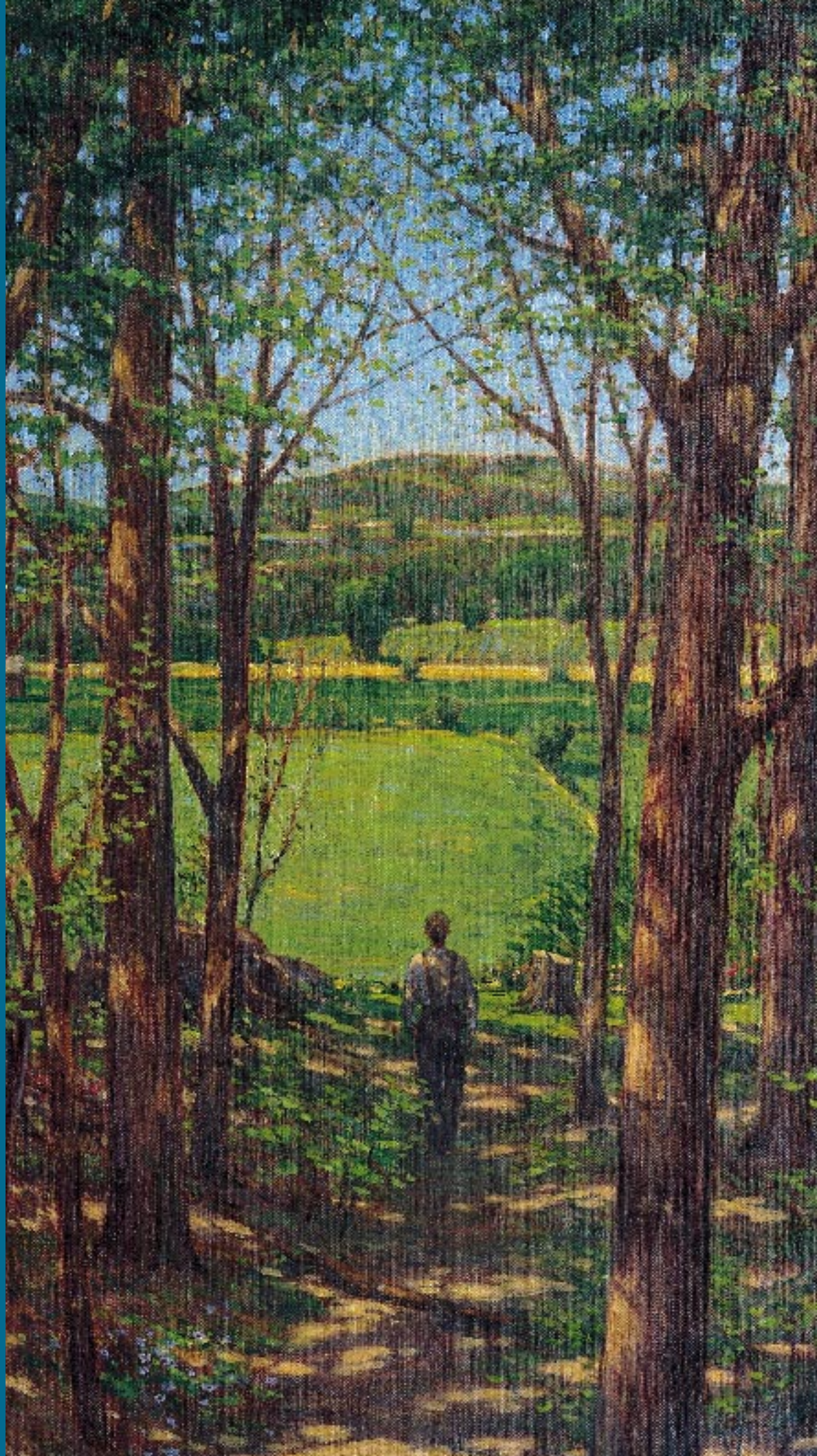


---

時満ちる  
時代の  
教会歴史

---

宗教341 - 343



# 時満ちる時代の 教会歴史

末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史

制作：教会教育部

発行：末日聖徒イエス・キリスト教会

## 謝辞

本書の視覚資料を提供して下さった各団体に感謝の意を表します。視覚資料の提供者が明記されていない場合は以下の団体の協力を受けています。教会歴史記録保管課，教会歴史美術館，教会教育部大学教科課程課，教会視覚資料室。

©1998 Intellectual Reserve, Inc

版權所有

印刷：日本

英語版承認：1993年1月

翻訳承認：1993年1月

原題：Religion 341 - 343 Church History in the Fulness of Times：

The History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints

# 目次

序文	.....	v
第1章	回復への序曲	.....1
第2章	ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの伝統	.....14
第3章	最初の示現	.....28
第4章	準備の期間	.....37
第5章	『モルモン書』の出現と神権の回復	.....52
第6章	イエス・キリストの教会の設立	.....67
第7章	広がりを見せる初期の教会	.....79
第8章	オハイオへの集合	.....89
第9章	シオンの地への集合	.....102
第10章	オハイオでの教会の発展, 1831 - 1834年	.....113
第11章	ジャクソン郡からの追放	.....127
第12章	シオンの陣営	.....140
第13章	カートランドでの栄光の日々, 1834 - 1836年	.....153
第14章	カートランドでの背教, 1836 - 1838年	.....169
第15章	ミズーリ北部の教会, 1836 - 1838年	.....181
第16章	ミズーリでの迫害と追放	.....193
第17章	イリノイの避け所	.....211
第18章	十二使徒の伝道	.....225
第19章	美しい町ノーブーの生活	.....240
第20章	ノーブーにおける教義上の進展	.....251
第21章	イリノイで高まる摩擦	.....263
第22章	殉教	.....272
第23章	王国を支える十二使徒	.....286
第24章	使徒の指導の下のノーブー	.....297
第25章	アイオワ横断の旅	.....308
第26章	西へ向かう開拓者たち	.....322
第27章	荒野における避け所の確立	.....337
第28章	隔絶の地ユタ	.....352
第29章	ユタ戦争	.....368
第30章	南北戦争の時代	.....380
第31章	自立への努力	.....392
第32章	ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間	.....406
第33章	迫害の10年：1877 - 1887年	.....422

第34章	和解の時代 .....	435
第35章	世紀の分岐点に立つ教会 .....	451
第36章	20世紀初頭の教会 .....	465
第37章	20世紀を前進する .....	480
第38章	変更と継続 .....	495
第39章	大恐慌と教会 .....	509
第40章	第二次世界大戦中の聖徒 .....	522
第41章	大戦後の復興 .....	535
第42章	世界の教会への成長 .....	550
第43章	コーリレーションと統合の時代 .....	562
第44章	教会の歩みを速める .....	579
第45章	世界中の教会の必要を満たす .....	591
第46章	チャレンジと成長の時代 .....	601
第47章	教会の行く末 .....	612
十二使徒定員会会員 .....		617
索引 .....		625

# 序文

**末**日において「天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがな〔い。〕」この国はダニエルが予見したように、「人手によらずに山から切り出され」た石にたとえられる。その石は転がり出て力を増し、やがて全地に満ちるのである（ダニエル2：44 - 45。教義と聖約65：2も参照）。

十二使徒定員会会員のマーク・E・ピーターセン長老はこう証している。「皆さんやわたしが所属している教会がその石です。それは人手によらず山から切り出されました。皆さんとわたしに与えられた使命は、その転がりを助けることです。」（*Conference Report* 『大会報告』1960年10月，82）

預言者たちはアダムの時代から、時満ちる神権時代が到来し、主が「天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめよう」とされるのを待ち望んできた（エペソ1：10）。これはキリストの再臨と福千年の統治のために必要なことである。

すべての聖なる預言者が預言した約束の時は、1820年春、父なる神と御子イエス・キリストがジョセフ・スミスに御姿を現されたときに現実となった。この栄光に満ちた示現を機にイザヤの預言の言葉は成就し始める。イザヤは主の「不思議な驚くべきわざ」が人の子らに起こると証している（イザヤ29：14）。

神に召されたジョセフ・スミスが基礎を築き、後継者たちがそれを土台に教会を築き上げてきた。また、預言者は天からの靈感によって『モルモン書』を翻訳し、聖なる神権を受け、人々の間に再びイエス・キリストの教会を組織した。神権の鍵はジョセフを通して回復されたのである。

「さらにまた、わたしたちは何を聞くでしょうか。……

……それぞれの神権時代と権利、鍵、誉れ、尊厳と栄光、神権の力について宣言し、またここにも少し、そこにも少しと、教えに教え、訓戒に訓戒を与え、また来るべき事柄を宣言することによってわたしたちに慰めを与え、わたしたちの希望を確かなものとした、天使長ミカエルの声、ガブリエルと、ラファエルと、ミカエルすなわちアダムから現在に至るまでの様々な天使たちの声。」（教義と聖約128：20 - 21）

これらの鍵の回復により、今やイスラエルは長きにわたる散乱から集められ、すべての救いの儀式が生者、死者を問わず執行可能になってきている。

初期の教会に授けられた戒めに「シオンは美しさと聖さを増し、その境は広げられ、そのステーキは強くされなければならない。まことに、わたしはあなたがたに言う。シオンは立ち上がり、その美しい衣を着なければならない。」（教義と聖約82：14）という戒めがある。

以来教会は、4つの州からの脱出、指導者と教会員への執拗な虐待と迫害、ある知事から出された撲滅令、預言者の殉教、政府による権利の剥奪<sup>しつよう</sup>、聖徒たちの貧困と

いう状況をしのいできた。この書物に採り上げられている事柄は、教会が忍耐を重ねて生き延びた最初の1世紀の歴史である。逆境や迫害、貧困を乗り越えて、教会は力を増し、成熟していく。

預言者ジョセフ・スミスの兄ハイラムの息子であるジョセフ・F・スミスが大管長になるころには、大管長の口から次のような言葉が出るまでに至っていた。「わたしたちは揺籃期を過ぎ……福音を十分に享受できる大人の段階に近づきつつあります。」(『大会報告』1909年10月, 2)

宣教師は世界中から改宗者をもたらした。海外でまかれた種は伝道部をステーキに変え、シオンの境は広がっている。ジョセフ・F・スミスの息子であるジョセフ・フィールドینگ・スミスは、大管長となったときにこう宣言している。「わたしたちは教会としても民としても成年に達しつつあります。わたしたちは背丈も伸び、力も増し加わって、主が預言者ジョセフ・スミスを通してわたしたちにゆだねられた使命を果たすことができるようになってきています。つまり、回復のよきおとずれをあらゆる国民とすべての民族にもたらすことです。」(英国マンチェスター地域大会, 1971年, 5)

その2年後、スミス大管長の後継者であるハロルド・B・リー大管長はこう語っている。

「今日わたしたちは、主の御手の業を主の聖徒、すなわち教会員の間に見ることができます。現代の教会員が抱いている、歩みを速めなければという切迫した気持ちは、この神権時代はおろかほかのどのような時期にも見ることはなかったのです。教会の境は広がり、ステーキは強められています。……

もはやこの教会は『ユタの教会』でも『アメリカの教会』でもありません。教会員は世界中に広がっているのです。」(『大会報告』1973年4月, 6; *Ensign* 『エンサイン』1973年7月号, 4 - 5)

神の御心により「人手によらず山から切り出され」た石(ダニエル2: 45)は、福音が全世界に広まる様子をたとえた主の言葉である。この石は転がりながら、必ずや地を満たすであろう。こうして主の王国は永遠に続き、主御自身が世界を統治し、主を愛してその戒めを守ったイスラエルの民を治められるであろう。





# 回復への序曲

年表	
年代	重要な出来事
34 - 100	使徒が新約時代の教会を導く
60 - 70	ペテロとパウロの殉教
325	ニケアの宗教会議
1300 - 1500	ルネッサンス
1438	グーテンベルグが活版印刷機を改良する
1492	コロンブスが初めてアメリカ大陸を訪れる
1517	ルターがカトリック教会に反抗する
1620	清教徒がプリマスに着く
1740 - 60	第一次大覚醒 <small>かくせい</small>
1775 - 83	アメリカ独立戦争
1789	アメリカ合衆国憲法の制定
1790 - 1830	第二次大覚醒

イエス・キリストの福音の回復とシオンの確立は、イエス・キリストの再臨を前にした人類の歴史の中で並び称せられる二つの重要な出来事である。預言者ジョセフ・スミスはこう書いている。「シオンの建設はあらゆる時代において神の子らが関心を抱いてきた大義である。それは預言者や祭司や王が特別な喜びをもって取り組んだテーマであり、彼らはわたしたちが生きているこの日がいづの日か来ることを心待ちにしていた。」<sup>1</sup>この末日の回復の業は、福千年を前にした神の子らのための神の聖なるドラマの終幕である。回復は「時の満ちるに及んで実現されるご計画」(エペソ1:10)であり、そこでは「聖なる預言者たち」を通して主が約束された「万物更新」が行われるのである(使徒3:21)。

実際のところ、福音の歴史は地球自体よりも古い。福音の原則は永遠であり、天上の会議で神の子供たちに知られているからである。御父の計画はイエス・キリストを中心としたものであった。イエスは「ほふられた小羊」として「世の初めから」選ばれていた(黙示13:8)。御父は天上の会議で、地球が御父の子供たちの試しの場になることを説明し、こう宣言された。「そして、わたしたちはこれによって彼らを試し、何であろうと、主なる彼らの神が命じられるすべてのことを彼らがなすかどうかを見よう。」(アブラハム3:25)このようにして、御父は子供たちに選択の自由という永遠の原則を授け、彼らが自ら善悪の判断ができるようにされたのであった。御父と御父のこの計画に背き、天を追われたのがルシフェルである。彼はサタンまたは悪魔、あらゆる偽りの父として知られるようになり、地上で人を欺き、「〔神〕の声を聴こうとしないすべての者を自分の意のままにとりこにする者となった。」(モーセ4:4)

一方、神はイエス・キリストの福音の救いの原則と儀式を子供たちに教えるために、預言者を立ててこられた。世の初めから、神の王国とサタンとの間には争いがあったが、神の選ばれた従順な子供たちを集めて聖約を受けさせ、悪と戦うための訓練を行う場として、主の地上の組織であるイエス・キリストの教会が時に応じて地上に設立されてきた。その真実の教会には、人を永遠の命へと導くために必要なイエス・キリストの福音の原則と儀式がある。

主がその福音、教義、儀式、および神権を明らかにされる時代を、「神権時代」と呼んでいる。例えば、過去にはアダム、エノク、ノア、アブラハム、モーセ、それにニーファイ人の神権時代があった。これらの神権時代が忠実で従順な民に提供したのは、イエス・キリストの福音の原則と儀式に従った生活をするを条件に、悪に打ち勝ち永遠の命への備えをする機会を得るというものであった。

真実の教会が花開いた(発展した)後には、必ずと言ってよいほど背教が訪れた。真理からの逸脱である。世界の歴史を見ると、真理の開花と背教はサイクルを成

している。そして、主の民が背教を重ねる度に、福音の回復が必要であった。本書で取り扱う回復は、時代を超えて起こった一連の回復の業の最後のものにすぎない。

## 新約時代の教会

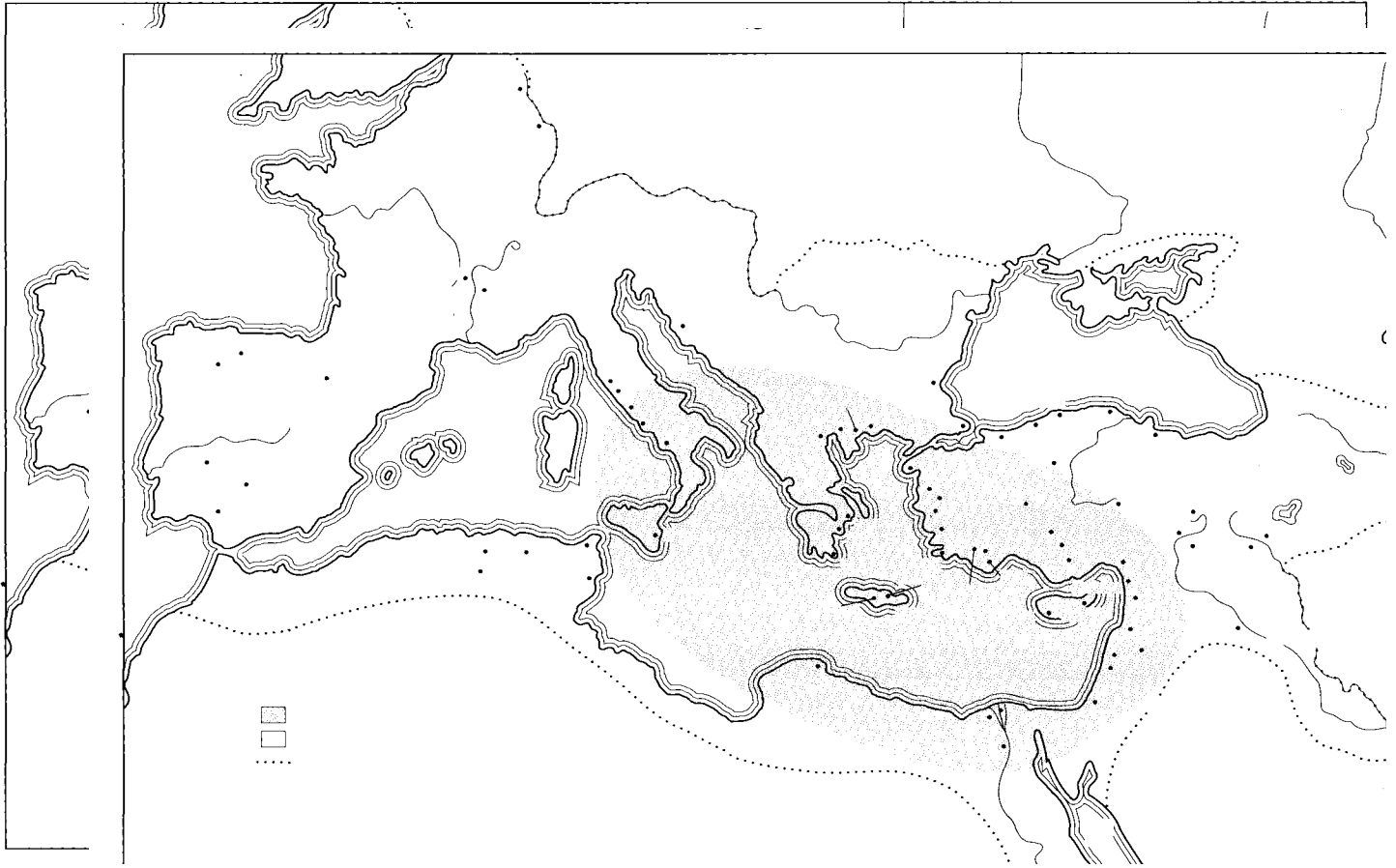
主イエス・キリストは、この世に生を受けてイスラエルの民の間で教え導いておられたとき、福音と大神権を回復された。イエスは「使徒たちや預言者たちという土台の上に」教会を組織された（エペソ2：20）。御自身の後にも御業が続けて行われるようにされたのである。救い主は地上におられた間、個人的に使徒たちを教育することに専念し、彼らに御自身の死後も御業を継続するための権能と鍵をお与えになった。主はペテロ、ヤコブ、ヨハネを管理使徒としてお選びになった。そして昇天に際しては、救いのおとずれを全世界に伝える業を使徒たちに託されたのであった。

使徒たちが導いていたころの教会は小規模であった。救い主の昇天からちょうど1週間後のペンテコステ（五旬節）の日、使徒たちが福音を教え復活された主の存在を証していたとき、聖なる御霊が豊かに降り注いだ。このときは、3,000人もがバプテスマを受けて教会員となっている。使徒たちはその後も力と権能をもって教導の業を続け、さらに数千人の改宗者を得た。ここまでは、福音はイスラエルの民に限られたものである。ところがある日、ペテロはヨッパのある家の屋根の上で祈っていたときに一つの示現を受けた。その示現の中でペテロは、神が人を偏り見られる御方ではなく、どの人々も清くないと見なすべきではないこと、そして、福音はユダヤ人だけではなく異邦人にも伝えられるべきであることを学んだのである（使徒10：9 - 48参照）。

教会の発展に重大な意義をもたらすのが、しばらく後のタルソのサウロの改宗である。サウロは初期のころの信者に対して迫害を加えていたが、ダマスコへの道で輝く光に包まれた救い主を見た。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」（使徒9：5）よみがえられた主は、驚いているパリサイ人サウロにそう宣言された。

救い主は昇天のとき、「地のはてまで、わたしの証人となる」ように弟子たちに命じられた（使徒1：8）。





初期のキリスト教の発展。紀元1世紀の終わりには、福音が使徒たちの手により、北はシリアと小アジア、西はマケドニアやギリシャ、イタリア、地中海諸島、そしてアフリカ東北部やエジプトまで広まっていた。そして2世紀末には、ガウル（フランス）、ゲルマン、イベリア半島（スペイン）、北西アフリカにもクリスチャンの共同体が見られた。

こうして、サンヒドリン（議会）の一員であったサウロは信仰の擁護者、「器として、〔主〕が選んだ者」（使徒9：15）となり、異邦人や王たちにキリストの名を宣言する者となった。それから30年以上の間、この大胆な使徒は同行したほかの多くの献身的な弟子たちとともに福音のメッセージを広め、ローマ帝国のほとんどの地域に教会の支部を設立した。そして発展が続き支部が増えていくにつれて、長老、監督、執事、祭司、教師、伝道者（祝福師）が召され、使徒たちから正式な権能が授けられた。

## 大背教

使徒たちやほかの宣教師たちが地上における主の王国の確立に勇敢に取り組んでいる一方で、背教の種はすでに教会内部で芽を出していた。ペテロは民の中に偽教師がおり、また「滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている」者がいることを書いている（2ペテロ2：1）。またペテロは、「大ぜいの人が彼らの放縦を見習う」と預言した（2節）。パウロも同じように、信者の中から「いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう」と証している（使徒20：30）。

しかし、古代の宣教師たちが直面した難題は、内部の背教と不信仰だけではなく、ローマの一般的な方針は属国に対して文化や宗教の自由を認めるというものであったが、時折クリスチャンがひどい迫害を受ける時期があり、そのため公の場



ペテロのはりつけ

での礼拝が困難になって、福音の「よきおとずれ」を伝えることに支障が出た。そのような時期は、当然の成り行きとして教会指導者の投獄や処刑が行われた。ローマによる最初の顕著な迫害は、ネロの治世の下で行われ、ネロは紀元64年のローマの火事をクリスチアンの責任にした。言い伝えによれば、使徒ペテロは逆さはりつけにされ、後の紀元67 - 68年には、使徒パウロがネロの命令により首をはねられている。

初めのころ、使徒の職には12人全員が召されていた。例えば、最初の12人の中に入っていなかったマツヤが、後に使徒として召されている。しかし教会の指導者たちは、背教が避けられないのみならず、もう真近に迫っていることを、預言の霊を通して知った。使徒たちが殺されると、主の教会を導いていた啓示は教会を運営していた権能とともに失われてしまったのである。

使徒たちが死んだ後は、預言されたキリストの教会の崩壊の証拠が至る所に見られる時代である。福音の原則は、当時浸透してきていた異教の哲学と混交して墮落し、御霊の賜物が次第になくなることにより聖なる御霊がこの世から失われたことも明らかである。そして、教会の組織や管理形態、さらには福音の基本となる儀式にも変更が加えられていった。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の言葉を借りれば、この背教の結果は破壊的なものであった。「サタンは怒りをもって〔教会〕を地上から荒れ野に追いやった。神権の力は人の中から取り去られ、教会がその権能と賜物もとも地上から消えたのである。そしてかの蛇は、良心の求めに応じて神を礼拝することを願いながら、信仰をもってイエスの証を求めたすべての人々に対して、引き続き怒りをもって戦いを挑んだのであった。サタンはその戦いに勝利を収め、その支配は人知の及ぶ至る所に広がった。」<sup>2</sup>

## 長くて暗い夜の時代

教会における真実から誤りへの変化は一日で起こったわけではない。1世紀後半の使徒たちの死によって拍車がかかった背教は、その後、年を重ねるごとに深刻さを増していった。そして4世紀になるとイエス・キリストの教会の痕跡は認められなくなり、「長くて暗い夜の時代」が深く進行する。使徒の死に伴い次第に大きな権限を有するようになったのが地元の教会指導者であった。監督たちは地元に合わせて方針や教義を決め、自分たちが使徒たちの正当な後継者であることを主張した。こうして、ローマ、アレクサンドリア、エルサレム、アンテオケなどの主要都市の少数の監督が、それぞれの地区全体を統轄する強力な権限を持つようになった。そして、こうした教会の指導者が啓示ではなく論理や修辭学に頼るようになったため、慣習や教義に大きな相違が見られるようになる。「真理と誤りの間の妥協、イエス・キリストの福音と人の哲学との同化が新たな宗教を生んだ。この新しい宗教は、新約のキリスト教とユダヤ人の伝統、ギリシャ哲学、ギリシャ・ローマの異教礼拝、それに神秘宗教の混合した、人を引きつけるものであった。」<sup>3</sup>

キリスト教の教会が発展と拡大を遂げるにつれて、ローマ政府は容認から迫害へとその方針を転換した。これは一部に、当時ローマ法の下に特権を許されていたユダヤ教から明確に分離する形で、キリスト教が台頭してきたという理由によるもの



ローマのミルビアンブリッジでの戦いで  
のコンスタンチヌス大帝。コンスタンチヌスは  
紀元312年、ローマと西帝国における押し  
も押されもせぬ支配者となった。そして1年  
後、キリスト教界はコンスタンチヌスのミラ  
ノでの勅令により信教の自由を獲得する。

324年の戦いでは帝国の東半分も支配下に  
治め、翌年のニケアでの会議で帝国内の宗教  
の統一を開始した。330年、異教の拠点で  
あるローマから離れ、キリスト教を国教に  
するため、首都をコンスタンチノーブルに  
移した。

これはコンスタンチヌスの回心の劇的な瞬  
間を描いたもので、彼は白日の空の中に「こ  
の征服により」と書かれた燃える十字架を見  
たと書いている。ジョバンニ・ロレンツォ・  
ベルニーニ作「コンスタンチヌス」の一部で、  
現在バチカンにある。

である。こうして、キリスト教徒は反社会的と見なされ、公職や軍務に就くこと、民事法廷に訴訟を持ち込むこと、公の祭事に加わることを拒否された。また彼らは無神論者と呼ばれた。一神教であるキリスト教には、ローマの神々や神格化された皇帝を受け入れる余地がなかったからである。以上ならびに恐らくはその他の理由も含めて、ローマ人は教会に対して散発的な攻撃を仕掛けてくるようになり、それはディオクレティアヌス（紀元284 - 305年）の時代まで続いた。ディオクレティアヌスは、多神教に属さないものはすべて反ローマであるとし、滅ぼすことを決めた。こうして教会は破壊され、『聖書』は焼かれ、キリスト教徒はローマの神々に犠牲としてささげられたり、責め苦に遭ったりした。そして306年の勅令により、迫害の命令が帝国全体に向けて出された。

やがてこの反キリスト教の法令は廃止へと追い込まれるのだが、それはたぶん避けることのできない道であった。教会は発展を続け、帝国は弱体化しつつあるという状況では、不和ではなく一致が求められたのであろう。紀元312年、ミルビアンブリッジのコンスタンチヌス1世は、敵であるマクセンチウスを倒すときに象徴として十字旗を用いた。そして翌年、コンスタンチヌスはミラノで、有名なキリスト教信仰公認の勅令を出す。これはあらゆる人々に自由な礼拝の権利を認め、キリスト教弾圧のために用いられていた法令を撤廃するというものであった。

コンスタンチヌス1世は死ぬまでキリスト教徒にはならなかったが、彼のキリスト教に対する容認と擁護は、同じ目的に向かって帝国と歩調を同じくする者という立場に教会を押し上げた。そしてローマの結束を強めることが急務であると考えたコンスタンチヌス1世は、教会内の神学上の論争に関心を持った。神会の属性についての論争である。コンスタンチヌス1世はこれを解決するためにニケアの宗教会議を召集した。これはキリスト教の最初の全体会議で、紀元325年に首都ローマの南のニケアの町で開かれた。この会議での討議から導き出され、後に皇帝の承認を受けた信条は、背教の結果論理や法令が啓示に取って代わることを示す典型的な例と言えよう。こうして、それからの数世紀にわたって同様の争点が解決を見ることにより、国と教会との間に強力な同盟関係が生まれるようになった。かくして、世俗的な力が教会の教義や慣行に影響を及ぼしていくのである。

ゲルマン民族の場合、5世紀の異邦人による西ヨーロッパへの侵入までの間に、多くがすでにいろいろなタイプのキリスト教の宣教師の訪れを受けていた。したがって、ローマの文化やカトリック教義を素早く吸収していった。しかしながら、紀元410年のローマ侵入は、ローマ帝国が不死身ではないことを示すものであった。帝国国境を越えて侵入して来たゴート族、バンダル族、フン族により西ヨーロッパの結束はずたずたになり、幾つかの民族国家が登場することとなった。こうしてローマの影響力が薄れたために、地元の政治指導者の教会への影響力がますます大きくなる。そしてそれから数世紀の間、発展途上のヨーロッパの国々の教会は、結局のところ封建領主の領地と化してしまった。こうして、文化や教育、一般大衆の倫理観は後退し、いわゆる暗黒時代の始まりとなった。

## ルネッサンスと宗教改革

14世紀になるとギリシャやローマの古典への回帰が見られるようになる。その結果、

文学や科学，芸術が開花した。これが「ルネッサンス」，すなわち「再生」の時代であり，自信を取り戻した人間が，自分たちが置かれた環境を新たな方法で探り始めた時期である。芸術家たちは陰気な神秘主義から離れ，彫刻や絵画，文学に新たな手法を駆使し始めた。また，その時期は自然主義の時代でもあり，人間の体を賛美し新しい巨大な大聖堂を建立するために，科学や芸術という手段が用いられた。

こうして，人間はあたかも古いやり方とかせを外されたかのようであった。火薬は戦争の方法に革命的な変化をもたらし，羅針盤は旅と探検に新たな可能性をもたらし，東洋という果てしない地にも商業の手が伸びるようになった。そして，西半球が発見された。15世紀には活版印刷技術が大幅に洗練されたものとなり，印刷の分野全体に新たな可能性が出てきた。こうしたことは当然のことながら，大学の出現や情報の拡散に直接的な影響を及ぼすことになる。

ルネッサンスはまた霊的な変革の時代でもあった。過去の時代の古典の研究の結果，初期の教会指導者の著作をはじめ，ヘブライ語やギリシャ語の『聖書』の複写本などが紹介されるようになった。そしてルネッサンスの学者たちは，そうした作品を一般大衆の手にも渡るようにした。こうして，中世のキリスト教の典礼や複雑さとは対照的に初期の教会が簡素なものであることに気づいた多くの人々は，自分たちの信仰の原点を再発見する。彼らはフランシスコ会やドミニコ会などの宗教組織を設立したり，アルビ派やワルドー派などの異端運動を起こしたりした。ある意味では，ルネッサンスがプロテスタントの宗教改革運動の土壌作りをしたと言える。当時のキリスト教界の結束を一挙に崩してしまったからである。

宗教改革者の中で最も有名なのがマルチン・ルターである。1483年11月10日，ザクセンのアイスレーベンで生まれた彼は，18歳のときに父のハンツ・ルターにより，法律を学ぶ目的でエアフルトに送られる。しかし，法律の勉強をやめてアウグスト修道会の修道僧となり，1508年には神学の研究とアリストテレス哲学を学ぶためビッテンベルグに派遣された。このころのルターを見ると，『聖書』の教義や教えとカトリック主義の慣習との間の大きな食い違いに心を悩ませていたことがうかがえる。そして1510年，ローマに向いたルターは，聖職者の腐敗ぶりと民衆の宗教離れを目の当たりにして衝撃を受ける。それは，彼が今まで法王に対して抱いていた絶対的な信頼を覆し，権力に対して挑戦を試みようとするに足るものであった。ルターの広範囲に及ぶ『聖書』の学習は，後の宗教改革運動に教義上の裏づけを与えることとなった。すなわち，人は信仰によってのみ正しいとされるのであって（ローマ3：28参照），善行によるものではないとの立場である。

ルターが最も声を大にして直接的にローマ教会と対抗したのが，法王レオ10世の代理人らによる免罪符の販売である。この免罪符は法王の代理人らが，マインツでの大司教の職を獲得するためにマインツのアルベルト公に支払った費用に充てられるとともに，未完成の聖ペテロ大聖堂の作業を続行する資金にも用いられた。人々は免罪符を買うことによって罪の赦しと煉獄からの解放を約束され，死者の罪の赦しはすべて完成するとされた。1517年10月31日，ルターはビッテンベルグの教会の扉に「95箇条の抗議文」を釘で打ち付けた。これは，免罪符の妥当性と教会の聖餐式の方法について討論を求めることを目的としたものであった。

ルターのもともとの主張は学者たち間での話し合いを促進することを意図したも



マルチン・ルター（1483 - 1546年）はアウグスト派の修道僧であったが、ローマカトリック教会の教義と組織に対して異議を唱えた。彼は『聖書』をドイツ語に翻訳し、一方ではローマ教会の慣習を無視した。後にローマ教会から破門され、ドイツでの宗教改革を指揮した。

のであったのだが、一般大衆は彼を自分たちの英雄として見るようになった。ルターは高位聖職者や学者に対しても屈することなく自説を擁護し、とうとう1521年にはボルムスの帝国議会で聴聞を受けた。このころになると、ルターの運動は宗教だけにとどまらず一種の政治運動となり、神聖ローマ帝国の結束に対して脅威を与えるところまで発展していた。

運動をやめるように命じられたルターは、大胆にも次のように宣言している。「『聖書』の証明により、もしくは明確な論拠により論ばくされるのでなければやめません。わたしは法王も議会も信じていないからです。彼らはしばしば誤ちを犯し、自己矛盾を露呈しています。わたしが信じるのは、わたしが引用した『聖書』の言葉です。わたしの良心は神の言葉により拘束を受けています。わたしはいかなることも撤回できませんし、そのつもりもありません。良心に反して行動することは不安であり、危険なことだからです。」<sup>4</sup>

ルターは教会から破門され、帝国追放、すなわち法外追放者となった。しかし彼を保護したのがゲルマンの諸公たちであった。ルターの考えに共鳴したのと、ローマからの政治的独立を望んでいたからである。この保護を受けたおかげで、彼は『聖書』のドイツ語訳に取りかかることができた。この翻訳がヨーロッパ全体に与えた影響は大きい。ジェロームのラテン・ウルガタ（平俗ラテン語訳『聖書』）以来初めての口語訳だったからである。

ルターが提唱する新しい礼拝の形式と改訂された教義は、次第にゲルマン諸国に浸透していく。そして、カトリックが改革の方向に行かないことが明白になったとして、ルターの支持者たちはルーテル教会を設立した。ルーテル派は北部ならびに中央のゲルマン諸国の国教とはなったものの、ハバリアや東部諸国においては成功は見られなかった。しかしながら、ルーテル派は北に広がり、スカンジナビアからアイスランドに達した。ルターは、宗教上の自由をヨーロッパにもたらしたとまでは言えないものの、彼の運動が少なくとも他の宗教グループをも容認できる多元的な社会の実現に強く貢献したことは否定できない。

宗教改革といえばルターが最も有名であるが、改革を目指したのはルターが最初ではなかった。それよりも1世紀半前の1300年代に、イギリスのジョン・ウィックリフがカトリック教会の腐敗と権利の濫用を非難し、ローマ法王を反キリストと決めつけた。彼は『聖書』を翻訳して一般大衆に配布した。ウィックリフは教会により厳重な処罰を受けたが、彼の教えはイギリス内で広く受け入れられるようになった。したがって、ルターやヨーロッパ大陸の他の宗教改革者たちが改革の運動を開始すると、イギリス国民の中には多数の理解者が出た。

イギリスの改革運動は他の国々とは趣を異にする。ルターの改革を承認しなかったヘンリー8世は、自らの離婚を否定する権限は法王にはないと主張、そしてついには法王の権威を否定したために、1533年に破門となった。そこでヘンリーは英国国教会を設立することになる。

スイスの二大宗教改革者は、ウルリック・ツィングリとジョン・カルビンである。ツィングリはチューリッヒの市民に対して、宗教的真理の基準となるものは『聖書』しかないことを確信させた。そしてこの基準を用いて、修道制や独身制、ミサなどのカトリック的慣習による生活を拒否した。

ジョン・カルビンの影響力はさらに大きい。彼はジュネーブで、『聖書』に基づいた聖なる町の設立を試みた。カルビン派は次第にスイス全土を支配するようになり、そこからフランス、イギリス、スコットランド、オランダ、そしてわずかではあるが、ドイツにまで広まっていった。また、カルビン派の初期の改宗者であるジョン・ノックスが、教義の改良と拡充に寄与している。

このカルビン派の中でも二つの厳格なグループが、ピルグリムと清教徒となり新大陸に移動、アメリカ人の価値観に多大な影響を与えることになる。例えば、初期のアメリカで顕著だったカルビン派の基本的な教義として挙げられるのが、神への絶対的な服従、人は神の恵みにより救われること、救われた教会員は神の手の器としてほかの人々の贖いの業のために働くべきであること、それに教会は「山の上の明かり」としてこの世の諸事に影響を及ぼすべきであること、などである。

末日聖徒は、宗教改革のこうした活動がすべて、福音の回復の備えであったと信じている。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はこう書いている。

「この回復に備えて主は、ルター、カルビン、ノックス、その他宗教改革者と呼ばれる高貴な人々を興された。そして人々を縛っていた足かせ、すなわち良心の命じるままに神を礼拝する神聖な権利を否定する足かせを打ち砕く力を彼らに与えられた。……

末日聖徒は、宗教界を縛っていた足かせを粉碎したこれらの偉大で恐れを知らない宗教改革者に、もろ手を挙げて賛辞を送るものである。彼らが数多くの危険に満ちたこの使命を果たすに当たって、主が彼らの守護者となられた。しかし当時、完全な福音を回復する時はまだ来ていなかった。改革者の仕事は非常に重要であったが、それは準備の仕事であった。」<sup>5</sup>

## アメリカの発見と入植

福音の回復への備えとしてもう一つ重要な出来事が、アメリカの発見と入植である。アメリカは末日において福音を全世界に送り出すえり抜き<sup>えり</sup>の地として、初めから取っておかれた。古代アメリカの預言者モロナイはこう記している。「見よ、この地はえり抜き<sup>えり</sup>の地であり、この地を所有する民はどの国民も、この地の神に仕えさえすれば、奴隷の状態にも囚われ<sup>とら</sup>の身にもなることなく、天下のほかのどのような国民からも支配を受けない。この地の神とはイエス・キリストであり、わたしたちが書き記してきたことによって明らかにされた御方である。」(エテル2:12)

また、クリストファー・コロンブスのアメリカ大陸への到着は、コロンブスが生まれる2,000年以上も前に、同じ古代アメリカの預言者ニーファイが示現で見えていた。「それで眺めると、異邦人の中に一人の男が見え、その男は大海によってわたしの兄たちの子孫から隔てられていた。すると神の御霊が降<sup>くだ</sup>ってこの男に働きかけ、この男が大海を渡って、約束の地にいるわたしの兄たちの子孫のところへ行くのが見えた。」(1ニーファイ13:12) コロンブス自身もその航海の動機として、海の男としてこの冒険をしたいとの思いに駆られたこと、またインディアンの間に宗教を確立したいという気持ちになったことを挙げている。<sup>6</sup>

ニーファイは続けてこう預言している。「そして、神の御霊がほかの異邦人にも働きかけ、彼らが囚われの身の上から逃れて大海を渡って行くのが見えた。」(1ニーフ



アイ13：13) このように、約束の地に着いた大勢の人々は、神の手により導かれたのである(2ニーファイ1：6参照)。

ニーファイはアメリカ大陸でのほかの様々な出来事を示現で見た。彼はレーマン人が異邦人によって追い散らされ、次いで異邦人がへりくだって主を呼び求め、神が異邦人とともにおられる様子を見た。またニーファイは、南北アメリカに入植した異邦人が「母国の異邦人」と戦い、主の手によって導かれるのを見た(1ニーファイ13：14 - 19参照)。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はこう語っている。「[アメリカ]の発見は、末日における人の救いのための完全な福音の回復という全能者の目的を果たすうえで最も重要な要素の一つであった。」<sup>7</sup>

## アメリカでの信教の自由

今日の歴史家の多くは、アメリカへの植民者のおもな目的は経済的なものであったと主張するが、信教の自由を求めて海を渡った人々も多かった。その中に、ニューイングランドに強大な宗教社会を築き上げた清教徒の存在がある。彼らは自分たちの信仰が真実であると信じており、他の宗教を容認することはなかった。<sup>8</sup> この偏狭な姿勢は福音の回復までの間に取り去られなければならなかった。

ロジャー・ウィリアムズを中心とする清教徒の中の反体制派が、教会は行政府と明確に分離されるべきであり、市民に対してはいかなる宗教をも強要してはならないことを主張した。彼はまた、どの教会も使徒たちから正しい権能を継承していないことを教えた。ウィリアムズは1635年にマサチューセッツから追放されたが、数年後に賛同者とともにロードアイランドに入植する権利を得、全宗教に対する完全な認容の法制化の実現に成功した。

また勇敢な女性アン・ハッチンソンは1634年にマサチューセッツに行き、神学上の二つの点について異を唱えた。救いにおける善行の役割と、個人が聖なる御霊から啓示を受けられるかどうかという問題である。ハッチンソンもウィリアムズと同様にマサチューセッツから姿を消し、1638年ロードアイランドに逃避した。しかし、こうしたロジャー・ウィリアムズやアン・ハッチンソンなどの努力にもかかわらず、ニューイングランドではそれから1世紀半にわたり、信教の自由は達成されなかった。

その間、宗教を基とするいろいろなグループが、その他の入植地で共同体を形成し始める。その一つ一つがアメリカの宗教環境を作っていくのである。そうした中で、アメリカの歴史上最初に信教の自由を法的に認めたのが、メリーランドに定住したローマカトリック教徒である。ペンシルベニアのクエーカーも信教の自由を擁護し、教会と政府との分離を提唱した。このようにして、宗教上の多元性が信教の自由をもたらす最大の理由となり、そのことがアメリカ合衆国の特徴の一つとなっていくのだが、これは多分に、植民者のもともとの宗教が多岐を極めており、ある特定の宗教に絞ることが不可能であったという理由によるものである。

当時のアメリカには異なった教会が多数存在したが、植民者のほとんどは特定の教派の会員となることはなかった。アメリカの宗教史で重要な出来事に数えられるのが、1739年に始まりほぼ20年間続く「大覚醒<sup>かくせい</sup>」である。初期のアメリカ史の中のこの最初の一大復古運動は、義と宗教への熱意を回復しようとの敬虔な試みであって、

13州の隅々にまで浸透していった。家庭や納屋、ひいては牧場でも伝道者や巡回説教者が非公式な集会を行うほどであった。こうして、「大覚醒」の潮流はそれまでのアメリカに何年もの間なかった宗教に帰依する心に火をつけ、宗教組織への聖職者と普通の信徒の区別のない参加に拍車をかけることとなった。またアメリカ植民者の中には、団結して民主主義体制を求めていこうとする動きも現れた。<sup>9</sup>

しかしながら、こうした熱意にもかかわらず、完全な信教の自由が達成されたのは、独立戦争で信教の自由を求める気運が高まってからのことであった。結束してイギリスに立ち向かっていた植民者たちは、大義のためには宗教の違いは重要なことではなく、基本的な事柄については合意できると考えるようになったのである。さらに、トーマス・ジェファースンは政府が宗教組織により不当な圧力を受けることに真っ向から反対の立場を取る人物であった。彼が起草したアメリカ合衆国独立宣言には、人は自らの力で正しい政治制度を見いだせることが明記されている。

このようにして、独立戦争後に生まれた新たな自由という気運の中で、幾つかの州は信教の自由を含む基本的人権を追求するようになった。その中で1785年、信教の自由を求めたジェファースンの法案を初めて採用したのがバージニア州である。バージニア州では、何人たりともいかなる教会への参加や支持も強制されず、まただれも宗教上の嗜好の違いにより偏見を受けないことを保証した。

それから数年、州の連合に手を焼きながらも、アメリカ合衆国は1787年に新憲法の草案を完成、1789年にはそれを批准した。その憲法は「この目的のために〔主が〕賢人たちを立てて」制定されたものであり（教義と聖約101：80）、民衆を主体とした自由への推進力と基本的な秩序への希求の両方を織り込んだものであった。そして信教の自由は、この憲法の最初の修正箇条の中で保証された。

預言者ジョセフ・スミスはこう述べている。「アメリカ合衆国憲法は輝かしい標準です。この憲法は神の知恵により制定されました。これは天から授けられた旗であり、乾燥した荒れ野の中で涼しい日陰とのどを潤す清水を提供してくれる大岩のように、受ける者に甘美な自由を授けてくれるのです。」<sup>11</sup>これが真実である一つの理由はこうである。「主はこの憲法の下で福音を回復し、主の教会を再度確立することがおできになりました。……どちらもさらに大きな枠組の中の一つであり、主の末日の業の一部を構成するものなのです。」<sup>12</sup>

アメリカ独立戦争ならびに新憲法の制定と時を同じくして起こったのが、「第二次大覚醒」である。これはキリスト教徒の心に新たな方向づけを与えるものであった。幾つかの宗教組織が勢力を増し、様々な信条を掲げるようになった。ユニテリアン派、万人救済派、メソジスト派、バプテスト派、ディサイプル派である。こうして、新しい国家にはたくさんの教派が紹介されたが、その中には、新約時代の教会の回復の必要性を説くものもあった。この回復の必要性を説いた人々は求正派として知られている。彼らの多くは神の教会の回復を待ち望んでおり、福音が回復されると、その初期における改宗者となった。<sup>13</sup>

この「第二次大覚醒」と同時に起こったのが信仰復興運動である。巡回説教者たちが合衆国の辺境地帯で新たな入植者を相手に熱のこもった野外集会を開いた。孤独な入植者たちは農場や村々から大挙して集まり、この野外集会を楽しむようになった。騒々しい一面もあったが才気あふれる巡回説教者たちは、この集まりをお祭り

のように楽しいものにし、その一方で自派への改宗者の獲得をねらっていたのである。<sup>14</sup>

「第二次大覚醒<sup>かくせい</sup>」はまた、伝道活動や教育倫理観の改善、人道主義運動に対するボランティア団体の設立にも影響を与えた。このように、信仰復興運動は宗教熱を高め、人気のある教派、特にメソジスト派とバプテスト派の発展に寄与した。<sup>15</sup> この「第二次大覚醒」は少なくとも40年間続いた。ジョセフ・スミス最初の示現もこの期間に入る。

福音と主のまことの教会の回復は、ヨーロッパや初期のアメリカの信教の自由が認められなかった環境の中では起こり得なかった。信教の自由とキリスト教思想の再評価、霊的な覚醒の中でこそ可能だったのである。それが19世紀初頭のアメリカであった。主の手により回復の業が最もふさわしい時期に行われたことは明白である。

アメリカの著名な歴史家ゴードン・S・ウッドは、回復が特別なタイミングで行われたことを認めている。

「1830年というタイミングは神の御心によるものであった。アメリカの歴史の中で最もふさわしいと思われるときに行われたからである。それより早くても遅くても、教会は発展を遂げることがなかったであろう。『モルモン書』も18世紀では発行を見ることがなかったと思われる。合衆国の初期の宗教運動のきっかけとなる大民主改革の前で、口伝による民間信仰がいまだに幅を利かせていた時代だったからである。もし18世紀であれば、モルモニズムはその当時支配的な教育程度の高い貴族の文化の中で、単なる熱狂的な民間信仰として簡単に抑圧され、捨てられていたであろう。あるいはもう少し遅れて、すなわち合衆国政府設立の後の19世紀半ば、科学が発展を遂げていた時期に回復していたなら、その内容や啓示の証明に困難を覚える人々が大勢出てきたことであろう。」<sup>16</sup>

神は初めから終わりまで御存じである。人間の歴史の広大な計画を作られるのは神である。神は歴史の諸事に手を下され、アメリカが、回復された福音の種がまかれる肥沃な土地<sup>ひよく</sup>として、また選ばれた聖見者ジョセフ・スミスにより育てられる地としてふさわしい所となるように備えられたのである。



ニューヨーク州歴史協会の厚意により掲載

トーマス・ジェファーソン（1743 - 1826年）がその長期にわたるアメリカで最も洗練された政治家の一人としての多彩な経歴の中で後世に残したものは次の3つである。まずはアメリカ独立宣言を起草したこと、バージニア大学を設立したこと、そして1785年に採択された信教の自由を認めるバージニア州法を起草者したこと、である。

アメリカ合衆国憲法は1787年9月17日の憲法会議の席で署名がなされ、新政府は1789年に活動を開始した。



「アメリカ合衆国憲法署名の様子」ハワード・チャンドラー・クリスティー画  
議事堂建築家の厚意により掲載

注

1. *History of the Church* 『教会歴史』 4 : 609
2. ジョセフ・フィールディング・スミス, *The Progress of Man* 『人の進歩』 (Salt Lake City: Deseret News Press, 1952), 166
3. ミルトン・V・バックマン・ジュニア, *American Religions and the Rise of Mormonism* 『アメリカの宗教とモルモニズムの起こり』 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1965), 6
4. ヘンリー・アイスター・ジェイコブズ, *Martin Luther : The Hero of the Reformation, 1483 - 1546* 『マルチン・ルター 宗教改革の英雄, 1483 - 1546年』 (New York and London: G. P. Putnam's Sons, Knickerbocker Press, 1973), 192
5. ジョセフ・フィールディング・スミス 『救いの教義』 ブルース・R・マッコンキー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1954 - 56), 1 : 168
6. サミュエル・エリオット・モリソン, *Admiral of the Ocean Sea : A Life of Christopher Columbus* 『大海原の提督 クリストファー・コロンプスの生涯』 (Boston: Little, Brown, and Co., 1942), 44 - 45, 279, 328参照
7. スミス 『人類の進歩』 258
8. エドウィン・スコット・ガウスタッド, *A Religious History of America* 『アメリカ宗教史』 (New York: Harper and Row, 1966), 47 - 55 ; シドニー・E・アールストロム “The Holy Commonwealths of New England” *A Religious History of the American People* 「ニューイングランドの聖なる民」 『アメリカ国民の宗教史』 (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1972), 135 - 150参照
9. アラン・ハイマート “The Great Awakening as Watershed” 「分岐点としての大覚醒」 ジョン・M・マルダー, ジョン・F・ウィルソン編, *Religion in American History : Interpretive Essays* 『アメリカ史の中の宗教 解釈評論』 (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1978), 127 - 144で引用
10. シドニー・E・ミード “American Protestantism during the Revolutionary Epoch” 「独立戦争時代のアメリカのプロテスタント主義」 マルダーおよびウィルソン編 『アメリカ歴史における宗教』 162 - 176で引用
11. ジョセフ・スミス, *Teachings of the Prophet Joseph Smith* 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 ジョセフ・フィールディング・スミス選 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1976), 147
12. マーク・E・ピーターセン, *The Great Prologue* 『大序曲』 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1975), 75
13. バックマン 『アメリカの宗教とモルモニズムの起こり』 186 - 248参照
14. マーティン・E・マーティン, *Pilgrims in Their Own Land : 500 Years of Religion in America* 『自国での巡礼 アメリカ500年の中の宗教』 (Boston: Little, Brown, and Co., 1984), 168
15. アールストロム 『アメリカ国民の宗教史』 415 - 428参照
16. ゴードン・S・ウッド “Evangelical America and Early Mormonism” *New York History* 「福音伝道のアメリカと初期のモルモニズム」 『ニューヨーク史』 1980年10月号, 381



# ジョセフ・スミスの受け継いだ ニューイングランドの伝統

年表	年代	重要な出来事
1638		ジョセフ・スミスの父方の先祖で初めてイギリスを離れアメリカに渡ったロバート・スミスがマサチューセッツに着く
1669		ジョセフ・スミスの母方の先祖で初めてイギリスを離れてアメリカに渡ったジョン・マックがマサチューセッツに着く
1796.1.24		ジョセフ・スミス・シニアがルーシー・マックと結婚
1805.12.23		ジョセフ・スミス・ジュニアがバーモント州ウィンザー郡シャロンの町で誕生
1812 1813		ジョセフ・スミスが7歳でチフス熱のために合併症を起こし、手術を受ける
1816		スミス家、バーモント州ノーウィッチからニューヨーク州パルマイラに移転

**周** 囲の環境から影響を受けない人はいない。わたしたちは、家族や友人から養い育てられ、その環境に順応していく。ジョセフ・スミスは農家に育った。受ける影響といえばほとんど家族からだけに限られていた。彼が家庭で学んだことの中で最も大切なものは、ニューイングランドの伝統であろう。ジョセフの両親は、勤勉と国家への忠誠、そして神への信仰を強調した。ジョセフは両親の教えをよく聞いて学び、その伝統からたくさんのことを吸収していった。このようにしてジョセフは少年のころから、予任された使命を果たすに必要な資質を身に付け、それを示し始めたのである。

## ジョセフ・スミスの父方の先祖

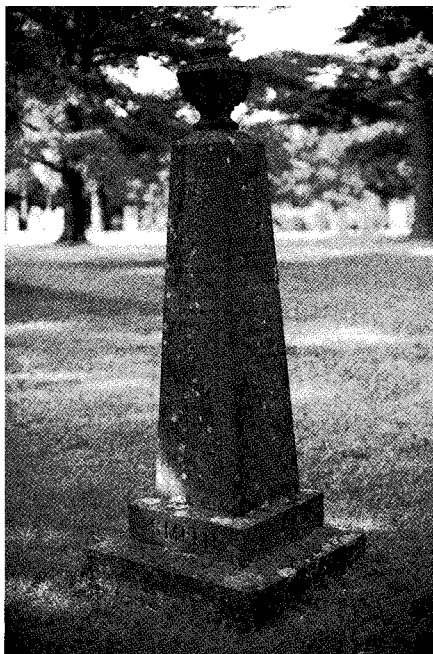
ジョセフ・スミスの先祖を調べてみると、一族が大切にしていた人格の特質がジョセフ・スミスに受け継がれていることが分かる。家族との強いきずな、勤勉の精神、自分で考えること、人に奉仕すること、自由を愛することである。彼はこう回想している。「自由を愛する心は、祖父たちがわたしをひざに乗せてあやしてくれていたころから、わたしの心に広がっていきました。」<sup>1</sup>また、特定の教会に所属するこ

### ジョセフ・スミスの先祖

<p><b>ジョセフ・スミス</b> 誕生 1805年12月23日 場所 バーモント州ウィンザー郡シャロン 死亡 1844年6月27日 場所 イリノイ州ハンコック郡カーセージ</p>	<p><b>ジョセフ・スミス・シニア</b> 誕生 1771年7月12日 場所 マサチューセッツ州エセックス郡トプスフィールド 死亡 1840年9月14日 場所 イリノイ州ハンコック郡ノーブー</p>	<p><b>アサエル・スミス</b> 誕生 1744年3月7日 場所 マサチューセッツ州エセックス郡トプスフィールド 死亡 1830年10月31日 場所 ニューヨーク州セントローレンス郡ストックホルム</p>
<p><b>ルーシー・マック</b> 誕生 1776年7月8日 場所 ニューハンプシャー州チエシャイア郡ギルサム 死亡 1856年5月14日 場所 イリノイ州ハンコック郡ノーブー</p>	<p><b>メアリー・デューティ</b> 誕生 1743年10月11日 場所 マサチューセッツ州エセックス郡ローリー 死亡 1836年5月27日 場所 オハイオ州レークカウンティ</p>	<p><b>ソロモン・マック</b> 誕生 1732年9月15日 場所 コネチカット州ニューロンドン郡ライム 死亡 1820年8月23日</p>
	<p><b>リディア・ゲイツ</b> 誕生 1732年9月3日 場所 コネチカット州ミドルセックス郡イーストハダム 死亡 1817年ごろ 場所 バーモント州ウィンザー郡ロイヤルトン</p>	

◀ジョセフ・スミスの生誕の地はバーモント州シャロンにある。そこには花崗岩でできたジョセフ・スミスの記念碑があるが、ジョセフ・スミス生誕100年に当たる1905年12月23日にジョセフ・F・スミス大管長により奉獻された。

記念碑は高さが38.5フィート、ジョセフの生涯の1年を1フィートで表している。記念碑のすぐ左横には小さな小屋があり、記念碑と同時期に建設・奉獻された後に、訪問者センターとして使われた。



マサチューセッツ州トプスフィールドのバイングローブ墓地にあるスミス家の墓石。ここに埋葬されているのはサムエル・スミスと妻のレベッカ、サムエル・ジュニアとその妻プリシラ・グールドである。ジョージ・A・スミスが1873年に自分の先祖である彼らのためにこの墓石を建てた。

スミス家は5代にわたってトプスフィールドに住んだ。ロバート・スミス、サムエル・スミス・シニア、サムエル・スミス・ジュニア、アサエル・スミス、ジョセフ・スミス・シニアである。ジョセフ・スミス・シニアは1771年7月12日にこの家で生まれた。この家は1875年に取り壊されている。

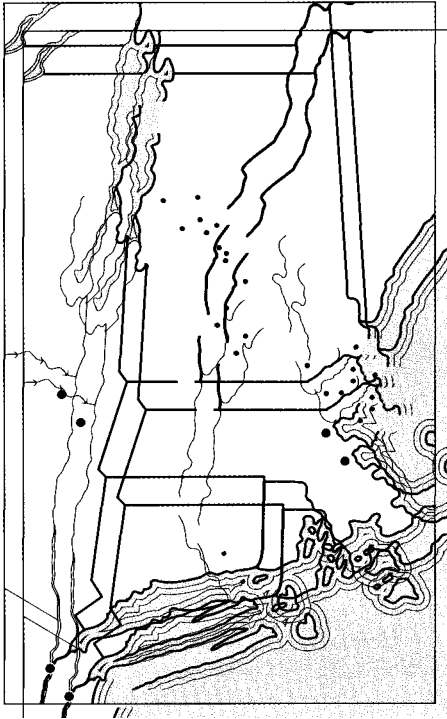
とはなかったものの、彼の先祖は何代にもわたって正しい宗教上の原則に従って生活することを求めてきた。中には、子孫の中から霊的な指導者が現れることを予期した者もいる。

マサチューセッツ州ボストンの北約20マイル（約32キロ）の緩やかな丘陵地帯にトプスフィールドという名の小さな町がある。預言者の先祖は長い間5代にわたってここに住んでいた。最初はジョセフ・スミスの3代前の祖父ロバート・スミスで、まだ10代のころの1638年、イギリスのトプスフィールドからボストンに移って来た。ロバートはメアリー・フレンチと結婚し、ローリーの近くに短期間滞在した後にマサチューセッツ州トプスフィールドに落ち着いた。彼らは10人の子供に恵まれる。ロバートは1693年に亡くなったが、当時では大金である189ポンドの財産を残した。ロバートとメアリーの間に息子サムエルが生まれたのは1666年である。彼は町と郡の記録に「議員 (gentleman)」という称号で出ているので、恐らく公職に就いていたのであろう。サムエルはレベッカ・カーティスと結婚、9人の子供をもうけた。

サムエルとレベッカに最初の子供サムエル・ジュニアが生まれたのは1714年のことである。サムエル・ジュニアは傑出した地域指導者で、アメリカ独立戦争の擁護者であった。彼の死亡記事には、「彼は国家の自由の誠実な友であり、キリスト教の教えのたゆまぬ擁護者であった」<sup>2</sup>とある。サムエル・ジュニアはトプスフィールドの創設者の子孫であるプリシラ・グールドと結婚した。プリシラは5人の子供をもうけた後に死去、サムエルは同じプリシラという名の前妻のいとこ再婚する。彼女には子供がなかったが、前妻の5人の子供を育て上げた。その中にジョセフ・スミスの祖父アサエル・スミスがいた。アサエルが生まれたのは1744年のことである。

アサエルはニューイングランドの宗教組織である会衆派教会に籍を置いていたが、後に宗教組織に対して懐疑心を抱くようになる。彼には既存の教会の教えが聖文や常識と相いれないと思えたのである。彼は23歳でマサチューセッツ州ローリーのメアリー・デューティーと結婚した。彼は自分自身と家族に対して多大な犠牲を払ってニューハンプシャー州デリーフィールドからトプスフィールドに戻り、父親が生





ニューイングランドに居住したジョセフ・スミスの先祖

前清算できなかった負債を5年間働いて全額返済している。

スミス家は1791年までトプスフィールドにとどまり、それからアサエルとメアリーは11人の子供を連れて少しの間マサチューセッツ州イプスウィッチに移る。それから安価な未開の土地を求めてバーモント州タンブリッジに移った。アサエルはタンブリッジでも地域社会奉仕を続け、30年間でほとんどの公職を歴任した。

アサエルの哲学には、イエス・キリストを万人を救う愛の神と信じる普遍救済派の教義と相通ずるものがあった。普遍救済派の人々と同じように、アサエルにとって納得のいく神とは、人類を滅ぼす神ではなく、人類の救いに関心を持つ神だったのである。彼は死後も命が続くことを信じていた。

アサエルは家族にあててこう書いている。「魂は不滅だ。……すべてのことは神のために、真剣に行いなさい。神のことを考えるとき、神について語るとき、神に祈るとき、偉大な威光の御方に語りかけるときは、熱心な態度で行うことだ。……宗教については、宗教の本質を学びなさい。そしてそれが外面の飾りしかないのか、あるいは人の心の内なるところに秘められているのかを確かめなさい。……」

わたしの救い主キリストは確かに完全な御方で、いかなる環境の下でも挫折されることはない。わたしはキリストに対して、おまえたちの霊と体と財産と、名前と、人格と命と死とあらゆるもの、そしてわたし自身をゆだねよう。そして、わたしの卑しい体を御自身の栄光の体と同じ形に変えてくださるときまで待とうと思う。<sup>3</sup>

アサエル・スミスはまた、「神が自分の家族のある枝を起こして人類のために大いなる利益をもたらしてくださる」<sup>4</sup>ことを予見した。それからだいぶ後のこと、息子のジョセフ・スミス・シニアが出版されたばかりの『モルモン書』を渡すと、アサエルは大いに関心を示した。ジョージ・A・スミスはこう記録している。「わたしの祖父アサエルは『モルモン書』を完全に信じていました。彼はほとんどすべて読み終えていました。<sup>5</sup>アサエルは1830年の秋に亡くなったが、孫のジョセフが長い間待ち望んだ預言者であり、まさに新たな宗教の時代を切り開いた人物であることを確信していたのである。

メアリー・デューティーは夫のアサエルより6年長生きした。1836年、メアリーは500マイル（約800キロ）もの困難な旅をして、当時すでにオハイオ州カートランドに移っていた子や孫たちと合流した。孫のエライアス・スミスは、メアリーが子や孫たちと再会したときにその場にいたが、こう書いている。「祖母と預言者である孫、それにその兄との再会は心打たれるものでした。ジョセフは彼女を祝福し、地上で最も高貴な女性であると言いました。<sup>6</sup>メアリーは孫の証をすべて受け入れ、バプテスマを受けることを心から望んだが、残念ながら、年齢と健康の関係でそれは実現できなかった。彼女は1836年5月27日、カートランドに着いてわずか10日の後に世を去った。

## ジョセフ・スミスの母方の先祖

ジョセフの母ルーシー・マックの育ったマック家族については、あまりよく知られていない。スコットランドのインバーネスで生まれたジョン・マックは聖職者の血統で、1669年にニューイングランドに着いた。そして、長年にわたりマサチューセッツ州サリズベリーに住んだ後、彼は妻とともにコネチカット州ライムに移る。



1696年のことである。そして彼らの8番目の子供であるエビニーザーがハンナ・ハントリーと結婚、しばらくの間マック家を盛り立てたものの、繁栄は長続きせず、1732年に生まれたソロモンは4歳でライムの農夫に奉公に出された。ソロモンはこう回想する。「わたしは主人から同じ人間ではなく物のように扱われた。」<sup>7</sup>彼は21歳まで奉公を続けたが、主人は宗教のことは一切彼に教えなかったし、話もしなかった。

ソロモンは、残りの生涯のほとんどを、若いころには得られなかった安定した生活を求めて過ごす。奉公を終えた彼は英仏戦争の兵役に志願、その後は商業、土地開発、船長、粉ひき、農業などの職を転々とした。懸命に努力したものの、運は彼に味方をせず、事故や苦難、経済的破たんに見舞われた。

しかし、この勇敢な冒険者にも、1759年に幸運が巡ってくる。リディア・ゲイツとの結婚である。知り合っ間もなくのことであった。リディアは訓練を受けた有能な教師で、会衆派教会の執事として尊敬を受け、人生でも成功を収めていたダニエル・ゲイツの長女であり、彼女自身子供のころから会衆派教会の信者であった。このように、ソロモンとリディアの生い立ちはまったく対照的であったが、二人の結婚は長続きした。リディアは宗教教育と実務教育の両方を担当して、8人の息子娘を育て上げた。恐らく子供だけでなく、夫にも読み書きを教えたのではないだろうか。ソロモンはそんなリディアについてこう考えていた。「彼女が身に付けていたのは、洗練された教育だけではありません。彼女は値の付けられない宝石を持っていました。妻そして母が持つ、家庭の中での高価な真珠という宝石です。敬虔で献身的な人格の持ち主でした。」<sup>8</sup>

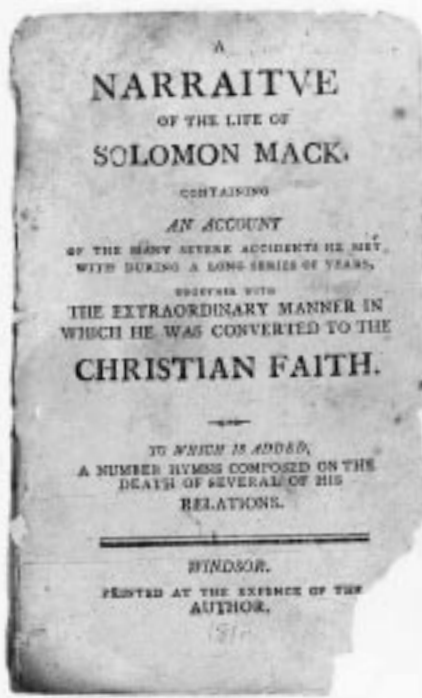
結婚直後、ソロモンはニューヨーク州北部に1,600エーカーの原野を購入する。ところが足のけがのために開墾ができず、契約が切れ、その土地を失ってしまった。1761年、ソロモンとリディアは二人の幼い子供を連れてニューハンプシャー州マローに移る。そこに10年いて4人の子供をもうけた。そして1771年にニューハンプシャー州ギルサムに移り、そこでまた二人の子供が生まれた。その下の子供ルーシーが預言者ジョセフ・スミスの母となるのである。

アメリカ独立戦争のとき、ソロモンは砲兵隊に志願して参戦したものの、すぐに病気になるって、治療のための帰還を命じられた。しかし彼の場合、戦場にいた方がもっと安全だったかもしれない。倒れてきた木に体を打ちつけ、水車であざを作り、折れた木の枝が当たって気を失うなどのことが立て続けに起こったからである。とりわけ最後の事故は大変なもので、その後彼は頻繁に意識を失うようになった。彼はそれを「発作」と呼んでいた。<sup>9</sup>

しかし、ソロモン・マックの冒険の虫が騒ぎ出すまでに時間はかからなかった。ソロモンは10代の息子ジェイソンとスティーブンとともにアメリカの民間武装船の乗組員となったのである。しかし、海の上の4年間はハリケーン、難破、病気など、災難の連続だった。そして一文なしで戻ったソロモンは、詐欺に遭って家を奪われたリディアと子供たちが放浪の生活をしているのを発見する。「もうどうでもいいと思った。」そのころの生活を回想して、ソロモンはそう書いている。<sup>10</sup>しかし、こうした不幸な生活は一時的なものだった。ソロモンの懸命の努力のおかげで、再び自立できるようになったのである。

ソロモン・マックは神を畏れる善人ではあったが、表立って信仰を表明するような

ブラウン大学付属ジョン・カーター・ブラウン図書館の厚意により掲載



ソロモン・マックの自叙伝のタイトルページ

人物ではなかった。『聖書』も読まず教会にも足を向けなかった彼だが、1810年、リユーマチが彼の価値観を変えてしまう。「これからは夢を追いかけることはやめ、残りの人生を神と家族に仕えたいと思う。」<sup>11</sup>その年の冬、彼は『聖書』を読み、熱心に祈った。こうして心に平安を見いだした彼は、1820年に死去するまで、人々に自分の改心と主に仕えることの大切さを説き続けた。彼はまた自伝を著した。ほかの人が自分のように金もうけに走ることをないようにとの願いからである。ソロモンは自分の確信を孫たちに熱心に伝えたが、その中にいたのがジョセフ・スミス・ジュニアであった。ソロモンが亡くなったのは88歳の誕生日の3週間前、孫のジョセフが御父と御子の驚くべき訪れを受けた数か月後のことである。そのことについて、ソロモンは恐らく知らなかったものと思われる。

ソロモンが冒険をし災難に遭っている間、妻のリディア・ゲイツは子供たちをよく導いていた。そうした母親の影響を子供たち全員が受けていたが、中でも末娘のルーシーは特別だった。ルーシーは母親のことをこう語る。「これまで受けてきたすべての宗教的な訓練と教育の機会は、すべて母親のおかげです。」<sup>12</sup>

ルーシーはこのように知的で、自己主張をしっかりと持ち、しかも敬虔な環境の下で育ったにもかかわらず、霊的に心を動かされる体験を味わうのは19歳になってからのことであった。人生にはどのような意味があるかを考えた彼女は、自分の暗い態度を改めるべきだと考えた。そして、世俗的だとレッテルをはられるのが嫌だったので教会に加わったのだが、いろいろな牧師の口から出る他と張り合うような主張に辟易<sup>へきえき</sup>していた。彼女はこう尋ねる。「このようなときに、わたしはどう判断すればよいのだろう。どの教会も古代の教会とは違っているように見える。」<sup>13</sup>

ルーシーはこの霊的なジレンマに対して満足のいく答えを見つけることができなかった。既存の教会が自分の欲求を満たしてくれないことを確信した彼女は、一時的に真の教会の探求をやめた。そして次第に、悩みも薄らいでいく。それから2年もたたないうちに、彼女はジョセフ・スミス・シニアと出会い、結婚する。この時点でルーシーには、その結婚が、彼女のようにイエス・キリストの教会を求めるあらゆる人々に慰めと導きを与える預言者を息子として生み出すものとなるとは思っても寄らないことだった。

## 預言者の両親

ルーシー・マックがジョセフ・スミス・シニアと会ったのは、バーモント州タンブリッジにいた兄のスティープンを訪問していたときのことである。ジョセフは25歳、身長は6フィート（約180センチ）を超え、体ががっちりしていて、父のアサエル似だった。二人は1796年1月24日に結婚、タンブリッジの家族農場の一つに落ち着いた。そしてそこで6年過ごし、その間最初の3人の子供が生まれた。ジョセフとルーシーは、石地の土地だったためだろうか、タンブリッジの農場の借金をやめ、1802年にランドルフに移り、小売店を始めた。

ところが、ランドルフでルーシーが病気になる。医師の診断では結核だった。ルーシーの姉のルビサとロピナが亡くなる原因となった病気である。自分が死ぬことを医師から聞いたルーシーは、子供と夫に慰めを与えたいので自分の命を長らえてくださるように主に願った。



タンブリッジの雑貨屋。160年後もまだそのまま使われていた。ジョセフ・シニアとルーシーが初めて会った場所と言われている。

ジョセフ・シニアとルーシーの初めての家があったバーモント州タンブリッジの三角地帯。1800年2月9日、ここでハイラム・スミスが生まれた。



ジョセフ・スミス・シニアの家族はニューヨーク州の中を数回にわたって移転した。(1) 1796年の結婚の後、ジョセフ・シニアとルーシーはバーモント州タンブリッジに住み、農業を営んだ。(2) 1802年、彼らはランドルフに移り、商店を営む。(3) 翌年、タンブリッジに戻る。(4) 1803年、彼らはまた農地を売り、ロイヤルトンに移って数か月間滞在する。(5) 1804年、ウィンザー郡シャロンに移る。ここでジョセフ・ジュニアが生まれる。(6) またタンブリッジに戻り、サミュエル・ハリソンをもうける。(7) 1808年、またロイヤルトンに戻り、そこでエフライムとウィリアムが生まれる。(8) 1811年、ニューハンプシャー州ウェストレバノンに移るが、チフスが家族を襲う。(9) 1813年、バーモント州ノーウィッチに移る。3年連続の不作に見舞われる。(10) 不作続きのため1816年、ニューヨーク州バルマイラ近郊への移転を強いられる。

ルーシーはこう書いている。「わたしは厳粛に主と約束しました。主がもしわたしを生かしてくださるのであれば、わたしは全力を尽くして主に仕えるという約束です。そのすぐ後で、わたしはこのように言う声を聞きました。『探せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、開けてもらえるであろう。心に慰めを得なさい。神を信じ、またわたしを信じなさい。』

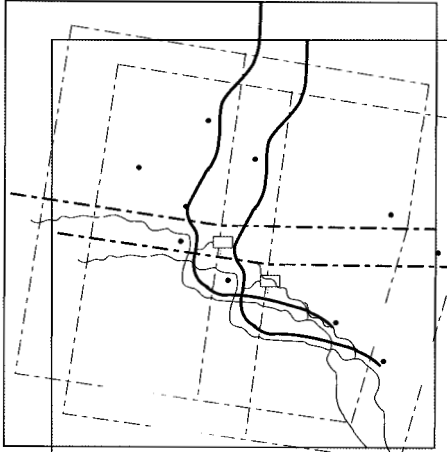
.....快復してすぐ、わたしは全力を尽くして命と救いの道をさらに完全に教えてくれる人を探し求めました。.....

.....わたしはあちらこちらと尋ねて回りました。できればわたしの気持ちをよく理解することのできる気の合う人がいて、わたしを力づけ、決心したことをどうしたら実行できるか教えてくれればと思ったからです。.....

.....そのときわたしは、地上には今、わたしの求める宗教はないと思いました。そこでわたしは、『聖書』を調べてイエスと弟子たちを模範にしようと決心しました。人が与えたり取り去ったりできないものを神から頂けるように努力しようと考えたのです。.....

そしてたどり着いた考えは、バプテスマを受けなければならないということでした。そこでわたしに喜んでバプテスマを施してくれ、しかも教派はどれに加わろうと自由であると言ってくれる牧師を探すと、この儀式に身を任せたのでした。』<sup>14</sup>

ルーシーが宗教と救いに心を奪われていたころ、夫のジョセフはやがて不幸な結末を迎えるもうけ話に手を染め始めていた。バーモントに自生する朝鮮人参が中国では健康と長寿の薬草として珍重されていることを知ったジョセフは、度重なる財政破たんを取り返すべく多額のお金をその薬草に注ぎ込み、大量に収穫した。すると、ロイヤルトンのスティーブンスという名の人物が3,000ドルで買いたいと言ってきた。ジョセフがそれを断ると、スティーブンスは、中国への発送の手配のためにニューヨークに出かけたジョセフの後を追ひ、ジョセフの荷がどの船に載るかを突き止めた。そして自分の息子に同じ人参を持たせて中国に送り、ジョセフの人参と自分の人参を息子に売らせた。スティーブンスの息子は人参を高値で売ったが、もうけをごまかし、ジョセフには1箱分の紅茶を渡したただけだった。ジョセフが詐欺に気づいたときは、スティーブンスはお金を持ってカナダに逃亡し、ジョセフとルーシーに



ジョセフ・スミスはバーモント州ウィンザー郡シャロン町で生まれた。生誕の場所である農場は町の境界近くにあり、南東にあるシャロン村ではない。

残されたのは、1,800ドルの借金だった。ルーシはこう回想する。「この農場は1,500ドルの値打ちがありましたが、夫は支払いを早くしたかったため、800ドルで売ってしまいました。」<sup>15</sup>ルーシーはその800ドルに結婚祝いとしてもらった1,000ドルを加え、借金を返済した。こうして、二人は負債はなかったものの、文無しとなったのであった。

ジョセフとルーシーはバーモント州ロイヤルトンに数か月住んだ後に、ウィンザー郡シャロンに移る。そして、そこでソロモン・マックの農場を借りることになる。ジョセフは夏は農場で働き、冬は学校で教師をした。ジョセフとルーシーはシャロンでもう一人の息子を授かる。二人は1805年12月23日に生まれたその子をジョセフと名付けた。これがエジプトのヨセフの預言を成就する。ヨセフは「えり抜きの聖見者」が自分の子孫から出ることを預言し、しかもその聖見者を見分ける一つの鍵は、彼の名は古代の族長ヨセフにちなんで付けられ、また父の名を取って付けられると語った（2ニーファイ3：14 - 15参照）。

ジョセフ・スミス・シニアとルーシーはまじめな親で、子供たちに宗教上の原則を教えることに力を尽くした。特にルーシーは、『聖書』を読むことを子供たちに勧めている。1811年に生まれた息子のウィリアムは、宗教を大切にする母ルーシーの様子をこう表現している。「わたしの母は敬虔な女性で、子供たちが立派に成長できるように心を砕いていました。それは生きている子も死んだ子も同様です。持てる愛のすべてを尽くして、わたしたちが魂の救いを得る業に携わるよう励ましてくれました。」<sup>16</sup>

ジョセフ・スミス・シニアは体格は大柄だったが、気持ちの優しい人物だった。ヒーバー・C・キンボールは彼のことを、「わたしが会った中で最も快活で、子供のように無邪気な人でした。」<sup>17</sup>ルーシーは彼を「愛情豊かな伴侶であるとともに、家族の信頼を勝ち得ただれよりも優しい父親」<sup>18</sup>と描写する。

ジョセフ・スミス・シニアは、家族に表立って福音を教えるようなことはあまりなかったものの、自身は宗教を大切にする人物であった。ウィリアムはこう回想する。「父の信仰に対する態度は敬虔そのもので、善悪の判断にも厳しいものがありました。」<sup>19</sup>父アサエル同様、ジョセフは当時の教会に対しては疑問を抱いていたが、神へ

#### ジョセフ・スミス・シニアとルーシー・マック・スミスの子供たち

名前	誕生日	誕生地	死亡日
1. 子供	1797年ごろ	バーモント州タンブリッジ	1797年ごろ
2. アルビン	1798年2月11日	バーモント州タンブリッジ	1823年11月19日
3. ハイラム	1800年2月9日	バーモント州タンブリッジ	1844年6月27日
4. ソフロニア	1803年5月16日	バーモント州タンブリッジ	1876年
5. ジョセフ・ジュニア	1805年12月23日	バーモント州シャロン	1844年6月27日
6. サミュエル・ハリソン	1808年3月13日	バーモント州タンブリッジ	1844年7月30日
7. エフライム	1810年3月13日	バーモント州ロイヤルトン	1810年3月24日
8. ウィリアム	1811年3月13日	バーモント州ロイヤルトン	1893年11月13日
9. キャサリン	1812年7月28日	ニューハンプシャー州レバノン	1900年2月1日
10. ドン・カーロス	1816年3月25日	バーモント州ノーウィッチ	1841年8月7日
11. ルーシー	1821年7月18日	ニューヨーク州パルマイラ	1882年12月9日

の信仰は強かった。1811年のあるとき、彼は「信仰の問題について心が騒ぐのを覚えた。」<sup>20</sup>そして彼は、そうした心の動揺と不安の中で、8年間にわたって連続して見た夢の最初を見る。その夢の中でジョセフは、御霊とともに枯れ木の荒れ野を歩いていた。御霊は荒れ野が宗教のない世界を表していることを告げ、ジョセフは食べれば賢くなる食べ物の箱を見つけるだろうとお告げになった。彼は箱の中味を食べようとすが、角の生えた獣から止められるのだった。彼はルーシーに、目を覚ましたときは体が震えていたが、それでも幸せな気持ちだったと話した。こうして彼は、当時たとえ宗教を信仰している人といえども、神の王国については何も知らないことを知るのである。

1811年も後半になって、ジョセフは2番目の壮大な夢を見る。それは、リーハイの命の木の夢とほぼ同じものであった。ジョセフは夢の中で、実のなった美しい木に通じる道を歩いていた。そして、おいしそうなお実を食べ始めたとき、ジョセフは妻と家族も連れて来て、その実と一緒に食べられたらよいのにと考える。そこで家族を連れて来ると、皆食べ始めた。ジョセフはこう語る。「わたしたちは非常に幸福な気持ちでした。その喜びは、簡単には言葉で表せません。」<sup>21</sup>

最後の夢は1819年、息子が最初の示現を経験する少し前にニューヨークで見た。夢の中で天使がこう述べた。「あなたはどのようなことについても常に正直でした。... ..わたしがこのようにしてあなたのもとを訪れるのはこれが最後です。あなたに言いたいのは、救いを得るために、あなたに欠けているものが一つだけあるということです。」<sup>22</sup>ジョセフはその欠けているものが何かが分からないままで目を覚ました。このように、ジョセフは天使との交わりをすでに体験していたので、預言者としての息子の召しはたやすく受け入れることができた。やがて彼は、自分に欠けていたのは救いの原則と儀式であったことに気づく。主はそれを、息子のジョセフを通じて回復してくださったのである。

## ジョセフ・スミスの幼年時代

ジョセフ・スミスの幼年時代、家族は肥沃な土地や豊かな暮らしを求めて転々とした。ジョセフが生まれてすぐに、家族はシャロンからタンブリッジに移った。そして1807年、サミュエルが生まれるとすぐに、バーモント州ロイヤルトンに移り、そこで二人の息子が生まれる。1811年にウィリアムが生まれると、スミス家はニューハンプシャー州ウエストレバノンに移った。そしてルーシーによれば、彼らは「喜びと満たされた心で、これまでの努力の報いとして与えられる豊かな生活に思いをはせるのでした。」<sup>23</sup>ルーシーのこの楽観主義も、チフスがウエストレバノン一帯に「猛威を奮った」とときには失望に変わる。それはコネチカット盆地の北部で6,000人の死者を出した伝染病であった。スミス家の子供たちも、一人また一人と病に冒されていった。ソフロニアは3か月もの間苦しんで危篤にまで陥ったが、ジョセフとルーシーが命を助けてくれるように神に願い求めることによって持ち直し始めた。

7歳のジョセフ・ジュニアもこの病気にかかり、熱は2週間で治まったものの合併症を引き起こし、4回も手術を受けた。最もひどい合併症は左足の脛骨部分の炎症によるはれを伴うものだった。今日では骨髓炎と呼ばれる病気である。ジョセフは2週間

以上ももたえ苦しんだ。その間、兄のハイラムは弟ジョセフに対して深い思いやりを示している。ルーシーはこう記録している。「ハイラムは昼も夜も、かなりの時間ジョセフの傍らに座り、ジョセフの炎症を起こしている足の部分を持ち、痛みを耐えられるようにと両手で押してくれていました。」<sup>24</sup>

ジョセフの足のはれを抑え、うみを出す試みは2回とも失敗に終わり、外科医長は足の切断を勧める。しかしルーシーはこれを拒み、医師たちに強い口調でこう言った。「だめです。足を取っちゃだめ。もう一度やってください。」<sup>25</sup>幸いなことに、「当時アメリカでたった一人、骨髄炎の手術を積極的に提唱し、しかも成功を収めていた医師」であるネイサン・スミス博士がジョセフの担当医、少なくとも担当顧問だった。彼はニューハンプシャー州ハノーバーにあるダートマス医科大学の優秀な医師で、骨髄炎の治療にかけては数世代先を行っていた人物である。<sup>26</sup>

ジョセフは手術の痛みを耐えるために体を縛るとか、ブランデーやワインを飲んで神経を弛緩させる方法は拒んだ。まず彼は、母親に部屋を出るように頼んだ。自分の苦しむ姿を見せたくなかったからである。彼女は同意した。しかし、医師たちが鉗子で骨の一部をはがしたためにジョセフが悲鳴を上げると、たまらず部屋に飛び込んで来た。「お母さん、出てって。出てってよ。」ジョセフが大声で叫ぶと母はいったん外に出るのだが、また入って来る。そしてまた外に出されるのだった。<sup>27</sup> この手術の苦しみを乗り越えたジョセフは、おじのジェス・スミスとマサチューセッツの港町セーレムに行く。浜風が手術後の回復を助けてくれるのではとの配慮であった。しかし、大変な手術であったことから、回復は遅々としたものだった。ジョセフは3年間松葉杖を使い、その後も多少足を引きずる状態であった。しかし、その後は健康を取り戻し、活力に満ちた生活を送ることになる。

母親によれば、ジョセフの幼年時代の出来事の中で特筆すべきものは、その手術ぐらいである。<sup>28</sup> 1813年ごろ、一家はバーモント州ノーウィッチに移った。そこで恐らくジョセフは、公立の小学校に短期間通ったものと思われる。また家庭では宗教的な教育も受け、外で当時のいろいろな活動やゲームに興じたことであろう。彼は背が高く、スポーツが好きで、体力もあったが、物事を深く考え、温厚な性格だった。母親はジョセフについて、「ほかのどの子供よりも本を読むのは少なかったのですが、物事を深く考え、よく研究するという点では群を抜いていました」<sup>29</sup>と語る。スミス家はノーウィッチでマードック氏の土地を借りて農業を始める。それは彼らにとって、バーモント州の土で生計を立てる最後の試みだった。ルーシーはこう書いている。「初めの年は実りはありませんでした。でも、その地からとれた果実を売って家族のためのパンを買うことができました。」<sup>30</sup> 2年目も実りはなかった。

スミス家の3年目はほかのほとんどの人と同じように、冷害に見舞われた。悪名高き1816年、夏のなかった年で、「1800年代初めての、凍え死ぬほど寒い年」として知られている。1815年の4月半ば、オランダ領東インド諸島（インドネシア）にあるタンボラ山が大爆発を起こした影響であった。それは歴史上最大と言われる爆発で、25立方マイル（約105立方キロ）の溶岩を流出した。成層圏にまで達した火山灰は1600年以来最も深刻な影響を日照に与え、かなり長期間にわたって天候のパターンを変えてしまったのである。<sup>31</sup>

ニューイングランドは大きな打撃を受けた。6月6日から8月30日までの間に4回にわ



少年ジョセフ・スミスの医師の一人、ネイサン・スミス

エール大学付属美術館所蔵 1826年度卒業生から医学部への寄贈品

たって降りた霜のため、寒さに強い作物を残してすべてがだめになった。不作の理由も分からないまま、連続の不作に希望を失った多くの人々がニューイングランドを離れた。バーモント州ノーウィッチのスミス家もそうである。1810年から20年にかけての10年間は、脱バーモントの年である。バーモントの60以上の町が人口の減少を見ている。<sup>32</sup> バーモントを出た人のほとんどは西へ、つまりニューヨークやペンシルベニア、オハイオの各州に向かった。いい土地があるとの新聞の広告に動かされたのである。広告には「樹木が多く、水の便や交通の便も良く、肥えた土地であること疑いなし -- すべてエーカー当たり2,3ドルの長期払いで入手可能」<sup>33</sup>とあった。

## パルマイラに移る

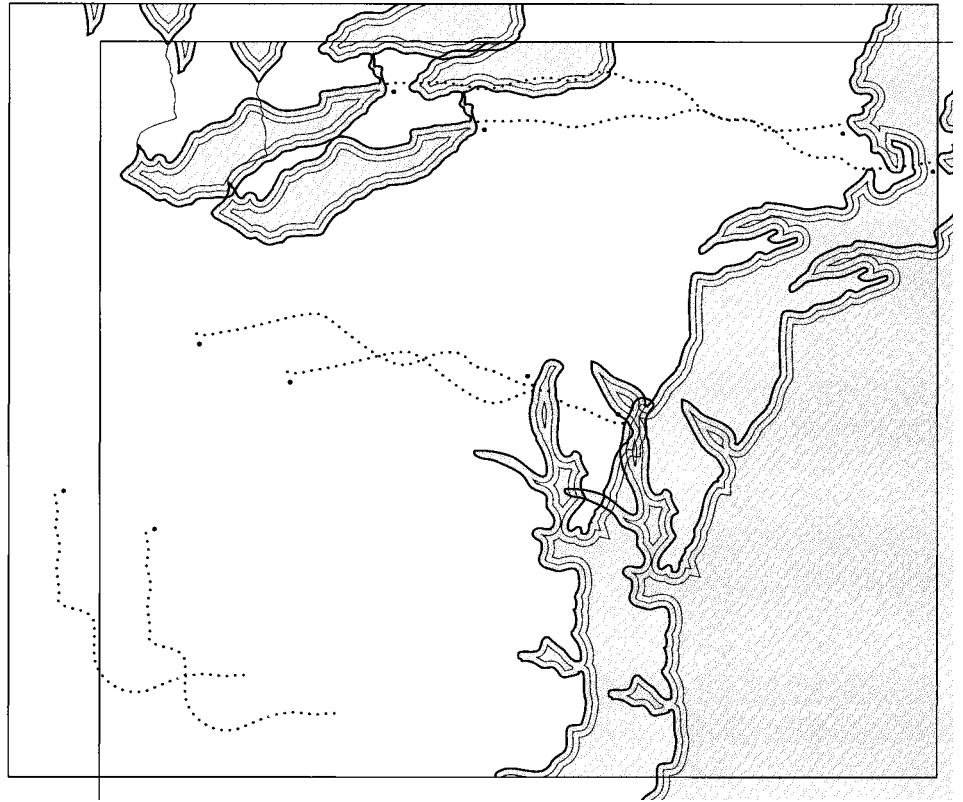
1816年、ジョセフ・シニアはハワード氏という人物と連れ立ってニューヨーク州オタリオ郡、パルマイラに行くのだが、その旅の前に彼は債権者と債務者のもとを訪れて清算をしようとした。しかし、中には取引の内容を記録に残しておかなかった人々もいた。ジョセフは現金での支払いもしくは債権を譲渡するという形での清算を行い、債権者からの請求に対してきちんと支払いを済ませたことは明白であった。こうして、金銭的な問題はすべて片付いたと考えたジョセフは、パルマイラに行き、土地を購入したのである。それからルーシーに手紙を書き、家財を幌馬車に積んで引っ越しの準備をするように指示した。そしてジョセフはパルマイラに一緒に来たハワード氏のいとこのカレブ・ハワードに頼んで、御者として家族をニューヨーク州に連れて来てもらうつもりでいた。ところが、夫に会うために出発しようとしていたルーシーのところに新たな債権者が何人か現れ、まだ支払ってもらっていないお金があると言うのである。ルーシーはこの出来事についてこう語っている。「不当な請求だとは分かっていたのですが、裁判ざたになるよりは払った方がこちらにとっては有利だという結論に達しました。そこで、わたしは大変な思いをしてそのお金を集めました。150ドルです。こうして返済はすべて終わりました。」見かねた近所の人々が親切心から、少しでも足しになるように募金運動をすることを提案してくれたのだが、ルーシーは断っている。「そのようにして人から援助を受けるやり方は、大変な嫌悪感を抱かせるものでした。」<sup>34</sup>

こうして、支払いを済ませたルーシーと母リディア、そして赤ん坊のドン・カーロスから17歳のアルピンまでの8人の子供たちは、カレブ・ハワードとともにニューヨークに向かった。ところが南ロイヤルトンで幌馬車が転倒したときに、乗っていたルーシーの母リディアが負傷してしまう。その結果、リディアはタンブリッジの息子に引き取られることになった。ルーシーとリディアはタンブリッジで涙ながらに別れの言葉を交わす。年老いたリディアは娘ルーシーにこう諭して聞かせた。「命のあるかぎり神の業のために働くのですよ。天国のもっと楽しい世界であなたを抱き締められる日が来ることを楽しみにしています。」<sup>35</sup>リディアはそれから2年後ロイヤルトンにて、このときの傷がもとで死んだ。

スミス一家のこの旅の途中で、ルーシーは御者に雇ったハワードという人物が、「冷淡なとんだ食わせ者」<sup>36</sup>であることに気づく。一家を集めてニューヨークまで案内する費用としてジョセフ・シニアがハワードに支払ったお金は、途中の宿屋での酒とばくちに使果たしてしまった。また当時10歳だった少年ジョセフ・ジュニアは、

合衆国の初期の歴史の中で、西部移住者への巨大な壁はアパラチア山脈であった。移住者たちは、海岸地帯から内陸部へ入るのに3つのルートのどれかを取らざるを得なかった。一つはニューヨーク州のグレート・ジェネシー・ロードのモホークターンパイク、次がメリーランドからベンシルベニアそしてオハイオへと通じる国道、そしてノースカロライナからテネシーそしてケンタッキーへと行く未開発の道である。

スミス一家は最初の道を通してニューヨーク州バルマイラに行った。この道はニューイングランドを出てマサチューセッツに入り、ニューヨーク州東部のオールバニを通してモホーク川の峡谷をさかのぼる。



手術からの回復がまだ完全でなかったにもかかわらず、「何日間も雪の中を1日40マイル（約64キロ）もハワードに歩かされた。あれほどひどい疲れと痛みはなかった」と回想している。<sup>37</sup>

目的地まであと数マイルというユティカの町で、ハワードはスミス家の家財を幌馬車から下ろし、そのまま幌馬車ごと立ち去ろうとした。そこでルーシーは彼の前に立ちはだかった。「あなた、幌馬車に触らないで。さもなければ、最後まで行くのよ。」ルーシーは毅然とした態度で家財を幌馬車に積み直すと、バルマイラまでの残りの道を自分で馬車を操った。到着した彼女が持っていたお金はわずか2セントだったが、彼女は幸せだった。彼女はこう書いている。「夫と再び会えて、またわたし自身も子供たちも心優しい伴侶、そして父親のいたわりの前に身を投げ出すことができて、幸せでした。」<sup>38</sup>

### ジョセフ・スミスへのニューイングランドの影響

スミス家は福音の回復に縁のある多くのニューイングランド出身の家族の一つにすぎない。ジョセフの後継者であるブリガム・ヤング、忠実な使徒ヒーバー・C・キンボールなど、無数の教会指導者がニューイングランドの出である。そして彼らの先祖の中には、メイフラワー号で海を渡って来た男女、独立戦争で活躍した人々もいた。<sup>39</sup> ニューイングランドの荒れ野で家や社会を作り上げたこれらの勤勉で独立心の強い人々は、実にすばらしい人々である。彼らは国を愛する、社会的な責任感の強い、宗教的な人々であった。ジョセフ・スミスは出身の貧しさを弁解する必要などまったくなかった。彼には先祖からのしっかりした倫理観が脈々と受け継がれていたからである。



ジョセフの置かれた環境を形作っていたピューリタンの考え方は、後に彼が預言者として示される原則や教義に説明を補足してくれるものであった。例えば、ジョセフが啓示で知った「あなたは怠惰であってはならない」(教義と聖約42:42)という原則は、ニューイングランドの質素でやり繰り上手の生活の正しさを確信させるものであった。また、最良の書物から「研究によって、また信仰によって」(教義と聖約88:118) 学問を求めるとの主の言葉は、教育を重視するピューリタンの考え方を是認する。さらに、後にジョセフが理想の神権社会を提唱したとき、彼はニューイングランドのピューリタンであればすぐに理解できる原則を用いて説明をしている。

しかし、ジョセフはこのニューイングランドの伝統に縛られていたわけではない。生涯の間に、彼のピューリタンとしての背景にまったく反し、神学上の視野やその表現の明確さにおいて、過去のあらゆる宗教指導者を超えるような福音の教義や原則を紹介している。例えば、彼の人格を持ち思いやりにあふれた神の概念は、厳格な正義の神というカルビン派の考えとは異なったものであったし、神会が明確に異なる三者で構成されるとの啓示は、カルビン派の伝統的な三位一体の神学とは真っ向から対立するものであった。

しかし、こうした環境的なもの以上にジョセフの考え方に影響を与えたのは、神そのものである。確かに主は前世からジョセフを知っておられ、地上における神の教会の回復という重要な役割を果たせるように備えられた。ジョセフは自らの予任についてこう語っている。「この世に住む民に仕える召しを受けているすべての人は、この世が造られる前から天上の会議でその目的のために聖任されていたのです。当然のことながら、わたし自身も天上の会議でまさにこの職に聖任されていたと信じています。」<sup>40</sup>

ブリガム・ヤングはジョセフ・スミスについてこう語っている。「この世の基が置かれるはるか前の永遠の会議において定められたのは、彼がこの世の時満ちる神権時代において人々に神の言葉を授け、神の御子の神権の完全な鍵と力を受ける者となるということです。主は彼と彼の父、そのまた父、そしてアブラハムやアブラハムから洪水の時代、洪水の時代からエノク、エノクからアダムに至る彼の遠い先祖にまで目を留められました。主はその家系と血統を、基が置かれるところからこの人物の誕生に至るまで見守ってこられたのです。彼はこの時満ちる神権時代を管理するために、永遠の世界で予任されていたのです。」<sup>41</sup>

## 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』5:498で引用
2. *Salem Gazette* 『セーレム新聞』1785年11月22日付, リチャード・ロイド・アンダーソン, *Joseph Smith's New England Heritage* 『ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの伝統』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1971), 89, 91で引用
3. アンダーソン 『ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの伝統』124 - 125, 129で引用。130 - 140も参照
4. ジョージ・A・スミス “*Memoirs of George A. Smith*” 『ジョージ・A・スミス回顧録』2, アンダーソン 『ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの伝統』112で引用。『教会歴史』2:443も参照
5. スミス 『回顧録』2, アンダーソン 『ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの

伝統』112 - 113で引用

6. エドワード・W・タリッジ, *History of Salt Lake City* 『ソルトレーク・シティーの歴史』 (Salt Lake City: Star Printing Co., 1886), 157

7. ソロモン・マック, *A Narrative Life of Solomon Mack* 『ソロモン・マックが語るその人生』 (Windsor, Vt.: [1811]), 4

8. ルーシー・マック・スミス, *Biographical Sketches of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』の草稿より, アンダーソン 『ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの伝統』27で引用

9. マック 『ソロモン・マックが語るその人生』11 - 12, 17参照

10. マック 『ソロモン・マックが語るその人生』17

11. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 7 - 8で引用

12. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』68, アンダーソン 『ジョセフ・スミスの受け継いだニューイングランドの伝統』29で引用

13. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』31

14. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』34 - 36

15. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』40

16. ウィリアム・スミス, *William Smith on Mormonism* 『ウィリアム・スミス, モルモンイズムについて語る』 (Lamoni, Iowa: Herald Steam Book and Job Office, 1883), 6

17. *Journal of Discourses* 『説教集』8: 351で引用

18. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』182

19. ウィリアム・スミス, リチャード・ロイド・アンダーソン “Joseph Smith's Home Environment” *Ensign* 「ジョセフ・スミスの家庭環境」『エンサイン』1971年7月号, 58で引用

20. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』46

21. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』49で引用。48 - 50も参照

22. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』68で引用

23. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』51

24. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』55

25. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』56

26. リロイ・S・ワースリン “Nathan Smith (1762 - 1828) Surgical Consultant to Joseph

Smith” *Brigham Young University Studies* 「ジョセフ・スミスの外科顧問ネーサン・スミス (1762 - 1828年)」『ブリガム・ヤング大学紀要』1977年春季号, 337。リロイ・S・ワースリン “Joseph Smith's Boyhood Operation: An 1813 Surgical Success” 「ジョセフ・スミスの少年のころの手術 1813年の外科手術の成功例」, *Sidney B. Sperry Symposium* 『シドニー・B・スペリー・シンポジウム』1980年1月26日付, 328 - 347で引用された文も参照

27. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』57で引用

28. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』67参照

29. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』82

30. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』59

31. ヘンリー・ストンメル, エリザベス・ストンメル, *Volcano Weather* 『火山気候』 (Newport, R.I.: Henry and Elizabeth Stommel, 1983), 3, 11 - 12

32. ラリー・C・ポーター “A Study of the Origins of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints in States of New York and Pennsylvania, 1816 - 1831” 「ニューヨークとペンシルベニア各州における末日聖徒イエス・キリスト教会の起源に関する研究(1816 - 1831年)」, 博士論文, ブリガム・ヤング大学, 1971年, 30

33. ルイス・D・スティルウェル “Migration from Vermont (1776 - 1860)” 「バーモントからの移住 (1776 - 1860年)」, *Proceedings of the Vermont Historical Society* 『バーモント歴史協会 議事録』 (Montpelier, Vt.: Vermont Historical Society, 1937), 135で引用。

34. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』61

35. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』62

36. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』62

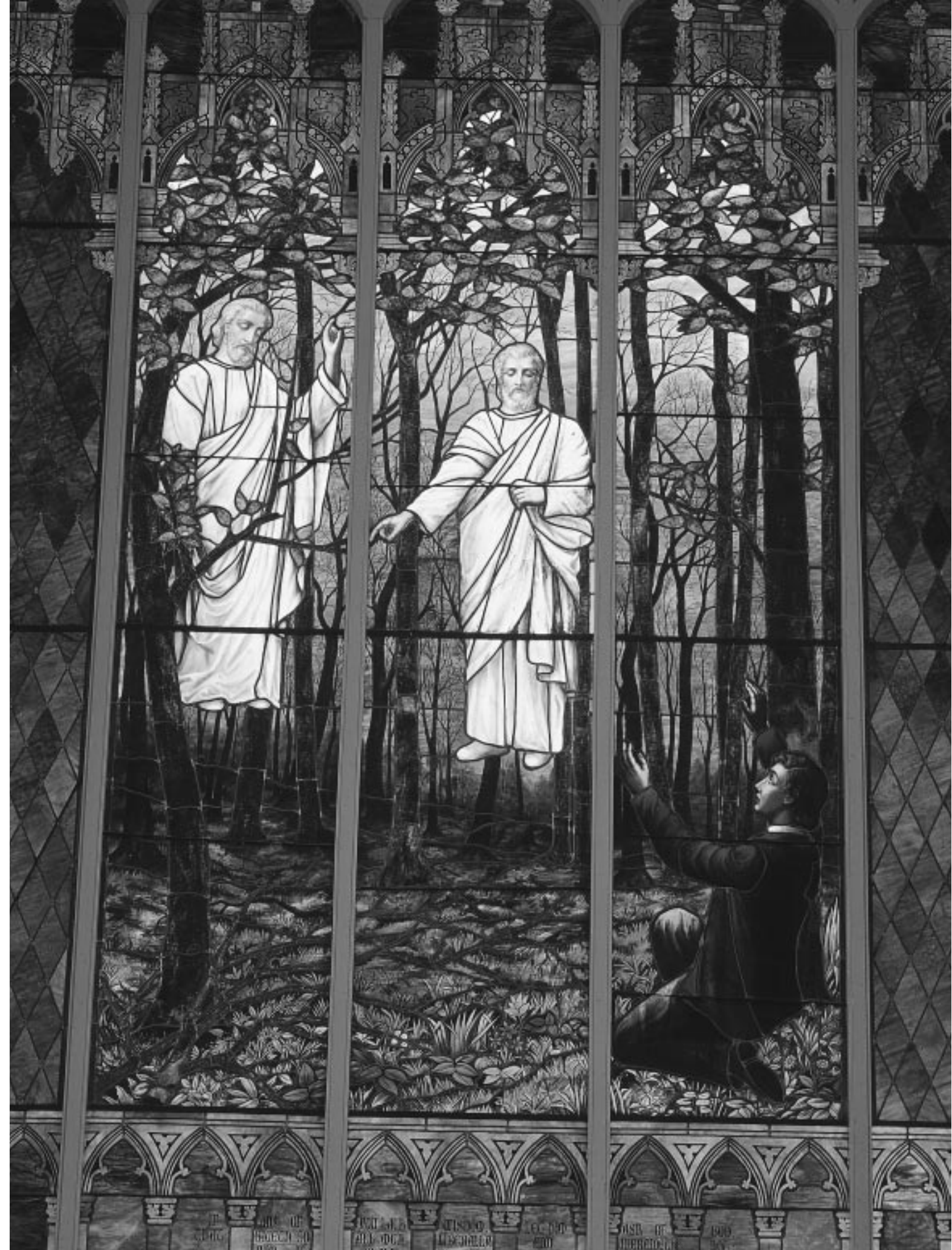
37. 教会歴史草稿, *The Personal Writings of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』デューン・C・ジェスパー編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984), 666

38. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』63

39. ガスティブ・O・ラーソン “New England Leadership in the Rise and Progress of the Church” *Improvement Era* 「教会の創立・発展期におけるニューイングランドの指導者」『インブルーメント・エラ』1968年8月号, 81参照

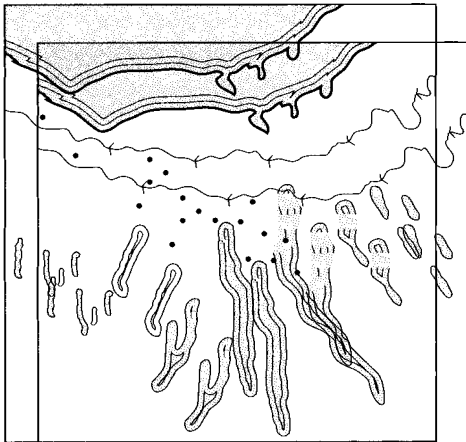
40. 『教会歴史』6: 364

41. 『説教集』7: 289 - 290



# 最初の示現

年表	重要な出来事
1818	スミス家がファーミントンに農場を購入する
1819	信仰復興運動がバルマイラ近郊で激しさを増す
1820年春	14歳のジョセフが父の農場の近くの森で御父と御子にまみえる



1816年にスミス家が移住して来たとき、バルマイラは約600人の住む村であった。1818年または1819年に、彼らはファーミントン（後のマンチェスター）の町の近くに100エーカー（約40ヘクタール）の農地を開墾した。

◀最初の示現を描いたこのステンドグラスは、アニー・D・ワトキンスにより1907年にソルトレーク・シティ第17ワードに寄贈された。ベルギーのガラス職人の手によるものである。

**何**世紀もの間、世界は霊的な暗黒時代が続いていた。主の使徒を拒んだためである。宗教改革者らが見たほのかな光を除いては、天は閉ざされていた。これが、1820年の春にニューヨーク州北部の森で一人の少年が経験した出来事により一変する。霊の光が降り注ぐ時代の夜明けである。

スペンサー・W・キンボール大管長はこう語っている。「今また一人の人物が神の導きを求めて熱心に祈りをささげ、新しい時代は夜明けを迎えました。独りになれる場所が選ばれ、ひざがかがめられ、心はへりくだり、願いがささげられました。すると太陽にも増して明るく輝く光が世界を照らしました。もう幕は閉じられることがないのです。

……天は地に口づけをし、光は闇<sup>やみ</sup>を追い払い、神が再び人に語られたのでした。」<sup>1</sup>

## ニューヨーク州西部への定住

ジョセフ・スミス・シニアはニューヨーク州のフィンガーレーク地方の小さな村、バルマイラを定住の場所を選んだ。湖の形が指（Finger）の形をしているのでその地方はそう呼ばれた。19世紀を迎えたころのフィンガーレーク地方は人口も少なかったが、そのころは急速な発展を見せ、1820年にもなると湖沿いにたくさんの村が形成されていた。

この地方の発展は、肥沃な土地と豊かな森林によるところが大きい。またニューヨーク州をオールバニから五大湖地方まで結び、人と物資を運ぶ重要な内陸水路であるエリー運河も、発展に大きく寄与していた。この363マイル（約584キロ）に及ぶ水路は、700万ドルを投じて、ほぼすべて人力のみで建設されたもので、州を横断するのにそれまで3週間を要していたのが6日間に短縮され、輸送の経費も数百万ドル節減された。この運河がバルマイラのメインストリートから数ブロックの所にあつたのである。

10人の子（1821年には11人になる）の父親であったジョセフ・スミス・シニアは、生計を立てるために懸命に働いた。そしてバルマイラに来てから2年後には、近くのファーミントンの町に100エーカー（約40ヘクタール）の森林を購入するための頭金をためるまでに至った。初めの年、彼は息子たちとともに30エーカー（約12ヘクタール）の森林を伐採して開墾し、小麦の種をまいた。<sup>2</sup> 森林を開墾するということは、のこぎりや斧で木を切り倒すだけではない。残った切株や木の根を手で、また家畜の力を借りて掘り起こさなければならないのである。ジョセフはそのころのことをこう振り返る。「家族を支えるために家族全員ができることを何でもしなければなりませんでした。」<sup>3</sup> やがてファーミントンの町は分割され、1822年、スミス家は新設されたマンチェスターの町の住民となった。



エリー運河の掘入れは1817年7月4日に行われた。

当時、ジョセフの学校教育の機会が極度に制限された状況にあった。ジョセフはそれを「貧しい暮らし」のためであるとしている。「わたしたちは教育の機会を奪われていました。読み書きと簡単な算数だけしか習わなかったと言って過言ではありません。わたしが身に付けたのはそれがすべてでした。」<sup>4</sup>

さて、キャッツキル山脈やアディロンダック山脈を越えてフィンガーレーク地域に移住する人々が増えるに従い、移住者の中にはかつて住んでいた所の教会と疎遠になる者が多くなった。そうした「教会疎遠」の移住者に懸念を抱いたのがバプテスト派、メソジスト派、長老派を中心とする教派の宗教指導者で、彼らは西部に住む「教会に恵まれない」移住者のための布教プログラムを確立することになる。

信仰を持たない人々への布教にことさら熱心だったのはメソジスト派とバプテスト派である。メソジスト派は巡回説教者を雇った。担当の地区を町から町へ馬で回る巡回教導者で、人々の宗教的な問題の解決をその任務としていた。バプテスト派が採用したのは農業説教者制度である。ふだんは農業で生計を立てている人が、日曜日になると説教を行うのである。こうした活動は「第二次大覚醒<sup>かくせい</sup>」と呼応して活発さを増し、やがてアメリカ合衆国全体に広がるようになる。

ニューヨーク北部の教会のほとんどがこのような信仰復興のための伝道集会を行っていた。宗教心を呼び起こすための集会である。伝道集会は森に面した場所や森の中の小さな広場など、野外で行われることが多かった。参加者はほこりだらけの道やでこぼこ道を延々とやって来てテントを張ったり、野営地の傍らに幌馬車を止めたりして会に加わった。このような野外伝道集会は1週間も続くことがよくあり、朝から夜遅くまで行われる日もあった。牧師は何人かで交替するのだが、2、3人の牧師が同じ聴衆に向かって同時に説教をすることもまれではなかった。<sup>5</sup> このように、1800年代初頭のニューヨーク州西部の宗教熱は大変なもので、「焼け野原の地区」として知られていた。牧師たちのつけた火が文字どおりフィンガーレーク地方全体に広がっていたのである。したがって、若きジョセフと家族がこの宗教熱に巻き込まれたことは何ら驚くに値しない。

## ジョセフ個人の探究

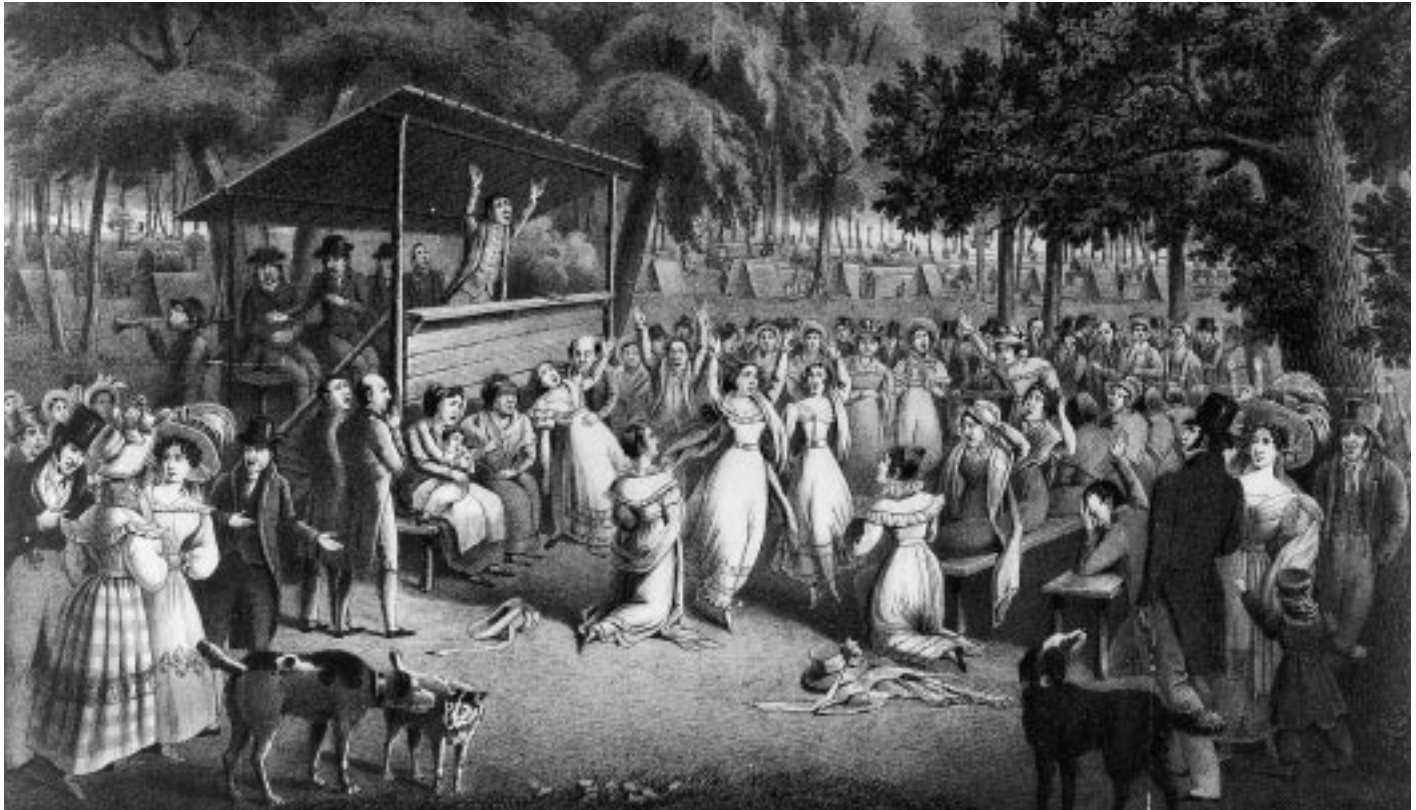
ファーマントン（後のマンチェスター）は、この宗教熱の影響を受けた地区にあった定住地の一つである。後にルーシー・マック・スミスはこう回想している。「宗教の大復興運動がキリスト教のあらゆる教派に及び、わたしたちの住んでいた地区にも広まってきました。世の人々の多くが魂の救いに関心を抱き、進み出て自分は宗教を求めていると公言するのです。」「ほとんどの人は教会に入りたいと思っていたが、どこにするかは決めかねていた。預言者ジョセフ・スミスは、マンチェスターに移って2年後のことをこう語っている。「宗教に関する異常な騒ぎがあった。それはメソジスト教徒から始まったが、間もなく広くその地域内のすべての教派に及んだ。実に、その地方全体がそれに影響されたようであった。そして、大勢の群衆が様々な教派に加わり、それが人々の間にただならぬ騒ぎと分裂を引き起こした。」（ジョセフ・スミス 歴史1：5）

この信仰復興運動と野外伝道集会は若きジョセフにも影響を与える。彼は自伝の中で次のように述べている。「12歳のころだと思うが、わたしの心は不滅の魂の救い



議会図書館の厚意により掲載

「メソジストの巡回説教者」A・R・ワウド画



議会図書館の厚意により掲載

「1830 - 1835年ごろの野外集会」

A・ライダー画

という何よりも重要な事柄について、深く考えていた。』これが彼を聖文の研究と罪の赦しを求めようとする行動へと導くのである。いろいろな宗教牧師たちによって説かれる教えについて、ジョセフはこう述べる。「わたしにはだれが正しくだれが間違っているか分からなかった。ただ、これは永遠に関することなので、わたし自身は正しくありたいと思った。』また、こうも述べている。「機会があるごとに、彼らのいろいろな集まりには出席した。……わたしの若く、世間のことを知らない者にとって、だれが正しく、だれが間違っているか、確かな結論を出すことは不可能であった。」(ジョセフ・スミス 歴史1:8)

ジョセフはまた、牧師や交際するクリスチャンの人々の間に憎しみや偽善があるのを目の当たりにして混乱する。ジョセフはこう語っている。「ある異なった教派に属する親しい友人は、わたしをことのほか驚かせた。彼らの告白が、神聖な書物〔聖典〕の中にわたしが発見した聖い生き方<sup>きよ</sup>や慈しみあふれた会話とはかけ離れていたからである。このことはわたしを大いに悲しませた。』そして改宗者たちがこの教会、あの教会と所属を定め始めると、「牧師たちと改宗者たちの好ましく見えた感情は、真実ではなく偽りであるように思われた。牧師が牧師と、改宗者が改宗者と言い争うひどい混乱と悪感情の場面がこれに続き、その結果、すべてお互いの好感情は、もしかつて幾らかでもそのようなものがあつたとしても、今は言葉の争いと見解についての論争ですっかり失われてしまったからである。」(ジョセフ・スミス 歴史1:6)

そのような状況が探究心に満ちた若きジョセフの心にどれほどの影響を与えたかは想像でしか分からないが、神への道を示してくれる人だと彼が考えていたまさに

その人たちが「同じ聖句を異なって解釈し、その結果、聖書に訴えて疑問を解決することへの信頼をすべて打ち砕いてしまっていた〔ようである。〕」(12節) ジョセフはこう説明する。「この言葉の争いと見解の騒動の渦のただ中であって、わたしはしばしば心に問うた。『何をしなければならぬのだろうか。これらすべての教派のうちのどれが正しいのだろうか。それとも、ことごとく間違っているのだろうか。もし彼らのうちのどれかが正しいとすれば、それはどれで、どうすればそれが分かるのだろうか。』」(10節)

ジョセフ・スミスは宗教を重んじる家庭で生まれ育った。母親と姉、二人の兄弟は長老派に属していた。しかし、ジョセフは満足できなかった。ジョセフが小さいころから両親は彼にキリスト教の教えを授けていたので、ジョセフは既存の教会の中に正しい教会があるだろうとは思っていたが、それがどれなのか分からなかった。ジョセフは正しい教会を見いだす過程で、自分で教会を設立することなど考えていなかったし、真理が地上にはないなどとは考えていなかった。ただ単に、どこで真理を見つければよいか分からなかったのである。ただ、彼は『聖書』を信じるように訓練されていたので、答えを『聖書』に求めたのであった。

ほかの多くの開拓者の家庭と同じように、スミス家にも『聖書』があった。「善い両親」によってまかれた種が聖なる御霊によって養われたのである。光を求めて何昼夜瞑想をし、探究をし、祈ったのか、彼は触れてはいない。また、自分の気持ちを家族に打ち明けたかどうかにも触れていない。しかし、彼の何年にも及ぶ準備と時間と努力と瞑想は報われた。14歳のとき、彼は『聖書』の一節に自分の問題への解決の糸口を見いだしたのである。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブの手紙1:5)

この聖句はジョセフに深い影響を与える。「この聖句が、このとき、かつて人の心に力を与えたいかなる聖句にも勝って、わたしの心に力強く迫って来たのであった。それはわたしの心の隅々に大きな力で入り込んで来るように思われた。もしだれか神からの知恵を必要とする者がいるとすれば、それは自分であることを悟って、わたしはこの言葉を再三再四思い巡らした。なぜならば、わたしはどうしてよいか分からず、また自分がそのときに持っていた知恵よりも深い知恵を得られなければ、どのように行すべきかまったく分からなかったからである。」(ジョセフ・スミス 歴史1:12)

『聖書』はジョセフにどの教会が真実であるかは告げなかったが、祈れば問題は解決することを教えてくれた。そのことを彼はこう語る。

「とうとうわたしは、暗闇と混乱の中にとどまるか、それともヤコブが指示しているとおりに行うか、すなわち神に願い求めるか、どちらかにしなければならぬという結論を出すに至った。……

そこで、神に願い求めるというこの決心に従って、わたしはこれを実行するために人目を避けて森に入って行った。それは千八百二十年の早春、美しい晴れた日の朝のことであった。」(13-14節) それは彼が初めて声に出して祈った日であった(14節参照)。

そして、続いて起こった出来事はジョセフ・スミスを、それ以降のすべての人々と



ジョセフ・スミスが最初の示現を体験した正確な場所は分からない。スミス家から道を隔てた所にある森が最もその可能性が高い。

一線を画した存在とする。永遠の父なる神と御子イエス・キリストが彼に御姿を現されたのである。神が御姿を現されることを「神の顕現」と呼ぶが、『聖書』はこの「神の顕現」が実際にあったことを証明する。ペニエルでヤコブはこう言って喜びを表した。「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている。」(創世32：30) また神はモーセに「人がその友と語るように……顔を合わせて語られた。」(出エジプト33：11。民数12：8も参照) またイザヤはこう書いている。「わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから。」(イザヤ6：5)

父なる神と御子イエス・キリストは、14歳のジョセフ・スミスに御姿を現された。イエス・キリストの復活以来、悪魔の王国にとってそれに匹敵するような脅威はなかったであろう。したがって、サタンがその朝、その場にいたことは驚くに当たらない。

モーセのように(モーセ1：12-22参照)、ジョセフはサタンからの直接の攻撃を受けた。「わたしは前もって決めておいた場所に人目を避けて行き、辺りを見回し、自分一人であることを確かめると、ひざまずいて、心の願いを神に告げ始めた。わたしがそうし始めるやいなや、すぐにわたしは何かの力に捕らえられた。その力は完全にわたしを圧倒し、わたしの舌をしびれさせるほどの驚くべき力を振るったので、わたしは物を言うこともできなかった。深い闇がわたしの周囲に集まり、一時はあたかも突然の滅びを宣告されたかのように思われた。」(ジョセフ・スミス 歴史1：15)

悪魔の力は強烈であった。しかし、それよりも大きな力が彼を救い出した。ジョセフは力を振り絞って彼を捕らえた敵の手から救い出してくれるように神に願い求める。そのときの経験を彼はこう書いている。

「すると、わたしが今にも絶望し、破滅に身を任せようとしたその瞬間……わたしは自分の真上に、太陽の輝きにも勝って輝いている光の柱を見た。そして、その光の柱は次第に降りて来て、光はついにわたしに降り注いだ。

それが現れるやいなや、わたしはわが身を縛った敵から救い出されたのに気づいた。そして、その光がわたしの上にとどまったとき、わたしは筆紙に尽くし難い輝きと栄光を持つ二人の御方がわたしの上の空中に立っておられるのを見た。すると、そのうちの御一方がわたしに語りかけ、わたしの名を呼び、別の御方を指して、『これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい』と言われた。」(16-17節)

サタンとサタンの力は消えた。代わって御父と御子が不滅の栄光を身にまもって立っておられた。ジョセフは物を言えるようになるやいなや、その方々に、すべての教派のうちどれが正しいかを尋ねた。ジョセフはこう報告している。

「すると、それらのどれにも加わってはならない、すべて間違っているからである、とのお答えであった。また、わたしに話しかけられた御方は、彼らの信条はことごとくその目に忌まわしいものであり、信仰を告白するそれらの者たちはすべて腐敗しており、『彼らは唇をもってわたしに近づくが、その心はわたしから遠く離れている。彼らは人の戒めを教義として教え、神を敬うさまをするけれども神の力を否定している』と言われた。

その御方は再びわたしに、それらのどれにも加わることを禁じられた。……わたしは再び我に返ると、自分が天を見上げて仰向けに横たわっているのに気づいた。」



(19 - 20節) 神の現れに体力を消耗したジョセフは、しばらく休んでようやく家にたどり着くという有様<sup>ありさま</sup>だった。

ジョセフはこの天からの訪れに並々ならぬ影響を受ける。どの教会が正しいかとの問いへの答えを受けただけでなく、自分の罪が赦され<sup>10</sup>、「完全な福音が将来いつか〔彼に〕明らかにされる」<sup>11</sup>と言われたからである。この経験は生涯にわたって預言者ジョセフに影響を与えた。後に彼はその影響力について、いきいきとした調子でこう語っている。「わたしの心は愛で満たされ、それから何日もの間、わたしは大いなる喜びに満たされた。主がわたしとともにおられたのである。」<sup>12</sup>

## ジョセフの示現への反応

家に着くやいなや、ぐったりしている様子を見かねたのであろう、母親が具合でも悪いのかと尋ねた。ジョセフは答えた。「『何でもありません。大丈夫です。元気です。』……『長老派の教えは真実でないことが自分で分かりました。』」(ジョセフ・スミス 歴史1:20) このときにそれ以上の詳しいことを母親に話したのかどうか、ジョセフは触れていない。しかし、やがてジョセフは「神の顕現」について家族に打ち明ける。弟のウィリアムはこう断言している。「わたしたちは皆、彼の言ったことを心から確信しました。彼は正直な人間でした。両親が彼を信じていましたから、子供たちが信じるのは当然のことです。」<sup>13</sup>この歴史上きわめて重要な出来事はジョセフの疑問に答えを与えてくれた。しかし、ほかの人々にとっては必ずしもそうではなかった。ジョセフはこう報告している。「しかし、それから間もなく、わたしがその話をしたことが、信仰を告白する人々の間にわたしに対する大きな偏見を引き起こし、ひどい迫害の原因となったことを、わたしは知った。そして、迫害は増し続けた。」(ジョセフ・スミス 歴史1:22)

家族以外でジョセフの体験を最初に耳にした者の一人に、「宗教上の騒ぎの中で盛んに活動をしていたメソジスト派の説教者の一人」がいた。ジョセフは無邪気にも、この牧師が天からのよきおとずれを喜んでくれるものとばかり思ったが、結果は逆であった。こう書いている。「わたしは彼の振る舞いにひどく驚いた。彼はわたしの話を軽くあしらっただけでなく、ひどく軽蔑<sup>けいべつ</sup>した調子で、それはすべて悪魔から出たものであって、この時代に示現や啓示のようなものはなく、そのようなものはすべて使徒たちで終わっており、今後決してそのようなものはない、と言った。」(21節)

教派社会ではそのような反応はごく普通のことである。1820年に全能の神が、古代の預言者に御姿を現されたと同じようにして14歳の少年のもとを訪れるほどに御自身を低くされるなどということは、まったく考えも及ばないことであった。こうして、ジョセフの神聖な体験はひどい迫害を呼び起こす。クリスチャンを公言する者たちが憎しみを抱くことは、ジョセフにとって理解できないことであった。ジョセフはこう記している。「わたしはたかが十四、五歳の名もない少年であり、生活の状況からいっても世の人々の中で取るに足りない少年であったにもかかわらず、地位のある人々はわたしに目を留めて、一般の人々の心をわたしに敵対するようにおおひ……しばしばわたし自身にとってひどい悲しみの種となった。」(22 - 23節) 後にウィリアム・スミスはこう回想している。「ジョセフがこの示現を口にするまで、わたしたちは人に悪く言われることは決してありませんでした。尊敬されていたので



ジョセフ・スミスと同時代のメソジスト派牧師ジョージ・レーン師（1784 - 1859年）。スミス家の言い伝えによれば、レーン師とはパルマイラでの信仰復興運動を通じてつながりがあったという。

す。でも人々は、たちまちのうちに偽りや作り話を驚くような速さで言いふらしたのです。」<sup>14</sup>

しかし、ジョセフ・スミスがますますひどさを増す迫害に耐えられたのは、自分の体験が事実だったからである。彼は自分を、復活された主にまみえ、主の声を聞いた使徒パウロと比較している。パウロを信じた人はほとんどいなかった。ある者はパウロをうそつきであるとか、狂っているとが言った。しかし、それらのどれも、パウロが体験した真実を滅ぼすことにはならなかった。ジョセフはこう宣言する。「わたしについても同じであった。わたしは実際に光を見た。その光の中に二人の御方を見た。そして、その方々が実際にわたしに語りかけられたのである。たとえ示現を見たと言ったことで憎まれ、迫害されたとしても、それは真実であった。」（ジョセフ・スミス 歴史1：25）

ジョセフは不当に非難され罰を受けている子供のような心境であったと思われる。ジョセフはこう語っている。「わたしはこのように心の中で言うようになった。『真実を告げたことで、なぜわたしを迫害するのか。わたしは実際に示現を見た。どうしてわたしは神に逆らえようか。なぜ世の人々はわたしが実際に見たものを否定させようとするのか。』わたしは示現を見た。わたしはそれを知っていた。神がそれを御存じであるのを、わたしは知っていた。わたしはそれを否定でき……なかった。」（25節）彼は否定すれば罪に定められ、神の不興を招くことを知っていたのである。

### 最初の示現の重要性

最初の示現は末日における地上での神の王国の出現にとって鍵となる出来事である。ジョセフ・スミスは学問のない一介の若者であったにもかかわらず、末日聖徒の信仰の基となる深遠な真理を学んだ。彼は実際に父なる神と御子イエス・キリストを見、言葉を交わした。そして、ヤコブの約束が真実であることを知ったのである。神は誠心誠意求めて祈る者に、とがめることなく答えを与えてくださる。こうして、ジョセフにとって神は言葉を交わすことのできる存在、重要な真理の源、愛にあふれた天の御父となった。ジョセフ・スミスの神の存在への信仰はもはや信仰の問題ではなくなった。個人の体験に基づいて事実となったのである。こうして彼は使徒パウロのように、神によって選ばれ、イエス・キリストについて説き、証をするように命じられた預言者となった（使徒10：39 - 43参照）。彼はまた、御父と御子が栄光に満ちた別個の御方であり、人間は御二方の形に造られていることも証することができた。

さらにジョセフ・スミスは、サタンの存在も知ることができた。強大な力を持ち、神の業を滅ぼそうとしている敵である。サタンは聖なる森では敗れた。しかし戦いは始まったばかりである。ジョセフはそれより後、自らの使命を終えるまでこの義に敵対する者と戦い続ける。さらに、どの教会が正しいかとのジョセフの問いへの主の答えは、19世紀のキリスト教会の全体に対する非難を意味していた。当時のどの教会も神から承認を得ていなかったからである。救い主が弟子たちにパリサイ人とサドカイ人の教義上の「パン種」について注意するよう警告されたように（マタイ16：6 - 12参照）、主はジョセフ・スミスに、既存の教会は「人の戒め」を教えていると言われた（ジョセフ・スミス 歴史1：19）。その理由で彼は、どの教会にも

加わってはならないと言われたのである。

預言者ジョセフのあいだで第6代大管長のジョセフ・F・スミスは、最初の示現の重要性についてこう解説している。「神の御子が墓から復活し天に昇られて以来最大の出来事は、御父と御子が少年ジョセフ・スミスのもとを訪れ、天国の基を据える業への備えをされたことである。それは人の王国ではなく、決して終わることも覆されることもない王国である。この真理を受け入れれば、(教会設立以来)14年間のこの世での使命の中で彼が明らかにし宣言したほかのいかなる真理も、たやすく受け入れることができる。神の御子が墓より復活して高きに昇られて以来、世に起こった最大の出来事は、御父と御子が少年ジョセフ・スミスに現れて、人の王国でなく、もはやくじかれることのない神の王国の基を置くための道を備えられたことである。この真理を受け入れると、わたしは、イエス・キリストがこの世での14年間の使命の間に明らかにし、宣言されたほかの真理を容易に受けられることが分かった。」<sup>15</sup>

## 注

1. スペンサー・W・キンボール『聖徒の道』1977年10月号, 512で引用
2. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 63 - 64参照
3. “History of Joseph Smith by Himself” 『ジョセフ・スミス自伝』1832年 (1832年7月20日から11月27日にかけてオハイオ州カートランドにて書かれたもの), 末日聖徒歴史記録部, 1. ディーン・C・ジェシー編, *The Personal Writings of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984), 4も参照
4. 「ジョセフ・スミス自伝」1; ジェシー『ジョセフ・スミス私文書集』4
5. ミルトン・V・バックマン・ジュニア, *Joseph Smith's First Vision* 『ジョセフ・スミスの最初の示現』第2版 (Salt Lake City: Bookcraft, 1980), 72 - 74参照
6. スミス『ジョセフ・スミスの生涯』68
7. 「ジョセフ・スミス自伝」1 - 2; ジェシー『ジョセフ・スミス私文書集』4 - 5
8. ジョセフ・スミス “History A-1” 『歴史A - 1』1835年11月, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 120
9. 「ジョセフ・スミス自伝」2; ジェシー『ジョセフ・スミス私文書集』5
10. 「ジョセフ・スミス自伝」3; ジェシー『ジョセフ・スミス私文書集』6参照
11. *History of the Church* 『教会歴史』4: 536。この声明は『シカゴ・デモクラット』(*Chicago Democrat*)紙の編集長であるジョン・C・ウェントワースへの返答の一部である。ウェントワースはニューハンプシャーの歴史を書いていた友人のバストウ(正しくはジョージ・バーストウ)の代理としてジョセフに質問状を送ったのであった。バストウは末日聖徒イエス・キリスト教会の起源と発展について「正確な情報」を記載することを希望していた。
12. 「ジョセフ・スミス自伝」3; ジェシー『ジョセフ・スミス私文書集』6
13. J・W・ピーターソン “Another Testimony, Statement of William Smith, Concerning Joseph the Prophet” *Deseret Evening News* 「もう一つの証 預言者ジョセフについてのウィリアム・スミスの声明」『デゼレト・イブニング・ニュース』1894年1月20日付, 11で引用
14. ピーターソン「もう一つの証」11で引用
15. ジョセフ・F・スミス『福音の教義』474

# 準備の期間

## 1823 1829年

年表

年代	重要な出来事
1823.9.21 - 22	ジョセフ・スミスへのモロナイの最初の訪れ
1824 - 1827	ジョセフ・スミスのクモラの丘への4回の訪れ
1823.11.19	アルビン・スミス、死去
1825.10	ジョセフ、ジョサイア・ストウエルのもとで働き、エマ・ヘイルに会う
1827.1.18	ジョセフとエマ・ヘイルの結婚
1827.9.22	ジョセフ、神聖な版を預かる
1828.2	マーティン・ハリス、ニューヨーク市のチャールズ・アンソンのもとを訪れる
1828.2 - 6	『モルモン書』の最初の116ページの翻訳が完成したが、原稿が紛失する
1828.9	ジョセフ、再び翻訳の賜物を得る

**あ**の1820年の美しい春の朝、森を出たジョセフ・スミスはもはや以前と同じ人物ではなかった。御父と御子が生きておられることを知った彼は、生涯を通してその真実を証するのである。しかし、ジョセフが彼の召された重要な業についてさらに詳細な指示を受けるには、神の偉大な示現の後3年を要した。

この間ジョセフは10代の半ばを過ごす。生徒思いの教師や気心の知れた近隣の人々が助けてくれる時期である。しかしジョセフは正式な教育をほとんど受けておらず、またこれまでも見てきたように、彼の証は人々の敵対心呼び起こしてしまった。信頼していた友人たちの中にも彼に背を向ける者がいたが、家族からの愛情に満ちた助けはやむことなく続いていた。

ジョセフはこの時代の自らの姿をこう認めている。「しばしば多くの愚かな誤りを犯し、若者としての弱さと人間性の至らなさを示した。」(ジョセフ・スミス 歴史 1:28)「時には陽気な仲間と交わり、「軽率な行動」を取ることがあったのは、「生来の陽気な気質」のためであったが、彼はそれを神から召された者としてふさわしくないと考えている(28節)。しかし彼は、「何か大きな罪、すなわち憎むべき罪」(28節)を犯していたわけではない。母親によれば、この時期は取り立てて話題にするようなことは何も起こっていないという。ジョセフはそれまでと変わりなく家族の農場で父親と一緒に働いたり、木の伐採を行ったり、シロップや砂糖を採るために木の幹に穴を開けたり、また時には建物の基礎を掘ったり、マーティン・ハリスのとうもろこし畑で働いたりしていた。この3年間は若きジョセフにとって、成長して大人になり、経験を積み、続けて家族からの薫陶を受ける期間であった。

### モロナイの最初の訪れ

1822年、ジョセフは家族のために木造の家屋を建てていた兄のアルビンの手伝いをしていた。1823年の9月には、屋根を残してその2階建ての家屋が完成しつつあったが、家族はまだ小さな丸太小屋に住んでいた。そして1823年9月21日曜日の夜遅く、当時17歳のジョセフは床に就いた。そして、神の前における自分の立場について考え、罪の赦しを熱心に祈り求めた彼は、再び神の現れを受けるという確信を得た。すると突然部屋が光に満たされ、天からの使者が傍らに立っていた。それは使徒ヨハネの偉大な預言を成就するものであった(黙示14:6-7参照)。ジョセフはこの復活した天使についてこう述べている。

「その方はこの上なく美しい白さの、ゆったりとした衣を着ておられた。それは、わたしがこれまで見たこの世のいかなるものにも勝る白さであった。この世のいかなるものも、これほど白く輝いて見えるようにすることはできないと思う。その方

1982年夏に行われた考古学調査で、1820年の路線調査にあった丸太の家の位置が正しいことが確認された。長年にわたる耕作で基礎の浅い部分は破壊されているものの、それよりも深い部分から、井戸や浅めの穴蔵など当時の道具類が無数に出土する場所が3か所見つかった。<sup>1</sup>

ジョセフ・スミスが1820年に最初に示現を受けたのは、この丸太の家に住んでいたときである。1923年の9月には、天使モロナイがこの家に現れた。

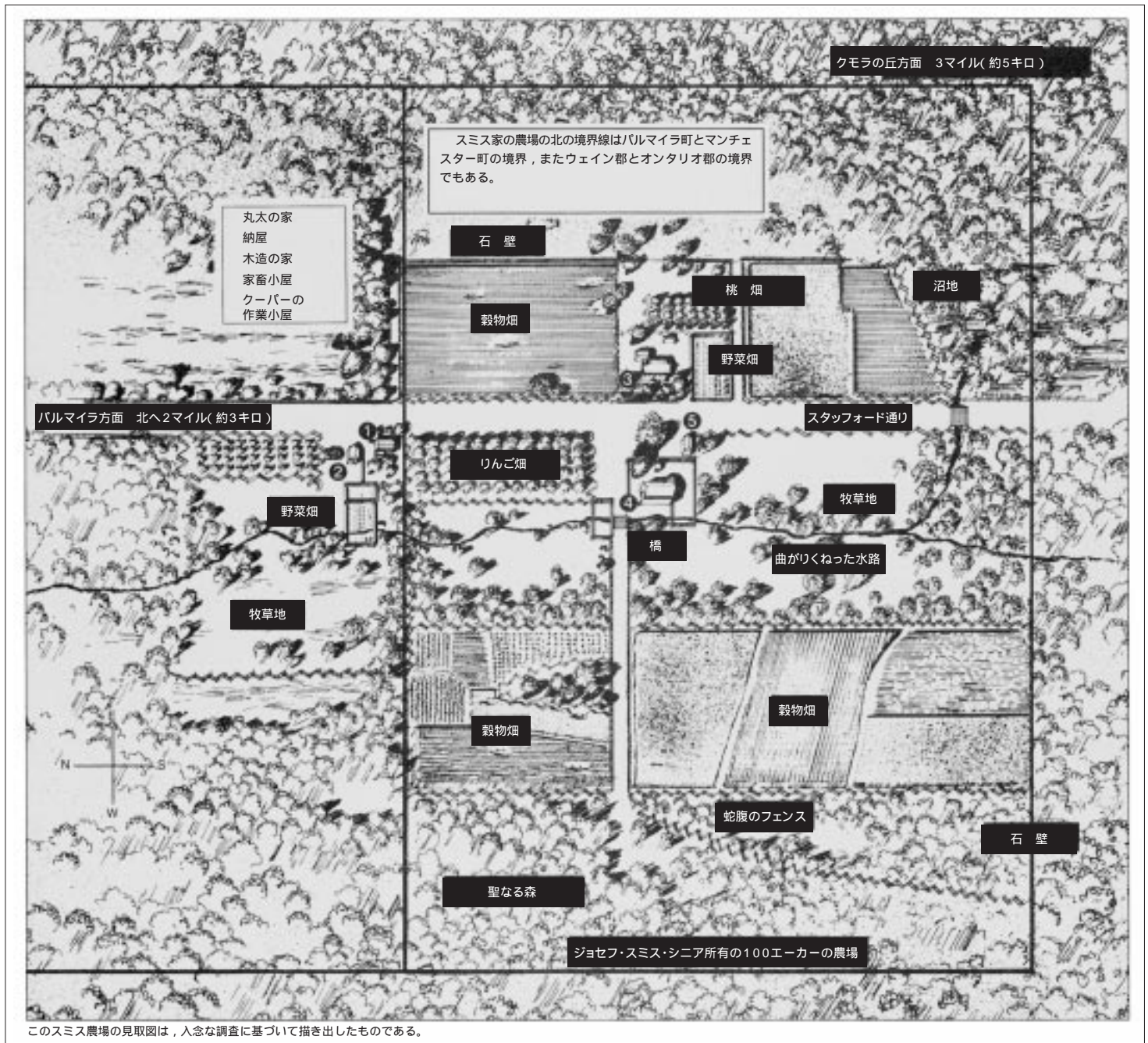
1818年から1819年にかけて、スミス家はファームントン（後のマンチェスター）の町（タウンシップ）に100エーカー（約40ヘクタール）の土地を購入，そこに縦24フィート（約7メートル）横30フィート（約9メートル）の小さな丸太の家を1818年から1819年にかけて建てた。スミス家はその家に1825年まで住み，それから後はもっと大きくて立派な家を建てて1829年まで住んだ。

財政状態が困難になったために家を明け渡し，また丸太の家に戻る。1830年になると，ジョセフ・スミス・シニアは残りの家族を伴ってニューヨーク州セネカ郡ウォータールーに移った。<sup>2</sup>

の手はあらわで，衣の袖は手首の少し上までで，その足もあらわで，衣の裾は足首の少し上までしかなかった。その頭と首も覆われていなかった。その方の胸が見えるほど衣がゆったりとしていたので，わたしはその方がその衣のほか何も着ておられないのに気づいた。

その衣が非常に白かっただけでなく，その全身も筆紙に尽くし難い輝きに満ち，その顔はまことに稲妻のようであった。部屋は非常に明るかったが，その方のすぐ周りほど明るくはなかった。わたしは最初にその方を見たときに恐れたが，その恐れはすぐに去った。」（ジョセフ・スミス 歴史1：31 - 32）

その使者はアメリカ大陸に住んでいた預言者で名をモロナイという，と紹介した。モロナイは「エフライムの木」（教義と聖約27：5参照）の鍵を持つ者として，金版



このスミス農場の見取図は，入念な調査に基づいて描き出したものである。



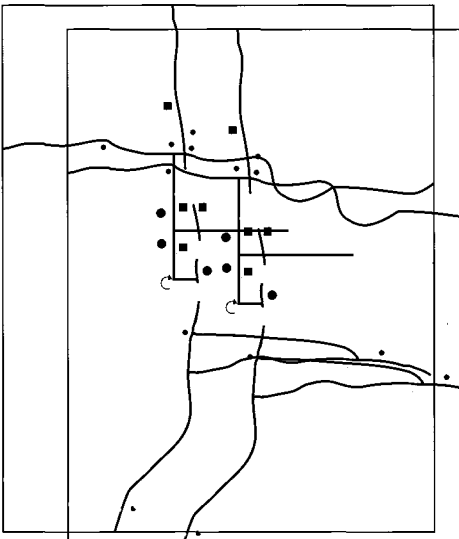
1923年9月23日、モロナイの訪れの100周年を記念する特別集会在ヒーバー・J・グラント大管長の管理の下に開かれた。

写真は左から、ジョン・ハリス・テラー、ジョセフ・フィールドینگ・スミス長老、ラドガー・クローソン長老、グラント大管長、オーガスタ・W・グラント姉妹、ジェームズ・E・タルメージ長老、それに東部諸州伝道部のブリガム・H・ロバーツ部長。

に記された記録の存在を明らかにするために、指定されたこの時にやって来たのだ。その記録は14世紀もの間地の下に隠されていたのである。そして「この大陸の先住民の話と彼らの起源」を伝えるものであった。その使者は「それには救い主がその昔の住民に述べられたままに完全な永遠の福音が載っていることも告げ[た。]」(ジョセフ・スミス 歴史1:34) ジョセフの使命はその記録を翻訳し出版することであった。彼はまさにその業のために、またその他のいろいろな業のために召されており、彼の名は良くも悪くもすべての国民に知られるようになるのである(33節参照)。

モロナイはマラキ、イザヤ、ヨエル、ペテロなどの『聖書』の預言者の言葉を幾つか引用し、キリストの福千年の統治に向けて末日になされる備えの業のことを説明した。こうして、モロナイによる福音の教育が始まった。

モロナイのメッセージは非常に重要なものであり、またその内容を若き預言者ジョセフの心に刻み込む必要があったことから、モロナイはその夜さらに2度にわたってジョセフのもとを訪れ、少しずつ新たな情報を付け加えながら同じ指示を繰り返した。最初の訪れのとき、ジョセフは記録の版が隠されている場所を見せられる(42節参照)。彼の家から約3マイル(約5キロ)の距離にある丘の中腹であった。2度目の訪れでは、「地上に来ようとしている大きな裁き」(45節)のことを聞かされる。そして3度目の訪れの最後に、モロナイはジョセフに警告の言葉を与えた。彼が家族の貧しさを救うために、金版を一時的に金銭に換えようという誘惑をサタンから受けるといのである。モロナイは17歳のジョセフに、その版を受け取る目的はただ一つ、神に栄光を帰すためであると教える。彼を促す動機は神の王国を建設することのみでなければならなかった(46節参照)。預言者ジョセフは、その後の数々の出来事から、なぜモロナイがそのような忠告と指示を受けたのかを理解する。このモロナイの訪れは夜を徹して行われた。3度目の訪れが終わりを告げるころには、鶏の声を聞いている。まさに、霊の光を得た新たな時代が夜明けを迎えようとしていた。イザヤはこの時代について「不思議な驚くべきわざ」が行われる時代であると記している(イザヤ29:14)。



パルマイラとクモラの丘近辺

### クモラへの最初の訪問

その朝、ジョセフはいつものとおりに父や兄たちと畑に仕事に出かけた。しかし、睡眠不足に加え、復活して栄光に満ちた天使の前で一晩中いたことで体が思うように動かない。ジョセフの様子がおかしいと気がついた父親はジョセフが病気がかかったと思い、家に戻るように言う。ところが家に戻る途中、ジョセフは気を失って倒れてしまった。気がつくとなだれかが自分の名前を呼んでいる。我に返ったジョセフが辺りを見回すと、驚いたことにモロナイが前に立っていた。<sup>3</sup>モロナイは同じメッセージを繰り返した後に、今回の示現のことと受けた戒めのことを父親に話すように命じた。

そこでジョセフは父親のもとに戻り、すべてを打ち明ける。すると父親は、それは神からの導きであるから命じられたとおりに行うよう励ました。ジョセフはこう語っている。「わたしは畑を去って、版が隠されていると使者から告げられた場所へ行った。すると、それに関して受けていた示現が明瞭であつたので、そこに着くとす

クモラの丘は堆石<sup>たいせき</sup>によって形成された、急傾斜の側面と緩傾斜の端面を持つ細長い丘陵で、地質学上ドラムリンと呼ばれる。この地域のドラムリンは南北に細長い。1830年にクモラの丘を訪れたオリバー・カウドリはこう表現している。

「北端は平地から急に突き出た形でがけを形成しており、樹木はなく草付きとなっている。南に向かうと人手によるのか風によるのかは分からないが、樹木の数がまばらになる。それから少し左に行くと、この地でよく見られる木々がうっそうと茂っている。……記録が託されたのはわたしが2番目に述べた場所で、丘の西側、頂上から少し下がった所であった。」<sup>4</sup>



ぐにその場所が分かった。」(ジョセフ・スミス 歴史1:50) ジョセフは丘の頂上付近に大きな石があるのを見つけた。その石は「厚みがあって、上部の中央が丸みを帯びており、へりに行くに従って薄くなっていた……。」(51節) それは石の箱のふたの部分であった。箱を開けるときのジョセフの興奮した様子は想像でしか分からないが、箱の中には何世紀にもわたって隠されていた版とウリムとトンミム、それに胸当てがあり、モロナイが説明したとおりであった。

「それらが納められていた箱は、ある種のセメントの中に石を置いて造ったものである。箱の底には、横向きに2個の石が置かれ、その石の上に版とその他の物が一緒に載せられていた。」(ジョセフ・スミス 歴史1:52)

モロナイは預言者としてこの世にいたとき、神の命により、その版が世の富を得るために用いられてはならないということ、しかしいつの日か将来の世代の人々にとって、神の知識を得るうえで「非常に価値がある」ものになることを預言した(モルモン8:14-15)。

クモラの丘を訪れたジョセフの心には、貧しい家族のことが思い出された。その版や版の翻訳が評判になって、「普通の村人以上の生活ができるようになり、家族を貧しさから解放できる」と考えたのである。<sup>5</sup> 版を取ろうとして手を伸ばしたジョセフは衝撃を覚えた。箱の中の物が取り出せないのである。それから2度試みたものの、はじき飛ばされてしまった。不満に思ったジョセフはこう叫ぶ。「なぜこの本が取り出せないのですか。」するとモロナイが現れ、それはジョセフが戒めを守らなかったからであると説明した。彼はサタンの誘惑に屈して、命じられたように神の栄光にひたすら目を向けるのではなく、富のために版を得ようとしていたのである。<sup>6</sup>

悔い改めたジョセフはへりくだって祈りを通して主を求め、御霊に満たされた。すると示現が開かれ、「主の栄光が彼を巡り照らし、彼の上にとどまった。……そして彼は闇の皇子を見た。……天からの使者〔モロナイ〕はこう告げた。『善と悪、聖さと汚れ、神の栄光と闇の力、これらすべてを示されたあなたは、これより後、この二つの力を区別することができ、悪の力に惑わされたり打ち負かされたりすることはないであろう。』……今あなたは、なぜこの記録を取り出せないかが分かった。この命令は厳しいもので、これらの神聖なものは、祈りと忠実に主に従うことによってしか手にすることができないのである。金版がここに置かれたのは、世の誉れ

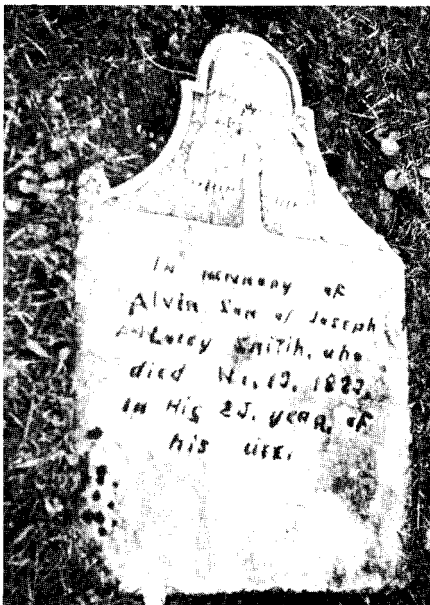
のために金をもうけ、富を得るためではない。それらは信仰の祈りによって結び固められており、また含まれている情報は人の子らの間では何ら金銭的な価値はない。彼らに知識をもたらすだけである。」<sup>7</sup>モロナイは警告をもって指示の言葉を結んだ。「神の戒めを守れるようになるまで、版を受け取ることは許されないというのである。しかも気持ちだけでなく実際に守れるようにならなければならなかった。……」

次の夜、家族が全員集まっているところで、ジョセフは畑で父に話したことをすべて打ち明けた。またその記録を実際に見つけたこと、そして版が置かれた場所での天使とのやりとりの一部始終を話して聞かせた。」<sup>8</sup>

## ジョセフの備えは続く

『モルモン書』を世に出すという歴史的な業については、古代の預言者が預言している（イザヤ29章；エゼキエル37：15 - 20；モーセ7：62参照）。それだけの影響力を持つ業には周到な準備が必要であった。この場合、4年間の訓練が求められた。その間ジョセフは年に1度クモラの丘でモロナイに会い、版を受け取る準備としての指示を受けた。『モルモン書』の出現に重大な関心を抱いていたニーファイ人のほかの預言者たちも、ジョセフの備えに大切な役割を果たしている。ニーファイ、アルマ、救い主がアメリカ大陸で選ばれた十二使徒たち、それにモルモンらが全員、ジョセフに教えを施したのである。<sup>9</sup> この間のジョセフへの教育は密度の濃いものであった。

預言者の母ルーシーは、ジョセフとの夜の会話の内容についてこう書いている。「ジョセフはよくわたしたちにこれほど楽しい〔興味深い〕内容はないと思えるような話をしてくれました。このアメリカ大陸に昔住んでいたという人々についてです。服装や旅の仕方、乗った動物、町、建物、それも詳細な点まで。戦争のやり方や礼拝の方法についても話してくれました。ジョセフはいとも簡単に説明するのです。あたかもそれまでずっと彼らと生活を共にしてきたかのようにでした。」<sup>10</sup>



アルビン・スミスの墓石。「ジョセフとルーシー・スミスの息子アルビンをしのんで。1823年11月19日死去、25歳」とある。

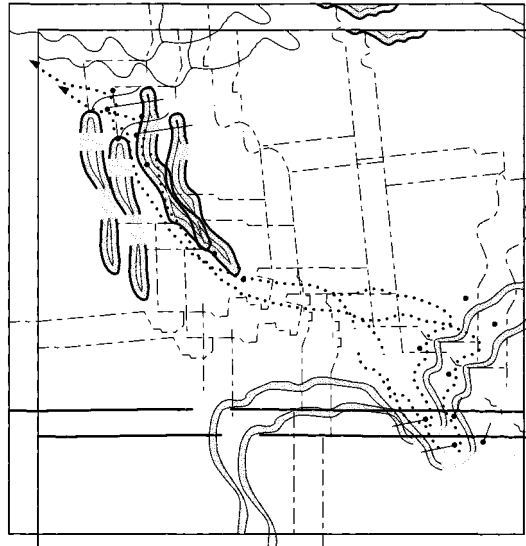
## 準備の期間の出来事

モロナイの最初の訪れからジョセフが版を受け取るまでの間、ジョセフの生活には幾つかの重要な変化が起こる。まず1823年11月、一つの悲劇がスミス家を襲った。ジョセフの長兄アルビンが病気で倒れたのである。父親はかかりつけの医師を見つけられず、何とか来てくれた医師はアルビンに当時一般的な病気の治療方法として使用されていた緩下剤の甘汞（塩化第一水銀）を投与した。ところがそれが胃にたまり、アルビンの苦痛は増した。そして発病から4日目の1823年11月19日に息を引き取った。信仰深く誠実なアルビンをジョセフは慕っていた。非の打ちどころのない人物と見ていたのである。アルビンもジョセフを愛していて、神聖な記録については大きな関心を抱いていた。死が迫ったとき、アルビンはジョセフをこう諭している。「いい子でいるんだよ。記録を授かるために自分の力でできる限りのことすべてをしなさい。受けた指示に忠実に従って、与えられた戒めはきちんと守るんだよ。」<sup>11</sup> ジョセフは後に啓示の中で、アルビンが日の栄えの王国を受け継いだことを知った（教義と聖約137：1 - 6参照）。

アルビンの死後、スミス家は財政的な苦境に立たされる。ジョセフをはじめその



パルマイラのスマス農場からペンシルベニア州ハーモニーまでの距離はほぼ130マイル（約210キロ）である。



兄弟たちは、働き口があると日雇いで働きに出かけた。そのころアメリカでは宝探しや財宝の発掘がブームになっていた。1825年10月、ニューヨーク州サウスインブリッジの農夫で製材所の所有者であるジョサイア・ストーウェルという男が、宝探しの手伝いをジョセフに持ちかけてきた。ストーウェルは長老派教会の執事でもあった。彼にはパルマイラに親戚がいたので、たぶんそこからジョセフのことが伝わったのであろう。ストー

ウェルはスペイン人が開いた銀の鉱山がペンシルベニア州北部に隠されているという伝説を信じて、その探索をしていたのである。当時アメリカ各地に財宝が隠されていることを信じ、探索のために金銭と努力を注ぎ込んでいた大勢の裕福で高潔な人々がいたが、ストーウェルもそのような人物の一人であった。ストーウェルはジョセフには目に見えないものを識別する力があるといううわさを聞き、探索への援助を求めたのである。預言者はためらったがストーウェルは引き下がらず、家族の経済状態のことも考えた末にジョセフは父と、近所の人々とともに出かけることにした。この決断がそれからのジョセフの人生と教会の将来に重大な影響を及ぼすことになる。

ジョセフと仲間たちはペンシルベニア州ハーモニーでアイザック・ヘイル宅に泊まる。ハーモニーの村はサスケハナ川が北東に湾曲してペンシルベニア州に入った部分から数マイルの所に位置しており、鉱山の推定地からもさほど遠くなかった。ジョセフはヘイル家に滞在している間、アイザックの黒髪の娘エマに心引かれる。エマもジョセフより1歳半年上であったが、ジョセフに好感を抱いた。しかしこのロマンスの芽生えも、宝探しが嫌いで、しかもジョセフの教育のなさ（けいべつ）を軽蔑するエマの父親の反感を買う。父親は教師をしていた教養のある娘にジョセフは不足だと考えたのである。そうこうしているうちに、銀の鉱山の発掘は失敗に終わった。ほぼ1か月にわたる努力の末に、ジョセフはジョサイア・ストーウェルを説得し、ハーモニーでの宝探しは打ち切られた。

このエピソード以来、ジョセフを中傷する人々は、この「宝探し」を攻撃の材料にしてきた。ジョセフの人格や動機に疑いを抱き、彼が組織した教会の正当性に疑問の目を向けるのである。しかしほんとうの状況は、このエピソードの時代と場所を考慮しなければ理解できないであろう。ニューイングランド州やニューヨーク州西部では、宝探しという行為が今日のように人に後ろ指を指されるようなものではなかった。後にジョセフはこの出来事への関与を率直に認めたと、それは取るに足りないことであると語っている。<sup>13</sup>

ジョセフはニューヨーク州とペンシルベニア州の境界地方で働いていたこの期間に、彼自身と初期のニューヨークの教会にとって重要なもう一つの出会いが訪れる。



復元末日聖徒イエス・キリスト教会の厚意により掲載

エマ・スマスは9人の子供の7番目である。「エマは立派な特質を備えた、背の高い魅力的な女性であった。黒味がかった茶色の目と黒い髪の彼女は、容姿も性格も独特の気品を漂わせていた。」<sup>12</sup>



スクワイア・ターベル氏の家，ジョセフとエマは1827年1月18日にニューヨーク州シェナゴ郡サウスインブリッジ（後のアフトン）で，ザカリヤ・ターベルの司式で結婚した。ターベル家は取り壊されている。

ジョセフ・ナイト・シニアとの出会いである。彼はジョサイア・ストーウェルの友人で，ニューヨーク州ブルーム郡コールズビルに住む謙虚な農夫兼粉屋であった。ジョセフは彼のもとでもしばらく働き，彼とその息子であるジョセフ・ジュニアやニューエルと親交を深めた。彼らはジョセフから神聖な経験を聞き，ジョセフの証を受け入れた。

ジョサイア・ストーウェルやジョセフ・ナイト・シニアのもとで働き，またマンチェスターの自分の家族を訪れる間，ジョセフはエマへの求愛を続けていたが，エマの父親のひどい反対に遭ったために二人は駆け落ちした。1827年1月18日，ニューヨーク州サウスインブリッジの治安判事により婚姻の手続きをすると，直ちにジョセフは新婦をマンチェスターの実家に連れて戻り，その夏は父と一緒に農業を行った。エマはスミス家によく受け入れられ，エマとルーシー・マック・スミスとの間には親密な関係がはぐくまれていった。

## ジョセフ，版を託される

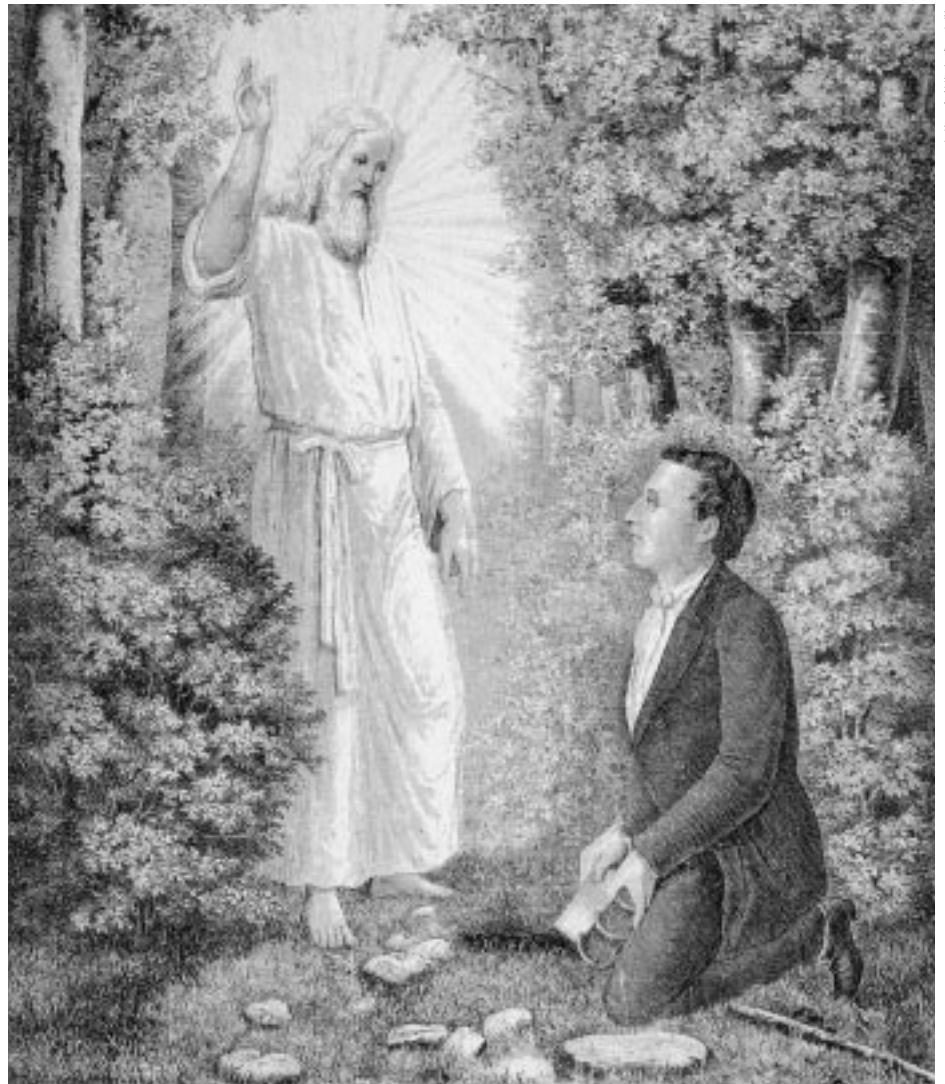
1824年から1827年のジョセフとモロナイの会見の内容についてはほとんど知られていない。しかし，1827年の秋を迎える前のころ，ジョセフはいつもより遅く帰宅している。心配した家族が尋ねると，遅れたのはモロナイにひどい叱責を受けていたからだと言った。クモラの丘のそばを通りかかったときのことを預言者はこう説明した。「その天使が現れて，わたしが主の業に十分に携わっていないと言いました。記録を世に出す時が来た。わたしは急いで自分自身を整え，主から命じられたことを始めなければならないと。」<sup>14</sup>

ジョセフの4年という準備の時期には，いろいろなことが起きたに違いない。彼は10代の時期を人の訓戒に惑わされずに過ごした。また家族からは温かく見守られ，結婚に伴う責任も負うこととなった。そして天使たちは，神聖な靈感に満ちた書物を翻訳する業のために彼を備えさせ，自制と従順の必要性を教えたのであった。そのような中で，ジョセフが翻訳の開始を心待ちにしていたのは疑いない。このころ，ジョサイア・ストーウェルとジョセフ・ナイトはマンチェスターのスミス家を訪れていた。ジョセフが版を受け取ることを予期してのことと思われる。

1827年9月22日，夜明けのかなり前，ジョセフと妻エマはジョセフ・ナイトの馬をジョサイア・ストーウェルの馬車につなぎ，クモラの丘まで3マイル（約5キロ）の道のりを進んで行った。ジョセフはエマをふもとに残し，モロナイに会うために丘に登った。そこでモロナイは版とウリムとトンミム，それに胸当てをジョセフに渡した。また，彼の負う責任に従った明確な警告と約束の言葉を付け加えている。ジョセフはここで神聖な品物を託された。不注意や怠慢が見られたり，託された物をなくしたりするようなことがあれば，彼は絶たれる。しかしモロナイが取りに来るまで，それらを保存するためにあらゆる努力を払うならば，それらは守られるとジョセフはモロナイから約束された（ジョセフ・スミス 歴史1：59参照）。

こうして1,400年ぶりに貴重な記録が生身の人間に託された。ジョセフはその版を家の近くにあった中が空洞の丸木の中にしっかりと隠した。ジョセフが版を受け取るのを心待ちにしていたのは，友人たちだけではなかった。隣人の中にも，ジョセフが貴重な金属の版を家に持ち返るとい話を耳にした者がいた。銀の鉱山を一緒

「版を渡すモロナイ」L・A・ラムジー画



教会歴史美術館所蔵



これは預言者ジョセフが版を隠しておいた木箱である。箱の内のは14×16インチ(約35.5×40.5センチ)、深さは6.25インチ(約16センチ)から4インチ(約10センチ)と傾いている。板の厚さは3/4インチ(約1.9センチ)である。

ふたと底板はかして、側板はつげである。この箱はひざの上に載せる携帯用の机として用いられた。底に傾きがあるのはそのためである。

この箱は大祝福師エルドレッド・G・スミスが所有していた。

に探しに行った者の中には、分け前をもらえて当然と考えていた者もあったらしい。間もなくジョセフは、モロナイが版を守るように厳かに命じた理由を理解した。彼からその版を奪うために「あらんかぎりの努力が払われた」からである(60節)。例えば近くに住む農夫ウィラード・チェイスは、ほかの宝探しの仲間とともに版を隠してある場所を見つけるため魔術師を雇う計画を立てた。これを知ったスミス家族は、エマにパルマイラの西数マイルのマセドンで働いていたジョセフを呼びにやらせた。ジョセフは直ちに戻ると、版を取り出して亜麻のシャツに包み、森の中を走った。普通の道を走るよりも安全だと思ったからである。ところが、丸太を跳び越えた途端後ろから銃で頭を殴られたのである。しかしジョセフはその男を逆に殴り倒し、逃げる事ができた。それから半マイルほどしてまた襲われたが何とか逃れ、さらに家にたどり着く直前にもう一度襲われた。母親が言うには、彼が家に着いたときには「恐怖と走って来た疲れでほとんど口が利けない状態」<sup>15</sup>だった。

版を奪おうとの企ては激しさを増したものの、版を守るとのモロナイの約束も成就した。ジョセフはよく版の隠し場所を変えたが、それがまさに宝探しの連中の来る直前だったということがしばしばあった。あるときジョセフは家の暖炉の炉床の



ジョセフ・スミスを除けば、マーティン・ハリスほど『モルモン書』の出現に貢献した人物はいない。マーティンは1827年12月、預言者がニューヨーク州マンチェスターからペンシルベニア州ハーモニーに移れるように財政的な援助を行い、また、古代の預言の成就に一役買った（イザヤ29：11 12参照）。彼は筆者としても奉仕し、『モルモン書』出現の証人となり、出版を財政的に援助し、『モルモン書』の真实性を生証し続けた。

#### イザヤ29章



このイザヤの預言は『聖書』研究者の間で何世代にもわたってなぞであった。マーティン・ハリスとジョセフ・スミスはこの聖句が『モルモン書』に関するものであることを理解していたが、そのことはイザヤの預言の拡大版であるニューファイ第二書第27章で証明されている。

下に版を隠した。すると大勢の男たちが家の前に集まって来た。しかしジョセフと兄弟たちがあたかも大勢の援軍がいるかのように大声を上げながら表口から出て行くと、集まった者たちは四方八方に逃げ去った。またあるときジョセフは版の入った箱を作業小屋の木の床の下に隠していたが、版だけを屋根裏に亜麻布をかぶせて隠すように御霊に促された。その夜、敵が来て作業場の床をはがしていったが、版は無事だった。

### イザヤの預言、成就する

このころ、ジョセフは身の危険を感じるようになった。そこでエマを連れてハーモニーに戻ることを決心する。だれにもじゃまをされずに翻訳を始めたいと思ったのである。出発前、パルマイラの有力者であるマーティン・ハリスが援助を申し出た。後に回復の業の中で重要な働きをする人物である。彼は裕福な識者であり、事業家であり、また農業も営んでいた。スミス家が最初にパルマイラに移って来たころからの知り合いで、スミス家の者たちは長年にわたって彼に雇われていた。彼はジョセフとエマが負債を完済できるようにお金を用意し、また旅の費用にと50ドルを手渡した。版を馬車の後ろに積んだ大豆のたるの中に隠して、二人は1827年12月のある嵐の日に町を出、ハーモニーに向かった。しばらくの間エマの両親のもとに滞在することになっていた。

ヘイル家に少しの間滞在した彼らは、エマの長兄ジェシーから家を購入する。サスケハナ川のほとりの、13エーカー（約5.25ヘクタール）の農場の中にある2階建ての小さな家であった。ジョセフは何週間ぶりかで、そこで安心して仕事をする事ができた。1827年12月から1828年2月にかけて、ジョセフは版からたくさんの文字を写し取り、その中の幾つかをウリムとトンミムを使って翻訳した。翻訳の業の初期の段階では、版の言語に慣れ、翻訳の仕方を学ぶために多くの時間と労力を費やしている。

1828年2月、事前の予定どおり、ハーモニーのジョセフのもとにマーティン・ハリスが訪ねて来た。それまで主はマーティンを、ジョセフがその使命を果たすのを援助する人物として備えてこられたのであった。彼自身の証によると、マーティンは1818年、イザヤの預言が成就するまではどの教会にも加入しないように主から命じられた。それから少しして、マーティンは主が自分になすべきことを用意しておられるとの啓示を受けた。1827年、幾つかの現れによりジョセフ・スミスが預言者であることを確信したマーティン・ハリスは、『モルモン書』を世に出す業を行うジョセフを助けるべきであると考えた。そこでマーティンはハーモニーに行き、版から写し取った文字を当時の著名な言語学者に見せた。そしてそれがイザヤ書第29章11節から12節の預言を成就することにより、世の人々の不信仰を如実に示す結果となった。<sup>16</sup>

マーティンは有能な言語学者として名の通った少なくとも3人の人物と会っている。ニューヨーク州オールバニでは、ルーサー・ブラディッシュと話をした。彼は外交官であり、政治家であり、世界を旅した人であり、各種の言語の研究家でもあった。またニューヨーク・シティではラトガー医科大学の副学長であるサミュエル・ミッチェル博士のもとを訪れた。さらに、ヘブライ語とバビロニア語を含む4つ



サミュエル・レイサム・ミッチェル (1764 - 1831年)はニューヨーク州ロングアイランドの生まれで、州議会議員ならびに合衆国上下両院の議員として働いた。彼は歴史家、言語学者、魚類学者、園芸学者、地質学者、編集者、化学者、内科医、外科医として知られている。

の言語に通じているチャールズ・アンソン教授と会う。アンソンはニューヨーク・シティーのコロンビア大学の教授で、当時の古典研究者で先導的立場に立っていたので、マーティンが接触した中では版の文字について判断するのに最もふさわしい人物である。マーティン・ハリスが訪問したとき、アンソンはギリシャ語とラテン語の助教授の地位にあった。彼はフランス語、ドイツ語、ギリシャ語、ラテン語を解し、彼の書棚の本から判断して、シャンポリオンの当時の業績を含むエジプト語関連の最新の発見に通じていた。<sup>17</sup>

マーティン・ハリスによれば、アンソン教授は文字と翻訳を入念に調べたうえで、それが本物であるとの証明書をパルマイラの市民に喜んで書いてくれたという。また、アンソンは、文字がエジプト語、カルデア語、アッシリア語、アラビア語に似ていると言い、翻訳も正しいと述べた。そこでマーティンが証明書をポケットにしまい、帰ろうとすると、アンソンがマーティンを呼び止め、ジョセフ・スミスがその版をどのようにしてその丘で見つけたかを尋ねた。マーティンが神の天使が場所をジョセフに教えたと言うと、アンソンは証明書をを見せてくれと言った。そこでマーティンは証明書をアンソンに渡した。「彼はそれを取って細かく破って、今どき天使の働きのようなものなどないと言い、また、その版を持って来れば翻訳してあげようと言った。そこでわたしは、版の一部は封じられており、持って来ることを禁じられていると告げた。すると彼は『わたしは封じられた書を読むことはできない』と答えた。』<sup>18</sup>

このマーティン・ハリスの教授たちへの訪問は、幾つかの理由で重要である。第1に、学者たちはその文字に興味を示し、その話の中に天使という存在がなければ喜んで証明書を書いたという点。第2は、マーティンとジョセフの目から見て、それは『モルモン書』に関する預言の直接の成就だったという点。第3は、その版の翻訳には知性だけでは不十分で、神の助けが必要であったという点（イザヤ29：11 - 12；2ニーファイ27：15 - 20参照）。そして最後に、マーティン自身の信仰を強めたという点である。マーティンは、これで隣人たちにジョセフ・スミスの業が真実であると証明できるという確信を抱いて自宅に戻った。こうして、自分自身と持てる財産をすべて『モルモン書』を世に出すためにささげるとの心からの決意ができたのであった。

## 失われた原稿

マーティンはパルマイラで彼を待ち構えている困難な状況を知る由もなかった。妻のルーシーは自分を置いて夫が東部に出かけたことに腹を立てていた。彼女はスミス一家が夫をだまそうとしているのではないかと恐れており、夫が自分のことをなおざりにしてジョセフと時を過ごすのを恨めしく思っていたのであった。マーティンが帰宅したとき、ルーシーはその不満をあからさまにマーティンにぶつけた。彼女ははっきりした証拠を求めるタイプの人物であったので、今度ペンシルベニアに行くときには必ず一緒に連れて行くように言って譲らなかった。そこでマーティンは求めに応じ、数日間の予定で出かけることにした。ハーモニーでの彼女の最優先事項は、版をその目で見ることだった。彼女は家の中を探し回った。そこでジョセフは版を家の外に隠さなければならなかった。そして、彼女がついに版を埋めて



チャールズ・アンソンは47年間、ニューヨークのコロンビアカレッジ（現コロンビア大学）の古典学の教授を務めた。

ある場所を探し当てたと思い、かがみ込んでのぞこうとした途端、大きな黒蛇が出て来て彼女を齧した。版を見つけれなかったことに腹を立てたルーシーは、聞いてくれる人ならだれにでも、夫が「大ペてん師」にだまされていると言いふらした。2週間後、マーティンはルーシーを連れて帰宅する。そしてマーティンは、ルーシーの説得にもかかわらずまたハーモニーに戻った。マーティンの留守の間、ルーシーはバルマイラでジョセフたちを批判し続けた。<sup>19</sup>

ペンシルベニアでは、ジョセフとマーティンが1828年6月14日まで翻訳の業を続けた。翻訳はフルスキャップ判（ほぼリーガルサイズ）（訳注：33.3×20.3センチ）で116枚に達していた。そこでマーティンはジョセフに、その原稿を家に持って帰り、妻や友人たちに見せたいと言った。ルーシーに自分たちの携わっている業が真実であることを確信させ、彼女の反対を阻止したいと思ったのである。ジョセフはウリムとトンミムを通して主に伺いを立てた。答えは「否」であった。その答えに不満だったマーティンは、再度主に尋ねてくれるようにジョセフに願った。しかし、答えは「否」であった。それでもマーティンはあきらめることなく願い求めた。ジョセフは援助者であるマーティンの願いを聞き届けたいと思った。若く経験に乏しかった彼は、マーティンの年齢と成熟度に頼っていたのである。さらにマーティンは、筆記者として、また『モルモン書』の出版の費用を賄ってくれる人として、ジョセフが知り得る唯一の人物であった。こうしたことを考えたジョセフは、もう一度主に尋ねるように心を動かされた。そして、ついに主は条件付きで許可をお与えになった。マーティンは契約書を書き、妻、兄弟のプリザーブト・ハリス、父親、母親、それにルーシーの姉妹であるポリー・コブ夫人を含む4、5人だけに原稿を見せることに同意した。こうしてマーティンは、たった1部しかない原稿を持ってバルマイラに戻って行った。

マーティンが去って間もなく、エマはアルビンという名の男の子を出産するが、彼はその日のうちに亡くなってしまった。エマ自身も生死の境をさまよい、ジョセフは2週間、彼女の看病を続けた。エマが持ち直すと、ジョセフは原稿のことが気になり始めた。マーティンがハーモニーを去ってからもう3週間にもなるというのに何の知らせも来ていなかったのである。マーティンはそれまで任せたことはきちんと行う人物だった。妻とともに時間を過ごし、バルマイラでの事業も継続し、陪審員としての奉仕も行ってきたのである。

エマはジョセフに、馱馬車に乗ってバルマイラに行き、事の次第を調べるように勧める。ジョセフはハーモニーからバルマイラの地域まで馱馬車に乗り、そこから残りの20マイル（約32キロ）を夜通し歩いて、やっとマンチェスターの両親の家に着いた。ジョセフは直ちにマーティンを呼びにやった。普段マーティンはすぐにやって来るので、みんなで一緒に朝食を食べようと待っていたのだが、マーティンは現れない。数時間後、うなだれ、重い足取りでマーティンはやって来た。そして塀に登り、帽子のつばで目を隠すようにしてそこに腰を下ろした。それからようやく朝食のテーブルに着いたが、何も食べられない。預言者の母であるルーシー・マック・スミスはこう記録している。「これから食べ始めるかのようにフォークとナイフを取ったのですが、すぐに落としてしまいました。それを見ていたハイラムが『マーティン、食べないの。具合でも悪いのかい』と尋ねました。するとハリスさんは

こめかみのところに両手を当てて、苦痛に満ちた声でこう言うのです。『もうおしまいだ。主の御前から絶たれる。』

それまで心の不安を少しも見せなかったジョセフが、その言葉にいすから跳ぶようにして立ち上がり、こう叫びました。『マーティン、原稿をなくしたと言うのかい？ 誓いを破ってわたしとあなたの頭に神の罰を招こうと言うのか。』

『ええ、なくなりました。』マーティンが答えました。『どこにあるか分からないんです。』

自分を責める気持ちと恐れとが預言者を襲いました。彼は叫びました。『すべてが失われた。すべてが失われた。どうしたらいいんだ。わたしは罪を犯した。神の怒りを招いたのはわたしだ。神からの最初の答えで満足すべきだった。原稿をほかに渡すのは安全ではないと主がおっしゃったのだから。』ジョセフはうめくように泣きながら、部屋を行ったり来たりしました。

そしてようやくジョセフはマーティンに、家に帰ってもう一度探すように言いました。

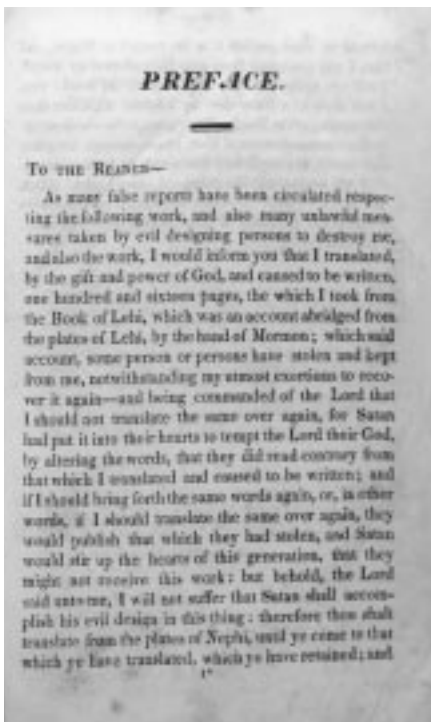
するとマーティンは答えました。『いや、無駄だ。ベッドや枕まで破って〔原稿を探した〕んだ。ないに決まっている。』

ジョセフが言いました。『そんなばかな話を主に申し上げなければならないのですか。わたしにはできない。主に顔向けができないでしょう。いと高き天使からのどんな叱責も避けられないのですよ。』

翌朝、ジョセフは家路に就きました。別れを告げるわたしたちの心は重く閉ざされていました。わたしたちが心待ちにしていたもの、わたしたちのひそかな喜びの源となっていたものが、瞬時にして、そして永遠になくなってしまったからです。<sup>20</sup>

116ページの原稿がないままにハーモニーに戻ったジョセフは、主の御心に背いたことへの赦しを求めて直ちに主に祈った。するとモロナイが現れ、版とウリムとトンミムを返すように命じたが、彼が謙遜になって悔い改めればもう一度授けられるという約束も与えられた。しばらくして、ジョセフは一つの啓示を受ける。それは「神の勧告を無視」したことを懲らしめるものであったが、同時にジョセフが今もまだ選ばれた者であり、悔い改めれば再び翻訳の業に召されることを告げる慰めの啓示でもあった（教義と聖約3：4 - 10参照）。ジョセフは悔い改め、再び版とウリムとトンミムを受け取り、また翻訳の業を援助するために筆記者を送るとの約束も与えられた。次のような特別なメッセージもあった。「天使はわたしのことを喜んでくださっているようだった。……主が忠実であり謙遜であるわたしを愛してくださっていると告げられた。」<sup>21</sup>

神からの賜物を取り戻したジョセフは、自分を陥れようとする邪悪な者たちが原稿の言葉を変えていたことを啓示により知った。もし彼が同じ部分を翻訳して出版するならば、邪悪な者たちは初めの翻訳と2度目の翻訳は同じでないからジョセフの翻訳の業は靈感によるものではないと言うであろう（教義と聖約10章参照）。しかし神は、この状況に対して備えをしておられた。失われた原稿はニーフアイの大版のモロナイの要約から取ったリーハイ書であった。しかしモルモンは、当時彼にはその理由が分からなかったが「ある賢明な目的のために」彼の記録にニーフアイの小版を付け加えた（モルモンの言葉1：3 - 7参照）。その小版にはリーハイ書と似た内



ジョセフ・スミスによれば、失われた116ページの原稿はニーフアイの大版の一部であるリーハイ書からのものである。学者間の定説となっているのは、原稿紛失後再び翻訳の許可が出たとき、預言者が大版をそのまま用いてモーサヤ書から翻訳を続けたということである。後に彼はニーフアイ第一書からモーサヤ書までの小版を訳した。『モルモン書』の現存する原稿の筆跡はこの考え方を裏づけている。

容のことが書かれていた。ジョセフは失われた部分の再翻訳は行わず、飛ばしてほかの部分の翻訳を続け、後の適当な時期にニーファイの小版からの翻訳を付け加えるように命じられた。その記録はニーファイによる記述で、主が「人々に知らせたいと自らの知恵により望んでいる事柄に関して、もっと詳細なもの」である（教義と聖約10：40）。

## 預言者の備え

1823年9月から1829年4月にかけての5年半の歳月は、ジョセフ・スミスにとって、『モルモン書』の翻訳ならびに時満ちる神権時代の教会を指揮する備えとして重要な時期であった。そして彼は今や23歳。背が高くたくましかった。農場や畑での仕事、そのほかいろいろな仕事をこなした。正式な教育はほとんど受けていなかったものの、好奇心は強く、知識欲はおう盛だった。彼は自分で物事を見いだすことや、聖文から答えを探すことを好んだ（ジョセフ・スミス 歴史1：11 - 12参照）。この知識欲、特に霊的な事柄を知ろうとする意気込みは消えることがなかった。

1843年6月、ジョセフは聖徒たちにこう語っている。「わたしは粗削りな石です。主の手に取られるまで、わたしからは金づちの音ものみの音もしませんでした。」<sup>22</sup>ジョセフの傑出した特質は、勇気と楽観主義と信仰である。彼はまだ幼いころ、足の手術を受けるときに大いなる勇気を示した。また彼の手から版を奪おうとする暴徒のような隣人を撃退した。そして彼には、貧しさや教育のなさを物ともしない明るさがあり、自分自身や自分の人生に対して楽観的であった。主に叱責されモロナイに過ちを正された彼は常に従順でよく罪を悔い、へこたれなかった。116ページの原稿を紛失したときは絶望に瀕<sup>ひん</sup>したけれども、その経験を通して従順を学び、後にこう言うまでに至った。「わたしはこのことをモットーとしている。すなわち、主が命じられたときは、それを行いなさい、ということである。」<sup>23</sup>また彼は、自分の動機や目的をコントロールするということについて貴重な教訓を得、それゆえ「神の栄光にひたすら目を向け」られるようになり（教義と聖約4：5）、その精力と思いを集中して王国の建設にいそむことができるようになったのである。

ジョセフはこのころまでに、いろいろな啓示を通してかなりの経験を積んできていた。神や御子や天使と言葉を交わし、示現を見、御霊の勤めを心に感じ、ウリムとトンミムを使う技術にもたけてきていた。わたしたちは啓示が何の苦もなく授けられたとは考えるべきでない。なぜなら、彼がこの時期に得たもう一つの貴重な教訓は、信仰や勤勉さ、根気強さ、ふさわしさ、従順さという代価を払わなければ神と交わることはできないということだったからである。



## 合衆国東部を理解するために

合衆国東部における教会の初期の歴史に登場する地名は、しばしば現代の読者を混乱させる。それは、当時の多くの東部諸州の行政区について無知であったり、それらの用語の現代の意味との違いについて理解していないためである。もし東部諸州で用いられていたそれらの用語が理解できたならば、混乱はなくなり、教会歴史もより分かりやすいものとなるであろう。

町 (town) という語は、村や集落、市を意味するものではない。タウンシップ (township) の省略語で、郡の下位区分のことである。郡はたくさんの町 (タウンシップ) に分かれる。例えばバーモント州ウィンザー郡には24の町 (タウンシップ) があり、その中の一つがシャロンである。教会歴史を読むと、ジョセフ・スミスがウィンザー郡のシャロンの町で生まれたとなっているが、それはシャロンという村や集落ではなく、タウンシップなのである。

この町 (タウンシップ) の名称は遺言書などの法律文書によく用いられた。また町には行政担当者や議員があり、それらは町 (タウンシップ) の中の村や共同体の行政担当者とは明確に異なっていた。

しばしば村や共同体が町 (タウンシップ) と同一の名称のことがあり、混乱のもとになっている。また州の中にある共同体が別の町 (タウンシップ) と同じ名前があることがある。例えば、ジョセフとエマはペンシルベニア州ハーモニーに住んでいたということで地図を見ると、ハーモニーという地名は州の西の端のバトラー郡の中にある。しかし、そこは彼らの家の所在地ではない。彼らはハーモニーという共同体 (集落) ではなく、ハーモニーという町 (タウンシップ) に住んでいたのであり、それはペンシルベニア州の北東の端のサスケハナ郡の中である。

東部の人々がこの町 (タウンシップ) という言葉の二つの意味の混乱を避けるために用いた方法が、共同体を表すときにより具体的な語を用いるというものである。まだそれ自体で行政組織を持ち得ない小さな共同体は集落 (hamlet)、組織ができた段階で村 (village、ペンシルベニアではborough)、そして人口が約1

万人に達すると市 (city) になる。

以上の理解に基づいて、これまでの章に出てきた教会歴史上重要な地名をもう一度見てみると理解が深まるであろう。また地図を見れば、この点がさらに明確になる。

1. ジョセフ・スミスの先祖はマサチューセッツ州トプスフィールド村ではなく、トプスフィールドの町 (タウンシップ) に住んでいた。

2. ジョセフ・スミスが生まれたのはバーモント州ウィンザー郡シャロンの町 (タウンシップ) である。生家はシャロンの村から少し離れた場所にあり、町 (タウンシップ) 境の上に位置していた。彼がシャロンの生まれとされるのは、出産の際に用いたベッドが境界線のシャロン側にあったからであると考えられている。

3. ジョセフ・スミスの農場と聖なる森があるのはニューヨーク州オンタリオ郡マンチェスターの町 (タウンシップ) で、パルマイラの村ではない。しかし郵便物の配達先の住所はニューヨーク州ウェイン郡パルマイラで、それは今も変わっていない。

4. アイザック・ヘイルとジョセフ・スミスの時代にオークランドという集落はなかった。あったのはハーモニーという村で、当時はハーモニーという町 (タウンシップ) に含まれていた。オークランドは後になって形成された町で、昔のハーモニーの町から分轄された。以来ハーモニーの村は消滅し、形跡をとどめない。

5. ジョセフ・ナイトの農場があったのはニューヨーク州ブルーム郡のコールズビルという集落ではなく、ノースコールズビルならびにサウスコールズビルの両方の集落から少し離れた距離にあるコールズビルの町 (タウンシップ) にあった。最も近い村は二ネベである。

6. ジョセフとエマが結婚したターベル氏 (p.51) の家は、ニューヨーク州シェナゴ郡ベインブリッジ町 (タウンシップ) の中のサウスベインブリッジ (現アフトン) の村にある。

7. 教会が組織されたのはニューヨーク州セネカ郡フェイエットという集落ではない。フェイエットの町 (タウンシップ) のピーター・ホイットマーの丸太小屋においてである。

## 注

1. デール・L・バージ “ Archaeological Work at the Smith Log House ” *Ensign* 「スミス家の丸太の家での考古学調査」『エンサイン』1985年8月号, 24 - 26参照
2. スミス家の農場の図面に関する情報は, ドナルド・E・エンダース, ジョセフ・スミス・シニア, *Family in Palmyra / Manchester, New York reserch file* (ニューヨーク州マンチェスター郡バルマイラの家族調査ファイル, 教会歴史美術館, ユタ州ソルトレーク・シティー, 1989年)
3. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニプレー 編 ( Salt Lake City: Bookcraft, 1958 ), 79参照
4. *Latter Day Saints' Messenger and Advocate* 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1835年10月号, 195 - 196で引用
5. オリバー・カウドリ 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1835年7月号, 157で引用
6. カウドリ 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1835年10月号, 198で引用
7. カウドリ 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1835年10月号, 198で引用
8. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』81で引用, 下線付加
9. *History of the Church* 『教会歴史』4 : 537 ; ジョージ・Q・キャノン, *Journal of Discourses* 『説教集』13 : 47で引用 ; ジョン・テラー 『説教集』17 : 374 , 21 : 94で引用参照
10. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』83
11. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』87で引用
12. バディー・ヤンググリーン, *Reflection of Emma , Joseph Smith's Wife* 『ジョセフ・スミスの妻エマの思い出』( Orem, Utah: Grandin Book Co., 1982 ), 4
13. 『教会歴史』3 : 29参照
14. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』100 - 101で引用
15. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』108
16. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』114参照 ; ジョセフ・スミスの1832年の出来事, ジョセフ・スミス書簡集, *The Personal Writings of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』ディーン・C・ジェシー編 ( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984 ), 7 - 8で引用
17. スタンリー・B・キンボール “ I Cannot Read a Sealed Book ” *Improvement Era* 「わたしは封じられた書を読むことはできない」『インブルーメント・エラ』1957年2月号, 80 - 82, 104, 106 ; “ Charles Anthon and the Egyptian Language ” 「チャールズ・アンソンとエジプト文字」『インブルーメント・エラ』1960年10月号, 708 - 710, 765 ; “ The Anthon Transcript: People, Primary Sources, and Problems ” *Brigham Young University Studies* 「アンソン原稿 人, おもな典拠, 問題点」『ブリガム・ヤング大学紀要』1970年春季号, 325 - 352参照
18. 『教会歴史』1 : 20で引用
19. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』119 - 123参照
20. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』128 - 129
21. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』135で引用
22. 『教会歴史』5 : 423で引用
23. 『教会歴史』2 : 170

# 『モルモン書』の出現と 神権の回復

年代	重要な出来事
1828. 秋	ジョセフ・スミス、再び版とウリムとトンミムを受け取る
1829.4.7	ジョセフ、オリバー・カウドリの援助を得て『モルモン書』の翻訳を開始
1829.5.15	バプテスマのヨハネ、アロン神権を回復
1829.5. 6	ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、メルキゼデク神権を回復
1829.6.1	ジョセフとオリバー、翻訳を完成するためにフェイエットに移る
1829 - 1830 秋から冬	『モルモン書』、初めてバルマイラで印刷される
1830.3.26	『モルモン書』、バルマイラで販売される



オリバー・カウドリ（1806 - 1850年）

1829年、若き預言者と、彼が回復することになる教会は重要な年を迎える。1828年末、モロナイは版とともにウリムとトンミムをジョセフに返し、翻訳の業を援助する新たな筆記者を授けることを約束した。その年の秋、ジョセフのことを心配した両親がハーモニーを訪れている。彼らはジョセフが元気であり、また版とウリムとトンミムもエマの赤いモロッコトランクに安全に保管してあることを知って喜んだ。彼らは安堵して帰途に就き、こう記している。「支え切れないような重荷が下りたようでした。その喜びは過去のすべての悲しみを打ち消して余りあるものでした。」<sup>1</sup>筆記者を授けるとの主の約束は、オリバー・カウドリがハーモニーに着いた1829年に成就する。オリバーとジョセフは翻訳の完成に向けて熱心に働いた。その過程で彼らは重要な福音の原則の幾つかを学び、中には新たな霊的経験や神権の回復につながるものもあった。こうして明るく年のイエス・キリストの教会の設立への備えがなされたのだった。

## オリバー・カウドリの到着

1828年から1829年にかけての冬、ジョセフ・スミスはエマやエマの兄弟の助けを得て翻訳の業を時折行ったものの、生計を立てなければならず、それは思うように進まなかった。エマの父親アイザック・ヘイルはジョセフの版についての話に疑いを持ち、ほとんど同情を示さなかった。1829年3月、ジョセフはこう語っている。「わたしはどこに行ったらいいのかも分からず、命じられた業を完成するための力を与えてくださるように主に叫び求めました。」<sup>2</sup>すると主はジョセフに、当分の間翻訳を中止して待つように言われた。「中止して、わたしがあなたに命じるまでそのままいなさい。そうすれば、わたしがあなたに命じたことを成し遂げる手立てを与えよう。」（教義と聖約5：34）これで確信を得た預言者は新しい筆記者の到着を待ち、4月5日、オリバー・カウドリが来た。

オリバー・カウドリは1806年10月3日、バーモント州ラットランド郡ウェルズに生まれた。8人兄弟の末子である。彼は読み書きと基本的な計算の教育を受けていた。彼の兄たちはバーモント州では仕事の機会がなかなか見つからないということで、ニューヨーク州西部に移った。1825年、オリバーも兄たちに倣ってニューヨーク州西部に移り、ある村のよろず屋の店員をした。またかじ屋や農業も行った。オリバーは5フィート5インチ（約165センチ）のやせ型で、黒い巻き毛に鋭い黒い目をした人物である。

1829年初頭、オリバーの兄の一人であるライマン・カウドリがジョセフ・スミスの家族が住んでいた場所の近くのマンチェスター町のある村で教師として雇われた。ところが、兄ライマンは都合で勤めることができず、学校の理事会に弟のオリバーを代わりに雇うよう提案した。こうして、ハイラム・スミスも理事を務めていたそ

の理事会の承認を得たオリバーは、教師としての仕事を始め、ジョセフ・スミス・シニアの家に下宿することを勧められる。ルーシー・スミスはそのときのことをこう書いている。「彼はすぐにたくさんの人から版のことを耳にし、そのことについて夫に熱心に尋ねました。しかし長い間、詳しい情報を聞き出すことはできませんでした。」<sup>3</sup>スミス家は近隣の人々に嘲笑ちやうしやうされていたこともあって、自分たちの経験したことをオリバーに話すのをためらっていたのである。

しかし、やがてスミス家からの信頼を得たオリバーに、ジョセフ・スミス・シニアは版のことを話した。オリバーは版のことについて個人的に祈りと瞑想めいそうを行い、ジョセフ・スミス・シニアに、まだ会ったことのないジョセフのために自分が筆記をする特権を与えられるように感じると打ち明けた。彼はスミス家の人々に、来春、冬の学期が終わった後にサミュエルとともにジョセフのもとを訪れるのが「主の御心」であると語っている。オリバーはこう述べている。「このことについてわたしになすべきことがあれば、わたしは意を決してそれを行うつもりです。」<sup>4</sup>こうして1829年4月上旬、サミュエル・スミスとオリバー・カウドリはペンシルベニア州ハーモニーに向けて旅立った。当時は不順な天候が続き、普通の人なら旅は控えるところであったが、オリバーのジョセフ・スミスに会って話をしたいという心はそのような悪条件などものともしなかった。

マンチェスターでスミス家と会う前、オリバー・カウドリはニューヨーク州フェイエットのデビッド・ホイットマーと会い、親しくなっていた。ハーモニーへの途中、オリバーとサミュエルはデビッドに会いに行く。するとデビッドはオリバーに、ジョセフがほんとうに古代の記録を持っているのか、感じたことを手紙に書いて送ってくれるように頼んだ。オリバーとデビッドのこの関係は、後の『モルモン書』の出版と教会の設立に重大な影響を及ぼすことになる。

4月5日、日曜日にオリバーがハーモニーに着くと、ジョセフ・スミスはオリバーが主から約束された助け手であると直感した。彼らはジョセフが経験したことについて夜遅くまで語り合った。翌日に幾つかの用事を済ませた二人は、4月7日、火曜日から熱心に翻訳の業に携わっている。

## 速まる翻訳の業

4月はジョセフもオリバーも「休むことなく」翻訳の業を続けた。ジョセフはオリバーの助けを得て、それまでにない速度で翻訳を進めている。そしてその後の3か月に、印刷ページにして約500枚という驚くほどの量の翻訳を完成させたのである。それは彼らの人生で栄えある期間であった。オリバーはこう書いている。「これらの日々は、決して忘れられないものであった。天の靈感によって語られた声、……彼が『モルモン書』と呼ばれる歴史すなわち記録を、ウリムとトンミンム……を用いて翻訳するまに、わたしは、来る日も来る日も、彼の口から出る言葉を絶え間なく書き続けた。」<sup>5</sup>

そして4月、幾つかの重要な啓示がジョセフ・スミスを通してオリバー・カウドリにもたらされる。現在教義と聖約第6章に収められている最初の啓示は、主を呼び求めるオリバーの義にかなった望みを褒めたものである。「尋ねる度に、わたしの御霊からの教えを受けてきたからである。そうでなかったならば、現在あなたがいる所に来ることはなかったであろう。」(14節)しかしオリバーは恐らく業の真实性につ



「翻訳中のジョセフとオリバー」アール・ジョーンズ画

ペンシルベニア州ハーモニーのジョセフ・スミスと妻エマの家。中央の家が当時建てられた家である。エマはこの家で最初の子供アルビンを出産したが、アルビンはその日のうちに死んだ。1828年6月15日のことである。

ジョセフ・スミスはここで『モルモン書』のかなりの部分を翻訳した。また、ハーモニーではたくさんの啓示も受けている（教義と聖約3 - 13, 24 - 27章参照）。



いてこれ以上の証を求めたのであろう。主はこう言われた。

「これらのことが真実であるのを知ろうとして心の中でわたしに叫び求めた夜のことを思い出しなさい。

わたしはこの件についてあなたの心に平安を告げなかったであろうか。神からの証よりも大いなる証があるであろうか。」（教義と聖約6：22 - 23）この啓示の後でオリバーはジョセフに、スミス家に下宿していたところにジョセフ・スミスが預言者かどうかを主に祈りを通して尋ね、平安な気持ちを得ていたことを初めて打ち明けた。

二人が翻訳の業を継続していく中で、オリバーは自分も翻訳の力を得たいと思うようになった。この祝福が許可されてオリバーは幾つかの単語を訳そうとしたができなかった。必要な霊的な準備と熟考というプロセスを経ていなかったからである。主はこう説明しておられる。

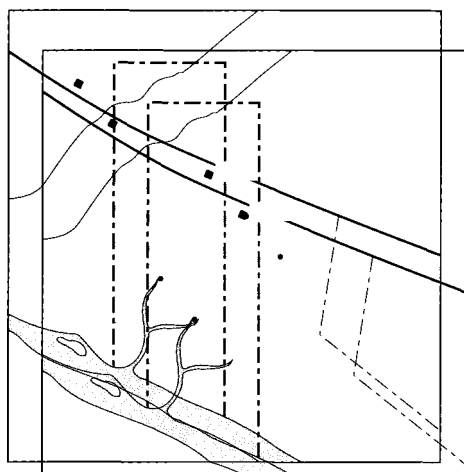
「あなたは心の中でそれをよく思い計り、その後、それが正しいかどうかわたしに尋ねなければならない。もしそれが正しければ、わたしはあなたの胸を内から燃やそう。それゆえ、あなたはそれが正しいと感じるであろう。

しかし、もしそれが正しくなれば、あなたはこのような感じを少しも受けず、思いが鈍くなり、それによって誤っている事柄を忘れるようになる。それゆえ、あなたはわたしから与えられなければ、神聖なことを書くことはできない。」（教義と聖約9：8 - 9）

この時期、旧友であるジョセフ・ナイト・シニアが28マイル（約45キロ）の道をニューヨーク州コルズビルから、じゃがいもやさば、穀物を何ブッシェルも携えてやって来た。彼は罫線を引いた紙やそれを買って足すお金まで持って来てくれた。このナイトの訪問は業の続行のために重要であった。ジョセフとオリバーは資金がなく、仕事を探そうとしていたからである。一時的にせよ仕事をする事になれば、翻訳は遅れてしまう。二人はこの時宜を得た援助に心から感謝した。まさに天からの賜物であった。

## 神権の回復とバプテスマ

ジョセフとオリバーは翻訳に従事している間、西半球の住民への救い主の訪れやバプテスマについての主の教えが明らかにされる度に胸を躍らせた（3ニーファイ



ハーモニーでジョセフとエマは初めエマの父であるアイザック・ヘイル宅に住んでいたが、版を見せてくれないと言ってアイザックが腹を立てたために、エマの兄弟、ジェシー・ヘイルから200ドルで13.5エーカー（約5.5ヘクタール）の土地と家を買って、移り住んだ。南端がサスケハナ川に面する細長い土地である。

アロン神権が回復されたのはサスケハナ川に面したスミス家の所有地内もしくはその近辺での出来事であろうと思われる。1947年から1956年にかけて、教会はこの地域の土地を3か所購入し、当時の史跡となる場所の多くを獲得できた。1960年にはジョセフ・スミスの家の近くにアロン神権の回復を記念する碑が建てられた。



エマの両親アイザック・ヘイルとエリザベスはマッキューン墓地に埋葬されている。ジョセフとエマの長子アルビンが眠るのもこの墓地である。

アイザック・ヘイルの墓碑銘には、「アイザック・ヘイル、1839年1月11日死去、享年75歳10か月10日。」

獵師アイザック・ヘイルの体は、目次は破れ、文字や金ばくのはげ落ちた古びた書物の表紙のように、ここに横たわり、虫けらの食すところとなれど、書物そのものは失われることはない。彼が信じたように、彼の体は再び、訂正され修正された新たなさらに美しい装丁のもとに現れるからである。」

エリザベス・ヘイルの墓碑銘にはこう書かれている。「アイザック・ヘイルの妻エリザベス、1842年2月16日死去、享年75歳2か月28日。」

11：18 - 38参照)。そして特に、どうしたらバプテスマの祝福が得られるのかを知りたいと思い、熱心に祈り求めた。こうして1829年5月15日、ジョセフとオリバーは近くのサスケハナ川のほとりの森に祈るために出かけて行く。そのときの模様をオリバーがこう書いている。「突如、永遠のただ中から来たかのように、贖い主の声がわたしたちに平安を告げられた。それと同時に、とばりが分けられ、神の天使が栄光をまとめて降りて来て、わたしたちが切に待ち焦がれていた知らせを告げ、悔い改めの福音の鍵を渡してくださったのである。何という喜びであろう。何という驚異であろう。何という驚きであろう。世の人々が苦しみ、当惑していたときに……わたしたちの目は見、わたしたちの耳は聞いたのである。』<sup>6</sup>

天使は自分がヨハネ（『新約聖書』のバプテスマのヨハネ）であると紹介し、使徒であるペテロ、ヤコブ、ヨハネの指示の下で働いていると告げた。彼はジョセフとオリバーの頭に手を置き、こう言った。「わたしと同じ僕であるあなたがたに、メシヤの御名によって、わたしはアロンの神権を授ける。これは天使の働きの鍵と、悔い改めの福音の鍵と、罪の赦しのために水に沈めるバプテスマの鍵を持つ。」（ジョセフ・スミス - 歴史1：69。教義と聖約13：1も参照）ヨハネは、後でメルキゼデク神権も授けられると告げた。こうして、何世紀もの時を隔てて、神権が地上に回復されたのであった。

ヨハネはジョセフがオリバーにバプテスマを施し、次いでオリバーがジョセフにバプテスマを施すように命じた。それから二人はアロン神権を互いに授け合った。バプテスマを終えて水から上がった二人は、預言の霊に満ちていた。オリバーは「間もなく起こるはずの多くのこと」を預言し、ジョセフは「この教会の起こりと、教会に関連のあるその他の多くのことと、この時代の人の子らについて預言した。」（ジョセフ・スミス - 歴史1：73）彼らは聖霊に満たされ、救いの神を喜びたたえた。また彼らの心に光が注がれ、それまでになくはっきりと聖文の意味が理解できるようになった。しかしながら、二人はその経験を内密にしておくことを強られる。地元の宗教指導者からの迫害のためである。ジョセフの義理の父であるアイザック・ヘイルが仲介役に回り、二人を守ろうとしたが、彼の力ではどうにもならない状態であった。

このころ、ハーモニーのジョセフのもとを何人かの人が訪れた。まずは弟のサミュエルである。ジョセフとオリバーは自分たちの体験について熱心に話し、それまで翻訳を終えた原稿を見せた。しかしサミュエルは簡単には納得しなかった。イエス・キリストの福音について『聖書』を使って説明しても首を縦に振らない。サミュエルは自分の疑いの心を解決するために、森へ行って祈ることにした。ジョセフはこう書いている。「その結果彼は、わたしたちが彼に主張した真実について納得するだけの啓示を受けた。そして同じ月の25日、バプテスマと聖任が行われた。オリバー・カウドリが彼にバプテスマを施した。サミュエルは輝くような顔で神を賛美し、聖なる御霊に満たされて父の家に帰って行った。』<sup>7</sup>

次の訪問者はジョセフの兄ハイラムであった。ジョセフはハイラムの求めに応じ、ウリムとトンミムを使って主に伺いを立てた。すると主はハイラムに、この時代に大いに善を行う仲立ちとなると告げられた。しかしそれと同時に、忍耐して翻訳されつつある『モルモン書』などの聖文を研究すること、また悔い改めの福音を宣べ

伝える業に召される日のために備えをすることを求められた（教義と聖約11章参照）。

ジョセフとオリバーはその後すぐにコールズビルに行く。その帰途、主の使徒の長であるペテロ、ヤコブ、ヨハネがサスケハナ河畔に姿を現した（教義と聖約128：20参照）。そして彼らはジョセフとオリバーに聖なるメルキゼデク神権を授け、使徒職の鍵を渡した（教義と聖約27：12参照）。こうしてジョセフとオリバーは、地上に神の王国を築く主の正当な代理人としての権能を授けられたのである。

## 翻訳の完成

翻訳の業の手伝いを始めて間もなく、オリバーはフェイエット町に住むデビッド・ホイットマーにあてて手紙を書いた。そしてジョセフ・スミスが古代の記録を持っており、この業が神の業であることを熱烈に証した。またオリバーは翻訳を数行デビッドに送り、その版にはアメリカ大陸の古代住民の記録が書いてあることを証した。当時24歳のデビッド・ホイットマーはその手紙を喜々として父親や兄弟姉妹に見せている。当時ハーモニーでも迫害が強まり始めたので、オリバーはデビッドに、ジョセフと二人でフェイエットに移ってホイットマー家に滞在できないかと打診した。その返事の中でデビッドの父であるピーター・ホイットマー・シニアは、翻訳の業が終わるまで滞在してかまわないと述べている。デビッドの兄弟であるジョンは筆記者となることを申し出た。フェイエットの大勢の人々は、業についてさらに詳しいことを聞きたがった。<sup>8</sup>

5月の後半は秋の収穫のための種まきをしなければならない時期である。そこでデビッド・ホイットマーは2頭立ての馬車でジョセフ・スミスとオリバー・カウドリを迎えに行く前に畑を耕して種まきの準備をしなければならなかった。ところが、耕作を終えてその日の仕事を振り返ってみると、普段の2日分の面積を1日で耕していた。デビッドの父ピーター・ホイットマー・シニアもこれには奇跡だと言って感嘆し、こう述べている。「これは何か大きな力が働いているに違いない。畑に石灰をまいたらすぐにペンシルベニアに出かけるといい。」<sup>9</sup>（石灰は土壌の酸化を低減させるものとして用いられた。）翌日、デビッドは石灰をまこうと畑に出た。すると驚いたことにすでにそれはまかれてあった。近くに住む彼の姉妹によれば、前日に子供たちに呼ばれて外に出ると、見ず知らずの3人の男が驚くほどの手際よさで石灰をまいていたとのことだった。てっきりデビッドの雇った者たちだと彼女は思ったのである。<sup>10</sup>

こうした神の助けに感謝し、デビッドはハーモニーへの3日の旅に出発した。ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは町外れまで迎えに出ていた。デビッドはいつ到着するかを告げてはいなかったが、ジョセフは示現でデビッドの旅の様子をつぶさに見ていたのだった。<sup>11</sup> デビッド・ホイットマーが目撃したこれら3つの奇跡は、預言者ジョセフの聖見者としての働きと、回復の業の首尾よい開始への主の介入を示すものである。

ジョセフ・スミスとデビッド・ホイットマーは初対面であったが、オリバーのときと同じようにデビッドとジョセフはすぐに友達になった。こうして彼らはすぐに100マイル（約160キロ）余り離れたフェイエットへと向かった。この移動に当たっては、危険を避けるためにモロナイが版を預っている。またこの移動でもう一つ不



デビッド・ホイットマー（1805 - 1888年）は『モルモン書』の3人の証人の一人である。彼はミズーリ州リッチモンドで84歳で死んだ。

思議なことが起きた。全員が馬車に乗っていたときのことであったが、デビッド・ホイットマーがこう語っている。

「整った顔立ちの老人がにこにこして、馬車のわきからわたしたちにあいさつをするのです。『おはようございます。暑いですね。』そして彼は手で額の汗をぬぐいました。わたしたちもあいさつを返しましたが、ジョセフからの目くばせで、方向が同じであれば馬車に乗ってもらおうということになりました。ところが彼は朗らかにこう言うのです。『いいえ、わたしはクモラに行きます。』クモラという地名は聞いたことがなかったので、何のことかわたしには分かりませんでした。わたしたちはその老人に目をやり、それから互いに顔を見合わせました。そしてジョセフに尋ねようと振り向くと、その老人の姿はどこにもありませんでした。……

……それは版を持った使者でした。ハーモニーから出発する直前にジョセフから版を受け取った天使だったのです。」<sup>12</sup>

3人は6月1日ごろにフェイエットに着いた。また家族の世話をするためにしばらくの間ハーモニーに残ったエマもやがて合流した。それと同時に、翻訳の業が直ちに開始された。ホイットマー家はジョセフとエマ、オリバーのために親身になって世話をしている。

翻訳の業が進められているころ、福音はセネカ郡で宣べ伝えられ、6月にハイラム・スミス、デビッド・ホイットマー、ピーター・ホイットマー・ジュニアが罪の赦しのためのバプテスマを受けた。ピーター・ホイットマーの3人の息子であるデビッドとジョンとピーター・ジュニアは熱心に業を助けた。そこでジョセフは、自分に与えられた務めを知りたいと願う3人の求めに応じて、主に願い求め、一人一人に啓示が授けられた。3人とも悔い改めを宣言することにより神の王国を建設するように命じられている（教義と聖約14 - 16章参照）。スミス夫婦とオリバーの世話をするピーターとメアリー・ホイットマーの夫婦にとってこれらの出来事はただ事ではなかった。息子デビッドによれば、負担が大きくなった母親メアリーは大きな不安に駆られるようになる。不平を言うわけではなかったが、負担が大きすぎたのである。デビッドは、ある日母親がミルクを搾るために家畜小屋に行ったときのことをこう述懐している。「母は裏庭の近くで〔デビッドが会った〕あの同じ老人（母親が話したその老人の姿形から判断して）に会いました。老人は母にこう言ったのです。『あなたは忠実に、そして熱心に働いてこられました。でも、仕事が多くて疲れています。そこで、あなたの信仰を強められるものを見せてあげましょう。』そしてその老人は母に版を見せました。」<sup>13</sup>この出来事は母メアリーと家族を力づけ、彼らは続けてジョセフ・スミスを支え、彼が携わろうとしていた重要な業の助け手となったのであった。

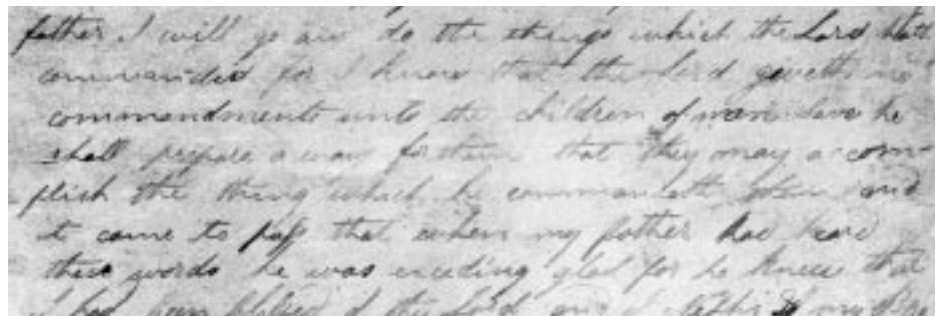
## 翻訳の過程

翻訳の実際の過程はあまりよく知られていない。その一番の理由は、翻訳についてそのほとんどを知っていたジョセフ・スミスとオリバー・カウドリが話していないからである。さらに、ジョセフを助けたマーティン・ハリスやデビッド・ホイットマー、エマ・スミスも当時、翻訳の業について何の文書も残していない。彼らがかなり後になってから記した簡単な回想文には矛盾する点が多い。



預言者は翻訳の詳細についてあまり語りたがらなかった。1831年10月25 - 26日にオハイオ州オレンジ郡で開かれた教会の大会でハイラムは、『モルモン書』の出現について本人から話をしてもらうことを求めた。しかし、預言者はこう語っている。「『モルモン書』の出現の詳細のすべてを世の人々に公表するのは御心ではありません。」<sup>14</sup> ジョセフは1833年、ある新聞記者への公開書簡で業の本質的な部分については説明したが、詳細については触れず、『モルモン書』は「聖なる天使の働きを通して発見され、神の賜物と力とによってわたしたちの言語に翻訳された」<sup>15</sup>と述べただけであった。彼のこの説明は『教義と聖約』と呼応する。そこには、彼が「神の憐れみによって、神の力により『モルモン書』を翻訳」することを許されたとある（教義と聖約1：29）。そして主は「前もって備えられた手立てによって『モルモン書』を翻訳するために、高い所から彼に力を授けられた」のである（教義と聖約20：8）。

これはジョン・ホイットマーの自筆の『モルモン書』原稿である。ジョンは『モルモン書』の翻訳に当たり、筆記者の一人として奉仕した。



『モルモン書』のタイトルページにもあるように、翻訳の業の中で最も大切なのは、「神の賜物により翻訳される」ことである。この古代の記録の最後の管理者であったモロナイは、『モルモン書』を読むすべての人に対して、祈りによってその真実性を確かめるようにとチャレンジしている。彼は、聖霊の力によりすべての人がその書の真実性を知ることができると約束した（モロナイ10：4 - 5参照）。主は『モルモン書』について、ジョセフが「その書を、すなわちわたしが彼に命じた部分を翻訳した。あなたがたの主、あなたがたの神が生きているように確かに、その書は真実である」（教義と聖約17：6）と証された。

中にはシドニー・リグドンが中心になって『モルモン書』を書いたと言う人々がいる。彼らの主張は、シドニーがソロモン・スポールディングの小説『発見された原稿』（*Manuscript Found*）または『原稿のいきさつ』（*Manuscript Story*）を底本として、『モルモン書』の歴史部分を書いたというものである。しかしながら、シドニー・リグドンが『モルモン書』の出版前にジョセフ・スミスを知っていたという証拠はどこにもない。シドニー・リグドン自身の証によれば、彼が初めて『モルモン書』のことを耳にしたのは1830年10月で、パーリー・P・プラットから現物を受け取っている（本書、80 - 81ページ参照）。ソロモン・スポールディングの原稿が発見されたのは1880年代で、しかも内容は『モルモン書』とは似ても似つかぬものである。この偽りの、しかし広く支持されているスポールディング・リグドン説は、明らかに神の言葉の信用をおとしめるサタンの企てである。

1827年にジョセフ・スミスが翻訳を開始したときは、モルモンによって要約されたニーファイの大版の中のリーハイ書から始めたことが明らかである（教義と聖約10章の前書き参照）。そして116ページの原稿を紛失した後は、同じ大版の中のモー

サヤ書から始めたと思われる。1829年4月初旬にオリバー・カウドリが派遣されたとき、ジョセフはモーサヤ書に入っていた。それから5週間後の1829年5月15日、二人は第三ニーファイのバプテスマに関する救い主の説教の部分に入っており、フェイエットのホイットマー宅に到着するまではニーファイ第一書からモルモンの言葉までを含んだニーファイの小版は翻訳していなかったのである。預言者が小版を翻訳するように命じられたのは116ページの失われた原稿と差し換えるためであった（教義と聖約10：43 - 45参照）。したがって『モルモン書』のオリジナルの原稿でジョン・ホイットマーが筆記者としての役割を果たしたのは小版のみで、これは、ジョセフがホイットマー宅に来るまでは小版を翻訳していなかったという説を裏づけるものである。<sup>16</sup>

## 『モルモン書』の証人

ジョセフ・スミスが証人の必要性についてのニーファイの言葉を翻訳した直後（2ニーファイ27：12 - 14；エテル5章参照）、マーティン・ハリスはパルマイラからフェイエットに赴き、作業の進行状況を確認している。マーティンはオリバー・カウドリならびにデビッド・ホイットマーとともに、自分たちが約束された証人になれるのか主に伺ってくれるように求めた。ジョセフはそのとおりにし、啓示を受けた。それには、彼らが誠心誠意信仰を行使するならば版を目にし、また胸当て、ラバンの剣、ヤレドの兄弟が用いたウリムとトンミム、またリーハイが荒れ野にいたときに授けられた不思議な指示器であるリアホナも目にするという約束があった（教義と聖約17章参照）。主はこう宣言されている。「あなたがたがこれらのものを目にするのは、あなたがたの信仰、すなわち、昔の預言者たちが持っていたような信仰によるのである。」（教義と聖約17：2）また主は、これを見た彼らは、これらのことについて世の人々に証ししなければならないと言われた。

翻訳が完成すると、ジョセフはマンチェスターの両親に、フェイエットのホイットマー宅に来るように連絡した。両親がマーティン・ハリスとともに訪れると、その晩は皆で原稿を読みながら楽しいひとときを過ごした。翌朝、証人となるべき人々ならびにホイットマー家に滞在していた人々は、いつもどおり朝の礼拝集会のために集まり、聖文を読み、賛美歌を歌い、祈りをささげた。ルーシー・スミスはこう書いている。「ひざまずいていたジョセフは立ち上がると、威厳に満ちた態度でマーティン・ハリスのもとに歩み寄り、言葉をかけました。このときのことを思い出すと、今でも胸が躍ります。ジョセフはこう言いました。『マーティン・ハリス、あなたは今日、神の御前に謙遜にならなければなりません。そして、罪の赦しを得てください。そうすれば神の御心により、オリバー・カウドリ、デビッド・ホイットマーとともに版を見ることができるようでしょう。』」<sup>17</sup>

その後で4人の男性たちは森に入り、約束された啓示が成就するよう願い求めた。しかし、2度試みても示現はなかった。そこでマーティン・ハリスは、自分がいるために答えが受けられないと感じ、一人引き下がって祈りをささげた。残りの3人が祈りをささげるやいなや、栄光に包まれたモロナイが手に版を持って現れた。ジョセフはこう記録している。「版を一枚一枚めぐり、そこに刻まれている文字をはっきりわたしたちに見せた。……そしてその後わたしたちの真上に輝く光の中から声が聞こえ

た。『この版は神の力により現され、神の力により翻訳されたものである。あなたがたが見た翻訳は正確である。あなたがたに命じる。今、見聞きしたことを証しなさい。』

さて、わたしはデビッドとオリバーとをその場に残留してマーティン・ハリスを捜しに行き、かなり離れた場所で熱心に祈っている彼を見つけた。しかし彼は願いがまだ主に聞かれないと言い、わたしたちと同じ祝福が得られるようにぜひ一緒に祈ってほしいと言った。そこでわたしもともに祈り、ついに願いは聞き届けられた。祈りがまだ終わらないうちに示現が開けてきたのである。それはわたしが前に見たのと同じ示現で、わたしは同じ言葉をもう一度聞いた。マーティン・ハリスは喜々として『すばらしい、すばらしい。確かに見た、見た』と叫んだ。<sup>18</sup>

ホイットマー家に戻ったジョセフは、自分以外の者が天使に会って金版を見、真理の証を述べるように求められたことに対して、両親に安堵の胸の内をこう語っている。「これでようやく彼らは、わたしがあちらこちらで人をだましているのではないことを、自分の力で知りました。とても耐え切れなかった重荷が取り去られたようです。もうこの世でわたし一人だけではないのだと思うと胸が躍ります。」<sup>19</sup> 3人の証人は自分たちの経験をこう証している。「わたしたちは、父なる神と主イエス・キリストの恵みによって、この記録が記されている版を見た。……また、その版が神の賜物と力によって翻訳されたことも知っている。神の声はわたしたちにそのことを宣言されたからである。したがって、わたしたちはこの書物が真実であることを確かに知っている。<sup>20</sup> 彼らはまた、天使がその版に刻まれている文字を見せてくれたことを証している。そのとき以来、彼らの証は『モルモン書』のすべての版に含まれるようになった。

それから数日後、翻訳の業にあってジョセフと親交の深かった8人が新たに証人として選ばれた。その8人とは、ジョセフ・スミスの父であるジョセフ・スミス・シニア、ジョセフの兄ハイラムと弟サミュエル、それにホイットマー家の4人の兄弟、クリスチャン、ジェイコブ、ピーター、ジョン、それにホイットマー兄弟とは義理の兄弟に当たるハイラム・ページである。ジョセフが彼らに版を見せることを許されたのはマンチェスターのスミス家の近くでのことで、ジョセフが『モルモン書』の印刷の手配をしていたときであった。<sup>21</sup> 8人の証人は自分で版を持ち上げ、ページに刻まれた文字を見たこと証している。彼らの証もまた、『モルモン書』のすべての版に含まれている。このようにして、神の証人の律法により『モルモン書』の真実性はさらに具体的なものとなり、地の住民はそこに書かれている事柄に対して責任を問われるようになったのである。

『モルモン書』の11人の証人は、回復された教会でも宗務上の重要な地位を占めるようになった。その中の5人、すなわちスミス家の3人とクリスチャンならびにピーター・ジュニアのホイットマー兄弟は教会への奉仕の業に活発に参加している最中に亡くなったが、3人の証人、すなわちマーティン・ハリス、オリバー・カウドリ、デビッド・ホイットマーは後に教会を去った。ジョン、ジェイコブのホイットマー兄弟ならびにハイラム・ページも教会を離れている。しかしこの6人は証を否定する機会がたくさんあったにもかかわらず、そうしたことは一度もなかった。それどころか、求められる度に、証の真実性を強く主張したのである。オリバー・カウドリとマーティン・ハリスは後に教会に戻り、正会員として世を去っている。

## 『モルモン書』の版の8人の証人

名前	生年月日	誕生地	版を見た ときの年齢	職業	死亡
クリスチャン・ホイットマー	1798 . 1 . 18	ペンシルベニア州ハリスバーグ	31	靴屋	1835 . 11 . 27 ミズーリ州クレイ郡 信仰を保つ
ジェイコブ・ホイットマー	1800 . 1 . 27	ペンシルベニア州ハリスバーグ	29	靴屋	1856 . 4 . 21 ミズーリ州リッチモンド
ピーター・ホイットマー・ジュニア	1809 . 9 . 27	ニューヨーク州フェイエット	19	仕立屋, 農業	1836 . 9 . 22 ミズーリ州クレイ郡リパティエ 信仰を保つ
ジョン・ホイットマー	1802 . 8 . 27	ペンシルベニア州ハリスバーグ	26	農業	1878 . 7 . 11 ミズーリ州ファーウェスト
ハイラム・ページ	1800	バーモント州	29	医師, 農業	1852 . 8 . 12 ミズーリ州エクセルシア・スプリングス
ジョセフ・スミス・シニア	1771 . 7 . 12	マサチューセッツ州 エセックス郡トプスフィールド	57	農業	1840 . 9 . 14 イリノイ州ノーブ 信仰を保つ
ハイラム・スミス	1800 . 2 . 9	バーモント州タンブリッジ	29	農業	1844 . 6 . 27 イリノイ州カーセージ 信仰を保つ
サミュエル・H・スミス	1808 . 3 . 13	バーモント州タンブリッジ	21	農業	1844 . 7 . 30 イリノイ州ノーブ 信仰を保つ

## 『モルモン書』の出版

1829年6月, オリバー・カウドリとともにフェイエットに到着したジョセフは, 翻訳の業も進行してきたので, 数日後, 版権の申請を行うことにした。こうして6月11日, ジョセフ・スミスの『モルモン書』の版権の申請は受理され, ニューヨーク北地区から許可が下りた。<sup>22</sup> これで『モルモン書』が盗作行為から法的に保護されることになる。

翻訳の業が終盤に近づいた6月の下旬, 預言者の関心は『モルモン書』の出版に移っていく。そしてパルマイラに住む23歳の印刷工, エグバート・B・グランディンと数度にわたる交渉が行われた。タイトルページを含む数枚の原稿を見積もりのために受け取ったグランディンとその仕事仲間は, 彼らが「黄金の『聖書』」と呼ぶ『モルモン書』の印刷に二の足を踏んだ。そこでジョセフは仲間とともにロチェスターに出向き, 高名な市民で印刷業を営むサーロー・ウィードと接触した。しかし申し出は断られた。ジョセフの翻訳のいきさつを信じなかったからである。そこで同じロチェスターのエリフ・F・マーシャルのもとを訪れた。彼は印刷から製本まで引き受けると述べたものの, 彼の見積もりは法外なものであった。兄弟たちはグランディンのもとに戻り, マーティン・ハリスが必要であれば支払いのためにパルマイラの農地の一部を手放すとの保証の下に抵当権契約を結ぶことで, 何とかグランディンを説得した。グランディンが出版を承知したのには, このころまでにロチェスターのある印刷会社から別の見積もりが入っていたという理由も挙げられる。こうして1829年8月17日, 5,000部を3,000ドルで印刷するとの同意書が交わされた。<sup>23</sup> この部数は当時の特に地方の印刷業者としてはかなり多い。

ジョセフは116ページの原稿の紛失から大切な教訓を得ていた。ハーモニーに戻っ

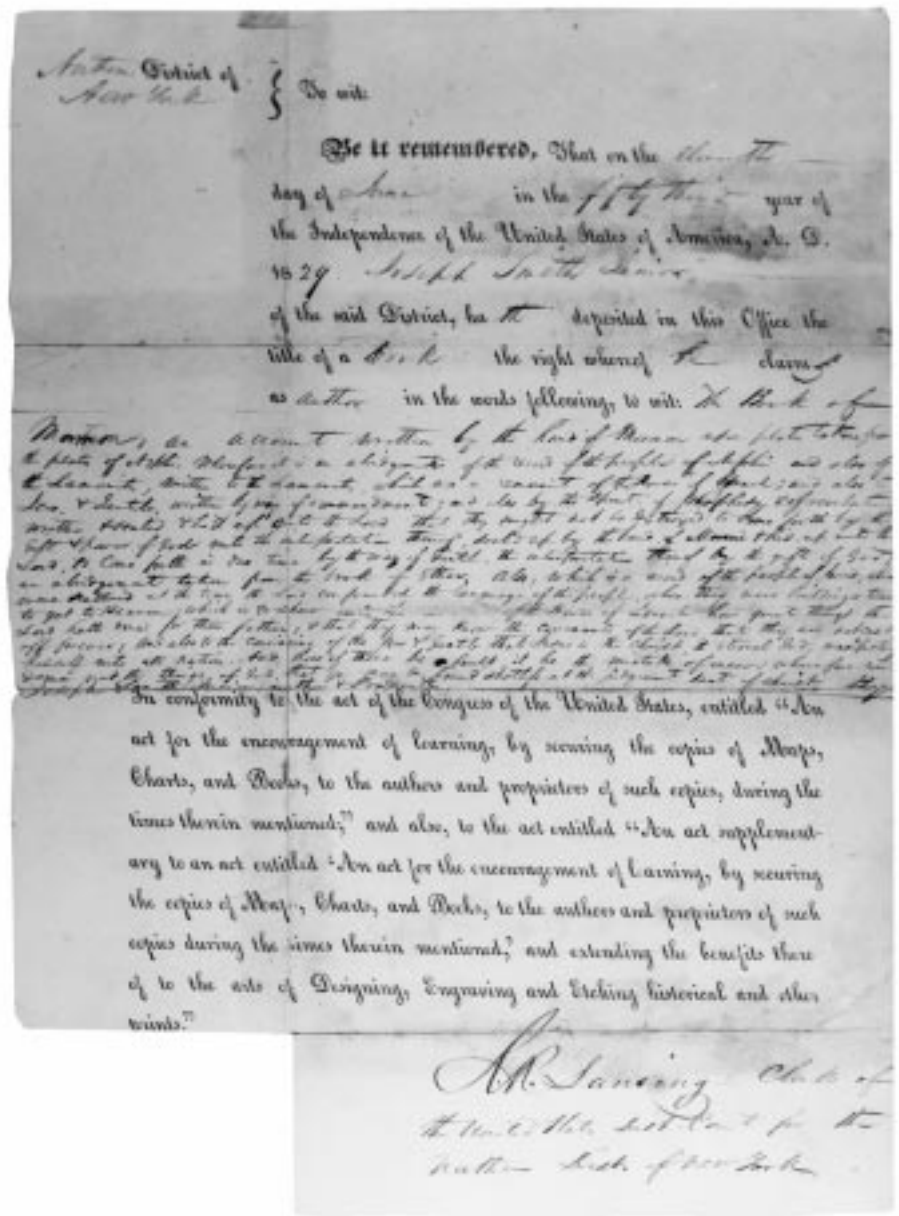
てエマに会い、家庭の用事を片付ける間、ジョセフはオリバー・カウドリとハイラム・スミスに印刷の監督を命じている。また彼は、印刷所には原稿の複本を渡し、原本は安全のためスミス家に保管するように厳かに指示した。そこでオリバーは、原稿の印刷所用の複本を作成した。<sup>24</sup> また上の理由から、原稿は印刷の進行に合わせ、幾つかに分けてグランディンの印刷所に渡された。こうしてハイラムは数か月の間、ほとんど毎日のように印刷所に通い、作業の進行を見守っている。

そのような状況を考えれば、多少の書き写しや印刷の間違いがあっても不思議ではない。しかも、オリジナルの原稿には句読点も段落も付いていなかった。ハイラム・スミスの許可を得て句読点と段落を入れたのは、グランディンの植字工ジョン・H・ギルバートであった。パーリー・P・ブラットが作成した1837年版と預言者自身が作成した1840年版では初期の誤植のほとんどを訂正し、ギルバートの作業の幾つかに改訂を加えている。

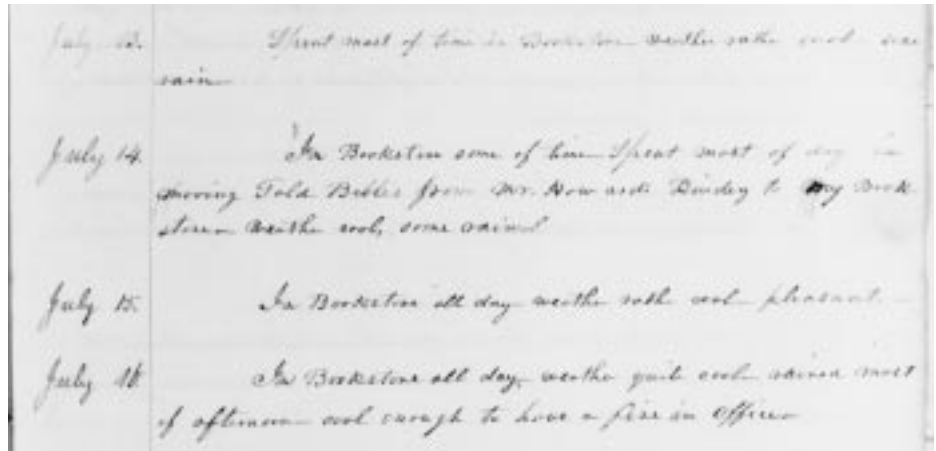
『モルモン書』の原稿原本の著作権証書。地方裁判所書記官リチャード・R・ランシングが申請書を2部作成し、1部は教会文書課が保管し、もう1部は国会図書館に収蔵されている。



エグバート・ブラット・グランディン (1806 - 1845年)。グランディンは19歳のときからパルマイラの新聞社『ウェインセンチネル』(Wayne Sentinel)で印刷技術を学ぶ。『モルモン書』の原稿が持ち込まれるころは印刷業に精通していた。これはアロンゾ・パークスによる1843年の肖像画である。



これは1831年1月から始まるE・B・グランディンの日記の一部である。1831年7月14日の欄には、「ほぼ一日中、『黄金の聖書』を（ルーサー）ハワード氏の製本所から店に運ぶのに費やす」とある。



『モルモン書』の印刷の過程でオリバー・カウドリは「E・B・グランディンの事務所で自らの手で『モルモン書』のための植字のほとんどを行い、印刷業の何たるかを学んだ。」<sup>26</sup>

新しい聖典への反対運動は、『モルモン書』が印刷される前から表面化していた。グランディンのビルを使用していた者の中にアブナー・コールがいた。パルマイラ版の新聞『リフレクター』(Reflector)をオベディア・ドッグベリーのペンネームで夕刊ならびに日曜版として発行していた人物である。彼は『モルモン書』をくだらないものと考え、自らがグランディンに出入りしほかの人の印刷用の原稿も見ることができたことから数ページを盗み、出版してしまった。12月のある日曜日、不安になったハイラムとオリバーがグランディンの事務所に行くと、コールが髪を振り乱しながら『モルモン書』の抜粋の印刷をしていた。

二人はコールに版權に違反するからやめるように命じたが、コールはそれを無視して『リフレクター』に『モルモン書』の抜粋を載せた。そこでジョセフ・スミス・シニアが直ちに預言者のもとに出向き、預言者をパルマイラに連れ帰った。ジョセフは到着するなりコールに著作権への侵害を即刻やめるように命じたが、コールは力で結着をつけることを求める。しかし預言者はあくまでも平静さを保ち、相手を説き伏せた。こうしてコールの『モルモン書』の抜粋の掲載は、1830年1月22日

グランディンの店の前に2台の馬車が止まっているところである。この3階で『モルモン書』の印刷が行われた。



これは『モルモン書』の印刷に使われたスミス印刷機である。グランディンは『モルモン書』の印刷作業を開始する6か月前にこの機械を購入したと思われる。1906年に教会が購入している。

植字と印刷と製本は手間のかかる作業であった。活字やスペースを活字ケースから一つ一つ手で拾い、8ページ分のレイアウトで組んでいく。そして活字にインクが盛られ、枠に入った大判の紙を組んだ版の上に載せる。そしてレバーを引くと重い鉄のプラテンが降りてきて印字がなされるのである。

このプロセスを5,000回繰り返す。そして刷り上がったシートはつるして乾燥させる。次に別の8ページ分を印刷し、それから前のシートの裏面を印刷する。出来上がった16ページ分は折り畳んで背中をとり、製本のときに本のサイズに端を切りそろえる。この1枚の16ページ分のシートを「折り」と呼ぶ。『モルモン書』の場合、全部で35の折りが必要であった。<sup>25</sup>

この折りは3度二つ折りにされ、積んで置かれた。印刷が終わると折りを点検し、とじ、プレスをかけ、のりづけし、端を切りそろえ、次いで製本となる。製本では表紙に白い紙を付けそれが本文にはりつけられた。最後に、表紙の表に薄手の革をはり、外側は金文字を印字している。

1829年8月、スティーブン・S・ハーディングが親戚や友人と会うためにバルマイラに来ていた。滞在中グランディン印刷所の職長であるいとこのボメロイ・タッカーが『モルモン書』のタイトルページと最初の折りを渡している。インディアナの政界で名をさせたハーディングは、後に西部への道を行き来するモルモンの宣教師をしばしばもてなし、彼らにそのタイトルページと折りを見せている。

1847年8月8日、ハーディングはそのタイトルページと折りをロバート・キャンベルに渡し、キャンベルがユタに持ち込んだ。ハーディングは1861年、ユタ準州知事としての指名をリンカーンから受けている。ハーディングの赴任後すぐにキャンベルはハーディングと会い、彼がグランディンの職長からもらった書類がどれほど大切なものであるか確かめてくれるように求めた。ハーディングはその求めに応じ、右上の角にこう書き残している。「これは型から出てきた最初の刷り出しで、『モルモン書』が印刷されている。これはニューヨーク州バルマイラの印刷工がわたしに譲ってくれたものである。」そしてS・S・ハーディングのサインが入っている。

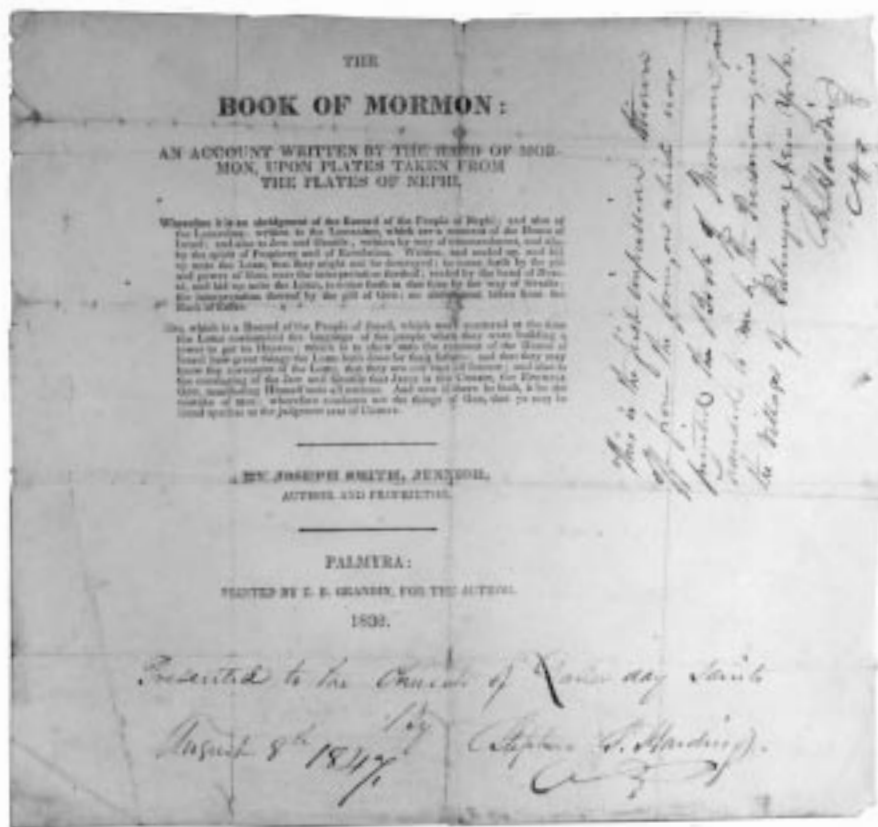


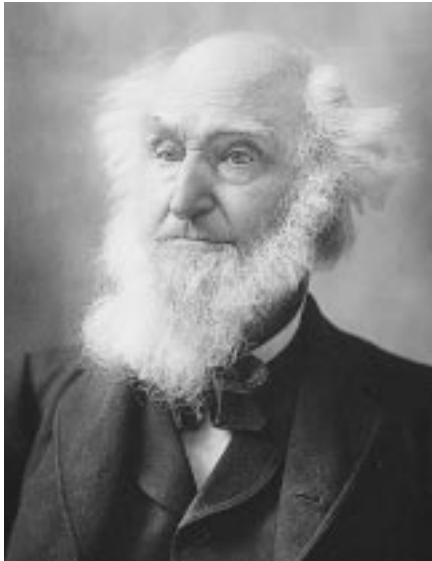
号で終わりを告げた。<sup>27</sup>

このコールの侮蔑的な態度は、当時のバルマイラ一般市民の感情を代弁したのと言ってよい。大勢の人々が集会を開き、『モルモン書』が出版されても買わないようにとの決議を得ている。これに穏やかでなくなったのはグランディンだが、預言者ジョセフはバルマイラに戻り、印刷費用は必ず支払うと言ってグランディンを慰めている。<sup>28</sup> 『モルモン書』が売れなければ農場を手放さなければならなくなるマーティン・ハリスは、預言者のもとに行き導きを求めた。それに対してマーティンは啓示により、自分の財産を「むさぼることなく」、『モルモン書』の印刷費用として「惜しみなくそれを分け与えなさい」と命じられる（教義と聖約19:26参照）。こうして、マーティン・ハリスの151エーカー（約60ヘクタール）の農場は、グランディンへの支払いのために1831年4月、競売にかけられ、売られた。この犠牲により『モルモン書』の印刷は可能になったのである。<sup>29</sup> 『ウェインセンチネル』（Wayne Sentinel）は『モルモン書』の初版が1830年3月26日に発売されると報じている。

『モルモン書』は今日の時代の人々への神の思いと御心を著したものである。わたしたちの時代の人々は、この偉大な書物に対する主御自身の評価を手にするという特権に浴している。

『モルモン書』は今日の時代の人々への神の思いと御心を著したものである。わたしたちの時代の人々は、この偉大な書物に対する主御自身の評価を手にするという特権に浴している。





ジョン・ハルバード・ギルバート・ジュニア（1802 - 1895年）、『モルモン書』の植字工。オリジナルの原稿には句読点がほとんど入っていないため、ギルバートが印刷の過程で主要な部分の句読点のほとんどを入れた。ハイラムとオリバーの信頼を得たギルバートは幾晩か原稿を自宅に持ち帰ることを許され、鉛筆で句読点を入れた。

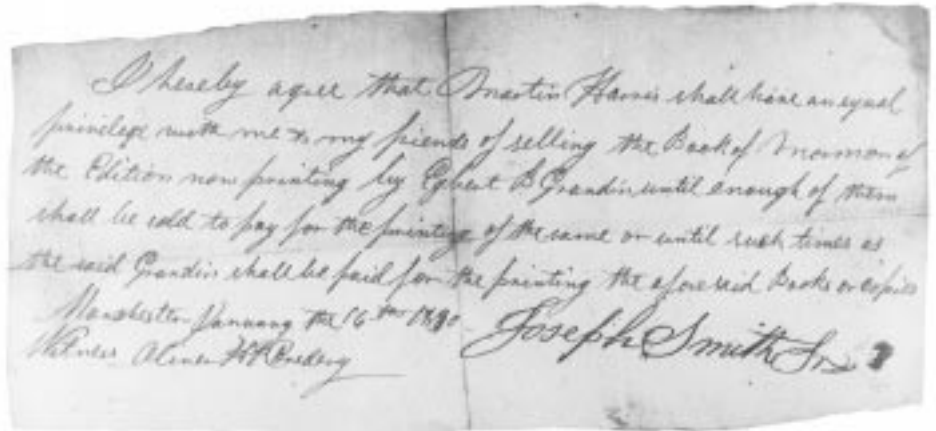
この写真は1892年、彼が90歳のときのものである。

1830年1月16日付けのこの同意書でジョセフ・スミス・シニアは、『モルモン書』の販売による最初の利益は印刷所への支払いのためにマーティン・ハリスに渡し、支払いの重荷を軽減すべきであると書いている。しかしマーティンは1831年、返済のために151エーカー（約60ヘクタール）の土地を売らなければならなかった。

『モルモン書』には「ある墮落した民の記録と、異邦人ならびにユダヤ人にあてたイエス・キリストの完全な福音が載っている。

これは靈感によって与えられ、天使たちの働きによってほかの人々に確認され、その人々によって世の人々に知らされるのである。

これらのことは、聖文〔神聖なる『聖書』〕が真実であること、また神が実に人々に靈感を与えて、昔と同じようにこの時期と時代にあっても神の聖なる業に人々を召しておられることを、世に証明している。」（教義と聖約20：9 - 11）



## 『モルモン書』の出版にかかわる出来事

1829. 6. 11 『モルモン書』の版權を獲得する。

1829. 7. 1 『モルモン書』の翻訳完成。

1829. 7 オリバー・カウドリ、印刷用原稿の作成を開始。

1829. 8. 17 ジョセフ・スミスとマーティン・ハリス、エグバート・グランディンと5,000部の『モルモン書』の出版の契約を結ぶ。

1829. 8 オリバー・カウドリ、最初の1ページを印刷所に持ち込む。植字が始まり、最初のアンカット（縁をカットしていない）の折りが印刷される。スティーブン・ハーディングが最初のタイトルページを受け取る。

1829. 8. 25 マーティン・ハリス、印刷費用3,000ドルのために農場を抵当に入れる。

1829. 10 ジョセフ・スミス、ペンシルベニア州ハーモニーに戻る。

1829. 11. 6 オリバー、ジョセフに自分の病気のため、ならびにグランディンのもとに追加の活

字がまだ届かないため印刷が遅れていると説明。オリバーの印刷用原稿、アルマ書第36章まで進む。

1830. 1. 16 ジョセフ・スミス・シニアとマーティン・ハリス、グランディンへの支払いが完了するまでは『モルモン書』の販売権を共有することに同意。

1829. 12 - 1830. 1 アブナー・コール、『モルモン書』の抜粋を彼の新聞『リフレクター』に不法に掲載。

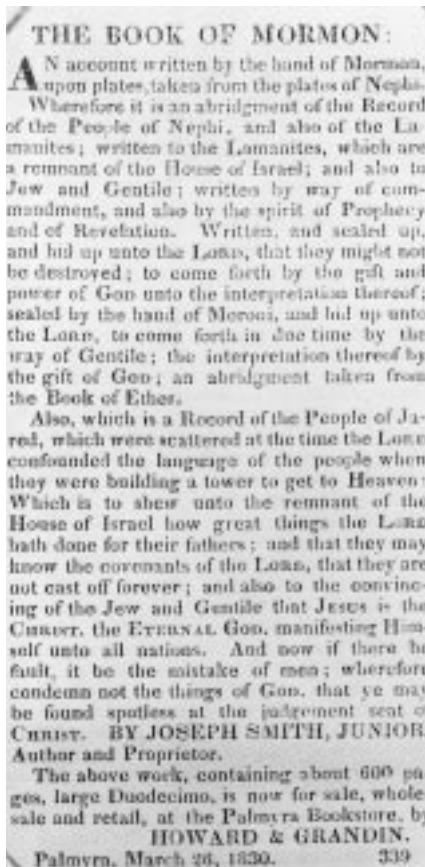
1830. 1 グランディン、不買の脅しに『モルモン書』の印刷を中止する。ジョセフ、ハーモニーからバルマイラに戻ってコールと折衝し、グランディンに印刷を完了することを納得させる。

1830. 3. 19 『ウェインセンチネル』、『モルモン書』が1週間以内に手に入ると発表。

1830. 3. 26 『ウェインセンチネル』、『モルモン書』が販売中であるとの広告を出す。



注



1830年3月19日、バルマイラの『ウェインセンチネル』紙は広告を出し、こう告げた。「我々は『モルモン書』が1週間以内に発売されることを発表するように求められた。」1830年3月26日、『モルモン書』の発売開始日の入ったもう一つの広告が同紙に掲載された。

1. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 137
2. ジョセフ・スミス, 1832年歴史, 5, *The Personal Writings of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』ディーン・C・ジェシー編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984), 8で引用
3. スミス『ジョセフ・スミスの生涯』138
4. スミス『ジョセフ・スミスの生涯』139で引用
5. *Latter Day Saints Messenger and Advocate* 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1834年10月号, 14。モーサヤ18: 13 - 15; 3ニーファイ19: 10 - 13
6. 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1834年10月号, 15で引用。モーサヤ18: 13 - 15; 3ニーファイ19: 10 - 13も参照。
7. *History of the Church* 『教会歴史』1: 44
8. 『教会歴史』1: 48 - 49; *Millennial Star* 『ミレニアルスター』1878年12月9日付, 772; 『ミレニアルスター』1881年7月4日付, 422 - 423参照
9. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』148で引用
10. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』148 - 149参照
11. "Report of Elders Orson Pratt and Joseph F. Smith" 『オーソン・プラット, ジョセフ・F・スミス両長老の報告』『ミレニアルスター』1878年12月9日付, 772
12. 「オーソン・プラット, ジョセフ・F・スミス両長老の報告」772
13. 「オーソン・プラット, ジョセフ・F・スミス両長老の報告」772 - 773
14. *Far West Record: Minutes of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1830 - 1844* 『ファーウェスト記録 末日聖徒イエス・キリスト教会議事録, 1830 - 1844年』ドナルド・Q・キャンノン, リンドン・W・クック編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983), 23
15. 『教会歴史』1: 315
16. スタン・ラーソン "A Most Sacred Possession: The Original Manuscript of the Book of Mormon" *Ensign* 『神聖な書物』『モルモン書』初版原稿』『エンサイン』1977年9月号, 90参照
17. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』151 - 152
18. 『教会歴史』1: 54 - 55
19. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』152で引用
20. 『教会歴史』1: 56 - 57
21. 『モルモン書』の「8人の証人の証」参照
22. 『教会歴史』1: 58参照
23. 『教会歴史』1: 71参照
24. "Historic Discoveries at the Grandin Building" 『グランディン・ビルディングでの歴史的発見』『エンサイン』1980年7月号, 49 - 50参照
25. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』157参照
26. *Wayne County Journal* 『ウェイン郡誌』ニューヨーク州, ライオンズ, 1875年5月6日付; ドナルド・E・エンダース, ジョセフ・スミス・シニア, ニューヨーク州マンチェスター郡バルマイラの家族 (リサーチファイル, 教会歴史美術館所蔵, ユタ州ソルトレーク・シティ, 1989年) より情報入手
27. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』164 - 166; リチャード・L・ブッシュマン, *Joseph Smith and the Beginnings of Mormonism* 『ジョセフ・スミスとモルモンイズムの起こり』(Chicago: University of Illinois Press, 1984), 108 - 109; ラッセル・R・リッチ "The Dogberry Papers and the Book of Mormon" *Brigham Young University Studies* 『ドッグベリーの新聞と『モルモン書』』『プリガム・ヤング大会紀要』1970年春季号, 315 - 320参照
28. ルーシー・マック・スミス『ジョセフ・スミスの生涯』166 - 167参照
29. ウェイン・C・ガネル "Martin Harris-Witness and Benefactor to the Book of Mormon" 『マーティン・ハリス』『モルモン書』の証人, 後援者』修士論文, プリガム・ヤング大学, 1955年, 37 - 40

# イエス・キリストの教会の設立

年表	重要な出来事
フェイエット	
1830.4.6	教会が組織される
1830.4.11	教会最初の説教が行われる
1830.6.9	最初の大会が開かれる
1830.9.26	2回目の大会が開かれる
コールズビル	
1830.4.下旬	最初の奇跡が見られる
1830.6.26	28 パプテスマと迫害
1830.6.28	ジョセフ・スミス逮捕される
ハーモニー	
1830.6	『聖書』のジョセフ・スミス訳作業始まる
1830.8	聖餐に関する啓示を受ける
1830.8下旬	ジョセフ・スミス、ハーモニーを後にする
マンチェスター地域	
1830.4.6	サミュエル・スミス宣教師として働く
1830.7	ジョセフ・スミス・シニアおよびドン・カーロス・スミス伝道に出る
1830.9.1	パーリー・P・プラット、パプテスマを受ける

**18**30年4月6日は末日聖徒にとって重要な日である。この日に、末日聖徒イエス・キリスト教会は組織された。ゴードン・B・ヒンクレー長老が指摘するように、教会の設立は預言者ジョセフ・スミスにとって10年の準備の歳月を経て迎えるクライマックスであった。

「結果的に、この教会設立の日は、ジョセフ・スミスにとって10年に及ぶ驚くべき訓練の修了を記念する日でした。その訓練は1820年、森の中での比類なき示現で始まりまして。御父と御子が14歳の少年に御姿を現されたのです。そしてその訓練はモロナイの手に受け継がれ、幾度となく警告と指示が授けられました。それから古代の記録の翻訳がありました。またその経験を通して靈感と知識と啓示が与えられました。次いで神の権能の授与が行われました。古代の神権がその正統の保持者により再び人に授けられたのです。アロン神権はパプテスマのヨハネによって、メルキゼデク神権はペテロ、ヤコブ、ヨハネによって授けられました。たくさんの啓示が与えられ、その中で再び主の声が聞かれました。こうして、人と創造主との間にコミュニケーションの経路が再開されたのです。これらすべてが、歴史に残る4月6日への準備でした。」<sup>1</sup>

## 記念すべき日

1829年にジョセフ・スミスとオリバー・カウドリが天の使者たちから神権を受けて間もなくのこと、二人は啓示の中で「〔神の〕御心と命により再びこの地上に教会を設立する正確な日」<sup>2</sup>を示された。この設立の集会は、場所はピーター・ホイットマー・シニアが自宅を提供することになり、啓示により4月6日火曜日に設定された。集会の開始時には60人近くの人々が集まり、イエス・キリストの教会の正式な設立を見守った。その中の約20人は約100マイル（約160キロ）離れたコールズビルからの人々で、この神聖な出来事に参加しようとはるばるやって来たのであった。<sup>3</sup>

集会は簡素なものであった。当時24歳のジョセフ・スミスが開会を宣言し、宗教団体として法人登録をするためにニューヨーク州法上必要なほかの5人を指名した。オリバー・カウドリ、ハイラム・スミス、ピーター・ホイットマー・ジュニア、サミュエル・H・スミス、デビッド・ホイットマーである。<sup>4</sup> ひざまずいて厳粛な祈りをささげた後、ジョセフは出席した人々に、自分自身とオリバーを教師ならびに霊的なアドバイザーとして支持してくれるかどうか尋ねた。全員が賛成の挙手をした。ジョセフとオリバーはすでにメルキゼデク神権を受けていたが、互いに長老の職に聖任し合った。二人がこれを行ったのは、二人が新たに設立された教会の長老であることを示すためである。次いで主の晩餐の聖餐の儀式が執行された。ここで用いられた祈りは、啓示を通して授けられていたものである（教義と聖約20：75 - 79参

ニューヨーク州フェイエット町にある再建されたピーター・ホイットマーの丸太小屋。ここで多くの重要なことが起こった。3人の証人の証が記され、『モルモン書』の翻訳が完了し、教会が組織され、ここで受けた20の啓示が『教義と聖約』に記されている。



照)。それからジョセフとオリバーは、すでにバプテスマを受けてイエス・キリスト教会の会員となっていた人々に対して確認の儀式を行い、聖霊の賜物を授けた。

この歴史的な日に受けた啓示で、ジョセフは「聖見者、翻訳者、預言者、イエス・キリストの使徒」として指名されている（教義と聖約21：1）。また主は生まれただけの教会の会員に対して、ジョセフの言葉を「忍耐と信仰を尽くして、あたかもわたし自身の口から出ているかのように」受け入れるよう指示された（教義と聖約21：5）。

教会の設立は出席した者たちにとっては忘れられない経験となった。ジョセフはこう記録している。「そして神の恵みにより聖霊の賜物の力と祝福が授けられていることを喜びをもって実感し、その思いに浸ったわたしたちは、神がお認めになった『イエス・キリストの教会』の会員であることに胸を躍らせながら散会したのであった。まことに『イエス・キリストの教会』は、末日においてわたしたちに下された戒めと啓示により、また『新約聖書』に記録されている主の教会の秩序に従って組織されたのである。」<sup>5</sup>またジョセフはこの機会に聖徒たちに教えを施し、自らの証を述べた。この歴史的な日、何人かがバプテスマを受けたが、その中にはオリン・ポーター・ロックウェル、マーティン・ハリス、ジョセフ・スミスの両親がいる。この日は預言者ジョセフの生涯の中でも喜びと幸福の日であった。ジョセフは喜びの声を上げている。「神はほむべきかな。わたしは自分の父親がバプテスマを受けて真実のイエス・キリストの教会に加わるのを目にしたのだ！」<sup>6</sup>

4月11日日曜日、フェイエットのホイットマー宅でオリバー・カウドリが教会初の公式の説教を行った。その会には大勢の人々が集まり、新たに6人がバプテスマを受けた。それから1週間後にはまた7人のバプテスマがあった。このときジョセフは、ほかの教会ですでにバプテスマを受けた人が再度バプテスマを受ける必要があるかとの問いに対して啓示を受けている。答えはこうであった。「それゆえ、たとえ人が

百度バプテスマを受けたとしても、それはその人にとって何の役にも立たない。あなたがたはモーセの律法によっても、あなたがたの死んだ行いによっても、狭い門から入ることはできないからである。」(教義と聖約22:2) 主は有効なバプテスマを行うには権能が必要であることを断言されたのである。このようにして教会は、今日と同様にキリストと福音を心から信じる人々に救いにかかわる儀式を受けるに必要な組織を設け、信仰を共にする人々との交わりを深め、福音の原則を完全に教える場所となり、人々の救いにかかわっていた。

### 預言者のコールズビルでの務め

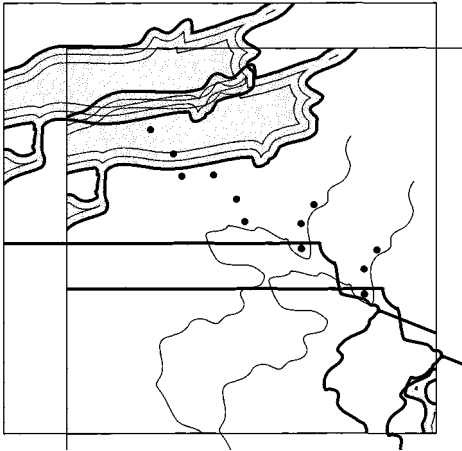
4月末、預言者はコールズビルのジョセフ・ナイト・シニアのもとを訪れた。ナイト家の人々は喜んでジョセフから宗教の話聞き、すぐに敵の手からジョセフをかくまってくれた。コールズビル滞在中ジョセフは何度か集会を開き、大勢の友人の参加を得た。ジョセフは「大勢の人々が全能の神に熱烈に祈り始めたので、神は必ずや真理を理解する知恵を授けてくださるであろう」と述べている。

集会にいつも参加していた人の一人に、預言者の親友であるニューエル・ナイトがいた。ニューエル・ナイトは人前で声に出して祈ることを恐れていたが、預言者から説得されて次回の集会で祈ることとなった。ところがその時が来ると、ニューエルは後で人のいない所で祈ることを約束して、祈りを断ってしまった。そして翌朝、彼は森に行き祈りを試みたができなかった。公の席で祈ることを断ったことに罪悪感を覚えていたからである。彼は不安を感じ、具合が悪くなってしまった。家に戻ると、妻が彼の顔色を見て驚いてしまう。ニューエルは妻にジョセフを呼んでくれるように頼んだ。預言者ジョセフが着いたとき、ニューエルは「気が動転していて、体を変によじらせていた。顔や腕、足はあらゆる形にねじれ、ゆがみ、そして最後には部屋の床に倒れて、恐ろしい様子でのたうち回った。」

この恐ろしい様子は近所の人や親戚の人目撃している。やがてジョセフがニューエルの手をつかんだ。するとニューエルは、自分は霊に捕らえられていて、ジョセフにはその悪魔を追い払う力があると言った。そこでジョセフはニューエルの信仰と自分自身の信仰により、イエス・キリストの名によって悪霊に去るように命じた。すると直ちにニューエルは、悪霊が自分の体を離れ、消えたと宣言した。これは回復された教会における最初の奇跡と言われている。ジョセフはこう断言している。「これは人によるものでも人の力によるものでもなく、神によって、神性の力によって行われたことなのである。」<sup>7</sup>ニューエル・ナイトのゆがんだ顔は元に戻り、ねじれた体も元どおりになった。

こうして主の御霊がニューエルに臨み、永遠の示現が後に開かれた。ニューエルは体力を消耗していたためベッドに横たわっていたが、そのときの様子をこう語っている。「上の方に吸い寄せられるような気持ちになって、しばらくの間我を忘れていました。ですから、その部屋で何が起こったのか覚えていません。」このような状態で彼の体は持ち上げられ、彼は頭と体が天井のほりに押し付けられるのを感じた。

こうした出来事を目撃した多くの人は神の力の存在を感じ、後に教会に加入した。ジョセフは間もなくフェイエットに戻った。それから数週間後、ニューエル・ナイトはフェイエットを訪れ、デビッド・ホイットマーからバプテスマを受けている。<sup>8</sup>



1830年6月の時点でのニューヨーク州における教会の3つの中心地  
 (1) マンチェスタータウンシップ  
 (2) フェイエットタウンシップ  
 (3) コールズビル地区

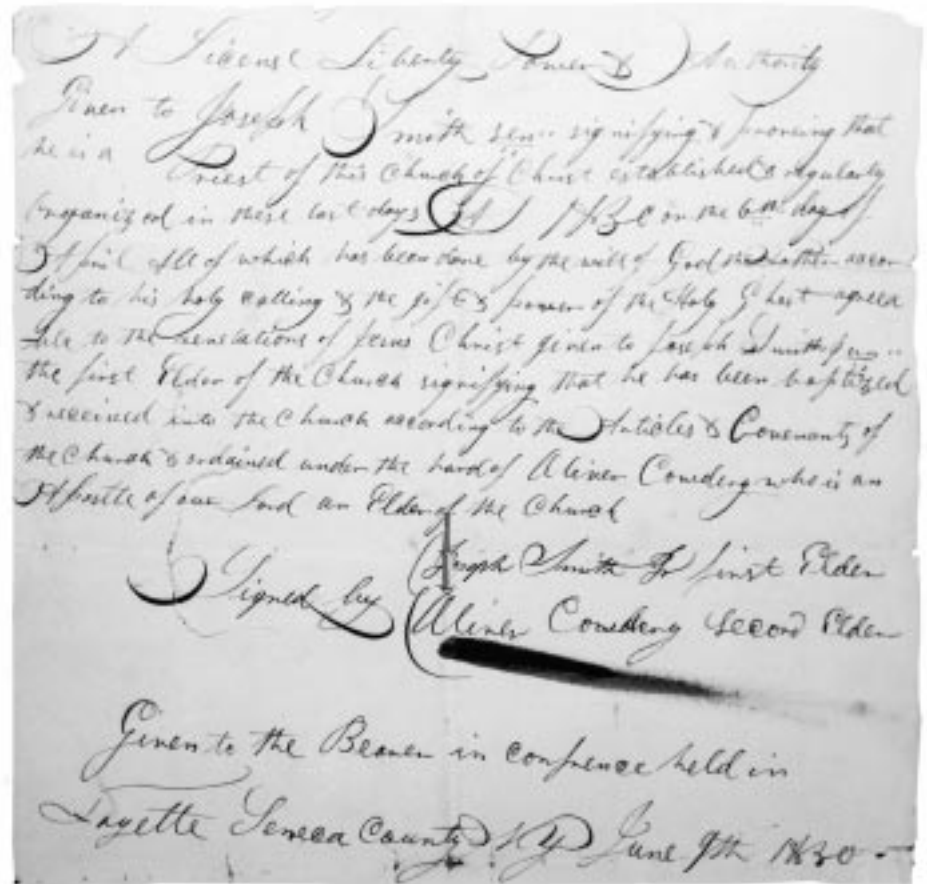
## 教会の最初の大会

1830年6月の時点で、ニューヨーク州の聖徒たちはおもにマンチェスター、フェイエット、コールズビルの3か所に集中していた。このときの教会員数は約30人である。啓示による指示（教義と聖約20：75参照）を受けた預言者ジョセフは6月9日、フェイエットにおいて教会の最初の大会を招集した。この大会には信者だけでなく、福音について知りたいと望む人々も大勢集まっている。集まった人々は聖餐にあずかり、改宗したばかりの人が数人、確認の儀式を受けた。サムユエル・H・スミスが長老に聖任され、ジョセフ・スミス・シニアとハイラムが祭司に聖任されている。10人の兄弟たちは「認可書」を受け取っている。これは教会を代表することを承認した小さな文書である（教義と聖約20：64 - 65参照）。この大会の議事録を作成したのがオリバー・カウドリで、この大会で教会の公式記録作成者として任命された。

ジョセフ・スミスは集まった人々に「キリストの教会の規定と聖約」を読み上げた（教義と聖約第20，22章のほとんど）。これは、教会の秩序についての重要な指示を含むものである。<sup>9</sup>

ジョセフ・スミスはこう書いている。「多くの勧告と指示が与えられ、聖霊が驚くような方法で注がれた。多くの人々が預言をし、天が開かれるのを目の当たりにした者もいた。」ニューエル・ナイトなどは言葉に尽くせない愛と平安を感じ、救い主の示現を見て、いつの日か救い主の前に行くのを許されることを知った。

ジョセフ・スミス・シニアの祭司の聖任証明書。ジョセフ・スミス・ジュニアとオリバー・カウドリの署名がある。



こうした光景はわたしたちの心を言葉に尽くせない喜びで満たすものであった。わたしたちの心は全能者に対する畏れと敬虔の念でいっぱいである。……わたしたちは今、聖なる古代の使徒たちが信奉していたとまったく同じ秩序を頂いている。またそうした手続きが重要で神聖なものであることを知っている。そして、神権の力と聖霊の賜物と祝福、主イエス・キリストの永遠の福音に従う人々に対する神の慈しみと御自身を低くされる様子をわたしたちの五官を通して感じることにより、それらが融合して心の中に熱烈な感謝の気持ちが生まれ、真理という大義のために新たな熱意と精力をわき上がらせてくれるのを覚えるのである。」<sup>10</sup>

この大会から程なく、12人の人々がデビット・ホイットマーによりセネカ湖でバプテスマを受けた。その中にジョセフ・スミスの妹キャサリン、それに弟のウィリアムとドン・カーロスがいた。

### コールズビルでの苦難と喜び

大会を終えてすぐ、ジョセフ・スミスはペンシルベニア州ハーモニーの自宅に戻っている。そして1830年6月の後半、預言者ジョセフは妻とオリバー・カウドリ、ジョン・ホイットマー、デビッド・ホイットマーを伴い、ニューヨーク州コールズビルのナイト家を訪れた。ジョセフ・ナイト・シニアはそれまでに『モルモン書』を読み終えてその内容が真実であることを確信し、近隣の大勢の人々とともにバプテスマを受けることを望んでいたのである。6月26日土曜日、兄弟たちは川の流れをせき止めてダムを作り、バプテスマを授ける場所を調べた。ところがその夜、自分たちの会員が引き抜かれてしまうことを恐れた地元の幾つかの教会の指導者に扇動された者たちによって、そのダムは壊されてしまう。日曜日、兄弟たちは集会を開き、オリバーが説教をしてほかの人々が『モルモン書』の真実性について、また悔い改めと罪の赦しを得るためのバプテスマ、聖霊の賜物を授けるための按手について証を述べたが、暴徒の中の幾人かがその会に出席していて、出席していた人々を集会の後で脅迫し始めた。

翌6月28日の早朝、兄弟たちはダムを修理し、バプテスマ会を開いた。13人がバプテスマを受け、その中にはエマ・スミスも含まれていた。近隣の大勢の人々は「羊を洗っているのか」<sup>11</sup>と言って彼らを嘲笑した。聖徒たちは何事もなかったかのようにジョセフ・ナイトの家に帰り、次いでニューエル・ナイトの家に行った。しかし敵は後をつけて来て口汚くののしり、新たに改宗した人々に危害を加えると脅した。その晩、バプテスマを受けた人を確認する集会が開かれる予定であったが、開始前にジョセフ・スミスが治安びん乱の容疑で逮捕され、裁判のためにシェナゴ郡サウスベインブリッジに連行された。途中暴徒たちはジョセフと警察官を拉致しようとしたが、それは警察官によって阻まれた。

ジョセフ・ナイト・シニアは高潔で名高いジェームズ・デビッドソンとジョン・リードという名の隣人に翌日の裁判所でのジョセフ・スミスの弁護を依頼した。裁判は多くの傍聴人でごった返した。預言者についての偽りの醜聞が広まり、人々の好奇心を呼んだのである。しかしながら、ジョサイア・ストーウェルと彼の二人の娘の証言により、ジョセフは無罪を勝ち得た。しかし、その裁判が終わるやいなや、ブルーム郡の警察官が同じ罪でジョセフを再逮捕した。

ジョセフはこう報告している。「わたしに第2の逮捕状を突きつけたその警官は、逮捕するやいなやわたしに罵詈雑言はりぞごんを浴びせてきた。彼はわたしに対して非常に冷酷な人物で、わたしが朝から裁判所に閉じ込められていて何も食べ物を与えられていなかったことを知りながら、15マイル（約24キロ）離れたブルーム郡へと急拠連行したのである。その間、彼は何の食物を取ることもわたしに許さなかった。彼は途中居酒屋に立ち寄り、大勢の男たちを集めたが、彼らはわたしを嘲笑し侮辱するありとあらゆる言葉を吐いた。男たちはわたしにつばを吐き、指を指して『預言しろ、預言しろ!』と言った。彼らは全人類の救い主を十字架にかけた者たちと同じことをしていたのであるが、自分が何をしているのか分からなかったのである。」

翌日の裁判では多くの証人が預言者に対する偽りの証言をした。その多くがつじつまの合わないものであった。ニューエル・ナイトが証言台に立ったとき、モルモニズムをなきものにしようとならっていたシーモアという名の検察官が、ニューエルの体から悪霊が追い出された事件についての尋問を始めた。

『悪霊を追い出すのにジョー・スミスは加わらなかったのでしょうか。』

『いえ、加わりました。』

『それでいて悪霊を追い出したのはジョセフではないと言うのですか。』

『そのとおりです。追い出したのは神の力です。ジョセフは神の御手の器だったのです。ジョセフはイエス・キリストの御名によって悪霊に、わたしから出て行くように命じたのです。』

『それが悪霊であることは確かですか。』

『はい。』

『あなたの体から追い出される悪霊を見たのですか。』

『はい。見ました。』

『どんな姿だったか教えてください。』

……証人は言った。

『あなたの最後の質問にはお答えする必要はないと思います。ただ、もしわたしがあなたに質問をすることを許していただき、それにお答えいただいたらわたしも答えましょう。シーモアさん、あなたは霊に関する事柄について理解していらっしゃいますか。』

『いや』シーモアは答えた。『そのような大それたことは理解しているとは主張しません。』

『そうであれば』ナイトは答えた。『悪霊がどのような姿であるかをあなたに答えるのは無用です。それは霊的な姿であって、霊によって識別されるものだからです。ですから当然のことながら、わたしがそのことについてお話ししてもご理解いただけないと思います。』

検察官はうなだれた。と同時に、傍聴席からは大きな笑い声が起った。それは彼の敗北を宣言するものであった。

……彼ら〔ジェームズ・デビッドソンとジョン・リード〕は正式な弁護士ではなかったものの、敵を沈黙させ、法廷にわたしの無実を確信させてくれた。彼らは神から靈感を受けた者たちのように話した。<sup>12</sup>預言者は再び無罪となった。しかし暴徒たちはなおもジョセフを脅迫し続け、それは彼が妻の姉妹の家に、そして後にハー

モニーの自宅に落ち着くまで続いた。

数日後、ジョセフ・スミスはオリバー・カウドリとともにコールズビルに戻る。バプテスマを受けた人々に確認の儀式を施すためである。しかし彼らが到着するやいなや暴徒が集結し始めた。二人は休息を取らずにすぐにその場を去ることが最良の策と判断し、夜通し二人を追跡していた暴徒からすんでのことで逃れることができた。ジョセフはこう語っている。「このように、わたしたちは信仰のゆえに迫害を受けた。憲法によってすべての人に、自分の良心の命じるとおりに神を礼拝する否定されることのない権利が保証されている国においてである。また信仰を公言し、宗教の自由の権利を擁護することにやぶさかでない人々が、わたしたちに対しては理不尽にもそれを否定するのである。」<sup>13</sup>

このような中でコールズビルの聖徒たちは、ジョセフとオリバーが再び自分たちのもとを訪れることを願っていた。8月初旬の預言者のコールズビルへの訪れは奇跡的なものであった。ジョセフとハイラム、そしてジョン・ホイットマーとデビッド・ホイットマーは、住民の中に敵対感情が続いていることを考え、旅立ちを前にして熱烈に主に祈った。ニューエル・ナイトはこう語っている。「彼らの祈りは無駄ではなかった。わたしの家からすぐの所で大勢の男たちが道路工事をしている、その中にわたしたちのことを最も憎んでいる敵が何人かいたが、兄弟たちをじっと見詰めていたものの兄弟たちと気づかなかった。それで何の抵抗もなくその場を通り過ぎることができた。」<sup>14</sup>それに続く確認の儀式と一緒にいった聖餐の儀式は、苦難の中の喜びの間奏曲であった。

この苦難の中で主は預言者を支え、末日聖徒の神学と慣行の基本的な真理を示された。これらの真理の中に「モーセの示現」がある。『高価な真珠』のモーセ書の第1章を成すこの示現は、神の業の本質と範囲を明確に説明し（モーセ1：33, 39参照）、サタンが義の敵の根源であることを明らかにしている。ジョセフはその年の夏、『旧約聖書』の創世記の研究を続けた。この研究がモーセ書ならびに『聖書』の「靈感訳」の多くの土台となった。この『聖書』の靈感訳は現在、「ジョセフ・スミス訳」として知られている。<sup>15</sup>

7月に受けた啓示はほかにもあるが、それらはジョセフに苦難の中で忍耐強くあること、祈りを続けることを教えるものだった。また、次の指示を受けている。「慰め主によってあなたに与えられるものを記し、また教会員にすべての聖文を説き明かさなければならない。……

あなたはシオンにおいてすべての務めに献身しなければならない。そうすれば、これに関してあなたは力を持つであろう。……

世俗の働きについては、あなたは力を持たないであろう。」（教義と聖約24：5, 7, 9）ジョセフの召しは預言者としての召しであり、自らの物質的な必要については直接的に影響を与えるものではなかった。これはジョセフ自身にとっても家族にとっても簡単な犠牲ではなかった。また彼は次の勧告も受けている。「あなたがたは次回の大会を開くために西部へ行くまで、聖文を研究すること〔『聖書』の靈感訳のこと〕と、教えを説くことと、コールズビルの教会を強めることと、必要に応じてその地で仕事に携わることに時間を費やしなさい。その後、あなたがたの行くべきことが知られるであろう。」（教義と聖約26：1）この「次回の大会」は、9月にフェイエ



ットで開かれることになっていた。

7月、ジョセフは妻のエマのために一つの啓示を受ける（教義と聖約25章参照）。エマは「選ばれた婦人」（3節）と呼ばれ、苦難の中にあって慰めを受けた。彼女はまた、教会の最初の賛美歌集の編さんも命じられている。彼女が編さんした後にほかの人々書き加えてきた賛美歌集は、末日聖徒にとってかけがえのない信仰の発露であった。この神権時代における音楽の重要性について、主はこう語っておられる。「わたしは心の歌を喜ぶからである。まことに、義人の歌はわたしへの祈りである。それに対する答えとして、彼らの頭に祝福が注がれるであろう。」（12節）

8月にハーモニーに戻った預言者は、聖餐の象徴について一つの重要な啓示を受ける。このとき、ニューエル・ナイトと妻のサリーがジョセフとエマに会いにハーモニーを訪れていたが、サリーもエマも教会員としての確認の儀式を受けていなかった。そこでこの2組の夫婦とジョン・ホイットマーとで確認の儀式を行い、聖餐にあずかることになった。そこでジョセフがぶどう酒を買いに出かけたが、少しも行かないうちに天からの使者と会い、神の栄光にひたすら目を向けさえすれば、聖餐において何を食べ何を飲もうと重要ではないと言われた。またジョセフは、ぶどう酒を敵から買うことのないように警告された（教義と聖約27：2-4参照）。この命令に従い、彼らは自分たちで造ったぶどう酒を用いて集会を開いた。そしてその晩彼らは「心楽しい」時を過ごし、御霊が彼らにあふれるほどに降り注いだ。<sup>16</sup>

## 初期の宣教師の働きと改宗

こうした出来事がコールズビルとハーモニーで起こっていた1830年の夏、伝道活動もニューヨーク州の別の地域で展開していた。人々は教会が設立される前から、家族や友人、隣人に福音を宣べ伝えている。そして望みを高く抱く数人の宣教師が、啓示を通して次の言葉を授かっている。「見よ、畑はすでに白くなり刈り入れを待っている。それゆえ、だれでも刈り入れをしたいと望む者は、永遠の救いが神の王国で自分のために蓄えられるように、勢力を尽くして鎌を入れ、日のあるうちに刈り取りなさい。」（教義と聖約6：3、4：4；11：3；12：3；14：3も参照）

『モルモン書』の印刷が始まると、ジョセフ・スミスとモルモニズムへの公の関心が高まった。パルマイラで黄金の書が印刷されるとのうわさが広がったのである。このうわさを聞いた人の中にボストン在住のトーマス・B・マーシュがいた。後に初代十二使徒会会長となった人である。彼は好奇心からグランディンの印刷所を訪れ、マーティン・ハリスと会った。マーティンは彼に『モルモン書』の最初の16ページ分の校正刷を渡し、彼を伴ってマンチェスターのスミス家に行く。そこではオリバー・カウドリが2日間を費やして、ジョセフについて、また回復の業について話した。マサチューセッツに戻ったトーマスは家族に、主の新しい回復された業について教えている。そして教会が設立されたことを知ると、トーマスは家族を連れてパルマイラに移り、1830年9月にバプテスマを受けて伝道に召された（教義と聖約31章参照）。

預言者ジョセフの弟であるサミュエル・H・スミスは、1830年6月9日の教会の第1回の大会で長老に聖任され、その後すぐに単独で、また両親とともに隣接した郡に『モルモン書』販売の夏旅行に出ている。彼は力を落とすことが多かった。彼のこの努力は拒まれることが多かったからである。しかしながら彼は1冊をジョン・P・グ



ブリガム・ヤングと兄のフィニアス。ジョン・P・グリーンとフィニアス・ヤングは、サムエル・スミスの伝道活動により教会に加入した。またサムエルはフィニアス・ヤングに渡した『モルモン書』を通して、ブリガム・ヤングやヒーバー・C・キンボールの改宗にも間接的に貢献している。

リーン師に渡すことができた。グリーン師は、自分は関心がないので読まないが、教区の人に興味があって買いたいと思う人がいないかどうか尋ねてみようと言ってくれた。それから3週間後にグリーン師に会いに行くと、彼は巡回伝道の旅からまだ戻っていなかった。妻のローダが言うには、本は売れなかったが、彼女が自分で読んで気に入ったとのことだった。サムエルは『モルモン書』を彼女のもとに残した。後に、グリーン師はそれを読み改宗したのであった。

このローダ・ヤング・グリーン兄弟がフィニアス・ヤングで、フィニアスは同じ1830年の4月、ニューヨーク州での伝道から戻ったサムエルに会い、『モルモン書』を買求めていた。フィニアスはその『モルモン書』をブリガム・ヤングに渡し、それがヒーバー・C・キンボールの義理の母であるファニー・ヤング・マリーに渡った。そして熱心な研究の後、これらの兄弟たちとその家族はバプテスマを受けて教会員となった。ブリガム・ヤングは研究と比較検討に2年を費やし、1832年4月にバプテスマを受けている。このように、サムエル・H・スミスの初期の伝道活動は、教会初期の最も影響力の大きい改宗に貢献することとなった。彼は献身的な宣教師で、ニューヨーク、ニューイングランド、オハイオ、ミズーリの各州で伝道し、数十人の人々を改宗して、教会の支部を幾つか開設した。

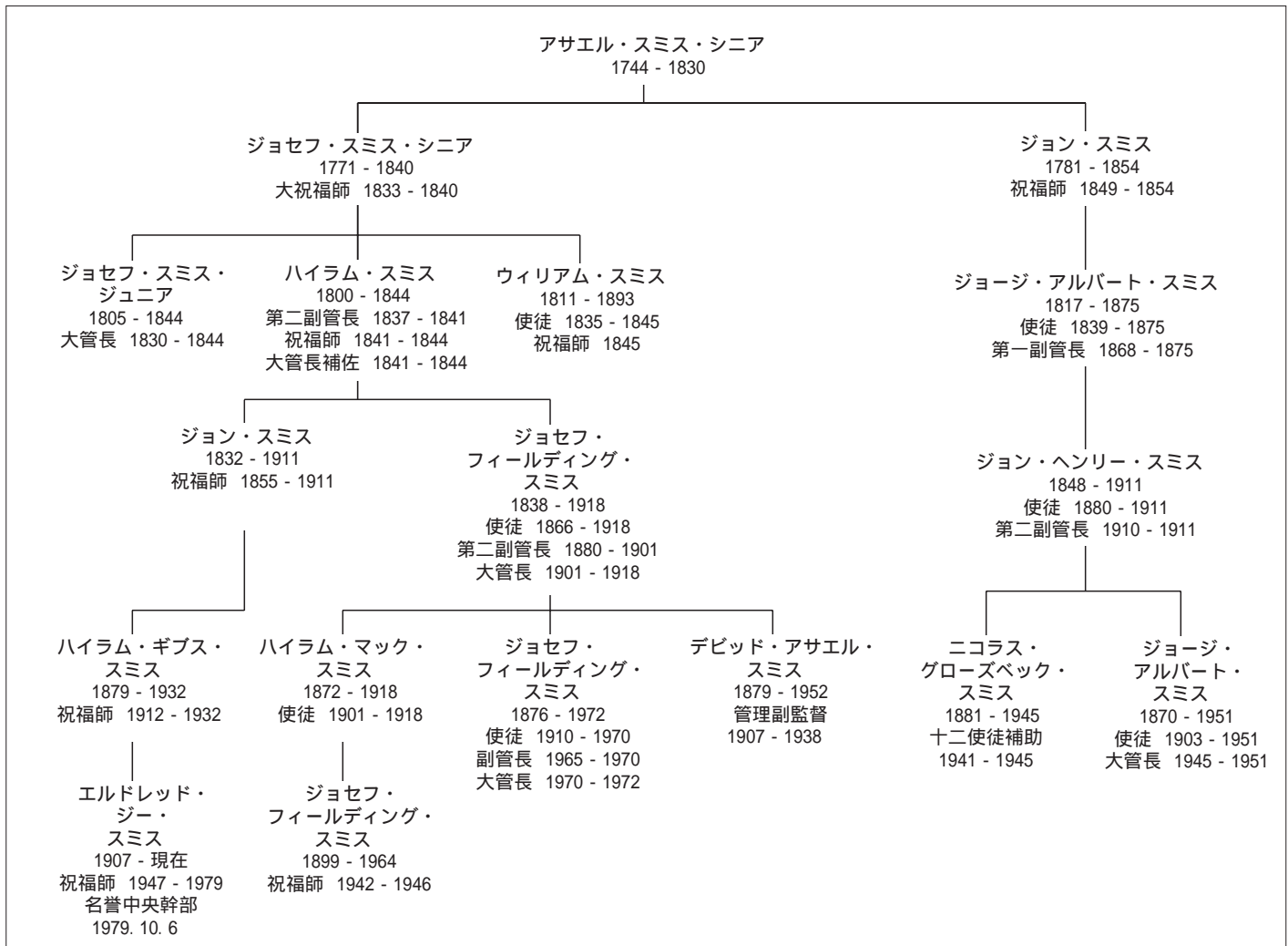
ジョセフ・スミス・シニアも初めての夏、「実り豊かな畑」で鎌を入れている。彼は14歳の息子ドン・カーロスとともにセントローレンス郡の父方の家族に福音を宣べ伝え、そのメッセージは喜びをもって受け入れられた。父アサエルの息子でありジョセフ・シニアの弟であるジョンも福音を受け入れ、またジョンの息子であるジョージ・A・スミスも改宗した。ジョージ・A・スミスは後に十二使徒に召されている。こうして、3世代が回復されて信仰により一つに結ばれたのである。

その年の夏のニューヨーク州からの改宗者の一人に、23歳のパーリー・P・プラットがいた。オハイオ州東北部の荒野に定住したパーリーは、そこでシドニー・リグドンを指導者とする回復派（ディサイプル派またはキャンベル派）に加わった。そして1830年の夏に親戚の家を訪れるために運河でニューヨーク州を通ったとき、御霊が妻のサンクフルを一足先に行かせ、それからパーリー自身はニューアーク村のバルマイラの近くで自分の福音に対する考え方を説くようにと促した。それに従ったパーリーはバプテスト派の執事から『モルモン書』のことを聞き、読むように勧められる。彼はタイトルページと証人の証を食い入るように読み、そして本文に入っていた。そのときの様子を彼はこう語っている。

「わたしは一日中読み続けた。食事は重荷だった。物を食べたいとは思わなかった。夜が来ても眠ることは重荷だった。眠るよりも読み続けたいと思ったからである。

読んでいると主の御霊がわたしに宿り、わたしはその本が真実であることを知り、理解できた。それは人が自分の存在を理解し知っていると同じように明白に、疑いなく分かったのである。わたしの心には喜びが満ちあふれ、それはまるでわたしの人生のあらゆる悲しみや犠牲、苦難を差し引いても余りあるような喜びだった。わたしはすぐにその書物の発見と翻訳において神の器となった青年に会おうと決意した。

こうしてわたしはバルマイラの村を訪れ、ジョセフ・スミス氏の家を探した。家は村から2、3マイル離れた所にあった。夕暮れ近くその家に近づくと、牛を追っている一人の男がいる。……ハイラム・スミスだった。わたしは『モルモン書』に関心



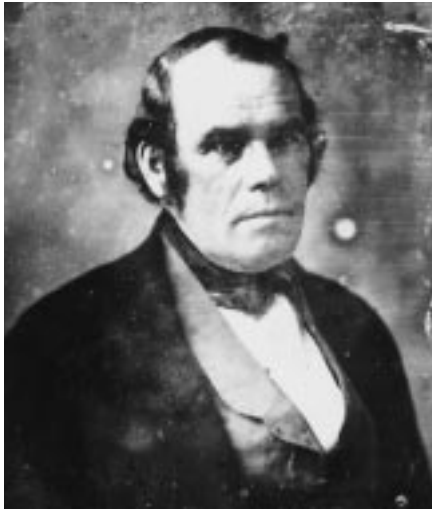
アサエル・スミスの子孫と教会での責任

を抱いたこと、そしてもっと学びたいことを告げた。彼はわたしを家に招き入れ...  
...わたしたちはほとんど徹夜で話し続けた。その中でわたしは、これまでの真理の探究の体験や自分の得てきたことを打ち明けた。また、自分が足りないと感じていることも話した。すなわち神権の委託や神の儀式を執り行うための使徒職についてである。」<sup>17</sup>

ハイラムは続けてパーリーに教えを施し、やがて二人はフェイエットに行ってホイットマー家の人々や発展を続けていたフェイエット支部の会員たちと会うことになる。こうしてパーリーはバプテスマを受け、1830年9月にオリバー・カウドリによって長老に聖任された。権能を受けたパーリーはニューヨーク州コロンビア郡の生家を訪れ、毎日大勢の人々を前に説教をしたが、メッセージを受け入れてくれたのは弟のオーソンだけであった。オーソンは19歳の誕生日にバプテスマを受け、2週間もたたないうちにフェイエットの預言者ジョセフ・スミスに会いにやって来た。

### 預言者のフェイエットへの移転

そのころハーモニーでは、ジョセフ・スミスがジョン・ホイットマーの援助を得てジョセフが受けた啓示の整理と書写を行っていた。ところが、この作業を行ってい



パーリー・P・プラット(1807 - 1857年)『モルモン書』を通して改宗。教会を代表する神学者、初代十二使徒定員会の一員となる。1857年、アーカンソー州で暗殺された。



オーソン・プラット(1811 - 1881年)宣教師、学者、教会歴史記録者、使徒。

たジョセフのもとに届いたオリバー・カウドリからの手紙が、預言者を深く悲しませることとなった。オリバーは教会の第二長老の地位にあることから自分に権限があると思い、次の啓示の言葉に誤りを発見したとジョセフに書き送ったのである。「自分の罪の赦しを得るようにキリストの御霊を受けたことをその行いによってまことに明らかにする人は」の部分である(教義と聖約20:37)。これに関してジョセフはこう記している。

「彼はその引用句が誤りであると言い、こう付け加えていた。『わたしは神の御名によりこれらの言葉を削除するようにあなたに命じます。わたしたちには偽善売教は存在しないのです。』

わたしは直ちに彼に返事を書いた。その中でわたしが尋ねたのは、何の権能があつて全能の神から授かった啓示や戒めに変更や削除、追加、消去を加えるようにわたしに命令するののかということである。」

ちょうどそのころ、メソジストの牧師がエマの父であるアイザック・ヘイルに、ジョセフのことについて偽りの数々を言い、それをアイザックが信じたため、ジョセフと彼の家族のハーモニーでの生活は立ち行かなくなってしまった。そこでジョセフはフェイエットに移り住む準備を始めた。ピーター・ホイットマー・シニアから、また一緒に住むように招かれていたからである。8月末、ニューエル・ナイトが馬車を仕立てて、ジョセフと家族のフェイエットへの移転のためにハーモニーにやって来た。フェイエットに着いたジョセフは、オリバー・カウドリのあの啓示の誤りの指摘についてホイットマー家の人々が賛意を表していることを知る。ジョセフはこう記している。「この件に関して一人一人に対して冷静な気持ちで論理的な説明をしていくことは、努力と忍耐なしにはできないことであつた。しかし、最終的に、まずクリスチャン・ホイットマーがその文章が道理にかなっており、聖文として適切であることに確信を持ち、次いで彼の助けを得て、ホイットマー家の人々だけでなくオリバー・カウドリにも、自分たちの主張が誤りであり問題の文書は残りの戒めと整合性があることを認めさせることができた。」<sup>18</sup>

フェイエットで、ジョセフは啓示に関するもう一つの重大な問題に直面する。『モルモン書』の八人の証人の一人でホイットマー家の義理の兄弟に当たるハイラム・ページが一つの石を持っていて、それを通してシオンの建設と教会の秩序に関する啓示を受けたと言うのである。ジョセフはそうした主張は『『新約聖書』に述べられた神の家の秩序と近代の啓示を根底から覆すものである』<sup>19</sup>と述べた。ジョセフはこの件について、9月26日に大会が計画されていたことから、兄弟たちに話をするだけにとどめ、大会まではそれ以上何も手を下さないことにした。しかし多くの人々、特にオリバー・カウドリとホイットマー家の人々はハイラム・ページの主張を信じた。

預言者はこの件について主に祈りをささげ、オリバー・カウドリへの啓示を受けた。その中で主はオリバーに、教会の指導者であるジョセフ・スミスに命令することはしないようにと言われた。そして主は、教会全体のために啓示を受けることができるのは大管長だけであることを明らかにしておられる(教義と聖約28:2参照)。主はまた、シオンの町の場所はまだ示されていないが時が来れば示される(9節参照)と言われた。さらに主はオリバーに、ハイラム・ページのもとに行つて、その石と

彼が啓示と称するものがサタンからのものであることを理解させるように命じられた（11節参照）。そして予定された9月の大会でハイラム・ページの石の件が話し合われ、ハイラムを含む出席者はハイラムの主張を棄却、石を通して得た「啓示」は誤りであるとの結論を出した。また大会では、ジョセフ・スミスが「教会全体のための啓示と戒めを受け、書き記す」<sup>20</sup>者として支持を受けている。大会は3日間続いたがジョセフは「神の力がわたしたちの間に顕著に現れ、聖霊が降られ、わたしたちの中には言葉に尽くせない喜びと平安と信仰と希望と慈愛があふれていた」<sup>21</sup>と証している。

## 注

1. “150 - Year Drama: A Personal View of Our History” *Ensign* 「150年のドラマ わたしたちの歴史の個人的考察」『エンサイン』1980年4月号, 11 - 12
2. “History of Joseph Smith” *Times and Seasons* 「ジョセフ・スミス史」『タイムズ・アンド・シーズズ』1842年10月1日付, 928 - 929
3. エドワード・スティーブンソンからF・D・リチャーズにあてた手紙, 1887年1月10日付参照。 *Journal of Edward Stevenson* 『エドワード・スティーブンソンの日記』1886年, 第3巻で引用, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
4. ラリー・C・ポーター “A Study of the Origins of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints in the States of New York and Pennsylvania, 1816 - 1831” 「ニューヨーク, ペンシルベニア両州における末日聖徒イエス・キリスト教会の起源に関する研究, 1816 - 1831年」博士論文, プリガム・ヤング大学, 1971年, 374 - 386参照
5. *History of the Church* 『教会歴史』1: 79
6. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 168で引用。『教会歴史』1: 79も参照
7. 『教会歴史』1: 81 - 83
8. 『教会歴史』1: 83 - 84
9. *Far West Record: Minutes of the Church of Jesus Christ of Latter day Saints, 1830 - 1844* 『ファーウェスト記録 末日聖徒イエス・キリスト教会議事録, 1830 - 1844年』ドナルド・Q・キャノン, リンドン・W・クック編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983), 1 - 3参照
10. 『教会歴史』1: 84 - 86
11. ジョセフ・ナイト・ジュニア “Joseph Knight’s Incidents of History from 1827 to 1844” 「1827年から1844年にかけてのジョセフ・ナイトの歴史上の出来事」トーマス・ブロッグ編, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 2。『教会歴史』1: 87 - 88も参照
12. 『教会歴史』1: 91 - 94
13. 『教会歴史』1: 97
14. ニューエル・ナイトの日記, 11, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー。ラリー・C・ポーター “The Joseph Knight Family” 「ジョセフ・ナイトの家族」『エンサイン』1978年10月号, 42も参照
15. ロバート・J・マシューズ “A Plain Translation” *Joseph Smith’s Translation of the Bible: A History and Commentary* 「明瞭な翻訳」『ジョセフ・スミスの聖書翻訳 歴史と注解』(Provo: Brigham Young University Press, 1975), 25 - 26参照
16. 『教会歴史』1: 108参照
17. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ, パーリー・P・プラット編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 20 - 22
18. 『教会歴史』1: 105
19. 『教会歴史』1: 110
20. キャノン, クック 『ファーウェスト記録』3で引用。教義と聖約21章も参照
21. 『教会歴史』1: 115

# 広がりを見せる初期の教会

年表	年代	重要な出来事
1830.9	10	レーマン人への宣教師の召し
1830.11		宣教師，西部保護区（オハイオ）を訪れ，127人にバプテスマを施す
1830.12		シドニー・リグドンとエドワード・パートリッジ，ニューヨークに行き預言者と会う
1830.12		ジョセフ，啓示により古代のエノクの書の一部を授かる
1831.1		宣教師，ミズーリ州西部に到着 未開地に住むインディアンに福音を宣べ伝える
1831.2		パーリー・P・プラット，東部に戻って伝道の報告をする

最初にインディアンに伝道し始めたころのインディアン居住区域。インディアンの住む「保護区」はアンドリュー・ジャクソン大統領が1830年インディアン移住条例に調印する以前から作られ，彼らはそこに住み着いていた。

**18** 30年の早い時期から，末日聖徒はアメリカインディアンを，大いなる約束を得ているイスラエルの家の残りの者と認めてきている。『モルモン書』の一人の預言者は彼らを「レーマン人」と呼び，こう述べている。「彼らはある時期に，導かれて主の御言葉を信じ，自分たちの先祖の言い伝えが正しくないことを知るようになるであろう。そして，彼らの多くが救われるであろう。」（アルマ9：17）1830年の聖徒たちもこの約束を信じ，教会の初期の時代からその成就を願っていた。

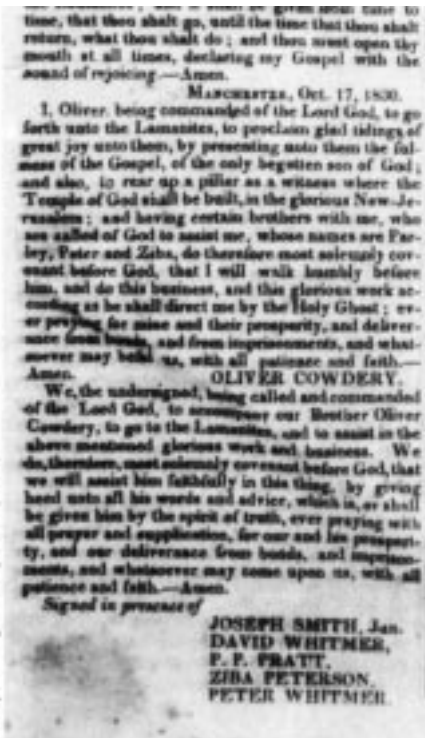
## レーマン人を教える召し

啓示によりオリバー・カウドリがレーマン人のもとに行き福音を宣べ伝えるように召されたのは，教会が設立されてわずか6か月後のことであった（教義と聖約28：8参照）。次いでピーター・ホイットマー・ジュニア，ザイバ・ピーターソン，パーリー・P・プラットがオリバーを支援するために召されている（教義と聖約30：5；32：1-3参照）。この宣教師たちの目的地は「レーマン人に近い境の地」（教義と聖約28：9）で，この言葉はミズーリ州とその西側のインディアン特別保護区の境界を



示すものと理解された。それまで20年以上もの間，多くのアメリカ人はインディアンを東部諸州から排除し，大平原のインディアンの境界地帯に永住させることを主張していた。この運動の結果として，宣教師たちが召しを受ける4か月足らず前に，アンドリュー・ジャクソン大統領がインディアン移住法案に署名していた。これに対してオハイオ州のショーニーインディアンとデラウェアインディアンはこうした動きをすでに予期しており，1828年から1829年にかけて自発的に移住を行っていた。どちらの部族もミズーリ州との境界のすぐ西に当たるカンザス川の近くに定住した。

ブリガム・ヤング大学付属図書館の厚意により掲載



レーマン人のもとに召された宣教師は召しの直後、ニューヨークを離れる前に協力誓約書に署名をした。原本は発見されていないが、ラベナで発行された1831年12月8日付けの『オハイオ・スター』誌 (Ohio Star) に掲載された転写は、学者の間で正確な複写であると信じられている。

教会の第2回大会の後、伝道の旅への準備が本格的に始まった。エマ・スミスをはじめ姉妹たちは宣教師が着る衣服を準備した。エマは体調が思わしくなかったにもかかわらず、何時間もかけて一人一人の宣教師に合う衣服を縫っている。ニューヨーク州フェイエット地域の聖徒たちは食糧を惜しみなくささげ、マーティン・ハリスは配布用の『モルモン書』を用意した。宣教師たちは出発前にオリバー・カウドリの「勧告と言葉にすべて従う」ことを書面をもって誓った。また彼らは、「完全な福音」を兄弟であるレーマン人に宣べ伝えることを誓ったのであった。<sup>1</sup> こうして10月18日、彼らは1,500マイル (約2,400キロ) の西部への旅に出発した。

### 西部保護区での初期の成功

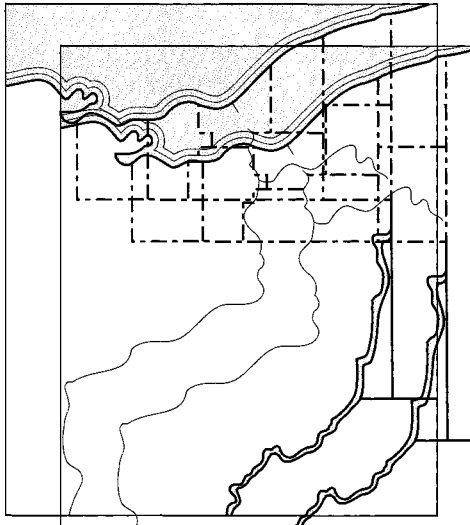
宣教師たちはニューヨーク州バッファローの近くで、カタローガス居留地に住む友好的なセネカインディアンを訪れ、『モルモン書』が彼らの忘れられた先祖の記録であることを紹介した。「わたしたちは親切なもてなしを受け、このおとずれを耳にした彼らからは多大な関心が示された。」パーリー・P・ブラットはそう報告している。<sup>2</sup> 宣教師たちは『モルモン書』を2冊渡し、旅を続けた。知られているかぎり、これがこの神権時代においてアメリカインディアンが回復されたメッセージを聞いた最初の例である。

オハイオ州北東部に到着した宣教師たちは、「西部保護区」としてよく知られた地域にやって来た。そこは植民地時代にコネチカット州に西部保護区として分け与えられた場所である。改宗する前にカートランドの50マイル (約80キロ) 西のアマーストに住んでいたパーリー・P・ブラットは、この地域に精通していた。以前パーリーは、求正派 (『新約聖書』への帰還を求めるキリスト教のグループ) を率いるその地域の著名な牧師、シドニー・リグドンのもとで研究をしていた。初めシドニーは求正派の一人であるアレクサンダー・キャンベルと組んでディサイプル・オブ・クライスト (キリストの弟子) と呼ばれる教派を設立した。この教派はキャンベルとも呼ばれている。しかしシドニー・リグドンは教義の運用のある点でキャンベルと意見を異にし、改革バプテスト会という自分自身のグループを組織した。ブラット長老はリグドンとの旧交があったことから、同僚たちを説得してオハイオ州メンターのシドニー・リグドンのもとを訪れた。そしてかつての師に神の権能の回復をも含む回復の業が始まったことを告げる。そして、神権の回復を目撃したオリバー・カウドリが、自らの体験を証として述べた。

シドニーは宣教師たちを敬意をもって手厚くもてなしたものの、すぐに改宗するこ

レーマン人への伝道に向かった宣教師は雪をかき分けて進んだ。





植民地憲章の中には、植民地が西部地域の領有権を主張するのを許すものがあった。本文でも指摘があるように、オハイオの「西部保護区」は、名前が示すとおり、コネチカット州が西部に領有を主張した地域であった。それはオハイオ州の8つの郡から成っている。

とはなかった。長老たちにこう語っている。「あなたがたの本を読みます。そしてわたしの信仰に対してどのような影響を与えるかを見てみましょう。」次に長老たちは、リグドンの教会で会員たちにメッセージを伝えることを希望、これが受け入れられ、「集会の日時が発表され、立派な身なりの人が大勢詰めかけた。」リグドンは集会の終わりに、感心にもまったく偏見を持たず、彼らが耳にしたメッセージは「驚くべき性質のものであり、確かに真剣に検討を加えなければならないものである」と述べた。彼は聴衆に「すべてのものを識別して、良いものを守」という使徒パウロの勸告を思い起こすように言った（1テサロニケ5：21）<sup>3</sup>

この間も、長老たちは勤勉に働いた。メンターのリグドンの家から5マイル（約8キロ）弱に位置するカートランドという村には、リグドンの信者が大勢住んでいた。宣教師たちはそこで戸別訪問をし、敬意をもって受け入れられる。やがて住民の中に、福音の儀式を行うのに必要な神からの権能を持つ者は自分たちの中にはいないと確信する人々が出始めた。そして、自分たちが行ってきたバプテスマは正当なものではなかったと思うようになった。こうして、度重なる研究と祈りにより、シドニー・リグドンを含む大勢の人々が宣教師の手によりバプテスマを受けることを求めた。このことから、彼らの教えについての話が急速に広まった。パーリーはこう記録している。「人々が昼夜の別なく押しかけて来たので、わたしたちは休むことも一人になる時間を取ることもできなかった。集会が近隣のいろいろな場所で開かれ、大勢の人々が集まって来てわたしたちの出席を求めた。また、毎日何千人もの人々がわたしたちの周りに群れを成した。その中には教えを聞こうとする者や好奇心だけの者、福音に従う者や論争したり拒絶したりする者もいた。」<sup>4</sup>

宣教師が到着して3週間で、127人がバプテスマを受けた。その中で著名な人物を挙げると、アイザック・モーリー、リーバイ・ハンコック、ライマン・ホワイト、ジョン・マードックである。彼らはカートランドでは名の知れた人々で、その後の教会の諸事に重要な役割を果たすようになる。そのときの自分のバプテスマとその影響を振り返って、ジョン・マードックは後にこう書いている。「その儀式には主の御霊が宿り、わたしは喜び、神と小羊への賛美の歌を歌いながら水から出た。」<sup>5</sup>

もう一人のオハイオ州からの改宗者フィロ・ディブルの場合はカートランドの東約5マイル（約8キロ）の所に住んでいて、「黄金の聖書」の話聞いた。好奇心に駆られた彼は宣教師を探し回った末、オリバー・カウドリの話聞いて福音を信じ、バプテスマを申し出た。彼は聖霊を受けるときに霊的な力を感じているが、その記述からなげ初期の聖徒たちが回復に喜びを見いだしていたかをかきま見ることができる。

「水から上がったとき、わたしは自分が水と霊から生まれたことが分かった。わたしの心が聖霊によって照らされたからである。

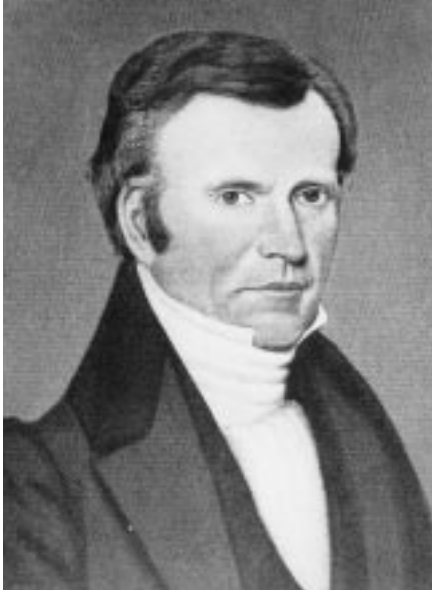
.....その夜床に就いていると、左肩に手の感触を覚えた。そして、たちまちのうちに火のようなものによってわたしの体が包まれるのを感じたのである。.....わたしは天の力に包まれ、喜びのあまり眠ることができなかった。」<sup>6</sup>

西部保護区への11月いっぱいという短期間の滞在は、すぐに永続する実をもたらした。このオハイオでの改宗劇は、わずか3週間で教会員数を2倍以上にした。それは主が啓示を通して約束しておられたことであった。「見よ、畑はすでに白くなり刈



ジョン・マードック（1792 - 1871年）は宣教師、監督、1847年の開拓者で、ソルトレーク高等評議会の一員、祝福師であった。





フレデリック・G・ウィリアムズ（1787 - 1842年）は預言者ジョセフ・スミス家の主治医であり、副管長であり、友人であった。教会に対して常に惜しみない献金を行った。彼の死後、妻と息子と義理の息子が聖徒たちとともにユタに移住している。

り入れを待っているからである。見よ、勢力を尽くして鎌を入れる者は、滅びることなく自分に救いをもたらすように蓄えるのである。」（教義と聖約4：4。11：3；12：3も参照）宣教師たちはシドニー・リグドンを含む数人に聖任を行い、民を教え導く責任を与えた。こうして彼らは、改宗前にカートランドで医師をしていたフレデリック・G・ウィリアムズを伴い、「レーマンの人の境の地」に向けて西への旅を続けた。

## ニューヨーク州にいる預言者への訪問

宣教師がカートランドを離れてから程なく、シドニー・リグドンと彼の親しい同志であったエドワード・パートリッジはニューヨーク州に行くことを決意した。自分たちに知らされた回復された福音について、「さらに詳しいことを」聞くためである。リンダ・パートリッジはこう書いている。「夫はある程度は信じていましたが、ニューヨーク州に行って預言者と直接会わなければと考えたのです。」そうでなければ得心がいかなかったのだ。<sup>7</sup> フィロ・ディブルによれば、パートリッジの訪問はほかの人々の代理でもあった。隣人の言葉にこうある。「わたしたちはある人にニューヨーク州に行ってもらい、この業が真実かどうか、預言者がうそをつく人間でないかどうかを調べてもらっている。」<sup>8</sup>

1830年12月、ニューヨーク州マンチェスターに着いたシドニーとエドワードは、ジョセフが20マイル（約32キロ）離れたフェイエット町のホイットマー家に滞在していることを知る。そこで隣人にスミス家の評判を聞いてみると、ジョセフが『モルモン書』の発見を口にするまでは非の打ち所がなかったことが分かった。農場もきちんとして整備されていて、スミス家が勤勉な家族であることを表していた。こうしてエドワードとシドニーはウォータールーのジョセフの両親の家で預言者ジョセフと会い、エドワードはバプテスマを受けることを求めた。<sup>9</sup> そして4日後、エドワードは友人であり旅の友であるシドニー・リグドンから長老に聖任された。

ジョセフ・スミスは初めて会ったときからシドニーとエドワードに好感を抱いている。そしてエドワードについて、「敬神の模範であり主の偉大な兵士の一人である」と評している。<sup>10</sup> エドワードのバプテスマの少し後で、ジョセフはシドニーとエドワードの義務と召しに関する啓示を受けた。主はシドニーについて、彼に従う者たちへの影響力の強さから、イエス・キリストのために道を備えたバプテスマのヨハネにたとえられた。シドニーの新しい責任はジョセフの筆記者として働くことであり（教義と聖約35：4、20参照）、エドワードは「ラッパの音のように」福音を宣べ伝えることであった（教義と聖約36：1）。またジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは、どこにあっても主の教会を強めるように、しかし「特にコールズビルで教会を強くするまで、出かけてはならない。見よ、彼らが深い信仰をもってわたしに祈っているからである」との勧告を受けた（教義と聖約37：2）。

コールズビルの聖徒たちの信仰は、預言者と預言者の新たな同志であるシドニー・リグドンの訪問により報われることとなった。シドニーの弁舌の才能が教会内で初めて示されたのは、彼が「わたしの福音を宣べ伝え、……聖なる預言者たちを呼んで彼の言葉を証明しなければならない」（教義と聖約35：23）との啓示により与えられた命令に従ったときのことであった。彼は人を感化する力強い説教をした。

ニューヨーク州の聖徒たちは、ジョセフ・スミスに授けられた教義に関する重要な啓示によっても祝福を受ける。ジョセフは1830年の6月から10月までの間、創世記の靈感による改訂作業に取り組んでいた。ジョセフはそのときのことをこう記している。「今述べた書については聖徒たちの間に推測やうわさが流布していた。『新旧約聖書』の各所で言及されているが、今ではどこにも見いだせないというものについてである。共通した意見は、それらは失われた書であるが、使徒の教会ではユダが、アダムから7代目のエノクの預言として引用しているように、幾分かを所有していたと思われる。」<sup>11</sup> 当時ニューヨーク州で約70人に達していた教会員にとって喜ばしいことに、主は古代のエノクの書の一部を明らかにしてくださった。それには未来についての長い預言も含まれている。現在では高価な真珠のモーセ書第7章にある記述を通して、主は「御自身の小さな羊の群れに励ましと力を与えられた。……（それまで知られていた）聖文よりも詳しい情報を授けられたのである。」<sup>12</sup>

### ミズーリへの旅

同じころ、インディアンの伝道のために旅に出た5人の宣教師は、西への旅路で会うあらゆる人々に福音を宣べ伝え続けた。パーリー・P・プラットはこう記している。「ある人々は学びたい、完全な福音に従いたいと願い、……ある人々はねたみや怒り、虚辞を連ねた。」<sup>13</sup>

パーリーはカートランドの西50マイル（約80キロ）の所で取るに足りない罪状により逮捕されて裁判にかけられて有罪とされ、罰金の支払いを命じられた。持ち合わせのなかったパーリーはその晩、公衆宿に拘留された。翌朝、彼は短時間仲間の宣教師たちと再会をし、後から追いつくので自分を置いて旅を続けるように願った。パーリーはこう書いている。「わたしはしばらくの間見張りの警官と一緒に暖炉のそばに座っていたが、外に出たいと申し出た。わたしは彼と一緒に広場に出た。そしてこう言った。『ピーボディーさん、走るのには得意ですか。』『いや。』彼は答えた。『でも、わたしのでかいブルドッグは得意だよ。警察署で何年もわたしを助けてくれているんだ。わたしが命令すればだれでも倒してくれる。』『ではピーボディーさん、あなたはわたしに1マイル行くように言いましたが、わたしはあなたとともに2マイルやって来ました。あなたはわたしに説教をし歌を歌う機会を与えてくださいました。また宿と朝食も提供してくださいました。わたしはもう旅を続けなければなりません。走るのが得意でしたらわたしについて来てください。ご親切を心から感謝しています。ごきげんよう。』

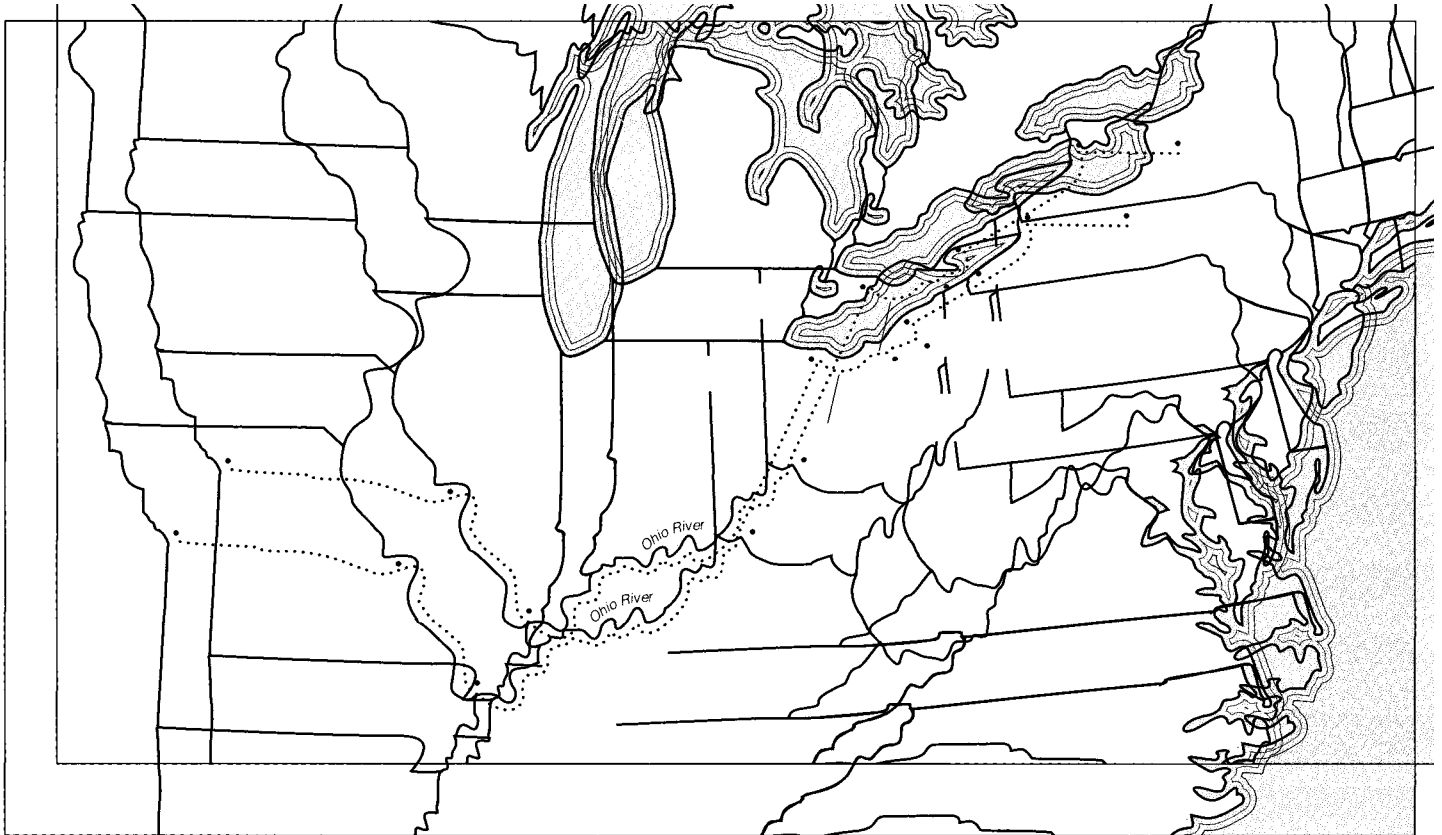
こうしてわたしは走りだした。彼は驚きのあまり足を一步も踏み出せない。……彼が我に返って追跡を始められるようになったのは、わたしが200ヤード（約180メートル）も離れてしまったときだった。……彼は叫び声を上げながら大声で犬をけしかけ、追いかけて来た。その犬は見たこともないような大きな犬で、わたしの足もと近くまでやって来てうなり声を上げている。警官はまだ追いつかず、手を打ちながら犬をけしかけた。『ステューボーイ、ステューボーイ、つかまえる。そいつを倒すんだ。倒せ。』そして、わたしの方を指さした。犬がまさにわたしに跳びかかろうとしたその瞬間、一つの考えが稲妻のようにひらめいた。わたしが警官の代わりになり、猛然と向かって来る犬を少し先にある森の方に誘導すればいい、と思ったの

である。わたしは森の方を指さして、手をたたき、警官の声をまねて叫んだ。犬はわたしのそばを走り抜けて、倍ぐらいにスピードを上げながら森に向かって走って行った。警官とわたしの両方にけしかけられて、犬はわたしと同じ方向に走って行ったのである。」

犬と警官から逃れたプラット長老は、別のルートを通して同僚たちに追いついた。パーリーは後になって、彼が『モルモン書』を渡したシメオン・カーターが近隣の約60人の人々とともに教会に加入し、支部を作ったことを知った。<sup>14</sup>

しかし宣教師たちは、アメリカ先住民に福音を宣べ伝えるという本来の務めを忘れ

宣教師たちは当時ミズーリ州西部に居留していたレーマン人に福音を伝えるために、1830年秋から1831年の冬にかけて約1,500マイル(約2,400キロ)の旅をした。旅程はオハイオ州シンシナティからイリノイ州カイロを蒸気船に乗っただけで、あとは徒歩であった。



たわけではなかった。彼らはオハイオ州サンダスキーのワイアンドットインディアンのもとに数日間滞在している。パーリーはこう書いている。「彼らは福音のおとずれに喜びを示し、わたしたちの成功を祈り、西に住むほかの部族での成功について手紙で知らせるように依頼してきた。」<sup>15</sup>

恐れを知らない宣教師たちがシンシナティに向けてサンダスキーを出発したのは、冬のことであった。彼らは全行程を徒歩で進んだ。1830年から1831年の冬は、中西部では記録的な大雪に見舞われた年である。特に12月後半は「極端な寒さの中、渦を巻いて吹きつけてくる雪、鉛色の雲が重く垂れ込めた空。それらはこの嵐がこの平地帯をまひさせ<sup>ありさま</sup>るものであることを物語っていた。雪は何日間もまったくやむことなく降り続く様相であった。初めは不安であったものが恐れに変わり、やがてそれが人と動物の命を奪う脅威となると、人を金縛りにしてしまうような恐怖へと変わっていくのだった。」<sup>16</sup>長老たちはクリスマスの5日前に、オハイオ州シンシナティでセントルイス行きの蒸気船に乗り込んだ。しかし、オハイオ川の流氷に行

く手を阻まれ、イリノイ州カイロで下船、再び徒歩で旅を進めなければならなかった。そしてセントルイスまであと20マイル（約32キロ）の地点で雨と雪の激しい嵐に襲われた彼らは、1週間行く手を阻まれた。この嵐は、所によっては3フィート（約1メートル）の積雪をもたらした。

彼らは一日中家に立ち寄ることも火にあたることもなく、ひざまでの深さの雪をかき分けながら西へ向かってゆっくりと歩みを進めて行った。「冷たい北西の風が痛いほどわたしたちの顔に吹きつけ、顔の皮膚をはがしてしまうかのようであった。」パーリーはそう書いている。あまりにもひどい寒さだったため、ほぼ6週の間、家の南側の日だまりでも雪が解けることはなかった。こうしておよそ300マイル（約480キロ）を、彼らはナップサックの中に衣服や書物、食糧を背負いながら歩いた。食糧は凍ったとうもろこしパンと生の豚肉だけである。パーリーによればそのパンは「あまりにもカチカチに凍っていたので、外の皮の部分を除いてまったく歯が立たなかった。」彼らのカートランドからインディペンデンスまでの1か月半の旅は、疲労と苦痛との闘いであった。そして1831年1月13日、宣教師たちはアメリカ合衆国の西の辺境の地、ミズーリ州インディペンデンスに到着した。<sup>17</sup>

### 福音を教える

目的地への到着を前に、宣教師たちはミズーリ州の西部境界に駐留していたロバート・パターン大佐の家に一時滞り、天候の回復を待った。そして2月1日ごろ、ピーター・ホイットマーとザイバ・ピーターソンはインディペンデンスに洋服屋を開く。オリバー・カウドリ、パーリー・P・プラット、フレデリック・G・ウィリアムズがインディアン<sup>インディアン</sup>の居留地に入り、福音を説き、『モルモン書』を紹介する間、必要な資金を稼ぐためであった。<sup>18</sup>

宣教師たちはウィリアム・アンダーソンというデラウェアインディアンの老酋長<sup>しゅうちやう</sup>に話を聞いてもらうことができた。彼は父親がスカンジナビア人、母親がインディアンである。彼はそれまでほかのキリスト教の教派の教えは頑として聞こうとしなかったが、ついに宣教師たちの説得に首を縦に振った。部族の指導者約40人が座る酋長の家で、オリバー・カウドリは話をする機会を与えられた。オリバーはすぐに、インディアンたちの信頼を得ることができた。『モルモン書』のメッセージを知らせるために、はるばる東部からつらい旅をしてきたことを話したからである。オリバーはインディアンの窮状を理解することができた。かつては勢力を奮っていた彼らは、今や少数になり、財産も少なくなっている。オリバーは『モルモン書』の物語を巧みに話の中に織り交ぜていった。「何千もの月の昔、赤い肌をした人々の先祖が平和に暮らし、このすべての地を所有していたとき、大霊が彼らに語りかけ、その律法と御心とたくさんの知識を賢者と預言者にお伝えになったのです。」オリバーはこれこそが彼らの歴史であり、「末日の彼らの子孫の身に起こる事柄」についての預言が一つの書物に記されていることを説いた。そしてオリバーは、もしも彼らがこの書物を受け入れてそれに従えば、彼らの「偉大なる父」が再び彼らを栄えさせ、過去の偉大さを取り戻させてくださることを約束した。また、彼と同僚たちはその書物を渡すためにやって来たこと、そしてその書物が彼らの将来の繁栄を左右することを説明した。アンダーソン酋長は白人の厚意に感謝を示した。



議会図書館の厚意により掲載

ウィリアム・クラーク（1770 - 1838年）。メリウェザー・ルイスとのルイジアナ購入地の勇敢な探検からの帰還後、ウィリアム・クラークはトマス・ジェファーソン大統領の命によりルイジアナ準州のインディアン部族担当官となった。彼は、その後の人生の大半を政府のインディアン部族担当官としてその務めを果たした。1822年にはインディアン担当局長となり、オリバー・カウドリが書簡を送ったときにその地位にあった。

『それはここをうれしくさせます。』彼は胸に手を当ててそう言った。

『今は冬で、わたしたちはこの地に来たばかりです。雪は深く、牛や馬は死んでいます。わたしたちの家も粗末です。春になればすることがたくさんあります。家や囲いを作り、農場を開きます。それに集会をする家を建てますから、そこでわたしたちの先祖の本について、また大霊の御心についてわたしたちに読んで教えてください。』

長老たちは「それから数日間、その老齢の酋長と彼の部族の人々に教え続けた。」インディアンたちの『モルモン書』について知りたいとの望みは日を追うごとに大きくなり、字の読める人々が『モルモン書』を配り、メッセージを広める手助けをしてくれた。<sup>19</sup>

当時インディアン保護区を管轄していたのは連邦政府のインディアン担当官であるが、宣教師たちはインディアン保護区に入って福音を宣べ伝えるために必要な許可証を入手していなかった。そこで地元の担当官は、宣教師たちの行為は法律違反であり、セントルイスにいるインディアン問題担当官のウィリアム・クラーク將軍から許可証の発行を受けるまでは伝道を中止するように言ってきた。<sup>20</sup> しかしながら、パーリー・P・プラットの記すところによれば、宣教師たちの成功がミズーリ州の開拓地に伝わると、「インディアン担当官やほかの教派の宣教師たちの間にねたみが起こり、それが高じてインディアン保護区から出るように、従わなければ武力行使も辞さないとの命令に至ったのである」とある。<sup>21</sup>

オリバー・カウドリは1831年2月14日付けのクラーク將軍への書簡の中で、自分はニューヨーク州を中心とする宗教団体の代表者であり、「〔インディアンの〕子供たちの教育のための学校を開設し、同時に〔大人たちに〕キリスト教を教える」ことを目的としていると書いている。彼らは実際にそのように行う予定であった。こう付け加えている。「それは現在確立されているいかなる伝道組織への介入や阻止をも意味するものではありません。」<sup>22</sup>クラークがこの書簡に返事を書いたのか、また許可証が発行されたのかどうかは定かではない。しかし、宣教師たちはインディペンデンスに定住し、興味を抱く移住者たちに福音を宣べ伝えた。

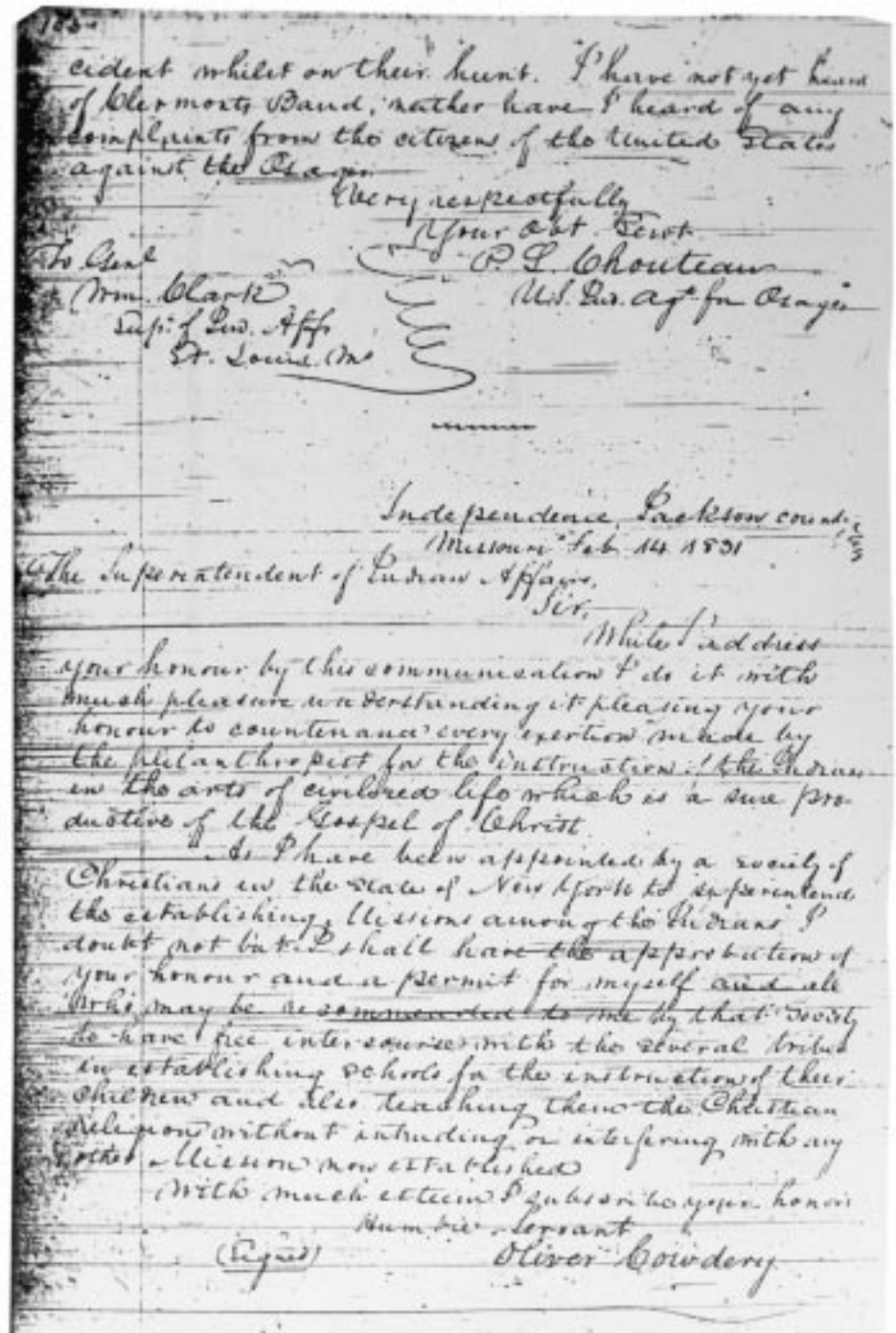
その間、パーリー・P・プラットが選ばれて東部に戻り、伝道の報告をし、『モルモン書』の追加入手をしている。パーリーが東部へたった後、宣教師たちのインディアンへの関心はサンタフェの西約300マイル（約480キロ）の地点にナバホという勤勉な大部族がいることを知ってますます高まった。<sup>23</sup> しかしながら当時の状況では、福音をほかの部族に宣べ伝える試みは断念せざるを得なかった。

## 宣教師の旅の評価

「レーマン人への伝道」はアメリカ先住民への伝道という点では成功したとは言えない。しかし、それはその後の教会歴史に重要な影響をもたらすことになる。この伝道はイスラエルの家の残りの子孫に初めて福音をもたらしただけでなく、主の目から見て彼らがいかに大切な存在であるかを再認識させたのである。

改宗や直接的な影響力という点で言えば、この伝道は西部保護区の白人定住者の間で成功を見たと言える。発展する教会に大きな力をもたらす人々が福音の網の中に集め入れられたのはオハイオにおいてであった。数か月のうちにオハイオの教会員

インディアンの子供たちのために学校を設立することを提案した、1831年2月14日付けのオリバー・カウドリからウィリアム・クラークへあてた書簡。



カンザス市歴史協会の厚意により掲載

数はニューヨーク州のそれを上回った。そこで、ニューヨーク州からの移転が必要となったとき、主はオハイオを教会本部を置く集合の地として指定されたのであった。

もう一つこの伝道によって明らかになったことは、『モルモン書』が改宗の手段として、また改宗がもたらす力を実際に試すものとして人々を啓発する力を持っているということであった。『モルモン書』は大勢の人々の人生に新たな方向づけを与える手段となったのである。

またこのレーマン人への伝道は、すぐには関心を引き起こさなかったものの、シオ

ンの地に関する将来の啓示への地ならしとなった。シオンの中心地の場所については正確な啓示はなかったが、主はすでに聖徒たちに、シオンは「レーマン人に近い境の地」(教義と聖約28:9)に位置することを示しておられた。こうして5人の屈強な教会員はその地で経験を得、そこが「良い地」であることを身をもって証することができたのである。

## 注

1. 1830年10月17日付けの書簡, *Ohio Star* 『オハイオスター』1831年12月8日付, 1で引用
2. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ, パーリー・P・プラット編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 35
3. *History of the Church* 『教会歴史』1: 124; “History of Joseph Smith” *Times and Seasons* 「ジョセフ・スミス史」『タイムズ・アンド・シーズンズ』1843年8月15日付, 289 - 290
4. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』35 - 36
5. ジョン・マードック “An Abridged Record of the Life of John Murdock Taken from His Journals by Himself” 「自身が日記からつづるジョン・マードックの生涯の略記録」末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 16
6. フィロ・ディブル “Philo Dibble’s Narrative” *Early Scenes in Church History* 「フィロ・ディブルが語る」『教会歴史の初期の場面』(Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1882), 75 - 56
7. リンダ・パートリッジの言葉。エドワード・パートリッジの系図記録への記載, 1878年, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 5で引用
8. ディブル「フィロ・ディブルが語る」77
9. ルーシー・マック・スミス *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレイ編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 191 - 192参照
10. 『教会歴史』1: 128
11. 『教会歴史』1: 132
12. 『教会歴史』1: 131 - 133
13. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』36
14. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』36, 38 - 39
15. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』39
16. エレノア・アトキンソン “The Winter of the Deep Snow” *Transactions of the Illinois State Historical Society for the Year 1909* 「豪雪の冬」『1909年イリノイ州歴史協会記録』49
17. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』40
18. ウォレン・A・ジェニング “Zion Is Fled: The Expulsion of the Mormons from Jackson County, Missouri” 「シオンからの逃亡 モルモン教徒のミズーリ州ジャクソン郡からの追放」博士論文, フロリダ大学, 1962年, 6 - 7; A・W・ドニファンへのインタビュー, *Kansas City Journal* 『カンザスシティー・ジャーナル』1881年6月24日付, *Saint & Herald* 『セイントスヘラルド』1881年8月1日付で引用参照
19. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』42 - 44
20. リチャード・クミンズ少佐からウィリアム・クラーク將軍への書簡, 1831年2月13日付, *William Clark Letter Book* 『ウィリアム・クラーク書簡集』第2集, 第6巻 (Topeka, Kans.: Kansas State Historical Society, n.d.), 113 - 114参照
21. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』44
22. オリバー・カウドリからウィリアム・クラーク將軍への書簡, 1831年2月14日付, 『ウィリアム・クラーク書簡集』103
23. オリバー・カウドリ 『教会歴史』1: 182で引用参照

# オハイオへの集合

年表	重要な出来事
1831.1.2	ニューヨーク州フェイエットで第3回総大会開催
1831.2月上旬	ジョセフ・スミス、オハイオに到着
1831.2	奉獻の律法が示される
1831.5 6	ニューヨーク州からの移住者オハイオに到着
1831.5	偽りの霊についての啓示が下る
1831.6.3	オハイオ州カードランドで第4回総大会開催
1831.6.7	ミズーリへの移住の命令（教義と聖約52章参照）

1831年に入って、ほとんどの教会員はオハイオへの集合を考えていた。1830年の12月に、主が民に対してオハイオに移るよう命じられたからである（教義と聖約37：3参照）。このためジョセフと筆記者であるシドニー・リグドンは一時的に聖文の翻訳を中断する。そして1831年の元日、預言者と同僚たちはフェイエットで第3回の総大会に向けての準備を完了した。その総大会ではオハイオへの移住を検討することになっていた。

## 聖徒たち、集合の指示を受ける

1831年1月2日、ニューヨーク州各地から来た聖徒たちがピーター・ホイットマー・シニアの家に集合した。教会の事務的な事項を処理した後、ジョセフ・スミスは「会衆に向かって説教をし、救いの結末について考えながら先を見てしっかり立つように勧告した。」<sup>1</sup>ジョセフの説教の後で、何人かの教会員からオハイオに移るよとの戒めについて質問が出た。ジョセフは会衆の前で主に祈り、一つの啓示を受けた（教義と聖約38章参照）。それは末日聖徒に対する約束の啓示であった。「わたしはさらに大いなる富、すなわち、主が来るときにまったくのろいのない一つの約束の地、乳と蜜みつの流れる一つの地をあなたがたに差し出して授けよう。

あなたがたが一心に求めるならば、わたしはあなたがたの受け継ぎの地としてそれを与えよう。」（教義と聖約38：18 - 19）しかし、シオンのはっきりとした位置は示されなかった。当面はオハイオに行くということであった。そこは主が「律法」を示し、力を与え、教会の発展に関するさらなる指示を受けると約束された場所だったのである（教義と聖約38：32 - 33参照）。

その大会に参加した全員がこの啓示に同調したわけではない。中には民をだまして自分だけ富を得るためにジョセフ・スミスがでっち上げたものだと主張する者もいた。ジョン・ホイットマーは自叙伝の中で、この主張が出たのは聖徒たちの心が「主の目から見て正しくなく、神と人〔の両方〕に仕えようとしていたからである」<sup>2</sup>と書いている。加えて、ある人々は農場や快適な環境を後に残して、不案内なオハイオの西部保護区に移ることを躊躇ちゅうちよした。それに、多くの者が土地の売却で損をし、中には売却すらできない人も出てくることは目に見えていたのである（教義と聖約38：37参照）。しかしながら、ほとんどのニューヨークの聖徒たちは戒めに従い、移住の準備をしたのであった。

大会の後、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンはコールズビルに赴き、コールズビル支部の教会員を励ますとともに、地域の教会員でない人に対して最後の説教を行った。それ以上の伝道は、迫害による身の危険があったため不可能であった。預言者はフェイエットに戻ると、ジョン・ホイットマーに幾つかの啓示の写しを持





ジョン・ホイットマー(1802 - 1878年)はジョセフ・スミスが1831年2月カートランドに到着するまでの間、教会で最初の管理長老となった。

たせ、カートランドに派遣した。聖徒たちに慰めと励ましを与えるためであった。ジョン・ホイットマーはまた、預言者が到着するまでの間、管理長老としての任に当たるように命じられている。ジョンが到着したころ、オハイオ州ジオガ郡とクヤホガ郡の教会員数は300人にもふくらみ、2か月前に報告された数の2倍以上に達していた。<sup>3</sup> 宣教師たちがレーマン人のもとへ出発してからも伝道の業は続いた。中でも最も成功を収めた宣教師が、元の回復派の説教者、ジョン・マードックである。彼は1830年11月から1831年3月にかけて、クヤホガ郡に住む70人以上の移住者にバプテスマを施した。<sup>4</sup> ほかの宣教師たちもオハイオでは似たような成功を収めることができた。

## オハイオへの集合が始まる

オハイオへの移転は揺籃期ようらんにある教会にとって好都合であった。ニューヨークを去ることによって聖徒たちは宗教的な弾圧から逃れられると考えたからである。コールズビル地域の聖徒たちは特にそうであった。加えて、オハイオは教会員数の最も多い地域であり、また一か所に集合することによりすべての人が預言者から直接教えを受けることができた。それによって教義上、また組織上の一致を保つことができたのである。さらに、オハイオは水路に恵まれていて、合衆国の他の地域への伝道の玄関口としてうってつけの所であった。しかしとりわけ重要なことは、オハイオへの移転によってシオンの建設が予定される「レーマン人に近い境地」(教義と聖約28:9)に一步近づいたことである。オハイオではシオン建設のための数々の原則を実行に移すことが可能であった。

ジョセフ・スミスはオハイオの聖徒たちと会うことを切望し、またジョン・ホイットマーも手紙ですぐにカートランドに移ることをジョセフに要請した。そこでジョセフは主の御心を伺い、直ちにオハイオに移るように命じられたが、移転はエマにとって相当困難なことであった。エマは結婚後4年間で7回の引っ越しを経験したうえ、1か月続いた病気からやっと快復したばかりであったし、妊娠6か月の体であった。そのような状態でオハイオへの300マイル(約480キロ)を真冬に旅するのは、苦難以外の何ものでもない。そこでジョセフ・ナイトが少しでもエマの旅が楽になるように、そりを用意してくれた。こうして1831年1月末、ジョセフとエマ、シドニー・リグドン、エドワード・パートリッジがカートランドに向けて旅立った。

そのそりがカートランドのニューエル・K・ホイットニーの店の前に着いたのは、2月1日ごろのことである。『ニューエル・K・ホイットニー、あなたですね。』彼は恭しく手を差し出すとそう叫んだ。まるで旧友に会ったかのようなのである。『これは先を越されましたな。』ニューエルはそう答えた。……『残念ながらわたしはあなたのお名前を知りません。あなたのようにお名前と呼ぶことができないのですが……』『わたしは、預言者ジョセフです。』ジョセフはほほえみながらそう言った。『あなたはここでわたしのために祈ってくださいましたね。さて、わたしに何をしてほしいですか。』ジョセフは驚いているニューエルに、自分がカートランドに来ることを祈っているニューエルの姿を、ニューヨークにいる間に示現で見ていることを説明した。<sup>5</sup> ホイットニー家はジョセフとエマを温かく歓迎し、当分の間一緒に住むよう申し出た。そしてそれからの数週間、スミス夫妻は「特にホイットニー姉妹からこれ



ニューエル・K・ホイットニー(1795 - 1850年)は有能な実業家であると同時に地域行政でも傑出した人物であった。1844年に教会初の監督に、1847年には管理監督に支持されている。

カートランドの辻に建つニューエル・K・ホイットニーの店。1826年から1827年にかけて建てられたこの店で、以下のような多くの重要な出来事があった。

1. 1832年の秋からジョセフとエマが住んだ。

2. この店が教会の本部となった。

3. 1832年11月6日にジョセフ・スミス・サードが生まれた。

4. 1833年1月24日に始まり4月に終わった「預言者の塾」がここで開かれた。

5. 預言者ジョセフ・スミスに多くの啓示が授けられた。教義と聖約84, 87 - 89, 95, 98章がそれに当たる。

6. しばらくの間、この店が監督の倉として用いられた。

7. ジョセフ・スミスはここで『聖書』の翻訳の多くを完成した。

1979年、教会はニューエル・K・ホイットニーの店を購入、すぐに修復に取りかかった。そして1984年8月25日、ゴードン・B・ヒンクレー副管長により奉獻式が行われた。



以上ないという温かいもてなしを受けた。』<sup>6</sup>

1831年1月末から5月の中ごろまでの間にほとんどのニューヨーク州の聖徒たちは財産を売却し、貴重品だけを荷造りしてカートランドならびに隣接した地域に移転して来た。ジョセフ・スミスたちが先に移転し、3つの隊がそれに続いた。コールズビルの聖徒たち、セネカ郡のフェイエットとその周辺の教会員、パルマイラとマンチエスターの教会員の3つのグループである。ほかの人々も同じ年の後半には移転を済ませた。

最初に出発したのはコールズビル支部の人々であった。彼らは5月1日にバッファローに着いたが、湖を渡る身を切るような風がバッファローの港に氷塊を吹き込み、そのため11日間の足止めを余儀なくされた。こうしてオハイオ州フェアポートにやっとのことで到着したのが5月14日であった。200人以上の人々がオハイオに移住したが、ある者はそりや馬車を使ったものの、ほとんどが運河の渡し船でバッファローまで行き、そこから蒸気船と帆船でエリー湖を進むというものであった。

同じころ、フェイエット周辺の教会員も移住の準備を進めていた。夫と上の息子たちがすでに出発していたため、ルーシー・スミスは持って生まれた指導者としての才能を生かして50人ほどの隊を組織（大人20人、子供30人）し、1隻の渡し船に乗り込んでカユーガ運河とセネカ運河を進んだ。トーマス・B・マーシュが組織した約30人の別の隊はもう1隻の船に乗り込み、ルーシーの隊の船とともにバッファローに向かった。

ルーシーはこう書いている。「(途中わたしは) 兄弟姉妹たちを集め、この旅は主の命令によって行っている旅で、エルサレムを離れた父リーハイと同じであることを説明しました。忠実であればリーハイのときと同じ理由で神の祝福を受けられることを話したのです。』彼らは、食糧よりも衣服を多く持って来た人々がいたために多少の飢えに苦しんだものの、旅の間賛美歌を歌い、祈りをささげ、船長に好印象を残している。ルーシーが率先して皆の世話に回ったおかげで、大した苦難も経験せずに旅は進んだ。



ルーシー・マック・スミス  
(1776 - 1856年)

バッファローに到着した彼らが出会ったのは、氷のために足止めされていたコールズビルからの聖徒たちであった。不安に駆られつつ、出発を待っていた数日間にたくさんの子供たちが病気になり、隊員の多くは空腹と失意に襲われた。彼らは甲板に移動し荷物を船に積み込み、翌朝早くまでの間女性と子供のために一時的な寝場所を確保した。翌朝男性たちが船に戻り全員そろろうと、ルーシーは不平を言っている隊員に、港をふさいでいる20フィート（約6メートル）の長さの氷を割ってくださるよう主に祈ることを説得した。ルーシーはこう説明している。「雷のような音が聞こえました。船長が叫びました。『全員配置に着け。』氷が二つに割れて、ちょうど船が通れるほどの透き間ができたのです。その透き間はとても狭くて、船が通過したとき、水車の羽根が氷に接触して裂けてしまったほどです。……そして船がその透き間を通り過ぎるやいなや、氷は再び元に戻ったのです。」コールズビルの隊はそれから数日後にバッファローをたっている。<sup>8</sup>

ニューヨークの聖徒たちがオハイオに到着したころ、50人から成る第3の隊がパルマイラを出発した。隊を率いたのはマーティン・ハリスである。彼らのオハイオへの到着により、末日聖徒の西部移住の第一段階は終わりを告げる。そのころ西部移住を試みたアメリカ人は大勢いた。しかし、彼らが自由や格安な土地、冒険を求めたり、債権者の手から逃れるためであったのと対照的に、末日聖徒の西部移住は神の命令によるものであった。

## オハイオでの初期のチャレンジ

ジョセフ・スミスは自分自身がカートランドに着いてからニューヨークの聖徒たちが到着するまでの3か月間、教会の急速な発展から来る多くのチャレンジに直面した。最初の問題は、支部の会員の間広がる「奇妙な考えや偽りの霊」であった。<sup>9</sup> オハイオ州北部では教会幹部からの導きを受ける機会が不足していたため、新会員の中に改宗のときに受ける聖なる御霊の働きについて「狂気じみた熱狂的な考え」を持ち込む人物が出てきたのである。オハイオの初期の改宗者であるジョン・コリルは、示現を見たと主張する若者たちの信じられないような行動に心を痛めている。「彼らの行動は奇怪極まりない。時にはインディアンのような仕草を試みたり、野原に飛び出して切株の上に立ち、あたかも群衆に囲まれているかのごとく説教を始める。そうしている間は完全に示現の中にいるようで、周囲の人々にはまったく気づいていない。」<sup>10</sup> こうした教会に対するサタンへの攻撃は、過去の習慣を持ち込んだ新会員の軽信と人のよさによるもので、何か月もの間神権による管理がなされなかったことの結果であった。

しかし、こうした行動に走った会員は少数であった。「しっかりした人々は驚きの目でそれを見、それが悪魔から出たものではないかと考えていた。」<sup>11</sup> この状況を見て心を痛めたジョセフは、こうした行きすぎた行為は「神の教会を汚すもの、神の御霊を退かせるもの、そして人類家族の救いのために与えられた栄光の原則を破壊し、根こそぎにするものとなるであろう」<sup>12</sup> と感じた。「いくばくかの注意と知恵により」、また幾つかの啓示を通じて与えられた指針により、ジョセフはこうした問題を切り抜けることができた。<sup>13</sup>

しかし、1831年2月末になっても、まだ啓示を受けたと主張する者が見られた。こ

れは新しい問題ではなく、前の秋にはフェイエットでハイラム・ページが同じ問題を起こしている（教義と聖約28章参照）。こうした示現を受けたと称する者の一人が、ハブルという名の自称女預言者で、自分は教会で教師になることを許されるべきだと主張した。ジョン・ホイットマーによれば、彼女は「非常に敬虔な人物のごとく振る舞い、その偽善を識別できない人々を欺いた。」しかし大勢の人々は彼女の主張が偽りであることを見抜き、「彼女の愚かな行いと冒瀆とが白日の下にさらされた。」<sup>14</sup>預言者ジョセフは彼女の策略について主に伺いを立てたが、それに対して主は、教会の長老たちに向けた啓示の中でこう宣言された。「もし〔ジョセフ・スミス〕がわたしにつながっているならば、彼が取り去られるまで、あなたがたのために戒めと啓示を受けるよう任命される者は彼のほかにだれもいない。」（教義と聖約43：3）つまり、預言者以外の人々が教会全体を導くために受けたと称する「啓示」は、神からのものではないのである（教義と聖約43：4-6参照）。

それから程なく長老たちに、二人一組となってあらゆる場所に福音を宣べるために出て行くようにとの啓示が下った（教義と聖約44：1-3；42：6-7参照）。そして間もなく、大勢の長老たちがオハイオ中の町や村を巡るようになる。例えばジョン・コリルの記録によれば、彼はソロモン・ハンコックとともに「カートランドから約100マイル（約160キロ）に位置するニューロンドンに行き、他教派の説教者たちからひどい迫害を受けたものの、3週間で36人から成る教会〔の支部〕を設立した。」<sup>15</sup>その春、オハイオの教会は数百人の改宗者により成長を遂げた。

このように発展を続ける教会がオハイオ州北部で話題にならないはずはない。ジョセフ・スミスは1831年春にこう書き記している。「多くの偽りの記事や愚かな作り話が出版されたり、流布されたりした。これは人々が業の探究をし、信仰を持つのを阻止するためのものであった。」<sup>16</sup>例えば、大規模な地震が中国の北京近郊を襲ったが、あるモルモンの少女がそれを6週間前に予知していた。この出来事により、キャンベル派の著名な説教者でモルモニズムの台頭に手を焼いていたサイモンズ・ライダーが、確信を得て教会に加入した。彼の改宗は地元で大きなセンセーションを巻き起こし、新聞は、中国の地震はモルモン教のせいだと書き立てた。「しかし、偏見や悪意がもたらすあらゆるものと闘わなければならなかった聖徒たちにとって喜ばしいことは、」預言者が主の再臨に先立つ無数のしるしについて列挙した啓示を受けたことであった。<sup>17</sup>その啓示の中で聖徒たちは、「聖なる場所に立ち……導き手として聖なる御霊を受け」るように命じられると同時に、この命令を守れば報いとして「新エルサレム」の建設が実現するとの約束を受けた（教義と聖約45：32，57，66）。

また1831年の春には、エズラ・ブースという名のメソジスト派の説教者が何人かの人々を引き連れてカートランドにやって来た。その中にオハイオ州ハイラムに住む裕福な農場主、ジョン・ジョンソンと妻のエリサがいた。エリサはリューマチのため腕の一部がまひしていて、腕を頭よりも高く上げることができなかった。預言者との会談の中で彼らの中の一人が、エリサのなえた腕を治す力を持った人がこの世にいるだろうかと言者者に尋ねた。話が別の話題に移ったとき、預言者は立ち上がってエリサのもとに行き、エリサの手を取って穏やかな確信を込めた声でこう言った。「女よ、主イエス・キリストの御名により治るように命じます。」ジョセフは部屋を出て行ったが、残された者たちは驚きで声も出なかった。エリサは腕を上げる

ことができたのである。翌日、彼女は6年ぶりに少しの痛みも感じずに自分で洗濯物を干すことができた。この癒しをきっかけに、エズラ・ブースとジョンソン家の何人かが改宗している。この奇跡はオハイオ州北部に広く知れわたった。<sup>18</sup>

同じ年の春、パーリー・P・プラットがレーマン人の中での伝道の報告をしにカートランドに戻ったが、彼は教会の驚くべき成長に喜んだ。中でも彼は、ジョセフがオハイオに移ったことをうれしく思った。間もなくパーリーは、オハイオ州北部のシェーカー教徒と呼ばれる宗教グループへの伝道に召されている。

シェーカー教徒（キリスト再出現信者連合会）はイギリスに端を発し、迫害のため1774年にアメリカにやって来た。その名称は礼拝の様式から来ている。歌、踊り、音楽に合わせた手拍子などの特徴を持っていたからである。しかし服装や様式についてはクエーカー教徒と似通っていて、よくシェーキング・クエーカー教徒と呼ばれていた。1754年から1784年までシェーキング・クエーカー教徒を指揮したのは、アン・リーである。彼女は自分のことを女性の姿を取って地上に再臨したメシヤであると主張し、男女は平等であるので信者間の結婚はすべきではないと教えた。ところで、元シェーカー教徒でリーマン・コプリーという改宗者があり、彼はいまだにシェーカー教の教義の幾つかを信奉していた。そこで彼は、その件についてジョセフに指示を請うた。<sup>19</sup> ジョセフに授けられた啓示は、独身を通すことや肉を食べないこと、神が女性の姿で御姿を現されることなどのシェーカー教の教義を拒絶するものであった。また、シドニー・リグドン、パーリー・P・プラット、リーマン・コプリーがシェーカー教徒に福音を宣べ伝える者として召されている（教義と聖約49章参照）。3人はオハイオ州クリーブランド近郊のシェーカー教徒の定住地を訪れたが、パーリーによれば「彼ら（シェーカー教徒）は福音に対して耳を傾けることも従うこともまったくしなかった。」<sup>20</sup>

次いでプラット長老は西部保護区にあるたくさんの末日聖徒の支部を訪問し、そこでジョセフ・スミスが2月にカートランドに移って来たときに遭遇したと同じ霊的な狂信状態を目の当たりにした。ほかの長老たちも現実の姿を見て心を痛めた。ジョン・ホイットマーはこう書いている。「ある者たちはラバンの剣を持っていると思い込んで竜騎兵のように剣を振り回し、ある者はインディアンが頭の皮をはぐ動作をし、ある者は蛇のような動きで床の上を這い回った。それを彼らはレーマン人のもとへ船で行き福音を宣べ伝えることを表していると言う。ほかにもばかげた言うに値しないむなしくて愚かな行動が数多く見られた。このように、悪魔は善良で正直な弟子たちの一部を盲目にしている。<sup>21</sup>パーリー・P・プラットも「不実の、偽りを言う霊が教会に忍び込んでいる」<sup>22</sup>と述べている。

こうした霊にかかわる現象への確実な対処の仕方が分からないまま、兄弟たちはカートランドの預言者が翻訳作業をしていた部屋に集まり、ともに祈りをささげた。そこでジョセフが書き取らせた啓示が教義と聖約第50章である。プラット長老は啓示が下る過程を目撃することができた厳粛な経験を次のように書いている。「一つ一つの文章がゆっくりと、よく分かるように語られた。そして、それぞれの文章の間には普通の人があるまま書き留めるに十分な間が置かれた。」<sup>23</sup>

主の言葉はこの世に「偽りの霊である多くの霊があり、その霊たちは地に出て行き、世の人々を欺いている」ことを認めたくて、「サタンもあなたがたを打ち破るため

に、あなたがたを欺こうと努めてきた」と宣言した（教義と聖約50：2-3）。そして主は兄弟たちに、悪霊の見分け方と対処の仕方の要点を示された。

「それゆえ、もしもあなたがたが自分の理解できない霊が現れたのを目にし、かつその霊を受けていなければ、あなたがたはイエスの名によって父に求めなければならない。もしも父がその霊をあなたがたに与えられなければ、それが神から出ていないことが分かる。

また、その霊を制する力があなたがたに与えられるであろう。そこで、あなたがたは、その霊が神から出ていないことを、大きな声でその霊に対して宣言しなければならない。」（教義と聖約50：31-32）

### 奉獻の律法

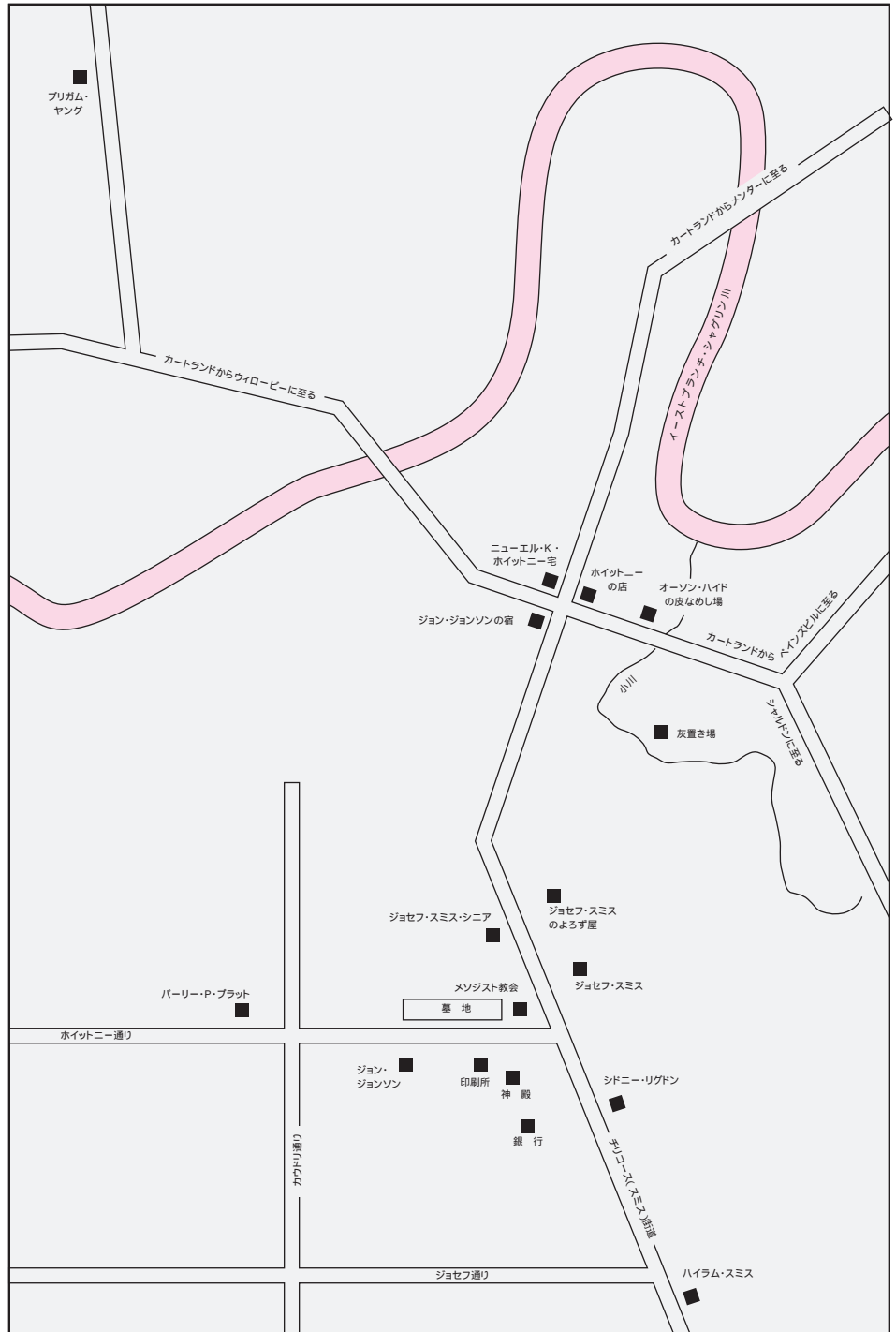
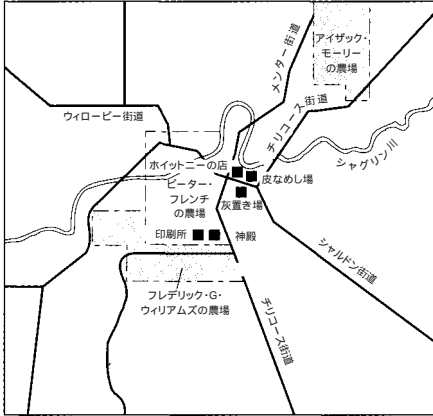
カートランドに落ち着いた預言者が次に主の御心を知りたいと切望したのは、聖徒たちの経済的な救いについてであった。多くは困窮状態で、ニューヨーク州に家を残して移住して来た聖徒たちは特にひどい状況であった。主の財政プログラムに対する預言者の関心はオハイオ到着当時、50人ほどの人々が使徒行伝の言葉を自分たちなりに解釈して協同事業を設立していたのを発見したころにさかのぼる。使徒行伝の一説には、初期の聖徒たちが一切のものを共有していたと書いてあった（使徒2：44-45；4：32参照）。このグループは「ファミリー」と呼ばれ、かつてシドニー・リグドンに従っていた人々であり、カートランド近くのアイザック・モーリーの農場で生活していた教会員である。ところが、1月中旬にジョン・ホイットマーが訪問してみると、彼らの事業が数々の問題を引き起こしていた。例えば、ヒーマン・バセットがリーバイ・ハンコックの持っていた懐中時計を売ってしまった。理由を尋ねられたヒーマンは、「ああ、それもファミリーの所有物だと思ったんですよ」と答えた。リーバイはそうした「ファミリー中心の」考え方に納得がいかず、そんな事業は長くは続かないだろうと述べている。<sup>24</sup>

しかし預言者ジョセフは、増大する教会の財政的な必要性にこたえるための、より完成された制度を確立する必要があることを感じていた。啓示の出版や宣教師のちらしの印刷などの教会の様々な事業を賄うためには収入が必要である。預言者は家族のための家を持っていなかったし、シドニー・リグドンは牧師用の家を失い、かつて信者から得ていた経済的支援ももはや皆無であった。困窮者への援助のために、そして多大な犠牲を払ってオハイオに集合して来た移住者を支持するために、金銭と物品と土地が必要だったのである。そこでジョセフは主に伺いを立てた。

こうして1831年2月4日、預言者はエドワード・パートリッジを教会最初の監督に召す啓示を受ける。これはエドワードに全時間を費やして教会のために奉仕するよう指示するものであった（教義と聖約41：9参照）。それから5日後、教会の律法を含むもう一つの重要な啓示が下った。それはパートリッジ監督の責任について追加の指示を与えるとともに、新たな財政制度の概要を明らかにするものであった（教義と聖約42章参照）。

この新たな財政制度の基本原則の一つは、地球とその上にあるすべてのものは主のものであり、人はその管理を託された者であるというものであった（詩篇24：1；教義と聖約104：13-14参照）。この奉獻の律法と呼ばれる制度の下では、教会員は動

1833年、教会はピーター・フレンチの農場を購入した。そこは拡大図が示すとおり、カートランドの教会の中心部となった。



産・不動産を問わずすべての資産を教会の監督に奉獻する。すると監督は受けた資産の中から適切な分を「受け継ぎ」すなわち受取分として個人に渡すのである。受取分の大きさは家族の事情と入り用と必要を考慮したうえで、監督と管理を任される予定の人の合議によって決められた（教義と聖約42：32 - 33；51：3参照）。家族は能力の限りを尽くして受取分を管理する。そして勤勉に働いて成功すれば年度末には剰余と呼ばれる利益が出る。そして、その家族の必要を超えた分の剰余は倉に戻され、監督が「貧しい者と乏しい者に与えるため」に用いられる（教義と聖約42：34）。このように、奉獻の律法は経済的な相対的平等を実現し、貪欲と貧困をな

1832年10月の奉獻証書

**BE IT KNOWN, THAT I,** *Edward Partridge*  
 Of Jackson county, and state of Missouri, bishop of the church of Christ, organized according to law, and established  
 by the resolutions of the Lord, on the 6th day of April, 1830, here named, and by those persons do hereby certify  
 that *Joseph Knight junr* of Jackson county, and state of Missouri, a member of said church,  
 the following described piece or parcel of land, being a part of section No. *11* township No. *10* range  
 No. *10* situated in Jackson county, and state of Missouri, and is bounded as follows, viz:—  
 Beginning forty two rods & 8/10 from the S. W. corner of S. Sec. Thence E.  
 on the N. line of S. Sec. two rods thence S. 3/4 N. thirty six rods  
 thence S. Thence W. ten rods by land owned to S. Knight thence  
 N. thirty six rods to the place of beginning containing one acre  
 and eighty one hundredths be the same more or less

And also have named the following described property, viz:— *Severing articles of workery, tinware,  
 knives, forks and spoons valued nine dollars forty three cents, sewing  
 articles of iron ware and household furniture valued twelve dollars ninety  
 two cents, one bed and bedding valued nineteen dollars, sewing  
 articles of clothing valued twenty three dollars thirteen cents, grain valued  
 seven dollars, sewing articles of jinner tools valued twenty dollars forty  
 four cents, one cart valued twelve dollars*

TO HAVE AND TO HOLD the above described property, by him the said *Joseph Knight junr*  
 to be used and managed as to him shall seem most and best. And to a consideration for the title of the above des-  
 cribed property, I the said *Edward Partridge* do bind myself to pay the same, and also to  
 pay yearly unto the said *Joseph Knight junr* bishop of said church, or his successor in office,  
 for the benefit of said church, all that I work make or appropriate more than is needful for the support and comfort  
 of myself and family. And it is agreed by the parties, that this lease and lease shall be binding during the life of the  
 said *Joseph Knight junr* and in his absence, and is not deemed void by the author-  
 ity of the church, according to its laws, to belong to the church. And in that case I do bind  
 myself to give back the longest, and also pay an equivalent for the longest, for the benefit of said  
 church, unto the said *Edward Partridge* bishop of said church, or his successor in office.  
 And further, in case of the said *Joseph Knight junr* or family's inability in consequence of re-  
 fersity or old age, to provide for themselves and members of his church, I the said *Edward Partridge*  
 bishop of said church, do bind myself to withdraw from their possession out of any funds in my  
 hands appropriated for that purpose, not otherwise disposed of, to the satisfaction of the church. And further, in case  
 of the death of the said *Joseph Knight junr* his wife or widow, being at the time a member  
 of said church, his claim upon the above described land and house property, upon precisely the same conditions  
 that her said husband had there, or also deceased; and the children of the said *Joseph Knight junr*  
 in case of the death of both their parents, also have claim upon the above described property, for  
 their support, until they shall be of age, and no longer; subject to the same conditions partly that their parents  
 would provided however, should the parents not be members of said church, and in possession of the above described  
 property at the time of their death, the claim of the children of above described, is null and void.

In testimony whereof, WE have hereunto set our hands and seals this *20th* day of  
*October* at the year of our Lord, one thousand eight hundred and thirty *two*  
 in presence of

*John Lovell* [SEAL]  
*Edward Partridge* [SEAL]  
*Joseph Knight junr* [SEAL]  
*Retscy Knight*

くすことを目的としたものであった。

教会員は追加の啓示を受ける度に奉獻の律法への理解を徐々に深めていった。例え  
ば、預言者は主に、移住して来る聖徒たちのために土地をどう手配したらよいか尋  
ねているが、それに対して主は、カートランドに土地を持つ者が無償で土地を分け  
与えるよう命じておられる。さらに、土地の購入を増やすための資金を集めるよう  
にとの命令も下された（教義と聖約48：2 - 3参照）。こうして5月、泥に汚れたニュ  
ーヨークからの聖徒たちの到着が始まり、彼らを定住させる必要が出てきた。この  
全責任を託されたのがパートリッジ監督で、彼は預言者の指示を求めた。そこで預  
言者は監督に、受取分を各人に割り当てるよう指示している（教義と聖約51：3参照）。



奉献の律法と共同制度に関する重要な啓示

日付	受けた場所	記載箇所	内容
1831. 2. 4	オハイオ州カートランド	教義と聖約41：9	エドワード・パートリッジへの監督の召し
1831. 2. 9	オハイオ州カートランド	教義と聖約42：30 - 34	奉献の律法の説明
1831. 2	オハイオ州カートランド	教義と聖約44：6	律法に従い貧しい人々の世話をするようにとの聖徒たちへの指示
1831. 3. 7	オハイオ州カートランド	教義と聖約45：64 - 75	シオンへの集合の召し 新エルサレムへの展望
1831. 3	オハイオ州カートランド	教義と聖約48章	オハイオに定住した聖徒たちへの、シオンで受け継ぎを得るために金銭をためるようにとの指示
1831. 5	オハイオ州トンプソン	教義と聖約51：3節以下	家族の人数、事情と入り用と必要に応じて受取分（管理の職）を割り当てるようにとのパートリッジ監督への指示、監督の倉の設立
1831. 6	オハイオ州カートランド	教義と聖約56：16 - 20	富者も貧者も悔い改めるようにとの指示
1831. 7. 20	ミズーリ州ジャクソン郡	教義と聖約57章	受け継ぎの地として、またシオンの中心の場所としてミズーリの地が指定され、奉献されることの知らせ
1831. 8. 1	ミズーリ州ジャクソン郡	教義と聖約58：1 - 9, 50 - 57	シオンは多くの艱難の後に来る、初期の移住者はシオンの基を据えるという誉れを受ける、インディペンデンスで土地を購入せよとの指示
1831. 8	オハイオ州カートランド	教義と聖約63：27 - 31	血ではなく金銭で土地を購入するようにとの聖徒たちへの指示
1831. 11. 12	オハイオ州カートランド	教義と聖約70：1 - 8	長老たちへの啓示の管理人としての召し、余剰分は教会に返すようにとの指示
1831. 12. 4	オハイオ州カートランド	教義と聖約72章	カートランドでの教会の第二監督としてのニューエル・K・ホイットニーへの召し、監督のその他の義務
1832. 3	オハイオ州ハイラム	教義と聖約78章	教会が自立するためにシオンに倉を設立しさらに人々を組織するようにとの指示
1832. 4. 26	ミズーリ州ジャクソン郡	教義と聖約82：11 - 12	シオンとカートランドでの諸事を管理するために共同制度を確立するようにとの指示
1832. 4. 30	ミズーリ州インディペンデンス	教義と聖約83章	未亡人や孤児は教会の奉献により倉に集められた物品により援助を受けるべきであるとの指示
1832. 11. 27	オハイオ州カートランド	教義と聖約85章	シオンで受け継ぎを得るには進んで奉献の律法を守って生活すべきであるとの教え
1833. 6. 25	オハイオ州カートランド	『教会歴史』( <i>History of the Church</i> ) 1：364 - 365	教会員の受取分の面積についての預言者からエドワード・パートリッジ監督への手紙
1833. 8. 2	オハイオ州カートランド	教義と聖約97：10 - 21	シオン（ジャクソン郡）に家（神殿）を建てるようにとの指示、シオンは心の清い者である
1833. 8. 6	オハイオ州カートランド	教義と聖約98章	憲法に従うようにとの聖徒たちへの指示、戦争に関する律法と赦しに関する律法
1833. 10. 12	ニューヨーク州ペリーズバーグ	教義と聖約100：13 - 17	懲らしめを受けたシオンは贖われるべきである
1833. 12. 10	オハイオ州カートランド	『教会歴史』1：453 - 456	預言者から聖徒たちへの土地を保有しておくようにとの勧告、聖徒を受け継ぎの地へ戻して下さるようにとの主への嘆願
1833. 12. 16	オハイオ州カートランド	教義と聖約101章	ジャクソン郡から追放された理由、シオンはその場所から移されることはない、聖徒たちは憲法の手続きに従うべきである
1834. 2. 24	オハイオ州カートランド	教義と聖約103章	シオンは苦難の後に贖われる、シオンは力によって贖われる
1834. 4. 23	オハイオ州カートランド	教義と聖約104：47 - 66	カートランドとシオンを別個の共同制度下に置くようにとの指示、神聖な金庫を設けよとの指示
1834. 6. 22	ミズーリ州フィッシング川	教義と聖約105章	シオンの贖いは聖徒が備えをし、エンダウメントを受け、その数を無数に増し加えるまで持ち越される、シオンの贖いの後、共同制度は解消される
1835. 9. 1	オハイオ州カートランド	『教会歴史』2：254	1831年6月のミズーリ州西部に行くようにとの示現に関する長老たちへの預言者の手紙

ウィリアム・O・ネルソン, *Ensign* 『エンサイン』1979年1月号, 23からの翻案

◀ ジョセフ・スミスへの奉獻の律法に関する啓示は、彼がオハイオに到着した直後の1831年2月の啓示に端を発する。以来4年半にわたり、主は奉獻の律法に関する数々の原則を示してこられた。表から明らかなように、そのほとんどはカートランドで授けられたものである。

「また、わたしがあなたがたに命じたように、あなたがたが一つとなるために、すべての人がこの民の中で正直に振る舞い、平等であり、等しく受けるようにしなさい。」  
(9節)

ジョセフ・スミスはコールズビルからの移住者に、カートランドの東数マイルのオハイオ州トンプソンに定住するよう指示した。そこはリーマン・コプリーの所有する土地であった。セネカ郡からの聖徒たちはアイザック・モーリーの農場に行くよう割り当てられた。聖徒たちはそこで丸太小屋を建て、作物を植えた。パートリッジ監督はトンプソンで奉獻の律法の適用を開始しようとしたが、対立が起こったために完全実施が阻まれてしまった。リーマン・コプリーが自分の農場に末日聖徒を住まわせるとの契約を破り、立ち退きを命じたのである。この問題について知らせを受けた預言者は主に指示を求め、一つの啓示を得た。それはコールズビル支部の支部長であるニューエル・ナイトとコプリーの農場に住む人々に「すべての罪を悔い改め……西の地域へ、ミズーリの地へ、レーマン人の境の地へ旅をしなければならぬ」(教義と聖約54:3,8)との指示を与えるものであった。その後間もなく、少なくとも14の家族が、ニューエル・ナイトの指示の下にミズーリの辺境に向かった。<sup>25</sup>

さて、2月のエドワード・パートリッジを監督に召す啓示の中で、主はジョセフとシドニーに聖文の翻訳を続行するように命じておられる。「さらにまた、わたしの僕ジョセフ・スミス・ジュニアが住んで翻訳するための家を一軒建てるのは、適切なことである。」(教義と聖約41:7)そして5日後、預言者は次の啓示を受けた。

「あなたは求めなければならない。そうすれば、わたしが定めたように、わたしの聖文が与えられるであろう。そして、それは安全に保存されなければならない。

また、あなたはそれについて黙していて、そのすべてを受けるまで人々に教えないようにすることが必要である。」(教義と聖約42:56-57) こうして二人は春の間中ほぼ毎日、アイザック・モーリーの農場にジョセフとエマのために建てられた小さな家で熱心に翻訳の業を進めた。

この時期、エマは陣痛を迎えた。病気が完全に快復しない状態で、しかも冬のさなかのニューヨーク州からのつらい旅を経験した後の出産である。彼女は4月30日に双子を産んだが、彼らはわずか3時間の命だった。これでエマとジョセフは、彼らのもとに生まれた3人の子供すべてを亡くしたことになる。偶然ではあるが、ジュリア・マードックのもとにも5月1日に双子が生まれた。しかしジュリアの方は、産後間もなく息を引き取った。このとき夫のジョン・マードック長老は伝道に出ようとしていたところで、彼は残された子供たちを養子に迎えたいとのエマとジョセフの申し出を喜んで受け入れた。こうしてエマの悲しみは和らげられ、彼女は二人の子、ジュリアと名付けた女の子とジョセフと名付けた男の子を自分の子供として育てることになった。

## オハイオでの総大会

第4回の総大会は1831年6月3日金曜日、カートランドの村外れの学校で開かれた。オハイオで伝道していた多くの宣教師たちがこの大会のために戻っていた。議事録には63人の神権者が出席したとある。<sup>26</sup> ジョセフ・スミスの言葉としてこう書かれて



神殿の北側の通りに面した墓地。ジョセフとエマの双子の子供ルイーザとサダウスはここに埋葬されている。ハイラムの妻のジェルシャ・スミス、預言者の祖母のメアリー・デューティー・スミスも同様である。

いる。「主は〔この大会において〕聖徒たちが心ゆくまで満足できるような力を発揮されました。』<sup>27</sup>ジョセフは開会行事の後で、主がふさわしい長老たちを「大祭司に聖任する」ことを望んでおられると発表した。<sup>28</sup> これは、この神権時代初の大祭司への聖任である。預言者は5人の兄弟を大祭司に聖任した。その中の一人ライマン・ワイトは、同じ会でほかの数人を聖任している。またジョン・コリルとアイザック・モーリーはエドワード・パートリッジの副監督としての召しを受け、ライマン・ワイトから按手を受けた。<sup>29</sup>

大会の間中、御霊が預言者に注がれた。それは「並外れたもので、彼は黙示者ヨハネが今イスラエルの十部族とともにあり、……長い散乱からの帰還の準備をさせている」と述べた。<sup>30</sup> 預言の霊はライマン・ワイトにも降り注いだ。彼はこう語っている。「救い主の再臨は太陽が東から昇るように全地を覆うのです。」また彼は、何人かの兄弟たちが自らの宗教のために殉教し、キリストへの証を血で結び固めるであろうと述べている。<sup>31</sup> 預言者ジョセフ、ハービー・ホイットロック、ライマン・ワイトは、天が開いてイエス・キリストが御父の右に立っておられるのを見た。ライマンは、聖徒のために執り成しをしてくださる神の御子を見たこと証している。<sup>32</sup>

しかし、大会の期間中に起こったすべての出来事が歓迎すべきものだったわけではない。過去数か月にわたってそうであったように、悪霊の現れが見られた。教会歴史記録者のジョン・ホイットマーはこう記録している。「悪魔が自らの力を人に知らしめようとしていた。』<sup>33</sup>集会を通して忌まわしい音が鳴り、数人の男性が悪霊に捕らえられてのたうち回った。ハービー・グリーンはけいれんを起こして床に投げ出されたが、預言者が彼に手を置いて悪霊を追い出した。ハービー・ホイットロックとジョン・マードックは金縛りに遭い、口が利けなかった。ジョセフ・スミスは、これらはすべて「不法の者」が現れるという聖文の成就であると語った（2テサロニケ2：3参照）。そして、サタンの策略を見抜いた預言者はキリストの名によりサタンに去るように命じた。このことは出席した人々に「喜びと慰め」をもたらした。<sup>34</sup> カートランドでのこの初期の経験は聖徒たちに、いたずらに悪霊にかかわることや霊的にあまりにも熱狂しすぎることを警鐘となった。

こうしてニューヨーク州の聖徒たちのカートランドへの集合と教会本部の設立の、きわめて重要な最初の数か月間が過ぎていく。この間聖徒たちは何度となく悪霊の現れを体験するが、貴重な教えを受け、神の力が悪の力に勝つ様子も目撃した。ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは『聖書』の靈感訳の作業を進めた。そして奉獻の律法という永遠の原則も示され、偉大な末日の伝道の業のためにさらなる基礎が築かれたのであった。

## オハイオへの集合

### 注

1. *An Early Latter Day Saint History : The Book of John Whitmer* 『初期の末日聖徒史 ジョン・ホイットマーの書』 F・マーク・マツキヤーナン, ロジャー・D・ローニラス編 (Independence, Mo.: Herald Publishing House, 1980), 32で引用
2. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 35で引用
3. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 36参照
4. “Journal of John Murdock” 「ジョン・マードックの日記」 1830年11月 1859年7月参照, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
5. *History of the Church* 『教会歴史』 1: 146で引用
6. 『教会歴史』 1: 146
7. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』 プレストン・ニブレー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 196
8. スミス 『ジョセフ・スミスの生涯』 200 - 205
9. 『教会歴史』 1: 146
10. ジョン・コリル, *Brief History of the Church of Christ of Latter Day Saints* 『末日聖徒キリスト教会略史』 (St. Louis: John Corrill, 1839), 13. ジョセフ・スミス “Try the Spirits” *Times and Seasons* 「霊を試しなさい」 『タイムズ・アンド・シーズンズ』 1842年4月1日付, 747も参照
11. コリル 『末日聖徒キリスト教会略史』 13
12. 『タイムズ・アンド・シーズンズ』 1842年4月1日付, 747で引用
13. 『教会歴史』 1: 146
14. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 42で引用
15. コリル 『末日聖徒キリスト教会略史』 13
16. 『教会歴史』 1: 158
17. 『教会歴史』 1: 158
18. 『教会歴史』 1: 215 - 216で引用。 *Millennial Star* 『ミレニアルスター』 1864年12月31日付, 834も参照
19. 『教会歴史』 1: 167参照
20. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』 モルモン名著シリーズ, パーリー・P・プラット編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 47
21. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 62で引用
22. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』 48
23. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』 48
24. リーバイ・W・ハンコック “Levi Hancock Journal” 「リーバイ・ハンコックの日記」 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 81
25. ラリー・C・ポーター “A Study of the Origins of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints in the States of New York and Pennsylvania, 1816 - 1831” 「ニューヨーク, ペンシルベニア両州における末日聖徒イエス・キリスト教会の起源に関する研究, 1816 - 1831」 博士論文, プリガム・ヤング大学, 1971年, 299 - 303参照
26. *Far West Record : Minutes of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1830 - 1844* 『ファーウェスト記録 末日聖徒イエス・キリスト教会議事録, 1830 - 1844年』 ドナルド・Q・キャノン, リンドン・W・クック編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983), 6 - 7参照
27. 『教会歴史』 1: 175
28. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 66で引用
29. キャノン, クック 『ファーウェスト記録』 7参照
30. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 66で引用
31. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 67で引用
32. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 67で引用。 リーバイ・ハンコック 「リーバイ・ハンコックの日記」 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 91 - 92も参照
33. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 71で引用
34. マツキヤーナン, ローニラス 『初期の末日聖徒史』 71で引用。 『教会歴史』 1: 175も参照

# シオンの地への集合

年表	重要な出来事
1831.7	コールズビルの聖徒たちミズーリに到着
1831.8.2	シドニー・リグドン、ミズーリを集合の地として奉獻
1831.8.3	ジョセフ・スミス、インディペンデンスの神殿用地を奉獻
1832.6	『イブニング・アンド・モーニング・スター』( <i>Evening and Morning Star</i> )の創刊号発行

シオン、聖なる都、新エルサレム。エノクはシオンを建設し（モーセ7：19 - 21参照）、イザヤは将来のシオンを予見し（イザヤ33：20；52：1，8参照）、黙示者ヨハネは天からシオンが降る様子<sup>くだ</sup>を示現で見ている（黙示21：2参照）。『モルモン書』の発刊はこうした夢を明確なものにした。なぜなら『モルモン書』には、アメリカが新エルサレム建設の場所であることが述べられているからである（エテル13：2 - 3；3ニーファイ20：22参照）。それゆえに『モルモン書』は、シオン建設の時と場所を知りたいという聖徒たちの熱意に火をつけたのである。聖徒たちは、艱難と荒廃が悪人のうえに送られる日が間もなく訪れるが、その日に安全でいられるのはシオンだけだと信じていた（教義と聖約29：7 - 9；45：65 - 71）。そして1830年12月に示されたエノクの書の中には、エノクと彼の町が義にかなってシオンを建設する話が、具体的な例として出ていたのである。「主はその民をシオンと呼ばれた。彼らが心を一にし、思いを一にし、義のうちに住んだからである。そして、彼らの中に貧しい者はいなかった。」（モーセ7：18）

## ミズーリへの旅

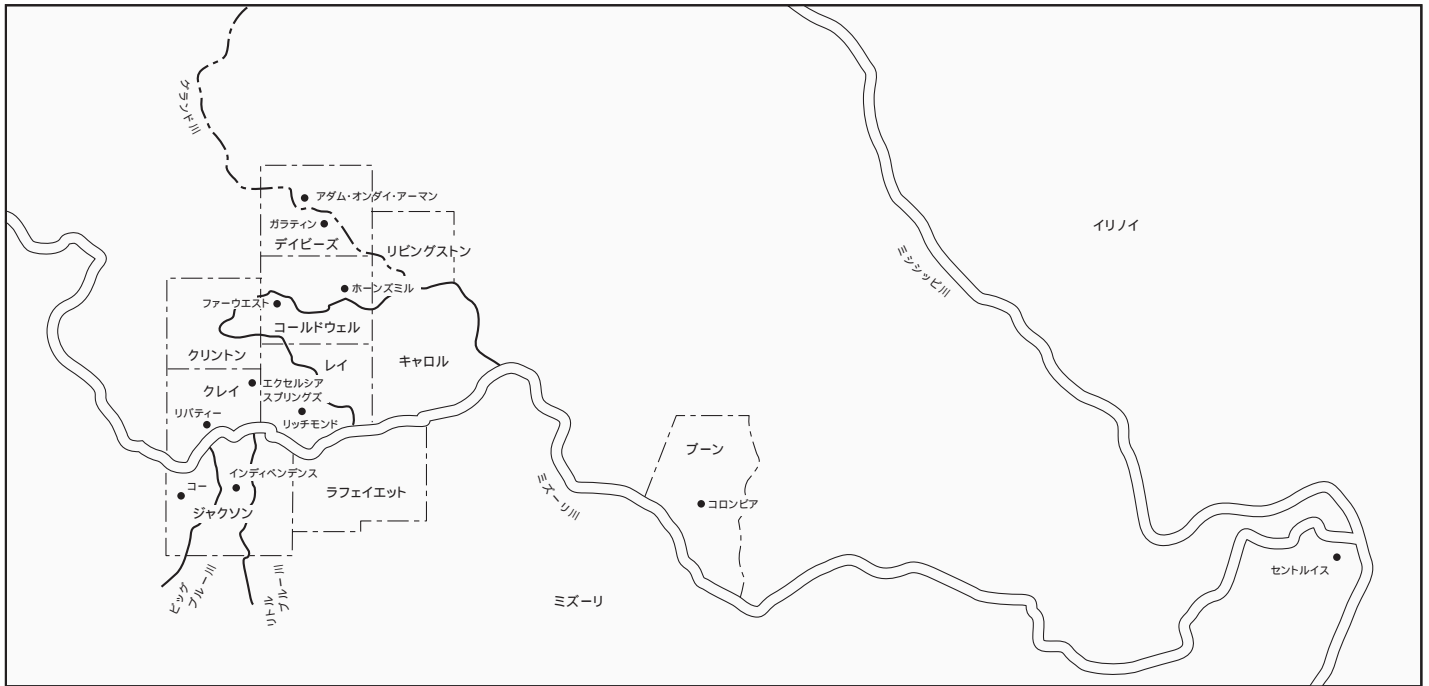
このようにして、シオンの場所の特定とシオンの建設は末日聖徒にとって最重要の課題となり、1831年初頭には、シオンの場所についての憶測が出始めている。そのような中で第4回総大会（1831年6月3日）の翌日、ジョセフ・スミスと他の教会指導者にミズーリへ行くようにとの啓示が下った。ミズーリで受け継ぎの地が明らかにされるというのである。それに加えて、二人ずつ組になって13組の宣教師がそれぞれ別のルートを通してミズーリに向かい、途中で福音を宣べ伝えるように召された（教義と聖約52：3 - 8，22 - 33；56：5 - 7参照）。指導者や長老たちが旅支度を整え始めたそれからの2週間、カートランドの町は大いなる興奮に包まれた。主は次のような約束を下された。

「このようにしてわたしが言ったように、あなたがたは忠実であれば、あなたがたの受け継ぎの地であるが、今はあなたがたの敵の地である、ミズーリの地に集まって喜びを得るであろう。

しかし見よ、主なるわたしは、その時が来れば速やかに町を築き、忠実な者に喜びと歓喜の冠を与えよう。」（教義と聖約52：42 - 43）

ニューエル・ナイトが預言者に、オハイオ州トンブソンでの奉獻地に関する問題について尋ねたのは、ちょうどこのころのことである。その答えは、コールズビルの聖徒たちに「西の地域へ、ミズーリの地へ、レーマン人の境の地へ旅を」するよう指示するものであった（教義と聖約54：8）。このように、3つのグループが同時に西の境の地へ向けて旅立ち、先方で落ち合うことになった。ジョセフ・スミスのグル

## シオンの地への集合



ミズーリ州の地図。カンザスシティのコータウンシップはジャクソン郡の中にある。コータウンシップはヒッグブルー川の西側のジャクソン郡をすべて包含していた。

ープと宣教師のグループ、それにコールズビル支部の人々である。

この旅への準備が進む中、ミズーリ以降の教会において重要な役割を演じる一人の男、ウィリアム・ワインズ・フェルプスが、妻のサリーと子供たちを引き連れてニューヨーク州カナダダイガからやって来た。ウィリアム・W・フェルプスは39歳の有能な人物で政党新聞の編集長をしていたことがあり、文筆と出版にかけては専門家であった。彼はかつてニューヨーク州の副知事候補となったことがある。教会への改宗のきっかけは『モルモン書』を購入したことであった。「わたしはこの書物により聖なる預言者を知る鍵を見いだした。またこの書物により神の奥義が開かれ、それをわたしは喜んでいる。神の慈しみがどのようなものか、またこの1冊の書物の持つ価値がいかなるものかを言い当てることのできる者はいない。」後に彼は、自分の改宗と『モルモン書』についてそのように書いている。<sup>1</sup> フェルプスは、自分は主の御心を行うためにカートランドにやって来たと述べた。彼にあてた啓示には、彼が「召され、選ばれ」たとあるが、まずはバプテスマと神権への聖任を受け、次いでジョセフ・スミスやシドニー・リグドンとともにミズーリに行くことになった。ミズーリ到着後、彼はオリバー・カウドリの印刷の仕事を手伝い、教会の学校で子供たちが使う本の選択と執筆に携わった（教義と聖約55：1 - 5参照）。

6月19日、ジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、エドワード・パートリッジ、マーティン・ハリス、ジョセフ・コー、ウィリアム・W・フェルプス、シドニー・ギルバートと妻のエリザベスによる、カートランドからミズーリ州西部境界の地への約900マイル（約1,450キロ）の旅がついに始まった。長年の望みがかなえられ、彼らはその時点では正確な地点は定かではなかったものの、シオンの地に向かって歩を進めたのである。預言者たちのグループはまずシンシナティへ行き、そこで蒸気船に乗り込んでオハイオ川をミシシッピ川との合流点まで下り、そこからセントルイスへとさかのぼる行程を取った。途中彼らは、ニューエル・ナイト率いるコール



ウィリアム・ワインズ・フェルプス（1792 - 1872年）はニュージャージー州ハノーバーで生まれ、ユタ州ソルトレーク・シティで死去した。

多彩な才能に恵まれた活動的な彼は、編集者、弁護士、賛美歌作曲家、宣教師、教育者、代議士、従軍牧師、ソルトレーク・シティのテンプルスクウェアのエンダウメントハウスでの儀式執行者などの顔を持つ。

## 時満ちる時代の教会歴史



ゼベディー・コルトリン（1804 - 1887年）は1835年2月28日に組織された七十人第一委員会7人の会長の一人として召され、聖任された。

ズビルの聖徒たちと合流している。<sup>2</sup>

ミズーリへの旅は簡単なものではなかった。24台の幌馬車に家財や食糧を積んでオハイオ州トンプソンをたったコールズビル支部の人々にとっては特にそうであった。<sup>3</sup> 彼らはオハイオ州ウェルズビルで幌馬車を手放し、蒸気船でミシシッピ川との合流点まで下り、そこからミシシッピ川をさかのぼってセントルイスに着いた。セントルイスでは、ニューエル・ナイトとそのグループ、ならびに預言者のグループの中の数人が蒸気船でミズーリ川をさかのぼることを選択、そのために切符を購入できるまで数日間待機を余儀なくされた。しかし、預言者たちは徒歩でインディペンデンスを目指し、7月の半ばに到着している。<sup>4</sup> 蒸気船を利用した人々よりおよそ10日ほど早い到着であった。預言者は日記に「長く大変な」旅であったと記し、「度重なる窮乏と苦難」<sup>5</sup>の末にようやく到着したと語っている。またニューエル・ナイトは、コールズビルの聖徒たちを導くために、持っていた「すべての知恵を使わなければならないかった」と述べている。<sup>6</sup>

ほとんどの長老たちの組は、召しを受けてから2週間以内に旅仕度を整えることができた。彼らは「互いにほかの人の土台の上に建てることのないように、またほかの人の通った跡を旅することのないようにしなければならない」（教義と聖約52：33）と命じられていたために、各々が別のルートを通ることになった。これらの宣教師たちの中に、とりわけ目立った成功を収めた者たちがいる。数か月前にミズーリから戻ったばかりのパーリー・P・プラットと弟のオーソンは、1831年の夏のほとんどをミズーリ、オハイオ、インディアナ、イリノイでの伝道に費やした。彼らは「新しい、しかもその多くはまだ開かれていない地で、苦難も多かった」ものの、大勢の人々にバプテスマを施し、伝道の途中立ち寄った各州に教会の支部を築いている。こうして、彼らがミズーリ州西部に着いたのは、9月になってからのことであった。<sup>7</sup>

成功したもう一組は、ゼベディー・コルトリンとリーバイ・ハンコックである。カートランドを出発した彼らは南下し、インディアナ州インディアナポリスに向かって国道を西に向かった。バプテスマは最初こそ少なかったものの、インディアナ州ウィンチェスターに着くと話を聞く準備のできた人々が待っていた。リーバイはこう書いている。「わたしたちは続けてそこで福音を説き、周囲の地区を回った。そして教会の大きな支部を起すまでに至った。」彼らはワードという名のタウンシップでも同様の成功を収めた。「わたしたちは両方の地で成功を見、教会員数はそれぞれ100人を数えた。」すると、こうした二人の存在が地元の人々を刺激し、彼らは翌朝10時までに町を出るよう脅された。

しかし二人はその町にとどまることを決意し、約束してあった11時の集会に出かけで行った。するとそこには二人を脅迫した者たちも来ていた。リーバイが説教の中で、父親が独立戦争で自由のために戦ったことを話し、次いで親戚の一人であるジョン・ハンコックが独立宣言に署名をした最初の人物であることを話すと、聴衆は大いに感銘を受けた。リーバイはこう記している。「集会の後でわたしたちは水のある所に行き、17人にバプテスマを施した。その中には、前日にわたしたちを追放すると脅した人々も含まれていた。」二人は神の守りと助けに感謝した。彼らがミズーリに到着したのはほかの人々よりも遅く、ゼベディーは10月、病気のために滞在を

## シオンの地への集合



リーバイ・ハンコック(1803 - 1882年)  
は1835年2月28日に組織された七十人第一  
定員会の7人の会長の一人として召され、  
聖任された。

余儀なくされたリーバイは11月であった。<sup>8</sup>

宣教師たちの働きの中には、影響力の大きさに比してあまり人に知られていないものがしばしばある。その典型が23歳のサミュエル・スミスと41歳のレイノルズ・カフーンによるインディアナ州南部の伝道での旅であった。二人はグリーン郡のカフーンの親戚のところに3日間滞在し、2か月半後、帰還の途中で再び同地に2週間以上滞在した。そのときに改宗した多くの人々の中にいたのがジョン・パッテンである。ジョンには24歳になるデビッドという名の兄弟がミシガンにいた。ジョンは次の年の春、デビッドに手紙を書いて回復された福音について紹介し、聖霊の賜物を受けたことを述べている。それに対してデビッドはこう述懐している。「その言葉にわたしは跳び上がらんばかりに喜びました。そして、すぐに出かけて行って自分の目で確かめようと思ったのです。」<sup>9</sup>彼は1832年6月、兄弟のジョンによりバプテスマを受け、それから3年後、この神権時代の十二使徒の一人に召されている。

長老たちの中には急いで旅をした人々もいた。例えばライマン・ワイトとジョン・コリルは、6月14日から8月13日までの2か月間で歩き切っている。<sup>10</sup> しかしながら、預言者が開いた大会に間に合うよう到着した長老たちはほとんどいなかった。インディペンデンス到着後、独身の長老たちの中にはそこを永住の地とする人もいた。それに対して東部に家族を残している人々は、家に戻った。この宣教師たちの働きにより、オハイオ州カートランドとミズーリ州インディペンデンスの間に住む大勢の人々が末日聖徒について、またその信条について知ることとなった。そして、それから後の宣教師たちが、これら初期の宣教師たちのまいた種の実りを刈り取ることになるのである。

次に紹介するポリー・ナイトの事例は、当時の多くの教会員が抱いていた強い望みを如実に物語っている。ニューエル・ナイトの母親でコールズビル支部の会員であったポリー・ナイトは、命を懸けてシオンへの旅に参加した。ポリーの健康状態は衰えてきていたが、約束の地を見たいとの気持ちがあまりにも強かったために、彼女一人オハイオに残ることを拒んだのである。それだけではなく、途中友人たちと体を休めながらゆっくりと目的地に向かうことも拒んだ。彼女の息子はこう書いている。「彼女のたった一つの、最大の望みは、シオンの地に自分の足で立つことでした。自分の体でシオンの地に入ることでした。」ニューエルは旅の途中で彼女が死ぬ可能性があることを考え、ある所で下船し、<sup>ひつぎ</sup>棺を作るための木材を購入している。ニューエルは後にこう書いている。「主は母に望みを授けてくださいました。そして母はその足でシオンの地に立つことができたのです。」<sup>11</sup>ポリーは到着後2週間して亡くなった。こうして彼女は、ミズーリの地に埋葬された最初の末日聖徒となった。主は次のような慰めの言葉を授けておられる。「生きている者は地を受け継ぎ、死者はその労苦をすべて解かれて休み、彼らの業は彼らについて行くからである。そして、彼らは、わたしが彼らのために用意した父の住まいで冠を受けるであろう。」(教義と聖約59:2)

## シオンの地を特定する

預言者をはじめ兄弟たちは、栄光の新エルサレムがいつの日か自分たちが今いる場所の近くに建設されることを知っていた。啓示の中でシオンが「レーマン人に近い



## 時満ちる時代の教会歴史

境の地」(教義と聖約28:9)に建てられると言われていたからである。そして、その地はミズーリであった(教義と聖約52:2, 42参照)。しかしどこなのだろうか。西の境界は約300マイル(約480キロ)の距離がある。預言者はこう尋ねた。「いつシオンはその栄光のうちに築き上げられ.....あなたの神殿は、どこに立つのでしょうか。」<sup>12</sup>それに対する1831年7月20日の主の答えは簡潔かつ率直なものであった。

「この地、すなわちミズーリの地.....は、わたしが聖徒の集合のために指定し、聖別した地である。

.....見よ、今インディペンデンスと呼ばれている場所は中心の場所であり、神殿の建てられる地点は西方の、郡庁舎から遠くない地所にある。」(教義と聖約57:1, 3)

ジョセフ・スミスも集まった聖徒たちも、約束の地シオンの正確な位置が示されたことに胸を躍らせた。

集合した聖徒たちは、ジャクソン郡が丘や渓谷に恵まれた美しい地であることを発見した。気候はさわやかで、空気や水も清浄であり、木々も青々としている。郡には二つの澄み切った流れ、すなわちビッグブルーとリトルブルーの二つの川があり、中央の高台を潤しながら北のミズーリ川に緩やかに流れ込んでいた。くるみやヒッコリー、桜、にれ、かしなどの木々が川岸を縁取り、いちごつなぎのじゅうたんを敷き詰めたような青々とした平原は、家畜を育てるのにこの上ない環境である。この地区はまだあまり開拓が進んでおらず、郡の中心地であるインディペンデンスも4年前に開かれたばかりであった。預言者ジョセフ・スミスはこの地域には大いなる可能性があると感じ、ミズーリ州ジャクソン郡はエデンの園があった場所であると教えている。<sup>13</sup>

聖徒たちにとってこの地が魅力的だったもう一つの要素は、土地が安くしかもすぐに手に入るということだった。1831年の段階で、この未開拓の土地全域をエーカー当たり1ドル25セントで買うことができた。主は兄弟たちに、可能なかぎりたくさんの土地を購入するように指示しておられる(教義と聖約57:3-5; 58:37, 49-

ミズーリ州インディペンデンスの神殿用地は1831年8月3日、ジョセフ・スミスにより奉獻された。預言者が立てて神殿用地を奉獻した実際の場所は現在チャーチ・オブ・クライスト(ヘドリック派)の所有となっている。もともとの神殿用地のほかの部分には、末日聖徒イエス・キリスト教会ならびに復元末日聖徒イエス・キリスト教会の所有に分かれている。

神殿用地の北東の隅にあるのがチャーチ・オブ・クライストの本部。写真の左下に見えるのが復元末日聖徒イエス・キリスト教会のタバナクル、右下が末日聖徒イエス・キリスト教会の訪問者センターである。



## シオンの地への集合

52；63：27参照）。またシドニー・リグドンは「シオンの地の詳細」を記すように命じられた（教義と聖約58：50）。東部の聖徒たちに配付して資金を得るためである。こうして、シドニー・ギルバートが「教会のために代理人となり」、資金の受け取りと土地の購入を行った（教義と聖約57：6）。また、すでに監督の職にあったエドワード・パートリッジは、購入した土地を分轄して集合してきた聖徒たちに「受け継ぎの地」として分け与えるように命じられた（教義と聖約57：7）。主はまたシオンについてこう警告しておられる。「これらすべてのことを秩序正しく行いなさい。... 集合の業はあわてることのないようにし、また逃げるようにして行うことのないようにしなさい。」（教義と聖約58：55 - 56）

## シオンの地と神殿用地の奉獻

ジョセフ・スミスにとって、オハイオに戻る前にしておかなければならない大切なことが二つあった。シオンの地を聖徒たちの集合の場所として奉獻することと、神殿用地そのものを奉獻することである。この二つとも預言者ジョセフ・スミスの管理の下に行われた。1831年8月2日の特別集会において、12人の兄弟たち（うち5人はコールズビル支部の会員）がイスラエルの十二部族を記念して、「インディペンデンスの12マイル（約19キロ）西のコーというタウンシップで、シオンの基礎としての」最初の丸太を置いた。<sup>14</sup> 土地を聖別して主に奉獻したのはシドニー・リグドンである。シドニーはこの会の中で聴衆にこう呼びかけている。「あなたがたはこれまで自らの地では守ってきたことのない神の律法を、この地では守ると約束しますか。〔聴衆がこたえる。〕約束します。あなたがたはここにやって来るほかの兄弟たちも神の律法を守るように見守っていくと約束しますか。〔出席した者たち、再びこたえる。〕約束します。〔奉獻の〕祈りの後で〔リグドン長老は〕立ち上がり、こう言った。わたしは今、主から権能を受けた者として、イエス・キリストの御名により宣言します。この地は聖徒たちと最も遠い時代にまでさかのぼる主の忠実な僕たちすべての所有と受け継ぎの地として聖別され、主に奉獻されました。アーメン。」<sup>15</sup>

インディペンデンスでの神殿用地の奉獻は、その翌日に行われた。この儀式も簡潔ではあったが靈感に満ちたものであった。シオンの栄光と威厳を歌った詩篇第87篇の朗読に引き続き、神殿の南東の角を示す地点に1個の石が据えられた。次いでジョセフ・スミスが祈りをもって神殿用地を奉獻している。ジョセフは「その様子は厳粛で印象深いものであった」と報告している。<sup>16</sup>

兄弟たちは以前に与えられていた指示に従い（教義と聖約52：2参照）、預言者の管理の下に8月4日、コータウンシップで大会を開いた。大会ではシドニー・リグドンが聖徒たちに、天から下されるすべての戒めに従うように勧告するとともに、教会の他の諸事の処理が行われた。こうして兄弟たちは散会してオハイオに戻ることになる。<sup>17</sup>

## オハイオへの帰還

（ミズーリ川をカヌーで下る）帰還の旅は、1831年8月9日に始まった。彼らが最初の夜に立ち寄ったのはフォートオサージで、インディアンの襲撃から人々を守るために政府が設けたとりでである。そして3日目、W・W・フェルプスが示現を見る。

## 時満ちる時代の教会歴史

「恐ろしい力を持った滅ぼす者」が水の上を進む様子である。その場に居合わせた人々は、悪魔の立てる物音を耳にしている。<sup>18</sup> この出来事は彼らに強い衝撃を与え、中には身の危険を覚える人々もいた。

翌朝、ジョセフは長老たちに向けられた一つの啓示を受けた。それは、川の両岸に住む者たちが「不信仰で滅びつつあるときに」、一行全員が急いで家に戻る必要はないというものであった（教義と聖約61：3）。水、特に「これらの水」（ミズーリ川）は旅人にとって危険であることが言明された。しかし主はこうも示しておられる。「しばしの後、彼らが自分の使命を果たすならば、彼らが水路を取ろうと、陸路を取ろうと、問題ではない。」（教義と聖約61：5，22）長老たちは二人一組で旅をし、「悪人の集まりの中で御言葉を告げ」るように命じられた（教義と聖約61：33）。翌日兄弟たちは、いまだシオンの地を目指して進んでいた何人かの長老たちとの喜びの出会いを体験する。ジョセフ・スミスは彼らのために啓示を受けた。そのまま旅を続け、シオンの地で集会を開き、ともに喜ぶようにというものであった（教義と聖約62：1 - 4参照）。

ジョセフ・スミスたちの一行がカートランドに到着したのは8月末のことであった。彼の記録には、途中での福音を宣べ伝えようとする努力は、サタンが人々の目をくらませていたために不成功に終わったとある。<sup>19</sup> また彼はオハイオの聖徒たちに、シオンの地を特定するうえで自分たちが経験した栄光あふれる出来事を語っている。この時点で主は、シオンの聖徒たちのために資金を提供したオハイオの教会員は「この世において受け継ぎを得、……来るべき世においても報いを受ける」と約束された（教義と聖約63：48）。

## シオンで進む開拓

東部からやって来たほとんどの聖徒たちにとって、開拓最前線での体験は初めてであった。木を切り、渡し船や橋、製材所、ダムを作り、家や家畜小屋、さくを作らなければならない。1831年の秋のことをニューエル・ナイトはこう回想する。「わたしたちは開拓最前線での生活に慣れていなかった。したがって、すべてが新しく未知のものばかりで、する仕事も東部で行ってきたものとは本質的に異なったものであった。しかし、わたしたちはそれらに対して積極的に、また最善を尽くそうという姿勢で取り組み、熱心に働いて食糧を確保し、来るべき冬に備えたのである。」<sup>20</sup> パーリー・P・ブラットはミズーリの聖徒たちの勤勉さと積極性についてこう記している。

「彼らは夏の終わりに到着し、家畜のために牧草を刈り、穀物の種をまき、少しの土地を耕やし、秋と冬は丸太小屋などの建設に当たった。冬は寒く、しばらくの間一つの丸太小屋に10家族が同居していた。その小屋はまだ未完成で、床は凍った土のままだった。食物は牛肉ととうもろこしで作った小さなパンで、それはブリキのおろし器でとうもろこしをおろして作った粗末なものである。こうした生活は病人には不便なものであったが、福音のためという目的があったので、皆大変元気で幸せそうであった……

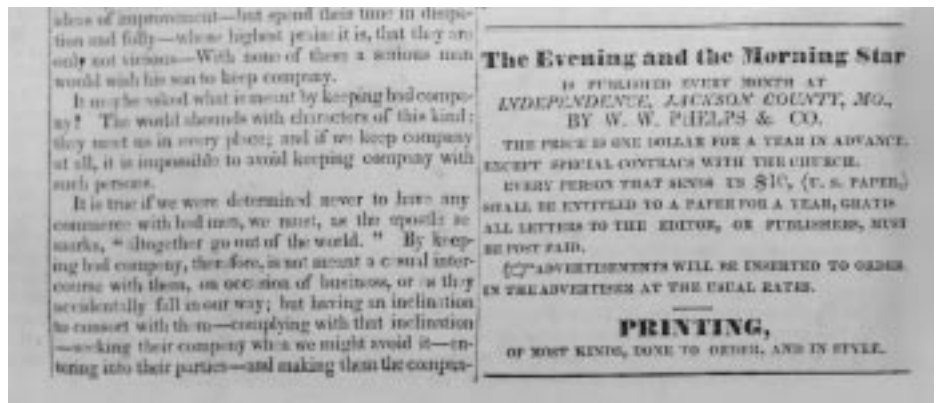
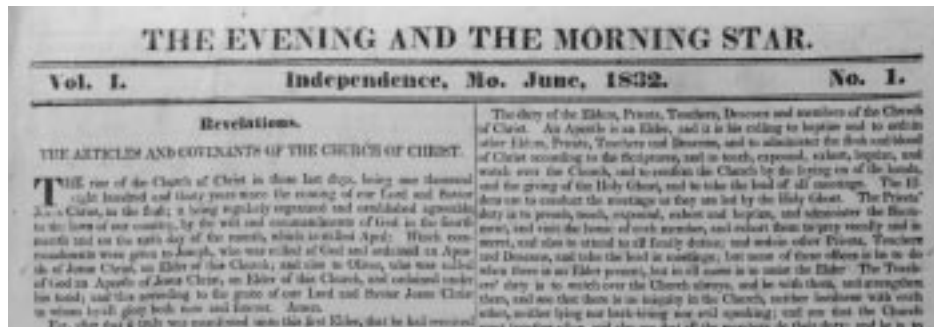
……この荒れ野の小さな教会には平安と一致、愛と思いやりの精神が満ちあふれていた。このころの思い出はわたしの心の中で大切なものとなっている。」聖徒たちを

## シオンの地への集合

鼓舞し、くじけそうになる心を奪い立たせてくれたのは、そのときのシオンの姿ではなく、シオンが持つ可能性だったのである。<sup>21</sup>

やがて資金が東部から流れて来るようになる。1832年1月現在でエドワード・パートリッジ監督は2,694ドル70セントを受領、そのうち2,677ドル83セントを支出している。<sup>22</sup> 彼はさらに土地の購入を増やすとともに、聖徒たちのささげ物を受け取り、分配するための倉の設立を指揮した。ミズーリの教会指導者たちはまた、指示により印刷の業務を開始している（教義と聖約58：37参照）。シオンで印刷者ならびに新聞編集長として召されたW・W・フェルプス（教義と聖約57：11 - 12参照）が、教会の最初の定期刊行物である『イブニング・アンド・モーニング・スター』（*Evening and Morning Star*）の発行に取りかかった。

『イブニング・アンド・モーニング・スター』（*The Evening and the Morning Star*）は1832年6月にミズーリ州インディペンデンスで創刊された月刊紙である。ウィリアム・W・フェルプスにより14号発行された。1833年7月20日に印刷所を破壊されたため、発行の中止を余儀なくされている。



1832年の春から夏にかけて、300人から400人の聖徒たちがミズーリに到着し、監督から受け継ぎの地を割り当てられて開墾を始めた。彼らの努力と勤勉さは並たいていのものではなく、ある人はその様子をこう書いている。「まったく異様な光景だった。4頭から5頭立ての牛が豊かな土を掘り起こし、さくやそのほかの設備が次から次へと作られていく。また、時間と金銭と労働力の限りを尽くして家族のための家が建てられていく。この新しい地に建つわたしたちの家は実に立派で、パラダイスではないかと思うほどである。そして自慢して言うのだが、わたしたちが味わっている平安と幸福は、エデンの園でわたしたちの最初の両親が味わったものと大差ないのではないかと思われた。えり抜きの花や木々を育てるために、労力や丹精を惜しまなかったからである。」<sup>23</sup>

しかし、土地は豊かでも、技術を持った職人や大工が不足していた。シオンの住民のほとんどは農夫か一般の労働者で、必要なのは車職人やかじ屋、れんが職人、大工だった。「すべての職種の働き手をこの地に送って、神の聖徒たちのために働かせ

## 時満ちる時代の教会歴史

なさい」との職人を求める啓示も下されたが（教義と聖約58：54）、結果はすぐには表れなかった。こうした中で、シオンに住み、大工の技術を持っていたリーバイ・ハンコックは、処理し切れないほどの仕事を抱え込むことになった。彼の最初の仕事は、W・W・フェルプスの家屋兼印刷所の建設だった。<sup>24</sup>

1832年5月29日、新たに建設されたその印刷所で大会が開かれた。印刷所の奉獻のためである。オリバー・カウドリとW・W・フェルプスが話をし、次いでエドワード・パートリッジ監督が奉獻の祈りをささげている。<sup>25</sup>

1832年6月、フェルプス長老は『イブニング・アンド・モーニング・スター』の発行を開始した。それから次の年にかけて、『スター』はジョセフ・スミスに授けられ、後に『教義と聖約』に収められた多くの啓示を掲載することになる。『スター』はジャクソン郡唯一の新聞であり、地元と全国のニュースの両方を掲載していたことから、教会員だけでなく教会員ではない人々にも広く読まれたが、やはり聖徒たちに役立つための新聞という意味合いが強かった。したがってどの号でも、教会員に対して宗教上の、また家庭での義務を果たすようにとの熱心な呼びかけが行われている。W・W・フェルプスは創刊号で、聖徒たちにこう要求している。「主の弟子たる者は子供たちのために学校を用意することにおいて遅れを取ってはなりません。子供たちは主に喜んでいただけるように教育し、聖なる方法で育てなければなりません。学校で使用する書物の選択と準備を任された人々は、重要な事柄が終わり次第できるだけ速やかにこの問題に取り組まなければなりません。しかし、キリストの教会に属する両親や保護者は待つ必要はありません。子供たちが善良に育つことは非常に重要なことであり、そのように教えられなければならないのです。」<sup>26</sup>こうして1832年の秋、「コールズビルスクール」と呼ばれる学校がコータウンシップの大きな泉のそばに開設された。初代教師はパーリー・P・プラットだった。また同じ年に第2の学校が、インディペンデンスの神殿用地近くに建てられた丸太造りの校舎で始まった。<sup>27</sup>

また『スター』では、主の日を正しく守ることが特に強調された。シオンにおいてジョセフ・スミスに下された最初の啓示の中に、「わたしの聖日に祈りの家に行って、聖式をささげなければならない。……いと高き方に礼拝をささげるように」との聖徒たちへの勧告が含まれていたからである（教義と聖約59：9-10）。

日曜日をほかの日と区別し聖日と見なすことは、ジャクソン郡の教会員以外の人々とは習慣を異にすることであった。この啓示の言わんとしているところを強調するため、『スター』は次の勧告を聖徒たちに伝えている。「安息日を守ってこれを聖なる日として保たなければなりません。主はいかなることであれ、労働の日に行くべきことをこの聖日に行く弟子たちを喜んでおられません。また、弟子たちはこの安息日はこちらの集會に、次の安息日はあちらの集會にと渡り歩くべきではありません。できるだけ厳格に、自らの場所に集うようにすべきです。……子供たちは集會を抜け出して遊ぶことは許されません。訓練の場に集い、救いを得るための方法を学ぶのです。わたしたちは神の子です。神の律法を無視することのないようにしようではありませんか。聖徒たちが安息日に働けば、世の人々はこうこたえるでしょう。わたしたちも働きます。聖徒たちが安息日に仕事で旅行をすると、世の人々はこうこたえるでしょう。わたしたちもそうします。聖徒たちが人に会うためほかの

## シオンの地への集合

集会を渡り歩けば、世の人はこうこたえるでしょう。わたしたちもそうします。聖徒の子供たちが安息日に遊んでいれば、世の人々はこう言うでしょう。わたしたちの子供も遊ばせましょう。兄弟の皆さん、気をつけてください。そして主の聖なる安息に入れるようにしてください。」<sup>28</sup>

しかし、『スター』の紙面の中で最も注目を集めたのは、集合に関する記事であり、そのテーマでたくさんの記事が書かれた。7月、フェルプス長老は入植しようとする聖徒たちに、オハイオの監督または3人の長老から推薦を受けなければならないことを確認している。また、監督により準備ができたことを知らされるまで、シオンへの出発を待つようにとの指示も載せた。そして、この注意を守らないと、「弊害が生じ」、混乱が起こると警告している。「さらに、土地をすぐに売らなければならなくなり、不当な犠牲を払うことになった例があります。今日は犠牲と什分の一の日ですが、法外で不当な犠牲を払うことは、主の目から見て喜ばしいことではありません。」<sup>29</sup>後にシオンへ旅をする聖徒たちは、「すべての点において」神の戒めを守るように、またほかの人から「彼らは神の子のように振る舞った」と言われるような良い模範を示すように勧められている。<sup>30</sup>

1832年11月の時点で、ミズーリ州在住の聖徒数は810人であった。この段階までシオンは入植者を首尾よく受け入れることができ、聖徒たちは入植の成功を喜んだ。『スター』の社説も楽観的で、シオンの将来の繁栄は約束されているとの印象を与えるものであった。

## 注

1. *Latter Day Saints Messenger and Advocate* 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1835年9月号, 178で引用
2. *History of the Church* 『教会歴史』1: 188; エミリー・M・オースティン, *Mormonism; or, Life among the Mormons* 『モルモン教, またはモルモン教徒の中での生活』63 - 64 参照
3. オースティン, *Mormonism* 『モルモン教』63参照
4. 『教会歴史』1: 188参照
5. 『メッセンジャー・アンド・アドボケイト』1835年9月号, 179で引用
6. *Scraps of Biography* 『伝記の中から』(Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1883), 70
7. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ, パーリー・P・プラット編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 54
8. "The Life of Levi Hancock" 『リーバイ・ハンコックの生涯』ブリガム・ヤング大学未出版原稿, ユタ州プロボにあるブリガムヤング大学特殊コレクション所蔵, 54 - 64
9. "History of David W. Patten" *Millennial Star* 『デビッド・W・パッテン史』『ミレニアルスター』1864年6月25日付, 407で引用
10. ライマン・ホワイトからウィルフォード・ウッドラフにあてた手紙, 1857年8月24日付, ライマン・ホワイト文書にて引用, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ
11. 『伝記の中から』70
12. 『教会歴史』1: 189
13. ジョージ・Q・キャノン, *Journal of Discourses* 『説教集』11: 336 - 337; プリガム・ヤング 『説教集』8: 195参照
14. 『教会歴史』1: 196で引用
15. *An Early Latter Day Saint History: The Book of John Whitmer* 『初期の末日聖徒史: ジョン・ホイットマーの書』F・マーク・マッキヤナン, ロジャー・D・ローニアス編 (Independence, Mo.: Herald Publishing House, 1980), 79で引用
16. 『教会歴史』1: 199
17. 『教会歴史』1: 199で引用; *Journal History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*, 『日誌で見た末日聖徒イエ

## 時満ちる時代の教会歴史

ス・キリスト教会の歴史』1831年8月4日，末日  
聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー

18．『教会歴史』1：203で引用

19．『教会歴史』1：206参照

20．『伝記の中から』72

21．プラット『パーリー・P・プラット自叙伝』56

22．『日誌で見た教会の歴史』1832年1月27日付  
参照

23．オースティン『モルモン教』67

24．デニス・A・クレグ “Levi Ward  
Hancock, Pioneer, Soldier, Political and  
Religious Leader of Early Utah” 「リーバイ・  
ワード・ハンコック，ユタ初期の兵士，政治・  
宗教指導者」修士論文，ブリガム・ヤング大学，  
1966年，20；リーバイ・ハンコックの日記，ユ  
タ州プロボにあるブリガムヤング大学ハロル  
ド・B・リー図書館特殊コレクション所蔵，67  
参照

25．教会歴史記録，1832年5月29日付参照

26．“Common Schools” 「公立学校」『イブニン

グ・アンド・モーニング・スター』1832年6月  
号，6

27．H・S・サリズベリー “History of Edu-  
cation in The Church of Jesus Christ of Latter  
Day Saints” *Journal of History* 「末日聖徒イエ  
ス・キリスト教会教育史」『歴史記録』1922年7  
月号（Independence, Mo.:Herald Publishing  
House,1922），259参照

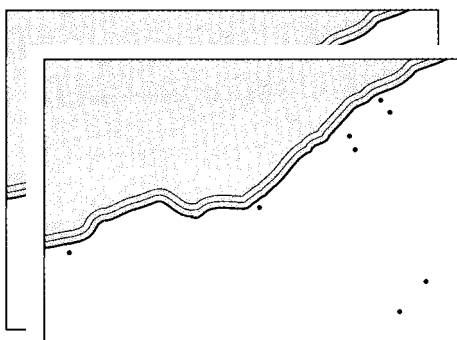
28．“To the Saints in the Land of Zion, and  
Abroad” 「シオンと海外の聖徒の皆さんへ」  
『イブニング・アンド・モーニング・スター』  
1832年10月号，5

29．“The Elders in the Land of Zion to the  
Church of Christ Scattered Abroad” 「海外に  
広がるキリストの教会に派遣されたシオンの地  
の長老たち」『イブニング・アンド・モーニン  
グ・スター』1832年7月号，5

30．“The Way of Journeying for the Saints of  
the Church of Christ” 「キリストの教会の聖徒  
たちの旅の方法」『イブニング・アンド・モー  
ニング・スター』1832年12月号，5

# オハイオでの教会の発展， 1831 - 1834年

年代	重要な出来事
1831.8	ジョセフ・スミス，初めてのミズーリ訪問から帰還
1831.10 - 12	エズラ・ブース，出版物で教会を攻撃
1831.11.1	長老の大会で『戒めの書』(Book of Commandments)の出版を支持
1831.12.4	ニューエル・K・ホイットニー，オハイオの監督に召される
1832.1.25	ジョセフ・スミス，大神権の大管長に支持される
1832.2.16	光栄の3階級の示現(教義と聖約76章)を受ける
1832.3.24	暴徒，ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンにタールを塗り，鳥の羽根を付ける
1832.4	預言者，ミズーリを再度訪問する
1832.12.25 - 27	「戦争に関する預言」(教義と聖約87章)と「オリーブの葉」(教義と聖約88章)が示される
1833.1	預言者の塾がカートランドで開かれる
1833.2.27	知恵の言葉(教義と聖約89章)が示される
1833.12.18	ジョセフ・スミス・シニア，最初の大祝福師に聖任される
1834.2.17	カートランドの高等評議会が任命される



オハイオ州北東部

**カ**ートランドの初期の時代は，教会歴史上最も重要な時期の一つに数えられる。しかし当時の教会員の中でそのことを理解していた人はあまりいない。ウィルフォード・ウッドラフは，1834年4月に預言者ジョセフ・スミスが神権者たちに語ったことを話している。「皆さんは，この教会と神の王国の行く末に関して母のひざに抱かれた赤ん坊同様考えも及ばないでしょう。皆さんは理解していない。……今晚ここにいるのはほんの一握りの神権者です。しかし，この教会は北南アメリカを満たし，世界を満たすでしょう。」<sup>1</sup>彼らの想像力には限界があったにせよ，それは聖徒たちの心に意欲を与え，初期の教会は成長し，発展し，成熟を迎えていった。

ジョセフは教会の確立だけに奔走していたわけではない。ほかの聖徒と同様ジョセフと妻のエマも必死に通常の家庭を築く努力をしていた。実際，オハイオでの最初の2年間，彼らには定まった家がなかった。1831年9月，ミズーリへの旅から帰ってわずか2週間後，ジョセフはカートランドの30マイル(約48キロ)南東にあるオハイオ州ハイラムに引っ越した。そして，ハイラムのジョン・ジョンソンの家に6か月間住むことになる。その間彼はシドニー・リグドンという有能な助け手を得て、『聖書』の翻訳をかなりの速度で進めることができた。

## 対立と背教

教会は設立当初から一般の人々には好意をもって迎えられていなかったが，それを後押ししたのが背教者で，さらに新聞や雑誌による否定的な話や記事が拍車をかけることとなった。人々は様々な理由をつけて背教していった。例えばノーマン・ブラウンの背教の理由は，シオンへの旅の途中で自分の馬が死んだことだった。ジョセフ・ウェイクフィールドは，翻訳していた部屋から出て来たジョセフ・スミスが子供と遊んでいるのを見て教会を去った。サイモンズ・ライダーは，伝道への召しに書かれた自分の名前のつづりが違っていただけで，ジョセフが靈感を受けていないと判断した。また，経済的に苦しい状況に陥ったために教会を去った者も多い。

この期間で影響力の大きかった背教者は，元メソジスト派牧師のエズラ・ブースである。彼は1831年5月，預言者がエルサ・ジョンソンの不具の腕を癒すのを見て教会に入った。ブースはほかの宣教師とともに1831年の夏に召され，ミズーリに派遣されたが(教義と聖約52:3, 23参照)，全行程が徒歩であったことと，伝道をしながら進まなければならなかったことに腹を立て，教会の指導者に対する批判とあら探しをするようになった。ミズーリに着いたら奇跡や異言の賜物などの御霊の現れを体験し，自分の信仰をさらに深めることができると考えていた彼は，それがなかったために力を落とし，オハイオ州ハイラムへ戻ったころには猜疑心とあら探しの



## 時満ちる時代の教会歴史



オハイオ州ハイラムのジョン・ジョンソン邸。預言者ジョセフ・スミスはここでたくさんの啓示を受けた。この神権時代最大の教義的な啓示の一つである「示現」(教義と聖約76章)もこの家で受けたものである。

とりこになっていた。預言者は「彼が祝福を得るには信仰と謙遜さと忍耐と苦難が必要であること、また……少しは自分のために取っておいても、あとはすべて人々に提供しなければならないことを身にしみて知ったとき<sup>2</sup>、失望してしまったのだろうと語っている。ブースは9月1日にハイラムに到着し、その5日後に破門された。彼とサイモンズ・ライダーは直ちに、ハイラムから数マイルのシェイラーズビルで開かれたメソジスト派の野外集会で信仰を捨てることを宣言している。

さて、オハイオでの末日聖徒の台頭を阻止しようとしたポーテージ郡の反対派はブースの影響力を利用することをもくろみ、彼に批判の言葉を公にするように勧めた。ブースは自分の影響で改宗した人が大勢いると信じていたので、今度はその逆を行うとともに、教会に加わろうとしていた人々にはやめるように説得している。彼は1831年10月13日から12月8日にかけてラベナの『オハイオスター』(Ohio Star)に9つの書簡を掲載、教会への批判を展開した。

彼の書簡は教会に問題をもたらすことになった。この書簡は広く配布され、後には1834年に出版された最初の反モルモン出版物、エバー・D・ハウの『暴かれたモルモン教』(Mormonism Unveiled)の一つの主要な章を構成するまでに至った。これを受けて1831年末にはブースの影響力を覆すための宣教師が召され、12月になると主は、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンも宣教師の活動に加わるように命じられた。彼らの務めは「公にも、ひそかにも」敵と会うことであった。主は「あなたがたを攻めるために造られる武器は、まったく役に立たない」と約束してくださった(教義と聖約71:7,9)。二人は約5週間このことのために働いた。ジョセフは彼らの働きにより「扇動的な手紙の出版によってかき乱された感情はおおかた収まった<sup>3</sup>と報告している。

しかし、ブースとライダーが残した否定的な影響はくすぶり続け、1832年3月24日、ハイラムで暴動が起こった。酒気を帯びた25人から30人の暴徒がジョセフ・スミスとシドニー・リグドンの家を襲撃したのである。その夜ジョセフは、はしかにかか

「タールを塗られ鳥の羽根を付けられるジョセフ・スミス」開拓者の画家、C. C. A. クリステンセン画



## オハイオでの教会の発展, 1831 - 1834年

った養子の赤ん坊の世話で遅くまで起きていて、やっとのことでキャスター付きのベッドに寝たところであった。気がついたとき、彼は足をつかまれドアに向かって引きずられていた。エマは叫び声を上げている。彼は抵抗したが、ねじ伏せられてしまった。暴徒たちはジョセフをののしり、首を締め、着ていた物をはぎ取り、酸の入った瓶を無理やり口に押し込んだ。このとき歯が一つ欠けてしまい、その後、話をするときには息漏れがするようになってしまう。そして一人の男が「逆上した猫のように預言者の体をつめで引っかき、『畜生野郎、聖霊はこうやって下るんだ』と言った。」暴徒たちは預言者の体にタールを塗り、鳥の羽根を付けてそのまま帰ってしまった。ジョセフがやっとのことで家にたどり着くと、エマは失神してしまう。タールを血だと思ったのである。一晩かかって友人たちがタールを落としてくれたので、翌日の日曜日、ジョセフは説教をし、3人にバプテスマを施すことができた。<sup>4</sup>

その事件の夜、ジョンソン家のドアは開け放されたままだった。そのため赤ん坊のジョセフ・マードック・スミスが風邪を引き、5日後に亡くなった。同じ夜、リグドン長老も足を持って引きずられ、頭を凍ったでこぼこの道に何度も打ちつけたために、数日間めまいが取れなかった。<sup>5</sup>

### 1832年のミズーリへの訪問

暴徒の襲撃を受けてから程なく、主は預言者にミズーリに戻るよう指示を与えられた（教義と聖約78：9参照）。これは、預言者がカートランドに住み、開拓の最前線である自分たちのもとには来ないことをねたんだ者がいたからである。主は預言者に、サタンがこの機に乗じて聖徒たちの「心を真理からそらそうと」している（教義と聖約78：10）、ミズーリに行って聖徒たちの話を聞く必要があると説明された。ミズーリ行きのもう一つの理由は、カートランドとインディペンデンスの教会の倉の運営を調整することであった。そして1832年3月には、両方の地域に倉を設立すべきであるとの啓示が下っている（教義と聖約78章参照）。インディペンデンスの倉の利益は移住して来る聖徒たちの援助に向けられていた。そこでミズーリでの預言者の用事の一つは、この二つの倉を統合して、教会の経済活動の一本化を図ることだった。

ミズーリへの滞在は短期間ではあったものの、実りは大きかった。4月26日、「総会」でジョセフは大神権の大管長として支持された。これは1832年1月25日にオハイオ州アマーストで開かれた同様の大会での聖任を追認するものである。そして午後の会でジョセフは啓示（教義と聖約82章）を通して、カートランドとインディペンデンスの経済制度を統合して一つの組織にするように指示を受けた。これは、「相互の友情と愛のきずなと聖約により、日の栄えの律法の下にあらゆる債務から独立した状態を実現するためであった。指導者たちはこの制度により教会の諸事を管理することに同意し、オハイオの監督であるニューエル・K・ホイットニーがその制度のため、品物の購入資金である1万5,000ドルの借り入れをすることを承認した。ジョセフ一行がコーのタウンシップに着くと、聖徒たちは「同じ信仰を持つ兄弟姉妹でなければできないような歓迎」をしてくれた。預言者はこう書いている。「神の民と喜びを分かち合えるのはすばらしいことである。」<sup>7</sup>

ジョセフ・スミスとニューエル・K・ホイットニー、シドニー・リグドンは5月の初

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョセフ・スミスがニューエル・K・ホイットニーに贈った時計と、ニューエル・Kとエリザベスの夫婦に贈ったレターオープナー



旬、駅馬車で帰途に着いた。ところが、インディアナ州グリービル近郊で馬が突然何かにおびえて暴走、ホイットニー監督は馬車から跳び降りようとしたものの服が引っかかって足を車輪に引き込まれ、何か所も骨を折る大けがをしてしまった。ジョセフとシドニーも跳び降りたが、けがはなかった。預言者はホイットニー監督に付き添ってグリーンビルに1か月間滞在し、シドニー・リグドンはこの知らせを持ってカートランドへの旅を続けた。この間ジョセフは、しばしば森を独りで散策する機会を得ている。エマへの手紙には、ほぼ毎日町外れの森に行き、祈りと瞑想めいそうを行っていることが書かれている。「これまでのことがみんな心によみがえってきました。そしてわたしの至らなさのために、わたしの心の中の悪魔が過去にそうであったようにわたしを圧倒するのを許してしまったことを思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいになり、涙が止まりません。でも、神は慈悲深い御方で、わたしの罪を赦してくださいました。」<sup>8</sup>

ある日、夕食の後で預言者は気分が悪くなり、あまりにもひどい嘔吐おうとだったためにあごの骨が外れてしまった。ところがホイットニー監督が癒しの儀式を行うと、毒のために髪の毛は多少抜けたものの、気分の悪さはたちどころに治ってしまった。預言者はすぐにその場を去った方がよいと判断し、確信をもってホイットニー監督に、旅は何の問題もなく順調に進むことを説明した。彼はこう語っている。「午前中に出発して、約4マイル（約6.5キロ）の道を馬車で川まで行き、そこで待っている渡し船ですぐに川を渡り、そこから貸し馬車で船着き場まで行きます。10時にはそこから待っている船に乗って川をさかのぼれるでしょう。」<sup>9</sup>二人はジョセフが言ったとおりに旅路を進み、6月初旬にカートランドに着いた。

それからの数か月間、預言者はまたほとんどの時間を『聖書』の靈感訳の作業に費やすようになった。ほかの仕事としては、秋にホイットニー監督とニューヨーク州オールバニならびにボストンに行っただけである。そこで彼らは教会の諸事を処理するとともに、悔い改めて福音を受け入れるよう住民に警告の声を上げている（教義と聖約84：114 - 115参照）。彼らがカートランドに戻ったのは1832年11月6日のことで、エマが4番目の子供（生き残った最初の子供）であるジョセフ・スミス・サードを出産した数時間後のことであった。<sup>10</sup>

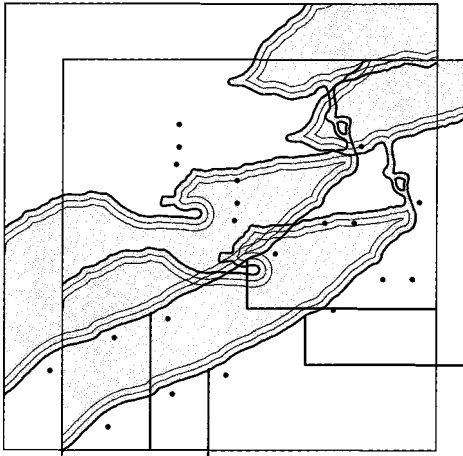
それから程なく、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールがニューヨーク州北部からやって来た。改宗して間もない彼らは、預言者との面会を心待ちにしていたのである。その日の夕方の集まりでは、ブリガム・ヤングが祈りの中で異言を語った。そしてジョセフは賜物に関する質問の中で、いつの日かブリガム・ヤングが教会を管理するようになると預言している。<sup>11</sup>

1833年の夏と冬、預言者は多くの時間を『聖書』の翻訳、ならびに預言者の塾での教育、そしてカートランド神殿の建設に費やした。

### ジョセフ・スミスのカナダへの伝道

1833年の秋、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは新しい改宗者であるフリーマン・ニッカーソンの強い要望でカナダ北部を訪れた。そこに住むニッカーソンの息子たちが福音を受け入れる用意ができていているというのである。その旅は歴史的なものであった。宣教師がカナダを訪れたのは初めてではなかったが（1830, 1832,

## オハイオでの教会の発展, 1831 - 1834年



カナダ南部の教会史跡

1833年に短期間の訪問が行われた), ジョセフの訪問によってカナダでの業に火がついた形となった。預言者はカナダ人をこよなく愛するようになり, 1837年に再度訪問, 生涯にわたってカナダでの伝道の業を見守り続けた。

ジョセフとシドニーはマウントプレザントで12人にバプテスマを施したが, その中にはニッカーソン長老の息子たちとその家族が含まれ, 彼らはその後設立される支部の中核となった。

マウントプレザントでエレアザー・フリーマン・ニッカーソンの家に滞在していた人物の一人にリディア・ベイリーがいる。彼女は心から福音を受け入れた。リディアはマサチューセッツとニューヨークで育ち, 16歳でカルビン・ベイリーと結婚した。しかし, 夫は酒癖が悪く, 惨めな生活を送っていた。結婚して3年, 夫は彼女と娘, それにおなかの中の子供を残して出奔した。出産した子は男の子だったが死産で, それから1年もしないうちに娘も亡くなった。彼女は20歳でニッカーソン家とともに傷ついた心を癒すためカナダに渡った。そこで彼女はジョセフ・スミスと出会い, ジョセフは彼女にこう語った。「あなたはあなたの父親の家の救い手となるでしょう。」リディアは後にカートランドに移住, 妻を亡くしたニューエル・ナイトと知り合い, 結婚した。それから長い年月の後, リディアはユタ州のセントジョージ神殿で自分の親族700人のための儀式を行い, ジョセフの預言を成就したのである。<sup>12</sup>

この伝道に関するジョセフの日記への記述から, わたしたちはジョセフの人柄をかいま見ることができる。ほかの宣教師と同じように, 彼は家族の身を案じ, 失意と成功が交互に訪れるような生活を経験した。ジョセフは短い祈りの言葉を頻繁に日記に記している。例えば, 出発の日の1833年10月14日の記述はこうなっている。「主よ, この旅路の間わたしたちとともにおられますように。」10月22日にはこう書いている。「カナダでいつの日か偉大な善の業が行われますように。主よ, どうぞあなたの御名によりその実現をお許しください。」10月23日には教えている人々の迷信深さに言及してこう述べている。「ああ神よ, この民の中にあなたの御言葉を確立してください。」<sup>13</sup>

カナダ北部での伝道は, ジョセフがカートランド在住中に行った14の伝道の業の一つである。彼は1831年から1838年の間, 年に最低1度はオハイオを出て, 大管長としての職務の傍ら専任宣教師として働いた。

### 『聖書』のジョセフ・スミス訳

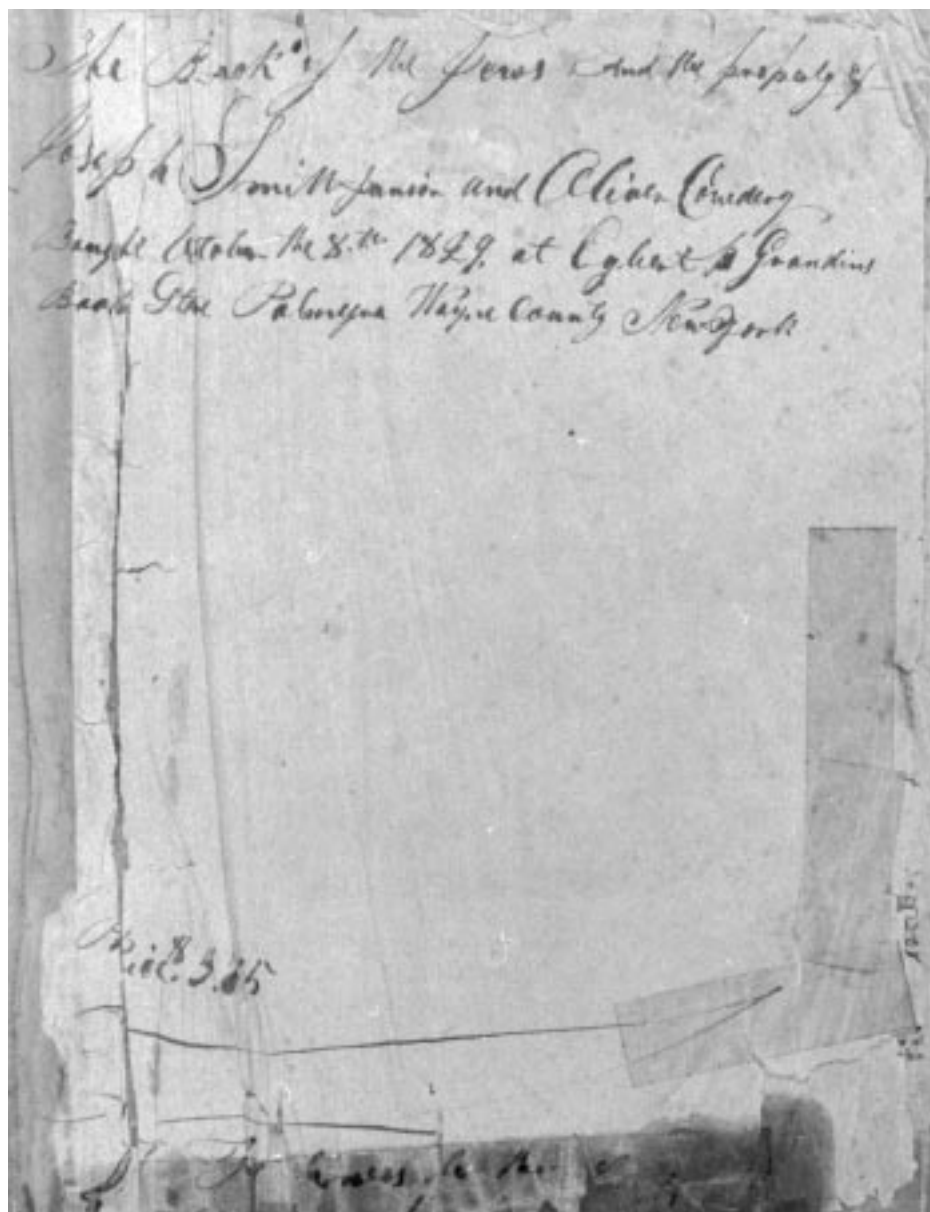
ジョセフ・スミスによる『聖書』の靈感訳は, 彼の預言者としての働きの中で非常に重要な位置を占めるものであり, 教会において強い影響力を示してきた。このプロジェクトにより, 彼の持つ福音の原則への理解ならびに古代の預言者や民への神の業に関する知識は大幅に増した。ジョセフはこのプロジェクトを自分の召しの一つの「枝」と考え, 勤勉に務めに励んだ。預言者とシドニー・リグドンがともにオハイオにいるときは, 専らの業に携わっていた。啓示や当時の歴史的な文書の中に「翻訳」という言葉が高い頻度で登場することは, このプロジェクトがいかに重要であるかを示すものである。預言者が初めてこの業を開始したのは1830年, ニューヨーク州でのことであった。そして1831年2月にオハイオに到着してからは, リグドン長老を筆記者として『旧約聖書』の翻訳の業を継続した。しかし3月初旬, ジョ

## 時満ちる時代の教会歴史

ジョセフ・スミス所有の欽定訳『聖書』の表紙裏。以下の内容がジョセフ・スミスの筆跡で記されている。

「ユダヤ人の書でジョセフ・スミス・ジュニアとオリバー・カウドリの所有。

1829年10月8日、ニューヨーク州ウェイン郡パルマイラのエグバート・B・グランデインの書店で購入。価格 3ドル75セント聖きを主にささぐ。」



復元末日聖徒イエス・キリスト教会の厚意により掲載

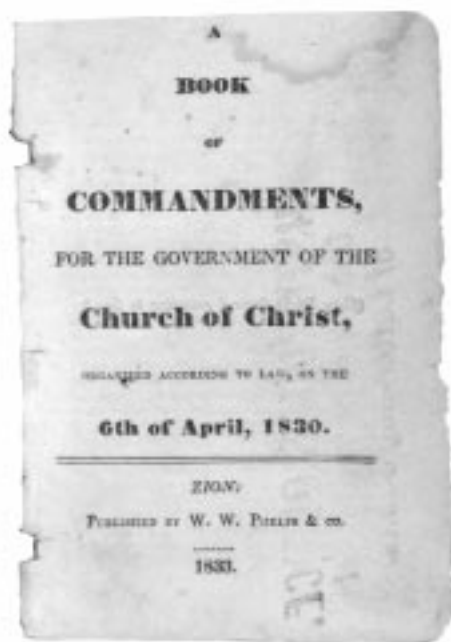
セフは『新約聖書』の翻訳を行うように命じられる（教義と聖約45：60 - 61参照）。そこでそれから2年間、ジョセフとシドニーは『旧新約両聖書』を同時併行で翻訳していった。彼らは1833年7月2日にこのプロジェクトを終えたと、喜びをもって報告している。<sup>14</sup>

ジョセフ・スミス訳（JST）自体が教会に偉大な足跡を残したことに加え、現在『教義と聖約』に収められている莫大な数の啓示が、この靈感訳の時期に与えられていた。『聖書』の研究が教義や組織に関する重要事項について主に尋ねる機会を増やしたのである。中でも教義と聖約76, 77, 91の各章は、翻訳作業と直接関連する聖句であり、そのほか「74, 84, 86, 88, 93, 102, 104, 107, 113, 132の各章の多く」も、翻訳関連のものである。ほかにも間接的なつながりを持つ聖句は多い。<sup>15</sup>

### 『教義と聖約』の起源

預言者ジョセフ・スミスが受けた啓示の数々は、教会の教義と管理に関する主か

## オハイオでの教会の発展, 1831 - 1834年



『戒めの書』

らの時宜を得た指示を含んでいた。教会設立の3か月後、預言者とジョン・ホイットマーはそれまでに受けた啓示を整理して複写をした。そしてジョセフはその複写を友人や宣教師、ならびにその他の教会員に配っていたが、ほとんどの人は啓示を直接手にすることはできなかった。これに解決を与えたのが、1831年のミズーリでの印刷所の設立である。1831年11月初旬のオハイオ州ハイラムでの数度にわたる大会の主要議題はこれであった。それまでに60を超える啓示が記録されていた。11月1日にはウィリアム・W・フェルプスに対して啓示を本の形で1万冊印刷する許可が出ている。(印刷部数は後に3,000部に減っている。)この本のタイトルは『戒めの書』(Book of Commandments)で、そのときの大会で受けた啓示にちなんだものである。主はこの啓示を「わたしの戒めの書へのはしがき」であると述べておられる(教義と聖約1:6)。

同じ日、大会を終えてから、何人かの兄弟たちが啓示の言語と文体について否定的な意見を述べ始めた。そこで主は啓示を通して批判する者に対して、戒めの中で「最も小さいもの」を捜し、彼らのうち最も賢い者に書き換えを行わせるというチャレンジをお与えになった(教義と聖約67:4-9参照)。するとせん越にも、最近の改宗者で学校の教師を務めるウィリアム・E・マクレランという男がこのチャレンジを受けて立った。預言者はこう書いている。「この自称最も賢い者、並外れた学識の持ち主は、主の最も小さな戒めに似せて戒めを書こうとしたが、失敗に終わった。主の御名により物を書くというのは途方もなく大きな責任なのである。」この経験を通して、兄弟たちは啓示への信仰を新たにし、「その真理を世の人々に証する」ことに同意した。<sup>16</sup> 次いで預言者は、この啓示が「末日における教会の基礎をなすものとなる」と述べた。<sup>17</sup>

また、大会のほかの部会で『戒めの書』出版のための細部の検討が行われ、1831年11月3日には「付録」(後の教義と聖約133章)が啓示に付け加えられた。また、11月8日には別の会が行われ、聖霊の導きにより啓示の複写の中の誤りを訂正する指示がジョセフ・スミスに出された。さらに11月12日には主が教会歴史記録者であり記録担当者のジョン・ホイットマーを召し、印刷のために原稿をミズーリに運ぶように命じられていたオリバー・カウドリに同行するように言われた(教義と聖約69章参照)。また、その日もう一つの啓示が下り、6人の兄弟たちが「数々の啓示と戒めについての管理人となるように」召されている(教義と聖約70:3)。このグループは「文書会」(Literary Firm)として知られるようになった。<sup>18</sup>

1831年11月20日、オリバーとジョンはミズーリに向けて出発した。彼らは寒くて長い旅の末、1832年1月5日にインディペンデンスに到着した。そして6月、フェルプス長老は『イブニング・アンド・モーニング・スター』(Evening and Morning Star)に抜粋を掲載し、『戒めの書』の版組みを開始した。

## 教会組織の発展

初期における教会の急速な発展は、組織のかなりな拡張を必要とした。主は「教訓に教訓、規則に規則」(教義と聖約98:12)との啓示の原則に従い、教会管理形態の確立を必要に応じた形で行われた。まず、1830年の教会設立直後、男性は奉仕の業に召され、執事、教師、祭司、長老の4つの神権の職のいずれかに聖任された。翌年にはほかの神権の職も加えられている。

## 時満ちる時代の教会歴史



エドワード・パートリッジ（1793 - 1840年）。主はエドワード・パートリッジを古代のナタナエルにたとえられた（教義と聖約41：11参照）。

最初に加えられた職は監督である。1831年2月、エドワード・パートリッジがこの召しを受けた（教義と聖約41：9参照）。しかし、彼の監督としての義務は一度にすべて示されたわけではない。彼に授けられた監督の職に関する最初の啓示は、奉獻の律法の実施についてのものであった。具体的には、奉獻されたものを受領し、管理の職の割り当てをし、貧しい人々の救済のために倉の運営に携わることである。彼はまた、土地の購入と礼拝のための建物の建設も担当した（教義と聖約42：30 - 35；51：1 - 3参照）。やがてこれらの責任の規模が大きくなると監督の代理人が召されて、基金の受領や土地の購入、ならびに実務の運営に携わった（教義と聖約51：8；53：4；58：49；84：113参照）。

監督に対してはまた別の啓示により、司法上の責任が授けられている。最初の長老法廷では、可能であれば監督も同席するようにとの指示に従う形で、教会の宗紀事項の処理が行われた（教義と聖約42：82参照）。1831年8月ごろにはイスラエルの判士としての監督の義務がさらに具体的なものとなり、監督は「また、神の預言者たちより与えられる王国の律法に従って、正しい者の証言により、また彼の副監督たちの助けにより神の民を裁くのである」とされた（教義と聖約58：18）。しかしながら、カートランドにおける司法上の責任の多くは長老法廷（後には高等評議会）が行った。当時監督には群れを守る牧者としての責任がなかったのである。この責任は、後には監督の重要な職務の一つとなる。

エドワード・パートリッジのミズーリへの移転後の1831年12月、二人目の監督としてニューエル・K・ホイットニーが召された。彼の責任はオハイオに住む教会員のふさわしさを判断し、ミズーリに移住しようとする教会員について、正式なふさわしい会員であると記した証明書をシオンの監督あてに発行することであった。

大管長ならびに後の大管長会の役割については、カートランドの初期の時代に明らかにされている。教会が組織された会合で、ジョセフ・スミスが啓示により「聖見者、翻訳者、預言者、イエス・キリストの使徒、教会の長老」として召された（教義と聖約21：1）。そして主は、彼が教会全体のため啓示を受けることを承認された唯一の人物であることも明らかにされた（教義と聖約28：1 - 6参照）。また1831年6月3日から6日の間に行われた大会では、数人の兄弟が初めて大祭司の職に聖任された。続いて1832年1月25日にオハイオ州アマーストで開かれた大会では、ジョセフが「大神権の大管長」として聖任されている。<sup>19</sup>

ジョセフは2年以上の間、副管長がいないままで教会を管理していた。1832年3月初旬、彼は初めて副管長を召す承認を受ける。3月8日、ジョセフは当時大祭司に聖任された人々の中からジェシー・ガウスとシドニー・リグドンを副管長として選任した。3月15日の啓示では、この大管長会が「王国の鍵」を持つことが明らかにされている（教義と聖約81：2）。ジェシー・ガウスは1832年に教会を離れたが、1833年3月18日に大管長会の再組織が行われ、フレデリック・G・ウィリアムズが新たに副管長として召された。

ジョセフの責任は、教会の大祝福師が召されることにより軽減された。それまでは、頻繁に個人がジョセフに自分のために啓示を受けてくれるように依頼していたが、教会が大きくなるにつれて、それは不可能な状態になっていた。こうして1833年12月18日、家族に祝福を受けていた預言者は、自分の父親を教会初の大祝福師として

エドワード・パートリッジの  
監督聖任証明書

The church of Jesus Christ To all to whom these  
 presents may come Truly testifying that our  
 beloved Brother Edward Partridge has been app-  
 ointed Bishop of this church on the fourth of  
 February one thousand eight hundred and thirty one  
 with and by the consent of the whole church  
 agreeable to the appointment of God and ordi-  
 nance to this office under the hand of Sidney  
 Higdon an Elder of this church of Christ  
 regularly organized on the sixth of April one thou-  
 sand eight hundred and thirty in witness  
 whereof we have here unto set our hands  
 Names of Elders

Wm. E. McLean	Sidney Higdon
George Whitlock	Joseph Smith
David Whitman	Oliver Cowdery
John Corriell	William H. Miller
Jamuel Fullinger	Martin Harris
Peter Dustin	Israel Morley
Asa Redds	Peter Whitmar
Orson Pratt	Sidney Gilbert
John Whitman	Joseph Coe
	Thomas Carter
	Nathan Smith

召し、聖任するように靈感を受ける。それから1840年の死去まで、ジョセフ・スミス・シニアは支部を訪問して回り、特別な祝福のための集会を開いて多くの忠実な聖徒たちに祝福師の祝福を授けた。祝福師の祝福は個人に啓示を授けると同時に、その人のイスラエルの家の血統を宣言するものでもあった。

1834年2月17日、オハイオ州カートランドで教会初のステークが組織された。最初のステーク会長会は大管長会が兼任している。また高等評議会がカートランドに組織されたことにより、教会司法制度に上級審が加わった。議事録によれば、高等評議会の目的は「教会内で起こり得る重大な問題のうち、教会または監督の評議会によって当事者に満足のいく解決が得られない問題を解決する」ことである（教義と聖約102:2）。高等評議会は重大な問題を審議する原法廷であり、控訴審法廷でもあった。高等評議会の判決は大管長会に控訴することができた。1834年7月3日には、



## 時満ちる時代の教会歴史

クレイ郡に二つ目の高等評議会が組織されている。

### 教義に関する啓示

『教義と聖約』の啓示の3分の1は1831年8月から1834年4月までの間に授けられたものである。これらの啓示は福音の理解に新たな光を与え、聖徒たちに日々の行動への貴重な指針を与えることとなった。例えば1832年2月16日、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは『聖書』の翻訳作業の最中に生じた疑問への直接の答えとしての啓示を受けている。御父と御子、サタンの墮落、滅びの子、そして栄光の王国に関する示現は、救いの計画に対する彼らの理解をはるかに増大するものとなった。1832年の秋、大勢の宣教師が帰還して喜びのうちに大会を開いたとき、主は神権に関する重要な啓示を下された（教義と聖約84章）。その啓示は新エルサレムと神殿がミズーリ州に建設されるという声明で始まっている。主は古代の族長や預言者から代々継承されてきた神権の歴史を簡潔に述べた後で、福音の儀式をつかさどる権能を持つのがメルキゼデク神権であり（19節参照）、小神権であるアロン神権は「備えの福音」の儀式をつかさどることを説明された（26節参照）。続いてその啓示は、この神権を受ける者は「誓詞と聖約」によって受けること、そして、忠実に神権を行使すれば永遠の命を受けることが明らかにされている（40節）。また、キリストの光や福音を宣べ伝えることに伴うしるしについての説明もあった。宣教師やほかの聖職者への指示がこの啓示の結びとなっている。

主は戦争と平和についても語られた。1832年のクリスマスに、主は有名なアメリカ南北戦争に関する預言を含む啓示を授けられた。その啓示は、その戦争が「間もなく起こる」こと、やがて「すべての国々のうえに押し寄せる」ことを述べている（教義と聖約87：1-2）。聖徒たちはこの戦争が全世界を巻き込むものとなるので、「聖なる場所に立ち、動かされないように」する以外に安全はないことを警告される（8節）。それから2日後、ジョセフ・スミスは啓示を受けた。ジョセフはその啓示を「オリーブの葉」と呼んでいる。「それはわたしたちが楽園の木から摘んだオリーブの葉で、わたしたちへの主の平和のメッセージである。」<sup>20</sup>この啓示はしかしながら、人が国の内外の問題をどう解決するかへの解答を与えるものではなかった。むしろそれは聖徒たちの関心をささいな心配事からそらして、主の再臨への備えや日の栄えの王国での昇栄に至る律法を守ることなどの永遠に関する事柄へと向けたのであった。

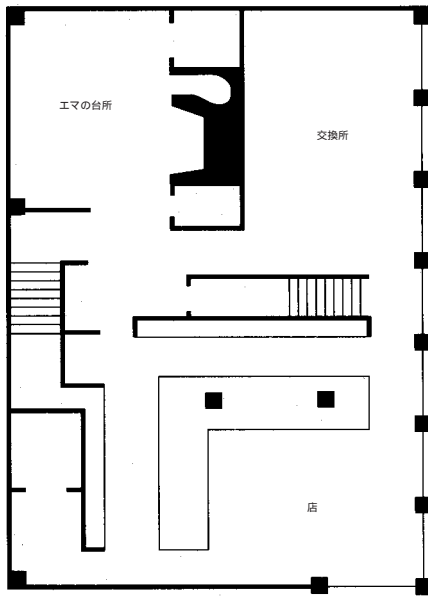
またこの啓示は、「預言者の塾」を開いて、兄弟たちが互いにさらに効果的に奉仕できるように訓練することを指示している（教義と聖約88：118-141参照）。この塾は1833年1月末、ホイットニーの店の2階で第1回の会合を行った。数々の会合は多くの驚くべき霊的体験の舞台を提供するとともに、福音の原則についての奥深い話し合いの場ともなった。

教会の初期においては、食事に関する事柄が懸念の一つとして存在した。例えば、近くのシェーカー教の定住地では食事に関する厳しい規則があり、肉は禁じられていた。1831年3月、主はジョセフ・スミスに、そのシェーカー教の規則は主の定めによるものではないことを告げられた。そしてその理由についてこう述べておられる。「見よ、野の獣と空の鳥、また地から生じるものは、食物として、また着る物として

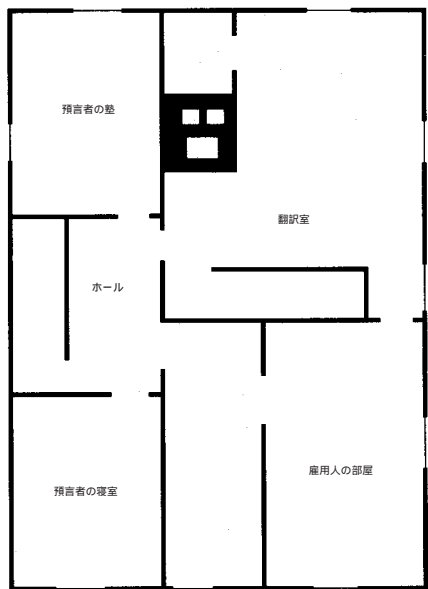


ジョセフ・スミス・シニア（1771 - 1840年）

## オハイオでの教会の発展, 1831 - 1834年



1 階



2 階

ニューエル・K・ホイットニーの店の平面図

人が使うように……定められているからである。」(教義と聖約49:19)そして同年8月にミズーリで授けられた啓示は、「これらのものは、思慮分別をもって、度を越さず」用いるようにとの警告を付け加えている(教義と聖約59:20)

1833年の冬、預言者の塾はしばしば会合を開いて教会の諸事について話し合っていたが、当時の習慣として多くの兄弟たちはたばこを吸ったりかんだりしていた。ブリガム・ヤングの回想によると、ジョセフ・スミスは「たばこの煙が立ち込める中で」塾生に教えを説くことに疑問を感じ、またエマは兄弟たちが帰った後で部屋を掃除しなければならないことに不満を持っていた。そこで預言者がたばこの使用について主に伺いを立てたところ、その答えとして、現在知恵の言葉と呼ばれている啓示が下された(教義と聖約89章参照)。<sup>21</sup> この啓示はたばこ、ぶどう酒、強い飲料、「熱い飲み物」を禁じるものであった。「熱い飲み物」はコーヒーと茶と解釈された。またこの啓示は新鮮な野菜や果物、穀物を取ることを勧めている。聖徒たちは、この知恵の言葉を守るなら健康と強さを得ると約束されている。また、「知恵と、知識の大いなる宝」を見だし、「滅ぼす天使は……彼らを過ぎ越」すとある(教義と聖約89:19, 21)。

1833年、主は政治、特に合衆国憲法に関して末日聖徒の考え方を定められた。これには基本となる二つの原則がある。まず、合衆国憲法は「この目的のために〔立てられた〕賢人……の手によって」書かれた靈感に満ちた文書だということである(教義と聖約101:80)。また、第2にこの憲法が世界的な視野を持つものであることが挙げられる。主は「憲法にかない、権利と特権を維持することによってその自由の原則を支持する国の法律は、全人類のものであり、わたしの前に正当と認められる」と述べておられる(教義と聖約98:5)。主は合衆国憲法が「公正かつ聖なる原則に従ってすべての肉なるものの権利と保護のために維持され……すべての人がわたしの与えた道徳的な選択の自由に応じて……教義と原則に従って行動できるようにして、各々が裁きの日に自分自身の罪に対する責任を負うようにするため」に制定されたと述べておられる(教義と聖約101:77-78)。ジョセフ・スミスはこの憲法への聖徒たちの執るべき態度についてこう説明している。この憲法は「神の知恵に基づいた栄光あふれる標準であり、天の旗である。……これは偉大な木であってその枝の下ではあらゆる国の人々が焼けつく日の光から守られるのである。」<sup>22</sup>

## 伝道活動の軸であるカートランド

この時期、教会本部のあったカートランドは伝道活動の中心であった。カートランドは交通の要地に近く、教会員の密度が最も高かった。宣教師たちはカートランドからカナダや北東部、中部大西洋諸州、中西部、南部へと旅立って行った。またオハイオ州自体が、伝道地との間を行き来する宣教師であふれ、また長期にわたる伝道に出られない人々や冬の間帰還していた人々が地元の町や村を訪れるなどして伝道をしていた。

宣教師の伝道の中で典型的なのが、親戚への伝道、あるいは出身地への伝道である。宣教師としての伝道の期間は数日間から一年以上まで様々であったが、ほとんどはかなり短いものだった。通常、宣教師の活動にはリズムがあって、数週間または数か月間の伝道の後カートランドに戻って休息を取り、エネルギーを蓄えてまた伝道に

## 時満ちる時代の教会歴史

出かけて行くというパターンであった。<sup>23</sup> オーソン・ブラットやオーソン・ハイド、エラスタス・スノー、ブリガム・ヤングなどは、このパターンを教会に加入してから10年間、何度となく繰り返している。

1835年に十二使徒定員会ならびに七十人第一定員会が組織される以前は、伝道の業の管理は地元の神権定員会や高等評議会、大管長会のいずれかが行っていた。また、宣教師の訓練を改善する努力も見られた。この訓練に当たって主要な役割を果たしたのが、預言者の塾と長老の塾である。長老の塾ではジョセフ・スミスとシドニー・リグドンが「信仰に関する講話」を行い、宣教師たちには福音の教えを論理的かつ系統的に教えられるように、それを暗記することが求められた。ある啓示は、地理や地学、歴史、預言、文化、戦争、言語などを研究することを宣教師に求めている。「それは、わたしが再びあなたがたを遣わすときに、あなたがたが、わたしがあなたがたを召したその召しと、あなたがたを任命したその使命とを尊んで大いなるものとするように、あらゆる点で備えられるためである。」(教義と聖約88:80)

宣教師のアプローチの方法として最も一般的なものは戸別訪問であるが、当時の宣教師たちが最も成功を収めたのは、福音に対して積極的な人の家に何人かを集めて教えるというやり方であった。多くの宣教師は公の集会を好んだ。教える場所は、空いている所であれば小屋、学校、教会、家庭、裁判所など、どこでもよかった。彼らは預言について、また『モルモン書』や時のしるし、霊の賜物、背教、回復について語ったが、教えの中に教会の奥義は含めないように警告されていた。通常、まず教会の長老が教えを説き、次いでだれでもそのメッセージに対して意見のある者が話をする「自由」を与えられた。この方法は地元の牧師を窮地に陥れることになった。つまり、沈黙は説かれた教義に同意しているか敗北と解されたからである。こうして、福音についての議論や討論が行われ、最後に、説教をした宣教師の同僚が聴衆にバプテスマを勧めるのである。

宣教師はよく反対や敵対、無視にさらされた。不信者が自分の家族の一員である宣教師たちは特に心を痛めた。1832年、オーソン・ハイドはニューヨークとニューハンプシャーの親族のもとを訪れて福音を説いた。しかし兄弟のアサヘルは福音の教えに心を動かされることがなかった。オーソン・ハイドは「断腸の思いで」彼と別れたと書いている。3か月後、オーソンは姉妹とその夫に働きかけたが、彼らもメッセージを拒んだ。彼はこう書いている。「わたしたちは荷物をまとめて彼らのもとを去った。涙がとめどなく流れた。……胸を刺し貫かれるような思いではあったが、わたしが言えることは『主の御心が行われる』ということだけである。」<sup>24</sup>

ほかの教会の牧師たちは狡猾な方法を使い情け容赦なく宣教師の働きを妨げた。1835年、バプテスト派の執事が、ジョージ・A・スミス長老の説教を聞いていた友人の一人にコルク鉄砲と弾を窓から渡した。このときの模様をスミス長老はこう記している。その友人は、「わたしが説教していた間ずっと、くず繊維を固めたもの〔亜麻から取れる短くほどけた繊維で紡ぎ糸に使われる〕をわたしに向けて飛ばした。彼は射撃がうまく、撃った弾はほとんどわたしの顔に命中した。何発かは手で取れた。〔聴衆の〕多くはくすくす笑っていたが、集中して話を聞いてくれた人もいた。わたしはじゃまをされていることに気を取られずに説教を終えることができた。」<sup>25</sup>

こうした悩みはあったものの、これら初期の宣教師たちは信仰と証に促され、驚く

## オハイオでの教会の発展, 1831 - 1834年

べき成功を収めた。反対や冷やかし, 批判にさらされたものの, 宣教師たちは決してひるむことなく働き, 業は発展し, 着実に急速な成長のパターンが確立された。主は確かに「畑はすでに白くなり刈り入れを待っている」と宣言されたのである(教義と聖約4:4)。

教会の機関誌である『イブニング・アンド・モーニング・スター』や『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケート』(*Latter-day Saints' Messenger and Advocate*)に掲載された地方の支部からの手紙には, さらに多くの宣教師を求める趣旨のものが多数見られた。これらの出版物は指示や決定事項, 教会全体の発展状況に関する情報, 教義の解説などの伝達のためにも用いられている。

カートランドならびに地方の支部の大会は, 大半が伝道関連の事柄に費やされた。回復された福音を全世界にもたらすという戒めは, カートランドの教会本部では早くから熱烈に受け入れられていたのである。しかし同じころ, オハイオでの発展をよそに, シオンでは聖徒たちとミズーリ州ジャクソン郡の住民との間に重大な問題が持ち上がっていた。

### 注

1. Conference Report 『大会報告』1898年4月, 57で引用
2. *History of the Church* 『教会歴史』1: 216
3. 『教会歴史』1: 241
4. 『教会歴史』1: 261 - 264で引用
5. 『教会歴史』1: 265参照
6. 『教会歴史』1: 269
7. 『教会歴史』1: 269
8. ジョセフ・スミスからエマ・スミスへの手紙, 1832年6月6日付。 *The Personal Writings of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』ディーン・C・ジェシー編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984), 238で引用
9. 『教会歴史』1: 272
10. 『教会歴史』1: 295参照
11. プリガム・ヤング “History of Brigham Young” *Millennial Star* 「ブリガム・ヤング史」『ミレニアルスター』1863年7月11日付, 439参照
12. *Lydia Kinight's History* 『リディア・ナイト史』(Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1883), 10 - 13, 23, 101で引用
13. ジェシー 『ジョセフ・スミス私文書集』18 - 19で引用
14. 『教会歴史』1: 368参照
15. ロバート・J・マシューズ “A Plainer Translation” *Joseph Smith's Translation of the Bible: A History and Commentary* 「明瞭な翻訳」『ジョセフ・スミスの聖書翻訳 歴史と注解』(Provo: Brigham Young University Press, 1975), 256, 264 - 265も参照
16. 『教会歴史』1: 226
17. 『教会歴史』1: 235
18. 『教会歴史』2: 482 - 483参照
19. 『教会歴史』1: 267で引用
20. B・H・ロバーツ, *The Missouri Persecutions* 『ミズーリでの迫害』(Salt Lake City: Bookcraft, 1965), 61で引用
21. *Journal of Discourses* 『説教集』12: 158で引用
22. 『教会歴史』3: 304
23. デービス・ビトン “Kirtland as a Center of Missionary Activity, 1830 - 1838” *Brigham Young University Studies* 「1830年から1838年の伝道活動の中心であったカートランド」『ブリガム・ヤング大学紀要』1971年夏季号, 499 - 500参照
24. オーソン・ハイドの伝道日記, ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学特殊コレクション所蔵, 14 - 15, 31
25. ジョージ・A・スミス “My Journal” *Instructor* 「わたしの日記」『インストラクター』1946年10月号, 462

# ジャクソン郡からの追放

年表	重要な出来事
1833.夏	預言者の塾が開かれる
1833.7	ジャクソン郡の市民の間に「密約」の回状が回される
1833.7.20	印刷所が破壊される
1833.7.23	6人の長老たち、聖徒たちの安全のために命をささげることを申し出る
1833.10.31	ホイットマー定住地が暴徒に襲われる
1833.11.4	「流血の日」と呼ばれる抗争が起きる
1833.11-12	聖徒たちジャクソン郡から追放される

**預**言者ジョセフ・スミスと彼に同行して1831年の夏にミズーリに行った人々は、ジャクソン郡が末日におけるシオンの地であることを知り喜んだ。彼らは、よもや2年もたたないうちにミズーリ州西部の家を追われることになるとは、考えもしなかったであろう。教会員は来るべき迫害については気づいていなかったが、主はすでに、シオンの栄光が「多くの艱難の後」でなければもたらされないことを告げておられたのである（教義と聖約58：4）。

1833年はミズーリ州ジャクソン郡の聖徒たちにとってそうした艱難の年であった。近隣の住民との間に起こった数々の問題は収拾がつかなくなり、住民の中に教会員を相手に断固とした態度を執る人々が出始めたのである。夏に始まった抗争が、11月には組織化した暴徒が聖徒たちを家から追い出し、極寒の中をミズーリ川の対岸へと追いやるまでに発展したのである。

## 悔い改めの必要性

1832年末の段階で、ジャクソン郡には800人を超える聖徒たちが5つの支部に分かれて住んでいた。そして、毎週のように新しい人々が入植して来て、家を建てていた。そこで7人の大祭司、すなわちオリバー・カウドリ、ウィリアム・W・フェルプス、ジョン・ホイットマー、シドニー・ギルバート、エドワード・パートリッジ、

「ジャクソン郡からの追放」C・C・A・クリステンセン画



## 時満ちる時代の教会歴史

アイザック・モーリー、ジョン・コリルが、ジョセフ・スミスにより急速に発展するシオンの教会を管理するように任命された。そしてこの7人の兄弟たちは、各支部を管理する人を長老の中から召した。

しかし教会員の中に、これらの支部を管理するように召された人々の権能を無視することにより、ミズーリの教会指導者を認めようとしないう人々が出てきた。そのため幾つかの支部はまとめるのが困難な状態となった。また中には、「奉献の律法と管理の職によらずに別の方法で受け継ぎの地を得ようとする者」が出始めた。<sup>1</sup> フェルプス長老がこうした問題についてカートランドのジョセフ・スミスに手紙で説明したところ、すぐに啓示された指示を含む返事を得た。主は示された律法を守らない人々に警告を与え、そのような人々は「神の民とともにその名を登録される」資格がなく、「神の律法の書に」名前が書かれることがあってはならないと言われた（教義と聖約85：3，5）。教会の歴史記録者であるジョン・ホイットマーは、エドワード・パートリッジ監督から「律法にかなって」受け継ぎを得た人と、やがて背教していった人の両方の名簿を作るように指示されている（教義と聖約85：1-2参照）。

シオンではほかの問題も持ち上がった。預言者は聖徒の中にささいなことへの嫉妬心やむさばり、軽薄、不信仰、そして全体的に神の戒めを軽視する傾向があることに気づいた。シオンの民の中にはジョセフ・スミスを「専制的な権力と力を追い求めている」と非難し、ジョセフは業とシオンへの移住を遅らせているのだと主張する者もいた。<sup>2</sup>

これに対して預言者は平和の精神に満ちた返事を書き、「オリーブの葉」（教義と聖約88章）の複写を送っている。「シオンにいるわたしたちの兄弟たちがたとえそうした思いでわたしたちを見ているとしても、そしてそれは新しい聖約で求められていることに反するのですが、それでもわたしたちは、主がわたしたちを受け入れてくださり、国々の救いのためにカートランドに主の御名を確立してくださっていることを知って満足を覚えています。……もしもシオンが自らの力で清くならなければ、主は代わりに民を求められるでしょう。……悔い改めよ、悔い改めよ。これがシオンへの神の御声です。」<sup>3</sup>

これと時を同じくして、カートランドの評議会はハイラム・スミスとオーソン・ハイドに、ミズーリの教会への叱責の手紙を書かせた。その手紙は断固たる警告で、こうあった。「悔い改めよ、悔い改めよ。さもなくばシオンは艱難を味わうことになります。懲らしめと裁きが必ずやって来るからです。」そしてその手紙は聖徒たちに、聖文を読んでそれに従い、自らを低くすることを嘆願している。「シオンの民は何もせず座し、神に関することを無視するためにシオンに来たわけではありません。新しい聖約に従うことにおいて熱心かつ忠実でなければならないのです。」<sup>4</sup>

「オリーブの葉」の啓示を受け取った後、大祭司の評議会は1833年2月26日に会合を開き、各支部で聖会を行うことにした（教義と聖約88：70参照）。デビッド・ペティグラーは日記の中で、パートリッジ監督が聖会を「告白と悔い改めの日」と定めたことを書いている。<sup>5</sup> オリバー・カウドリ、ウィリアム・W・フェルプス、ジョン・コリルの長老たちもシオンの聖徒たちの代理としてカートランドの幹部に書簡を送り、今後戒めを守っていく旨を知らせた。<sup>6</sup> 主はこの新しい気運に喜びを示し、ミズーリの聖徒たちのことを「天使たちは……喜んでいる」との啓示を預言者に下

## ジャクソン郡からの追放

された（教義と聖約90：34）。

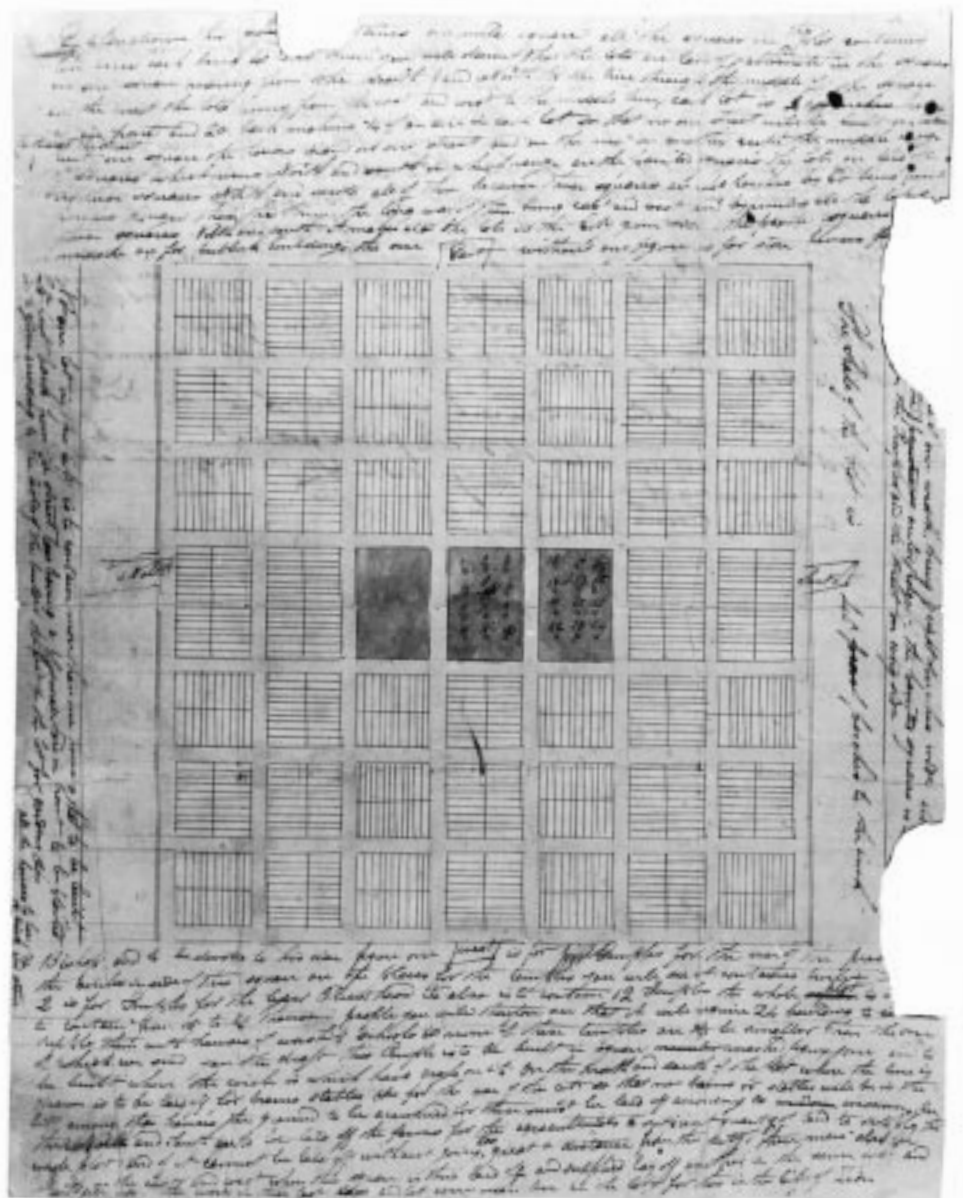
## 将来への楽観的な見方

1833年の春から初夏にかけての新たな聖徒たちのミズーリへの移住は、規模においてそれまでのシーズンを超えるものであった。パーリー・P・プラットの回想によれば、新たに到着した聖徒たちは土地を購入し、家を建て、土地を耕やしていったが、「彼らの働きは平和と実りをもたらし、荒れ野は良き畑となり、この荒涼とした土地はばらの花がつぼみをつけ、花開くように開花し始めた。」聖徒たちは日曜日ごとに自分たちの支部に集い、礼拝を行った。こうして6月初旬には、聖徒たちの間に一致の精神がみなぎっていた。パーリーはこう書いている。「現在の聖徒たちよりも幸福な民がこの地上にいるとは思えない。もしいるとしてもほんのわずかでしかないに違いない。」<sup>7</sup>

夏にはカートランドの預言者の塾をモデルにした長老の塾がシオンに組織された。



ミズーリ州カンザスシティーのトルスト公園にあるシオンの学校の記念碑。1963年9月14日、ジョセフ・フィールディング・スミスにより奉献された。この記念碑は教会が1831年にコータウンシップに建設したシオンの学校の跡地にある。シオンの学校はカンザスシティーで初めて建てられた学校でもある。



1831年12月19日、エドワード・パートリッジはジョーンズ・ホイ・フラーノイから63.43エーカー（約28ヘクタール）の土地を購入した。これにはかつて神殿用地として奉献された土地も含まれている。1833年6月25日、預言者はこの図面をミズーリの教会幹部に送っている。

各区画は1マイル（約1.6キロ）四方で、1エーカー（約0.4ヘクタール）の広さである。<sup>8</sup>

## 時満ちる時代の教会歴史

そして、60人の長老たちを管理し教えるように召されたのが、パーリー・P・プラットである。集会は森の木陰で行われた。プラット長老は当時のことを懐かしく思い出す。「そこには大いなる祝福が注がれて、偉大にして驚くべきことが数多く示され、教えられた。主はわたしに大いなる知恵をお授けになったので、長老たちを教え、啓発することができた。」<sup>9</sup>この長老の塾で数人の兄弟たちが異言の賜物による経験をしている。この間、W・W・フェルプスは続けて『戒めの書』( *Book of Commandments* ) の出版準備を行い、同時に月刊『イブニング・アンド・モーニング・スター』( *Evening and Morning Star* ) の編集にも携わった。

1833年6月下旬、預言者はミズーリの聖徒たちに、シオンの町の建設とそれに伴う神殿建設のための設計図を送っている。シオンの町は1万5,000人から2万人を擁する町として設計され、1マイル四方(約1.6キロ四方)の10エーカー(約4ヘクタール)の区画を0.5エーカー(約0.2ヘクタール)ずつの土地に分け、一つの土地に家を1軒建てることになっていた。また24の神殿の建物が建てられ、礼拝の家として用いられる。学校は町の中心の二つの区画内に建てられ、町の南と北の土地は家畜小屋や農場として用いられることになっていた。また農夫も商人も職人も町に住み、社交と文化と教育の機会を享受できるように考えられている。<sup>10</sup> 不運にもこの計画は暴徒の妨害により日の目を見ることはなかったものの、基本的なアイデアはミズーリ州北部やイリノイ州ノーブー、それに西部の数百もの定住地で末日聖徒により踏襲されていくのである。

## ジャクソン郡での対立の原因

ジャクソン郡の聖徒たちの幸福で好ましい状態は、1833年7月に突然終わりを告げる。もともとミズーリに住んでいた人々が、急速に増加する教会員に懸念を深めたのである。多くの人々は、東部からの宗教に啓発された新しい巡礼者たちによって自分たちがやがては少数派になってしまうことを恐れた。「古くからの移住者たち」は末日聖徒とは異なった背景を持つ人々で、当然のことながら文化や政治、宗教、経済の面で違いが生じるようになった。

ジャクソン郡の住民は南部の幾つかの州の山岳地帯から来た人々で、社会的な決まりからの自由を求めてアメリカ合衆国の西の辺境地帯に移住して来ていた。彼らのほとんどは教育がなく、ニューイングランドや東部ではごく普通の教養など持ち合わせてはいなかった。多くが神を冒瀆<sup>ほうとく</sup>する言葉を口にし、安息日を破り、競馬や闘鶏にふけり、怠惰で、大酒飲みで、かけ事や暴力を好む人々であった。初めてジャクソン郡を訪れたジョセフ・スミスは次のような感想を述べている。「ほぼ1世紀も時代に乗り遅れた人々が墮落し、知性に欠け、狂暴で、ねたみ深いのはごく当然の姿であり、文化や教養、宗教の恩恵を受けることなく放浪している彼らを見ると、同情を禁じ得ない。」<sup>11</sup>

もともとの移住者の目には、増加する聖徒たちの集団は政治的脅威として映った。ジャクソン郡への短期間の滞在の間、教会員が政治家のいすをねらっていたわけではないし、教会が特定の候補者への投票を指示したわけでもないのにである。1833年7月の段階で、ジャクソン郡の末日聖徒数は1,200人に達し、その数字は毎月増加していた。教会員の中には、さらに何千人もがやって来ると大言壮語する者もいた。



## ジャクソン郡からの追放

「数だけを取ってみれば、あと数百人でモルモン教徒がもともとの移住者で郡を設立した人々から政治上の支配権を奪取してしまう状況であった。」<sup>12</sup> そうなると、すべての「異邦人」(非モルモン教徒)はジャクソン郡に福千年の王国が築かれたときに絶たれると預言する宗教運動に対して、地元の住民が不安を抱くのは当然のことであった。

プロテスタントの牧師たちもまた、モルモン教徒の郡への進入に対して怒りをあらわにしていた。末日聖徒は狂信者、ならず者というレッテルをはられ、また奇跡や預言、癒し、異言を信じ、幾度となくそれらを体験していたことから、だまされやすい無知な者たちとさげすまれていた。さらに、自分たちの信者の一部を奪われたことも、牧師たちの敵対感情に拍車をかけた。カンバーランド長老派教会のフィニス・ユーイング師はこう主張する。「『モルモン教徒』は人類共通の敵である。彼らを滅ぼさなければならない。」伝道協会(訳注: Missionary Societyが原名で、インディアンへのキリスト教布教のために派遣された人々)のある牧師は「家々を回って悪らつな偽りを広め、聖徒たちに対して暴力行為を行うようにたきつけた。」<sup>13</sup>

サンタフェ街道もオレゴン街道もミズーリ州インディペンデンスを起点にしている。毛皮商人や開拓者、いろいろな冒険家がここで西部への旅の準備を整えた。

それに加えて、モルモンの商人たちは、それまでミズーリの住人が支配していたサンタフェ街道での利益率の大きい商売の一部を自分たちのもつものに引き寄せることに成功していた。そのためもたらいた住民の中には、土地も仕事もすべてモルモン教徒に奪われてしまうのではないかと恐れる者が出てきた。それに輪をかけて、「聖徒たちは現金を持っていかなかったことから、地元の商人から物を買うことをせず、教会の倉での教会員同士の物々交換で生活していた。……また、土地をモルモン教徒に売って転出してしまふ住民もいたので、地元の住民の営む店の客はどんどん少なくなり、財産的に破綻はたんを来しかねなかった。」

さらに事態を複雑にしたのが、1833年春のミズーリ川の氾濫である。この洪水でインディペンデンスの船着場が流され、川の流れから町を遠ざけてしまった。上流にもっと良い船着場を持つ新しい町、ウェストポートが建設され、インディペンデンスの商業は衰退していった。そしてインディペンデンスの事業主たちは、こうした状況をモルモン教徒の責任にした。<sup>14</sup> 将来を見越した住民の中には、聖徒たちにすべてを売却したいと考える者が出てきた。聖徒たちも農地や財産を購入したいのはやまやまであったが、十分な資本がなくそれができない。このことは、ミズーリ住民を憤慨させ、程なくモルモン教徒が赤貧の生活をしているという作り話が広まった。

ミズーリの開拓者たちはインディアンを恐れ、毛嫌いしていた。この敵対感情は、1830年代になって連邦政府が東部の部族をインディペンデンスのすぐ西の地帯に移住させたことにより増大する。そして1832年のブラックホークの戦い以降、ミズーリ州西部の住民は議会に対して、防御のための軍事駐屯地を設けるよう請願していた。最初のモルモンの宣教師が訪れてアメリカ先住民の預言された行く末について宣べ伝えたのは、そのような緊張状態のまっただ中だった。そこで古くからの住民たちは、聖徒たちがインディアンの助けを借りて地域を制圧し、新エルサレムを建設するのではないかと恐れた。それに、インディアンへの末日聖徒の宣教師の伝道に対してプロテスタントの牧師たちが嫉妬心を抱いたことが、事態をさらに複雑なものにしていったのである。

## 時満ちる時代の教会歴史

聖徒たちと古くからの住民との間の対立が深刻なものに発展したのは、奴隷制度の問題においてである。ミズーリ州は1820年の有名な妥協案により、奴隷州として連邦側に加盟していた。しかしながら実際に奴隷を所有することは制限されていた。ミズーリの住民は自分たちに奴隷所有の権利が与えられていることをかけがえのない大切なことであるととらえていたので、奴隷廃止論に対しては軽蔑<sup>けいべつ</sup>の目を向けていた。ところが、聖徒たちの中には北部や東部から奴隷廃止論を持ち込む者がいたし、黒人の反逆があるかもしれないことは南部全体で当時恐れられていたことだった。1831年に、バージニアでナット・ターナーによる奴隷の反乱が起こり、白人が70人以上、奴隷が100人命を落としていた。これらが、反乱に対する漠然とした恐れを奴隷州の中にかき立てていたのである。聖徒たちが奴隷に対して主人に逆らったり、逃げたりするようにそそのかしているとのうわさを耳にしたミズーリの住民が、1832年の初旬に決起したのはそのためである。

このうわさを否定するために、1833年7月号の『イブニング・アンド・モーニング・スター』は奴隷や「自由人である黒人」として知られる元奴隷の間での伝道について注意を喚起した記事を書いたが、不幸なことに地元の住民はこの勧告を、フェルプス兄弟が奴隷たちをジャクソン郡のモルモンに加えようとしていると誤解した。この記事が住民を激怒させていることを知ったフェルプスは号外を出し、教会には自由人である黒人をミズーリに招く意図はないと説明したが、時はすでに遅かった。

そして1833年の夏、聖徒たちと住民との多くのあつれきは、積もり積もって暴動への舞台を作っていく。集団による暴力行為への気運はすでに4月ごろから見え始めていたが、7月の初旬になると有力者を含む数百人の人々が「密約」として知られる宣誓書に署名した。それはモルモン教徒を弾劾し、7月20日の決起集会への参加を呼びかけるものであった。宣誓書はモルモン教徒が奴隷をそそのかして反逆させようとしていること、自由人である黒人や混血人を教会に加入させてミズーリに住ませようとしていることを非難しており、署名した者の意図は、「可能であれば平和的に、不可能であれば強制的に」モルモン教徒を排除することにあった。<sup>15</sup>

### 暴徒、聖徒を脅迫する

7月20日土曜日、インディペンデンスの裁判所に、不満を持つ4,5百人の市民が集結した。彼らは役員を選び、モルモンへの要求書の草案を作成する委員会を選出している。役員と委員会のメンバーに選ばれたのはジャクソン郡の有力者で、「多くは郡の役人、つまり郡判事、治安官、裁判所書記官、治安判事であった。」<sup>16</sup>ミズーリ州の副知事であり、広大な土地を持つ住民の一人であったリルバーン・W・ボッグズもこの会に参加し、反モルモン活動を奨励している。

この集会で「秘密の憲法」が読み上げられ、委員会はいかなる末日聖徒に対してもジャクソン郡への立ち入りもしくは移住は許さない、また現在までに居住している者は然るべき時間以内に退去することを誓約しなければならないとの憎悪に満ちた最後通牒<sup>つうちょう</sup>を書いた。教会の新聞も発行の停止を求められている。そして12人から成る委員会が聖徒たちへの要求の提示を行うように任命された。兄弟たちはこの要求に驚いたものの、シオンを放棄することはできなかったので、3か月間の猶予を得て

## ジャクソン郡からの追放

「モルモン教徒のミズーリ州ジャクソン郡からの逃亡」C. C. A.クリステンセン画



オハイオの教会指導者と協議したい旨を申し入れたが、その要求は拒絶された。そこで10日間の猶予を求めたが、委員会は15分の猶予なら与えると言い残し、裁判所の集会の場へと帰って行った。

集会に参加した者たちはたちどころに暴徒化し、印刷所と印刷機を破壊することを決定。印刷所兼W・W・フェルプスの住居となっていた建物を取り囲み、家具を道路や庭に放り投げ、印刷機を壊して運び去り、活字をばらまき、製本前の『戒めの書』を含むほとんどすべての印刷物を使えなくした。そして2階建てのその建物を完全に倒してしまった。次に暴徒たちはギルバートとホイットニーの店の品物を破壊する行動に出た。しかしシドニー・ギルバートが3日で荷物をまとめて出て行くことを約束したため、彼らは破壊を思いとどまった。

次に暴徒たちはのろいの言葉を声高に叫びながら、教会で指導的な立場にあった長老たちを探し始めた。男も女も子供たちも四方八方に逃げて行く。暴徒はエドワード・パートリッジ監督を家から連れ出し、町の広場に引きずって行った。ペンシルベニアからの改宗者で27歳になるチャールズ・アレンも広場に連れ出された。暴徒は二人に『モルモン書』を否定するか町を出て行くか、どちらかにしろと詰め寄ったが、二人はどちらも拒否した。すると暴徒はタールと鳥の羽根を持って来た。そこでパートリッジ監督は、キリストのためであれば古代の聖徒たちと同じように喜んで苦しみに耐えると穏やかな口調で語り、その侮辱的な行為に驚くほど従順に、柔和な態度で耐えた。それには、それまで汚ないのろいの言葉を叫んでいた群衆も、口をつぐんでその場を去ってしまった。<sup>17</sup>

さて、預言者ジョセフ・スミスへの啓示を含んだ『戒めの書』は、数冊が神の御心により難を逃れた。暴徒が製本前の『戒めの書』の印刷された紙の束を印刷所の窓から庭に投げ捨てるのを見たメアリー・エリザベス・ロリンズとキャロライン・ロリンズという14歳と12歳の二人の姉妹は、何とかして少しでも守りたいと決心し、それらの印刷された紙の束を腕に抱えられるだけ抱えると、建物の裏に走った。暴

## 時満ちる時代の教会歴史



メアリー・エリザベス・ロリンズは1828年、10歳で家族とともにカートランドに移り、1830年10月、オリバー・カウドリ、ピーター・ホイットマー、ザイバ・ピーターソンの証を聞いた後でバプテスマを受けた。

メアリーは1835年8月にアダム・ライトナーと結婚、10人の子供の母となった。そして1913年12月17日、ユタ州マイナーズビルで死去。享年95歳。

徒は二人に止まるように言ったが、二人は木の塀の透き間から抜け出してとうもろこし畑に逃げ込んだ。暴徒は長い間捜し回っていたが、二人は地面に身を伏せて静かにしていた。

やがて暴徒がいなくなると、二人は古い馬屋に隠れていたフェルプス姉妹と子供たちを見つけ、束をフェルプス姉妹に渡した。こうして後に、何冊かの『戒めの書』が製本された。二人はその1冊ずつを記念にもらい、生涯大切にしている。21歳の青年ジョン・テラー（後の大管長ではない）は、危険を冒して印刷所の倒れた丸太の間から印刷された紙の束を取り出し、暴徒に石を投げつけられたものの奇跡的に逃れることができた。<sup>18</sup>

暴徒は7月23日にもやって来たが、今度はライフルやピストル、<sup>むち</sup>鞭、棒を持っていた。彼らはのろいの言葉や神を<sup>ぼうとく</sup>冒瀆する言葉を叫びながら教会の指導者を探し回った。そして干し草の山や穀物畑に火を放ち、家や納屋、店を幾つか破壊している。やがて暴徒は、聖徒たちの財産と生命が危険にさらされると判断して自らの命を身代わりに差し出した6人の教会指導者と相対する。エドワード・パートリッジ、アイザック・モーリー、ジョン・コリル、ジョン・ホイットマー、W・W・フェルプス、シドニー・ギルバートの6人である。彼らの名は誉れある人々として、今もなお教会員の記憶に残る。

この身代わりの申し出を拒絶した暴徒の指導者らは、郡を出ることに同意しなければすべての男、女、子供を鞭で打つと脅した。この脅迫に幹部の兄弟たちは抗し切れず、同意書に署名をした。指導者は1834年1月1日までに、一般教会員は4月1日までに郡を離れるというものである。ジョン・コリルとシドニー・ギルバートは聖徒たちの土地を売却するための代理人として残ることを許された。コリルの記すところによれば、教会員はこの時点で「たとえ自己防御のためにも指1本上げることがせず、『<sup>ほお</sup>ほかの頬も向けなさい』との福音の教えにまったく忠実であった。』<sup>19</sup>

## 賠償の請求

同意書への署名の後、オリバー・カウドリがミズーリの聖徒たちの窮状について教会幹部と話し合うためにオハイオに派遣された。そして8月21日、カートランドで評議会が開かれ、オーソン・ハイドとジョン・グールドが特別メッセンジャーとしてジャクソン郡に送られることになった。彼らの携えたメッセージは、実際一人一人が同意書に署名しないかぎり土地や財産を手放さないこと、また住んでいる所から離れないことを指示するものだった。しかしこのメッセージが届いたのは、9月28日を過ぎてからのことであった。

その間、教会員の中にはバンビューレン郡に移住を試みた者もいたが、その住民もまたモルモン教徒を追放する誓約書に署名していた。そこで彼らはまたジャクソン郡の元の家に戻って来た。暴徒は夏の間中毎日聖徒たちの家に押し入り、ジャクソン郡に住む聖徒たちへの暴力行為に明け暮れた。聖徒たちへの嫌がらせはしないとの同意書を交わしたにもかかわらず、暴力は続いたのである。

8月になってミズーリ州フェイエットの新聞『ウェスタンモニター』(Western Monitor) がシリーズでジャクソン郡の暴力行為を厳しく非難、聖徒たちが受けてきた不当行為への賠償を州当局に求めるべきであるとの提案を出した。そこで教会指



アイザック・モーリー(1786 - 1865年)は9年間、エドワード・パートリッジ監督の副監督を務めた。死去する前の10年間は、ユタ州サンピート郡で祝福師の任にあった。

## ジャクソン郡からの追放

導者は嘆願書を書いた。受けてきた不当行為の詳細にわたる説明と、ジャクソン郡の古くからの定住者による偽りの非難を否定する内容のものであった。「愛する救い主の教えに従い、片方の頬を打たれたわたしたちはもう一方の頬も向けました。...このような侮辱行為を不平も言わず耐えてきましたが、神と人の律法からしてもこれ以上耐えることはできません。わたしたちは十分に耐えてきました。」<sup>20</sup> 10月初旬、W・W・フェルプスとオハイオからの代表であるオーソン・ハイドが州の首都であるジェファーソン・シティーに赴き、ダニエル・ダンクリン知事に嘆願書を渡した。彼らの要求は自分たちの権利を守るために州軍を派遣すること、財産への損害に対する訴訟を受け付けること、暴徒に加わった者たちを司法当局の手にゆだねることであった。

州の法務長官と数日にわたる協議を行った結果、知事は問題解決のために軍の派遣は必要ではないと判断し、ジャクソン郡の巡回判事ならびに治安判事に嘆願書を提出することにより、現行法の下での賠償と保護の請求を行うように勧めた。そして知事は、この方法が効を奏さないときはほかの方法を用いて法を執行すると約束している。<sup>21</sup>

知事の進言は効果がなかった。ジャクソン郡の郡判事サミュエル・D・ルーカスと郡の治安判事の中の2人が、モルモン教徒を追放しようとするグループに加わっていたのである。にもかかわらず教会指導者は知事の指示に従い、クレイ郡の4人の著名な弁護士に援助を依頼した。この4人の弁護士は聖徒たちの味方となり、その後のミズーリでの残りの10年間、聖徒たちを迫害者の手から守った。そのうちの2人、アレクサンダー・ドニファンとデビッド・アッチンソンは、1845年から1865年にかけて州および全米で名の知られる働きをしている。

教会指導者は法律上の賠償を求めることに加えて、無抵抗主義を返上、教会員に武器を持って家族と家を守ることを指示した。代表者がクレイ郡に行き弾薬を買い求め、1833年10月20日、肉体的な暴力に対してはいかなるものであっても自ら身を守るようにとの発表が教会指導者からなされた。

## 聖徒たち、ジャクソン郡から追放される

古くからの住民は、聖徒たちが抵抗の姿勢を示したのを見るや暴力行為への決意を新たにし、モルモンの教義が神を冒瀆したものであり、力づくでジャクソン郡を奪おうとしているとのうわさを流した。すると1週間もしないうちに郡の中で一気に緊張が高まった。そして10月31日木曜日の夜、馬に乗った約50人の暴徒がインディペンデンスの西にあるビッグブルー川のホイットマー定住地を攻撃した。彼らは13軒の家の屋根をはがし、『モルモン書』の8人の証人の一人であるハイラム・ページを含む数人の兄弟たちを鞭で打って半殺しにした。こうした略奪行為はインディペンデンスやブルータウンシップ、コータウンシップ、そしてホイットマー定住地で、その後も2晩続けて行われている。男たちは打たれ、女性や子供たちは恐怖におののいた。教会指導者は当局による暴徒の逮捕が望めないことから、自衛手段として各定住地に見張りを置いた。

ジャクソン郡の市民のすべてが聖徒たちに敵対していたわけではない。教会員に対して親近感を抱いていた人々は暴徒に対して、またその無法行為に対してまった

## 時満ちる時代の教会歴史

く弁解の余地がないと考えていたが、残念ながら暴動を阻止するだけの行動を起こすまでには至らなかった。

そして11月4日月曜日は「流血の日」として知られる日となった。何人かのミズーリ住民がビッグブルー川のモルモンの渡し船を奪ったことで、双方から3,40人の男たちが武器を持ってとうもろこし畑で対峙したのである。発砲したのは暴徒の方からであった。その弾丸がフィロ・ディブルの腹に命中したが、ニューエル・ナイトの神権の祝福によって奇跡的に癒されている。しかしアンドリュー・バーバーは致命傷を受けた。モルモン側も応戦し、二人のミズーリ住民と何頭かの馬を殺している。同じ日、数人の教会指導者がインディペンデンスで逮捕され、裁判にかけられた。そして裁判の進行中にモルモンとミズーリ住民との抗争について偽りの情報が町に届き、モルモン教徒がある市民の家に押し入り、息子を撃つたと伝えられた。これを聞いた群集は激怒、逮捕されている教会指導者を殺すと言いたしたが、教会指導者はすぐに牢に入れられ、鍵をかけられたので無事だった。その晩、ミズーリの住民は翌日のモルモン大虐殺に備えて、武器と弾薬をかき集めている。また、モルモン教徒はインディアンを味方にして戦おうとしているとのうわさも流れた。しかし、牢の中でこうした状況を耳にした教会指導者は、自分たちに町を出る意図があること、またほかのすべての教会員にもそうさせることを保安官に告げた。

ボッグズ副知事の扇動により、反モルモンを自認するトーマス・ピッチャー大佐が率いる州軍の一部隊が、モルモン教徒を郡から追放するために召集された。同じころ、ライマン・ホワイトは教会の指導者が投獄されたことを知り、武装した200人の兄弟たちを集め、監獄に向かった。そしてあと1マイル（約1.6キロ）でインディペンデンスというときに、州軍の発動を知るのである。そこでボッグズは両軍が武器を収めるとともに、聖徒たちが10日以内に郡を出ることを提案してきた。こうして聖徒たちは、クレイ郡に入った段階で返却を受けるとの約束で武器を放棄したが、州軍側は武装を解除せず、聖徒たちの武器は二度と戻ってこなかった。

逮捕されていた指導者たちは拘束を解かれるとすぐに約束を実行に移し、ミズーリ川を越えて聖徒たちを速やかに群外に脱出させる計画を立てた。ところが、大勢の侵略者たちがその後3日にわたって聖徒のいる所を馬で駆け巡り聖徒たちを襲った。その中には幌馬車を入手するために男性たちが留守をしていた女性と子供ばかりの130人のグループも含まれていた。こうして、郡を脱出する中で、少なくとも女性二人が死んだ。

ミズーリ川の船着場付近の両岸には、難民と化した聖徒たちの長い列ができた。中には家財道具を持って逃げるのできた幸運な者たちもいたが、多くは着の身着のままであった。パーリー・P・プラットはこう記している。「そして再び夜のとばりが降り、ポブラの生い茂るその川べりは野営場の様相を呈した。あちこちに何百人もの人々が散らばり、土砂降りの雨の中をある者はテントの中に入り、ある者はたき火の周りに集まっていた。夫は妻の行方を尋ね、妻は夫を捜し、親は子供を、子供は親を捜し歩いた。……その光景は筆舌に尽く難く、この光景を目にしたならば、地上のいかなる人の心も同情にあふれるに違いない。あの盲目の虐待者、盲目で無知な住民を除いては。」<sup>22</sup>

ジャクソン郡の暴徒は教会員をことごとく郡の外に追い出すまで迫害を続けた。

## ジャクソン郡からの追放

ライマン・ホワイトはこう書いている。「わたしは190人の女性と子供たちの一団が、わずか3人の年老いた男性とともに30マイル（約50キロ）の平原を追われて行くのを目撃した。11月で、地面は薄くみぞれが凍りついている。わたしは彼らの後を簡単に追うことができた。焼けて株だけが残った木が刺さって傷ついた足から血がしたたり、彼らの踏み跡を点々と染めていたからである。」<sup>23</sup>1834年の早春ミズーリの住民はモルモン教徒がまたオハイオからやって来ることを知り、かつて聖徒たちが所有していた家をすべて焼き払った。郡を出た聖徒たちに二度と戻る気持ちを起こさせないためであった。

## 追放の余波

ジャクソン郡を追われた聖徒たちのほとんどは、近隣のほかの郡に難を逃れた少数の人を除いて、クレイ郡に仮の住居を見つけた。クレイ郡の郡庁舎のあるリパティエーの町では、市民が同情から家や仕事や食糧を提供してくれた。聖徒たちはかつて奴隷が使っていた小屋に入ったり、自分で粗末な小屋を建てたり、テントを張ったりしながら乏しい食物に耐え、春が来るのを待った。男性の中には家を建てたり、木を切ったり、未開地を開拓する仕事にありつけた者もあった。姉妹たちの中にも、裕福な農家で家事を手伝ったり、学校で教えたりする者も出た。そして春になると、畑を借りて作物の植え付けをする人もいた。クレイ郡の住民のほとんどは好意的であったが、彼らは聖徒たちの滞在をほんの一时的なものであると考えていた。ジャクソン郡の敵対者たちはクレイ郡のこれら聖徒たちに好意的な人々を「ジャックモルモン」と称した。その後19世紀において、聖徒たちに好意的な人々はそう呼ばれるようになった。

そのころジョセフ・スミスはミズーリ州西部での出来事について情報を集めていたが、7月の事件について知ると、シオンの教会に向けてこう書き送った。「兄弟の皆さん、もしわたしが皆さんと一緒にあれば皆さんとともに苦しむでしょう。そして、しりごみしようとする人間の本性を乗り越えて、わたしの霊はたとえわたしが死んでも皆さんを見捨てることはないでしょう。神がわたしを助けてくださっているからです。」<sup>24</sup> 1833年10月、主はジョセフ・スミスに次の啓示を下された。「シオンはしばしの間懲らしめを受けるが、贖われるであろう。……それゆえ、心に慰めを得なさい。まっすぐに歩む者たちに益となるように、また教会の聖めのために、万事がともに働くからである。」（教義と聖約100：13、15）

カートランドからミズーリへの使者であるハイド長老とグールド長老は、「ジャクソン郡の暴徒が兄弟たちを迫害しているとの暗い知らせ」<sup>25</sup>を携えて、11月25日にオハイオに戻って来た。この知らせは預言者に深い心痛をもたらした。彼はこう書いている。「御霊のいかなる示しからしても、今主がシオンにこのような苦難をお許しになっているにせよ、日の栄えの冠を受けるというシオンの権利が取り去られたとは理解できない。……わたしは、シオンが主の定められたときに贖われることを知っている。しかし、シオンの清めと艱難と苦難の日々がどれだけであるかを、主はわたしの目から隠しておられる。そしてこの件について伺いを立てると、主の御声はこう言われる。『安らかにして、わたしが神であることを知りなさい。わたしの名のゆえに苦しむ者は皆、わたしとともに治めるからである。そして、わたしの

## 時満ちる時代の教会歴史

ために自分の命を捨てる者は、再びそれを見いだすからである。』<sup>26</sup>

それから数日後、主はミズーリの聖徒たちに苦難の原因を明らかにされた。「彼らの背きのゆえに、彼らの受けている苦難が彼らに及ぶのを許した。……彼らの中には、あつれきや争い、ねたみ、対立、およびみだらなむさぼりの欲望があった。それゆえ、これらのことによって、彼らはその受け継ぎを汚したのである。」(教義と聖約101:2,6)

ミズーリの聖徒たちはクレイ郡を永住の地とするのか、それとも仮住居とするのか思い悩んでいた。ジャクソン郡の家に戻る見込みはほとんどなかったからである。そこで1834年1月1日の大会で、二人の長老をカートランドに派遣して預言者と相談し、ミズーリの聖徒たちの救済策を講じることとなった。名乗り出たのはライマン・ホワイトとパーリー・P・ブラットだったが、二人とも旅に出る資金を持ち合わせていなかった。パーリーはこう書いている。「わたしはこのころ、旅にふさわしい服は一着も持っていなかった。それに、馬も鞍も馬勒も、また持参するお金も食糧もなかった。ましてや、病床に伏していて自分ではほとんど何もできない妻に残してやれるものは何一つなかった。」<sup>27</sup>この高貴な二人の兄弟は、ほかの人々の助けを借りて旅の準備を整え、馬に乗って全力で進んだ。しかし彼らが着いたのは、過酷な天候のために春先となった。

教会の指導者たちは預言者からの返答を待つ傍ら、ミズーリ州政府に損害の賠償を求めた。そこで12月にリバティーで審問のための法廷が開かれ、州軍のトーマス・ピッチャー大佐の逮捕を決めている。しかし、ジャクソン郡の市民の聖徒たちに対する敵対感情があまりにも強く、刑事訴訟に訴えるのは不可能であった。ダンクリン知事は教会員から押収した武器を返還することを命じたが、その命令は守られなかった。

聖徒たちは自分たちが受けてきた不当な仕打ちについての扱いを州当局にゆだねるとともに、アンドリュー・ジャクソン大統領に請願書を出した。その請願書には、彼らのダンクリン知事への請願の返答も同封されていた。知事はその返答の中で、現行法の下では州軍をジャクソン郡に派遣して、家に戻って来るモルモン教徒を暴徒から守ることは不可能であると述べていた。大統領への聖徒たちの要求は、ジャクソン郡の家と財産の返還と、安全の確保であった。しかしながら残念なことに、この請願が行われたのはアメリカ史の中で州の自治の問題について大論争が行われていた最中であり、一般感情は、州政府への明らかな反逆行為があることを知事が宣言した場合は別として、ジャクソン郡で起こっているような内政上の事柄に対して連邦政府が干渉する権限はないというものだった。1834年5月、連邦政府は聖徒たちの請願を却下した。述べられている暴力行為は連邦法ではなく州法に対する違反行為であるとの見解に立ってのものである。同時に、ダンクリン知事も自ら行動を起こすことを躊躇した。教会の代理人は州議会に訴えたが、議会も介入を拒否した。

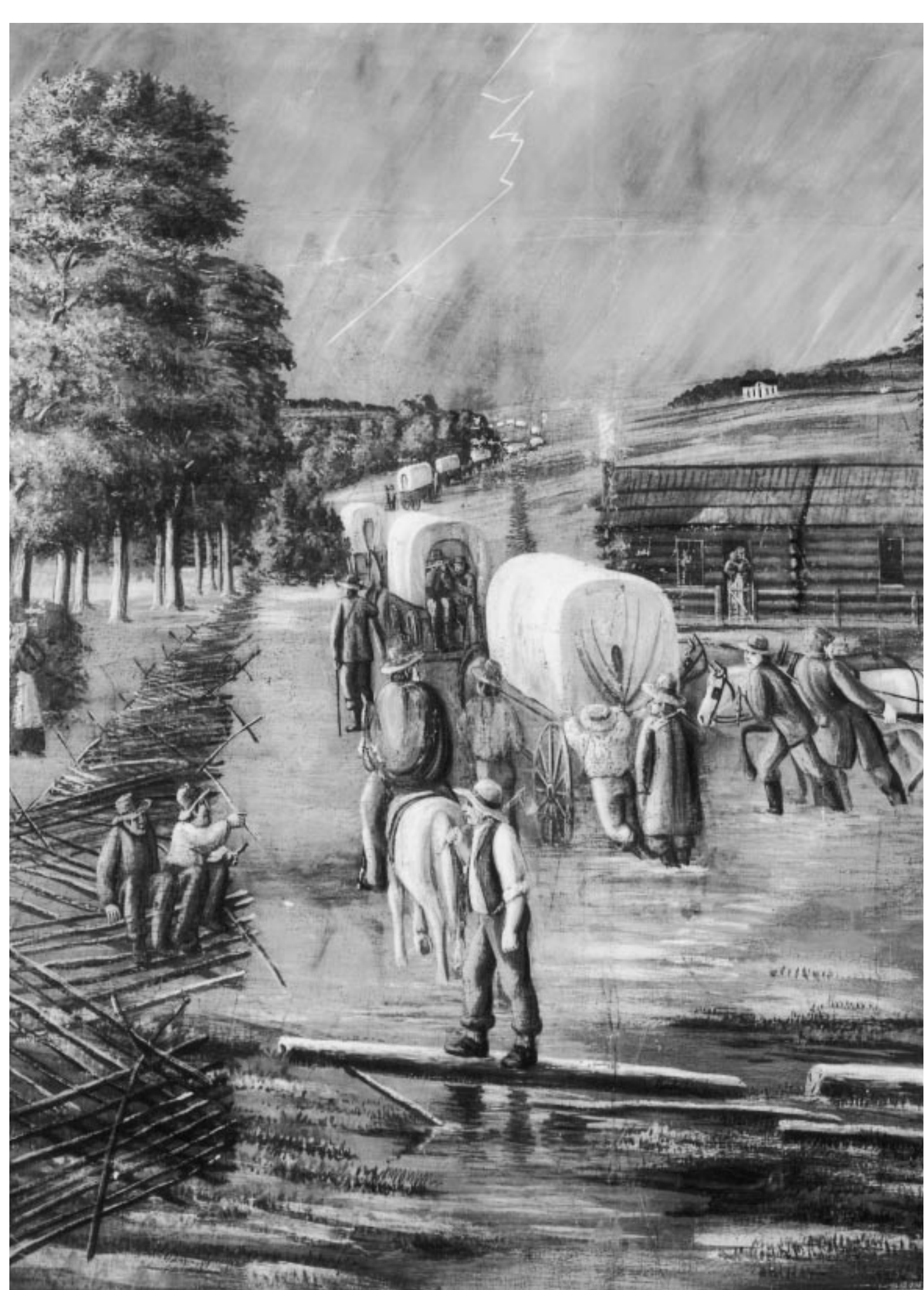
ミズーリ州西部の教会員にとって1833年7月から1834年7月までの期間はまさに「精錬者の火」で清めを受けたときであった。アメリカ合衆国全域に住む教会員は、シオンの地を放棄せざるを得なかったことに大きな落胆を見せた。残された道は、主の救済と導きを忍耐強く待つことだけだったのである。



## ジャクソン郡からの追放

### 注

1. B・H・ロバーツ, *The Missouri Persecutions* 『ミズーリでの迫害』(Salt Lake City: Bookcraft, 1965), 61
2. *History of the Church* 『教会歴史』1: 318 - 319
3. 『教会歴史』1: 316
4. 『教会歴史』1: 320
5. *Far West Record: Minutes of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1830 - 1844* 『ファーウェスト記録 末日聖徒イエス・キリスト教会歴史, 1830 - 1844』ドナルド・Q・キャノン, リンドン・W・クック編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983), 61n で引用。『教会歴史』1: 327も参照
6. 『教会歴史』1: 327; ロバーツ 『ミズーリでの迫害』68参照
7. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』パーリー・P・プラット編, モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 75。"The Season" *The Evening and the Morning Star* 「季節」『イブニング・アンド・モーニング・スター』1833年6月号, 102も参照
8. 土地の図面の詳細については, 『教会歴史』1: 357 - 359を参照
9. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』75 - 76
10. 『教会歴史』1: 357 - 358参照
11. 『教会歴史』1: 189
12. T・エドガー・ライオン "Independence, Missouri, and the Mormons, 1827 - 1833" *Brigham Young University Studies* 「ミズーリ州インディペンデンスとモルモン教徒, 1827 - 1833年」『ブリガム・ヤング大学紀要』1972年秋季号, 17
13. ロバーツ 『ミズーリでの迫害』73 - 74で引用
14. ライオン 「ミズーリ州インディペンデンスとモルモン教徒」17 - 18
15. 『教会歴史』1: 374
16. ロバーツ 『ミズーリでの迫害』87
17. ロバーツ 『ミズーリでの迫害』84 - 86参照
18. ジェリー・アバント "Book & History: A Tale of Mobs, Heroic Rescue" *Church News* 「本の歴史 暴徒の話, 英雄的な救出」『チャーチニュース』1984年12月30日付, 6参照
19. ジョン・コリル, *A Brief History of the Church of Jesus Christ of Latter Day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会略史』(St. Louis: John Corrill, 1839), 19
20. 『教会歴史』1: 414 - 415
21. 『教会歴史』1: 423 - 424参照
22. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』82
23. 『教会歴史』3: 439で引用
24. *The Personal Writing of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』ディーン・C・ジェシー編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984), 283で引用
25. 『教会歴史』1: 446
26. 『教会歴史』1: 453 - 454
27. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』87



# シオンの陣営

年表 年代	重要な出来事
1834.2	ミズーリの聖徒を助けるための軍隊の編成計画を高等評議会が承認
1834.3 5	シオンの陣営の隊員募集
1834.5	シオンの陣営の行軍開始
1834.6.8	シオンの陣営の隊員，最大の207人に達する
1834.6.9 15	ダンクリン知事，シオンの陣営への協力を拒む
1834.6.19	大嵐がシオンの陣営を敵から守る
1834.6.22	主が将来におけるシオンの贖いについての条件を示される
1834.6.21 29	コレラがシオンの陣営を襲う
1834.7.3	クレイ郡にステーキ会長と高等評議会が組織される

**18** 33年から1834年にかけての冬，聖徒たちはまだダニエル・ダンクリン知事の援助によりジャクソン郡の家を奪回できると考えていた。しかし1833年12月16日，ジョセフ・スミスは不吉な可能性を示す啓示を受けた。主はミズーリでの抗争を收拾するための数々の手段を提示されたが，平和的な解決が不可能であれば武力によって権利を有する土地を占拠する必要があると警告されたのである（教義と聖約101章参照）。そして事態が深刻化すると，主はカートランドの幹部の兄弟たちに軍隊を組織してミズーリに向かうように指示された。こうしてシオンの陣営と呼ばれる行軍が現実のものとなるのである。

## シオンの陣営が組織される

1834年2月22日，苦難の旅の末，パーリー・P・プラットとライマン・ワイトがミズーリからカートランドに到着した。そこで組織されてまだ1週間もたないカートランドの高等評議会が（教義と聖約102章前書き参照），二人が到着して2日後にジョセフ・スミス宅に集まり，二人からの報告を聞くとともにミズーリの兄弟たちからの援助要請について検討を行った。ジョセフ・スミスはこの会の終わりに，シオンを贖う援助をするために彼自身がシオンに赴くことを発表した。そしてその決定に対して評議会に賛意を求め，全会一致で受け入れられた。次に預言者は同行する者を募ったが，出席した30人から40人の人々が参加の意志を表し，ジョセフ・スミスが「イスラエルの軍の司令長官」<sup>1</sup>に選ばれた。

同じ日，ジョセフ・スミスはこのシオンの陣営の召集と規模について啓示を受けている。預言者を含む8人の兄弟がシオンの陣営のために青年，および中年の教会員を集めるとともに，抑圧を受けているミズーリの教会員を援助するために基金を募るよう召された。彼らは可能であれば500人，少なくとも100人の男性を募り，シオンの贖いと回復のためにミズーリに行軍することになった（教義と聖約103：11，15，22，29 - 40参照）。

これら8人の宣教師は2月下旬から，二人一組で合衆国東部の教会の支部を回り，資金と陣営への参加者を募った。預言者は彼らが集めた人数に満足しなかった。そこで彼は4月，東部に住む兄弟たちに対してシオンの陣営に加わってミズーリに行くように，さもなければ「良い土地を所有して自らを高め……邪悪な暴徒に対抗する」機会を失うと語った。

「……キリストの教会を目指すこの教会が犠牲を払うことなしに援助できるにもかかわらず援助を惜しむならば，……神はその者たちの能力を取り上げて，能力を持たない者に渡してしまわれるであろう。そして避難の場所すなわちシオンの地での受け継ぎを得ることを決してお許しにはならないであろう。」<sup>2</sup>

◀「シオンの陣営」C. C. A.クリステンセン画

## 時満ちる時代の教会歴史



ウィルフォード・ウッドラフ（1807  
1898年）は熱心な聖文研究者、宣教師、  
使徒、教会歴史記録者、大管長であった。



ホセア・スタウト（1810 - 1889年）は  
ミズーリ州ファーウェスト在住中の1838  
年に教会に加入した。彼は元教師でノーブ  
部隊の将校、ノーブ警察隊長、七十人、弁  
護士、宣教師、開拓者であった。

しかしながら、東部から陣営に志願した者はほとんどいなかった。志願したうちの一人に27歳の新しい改宗者、コネチカット出身のウィルフォード・ウッドラフがいた。ウィルフォードはパーリー・P・ブラットの熱意あふれる呼びかけに感銘を受けたものの、仕事の都合で参加を躊躇した。ウィルフォード・ウッドラフは日記にこう書いている。「パーリー兄弟に事情を説明した。彼の答えは、準備をしてシオンに行くのはわたしの義務だというものであった。そこでわたしはあらゆる手を尽くして負債を支払い、諸事の手配をし、ミズーリに行く兄弟たちに加わる準備をした。」<sup>3</sup>そして4月25日にはウィルフォードはカートランドのジョセフ・スミス之家に滞在し、ほかの人々の陣営参加の準備を手助けしている。

4月21日、ハイラム・スミスとライマン・ワイトはさらに多くの隊員を募るためにカートランドをたち、北西部に向かった。彼らは志願してきた人々とともにミズーリ州東部に行き、ソルト川でジョセフの一行と落ち合う手はずになっていた。彼らはオハイオ州北部やミシガン、イリノイの教会の支部を訪れ、20人以上の隊員を確保した。その半数はミシガン州ポンティアックからの人々であった。後の教会で重要な役割を果たすことになるホセア・スタウトは、ハイラムとライマンがミシガンの彼の生まれ故郷を訪れた1834年の時点ではまだ教会員になっていなかった。ホセアは当時を回想してこう書いている。「彼らの説教は力強く、感動的だった。彼らが神の特別な指示により、失った受け継ぎを取り戻すためにシオンに行軍しようとしていることを考えたとき、わたしができることは参加することしかないと判断した。」<sup>4</sup>

カートランドでの募集活動はまだまじな方であった。健康な神権者が多数名乗りを上げたのである。32歳のブリガム・ヤングは自ら参加を表明するとともに兄のジョセフにも同行するように説得した。ジョセフ・スミスはこの二人の兄弟に対し、こう宣言している。「ブリガム兄弟とジョセフ兄弟、わたしとともに陣営に加わってミズーリに行き、わたしの勧告を守るならば、全能者の御名により約束します。わたしはミズーリの地であなたがたを導き、再びここに帰って来ます。あなたがたは髪の毛一筋さえも損なわれることがないでしょう。」これを聞いたジョセフ・ヤングは参加を承諾し、3人は手を固く握り合ってこの約束を確認した。<sup>5</sup>

シオンの陣営に参加した多くの兄弟は、蓄えがほとんどなく、また収入の当てもないまま家族を残して来ていた。そこで教会員は、家族がづらい思いをすることがないように作物を植えて、陣営が帰還するまでの間に女性や子供がとうもろこしなどの穀物を収穫できるようにした。また陣営に参加した人々は、旅のための物資と荷車を準備し、ミズーリの聖徒たちのために、衣服や寝具、食糧、武器を集めた。オリバー・カウドリとシドニー・リグドンを含む少数の長老たちは、進行中の神殿の建設や教会の諸事の管理をするためにカートランドに残った。

## シオンへの行軍

1,000マイル（約1,600キロ）の行軍の出発日に指定された5月1日、準備が整ったのはわずか20人であった。ジョセフ・スミスはその20人を50マイル（約80キロ）南のニューポージェジに向かわせ、そこでほかの隊員を待つように指示している。5月4日日曜日までに、80人以上の隊員がカートランドに集合した。ほとんどすべてが若い男性で、中には前途に不安を覚える者もいた。ヒーバー・C・キンボールはこう語

## シオンの陣営

っている。「わたしは生きて再会できるかどうか分からないままに、妻子に別れを告げました。」<sup>6</sup>その日預言者は出発に先立ち、カートランドの聖徒たちに語ったが、ジョージ・A・スミスはこのように記録している。「彼は聖徒たちに、信仰と忍耐を示し全能者の命令に従って生活することにより謙遜になる必要があることを強調した。……彼は神が彼を通して示された業が真実であることを証し、兄弟たちに、神の前に戒めを守って生活するならば……無事に帰還できると約束した。」<sup>7</sup>

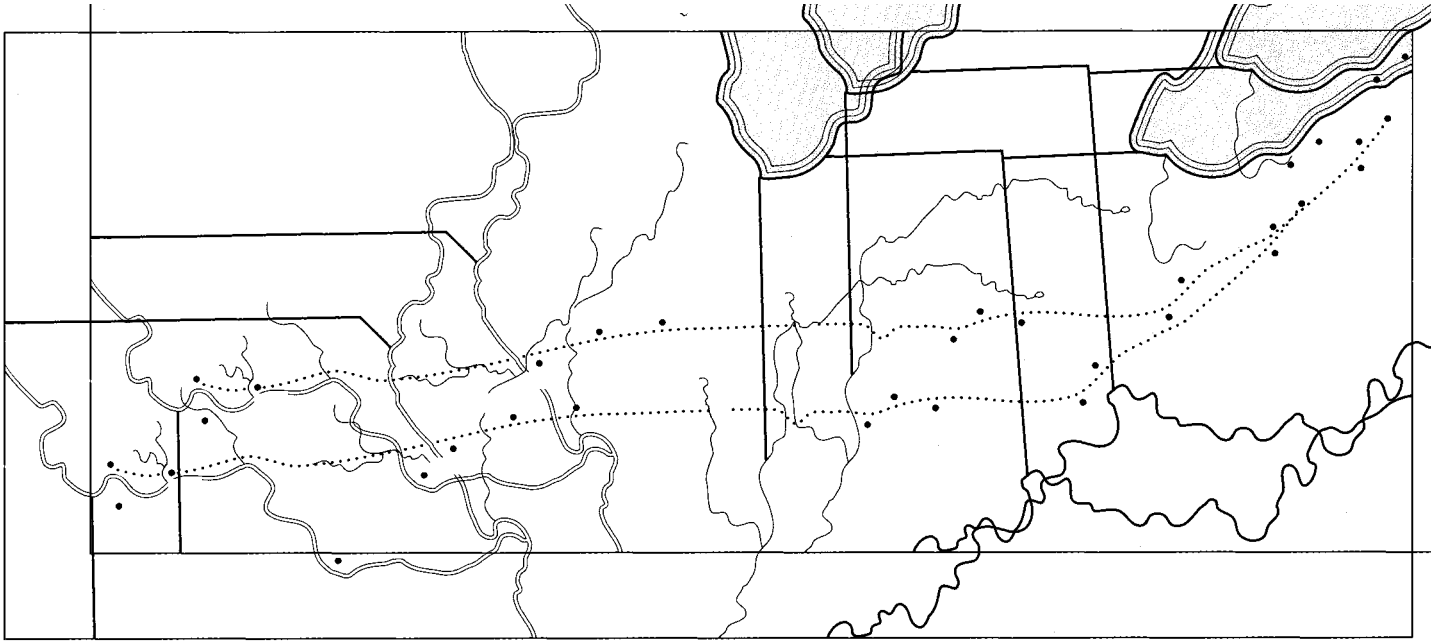
その翌日、ジョセフ・スミスは司令長官としての職務を遂行し、80人の隊員は1834年5月6日火曜日の夕方、ニューポーターズの20人の隊員と合流、預言者は陣営の編成を行った。彼は陣営を10人と50人の隊に分け、各隊で隊長を選出させた。隊長は各隊員に任務の割当てを行うことになっていた。隊員の一人ジョン・ホルブルックは、陣営は「古代イスラエルの方式に基づいて」<sup>8</sup>編成されたと語っている。また、隊員の所持金は総合基金としてまとめられ、主計官に任命された第二副管長のフレデリック・G・ウィリアムズが管理した。隊員の平均年齢は29歳、指導者であるジョセフ・スミスの年齢と同じであった。最年少は預言者のいとこのジョージ・A・スミスで16歳、最年長はサミュエル・ベーカーで79歳であった。

こうして5月8日、シオンの陣営は西への長期にわたる行軍を開始した。行軍が進むにつれて、隊員や武器、食糧、基金も次第に増えていった。陣営の将校たちはオハイオやインディアナ、イリノイに住む末日聖徒に続けて援助を呼びかけていたのである。そして陣営がミシシッピ川を渡ってミズーリに入るころには、隊員数は185人になっていた。また、6月8日ジョセフ・スミスがハイラム・スミスの隊と合流することになっていたミズーリ州ソルト川では、陣営は数のうえで最大の規模となり、男性207人、女性11人、子供11人、荷車25台を数えた。

シオンの陣営の日課は多くの点で通常の軍隊と似ていた。健康な男性のほとんどは、荷物を満載した荷車のわきを徒歩でぬかるみやほこりだらけの道を進んだ。多くの者はリュックサックを背負い、銃を持っていた。足にまめができ、うだるような暑さや土砂降りの雨、ひどい湿気、飢え、渇きに見舞われながらも、1日に35マイル（約56キロ）進むことも珍しくなかった。夜は陣営の周囲に武装した見張りが立ち、朝は4時にラッパ吹きが、つぶれた古いフレンチホルンの起床ラッパで疲れの抜けない隊員を起こした。そして各隊は祈りをし、その日の与えられた任務に着いた。薪を集める者もいれば、水をくむ者、朝食を準備する者、テントを徹収する者もいた。荷車には油を差し、馬にはえさをやって体の手入れをし、その日の行程に備えたのだった。

陣営に常に付きまとった問題の一つは、隊員への食糧の供給である。隊員はしばしば食糧について量的な制限を受けるとともに、固くなったパンや悪臭を放つバターやとうもろこしの粉を練ったもの<sup>はちみつ</sup>、においの強い蜂蜜、生の豚肉、腐ったハム、うじのわいたベーコンやチーズを食べなければならなかった。ジョージ・A・スミスは、いつも飢えに襲われていたことを次のように記している。「わたしはひどい疲れと飢えと眠けのため、道を歩きながら夢を見た。涼しげな木陰のわきの美しい流れと泉のそばにクロスが敷いてあり、おいしそうなパンと瓶に入ったミルクが置いてあるのだ。」<sup>9</sup>

水を飲むときも、沼の水からぼうぶら（蚊の幼虫）をこしてから飲まなければな



シオンの陣営の行程

らないことがよくあった。ミルクとバターは地元の農家から調達したが、衛生管理が行き届いていなかったため、陣営全体にミルクによる病気や嘔吐おうとを伴う発熱、そして死への恐れがわき上がった。しかしジョセフ・スミスは、汚染されていると言われないかぎり「敵味方を問わず手に入れられるすべてのものを用いるように。それは良いもので、病気に至らせるものは何もない」と勧告した。「多くの家畜や人が病気に感染している地域も通ったが、わたしの言葉は成就した。」<sup>10</sup>

ジョセフ・スミスは機会をとらえて陣営の隊員に、自然資源を大切にし無様な殺生はしないように教えている。ある日の午後、テントの設営をしていたジョセフたちは3匹のガラガラ蛇を見つけた。ほかの人たちが殺そうとしてるのを見て、預言者はこう言っている。「かまわないでおきなさい。傷つけてはなりません。神の僕が蛇の毒と同じような攻撃性を持ち続けて蛇と敵対しているうちは、蛇としてその毒を失うわけにはいかないでしょう。蛇よりもまず人が先に他に害を及ぼさない者とならなければならないのです。」そこで3匹の蛇は棒で川の向こう側に運ばれ、放された。ジョセフ・スミスは陣営の隊員に、飢えを避けるためにどうしても必要であるとき以外はどのような動物も殺さないようにと教えた。<sup>11</sup>

ほかの多くの軍隊と異なり、シオンの陣営では靈性を大きく強調した。隊員には隊での祈りのほかに、朝夕個人でも祈るように求められている。日曜日になると陣営は行軍を休み、集会を開き、聖餐を受けた。また、預言者が王国の教義を教えるのを耳にする特権もしばしば得た。陣営に参加した人々の心には、主がともにいてくださるとの信仰があったのである。預言者はこう回想している。「神はわたしたちとともにあり、天使はわたしたちの前を歩み、わたしたちのこの小さな隊の信仰は決して揺らぐことはなかった。わたしたちは天使がともにいたことを知っている。彼らを見たからである。」<sup>12</sup>

1834年6月2日、陣営はフィリップスの渡し場でイリノイ川を渡った。預言者はほかの数人とともにがけ沿いの道を歩いていて、人骨が散乱した小高い丘を見つけた。いにしへの祭壇らしきものが3つあり、掘ってみると大きな人骨が出てきて、あばら

## シオンの陣営

骨の間に石の矢尻があった。兄弟たちが丘を離れた後で預言者は主に尋ね、その丘はレーマン人の元軍司令官で、ゼルフという名の男が葬られた場所で、ゼルフは「レーマン人とニーファイ人の最後の大抗争で」<sup>13</sup>死んだ者であるとの答えを現形で受けた。

主はまた、陣営が危険な状況の中でも安全に旅を続けられるように祝福された。行軍中隊員は、自分たちが何者で何の目的で行軍しているのかを隠そうとしていたが、その規模を見極めようとする外部の者の目に、陣営は実際よりも大きく、あるいは小さく映った。オハイオ州デイトンの近くでは10人ほどの男性が陣営に入り、彼らの判断では総勢600人ということであった。またイリノイ川を渡るとき、流し船の船長は隊員数を500人と踏んでいる。インディアナポリスで妨害に遭ったときには、町をだれにも気づかれずに通過することができるとジョセフは兄弟たちに自信をもって言った。彼は陣営を小さなグループに分けてばらばらに配置し、それぞれ異なったルートを通して進ませた。そのためだれにも気づかれることがなかった。

外部の敵もさることながら、陣営内の口論や争いは最大の問題として浮上してきていた。中には将来危険に身をさらすことを恐れる者、生活様式の変化に不満を持つ者、指導者の決定に疑問を差し挟む者がいたのである。彼らは45日間一緒に行軍したが、どうしても避けられない個人間の対立が過酷な状況下での行軍により増幅されていった。そして不満を持つ者の矛先がしばしばジョセフ・スミス本人に向けられたのである。

こうした抗争によく登場したのが毒舌の隊長、シルベスター・スミス（預言者の縁者ではない）である。彼は食糧が乏しいこと、行軍への準備が十分でなかったこと、ジョセフの番犬のせいで夜眠れなかったことについて不満を抱いていた。5月17日の夕刻、預言者は兄弟たちの争いの仲裁に呼ばれた。彼はこう語っている。「(わたしは)シルベスター・スミスに反逆心があるのを見て取ったし、ほかの人々にも多少それを感じた。わたしは彼らに不運や困難や難儀に遭うだろうと言い、『この地を離れる前にそのことが分かるだろう』と語った。そして主の前にへりくだり、一つとなり、主から懲らしめを受けることがないようにと説いた。」<sup>14</sup>翌日、預言は成就した。ほとんどすべての馬が病気になるか、あるいは足が立たなくなってしまったのである。そこで預言者は皆に、へりくだって不和を克服すれば馬はたちどころに元気になると約束した。馬は昼までにすべて元気を取り戻したが、シルベスター・スミスの馬だけは例外で、間もなく死んでしまった。

争いはシルベスター・スミスがジョセフの犬を殺すと脅したことで、また始まった。そこでジョセフは6月3日、荷車の車輪の上に立って隊員が謙遜さに欠けていること、不平やあら探しが多いことを叱責した。「わたしは、彼らの間に見られる争いや自分勝手に振る舞う結果として陣営に災いが下ると主が示されたこと、そして腐敗病の羊のように死んでしまうことを告げた。また、悔い改めて主の前にへりくだるならば、多くの災いは取り去られることも告げた。しかし、主が生きておられるように確かに、この陣営の隊員は感情の抑止が利かないという問題で苦しむことになるであろう。」<sup>15</sup>この悲しむべき預言は数週間のうちに成就することになる。

## 平和を求める努力

ジャクソン郡の反モルモンの人々がシオンの陣営の行軍を知ったのは6月である。

## 時満ちる時代の教会歴史

「聞け、ラッパの音に耳を傾けよ」は行進用の賛美歌で、ミズーリに行軍するシオンの陣営が歌った。また陣営の人々のためにブリガム・ヤングとジョセフ・ヤングがしばしば歌っている。

「聞け、ラッパの音に耳を傾けよ」

聞け、ラッパの音に耳を傾けよ  
咲き誇る花と輝く山のシオンで  
つわものを呼ぶ  
士官を見よ

その馬は白く、そのよろいは輝き  
威風堂々と立つ  
王のために立ち上がった兵士たち  
シオンの地へと進む

心は燃える  
志高き兵士  
われらは戦う  
自由のために

隨する者は去れ  
旗は翻る  
われらが求む勇氣の人  
死をも恐れぬ勇氣の人

われらの隊は進む  
その姿は雄々しく  
武器とそろいの制服に身を固め  
戦士のごとく行く

われらは従う偉大な將軍  
大いなる永遠の小羊  
その衣は血に染まる  
その名は王イエス

ラッパは鳴り、軍は叫び  
地獄の軍勢追い払う  
われらの神は恐るべきかな、ほむべきかな  
大いなるインマヌエルよ

罪人よ、イエスとともに戦いに出よ  
永遠の神の御子と  
われらとともにシオンへと進め  
みなぎる大河を越えて

花咲く緑の山に  
不滅の果実が実る  
白き衣の天使の群れと  
われらの贖い主の知る地

われらは永遠の世で  
叫び歌い続ける  
サタンとその軍勢は  
地獄に落ち、葬られる

頭を上げよ、勇氣ある兵士よ  
贖いの時は近い  
やがてラッパの音が鳴り響き  
天地は震えん

われらは火の車に乗り  
炎の地を離れ  
愛の王座を囲みながら  
天の聖歌隊に加わらん<sup>16</sup>

オハイオ州シャグリンの郵便局長がインディペンデンスの局長あてにこう書き送ったのである。「この地区のモルモン教徒がシオンを回復するために軍隊を組織しています。つまり、武力で取り返そうということです。」<sup>17</sup>モルモン教徒の侵攻が切迫していると考えたジャクソン郡の市民軍は訓練を開始し、ミズーリ川のすべての渡し場には歩哨が立った。そして暴徒たちは復讐心から、また聖徒たちの帰還への意欲をそぐ目的から、ジャクソン郡にあった聖徒たちの家150軒をすべて灰にしてしまった。シオンの陣営の隊員たちは、ミズーリからのスパイが何百マイルも追跡して来ていると察知していた。ある晩、一人のミズーリ住民が陣営に入り込み、「おまえたちが目指しているのはジャクソン郡だろうが、ミシシッピ川は生きて渡れないぞ」とのろいの言葉を発した。

これと時を同じくして、クレイ郡の教会指導者は続けてダニエル・ダンクリン知事に援助を要請し、彼が家の返還や土地の取り戻し、またジャクソン郡での平穏な生活の実現に向けて自分たちを支持してくれるように嘆願を続けていた。ダンクリン知事は聖徒たちが家を追われたのは不当なことであるとの見解を持ち、先の11月にジャクソン郡を追われたときに取り上げられた武器は返還されなければならないと考えていた。さらに、モルモン教徒が土地を取り戻すために、また裁判が判決を下した法律上の問題の執行のために武装した州軍を派遣する必要があることを認めていた。

シオンの陣営がミズーリに到着すると、ジョセフ・スミスはオーソン・ハイドとパーリー・P・プラットの二人の長老を州庁のあるジェファーソンシティに派遣し、ダンクリン知事が約束を守って州軍の援助を要請してくれるかどうか確認させた。知事との会見は希望を失わせる冷酷なものであった。州軍を要請すれば州全体が戦争状態に突入するというのが彼の主張である。知事は兄弟たちに、権利を主張することをやめて土地を売却し、どこか別の所に定住の地を見つけることによって流血を避けるように勧めた。それは教会にとって受け入れられないことであった。そこで知事は裁判所に上訴するよう勧めた。しかし兄弟たちは、何も効果がないことを知っていながら知事がそれを勧めているのを感じ取った。裁判所の役人は郡の中の反モルモンの人によって占められており、訴訟を起こすことは奪われた財産を取り戻すために強盗団に訴えを起こすようなものであった。<sup>18</sup> またパーリーは、知事が臆病な人物で、職務遂行に落ち度があれば職を辞さなければならないと考えていると確信していた。

プラット長老とハイド長老は行軍して来たシオンの陣営に合流したが、彼らの報告は、ミズーリの聖徒たちが平和的にジャクソン郡の家に戻るのを許されるであろうという望みを粉々に打ち砕くものであった。また兄弟たちは、ジャクソン郡に定住しようとするモルモン教徒を皆殺しにすべく反モルモンの人々が待ち受けていることも知った。預言者は神に、聖徒たちの大義が義にかなったものであること、またその誓いが心からのものであることを認めてくださるよう呼び求めた。こうしてシオンの陣営は、知事の裁定にやり場のない怒りを覚えながら、なおも行軍を続けた。

同じころ、クレイ郡のジョン・J・ライランド判事は、6月16日にリバティーの郡庁舎で集会を開く手はずを整えた。ジャクソン郡の住民の代表である委員とクレイ



## シオンの陣営

郡の聖徒たちの代表が一堂に会し、紛争の終結を図ろうというものである。しかしその会には横暴で血のけの多い者たちが大勢詰めかけ、モルモンでない人々は聖徒たちがジャクソン郡に所有していた土地を30日以内に、第三者である3人の評定した金額で自分たちが買い取るか、またはモルモン教徒側で同じく30日以内に、それをジャクソン郡から購入するかという提案をしてきた。この提案には現実性がなかった。聖徒たちにはモルモンでない人々の土地の一部さえも購入する資金がなかった。また、主からシオンの土地を購入しそこに定住するように命じられていた聖徒らにとって、シオンの土地を売却することはできなかった。当然のことながら、これらのことは反モルモンの人々にはすでに知られていたことである。そしてジャクソン郡の住民代表の一人であるサミュエル・オーエズが、「ミズーリ州住民は聖徒たちを戻らせることはしない。どんな小さな土地までも戦って勝ち取る」と宣誓すると、それらの人々の怒りはいっそう燃え上がった。

「一人のバプテスト派の牧師は言った。『モルモン教徒はクレイ郡に長い期間滞在した。あとは引き払うか追い払われるかどちらかだ。』」

集会を取り仕切っていたターンハム氏は賢明にもこう述べた。『共通の目的を持つ社会人として振る舞おうではありませんか。国家に敬意を払いましょう。ジャクソン郡のように国家を汚すようなことはやめましょう。神にかけてモルモン教徒から公民権を剥奪したり、彼らを追放したりしてはなりません。彼らはほかの多くの住民より立派な人々です。』<sup>19</sup>

モルモン側の代表は自分たちから敵対行為に出ることはないとの声明を用意し、1週間以内にジャクソン郡からの提案への回答を出すことを約束した。そして聖徒たちは逆提案を用意した。中立の委員会を作って末日聖徒とともに住むことを拒否するジャクソン郡住民の土地の価格を決めさせ、聖徒たちがその土地を1年以内に買い上げるというものである。さらに、全額支払いが終わるまでは郡外にとどまることも約束した。しかし、不幸にもこの交渉はまとまることはなかった。

## フィッシング川での出来事

6月18日、シオンの陣営はレイ郡の郡庁所在地であるリッチモンドから1マイル（約1.6キロ）の地点に到着した。ところが預言者は野営をする段になって危険が迫っていることを予感、森に入り安全を求めて主に祈った。そして主が守ってくださるとの確信を得る。預言者は早朝に隊員を起こし、朝食も祈りも抜きで出発させた。そして彼らがリッチモンドの町を抜けようとしているところへ、黒人の奴隷の女性が近づいて来て、興奮しながらルーク・ジョンソンにこう言った。「ここには男たちが何人が待ち伏せしてて、あんたらが通ったら殺すつもりだよ。」しかし彼らは何の抵抗も受けなかった。ただ荷車の車輪が壊れたために進行が遅れ、わずか9マイル（約15キロ）しか進めなかった。

彼らのもともとの目的地はリバティーであったが、クレイ郡に入ったすぐの、フィッシング川の二つの支流に挟まれた丘が野営地に選ばれた。そこでもジョセフは、暴徒が襲って来ることを知り、神の守護を求めて祈った。ジョセフの恐れは現実となった。武器を持ったミズーリの住民が5人、野営地に入って来て、ののしりの声を上げ、モルモンは「朝までには地獄を見る」と誓ったのである。彼らは、400人近い

## 時満ちる時代の教会歴史

男たちがレイ，ラフェイエット，クレイ，ジャクソンの各郡から集まり，モルモンを皆殺しにするためにウィリアムズの渡し場でミズーリ川を渡ろうとしていると誇らしげに言った。<sup>20</sup> こうして暴徒が発砲したため応戦しようとする者もいたが，預言者は主が必ず守ってくださるからと約束して，こう語った。「静かに立って神の救いを見ようではないか。」<sup>21</sup>

5人のミズーリ住民が野営地を去って数分後，西の方の青空に小さな黒い雲が現れた。それはまるで巻き物を広げるように東の空に広がり，天が暗闇に覆われてしまった。そして，暴徒の第一陣をいっばいに乗せた渡し船がミズーリ川を南に進んでいたとき，突然の激しいスコールが襲い，渡し船は戻って第二陣以降を運ぶことができなくなってしまった。嵐は非常に激しく，シオンの陣営はテントをあきらめ，近くの古いバプテスト教会の教会堂に避難せざるを得ないほどであった。教会堂に入って来たジョセフ・スミスは大きな声でこう言った。「みんな，このことにはある意味があります。この嵐は神が起こされたものだ。」<sup>22</sup> だれも眠ることができなかったので，陣営は賛美歌を歌い，ごつごつした長いすの上で休息を取った。陣営の一人はこう記録している。「広い地平線の上の空全体が恐ろしい雷鳴を伴って燃えているようであった。」<sup>23</sup>

ほかの所では，集合した暴徒たちが避難する場所を求めていた。たけり狂う嵐のために木々の枝は折れ，穀物は倒れ，暴徒たちの火薬はぬれて使いものにならなくなり，馬はおびえて散り散りになり，またフィッシング川の水かさが増えた。こうしたことで，暴徒たちはシオンの陣営を攻撃することができなかったのである。預言者はこう回想する。「滅ぼそうとする敵の手から僕たちを守るために，戦いの神が復讐ふくしゅうの命令を出されたかのようにであった。」<sup>24</sup>

それから2日後の6月21日，レイ郡住民軍のジョン・スコンス大佐が二人の隊員とともに，モルモン側の意図を聞きにやって来た。「この民は全能者の力によって守られていることが分かります。」<sup>25</sup> スコンスはそう言った。預言者は，シオンの陣営の唯一の目的が兄弟たちが土地を取り戻すことであり，だれをも傷つけようとは思っていないことを説明した。彼はこう語っている。「わたしたちについて流布している悪評は偽りです。わたしたちを滅ぼそうとする敵のでっち上げです。」<sup>26</sup> スコンスらはこれまで聖徒たちが受けてきた不当な仕打ちと苦しみ心で心を打たれ，モルモン教徒に対する悪感情を打ち消すことに全力を尽くすと約束してくれた。

翌6月22日，預言者に教会員の不従順と利己心に対して主が不満に思っておられる内容の啓示が与えられた。

彼らは「聖徒としてふさわしく彼らの中の貧しい者や苦しんでいる者に持ち物を分け与えない。

また，日の栄えの王国の律法により求められている和合一致に従って結束していない。」(教義と聖約105：3-4)

この懲らしめの啓示は，シオンのために自分自身や財産を分かち合うことをなかなか実行に移さない支部の教会員に向けたものである(7-8節参照)。聖徒たちはシオンの贖いの前に自らの義務を学び，経験を積まなければならなかった(9-10節参照)。そこで主はこう言われた。「それゆえ，わたしが必要としているのは，長老たちがしばしの間シオンの贖いを待つことである。」(13節) 主は従順な者たちに，続

## シオンの陣営

けて忠実であれば天からのエンダウメントを授けると約束された（11 - 12節参照）。シオンの陣営は軍事上の目的については成功を見ることはなかったが、主の目的は達成された。陣営の人々に関して主はこう言っておられる。「わたしは彼らの祈りを聞いた。そして、彼らのささげ物を受け入れる。信仰の試練として、彼らがここまで連れて来られることは、わたしにとって必要であった。」（19節）

ある少数の聖徒たちにとって、戦うなどの主の命令は最後の信仰の試みであった。失意と怒りのため、彼らは背教した。彼らの反抗を見た預言者は、彼らの不義なつばやきの結果として主がひどい災いを下されると、陣営に対して再び警告している。すると、その啓示が下る前日、二人がコレラに感染した。そして3日後にはさらに何人かがこの恐ろしい病気に倒れた。汚染された水を通して感染したのである。コレラはさらに広がり、ひどい下痢や嘔吐、けいれんが人々を襲った。そして小康を得るまで預言者を含む68人が感染し、14人が死んだ。その中にはベツィー・パリッシュという名の女性がいた。7月2日、ジョセフ・スミスは陣営にこう語っている。「主の前にへりくだり、主の戒めとわたしの勧告に従うと聖約するならば、疫病は即やんで、コレラが二度と彼らを襲うことはないであろうとわたしは言った。兄弟たちは拳手をもってわたしの言葉どおりに聖約をしたため、疫病は終わりを告げた。」<sup>27</sup>

## 陣営の解散と聖徒たちの再組織

コレラの猛威が最高点に達していた6月25日、ジョセフ・スミスはシオンの陣営を幾つかの小グループに分け、聖徒たちがミズーリ住民に対して攻撃の意図を持っていないことを示そうとした。そして10日後、陣営の忠実な隊員たちに、正式な文書による除隊命令が出された。ライマン・ワイトはこう記録している。「〔ジョセフ・スミスは〕今、帰途に就こうと思っていること、主の御心を行えたことに満足していること、そして主が、アブラハムが息子イサクをささげたときに受け入れてくださったように、わたしたちの犠牲とささげ物を受け入れてくださったことを話した。そして最後の祈りで彼は、わたしたちに永遠の命と救いがあるようにと天の御父に願った。」<sup>28</sup>

預言者により解任の命を受けた陣営の隊員の行く先は幾つかに分かれた。ある者はフィッシング川での啓示（教義と聖約105：20参照）に従ってミズーリに残り、ある者は伝道地に戻って行った。しかしほとんどの者は東部の家族のもとに帰って行った。同じ7月3日、預言者はエドワード・パートリッジ監督がその地区の諸事を管理することを助けられるようにミズーリにステーキ会長会と高等評議会を組織している。しかしジョセフ・スミスは、地元の市民に恐怖心を与えることのないように、教会の集会を開くことは禁止した。

1834年の残りと1835年は、クレイ郡での聖徒たちの生活は比較的楽であった。この間は迫害もさほどひどくなく聖徒たちも多少の繁栄を見た。クレイ郡の一般住民のほとんどは聖徒たちに対して好意的であったが、この友好の雰囲気にも変化が訪れる。聖徒たちがジャクソン郡に戻るためにミズーリへの移住を続け、さらに教会員の中にクレイ郡に土地を購入した者が出てきたからである。不幸なことに少数の教会員がジャクソン郡での迫害から学ぶことをせず、古くからの住民にいずれ彼らの土地は聖徒たちのものとなるとの印象を与えてしまったのである。全体として、聖

## 時満ちる時代の教会歴史

徒たちは次の主の勧告を守らなかったと言える。

「裁きについて語らず、また信仰も力ある業も自慢することなく、注意深く集まって、人々の気持ちに添うようにできるだけ一地域にいるようにしなさい。

また見よ……あなたがたが平穏かつ安全でいられるように、わたしは彼らの好意と善意をあなたがたに与えよう。」(教義と聖約105:24-25)

ジョセフ・スミスとシオンの陣営の少数の指導者がカートランドに戻ったのは、8月初旬である。預言者の帰還は、ミズーリで殺されたとの情報があり狼狽していたカートランドの聖徒たちにとって、まさに安堵の瞬間であった。同月、高等評議会法廷が開かれ、シオンの陣営についていまだに不満を持っているシルベスター・スミスらの聴聞が行われた。これにはシオンの陣営に参加した10人の兄弟たちが出席し、シルベスター・スミスの訴えを論破するとともに、ジョセフ・スミスの行動が正しかったことを証言した。シルベスター・スミスは証言ならびに証拠を検討した後、自らの過ちとふさわしくない行動があったことを認めた。

シオンの陣営のミズーリの聖徒たちを援助してシオンの土地を奪回するという計画は失敗に終わった。また不和や背教、不当な情報などによる混乱もあった。しかし、この行軍から得られた積極的な成果も幾つかある。陣営の参加者は自由意志をもって主と預言者への信仰を示し、末日の啓示に従いたいとの望みを形にした。またミズーリの追放された聖徒たちに対して、必要ならば命に代えても喜んで助けようとの思いやりを見せた。

またこの苦難の旅は、だれが信頼を受けて指導者としての地位に就き、カートランド神殿でエンダウメントを受けるにふさわしいかを判断する試金石となった。預言者は後に次のように説明している。「神は皆さんが戦うことを望まれました。主は地上の国々に福音の扉を開くために12人の人を召し、彼らの指示に従える70人の人を召されましたが、主はそれらの人を、自らの命をささげてアブラハムのように偉大な犠牲をささげた人々の中から選ばれたのです。」<sup>29</sup> 1835年2月、十二使徒定員会と七十人第一定員会が組織されたが、最初の十二使徒の中の9人と七十人定員会の会長全員、ならびに定員会の63人の会員全員は、1834年にミズーリ州西部に行軍したイスラエルの軍のメンバーであった。

シオンの陣営は多くの主の僕たちを鍛え、磨き、霊的に洗練された者にした。主に従い献身した人々は貴重な実践訓練と霊的な体験を積み、それは後の教会が遭遇する苦難を乗り切るのに大いに役立つことになる。1,000マイル(約1,600キロ)以上に及ぶ苦難と試練の経験は、ブリガム・ヤングやヒーバー・C・キンボールなど、ミズーリからイリノイ、ノーブーから大平原を越えてロッキー山中に移住する聖徒たちを導いた人々にとって、かけがえのない訓練の場となったのである。懐疑的な人からの、行軍によって何を得たのかとの質問に対し、ブリガム・ヤングは間髪を入れずにこう答えている。「この機会を通して得た知識は、グユーガ郡全部をくれると言われても渡すことはできません。」<sup>30</sup>

## シオンの陣営

### 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』2: 39で引用
2. 『教会歴史』2: 48
3. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1834年4月11日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
4. “Autobiography of Hosea Stout, 1810 to 1835” *Utah Historical Quarterly*, 1962 「ホセア・スタウト自叙伝, 1810年 - 1835年」 『ユタ歴史旬報』1962年, リード・A・スタウト編, 259 - 260
5. “History of Brigham Young” *Millennial Stay* 「ブリガム・ヤング史」 『ミレニアルスター』1863年7月18日付, 455; またはエルデン・ジェイ・ワトソン, *Manuscript History of Brigham Young, 1801 - 1844* 『稿本ブリガム・ヤングの生涯1801年 - 1844年』(Salt Lake City: Elden Jay Watson, 1968), 8
6. オーソン・F・ホイットニー, *Life of Heber C. Kimball* 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』(Salt Lake City: Bookcraft, 1967), 40で引用
7. ジョージ・A・スミス “Memories of George A. Smith” 「ジョージ・A・スミスの思い出」1834年5月4日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 13
8. ジョセフ・ホルブルック “History of Joseph Holbrook, 1806 - 1885” 「ジョセフ・ホルブルック史, 1806年 - 1885年」 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 15
9. スミス 「ジョージ・A・スミスの思い出」15
10. 『教会歴史』2: 66 - 67
11. 『教会歴史』2: 71 - 72
12. 『教会歴史』2: 73
13. 『教会歴史』2: 80
14. 『教会歴史』2: 68
15. 『教会歴史』2: 80
16. *Sacred Hymns* 『聖なる賛美歌』1840年, 283 - 285
17. J・M・ヘンダーソンからインディペンデンス郵便局長への手紙。パール・ウィルコックス, *The Latter Day Saints on the Missouri Frontier* 『ミズーリ辺境での末日聖徒』(Independence, Mo.: Pearl G. Wilcox, 1972), 121で引用
18. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』パーリー・P・プラット編, モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 94参照
19. 『教会歴史』2: 97 - 98
20. 『教会歴史』2: 102 - 103で引用
21. 「ジョセフ・ホルブルック史」17
22. ウィルフォード・ウッドラフ 『教会歴史』2: 104n
23. モーゼズ・マーティンの日記, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー; 『教会歴史』2: 104 - 105も参照
24. 『教会歴史』2: 105
25. 『教会歴史』2: 106で引用
26. 『教会歴史』2: 106
27. 『教会歴史』2: 120
28. ライマン・ホワイト, *The History of the Reorganized Church of Jesus Christ of Latter Day Sairits* 『復元末日聖徒イエス・キリスト教会歴史』(Independence, Mo.: Herald Publishing House, 1896), 1: 515 - 516で引用
29. ジョセフ・ヤング, *History of the Organization of the Seventies* 『七十人組織の歴史』(Salt Lake City: Deseret News, 1878), 14; または 『教会歴史』2: 182注
30. *Journal of Discourses* 『説教集』2: 10で引用

# カートランドでの栄光の日々 1834 - 1836年

年表 年代	重要な出来事
1834.8	シオンの陣営の帰還
1834.11	長老の塾がカートランドで開かれる
1834.12.5	オリバー・カウドリ、大管長補佐に任命される
1835.2	十二使徒定員会、七十人定員会が召される。
1835.3.28	神権に関する啓示（教義と聖約107章）が下される
1835.7	マイケル・チャンドラーからミイラと巻き物を購入する
1835.8.17	特別大会で『教義と聖約』を承認する
1835.11	神殿の壁のしっくい塗りが始まる
1835.11	エマ・スミスの賛美歌集が発行される
1836.1.21	日の栄えの王国の示現を含む霊的な現れがカートランド神殿で起こる（教義と聖約137章）
1836.3.27	カートランド神殿が奉献され、御霊が注がれる
1836.4.3	イエス・キリスト、モーセ、エライアス、エリヤが現れて神殿が受け入れられ、神権の鍵が回復される
1836.5・6月	二人の将来の大管長、ジョン・テーラーとロレンソ・スノーがバプテスマを受ける

**18** 34年の8月時点でジョセフ・スミスとシオンの陣営のほとんどの隊員はカートランドに帰っていた。ミズーリの聖徒たちを助けようとの試みを断念した今、オハイオの教会員は再び自分たちの地区に神の王国を建設することに注意を向け始めた。シオンの陣営が帰還してから後の2年間は、オハイオの聖徒たちにとって比較的平安な時期であった。この時期に教会組織や教義、聖文、神殿活動に重要ではるか将来にわたって影響を与える進歩が見られた。

## 教会組織のさらなる拡大

1834年12月5日、預言者ジョセフ・スミスはオリバー・カウドリを大管長補佐に昇任した。<sup>1</sup> 彼はアロン神権とメルキゼデク神権の回復の際に預言者とともにいた。1830年に教会が組織されたときには、オリバーは「第二の長老」として、ジョセフの次に権限を持つ者であった（ジョセフ・スミス 歴史1：68 - 73；教義と聖約110章参照）。このように、神権の権能や鍵が回復されるときにはいつも、オリバーと一緒にであった。「神の証人の律法に従い、ジョセフ・スミスにはそれらの鍵を持つ同僚が必要であった。」<sup>2</sup>オリバー・カウドリは教会管理においてジョセフ・スミスを援助したのみならず、回復の第二の証人として預言者の側に立った。1838年、オリバー・カウドリは背教と破門により大管長補佐としての地位を失ったが、1841年に主はハイラム・スミスをこの職に召された（教義と聖約124：94 - 96参照）。大管長と大管長補佐、すなわち第一と第二の証人は、カーセージの監獄で自らの血をもって証を結び固めることになる。

救い主の教会の回復にまつわる最も重要な出来事の一つに、十二使徒定員会の組織が挙げられる。教会員は教会が設立される前からこの重大な出来事を待ちわびていた。ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリが使徒職の権能を受けたのは、恐らく1829年であろう（教義と聖約20：2 - 3参照）。同じ年、オリバー・カウドリとデビッド・ホイットマーは啓示を通して、「すべての造られたものにわたしの福音を宣べ伝える」12人の人々を探すように指示された（教義と聖約18：28）。後に、マーティン・ハリスも人選に加わるように言われている。つまり、『モルモン書』の3人の証人が大管長会の同意により、この神権時代における救い主の特別な使徒として主に仕える十二使徒を選ぶことになったのである。預言者ジョセフ・スミスは1835年2月14日土曜日、シオンの陣営の元隊員その他を招いて特別な大会を開いた。この会の議事録にはこう記してある。

「そして彼は、シオンへの行軍に際しての幾つかの状況、すなわち試練や艱難について、その関連性を説明し、このように語っている。『神はこれらのことを何の目的もなく与えられません。神はこのことを覚えておられ、必要であれば命を捨てると

## 時満ちる時代の教会歴史

の決意の下にシオンに行った人々は奉仕の業に召され、ぶどう園で最後のすなわち間近に迫っている主の来臨に向けての刈り込みをするために出て行くのです。……わたしたちの中の最も小さな者、最も弱い者でも力と強さを得ます。そしてこの時点から、皆さんにも偉大なことが達成できます。皆さんは神の御霊のささやきを感じ始め、神の業は今このときから展開されることでしょう。皆さんは高い所から力を授けられるのです。』預言者の話の後、会は1時間の休憩に入った。そして再開されると、3人の証人が祈り、預言者から祝福を受けた。次いで証人たちは十二使徒の人選に入った。<sup>4</sup> 十二使徒は全員同時に召されたため、前任順位は年齢に従って行われている。

### この神権時代における最初の十二使徒

選任から1週間後、十二使徒はオリバー・カウドリから使徒としての務めに関する指示を受けた。これは救い主が新約時代の使徒たちに授けられたものと類似したものである（マタイ10章；28：19 - 20；使徒1：8参照）。オリバーは彼らが予期しない困難に遭遇することを警告している。

『皆さんはあらゆる国々のあらゆる偏見と闘わなければならないでしょう。』

それから彼は啓示を読んだ〔教義と聖約18章〕。……

……『そこでわたしは皆さんに、謙遜さを十分に培っていただきたいと思います。それは、わたし自身が人の心にある高慢さというものを知っているからです。世のへつらいによって高ぶることのないように注意してください。この世のものに心を奪われることのないように気をつけましょう。奉仕の業を第一に置いてください。……

……必要なのは、自らの努力で天から証を得ることです。そうすれば真理について証を述べることができます。……

……皆さんはこのメッセージを、自らを賢人と思う人々、皆さんを迫害する人々、皆さんの命をねらう人々に宣べなければなりません。敵は常に神の僕の命をねらってきました。ですので皆さんは、神が業の発展と神の大義の確立のために必要とされるときはいつでも、皆さんの命を犠牲としてささげられるように準備をしておかなければなりません。……』

それから彼は一人一人の手を取ってこう言った。『あなたはこれらの兄弟たちとともに、受けた召しの主旨と意図に従い、固い決意をもってこの奉仕の業に携わり、全力を尽くして福音を宣べ伝えますか。』だれもが『はい』と答えた。<sup>5</sup>

それから2週間後の特別大会で、預言者はシオンの陣営に参加した人々の中から、もう一つの鍵となる神権定員会である七十人定員会を組織した（教義と聖約107：93参照）。そして福音を全世界に宣べ伝えるというそのユニークな務めを達成するために、七十人定員会には管理者として7人の会長が召されている。これは教会の組織について預言者が受けた示現に従ったものである。<sup>6</sup> 七十人定員会の初代会長として召されたのは、ジョセフ・ヤング、ヘイゼン・オールドリッチ、リーバイ・ハンコック、レオナルド・リッチ、ゼベディー・コルトリン、ライマン・シャーマン、シルベスター・スミスであった。

1か月後、主は神権と教会管理に関してさらなる情報を示された。伝道に出かける

#### 初代の十二使徒定員会の前任順

氏名	召された年齢
トーマス・B・マーシュ*	35
デビッド・W・パッテン	35
ブリガム・ヤング	33
ヒーバー・C・キンボール	33
オーソン・ハイド	30
ウィリアム・E・マクレリン	29
パーリー・P・ブラット	27
ルーク・S・ジョンソン	27
ウィリアム・B・スミス	23
オーソン・ブラット	23
ジョン・F・ポイントン	23
ライマン・E・ジョンソン	23

\*トーマス・B・マーシュは11月1日生まれなので、召しの時点ではまだ34歳であった。デビッド・W・パッテンは召しのときに自分の年齢を覚えていなかったが、記録によれば1799年11月14日生まれで、トーマスよりも年上である。

## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年

備えをしていた十二使徒が，召しに伴う重要な義務について自分たちはまだよく理解していないと感じ，悔い改めの気持ちから預言者に，さらなる導きを主に求めてくれるよう願ったのである。その答えとして主は十二使徒と七十人に，それぞれの責任を明らかにされた。十二使徒は「キリストの名の特別な証人」であり，大管長会の指示の下に「教会を築き上げ，すべての国々において教会の諸事をすべて整える。」(教義と聖約107：23，33)七十人は十二使徒会の指示の下に働き，同じ目的を果たす。そしてこの二つの定員会は，大管長会とともに教会の管理評議会を構成する。またこの啓示には神権組織のその他の定員会を管理する人々の義務も述べられ，最後に次の勧告の言葉で締めくくられている。

「それゆえ，今や人は皆，自分の義務を学び，任命されている職務をまったく勤勉に遂行するようにしなさい。

怠惰な者は，その職にいるにふさわしい者と見なされない。」(教義と聖約107：99 - 100) この啓示に述べられた指示に従い，1835年のカートランドでは最初のアロン神権定員会が組織された。構成メンバーは成人で，さらに高い職に聖任される際の年齢制限はなかった。<sup>7</sup>

教義と聖約第107章の指示に照らして，1830年代中期のステーク常任高等評議会はますます重要な役割を担うようになった。その典型的なものが教会法廷における働きである。ここですぐに疑問として出てきたのが，高等評議会と「巡回管理高等評議会」(教義と聖約107：33)と呼ばれた十二使徒会との地位と権限の違いについてである。これに対して預言者は，常任高等評議会の権限がステーク内に制限されるのに対し，十二使徒会は海外を含めた範囲の権限を有すると答えた。<sup>8</sup>するとこれに対して，十二使徒会の地元における権限の範囲についての疑問が起こった。これに対して預言者は，権能において十二使徒会は大管長会の次に位置するのでほかのいかなる組織にも従属してないことを確認している。ブリガム・ヤングはこの議論が起こった数か月間を試練のときであったと振り返っている。なぜならば十二使徒会が自ら進んで「『キリストのための万人の僕……』となることを証明しなければならなかったからである。ブリガム・ヤングによれば，このことは使徒として必要なことであった。『真の僕』だけがその力を得ることができたからである。』<sup>9</sup>

## 福音を分かち合うために手を差し伸べる

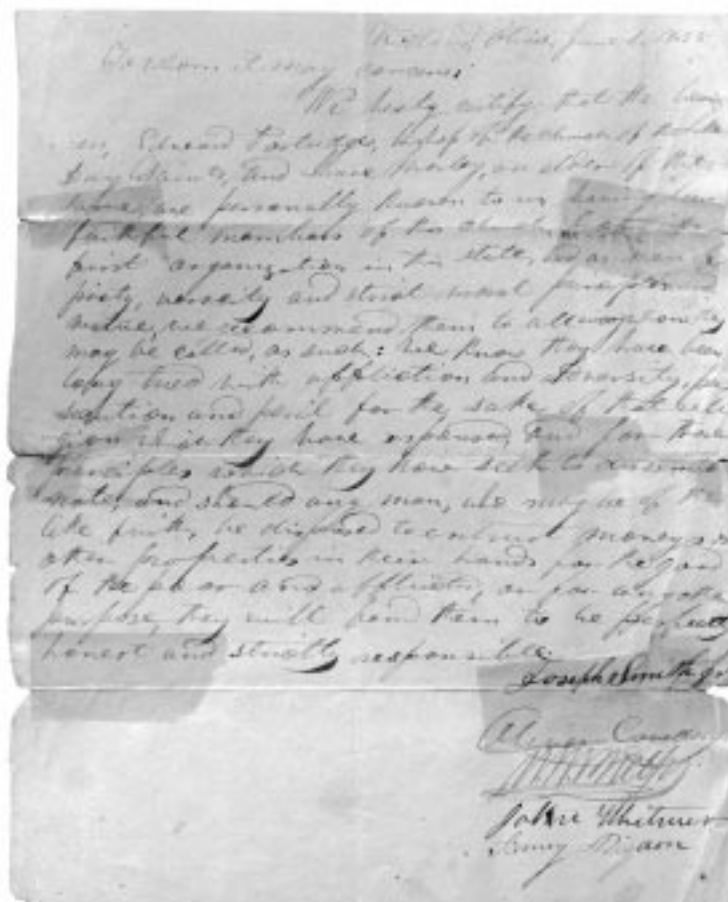
教会の組織的な伝道活動は，1834年夏シオンの陣営の行軍により一時的に中断されていた。しかし秋になると，教会指導者がさらに多くの男性を伝道に招いたため，伝道活動が再び活況を呈するようになった。中には近隣の地区で数週間のみ伝道に携わる者もいれば，遠く離れた地で長期にわたって奉仕の業に携わる者もいた。多くは数回伝道に出て，家庭の状況が困難な時期に家を離れることもしばしばであった。1836年，ウィリアム・フェルプスはこう書いている。「長老たちははっきりなしに出たり戻ったりしている。」<sup>10</sup>

正式に召された宣教師による伝道活動を補佐したのが，新たに見いだした宝を家族や友人と分かち合おうとする改宗者の熱意である。新改宗者であるキャロライン・クロズビーはこう語る。「預言者の声に耳を傾けているとき，友人や両親，兄



## 時満ちる時代の教会歴史

エドワード・パートリッジとアイザック・モリーへの宣教師証明書。



弟、姉妹たちもわたしと同じように彼の語る言葉を聞き、わたしが心に喜びを得ているように彼らも喜んでくれたらどんなにすばらしいかと、何度思ったことでしょうか。』<sup>11</sup>

教会の指導者の多くも伝道活動に携わった。預言者ジョセフ・スミスは1834年と1835年にミシガンに行っている。しかし、最も重要なのは1835年の十二使徒定員会による5か月間にわたる東部への伝道であろう。彼らは5月から9月にかけて、ニューヨークからニューイングランド、カナダへ数百マイルにわたって旅をした。そして伝道活動を行い、地元の教会の指導と強化に力を尽くす傍ら、神殿建設やシオンでの土地の購入、印刷事業のために資金を調達した。当時は財布も旅の袋も持たないという伝道方法であったため、彼らは迫害や拒絶、疲労、飢えという伝道活動に際して見られる典型的な問題に遭遇したものの、ある大きな会合では集まった馬車が144台を数え、2、3千人の参加者を得た。

この伝道は教会歴史上重要である。十二使徒定員会の会員12人がすべてそろって伝道に出たのはこの時期だけだからである。帰還したヒーバー・C・キンボールは、神の力に満たされて病人を癒し、悪霊を追い出すことができたと報告している。<sup>12</sup> 同じころ、七十人定員会も東部諸州を中心に伝道活動に従事している。

1830年代の中ごろ、教会の指導者の多くは個人的にも伝道の業を行った。その顕著な例が、パーリー・P・プラットのカナダへの伝道である。1836年4月、同僚の使徒であるヒーバー・C・キンボールはパーリーを祝福し、パーリーがトロントに行き、そこで「完全な福音を聞く備えのできた人に会い、その人々から歓迎を受ける」こ

## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年

とを預言した。「……福音はそこから周囲の地区に広がり……この伝道の成功によって完全な福音はイギリスへと広められ、イギリスで偉大な業が行われる基となることでしょう。」<sup>13</sup> パーリーがトロントに向かう途中ハミルトンにいたとき、見知らぬ人からトロントに住むメソジスト派の信徒説教者であるジョン・テラーへの紹介状をもらった。テラーは、既存の教派が新約時代のキリスト教に合致していないことを信じているグループに属していた。このグループは過去2年にわたって「いかなる教派からも独立して真理を求めることを目的として」週に数回集会を開いていた。トロントでテラー家族はプラット長老を厚意をもってもてなしたが、初め福音のメッセージに関して熱烈な関心を寄せてはいなかった。<sup>14</sup>

こうして説教のできる場を見つけられないまま、気落ちしたパーリーはトロントを去る決意をする。そして預けた荷物を受け取り別れを告げるためにテラー家に立ち寄った。テラー家では、レオノラ・テラーが居合わせた友人のイザベラ・ウォルトン夫人にパーリーが直面している問題について話し、このままトロントを去るのは残念だと言った。するとウォルトン夫人は「彼は神から遣わされた人かもしれませんよ」と言い、自分がその日の朝、御霊に導かれてテラー家を訪れたことを打ち明けた。そして、プラット長老に自分の家に滞在してもらい、説教を続けてほしいと思っていたということであった。こうしてパーリーはウォルトン家に滞在することになり、やがてテラーのグループの会合にも招かれるようになった。その会合でジョン・テラーは『新約聖書』からサマリアでのピリポの伝道について読んでこう言った。「さて、わたしたちのピリポはどこにいるのでしょうか。どこでわたしたちは御言葉を聞いて喜んで受け入れ、それを信じたときにどこでバプテスマを受けたらよいのでしょうか。わたしたちのペテロとヨハネはどこにいますか。使徒はどこでしょう。按手によって与えられる聖霊はどこにあるのでしょうか。……」<sup>15</sup> 話をするように求められたパーリーは、このジョン・テラーの疑問に答えられることを宣言する。



ジョン・テラー（1808 - 1887年）はイギリスで生まれ、カナダに移住して福音に改宗した。彼は出版者、宣教師、使徒、そして大管長として奉仕した。

それから3週間、ジョン・テラーはプラット長老の集会に出席してその説教の一部始終を書き留め、『聖書』と比較検討した。そして、イエス・キリストの真実の福音が回復されたことを次第に確信するようになった。1836年5月9日、ジョン・テラーと妻のレオノラはバプテスマを受けた。ジョン・テラーはその後間もなく長老に聖任され、宣教師として伝道活動を活発に行った。こうして福音は急速な広がりを見せ、パーリーを援助するためにオーソン・ハイドが派遣された。またすでにカナダにいたオーソン・プラットとフリーマン・ニッカーソンもトロントのパーリーと合流した。ジョン・テラーは宣教師がトロントを去るとき、彼らが設立したトロントの教会を管理する者として任命を受けている。

教会歴史の中で同じく重要な役割を果たすフィールドینگ家族も、このカナダでの収穫の一部である。メアリー・フィールドینگはハイラム・スミスと結婚し、第6代大管長ジョセフ・F・スミスの母、第10代大管長ジョセフ・フィールドینگ・スミスの祖母となる。メアリーの兄弟であるジョセフはバプテスマを受けて1年後、初めてイギリス伝道に召された宣教師の一人としてイギリスに行き、現地での業の確立に重要な役割を果たした。

ほかの地域の宣教師たちも、すばらしい霊的な体験を得ている。例えばウィルフォ

## 時満ちる時代の教会歴史



メアリー・フィールディング・スミス  
(1801 - 1852年)

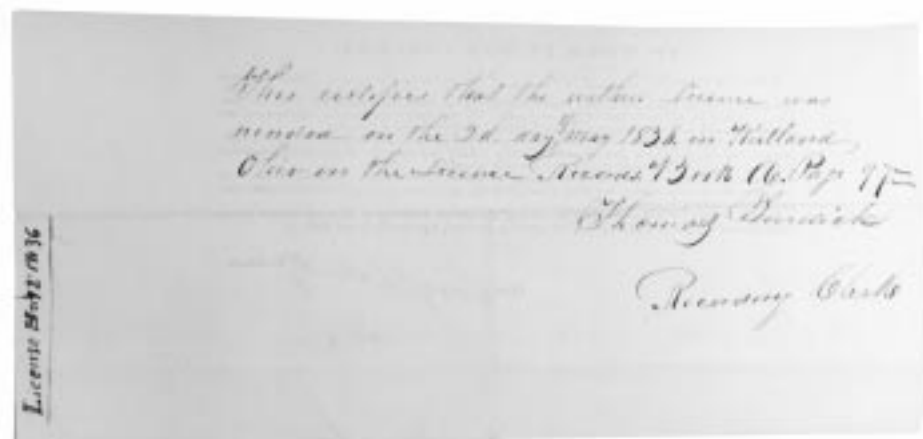
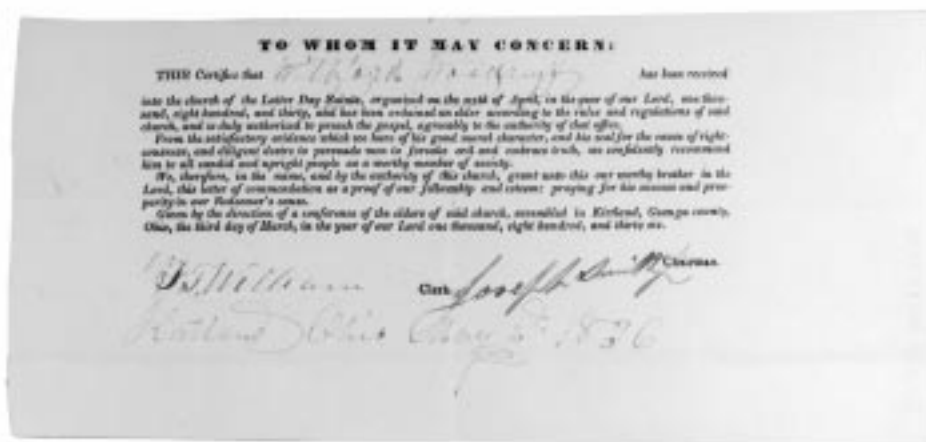
ウィルフォード・ウッドラフの長老証明書  
の表と裏。1836年のものでジョセフ・ス  
ミスの署名がある。

ード・ウッドラフは1834年、27歳でミズーリに赴いた。その年の秋には祭司に聖任され、宣教師としてアーカンソーとテネシーに赴きその地域の伝道の草分けとなった。後年、彼はこの宣教師時代のことをよく証している。「自分の生涯の中で、南部諸州での宣教師時代ほど神の御霊と力に満ちた時代はなかった。」<sup>16</sup>

こうして教会の支部は北東部、中西部、カナダ東部に広がり、福音はやがてウェストバージニア、ケンタッキー、テネシーにも伝えられていった。地元の支部は初め「教会」という名で呼ばれていたが、1835年になると「支部」という名称が定着する。この名称は、ある場所に住む教会員がよきおとずれを近くに住む友人に伝え、その友人が新しいグループを作るということで、文字どおり親木から枝が分かれていく様子を象徴するものであった。そして、幾つかの支部が時折一堂に会して大会を開くことが習慣になったところで、1835年、十二使徒会が地方（district）ごとの幾つかの支部の集まりを大会（conference）と名付けた。この「大会」には今日のステークのように地理的な境界が定められていた。<sup>17</sup>

## 聖文の拡充

古代エジプトの町テーベ（今のルクソール）の向かい側のナイル川西岸の墓で、ピードモント（イタリア北西部）出身のフランス語を話す探検家アントニオ・レボロが数体のミイラを発見し、それと一緒に何本かのパピルスの巻き物が見つかった。1830年のレボロの死後、ミイラとパピルスはアメリカに送られ、1833年にレボロの



## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年

おいと称するマイケル・H・チャンドラーの手に渡った。チャンドラーは1835年，東部の幾つかの町でそれらを展示した。

チャンドラーが6月末にカートランドにやって来ると，聖徒たちはそのミイラとパピルスに大変な興味を示した。ジョセフ・スミスが古代の文書を翻訳できることをうわさで知っていたチャンドラーは，そのパピルスを翻訳できるかどうかジョセフに尋ねた。そのときのことをオーソン・プラットはこう記している。「預言者はそれを手に取ると自室に入り，主に御心を伺った。主は彼にそれが神聖な文書であると言われた。」そして主は，そこに書かれてある幾つかの文字の翻訳を示された。チャンドラーはその記録に記された幾つかの文字を学者に見せて，意味を調べてもらっていたが，ジョセフの翻訳を見た彼は，それが学者の翻訳と詳細に至るまで一致しているとの署名付きの証書を書いている。<sup>18</sup>

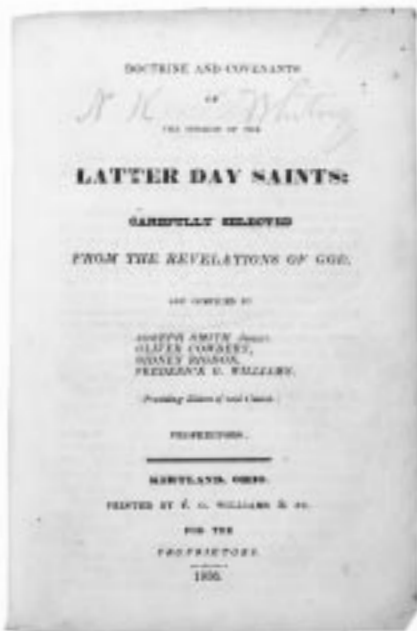
巻き物の内容に大きな関心を抱いた聖徒たちは，そのミイラと巻き物を2,400ドルで購入，ジョセフは直ちに翻訳に取りかかった。そしてそれがアブラハム，ならびにエジプトに売られたヨセフの書を含むものであることが判明した。「確かに主はあふれんばかりの真理を示しわたしたちに平安を与え始めておられることが分かる。」<sup>19</sup> ジョセフはカートランドでの残りの日々をその古代の書の翻訳に費やし，その結果アブラハム書が世に出ることになる。しかし出版されたのは1842年，ノーブーで追加の翻訳が完成してからのことであった。1843年2月，預言者はアブラハム書の翻訳をさらに進めると約束したが，多忙な生活の中で殉教までの間にそれが実現することはなかった。

1835年，もう一つの教会標準聖典が発行された。本来は1833年にミズーリで出版されることになっていたものの，迫害により阻まれてしまった『戒めの書』( *Book of Commandments* ) である。それがオハイオで，さらに追加された啓示も加えた形で出版される手はずとなった。1834年9月，発行する啓示の選択作業が大管長会に割り当てられ，預言者は誤植を訂正したり1833年以降に下された啓示を付け加えた。この作業は翌年の夏に完成し，1835年8月17日に『教義と聖約』と名付けられたこの新しい聖典を承認するための聖会が開かれた。

この聖典のタイトルは，中味が大きく二つに分かれることを意味している。すなわち「教義」と呼ばれる最初の部分は，前の冬に長老たちの塾で行われた信仰と題する幾つかの講話が掲載されており，「聖約と戒め」と題する後半は，『戒めの書』の啓示に新たに45の啓示を加えたものであった。<sup>20</sup> この聖典の序文には，神学に関する講話と主の啓示の違いが明らかにされている。<sup>21</sup> そして1921年にはこの違いが存在することを理由に，読者に講話というものについて誤った位置付けを与えないようにするため『信仰に関する講話』( *Lectures on Faith* ) を除いた啓示だけの部分が出版されることになった。

## カートランドの日常生活

1830年の中ごろになると，カートランドは次第に末日聖徒の町となっていった。教会員ではない人の数は1,200から1,300人で変わらなかったものの，教会員数は1834年から1837年の間に約500人から1,500人と，ほぼ3倍となった。そして，教会とその活動が地域の生活に大きな影響を与えるようになる。このことが，まったく性質を異



1835年版『教義と聖約』のタイトルページ。

## 時満ちる時代の教会歴史

ニューエル・K・ホイットニーの店の帳簿  
(1836年11月 - 1837年4月)

にした二つのグループの間の緊張を高めることになるのである。<sup>22</sup>

聖徒たちの多くは十二使徒の召しや『教義と聖約』の出版を喜んだものの、日々の生活は畑や町で働いて生計を立てるといったものだった。聖徒たちは長時間肉体労働を行わなければならないかったものの、娯楽や教育、礼拝にも時間を割いていた。

娯楽に費やす時間は限られていたものの、カートランドの聖徒たちは狩猟や釣り、水泳、乗馬を楽しんだ。冬になるとスケートやそりに興じた。聖徒たちにとって特に大切だったのは家族の交わりである。長時間働いた後、親子が夕べに歌を歌い、遊び、学び、共通のテーマについて話し合った。当時、祝日は珍しく、あったとしても特に気に留めることもなく1日が過ぎていった。当時の日記には特別な祝日についての記述がほとんどない。クリスマスでさえあまり触れられていない。ある末日聖徒の少女はニューヨーク市に旅行に行き、ほかの子供たちのところにはサンタクロースが来て靴下いっぱいプレゼントやお菓子をくれることを知って驚いている。<sup>23</sup>

聖徒たちは教育を必須のものと考えた。そして、おもに教育の場は家庭であった。したがって、ジョセフ・スミスの子供たちを教えたエライザ・R・スノーのような家庭教師はよく見られた。また教師たちが民家や公共の建物で奉仕として子供たちを教えることもよくあった。

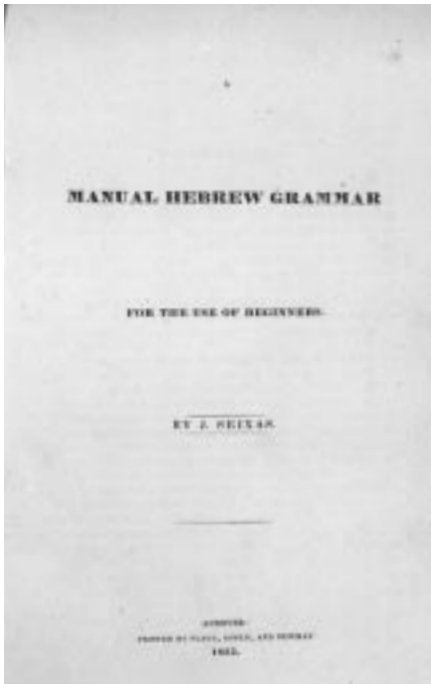
1833年預言者の塾で教育活動が始まり、その後2年間冬季には長老の塾が開催された。冬の間は兄弟たちが農作業も宣教師活動もそれほど忙しくなかったからである。長老の塾は神殿の西隣の印刷所の1階にある30×38フィート(9×11.5メートル)の広さの部屋で行われた。目的は宣教師として出て行く人、あるいは教会の新しい召しにあって奉仕しようとする人を備えることにあった。カリキュラムには英文法や作文、哲学、行政、文学、地理、古代史、現代史も含まれていた。しかし、最も重きを置かれたのは神学である。

長老の塾がもたらしたもののなかでもおもなものは、1836年1月から4月まで若きヘブライ語教師ジョシュア・シークサスが行ったヘブライ語講座であろう。彼は320ドルで雇われ、40人の生徒を7週間にわたって教えた。ところが思いの外反響が大きく、彼のクラスがもう二つ追加された。そしてシークサスが去った後も生徒のヘブライ語への関心は続き、例えばウィリアム・W・フェルプスなどは、ヘブライ語の『聖書』の翻訳を友人と交換していたほどである。<sup>24</sup> 預言者ジョセフ・スミスはヘブライ語の学習に特に熱心であった。彼はこう語っている。「主の言葉を原文で読むとき、わたしの心は喜びを覚えます。」<sup>25</sup>

このヘブライ語講座に近くのおハイオ州マンチュアから参加していた教会員ではない人がいた。ロレンゾ・スノーである。ある日ロレンゾは、オベリン大学に行く途中でデビッド・W・パッテン長老と会った。そして二人の会話はいつしか宗教のことに及び、パッテン長老の誠実な態度と証がロレンゾに強い印象を与えることとなった。そのようなわけで、改宗していた姉妹のエライザがヘブライ語講座に出席するように誘ったとき、ロレンゾには心の準備ができていたのである。ロレンゾはヘブライ語講座でジョセフ・スミスをはじめとする教会指導者と知り合い、1836年6月にバプテスマを受けた。

初期の末日聖徒にとって安息日の礼拝は生活の中心であった。大勢の人々は土曜日に十分な薪を集め、また家事をすべて済ませ、日曜日に霊的な事柄に献身できるよ

## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年



ジョシュア・シークサスのヘブライ語文法のタイトルページ。ジョシュア・シークサスはカートランドでヘブライ語の教師として預言者から雇われる前、ロレンゾ・スノーが学んだオベリン大学でヘブライ語を教えていた。

うにしていた。最初礼拝は家庭で行っていたが、後に塾で行うようになった。しかし気候の温暖なときは戸外で礼拝をしている。日曜日の集会は簡単なものだった。普通朝の集会は10時に賛美歌と祈りで始まり、次いで一人か二人が説教を行った。午後の礼拝も同じようなものであったが、聖餐式が執り行われるのが常であった。確認の儀式や結婚式が集会中に行われることもあった。

毎月の第1木曜日は断食日で、集会が6時間に及ぶこともよくあった。聖徒たちは歌い、祈り、生活の中での神の導きについて証を述べ合った。そして、福音を守って生活できるように互いに励まし合った。エライザ・R・スノーはその集会のことをこう懐かしく回想している。「言葉の力で表現できないほど霊的で興味深いものであった。多くの集会が神の御霊が降り注ぐペンテコステのようであり、福音の賜物や癒しと預言、異言を語り解釈するなど、それらを行う力が見られた。」<sup>26</sup>週日の夜は神権定員会や伝道集会、祝福師の祝福を授ける会などが行われている。

聖徒たちの礼拝の中で音楽は常に重要な位置を占めてきた。1830年7月、エマ・スミスに教会の賛美歌集を編さんせよとの啓示が下った。そして小さな賛美歌集が実際に出されたのは1835年のことである。そこには賛美歌が90曲収められ、34曲は教会員の作であり、回復を証するものであった。残りは当時一般に使われていた賛美歌集からの引用である。賛美歌集には楽譜がなかった。聖徒たちは当時よく知られた歌の替え歌として賛美歌を歌ったのである。したがって、支部によって聖歌隊の歌う賛美歌が歌詞は同じでもメロディーが違うことがよくあった。エマ・スミスがウィリアム・W・フェルプスの助けを得て選んだ賛美歌の幾つかが現在の賛美歌集に収められている。

## 主の宮を建てる

約3年間、カートランドの聖徒の時間と精力はこの神権時代初の神殿の建設に注がれた。この事業は1832年12月、主が聖徒たちに「一つの家、すなわち祈りの家、断食の家、信仰の家、学びの家、栄光の家、秩序の家、神の家を建てなさい」と命じられたことによって開始された（教義と聖約88：119）。そして5か月後、主は神殿建設の遅れを責め、その業を進展させるように勧告された（教義と聖約95章参照）。この勧告により聖徒たちは神殿建設に邁進するようになった。

預言者は一度大祭司を集めて大会を開き、神殿をどのように建てるか意見を求めている。ある者は丸木造りがいいと言い、ある者は普通の木造がいいと言った。「預言者は言った。『神のための宮を丸木造りにしましょうか。いいえ。わたしにはもっといい考えがあります。主の宮の設計図は主が直接授けてくださいます。そしてそれによってあなたがたは間もなく、わたしたちの考えと主の考えとの違いを見ることになるでしょう。』」<sup>27</sup>建築を監督する一人であるトルーマン・O・エンジェルは、主が預言者に神殿の設計図を示してくださるとの約束が成就したことを証している。トルーマンによれば、大管長会がひざまずいて祈っていると、「目に見える距離の所に建物が現れた。」後に、完成した神殿の中で話をしていたフレデリック・G・ウィリアムズは、集会を行っているホールが示現で見たものと細部にわたってすべて同じであると述べている。<sup>28</sup>

神殿の外観は典型的なニューイングランドの教会堂のそれであるが、内装はユニー

## 時満ちる時代の教会歴史

クなものであった。主は神殿には二つの大きな部屋が必要であることを述べられた。それぞれ上下に設け、部屋の広さは55×65フィート（約17×20メートル）である。下の部屋は礼拝堂として祈りと説教と聖餐式の執行に用い、上の部屋は教育の目的で用いることになっていた（教義と聖約95：8，13 - 17参照）。

神殿の建設は1833年6月6日に始まった。そして主の勧告に基づき、作業に必要な材料を用立てる委員会が組織された。石切り場は建設用地から2マイル（約3.2キロ）南にあったので、直ちに石を敷き詰めた荷車の通る道が造られた。そしてハイラム・スミスとレイノルズ・カフーンが基礎のための溝を掘り始めた。しかし、初期の教会員によれば聖徒たちはとても貧しく、「土を掘る道具もなければ、すきを持っている教会員もほとんどいなかった。」<sup>29</sup>しかしながら「彼らの中に満ちあふれていた一致と慈愛の精神が彼らを強め」、神殿建設の指示を果たすことができたのである。<sup>30</sup> こうして1833年7月23日、「聖なる神権の方式に基づき」隅石が置かれた。<sup>31</sup>

建設作業には、伝道で離れた所に住んでいる人を除き、体が不自由でない人はすべて参加した。ジョセフ・スミスは石切り場で現場監督として働いた。毎週土曜日、兄弟たちは馬車を持ち込み、切り出した石を積んで建設用地まで運び、それから1週間、石工が細工できるようにした。女性たちはエマ・スミスの指示により神殿建設に携わる人々のために「靴下とズボンと上着を作った。」ヒーバー・C・キンボールはこう回想する。「わたしたちの妻たちは編み物や糸つむぎ、裁縫に明け暮れ……男性と同じように多忙だった。」<sup>32</sup>

神殿の建設は容易なものではなかった。神殿を破壊するとの暴徒からの脅迫があったため、日中働いた人々が夜は見張りをするという状況だった。ヒーバー・C・キンボールは、数週間というもの昼夜を問わず「衣服を脱ぐことは許されず、銃を手に

カートランド神殿の設計図



アメリカ合衆国内務省の厚意により掲載

## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年

眠ることを義務づけられた」と語っている。<sup>33</sup> 当時教会は常に財政的に破綻状態にあったため、合衆国とカナダの聖徒たちは献金をするように求められ、多くの人々が個人的な犠牲を払ってその求めに応じた。ピエナ・ジャックスは、自身の財産の多くを献金としてささげた初期の人々の一人である。ジョン・タナーは神殿用地のための献金を借金で支払い、後に備品を購入する費用である3,000ドルを工面するために、2,200エーカー（約890ヘクタール）の土地を手放した。彼はそれからも寄付を続け、財産をすっかり教会にささげてしまった。<sup>34</sup>

1834年夏シオンの陣営による行軍も神殿建設の中断につながった。神殿建設のために働ける男性が少なくなり、また資金が窮地にあったミズーリの聖徒たちの援助のために使われたからである。しかし、兄弟たちがシオンの陣営から帰還してからは建設工事が急速に進んだ。その年の秋、ジョセフ・スミスはこう書いている。「主の宮の工事を速めるために多大な努力が払われ、ほとんど何も無いところから始まったにもかかわらず、工事が進むにつれてわたしたちが進むべき道が開かれ、聖徒たちは喜びを受けた。」<sup>35</sup> 1834年の秋には高さ約4フィート（約1.2メートル）だった壁が冬の間に急速に工事が進み、1835年11月には外壁のしっくい塗りが始まった。粉々に砕いたガラス食器をしっくいと混ぜて壁が光るように工夫している。また内装はブリガム・ヤングの指導により1836年2月に完了した。姉妹たちはカーテンとカーペットを作った。

## ペンテコステの日々

聖徒たちは個人的に神殿建設のために多大な犠牲を払ったのみならず、4万ドルから6万ドルの費用を捻出した。神殿建設に対して喜んで犠牲を払おうとする聖徒たちのそうした態度に、主は彼らに大いなる祝福を注ぐことでこたえられた。1836年1月21日から5月1日まで、「教会歴史の中で教会員がこれほど示現を見、そのほかの驚くべき霊的な現れを味わった時期はない。」<sup>36</sup> 教会員は少なくとも10の異なった集まりで天の使者の姿を見、その中の5回の集まりでは、救い主御自身にまみえたと証している。多くの人々が示現を見、中には預言をしたり異言を語ったりする人々もいた。

カートランド神殿で開かれた重要な集会の一つが1836年1月21日木曜日の会である。預言者はそのときの出来事をこう記録している。

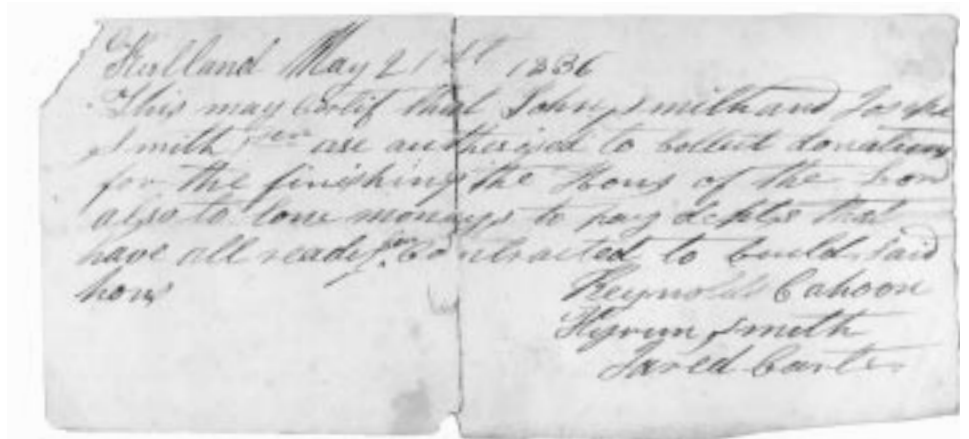
夕方「早くからともされらうそくの光の下で、わたしは神殿の西の講義室で大管長会と会った。わたしたちの頭に油を注ぐ儀式を行うためである。……天がわたしたちに開かれ、わたしは神の日の栄えの王国とその栄光を見た。……わたしはまた、輝く神の御座も見た。……わたしはその王国の美しい街路を見た。それは金を敷き詰めたかのようなであった。」ジョセフ・スミスは示現が別の場面が変わるまでの間に、たくさんの預言者が日の栄えの王国にいるのを見ている（教義と聖約137：1，3 - 5参照）。それからジョセフは、最近召された十二使徒が「円陣に立っているのを見た。彼らは疲れていて、着ている物はよれよれで、足もはれ上がっている。……そしてその中にイエスが立っておられたが、彼らの目はイエスに注がれていなかった。

わたしとともに〔洗いと油注ぎの〕儀式を受けたわたしの兄弟たちの中には、この栄光に満ちた示現を受けた人がたくさんいた。天使たちがわたしだけでなく彼らを



## 時満ちる時代の教会歴史

カートランド神殿の建築資金募集を担当する人々に与えられた証明書。



も教え導き、至高の御方の力がわたしたちに宿った。主の宮は神の栄光に満たされ、わたしたちは神と小羊にホサナと叫んだ。……

……中には救い主の顔を拝した者もいた。……わたしたちは皆、天の群勢と交わっていたからである。」<sup>37</sup>

ジョセフ・スミスは兄のアルピンが日の栄えの王国にいるのを見た。ジョセフが驚いたのは、アルピンは福音が回復される前に亡くなっていたからである。また主はこの示現とともに憐れみの原則も示された。「この福音を知らずに死んだ者で、もしとどまることを許されていたらそれを受け入れたであろう者は皆、神の日の栄えの王国を受け継ぐ者となる。」(教義と聖約137:7) 預言者はまた、責任を負う年齢以前にこの世を去った子供は皆、「天の日の栄えの王国に救われる」ことを知った(教義と聖約137:10)。

記念すべき霊的な出来事の数々が起こったのは、神殿が奉献された1836年3月27日日曜日のことである。カートランドには主が授けると約束された偉大な祝福を得ようとして、数百人の聖徒たちがやって来た。そして神殿の外には朝早くから奉献式への参列を希望する大勢の人々が集まった。神殿の扉が開けられたのは午前8時で、大管長会の案内で約1,000人が席に着いた。しかし中に入れぬ人々も大勢いた。やがて教会の指導者が少し高くなった説教壇と両端の長いすに着席し、扉が閉められた。しかし、数百人が外に残されたままであった。その多くは神殿建設のために多大な犠牲を払った人々や、奉献式に参列するために遠くからやって来た大勢の人々も含まれていた。彼らの失意を感じ取った預言者は、神殿の西隣の学校の建物に彼らを収容し、集会を開いた。また彼らのために木曜日に再度奉献式を行っている。

聖歌隊の開会の賛美歌の後、シドニー・リグドン副管長が2時間半話をした。内容は、神の啓示によって建てられた神殿はこの世のいかなる建物とも異なった独特のものであることを説明するものだった。その後短い休憩があり、次いで教会役員の支持が行われた。その日の行事は奉献の祈りによって頂点に達した。それはあらかじめ預言者に啓示として与えられていたものであった。預言者は神の祝福への感謝を述べ、「ひどい艱難を経て」建てられ、「人の子がその民に御自身を現す場所」である神殿を受け入れてくださるようお願い求めた(教義と聖約109:5)。また預言者は、神殿を建てるようにとの最初の戒めが下されたときに約束された祝福がかなえられるように願った(教義と聖約88:117-121参照)、さらに教会の指導者や教会員、

## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年

国々の指導者が祝福されて散乱したイスラエルの残りの子孫の約束された集合が成就するように祈った（教義と聖約109：60 - 67参照）。この祈りはほかの神殿の奉献の祈りのひな型となった。

祈りの後，聖歌隊がこの奉献式のためにウィリアム・W・フェルプスによって書かれた「主のみたまは火のごと燃え」を歌った。それから聖餐式が行われ，聖餐が会衆に配られた。ジョセフ・スミスをはじめ多くの人々が，その集会で天使を見ている。こうして7時間に及ぶ集会は，会衆の立ち上がって叫ぶ神聖な「ホサナ斉唱」で幕を閉じた。「ホサナ，ホサナ，ホサナ，神と小羊，アーメン，アーメン，アーメン。」これを3度繰り返した。エライザ・R・スノーは，ホサナ斉唱は「とても力強いもので，神殿の天井を持ち上げてしまうのではないかと思うほどだった」と語っている。<sup>38</sup>

その日の夕方，400人を超える神権者が神殿に集った。そしてジョージ・A・スミスが話をしていたとき，「強い風が押し寄せて神殿の中に満ちるような音がして，会衆は目に見えない力に動かされるように総立ちになった。そして多くの人々が異言を語ったり預言したりし，栄光あふれる示現を見た人々もいた。わたしは神殿が天使であふれているのを見た。」<sup>39</sup>「デビッド・ホイットマーは南側の通路を通る3人の天使を見た。」<sup>40</sup>「近所の人々は（神殿の中の異様な物音を耳にし，神殿の上に明るい火の柱が降りているのを見て）こぞって神殿の方に走って来た。」また，天使が神殿の上の空中にとどまり，賛美の歌を歌うのを聞いた人々もいる。<sup>41</sup>

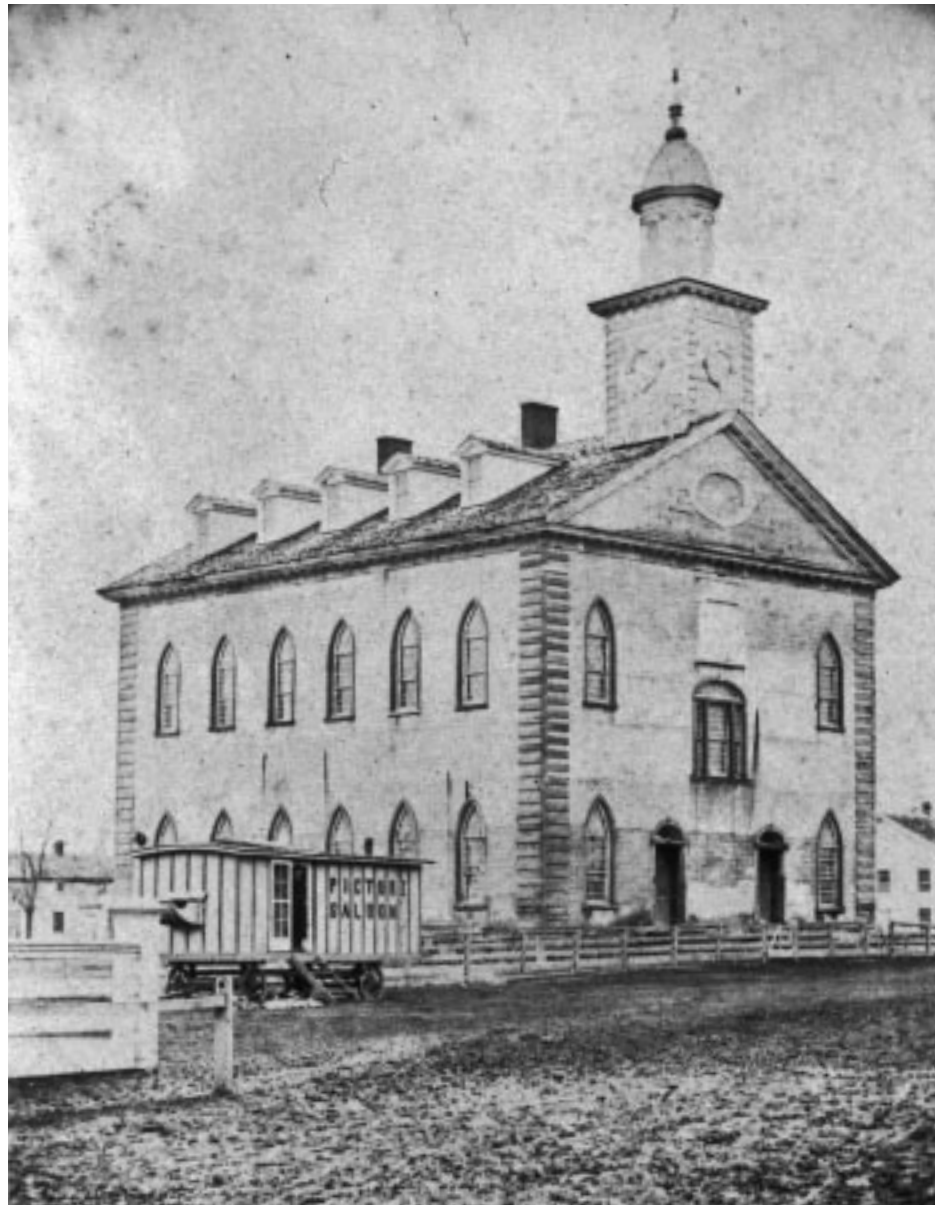
あらゆる出来事の中で最も霊的な現れが奉献式の1週間後に起こった。午後の礼拝の後ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは神殿の下の階の西側にあるメルキゼデク神権の教壇に入った。そして個人の祈りをささげるために教壇の墓が下ろされた。そして祈っていると，「わたしたちの心から幕が取り去られ，理解の目が開かれた。」（教義と聖約110：1）こうして彼らは一連の驚くべき示現を見る。主イエス・キリストが御姿を現し，神殿を受け入れ，「わたしの民がわたしの戒めを守り，この聖なる家を汚さなければ」神殿において再び御姿を現すことを約束された（教義と聖約110：8。2 - 9節も参照）。

次にモーセが現れ，「地の四方からのイスラエルの集合と北の地からの十部族の導きの鍵」を回復した（11節）。次にエライアスが「アブラハムの福音の神権時代」をゆだねた（12節）。最後に，マラキの預言（マラキ4：5 - 6参照）とモロナイの約束（教義と聖約2章参照）である「先祖の心を子孫に，子孫の心を先祖に向けさせ」る業を実現するために（教義と聖約110：15），預言者とオリバーにエリヤが現れ，「主の大いなる恐るべき日」に備えて「この神権時代の鍵はあなたがたの手にゆだねられている」と証した（16節）。末日聖徒はこのエリヤが回復した結び固めの鍵により，生者は言うに及ばず亡くなった先祖のためにも救いの儀式を行うことができるのである。この死者のための神聖なる儀式が教会員に紹介されたのは，ノーブー時代になってからのことであった。

この偉大な示現と啓示が授けられたのは，1836年4月3日，復活祭の日曜日であった。時満ちる神権時代の中で，この日ほど復活の真实性を確認するにふさわしい日がほかにあるだろうか。その週末はユダヤ教の過越の祭でもあった。ユダヤ人の家族では何世紀もの間，過越の食卓に空席を用意する。エリヤの再訪を期待してのことで

## 時満ちる時代の教会歴史

カートランド神殿



ある。エリヤは来た。しかし、それは過越の席にではなく、カートランドの主の神殿にであった。

1834年秋から1836年夏までは、教会にとって輝ける発展の期間であった。そして、その勢いはそれからも続いていくように思われた。しかし、カートランドの聖徒たちには、教会の内外から教会の発展を阻止しようとする勢力が台頭する暗黒の恐ろしい日々が待ち受けていたのであった。

## カートランドでの栄光の日々，1834 - 1836年

### 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』 2 : 176 参照
2. 『教会歴史』 1 : 39 - 43参照
3. ジョセフ・フィールディング・スミス 『救いの教義』 1 : 200
4. 『教会歴史』 2 : 182で引用。 2 : 181 - 189も参照
5. 『教会歴史』 2 : 195 - 196 , 198
6. 『教会歴史』 2 : 181n. , 201 - 202 ; ジョセフ・ヤング , *History of the Organization of the Seventies* 『七十人の組織の歴史』 ( Salt Lake City: Deseret News, 1878 ) , 1 - 2 , 14
7. ミルトン・V・バックマン・ジュニア , *The Heavens Resound* 『諸天は再び語る』 ( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983 ) , 253 - 255 参照
8. 『教会歴史』 2 : 220参照
9. ロナルド・K・エスプリン “ The Emergence of Brigham Young and the Twelve to Mormon Leadership, 1830 - 1841 ” 「ブリガム・ヤングと十二使徒のモルモン教指導者への道 1830 - 1841年」 博士論文, ブリガム・ヤング大学, 1981年, 170で引用。 ロナルド・K・エスプリン, “ Joseph, Brigham and the Twelve: A Succession of Continuity ” *Brigham Young University Studies* 「ジョセフとブリガムと十二使徒 連続性の継承」 『ブリガム・ヤング大学紀要』 夏季号, 1981年, 308 - 309も参照
10. *Journal History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史』 1835年6月2日, 歴史記録部, ソルトレーク・シティー。バックマン 『諸天は再び語る』 も参照
11. キャロライン・クロズビーの日記, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー。ケネス・W・ゴドフリー, アードリー・M・ゴドフリー, ジル・マルベイ・ダー, *Womens Voices* 『女性の声』 ( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1982 ) , 49 - 50も参照
12. ロナルド・K・エスプリン 「ブリガム・ヤングと十二使徒のモルモン教指導者への道」 161 - 165参照。 『教会歴史』 2 : 222 - 226も参照
13. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』 モルモン名著シリーズ, パーリー・P・プラット編 ( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985 ) , 110
14. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』 113 - 119参照 ; B・H・ロバーツ , *The Life of John Taylor* 『ジョン・テラーの生涯』 ( Salt Lake City: Bookcraft, 1963 ) , 31 - 38参照
15. パーリー・P・プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』 119
16. マサイアス・F・カウリー , *Wilford Woodruff* 『ウィルフォード・ウッドラフ』 ( Salt Lake City: Bookcraft, 1964 ) , 62
17. サミュエル・ショージ・エルズワース “ A History of Mormon Missions in the United States and Canada, 1830 - 1860 ” 「アメリカ合衆国とカナダにおけるモルモンの伝道の歴史 1830 - 1860年」 博士論文, カリフォルニア大学, 1951年, 147 - 154
18. オーソン・プラット , *Journal of Discourses* 『説教集』 20 : 65で引用。 『教会歴史』 2 : 235も参照
19. 『教会歴史』 2 : 236
20. 『教義と聖約』 1935年版 [ 英文 ] , 5 , 75参照
21. 『教会歴史』 2 : 250 - 251参照
22. *A Profile of Latter-day Saints in Kirtland, Ohio, and Members of Zion's Camp, 1830 - 1839: Vital Statistics and Sources* 『オハイオ州カートランドの末日聖徒, シオンの陣営の隊員の横顔 1830 - 1839年 重要な統計と典拠』 ミルトン・V・バックマン・ジュニア編 ( Provo: Brigham Young University Religious Studies Center, 1983 ) , 83参照
23. メアリー・アン・スターンズ “ An Autobiographical Sketch of the Life of the Late Mary Ann Stearns Winters, Daughter of Mary Ann Stearns Pratt ” 「メアリー・アン・スターンズ・プラットの娘である故メアリー・アン・スターンズ・ウィンターズの生涯の自画像」 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 6参照
24. 『教会歴史』 2 : 355 - 356 ; バックマン 『諸天は再び語る』 268 - 272
25. 『教会歴史』 2 : 396
26. *Eliza R. Snow, an Immortal: Selected Writings of Eliza R. Snow* 『名声不朽の人工エライザ・R・スノー エライザ・R・スノー特選集』 ニコラス・G・モーガン編 ( Salt Lake City: Nicholas G. Morgan, Sr., Foundation, 1957 ) , 63
27. ルーシー・マック・スミス , *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』 ブレストン・ニブレー編 ( Salt Lake City: Bookcraft, 1958 ) , 230。 『教会歴史』 1 : 352も参照
28. トルーマン・O・エンジェルの自叙伝, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー ; *Our Pioneer Heritage* 『わたしたちの開拓者の伝統』 全19巻, ケート・B・カーター編, ( Salt Lake City: Daughters of Utah Pioneers, 1967 -

## 時満ちる時代の教会歴史

76), 10 : 198

29. ベンジャミン・F・ジョンソン, *My life & Review* 『人生回顧録』( Independence, Mo.: Zion & Printing and Publishing Co., 1947), 16

30. 『教会歴史』1 : 349

31. 『教会歴史』1 : 400

32. ヒーパー・C・キンボール 『説教集』10 : 165で引用

33. “ Elder Kimball’s Journal ” *Times and Seasons* 「キンボール長老の日記」 『タイムズ・アンド・シーズンズ』1845年1月15日付, 771 ; 『教会歴史』2 : 2

34. バックマン 『諸天は再び語る』151 - 153参照

35. 『教会歴史』2 : 167

36. バックマン 『諸天は再び語る』285

37. 『教会歴史』2 : 379 - 382

38. モーガン 『エライザ・R・スノー』62

39. 『教会歴史』2 : 428

40. ジョージ・A・スミス 『説教集』11 : 10で引用

41. 『教会歴史』2 : 428 ; バックマン 『諸天は再び語る』300

# カートランドでの背教 1836 - 1838年

年表 年代	重要な出来事
1836.7 8	基金を求めてのニューヨーク州とマサチューセッツ州セーレムへの旅
1837.1.2	カートランド安全協会開業
1837.5	1837年恐慌、オハイオを襲う
1837.7	イギリスで宣教師による初めての伝道が行われる
1837.8	「オールド・スタンダード」の背教者、カートランド神殿で集会を行う
1838.1.12	ジョセフ・スミス、敵から逃れる
1838.7 10	カートランドの陣営、ミズーリに行軍

1838年7月6日、1マイル（約1.6キロ）の長さの幌馬車の列が、北オハイオのあのチリコーシ街道をゆっくりと南下していた。悲しみに打ちひしがれた500人以上の末日聖徒が家や仕事、美しい神殿を後にして、ミズーリ州北部にいる預言者や聖徒たちと合流する、苦難の3か月の旅が始まったのである。聖徒の一人はこう回想する。「わたしたちは家の扉に鍵をかけた。財産や持ち物をすべて敵の手に渡し、お金は1セントたりとも受け取ることはなかった。」<sup>1</sup>

それはカートランド神殿の奉献からわずか2年しかたっていないときの出来事で、それまで聖徒たちは偉大な霊の現れを受け、輝かしい未来を待ち望んでいた。そうした望みを打ち砕き、聖徒たちをカートランド追放へと追い込んだものは何だったのであるか。

## 貧困との取り組み

カートランド地域への新しい改宗者の集合は、1836年3月の神殿の奉献後、とどまることなく続いていた。集合して来た聖徒のほとんどは勤勉な働き者であったが、ベンジャミン・F・ジョンソンが言うように、ほとんどが「貧困階級」<sup>2</sup>に属する人々であった。不幸なことに、彼らの中には教会の資金であるいは教会員の善意で面倒を見てもらえると思っていた人がいた。こうして、貧困の状態で生活するモルモンの数が増えるにつれ、古くからのカートランドの住民は警戒感を強め、1835年初頭には結束して貧者に市外に立ち退くよう警告した。この問題について知った預言者ジョセフ・スミスは、無一文の者をカートランドに来させることのないように各支部に通達を出している。「聖徒たちは事前の必要な準備をないがしろにしている。...裕福な者はとどまって金を出そうとせず、一方、貧しい者が金もない状態で先に出発している。このような状況では、現在のようなひどい有様<sup>ありさま</sup>以外に何を期待できるだろうか。」<sup>3</sup>このひどい状況の一つとして挙げられるのは、神殿のすぐ南のシャグリン川に沿って聖徒たちが思い思いに建てた、おびただしい数の小さくて粗末な家であった。

しかし、こうした問題にもかかわらず、神殿奉献の後のカートランドには楽観主義が充満しつつあった。大望ある教会員が貧困の状況を改善しようとしていたからである。しかしながら、聖徒たちのカートランドへの急速な流入により、土地や家屋、生活必需品の必要性は加速度的に高まってきていた。ウォレン・カウドリはこの状況を『メッセンジャー・アンド・アドボケート』(Messenger and Advocate)の中で次のように書いている。「木材やれんが、石材、石灰、商品などを積んだ馬車の音が夜明けから夕暮れまで響いていた。.....まるで魔法のように、わたしたちの周囲に家が建ち始めた。それは苦しい逆境の日が去り、主が定められたシオンへの祝福

## 時満ちる時代の教会歴史

の時が到来したことへの明るい希望と強い期待と揺るぎない確信を物語るものであった。」<sup>4</sup>

聖徒たちの資産は増えていったものの、教会自体はいまだに大きな負債を抱えたままであった。金や銀に代表される資本は量的に少ない中で、カートランドとミズーリ州北部に聖徒たちを定住させるための土地を購入する資金が必要であった。教会指導者は負債を軽減し使用可能な資金を増やす方法を必死になって見いだそうとしていた。

1836年7月、バージェス兄弟がカートランドに到着し、ジョセフ・スミスに、マサチューセッツのセーレムのある家の地下室に大量の現金が隠してあることを報告した。彼は生存している人間でその大金とそれが隠されている家の場所を知っているのは自分だけだと言う。セーレムは交易の盛んな繁栄した港町で、宝が隠されているとしても不思議ではない。スペインの海賊が残した宝を掘り当てることは、当時のその地域のアメリカ人の間ではよく行われていたことであった。バージェスに促された預言者は、シドニー・リグドン、ハイラム・スミス、オリバー・カウドリを伴い、7月末にニューヨーク市に向けてカートランドをたった。到着後、彼らは4日間負債について債権者と話し合い、オリバー・カウドリは教会が後援する銀行を開設した際の紙幣の印刷について情報を集めた。一行はニューヨークから船でボストンに渡り、そこから鉄道でセーレムに行き、バージェスに会い、その町に隠されているという現金についてバージェスから詳細を聞く予定だった。

ジョセフ・スミスにとって、セーレムへの旅はこれが初めてではなかった。7歳のころ、足の大手術の快復のため、おじのジェシーとともに訪れたことがある。しかし、現金を隠した家は、バージェスの援助にもかかわらず見つけることができなかった。バージェスはセーレムの町は前に来たころと変わってしまっていて目指す家を見つけれないと言い、去ってしまった。しかし兄弟たちはなおも探し続け、ようやくバージェスの説明どおりの家を見つけたものの、現金は見つからなかった。<sup>5</sup>

1836年8月6日にセーレムで授けられた啓示の中で、主は次のように言っておられる。「主なるあなたがたの神であるわたしは、あなたがたの愚かな行為にもかかわらず、あなたがたがこの旅をしてきたことを不快には思わない。」(教義と聖約111:1)主はまた兄弟たちに、「シオンのためにあなたがたに与える多くの宝をこの町に持っている。また……多くの人がこの町にいる」と言われた(2節)。それから5年後、ハイラム・スミスはフィラデルフィアでエラスタス・スノーとベンジャミン・ウィンチェスターの二人の長老にこの啓示の書き写しを見せ、セーレムに行き、その預言を成就するように告げた。最初スノー長老は躊躇した。家に戻りたいとしきりに思っていたからである。しかし彼は導きを求めて祈り、セーレムに行くべきであるとの確信を得た。ベンジャミン・ウィンチェスターもセーレムに赴いたが、滞在したのは短期間であった。初めはなかなか進展が見られなかったものの、スノー長老は1842年にセーレムに教会員数120人の支部を設立した。彼は1年余りセーレムにとどまり、1843年2月にその地を後にした。こうしてエラスタス・スノーは「多くの人」がこの町から集められるとの約束を成就したのである。<sup>6</sup>



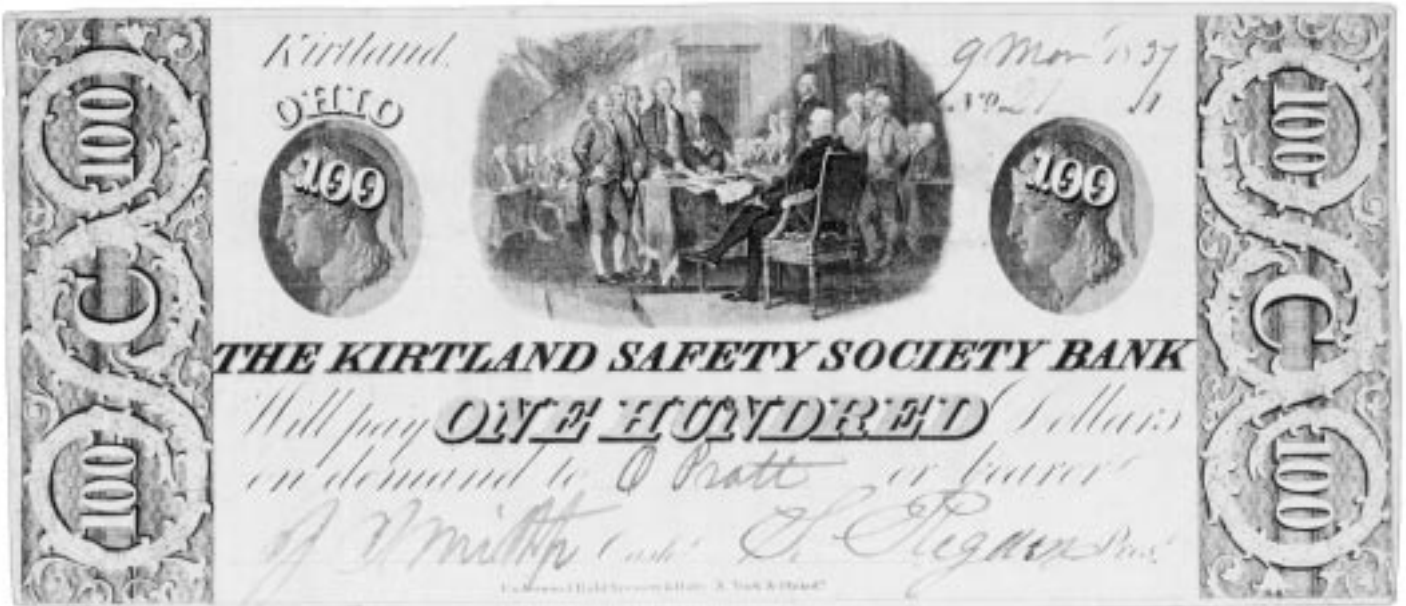
エラスタス・スノーは1849年から死去する1888年まで十二使徒定員会会員であった。1849年10月、福音を紹介するためデンマークに召された。

## カートランド安全協会

1830年代になって、アメリカの銀行数は2倍に増えた。債権や現金の需要が増大し

## カートランドでの背教，1836 - 1838年

たからである。銀行は貸し付けや紙幣の発行，交換の仲介，現金の安全な保管を業務としていた。カートランドでは，ジョセフ・スミスをはじめ幹部の兄弟たちが銀行の設立を検討していた。そして法律家の援助を得て，カートランドに銀行を法人として設立する同意書の草案が出来上がった。名称はカートランド安全協会である。1836年11月，オーソン・ハイドはオハイオ州の州庁に州議会に対する銀行設立の承認への嘆願書を携えて出かけて行った。同時にオリバー・カウドリはフィラデルフィアに行き，紙幣印刷のための版を購入している。オリバーは目的を果たしたものの，オーソン・ハイドは州都であるコロンバスから落胆させる知らせを持って戻って来た。申請の時機が悪かったのである。嘆願を聞いた議会は，申請された銀行の設立への認可を拒否した。オハイオでは銀行設立に反対する「硬貨派」の民主党議員が過半数を占めており，銀行の新設はすべて拒否していたのである。



カートランド安全協会発行の紙幣

兄弟たちは落胆はしたものの，私設の合同株式会社を設立することに決定した。カートランド安全協会反銀行会社という名称である。オハイオではほかにも議会の承認を得ない無許可の銀行が組織されていたので，兄弟たちは銀行業務を行う私有会社を組織するのは個人に与えられた権利であると解釈したのである。西部保護区に住む大勢の人々は，教会員であるなしを問わずこの会社の設立を支持し，ジョセフ・スミスが出納官，シドニー・リグドンが秘書官となった。こうしてカートランド安全協会は，1837年1月2日に業務を開始している。

ところが間もなく，安全協会の成功を根底から覆す重大な問題が発生する。ほかの多くの銀行が安全協会の紙幣を法貨として認めず，反モルモンの新聞が安全協会の紙幣は価値がないと書いたのである。さらに，同協会の資本の大半は土地であって，多額の紙幣との兌換請求に足りるだけの正貨（金や銀などの硬貨）を所有していなかった。教会の敵はたくさんの紙幣を集めて協会に硬貨との交換を要求，そのため協会は紙幣の発行後数週間で顧客への正貨の支払いを差し止めなければならない状況に追い込まれた。議会の承認もないうえに信用も失墜し，その結果ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンはオハイオ州の銀行法に違反したかどで裁判を受けるこ



## 時満ちる時代の教会歴史

とになった。

1837年の春、聖徒たちの経済問題はニューヨークから西へ、そして合衆国各地に広がった恐慌（後に1837年恐慌と呼ばれた）によっても打撃を受ける。5月になるとハイオ中のすべての銀行が正貨の支払いを差し止めた。恐慌の間、市中に正貨は乏しく、債権者の多くは債権を差し押さえることもできず、支払い期限を延長せざるを得ない状態であった。ジョセフ・スミスは投資家にさらなる投資を呼びかけて協会の維持を図ったものの、経営権がほかに移ってしまった。しかしずさんな経営と預金の横領行為があったとのうわさで、問題を解決することはできなかった。

カートランドでの投機熱も、教会の財政問題に新たな打撃を与えることになった。多くの人々が銀行から借りたお金で土地を買い、転売して大きな利益を得ようともくろんだのである。ウォレン・カウドリは『メッセンジャー・アンド・アドボケート』の中でこう書いている。「(多くの教会員が) 際限のない投機と富とこの世的な繁栄を夢見る罪を犯していた。金や銀が彼らの神であり、家や農場、商品を所有することが至上の喜びであり、繁栄へのパスポートのようであった。」<sup>7</sup> 1836年秋、伝道から帰ったヒーバー・C・キンボールはその投機の結末にあ然とした。こう書いている。「わたしがカートランドを出たときは1区画が約150ドルだったが、帰ってみて驚いたのは、同じ区画が場所によっては500ドルから1,000ドルもすると言う。そして、伝道に出かけたときは食べる物にも不自由していたある人々が大金持ちになっていた。確かにこの町のすべてが繁栄に向かって動いており、すべての人が金持ちになるとの決意を固めているようであった。」<sup>8</sup>

こうして過度な拡大を行ったカートランド安全協会は、1837年11月についに閉鎖された。投資した約200人の人々は、投資金額のほぼすべてを失っている。安全協会の倒産によるジョセフ・スミスの損失はほかのだれよりも大きい。銀行の成功を願いながら、同時にカートランドに土地を購入し、自分の店のために商品を仕入れた結果、負債は合計で約10万ドルにも上った。彼はある面から言えば負債を上回る価値を有する土地と商品を所有していたが、その資産を債権者に弁済できる形のものに変えることがすぐにはできなかったのである。その結果、預言者は1837年にギューガ郡で、3万ドルを超える支払請求のための17の訴訟の矢面に立たされた。残念なことに、経済破綻のほんとうの理由を正確に理解していた者はほとんどいなかった。多くの聖徒たちが預言者を批判し、問題のすべてを預言者に帰そうとしたのである。

## 広まる背教

この経済的な暗黒時代に大勢の教会員が背教した。エライザ・R・スノーは、1836年の神殿の奉献以来、多くの教会員が「繁栄は向こうからやって来た」という思いになり、「謙遜で忠実であった多くの者が高慢になり、心の高ぶっている状態となった。そして聖徒たちはこの世のものへの愛着と思い目くらまされ、主の御霊は彼らの心から去り、代わって彼らの心は、高慢と高潔さを保っている者たちへの憎しみでいっぱいになっていった」<sup>9</sup>ことを目にした。

ウィルフォード・ウッドラフの回想でも、教会員が指導者から、へりくだって高ぶりを悔い改めなければ、古代のニーファイ人の時代のように懲らしめが待ち受けて

## カートランドでの背教，1836 - 1838年

いるだろうとの警告を受けていたことが分かる。<sup>10</sup> さらにカートランドの新聞『メッセンジャー・アンド・アドボケート』は、無節操な兄弟たちが、移住して来る者たちにとてつもないもうけ話を持ちかけ、お金を巻き上げ、姿をくらましてしまう事件があったことを報じている。<sup>11</sup>

1837年春から夏にかけてのカートランドではジョセフ・スミスへの陰口は当たり前のように聞かれ、特にジョセフが仕事や伝道で留守のときはひどかった。教会で信任される地位にあった者たちの中には、ジョセフを指導者として拒否し、もはや真実の預言者ではないと言う者が出てきた。パーリー・P・プラット長老がカナダでの伝道から帰還したころ、背教はかなりのところまで進行していた。パーリーはこの困難な時期に一時騒動に巻き込まれたが、その当時の状況を次のように率直に書き残している。

「ねたみや偽り，抗争，分裂があり，それが苦しみと悲しみを生んでいた。そしてそのような連中によってわたし自身も非難され，誤解され，悪口雑言を浴びせられた。そしてあるとき，わたし自身も背教の気運にかなりのところまでのみ込まれ，聖徒たちに戦いを挑んでいた闇の力がわたしにも解き放たれたかのようであった。しかし主はわたしの信仰を御存じであり，わたしの熱意，目的の高潔さを知っておられたので，勝利を与えてくださった。

わたしはジョセフ・スミス兄弟のもとに行き，打ち砕かれた心と悔いる霊をもって涙ながらに自分が誤っていたこと，不平を言ったこと，筋違いなことを言ったり行ったりしたことを告白した。彼はそんなわたしを心から赦し，わたしのために祈り，祝福してくれた。このようにして，わたしは実際の体験を通して二つの霊を識別し対比させることを学び，一方を拒み，一方にしっかりとつながることを味わったのである。」<sup>12</sup>

ブリガム・ヤングやヒーバー・C・キンボールのような固い信念を持った人々は，身の危険を顧みず，いろいろな会合で預言者を擁護した。1837年2月，何人かの長老たちがジョセフ・スミスを墮落した預言者であると考える人々を招いて神殿で集会をした。目的はデビッド・ホイットマーを新たな指導者として擁立することであった。ところが，ブリガム・ヤングやヒーバー・C・キンボールなどの忠実な教会員もその会に出席し，預言者を批判する発言があった後にブリガムは立ち上がり，こう証した。「ジョセフは預言者です。わたしはそれを知っています。彼を罵倒し中傷する人は気の済むまでそうすればいい。しかし，神の預言者としての召しを滅ぼすことはできません。そうしようとすれば自分の権能を滅ぼし，神の預言者とつながっていた糸を自らの手で断ち切り，地獄に落ちていくのです。」<sup>13</sup> 2月19日，預言者はカートランド神殿で神の力を受けて数時間話をした。不平を言う者は口をつぐみ，聖徒たちは，主の選ばれた僕に対する支持の念を強めた。<sup>14</sup>

## イギリスへの伝道

この重大な危機のさなか，主はジョセフ・スミスに「主の教会のために何か新たなことを行わなければならない」<sup>15</sup>と示された。1837年6月4日日曜日，預言者は神殿でヒーバー・C・キンボールに近寄り，こうささやいた。「ヒーバー兄弟，主の御霊がわたしにささやきました。『わたしの僕ヒーバーをイギリスに行かせ，福音を宣べ伝

## 時満ちる時代の教会歴史

えさせなさい。そしてその国への救いの扉を開かせなさい。』」ヒーバーはイギリスへの召しに圧倒されてしまった。教養がなく洗練されていなかったからである。彼はほとんど毎日、立派に伝道の業を行うことができるように守りと力を求めて、神殿の上の階の部屋で祈りをささげた。彼の家族は赤貧状態であったが、彼は伝道に出ることを決意した。こう語っている。「わたしは真理の大義すなわちキリストの福音がほかのあらゆる煩いを押しつけてしまったように感じた。」<sup>16</sup>

ヒーバー・C・キンボールは親友であり同胞の使徒であるブリガム・ヤングを同僚に望んだが、預言者は問題の多いカートランドにブリガムの助けを必要とした。ヒーバーが伝道のための任命を受けていると、オーソン・ハイドが部屋に入って来た。そして何が起きているかを察知した彼は、悔い改めるように心を動かされた。彼自身、投機熱やジョセフ・スミスへの非難に心を奪われていたからである。オーソン・ハイドは自らの過ちを認めて赦しを求め、ヒーバーに伴って伝道に出ることを申し出た。預言者はオーソン・ハイドの悔い改めを受け入れ、彼をイギリスに伝道に行くように任命した。<sup>17</sup> この二人の使徒を助ける者として、新たに5人が召された。教会員になってわずか6か月のウィラード・リチャーズ、イギリスのベッドフォードシャー出身で1832年にカナダに移住したジョセフ・フィールディングである。またほかに3人のカナダ人が援助者として召された。ジョン・グッドソン、アイザック・ラッセル、ジョン・スナイダーである。この3人はイギリスに友人や親族がおり、文通を続けていた。5人のうち初めから数えて4人目までは、前の年のパーリー・P・プラットのカナダへの伝道のとき、ジョン・テラーと同時期に福音に改宗した人々である。

ジョセフ・フィールディングの兄弟であるジェームズは、イギリスのプレストンで独立派（元はメソジスト派）の牧師をしており、カナダに住んでいる兄弟に手紙を書いて、新しい宗教について自分の教会堂で説教をしてくれるように依頼してきた。そこで宣教師たちは、イギリスに着くとすぐにリバプールの港町から30マイル（48キロ）北のプレストンに行き、ジェームズの信者に福音を説いた。信者の中には偉大な信仰と祈りによって、宣教師たちが到着する前にアメリカ人の宣教師の訪れを夢で見ていた。宣教師たちは7月23日を皮切りに、フィールディング牧師の教会であるパウクスホール教会にあふれるほどに詰めかけた聴衆を前に説教を行った。ところが、信者の中から数人のバプテスマ希望者が出るやいなや、フィールディング牧師は宣教師たちに教会堂の使用を禁じた。フィールディング牧師は後にこう嘆いている。「キンボールが穴を開け、グッドソンが釘を打ち込み、ハイドが締めつけた。」<sup>18</sup>

長老たちは気落ちすることなく、説教の許可を受けた民家や街角で聴衆を得た。聴衆のほとんどが貧しく学問もないことに気づいた長老たちは、聴衆のレベルに合わせて話をし、一般の人のように振る舞い、特別な衣装も身に着けなかった。また説教に対して金銭を求めることもしなかった。そして友情と兄弟愛の手を差し伸べ、だれもが神の前に平等であることを感じさせるようにした。宣教師たちのこの誠実な態度は、当時のイギリスの高圧的な聖職者とは好対照を見せていた。こうして、間もなく大勢の人々がバプテスマを求めるようになった。

7月30日の朝、最初のバプテスマが執行される予定であったが、宣教師たちはサタンとその軍勢に襲撃された。ラッセル長老がキンボール長老のところに来て、

## カートランドでの背教，1836 - 1838年



イギリスのプレストンのセントウィルフレッド通りにある家。宣教師たちはこの家にいたときに、イギリスへの伝道を阻止しようとする悪霊の攻撃を受けた。

悪霊の苦しみから救ってくれるように頼んだのである。ハイド長老とキンボール長老が頭に手を置いて祝福すると、キンボール長老は目に見えない力に打たれて床に倒れ、気を失ってしまった。気がついたときは、ほかの長老たちが彼のために祈っていた。

「わたしはそれからベッドの上に体を起こした。するとわたしたちの心に示現が開かれ、悪霊をはっきりと見る事ができた。悪霊は泡を吹き、歯をくいしばっていた。わたしたちは約1時間半、悪霊と対峙していた。……わたしは、わたしと視線を合わせたときの悪霊たちのあの復讐心と悪意に満ちた表情を忘れることができない。そして、それ以降に展開された光景、またそこに示された悪意と敵対心は、いかなる方法でも表現することはできないであろう。……」

それから何年かして、その恐ろしい朝のことについて預言者ジョセフ・スミスに語ったヒーバーは、預言者にこう尋ねた。『あのような現れを受けたということは、わたしに何か落ち度があったのでしょうか。』

『いいえ、ヒーバー兄弟。』預言者は答えた。『あのときあなたは主に近くありました。あなたと主との間には幕が1枚あっただけです。あなたには主が見えなかった。あなたの話を聞いて、わたしはとてもうれしくなりました。主の業がかの地に根を下ろしたことが分かるからです。悪魔があなたがたを殺そうとしたのはそのためです。』

……人が主に近づけば近づくほど悪魔の力が現れ、主の目的の達成を阻もうとするのです。』<sup>19</sup>

サタンとその軍勢による襲撃があったにもかかわらず、リブル川でのバプテスマは予定どおりに行われた。ジョージ・D・ワットは川までの徒競走で1位となり、イギリスで最初のバプテスマの栄冠を勝ち取った。このバプテスマを皮切りに、イギリスでの洪水のような改宗が始まる。宣教師たちはリブル盆地にあるプレストンの北東約20マイル（約32キロ）のチャトバーンとダウンハムの村を訪れた。チャトバーンでヒーバー・C・キンボールは、説教をした初日の夜に25人にバプテスマを施した。そして、その後5日間に、同僚であるジョセフ・フィールディングの助けを借りたヒーバーは約110人にバプテスマを施し、ダウンハム、チャトバーン、ワディントン、クリセロに支部を設立した。

ヒーバーがある日、チャトバーンの通りを歩いていると、前を歩いていた子供たちが「シオンの歌を歌い、両親がそれを目を細めて見ていた。彼らはわたしたちに祝福の言葉を伝えた。そして、真理の原則と救いの計画を教えるためにわたしたちをここに遣わしてくださった天の神をほめたたえた。』<sup>20</sup>ヒーバーはこう説明する。

「わたしは通りを歩いていると、それまで感じたことのない思いを抱いた。町を歩いていると髪の毛が立つのだ。わたしは訳が分からず帽子を取った。そして靴を脱ぎたい気持ちに駆られた。訳も分からずにそうしたのである。

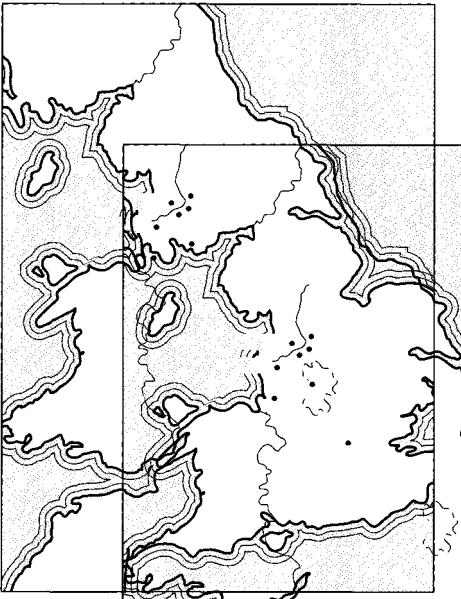
帰還してからそのことをジョセフ兄弟に話すと、彼はこう言った。『古代の預言者が何人か、出かけて行って〔イギリスを〕奉献し、あなたに祝福を注いだのですよ。』<sup>21</sup>

こうして、8か月間で2,000人が教会に加入し、26の支部が組織された。ヒーバー・C・キンボールは自分が召されたときの約束を覚えていた。「神は人々を御自分のもとに勝ち取るためにイギリスにおいてわたしを強くしてくださると約束してくださ



ジョージ・D・ワットはイギリスで初めて改宗した人物である。1837年7月30日にバプテスマを受けた彼はその当時「表音式速記法」と呼ばれていた速記術を身に付けていたため、1851年から1870年までの教会指導者の説教を記録している。

## 時満ちる時代の教会歴史



イギリスでの初期の伝道地

った。天使はわたしとともにあり、わたしを支え、足が決して滑ることのないようにしてくれる。そしてわたしは神より大なる祝福を受けて、イギリスだけでなくアメリカでも何千人もの人々にとって救いの源であることを証明すると約束された。』<sup>22</sup>イギリスでのこの最初の伝道は、1839年から1841年にかけての十二使徒定員会によるさらに大なる伝道への努力や、それ以後継続する19世紀におけるイギリスでの宣教師による刈り入れの足がかりとなるものであった。そして、このイギリスでの伝道の成功は、オハイオでの背教とミズーリでの迫害に重要な均衡をもたらすものとなる。アメリカに移民した何千人ものイギリス人改宗者が、危機にあった教会を大きく支えたのである。1850年代から1860年代にかけて、ユタ州に住む家族の大部分はイギリス出身者が家長であった。

### 「大背教」

イギリスでの伝道が数と力において発展する中で、カートランドの教会は背教により次第に弱体化しつつあった。キャロライン・バーンズ・クロズビーは、悲しみを込めてこう記している。

「親しい仲間だと思っていた人々の多くが背教者に数えられている。

……だれよりも親しい友人や隣人だった人々である。互いに相談もしたし、友として神の宮に通った同士なのに。」<sup>23</sup>

1837年8月、ジョセフ・スミスとほとんどの十二使徒が伝道のために留守にしていた間、預言者の前の筆記者でカートランド安全協会の役員であるウォレン・パリッシュと十二使徒定員会の一人であるジョン・ポイントンが、ピストルと短刀で武装した一団を率いて神殿の占拠を試みた。神殿の中にいた人々の中にはパニックと恐れのために窓から飛び降りる人もいた。この騒ぎは警官により制圧され、武装した一団は排除された。預言者の帰還後、彼らは正会員資格を剥奪された。しかし、心からの悔い改めを示した人々には資格が回復されている。

しかし、秋になってジョセフ・スミスとシドニー・リグドンがミズーリに赴くと、問題が再燃した。ウォレン・パリッシュ、ジョン・F・ポイントン、ルーク・ジョンソン、その他30人の指導的立場にある市民が「オールド・スタンダード(古い標準)」または「チャーチ・オブ・クライスト(キリストの教会)」と呼ぶグループを組織したのである。彼らは自分たちを改革者と称し、ジョセフ・スミスを墮落した預言者と決めつけた。ほかの教会幹部とともに真の信仰から逸脱した人物であると主張したのである。この一団は教会を打倒し、神殿を占拠することを目的としていたが、教会の教義は、『モルモン書』を拒否し、ジョセフ・スミスと神権を否定した以外、すべてそのまま教えている。彼らは、自ら背教の道を歩んでいたマーティン・ハリスからの反撃に遇った。マーティンは『モルモン書』は真実であり、拒む者は罰の定めを受けると証した。

この背教の結果、教会の指導者の中の50人がジョセフ・スミスの指示の下に破門された。しかし、事態はさらに深刻なものとなっていった。背教者の中に、忠実な教会員を告訴し、財産を奪おうと脅しをかける者が出てきたのである。反モルモンの人々は預言者と教会に忠実な人々に対してボイコットや悪業、雇用拒否などの手段に出て、力を拡大していった。ウィラード・リチャーズの姉妹であるヘブジバー・

## カートランドでの背教，1836 - 1838年

リチャーズは次のように書いている。

「過去3か月の間、民として嵐にもてあそばされ、波にのみ込まれそうになるときもしばしばであった。……

この教会に敵対している人々の心は恐ろしい思いに支配されている。彼らは法律を踏みじり、称賛に値することはまったく遠い存在である。彼らを駆り立てている目的は、ささいな理由で、あるいは理由もなく教会の財産をすべて奪い、〔聖徒たち〕を追放することである。」<sup>24</sup>

「1837年11月から1838年6月までの間、恐らく200人から300人のカートランドの聖徒たちが教会から離れた。これはカートランドの教会員数の10パーセントから15パーセントに相当する。」<sup>25</sup>「大背教」はミズーリまで飛び火した。9か月間で（『モルモン書』の）三人の証人、一人の副管長（フレデリック・G・ウィリアムズ）、十二使徒会の4人、七十人定員会の数人が教会を去った。そしてプリガム・ヤングは、預言者を変わずに雄々しく弁護したため、脅迫されて馬でミズーリに逃亡せざるを得なかった。

1838年1月、背教したもののジョセフ・スミスに対して同情的であったルーク・ジョンソンは、暗殺の計画があることを預言者に警告した。そして暴徒が近くまで来ていることが分かったとき、ジョセフを箱の中に隠して牛車で町の外に連れ去っている。ジョセフは暴徒の手が及ばないことを知ると馬に乗り、シドニー・リグドンとともに西の方に逃れた。敵は200マイル（約320キロ）も二人を追跡し、時には隣の部屋で自分たちのことをのろい、罵倒する言葉が聞こえるほどそばまで迫って来ていた。エマ・スミスと子供たちは途中でジョセフと合流し、つらく苦しい旅路の後で、1838年3月、ミズーリの聖徒たちに温かく迎えられた。シドニー・リグドンはインディアナ州ダブリンで預言者と別れ、数日遅れてミズーリに到着している。

## カートランドの陣営

ジョセフ・スミスがカートランドから逃亡した同じ月、高等評議会のメンバーの命もねらわれたので、忠実な聖徒たちのほとんどは指導者である預言者の後を追ってミズーリに移ることを決意した。ヘブジバー・リチャーズはこの激動の状況をこう記している。「友人たちは皆、この地をなるべく早くたどとうとしていた。……カートランドは悪人たちによってしばらくの間踏みにじられた状態になるというのがおおかたの見方ようである。……たぶん数百の家族がここ数週間のうちにここを出ることになるだろう。」<sup>26</sup>しかし、忠実な聖徒たちがカートランドを実際に離れる前、敵は聖徒たちの家を回って略奪を始め、地下に火を放った。

3月初旬、七十人たちは最も貧しい聖徒たちをミズーリに移す計画を立て始めた。七十人の会長の一人であるジェームズ・フォスターは、約500人の聖徒たちが整然と隊にまとまってミズーリに移動し、途中で野営をしている様子を見現で見た。そこで七十人たちは、その示現と預言に従って憲章を制定し、その憲章に進んで従う人を陣営として募り、各隊を指揮する指導者を任命した。隊長には、戒めを守り知恵の言葉に従うよう隊員を力づける責任が課せられた。

陣営の行軍の開始は数週間延びた。聖徒たちが負債の清算をし、土地を売却し、幌馬車や備品を手に入れるのに手間取ったからである。彼らが最終的にカートランド

## 時満ちる時代の教会歴史

を出発したのは1838年7月6日で、聖徒の数は500人以上、テント27張、幌馬車59台、馬97頭、役牛22頭、乳牛69頭、雄牛1頭という構成であった。ベンジャミン・ジョンソンはこう書いている。「費用の支払いのための資金はすべて一つにまとめられ、全員が同じ条件の下に旅をするようになっていた。これは陣営にいろかぎり続いた。」<sup>27</sup>しかし彼らは、食糧や備品を手に入れるためにしばしば行軍を中止して資金を稼がなければならなかった。

また、カートランドの陣営は行軍の間中、迫害に悩まされた。着のみ着のままの薄汚れた旅人の群れを、周辺の人々は好奇の目で見詰めた。「朝、通りを歩いていると、こちらからは何もしていないのに新しいスタイルの歓迎を受けた隊が幾つかあった。悪漢どもが卵を投げつけたのである。」<sup>28</sup>嘲笑には時折暴力的な脅迫が伴った。ミズーリではある町の市民が通りに「大砲を据えつけ、陣営が町を通るのを拒んだ。その町では、七十人の一人が、懸念する市民の気持ちをなだめ、指導者の何人かが一晩入獄することでようやく通過の許しを得た。このように、カートランドの陣営の行軍には数々の苦難が付きまとった。

「事故や病気は絶え間なく開拓者たちを襲った。幌馬車の車輪にひかれる者、病気で倒れる者、……日中は汗をかき、夜は寒気の中で、時にははじめじめとした湿地で睡眠を取らなければならなかった。そして川を渡り、坂を上り下りしながら道やわ

ハイラム・スミス<sup>27</sup>の指示により、七十人の会長会は「カートランド陣営憲章」を作成した。これは1838年のミズーリへの行軍に当たり、陣営を統率する手立てとなるものを9か条にまとめたものである。

The council of the society met this day in the  
 study of the school house, and with some  
 advice the provisions and accounts of the body of  
 the society, young and old, in a room  
 have together, the present session, and entered the  
 following resolutions etc.

Resolved that we do, as we do, to put our brethren and  
 sisters, and ourselves together, for the accomplishment  
 of the work, and that we adopt the following regulations  
 for the organization and government of the camp

1<sup>st</sup> That the president of the society, or some  
 other member of the camp, and that there shall  
 be one man appointed as treasurer, who shall be the  
 advice of the council, manage the financial  
 concerns, during the journey, and keep a just and  
 accurate account of all moneys received, and expended for the  
 use of the camp.

2<sup>nd</sup> That there shall be one man appointed to provide  
 and keep, to take charge of it, and that from the time  
 of their appointment they shall make all necessary arrange-  
 ment for the providing of teams, and tools, for the journey.  
 And they shall receive horses and advice, from the council  
 love, and furthermore shall see that cleanliness and decency  
 be observed in all cases, the word of wisdom headed, and the  
 commandment kept, in no thing, tea, coffee, or any  
 other article of any kind, taken internally.

3<sup>rd</sup> That every man shall be the head of his own family, and  
 shall see that they are brought in subjection, according to  
 the order of the camp.

4<sup>th</sup> That all those that shall subscribe to these regulations,  
 rules, and regulations shall make every exertion, and use

all lawful means to provide for themselves and their families,  
 and for the use and benefit of the camp, to which they belong,  
 and also, to hand over to the camp, such moneys as shall  
 be appropriate for that purpose, on or before the day the camp  
 shall start.

5<sup>th</sup> That the money shall be retained in the hands of the same  
 person, being suitable proportionally among them, for expenses  
 to be paid over to the treasurer, as circumstances may require.

6<sup>th</sup> That any faithful brethren wishing to journey with us, may  
 be subject to such regulations, and observing them, and regulations.

7<sup>th</sup> That every individual shall at the end of the journey  
 a settlement is to be made, pay their proportional part of  
 the expenses of the journey, or as soon thereafter as their  
 circumstances will admit. By expenses it is understood all  
 that is necessary paid out for the use of the camp, after it  
 starts, and that no individual is to receive any thing for ser-  
 vice, nor for the use of a team, wagon, or cow, if they shall come  
 at the place, where the camp finally breaks up.

8<sup>th</sup> That these rules and laws shall be strictly observed, and  
 every person who shall behave disorderly and not conform  
 to them, shall be expelled from the camp and left by  
 the wayside.

9<sup>th</sup> That this shall be the law of the camp in journeying  
 this place to the land of Zion, and that it may be added  
 what is ~~needed~~ <sup>required</sup> in circumstances may require, by the vote  
 of those subscribing to it.

And we whose names are hereunto written do hereby  
 bind ourselves, to pay our proportional part of the share  
 of the camp, and to observe, and that our families during  
 the journey, the above rules and regulations.

## カートランドでの背教, 1836 - 1838年

だちの跡に沿って進んだものの、疲労と食糧不足、食生活の変化、汚染された水の影響で次第に衰弱していった。

彼らはその苦しみと逆境の中で、天の御父に助けを求めた。旅の間中、長老たちは病気の者やけがをした者に癒しの儀式を施している。人々の日記の中には、多くの人が神権の力によってたちどころに癒されたことが記されている。<sup>29</sup>

9月にミシシッピ川にたどり着いた彼らは、ミズーリ州西部でモルモンと敵との間に戦闘が起き、すべてのモルモン教徒はすぐに州から追放されること、またこのまま旅を続けてミズーリに入れば自分たちも攻撃を受けて同じ運命をたどることを知った。この脅しのために陣営の何人かはミズーリに入ることを拒んだものの、ほとんどはそのまま前進し、1838年10月2日、ミズーリ州ファーウェストで預言者と再会した。そして2日後、定住の地であったアダム・オンダイ・アーマンに到着した。しかし彼らは程なく、苦難はオハイオで終わりではなかったことを知る。数週間後、以前よりもひどいミズーリでの迫害に遭遇するのである。

### 注

1. *Reynolds Cahoon and His Stalwart Sons* 『レイノルズ・カフーンとその雄々しい息子たち』ステラ・カフーン・シャートルフ、プレント・ファーリントン・カフーン編 (n.p.: Stella Cahoon Shurtleff, 1960), 28

2. ベンジャミン・F・ジョンソン, *My Life & Review* 『我が人生回顧録』(Independence, Mo.: Zion's Printing and Publishing Co., 1947), 15

3. *Latter Day Saints' Messenger and Advocate* 『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト』1836年9月号, 379

4. 『メッセンジャー・アンド・アドボケイト』1837年6月号, 520

5. *Studies in Scripture: Volume One, the Doctrine and Covenants* 『聖文の研究 第1巻, 教義と聖約』ロバート・L・ミレット, ケント・P・ジャクソン編 (Sandy, Utah: Randall Book Co., 1984), 432 - 436参照

6. アンドリュー・カール・ラーソン, *Erastus Snow: The Life of a Missionary and Pioneer for the Early Mormon Church* 『エラスタス・スノー モルモン教会初期の宣教師, 開拓者の生涯』(Salt Lake City: University of Utah Press, 1971), 67 - 74参照

7. 『メッセンジャー・アンド・アドボケイト』1837年6月号, 509

8. オーソン・F・ホイットニー, *Life of Heber C. Kimball* 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』(Salt Lake City: Bookcraft, 1967), 99で引用

9. *Biography and Family Record of Lorenzo Snow* 『ロレンゾ・スノーの経歴と家族の記録』エライザ・R・スノー編 (Salt Lake City:

Deseret News Co., 1884), 20

10. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1837年1月17日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ

11. 『メッセンジャー・アンド・アドボケイト』1837年5月号, 505 - 510

12. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ, パーリー・P・プラット編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 144

13. "History of Brigham Young" *Deseret News* 「ブリガム・ヤング史」『デゼレトニューズ』1858年2月10日付, 386

14. ディーン・C・ジェシー "The Kirtland Diary of Wilford Woodruff" *Brigham Young University Studies* 「ウィルフォード・ウッドラフのカートランド日記」『ブリガム・ヤング大学紀要』1972年夏季号, 385参照

15. *History of the Church* 『教会歴史』2: 489

16. ホイットニー 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』104で引用

17. 『教会歴史』2: 489 - 490参照

18. ホイットニー 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』125で引用

19. ホイットニー 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』130 - 131で引用

20. ホイットニー 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』172

21. ヒーバー・C・キンボール, *Journal of Discourses* 『説教集』5: 22で引用。ホイットニー 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』170 - 173も参照



## 時満ちる時代の教会歴史

22. ホイットニー 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』105で引用
23. ケネス・W・ゴドフリー, アードレー・M・ゴドフリー, ジル・マルベイ・ダー, *Women & Voices* 『女性の声』56で引用
24. ゴドフリー, ゴドフリー, ダー 『女性の声』76で引用
25. ミルトン・V・バックマン・ジュニア, *The Heavens Resound* 『諸天は再び語る』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983), 328
26. ヘブジバー・リチャーズからウィラード・リチャーズへの手紙のタイプ原稿, 1838年1月22日付, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ
27. ジョンソン 『我が人生回顧録』32 - 33
28. 『教会歴史』3; 112
29. バックマン 『諸天は再び語る』359 - 360

# ミズーリ北部の教会， 1836 - 1838年

年表	
年代	重要な出来事
1836.夏	聖徒たち、ファーウェストへの入植を開始する
1836.12.26	コールドウェル郡の設立
1837.11	ジョセフ・スミス、ファーウェストを短期訪問する
1838.3.14	預言者、ファーウェストに到着し入植
1838.5	アダム・オンダイ・アーマンの設立
1838.6	デウィットへの入植が始まる
1838.6.19	シドニー・リグドン、「塩の説教」を行う
1838.7.4	シドニー・リグドン、独立記念日の説教を行う
1838.7.8	4人の十二使徒が新たに召され、什分の一の律法が示される

**預**言者とほかの教会指導者は、1838年1月にカートランドを離れた。ほかのほとんどの会員も同じ年に預言者の後を追っている。カートランドを放棄するとの公式の決定はなされなかったものの、教会の焦点がカートランドからミズーリ州北部に移ったことは明らかであった。恐らく1831年に授けられた啓示を思い起こしていた教会員もいたであろう。「主なるわたしは、五年の間、カートランドの地に一つのとりでを保持したいからである。」(教義と聖約64:21) 1838年初めにはカートランドの栄光の日々はすでに過去のものとなっていた。ミズーリ北部の教会員が新たな本部となるファーウェストの町を建設していたからである。アメリカ合衆国やカナダに点在していたほかの教会員もファーウェストへの集合の準備をしていた。末日聖徒は1837年という悲惨な背教の年の後で、平安の時期を見いだしたいと切望していたのである。

## クレイ郡からの退去要請

1833年末のジャクソン郡からの追放の後で、ミズーリの聖徒たちはクレイ郡の住民と比較的平穩に生活していた。しかし、教会の指導者はクレイ郡での滞在を決して永続的なものとは考えておらず、政府当局に再三にわたりジャクソン郡への帰還と財産の奪回への援助を嘆願していた。しかし、彼らのそうした努力はまったく実らなかった。そうした間にも末日聖徒の流入は続き、クレイ郡の住民の中にはモルモンの滞在が恒久的なものになるのではとの懸念が生じ始めた。

こうした懸念を察知したエドワード・パートリッジ監督とウィリアム・W・フェルプスは、1836年春に探検の旅を2度行い、「ファーウェスト(西の果て)」として知られたミズーリ州北部にモルモンの定住候補地を探した。この地域はほとんどが平原で背の高い草で覆われ、川に沿ってだけ木がある所であった。当時は、入植に適した土地は木々の多い所とされていた。W・W・フェルプスは「州の北の境の木が茂った所にはすでに人が住んでいる」と報告している。しかし兄弟たちはレイ郡の北部のショール川に沿って未開の地を発見した。ただし、大人数を住まわせるには木の数が少なかった。<sup>1</sup> それでも幹部の兄弟たちは5月3日にショール川沿いの土地の購入を開始した。

1836年6月29日、クレイ郡リパティエーの郡庁舎でモルモンのクレイ郡への残留に反対するための大集会が開かれた。住民の中にはこの「危機」が住民を分裂させる戦闘にまで発展することを恐れる人々がいた。反対者がモルモンの残留を拒否する理由として挙げたのは、次の5つである。(1) 聖徒たちは貧しい。(2) 彼らの宗教上の相違点は偏見を生む。(3) 彼らの東部の習慣や方言はミズーリ住民にはなじまない。(4) 彼らは奴隷制度に反対している。(5) 彼らはインディアンが神に選ばれた人々

## 時満ちる時代の教会歴史

であって、モルモンの人々とともにミズーリの地を受け継ぐことになるかと信じている。住民たちはまた聖徒たちに郡を離れるように嘆願し、北の自由州であるウィスコンシン州に移れば定住地がたくさんあると提案した。クレイ郡の指導者たちは、聖徒たちが郡を離れるまで暴動が起こらないようにすることを約束した。

教会指導者はすぐにショールクリークに移動することになると考えていたので、平和の誓約を伴う嘆願に対して異を唱える理由は何もなかった。そして7月1日に公の集会を開き、回答の作成を行った。その決議案は承認され、クレイ郡の住民により聖徒たちに示された厚意と、危機に対する彼らの平和的な解決への要望に対して謝意が表明された。そして教会の指導者たちは、聖徒たちの州外への移動の指揮を執るとともに、クレイ郡への流入を止めることを約束した。翌日、クレイ郡の指導者はその回答を受理し、聖徒たちの移転を援助するための委員会が組織された。

オハイオでは、この展開を知った大管長会が教会指導者とクレイ郡の委員会の両方に別個に書簡を送っている。彼らは教会員への書簡で、争いを起こさないようにすること、しかしウィスコンシンに移住することはないように、と勧告している。また、クレイ郡の委員会への書簡には、大管長会が聖徒たちに流血の事態を避けて速やかに郡を出るように勧めたことが書かれていた。

7月7日、ミズーリの教会指導者はダニエル・ダンクリン知事に、レイ郡北部に購入した1,600エーカー（約650ヘクタール）の土地に移転することを知らせる書簡を送り、暴徒が集結するようであれば解散させてくれるように依頼した。1836年において、「モルモンの問題」は1833年から1834年のときほど政治的に重要な問題ではなくなっており、また知事も選挙の年を迎えていたこともあって、聖徒たちを援助しようという方向には傾かなかった。さらに、レイ郡の選挙民の多くが、未開の北部地域であっても聖徒たちの転入に反対していた。ダンクリン知事は7月18日付けの返事で、聖徒たちの窮状には同情を禁じ得ないものの、「一般市民の感情や意見が律法さえ超越する可能性があり、一人の人間もしくは複数の人間から成る組織が一般市民から排斥を受けるほどその感情を逆なでした場合、それに対抗することは無益なこと」と書いている。

「……あなたがたが行動と論理をもって彼ら〔ミズーリ住民〕を説得できないかぎり、結果は同じでしょう。これができなければ、わたしが言えることは、民の声は神の声であるということだけです。」<sup>2</sup>

## コールドウェル郡の創立とファーウェストの設立

聖徒たちは重大な危機を迎えていた。知事からの保護も得られず、クレイ、レイ両郡からも敵視された状態の中、ステーク会長会と高等評議会は7月25日、緊急の会合を開いた。そして事態をさらに複雑にしたのは、移って来た約100の家族がレイ郡南部のクルックト川沿いに野営していることが判明したことである。多くが病気にかかっており、食糧も土地も購入できない人がほとんどであった。レイ郡の住民は、郡から出なければ力づくでも追い出すと脅迫した。さらに新たに100の貧しい家族が、ミシシッピ川からレイ郡に向かっていった。そこで教会指導者は、「暴力と混乱、疫病と死を回避するため」住民の間に紛れて仮の住まいと仕事を見つけるように指示した。ケンタッキーからの改宗者であるトーマス・B・マーシュとエライシャ・H・グ

## ミズーリ北部の教会，1836 - 1838年

ローブズは、ほかの州の支部を回って募金をするように命じられた。「血を流している貧しいシオンを支援する」ためである。またW・W・フェルプス、ジョン・ホイットマー、エドワード・パートリッジ、アイザック・モーリー、ジョン・コリルは、移住のための土地を確保する責任を割り当てられた。<sup>3</sup>

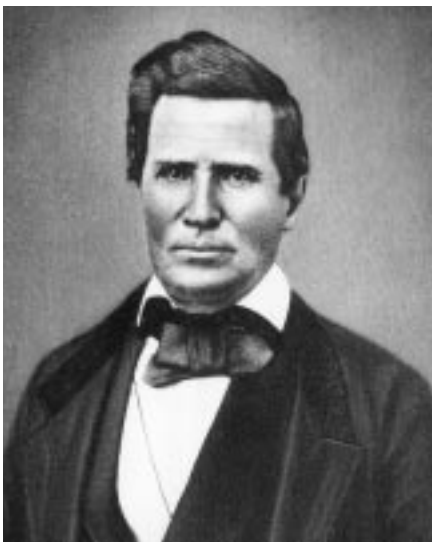
さらに教会指導者はレイ郡の住民に、聖徒たちの一時的な滞在地は北部の平原地帯のみであり、そこに新たな郡を創設する申請を行うことを話し、それは直ちに了承された。また境界線の両側に3マイル（約5キロ）ずつ合計6マイル（約10キロ）の緩衝地帯を設け、「立入禁止区域」としてモルモンもモルモンではない人々も居住しないとの提案が出され、それも了承された。

その間、8月の初旬にW・W・フェルプスとジョン・ホイットマーはレイ郡の北部に町を建設する場所を特定、ファーウェストと名付けた。その地点は1年前にジェーコブ・ハウグがショール川のほとりに築いた小さな居留地ハウズミルから西へ12マイル（約20キロ）西方で、聖徒たちはその年の夏の終わりから秋にかけて流入、間もなくファーウェストを中心にたくさんの移住地ができ始めた。

聖徒たちに友好的であった州議会議員アレクサンダー・W・ドニファンは、1836年12月の州議会にレイ郡北部の人口散在地域に新しい二つの郡を設立するとの議案を提出した。その二つの郡は、ドニファンが生まれ育ったケンタッキーの有名な二人のインディアン闘士にちなんで、デイビーズ郡、コールドウェル郡と名付けられた。そしてファーウェストとショールクリーク定住地が所在するコールドウェル郡はモルモン占有地となり、州議会に代表を送る権利を与えられることとなった。この末日聖徒の分離策は「モルモン問題」に対する優れた解決方法と見なされた。新任の知事リルバーン・W・ボグズが議案に署名し、1836年12月29日、二つの新しい郡が創設された。

こうして聖徒たちはコールドウェル郡に移住し、丸太小屋を建て、春の種まきのために開墾を始めていたが、ここで内部的な問題が頭をもたげ始めていた。1837年初旬、ケンタッキーとテネシーでの募金活動から戻ったトーマス・B・マーシュとエライシャ・グローブズが、集めた1,450ドルをステーク副会長であるW・W・フェルプスとジョン・ホイットマーに託した。会長のデビッド・ホイットマーがオハイオに行っていて不在だったからである。ところがこの二人の副会長はそのお金を用いて自分たちの名前で土地を買い、それを聖徒たちに転売して少額の利益を自分たちのものにしていた。そこで何人かの教会員が直ちに抗議し、さらに高等評議会のメンバーの中には、ファーウェストに関する事柄について、高等評議会に何の相談もないままに副会長たちが決定をしていることに不満を述べる者が出てきた。二人の副会長はファーウェストで4月に行われた数回に及ぶ会合で自らの非を認め、和解が成立している。そして、ステーク会長会、高等評議会、それにミズーリ在住の二人の使徒、トーマス・B・マーシュとデビッド・パッテンの援助の下、エドワード・パートリッジ監督が代理として土地の分配を行うこととなった。

しかしそれから1か月後、フェルプスとホイットマーは土地の件で再び利益を得ようとして、高等評議会と使徒たちの心証を害してしまう。このことを知った預言者は主に導きを求め、次のような言葉を得た。「まことに主はわたしの僕であるジョセフに言う。わたしの僕であるジョン・ホイットマーとウィリアム・W・フェルプス



アレクサンダー・W・ドニファン（1808 - 1887年）はケンタッキーの生まれ。18歳でケンタッキーのオーガスタ大学を卒業。後に法律を学び、オハイオとミズーリでの法律活動の資格を得る。

1837年12月21日、エリザベス・ジェーン・ソートンと結婚して二人の息子をもうけたが、二人とも若くして亡くした。アレクサンダー・W・ドニファンはミズーリ州リッチモンドで死去。長年住み慣れたリパティエの町に埋葬された。

## 時満ちる時代の教会歴史

はわたしの目から見て好ましくないことを行っただけで、悔い改めなければその地位から取り除かれなければならない。」<sup>4</sup>しかしながら、この問題は1837年11月まで後を引くことになる。

さて、1837年9月17日のカートランドでの大会で、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンをミズーリに派遣し、シオンのステーキの候補地を探す決定がなされた。「貧しい人々が避難の場所を得る」<sup>5</sup>ことができるようにするためである。また大会の後に、ニューエル・K・ホイットニー監督がアメリカ合衆国に散在する教会の支部に手紙を送り、カートランドの救済とミズーリでのシオンの建設のために什分の一を金銀で送るよう求めた。

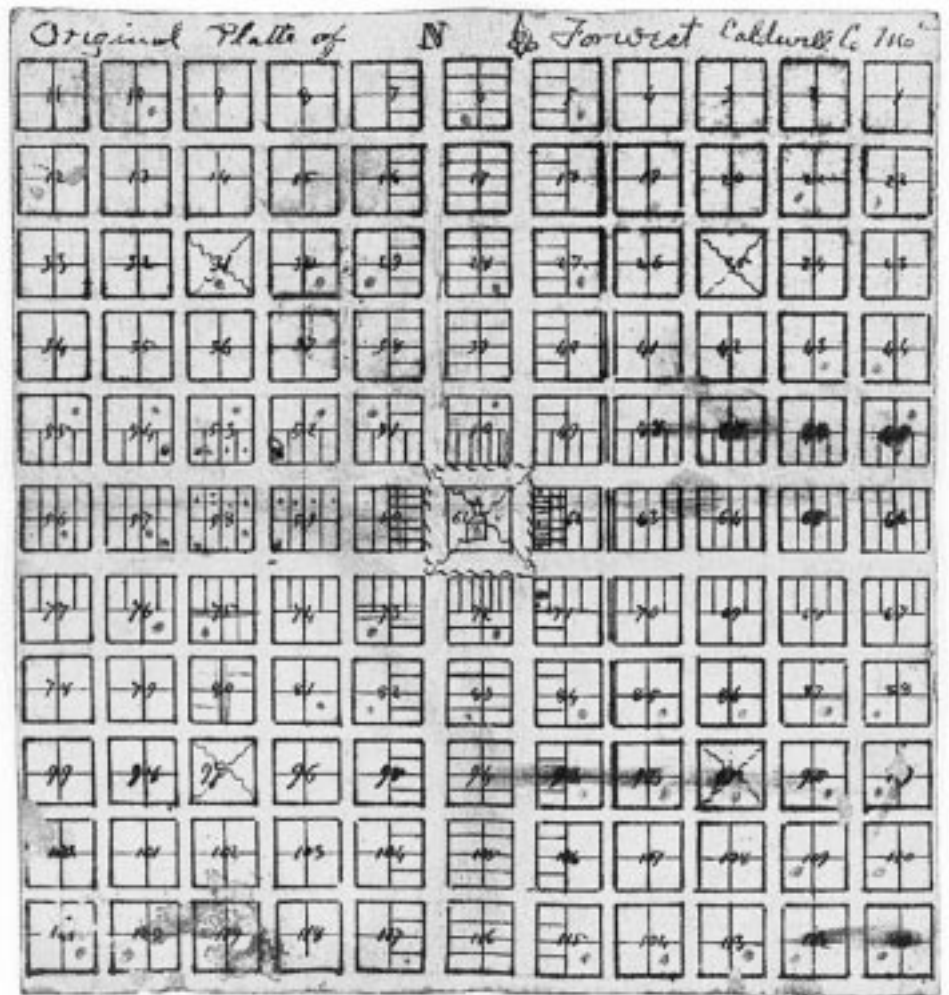
預言者と数人の幹部の兄弟たちがファーウェストに到着したのは11月初旬で、彼らは約10日間滞在し、集会を開いた。そして、ミズーリ州北部には聖徒たちの集合のための資源も土地もあると判断、新たなステーキの場所を特定するための委員会が選任された。また、ファーウェストでの神殿の建設は、主からのさらなる指示があるまで延期されることになった。しかし、ファーウェストの町の規模は1平方マイル（約1.6平方キロ）から2平方マイル（約3.2平方キロ）に拡張されている。ミズーリでのステーキ会長会の不祥事に関する問題は一時的な解決を見、ステーキ会長会は支持を受けた。しかし、1837年11月7日にファーウェストで行われた長老の大会では、フレデリック・G・ウィリアムズが第二副管長を続けることを参加者から拒否され、代わりにハイラム・スミスが支持されている。

そして冬の期間、ミズーリのステーキ会長会と高等評議会の間には新たな亀裂が生じた。カートランドで預言者と意見を異にしたフレデリック・G・ウィリアムズとオリバー・カウドリがファーウェストに移り、ステーキ会長会を抱き込んでジャクソン郡の土地を自分たちの名義で販売することに決めたのである。シオンの土地を売却することは、ジャクソン郡の土地についてはそのままにしておくようにとの主の指示に背くものであった（教義と聖約101：99参照）。

1838年2月初旬、高等評議会はジョン・ホイットマーとW・W・フェルプスを教会基金の濫用で、またデビッド・ホイットマーを故意による知恵の言葉への違背で審問した。高等評議会にはステーキ会長会を審問する権限はないのではないかと意見も多少あったが、過半数がステーキ会長会の更迭を支持、この決定が各支部に通達されて了承された。これに対して3人は、審問が不当なものであり、自分たちは弁護の場を与えられなかったと主張した。そこで高等評議会は、3人が正式に更迭されたにもかかわらず「いまだに正式なステーキ会長会だとして教会員をだましている」ことを確信したので<sup>6</sup>、2月10日に二人の使徒の援助を得てW・W・フェルプスとジョン・ホイットマーを破門し、トーマス・B・マーシュとデビッド・W・パッテンをジョセフ・スミスが到着するまでの代理の会長として支持した。デビッド・ホイットマー、オリバー・カウドリ、それに反対者のグループに加わった使徒であるライマン・ジョンソンへの処分は預言者ジョセフ・スミスの到着を待って行われることになった。

ジョセフ・スミスへの手紙の中でマーシュ長老はこう書いている。「この処置を行っていないければ、高等評議会全体と監督に対する反逆を食い止められるものは何もなかったと思われます。ステーキ会長会への不満はあまりにも大きく、人々は皆彼

羊の皮に描かれたファーウェストの区画



この皮の所有者 J・B・ウェスト氏と復元元白聖徒イエス・キリスト教会の厚意により掲載

らに対して疑いを抱き、権能を持つ人々は彼らを不本意ながらも支持することになっていったと思います。そうなれば教会は程なく羊飼いのいない羊のように、人々が勝手な方向に散り散りになってしまうのです。』

### 預言者、ファーウェストに定住する

当時、預言者ジョセフ・スミスはまだオハイオにいた。彼はミズーリの教会への迫害の様子や不安定な内部状況を耳にして心を痛めた。1838年1月12日、預言者はステークを組織できるのは大管長会だけであるとの啓示を受けた。<sup>8</sup> つまり、ファーウェストステークの設立は無効であるという意味である。そこで彼はミズーリに向かったが、これには敵の手を逃れるためだけでなく、ファーウェストの教会の秩序を回復するという使命も含まれていたのである。旅は困難なものであったが、ジョセフと妊娠6か月のエマが3月にミズーリに到着すると、大勢の聖徒たちが二人を出迎え、ファーウェストまで同行した。そしてファーウェストから8マイル（約13キロ）の所でまた別の出迎えを受け、二人は喜びを覚えた。東部であまりにも多くの困難に直面していた預言者にとって、ミズーリの聖徒たちの支えは大変な励みであった。また聖徒たちにとっても、預言者が自分たちとともに生活することは喜びであった。

## 時満ちる時代の教会歴史

ファーウェスト滞在中、預言者はステーク会長会の更迭を承認し、3月末ごろにはカートランドの背教者から手紙が何通か届き、少数の者たちの間に偽りが広まったが、彼はファーウェストでの人々の心に一致がはぐくまれると肯定的に考えていた。ジョセフはカートランドにこう書き送っている。「平安と愛が満ちあふれています。一言で言えば、天はコールドウェル郡の聖徒たちにほほえみを投げかけておられます。」<sup>9</sup>そして4月総大会の2日前、シドニー・リグドンの一行が長く困難な旅の末にファーウェストに到着し、聖徒たちを喜ばせた。

大会において預言者は3人の前任使徒であるトーマス・B・マーシュ、デビッド・W・パッテン、ブリガム・ヤングをミズーリの新たなステーク会長会として召した。しかしこれは一時的な措置であった。9日後ジョセフは、パッテン長老は諸事をまとめて、十二使徒会のほかのメンバーとともに外国に伝道に行くようにとの啓示を受けたのである（教義と聖約114章参照）。出発は1839年春の予定であった。後の集会においてデビッド・パッテンは十二使徒会の兄弟たちの現況を検討している。全員がミズーリにいたわけではないが、彼はその中の6人を「神の人」として褒めているものの、「ウィリアム・スミス……ウィリアム・マクレラン、ルーク・S・ジョンソン、ライマン・E・ジョンソン、ジョン・F・ポイントンには疑いの目を向け、大会に集まった人々に彼らを推薦することはできない」<sup>10</sup>と語っている。具体的には、そのうちの4人の更迭をしなければならない状況であった。そして4月7日と8日の集会で、ミズーリの教会に秩序を回復するための追加の措置が講じられている。

大会の後、新しく召されたステーク会長会は背教した前の指導者たちの事後処理を開始し、教会歴史記録者でありミズーリにおけるステーク会長会の一員であったジョン・ホイットマーに彼の書いた歴史記録や教会あて文書の返却を求めたが、ジョンはそれに応じなかった。彼の歴史記録のすべてが出版されたのはごく最近の出来事である。

それ以上にはるかに深刻なのがオリバー・カウドリのケースである。彼は数々の事柄で高等評議会から訴えられた。厄介な訴訟により教会指導者を迫害したこと、ジョセフ・スミス的人格を傷つけたこと、実務的な事柄について指導者に従わなかったこと、ジャクソン郡の土地を売却したこと、大管長補佐の召しを離れて法律業に身を転じたことである。オリバーは高等評議会への出席を拒み、手紙で返答している。彼は教会が私事にまで命令を下す権利はないと主張、教会とのつながりを絶つことを要求してきた。そこで高等評議会は1838年4月12日に彼を破門に処した。オリバーは10年間教会の外で生活したが、後にへりくだり、1848年10月にアイオワ州ケーンズビルで再加入のバプテスマを受けている。

高等評議会はまた、『モルモン書』のもう一人の証人であるデビッド・ホイットマーをも破門した。過度に権力を行使したこと、預言者に異議を唱える手紙を背教者に送ったこと、知恵の言葉を破ったことがその理由である。デビッドは二度と教会に戻ることはなかったが、天使と金版を見たという証は生涯変わることがなかった。十二使徒のライマン・ジョンソンも同じ時期に破門されている。初期の時代のこうした指導者たちの破門は教会にとって痛手ではあったが、指導者たちは教会の肅正を図ることが必要であると感じたのである。

1838年4月の後半、預言者はファーウェストの建設について啓示を受けた。その啓

## ミズーリ北部の教会，1836 - 1838年

示は、まず初めに教会の正式名称を「末日聖徒イエス・キリスト教会」と指定している（教義と聖約115：4）。これにより、名称の問題に決着がついた。それまで教会は、キリストの教会、末日聖徒教会、末日聖徒キリスト教会などと呼ばれていたからである。主はまた神殿の建設も命じられた。「ファーウェストの町を、わたしのために聖なる聖別された地としなさい。それを最も聖なる地と呼ばなければならない。あなたが立っている地は聖なる地だからである。」（7節）しかし大管長会は、この神殿についてはカートランドのときのような借財を行ってはならないと言われた。さらに、周辺の地区にステーキを設立するように命じられている。これは「シオンの地とそのステーキに集合することが、防御のためとなり、また嵐と激しい怒りが全地にありのままに注がれるときに、その避け所となるためである。」（6節）

預言者はそれからの3週間を、コールドウェル郡の聖徒たちのもとを訪れて福音の原則を教えることに費やした。次いで預言者は、シドニー・リグドンの援助を得て教会歴史をその始まりから記すという意欲的な仕事に取り組んでいる。初代の教会歴史記録者であるジョン・ホイットマーが書いた歴史は完結しておらず、しかも入手できなかったからである。現在『高価な真珠』に収められているジョセフ・スミスの歴史と回復の初期の出来事は、1838年4月に始まったこのプロジェクトの成果である。

## ミズーリ州北部の拡大

コールドウェル郡の教会の諸事をまとめた預言者ジョセフ・スミスは、1838年の春と夏にミズーリにやって来るオハイオとほかの東部のステーキの聖徒たちのための定住地の確保に乗り出した。1837年にはコールドウェル郡の北に新たに設立されたデイビーズ郡に少数の聖徒たちが入植していた。これは、彼らが「異邦人」の住民から許可を得ることを条件に入植できるとの紳士協定を守って行われたことであった。デイビーズ郡に入植した最も著名な人物はライマン・ホワイトで、グランド川を見わたす美しい丘のそばに、ホワイト入植地を切り開いた。

1838年5月中旬、ジョセフ・スミス一行は踏査のため北方に向かう。そしてグランド川のホワイトの渡し場に到着した預言者は、その地に町を建設するため、計画図を作るよう命じた。彼はまた、この地がアダム・オンダイ・アーマンの地であるとの啓示を受けた。1835年に下された啓示の中で主は、アダムが亡くなる3年前に義にかなった子孫を「アダム・オンダイ・アーマンの谷に呼び集め、そこで彼らに最後の祝福を授けた。」（教義と聖約107：53。78：15 - 16も参照）オーソン・プラットはその名前の意味を「アダムが住んだ神の谷の意味であり、アダムが話したもとの言語である」<sup>11</sup>と語っている。アダム・オンダイ・アーマンはまた、救い主を迎える選ばれた義にかなった人々が非常に重要な集会を開く場所となる。啓示の言葉にはこうある。「そこはアダムがその民を訪れるために来る場所、すなわち預言者ダニエルによって述べられたように日の老いたる者が座する場所だからである。」（教義と聖約116：1）この知識は兄弟たちにとって大きな喜びを与えるところとなり、彼らはアダム・オンダイ・アーマンにステーキを設立することについて話し合った。

踏査に参加した人々は、水路を確保できるグランド川沿いの木々の生い茂った場所に幾つかの入植候補地を見つけた。こうして踏査を終えたジョセフ・スミスは、フ



## 時満ちる時代の教会歴史

アーウェストに戻ってエマの出産が近いことを知る。彼女は1838年6月2日に男の子を産み、アレクサンダー・ヘイル・スミスと名付けた。

程なくジョセフ・スミスはアダム・オンダイ・アーマンに戻り、その新しい町を調査するとともに家の建設に携わった。彼はその場所をまだオハイオにいるか、またはミズーリに向かっているカートランドからの聖徒たちの集合の場所に指定した。そしておじのジョン・スミスが家族とともにファーウェストに到着したとき、ジョセフはジョンにアダム・オンダイ・アーマンに入植するように勧めている。また、6月28日には「ダイ・アーマン」と略称されたその地で大会が開かれ、ジョン・スミスがステーク会長として支持された。ステーク副会長はレイノルズ・カフーンとライマン・ホワイトであった。高等評議会も組織された。そして、ニューエル・K・ホイ

アダム・オンダイ・アーマンにあるライマン・ホワイトの2番目の小屋。ライマン・ホワイトは1796年5月9日にニューヨーク州フェアフィールドで生まれ、1812年の戦争に参加した。

ライマンは1830年にオリバー・カウドリからバプテスマを受け、アダム・オンダイ・アーマンのステーク会長であるジョン・スミスの副会長として奉仕した。ライマンは1841年に使徒に聖任されたが、不従順により1848年に教会員としての資格を失った。



ットニーがカートランドから到着するまでの間、ピンソン・ナイトが代理の監督として召されている（教義と聖約117：11参照）。

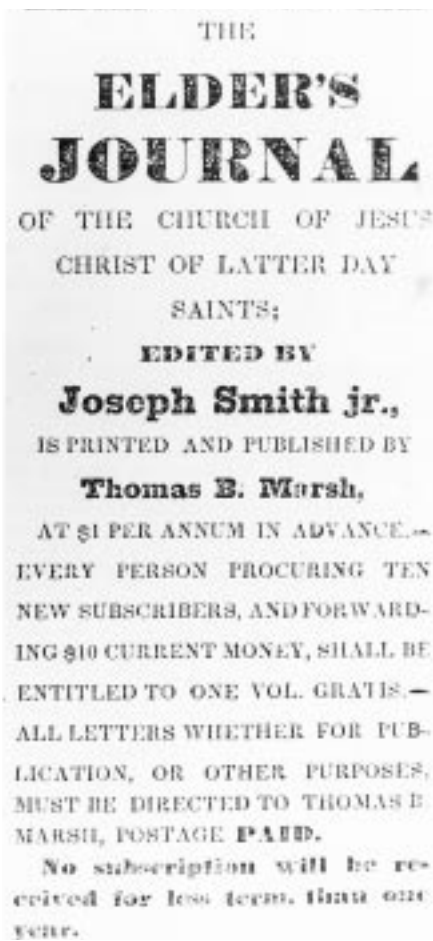
1838年の夏、末日聖徒の入植者は引きも切らずアダム・オンダイ・アーマンにやって来た。彼らは、アダムが住んだ地に住めることを大きな祝福であると感じていた。

『エルダースジャーナル』(Elders' Journal)の8月号の一つの記事には彼らの興奮ぶりが描かれている。

「このおびたしい数の入植は……聖徒たちに力を与え、神が古代の預言者を通して語られた不思議な業の行われる日が近いことを、わたしたちに確信させてくれる。

とうもろこしやほかの作物の驚くべき実りは、この季節にはまったく予期しなかったことで、これは我々のこの時代の教会の発展と共通している。もしも神が今その手を置かれているように続けて祝福を注いでくださるならば、程なく余剰が出るであろう。」<sup>12</sup>確かに、その秋の豊かな実りは、10月初旬にミズーリに到着しダイ・アーマンに入植したカートランドの陣営の貧しい聖徒たちを養った。

ダイ・アーマンへの入植が行われた同じころ、聖徒たちは独自でグランド川がミズーリ川に流入する近くのキャロル郡のデウィットに入植地を築き始めた。これは教



迫害により、オハイオ州カートランドでこの『エルダースジャーナル』(Elders' Journal)が発行されたのは、1837年の2回だけだった。その後ファーウェストに移り、また2回発行された。最終号は1838年8月号である。



会にとって好都合であった。そこに築かれた渡し場を利用して、聖徒たちがほかの末日聖徒の入植地から移動して来ることができるようになったからである。ファーウェスト高等評議会のジョン・マードックとジョージ・M・ヒンクルはデウィットに土地を購入して正式に入植する許可を得た。こうしてデウィットは急速に発展し、カナダからの聖徒たちが大量にやって来た秋には家屋が足りなくなり、デウィットの町はテント生活者の町の様相を呈した。

当時、最も繁栄を見た末日聖徒の入植地はファーウェストであった。1838年夏のコールドウェル郡の人口は5,000人に達し、その半数がファーウェストに住んでいた。聖徒たちは150以上の家と4軒の布地店、3軒の食料品店、かじ屋を数軒、ホテルを2軒、印刷所を1軒、それに教会と裁判所としても用いられた大きな学校を1軒建てた。<sup>13</sup>

聖徒たちは作物の植え付けや丸木の家の建設に忙しく働いたが、働きを休んで神を礼拝し聖文を学ぶことも忘れなかった。夫のチャールズとともにファーウェストから4マイル(約6.5キロ)の「心地よく幸せな」丸木小屋に移り住んだ24歳のサラ・リッチは、「すべての面で宗教が最優先だった」と語る。二人は毎週日曜日になると馬にまたがり、町に行って集会に出席した。彼らはこう書いている。「預言者ジョセフ・スミスが人々に教えを説き、指示を与えるのをよく耳にした。それはわたしたちにとって特権であった。」<sup>14</sup>

1838年の夏、預言者は十二使徒会の空席を補充するという重要な業に着手した。彼は十二使徒の責任について再確認するとともに、主の王国の財政について聖徒たちに勧告を与えている。当時教会全体には、十二使徒会の創立メンバーの4人を失ったことへの悲しみが広がっていた。エリザベス・バーローはこう回想する。「わたしたちはこれまでの試練や迫害以上に、使徒の教会からの離反を悲しく思った。」<sup>15</sup>

そうした悲しみの中で、ジョセフは4人の使徒の補充に着手した。彼らを全世界に福音をもたらす業のために備えさせるためである。1837年秋、ジョセフはファーウェストに出発する前にトロントからの屈強の改宗者、ジョン・テラーに、将来彼が使徒に召されることを告げていた。<sup>16</sup> しかし、そのときは彼の名を教会員の前に提示して支持を得ていなかった。翌年7月、預言者は祈った。「主よ、十二使徒についてあなたの御心をお示ください。」<sup>17</sup> その祈りの後に下された啓示は、教会歴史に非常に大きな影響を与えることになる。主はまずこう命じられた。「人々を任命して、墮落した者たちの職を満たしなさい。」(教義と聖約118:1) 召されたのは、ジョン・テラー、ジョン・E・ページ、ウィルフォード・ウッドラフ、ウィラード・リチャーズであった。

2年間カナダで宣教師として働いたジョン・E・ページ長老は、5,000マイル(約8,000キロ)以上を旅し、600人以上の改宗者を得た。この啓示が下されたとき、彼は

## 時満ちる時代の教会歴史

カナダからの聖徒とともにミズーリに向かう途中であった。彼らは10月にデウィットに着き、テラー、ページ両長老は1838年12月19日、ファーウェストでブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールから使徒への聖任を受けた。ウッドラフ長老はメイン州での伝道の最中に、手紙で召しの知らせを受けた。彼はニューイングランドからの改宗者を引き連れてミズーリに向かったが、到着前に聖徒たちがミズーリから追放されたため、イリノイにとどまった。したがって、彼がファーウェストで使徒への聖任を受けたのは1839年4月26日で、その時点で彼はファーウェストにいた十二使徒を伴い、イギリスへの伝道に旅立った。十二使徒はファーウェストからイギリスに向けて伝道の旅に出るようという戒めを成就するためである（教義と聖約118：4-5参照）。リチャーズ長老はイギリスでの改宗者で、イギリスで宣教師ならびに神権指導者として働いていたため、使徒としての聖任を受けたのは十二使徒たちがイギリスに着いた1840年のことであった。

使徒に関する啓示には、ファーウェストにおいて（『エルダーズジャーナル』に）引き続き主の言葉を掲載するようとのトーマス・B・マーシュへの指示、またほかの使徒への「へりくだった心で、柔和と謙遜と寛容をもって」福音を宣べ伝えるようとの指示が含まれていた（3節）。主はさらに使徒たちに、1839年4月26日に「大海を越えて行き、そこでわたしの福音、すなわち完全な福音を広め」るように命じておられる（4節）。

使徒への啓示が下された日、ジョセフ・スミスは教会の収入に関する二つの啓示を聖徒たちに読み聞かせている。教会が経済的に大変な苦境に陥っていた当時、預言者は奉獻の律法の適用について明らかにしてくださるよう主に求めていた。主は1831年にお授けになった律法に修正を加え、こう宣言された。

「わたしは、彼らの剰余の財産をすべてシオンにおけるわたしの教会の監督の手にゆだねることを求める。

それは、わたしの家を建てるため、シオンの基を据えるため、神権のため、またわたしの教会の大管長会の負債のためである。

これがわたしの民の納める什分の一の始まりとなる。

その後、このように什分の一を納めた者は、毎年彼らの得る全利益の十分の一を納めるのである。そして、これはわたしの聖なる神権のために、とこしえに彼らにとつての永続的な律法となる……。」（教義と聖約119：1-4）2番目の啓示は、什分の一の配分についての責任を中央幹部による委員会にゆだねるものであった（教義と聖約120章参照）。

ミズーリ州北部の聖徒たちは楽観的ではあったものの、不安を抱いて当然の理由があった。7年もの間迫害と造反を経験した彼らは、ファーウェストに住む離反者に対してこれ以上我慢できない状況にまで来ていた。離反者たちは教会員に対して訴訟を起こして嫌がらせをし、教会の指導者を非難した。6月、シドニー・リグドンは「塩の説教」として一般に知られる熱烈な説教を浴びせかけた。彼がテーマに用いたのは次の聖句である。「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら……もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。」（マタイ5：13）この意味は、離反者は聖徒たちの中から追放されるべきであるということである。

## ミズーリ北部の教会，1836 - 1838年

それから間もなく，正式な承認を得ていない文書が登場した。オリバー・カウドリ，デビッド・ホイットマー，ジョン・ホイットマー，W・W・フェルプス，ライマン・E・ジョンソンら名の通った離反者あてのもので，84人の教会員の署名入りで，背教者に郡を出ることを命じ，従わなければ重大な結果を招くと通告するものであった。シドニー・リグドンの説教とこの文書は功を奏し，離反者はすぐに郡外に逃れ，家族がその後を追った。しかし，少数の者たちによるこの極端な行動は一部の教会員の間には不安をかき立て，不満が生じた。最悪なことに，ミズーリ州北部の反モルモンによる敵対感情に油を注ぐことになったのである。

ミズーリ住民との間の抗争に拍車をかけたもう一つのことは， Sampson・アバードの「ダナイツ」という秘密地下組織の結成である。これは誓約の下に暗号や秘密の警告の記号などを用いて行動するグループで，アバードは部下たちに，教会の敵に対して強奪や虚言，必要であれば殺人をもって攻撃することを大管長会から承認されていると信じ込ませた。このダナイツの物理的・心理的攻撃は敵対感情を高揚させ，ミズーリ当局にジョセフ・スミスとほかの指導者を州法違反容疑で起訴する口実を与えてしまう。

また，シドニー・リグドンの1838年の独立記念日の説教は，モルモンと住民との間の抗争にさらに油を注いだ。ファーウェストの聖徒たちが合衆国の誕生を祝い，神殿の定礎式を行った席で，シドニー・リグドンの雄弁な語り口が聖徒たちを高揚させてしまったのである。彼は雷のような声で，聖徒たちがこれ以上暴徒の暴力や不法行為は受けないことを宣言するとともに，暴力行為に出ようとする者たちに対して，教会はこれ以上おとなしく迫害に耐えることはせず，死んでも自分たちを守ると警告した。「彼らと我々との間の戦いはどちらかが絶滅するまでの戦いとなるでしょう。なぜなら彼らの血の最後の一滴がしたたり落ちるまで，我々は戦うからです。でなければ，彼らが我々を滅ぼすかどちらかでしょう。」<sup>18</sup>この怒りに満ちた説教は愚かにも出版され，配布された。そして数部がミズーリ州当局の手に渡ったため，やがて聖徒たちが騒乱罪で起訴される土壌が形成されていくのである。

このようにして，恐るべき抗争と人命ならびに財産の損失への舞台が整った。聖徒たちは平安を見いだす前に，また別の「精錬する者の火」をくぐり抜けなければならなかったのである。

## 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』2: 445で引用

2. 『教会歴史』2: 462で引用

3. *Far West Record: Minutes of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1830 - 1844* 『ファーウェスト記録 末日聖徒イエス・キリスト教会議事録, 1830 - 1844年』ドナルド・Q・キャノン，リンドン・W・クック編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983), 105

4. 『教会歴史』2: 511

5. 『教会歴史』2: 516で引用

6. 『教会歴史』3: 7で引用

7. *Elders' Journal* 『エルダースジャーナル』1838年7月号, 45

8. "The Scriptorium Book of Joseph Smith" 『ジョセフ・スミス聖文集』末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー, 52 - 53参照

9. 『教会歴史』3: 11

10. 『教会歴史』3: 14で引用

11. *Journal of Discourses* 『説教集』18: 343. ブルース・R・マッコンキー, *Mormon Doctrine* 『モルモンの教義』(Salt Lake City:

## 時満ちる時代の教会歴史

Bookcraft, 1966), 19 - 21も参照

12. 『エルダースジャーナル』1838年8月号, 52

13. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 1: 425

14. サラ・ディアーマン・ピー・リッチ, 自筆の自叙伝, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ, 36; ケネス・W・ゴドフリー, オードリー・M・ゴドフリー, ジル・マルベイ・ダー, *Women's Voices* 『女性の声』 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1982), 98

15. エリザベス・ヘーベン・パーロー "Mother of Eight" 『8人の母』。 *Our Pioneer*

*Heritage* 『わたしたちの開拓者の伝統』全19巻, ケート・B・カーター編 (Salt Lake City: Daughters of Utah Pioneers, 1967 - 76), 19: 321で引用; レオナード・J・アーリントン, スーザン・アーリントン・マドセン, *Sunbonnet Sisters* 『日よけ帽の姉妹たち』 (Salt Lake City: Bookcraft, 1984), 24

16. B・H・ロバーツ, *The Life of John Taylor* 『ジョン・テラーの生涯』 (Salt Lake City: Bookcraft, 1963), 47参照

17. 『教会歴史』3: 46

18. *Oration Delivered by Mr. S. Rigdon on the 4th of July 1838* 『1838年7月4日にシドニー・リグドン氏が行った演説』 (Far West: Journal Office, 1838), 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ, 12

# ミズーリでの迫害と追放

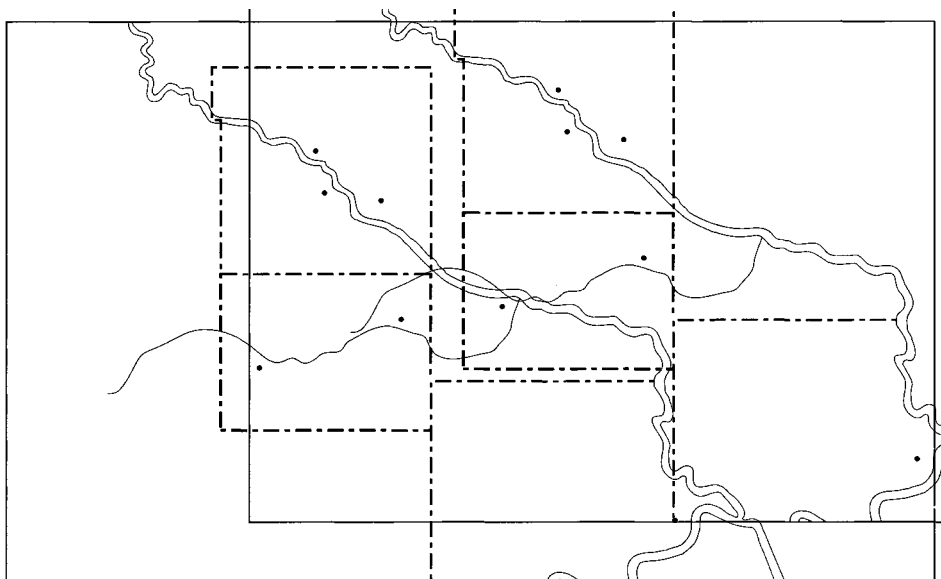
年表	
年代	重要な出来事
1838.8.6	ガラティンでの投票日の抗争
1838.9.7	ジョセフ・スミスとライマン・ ワイト, オースティン・キング 判事のもとで裁判を受ける
1838.10.1-7	デウィットの戦い
1838.10.18-19	デイビーズ郡でのゲリラ戦
1838.10.25	クルックト川の戦い
1838.10.27	ボッグズ知事の「撲滅令」
1838.10.30	ハウズミルの虐殺
1838.10.30	ファーウエストの包囲
11.6	

**猛** 暑の1838年夏、末日聖徒とミズーリ州北部の住民との間の関係は急速に悪化していった。東部での伝道活動から帰還した後、5月にファーウエストに到着したパーリー・P・プラットは、1838年7月の状況を次のように記している。「戦いの暗雲が脅威となって再び低く垂れ込めていた。隣接する郡の法律に反して集結した者たちが、我々の力の増大と繁栄をねたみをもって、また貪欲な目で見ていた。彼らが口をそろえて豪語していたことは、我々の開拓事業が一段落し、豊かな収穫を迎えたところで我々を州から追放し、その略奪した物で自分たちを豊かにするということであった。』こうした理由にほかの事情もからんで暴動が起こり、教会全体がミズーリ州から追放されるという結果を招いたのであった。

## ガラティンにおいて投票日に起こった闘争

1831年、後にデイビーズ郡となる地域にペニストンという名の家族が白人として初めて入植した。翌年、彼らはグランド川に水車を作り、入植して来る人々のために粉をひいた。こうして建設されたのがミルポートの村である。郡として設立された1836年には、まだわずか数百人のみの入植者であった。やがて郡の中心地としてガラティンの町が建設され発展を遂げるにつれて、3マイル（約5キロ）東のミルポートは衰退していった。1838年夏、聖徒たちはガラティンの4マイル（約6.5キロ）北のダイアーマンの町に移住して来た。そしてすぐにデイビーズ郡に住む地元住民の数を上回るようになった。

ミズーリ州北西部



## 時満ちる時代の教会歴史

1838年は選挙の年であった。当然のことながら、地元の住民は自分たちの中から州議会議員を出すことを望んでいた。彼らの候補者は教会に徹底して敵対するウィリアム・ペニストンであったが、彼はモルモンの急激な流入のために選挙に勝てないのではないかと恐れていた。なぜなら多くの教会員がジョン・ウィリアムズを支持していたからである。選挙の約2週間前、教会の二人の長老はミルポートのジョセフ・モリン判事から、暴徒がモルモンの投票を妨害するから用心するようにとの忠告を受ける。投票は8月6日月曜日にガラティンで行われるようになっていた。当時のガラティンは「家が10軒、しかもそのうち3軒は酒場」<sup>2</sup>が点在しているような所であった。

判事の予告が当たらないことを望みながら、大勢のモルモンの兄弟たちが何の備えもないままガラティンの投票所に向かった。午前11時、ウィリアム・ペニストンが、モルモンへの敵対感情をあおるため、投票に来た群衆に向かって演説を行った。「モルモンの指導者たちは馬どろぼうで、うそつきで、ぺてん師であります。御存じのように、彼らは病人を癒し、悪霊を追い出すと公言しております。そんなことがまやかしであることは、だれにも分かることです。」<sup>3</sup>当時西部では投票日によく一波乱あったが、ペニストンのアジ演説と、群衆の中にウィスキーを飲んで酔っていた者がいたために、一触即発の状態となった。そして、荒くれ者ディック・ウェルディングが聖徒の一人にパンチを食らわせ、失神させたことから、鬭争はもはや避けられないものとなった。数においては不利であったものの、モルモンの一人であるジョン・L・バトラーが近くにあった材木の山からかしの棒を取ると、自分でも驚くような力でミズーリ住民を攻撃した。ミズーリ住民も周囲にあった木切れなど手当たり次第の物で武装してこれに応戦、双方に数人の重傷者が出た。その日投票ができたモルモンはごく少数であったが、ペニストンはそれでも選挙に敗れた。

翌朝、この鬭争の報告が誇張された形でファーウェストの教会指導者のもとに届いた。8月8日水曜日、2、3人の死者が出たという知らせを聞いた大管長会と約20人の兄弟たちは直ちにデイビーズ郡に向かった。自衛のために武装した彼らは途中デイビーズ郡の各地で教会員と合流する。その中には投票日に暴徒から攻撃を受けた者もいた。こうしてその日の夕方にダイ・アーマンに到着した彼らは、死者は出ていないことを知り安堵している。

その地にいる間、預言者は幹部の兄弟たちとともに政治情勢を見極めることと同時に、郡の人々の不安を静めるため付近一帯を馬で回ることを決意した。彼らはまた、古くからの移住者も訪れたが、その中にデイビーズ郡裁判官に選出されたばかりのアダム・ブラック治安判事がいた。ブラックが反モルモンの活動を支援していたことを知っていた彼らは、公平に法を執行することと平和協定書への署名を彼に求めた。ジョセフ・スミスによれば、ブラックが暴徒との関係を断ち切ることを宣言した宣誓供述書に署名したので、彼らはアダム・オンダイ・アーマンへの帰途に就いた。<sup>4</sup> 翌日、モルモンとモルモンではない有力者による評議会が構成され、「互いの権利を尊重し、互いを擁護すること、また法を犯す者がいた場合、どちらもその者の肩を持ったりその者に手心を加えたりせず、法と正義によって裁かれるように手配する」という内容の平和協定を結んでいる。<sup>5</sup>

しかしこの親善の協定は24時間も続かなかった。8月10日、レイ郡リッチモンドに

## ミズーリでの迫害と追放

においてウィリアム・ペニストンが巡回判事オースティン・A・キングの前で、ジョセフ・スミスとライマン・ワイトが500人の軍隊を組織し、「デイビーズ郡の住民を皆殺しにする」と脅迫している、という宣誓供述書を作成したのである。<sup>6</sup> これを聞いたジョセフ・スミスは、ファーウェストの家で事の成り行きを静観していた。ジョセフがデイビーズ郡で裁判を受けるという条件であれば身柄を拘束されることもやぶさかでないと考えていることを知った保安官は、令状の執行を拒否、キング判事の指示を仰ぐためにリッチモンドに赴いた。

デイビーズ郡とキャロル郡では約2週間緊張状態が続いた。治安判事アダム・ブラックは、154人のモルモンが平和協定書に署名を強要したと偽りの主張をし、それに対して預言者は、ブラックの主張は「彼の真の姿、すなわち憎悪すべき無法のやからであり、偽証者であることを示すものである」<sup>7</sup>と応じている。ミズーリ州全体に流言飛語が飛び交い、モルモン反乱の偽りのうわさはリルバーン・W・ポッグズ知事の耳にも届いたため、住民間の抗争はもはや避けられない情勢であった。

## 抗争への舞台

9月に入って、預言者は情勢が悪化していることを考慮し、教会が取るべき方向性について次のように述べている。

「現在、ミズーリ住民との間には大きな感情の対立があります。彼らはわたしたちに対して闘いを仕掛けるきっかけをねらっています。手を替え品を替えて脅迫しながら、何とかわたしたちをいらだたせ、怒りをかき立てようとしているのです。でも、恐れるには及びません。永遠の父なる神はわたしたちの神であり、イエスはわたしたちの力と信頼の源であられるからです。……

……彼らの父である悪魔は、ひっきりなしに彼らに闘いをけしかけており、彼らは素直に従順な子供のように、次の指示を待つことなく進んで悪魔の意図に従うのです。でも、偉大なる神がわたしたちに勇気と強さと力という武器を与えてくださるならば、わたしたちはただ耐えるだけではなく、彼らの迫害に抵抗します。攻撃はしませんが、いつでも防御します。」<sup>8</sup>

翌日ジョセフ・スミスは、ミズーリ州軍のデビッド・アチソン陸軍少将とアレクサンダー・ドニファン准将に、デイビーズ郡での敵対感情を収拾するための意見を求めた。両者は1833年から1834年にかけてのジャクソン郡での事件のときに聖徒たちの弁護を担当してくれた人物であったが、それ以来教会に対して友好的な姿勢を崩していなかった。アチソン少将は暴徒の鎮圧のために軍司令官としてできる限りのことは行うと約束した。また二人は、ジョセフ・スミスとライマン・ワイトがデイビーズ郡での裁判に進んで出頭するように進言した。こうして9月7日、郡境のわずかに北にあるモルモンではない農家で、裁判が行われた。暴徒の攻撃を警戒した預言者は、郡境に聖徒たちの一団を配置、「裁判で不測の事態が発生したときは」<sup>9</sup>すぐに出動できるようにしておいた。裁判において二人の教会指導者には罪と認められるような証拠は何も示されなかったが、キング判事は緊迫した状況に負けて二人に巡回裁判所に出頭するよう命じ、500ドルの保釈金で保釈した。

しかし不幸なことに、この措置は暴動への気運を抑える役割はまったく果たさなかった。ほかの郡からの大勢の者たちを含めて、教会に敵対する者たちはアダム・



## 時満ちる時代の教会歴史

オンダイ・アーマンを襲撃する準備を進める。ライマン・ワイトはH・G・パークス將軍率いる州軍の傘下にあるミズーリ連隊の第59隊において大佐の職に任じられていた。そこでライマンは州軍の150人以上に武装して町を暴徒から守るように命じた。モルモンも暴徒も各地に斥候を出し、捕虜を得たりしながら互いに襲撃を繰り返すようになっていった。これが暴動に発展しなかったのは、アチソン少将とドニファン准将の冷静な行動があったからである。9月下旬、アチソン將軍は知事にこう書き送っている。「郡〔デイビーズ郡〕の状態はうわさほど悪くはありません。わたしが得た宣誓供述によれば、閣下<sup>こうかつ</sup>が狡猾な、あるいは狂気じみた者たちの言葉によって欺かれていたことは疑いの余地がありません。モルモンについては警戒すべき理由はどこにも見当たりません。彼らは恐れるべき存在ではないのです。恐怖心を抱いているのは彼らの方です。」<sup>10</sup>

同じころ、デイビーズ郡の「旧住民」から成る委員会が聖徒たちへの土地の分譲に同意したので、早速ジョセフ・スミスは東部と南部の聖徒たちに使者を送って、必要な資金の調達を指示したが、急速に深刻化する抗争によりこの合意の実現は不可能であった。

### デウィットの包囲

こうした抗争のさなか、キャロル郡デウィットの住民と聖徒たちの間で同様の忌まわしい事件が起きた。聖徒たちが移住を開始した初期の1838年6月ごろ、聖徒たちはその住民から歓迎を受けた。しかし7月になると、聖徒たちの数が旧住民の数を上回ることが明らかになってきて、旧住民はジャクソン、クレイ、デイビーズ各郡同様、政治的決定権を奪われることを懸念し始めた。そして「モルモンはペてん師である」との偽りのうわさを信じ、追放すべきであるとの考えが固定化していった。そして7月には3つの集会が開かれ、市民はモルモン放逐に向けて心をついにしていた。

こうして市民側は退去の最後通牒<sup>つうちよう</sup>を出したが、聖徒の指導者であったジョージ・M・ヒンクルとミズーリ州軍大佐は聖徒たちがデウィットに残って権利を主張することを確言し、9月まで膠着状態が続いた。暴動が回避できた裏には、9月の段階ではキャロル郡の民兵は遠くデイビーズ郡での戦いに参加していたことが挙げられる。9月下旬、デウィット郡の聖徒たちはリルバーン・W・ボッグズ知事に書簡を送り、キャロル郡ならびにほかの郡からの「無法な暴徒たち」からの防御を要請したが何の返事もなかった。

その間、デウィットの非モルモン勢力は増加の一途をたどり、レイ、ハワード、クレイ各郡からほぼ毎日のように連隊が集結していた。末日聖徒側も人員を強化し、バリケードを築き始めた。

10月の第1週は、二つの野営地で暴動が起こったため聖徒たちにとって恐怖の週となった。ジョン・マードックがこう記録している。「我々は日夜〔聖徒たちの〕警備のために雇われていた。……ある夜などは歩哨<sup>ほしやう</sup>が任務を怠らないように夜通し見回りをした。」<sup>11</sup>食と住の問題は深刻化していった。反モルモンの勢力はこの包囲を「皆殺しの戦い」<sup>12</sup>と考えていたのである。

新たな定住地を探していた預言者ジョセフ・スミスは、デウィットでの状況を幹部の兄弟たちに報告するためにファーウェストに向かっていた密偵に会う。失望し

## ミズーリでの迫害と追放

た預言者はこう語った。「住民の大部分は良心を持ち憲法を尊重する人々なのだから、近隣に迫害の気運が高まってもそれはすぐに静まると考えていたのだが。」<sup>13</sup>ジョセフは計画を変更し、敵の歩哨と会わないようにひそかに獣道を通してデウィットに入った。そこで彼が見たものは、大勢の暴徒に対抗する飢餓と欠乏に見舞われたほんの一握りの聖徒たちの姿であった。

教会指導者は再度知事に援助を嘆願することを決意、モルモンに対して心情的に理解を示すモルモンではない人々から、聖徒たちへの仕打ちや現在の状況についての宣誓供述書を集めた。10月9日、知事から「この抗争はモルモンと暴徒との間に起こったものであり、決着がつかずまで戦えばよいと考える」という内容の返事が来た。<sup>14</sup>これは政府による救済への一縷の望みを打ち砕くものであった。

こうした状況の中で、デウィットに定住した初期の聖徒たちは指導者たちに定住地を離れることを強く求めた。そこで聖徒たちは、ジョセフ・スミスも含めて70台の幌馬車を仕立て、10月11日に寂しくデウィットの地を後にした。その夜、産後間もない女性が体力の回復しないままに移動を強いられたため死亡、棺もないままに森の木立の下に埋められた。暴徒たちは移動する聖徒たちになおも攻撃を仕掛けて脅し、さらに多くの者が疲労と欠乏のために命を落とした。<sup>15</sup>

## 激しさを増すコールドウェル郡とデイビーズ郡での苦難

デウィットでの聖徒たちとの抗争に勝利を収めたことで活気づき、しかも知事が介入しないことを知って大胆になった反モルモン勢力は、モルモン一掃を目指してデイビーズ郡へと行軍を開始した。800人がアダム・オンダイ・アーマンに向かっており、また大集団がコールドウェル郡に向けて組織されていることを知った教会指導者たちは恐れを抱いた。知らせが届いたときにファーウェストにいたドニファン将軍は、ヒンクル大佐に地元の住民から兵を募って聖徒たちを守るように命じた。反モルモンの勢力はほとんどがほかの連隊の州兵であったので、その州兵と新たに結成された州兵との間の戦いという皮肉な様相であった。

安息日、預言者は「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」との救い主の言葉を引用して聖徒たちに話をした。そして話の最後に、自分と行動を共にする者は翌朝公共広場に集まるようにと述べた。こうして約100人の男性がドニファン将軍からコールドウェル郡の州兵としての認定を受け、月曜日にダイ・アーマンに向かった。<sup>16</sup>

同じころ、デイビーズ郡では敵対行動が表面化し、ジョン・D・リーの記録によれば、住民の何人かは「木に縛りつけられてヒッコリーの枝で打たれ、中にはめった切りにされた者もいる」<sup>17</sup>との状況であった。家の多くは焼かれ、家畜は追い出された。加えて10月17日と18日の吹雪の中、家を追い立てられて散り散りになった家族は、助けを求めてアダム・オンダイ・アーマンに逃げた。ジョセフ・スミスは当時をこう述懐する。「着の身着のままの状態で命からがら逃げて来た聖徒たちが村に身を寄せている姿を見たとき、わたしは言葉に尽くせない思いに襲われた。」<sup>18</sup>

こうした出来事を目撃したデイビーズ郡駐在ミズーリ州軍の司令官であったH・G・パークス将軍は、ミズーリ州北部担当の司令官であるデビッド・アチソン将軍に事態が悪化の一途をたどっていることを報告する。アチソン将軍は知事に、ミズー

## 時満ちる時代の教会歴史

リ住民にはモルモンをデイビーズ郡とコールドウェル郡から追放しようという意図があることを話し、現地を視察するように強く勧めた。これは知事に対するアチソン將軍の3度目の進言であったが、前の2回と同じように、今回も無視されてしまった。ボッグズ知事は聖徒側の言い分にはたとえアチソン將軍のような信頼できる人物によるものでさえ耳を貸そうとせず、逆に怒りに満ちた反モルモン側の報告を信用したのである。

デイビーズ郡での敵対行動が激化するのに合わせて、パークス將軍は州軍の大佐であるライマン・ホワイトにモルモンによる軍を組織することを承認、デイビーズ郡にいる暴徒の放逐に当たらせることにした。パークス將軍は集まった隊にこう語っている。「わたしはあなたがたの定住地を頻繁に訪れて、あなたがたが勤勉かつ実直で、法律を守る人々であることを知りました。それにもかかわらずあなたがたが平和のうちに自由という特権を得て生活できないのは嘆かわしいことです。」<sup>19</sup>

それから2日間、モルモンと反モルモンとの間にゲリラ戦が展開され、双方で略奪や放火が行われた。教会員は自分たちの所有物を奪われていたので異邦人から物を奪うのは必要なことであると考えた。モルモンの若き州軍将校ベンジャミン・F・ジョンソンはこう語っている。「我々は周囲を敵に囲まれ、食糧は底を突いていた。穀物や牛、豚、その他すべての食糧は家から遠く離れた所の畑にあって、強力な警護がついていなければ取りに行くことができない。そこで我々にできる唯一のことは、集団で外に飛び出して、だれの物かにかかわりなく手当たり次第に物を奪うことであった。<sup>20</sup>このことが法廷においてモルモンではない人々の口から誇張して報告され、モルモン戦争へと発展していく。反モルモンは自分たちで干し草や家屋に火を放ち、それをモルモンの仕業だとでっち上げた。このようなことからモルモンはどろぼうであり、隣近所の財産をすべて破壊するやからであるといううわさがすぐにミズーリ中に広がった。

ファーウェストの聖徒たちの間では、二人の悪名高き反モルモンの州軍将校、コーネリアス・ギリアムとサミュエル・ボガートがコールドウェル郡の定住地を襲う計画をしていることがうわさになっていた。そこで集会が開かれ、聖徒たちは大義を捨て去ることなく自衛することを誓い合った。周囲の定住地に住む住民もファーウェストに呼び集められ、町全体が急速に戦闘への準備態勢を整えていった。

ここで悲しむべきことが起こった。十二使徒定員会の二人のメンバー、トーマス・B・マーシュとオーソン・ハイドが10月18日に教会を去り、リッチモンドで敵に加わったのである。マーシュは以下のような宣誓供述を行い、ハイドもほぼ全面的にこれに同意している。「預言者は彼の預言が国の法律をもしのぐものであるとの考えを聖徒に教えており、それはすべての信心深いモルモンの間で信じられています。わたしは預言者が敵を足もとに踏みつけ、また死体をも踏んで歩くということを聞きました。彼は、わたしたちにこれ以上手出しをすると自分はこの時代の第二のモハメッドになると言っていました。」<sup>21</sup>この声明は反モルモンの人々の行動をさらに正当化することとなった。

彼らの裏切りについて、ジョセフ・スミスはこう述べている。「(トーマス・B・マーシュは)高い地位を得たことと天から自分に対して啓示が下ったことで高慢になり、行く手に待ち受ける逆風の第一陣に吹き飛ばされようとしている。彼は今、墮

## ミズーリでの迫害と追放

落して虚言を弄し、偽りの誓いを立て、最良の友の命を奪おうとしている。皆はこれを警告としてとらえ、自分を高くする者は神により低くされることを学んでもらいたい。」<sup>22</sup>トーマス・マーシュは1839年3月17日に破門されたが、オーソン・ハイドは十二使徒評議会の職務遂行の差し止めを言い渡され、1839年5月4日、次の総大会で彼が事情説明を行うまでは職務遂行を差し止められることが正式に決まった。<sup>23</sup>そして6月27日、悔い改めて過ちを告白したハイドは、十二使徒定員会の籍を回復した。マーシュは長年にわたる悲惨な生活の後、1857年に教会に戻っている。

## クルックト川での戦い

ミズーリでの「モルモン戦争」の転機となったのが、1838年10月25日木曜の夜明けに起こったクルックト川の戦いである。この悲劇のおもな原因は、教会の敵であったジャクソン郡出身の隊長、サミュエル・ボガートの挑発行為にある。ボガートは何日もの間、コールドウェル郡とレイ郡の境界をモルモンからの攻撃を防ぐためとの名目で何度も巡回していた。しかしボガートの隊は単にその任務を遂行するだけにとどまらず、2度コールドウェル郡に侵入して聖徒たちの家を攻撃し、教会員に州を離れるように命じるとともに、3人のモルモンの男性を人質に取った。このことがファーウェストに伝えられると、コールドウェル郡判事であり地域住民の最高権威者であるエライアス・ヒグビーは、ファーウェストの最高司令官であるヒンクル大佐に隊を派遣して「暴徒」を駆逐し、その夜には命を奪われることになっている捕虜を救出するように命じた。

州軍の教会員はこの数日間というものの召集の命令を待ち続けていた。深夜、広場への召集のドラムが打ち鳴らされると、75人の男性が集まりデビッド・W・パッテンとチャールズ・C・リッチの指揮の下に二つの隊が組織された。そして夜明け前、彼らはファーウェストから20マイル（32キロ）離れたクルックト川の浅瀬に着いた。ボガートの隊が川の兩岸に潜んでいることに気づかないままパッテンの斥候が川に近づくと、突然ボガートの警備兵の一人が発砲した。パッテンは応戦するように命じたが、夜明けの光にはっきりと姿が浮き出たパッテンの隊員らは相手の格好の標的となり、短いながらも熾烈な銃撃戦で双方とも数人の負傷者を出した。そのうちの一人は十二使徒定員会会員のデビッド・W・パッテン長老である。若いギデオンのカーターは頭部を打ち抜かれて地に倒れ、彼の顔は見分けがつかないほどであった。

兄弟たちは3人の捕虜を解放したものの、そのうち一人は負傷していた。彼らは敵を川向こうに撃退し、負傷者の手当てを行った。パッテン長老はファーウェスト近くのスティーブン・ウィンチェスターの家に運ばれたが、数時間後に息を引き取った。こうして彼は、この神権時代最初に殉教した使徒となった。回復された福音への彼の強い信仰は、預言者ジョセフ・スミスに殉教者として死にたいと漏らしていたことからもうかがえる。「預言者は強く心を動かされ、深い悲しみを示した。そしてデビッドに向かってこう言った。『あなたのような信仰の持ち主は、願ったことはかなえられるんですね。』」<sup>24</sup>預言者は2日後にファーウェストで行われた葬儀で、パッテンをこうたたえている。「ここに横たわっているのは、口にすることは必ず実行してきた人です。彼は友のために命をささげたのです。」<sup>25</sup>

## 時満ちる時代の教会歴史

パトリック・オバニオンも負傷がもとで後日亡くなった。瀕死<sup>ひんし</sup>の重傷を負ったもう一人、ジェームズ・ヘンドリックスは一時下半身がまひし、移動のときは担架で運ばれねばならなかった。そこで家族の世話はすべて妻のドルシラの手ゆだねられることになったが、彼女はその不屈の精神と信仰でミズーリでの危険な状況を乗り切り、イリノイへの苦難に満ちた旅路も耐え抜いた。

この戦いの報告は、誇張された形でジェファーソンシティのボッグズ知事のもとに送られた。また、ボガートの隊全員が虐殺されたか捕虜になったかして、モルモンがリッチモンドを占領して焼き討ちにするといううわさも流れた。ボッグズはこれらの報告を聞いて聖徒たちに対する全面戦争をする格好の口実を得たと感じた。

### 撲滅令とハウズミルの虐殺

10月最後の週、ミズーリ州北部は「四方から暴徒の声がする」<sup>26</sup>騒然とした状態であった。暴徒たちは家や穀物を焼き払い、家畜を追い散らし、聖徒たちを監禁し、彼らを殺すと言って脅迫した。ここでアチソン將軍は再度現場を視察するようボッグズ知事に提言したが、知事は逆に聖徒たちへの全面戦争を指示する。モルモン側が暴動を起こしたとの偽りの報告だけに依存したボッグズ知事は、聖徒たちが法律を犯し、敵対行為に出たと主張した。彼はこう書いている。「モルモンは敵として扱わなければならない、公共の福祉のために必要とあらば撲滅するか州外に追放しなければならない。彼らの不法行為は筆舌に尽くし難い。」<sup>27</sup>このころになると、一般大衆は聖徒たちに対し強い反対の立場を取るようになり、真理を知る者でさえもはや公に聖徒たちの擁護に立つことはなくなった。ボッグズ知事の「撲滅令」は当然の帰結でありこうした民意を反映したものと言えた。

アチソン將軍は州軍を指揮する立場にあったが、ファーウェスト占領前に知事により更迭された。そして、指揮権はジョン・B・クラーク將軍にゆだねられた。クラーク將軍がファーウェストに入ったのは、占領の数日後のことである。その間に残って指揮を執ったのがジャクソン郡出身で以前から反モルモンであったサミュエル・D・ルーカス將軍で、ファーウェストを取り囲む形で州軍を集結させた。10月31日の段階でその数は2,000人に達し、そのほとんどが知事の意向を実行に移す決意を固めていた。

再度暴動が起きたのはハウズミルにおいてである。ファーウェストの西12マイル（19キロ）にあるこの小さな定住地は、ウィスコンシン州グリーンベイ出身の改宗者ジェーコブ・ハウが開いたもので、彼はミズーリのほかの地域で迫害を受けている仲間の聖徒たちが逃れる場所を作るようと、1835年にショールクリークに移ったのである。ハウズミルには製粉所とかじ屋が1軒ずつと民家が数軒あり、製粉所近辺に10から30の家族、そしてその周囲に100ほどの家族が居住していた。10月30日、カートランドからの入植者が9台の幌馬車でこの地に到着した。ファーウェストへの旅の途中、数日間の休息を取ろうと思ったのである。

クルックト川での戦闘の直後、預言者ジョセフ・スミスは周辺地域に居住するすべての聖徒たちにファーウェストかアダム・オンダイ・アーマンに移動するように勧めた。しかし、財産を放棄しなかったジェーコブ・ハウは預言者の勧告を無視、集落の人々にも残るように指示したが、この思慮を欠いた判断が致命的な結

## ミズーリでの迫害と追放

果をもたらしたのである。ハウンのグループは、敵から攻撃を受けたときにはかじ屋の店をとりでとして使う計画を立て、製粉所と定住地全体を守るために見張りを配置した。

10月28日の日曜日、リビングストーン郡から派遣された州軍のトーマス・ジェニングス大佐が平和条約を締結するために兵士の一人をハウズミルに派遣した。この段階では双方とも攻撃はしないことを誓約していたが、非モルモンの人々はその約束を守らなかった。月曜日、リビングストーン郡のミズーリ住民のある一団がハウズミルの攻撃を決定した。恐らく知事の意向を実現するためであろう。そして10月30日火曜日の午後、約240人の男たちがハウズミルに接近した。七十人の7人の会長のうちの一人がハウズミルに到着したばかりのジョセフ・ヤング・シニアは、その午後遅くの状況をこう表現している。「ショール川の両岸では子供たちが遊びに興じ、母親たちは家事にいそしんでいた。父親たちは製粉所などの設備の見張りや来るべき冬のための穀物の収穫をしている。天候はとても穏やかで、さわやかな日差しが辺りを静寂に包み込み、門口まで忍び寄る恐ろしい危機への不安を抱く者はだれもいなかった。」<sup>28</sup>

午後4時ごろ、暴徒がハウズミルに向かって動き始めた。女子供は森へ逃げ込み、男たちは防御のためにかじ屋の店に立てこもった。聖徒たちの兵のリーダーであったデビッド・エバンズが帽子を振って降伏を叫んだが、暴徒は100発のライフルの音でそれにこたえ、そのほとんどがかじ屋の店に向かって放たれた。暴徒は女や子供、老人など、目に入る者を容赦なく銃撃した。アマンダ・スミスは幼い二人の娘の手をつかみ、メアリー・ステッドウェルとともに水車池越しに道を走って逃げた。アマンダはこう回想する。「子連れの女たちが逃げようとしているのに、あの鬼たちは弾丸を雨あられと浴びせ、わたしたちを殺そうとするのです。」<sup>29</sup>

暴徒たちはかじ屋に入り、アマンダ・スミスの10歳の息子、サーディアス・スミスがふいごの下に隠れているのを見つけた。そして一人が銃口をサーディアスの頭に当てると、引き金を引いて頭の上半分を吹き飛ばした。その男は後にこう語っている。「しらみの卵はやがてしらみになる。あの子も生きていたらモルモンになっていただろう。」<sup>30</sup>サーディアスの弟で7歳になるアルマ・スミスは、父と兄の死を目撃し、自分もしりを撃たれた。彼は暴徒に見つかることなく、後に祈りと信仰により奇跡的に癒されている。トーマス・マックブライドはコーンナイフで切り殺された。少数の男女、子供が川向こうの丘に逃れたものの、少なくとも17人が殺され、13人が負傷した。<sup>31</sup> ジェーコブ・ハウも負傷した一人だったが、後に回復している。数年後、預言者はこう語った。「ハウズミルで、兄弟たちはわたしの勧告に背きました。背かなければ、彼らの命は救われていたでしょうに。」<sup>32</sup>

生存者たちは2度目の攻撃を恐れて、その日の夕方から夜にかけて身を潜めていた。翌日、負傷していない男たちが数人、死体を井戸のために掘った穴に埋めた。カートランドからの旅でサーディアス・スミスとすっかり親しくなっていたジョセフ・ヤングは、悲嘆のあまりサーディアスの遺体を共同埋葬のための穴に入れることができなかった。翌日アマンダとアマンダの長男がサーディアスを埋葬した。

家を失った生存者たちは、ほかの教会員とともにその年の冬から翌年の春にかけてミズーリを後にした。その間、暴徒は夫を失った女たちに引き続き迫害を加えよ

撲滅令

High Quarter of the Militia  
City of Jefferson  
Oct. 27 1838

1st From the order of this morning to you  
 directing you to cause two mounted men to be  
 raised within your division I have received  
 from the Regt of Kay & White & Miller  
 one of my best information of the most appal-  
 -ling Character which entirely changes the face  
 of things and places the Mormon in the attitude  
 of an open and avowed defiance of the laws  
 and of having made war upon the people of  
 this State your orders are therefore to hasten your  
 operations with all possible speed The Mormon  
 must be treated as an enemy and must be ex-  
 -terminated or driven from the State of necessity  
 for the public peace these outrages are beyond  
 all description If you can increase your force  
 you are authorized to do so to any extent you  
 may consider necessary I have just issued  
 orders to Major Genl Willcutt of Marion Co to  
 raise 500 men and to march them to the  
 northern part of Adams and thus unite with  
 Genl Doniphan of Clay (who has been ordered  
 with 500 men to proceed to the same point for  
 the purpose of intercepting the retreat of the  
 Mormon to the north. They have been directed  
 to communicate with you by express you can  
 also communicate with them if you find it ne-  
 cessary In case therefore of proceeding as at  
 first directed to unite the Brigades of Adams  
 in their homes you will proceed immediately  
 to Richmond and there operate against the  
 2d Mormons Brig Genl Parks of Ray has been  
 ordered to have four hundred of his Brigade  
 in readiness to join you at Richmond  
 The whole force will be placed under your  
 command

I am very respectfully  
 Yr Obedt St  
 Silthorn M Bopp  
 Com in Chief

Genl John B. Clark  
 Ray Co.

## ミズーリでの迫害と追放

「ハウズミル」  
C・C・A・クリステンセン画



教会歴史美術館所蔵

うとしたが、主が助けを与えてくださった。アマнда・スミスは、とうもろこし畑で声を上げて祈ったときに主から受けた確信について、こう述懐している。

「そこはわたしにとって、まさに主の神殿のようでした。わたしは声を上げて、心を込めて主に祈りました。

そして畑から出ようとしたとき、わたしを呼ぶ声が聞こえたのです。はっきりとした声でした。それは御霊の、静かなそれでいて心に強く印象づけられるものではなく、声だったのです。その声が、聖徒たちが歌う賛美歌の1節を繰り返したのです。

『主、われに頼るものの霊

敵の手には渡し得ず

地獄、彼に迫るとも

われその霊を見捨てはせず

必ずわれは見捨てず』

このときを境に、わたしから恐れが消えました。だれもわたしを傷つけることはできないと感じたのです。」<sup>33</sup>

## ファーウェストの包囲

同じころ、反モルモンの州軍はファーウェストへの集結を続け、攻撃の準備を進めていた。それに対してファーウェストの軍は幌馬車や材木で町にバリケードを築いていたが、10月31日水曜日になると、反モルモンの勢力と聖徒たちの比率は5対1となった。そして、どちらも戦いを仕掛けることのないまま、にらみ合いの状態が過ぎた。夕方になってルーカス将軍が休戦の白旗を送り、これに聖徒たちの指導者であるヒンクル大佐が応じ、ルーカスの要求を内諾した。その要求の内容は、特定の指導者の裁判と処罰のための逮捕、損害賠償のためのモルモン側の財産の没収、残りの聖徒たちの武器の放棄とミズーリ州からの退去であった。

ファーウェストに戻ったヒンクルはジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、ライマン・ホワイト、パーリー・P・プラット、ジョージ・W・ロビンソンに対して、ルーカスが停戦会議を開く用意があると信じ込ませた。ルーカスに会った彼らは、ヒ



## 時満ちる時代の教会歴史

ンクルが自分たちをルーカスに捕虜として渡したことを知り、大変な衝撃を受けた。パーリー・P・プラットはこの悲劇的な情景をこう描写している。「高慢な〔ルーカス〕將軍は、馬にまたがったままで何も言わず、衛兵にわたしたちを取り囲むよう命令した。こうしてわたしたちは何千人もの野蛮人の格好をした者たちが取り囲む野営地に連行された。兵士の多くはインディアンのようないでたちで、顔にも色を付けている。そして辺りは歓声の渦で、あたかもこの世の歴史始まって以来最も奇跡的な勝利を得たたくさんのブラッドハウンド（訳注：獵犬の一種）が、獲物に向かって放たれたかのようにであった。」<sup>34</sup>

歓声は夜通し続き、ファーウェストの住民は預言者がすでに殺されてしまったのではないかと恐れた。そしてほとんどの聖徒が夜を徹して祈り続けた。敵陣では、兄弟たちが冷たい雨の中地面に寝かされ衛兵からあざけりと冒瀆ぼうとくの言葉を浴びせられた。「彼らは神を冒瀆し、イエス・キリストを嘲笑し、恐ろしいろいの言葉を吐き、ジョセフ・スミスらを挑発した。そして、『おい、スミス、天使を見せろ』、『おれにも啓示とやらをくれよ』、『奇跡を見せろ』などと言って奇跡やしるしを要求した。」<sup>35</sup>

その夜、不法な軍法会議が秘密裏に開かれ、捕虜たちを翌朝ファーウェストの公共広場で処刑するとの判決が下された。ルーカス將軍からこの命を受けたアレクサンダー・ドニファン將軍はこの野蛮で不当な仕打ちに憤慨し、こうこたえている。「これは冷酷な殺人です。わたしはあなたの命令には従いません。わたしの旅団は明日の朝8時にリバティーに向かってここをたちます。もしあなたが彼らを処刑するなら、わたしはこの世の法廷の場であなたの責任を追求します。必ずそうします。」<sup>36</sup>ドニファンのこの勇氣ある返答におじけづいたルーカスは、意気をそがれてしまった。このようにして聖徒たちの祈りがこたえられたのである。

その同じ夜、クルックト川の戦いに参加した残りの者たちを敵が逮捕しようとしているとのうわさがファーウェストの聖徒たちの間に流れた。そこで20人の兄弟たちが夜明け前にファーウェストから脱出して北東のアイオワを目指したが、不幸にもハイラム・スミスとアマサ・ライマンは捕らえられ、ほかの捕虜のもとに連行された。

11月1日の朝、ジョージ・ヒンクルがモルモンの連隊をファーウェストから移動させると同時にミズーリ州軍が町に入り込んだ。彼らは武器を探しながら町を破壊し、貴重な財産を略奪、数人の女性を強姦ごうかんし、指導者である長老に対しては銃剣を突きつけて州軍の費用を支払うという締約書に署名させた。教会の有力者の多くが逮捕されてリッチモンドに送られ、残りの聖徒たちは州を出るよう言い渡された。

教会指導者たちをインディペンデンスに連行し、さらし者にしたうえで裁判にかけるという計画が練られた。そこでジョセフ・スミスたちは処刑されることを覚悟し、一度だけ家族に会って別れを告げることを懇願した。こうして彼らは11月2日にファーウェストに戻って来た。ジョセフは涙をいっぱいにためた妻と子供たちに再会する。彼らは、もうジョセフは銃殺されたと思っていたからである。ジョセフはこう書いている。「家に入ると、彼らはわたしの洋服にしがみついた。目には涙をいっぱいにためて、彼らの表情には喜びと悲しみが入り交じっていた。」ジョセフは家族だけの時を過ごすことを許されず、涙に暮れるエマとすがりつく子供たちは「衛

## ミズーリでの迫害と追放

ファーウェストに集結するミズーリ州軍



兵の剣によってわたしから引き離された。」<sup>37</sup>ほかの捕虜たちも同じ苦しみを味わいながら、家族に別れを告げたのであった。

ジョセフとハイラムの母親であるルーシー・スミスは、捕虜たちが乗った衛兵つきの幌馬車に走り寄り、幌馬車が出る前に差し出された二人の息子の手にかろうじて触れることができた。彼女はそれから数時間悲しみに打ちひしがれていたが、御霊からの慰めを受け、次のような預言の賜物を受けた。「子供たちに関することについては心に慰めを受けなさい。彼らは敵により害を受けることはない。」<sup>38</sup>同様の啓示は預言者ジョセフ・スミスにも下った。翌朝、捕虜たちの連行が始まったとき、ジョセフは小さいながらも希望に満ちた声で同僚たちにこう言った。「兄弟たち、元気を出しましょう。主の言葉が昨夜わたしに臨み、この捕らわれの間どのような苦しみを受けようとも、だれも命を奪われることはないと知らされました。」<sup>39</sup>

時を同じくして、知事からモルモン戦争の指揮をゆだねられたジョン・B・クラーク将軍がファーウェストに到着した。彼は、全員に市内にとどまることを命令、そのため教会員は干からびたとうもろこしで飢えをしのぐことを余儀なくされた。11月6日、クラークは苦しむ聖徒たちに向かって冬のさなかに州外に移動することを強制しないと声明した。彼はこう述べている。「あなたがたはわたしのこの寛大な措置に感謝しなければならない。わたしは今この場を去るようには言わない。しかし、もう1年ここにどまって作物の植え付けを行えるとは考えないでほしい。……あなたがたの指導者に関して言えば、たとえ一度たりとも、たとえ一瞬たりとも、彼らが救い出されるとか、彼らの顔を再び見られるとか心に思ってはならない。なぜなら、彼らの運命はもう決まっている。さいころは投げられたのだ。彼らの運命は確定したのだ。」<sup>40</sup>

州軍の別の一団は、アダム・オンダイ・アーマンに逃げ込んだ聖徒たちを包囲した。3日間にわたる尋問の末、すべてのモルモンはデイビーズ郡を追放されたが、春まではファーウェストに行きそこにとどまることへの許可が与えられた。

脱出の準備を進めながら、聖徒たちは再び州議会に救済を求めた。聖徒たちの苦難の状況は詳細に伝えられ、議員の間やミズーリの新聞からかなりの同情が寄せられたにもかかわらず、このことに関して公式な調査が行われることはなかった。逆

## 時満ちる時代の教会歴史

に議会は、コールドウェル郡の聖徒たちに2,000ドルというわずかばかりの救済金を払っただけであった。

### 監獄に捕らわれて

ジョセフ・スミスとほかの少数の指導者たちはインディペンデンスに連行され、さらし者にされた。次いでリッチモンドに移送され、2週間以上古い空き家に一緒に鎖でつながれたまま、監視つきで監禁された。そして11月の中旬、巡回判事オースチン・A・キングの管理による13日間の裁判が始まる。挙げられた証拠は教会指導者を糾弾するものであった。最初の証人であるサンプソン・アバードは、秘密地下組織ダナイツの件での預言者の責任を追及、ほかの証人も同様の憎悪に満ちた証言を行った。また、捕虜たちが弁護側の証人として挙げた人々はすぐに投獄されるか、あるいは郡外に追放された。聖徒たちの弁護を務めたアレクサンダー・ドニファン准将はこう語っている。「たとえ天使の群れが下りて来て我々の無罪を主張したとしても、何も変わることはないであろう。彼（キング）は初めから我々を監獄に入れようとしていたのだ。」<sup>41</sup>

その後2週間にわたって捕虜たちは看守から虐待を受け、おぞましい日々を送ったのである。11月のある夜のこと、兄弟たちは看守たちが聖徒たちに加えた残虐な行為について何時間もの間、「わいせつな冗談や忌まわしいのろいの言葉、ひどい冒瀆や汚れた言葉で」自慢し合うのを聞いていた。預言者の隣に横たわっていたパーリー・P・プラットがまさに言葉を発しようとしたとき、突然ジョセフ・スミスが足かせを付けたまま、何も武器を持たずに立ち上がり、雷のような声でこう言った。「『黙れ、地獄の穴の鬼ども。イエス・キリストの御名により叱責し、命令する。黙れ。そのような言葉は生きて二度と聞きたくない。そのような話はやめろ。そうしなければ、おまえたちがわたしか、どちらかが今この場で死ぬだろう。』

ジョセフは話すのをやめた。すっと立ったその姿は恐ろしいほどの威光に満ちており、鎖につながれて武器も持たないにもかかわらず、彼は静かに、騒ぎ立てることなく、天使のような威厳をもって銃口を下げ、あるいは銃を床に落として震える看守たちを見下ろした。彼らのひざは震え、部屋の隅の方にうずくまるか、預言者の足もとにひれ伏すかして、彼らは許しを請うた。それから次の監視交代のときまで、声を上げることはなかった。」<sup>42</sup>

公判の終わりにキング判事は、ジョセフ・スミスとほかの5人の兄弟たちを起訴のために拘留し、クレイ郡のリバティーの監獄に入るように命じた。パーリー・P・プラットとほかの数人はリッチモンドで拘留され、ほかのほとんどの捕虜は釈放された。

リバティーの監獄は、22フィート四方（約6.7メートル四方）の2階建ての石牢で、窓は格子付きの小窓が上の階に一つあるだけで、熱を伝えるものは何もなかった。床に開けられた穴を通じてのみ下の階へ出入りできたが、その階は人が直立できないほどの高さしかなかった。冬の4か月間、預言者と同僚たちは寒くて不衛生な状態、換気の悪さ、孤独、腐敗した食べ物に苦しまなければならなかった。恐らく最も彼らを苦しめたのは、州を追放された忠実な聖徒たちと行動を共にすることができないことであっただろう。しかしこの期間は、ジョセフ・スミスと教会の双方にとって重要な時期となった。ジョセフ・スミス不在のまま、教会ではプリガム・ヤング、

## ミズーリでの迫害と追放

ヒーバー・C・キンボール、ジョン・テラーがすばらしい指導力を発揮した。ジョセフ・スミスは、この絶望的な状態にあって主から貴重な霊的な指示を受けており、そこで示された内容から、リバティーの監獄は神殿の監獄と呼ばれている。

ジョセフ・スミスと同僚たちがリバティーの監獄で苦難を味わいながら州当局が彼らの身柄をどう扱うかの決定を待っている間、ミズーリ州の民意はボッグズ知事と暴徒に対する批判へと傾いていった。1839年3月末にかけて預言者は教会あてに長い手紙を書いた。その一部は現在、教義と聖約第121、122、123章の中に見られる。預言者は聖徒たちに加えられた不当な仕打ちについて思い巡らし、次のように主に嘆願している。

「おお、神よ、あなたはどこにおられるのですか。あなたの隠れ場を覆う大幕はどこにあるのですか。

あなたの御手はいつまでとどめられ、あなたの目、まことにあなたの清い目はいつまで永遠の天からあなたの民とあなたの僕たちへの不当な扱いを眺め、またあなたの耳はいつまで彼らの叫び声で貫かれるのですか。

まことに、おお、主よ、彼らがどれほど長くこれらの不当な扱いと不法な虐げを受ければ、あなたの心は彼らに和らぎ、あなたの胸は彼らに対する哀れみの情に動かされるのですか。」(教義と聖約121:1-3)

そして預言者は、彼の嘆願に対する主からの答えを紹介している。

「息子よ、あなたの心に平安があるように。あなたの逆境とあなたの苦難は、つかの間にすぎない。

その後、あなたがそれをよく堪え忍ぶならば、神はあなたを高い所に上げるであろう。あなたはすべての敵に打ち勝つであろう。

あなたの友人たちはまことにあなたの傍らに立っている。そして、彼らは温かい心と親しみのある手をもって、再びあなたを歓呼して迎えるであろう。」(教義と聖約121:7-9)

「リッチモンドで看守を叱責するジョセフ・スミス」ダンカート・ウェグランド画



## 時満ちる時代の教会歴史



ミズーリ州リパティーにあるリパティーの監獄。建物の外寸は、縦22.5フィート（約6.85メートル）、横22フィート（約6.7メートル）、壁の高さ12フィート（約3.65メートル）で、この建物は安全上問題があると判断された1856年まで牢獄として使用された。

4月になると、リパティーの捕虜たちは裁判のためにデイビーズ郡に移送され、大陪審は彼らに「殺人、反逆、強盗、放火、窃盗、……」<sup>43</sup>のとがで有罪の答申を出した。次いで裁判地の変更が許可され、捕虜たちはブーン郡に移送されることになったが、途中で保安官や警備兵が彼らを釈放してイリノイに逃がした。なぜなら役人の中に捕虜たちを起訴に持ち込めないと結論を出した者たちがいたからである。夏の終わり、パーリー・P・プラットとモリス・フェルプスもリッチモンドの監獄から逃れ、ノーブーに向かった。彼とともに拘留されていたキング・フォレットは再逮捕されたものの、最終的には1839年10月に釈放された。これで教会員の拘留者は皆無となった。

多くの末日聖徒にとって、住み慣れた家を後に残し、身を寄せる場所を建設するために再び新たな努力を開始しなければならない移動が、10年足らずの間にこれで5度目のこととなった。過去数か月間というもの経済的な困窮や過酷な迫害、背教、ミズーリからの追放にさいなまれたにもかかわらず、ほとんどの教会員が自分たちの神聖な行く末を見失うことはなかった。ジョセフは聖徒たちへの手紙の中でこう述べている。「全能者が末日聖徒の頭に天から知識を注ぐのを人が妨げようとするのは、人がそのか弱い腕を伸べて、定められた水路を流れるミズーリ川をとどめようとするようなもの、あるいは逆流させようとするようなものである。」（教義と聖約121：33）

## 注

1. *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ、パーリー・P・プラット編（Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985）, 150
2. *Missouri: A Guide to the "Show Me" State* 『ミズーリ州 “ショーミー” ステートへの旅行案内』（New York: Hastings House, 1954）, 510で引用
3. *History of the Church* 『教会歴史』3：57で引用
4. 『教会歴史』3：59 - 60参照
5. 『教会歴史』3：60
6. 『教会歴史』3：61で引用
7. 『教会歴史』3：65
8. 『教会歴史』3：67 - 68
9. 『教会歴史』3：73
10. 『教会歴史』3：85で引用
11. “Journal of John Murdock” 「ジョン・マードックの日記」1838年10月1日、末日聖徒歴史記録部、ソルトレーク・シティー、101
12. リランド・ホーマー・ジェントリー “A History of the Latter-Day Saints in Northern Missouri from 1836 - 1839” 「1836 - 1839年にかけてのミズーリ州北部における末日聖徒の歴史」博士論文、プリガム・ヤング大学、1965年、201
13. 『教会歴史』3：152
14. 『教会歴史』3：157
15. 『教会歴史』3：159 - 160参照
16. 『教会歴史』3：162
17. ジョン・D・リー、*Mormonism Unveiled* 『ペールを脱がされるモルモニズム』（Philadelphia: Scammel and Co., 1882）, 68ふじづるは強く柔軟性のある柳の枝のことで物を結ぶのによく使われる。
18. 『教会歴史』3：163
19. ライマン・ホワイト 『教会歴史』3：443 - 444で引用
20. ベンジャミン・F・ジョンソン、*My Life & Review* 『回顧録』（Independence, Mo.: Zion's Printing and Publishing Co., 1947）, 37
21. 『教会歴史』3：167で引用
22. 『教会歴史』3：167
23. 『教会歴史』3：345参照
24. ライカーガス・A・ウィルソン、*Life of David W. Patten* 『デビッド・W・パッテンの生涯』（Salt Lake City: Deseret News, 1900）, 58

## ミズーリでの迫害と追放

25. 『教会歴史』3：175で引用
26. 『教会歴史』3：175 - 176
27. 『教会歴史』3：175で引用
28. 『教会歴史』3：184で引用
29. アンドリュー・ジェンソン, *The Historical Record* 『歴史記録』1886年7月, 84
30. ジェンソン 『歴史記録』1888年12月, 673で引用
31. 『教会歴史』3：326参照
32. 『教会歴史』5：137
33. ジェンソン 『歴史記録』1886年7月, 87で引用
34. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』159 - 160
35. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』160
36. 『教会歴史』3：190 - 191で引用
37. 『教会歴史』3：193
38. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレー編 (Salt lake city: Bookcraft, 1958), 291で引用
39. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』164で引用
40. 『教会歴史』3：203で引用
41. 『教会歴史』3：213
42. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』179 - 180
43. 『教会歴史』3：315で引用



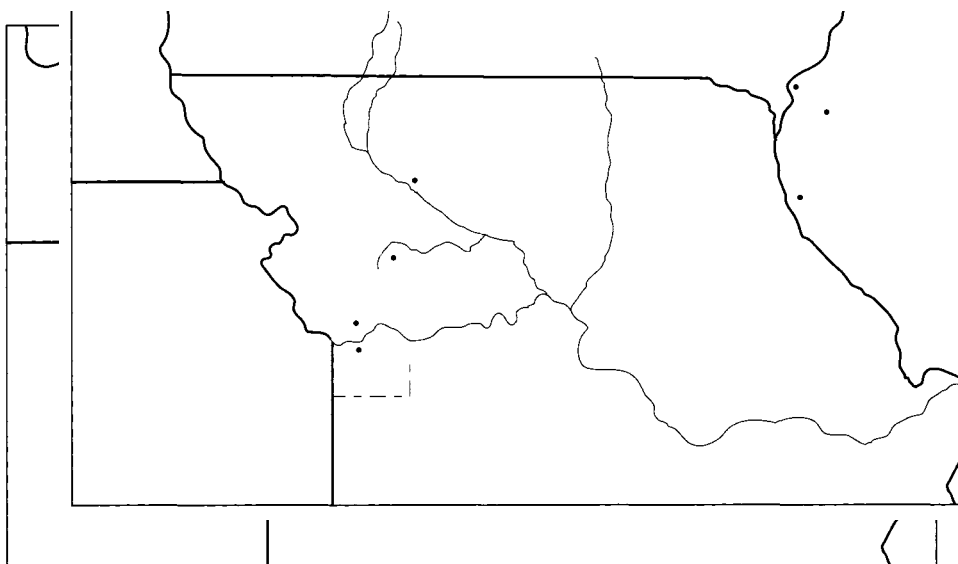
# イリノイの避け所

年表	
年代	重要な出来事
1839.1.26	ブリガム・ヤングによって移住委員会が組織される
1839.2	ミズーリ州からの大規模な移住が始まる
1839.3.22	ジョセフ・スミス、リバティーの監獄から聖徒たちに向けて、分散しないようにとの強い勧告の手紙を書き送る
1839.4.22	ジョセフ・スミス、ミズーリ州での何か月にもおよぶ監禁生活の後、イリノイ州クインシーに到着する
1839.4.30	ジョセフ・スミス、アイオワ州とイリノイ州で土地購入の交渉をする
1839.7.22	ノーブーとモントローズで多くの癒しが行われ、この日は「神の力が現された日」と呼ばれる
1839.11	ジョセフ・スミス、ワシントンD.C.でマーティン・バン・ビューレン大統領と会談
1839.12.16	イリノイ州スプリングフィールドでノーブー憲章が記名承認される
1841.2.1	ジョン・C・ベネットが初代ノーブー市長に選出される

▶ 1838年秋から1839年春にかけてミズーリ州を追われた聖徒たちが選択できる道は限られていた。最も可能性が高く、聖徒たちの心を引きつけたのは、東へ戻る道だった。経済的、政治的、そして人道的な理由から、イリノイ州の人々は当初、この避難者たちを温かく迎えた。

ミズーリ州からの逃避は主が聖徒たちを見離された証拠だと考える人々がいた。預言者ジョセフは釈放の見込みもない状態で、リバティーの監獄にいた。ミズーリ州における政治的権利と財産権の回復やシオンの町の確立について聖徒たちが持っていた希望は何も実現しそうになかった。教会の中にさえ、聖徒たちが一つの所に再集合することを疑問に思う者がいた。

教会員たちは避け所を求めてどこへ行ったのだろうか。西に広がるインディアンたちの居住地域は白人入植者たちには開放されていなかった。北のアイオワ州にはあまり入植が進んでいなかったが、その広大でなだらかな起伏が続く草原には材木になる立木がほとんどなかったし、南へ進むのは、敵意に満ちたミズーリ州の町や村を通過して行くことにほかならなかった。東に進むのが、教会員にとっては最も熟知した安心できるコースであった。わずか数か月前に、多くの聖徒がその道筋を通してカートランドから脱出して来た。また教会員の中には、オハイオ州へ戻ることを考えている人々もいたが、ミシシッピ川を越えて、その川沿いにあるイリノイ州の小さな町や村で休止しながら進むことによって、聖徒たちは教会の指導者から新たな指示を受けるのに必要な猶予を得ることができた。



## 聖徒の再定住

ファーウェスト崩壊後の何か月かは、教会の指導力が厳しく試される時期となった。大管長会のジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、ハイラム・スミスの3人全員が投獄されており、十二使徒定員会の陣容も希薄になっていた。デビット・W・パッテンはクルックト川の戦いで死亡、パーリー・P・ブラットはリッチモンドに



## 時満ちる時代の教会歴史

収監され、その兄弟オーソンは一団の聖徒とともに、セントルイスにいた。トーマス・B・マーシュ、ウィリアム・スミス、オーソン・ハイドは教会から離れ、結果的には何の力にもならなかった。そのため1838年から1839年にかけての冬と、ミズーリ州からイリノイ州への移動時期に、教会の様々な必要に対する責任のほとんどは、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールの肩にかかったのである。1838年の12月にジョン・テラーが使徒職に召された。そして翌年の4月には、ウィルフォード・ウッドラフとジョージ・A・スミスが同じくその職に召された。この二人は教会の重大な局面にあって、大きな力となった。

教会指導者たちは、州議会がボッグズ知事の教会撲滅令を廃止することを期待して、ミズーリ退去の決定をできるかぎり先延ばしにしていた。彼らは州の当局者たちに幾度となく請願書を送り、州議会に対しても聖徒たちのミズーリ居住の継続を認めるよう申し立て書を送っていた。しかしそれらの訴えは無視されたのである。

その一方で、ミズーリ州民たちは、なかなか退去しようとしぬ聖徒たちに対して、いらだちを募らせていた。1839年初頭、教会の指導者たちは、聖徒がそれ以上ミズーリ州にとどまることは望めないという判断を固めるようになった。1月26日に、ブリガム・ヤングは移住を促進するために、「移住委員会」を設置した。冬から春にかけて、この委員会は貧しい人たちに食糧や衣類を供給し、移送する手配をした。正式な決議によって、約400人の末日聖徒が各自の全財産の処分を「移住希望者が全員ミズーリを去る時が来るまで、ふさわしいと判断される貧しい人々へ移住に必要なものを提供する目的で」この委員会にゆだねるという聖約をした。ジョセフ・スミスでさえもこの計画を支えるために、リバティーの監獄から何とかして100ドルの現金を送ったのである。

2月中ごろまでには、聖徒たちの大規模な移住が始まる状況になっていた。最高のものとは言えないまでも、荷車やそれを引く家畜などが集められた。移動ルートに沿って、適所適所に予備の食糧が用意された。また、一時的に寒さも和らいでいた。それでもミズーリ州からの移住は、避難民にとって容易なことではなかった。多くの人々はミズーリ州を去るのに必要な物資を得るために、大切な財産や土地をとんでもない安値で売却した。あるミズーリ州民は「目が見えない1頭の馬と時計」と引き替えに教会員から40エーカーの良い土地を手に入れた。そのほかにも、1エーカー当たりわずか50セントというような土地取り引き例が幾つかあった。<sup>2</sup> 雄牛を所有している人々の中には、友人や親族を危険な状況の中から連れ出すために、コールドウェル郡から東に向かって320キロもあるミシシッピ川までの道のりを何度も往復した人々もいた。ハウズミルで夫を亡くしたアマンダ・スミスは雄牛を駆って、5人の子供とともにファーウェストを後にした。自分の家族をミズーリの暴徒たちの手の届かない所まで連れて来ると、彼女はほかの聖徒たちの東への移動を助けるために、自分の雄牛をミズーリへ送り返した。

チャールズ・C・リッチは、クルックト川の戦いに加わったことで逮捕されるのを免れるために、11月のあるとき、ミズーリから逃れた。このとき、彼は23歳の妻サラを後に残したが、彼女も後に自分の父親ジョン・ペアの助けによってファーウェストを去ることができた。彼女の健康状態は思わしくなく、ミシシッピ川までの旅の間ずっと荷車のベッドに寝たままだった。彼女にはホセア・スタウトの妻サ



チャールズ・C・リッチ(1809 - 1883年)は1832年に教会に加入した。彼はデビッド・W・バッテンが致命傷を負ったクルックト川の戦いのときに指揮を執った。ノーブー時代、彼は軍隊の指導者であるとともに教会の指導者でもあった。ブリガム・ヤングは、1846 - 1847年の冬アイオワ州マウントビスガの仮宿営地の管理責任を彼に与えた。

チャールズ・C・リッチは1849年2月12日に使徒に聖任された。1864年春に、彼はペアレクバレー(アイダホ州とユタ州にわたる)の最初の入植者の一人となり、その地域の入植の責任者となった。彼の名は、その善良さ、寛容、そして肉体の強靭さで人々によく知られた。道路の行き来が困難になる冬の季節、彼は何度も山岳地帯を越えてソルトレーク・シティへ郵便物を運んだ。

## イリノイの避け所

マンサが付き添った。彼らがミシシッピ川に着くと、川に張っていた氷はひび割れして、川越えは非常に危険な状態だった。このときジョージ・グラントはチャールズ・C・リッチたちにメッセージを伝えるため、自ら進み出てその危険な状況を恐れずに川を渡り始めた。イリノイ州側の岸に近づいたとき、彼は氷が厚く張っているように見えた所で川の中に落ちてしまったが、無事に救われた。

チャールズ・C・リッチとホセア・スタウトは、妻たちが対岸に到着したことを知らされると、彼女たちに会うためにカヌーで川を渡った。翌日の朝になって、チャールズ・C・リッチたちは最初の子供の出産を控えていたサラと、そのほかに二人の女性をイリノイ側に連れて来るのがいちばん良いという判断をした。カヌーが小さかったため、やむを得ずサラの父親は残って渡し船を待つことになった。イリノイ州岸へ戻る途中、小さなカヌーは大きな氷塊によって押しつぶされる危険があったが、男たちが氷の上に飛び移って危険のない所までカヌーを押しした。サラの父親は目に涙を浮かべながら、娘たちの乗ったカヌーがイリノイ州側へ無事に着くのを見届けた。<sup>3</sup>

エマ・スミスの場合は、ジョセフが逮捕された後の何か月かが特に辛い時期であった。1839年2月、隣人のジョナサン・ホルマンはエマ・スミスがわらを敷き詰めた2頭立ての馬車に4人の子供となけなしの財産を載せるのを助けた。出発前の夕方、エマ・スミスは夫の手がけた大切な『聖書』の翻訳の原稿をアン・スコットという女性から受け取った。預言者の秘書をしていたジェームズ・マルホランドが、暴徒たちも女性までは調べないだろうと考えてアンにその原稿を託していたのだった。アンは二つの木綿の袋を作り、その原稿を保管していた。エマは長いスカートの下にその二つの袋を隠すようにして、ミズーリからイリノイへ原稿を運んだ。

エマの一行がミシシッピ川に着いたとき、川は氷結していた。馬車の重さで氷が割れる危険を考え、エマは二人の子供を抱き、もう一人の子供にはスカートにつかまらせ、歩いて凍った川の上を渡った。そしてエマたちはイリノイ州クインシーの村外れに無事に到着し、ジョセフが釈放されるまでそこに住んだ。

## クインシーへの到着

投獄されていなかった教会の指導者たちは1839年の春の半ばまで、聖徒たちをどこに定住させるべきか具体的な計画を立てていなかった。そのような中で、イリノイ州の人々は聖徒たちの窮状に同情的で喜んで受け入れる気持ちがあるということが彼らの耳に入ってきた。イリノイ州の多くの人々は、モルモンが大量に流入してくれば低迷する経済の活性化につながると信じていた。イリノイ州の政治家たちもモルモンの移住を奨励した。当時イリノイ州はホイッグ党と民主党に分かれ、微妙な均衡状態にあった。どちらの党も大量のモルモンの有権者の票を自分たちのものにしたいと考えていたのである。

1,200人あまりのクインシーの情け深い住民たちは、追われてきた惨めな聖徒たちに惜しみなく助けを与え、同情を示した。彼らの多くが聖徒たちに住む所と仕事を与えた。そして1度だけにとどまらず、金銭、食糧、衣類、そのほかの必需品を集めて与えてくれた。民主党クインシー協会は、聖徒の援助に特に力を尽くした。家をなくした避難民たちを助ける方法を考えるために、2月25日を含めた週に3度集會を

## 時満ちる時代の教会歴史

開いた。聖徒たちの状況について報告するために、シドニー・リグドンが招かれた。寄付金が募られ、モルモンに対するミズーリ州の扱いを非難する決議がなされた。さらに協会は次のように決議した。クインシー住民は「人道的に見て思いやりと同情に値する〔聖徒に対して〕理非をわきまえた行動をとるようにし、彼らの感情を傷つけるような言動、態度にふけるようなことのないよう特に注意しなければならない。」<sup>4</sup> また協会の指導者たちは教会がミズーリ州から補償を得られるよう援助に努めた。

しかし、教会とクインシー住民や民主党との友好的な関係は、ライマン・ワイトの無分別な行動によって脅かされた。ライマン・ワイトは地元の新문에に発表した一連の書簡の中で、ミズーリ州で行われた不法行為は民主党全国本部の責任であると批判したのである。クインシーの民主党員たちは彼のこの批判にまったく当惑し、教会の指導者にそれが教会の公式見解を示すものかどうかを質問した。5月17日に大管長会は、教会はワイトの批判には一切関知していないという書簡を書き送った。また大管長会は、ワイト長老の見解は個人的なものであって教会の公式見解ではないことを明らかにするために、特定の政党を攻撃する書簡を書き続けるのかどうかを彼に問いただした。

晩冬から春にかけて、何千人もの末日聖徒がクインシーを臨むミシシッピ川西岸に到着した。エリザベス・ヘーベンは2月末のそのときの様子を次のように書いている。「毎日約12家族がクインシーに向かって川を渡り、約30家族が常時、川越えを待っている。進みが遅くて、気が滅入る。川越え用の渡し船は1隻しかない。」<sup>5</sup> 天候が和らいで、危険な浮氷のために川越えの進み具合はさらに遅れた。寒さがまた振り返して、川は再び結氷し、多くの聖徒が急いで氷の上を渡った。

避難する聖徒の数が増えるにつれて、クインシーでの生活環境が悪化してきた。ほとんどが貧窮の極みの状態にあって、聖徒たちは寒さと雨とぬかるみの中で飢えに苦しんだ。<sup>6</sup> しかしそのような状態にあっても、彼らは神への忠誠心を守った。一時期、クインシーにおける聖徒の数は他のどの宗派の会員数よりも多かった。モルモンでなかったウォンドル・メースは多くの聖徒を自分の家に宿泊させ、やがて自らも改宗するに至った。彼の家は集会場、会議場、また困窮者の避難所として用いられた。彼は次のような報告を残している。「幾晩にもわたって、1階、2階、地階とも足の踏み場がまったくないほどにベッドがすし詰め状態だった。」<sup>7</sup>

ドルシラ・ヘンドリックスの話は、クインシーにおける聖徒たちの体験の典型的な例である。ドルシラの夫ジェームズはクルックト川の戦いで首に銃弾を受け、やむなく担架で運ばれた。彼の家族は4月1日にクインシーに着き「一部は地上部にあり、また一部が地下にある」部屋を確保した。2週間がたち、彼らにはスプーン1杯の砂糖と皿1杯のコーンミールしかなくなり、餓死寸前の状態になった。ドルシラはそれらのわずかな残り物を調理した。自分たちはやがて飢死するだろうと考えて、ドルシラはすべてのものを洗濯し、小さな部屋を隅から隅まできれいにし、最悪の事態への覚悟をした。その日の午後、ルービン・オールレッド兄弟が訪ねて来た。彼はドルシラの家族の食料がなくなつたと考え、町へ行く途中に1袋の小麦を彼らのために粉にひいてきたと話した。それから2週間して、また食料がなくなった。ドルシラは次のように回想している。「とても怖くなりました。でも前にわたしを慰めて

## イリノイの避け所

くれたその同じ声が、また慰めを与えて『頑張りなさい。主は聖徒を養ってください』と言ったのです。」今回はアレクサンダー・ウィリアムズ兄弟が小麦の入った袋を肩に載せて、裏手の戸口に現れました。彼の話によると、非常に忙しくしていたが、ふと御霊が「ヘンドリックス兄弟の家族が困っているとささやいたので、取るものもとらずに駆けつけた」ということであった。

この時期に8千人から1万人の末日聖徒がイリノイ州西部へ移住した。クインシーでは新たに到着したこの人たちをすべて受け入れる余力はなかった。1839年の春から夏の間、多くの人々は周辺の農場や隣接する郡など住む場所が見つければ、どこへでも移住することを余儀なくされた。

## ノーブー定住

聖徒たちがミズーリ州東部からイリノイ州にかけての地域に散在していたころ、ジョセフ・スミスはリパティニーに収監されていた。ファーウェストが崩壊した直後、クルックト川の戦いに兵として加わった人々は迫害者から逃れるうちに道に迷い、やがてデモイン川にたどり着いた。そこはデモイン川がミシシッピ川に合流する場所のちょうど北に当たる地点であった。彼らはそこでアイザック・ガランドという人物に会ったが、彼はその地域で指折りの土地投機家であった。聖徒たちの窮状を聞いたガランドは、教会にアイオワ州とイリノイ州のかなりの面積の土地を売却してもよいと申し出た。ガランドの申し入れを聞いた人々は、クインシーで次に何をなすべきかを決める協議をしていた教会の指導者たちにそのことを伝えた。

シドニー・リグドン、エドワード・パートリッジ、その他幾人かはまた一つの場所に集合することが適当かどうか疑問に思っていた。彼らは、それがミズーリ州やオハイオ州で経験した様々な問題の大きな原因になったと考えていたのである。その一方でブリガム・ヤングは聖徒たちに、もっとよく相互援助ができるようにすべく集合するよう勧告していた。どうすればよいか方向性が定まらず、指導者たちは預言者に助言を求める手紙を送った。3月22日、預言者は教会の指導者たちに土地を購入し、散在することがないように勧告した。

4月に、ジョセフ・スミスとハイラム・スミス、また彼らとともに投獄されていた兄弟たちが、ミズーリ州からの逃亡を許された。そして彼らは1839年4月22日にクインシーに到着した。預言者は、自分たちの逃亡が実現したのは指導者たちの祈りのおかげだと考えていた。ジョセフがクインシーの渡し場に着いたとき、その姿を認めたディミック・B・ハンティントン兄弟は次のように書いている。「彼は穴だらけの古い長靴を履き、破れたズボンをその長靴の中にたくし込んでいた。襟を折り返した青いマントを着込み、つばの広い黒い帽子をかぶっていたが、その帽子のつばのへりは水でびしょ濡れだった。しばらくひげをそっていない様子で、顔色は悪く、やつれ切っているように見えた。』預言者は自分たちの到着を人目につかないようにしたいと考え、裏通りを通って、そこから4マイル（約6.4キロ）離れたクリーブランドの家に向かった。エマ・スミスはそのクリーブランドに住んでいたからである。彼女は馬から降りる夫を見つけると、入り口を出て通用門の途中まで喜んで夫を迎えに出た。

春の種まきの季節が近づいていたために、預言者は教会の次の動きに向けて寸刻



ハロー家の好意による

ジェームズ・ヘンドリックスとドルシラ・ヘンドリックスは1825年に結婚した。彼らの信仰と犠牲は、ミズーリ州から逃れた数多くの聖徒の典型的な例である。彼らはジェデダイア・グラント隊に属して、1847年にユタ州に到着した。ジェームズは1850年1857年にかけて、第19ワードの監督として働いた。



アイザック・ガランド(1791-1858年)はアイオワ州東部とイリノイ州西部における土地投機家であった。1839年に彼は教会に広大な土地を売却した。彼は後にバプテスマを受け、一時期教会の土地管理者として働き、教会の負債償還のために努力した。しかし彼の努力も教会の財政再建にはわずかな貢献しかできなかった。1841年から1842年にかけて彼は教会から離れたが、教会への友好的な態度に変わりはなかったようである。

## 時満ちる時代の教会歴史

も無駄な時間を過ごすことはなかった。彼が到着した2日後、ある評議会で預言者と他に数人を、「教会の土地の選定のために」<sup>10</sup>川をさかのぼってアイオワ州へ派遣することが決められた。その翌日、預言者はミシシッピ川兩岸の土地を自分の目で確かめた。

聖徒たちを集合させ、その定住先を決めるということがいったん決定されると、教会の指導者たちは必要な土地を獲得するために精力的に行動した。1839年の晩夏までには、教会が必要とする土地を取得するための4つの主要な取り引きが完了した。その中で最も広いのは、アイザック・ガランドから購入したミシシッピ川のアイオワ州側に位置する2万エーカー（約8千万平方メートル）の土地で、ほかにイリノイ州側でも少しの土地を購入した。そのほかの3か所の購入地は、蛇行するミシシッピ川を挟んでイリノイ州側からアイオワ州側に湾曲して突き出した所にあり、合計して600エーカー（約280万平方メートル）以上があった。その地域には以前からコマースとコマースシティという二つの小さな町の建設が予定されていたが、両方合わせてもごくわずかな住民しかいなかった。ミシシッピ川に近い平坦地は川の水位が高く、また川に面した崖の下から東側に向けて流れ出している湧き水のために湿地となっていて、人が住むには健康上問題がある所だった。しかしジョセフ・スミスをはじめとする指導者たちは、その地域を聖徒たちが住むのに適した場所できると確信していた。

避難してきた聖徒たちにも、組織としての教会にも、ほとんど現金がなかったために、土地の多くは信用取り引きで購入された。そのときの低い金利と長期にわたる返済期間は魅力的なものであったが、聖徒たちが困窮した状態にあったためその負債はノーブー時代の教会にとって非常に大きな負担となった。それから数年間ジョセフ・スミスは、その返済のためには教会員からの資金供給が必要であることを説いた。ノーブーの土地は教会員に売却されたが、税金で支払うことができる人は何と

教会が購入した土地の多くはアイオワ州側にあったが、末日聖徒の居住地として最も重要なものはイリノイ州側にあった。



## イリノイの避け所



ノーブーでのジョセフ・スミスの家。預言者とその家族は1839年から1843年までの間ここに住んでいた。1840年ごろに預言者ジョセフ・スミスは北側に増築をした。そして1856年ごろに預言者の息子ジョセフ・スミス・サードが西側にさらに大きな増築をした。

んどいなかった。そのため、ミシシッピ川兩岸の土地購入費はノーブー時代には完済されなかった。

1839年4月30日に最初の土地購入をした後で、預言者と彼の補佐たちは北への移住の準備を終えるためにクインシーへ戻った。5月の4、5の両日に、クインシーの近くで大会が開かれた。この大会で教会は土地の取得を裁可し、10月の第1週にコマースで次の大会を開催する決議をした。預言者は5月10日までに家族とともにコマースへ戻り、ミシシッピ川へ突き出たその地の南端にある川近くの丸木小屋を住まいとした。コマースの開墾、測量、地割図の作成、排水などが行われている間、到着した聖徒たちの多くは馬車、テント、壕で生活をした。ジョセフとエマは多くの人々を自分たちの粗末な家に住まわせた。対岸のモントローズでは、ブリガム・ヤング、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、オーソン・プラットなどの家族をはじめ、幾つかの家族がブラックホークの戦い以来放置されていた兵舎に住んでいた。

7月1日にジョセフ・スミスは公開書簡の中で、散在するすべての聖徒に対して、新しい集合の地へ移住するよう呼びかけた。数千人も聖徒がこの呼びかけにこたえた。このころ、ジョセフ・スミスは自分のそれまでの歩みを記録として残すために口述する作業や、間もなくイギリスへの伝道に出発することになっていた十二使徒定員会の会員たちを教える務めに没頭していた。

この多忙な時期のあるとき、預言者はイリノイ州の新しい地をノーブーと名付けた。それはヘブライ語で「美しい」という意味の言葉であった。ノーブーという名称が正式に使われたのは、1839年8月30日にノーブーの公式市街図に載せられたものが最初であった。合衆国の郵政省は1840年の4月に、変更されたその地名を公認し、同年3月にノーブーの市議会はコマースとコマースシティーをノーブーに合併する条例案を可決した。この集合地の成功が確実視されるようになると、聖徒たちが群れを成して移住を始め、ほかの土地所有者たちはノーブーに隣接する土地を「拡張地域」として分譲すれば利益になると判断した。

## 病気と「神の力が現された日」

1839年の夏、馬蹄形をしたノーブーの湿地帯の排水工事はまだ完了していなかった。集会、開墾、排水工事、建築、作物の植え付けなどを進める中で、聖徒たちはマラリヤを媒介する蚊の危険性に気づけなかった。ノーブーの湿地帯やミズーリ川岸沿いで大発生するアノフェレスという小さな蚊に刺された人は、その赤血球に病原体を移された。マラリヤというこの伝染病の特徴的な症状は、周期的な悪寒と高熱の発作である。しかし19世紀の人々はこのマラリヤやそれと同様の症状の病気を「おこり」と呼んでいた。

ミシシッピ川兩岸のたくさんの教会員が病に倒れた。預言者の家の周辺でテント生活をしていた多くの人々、そして預言者の家の中にいた人々もこの病気にかかった。エマは昼も夜も病人たちの看護に努め、6歳になるジョセフの息子も自分が同じ病気にかかるまで、病人たちのための水運びをした。この疫病は老若の区別なくすべての人を襲った。ノーブーでこの病気に倒れた初期の犠牲者に、オリバー・ハントントンの母親ジーナがいる。オリバーの家族はこのとき全員病の床にあった。

## 時満ちる時代の教会歴史

預言者ジョセフはオリバーに、看護を受けさせるために彼の家族を自分の家へ連れて来るように申し出た。ホイットマー家の人々も同じような状況にあった。エリザベス・アンは、彼らは「腹<sup>は</sup>這いで動き、互いに世話をし合うのがようやくだった」<sup>11</sup>と書いている。このような状況の中でエリザベスは9番目の子供を出産した。ジョセフは彼らの窮状を知ると、その家族をぜひとも自分の家へ連れて来るように説いた。エリザベスたちはジョセフの申し入れを受け入れ、ジョセフの家の敷地内にあった小さな離れに住むことにした。7月12日当時、ジョセフ・スミス・シニアは重病で生死の境をさまよっていた。

最後にはジョセフ・スミス自身も病気になったが、数日身動きのできない状態が続いた後で、起き上がって人々に助けを与えよとのささやきを受けた。ウィルフォード・ウッドラフの言葉によると、7月22日はノーブーとモントローズにおいて「神の力が現された日」であった。<sup>12</sup> その日の朝、預言者は主の御霊に満たされて立ち上がり、自分の家の敷地内にいた病人たちに癒しの儀式を施した。川沿いの地区には、病人がもつといて、預言者は大いなる力をもって忠実な人々に癒しの儀式を施した。その中の一人、ヘンリー・G・シャーウッドは瀕死<sup>ひんし</sup>の床にあった。ジョセフはシャーウッド兄弟のテントの入り口に来て、彼に起き上がって出て来るように命じた。シャーウッド兄弟はその声に従い、癒された。

ヒーバー・C・キンボール長老をはじめとする人々が、預言者について川を越え、モントローズへ行った。預言者たちは十二使徒たちの家を一軒一軒訪れ、祝福が必要な人々に癒しの儀式を施した。その後、ブリガム・ヤング、ウィルフォード・ウッドラフ、オーソン・プラット、ジョン・テラーが、人々を助けるために働くジョセフの一行に加わった。

モントローズで行われた最も印象深い癒しの業は、エライジャ・フォードグムに対するものであった。ジョセフ・スミスたちが来たとき、彼は口も利けない有様<sup>ありさま</sup>でベッドの中にいた。

「ジョセフ兄弟はフォードグム兄弟に近寄ると、彼の右手を取った……。

フォードグム兄弟の目はガラス玉のようになって動くこともなく、言葉も出ない状態で、周りで何が起きているのかまったく分からない様子であった。

ジョセフは兄弟の手を取って、彼の目をじっと見詰めていた。そして『わたしがだれか分かりますか』と尋ねたが、最初は答えがなかった。しかし、わたしたちは皆神の御霊の力が彼にとどまるのを見ることができた。

彼はもう一度『エライジャ、わたしがだれか分かりますか』と尋ねた。

フォードグム兄弟が低くささやくような声で『はい』と答えた。

ジョセフは兄弟に、『癒されるという信仰がありますか』と尋ねた。

今度は彼は前よりもはっきりと答えた。

『もう手遅れだと思えます。もう少し早く来ていただいていたら、癒されていたと思えます。』

彼は眠りから覚めたような顔をしていた。それは死の眠りであった。

預言者は尋ねた。『イエスがキリストであられることを信じますか。』

『信じています、ジョセフ兄弟』とフォードグム兄弟がそれに答えた。

すると、神の預言者は大きな声で、神の威光をまとっているかのごとく、次のよ

## イリノイの避け所

うに言った。『フォーダム兄弟，ナザレ人イエスの御名により命じる。起きて，病から癒されよ。』

預言者のその声は，人の声ではなく，神の声のようであった。家全体が土台から揺れ動いたかのような感じだった。

フォーダム兄弟は死からよみがえった人のように，ベッドから起き上がった。顔には血色が戻り，動きの一つ一つに生気が表れた。<sup>13</sup>

ジョセフ・スミスたちは次にジョセフ・B・ノーブルを訪れ，彼もまた癒された。ウィルフォード・ウッドラフはこのときのことを「教会の設立以来，癒しの賜物を通して神の力が現されたすばらしい日<sup>14</sup>と回想している。

ジョセフ・スミスたちがノーブーへ戻る準備をしてミシシッピ川の岸にいたときに，その日の数々の奇跡のことを聞いていた教会員でないある人が，モントローズから2マイル（約3キロ）ほどの所にある自分の家に来て瀕死の双子の幼児を癒してほしいと頼んできた。ジョセフは自分は行けないと言ったが，ウィルフォード・ウッドラフに赤い絹のハンカチを渡して，その双子を癒すように話し，そのハンカチで二人の顔をふけば癒されるだろうと約束した。また預言者は，ウィルフォードが持っているかぎりそのハンカチはいつまでも彼と自分を結びつける一つのきずなになると約束した。ウィルフォードは預言者の言葉に従い，双子を癒した。彼は終生その記念のハンカチを大切にした。<sup>15</sup>

信仰と神権の力のこのすばらしい現れがあったにもかかわらず，ノーブーの聖徒たちの間では夏から秋にかけて病気が猛威を振るった。しかし冬が近づくにつれて，この伝染病も静まり始めた。エリザベス・ヘーベンは10月にノーブーで開かれた総大会についての記録を残している。自身もその大会に出席した彼女は，ニューイングランドの故郷に次のように書き送っている。「預言者は，そこは健康に悪い場所だが，やがて聖められて集合の地になるということを知らされていると言っています。」<sup>16</sup>

病気が流行したのはノーブーだけではなく，クインシーでも1839年の2月から9月にかけて，多くの末日聖徒が病に苦しめられた。コマースにも病気の人は数多くいたが，死亡者はほとんどいなかった。しかしクインシーではかなりの死亡者が出て，大きな混乱を聖徒たちの間に引き起こした。エリザベス・ヘーベンは手紙の中で「『おこり』がどんなものなのか，それがどれほど精神を衰弱させ，健康を害するか知らないでしょう」と書いている。一つの家族の中から2，3人の犠牲者を出した例もあった。エリザベスの家の筋向かいに住んでいたゴダード家では，両親と16歳の娘が命をなくした。5人の子供が生き残ったが，そのうちの4人はそろって病の床に伏していた。幸運なことに，エリザベスはマラリヤにかからなかった。彼女は夏から秋にかけてほかの人々の看病のために働いた。看病を必要とする人があまりにも多く，彼女は6月から10月にかけては，安息日の集会にも行けなかった。彼女はこのときの状態に比べれば，ファーウェストでの試練の方がまだ小さかったと考えていた。<sup>17</sup>

## ミズーリ州での被害について補償を求める

預言者をはじめとする人たちは，1838年から1839年にかけて，リバティーの監獄で苦汁をなめていたときに，1833年また1838年から1839年の間に迫害にあった聖徒た

ユタ州，ソルトレーク，シティー。「開拓者の娘たち」の厚意により掲載



エライジャ・フォーダム（1798年1879年）は1833年にミシガン州で福音を受け入れた。彼は1835年にカートランドでジョセフ・スミスにより七十人に聖任された。アイオワ州モンローでジョセフ・スミスの手を通して奇跡的に癒された後，エライジャはノーブーへ移り住み，聖徒たちが1846年にイリノイ州を追われるまで，神殿で働いた。彼は1850年にユタへ行き，残る生涯福音に忠実な生活を続けた。



エリザベス・ヘーベン（1811 - 1892年）はブリガム・ヤングとウィラード・リチャーズのいところで，1837年に福音を受け入れた。ミズーリ州を追われた後，彼女はイリノイ州クインシーで病気に苦しむ数多くの聖徒の看病をした。彼女が残した手紙は当時の教会の歴史を知るうえでの重要な情報源となっている。彼女はクインシーでイスラエル・バーローと出会い，結婚し，後にユタへ移住してバウンティフルに住んだ。1892年のクリスマス日に死亡。



## 時満ちる時代の教会歴史

ちが失った土地や財産について、ミズーリ州政府からどのように補償を得たらよいかを話し合った。1833年に主は教会の指導者たちに、地元の関係当局と州政府に訴えるよう命じられた。そしてもしそれがうまくいかない場合には、連邦政府に救済を求めよう命じられた（教義と聖約101：81 - 91参照）。1834年に初めてこの方法がとられたが、アンドリュー・ジャクソン大統領は教会の訴えを採り上げなかった。1839年3月、リバティーに収監されていたときに、預言者は一つの啓示を受けた。それは、教会は合衆国政府に、聖徒たちがミズーリ州で受けた被害について再度補償を求めよという内容であった。教会員は「この州〔ミズーリ州〕の人々から加えられた苦難と虐待に関する一切の事実について、情報を集める」ように命じられた。それは「わたしたちの天の御父にその隠れ場から出て来ていただくという約束を果たすように求める権利を、わたしたちが十分かつ申し分なく主張するに先立って、天の御父からわたしたちに命じられている最後の努力」となるものであった（教義と聖約123：1, 6）。

シドニー・リグドンは健康を害していたため、他の大管長会会員よりも早く釈放されていた。彼はイリノイ州で、トーマス・カーリン知事に会い、聖徒たちの窮状を訴えた。またシドニー・リグドンは、「中央政府は各州に対して共和政体を受けろ」という合衆国憲法の宣言を根拠として、補償を得るための方策を考えていた。シドニー・リグドンは、ミズーリ州にはそのような政体は存在しないと感じていた。それで彼は、できるだけ多くの州がミズーリ州に対して非難決議をするように望んで、迫害の経緯を各州の知事と州議会に訴えていくことを考えた。彼は陳情運動をするために、各州の議会に教会の代表を派遣することを提案した。この計画は、迫害に関して供述書と全般的な情報を収集する任に、シドニー・リグドンの義理の息子ジョージ・ロビンソンを指名するところまで進んだ。シドニーはカーリン知事から他州の知事たちと大統領への紹介状を得た。<sup>18</sup>

ミズーリ州の当局者に救済を求める訴えをしても無駄なことは明白であった。そしてまたシドニー・リグドンの考えた計画も実際的ではないことが間もなく明らかになった。1839年5月のある大会で、シドニー・リグドンはワシントンD.C.に直接末日聖徒の苦しい状況を訴える責任を与えられた。しかし彼がその責任を果たすのが遅れたために、コマースで開かれた10月の大会で、新たにジョセフ・スミスとエライアス・ヒグビーがマーティン・バン・ビューレン大統領に申し立てを行う責任を与えられた。オリン・ポーター・ロックウェルも彼らに随行するように求められた。彼らは1839年10月29日にノーブーを出発したが、途中スプリングフィールドで改宗して間もないロバート・D・フォスター博士が合流した。預言者はスプリングフィールドでエマ・スミスに次のような手紙を書いている。「あなたと別れている間は、長く寂しい時になると思います。人道的精神以外、何もかもわたしにこのように大きな犠牲を払うように促すことはできなかったことでしょう。しかしわたしがほんとうに多くの人々が非業の死を遂げるのをただ手をこまねいて見ているだけで、補償を求めようと思わないと思いますか。いや、今回は主の〔御名〕によって事に当たるつもりです。」<sup>19</sup>

シドニー・リグドンは病気のために、スプリングフィールドのジョン・スナイダーの家にいた。預言者は彼をそこにとどまらせ、フォスター博士とオリン・ポータ

## イリノイの避け所



マーティン・バン・ビューレン（1782  
1862年）は合衆国の第8代大統領として、1837年から1841年までその職にあった。彼はミズーリ州で迫害された聖徒たちに対する救済申し立てをしたジョセフ・スミスたちに援助を与えようとしなかった。

ー・ロックウェルにその世話を頼み、自分はエライアス・ヒグビーとともに首都ワシントンへ向かい、11月28日に到着した。その翌日には、バン・ビューレン大統領との会見を予定されていたが、大統領はそのことにまったく気が乗らなかった。大統領は彼らが出した紹介状に少しも心を動かさず追い返そうとしたが、結局ジョセフの熱心な求めに押されて、会見が行われることになった。バン・ビューレン大統領から末日聖徒イエス・キリスト教会は当時の他のキリスト教の宗派と比べてどのように違うのかと質問されたとき、ジョセフは「バプテスマ、また按手による聖霊の賜物の授与の様式」が根本的に異なり、「ほかに考慮すべき事柄はすべて、聖霊の賜物に含まれると考え」<sup>20</sup>していると答えた。

当時の州権論が念頭にあり、政治上の支持者との良好な関係を非常に重視していた大統領は、モルモンとミズーリ州の間の問題は慎重な扱いを要することを承知していた。そのため大統領は教会の指導者たちの訴えに対して冷淡だった。ジョセフは後に次のように断言している。「わたしはマーティン・バン・ビューレン大統領と会って話をした。彼のわたしたちに対する態度は横柄なものだった。わたしたちの訴えに本気で耳を傾けようという気はさらさらなかった。わたしたちの話を聞いて、彼が答えた言葉はこうである。『あなたがたの申し立てはもっともです。しかしわたしがあなたがたのためにしてあげられることは何もありません。』」<sup>21</sup>預言者は上院の有力者ジョン・C・カフーン議員にも問題を理解してもらおうとしたが、やはり冷たくあしらわれた。

預言者とヒグビー長老はその後も上下両院の様々な議員に働きかけた。イリノイ州選出の議員団は彼らを特に良く遇し、イリノイ州選出上院議員リチャード・M・ヤングは議会に彼らの請願書を提出すると約束した。長文となったその請願書は、聖徒たちが1833年以来ミズーリ州で耐えてきた数々の苦難を詳細に述べ、最後を次のように締めくくっている。「我々はアメリカ国民として、またクリスチャンとして、人間として請願する。我々は、合衆国議会の高邁な正義の観念に照らせば、このような抑圧行為がこの広大な共和国に存するいかなる種類の国民に対してであれ実行されることについて、罰の適用のないままに済むことはないと信じる。また、このような虐待を受けてきた多数の人々が自らの被害に対し補償が得られるよう、諸氏の見識の命ずるところにより、何らかの処置が講じられるものと信じる。」<sup>22</sup>

その一方で預言者たちはイリノイ州に集合している聖徒たちに、迫害の事実と、ミズーリ州での土地の所有権を裏付ける証明書、供述書をできるだけ多く集めて送るようとの手紙を書いた。預言者は全部で491人分についての請求をミズーリ州に送付したと述べている。<sup>23</sup> これらの成り行きに当惑したミズーリ州選出の国会議員団は、多くの反モルモンまた以前モルモンだった人々の証言がなされたミズーリ州リッチモンドでの公聴会の筆記録を盾にして、防御態勢を固め始めた。

預言者は東部滞在中に、教会の数多くの支部を訪問した。フィラデルフィアでは約3,000人の聖徒を前にして話した。また預言者は、当時フィラデルフィアで幾冊かの本の出版の準備をしていたパーリー・P・ブラット長老と数日を過ごしている。パーリー・P・ブラットは次のように回想している。

「彼との話し合いの中で、神と天の永遠の秩序について、数多くの偉大で輝かしい原則を教えられた。彼から永遠に続く家族の組織という最も重要な教えを受けた

## 時満ちる時代の教会歴史

のはこのときだった……。

彼からは、愛する妻がこの世においても次の世においても自分に結ばれるということも学んだ。」預言者とのこのような恵まれた個人的接触は、パーリーのその後の生涯に大きな影響を及ぼした。

「以前から愛することはしていたが、その理由は分からなかった。しかし今わたしは純粋な思い、気高く尊い感情が持つ強さをもって愛するようになっている。その感情はわたしの魂をこの墮落した世界のつかの間の事柄から引き上げて大海のように広げてくれる。」<sup>24</sup>

当時のアメリカ、特に南部の政治家たちの間では、末日聖徒が提起したたぐいの問題は明らかに州内の問題であるという考え方が支配的であり、合衆国憲法は州内の問題に干渉する権利を認めていないという考えであった。このような考え方は疑いもなく各州の統治権に関する国内の論議を反映していた。そしてその論議がやがて頂点に達し、20年後の南北戦争に至るのである。

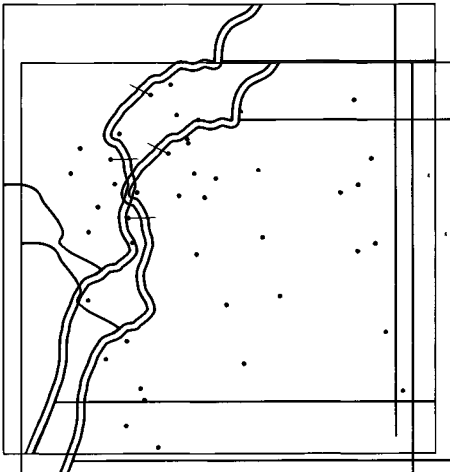
ジョセフ・スミスはエライアス・ヒグビーをワシントンに残して議会への請願の結果が出るのを待たせ、自分はノーブーへ戻った。1840年3月4日に上院の委員会は、議会としては何の処置もとらないという発表をした。そして教会に対してミズーリ州あるいは連邦裁判所に救済の訴えをするように勧告した。しかし、それは聖徒たちが何の効果ももたらさないと判断していた方法だった。4月に開かれた教会の総大会で、聖徒たちは以下の声明を決議した。「我々になされた不当な行為への補償を得る望みがことごとく断たれるなら、そのときは、国々の行く末を統御し、地に落ちるすずめにさえ心をかけられる大いなるエホバが必ず被害を救済し、遠からず我々の敵対者に報いてくださると信じ、この問題を天の法廷に訴えるものである。」<sup>25</sup>

### ノーブー憲章

聖徒たちの新しい集合地はイリノイ州のノーブー、アイオワ州のモントローズだけでなく、ミシシッピ川兩岸の幾つかの隣接地を含んでいた。教会員たちはハンコック郡の郡庁があるカーセージ、またラ・ハープ、ファウンテングリーンなどすでに教会員でない人々が定住していた所にも住み着いた。そしてレイマス、ライマ、イエルローム（定住地の基礎を築いたアイザック・モーリー “Issac Morley” の姓のスペルを逆に並べ変えて “Yelrome” とした）など自力で開発した小さな定住地もあった。ノーブー自体の周辺にも数多くの住宅地があった。しかし、ノーブーが中心地であることには間違いなかった。そして数か月のうちに、ノーブーはイリノイ州西部で政治的、経済的な影響力を持つようになった。

ジョセフ・スミスが東部から戻ると、ノーブーの行政形態をどうするべきかについて真剣な討議がなされた。1840年6月、スプリングフィールドの名士ジョン・C・ベネットがノーブーにやって来ると、この問題についての決着が促進されることになった。野心的で精力的なベネットは短期間に州都スプリングフィールドの軍人、医師、政治家たちの信奉を得ていた。トーマス・カーリン知事は彼を州軍の補給係将校に任じていた。ベネットはノーブーへ行く前に、預言者に手紙を書き、末日聖徒に対するミズーリ州の不当な扱いに憤りを表し、援助の申し出をした。彼はノーブー到着後間もなく、福音を受け入れ、バプテスマを受けた。彼は数多くの州政府

## イリノイの避け所



ノーブー時代に、イリノイ州ハンコック郡、アイオワ州のリー郡などで聖徒たちが築いた入植地が幾つか発展した。1846年に教会員がノーブーを脱出した時点におけるこの地域の総人口は1万5,000から2万と推定される。

職員をよく知っていたために、当然の成り行きとして、ノーブーの自治憲章のため請願活動を進める役回りを果たすことになった。10月の総大会において、ジョセフ・スミス、ロバート・B・トンプソン、ジョン・C・ベネットが提案を起草し、それをスプリングフィールドに届ける任に指名された。

ホイッグ党と民主党に対するベネットの陳情活動は功を奏し、ノーブー憲章は1840年12月16日に承認されるに至った。ノーブー憲章は1837年に承認されたシカゴやアルトン、また1839年のガレナ、1840年のクインシーなどの憲章に似ている。ノーブー憲章は、地元で軍隊、都市裁判所、大学などを設立する権利を認めるものである。教会の指導者たちはその広範かつ自由な内容の条項に大いに意気が上がった。それらの条項によれば、州政府の官吏はミズーリ州で見られたような、聖徒をだますという行為はできないと考えられた。ノーブーの立法権と行政権は、市長また4人の参事会員、9人の市会議員に属した。市長と参事会員は市裁判所の判事職も兼任した。これは自治権を認められていたほかの都市と違う点であった。つまり5名の役職者が地元政府の立法、行政、司法機関を統制するということである。

ジョン・C・ベネットは1841年2月1日にノーブーの初代市長に選出された。ほかにもジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、ハイラム・スミスなどを含めた教会の指導者たちが参事会員に選出され、聖徒たちと友好的な関係が保ち得る政治体制が作られた。市議会はすぐに軍隊を創設した。これはノーブー部隊と呼ばれ、次第に大きくなり3,000人の志願兵を擁するまでに至った。また、ノーブー憲章に定められた条項によると、ノーブー部隊は厳密には州軍に属していたが、ジョセフ・スミスと市のそのほかの指導者の統率下に置かれていた。そしてねたみ深い反モルモンの人々は、この地域においてモルモンの影響と力が衰えを見せずに成長していく様子に再び恐れを感じ始めた。

10年目にして初めて、聖徒たちは多少の<sup>あんど</sup>安堵感を覚えていた。主は再び避け所を見いだすよう彼らを導いておられた。使徒たちは以前に任命されていたイギリスへの伝道に行くことができる状態になっていた。彼らの預言者は危険がない状態でつつがなく暮らし、教会を指導していた。平和が満ちあふれ、イエス・キリストの福音を広める機会がすぐにも到来するかと思われた。

## 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』3: 251で引用

2. *History of Caldwell and Livingston Counties, Missouri* 『ミズーリ州コールドウェル郡とリビングストン郡の歴史』(St. Louis: National Historical Co., 1886), 42

3. ケネス・W・ゴッドフリー、オードリー・M・ゴッドフリー、ジル・マルベイ・デア共著、*Women & Voices* 『女性の声』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1982), 103 - 105参照

4. 『教会歴史』3: 269で引用

5. エリザベス・ハウ・バラードからエリザベ

ス・ヘーベンにあてた手紙、1839年2月24日付。オラ・H・パーロウ著、*The Israel Barlow Story and Mormon Mores* 『イズラエル・パーロウの物語およびモルモンの習慣』(Salt Lake City: Ora H. Barlow, 1968), 143で引用

6. ウィルフォード・ウッドラフの日記、1839年3月18日参照。末日聖徒歴史記録部、ソルトレーク・シティ

7. パーロウ 『イズラエル・パーロウの物語』156で引用

8. ドルシラ・ドリス・ヘンドリックス、"Historical Sketch of James Hendricks and Drusilla Dorris Hendricks" 『ジェームズ・ヘン

## 時満ちる時代の教会歴史

ドリックスとドルシラ・ドリス・ヘンドリックスの追想」末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー，22 - 23

9. デビッド・E・ミラー，デラ・S・ミラー共著，*Nauvoo: The City of Joseph* 『ジョセフの市，ノーブー』(Salt Lake City: Peregrine Smith, 1974)，26で引用

10. 『教会歴史』3 : 336で引用

11. “A Leaf from an Autobiography” *Woman's Exponent* 「自叙伝抄」『ウーマンズ・エクスポネント』1878年11月15日付，91

12. ウィルフォード・ウッドラフの日記，1839年7月22日

13. ウィルフォード・ウッドラフ，*Leaves from My Journal* 『わたしの日記から』(Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1882)，63

14. ウッドラフ 『わたしの日記から』65

15. ウッドラフ 『わたしの日記から』65参照

16. パーロウ 『イスラエル・パーロウの物語』163で引用

17. バラードあてのヘーブンの手紙，1839年9月30日付。パーロウ 『イスラエル・パーロウの物語』158，160 - 161で引用

18. アンドリュー・ジェンソン，*The Historical Record* 『歴史記録』1889年3月，738

19. ディーン・C・ジェシー編，*Personal Writings of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミス私文書集』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1984)，448

20. 『教会歴史』4 : 42で引用

21. 『教会歴史』4 : 80

22. 『教会歴史』4 : 38で引用

23. 『教会歴史』4 : 74 教会は1842年と1843年に幾度も訴えを起こしている。合計703名の訴願人が各自の供述書を提出した。クラーク・V・ジョンソン “The Missouri Redress Petitions: A Reappraisal of Mormon Persecutions in Missouri” *Brigham Young University Studies* 「ミズーリ州における救済措置の請願——ミズーリ州でのモルモンの迫害の再評価」『ブリガム・ヤング大学紀要』1986年春季号，31 - 44

24. *Autobiography of Parley P. Pratt*，Classics in Mormon Literature series 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ，パーリー・P・プラット編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985)，259 - 260

25. 『教会歴史』4 : 108で引用

# 十二使徒の伝道

年表	
年代	重要な出来事
1839.4.26	十二使徒会全員が、ヨーロッパへの伝道に出発する前にファーストに会して、預言を成就する
1839.6.27	使徒たちが、その使命について大管長会から訓練を受ける
1840.4	オーソン・ハイドとジョン・E・ページが、ユダヤ人帰還の地としてパレスチナを奉獻する任に召される
1840.5	イギリスで『ミレニアルスター』の発行が開始される
1840.3.8	ウィルフォード・ウッドラフたちが、3つの郡にまたがる地域で、約800人にバプテスマを施す
1840.6	イギリスの聖徒が初めてアメリカに移住する
1841.4	十二使徒がマンチェスターですばらしい大会を開き、その後アメリカへ戻る
1841.10.24	オーソン・ハイドがオリブ山で奉獻の祈りをささげる
1843.6	十二使徒により、太平洋地域で働く4人の宣教師が召される

▶ ヘレフォードシャー・ビーコンは近辺で最も有名な丘で、ローマ帝国軍に壊滅させられた要塞があった所。

ウィルフォード・ウッドラフ、ブリガム・ヤング、ウィラード・リチャーズは、歴史的に由緒あるこの場所へ来て、イギリスの聖徒たちが使う『モルモン書』と賛美歌集の発行について、祈り、話し合った。その計画を進めるようにとの確認を受けた後、彼らはそれを実現するためにジョン・ベンボー、トーマス・キングトンから受けた300ポンドを使った。

**聖**徒たちがノーブー定住を進めているころ、預言者ジョセフ・スミスは海外における教会のさらなる伸展を計画していた。その伸展は1837年にヒーバー・C・キンボールとオーソン・ハイドがイギリスへの伝道に召されたことによって始まった。主は早くも1835年に、十二使徒定員会会員に対して、「全世界におけるキリストの名の特別な証人」となり、「教会を築き上げ、すべての国々において教会の諸事をすべて整える」ようにと命じておられた。十二使徒たちは「イエス・キリストの福音を宣言することによって門を開く」鍵を授けられていた（教義と聖約107：23, 33, 35）。また十二使徒たちは、「どこでもあなたがたがわたしの名を宣言する所で、人々がわたしの言葉を受け入れるように、効果的な門があなたがたのために開かれるであろう」との約束も受けていた（教義と聖約112：19）。この約束は、それが明らかにされた1837年7月23日にまさしく成就した。その日に、ヒーバー・C・キンボールとその同僚たちはイギリスのプレストンにあるボックスホール礼拝堂で教えを説くように求められ、英国諸島における最初のバプテスマという結果に至ったのである。イギリスでも御業が大きな成功を得て前進するにつれ、十二使徒たちのさらなる関与が期待されるようになった。





1838年4月26日、主はジョセフ・スミスに、ミズーリ州ファーウェストに神殿を建設するように命じられた。1838年7月4日に隅石が据えられ、プリガム・ヤングによって敷地の奉獻が行われた。十二使徒たちは教義と聖約118：3-6の主の戒めを成就し、1839年8月26日にイギリスでの伝道のためにファーウェストをたった。

現在教会はこの地を所有し、1968年には整地を行い記念碑などを建て隅石を保存している。

### イギリスに召される十二使徒

1838年3月、ジョセフ・スミスはミズーリ州ファーウェストに定住して間もなく、十二使徒によるイギリス伝道をさらに進めるための準備を始めていた。十二使徒の一人であるデビッド・W・パッテンは啓示により、その翌年に伝道に出る備えをするように命じられた（教義と聖約114：1参照）。1838年7月8日、ほかの啓示を通して、ジョン・テラー、またジョン・E・ページ、ウィルフォード・ウッドラフ、ウィラード・リチャーズが十二使徒に召された。使徒たちには「大海を越えて行き、そこでわたしの福音、すなわち完全な福音を広め、わたしの名について証しなさい」（教義と聖約118：4）という責任が与えられた。主はまた、1839年4月26日に彼らに、ファーウェストを出発してイギリスへ向かうように命じられた。

この啓示が与えられたとき、教会の指導者たちは主に命じられたことはさしたる困難もなく成就できると考えていたが、その後の迫害とミズーリ州からの聖徒の追放は、ファーウェストからの4月出発の実現を非常に危うくした。多くの暴徒たちはミズーリにまだ残っていた教会員を苦しめ、そのような啓示が成就するはずがないと公言してはばからなかった。しかしプリガム・ヤングは、主が命じられたようにファーウェストへ行くよう同僚たちを促し、主が守ってくださると約束した。

4月26日の午前12時を少し過ぎたときに、プリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、オーソン・プラット、ジョン・E・ページ、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・A・スミスがほかに20名余りの聖徒とともに、月下のファーウェスト神殿用地に会した。彼らは自分たちの命が危険にさらされている中で、南東の隅に大きな石を転がし、主の宮の再定礎を始めた。プリガム・ヤングは次のように報告している。「この啓示はこうして成就した。わたしたちの敵はこの啓示について、もしジョセフ・スミスのほかの啓示がすべて成就したとしても、その啓示は絶対に成就しないだろう。なぜならそれには日付まで定められているからだと言っていた。」<sup>1</sup>その日の朝早い時間に、十二使徒とともにファーウェストにいた聖徒の一人セオドア・ターリーが背教者アイザック・ラッセルの家へ、別れを告げに行った。ラッセルは友人のターリーが十二使徒会の会員たちとともにファーウェストにいたことに非常に驚き、預言が成就したことを知って一言も発することができなかった。

聖徒たちがコマース（ノーブー）に集合地を見いだすまで、イギリス伝道のためにさらに準備を進めることはなかった。1839年6月27日、大管長会と十二使徒会は特別な会を持った。席上、自分の愚かな行為と罪をへりくだって告白したオーソン・ハイドが十二使徒会への復帰を認められた。預言者ジョセフ・スミスはそこに集まった指導者たちに、彼らが各々の使命を達成できるようさらによく備えさせるため、福音の基本原則について教えた。1週間後、アイオワ州モントローズでさらに指示が与えられた後に、大管長会は十二使徒とその妻たちに個別に祝福を与えた。祝福を受けたその人々について、ウィルフォード・ウッドラフは次のように記録している。「わたしたちは忠実ならば、また家族のもとへ戻り、伝道においても祝福され、その働きの確認のしるしとして多くの人を改宗に導くという約束を受けた。」その祝福の後で、ジョセフ・スミスは「彼らが送り出されるのは教えを受けるためではなく、

## 十二使徒の伝道

人々に教えるためであること、またまじめであり、常に油断のないようにし、話しかける言葉に愛を込めるようにすること。さらに、今は多くの言葉を弄するときではなく警告を発するときであることを心に留めるべきであること<sup>2</sup>を教えた。

7月7日日曜日、十二使徒たちは彼らのために開かれた送別会で話をし、一人一人が自分の携わっている業について力強い証を述べた。彼らがイギリスへ向けて出発するのを切望していたのはだれの目にも明らかだったが、運悪く、すぐに出発することはできなかった。翌週、ノーブーとその近辺にマラリアが蔓延したのである。十二使徒たちもこの病に襲われ、彼らの出発は一時延期を余儀なくされた。しかし、7月22日「神の力が現された日」の後、「十二使徒たちは全員が……『病気がどうかにかかわらず』自分たちの使命を果たす決意をした。8月4日日曜日、断食と祈りのこの日に、預言者は『イエス・キリストの啓示に従って、財布も伝道方法を記したのも持たずに行く』よう改めて教えた。』<sup>3</sup>

## 宣教師たちの出発

ジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフはまだマラリアを患っていたが、すぐに出立する決心をした。ウィルフォード・ウッドラフは次のように書いている。「8月8日の朝早く、わたしは病の床から起きると、病気の妻フィービーの頭に手を置き、祝福を与えた。それからわたしは妻のもとを離れることになったが、食料も生活に必要なものもほとんど残してやるができなかった。彼女はわたしの責任の重要さを思い、聖徒らしく毅然として別れに耐えた……。

病み上がりの体で衰弱していたが、わたしはミシシッピ川の岸まで歩いて行った。そこでヤング十二使徒定員会会長がわたしをカヌーに乗せ……川向こうまで運んでくれた。岸に上がると、わたしは郵便局のそばで、皮の上に体を横たえて休息を取った。神の預言者ジョセフ兄弟がやって来て、わたしを見て言葉をかけた。『ウィルフォード兄弟、伝道への旅を始められたんですね。』わたしが『そうです。しかし宣教師というよりは解剖室へ送られる死体という感じです』と言うと、ジョセフは『どうしてそのようなことを言うのですか。さあ、起きて旅を続けなさい。すべてがうまくいきます』と答えた。』<sup>4</sup>

ジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフは苦勞して東海岸へ向かう旅を続けた。インディアナ州でジョン・テラーが重い病気になる、ウィルフォードは彼を主の手に託してその場に残し、独りで先を進まなければならなかった。やがてテラー長老も奇跡的に回復し、旅を続けた。再度病に倒れたものの、最後にはニューヨーク州でウッドラフ長老に再会することができた。

ほかの兄弟たちの旅立ちも同じように困難を極めた。ブリガム・ヤングは妻メアリー・アンが女の子を出産した直後に、9月14日に出発する準備が整った。しかし、モンローズを出発するとき、彼の病気は重く、助けなしには川までの約500フィート（約150メートル）の距離も歩けないほどだった。3日後、出産直後でまだ衰弱していたメアリー・アンは、ノーブーのヒーバー・C・キンボールの家に行った夫の世話をするために、ミシシッピ川を渡る手配をした。9月18日、ブリガムとヒーバーはその日に出発することに決めた。二人とも病状がひどく、馬車に乗るにも助けが必要だった。キンボール家族も一人を除いて全員が病の床に伏していた。4歳のヒーバ



ウィルフォード・ウッドラフの妻であるフィービー・カーター・ウッドラフとその子ジョセフ・ウッドラフを描いたこの古風な絵は、イギリスのリバプールから移住して来た末日聖徒トーマス・ワードの作品と言われている。この絵は1845年ごろにノーブーで描かれたものと思われる。



## 時満ちる時代の教会歴史

ー・パーリーだけが病気にかからず、病人に何とか水を運ぶ仕事ができるくらいであった。

「馬車が走りだすと、ヒーバーは『死に抱きかかえられているような状態の家族を残して出かけることを思うと、わたしの心はやるせなさでいっぱいになった。わたしにはとても耐えられなかった』という。そして彼は『御者に止まってもらい、ブリガム兄弟に言った。「これはちょっときついですね。立ち上がって、励ましの喚声を挙げましょう。」そこでわたしは立ち上がり、帽子を頭上で3回振って叫んだ。「万歳、万歳、イスラエル！」パイライトはこの騒ぎを見てベッドから起き上がり、ドアの所へ出て来た。顔には笑みを浮かべていた。パイライトとメアリー・アン・ヤングはわたしたちに叫び返した。「さようなら。神の祝福がありますように。』」<sup>5</sup>

ヤング長老とキンボール長老は途中、ジョージ・A・スミスと合流した。旅の途中、ブリガムが自分のトランクを開けると、いつも次に乗る馬車の料金分ちょうど金額が入っていた。ブリガムはヒーバーが補充しているものとばかり思っていたが、そうではないことが後になって分かった。彼らは教会員が提供してくれた13ドル50セントを持って旅に出たが、馬車代にすでに87ドル使用していた。「福音を広める業の進展を助けるために天から遣わされた目に見えない使いによる以外」<sup>6</sup>、トランクの中の金額が減らなかったことの原因が彼らには思いつかなかった。彼らは病気のためにニューヨーク州北部に数週間とどまった。ブリガム・ヤングはニューヨーク州モラビアで病気になり、回復するまでカレブ・ヘイトとウィリアム・バン・オーデンの家族の看病を受けた。バン・オーデン兄弟はまた、ジョージ・A・スミスのために外套がいとを作った。ジョージ・A・スミスは肩にかけるキルト以外に寒さから身を守るものを何も持っていなかったのである。

冬の間7人の使徒がニューヨーク・シティーに到着した。彼らはそこで福音を説き、ほかに教会に必要な仕事をし、またイギリスへの渡航に必要な資金を得た。パーリー・P・ブラットは次のように回想している。「わたしたちはニューヨークにともいた数日の間に、大切な集会を何度も開いた。それらの集会で聖徒たちは喜びに満たされ、人々はわたしたちのメッセージが真実であることへの確信をさらに深めた。わたしたちがそこに滞在していた数日間に、ニューヨークで約40人がバプテスマを受け、教会に入った。」<sup>7</sup>まずウィルフォード・ウッドラフ、ジョン・テラー、セオドア・ターリーが1839年12月19日にイギリスへ向けて出航し、23日後に目的地へ到着した。ほかの人々は3月に3月に出航し、教会設立から10周年に当たる1840年4月6日にリバプールに到着した。

イギリスが十二使徒を必要としていたことはすぐに明らかになった。イギリスでは1837年の最初の伝道以来、迫害や地元における確固とした指導者の不足などが原因で、数多くの会員が背教し、教会から離れ去っていた。地元の新聞紙上で行われる教会への攻撃はますます頻繁になり、激しくなっていた。様々な教派の聖職者たちが説教や講演を通して反対の声を上げていた。教会内部でも、ジョセフ・フィールディング・スミス、ウィラード・リチャーズ、ウィリアム・クレイトンが構成する伝道部長会の管理に異を唱える人々がいて、小さな聖徒のグループを正しくない道へ導き、伝道の進展を遅らせていた。

ヒーバー・C・キンボール長老は、聖徒たちを励まし、イギリスにおける業の進

## 十二使徒の伝道

十二使徒たちが伝道した期間に、イギリスの多くの地域に福音が伝えられた。

スコットランド、エジンバラ。1839年12月に最初の宣教師がこの地に来る。1840年5月18日、オーソン・ブラット長老が到着。翌朝、アーサー王伝説で有名な市街地を見下ろす丘で、彼はスコットランドを福音を宣べ伝える地として奉獻した。

スコットランド、ピショップトン。ここで1840年1月14日にアレクサンダー・ヘイとジェシー・ヘイがバプテスマを受け、スコットランドで最初の改宗者となった。

イングランド、カッスル・フロム。ウィルフォード・ウッドラフは1840年の3月から7月にかけてこの地とヒル・ファームで伝道した。ウィルフォード・ウッドラフはジョン・ベンボー、ジェーン・ベンボー夫妻を含め、多くの同胞教会の教会員にバプテスマを授けた。

マン島、ダグラス。1840年にジョン・テラーがマン島を奉獻し、地元の聖職者と有名な討論を行った。また彼は自分の妻の親戚で、ジョージ・Q・キャノンのおばに当たるレオノラ・キャノン・テラーに福音を説き教えた。

イングランド、ヘレフォードシャー・ビーコン。この地で1840年5月20日に、プリガム・ヤング長老の管理の下に評議会が開かれ、イギリスでも『モルモン書』と末日聖徒賛美歌集の出版が決定された。

イングランド、リバプール。1837年に、末日聖徒の最初の宣教師がこの地に上陸した。リバプールは1842年から1929年にかけてイギリスにおける教会の本部としての役割を果たし、アメリカへの移民が集合し、教会の印刷所が置かれた場所である。『ミレニアルスター』をはじめ、ほかに教会の重要な出版物がここで発行された。また1900年までに、8万5,000人の末日聖徒がいったんリバプールに集ってからアメリカへ移住した。

イングランド、ロンドン。ロンドンでの伝道活動は1840年8月18日に始まった。ロndonはチャールズ・W・ベンローズ、ジョージ・ティーズデル、ジョージ・レイノルズなど幾人かの教会中央役員の出生地である。

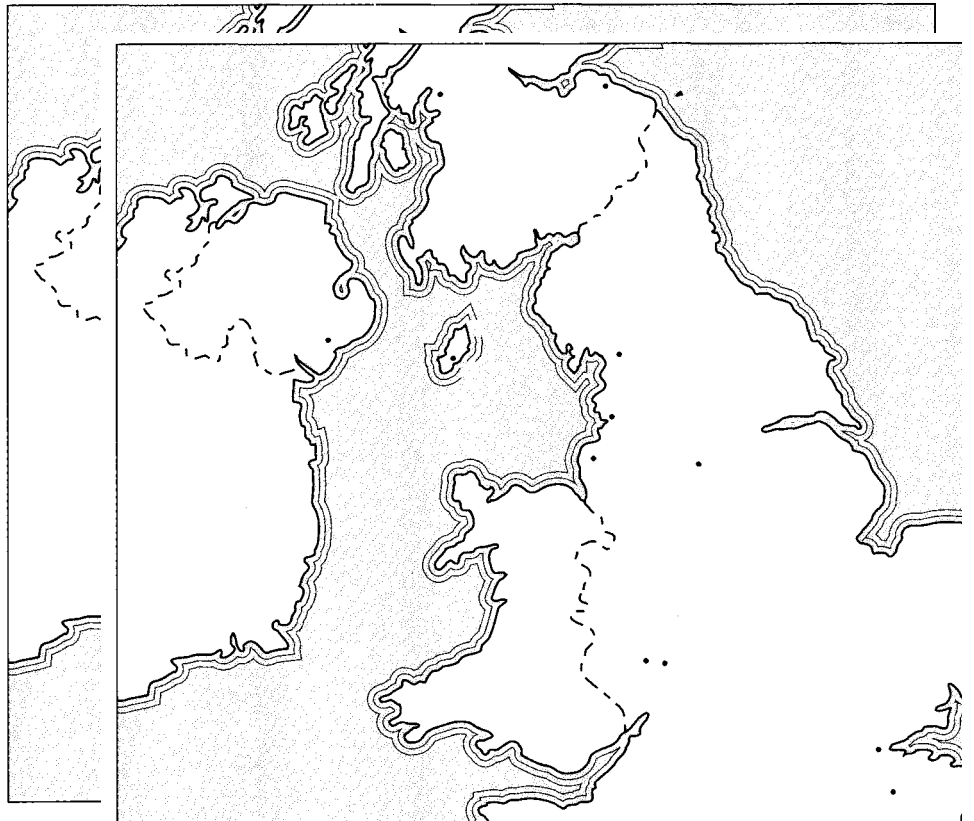
アイルランド、ラフブリックランド。1840年7月31日に、ジョン・テラーはここでトーマス・テートにバプテスマを施した。彼はアイルランドで最初の改宗者である。

イングランド、ミルンソープ。ここはジョン・テラー大管長の出生地である。

イングランド、ニューチャペル。1958年9月7日にデビッド・O・マッケイ大管長によって奉獻されたロンドン神殿用地。

イングランド、マンチェスター。マンチェスターには1840年から1842年にかけて、イギリスにおける教会の本部が置かれていた。プリガム・ヤング長老は宣教師として働いた期間の大半をここで過ごした。大英帝国初のステーキは、1960年3月27日にハロルド・B・リー大管長によってロンドンで組織され、また1971年8月には教会の最初の地域大会がこの地で開催された。

イングランド、プレストン。1837年7月23日に、ヒーバー・C・キンボールはこの地で初めて福音についての説教を行った。同年の8月に支部が設立された。プレストンには1837年から1840年にかけて、教会の本部が置かれていた。ウィラード・リチャーズは1840年4月にここで開かれた大会で使徒に聖任された。



展を妨げているのがだれであるかをしっかりと見定めるようにとの手紙を、アメリカから何度か書き送った。しかし、教会がイギリスにとどまり続けるには、回復された福音の教義をよく理解した強力な説教者と教師、また各支部の秩序を確立できる経験を積んだ指導者が緊急に必要とされていた。

イギリス諸島では宣教師としての十二使徒来訪の機が熟していた。イギリス国民の多くは、アメリカから来た宣教師たちと言語、文化、伝統などの面において、共通の地盤となるものを持っていた。イギリスでは信仰の自由は根強い慣習として残っており、ヨーロッパ大陸に特有の聖職者への強い依存というものもなかった。人々は使徒たちが伝道に用いていた欽定訳を誇りにし、『聖書』を愛しよく読んでいた。またイギリスには宗教的礼拝を尊重する法律の一律的適用を保障する強力な中央政府があった。それゆえ、宣教師たちはイギリス国内のどこへ行っても、ほかの教会の聖職者たちと法律的に対等の立場にあった。また産業革命は下層階級の社会的地位を弱め、その階級の人々は聖職者からも見捨てられたという意識を持っていた。多くの人々がそれぞれの生活の中で、霊的にも物質的な面でも支えになるものと喜びを求めていたのである。これは大英帝国に福音を伝えるために主によって備えられた状況であった。

### 大英帝国における十二使徒の働き

イギリスに最初に着いた使徒たちであったウィルフォード・ウッドラフ、ジョン・テラーは、伝道部長に会うためにプレストンの教会本部へ急いだ。それから後は、二手に別れることに決まった。テラー長老はジョセフ・フィールディングとともにリバプールへ戻り、ウッドラフ長老はセオドア・ターリーとともに南へ進

## 時満ちる時代の教会歴史

1840年、ウィルフォード・ウッドラフの働きの概要<sup>8</sup>

旅した距離	4,469マイル (約7,150キロ)
開いた集会	230回
事前に予告して行った説教会場	53か所
設立した教会	47か所
そこに属する教会員数の合計	1,500人
長老	28人
祭司	110人
教師	24人
執事	10人
出席した大会	14
施したバプテスマ数	336人
そのうちイギリス国教会の説教師	57人
同じく牧師	2人
バプテスマへ導いた数	86人
施した確認の儀式の数	420人
確認の儀式の執行を助けた回数	50回
聖任した人	
長老	18人
祭司	97人
教師	34人
執事	1人
祝福を受けた子供	120人
癒しの儀式を施した人数	120人
資金調達面での働き	1,000ポンド(『ミレニアルスター』, 『末日聖徒賛美歌集』3,000冊, 『モルモン書』5,000冊の印刷費用)の調達に助力
アメリカ移住のために援助を受けた教会員数	200人
書いた手紙	200通
受け取った手紙	112通
暴徒から攻撃を受けた回数	4回

み、陶器製造が盛んな所としてその名を知られたスタッフォードシャー・ポターリーズへ向かった。

テラー長老とフィールディング長老は1月23日にリバプールでの働きを開始し、2月4日には4名の改宗者にバプテスマを施した。また2月には、ジョン・テラーの妻のレオノラの兄弟であるジョージ・キャンノンの家族全員にバプテスマを施した。当時、ジョージ・Q・キャンノンはまだ12歳の少年にすぎなかったが、後にはハワイ諸島で目覚ましい働きをした宣教師となり、さらには十二使徒定員会の会員、おじのジョン・テラーを含む4人の大管長の副管長として仕えた。リバプールでの業は着実に進み、残りの十二使徒たちが4月に到着したときには、この港町に教会の支部が組織されていた。

ポターリーズでウッドラフ長老がこの地域の小さな町々に首尾よく幾つかの支部を組織し、ターリー長老にその管理の責任を与えた。ウッドラフ長老は3月に靈感を受けて自分の改宗者の一人ウィリアム・ベンボを伴って、さらに南のヘレンフォードシャーへ向かった。そこで二人はウィリアムの兄弟ジョン・ベンボとその妻ジェーン・ベンボ、また同胞教会と呼ばれる独自の宗教団体を作っていた600人のグループに接触した。最終的にはそのグループの指導者トーマス・キングトンと600人の会員のうち一人を除いた全員が回復された福音を受け入れ、バプテスマを受けた。ほかにその近辺の地域で何百という人々が教会に加入した。

彼らの働きは成功したが、その成功には必ず妨害が伴った。地元のある巡査が、無許可で説教をした罪でウッドラフ長老を逮捕するために派遣されたが、逆に彼はウッドラフ長老の靈感あふれる説教を聞いた後でバプテスマを受けた。また別のときには、ウッドラフ長老が何を教えているかを探るために送られた二人の牧師がそろってバプテスマを受けたこともある。その地域の聖職者たちは最後にイギリス国教会の長であるカンタベリー大主教に、その影響力をもってモルモンのイギリスでの活動を禁止してほしいという手紙を書き送った。しかしイギリスにおける宗教的寛容を定めた様々な法律を認識していた大主教はその聖職者たちに、彼ら自身ももっと献身的な牧者となることによって、その問題を解決するように勧めた。ところがその聖職者たちは反モルモンの説教を繰り返し、地元の新聞を扇動して末日聖徒を攻撃した。

この地域で教会が成長するにつれ、それに反対する動きも大きくなった。ウィルフォード・ウッドラフはホークロスの村で人々に説き教えていたときに、敵意もあらわな暴徒たちに取り囲まれた。村人の幾人かがバプテスマを受けたいと申し出ると、ウッドラフ長老は、もし彼らがそうするに足る信仰を持っているというのなら、暴力的な威嚇があるにもかかわらず、自分には儀式を施すだけの信仰があると答えた。その小さなグループは池のある所まで行ったが、すぐに石を持って構えている暴徒に囲まれた。ウィルフォード・ウッドラフの記録には、次のように書かれている。「心にひたすら神を思いながら水の中に入り、彼らがわたしに石を投げつけている間に5人にバプテスマを施した。石の一つが頭に当たり、わたしは危うく倒れてしまいそうになった。」<sup>9</sup>

また別のときには、ダイモックの村の聖職者に率いられた50人以上の暴徒が、聖徒たちが祈りの会を開いている家に石を投げつけたこともあった。イギリスではこ

## 十二使徒の伝道



『ミレニアルスター』は1840年5月27日に英国、マンチェスターで創刊された。『ミレニアルスター』はパーリー・P・プラットの編集で、月刊誌として出発したが、その後、月2回、週に1回となり最後は元に戻ってまた月1回の刊行となった。

1842年、イギリスの教会本部はリバプールに移り、『ミレニアルスター』は1933年まではそこで出版され、それ以降はロンドンで出版されるようになった。1970年に廃刊になるまで、教会で最も古くから続いた出版物であった。その出版期間の大半、『ミレニアルスター』はイギリス伝道部部长によって編集された。



リバプールのイズリングトンストリート42番地にあったこの建物は、1855年から1904年まで、イギリス伝道部の本部また『ミレニアルスター』の発行所として使われていた。

のようなことは比較的少なかったが、ウッドラフ長老はこれらの体験を通して、回復された福音への強い反対があることを認識した。

ウィルフォード・ウッドラフたちの努力により、ヘレフォード、ウスター、グロスターの3つの郡にまたがる地域で、約800人が改宗した。レッドベリーの市場町を訪ねたとき、ウッドラフ長老はバプテスト派の聖職者に、自分たちの教会の集会で話をするようにとの招きを受けた。その集会の後で、その聖職者と会衆の中の幾人かが、バプテスマを受けたいと申し出た。またあるとき、ウィルフォード・ウッドラフがバプテスマの儀式を執行しているところへ馬車に乗った何人かの聖職者が通りかかった。その聖職者たちは喜んでバプテスマを受け、また旅を続けた。ウィルフォード・ウッドラフは彼の人生の中でも特別なこの時期を振り返り、次のように記している。「このヘレフォードシャー時代の伝道生活はすべて、神の御霊の静かな細い声と聖霊の啓示に耳を傾けることの大切さを示している。人々は光と真理を祈り求めていた。そして主はわたしを彼らのところに遣わされたのである。」<sup>10</sup>

1840年4月、ほかの使徒たちがイギリスに着いたとき、イギリス伝道部で教会を指導する責任を受けていたブリガム・ヤングは指導者たちをプレストンに招集して教会の総大会を開いた。合計33の支部から約1,600人の教会員がこの大会に集まった。大会で最初に処理された議事は、1838年の啓示に即した、ウィラード・リチャーズの使徒職への聖任であった。またブリガム・ヤングが十二使徒定員会の会長として提示され支持を受けた。これによって今や十二使徒のうち8人、すなわちブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、パーリー・P・プラット、オーソン・プラット、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・A・スミス、ウィラード・リチャーズがイギリスに同時に滞在することになった。ほかの二人の使徒、ウィリアム・スミスとジョン・E・ページはイギリスでの伝道に召されなかった。オーソン・ハイドはこれよりも後にイギリスへ来て、数か月間使徒たちと働きを共にし、さらに、ユダヤ人帰還の地として聖地を奉獻するためパレスチナへと向かった。十二使徒会の一つの空席は、当時はそのままになっていた。

この大会では『モルモン書』、賛美歌集、イギリスの聖徒のための月刊誌の発行も承認された。ウッドラフ長老の提案に従い、その新しい出版物には『末日聖徒のミレニアルスター』(Latter-day Saints' Millennium Star)という名が付けられ、パーリー・P・プラットがその編集者として選ばれた。十二使徒会は聖徒たちのノーブー移住を強く勧めて、この大会を閉じた。

ブリガム・ヤングはイギリスの教会の指導において、霊的な面においても管理的な面においても非常に優れた能力を発揮した。南部にいたウィルフォード・ウッドラフと改宗した元同胞教会の会員を訪ねたとき、彼は神権の力を行使して人々の耳目を集める癒しの業を行った。音楽家ウィリアム・ピットの姉妹で11年間病に苦しんでいたメアリー・ピットという女性が祝福を求めてきた。ピット家の人々はその前日にバプテスマを受けていた。ウィルフォード・ウッドラフはこう記録している。「わたしたちは彼女のために祈り、その頭の上に手を置いた。ヤング兄弟が儀式の言葉を述べ、健康になるようにと彼女に命じた。彼女は松葉杖<sup>つえ</sup>を手放すと、その後は一度もそれを使わなかった。そして次の日には3マイル(約5キロ)も歩いたのである。」<sup>11</sup>メアリー・ピットは、ブリガム・ヤングの神権の祝福の力を通して癒された

## 時満ちる時代の教会歴史

パーリー・P・ブラットとオーソン・ブラットは、イギリスにおいて福音のメッセージを広める業を促進するために、7年の間に小冊子や新聞の発行を積極的に進めた。以下は彼らがイギリス滞在中に出した出版物の一覧である。

パーリー・P・ブラット

『末日聖徒イエス・キリスト教会の牧者からイングランドの人々へのメッセージ』(An Address by a Minister of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints to the People of England)

『神学への鍵』(Key to the Science of Theology)

時のしるしと世界の政治の将来に関する女王陛下への書簡

『ユタ州における結婚と道徳』(Marriage and Morals in Utah)

トーマス・テラー氏の『完全なる誤り』(Complete Failure) とリチャード・リベシー氏の『暴かれたモルモン教』(Mormonism Exposed) に対する回答

『混乱した世界 地上の楽園』(The World Turned Upside Down; or, Heaven on Earth)

オーソン・ブラット

『聖なる権威 ジョセフ・スミスは神より遣わされた人物か』(Divine Authority; or, The Question, Was Joseph Smith Sent of God?)

『神の王国』第1 - 4部(The Kingdom of God, Parts 1 - 4)

『驚くべき示現』(Remarkable Visions)

『新エルサレム 現代の預言の成就』(New Jerusalem; or, The Fulfillment of Modern Prophecy)

『「モルモン書」の聖なる出自の確かさ』(Divine Authenticity of the Book of Mormon) 第1 6号

『モルモンズムについて』(Remarks on Mormonism) と題する、諸宗派聖職者の認可を付しグラスゴーで出版されたパンフレットへの回答

『唯心論の不条理』(Absurdities of Immaterialism)

『大いなる神 宇宙の自動する力』(Great First Cause; or, The Self-Moving Forces of the Universe)

『聖霊』(The Holy Spirit)

『末日の王国 再臨への備え』(Latter-day Kingdom; or, The Preparations for the Second Advent)

『奇跡の必要性』(Necessity for Miracles)

『真の信仰』(True Faith)

『真の悔い改め』(True Repentance)

『水によるバプテスマ』(Water Baptism)

『霊的な賜物』(Spiritual Gifts)

『万国における背教』(Universal Apostasy)

『三次方程式と四次方程式の簡潔新解法』(New and Easy Solution of the Cubic and Biquadratic Equations)

イギリスの数多くの聖徒の一人であった。

ヤング会長はまたイギリス諸島における伝道活動を進展させた。彼の指示の下に、ヒーバー・C・キンボールは1837年から38年にかけて伝道活動をした北イングランドの幾つかの支部を訪問した。ヒーバー・C・キンボールはそれまでの間忠実であり続けた人々を励まし、また迫害のために離れ去っていた多くの人々を再び教会に導くために働いた。南イングランドにいたウィルフォード・ウッドラフを助けるために、ウィラード・リチャーズが派遣された。イングランドへ移住しリバプールにいたアイルランド人の間で成功を収めていたジョン・テラーは、3人のアイルランド人の同僚とともに、アイルランドへ渡った。目的はアイルランドの地に福音を広めることにあった。彼らは成功らしい成功を収めることができなかったが、大切な基礎を築いた。リバプールに戻ると、テラー長老はアイリッシュ海に浮かぶマン島に福音を広める必要があると心に強く感じた。マン島には彼の妻レオノラの親戚が数多くいた。間もなく彼はこの島で幾人かにバプテスマを施し、支部を一つ組織した。

オーソン・ブラットはスコットランドに福音を広める割り当てを受けた。オーソン・ブラットはサミュエル・マリナー、アレクサンダー・ライトという二人のスコットランド出身の改宗者の働きを基にして、この地での業を進めた。この二人は親族や友人に福音を伝えるために、1839年にカナダから故国へ戻っていたのである。そしてオーソン・ブラットが到着する以前に、20人の改宗者のグループを得ていた。ブラット長老は1840年5月8日、グラスゴーから数キロ離れたペーズリーに、スコットランド最初の支部を組織した。そして5月下旬に、福音を宣べ伝える地としてスコットランドを奉獻し、200人の改宗者が得られるよう主に祈った。スコットランドの首都エジンバラでの業は当初歩みが遅く、8月までにバプテスマを受けたのはわずか18人であった。しかし非常に精力的な宣教師オーソン・ブラットは10か月間懸命の働きをし、1日のうちに7回も街頭集会を開くことがよくあった。彼は『幾つかの驚くべき示現に関する興味深い記録』(A Interesting Account of Several Remarkable Visions) と題したパンフレットを出版した。このパンフレットには、預言者ジョセフ・スミスが経験した最初の示現についての印刷物として初めて世に出された記録が含まれていた。ブラット長老は伝道期間のほぼすべてをスコットランドで過ごし、1841年3月にこの地を去るときには、祈りがかなえられ、エジンバラ地区の教会員は226人を数えるまでになっていた。

1840年8月、ジョージ・A・スミス長老はキンボール長老とウッドラフ長老を伴い、世界有数の大都市ロンドンへ向かった。テンパランスホール(禁酒運動団体の会館)で教えを説こうとしたが断られ、野外市場として有名なスミスフィールド・マーケットへ行った。しかし、そこでもできないということを聞かされた彼らは、地元のある時計屋に案内されて、ロンドンをわずかに離れた所にあるタバナクル・スクウェアへ向かった。スミス長老はそこで、騒がしいながらも関心の強い人々に向かって説教をした。地元の聖職者の一人が群衆に、ジョージ・A・スミスはモルモンであり、彼の話<sup>ほうがん</sup>に耳を傾けるべきではないと話すと、イギリス人の判官びいきの精神を刺激し、人々はさらに熱心にスミス長老の話に聞き入ったが、進んでバプテスマを受けようとする人はいなかった。

## 十二使徒の伝道

数日伝道をしたものの成果はなかった。しかしその後で使徒たちの努力はついに報われ、彼らに好意的だったヘンリー・コナーという先の時計屋が福音を受け入れたのである。とはいえ、ロンドンにおける教会の成長は遅々としていた。彼らはブリガム・ヤングへの報告書の中で、次のように書いている。「アメリカやヨーロッパで旅をしてきたわけですが、福音への関心を呼び起こし、神の言葉を受け入れるよう心の備えをさせるために、様々な反論や障害の数々をその思いの中から取り除かなければならなかったという点で、ロンドンの町の人ほど難しい例は今まで見たことがありません。」<sup>12</sup> ブリガム・ヤングはロンドンでの伝道活動を支援するために、1840年12月にその地を訪ねた。そして1841年2月14日までに、アメリカから新たに到着した若い宣教師ロレンゾ・スノーを管理者として、地元組織を作るに十分な数の人々をバプテスマに導いた。その後3年間、スノー長老はロンドン滞在中に、数百人を新会員として教会に導き、美しい装丁の『モルモン書』を2冊、ピクトリア女王とその夫君アルバート公に献上した。

イギリスにおけるパーリー・P・ブラットの務めは、教会出版物の執筆と編集がおもなものであった。それは当時行われていた伝道活動を成功させるうえで重要な意味を持っていた。彼はまた幾つかの小冊子と月刊誌『ミレニアルスター』(Millennial Star)の編集も行った。『ミレニアルスター』はイングランドの聖徒たちにジョセフ・スミスに与えられた啓示と彼の経歴を紹介した最初の印刷物であった。また『ミレニアルスター』には合衆国の教会からの一般的なニュースも載せられ、イギリスの聖徒とアメリカの聖徒を結びつける役割を果たしていた。1840年以降、20世紀を迎えるまで、『ミレニアルスター』は教会の定期刊行物の中で先導的な位置を占めていた。歴史的な記録と教会指導者からのメッセージを満載した充実した内容だった。

## イギリスへの十二使徒の伝道がもたらした影響

ブリガム・ヤングと十二使徒たちの靈感あふれる優れた指導の下、教会は1840年に驚くべき成長を遂げた。マンチェスターで開かれた10月の総大会では、「聖任が採り行われ、懲戒処置がなされ、資力不十分な宣教師〔その多くは地元イギリス出身〕を援助するための基金が創設された。そして宣教師たちの任地が決められた。教会員総数は7月以来1,115人増加し、ヘレフォードシャー地区の支部数は70、教会員数は1,007人との報告がなされた。」<sup>13</sup>

イギリスの聖徒たちのアメリカ移住はマンチェスターでの大会以前から始まっていた。1840年6月1日、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールは46人ほどの聖徒と会い、彼らをノーブーへ向かう旅に備えて組織した。キンボール長老の最初の伝道の折に改宗した忠実な会員ジョン・ムーンが途中でそのグループを管理する責任を与えられた。この聖徒たちはノーブーに着くと故国イギリスの友人たちに励ましの手紙を書いて、集合を促し、そのような長い旅に関するイギリスの各新聞の否定的な記事に反駁した。

イギリスの聖徒のほとんどはせき立てられるまでもなく、移住に対して積極的だった。使徒たちが集合を口にする以前から、彼らはアメリカへ渡って預言者に会い、信仰を同じくするか地の聖徒たちとともに暮らしたいと考えていたのである。ブ

## 時満ちる時代の教会歴史

▶ ブリタニア号。600トンの横帆艦装定期船。最初に組織された末日聖徒の移民団をアメリカへ運んだ。1840年6月6日に、ジョン・ムーン長老の指示の下に40人の末日聖徒がリバプールから出航した。ムーン長老とその家族は1837年にヒーバー・C・キンポールから伝えられた福音のメッセージを受け入れていた。そしてこの移民団の中心的存在となっていた。一行は3度の嵐やひどい病気などに見舞われながらも、1840年7月20日に41日の船旅を終え、ニューヨーク港に到着した。汽船と汽車によるニューヨークからセントルイスへの旅は、冬季のピッツバーグ付近での待ち合わせを入れると、9か月を要した。セントルイスからは川蒸気船でアイオワ州のモンローズへ向かい、1841年4月16日到着した。1840年にはさらに二つのグループがイングランドから出発した。これらの移民団の最後のグループは、ニューオーリンズ経由でノーブーへ向かったが、すべて水路を取るこの方法はより短距離で費用がかからなかった。

ジョセフ・スミスは1837年に大英帝国への最初の宣教師としてヒーバー・C・キンポールを召したときに、その召しは教会を救うために何事かをする必要があるという御霊のささやきによるものであると話した。下記の表は、その言葉にどのような意味があったかを示している。

1837年から47年の間にイギリス諸島で教会に改宗した人々は1万2,000人を越えた。そしてそのうちの4,000人以上が少なくとも36のグループに分かれてノーブーへ移住した。大量の教会員が脱出を余儀なくされる以前のノーブーの人口の約4分の1から3分の1はイギリスからの移民であった。

イギリスから移住して来た改宗者たちは、危機的なこの時代にあって、教会に霊的な力と福音への情熱そして指導力をもたらしたのである。1850年までに大英帝国内の教会員数は3万人以上になり、開拓者の時代にイギリスから合衆国への移民が増えるとともに、彼らが教会へ与える影響も強いものとなっていった。

### ノーブーへ移住したイギリスの教会員

M・ハムリン・キャンノンは大英帝国からノーブーへの移民について、次のような数字を示している。<sup>15</sup>

1840年	240人
1841年	1,135人
1842年	1,614人
1843年	769人
1844年	623人
1845年	302人
1846年	50人
合計	4,733人



バーミニア州、ニューヨーク・セントルイス、船員博物館の厚意により掲載

リガム・ヤングは弟のジョセフに次のように書き送っている。「彼らの集合への気持ちは非常に強く、着いてすぐに死ぬと言われたとしても、また着いたらすぐに暴徒に襲われ、追い出されると言われたとしても行くことでしょう。」<sup>14</sup> 1841年の早い段階で約1,000人の聖徒が移住した。そして海外への旅の準備の手配を統括する<sup>あつせん</sup>斡旋機関が間もなく設立された。教会は出航を待つ教会員の一時滞在所として使う建物をリバプール市内で購入し、『ミレニアルスター』は長い旅への準備をする聖徒たちを助けるために、詳細な指示を掲載し始めるようになった。それからの10年間に、1万人を越えるイギリスの聖徒が海路アメリカへ渡った。1870年までに、さらに2万8,000人が移住した。ユタの成人教会員の多くはイギリス諸島出身者で占められていた。

預言者ジョセフ・スミスは1841年の初頭に十二使徒へ書き送った手紙の中で、その年の春にノーブーへ戻るようにとの指示を伝えた。合衆国へ戻る日が近づくにつれ、使徒たちは以前自分たちが働いた地域を訪ねて聖徒たちを力づけた。彼らは4月の初めにマンチェスターで何度か集会を持ち、4月6日に総大会が開かれることになった。主が彼らに下さった豊かな祝福のために、その大会には大きな喜びが満ちあふれた。教会員数は5,864人で、10月大会のとき以来約2,200人、1年前の最初の大会のときと比べると4,300人以上の増加であった。その数字には、すでにアメリカへ移住した人々は含まれていなかった。十二使徒たちのほとんどは4月の末にイングランドを離れ、7月にノーブーへ到着した。パーリー・P・プラットは伝道部の管理と『ミレニアルスター』の編集のためにそのままイギリスに残った。

この伝道の期間は十二使徒定員会に訓練と成長の機会を与えた重要な時期であった。ブリガム・ヤングはその間に指導力を高め、その後間もなくそれを発揮することとなった。特にジョセフ・スミスの殉教後のノーブーにおいてである。十二使徒たちはイギリスでの試練と犠牲、また共通の目標に向けて働いたことを通して一致団結し、将来へ向けて教会に強固な指導力がもたらされることになった。ロレンゾ・スノーがロンドンに来たことにより、ブリガム・ヤング、ジョン・テラー、

## 十二使徒の伝道

ウィルフォード・ウッドラフと合わせて、将来の4人の大管長がイギリス伝道部で働きを共にしたのである。また、ノーブーに移住したイギリス人の改宗者たちは、ジョセフ・スミスの死後、十二使徒たちの重要な助けとなった。

預言者は使徒たちがイギリスでの伝道を通して得た指導者に必要な体験と、彼らと彼らの家族が払った犠牲を高く評価した。預言者は次のように記録している。「かくも苦しく悲惨な状況の中で、これほど重要な使命を引き受けた人はかつていないのではないだろうか……。しかし、彼らにそのような苦しみと試しがあったとはいえ、主は常に彼らのために御手を差し伸べ、彼らが死の淵に沈んでしまうことがないようにしてくださったのである。彼らのために何らかの逃げ道が用意されていた。最も必要なときに友人が現れ、彼らを苦境から救った。そうして彼らは旅を続けることができ、イスラエルの聖者をたたえたのである。まさしく彼らは『泣きながら出て行き、貴い種をまいた。』しかし『喜びと実りの束を携えて戻ったのである。』」<sup>16</sup>

イギリスにおける伝道の進展の結果として、イギリス以外の地域での伝道活動もさらに進められた。イギリス人改宗者が仕事や軍務で移住したり、旅行することにより、大英帝国は福音が世界の様々な地域へ流れ込んでいく一つの道となった。



オーソン・ハイド（1805 - 1878年）は11人兄弟の中の一人。彼は1831年にオハイオ州カートランドで福音を受け入れた。教会に入って間もなく宣教師に召され忠実にその務めを果たし、1835年に使徒に聖任された。

彼は1840年にエルサレムへ赴く召しを与えられた。つらく苦しい長い旅をして、1841年10月24日にオリブ山上で聖地を奉獻した。

オーソン・ハイドはしばらくの間、イングリッドで『ミレニアルスター』の編集に携わり、後にもアイオワ州で『フロンティアガーディアン』(Frontier Guardian)の編集をしている。ソルトレーク・シティーに定住してからは、入植事業と準州行政機関の仕事に携わった。

## オーソン・ハイドによるパレスチナ伝道

オーソン・ハイド長老はマラリアからの快復が不十分で、1839年にほかの十二使徒たちがイギリス伝道に出発するのに同行することができなかった。彼は合衆国内で何とか伝道活動をしようとしたが、高熱と悪寒に苦しめられ続けた。彼は次のように書き残している。「わたしは『おこり』にかかり、もうそれが何か月も続き、わたしと家族に死ぬほどの苦しみを与えている。1840年の4月の大会のときには〔わたしは〕体重が減って、骨と皮ばかりの状態だった。」<sup>17</sup>

この大会でオーソンは、預言者ジョセフ・スミスが9年前に予告したユダヤ人への伝道を進めるよう、しばらくの間御霊のささやきを受けていたと発表した。それは1か月ほど前に彼が受けた示現のことであり、彼はその示現の中で、ロンドン、アムステルダム、コンスタンチノーブル、エルサレムを見ていたのである。その示現で、御霊は彼に次のように告げた。「ここにはアブラハムの子孫が数多くいる。わたしは彼らをその先祖たちに与えた地に集めるであろう。そして、ここにあなたの働く畑がある。」預言者ジョセフはハイド長老と同僚の使徒ジョン・E・ページに、ヨーロッパのユダヤ人を訪れ、さらにパレスチナへ行き聖地をユダヤ人帰還の地として奉獻する召しを与えた。<sup>18</sup>

ハイド長老とページ長老は東部へ向かう旅の途中、福音を人々に説き教え、またその召しの遂行に必要な資金を集めた。その中には、『モルモン書』や教会のほかの印刷物をドイツ語に翻訳するための費用も含まれていた。彼らはヨーロッパでドイツ語を話すユダヤ人たちに接触を図ろうとしていたからである。ページ長老のペンシルベニア州での滞在が長引いたため、使命を急いで果たさなければならないと強く感じたハイド長老は、単独でニューヨーク州への旅を続けた。この一件で、ジョセフ・スミスは1841年1月15日に『タイムズ・アンド・シーズンズ』(Times and Seasons)の中で彼に次のように求めている。「主は彼ら（特にジョン・E・ページ長老）がその使命の遂行を遅らせていることをあまり喜んでおられない。彼らはそ



## 時満ちる時代の教会歴史

パレスチナへのオーソン・ハイドの旅は近代の宣教師の旅の中でも有数のものであった。1840年4月15日にノーブーを出発したハイド長老は、1842年12月7日にノーブーへ戻るまでの約3年の間に、3つの大陸で働き、説き教え、また著作、出版なども行った。

1. イリノイ州ノーブー
2. イリノイ州ライマ
3. イリノイ州クインシー
4. イリノイ州コロンバス
5. イリノイ州ジャクソンビル
6. イリノイ州スプリングフィールド
7. インディアナ州インディアナポリス
8. オハイオ州デイトン
9. オハイオ州フランクリン
10. オハイオ州シンシナティ
11. ウェストバージニア州ウェルズバーク
12. ペンシルベニア州ピッツバーグ
13. ペンシルベニア州フィラデルフィア
14. ニューヨーク州ニューヨーク・シティー (1840年12月4日)
15. ニューヨーク・シティーから出航 (1841年2月13日)
16. イングランド、リバプール (イングランドで3か月間働く) (1841年3月3日)
17. イングランド、プレストン
18. イングランド、マンチェスター
19. イングランド、ロンドン
20. オランダのロッテルダムへ向けて出発 (1841年6月20日)
21. ドイツ、アルンヘム (後にオランダ領となる)
22. ドイツ、マインツ
23. ドイツ、フランクフルト
24. ドイツ、レーゲンスブルク
25. ガラツィから黒海へ
26. トルコ、コンスタンチノーブル
27. エーゲ海：スミルナ (後にトルコ領となり、イズミールと呼ばれる) で船がドックに入る。
28. ベイルート (現レバノン領内)
29. ヤッファ (現在はイスラエル領テルアビブの一部) (1841年10月19日)
30. エルサレムのオリブ山で奉獻の祈り (1841年10月24日)
31. ナイル川東の支流
32. エジプト、ドゥムヤット
33. エジプト、カイロ
34. ナイル川西の支流
35. アレクサンドリア (エジプト)
36. イタリアのトリエステ港に到着 (1841年12月21日)
37. アルプスを越え、ミュンヘン (ドイツ)、さらにレーゲンスブルク (ドイツ) へ向かう。
38. イングランド、ロンドン (1842年9月)
39. イングランドのリバプールを出航 (1842年9月25日)
40. ルイジアナ州ニューオーリンズに到着 (1842年11月13日)
41. イリノイ州ノーブーに到着 (1842年12月7日)



の旅を急ぐよう大管長会から求められている。」<sup>19</sup> ページ長老がこのメッセージに応じようとしなかったため、ハイド長老は独りでヨーロッパへの旅を続けざるを得なくなり、2月13日にページ長老を残して出発した。

オーソン・ハイドはほかの十二使徒たちとイングランドで3か月半過ごし、十二使徒のほとんどがアメリカへ引き揚げてから、教会の起こりについての簡単な歴史を書いた。イングランド滞在中に彼はロンドンにいるユダヤ人指導者との接触を持った。6月、彼はダニューブ川を下り黒海へ入る前に、ユダヤ人に向けて書いた小冊子を配布しながら、ロッテルダム、アムステルダム、フランクフルトを歴訪した。トルコ西部からベイルートへの旅はひどく大変なものだった。食糧などの必要な物資を1週間分しか積んでいない船が、19日間も海上で立往生してしまったのである。ハイド長老は次のように記録している。「わたしたちが乗った船は風がないので動けなくなり、幾つかの小さな無人島に囲まれた海域に停泊し、わたしは来る日も来る日も岩礁でとった貝を食べた。しかし、最も困ったことは、その貝すらも十分にとれなかったことである。」<sup>20</sup> 彼は非常に衰弱していて、その船を下りた後ヤッファの海岸まで満足に歩くこともできなかった。

ハイド長老は1841年10月21日にエルサレムへ着いた。それまでの19か月間、目的地として目指してきたその聖なる町を最初に見上げたとき、感激の涙が彼の頬をぬらした。彼はパーリー・P・プラットへの手紙の中で、それは「まさしく示現の中

## 十二使徒の伝道



で見た」<sup>21</sup> エルサレムと同じだったと伝えている。数日間伝道をし何の成功も得ることができなかったものの、オーソン・ハイドは10月24日、日曜日の夜明け前、開け放たれたエルサレムの門をくぐりケデロンの谷を越えてオリブ山へ上った。そして眼下に広がるエルサレムの町並みを見ながら、自分自身に次のように問いかけた。「今自分が見下ろしている町が、その罪のゆえに救い主の心を悲しみであふれさせ、憐れみの涙を流させたあのエルサレムなのか。ひっそりとたたずむオリブ山の木の枝が静かな風に吹かれ、緑の葉を優しく震わせている、ケデロンの谷のあの一画が、不滅の贖い主の尊い頭の上に、<sup>よみ</sup>黄泉の力が<sup>いんうつ</sup>陰鬱な<sup>やみ</sup>地獄の闇をもって押し寄せたゲツセマネの園なのか。」<sup>22</sup>

オーソン・ハイドはこの<sup>めいそつ</sup>霊的で<sup>めいそつ</sup>瞑想的なたたずまいと「厳肅な静けさの中で、ペンとインクと紙を出し、示現の中で見たままに」、ユダヤ人の帰還とエルサレムにおける将来の神殿建設のために聖地を正式に奉獻する祈りの言葉を書き、主にささげたのである。彼は主に「この地の不毛と荒廃を取り除き、乾いた地を潤す命の水の泉をわき出させ、ぶどうとオリーブを力強く実らせ、いちじくの木を花咲かせ、生い茂らせ」てくださいと祈り求めた。<sup>23</sup> この厳肅なひとときの後、オーソンは古代の習わしに従い、幾つかの石を積み上げて、そこで奉獻の祈りをささげたことの証とした。

自分に与えられた使命を果たしたハイド長老は『聖書』の史跡を幾つか訪ね、そ

## 時満ちる時代の教会歴史

の後船でエジプトへ渡った。エジプトのアレキサンドリアではやむを得ない理由でしばらくここに滞在を余儀なくされたが、彼はこの地で多くのユダヤ人に会い、パーリー・P・ブラットには自分が果たした使命について報告を書き送った。そしてパーリー・P・ブラットはそれを『ミレニアルスター』誌上で発表したのである。ヨーロッパに戻ってからは、ドイツで数か月を過ごし、そこで『荒れ野に呼ばれる声』(A Cry Out of the Wilderness)と題した109ページに及ぶ福音に関するドイツ語の論文を出版した。そしてイギリスからの移民のグループとともに合衆国へ渡り、1842年12月7日にノーブーへ到着した。オーソン・ハイドはこのようにして、非常に長く(約3万2,000キロ以上)、危険な、教会の歴史の中でもきわめて重要な使命を果たした。それは数々の困難との遭遇という点において、使徒パウロの旅にも匹敵するものである。



アディソン・ブラット(1802-1872年)は1843年に七十人に聖任され、ほかの3人とともに太平洋の島々に派遣された。彼は1844年の春にタヒチに到着し、1847年まで熱心にその務めを果たした。彼は短期間ユタに滞在したが、1849年には太平洋地域に戻り、フランス政府が宣教師を追放した1852年までそこで働いた。彼は合衆国へ戻ったが、教会に不満を抱くようになってカリフォルニアへ行き、死ぬまでそこにとどまった。

## 太平洋諸島へ遣わされた宣教師

十二使徒たちがイギリスからノーブーへ戻るとすぐに、預言者は彼らに全世界への伝道活動を指導する責任を与えた。今や使徒たちは、自分たちの神聖な使命を果たす十分な成長を遂げていた。1843年の春に、4人の男性が太平洋の島々に福音を伝える業に召された。そのうちの二人、アディソン・ブラットとベンジャミン・グローアードは太平洋で船乗りをしていた人物である。この二人にノア・ロジャースとノールトン・ハンクスが加えられた。この4人の宣教師は、十二使徒たちと同じように、妻子を残して伝道の旅に出た。彼らは1843年10月にニューイングランドを出航して、1844年4月30日に、タヒチから約300マイル(約480キロ)離れたツブアイに到着した。ハンクス長老はこの船旅の間に肺病(結核)で亡くなった。

宣教師たちはサンドイッチ諸島(ハワイ)へ行く予定だったが、ブラット長老は、すでにクリスチャンとなり、長期にわたって自分たちのもとにいてくれる聖職者を求めていたツブアイの島民から島にとどまるように強く求められた。それで彼は、二人の同僚を北のタヒチに送り自分はそこにとどまった。彼はツブアイでの最初の年に、島の人口の3分の1に当たる60人を改宗させ、バプテスマに導いた。島には白人の造船技師が数人いたが、彼らも一人を除いて全員が改宗した。新しい教会員たちが生活上の事柄や霊的な事柄について熱心に助言を求めてくるにつれ、それらへの対応はブラット長老にとって非常に重い責任となった。

タヒチやそのほかの島々での進展は非常に遅々としていた。ロンドン伝道協会から派遣された代表たちが偽りを基にした妨害宣伝活動をし、それによってこの教会の宣教師たちの業が妨げられたのである。イリノイ州で教会に加えられている暴虐行為についての漠然とした報告を聞いて家族の安否を非常に気にかけ、ロジャース長老はアメリカへ行く船に乗り、1845年12月にノーブーへ戻った。

グローアード長老はタヒチの東にあるツアモタス諸島のアナというごく小さな環状珊瑚島さんごでかなりの成功を収めた。彼はタヒチ語を覚え、すぐに島の文化に順応していった。この島の友好的な住民たちは、彼のメッセージを特によく受け入れ、4か月の間に彼がバプテスマを施した人の数は35名に上った。1846年9月24日の大会に、ブラット長老とグローアード長老は10の支部から合計866人の会員を集めた。11月にブラット長老は、さらに多くの宣教師を連れて戻って来るといふ希望を抱いて、アメリ

## 十二使徒の伝道

カへ戻った。

イギリス諸島での十二使徒の伝道，オーソン・ハイドのパレスチナへの旅，太平洋諸島での伝道活動の開始は，主から預言者ジョセフ・スミスに与えられた数々の啓示が成就し始めたことを告げていた。1837年に主は次のように約束しておられる。「あなたがたによって正式に推薦されて権能を与えられた者で，兄弟たちすなわち十二使徒会の声により，わたしの名によって遣わされる者は，あなたがたから遣わされるどの国に対してでも，わたしの王国の門を開く力を持つ。」(教義と聖約112：21) 今や主の言葉は十二使徒を通して世界の国々に広められるようになったのである。

## 注

1. エルデン・ジェイ・ワトソン，*Manuscript History of Brigham Young* 『稿本ブリガム・ヤングの生涯』1801 - 1844年 (Salt Lake City: Elden Jay Watson, 1968)，39
2. ウィルフォード・ウッドラフの日記，1839年7月2日，末日聖徒教会歴史部，ソルトレーク・シティー
3. レオナード・J・アーリントン，*Brigham Young: American Moses* 『ブリガム・ヤング - アメリカのモーセ』(New York: Alfred A. Knopf, 1985)，74で引用
4. マサイアス・F・カウリー編，*Wilford Woodruff* 『ウィルフォード・ウッドラフ』(Salt Lake City: Bookcraft, 1964)，109で引用
5. オーソン・F・ホイットニー，*Life of Heber C. Kimball* 『ヒーバー・C・キンボールの生涯』(Salt Lake City: Bookcraft, 1967)，266で引用
6. アーリントン 『ブリガム・ヤング - アメリカのモーセ』77で引用
7. パーリー・P・プラット編，*Autobiography of Parley P. Pratt*，『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985)，261
8. ウィルフォード・ウッドラフの日記 “A synopsis of the travels and labours of W. Woodruff in A.D. 1840” 「西暦1840年の旅と働きの概要」1840年12月30日の後の記入参照
9. “Elder Woodruff’s Letter” *Times and Seasons* 「ウッドラフ長老の手紙」『タイムズ・アンド・シーズンズ』1841年3月1日付，330
10. カウリー 『ウィルフォード・ウッドラフ』118で引用
11. *Journal of Discourses* 『説教集』15：344で引用
12. *History of the Church* 『教会歴史』4：222で引用
13. アーリントン 『ブリガム・ヤング—アメリカのモーセ』89
14. アーリントン 『ブリガム・ヤング—アメリカのモーセ』94
15. M・ハムリン・キャノン，*Migration of English Mormons to America* 『イギリス人のモルモンのアメリカ移住』(Reprint, The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints), *American Historical Review* 『アメリカ歴史評論』1947年4月号，436 - 455
16. 『教会歴史』4：390 - 391
17. *Millennial Star* 『ミレニアルスター』1864年12月10日付，792
18. 『教会歴史』4：376で引用。4：106，109も参照
19. 『タイムズ・アンド・シーズンズ』1841年1月15日付，287；『教会歴史』4：274も参照
20. *A Sketch of the Travels and Ministry of Elder Orson Hyde* 『オーソン・ハイド長老の旅と伝道の概略』(Salt Lake City: Deseret News Office, 1869)，24
21. 『オーソン・ハイド長老の旅と伝道の概略』20
22. 『オーソン・ハイド長老の旅と伝道の概略』13
23. 『教会歴史』4：456 - 457で引用。『オーソン・ハイド長老の旅と伝道の概略』20 - 21も参照

# 美しい町ノーブーの生活

年表	重要な出来事
1841.1.15	「散在」しているすべての聖徒にノーブーへの集合を促す大管長会の声明が出される
1841.1.19	ノーブーで果たすべき事柄を概説する啓示（現在の教義と聖約第124章）
1841.4.6	ノーブー神殿の隅石が据えられる
1841.8.16	ジョセフ・スミスが十二使徒に、教会全般の指導に関する新しい責任を与える
1841.10.2	ノーブーハウスの定礎式が行われる
1842.3.17	扶助協会が創立される

**18**41年を迎えたばかりのノーブーには喜びと活気が満ちていた。イングラ  
ンドからは十二使徒の伝道がすばらしい成功を収めていることを知らせ  
る手紙が届き、1830年の教会創立以来聖徒たちを苦しめてきた迫害も、  
この時期はまったく影を潜めていた。また、1840年12月に州議会で承認されたノー  
ブー憲章により、聖徒たちは公民としての保護を保障された。

## 町作りを進めよ、との主の求め

1841年1月15日に大管長会は「散在」していた聖徒たちに、ノーブー憲章について  
の説明と感謝を示す声明書を発表した。その声明書には、イリノイ州の立派な州民、  
特に「良いサマリヤ人のようにわたしたちの傷に油を塗り、必要なものを惜しみな  
く提供してくれた」クインシーの市民に対する謝意が述べられていた。そして大管  
長会はその中で次のような呼びかけをしている。「シオンの繁栄を喜び、シオンのス  
テークが強められてその綱を長くしたいと強く望み、自分自身の喜びよりもシオン  
の繁栄を望む同胞たちを招き、わたしたちと運命を共にさせ、輝かしく崇高な業に  
喜びをもって加わらせ、ネヘミヤとともに『そのしもべであるわれわれは奮い立っ  
て築くのである』（ネヘミヤ2：20）と語らせよう。」大管長会は、「熱心に働き、力  
を合わせる」なら、天の恵みが神の民に注がれ、聖徒たちは物質的にも霊的にも栄  
えるようになると約束した。<sup>1</sup>

1月19日、預言者に「シオンの隅石となるように〔主〕が……宮殿のような優美さ  
をもって磨き上げ」（教義と聖約124：2）られるノーブーの開発について概説した長  
い啓示が授けられた。主はジョセフ・スミスと聖徒たちに、神の王国の前進のため  
にノーブーで数多くのことを成し遂げるように命じられた。彼らは世界の王、アメ  
リカ合衆国の大統領、幾つかの州の知事に対して宣言を発するように求められた。  
また、聖徒について知るためにノーブーを訪れる人たちを泊めるためのノーブーハ  
ウスというホテルと、主が民に神聖な儀式を明らかにする神殿の建築、さらにはハ  
イラム・スミスをすでに世を去ったジョセフ・スミス・シニアに代わる大祝福師に、  
ウィリアム・ローを第二副管長として聖任すること、会長会と高等評議会を擁する  
ノーブーステークの組織、そして、各神権定員会の秩序を整えることなどを求めら  
れた。

これらの項目の中で最も重要なのは、神殿の建設であった。神殿の建設は聖徒に  
集合を促すおもな理由の一つでもあった。この神権時代に最初に建てられたカート  
ランド神殿はすでに聖徒たちの手を離れていた。ほかにミズーリ州のインディペン  
デンス、ファーウェスト、アダム・オンダイ・アーマンの3か所に神殿の建設が計画  
されていたが、迫害と暴力によってその実行が妨げられていた。そのために、主は

## 美しい町ノーブーの生活

教義と聖約第124章の主の戒めに従って宣言起草する試みが幾度かなされたが、そのほかの事柄や困難な問題によって完成が遅れた。この指示は十二使徒定員会によって成し遂げられ、1845年4月にパーリー・P・ブラットがその宣言を初めて発表した。

宣言は主の再臨に備えてなすべき幾つかの備えについて触れていた。十二使徒は以下の事柄を証した。(1) 神の王国はそれに付随する啓示と神権の権能とともにすでに地上に到来している。(2) 主は国々の指導者と民に悔い改めてバプテスマを受け入れるように命じておられる。(3) 聖霊の賜物を受けることにより、数多くの祝福が与えられる。(4) イスラエルの部族の残りの者であるアメリカインディアンがこれから集められ、文明化されて、福音を授けられようとしている。(5) 新エルサレムがアメリカに建設される。(6) ユダヤ人たちは、エルサレムへ戻って町と神殿を再建し、独自の政府を作るよう、主に導かれている。(7) 異邦人の統治者は、自分たちの富を使ってその目的の実現を助ける。(8) 一つの大きい業が前途に待ち受けている。その業には、すべての人への参加の呼びかけが含まれており、またその業が進展するにつれ、だれも神の王国に対して中立的な立場にとどまることはできなくなるという警告も含まれていた。そして(9) その対立はやがてハルマゲドンで頂点を迎える。

十二使徒会はこの宣言の最後でアメリカの統治者と国民に聖徒たちの業を妨げるのをやめるように訴え、もし彼らが聖徒を助けるなら、それまでアメリカが享受してきたすばらしい祝福が続けて与えられると約束した。

1975年10月の総大会で、当時十二使徒定員会会長代理の任にあったエズラ・タフト・ベンソン長老はこの宣言の中の呼びかけ、預言、警告を再び吟味し、確認した。

聖徒たちからその責任を免除された。「わたしが人の子らのだれかにわたしの名のためにある業を行うよう命じ、そしてそれら人の子らが勢力を尽くし、彼らの持っているすべてを尽くしてその業を成し遂げるように努め、かつ熱心であることをやめなければ、彼らの敵が彼らを襲って、彼らとその業を成し遂げるのを妨げるとき、見よ、わたしは当然のこととして、もう人の子らの手にその業を求めることはない。」(教義と聖約124:49)

聖徒たちはノーブーで出直しをしなげらなかつた。大管長会は聖徒たちへの宣言の中で、教会員の一大奮起が求められること、またこの責任を果たさなければ主から「教会として拒まれる」(教義と聖約124:32)ということ述べている。大管長会は次のように書いている。「したがって、王国の繁栄のために、また真理の大義に対する愛のゆえに、自分自身の時間、才能、財産を進んで犠牲にできる人々に、故郷や心地よい住み家に別れを告げさせ、終わりの日のこの偉大な業を進めるわたしたちの中に加わせよう。」<sup>2</sup>

2月にノーブーで最初の選挙が行われた。その結果、ジョン・C・ベネットが市長に選ばれ、ジョセフ・スミスをはじめとする教会指導者たちも参事会員や市会議員として選ばれた。ノーブーの市当局はノーブー憲章の条項によってこの後すぐ、ノーブー大学を創設し、ジョセフ・スミスを中将とするノーブー部隊を組織した。

3月にジョセフ・スミスは次の啓示を授かった。「わたしの名によって自分自身を呼んで、わたしの聖徒であろうと努めている者たち……を、わたしがわたしの僕ジョセフによって彼らに指定した場所に集め、わたしの名のために数々の町を築かせて、将来起こることに備えさせるようにしなさい。」(教義と聖約125:2) ノーブー以外の所で最初に町作りが行われたのは、ミシシッピ川のアイオワ州側であった。そこに組織されたステーキは、『モルモン書』に出てくる有名な町にちなんでゼラヘムステーキと呼ばれることになった。ノーブー時代の初期に、ノーブー周辺に幾つか小さなステーキが組織された。

## 美しい町の建設

ノーブーに来た最初の聖徒たちは、雨露をしのぐ程度のあばら屋、テント、そして幾つかの廃屋に住んでいた。聖徒たちが最初に建てた家は開拓地特有の丸木小屋であった。そして時間と資力の許す範囲で板張りの家屋が建てられるようになり、後にはもっと大きなれんが造りの家が建てられるまでになった。間もなく建築の仕事はノーブーの主要産業の一つとなり、多くの職人に働く場所を与えた。ノーブーには幾つかれんがを作る工場があり、民家や公共の建築物に必要な十分な量のれんがを供給していた。聖徒たちは各自の家とその周囲の美化を図るために、広い敷地の中に果樹、日よけの木、つる植物、<sup>かんぼく</sup>灌木などを植え育てるように奨励された。

預言者の指示の下にノーブーで始められた数ある事業の中で、末日聖徒の心を最も強くとらえたのが神殿の建設であり、聖徒たちの希望は神殿に集中していた。神殿建設は、5年にわたってノーブーで行われた様々な事業の冠たるものであった。1840年10月の総大会で、ジョセフ・スミスは神殿建設の必要性について討議した。カートランド神殿の建設のために働いたレイノルズ・カフーン、アルフェウス・カトラー、エライアス・ヒグビーの3人の兄弟が、ノーブー神殿建設を監督する委員

## 時満ちる時代の教会歴史

ノーブー神殿は教会の初期に計画された5番目の神殿であり、実際に建設されたものとしては2番目のものである。(ミズーリ州のインディペンデンス、ファーウェスト、アダム・オンダイ・アーマンの神殿は建設までには至らなかった。)ノーブー神殿の建設計画と目的は預言者ジョセフ・スミスに明らかにされ、ウィリアム・ウィークスが実際の設計を行った。

建設工事には5年以上(1841年1月から1846年5月まで)の歳月がかかり、多くの人々の労力を要した。資金不足のために、神殿建設のために働いたこれらの人々は什分の一として労力奉仕をしたり、あるいは聖徒たちからささげられた食料、衣類、家具などで支払いを受けた。

以下はノーブー神殿の歴史に関する重要な出来事を示したものである。

- 1841.1.19 神殿の建設を命じる啓示が授けられる(教義と聖約第124章)。
- 1841.4.6 隅石が据えられる。
- 1841.11.8 地階の部屋とバプテスマフォントが奉献される。
- 1841.11.21 最初のバプテスマが執行される。
- 1845.10.5 神殿内の集会室で総大会が開かれる。
- 1845.12.10 エンダウメントの儀式が執行される。
- 1846.2.7 西部へ出発するに先立ち、ブリガム・ヤングによって非公式に奉献される。
- 1846.4.30 神殿が非公式に奉献される。七十人先任会長ジョセフ・ヤングが奉献の祈りをささげる。
- 1846.5.1 オーソン・ハイドによってノーブー神殿の公式の奉献の祈りがささげられる。
- 1848.10.9 神殿内部が放火によって燃える。
- 1850.5.27 竜巻によって外壁の3部分が破壊される。
- 1856 最後まで残っていた壁が安全上の理由により取り壊される。



会の委員として任命された。ジョセフ・スミスは建築家ウィリアム・ウィークスの設計を承認したが、その後も建設工事や設計上の詳細について事細かな注意をしている。

間もなく神殿の基礎の掘削工事が開始された。ノーブーの郊外に石切り場が開かれ、休む間もないほどに作業が続けられた。直径4-6フィート(約120-180センチ)ほどの石灰岩の塊が切り出され、その後で神殿の敷地内で仕上げが施された。1841年4月6日にジョセフ・スミスは神殿の定礎式を行い、その管理をした。

神殿はおもに、労力をささげ物として働いた人々によって建設された。2月になってノーブーは行政上の理由と要員計画の改善のために幾つかのワードに分割された。19世紀のアメリカでは、ワードという言葉は行政、政治区画を示すのに用いられていた。各ワードは神殿の作業日として、それぞれに特定の日を割り当てられた。ノーブーでも指折りの頑健な男性たちが、石切り場あるいは神殿で働き、10日のうちの1日を什分の一の労働日として働くこともよくあった。女性たちは力仕事に精を出す男性たちのために、裁縫や食事の準備をした。すべての末日聖徒に対して、現金によるささげ物をするよう熱心に奨励がなされた。会員たちは建設工事の開始されたときに全財産の10分の1をささげ、またそれ以後完成に至るまで全利益の10分の1を納めるように求められた。ささげ物をした人の名前とその合計は「主の律法の書」と呼ばれる特別な帳簿に記帳された。

神殿の内装と屋根に用いる材木、またノーブーハウス用の材木はウィスコンシン州の森林から、ミシシッピ川の支流ブラック川経由で運ばれた。ジョージ・ミラー監督に率いられたかなりの数の兄弟たちが「松林」に送り込まれ、<sup>ばくだい</sup>莫大な量の材木を切り出し、いかだ組みにしてノーブーへ運んだ。

## 美しい町ノーブーの生活

地階のバプテスマフォントのほかに、ノーブー神殿には2階と3階に大きな集会場があり、中央のアーチの両側の中2階部には事務室が設けられていた。この2階と3階の集会場はカートランド神殿と同じように、部屋の前と後にそれぞれ演壇があった。集会の目的に応じて出席者は座席を前向きにも後ろ向きにも変えることができるようになっていた。この集会場では頻りに様々な会が持たれた。屋階には事務室、更衣室、儀式用の部屋だけが設けられていた。

ノーブー神殿は奥行128フィート（約39メートル）、間口88フィート（約27メートル）、地盤面から屋根までの高さは60フィート（約18.3メートル）であった。塔の高さは軒から98.5フィート（約30メートル）あった。主要な建材としてはノーブー郊外に何か所かあった石切り場から運ばれた灰色の石灰岩が用いられた。30の様々な造作の中でも特徴的なのは、片蓋柱（訳注：壁の側面に接して設けられた付け柱）とフリーズ（訳注：壁の上部に設けられる帯状の面。装飾帯として用いられることが多い）に施された太陽、月、星の装飾だった。

預言者はノーブーハウスホテルの建設を、神殿建設と同じくらいに緊急を要するものと重視していた。彼はノーブーハウスを聖徒たちの楽しみ場、また「財産家、有名人、有力者」に真理を教えるための場として考えていたのである。<sup>3</sup> この建物の定礎式は1841年10月2日に行われ、『モルモン書』の肉筆原稿を含む貴重な記録が幾つか、隅石の中に納められた。教会の指導者たちはこのホテルの建設工事を速めるように、説教壇上から絶えず促したが、資力と労力の不足のために、遅々として進まなかった。1844年3月にジョセフ・スミスは神殿の工事を押し進めるために、ノーブーハウスの建設を延期することにした。

ノーブーではその急速な発展とともに、ほかの公共建築物の必要性も高まった。赤れんが造りの店はジョセフ・スミスと大管長会の事務所兼預言者が家族を養うための店として建てられた。3階建てのメーソンホールは文化ホールとも呼ばれ、演劇、コンサート、フリーメーソンの儀式、政治集会、美術品の展示会、葬式、宴会、裁判などに用いられた。この印象的な建物では、教会の集会、軍や警察の集会も開かれた。七十人ホールの建設は1843年の秋に始まり、1年後には奉獻できる状態になった。この2階建ての建物は教会の伝道を押し進める七十人の集会と訓練の場として用いられた。1階には美しい会衆席と説教壇が設けられ、2階には事務室、これに小さな美術館、675冊の蔵書を持つ図書館があった。

## ノーブー市政

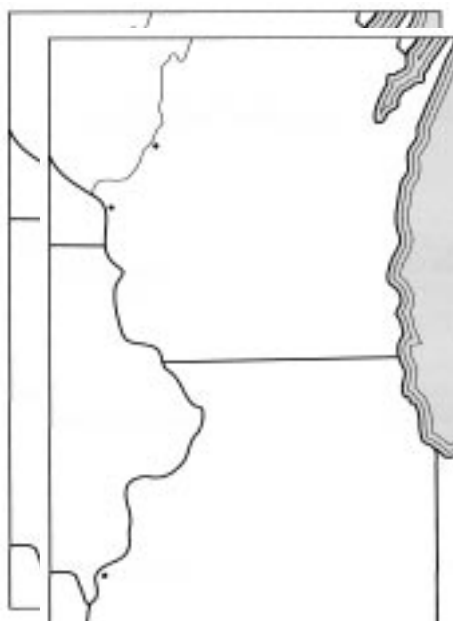
ノーブーの発展は自由を尊重するノーブー憲章の条文によるところが大きかった。市議会はよく訓練された警察隊を作り、効率的に市政を進めるために数々の条例を定めた。集会を開く権利、教派を問わない個人の礼拝の自由を保障する法律が作られた。市議会は湿地帯の排水計画を実施に移し、また就労の機会をもたらす公共事業計画を定め、家屋、ホテル、店舗、そのほかの建物の建築を促進した。また市議会はノーブー市内における酒の販売を禁止する条例を定め、また公序良俗に反する不道徳な催しを一切避けるために公開行事を取り締まる法律を定めた。

ノーブー部隊と市民軍の創設には重大な意義があった。ミズーリ州での苦しい経験により、末日聖徒は当然のことながら州軍に対して不信感を抱いていた。ノーブー部隊は名目的にはイリノイ州軍の一部であり、厳密に言えば州知事の指揮下にあったが、法的には（憲章によると）ノーブー市の統制下に機能していた。ノーブー部隊は独自に軍規を定め、内部の事柄と組織の事柄は自ら処理した。隊には18歳から45歳までの壮健な男性が入隊した。隊は歩兵隊と騎兵隊の2隊に組織され、各隊は准将の指揮下にあり、隊全体は中将ジョセフ・スミスによって統率された。最盛期のノーブー部隊には3,000人の兵士が所属していた。

ノーブー部隊による閲兵式や演習はイリノイ州西部全域においてかなりの注目を集めた。ある末日聖徒はこう回想している。「わたしの人生の中で最も印象深い思い出は、『ノーブー部隊』の閲兵式を見た時のことです。当時預言者であり、中将だったジョセフ・スミスが妻のエマ・ヘイル・スミスとともに、馬に乗って隊の先頭を進みました。その様子はほんとうに印象的で、いつまでも忘れないでしょう。預言者はプロンド、そして彼女は黒い髪をたたえ、美しい乗馬服に身を包んでいました。……彼はその腰に剣を下げて、彼のお気に入りの馬はチャーリーという名の犬



## 時満ちる時代の教会歴史



ノーブー時代の聖徒たちは、マンションハウス、神殿の内装材、そのほかの建築物に用いる材木を、ウィスコンシン州のブラック・リバー・フォールズとその周辺の松林から運んだ。ここでの伐採の仕事は1841年から始まった。モルモンの小さな集落モルモンクーリーとセントジョセフはラ・クロスのちょうど南東に位置していた。教会は、ブラックリバー・フォールズとラ・クロスの間のメルローズで製材所を購入し、後にも伐採現場から15マイル（約24キロ）近い所にあった製材所を購入している。

伐採はブラック川とその支流の岸辺で行われ、木を川に浮かせて製材所まで運んだ。公開市場で売られた木材もあったが、ほとんどはいかにに組まれて、ミシシッピ川を500マイル（約800キロ）以上下り、ノーブーまで運ばれた。

1842年の春と夏、この森では約150人が働いていた。5万ボードフィート（木材の体積を示す単位：1フィート平方で厚さ1インチの板に相当する体積）分の松材が到着したのは1842年5月であった。そして1843年には丸木、屋根板、納屋用の板を含めて60万ボードフィート以上が伐採された。1844年の夏の作業は、財政上の問題、土地の所有権を巡るインディアンとの問題、ジョセフ・スミスの殉教などで遅れた。それでも、その年のうちにいかにに組まれた合計15万5,000ボードフィートの木材がノーブーに運ばれたのである。

きな黒馬でした。」<sup>4</sup>

### ノーブーの経済的成長

当時のアメリカの他の市と同じように、ノーブーとその周辺の末日聖徒の社会でも、おもな産業は農業であった。ノーブーで1区画1エーカー（約0.4ヘクタール）の土地を購入した家族の多くは、敷地に菜園を作ってぶどうの木などの果樹や野菜を育てていた。貧しい聖徒たちは市の周辺部にある「大農場」と呼ばれた共同農場で耕作をした。「大農場協会」は栽培する作物や耕作地などの規制を行った。ノーブー市の外やレイマス、ライマ、イエルロームなどのへんぴな地区に住む農民たちは小麦、えん麦、ライ麦、じゃがいもなどを作り、牛、羊、豚などを飼育していた。

家建て、土地を耕し、商売を始め、事業を興したいと願う移民の急激な流入によって、ノーブーはたちまち活気に満ちた豊かな都市になった。これは不景気に苦しむイリノイ州の他の地域に比べると非常に対照的であった。ノーブーには製材所、れんが製造工場、石灰がま（訳注：生石灰を作るための）、印刷所、製粉所、パン屋、仕立屋、かじ屋、靴屋、大工、建具屋、家具屋など、数多くの店や工場があった。当時は土地の用途を規制する法律がなかったために、市内の至る所にこれらの店が出現した。ノーブーの職人たちはマッチ、皮製品、ロープやひも、手袋、帽子、陶器、装飾品、時計などを作った。

アメリカのその他の地域の職人と同じように、ノーブーの職人たちもよく職種ごとに協定し、値段や規格を決め、統制を図った。ノーブーにはそのような趣旨の協会が少なくとも18はできた。その中には、ノーブー住宅協会、園芸協会、ノーブー馬車製造業協会、それに縫製業協会、製陶業協会、れんが製造業協会などの重要なものがあり、最終的にはノーブー農工協会が組織されて成功した。

ノーブーでは土地と建物がおもな資産だったこともあり、土地の売買や交換が、市の主要な事業の一つとなった。預言者はノーブーで過ごした最初の2年間に、財務責任者として、また後には教会資産の被信託人として、不動産の取り引きに深くかかわった。教会員は現金をほとんど持っていなかったために、ミズーリ州やオハイオ州で所有していた不動産の所有権と交換に新しい土地を取得するケースが多かった。そして後には、個人投資家がノーブーに新たに移り住んで来た人々を相手に、神殿が建設されていた市の東側の高台を売るようになった。教会は低地を所有していたために、指導者たちは土地の売却によって教会の負債の返済が進むように、聖徒たちに教会所有の区画を買い、仕事を始めるように奨励した。高台の土地の所有者の中には、教会のそのやり方を不当だと非難し、高い所に住んだ方が健康に良いと主張した。土地を巡る問題やほかの問題から、ねたみの種が次第に一部の会員を教会から背けさせるようになった。

### ノーブーにおける教育と社会

カートランド時代から明らかだった人々の教育への関心は、ノーブーにおいてさらにふくらんでいた。ノーブー憲章の定めに従って大規模な公共教育事業が始まる前に、私立学校が作られていた。ノーブーでは少なくとも81人（男性48人、女性33人）が教える仕事を生計の一部とし、学校への登録をした生徒の数は1,800人を超え

## 美しい町ノーブーの生活

ノーブーのミシシッピ川岸に計画された教会所有のホテル、ノーブーハウスの建設は教義と聖約第124章の中で主から命じられた事業であった。1841年10月2日、隅石が据えられたとき、ジョセフ・スミスはその中に『モルモン書』の肉筆原稿を入れた。工事はしばらくの間は順調に進んだが、反モルモンの気運がもたらした緊張によって、建築事業は神殿に集中されることになり、ノーブーハウスはついに完成に至らなかった。

殉教したジョセフ・スミスとハイラム・スミスの遺骸は一時、ノーブーハウスの地階に葬られた。エマ・スミスの再婚相手ルイス・ピダモンは、ノーブーハウスの基礎の一部の上に家を建てた。彼は1882年にその隅石を見つけ、開いて見ると、その中に納められていた『モルモン書』の原稿はひどく傷んでいた。ピダモンは長年にわたってノーブーを訪ねた人々にその原稿の一部を与えていた。『モルモン書』の肉筆原稿のうち140ページ以上は現在当教会が所有している。



復元未日聖徒イエス・キリスト教会の厚意により掲載

た。各学年は通常3か月ずつの学期に分けられていた。エリ・B・ケルシーは生徒数100人を優に超える大きな公立学校で教え、指導していた。ノーブーの学校の授業料は1学期1ドル50セントから3ドルで、生徒の中には現物で納める者もいた。<sup>5</sup>

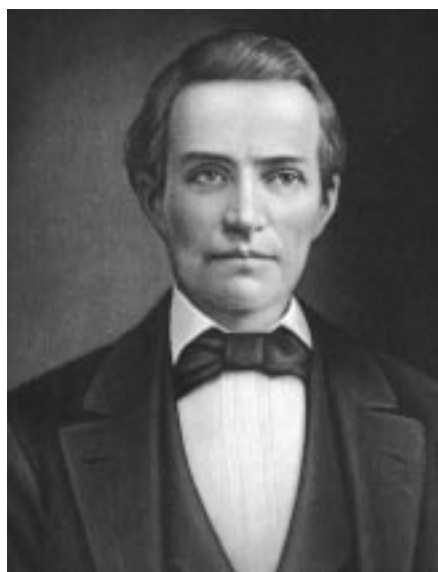
ノーブーの教育制度の頂点にあったのがノーブー市立大学であった。しかし、建築事業の優先順位があったために、この大学の校舎は建設されなかった。授業は個人の家や公共の建物の中で行われた。教授陣としては、英語、数学、科学担当のパーリー・P・プラット、また英文学と数学担当のオーソン・プラット、外国語のオーソン・スペンサー、教会史のシドニー・リグドン、音楽のガスタバス・ヒルズなどがいた。中でもオーソン・プラットは非常に人気のあった教授で、算数、代数学、幾何学、三角法、そして測量術、航海術、解析幾何学、微積分学、哲学、天文学、化学などを講義した。授業予定が不規則で専任の教授が不足していたために、聖徒たちがイリノイ州を追われた時点でも、ようやく発展の緒に就いた段階だった。しかしそれでも教会が将来高等教育を実施するときのための重要な布石となったのである。

ノーブーの多くの聖徒たちが受けた教育は、公開の講座や討論会という形で行われた。ノーブーで行われた巡回講座では、骨相学（頭蓋骨の形から性格を判断するという似非学問）や地質学などが教えられた。ノーブー文化事業団は時事問題について定期討論会を開催した。聖徒たちはまた、宣教師や旅行者からなどの寄贈物を集めた博物館も開いた。アディソン・プラットはその最初の寄贈者である。彼の寄贈した中には、クジラの歯、さんご、イルカの顎骨などがあつた。<sup>6</sup>

ノーブーにおける社会全体に関するおもな情報源は新聞であった。聖徒たちはミズーリ州でもオハイオ州でも新聞を発行した。ミズーリで暴徒に包囲され攻撃を受けた時期に、教会の指導者たちは『エルダーズジャーナル』(Elders' Journal)の印刷に使っていた印刷機を地中に埋めた。1839年にこの印刷機は掘り出されて、ノーブーに運ばれ、その年の11月から『タイムズ・アンド・シーズンズ』(Times and Seasons)の印刷に使用された。『タイムズ・アンド・シーズンズ』は教会の公式の

## 時満ちる時代の教会歴史

復元末日聖徒イエス・キリスト教会の厚意により掲載



オーソン・スペンサー（1802-1855年）はマサチューセッツで生まれた。彼は当時としては高い学歴の持ち主で、1824年にニューヨーク州シェネクタディのユニオンカレッジを卒業している。短期間教鞭を執ったり法律を学んだ後、彼は宗教に関心に向け、1829年にニューヨーク州ハミルトンの神学校を卒業した。そして1841年に回復された福音を受け入れる前の12年間は聖職者として働いていた。

教会がノーブーからの脱出を進めていた時期に、彼は12歳の子供を頭に6人の子供を抱えた状態で妻に先立たれた。このような試練のさなかの1847年、彼はイングランドの伝道部長の責任に召された。彼はイングランドで2年間務めを果たし、『ミレニアルスター』の編集も行った。また1850年にはユタ州に新設されたデゼレト大学の学長に指名された。彼は準州議会でも働き、後にはプロシア、ドイツ、チェロキーインディアンなどに対する伝道に数度召されている。

刊行物として、預言者自身がその内容を入念に吟味し、監督した。

その短い歴史の中で『タイムズ・アンド・シーズンズ』には、重要な教義に関する記事や方針についての記事が掲載された。その中には、後に『高価な真珠』に含められたジョセフ・スミスの公式な自伝の一部、モーセ書、アブラハム書などがある。また『タイムズ・アンド・シーズンズ』には、大会説教、十二使徒評議会発信の回状、教会の重要な集会の議事録、他の新聞からの転載記事、「キングフォレット説教」(King Follett Discourse)なども掲載された。『モルモン書』の考古学的証拠や地理的な判断についての論文なども数多く載せられた。

ノーブーではまた、農業、商業、科学、芸術、地域行事だけを扱った、宗教色のない新聞が週に1度発行されていた。『ワズプ』(Wasp)というその新聞は1842年4月に創刊され、後に『ノーブーネイバー』(Nauvoo Neighbor)と紙名を変えた。『ノーブーネイバー』は『タイムズ・アンド・シーズンズ』と同じ印刷所で印刷され、預言者の弟ウィリアム・スミスが編集していた。後にジョン・テラーが編集の責任を割り当てられている。

ノーブーの住人たちは、一般的なアメリカ人と同様に、レクリエーションの時間も取り、生活を楽しんだ。(文化ホールで行われた)演劇、講演、舞踏会に顔を出す人もいればダンス教習所に通ったり、3つあった合唱隊のどれかに属して歌を楽しんだりする人もいた。ノーブーには吹奏楽隊が3つあり、演奏に励む人もいた。さらにはボウリング、球技、棒引き、レスリング、野火の見物などに興ずることもあった。ジョセフ・スミスは特に棒引きとレスリングが好きで、そのどちらにおいても多くの人に実力を認められていた。丸太切り競争、おしゃべりを楽しみながらのキルト作り、皆が寄り合って行う納屋造りや家造り、釣り、野いちご摘み、刺しゅう、織物などは気晴らしの時間としても人気があったが、実用的な活動でもあった。

湿地帯の排水がなされ、マラリアが影を潜めた後でも、ノーブーの人々は病気や死に苦しめられた。ノーブーで死んだと言われている人々の約半数は10歳未満の子供たちであった。家によっては1度ならず家族の死に見舞われ、中には両親を奪われた子供たちもいた。聖徒たちを襲い、死に至らしめることもよくあった病気としては、下痢、潰瘍、はしか、おたふくかぜ、百日ぜき、赤痢、肺病、ジフテリアなどがあった。当時の聖徒たちの手紙の中にも、病気、死、苦しみについての記述が頻繁に出てくる。

レオノラ・テラーはイングランドで伝道中の夫ジョン・テラーにあてた手紙の中でこう書いている。「あなたがいなくなって以来、こちらは病気で大変です。どの家族を見てもほとんどの人が病にかかっています。ジョージ(ジョン・テラーの息子)は熱が引いて大分良くなりましたが、それでも目の縁の辺りに小さなはれものがあり、とても心配です。」<sup>7</sup> バッシーバ・スミスは伝道中の夫ジョージ・A・スミスに息子のことについて1842年の手紙の中で次のように書いている。「先週の土曜、日曜とジョージ・アルバートは病気でした。かなり熱があり、とても心配でした。ジョージが熱を出したら大変だと恐れていました。でもフォントの所まで連れて行って、バプテスマを受けさせたら、その日以来熱はぴたりと治まりました。今ではほとんど回復しています。」<sup>8</sup>

しかし、彼らの手紙には病気や死や苦しみのことしか書かれていなかったわけで

## 美しい町ノーブーの生活



ノーブー時代の聖徒たちは、3つの新聞を通して地元や州内、国内のニュースを知らされた。『タイムズ・アンド・シーズンズ』はおもに教会に関する記事内容であったが、預言者の弟ウィリアムが編集した『ワスパ』は非宗教的な立場から聖徒たちの利益のために貢献した。『ワスパ』は後に紙名を『ノーブーネイバー』に変えた。

はない。ノーブーの様々な催し物、菜園の様子、教会の行事などがその例である。夫ジョージ・アルバート・スミスの不在を寂しく思う気持ちを述べたバッシーバ・スミスの文面は、ほとんどの手紙の中によく見られた感情表現の好例である。「今日の午後はあなたが一緒にいてくれたらうれしいのに、と思いました。わたしにとって、あなたがその優しく張りのある声で、心の中にある尊い思いを話してくれるのを聞くことほどうれしいことはありません。あなたの足音でさえ、わたしの耳に音楽のように思えます。」<sup>9</sup>

## 拡大する教会の組織

何千人もの聖徒がノーブーやその周辺に集合するにつれ、様々な組織上の必要が生じてきた。ノーブー、アイオワ（ゼラヘムラ）、レイマス（イリノイ）の地域に、会長会と高等評議会の組織を持つ、3つの大きなステークが組織された。さらに、アイオワステークとレイマステークには貧しい人の世話をし、そのほかにも福祉上の重要な必要に目配りをする一人の監督が召された。ノーブーでは最初、市内にある3つのワードで助けが必要な人々に仕える監督が3人召されていた。しかし移民が急激に増えたために、1842年の8月までに、ノーブーを10のワードに再編成し、その郊外の地域には新たに3つのワードが組織された。移住して来る聖徒たちの様々な必要を考慮して、各ワードに複数の監督が召された。当時はワードといっても独自の管理組織があったわけではなく、ワード別の会衆というものもなかった。日曜日の礼拝行事や神権定員会の行事は、ステークごと、あるいは全教会レベルで行われていた。

ノーブーでは神権定員会の再編成が行われた。ジョン・A・ヒックスを会長として長老定員会が一つ組織され、大祭司定員会はドン・カロス・スミスによって管理された。ノーブー以前に組織されていた3つの七十人定員会は、おもに宣教師の育成を目的としていた。このように七十人は、ノーブー時代最も大きいメルキゼデク神権グループであった。七十人の組織はパーリーストリートに立派な「七十人ホール」という独自の建物を持ち、伝道と教育活動の面で活発な働きをしていた。預言者の殉教後も、さらに幾つかの七十人定員会が組織された。

使徒たちがイギリスでの伝道を終えて戻って来ると、ジョセフ・スミスは彼らに、教会全体の管理に関する責任を新たに与えた。預言者は1841年8月16日の特別大会で、十二使徒は今後家族のもとにとどまって妻子を養い、大管長会が負っている財政上の責任を幾つか受け持ち、多くの移民の様々な必要にこたえていくことになることを発表した。ジョセフ・スミスは、十二使徒は引き続き伝道活動の指導を行うが、彼らには「大管長会に次ぐ位置に立つべき時がすでに来ている」と話した。<sup>10</sup> これより以前、十二使徒会は巡回高等評議会として働き、高等評議会を持つステークが組織されている地域については管理責任を持っていなかった。その結果、多くの教会員は、高等評議会はその権能において十二使徒会と対等な場合があるのだと考えていた。しかし、今や十二使徒会は伝道部だけにとどまらず、ステークをも管轄する中央役員となったのである。預言者は殉教のときまでに、十二使徒を訓練し、王国の鍵を授けていた。それによって十二使徒たちは、教会をすべての面で指導できるようになっていた。



この文化ホールは1844年4月に奉献された。公共的建築物としての性格を持つこの建物では、市議会などの集会をはじめ、音楽や演劇またそのほかの文化的活動も行われた。また、そこはノーブー・フリーメーソンの宿泊施設としても活用された。最初は3階建てであったが、1880年以後のあるときに3階の部分を取り壊された。教会は1962年にこの建物を取得して以来、3階の部分も含めて復元工事を進めてきた。

## 時満ちる時代の教会歴史

末日聖徒の女性たちは、ノーブー時代に一つの新しい組織を恵みとして与えられた。その発端は、サラ・M・キンボールの指導の下に、何人かの女性が力を合わせて、神殿の建設のために働く男性のために行ったシャツ作りであった。彼女たちは当時の女性グループに典型的な形の組織を起こす案を作り、ジョセフ・スミスに相談した。それに対してジョセフ・スミスは、神権組織と同じ形の女性組織を作るように提案した。そして彼の指導の下に、1842年3月17日、18人の女性が集まって、ノーブー女性扶助協会が組織されたのである。エマ・スミスがこの組織の会長として選ばれ、ジョセフ・スミスの言うところによれば、彼女を「選ばれた婦人」(教義と聖約25:3)と述べた初期の啓示が成就した。この組織の目標は「貧しい人、困っている人、夫に先立たれた女性、親を失った子供たちを助けること、またすべての憐れみ深い行いをする事」であった。<sup>12</sup>

預言者は4月28日に、その姉妹たちにさらに勧告と約束を与えた。彼は姉妹たちに「優しく、愛情をもって」夫に接し、「言い争いや不平ではなく、笑顔で」対するよう勧告し、落胆している心には「愛と優しさに満ちた慰め」が必要なことを指摘した。教会の女性には神権の秩序を通して、適切な教えが授けられると約束した後で、ジョセフ・スミスは次のように話した。「わたしは今、主の御名によって、その鍵を回します。この協会は喜びとなり、今より後知識と英知とが流れ下るでしょう。これは貧しい人、助けが必要な人にとって、さらに良き時代の始まりを告げるものです。彼らは喜びを得、皆さんの頭には祝福が注がれることでしょう。」<sup>13</sup>

当時は扶助協会の会員になるには、末日聖徒の女性でもその申請をしなければならなかった。それでも扶助協会は非常に人気があり、急速に成長した。ジョセフ・スミスが殉教した当時には、会員が1,300人以上になるまで成長していた。しかし預言者の殉教に続く危機的な状況とノーブーからの脱出、西部への移住などのために、1867年の再開まで、扶助協会の集會が開かれることはほとんどなかった。

当時の礼拝行事はワードごとではなく、預言者が直接聖徒に説教を説いたり、家庭で開かれていた。天候が良ければ、日曜日の集會は何千人もが集えた神殿西側の森の中で開かれた。中央役員が移動式の演壇上に座り、会衆はれんが、丸太、草の上などに座った。通常、安息日の礼拝は、午前中の靈的な集會と、実務上の処理をするための午後の集會があった。聖徒たちは喜んで預言者の話に耳を傾け、このような公開の礼拝行事に熱心に出席した。しかし預言者にとって、野外で大勢の聴衆を前に何時間も話をするのは、大変な労力を要する仕事であった。時には声が出なくなってしまう、ほかの人に代わってもらうようなこともあった。彼の説教の多くは記録として残され、現在の教会員を教え導く重要な源の一つとなっている。

末日聖徒の家族は頻繁に各自の家庭で集いを持ち、温かいパンや軽い食べ物を取りながら、家長の証や勧告、宣教師からの報告に耳を傾けた。ノーブーの各個人の宗教生活には、ほかに断食と祈り、賛美歌を歌うこと、病人を癒すことなどもあった。社交的な行事にも宗教的な側面があり、聖徒を一致させるうえで大切な役割を受け持ち、彼らの生活に潤いを与えた。

一般的にノーブーにおける末日聖徒の生活は、19世紀のアメリカの他の都市の住民の暮らしとそう変わりはない。しかし、末日聖徒独特の面も幾つかあった。恐らく最大の違いは、その市民のほとんどが、シオンの原則に従ってともに集い、



扶助協会創立の集會の様子を描いた絵皿。カートランド時代に教会の女性たちは、カートランド神殿のとばりを作るために力を合わせて働いた。そのとき以来、ジョセフ・スミスは彼女たちの優れた働きを称賛していた。

1842年3月17日木曜日の午後、預言者はノーブーにて、ジョン・テラーやウィラード・リチャーズとともに、出席した18人の女性を一つの協会として組織した。ジョセフ・スミスはこう述べている。「こうして女性が組織されて初めて、教会は完全に組織されたことになった。」<sup>14</sup>サラ・M・クリーブランドとエリザベス・アン・ホイットニーを副会長、エリザ・R・スノーを書記として、エマ・スミスが初代会長に召された。

## 美しい町ノーブーの生活



扶助協会最初の集会の議事録のタイトルページ。この集会が開かれた部屋に置かれていた古い『聖書』の中に、「この協会にふさわしい」内容の言葉を記した断片があった。「ノーブー女性扶助協会議事録」というタイトルの下にその言葉が次のように書かれている。「おお、主よ。やもめと父のない子供たちを救いたまえ。まことに、かくあれかし、アーメン。主よ、剣と真理の言葉もて彼らを守りたまえ。まことに、かくあれかし、アーメン。」

聖なる神殿を建設し、救いの教義を学び、全能者に祝福を求めることを第一の希望にしていたことである。

### 注

1. ジョセフ・スミス、ハイラム・スミス、シドニー・リグドン、*History of the Church* 『教会歴史』4：267, 271 - 272
2. ジョセフ・スミス、ハイラム・スミス、シドニー・リグドン 『教会歴史』4：273
3. 『教会歴史』5：328；5：137も参照
4. “A Sketch of the Life of Eunice Billings Snow” *Woman’s Exponent* 「ユナス・ビルリクス・スノーの生涯の概略」『ウーマンズ・エクスポネント』1910年9月，22
5. ポール・トーマス・スミス “A Historical Study of the Nauvoo, Illinois, Public School System, 1841 - 1845” 「イリノイ州ノーブーの歴史研究：1841 - 1845年における公立学校制度」修士論文，ブリガム・ヤング大学，1969年，82 - 98参照
6. 『教会歴史』5：406参照
7. ロナルド・K・エスプリン “Sickness and Faith, Nauvoo Letters” *Brigham Young University Studies* 「ノーブーの手紙に見る病氣と信仰」『ブリガム・ヤング大学紀要』1975年夏季号，427で引用
8. ケネス・W・ゴッドフリー，オードリー・M・ゴッドフリー，ジル・マルベイ・デア共著，*Women’s Voices* 『女性の声』（Salt Lake City: Deseret Book Co., 1982），122 - 123で引用
9. ゴッドフリー，ゴッドフリー，デア 『女性の声』125で引用
10. ブリガム・ヤング 『教会歴史』4：403で引用
11. “Story of the Organization of the Relief Society” *Relief Society Magazine* 「扶助協会設立にまつわる話」『扶助協会誌』1919年3月号，129
12. 『教会歴史』4：567
13. 『教会歴史』4：606 - 607で引用



# ノーブーにおける教義上の進展

年表 年代	重要な出来事
1840.8.15	ジョセフ・スミスが死者のためのバプテスマについて教え始める
1841.11.8	ノーブー神殿のバプテスマフォントが奉獻される
1842.5.4	ジョセフ・スミスが9人の忠実な兄弟たちにエンダウメントを授ける
1842春	ウェントワース書簡とアブラハム書が『タイムズ・アンド・シーズズ』紙上に発表される
1844.4.5	ジョセフ・スミスがイリノイ州ラムスを訪れ、靈感あふれる教えを与える
1844.4.7	ジョセフ・スミスが「キング・フォレット説教」を行う

ノーブーは確かに大きくなり繁栄したが、この時代に起きた最も重要なことは、ジョセフ・スミスを通して、福音の教義と儀式に関する啓示が流れ出す泉のように次から次に与えられたことである。ノーブー時代、預言者は聖徒たちを福音の知識の新たな高みへと導く中で、霊的な成熟をさらに深めた。それまでに知らされていた多くの教えについて、さらに深い注意の喚起と説き明かしがされるようになっていた。ジョセフ・スミスは1841年10月の総大会において、「時満ちる神権時代には、過去のすべての神権時代に明らかにされてきた事柄に、またこれまで明らかにされてこなかった事柄にも光が当てられ、明るみに出される」<sup>1</sup>と約束している。

教義的な基礎は回復の業の初期の時代に築かれていて、その上にノーブー時代にさらに新たなものが付け加えられた。

## 死者のためのバプテスマ

1840年8月10日、ノーブーの最初の入植者の一人シーモア・ブランソンが亡くなった。彼は教会の最も早い時代に召された宣教師の一人であり、ファーウェストとノーブーで高等評議員の責任を務めた。

ジョセフ・スミスが残した記録には、ブランソンは「信仰の勝利のうちに亡くなった。彼は臨終のときに、自分が受け入れた福音について証をした」<sup>2</sup>と書かれている。

8月15日の葬儀のときに話した力強い説教の中で、預言者はコリント人への第一の手紙の第15章のかなりの部分を読んだ。その中には当時死者のためのバプテスマが行われていたことについて述べた第29節も含まれていた。

ジョセフ・スミスは会衆に主は聖徒たちがすでにこの世を去っている友人や親族に代わってバプテスマを受けることをお認めになると発表し、聖徒たちに「救いの計画には、神の律法の要求に進んで従うすべての人を救うという目的がある」<sup>3</sup>と話した。

その説教の後、ジェーン・ネイマンという女性がハービー・オムステッドに、亡き息子サイラスのためにミシシッピ川でバプテスマを授けてほしいと頼み、その儀式が執り行われた。ジョセフ・スミスはその儀式を執行するときどのような言葉を使ったかを尋ね、その儀式を承認した。その後の数週間に、ミシシッピ川や近くの川で死者のためのバプテスマが何度か行われた。1841年1月19日、主は聖徒たちに、身代わりの儀式を行うためのバプテスマフォントを備えた神殿を建てるように命じられた。死者のためのバプテスマは「わたしの家に属するものであり、あなたがたがわたしのために家を建てることのできないほど貧しいときを除いて、わたしはこれを受け入れることはあり得ない」(教義と聖約124:30)と主は言われた。

この啓示は聖徒たちの熱意をあまり、神殿建設の仕事はいよいよ進んだ。1841年



## 時満ちる時代の教会歴史

『旧約聖書』には、ソロモン時代に神殿で用いられた12頭の牛の彫刻に載せられた大きな水盤についての記述がある（列王上7：23 - 25参照）。ノーブー神殿が建設されたとき、預言者ジョセフ・スミスは、イスラエルの十二部族を象徴する12頭の雄牛の背に載せたバプテスマフォントを地階に作るように指示を与えた。



ミズーリ州歴史協会の厚意により掲載

10月3日、地階工事の完了が間近になったとき、ジョセフ・スミスは「主の宮で儀式が行われるようになるまで、死者のためのバプテスマを行わない」と宣言した。<sup>4</sup> 地階にはエライジャ・フォーダムが作った仮のバプテスマフォントが置かれた。そのバプテスマフォントはウイスコンシン州から運んだ松材で作られ、入念に作られた12頭の牛の彫刻の上に据えられた。11月8日にそのフォントはブリガム・ヤングによって奉獻され、その2週間後に初めて実際の儀式に用いられた。ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ジョン・テラーが40人の死者のためにバプテスマを行い、ウィラード・リチャーズ、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・A・スミスが確認の儀式を執行した。

1842年、ミズーリ州の昔の敵によって、一時退去を余儀なくされたとき、預言者は死者のためのバプテスマの教義について、聖徒たちに2通の手紙を書き送っていた。2通の手紙とも、バプテスマを有効なものとするために記録者を立ち会わせることの重要性を強調していた。記録者には、それぞれの儀式が正しく執行されたことを確認し、正確な記録を付ける責任が定められた。最初の手紙にはこう書かれている。「すべての記録を整理して、わたしの聖なる神殿の記録保管所に収め、それらが代々覚えられるようにしなさい、と万軍の主は言う。」（教義と聖約127：9）

2番目の長い方の手紙で、預言者は、生者と死者はそれぞれの救いにおいて、互いになくしてはならない存在であることを説明している。「わたしたちなしには彼ら〔死者〕が完全な者とされることはないと言っているように、わたしたちの死者なしには、わたしたちも完全な者とされることはないのです。」（教義と聖約128：15）彼は後に、相互の完成を助けるための儀式には、死者のためのバプテスマだけでなく、神権のエンダウメントと、この世と永遠の世にわたる結婚も含まれるということを説明している。

## エンダウメント

以前、聖徒たちがオハイオ州でカートランド神殿建設の準備をしていたときに、主は御自身の宮の中で「わたしが選んだ者たちに高い所から力を授けよう」（教義と聖約95：8）と約束され、1836年初旬カートランド神殿が完成し奉獻されたとき、霊的に偉大なしるしが聖徒たちに示された。救い主が現れ、カートランド神殿を嘉納されたのである。さらに古代の預言者モーセ、エライアス、エリヤがジョセフ・ス

## ノーブーにおける教義上の進展

ミスとオリバー・カウドリに現れ、イスラエルの集合とそのほかの神聖な儀式を始めるための神権の鍵を回復した（教義と聖約110章参照）。

ミズーリ州でも幾つかの神殿の建設が予定されたが、迫害によって忠実な聖徒たちが州外へ追われたために、建設に至らなかった。主は新しい集合地としてノーブーが確立されてから、神殿以外に御自身が来て、「完全な神権」（教義と聖約124：28）を回復できる場所はないという理由を挙げ、神殿が必要であるということを示された。また聖徒たちは、死者のためのバプテスマと同じように、洗いと油注ぎの儀式も神聖な場所で執行すべきことを教えられた。さらに、「わたしの名のためにこの家を建てて、わたしがそこで民に儀式を示すことができるようにしなさい。わたしは創世の前から隠されてきたこと、すなわち時満ちる神権時代に関することを、わたしの教会に示そうと思うからである。」（40 - 41節）

神殿建設が進められる中で、ジョセフ・スミスは神聖なエンダウメントについて主にさらに幾つか教えを求め、その答えを受けた。しかし、彼が神殿の儀式に関するすべての教えをいつ受けたかは、正確に知られていない。彼は1842年5月4日に、自分が住んでいた赤れんが造りの店の2階で、特に信頼の篤い<sup>あつ</sup>数人の末日聖徒に、これらの儀式について教えた。当時のノーブーで内々に何人もが集まれる場所といえば事実上ここ以外にはなかった。この建物はミシシッピ川のほとり、マンションハウスとジョセフ・スミスがノーブーで最初に住んだ丸太小屋から西へ約1ブロック離れた所にあった。1841年に建設され、1842年1月には店舗として営業が開始された。

ジョセフ・スミスの「赤れんが造りの店」は、ノーブー時代の教会において、最も重要な建物であったと思われる。この建物は雑貨店としてだけでなく、社会、経済、政治、宗教活動などの中心的な施設としても用いられていたからである。1841年12月に完成し、1842年1月5日に店舗としての営業を始めた。

2階はジョセフ・スミスの執務室として用いられ、教会の本部となった。神殿の完成する前は、この店の2階は儀式用の部屋として用いられ、最初のエンダウメントはここで行われた。この店では、教会の集会以外にも、公立学校の授業や若人の集会などを含め、市民による種々様々な会が開かれた。

1842年3月17日に、エマ・スミスを初代会長として、ここで扶助協会が設立された。この店は1890年には取り壊され、長年にわたり、人目に触れるのは基礎の部分しかなかった。1978年から1979年にかけて、復元末日聖徒イエス・キリスト教会によりこの建物が再建された。



2階はほとんど会議室として用いられ、神権評議会、ノーブー婦人扶助協会、市政に関する集会、フリーメーソンの集会、学校のクラス、演劇、討論会、講演会、ノーブー部隊の将校会議などが開かれた。

5月3日、預言者はほかの人々の助けを得て、自分の執務室と会議室を「事情の許すかぎり、神殿の内部」と同じようにした。<sup>6</sup> そして翌日の午後、預言者は特に選ばれた人々に最初のエンダウメントを授けた。その場に会したのは、大祝福師ハイラム・スミス、また十二使徒のブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ウィ

## 時満ちる時代の教会歴史

ノーブーのジョセフ・スミスの執務室の表示板。スズ製のこの表示板は縦4インチ（約10センチ）、横14インチ（約35センチ）の大きさで、「末日聖徒イエス・キリスト教会大管長ジョセフ・スミス執務室」<sup>5</sup>と書かれていた。



預言者ジョセフ・スミスに明らかにされた神殿に関連した教義の進展

- 1823.7.21 モロナイがエリヤの訪れに関するマラキの預言を引用し、エリヤが神権を「現す」時が来ると話した（教義と聖約2章；ジョセフ・スミス 歴史1：38 - 39参照）。
- 1830.12 近代の啓示においては最初の神殿についての言及がなされる（教義と聖約36：8参照）。
- 1831.1.2 主は教会員にオハイオ州へ行くように命じ、そこで「高い所から力を授けられる」と約束された（教義と聖約38：32）。
- 1831.7.20 主は神殿を建てる地として、ミズーリ州ジャクソン郡を定められる（教義と聖約57：2 - 3参照）。
- 1832.2.16 複数の栄えに関する示現が授けられる（教義と聖約76章参照）。
- 1832.12 カートランド神殿を建設するようにとの戒めが授けられる（教義と聖約88：119参照）。
- 1836.1.21 ジョセフ・スミスが、バプテスマを受けることなく世を去った兄アルビンを日の栄えの王国に見、この世にとどまっていれば福音を受け入れたであろう者は来世において日の栄えの王国を受け継ぐ者になると言われた（教義と聖約137章参照）。
- 1836.3.27 カートランド神殿が奉獻される（教義と聖約109章参照；『教会歴史』2：410 - 428）。
- 1836.4.3 救い主、モーセ、エライアス、エリヤがカートランド神殿に現れ、その神殿を嘉納し、神権の鍵を回復する（教義と聖約110章参照）。
- 1840.8.15 1840年8月10日に亡くなったセイモア・ブランソンの葬儀の席上、死者のためのバプテスマの教義が初めて人々に説かれる（『教会歴史』4：179,231参照）。
- 1841.1.19 ノーブー神殿を建設するように

ラード・リチャーズ、総監督（訳注：特定のワードや支部を割り当てられない監督）のニューエル・K・ホイットニー、ノーブー大祭司、定員会会長と総監督を務めるジョージ・ミラー、そしてスプリングフィールド支部長のジェームズ・アダムズである。<sup>7</sup>

ジョセフ・スミスはこの重要な出来事について次のように記録している。「その日は店の2階で……彼らに神権の原則と系統について教え、洗い、油注ぎ、エンダウメント、アロン神権に関する鍵さらにはメルキゼデク神権の至高の位に関する鍵の儀式について教えを授けた。また旧約の時代に見られた神権の系統を復活させ、長子の教会のために備えられたすべての祝福を得させ、永遠の世界においてエロヒムの前に進み、そのみもとに住めるように導くこれらすべての計画と原則について教えた。」<sup>8</sup>

主は以前から永遠の命と昇栄への門を開くのに必要なこれらの数々の儀式について言及しておられた。そして忠実な末日聖徒はそれらが授けられるように熱心求めていたのである。その後の2年間、ジョセフ・スミスは約90人の男女に対して、徐々にエンダウメントを授けていった。彼はまた十二使徒たちに、これらの儀式の鍵に関して特別な指示を与え、神殿が完成したらその中でふさわしい聖徒たちにエンダウメントを授けるように教えた。1845年12月には、神殿の建設は儀式が執行できる状態にまで進んでいた。

何年も後に、プリガム・ヤング大管長はソルトレーク・シティーで、末日におけるエンダウメントの重要性について聖徒たちに教えを与えた。彼は、カートランド神殿で最初にエンダウメントの儀式が行われたとき、実際に長老たちに授けられたのはエンダウメントの一部だけであったことに言及し、それは「予備的な、初めの儀式であり、エンダウメントに備えるためのもの」であると説明した。そしてプリガム・ヤングはエンダウメントを定義して、次のように言った。「エンダウメントとは、これらの儀式のすべてを主の宮で受けることです。それはあなたがこの世を去った後、番人として立つ天使たちに、聖なる神権に関する鍵の言葉とするしと形を示して、その前を通り過ぎ、御父の御前に戻り、現世や地獄にかかわりのない永遠の救いを得るために必要なものです。」<sup>9</sup>

### 結婚に関する啓示

聖なる神権のエンダウメントは、永遠の結婚の原則と密接に結びついている。末日聖徒は回復の業の当初から、「結婚は人のために神によって定められている」（教義と聖約49：15）と教えられてきた。結婚の聖約はいつでも、非常に重要なものと

## ノーブーにおける教義上の進展

- との戒めが聖徒たちに与えられる。ジョセフ・スミスは、エンダウメントに関するすべての事柄についてはまだ明らかにされていないと告げられる（教義と聖約124：25 - 55参照）。
- 1842.3.15 アブラハム書の写しと神殿に関する声明が『タイムズ・アンド・シーズズ』に掲載される。
- 1842.5.4 ジョセフ・スミスが自分の住む「赤れんが造りの店」の2階の部屋で最初のエンダウメントの儀式を行う（『教会歴史』5：1 - 3）。
- 1843.5.16 - 17 昇栄には永遠の結婚が必要であることを説く啓示がジョセフ・スミスに授けられる（教義と聖約131章参照）。
- 1843.7.12 新しく永遠の聖約、結婚、永遠の命に関する啓示が授けられる（教義と聖約132章参照）。

されてきた。教会の男性はこう戒められている。「あなたは心を尽くして妻を愛し、妻と結び合わなければならない。その他のものと結び合ってはならない。」（教義と聖約42：22）教会員は義にかなった結婚をするだけでなく、子供をもうけ、イエス・キリストの福音の原則に従って育てるように求められている。

預言者はエンダウメントが行われ始めてから間もなく、夫婦は神権の力によって、この世においても永遠にわたってともに結び固められるということを示した。エンダウメントを受けていた多くの男女が、ジョセフ・スミスにより結婚の聖約を受け、夫婦の結び固めを受けた。ジョセフ・スミスは、結婚の結び固め、エンダウメント、死者のためのバプテスマは主の宮で執行されるべきものであり、忠実な聖徒は皆、神殿が完成したらすぐにそれらの儀式を受けられるようになることを教えた。1843年の春、ジョセフ・スミスは結婚の聖約が持つ永遠の重要性について教えた。ノーブーから20マイル（約32キロ）ほど南にあるレイマスのモルモンの村を訪れた間に、預言者は数人の教会員に次のように説明した。

「日の栄えの栄光には、三つの天、すなわち三つの階級がある。その最高の階級を得るためには、人はこの神権の位（すなわち、結婚の新しくかつ永遠の聖約）に入らなければならない。そうしなければ、その人はそれを得ることができない。」（教義と聖約131：1 - 3）

その後、夏になってジョセフ・スミスは結婚に関する一つの啓示を記録した。その啓示には1831年にカートランドですでに明らかにされていた幾つかの原則が織り込まれていた。その中で主は次のように宣言された。

「もしある男がわたしの律法であるわたしの言葉によって、また新しくかつ永遠の聖約によって妻をめとり、そしてそれが、わたしからこの力とこの神権の鍵とを与えられた油注がれた者によって、約束の聖なる御霊により彼らに結び固められ〔るならば〕……彼らがこの世の外に去るときにも完全に効力があるであろう。そして、彼らはそこに置かれる天使たちと神々のそばを通り過ぎ、彼らの頭に結び固められたように、すべての事柄について昇栄と栄光を受けるであろう。その栄光とは、とこしえにいつまでも子孫が満ちて続くことである。」（教義と聖約132：19）

この啓示の中に説かれている日の栄えの結婚の律法には、多妻婚の原則も含まれていた。ジョセフ・スミスは靈感による聖典の翻訳に携わっていた1831年に、『旧約聖書』の族長たちの間で行われていた多妻婚はどうして義とされるのか主に伺いを立てた。その結果として、日の栄えの結婚に関する啓示が与えられたのである。その啓示の中には、族長たちの多妻婚についての答えが含まれていた。<sup>10</sup>

初めに主は、結婚も含めて、いかなる聖約もそれが永遠に効力を持つようになるためには3つの条件を満たさなければならないという説明をされた（教義と聖約132：7参照）。それは（1）「約束の聖なる御霊により結び固められなければならない。（2）正当な神権の権能によって執行されなければならない。（3）主に油注がれた預言者を通して与えられた「啓示と戒め」によらなければならない（18 - 19節も参照）。主はアブラハムを例として、彼は「啓示と戒めによって、すなわちわたしの言葉によって、彼が受けたすべてのものを受け」と言われた（29節）。続けて主は次のようにお尋ねになった。「それで、アブラハムは罪の宣告を受けたであろうか。まことに、わたしはあなたがたに言う。『受けなかった。』主なるわたしがそれを命

## 時満ちる時代の教会歴史

じたからである。」(35節)

さらに、ジョセフ・スミスと教会員は、万事を元どおりに回復する業の一部として多妻婚の原則を受け入れるように求められた(45節参照)。伝統的な結婚の習慣に慣れていた預言者は、当然のことながら、最初はこの新しい教えに従うことを躊躇した。当時の様子を記した記録があまりないために、この戒めを知らされた当初、預言者がこれに従うためにオハイオ州で具体的にどのようなことをしたかは定かでない。ノーブーにおいて預言者が実行した多妻婚で、記録に残っている最も古いものはルイズ・ピーマンとの結婚である。これは1841年4月5日ジョセフ・B・ノーブル監督によって執り行われた。<sup>11</sup> その後の3年間に、ジョセフは主の戒めに従い、ほかに幾人かの女性を妻にしている。

1841年十二使徒評議会の会員が英国諸島での伝道を終えて帰って来ると、ジョセフ・スミスは多妻婚の教義を一人一人順番に教えていった。しかし、十二使徒たちはこの教えを理解し、受け入れるのにかなりの抵抗があった。例えばブリガム・ヤングは自分の葛藤について次のように話している。「わたしはいかなる責任も避けようと思ったことはなかったし、命じられたことをいささかでも怠ったことはありませんでした。しかしそのときは自分の生涯で初めて死にたいと思いましたし、長い間その嘆きから脱け出すことができませんでした。ある葬式を見たときは、その亡くなった人をうらやましく思い、自分がその棺の中ひつぎにいないことを嘆きました。」<sup>12</sup>

最初はためらいと当惑を感じていたブリガム・ヤングとほかの十二使徒たちも、聖霊からの個人的な確信を受け、多妻婚という新しい教義を受け入れた。彼らはすべてのことにおいて、ジョセフ・スミスが神の預言者であるということを知っていたのである。当初、多妻婚の実施は内密にされ、ごく少数の人々に限られて行われていた。多妻婚をした教会の指導者についてのうわさが駆け巡り始め、それによって真理がゆがめられ、背教者や教会外部からの迫害の気運が高まる原因となった。もちろんその問題の一部は、「多妻婚」に対してアメリカ人が持っていた当然ともいえる嫌悪感にあった。この新しい結婚観は、強固に定着している一夫一婦制度の伝統と家族組織のきずなを脅かすものに思われたのである。後にユタにおいて聖徒たちはこの「原則」を公に実行したが、やはり迫害が付いて回った。

## ウェントワース書簡

預言者は時折、モルモンの教えと実際の宗教生活について教会外の人々に説明するように求められたことがあった。その中でも重要な意味を持つのが、ウェントワース書簡である。1842年の春に、『シカゴデモクラット』(Chicago Democrat)紙の編集者ジョン・ウェントワースがジョセフ・スミスに「末日聖徒の起こりと発展、迫害、信仰について」要約してほしいと依頼した。<sup>13</sup> ウェントワースはニューハンプシャー州の出身で、友人のジョージ・パーストウが執筆していたニューハンプシャー史の編さんを手伝うために、この情報を得たかったのである。ジョセフ・スミスはこの求めに応じ、最初の示現や『モルモン書』が世に出されたことなどを含めて、回復の業の初期の出来事を数多く記した何ページもの文書をウェントワースに送った。その文書の中には、末日聖徒が信じている教えを13箇条に要約したものが含まれていた。この13箇条は信仰箇条として知られるようになった。パーストウは自著

## ノーブーにおける教義上の進展

ジョン・ウェントワースは『シカゴデモクラット』紙の編集者で、ジョセフ・スミスから有名なジョン・ウェントワース書簡を受け取った人物である。1836年にダートマスカレッジを卒業した若きウェントワースは、当時はまだ人口が5,000人にも満たなかったシカゴへ出て行った。彼は経営難に苦しむシカゴで最初の新聞社シカゴデモクラットを買収した。1843年には28歳で合衆国の下院議員に選出され、イリノイ州の指導的な人物となった。合衆国議員として3期務め、1857年にはシカゴ市長に選出されている。

の歴史書を発行したが、ウェントワース書簡はその中に含まれなかった。またモルモンについても一切触れられていなかった。

ウェントワースはジョセフ・スミスから送られた文書を『シカゴデモクラット』紙に掲載しなかった。またそれはニューハンプシャー史にも採り上げられなかった。しかし教会の新聞『タイムズ・アンド・シーズンズ』(Times and Seasons)は1842年3月にそれを掲載した。以来それは教会が受けた神の導き、歴史、教義について述べた第一級の文書として認められてきた。信仰箇条は教会外の人々のために書かれたものであり、決して福音の原則や実践を完全に要約するつもりで書かれたものではない。しかし、末日聖徒独特の信条が分かりやすく述べられている。各信条はモルモンイズムと他の宗派の信条との違いを明確にしている。

1851年に信仰箇条は、イギリス伝道部で発行された『高価な真珠』の初版本に収載された。『高価な真珠』は1878年に改訂され、1880年に標準聖典となり、信仰箇条は教会の公式の教義となった。

## アブラハム書

1842年の初期、ジョン・ウェントワースに手紙を書き送ったころのジョセフ・スミスは、「アブラハム書の記録からの翻訳」<sup>14</sup>に忙しい日々を送っていた。このアブラハムの記録は1835年に教会がマイケル・チャンドラーから購入した古代エジプトのパピルスの巻き物である。ジョセフと筆記者はその記録について幾らか予備的な研究はしていたが、カートランド神殿の建設やその後起こった背教、迫害などのために、オハイオ州とミズーリ州にいた時代には、それを続行する機会が得られなかった。しかし1842年の春になって、数週間何の妨げもなくその翻訳に打ち込むことができた。

指導者の評議会で、預言者がその翻訳をしていることや内容についても若干知らされていたウィルフォード・ウッドラフ長老は、日記の中にそれに関する自分の気持ちを書いている。「確かに主は聖見者ジョセフを起こし……今や彼に偉大な力と知恵と知識をまわらせておられる。……主はジョセフに神の王国の奥義を明らかにする力、古代の記録、それにアブラハムやアダムと同じくらいに昔の象形文字で書かれた文を翻訳する力を祝福しておられる。それらの輝かしい真理を目の当たりにして、わたしたちの心は深く感動するだろう。」<sup>15</sup>

アブラハム書からの抜粋は1842年の夏にまず『タイムズ・アンド・シーズンズ』に、次いで『ミレニアルスター』(Millennial Star)に発表された。ジョセフ・スミスはさらに発表すべき部分があると話していたが、1842年以降は翻訳を続けることができなかった。教会が受けた『高価な真珠』のアブラハム書の5つの章は、基になった記録の一部にすぎない。

1967年にジョセフ・スミスのパピルスの11の断片が、ニューヨーク・メトロポリタン美術館のアジズ・S・アチア博士によって再発見された。研究の結果、それらはおもに古代エジプトで埋葬に用いられた記録で、王族や貴族が死んだ場合に、彼らの永遠の旅路を導くために、墓室と一緒に納められた種類のものであることが確認された。<sup>16</sup> これによって、それらの記録とアブラハム書の関係についての疑問が再浮上した。ジョセフ・スミスは『モルモン書』がどのように翻訳されたのか完全に



1835年に教会が購入したパピルスの一部が、1967年になって発見され、教会に寄贈された。中でも特に重要で興味深いのは、『高価な真珠』の「模写第一」の原本であった。

説明しなかったが、それと同じようにアブラハム書の翻訳方法についても説明したことがない。しかし、『モルモン書』と同じようにアブラハム書はそれ自体が、神の賜物と力によって世に現されたことの証明である。

### ジョセフ・スミスの説教

ノーブーの聖徒たちは預言者ジョセフ・スミスの説教を聞く機会に恵まれ、多くの人々がその話を聞いて感動を受けたことを書き残している。彼らはジョセフ・スミスの言葉に感動し、証を強められたのである。プリガム・ヤングは次のように述べている。「それはわたしにとって、この世のあらゆる富よりも価値あるものでした。自分がひどい貧乏をしていて、妻や子供に食べさせるため、食材を人から借りなければならぬとしても、預言者の教えを学ぶ機会を逃すことは決してありませんでした。」<sup>17</sup>改宗して間もないワンドル・メイスは、公私も天気もお構いなしに、とにかく預言者ジョセフ・スミスの話に耳を傾ける過程で、彼が神から教えを受けていることを確信するようになったと述べている。彼はジョセフ・スミスの説教を聞く機会を決して逃さなかった。それはジョセフが「霊的な食べ物で自分たちを養い、満たしてくれた」<sup>18</sup>からであると書いている。イギリス人の改宗者ジェームズ・パーマーは、こう書いている。預言者は「説教しているときは、直接天から降<sup>くだ</sup>って来た人か、神聖な使命を帯びて天の世界から遣わされてきた人のように見えたし、実際にそうだった。」<sup>19</sup>

ノーブーには、すべての聖徒が預言者の話を聞くために集えるだけの大きな集会場がなかったため、晴れた日には屋外の木陰のある場所に集った。その良い例が、神殿の西側の斜面の地で、ちょうど階段式座席の付いた集会場のような場所だった。そこは聖徒たちに話をするとき、預言者が好んで使った場所であった。ノーブー

## ノーブーにおける教義上の進展

時代、預言者は人々の前で説教をすることに慣れていった。回復の業の初期には、彼は説教する機会の多くを自分よりも雄弁だと思う人に任せていた。しかし、今や彼はノーブーやその周辺の入植地で大きな権能と権威をもって人々に話すようになっていたのである。この時代に彼が話した約200の説教は、聖徒たちに福音の教義を理解させ、教会に大きな影響を与えた。

1842年3月20日日曜日、ジョセフ・スミスはこの日ウィンザー・P・ライアンの葬儀の際に、神殿西側の斜面の森の中で、人々に幼い子供たちの救いについて語った。彼は「なぜ罪のない幼い子供たちが自分たちから取り去られるのか、特に、物分かりがよく人々の関心を引きつけるような子供たちが取り去られる理由を以前に尋ねたことがある」と話し、それは、彼らがこの世に高まっている罪悪から守られるためであると言った。それから、末日に明らかにされた中でも、特に慰めに満ちた教義を話したのである。「子供はすべてイエス・キリストの血によって贖われています。そして、子供はこの世を去るとともに、アブラハムの懐に迎えられます。老いて死ぬことと、若くして死ぬことの唯一の違いは、一方が天で永遠の光と輝きの中で過ごす時間が長く、苦しみの多いこの邪悪な世界から少し早く解放されるということです。」<sup>20</sup>

1843年の春、ジョセフ・スミスはノーブーから遠く離れた入植地を何度も訪れ、そこに住む聖徒たちに教えと導きを与えた。彼はレイマスでは友人のベンジャミン・F・ジョンソンの家に滞在した。1843年4月2日の日曜日に預言者がイリノイ州レイマスで語った教えは非常に重要なものであり、教会の正式な歴史記録に組み入れられ、後には教義と聖約第130章として聖典の中に入れられた。午前の集会で、オーソン・ハイド長老は、御父と御子は聖徒たちの心の中に住まわれるという考えについて話し、救い主は再臨のときに「戦士として白い馬に乗って現れられる」と述べた。昼食のときにジョセフ・スミスはオーソンに、午後の集会で彼の午前の説教について幾つか訂正すべき点を話したいと言った。それに対してハイド長老は「感謝して、お聞きします」と答えた。<sup>21</sup>

預言者は聖徒たちに次のように説明した。「救い主が御姿を現される時、わたしたちは、救い主をありのままに見るであろう。わたしたちは、救い主がわたしたちのような人間であるのを見るであろう。」(教義と聖約130:1)そしてさらに訂正を加え、次のように述べた。「御父と御子が人の心の中に住まわれるという考えは、昔からの諸教派の観念であって、誤りである。」(3節)そしてその説教の中で、はっきりとこう宣言したのである。「御父は人間の体と同じように触れることのできる骨肉の体を持っておられる。御子も同様である。しかし、聖霊は骨肉の体を持たず、霊の御方であられる。」(22節)

この不朽の説教の中で、ジョセフ・スミスはほかにも幾つか真理を教えた。それらの教えは今日に至るまで、熱心に真理を探求し良い業を求めようとする末日聖徒たちに靈感を与えている。彼は次のように説いている。

「わたしたちがこの世において得る英知の一切は、復活の時にわたしたちとともによみがえる。そこで、もしある人が精励と従順によって、この世でほかの人よりも多く知識と英知を得るならば、来るべき世でそれだけ有利になる。」(18 - 19節)さらに次のように説明が続く。「創世の前に天において定められた不変の律法があり、



## 時満ちる時代の教会歴史

すべての祝福はこれに基づいている。

すなわち、神から祝福を受けるときは、それが基づく律法に従うことによるのである。」(20 - 21節)

1か月半後に預言者は再びレイマスを訪れている。夕方の集会で、モルモンについてより多くのことを知るためにその地を訪れていたメソジスト教会の説教師サミュエル・プライアーが会衆に向かって話をするように求められた。その話の後に、ジョセフ・スミスが立ってプライアー師の話と異なる考えを述べた。プライアーはこう記している。「彼の話し方は、穏やかで、また礼儀正しく、感動的であった。悪意をもってしてもわたしとの討論に勝ちたいというよりは、真理を伝えることの方に熱心な人物という感じがした。わたしは彼の話聞いて大いに啓発された。そして前よりもモルモンに対する偏見がなくなったと感じた。」<sup>22</sup>このときのジョセフ・スミスの教えの数々は、彼の預言者としての使命をよく表し、今は聖典の中に加えられている。「実体のない物質というものは存在しない。霊はすべて物質であるが、もっと微細で純粹であり、より清い目によってのみ見分けることができるものである。

わたしたちはそれを見ることができない。しかし、体が清められるとき、それがすべて物質であることが分かるであろう。」(教義と聖約131：7-8)

神殿の建設が進められる中で、預言者ジョセフ・スミスは未完成の神殿で開いた特別な集会で幾つか偉大な説教をしている。1843年4月の総大会もその一つの例である。当時ウィリアム・ミラーが、1843年4月3日にキリストが再臨されるという預言を発表し、アメリカ全土で、また末日聖徒の中でも大騒ぎとなっていた。(ミラーは熱狂的な宗教家で、ミラー派の創始者である。)ジョセフ・スミスは4月6日に総大会の席上、自分は主の預言者としてこのことについて祈り次のように教えられたと語った。「この時代にあると告げられている裁きが注ぎ尽くされるまで人の子の再臨は決してありませんし、あり得ません。裁きは始まったばかりです。」また預言者は再臨に先立ってある出来事で、まだ起きていなかったことを幾つか挙げた。「ユダの帰還、エルサレムと神殿の再建がなければなりません。また神殿の下から水が流れ出て、その水によって死海が癒されなければなりません。エルサレムの城壁と神殿の再建にはまだ幾らかの時間がかかるでしょう。」<sup>23</sup>

預言者が語った中でも最も名高い説教が1844年4月の総大会で話された。それは、建設工場の事故で亡くなった彼の友キング・フォレットの葬儀で故人をたたえる話として語られたものであった。ジョセフ・スミスは2時間以上にわたり、少なくとも34の教義的事項について話した。その中には、真の神を知ることの大切さ、神に似た者となるための方法、複数の神がおられること、永遠の進歩、聖霊の大切さ、英知の本質、赦されない罪、幼い子供と復活などの主題が含まれていた。

彼のメッセージの中で最も深遠なものは、神と人間の行く末に関するものであった。彼は次のように宣言した。「……要するに、人は神が今あるごとくになることができるのである。」ジョセフはまたこのように説明している。「神御自身、かつては今のわたしたちのようであり、今は昇栄した人となり、かなたの天の王座に座しておられる。……あなたがたはどのようにして自ら神々となるかをぜひとも学ばなければならない。……小さな程度から始めて、わずかな理解力を卓越したものとし、神からの恵みに恵みを加え、昇栄から昇栄へ、やがて死者の復活にまであなたがた

## ノーブーにおける教義上の進展

は到達し、永劫<sup>えいごう</sup>の炎の中に住まうことができるようになるのです。」それから人は今まします神のようになることであろう。ジョセフはまた義人の死に嘆き悲しむ人々のために「慰めの第一原則」について説明している。「たとえ地上での肉体が埋葬され消滅したとしても、彼らは再び立ち上がり、不死不滅の栄光をもって永劫の炎の中に住まい、もはや悲しみも苦しみも味わうことなく、死ぬこともなく、イエス・キリストとともに神の相続人となるのです。」<sup>24</sup>

聖徒たちはこの長く、しかも雄弁で霊的な説教にどのように反応したのだろうか。多くの人がこの説教を聞いて、心を大きく動かされた。ジョセフ・フィールディングは日記にこう書いている。「彼の説教を聞いて、今日ほどうれしかったことはない。自分の演説に対して人々から『これは神の声だ。人間の声ではない』と言われたときのヘロデのことが思い浮かんだ。」(使徒12:20-23参照)<sup>25</sup>

このように、ノーブー時代に聖徒たちは、神の教えが見事に花咲くさまを目にした。以前は簡単にしか触れられなかった教えについて、教会を導く預言者が詳細に述べる話に、聖徒たちは熱心に耳を傾けた。彼らは『タイムズ・アンド・シーズンズ』を読みながら、オハイオ州やミズーリ州で教えられた以上に、より深く説き明かされた教えを学んでいった。そして神殿を建設し、神聖な儀式にあずかるようになる。以前は知らなかった力、知識、祝福を受けたのである。ノーブーでの教義面における進展は、将来の教会に対する不朽の遺産となった。

## 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』4:426で引用
2. 『教会歴史』4:179
3. *Journal History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会歴史』1840年8月15日、歴史記録部、ソルトレーク・シティー；アンドリュー・F・イーハット、リンドン・W・クック共編、*The Words of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの言葉』宗教研究論文シリーズ(Provo: Religious Studies Center, 1980), 49
4. 『教会歴史』4:426で引用
5. 教会歴史美術館蔵
6. *Deseret News, Semi-Weekly* 『デゼレトニュース、隔週刊』1884年2月15日付, 2
7. 『教会歴史』5:1-2参照
8. 『教会歴史』5:1-2
9. *Journal of Discourses* 『説教集』2:31で引用
10. 『教会歴史』5:xxix-xxx; 教義と聖約132章前書き参照
11. アンドリュー・ジェンソン、*The Historical Record* 『歴史記録』1887年2月, 233参照
12. 『説教集』3:266で引用
13. “Church History” *Times and Seasons* 「教会歴史」『タイムズ・アンド・シーズンズ』1842年3月1日付, 706
14. 『教会歴史』4:548
15. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1842年2月19日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
16. ヒュー・ニブレー、*The Message of the Joseph Smith Papyri: An Egyptian Endowment* 『ジョセフ・スミスのパピルスが伝えるメッセージ: エジプトのエンダウメント』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1975), 1-14, 48-55参照
17. 『説教集』12:270で引用
18. *Biography of Wandle Mace as told to Rebecca E. H. Mace, his second wife*, ウォンドル・メイスが2番目の妻E・H・メイスに語った自伝(孫ウィリアム・M・メイスの監修により発行), プリガム・ヤング大学特選集, ユタ州プロボ, 13, 18
19. ジェームズ・パーマー、回想録, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 69
20. 『教会歴史』4:553-554で引用
21. 『教会歴史』5:323で引用
22. サミュエル・A・ブライアー “A Visit to Nauvoo” 「ノーブー訪問記」『タイムズ・アン

## 時満ちる時代の教会歴史

ド・シーズンズ』1843年5月15日付, 198

23. 『教会歴史』5: 336 - 337で引用

24. 『教会歴史』6: 305 - 306で引用

25. アンドリュー・F・イーハット編 “ ‘ They  
Might Have Known That He Was Not a  
Fallen Prophet ,’ - The Nauvoo Journal of

Joseph Fielding ” *Brigham Young University  
Studies* 「『彼が偽預言者でないことを知ることが  
できたであろう』 - ジョセフ・フィールディングの  
ノーブー時代の日記」『ブリガム・ヤング大学紀要』  
1979年冬季号, 148

# イリノイで高まる摩擦

年表 年代	重要な出来事
1841.6	反モルモンを唱道する政党がハンコック郡で設立される
1841.6	ミズーリ州が初めて提出したジョセフ・スミスに対する引き渡し請求がイリノイ州の裁判所で却下される
1842.5	ジョン・C・ベネットがその不正を暴かれる
1842.5	ミズーリ州前知事リルバーン・ボッグズの暗殺未遂事件が起きる
1842.8	ミズーリ州から2度目の引き渡し請求がなされ、ジョセフ・スミスは敵の目を逃れるために、姿をくらます
1842.12	ジョセフ・スミス、ミズーリ州からの逮捕請求が却下されイリノイ州スプリングフィールドへ行く
1843.6	ジョセフ・スミスが、ミズーリ州から3度目の引き渡し請求により、イリノイ州デイクソンで逮捕される
1843秋	ウィリアム・ローを含む名のある会員たちが教会に背き始める
1844.1	ジョセフ・スミスが合衆国の大統領選挙の候補者となる
1844春	『ウォーソーシグナル』紙がモルモンを激しく攻撃する記事を掲載する



ジョセフ・スミスと末日聖徒たちは、初めの3年間イリノイ州で比較的の平穏な生活をしてきた。それが、オハイオやミズーリで起こったように、ここに及んで教会に害を加えるために、内外の敵が手を組んできたのである。ジョセフ・スミスに対する間断ない攻撃、迫害、威嚇が再び始まった。それらの問題がエスカレートし始めた1842年、ジョセフ・スミスは聖徒たちにあてて1通の手紙を書いた。彼は福音のきずなで結ばれた兄弟姉妹にこう断言した。「人のねたみと憤りが生涯を通じてわたしの日常のことであったので、それらはわたしにとってほんのささいなことに思われます。ある善い目的のために、あるいは人が悪いと呼びたければ悪い目的のために、わたしが創世の前から任じられていたのでなければ、それはどのような理由のためか不可解に思われます。……わたしはパウロのように艱難を誇りと感じています。わたしの先祖の神は、今日までそれらのすべてからわたしを救い出してくださり、またこれから後もわたしを救い出してくださるからです。」(教義と聖約127:2)。これらの新たな摩擦が生じてきていたにもかかわらず、預言者は主の助けによってすべての敵に打ち勝つことができるという不動の確信を持っていた。

## ジョン・C・ベネットの背教

ジョン・C・ベネットは1840年8月にノーブーへ来て、その後間もなく人々にその名を知られるようになった。ベネットは預言者よりも1歳半だけ年上であったが、医師、メソジスト教会の説教師、大学の創設者、大学学長、軍隊の指導者、そして最近ではイリノイ州軍の補給局長(訳注:兵員、兵器、食糧などを補給する任務を帯びた将校)など様々な経歴を持つ人物であった。1841年4月の総大会で、彼は「[シドニー・]リグドン副管長の健康が回復するまでの間の大管長補佐」として教会員に紹介された。<sup>1</sup> 彼はしばらくの間、預言者の同僚、親友、助言者であった。

ベネットが大管長補佐として支持されたわずか2か月半後の1841年6月15日、ジョセフ・スミスは当時ピッツバーグにいたハイラム・スミスとウィリアム・ローから、ベネットにはオハイオ州に別居中の妻と子供がいるといううわさが事実であることを確認する手紙を受け取った。ベネットはノーブーへ最初に来たときには、自分は結婚していないと話していた。預言者がその事実を突きつけると、ベネットは悔い嘆いているように装い、毒を飲んで見せかけの自殺をしようとした。

そのころベネットは、多妻婚の教義を歪曲し、その上教会での高い地位に伴う信用を利用して、何人かの女性を不道德な行為に誘い込んでいたのである。彼が言うところの「霊のうえで妻」とは、不道德にほかならなかった。

ジョン・C・ベネットはその正体を明らかにされる前にも、狡猾な陰謀を立てて

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョン・C・ベネット（1804 - 1867年）は1840年にイリノイ州で教会に加入した。精力的で、異彩を放つベネットは、スプリングフィールドでノーブー憲章の法案通過のために対議会活動に奔走した。またノーブー部隊の将校になり、さらにはノーブーの初代市長に選出された。シドニー・リグドンが病気の間は暫定的に大管長会の一員としてジョセフ・スミスに助言する任にあった。しかし間もなく、彼が「霊のうえでの妻」というまやかしの論法で複数の女性を誘惑していたことが預言者の耳に入り、1842年の春には破門されるに至った。それを恨んだ彼は、国内各地で教会を攻撃する講演を行い、ミズーリ州がジョセフ・スミスの身柄引き渡し請求をするようにあり立て、反モルモンと称する人々の中でも、時期的にはかなり早い時点で、教会を攻撃する書物を著した。



アルバート・P・ロックウッド（1805 - 1879年）はノーブー部隊で幾つか責任ある務めを果たした。また、1845年には七十人の会長として中央役員に召された。1847年にはユタに向けて出発した開拓者の第1陣に属した。

預言者を暗殺し、教会を乗っ取る工作をしていた。1842年5月7日土曜日、ノーブー部隊で、2隊に別れて模擬戦が行われることになった。少将のベネットは中将のジョセフ・スミスにこの模擬戦で第1隊の指揮を執るように頼んだ。預言者がそれを断ると、ベネットはそれでは交戦中一人で騎馬隊の護衛に就くようにと強く促した。ジョセフ・スミスはこれも断った。そして衛兵のアルバート・P・ロックウッドを伴って、自ら選んだ部署に就いたのである。彼は「御霊の静かなささやき」を通して、犯人が人に覚えられないように工作して、自分を危険な場に追いやって命を奪おうとする企みが行われていることを知ったと記録している。<sup>2</sup>

その不道徳な行いと邪悪な企みが露見したジョン・C・ベネットは教会から破門された。それと同時にノーブー部隊から除隊させられ、ノーブー市長の職も罷免され、フリーメーソンからも除名された。ノーブーでの名声を失った彼は、恨みを抱いてそこを去ると、講演を通して預言者やほかの教会指導者を攻撃することを始めた。1842年の夏は、彼が書いた教会を中傷、攻撃する記事が、イリノイ州スプリングフィールドの新聞『サンガモジャーナル』(Sangamo Journal) に連載された。そしてその記事は数か月後にまとめられて、『聖徒の歴史 ジョー・スミスとモルモンイズムの真相』(The History of the Saints; or, an Epose of Joe Smith and Mormonism) という本の一部として出版された。ベネットは自分がモルモンになったのは、ただ預言者の不正な行為を暴くためだったと主張した。

ベネットはさらにイリノイ州のフリーメーソンの間に反モルモンの感情をあり立てた。1841年の10月にはすでに、教会員でもあった幾人かのフリーメーソンの会員がノーブーにロッジを開設する認可を得ていた。ジョセフ・スミスはこの友愛精神を基とする結社に帰属することに幾つかの利点を見だしていたものと思われる。フリーメーソンはイリノイ州においても、合衆国全域においても、社会的な有力者を数多く擁していた。そのフリーメーソンが教会に対してもっと好意的な見方をするようになるだろうとの判断があったと考えられる。1842年3月にジョセフ・スミスをはじめとする多くのノーブー住民がこの結社への正式入会を認められた。以前、ジョン・C・ベネットはその行いをとがめられてオハイオ州のフリーメーソンから除名されていた。ノーブーのフリーメーソンはそのことを知らず、彼を自分たちのロッジの書記に選出していた。

ノーブーを去ったベネットは、ミズーリ州ハンニバルのフリーメーソンを訪ねた。ハンニバルのメーソンも彼が除名されていたことを知らなかった。彼はここでノーブーとその周辺のモルモン主体のロッジの指導者を、メーソンの規約への違背や偽りに満ちた書物の出版、そのほか様々な悪行があるとして非難した。このような非難の声がイリノイ州にあったロッジ本部にまで届き、彼らは2年間にわたる調査に乗り出したのである。この結果、イリノイ州のフリーメーソンの多くがベネットの偽りの非難を信じてしまった。

## 政治的な紛糾

ジョン・C・ベネットがノーブーで急激な浮き沈みを味わっていた間に、末日聖徒とイリノイ州西部の住民の間には政治的な対立が高まりつつあった。それらの問題は、政党間の対立が激しく感情的な暴発が発生しやすい辺境地域の不安定な政治

## イリノイで高まる摩擦

イリノイ州立歴史図書館の厚意により掲載



トマス・シャープはイリノイ州で教会に反対した主要人物の一人で、『ウォーソーシグナル』という自分が発行している新聞の記事を通して、教会への反対運動を刺激した。

情勢に根ざすものであった。問題が激化したのは、イリノイ州では民主党とホイッグ党の勢力がほぼ互角であったからである。1838年のイリノイ州では民主党が州政府の主導権を持っていた。一方、聖徒たちの移住し始めてきた1839年にホイッグ党がイリノイ州西部で持っていた勢力は小さなものであった。民主党にしてもホイッグ党にしても、新しくイリノイ州の住民となった有権者たちの支持が得られるようにと望んでいたのは同じであった。

しかしハンコック郡では、ノーブーやそのほかのモルモンの入植地の急速な成長を巡って、間もなく住民の意見が分裂するようになった。ノーブーの南17マイル（約27キロ）ほどの所にあるウォーソーの住民たちは経済、政治、宗教面でのノーブーの発展に不安とねたみを持つようになってきた。イリノイ州で様々な反モルモンの感情が結合し始めたのは、ウォーソーと、ノーブーから東へ17マイル（約27キロ）離れた郡庁所在地カーセージが最初であった。

教会指導者は、教会以外の人と親善を深めるため、元弁護士で『ウォーソーシグナル』( *Warsaw Signal* ) の編集人であるトマス・シャープを、1841年4月6日の神殿の定礎式に招待した。パレード、豪華な食事などのその日の数々の行事を見、またノーブーと神の王国の成長への展望についてジョセフ・スミスやほかの教会指導者の話を聞いて、トマス・シャープは、この教会は単なる宗教団体以上のものだと確信した。彼の目には、この教会は強大な絶対支配権を目指す、危険な反アメリカ的政治勢力と映ったのである。彼はウォーソーへ戻ると、自分が発行する新聞の紙上で大々的な反教会キャンペーンを始め、ジョセフ・スミスは教会と州の一体化をねらっていると断言した。また聖徒たちがノーブー憲章によって得た力と自治権はあまりに大きすぎると主張した。

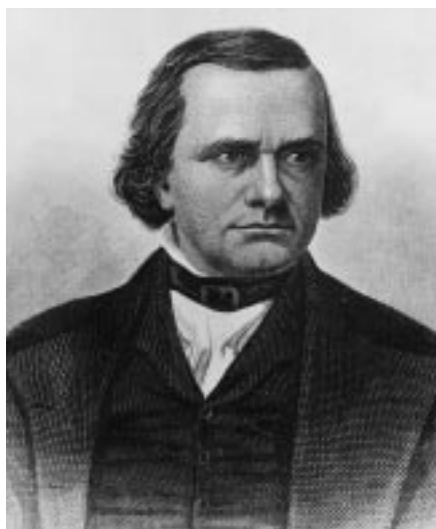
1841年6月に、シャープはハンコック郡内に反モルモンを唱える政党が組織されるのを後押しした。この政党はウォーソーとカーセージで党大会を開き、そのほかの小さな町や村でも公開集会を催した。これによって全国的な二つの政党の黨員たちが反教會的な立場で連合したのである。7月に行われたハンコック郡の選挙では反モルモンの候補者たちが当選し、聖徒たちの一致した投票にもかかわらず、その政治的な力は抑え込まれる形になった。しかし、移住後すぐに合衆国の市民権を得た多数のイギリス人改宗者を含めた末日聖徒が続々とハンコック郡へ流入して来るにつれ、教会員の政治的な力は大きくなり、ハンコック郡の新たな敵の憎しみをさらにかき立てることになった。

しかしその一方で、聖徒たちはイリノイ州の民主党の指導者の中に一人の友を見いだした。イリノイ州最高裁判所のスティーブン・A・ダグラス判事がその人である。ダグラスは州務長官として働いていた時期に、ノーブー憲章がイリノイ州議会で承認されるように尽力した人物である。

1841年6月初旬アダムス郡の教会員を訪ねていたジョセフ・スミスは、ミズーリ州からの逃亡犯として逮捕された。しかしジョセフはクインシーで人身保護令状（訳注：人身保護の目的で拘禁理由などを聴取するために逮捕拘禁された人を送らせる令状）を得、それによってダグラス判事に申し立てをすることができた。ダグラス判事はこれに対して、数日後にノーブーの北東75マイル（約120キロ）ほどの所にあるモンマスの巡回裁判所で審理を行う旨の承諾をした。

## 時満ちる時代の教会歴史

イリノイ州立歴史図書館の厚意により掲載



スティーブン・A・ダグラス（1813 - 1861年）はその華々しい経歴の中で、数多くの公職を務めている。1841年から43年にかけてはイリノイ州最高裁判所の判事を務め、1843年には合衆国下院議員、そして1847年には上院議員に選出されている。1860年の大統領選挙でエブラハム・リンカーンに敗北する。そしてその翌年、連邦の維持結束を訴えるキャンペーンの途中、シカゴで死亡。（訳注：1860年11月の大統領選挙後、12月にサウスカロライナ州が連邦脱退を決議。さらに翌1861年にはミシシッピ、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、テキサスの諸州が連邦を脱退。同年4月12日南北戦争勃発。このような動きの中でダグラスは連邦の維持を訴えた。）

6月9日、審理が行われ、裁判室内は暴徒がジョセフ・スミスに暴行を加えるかもしれないという話に興奮した見物人であふれかえった。ダグラス判事は、群衆の規制ができていないことを理由に保安官を2度科料に処した。ミズーリ州で聖徒たちに加えられた残虐行為について述べた被告側陳述は、ダグラス判事も含めて裁判室内の多くの人々の涙を誘った。翌日、判事はジョセフ・スミスの釈放命令を出した。

ダグラス判事の判決は教会側には感謝されたが、一方で、ジョセフ・スミスと彼が政治的な協約をしているのではないかという強い疑いがイリノイ州西部の住民の間に起こった。ホイッグ党の機関紙は州全域で、ダグラスはジョセフ・スミスの引き渡し請求を却下することにより、公然とモルモンの有権者の支持を取り付けようとしたと批判、攻撃した。この結果、ホイッグ党は末日聖徒の歎心を得ようとする動きをやめ、1842年の知事選挙が近づくにつれ、攻撃の矛先を教会に向けていった。スティーブン・A・ダグラスは教会に対して理解を示し続けていくにつれ、党派心むき出しの攻撃を何度も受けるようになった。彼が幾人かの教会員をハンコック郡の裁判所の職に就けると、ウォーソーとカーセージでは激しい反モルモンの感情が起こった。

モルモンがダグラス判事に対してどれほど感謝していたかは、『タイムズ・アンド・シーズンズ』（*Times and Seasons*）に掲載されたジョセフ・スミスの手紙によく表れている。「わたしたちはホイッグ党も民主党も問題にしてはいない。わたしたちにはどちらも同じようなものである。わたしたちは友を、信頼できる友を支持する。……ダグラス氏は優れた人物である。彼の友は、わたしたちの友でもある。わたしたちは自らの旗を掲げ、彼とともに人類の大義、そして平等な権利、自由と法のために戦うことをいとわない」<sup>3</sup>後の1842年に、民主党のトーマス・L・フォードは州知事選挙でモルモンの有権者の絶対的な支持を受け、ホイッグ党の候補者で反モルモンの立場を広言するジョセフ・ダンカンを破っている。

この知事選挙と同時に行われた州議会の議員の選挙に、預言者の弟で十二使徒でもあったウィリアム・スミスが民主党から立候補し、ホイッグ党の候補者トーマス・シャープに対抗した。教会を敵視するシャープの言説に対抗するために、ウィリアム・スミスを編集人として『ワズプ』（*Wasp*）が発行された。後に『ワズプ』はジョン・テラーを編集者として『ノーブーネイバー』（*Nauvoo Neighbor*）と名を変え、末日聖徒の主張を掲載し続けた。増え続ける末日聖徒の支持を受けて、ウィリアム・スミスはこの選挙に快勝し、ノーブー憲章の維持継続のために州都スプリングフィールドへ行った。選挙に敗北したシャープは敵意を募らせ、より広範な10以上の郡で攻撃を展開し、モルモンの根絶、追放を叫んだ。

## ミズーリ州からの脅威の再来

1842年5月、前ミズーリ州知事リルバーン・W・ボグズが暗殺未遂事件で負傷した。ミズーリ州の当局はジョセフ・スミスを殺人未遂容疑で告発し、再びイリノイ州に対して「ミズーリ州への逃亡犯罪人引き渡し」の請求をした。

ノーブーを去ったジョン・C・ベネットは憎しみと復讐心<sup>ふくしゅう</sup>を募らせてジョセフ・スミスが前知事を暗殺せよとの特命をポーター・ロックウェルに与えて、ミズーリへ送り込んだと断言した。これに怒ったロックウェルはカーセージでベネットと会

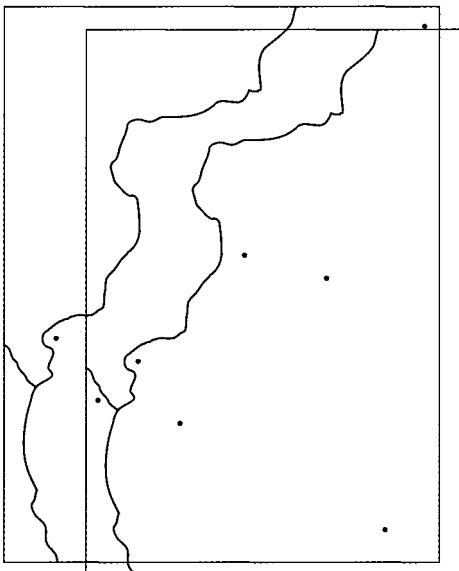
## イリノイで高まる摩擦

い、彼を強く非難した。その後ベネットは快復著しいボッグズにミズーリ州で会い、ポーター・ロックウェルがジョセフ・スミスの命令を受けて彼を殺そうとしたと供述するように説得した。7月になり、ボッグズはミズーリ州インディペンデンスの治安判事のもとに出向き、ジョセフ・スミスの護衛の一人オリン・ポーター・ロックウェルを殺人未遂で告発した。そしてミズーリ州のトーマス・レイノルズ知事がイリノイ州のトーマス・カーリン知事に、ポーター・ロックウェルとジョセフ・スミスの逮捕のために係官を派遣するように説得した。預言者は、ノーブー憲章に保障されていた人身保護令により仮釈放となっていたが、ミズーリ州へ戻れば殺されるということが分かっていたので、ミシシッピ川にある島に隠れ住んだ。ロックウェルは偽名を使ってペンシルベニア州へ逃れた。

エマ・スミス、またノーブーの婦人扶助協会や有名な市民が、ジョセフ・スミスをミズーリ州へ引き渡すことの不当を訴える手紙をカーリン知事へ送ったが効果はなかった。カーリンは預言者とポーター・ロックウェルの逮捕に関して懸賞金をかけ続けた。このとき、教会指導者はジョン・C・ベネットの中傷にこたえる文書を作成し、全国の公職者や教会員に配付させるために、それを380人の長老たちに送付した。一方、連邦地方検事ジャスティン・バターフィールドは、ジョセフ・スミスは最高裁判所から引き渡し請求無効の裁定を受けることができるだろうとの考えを表明していた。就任して間もないトーマス・フォード知事の保護の下に、1842年12月にジョセフ・スミスはスプリングフィールドへ行き、結局は釈放された。その引き渡し請求はボッグズの宣誓供述に証拠として挙げられている事柄の範囲を越えており、根拠が不十分だったからである。ノーブーの聖徒たちは預言者が隠れ家から出て来て、再び自分たちの前に姿を現したことを喜んだ。しかしポーター・ロックウェルは不運にも、3月にノーブーへ戻る途中セントルイスで逮捕され、釈放されるまでの10か月、ミズーリ州で収監されたのである。

ジョセフ・スミスをインディペンデンスへ連れ戻し裁判にかけようとするミズーリ州当局の3度目の動きが見られたのは、1843年6月、合衆国議員選挙のさなかであった。ミズーリ州デイビーズ郡にいたジョン・C・ベネットが預言者を以前告発した反逆罪の容疑で再び訴えたのである。イリノイ州のフォード知事は引き渡しに同意した。このときジョセフとその家族はノーブーの北200マイル（約320キロ）にあるイリノイ州ディクソン付近のエマ・スミスの妹エリザベス・ワットソンの家で、彼らにとって長い間必要だった休暇を取っていた。スティーブン・マーカムとウィリアム・クレイトンが預言者に用心を促すため、ノーブーから派遣された。しかしミズーリ州ジャクソン郡から来た保安官ジョセフ・レイノルズとイリノイ州ハンコック郡の治安官ハーモン・ウィルソンはジョセフ・スミスがいたその家の敷地内に入り、裏庭で預言者を乱暴に逮捕した。そのとき偶然ディクソンに来ていた指折りの弁護士でホイッグ党から国会議員選挙に立候補していたサイラス・H・ウォーカーはジョセフ・スミスに、選挙で自分に投票するなら、弁護してもよいと約束した。ジョセフはその申し出を受け入れた。

次いでスティーブン・マーカムとウィリアム・クレイトンはレイノルズ保安官とウィルソン治安官を不法監禁とジョセフ・スミスへの脅迫を理由に逮捕した。ノーブーへ向かう途中、彼らはノーブー部隊の騎馬隊と出会い、その先導で無事にノー



イリノイ州ディクソンにはエマ・スミスの妹エリザベス・ヘイル・ワットソンが住んでいた。ジョセフ・スミスはここを訪ねていたときに、ミズーリから来た保安官に逮捕された。ノーブーにいた教会指導者たちはジョセフが逮捕されたことを知らされると、その行方を探するために大勢の兄弟たちを派遣した。その後ジョセフ・スミスは人身保護令に基づいて釈放されたが、そのことが原因となってノーブー市に認められていた自治権について激しい論議を呼ぶことになった。



## 時満ちる時代の教会歴史

ブーに入り、市民に喜び迎え入れられた。ノーブー市裁判所は、人身保護令状をもとにジョセフ・スミスを釈放した。

レイノルズとウィルソンは豪華な食事を振る舞われた後に釈放された。それから二人はカーセージへ急ぎ、そこで住民の間に反モルモンの感情をあおり立てた。彼らはジョセフ・スミス逮捕の令状を再び出してもらうよう誓い合い、彼の身柄を奪い返すための捜索隊を組織した。フォード知事はノーブーの裁判の決定を尊重していたが、この問題についての論議がなされるうちに、イリノイ州では反モルモンの世論が高まっていった。

8月の議会の選挙に先立って教会の指導者は、聖徒たちの意見を最も反映してくれる代表者としては、民主党の候補者ジョセフ・P・ホークがいちばん適しているとの判断を下した。ジョセフ・スミスは約束を守ってサイラス・ウォーカーに投票した。しかし、ハイラム・スミスとジョン・テラーは、他の教会員に対してはホークに投票するよう勧めた。どちらの候補者も、モルモンの有権者の動向が読めず、ノーブーでの選挙運動に4日費やした。ノーブーの有権者の大勢はホーク支持に傾いていたため、ホイッグ党はモルモンは組織票としての力を乱用していると批判した。多くの民主党員までもが反モルモンの大合唱に加わった。それは、彼らがかつては自分たちの追い風となっていた力が、いつか逆風に転じるかもしれないと恐れたからである。こうして、教会を党派心の強い政治の世界から遠ざけておこうとしたジョセフ・スミスの真剣な試みは成功するに至らなかったのである。

## 教会内部の不一致

外部の力が預言者を脅かす一方で、ノーブー内部の不一致は教会外からの敵意を助長した。1842年、ジョン・C・ベネットの不品行がスキャンダルになっていたとき、ロバート・フォスター、フランシス・ヒグビー、チョーンシー・ヒグビーという3人の教会員が、やはりその不品行をジョセフ・スミスから厳しくとがめられた。このスキャンダルの後、フランシス・ヒグビーは1年間シンシナティに行っていたが、信仰に忠実な父エライアス・ヒグビーが亡くなると、ノーブーへ戻って来た。しかし9月に入り、彼とほかの何人かがジョセフ・スミスに対する3度目の引き渡し要求に関してミズーリ州側と共謀していたことを預言者自身から公に非難され、再び不快感を抱いた。そして、フランシス・ヒグビーは預言者をひどく憎むようになった。

ノーブーの中で教会に反対する人々の数は、ジョセフ・スミスが教えた多妻婚やほかの新しい教義を受け入れようとしぬ教会員を加えてさらに増えた。第二副管長のウィリアム・ローとノーブー部隊の少将に任じられていたその兄弟ウィルソン・ロー、また高等評議員のオースティン・カウレズ、レナッド・ソービーらは皆、ジョセフ・スミスは墮落した預言者であると信じていた。

ジョセフ・スミスは1843年の12月下旬には、そのような人々の邪悪な企みの幾つかについて情報を得ていた。彼はノーブーの警察に対して、ミズーリのどんな敵よりも、教会内の裏切り者の方がはるかに心配であると話している。「地の表にいる敵は皆大声を発し、わたしを殺そうと力を尽くしています。しかし、わたしたちの中でつまりわたしたちの社会で生活し、わたしたちとともに会議に出席し、信頼を得、わたしたちの腕を取り、わたしたちを兄弟と呼び、そしてキスで挨拶をする人々が

## イリノイで高まる摩擦

敵に加わらないかぎり、またわたしたちの徳を罪とし、彼らの巧みな偽りと不誠実をもってわたしたちに対する怒りと憤りをかき立て、一致してわたしたちに復讐しないかぎり、わたしたちは何もし得ないのです。……わたしたちの中にはユダがいます。」<sup>4</sup>

警察にその動きを事細かく監視されるにつれ、背教者たちは不安を募らせた。背教者とノーブー市議会の間では非難の応酬がなされた。4月に、ロバート・フォスターとウィリアム・ロー、ウィルソン・ローが反キリスト教徒的行動のために破門された。4月28日に、彼ら3人とその同調者が集まり、ジョセフ・スミスを墮落した預言者と断言し、ウィリアム・ローを長とする新しい教会を組織した。彼らは、末日聖徒の家族を訪問し、新しい教会へ改宗させるための委員会を設けた。また印刷機を発注し、教会を非難攻撃するために『ノーブーエクスポジター』(Nauvoo Expositor)という名の新聞を出す計画を立てた。

## ジョセフ・スミス、合衆国大統領選挙に立候補

1843年本格的な冬を間近に控えたころ、ノーブーの背教者たちがその敵意をさらに強くしていた一方で、預言者ジョセフ・スミスは政治的な面での活動に忙しくしていた。1844年に大統領選挙があることを知っていたジョセフ・スミスは、大統領選挙候補者として何度も名前を挙げられていた5人の人物、ジョン・C・カフーン、ルイス・カス、リチャード・M・ジョンソン、ヘンリー・クレイ、マーティン・バン・ビューレンに手紙を書き送った。その手紙の中でジョセフ・スミスは各候補者に、もし当選した場合、末日聖徒に対して、特にミズーリ州で被った財産喪失の救済についてどのような考えがあるかを尋ねた。5人のうちカス、クレイ、カフーンの3人は手紙で回答してきたが、預言者や教会員が望んでいた連邦政府の介入を約束した候補者は一人もいなかった。

どう考えても聖徒たちが大統領として支持できる人物は見つからなかったようである。このため、ジョセフ・スミスは1844年1月29日に十二使徒会と会合を持ち、来るべき選挙への対応策を討議した。そして、教会独自の大統領選立候補としてジョセフ・スミスを提議するという動議が、全員一致で承認されたのである。ジョセフ・スミスは出席者に対して、ノーブーに住む教会員で、選挙遊説の演説ができ、福音を説くことができる人をすべて動員しなければならないこと、また自分自身も彼らとともに力を尽くす覚悟があることを話した。「4月の大会の後、全国で総大会を開きます。わたしも時間の許すかぎり出席するようにします。人々には、『ホイッグ党の大統領と民主党の大統領はもう十分。わたしたちに必要なのは合衆国の大統領だ』と話してください。もし大統領になったら、わたしは人々の権利と自由を守ります。」<sup>5</sup>

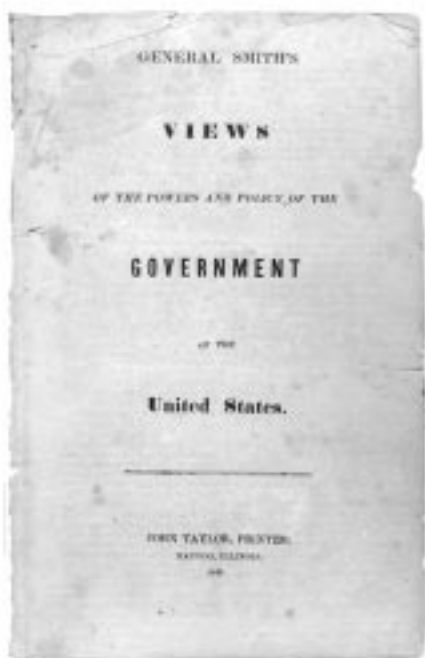
ウィリアム・W・フェルプス、ジョン・M・バーンハイゼル、トーマス・ブロックの助けを得て、ジョセフ・スミスは自分の政治綱領を『合衆国政府の政治権力と政策に関するスミス将軍の見解』(General Smith's Views of the Powers and Policy of the Government of the United States)と題したパンフレットにまとめた。2大政党の選挙人にアピールするためにこのパンフレットは2月7日に刊行され、国内約200人の指導者に郵送された。ジョセフ・スミスは金銭債務不履行による禁固の廃止、刑務所の教育・更生施設化、1850年までの奴隷制度廃止、国有地売却益を財源とす



ノーブー時代に聖徒たちは、ミズーリ州における迫害に関して、救済措置を求める正式な請願書を3度連邦政府に提出している。最初の請願は、1839年から1840年にかけてジョセフ・スミスと他の者がワシントンD.C.に行き、上院の司法委員会に訴えたときである。預言者は、このときは491人の教会員が訴えを起こしたと述べている。合衆国の国立公文書館にはその請願書のうち、200以上が保存されている。

2度目は1842年5月に、下院の司法委員会に対して行った請願である。3度目に提出した1843年11月28日付けの請願書には3,419人の署名がなされ、長さ50フィート(約15メートル)に及ぶというものであった。この請願書は1844年4月5日に上院司法委員会に提出された。しかし3度の請願にもかかわらず政府から何ら反応を得ることはできなかった。

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョセフ・スミスは合衆国大統領選挙に立候補することが決まったとき、幾つかの重要な問題について自分の考えを表明したパンフレットを発行した。上の写真はそのタイトルページである。このパンフレットに述べられている重要点を挙げると次のようになる。

1. 合衆国政府の目指すところについて、ベンジャミン・フランクリンや、何人かの大統領が就任演説の中で語った高邁な識見を再吟味する。これにはバン・ビューレン大統領が合衆国を、建国の父たちが唱えた基本理念から外れた方向へ導き始めたという背景があり、もしウィリアム・ヘンリー・ハリソンが生きていたら建国の理想に立ち返っていたはずだという考えがあったからである。
2. 国会議員を人口100万人に1人の割合とし、議員定数を全体で3分の2に削減する。また議会関係の歳出を削減し、議会の権限を縮小する。
3. 収監中の多くの犯罪者に対して特赦を行う。軽犯罪については公共奉仕目的の労役刑を確立する。「苦役と隔離は、理性と親しい交わりに匹敵するほど人間の性質を変えることはない」ということを考えて、重罪犯については、その刑務所を「学習の場」とする。<sup>8</sup>
4. 奴隷については、連邦政府がいったん彼らを買上げた後に解放するという方法で、1850年までに奴隷制度を廃止する。
5. 脱走に対する軍法会議の審理を廃止し、軍規を尊重する。
6. 連邦政府、州政府における大きな予算節減の実行。
7. 国立銀行を創設し、各州と準州にその支店を置き、標準流通貨幣を流通させ

る奴隷所有者への支払い、各州に支店を持つ国立銀行の創設、テキサス、オレゴンの併合などを唱えた。ジョセフ・スミスは当初、副大統領候補として、ニューヨーク州の著名なジャーナリストで聖徒に好意的だったジェームズ・アーリントン・ベネットを考えていた。しかし、ベネットがこれを辞退したため、最終的にはシドニー・リグドンが選ばれた。

1844年3月11日、キリスト再臨に備え神の政治的な王国を組織するために、ノーブーで一つの評議会が開かれた。そして、ジョセフ・スミスが大統領選挙に立候補することになった以上、選挙運動を推し進めていくために、その会に集まった人たちを一つの委員会として組織することが時宜にかなったことと考えられた。この評議会は約50人で構成され、教会指導者も多く含まれていた。そのためにこの評議会は、五十人評議会と呼ばれるようになった。

4月の末までには、長老たちの名簿と選挙運動の分担が『ノーブーネイバー』に発表された。また5月早くノーブーで開かれた大会において、ジョセフ・スミスを大統領候補に指名するためボルチモアで開かれる予定の全国大会に向け、幾つかの州の代議員選出を確実にすることが決定された。

## さらに激しくなる敵対勢力の動き

教会が様々な広報活動を行ったにもかかわらず、1844年の最初の何か月かのうちに、敵対勢力の動きはさらに激しくなった。トーマス・シャープは繰り返し教会を攻撃し、考えつく限りの罪状をでっち上げて教会の指導者を非難した。彼は「偽預言者」ジョセフ・スミスを速やかに打倒するためにと称して、3月9日に反モルモンの政党による断食祈禱集会の計画も進めた。カーセージの反モルモンの党は同じ日にハンコック郡で大々的に「おおかみ狩り」を行う計画を立てた。おおかみ狩りはその地域ではよく行われたスポーツだったが、反モルモンが考えていたおおかみ狩りは、暴徒たちがそれにかこつけて集まり、ノーブーから離れた地域の聖徒たちに対して攻撃し略奪を働き、彼らの畑を焼き討ちすることにほかならなかった。

この反モルモンの無法な行動や『ウォーソーシグナル』とは対照的に、ジョセフ・スミスはこの年の春、フォード知事とともにイリノイ州西部の住民の間により友好的な関係を築こうと努力した。『ノーブーネイバー』は社説の中で、「平和を求め、法を尊ぶため称賛に価する努力をしている」知事と力を合わせるようにと、すべての正直な人々に呼びかけた。その社説は聖徒たちには、自分たちに害を加える人々に親切にするよう勧告し、「柔らかない答は憤りをとどめ」る（箴言15:1）という賢者の言葉を思い起こさせた。またその社説には、聖徒のモットーは「すべての人と平和に」であると宣言した。これらの呼びかけがあったにもかかわらず、トーマス・シャープは『ウォーソーシグナル』による攻撃を続け、ジョセフ・スミスと一部の教会員の間の問題が起ころうとしていること、またその亀裂はすぐに表面化するだろうという思わせぶりな記事を書いた。<sup>8</sup>

1844年5月には、再び末日聖徒とその近隣の教会外の人々との間に、融和し難い摩擦が生じていた。それには次のような様々な理由があった。聖徒たちは政治的な面で、イリノイ州の他のほとんどの住民と立場を異にしており、ノーブーの経済的成長と政治的自治は教会外からのねたみを受けた。イリノイ州民の多くがノーブー部

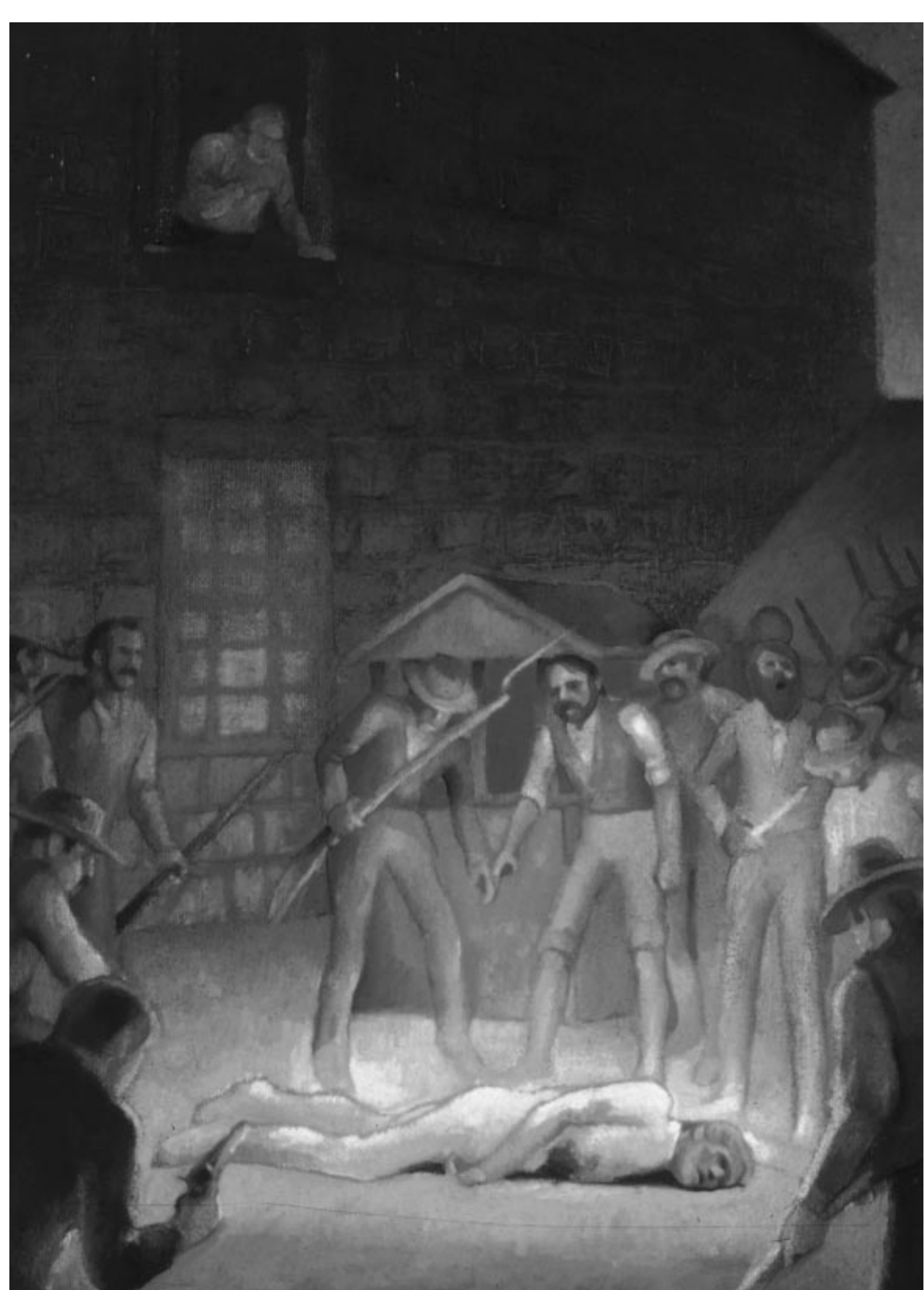
## イリノイで高まる摩擦

- る。
8. 知事自身が暴徒になる可能性があることを考慮し、州内の暴力鎮圧を目的とした連邦政府に対する介入要請を義務づけていた憲法の第4項を廃止する。
  9. 「混乱を引き起こす」外国との同盟を避ける。
  10. オレゴン、テキサス、その他連邦への加入を求めてくるかもしれない地域を受け入れる。
  11. 党利党略で動く大統領ではなく、合衆国のために、また主権者である多数の国民のために働く大統領となる。

隊の軍事力を恐れた。またフリーメーソンの会員たちは、ノーブーのロッジで行われているとうわさされていた数々の不品行を聞いて当惑していた。人々の間には、ジョン・C・ベネットなどが偽り伝えたモルモンの特定の教義や生活習慣に対する嫌悪感が広く存在したが、このような悪要因があったにせよ、教会内部の背教が進まなければ、聖徒たちは平和を維持できたと考えられる。不幸にも、すべてのことが最終的な暴力の前兆となっていた。1844年5月29日、トーマス・シャープは自らの記事の中で、「彼〔ジョセフ・スミス〕が近いうちに、暴力的な方法で殺されたということを知っても、驚きはしないだろう」と述べた。<sup>9</sup>

## 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』4 : 341
2. 『教会歴史』5 : 4
3. “State Gubernatorial Convention” *Times and Seasons* 「州の行政協定」『タイムズ・アンド・シーズズ』1842年1月1日付, 651
4. 『教会歴史』6 : 152
5. 『教会歴史』6 : 188
6. *General Smith's Views of the Powers and Policy of the Government of the United States* 『合衆国政府の政治権力と政策に関するスミス中将の見解』( Nauvoo, Ill.: John Taylor, 1844 ), 末日聖徒教会歴史記録部, ソルトレーク・シティ, 6
7. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 ( Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930 ), 2 : 218で引用
8. *Warsaw Signal* 『ウォーソーシグナル』1844年5月8日付, 2参照
9. 『ウォーソーシグナル』1844年5月29日付, 2



# 殉教

年表	
年代	重要な出来事
1844.3.24	ジョセフ・スミスが自分に対する謀議があることを聖徒たちに明らかにする
1844.4.6	ジョセフ・スミスが総大会で陰謀者たちの企みの裏をかく
1844.6.7	この日、『ノーブーエクスポジター』が発行される結局『エクスポジター』は、この1度しか発行されることがなかった
1844.6.10	ノーブー市議会が『エクスポジター』の破棄を命じる
1844.6.18	ジョセフ・スミスがノーブーに戒厳令を敷く
1844.6.22	フォード知事がジョセフ・スミスとハイラム・スミスに、告発に応じてカーセージに行くよう強く要求する
1844.6.24	ジョセフ・スミスとハイラム・スミスがカーセージへ行く
1844.6.27	ジョセフ・スミスとハイラム・スミスがカーセージで暴徒によって殺される

**ジョ**セフ・スミスは預言者としての働きを始めたときに、自分は神の教えのために死ななければならないということをすでに知っていた。彼が『モルモン書』の翻訳を進めていたときに、主は彼に「戒めを確固として守りなさい。……たとえあなたが殺されようと」、永遠の命を授ける（教義と聖約5:22）という約束をお授けになった。その1か月後に主は再び、暴力によって預言者が死ぬ可能性があることを述べられた。「また、たとえ彼らがわたしに行ったようにあなたがたに行うとしても、あなたがたは幸いである。あなたがたはわたしとともに栄光の中に住むからである。」（教義と聖約6:30）しかし預言者はこの世における自分自身の使命についても、幾つか重要な確認を授けられている。数年後、主はリバティーの監獄においてジョセフ・スミスに次のような約束をお授けになった。「あなたの命数は知られており、あなたの寿命が短くされることはない。それゆえ、人のなし得ることを恐れてはならない。とこしえにいつまでも、神はあなたとともにいるからである。」（教義と聖約122:9）

1840年ジョセフ・スミスの父親は死を前にして、息子に祝福を与え、「『あなたは自らの業を成し遂げるまで生き長らえるでしょう』と約束しました。それを聞いて、ジョセフは声を上げて泣きながら『お父さん、わたしがですか？』と言った。すると父親は『そうだ、おまえは、神から与えられたすべての業の計画を準備し終るまで生き長らえるのだ』と答えた。<sup>1</sup>」ジョセフ・スミスは御霊の勧めを心に留め、雄々しく自分の使命を果たし、殉教し、栄光ある報いにふさわしい者とされた。この祝福の預言はこうして成就した。

## 死の予感

ノーブー時代に、預言者は自分の使命を果たし続けながら、この世における自分の使命が終わりに近づいてきたという予感を御霊から与えられていると、ますます強く感じていた。彼はその気持ちを近い人々に話し、時には、多くの聖徒に向かって話すこともあった。1843年1月22日、未完成の神殿に集った多くの人々を前に、未日に神の王国を確立するために使われている神権の力について話し、彼は、神殿のエンダウメントは「弟子たちを、世に出て行く使命に備えさせるでしょう」と説明した。ジョセフ・スミスは自分自身の役割に言及して、次のように宣言した。「わたしは自分の使命と責任を理解しています。全能の神がわたしの盾です。神がわたしの友ならば、人間に一体何ができるのでしょうか。わたしは自分に定められた時が来るまで、犠牲とされることはありません。その時が来れば、わたしは自ら進んでいけにえとなります。<sup>2</sup>」

ジョセフ・スミスの殉教に関する預言中、最も直接的で、心に強く訴えかけるも

◀「悪の力」ゲアリー・スミス画

## 時満ちる時代の教会歴史

のは、1844年の春に十二使徒定員会に向かって語られたものである。オーソン・ハイドはそのときのことを回想して次のように述べている。「わたしたちは何週間もの間、ほとんど毎日のようにジョセフ兄弟と会議を持った。そのような会の中であるときジョセフ兄弟は、『何かが起ころうとしています。それが何かは分かりません。しかし、主は神殿が完成する前にあなたたちに急いでエンダウメントを授けるように命じておられます。』ジョセフ・スミスは聖なる神権のすべての儀式について、わたしたちを導いてくれた。すべての儀式を終えたときに彼は非常に喜んだ。そして『たとえ今自分が殺されるようなことがあっても、あなたがたにすべての鍵と儀式を授けてあるから、あなたがたはそれをほかの人々に授けることができます。そして皆さんがそれを保つかぎり、サタンはこの王国を倒すことはできません』と話した。」<sup>3</sup>

預言者も普通の人と同じように、生き続けたいと願ったに違いない。妻と一緒に過ごし、子供たちと遊び、聖徒と話し、善良な人々と親しく交わりたいと思っていたに違いない。恐らく自分は間もなく死ぬと知っていながらも、彼はこの世の生活を愛していたのである。彼は幾度となく聖徒たちとじかに接した。彼の説教の中で最も偉大なものの幾つかは、殉教の前の数週間に話されたものであった。

### 預言者に対する陰謀

ノーブーで繁栄を享受していた多くの聖徒たちの義とくつきりした対照を成していたのが、教会の中に広がっていた背教の気運であった。ジョセフ・スミスの第二副管長を務めるウィリアム・ローとその兄弟ウィルソンは、自ら先頭に立って預言者への陰謀を企てていた。1844年の最初の数か月間に彼らの支持者は次第に増えて、約200人を数えるまでになっていた。この一味の指導者としてはほかに、ロバート・フォスターとその兄弟であるチャールズ、チョーンシー・ヒグビーとフランシス・ヒグビーがいた。そしてモルモン以外の影響力のある人物では、ノーブー市議会議員のシルバスター・エモンズ、悪名の高かった犯罪者ジョセフ・H・ジャクソンもこのグループの指導者であった。

1844年3月24日日曜日、ある人から情報を得ていたジョセフ・スミスは神殿でこの陰謀について話をした。彼はその敵の一味に加わっている何人かの名前を挙げ、次のように話した。「ヒグビーが自分たちの行おうとしていることの名目としてでっち上げたいというのは、わたしがミズーリで何人もの首をはね、殺したいと思っていた人々の胸を剣で刺し貫いて暗殺したというものです。彼らに対する逮捕状の請求をするつもりはありません。彼らのだれをも恐れていないからです。彼らには、卵を抱いてじっとしている鶏さえ脅かすことはできません。」<sup>4</sup>

この陰謀を企てていた者たちは、4月の総大会で預言者を失脚させようと考えていた。聖徒の多くが多妻婚の教えに反対するだろうと確信していた彼らは、そのことを大会のビジネスの部会で採り上げようと画策した。彼らはまた、それまでの何か月間か印刷に付され教会員の間に配付された啓示がほとんどないという理由を挙げて、ジョセフ・スミスは墮落した預言者になったと主張する準備をしていた。預言者はそれらの陰謀をくじくために、大会の冒頭に、自分が墮落した預言者ではないこと、またかつてなく神を近くに感じていること、神が自分とともにおられることを大会が終わる前に人々に示すであろうと証した。<sup>5</sup> 翌日、ジョセフ・スミスは大会

## 殉教

の席上2時間にわたる説教を話した。これがキング・フォレット説教として知られているものである。このとき、忠実な人々はジョセフ・スミスの姿に預言者としての威厳を強く感じたのである。

## エクスポジター事件

この陰謀を企んだ者たちは『タイムズ・アンド・シーズズ』(Times and Seasons)紙上でその名前を暴かれ、教会から破門された。自分たちの企みをくじかれたその対立者たちは、教会を攻撃する新聞を発刊することを決めた。『ノーブーエクスポジター』(Nauvoo Expositor)というその新聞は1844年6月7日に第1号が発行されたが、結局それだけで終わり、第2号以降が出されることはなかった。彼らはその新聞紙上でジョセフ・スミスを、邪悪な教えを説き、また不道徳を行い、いわゆる「霊のうえでの妻」という教えを唱導し、政治権力を握り、多くの神がいると教え、神を冒瀆する言葉を吐き、自分に反対する者を激しく弾圧したとして、攻撃した。

6月8日土曜日と、翌々日の月曜日に、ノーブー市議会では長時間の審議が行われた。市議会は、『エクスポジター』の編集者で、教会員ではなかったシルベスター・エモンズを停職処分とし、その発行にだれが関与し、どのような意図で行ったかを話し合った。市議会は著名なイギリスの法律学者ウィリアム・ブラックストーンに諮問し、様々な市の条例を吟味した結果、『エクスポジター』は公的不法妨害を犯し、その中でノーブー市の市民の名誉を棄損したと裁定した。市議会はさらに、中傷目的のこの新聞の発行を中止させなければ、反モルモン勢力が刺激されて暴徒化する恐れがあるとの判断を下した。

ジョセフ・スミスは市長として、市警察署長ジョン・グリーンに印刷機を破壊し、活字をまき散らし、『エクスポジター』の残部の廃棄を命じた。この命令は数時間のうちに実行に移された。当時の法律的理解では、『エクスポジター』の既刊分の廃棄だけが妥当と考えられていたが、市議会は公的不法妨害という法的措置を取ったのである。しかし印刷機の破壊は財産権の侵害であった。<sup>6</sup>

印刷機が破壊されると、『エクスポジター』の発行人たちはカーセージへ急行し、ノーブー市議会の措置に対して騒擾罪に当たると告発し、市議会議員に対する逮捕状の発布を受けた。しかし6月13日と14日に、ジョセフ・スミスと市会議員たちはノーブーの都市裁判所で開かれた人身保護令状に関する審問の後に釈放された。ところがこれがさらに反モルモン勢力を刺激することになった。イリノイ州ではそれまでの過去20年間に同様の印刷機破壊措置が取られた例が20件あったが、それについてこの反対勢力の取ったような対抗措置が取られたことはなかった。すなわち、教会の敵たちは『エクスポジター』事件は出版の自由の侵害だと主張したのである。

この一連の動きに対して、ハンコック郡の幾つかの住民グループは聖徒たちに対してイリノイ州退去を要求してきた。トーマス・シャープは『ウォーソーシグナル』(Warsaw Signal)の記事の中で、多くの教会の敵の感情を激しい論調で表現した。「こうなれば、戦争と根絶しかない。市民は立て！ 一人残らず！ 黙って財産も権利も奪おうとするこの悪魔のような連中に好き放題をさせてよいのか。とやかく論議をしている時間はない。各人が自らのなすべきことを果たすのみだ。あとは火薬と銃弾に物を言わせるだけだ。」<sup>7</sup>



『ノーブーエクスポジター』は反モルモン勢力を結集するために、1844年6月7日にノーブーで発行された。『ノーブーエクスポジター』の発行禁止処分、印刷機の破壊、偶発的な建物の破壊は、ノーブー市長ジョセフ・スミスに対する告発と、カーセージへの連行という事態を生むことになった。



## 時満ちる時代の教会歴史

非常に危険な事態となったために、ジョセフ・スミスはフォード知事に手紙を送って、どのような状況になっているかを知らせ、また聖徒への脅迫について説明するために数多くの供述書を添えた。ハイラム・スミスはブリガム・ヤングに、選挙運動に出ている十二使徒と長老たちはすぐにノーブーへ帰るようにと手紙を書き送った。ハイラムは次のように書いている。「御存じのように、わたしたちは恐れてはいません。しかし攻撃に対して備え、心構えをしておくに越したことはないと考えています。」<sup>8</sup>ジョセフは自分の護衛とノーブー隊を動員し、6月18日にはノーブーに戒厳令を敷いた。一方、ハンコック郡の住民たちはフォード知事に、州軍を動員し、ノーブーの犯罪者たちを法に照らして処断するように求めた。

その興奮状態があまりにも激しいために、フォード知事は平静な行動を促す公開書簡を出し、次いで、内乱になる恐れもある状態を沈静化するためにカーセージへ向かった。彼はまた、ノーブーの市会議員たちがカーセージでモルモン以外の陪審員によって構成される裁判を受けないかぎり、人々を鎮めることはできないという主張の手紙をジョセフ・スミスに書き送った。そして、その身柄を自分たちにゆだねるなら、被告たちを完全に保護することを約束したのである。しかし預言者は、フォード知事が約束を果たすとは信じなかった。彼は知事に次のような返書を送っている。「至る所で、我々に対する逮捕状が出ていることは疑いようがありません。何のためでしょうか。血に飢えた悪人たちがわたしたちを撃ち殺す機会を見つけるまで、川を越え、野を越え、裁判所から裁判所へと引きずり回すためです。わたしたちは出て行くつもりはありません。」<sup>9</sup>

ジョセフ・スミスは兄弟たちと話し合っているとき、フォード知事から一片の慈悲心も感じられない手紙を読み上げ、次は一体どうしたらよいものかと考えた。あれこれ思案を重ねていくうちに、ジョセフは晴れやかな表情になり、こう話した。「道は開かれています。何をなすべきか、わたしにははっきり分かりました。彼らが求めているのは、ハイラムとわたしだけなのです。ですからすべての人に、仕事に精を出し、群れ集まらず、散らばっているように伝えてください……。わたしたちは今晚、川を越えて、西へ行きます。」<sup>10</sup> 預言者ジョセフ・スミスの親しい友ステイブン・マーカムは、夜中続けられたその話し合いの中において、ジョセフ・スミスが次のように言うのを聞いた。「御霊の声が彼に臨んで、インディアンたちの住む西へ行くように、またハイラムとほかの数人を連れて、教会のための土地を探すように告げた。」<sup>11</sup>

1844年6月22日の夜遅く、ジョセフとハイラムは涙ながらに家族に別れを告げ、ウィラード・リチャーズ、オリン・ポーター・ロックウェルとともに小さな舟でミシシッピ川を渡った。その舟は水漏れが激しく、その上川の波が高いこともあって、向こう岸へ着くまで一晩かかってしまった。朝早く武装した警官隊がジョセフとハイラムを逮捕するためにノーブーへ来たが、二人を見つけることはできなかった。警官隊は、もしジョセフとハイラムが出頭しないなら、軍隊が侵攻して来るとノーブー市民を脅してから、カーセージへ戻った。同じ日の朝、ジョセフに会うためにその後を追った何人かの兄弟たちは、たとえジョセフがノーブーを去ったとしても、暴徒たちは聖徒を追い出すだろうと話した。それを聞いたジョセフはこう答えた。「この命が友にとって価値のないものなら、わたしにとっても何の価値もない。」<sup>12</sup>ジ

## 殉教

ヨセフとハイラムはノーブーに戻り、次の日に出頭することに決めた。

### ジョセフとハイラム、カーセージへ向かう

ノーブーへ戻ると、ハイラムは娘ロビーナとローリン・ウォーカーの結婚式の司式をした。間もなく襲い来る悲しみを前にした、つかの間の喜びであった。ジョセフはもう一度聖徒たちを前に話をしたいと思ったが、十分な時間がなかった。彼は家族が待つ自分の家へ戻った。心の中には、それが恐らく家族と過ごす最後の夜になるだろうとひしと感じていた。

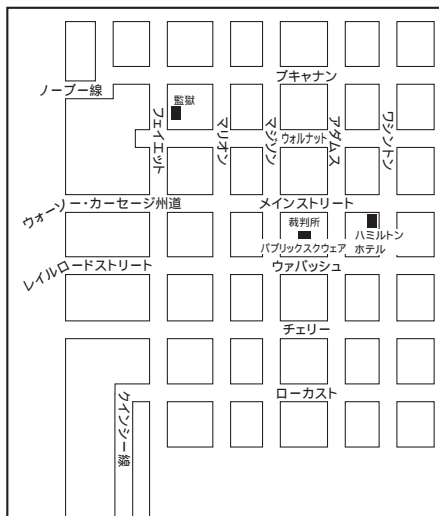
6月24日月曜日の午前6時半、ジョセフとハイラム、ジョン・テラー、そして15人のノーブー市会議員たちは、馬でカーセージへ出発した。ウィラード・リチャーズと多くの友人が彼らに同行した。それまで何週間も雨が降り続く空模様だったが、この日は朝からさわやかに晴れわたっていた。神殿のそばで馬の足を止めた預言者は、その神聖な建物とノーブーの町を眺め、「ここは地上で最も美しい場所で、最もすばらしい人々が住んでいる。彼らはこの先に待ち受けている試練については何も知らない」<sup>13</sup>と話した。そして預言者はその場にいた人々にこう話した。「もしわたしがそこ〔カーセージ〕へ行かなければ、この町と住民が滅ぼされることになるでしょう。愛する兄弟姉妹そして子供たちがミズーリで受けた苦しみをまたノーブーで受けるなどということは、とても耐えられないことです。それよりも、兄弟姉妹のために死ぬ方がわたしには望ましいことです。わたしは彼らのために喜んで死にたいと思います。わたしの働きは終わりました。」<sup>14</sup>

10時ごろ、一行はカーセージの西4マイル（約6.4キロ）にある農場に着き、そこで馬に乗った60名の州兵の一団に会った。ダン大尉が、ノーブー部隊が保有する州管理の武器をすべて引き渡すべきことを告げたフォード知事の命令書を提示した。ダン大尉のその要求に、ジョセフ・スミスはいかなる抵抗運動も起こらないようにするためにノーブーへ戻ることに同意した。それからジョセフはカーセージにいる知事に、出頭が遅れることを説明する簡単な手紙を送った。ノーブーへ戻る前に、ジョセフは次のように預言した。「わたしはほふり場に引かれて行く小羊のように行く。しかし、わたしは夏の朝のように心穏やかである。わたしの良心は、神に対してもすべての人に対しても、責められることがない。もし彼らがわたしの命を奪うなら、わたしは罪のない者として死に、わたしの血は地から報復するように叫び、やがて『彼は冷酷に殺害された』と言われるだろう。」<sup>15</sup>

ジョセフ・スミスはノーブーへ戻ると、3門のカノン砲と200丁の小火器を州軍に引き渡すように指示した。これは聖徒たちに、ミズーリ州で虐殺の前に行われた武装解除の光景を、苦痛とともに思い起こさせた。預言者はもう一度、家族に別れを告げる機会を得た。そして夕方6時にカーセージへ向かった。

6月24日の夜11時55分、ダン大尉と60人の騎兵は、ジョセフ・スミスとハイラム・スミス、そしてノーブー市議会議員を任意出頭として連行し、カーセージへ到着した。ジョセフとハイラムは、逃走と潜伏生活、また暗殺の脅威によって疲れ切っていたが、馬でカーセージへ入って来たときの二人の姿は堂々としていた。38歳の預言者、そして44歳のハイラムは、そろって背が高く、周りの人々に抜きんできて見えた。

カーセージは騒々しい状態だった。イリノイ州西部全域の町や農村から集った



カーセージはハンコック郡の郡庁所在地であり、郡の監獄が置かれていた。暴徒の多くは、任務を解かれてウォーソーからカーセージへ来ていた州軍の兵たちだった。

## 時満ちる時代の教会歴史

ハミルトンハウスは、ジョセフとハイラムが初めてカーセージへ行ったときに宿泊した場所であり、殉教の後で二人の遺体が一時置かれた所でもある。



人々が怒り狂い、モルモンの預言者の逮捕を要求して騒ぎ立てていたのである。彼らはその捕らわれた人たちを一目見ようといきり立っていた。暴徒の中には、地元のカーセージ連隊も含めて、手に負えない11,400人以上の州兵がいた。また、群れを成した人々が、酒を飲んだり、けんかをしたりしながら、一日中町の中を歩き回り、スミス両兄弟に近づいて危害を加えたがっていた。ダン大尉の努力によって、預言者とその一行は無事にハミルトンハウス・ホテルに入ることができた。州兵たちは、まだジョセフ・スミスを見せるようにと要求していた。とうとう、フォード知事が窓から姿を見せ、明日スミスに整列した州兵の前を歩かせると発表して、彼らを静ませた。

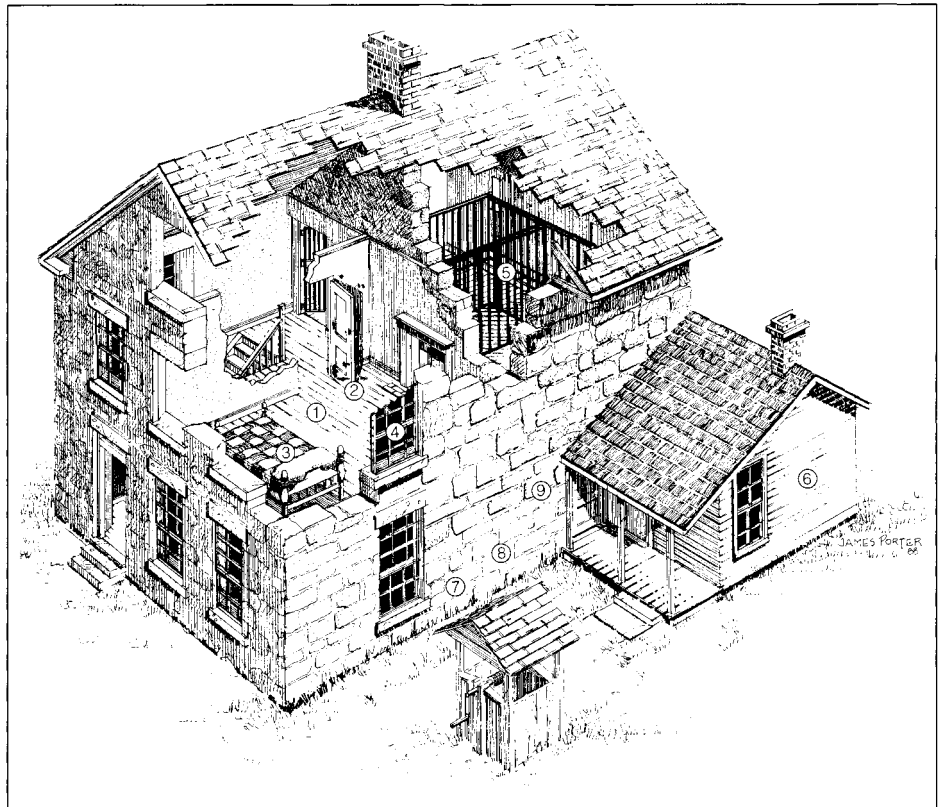
翌朝早く、ジョセフと兄弟たちは、騒擾罪の容疑で治安官のデビッド・ベティスワースに身柄を引き渡された。そして間髪を入れず、ノーブーに戒厳令を敷いたことで、イリノイ州への反逆罪で告訴を受けた。8時半になってフォード知事は州兵に集合を命じ、彼らに話した。囚人たちは危険人物であり、恐らく有罪になると思うが、彼らも今は法の手の中にあり、法に従って事を進めなければならないと話した。しかし、その言葉はさらに兵たちの怒りをかき立てただけだった。ジョセフとハイラムは汚い言葉を浴びせられ、また殺してやるという脅しの言葉に耐えながら、州兵たちの前を進まされた。

4時になって、治安判事ロバート・F・スミスを前に予審が開かれたが、この判事自身カーセージ連隊の指揮官であり、反モルモン勢力の中で活発に動いていた人物だったのである。ノーブーの市議員たちは500ドルの保釈金で保釈となり、巡回裁判所の次の開廷日に出頭するように命じられた。訴えられた兄弟たちのほとんどは、その後ノーブーへ戻ったが、ジョセフとハイラムはフォード知事との会見のためにそのまま残った。その晩、一人の治安官が来て、反乱罪という大罪の審理が行われるまでジョセフとハイラムを拘留するというスミス判事の署名入りの収監令状を提示した。ジョセフと彼の弁護人は、そのような話は予審の際に一切なく、違法だと抗議した。彼らの不服はフォード知事に伝えられたが、知事は執行吏の職務遂行を妨げることはできないと言うだけであった。

## 殉教

この監獄は1839年に着工され、4,105ドルの費用をかけて、2年後に完成した。25年間監獄として使用された後、建物は個人の住居として使われ、カーセージで最も立派な家の一つに数えられるようになった。教会は1903年に、ジョセフ・F・スミス大管長の指示の下に、4,000ドルでこの建物を購入した。そして1938年に、昔の姿に復元している。

1. ドア越しに撃ち込まれた銃弾を顔面に受け、ハイラム・スミスが倒れた場所。この部屋は看守たちの寝室としても使われていた。
2. ウィラード・リチャーズはこのドアの後ろに立ち、杖で敵を撃退しようとした。
3. 傷を負ったジョン・テラーはこのベッドの下にもぐり込んだ。
4. 預言者は2階のこの窓から井戸のそばに落ちた。彼は4発の銃弾を受けて、絶命した。
5. この部屋には独房が一つあった。ここは「土牢」と呼ばれ、刑事犯の独居房として使われていた。
6. 張り出した玄関、およびサマーキッチン（訳注：暑い季節に用いる台所）。看守とその家族が使用した。
7. 1階の居間。
8. 1階の台所。
9. 1階北西側の経済犯用独房。この部屋は重罪犯以外の収監に使われた。



カーセージ連隊の指揮官であったスミス判事は、自分が治安判事として発布していた収監令状の執行のために配下の兵を送った。ジョセフとハイラムは道にあふれかえる群衆の中を通過して、カーセージの監獄へ引き立てられた。ジョン・テラー、ウィラード・リチャーズを含む8人の友人が、二人について行った。ダン・ジョーンズは歩行用のステッキで、スティーブン・マーカムは自ら「矯正の鞭」と名付けていたヒッコリーの木の杖を持って、預言者とハイラムの両側を固めて歩き、酒に酔った群衆から二人を守ろうとした。結局のところ、カーセージでは石造りの監獄こそが、身の安全を守る場所だった。ジョセフとハイラムの幾人かの友人と一緒にいることを許された。

明けて6月26日、反乱罪に関する審理が行われた。被告側には証人がいなかった。反乱罪は保釈請求が認められないため、ジョセフとハイラムは6月29日に再度審理が行われるときまで、そのまま身柄を拘留されることになった。何人かの兄弟がフォード知事に対して、もし知事がノーブーへ行くようなことがあれば、カーセージに残るジョセフとハイラムの身の安全が保てなくなると話した。それに対してフォード知事は、ジョセフとハイラムと一緒に連れて行くこと約束した。ジョセフはその日の午後、自分が口述することをウィラード・リチャーズに書き取らせ、ダン・ジョーンズとスティーブン・マーカムは彼らがいた監獄内の部屋のゆがんだドアを折りたたみ式の小さなナイフで削っていた。暴徒たちが攻撃してきた場合に備えて、ドアにしっかりと掛け金をかけられるようにするためであった。

その夜、ウィラード・リチャーズ、ジョン・テラー、ダン・ジョーンズの3人が、ジョセフとハイラムとともに監獄に残った。彼らは一緒に祈り、『モルモン書』を読んだ。ジョセフは護衛してくれている兄弟たちに証を述べた。その後かなりたって

## 時満ちる時代の教会歴史



ダン・ジョーンズ（1811 - 1862年）はウェールズのプリントシャーで生まれ、後にアメリカに移住しそこで教会員となった。カーセージの監獄で預言者から与えられた預言的約束が成就し、ダン・ジョーンズは1845年から1849年にかけてウェールズで伝道した。彼は教会の出版物を自ら著作したり、翻訳することにより、2,000人以上を教会に改宗させるのに貢献した。

彼は1852年に2度目のウェールズ伝道に召された。そして1854年には伝道部長となり、再び故国の人々の中で偉大な働きをしたのである。

から、ジョセフは川船の船長をしていダン・ジョーンズと並んで、床の上に体を横たえて休んだ。「ジョセフは小さな声で彼に『あなたは死ぬことが怖いですか』と尋ねた。そのとき、ダンが『その時が来たのですか。わたしは主の業に携わっていますから、死は恐怖ではありません』と答えると、ジョセフ・スミスが言った。『あなたは死ぬ前にウェールズ〔ジョーンズの生まれ故郷〕に行き、召された伝道の業を全うすることでしょう。』<sup>16</sup>ジョーンズ長老は後にウェールズで宣教師として偉大な働きをし、この預言を成就した。

夜中の12時ごろ、何人かの男が監獄を囲み、囚人たちの部屋に通じる階段を上り始めた。兄弟たちの一人が日中ひそかに持ち込んでおいた武器を手にした。ドアの近くに来た暴徒たちは、部屋の中の物音を聞いて、たじろいだ。「預言者は威厳のある声で彼らに挑んだ。『来るなら来るがいい、暗殺者ども。用意はできている。逃げも隠れもせず、今ここで死ぬ覚悟もある。』<sup>17</sup>暴徒たちはそれを聞いて退き去った。

### カーセージの悲劇

明けて6月27日木曜日の朝、「ジョセフはダン・ジョーンズに、下へ行って夜中の騒ぎの原因を衛兵に尋ねて来るように求めた。カーセージ連隊に属していた衛兵の指揮官フランク・ウォーレルはいかにもいまましげに言った。『さんざん苦勞してあいつをここへ連れて来たのは、無事に逃してやるためじゃない。おまえさんもあいつと一緒に死にたくなかったら、日が暮れる前にここを去った方がいいぞ。……後になったら、おれの方があいつよりもいい預言ができるってことが分かるぞ。……』

ジョセフはジョーンズに、フォード知事のもとへ行って、ウォーレルに言われたことを知らせるように指示した。ジョーンズはフォード知事の宿舎へ向かう途中、一団の男たちを見た。そして、その中の頭目らしき男が盛んに何かを話しているのを聞いた。その男の話はこうだった。『この隊は今朝、命令に従って解散になるだろう。一応、この町を離れるふりはするが、午後になって知事とマクドノー隊がノーブーへ向けて出発したら、戻って来て、あいつらを殺す。監獄を打ち壊してでもだ。』それを聞いて、群衆は3度喝采かっさいの声を上げた。

ジョーンズ船長はフォード知事のもとへ行くと、夜中にあった出来事と、衛兵の士官が言ったこと、またそこへ来る途中に聞いたことを話し、その危険な状況を何とかするように強く求めた。

知事は答えた。『あなたは友人の身の安全を心配しておられるが取り越し苦勞ですよ。皆それほど無慈悲な人間ではありません。』

その言葉を聞いたジョーンズはいらだちながら、預言者たちの警衛として、自ら暗殺の意図をほのめかすような人間ではなくもっとまともな人間を配置する必要があると促した。……

……ジョーンズはこう話した。『知事がそれをなさらないというのであれば、わたしの望みはただ一つ……

……然しかるべき時に然るべき場所で、彼らの身の危険について知事が前もって注意を促されていたと証できるように、全能の神がわたしを生き長らえさせてくださることです。……』

## 殉教



預言者は自分と同房の兄弟たちの身を守るために、「ペッパーボックス」(こしょう入れ)と呼ばれていたこの6連発銃を用いた。

ジョン・S・フルマーは獄内にこの短身銃を持ち込んでいたが、実際には使われなかった。

……ジョーンズ自身も殺すと言って脅されていた。チョーンシー・L・ヒグビーは通りで彼にこう言った。『おれたちはジョセフとハイラムを殺すことに決めている。おまえも助かりたかったらここから消えた方がいいぞ。』<sup>18</sup>

その日の朝、ジョセフはエマにこう書き送っている。「わたしは死を覚悟しているが、自分の身の証を立てることができるし、これまでできる限りのことをしてきた。わたしの愛を子供と、すべての友人に伝えてほしい……。神があなたがたを祝福してくださるように。」<sup>19</sup>預言者はまた著名な弁護士オービル・H・ブラウニングにも手紙を書き、自分のもとへ来て弁護をしてくれるように頼んだ。その後間もなく、ウィラード・リチャーズとジョン・テラーを除いて、ジョセフの友人たちは監獄から退去させられた。

フォード知事は約束をたがえ、その朝、ジョセフとハイラムを残したままマクドノー郡のダン大尉の騎兵隊を伴ってノーブーへ出発した。ダン大尉の一隊は、ジョセフ・スミスの件に関して中立の立場を表明していた唯一の隊だった。途中フォード知事は、監獄を警衛するカーセージ連隊を除いて、カーセージとウォーソーの諸隊の解散命令書を送った。カーセージ連隊がジョセフに最も強い敵意を持っていたことを考えれば、彼の警護を期待できるはずがなかった。彼らは、後に預言者の敵たちが監獄に殺到するときには、囚人たちを守るふりをするという謀議の加担者だったのである。

フォード知事はノーブーで侮辱に満ちた演説をして、次のように話した。「エクスボジター社を打ち壊し、市に戒厳令を敷いたのは重大な罪であり、その償いはしてもらわなければならない。したがって、あなたがたは不測の事態に備えて心構えをしておきなさい。騒ぎのもう一つの原因は、あなたがたが多くの銃を持っていることである。住民は、あなたがたがそれらの銃口を政府に向けるのではないかと恐れている。あなたがたの宗教の特異性が原因で、あなたがたに対してかなりの偏見があるということは承知している。しかし、あなたがたは銃を構える聖徒ではなく、神に祈る聖徒でなければならない。」<sup>20</sup>

一方、ウォーソーのリーバイ・ウィリアムズ大佐は、知事からの解散命令書を自隊の兵たちに伝達した。次いでトーマス・シャープがその兵たちに向かって演説し、東へ向かいカーセージへ行くように要求した。そして志願者たちに、ジョセフとハイラムを殺せとの檄<sup>げき</sup>が飛ばされた。彼らの一部は、火薬を混ぜた泥を顔に塗って変装し、カーセージへ向けて出発した。

獄内の4人の兄弟たちは、午後の炎暑にうだり切っていた。ジョセフはハイラムに単発銃を与え、自分は朝のうちにサイラス・ウィーロックがひそかに持ち込んでいた6連発銃で身を守る備えをした。重苦しい空気に包まれていた兄弟たちは、ジョン・テラーに賛美歌の中の一曲「悩める旅人」を歌うように頼んだ。この歌に歌われている悩める旅人は、歌詞の最後の箇所自身で救い主であると明らかにされた。ジョセフがもう一度この歌を歌うように頼んだのにこたえ、ジョンは再び歌った。彼らが置かれていた状況を考えると、この歌詞の一部が特に心に強く訴えたものと思われる。

## 時満ちる時代の教会歴史

「ジョセフとハイラムの殉教」  
ゲリー・スミス画



「預言者の死」ゲリー・スミス画



ジョン・テラーの時計と杖

ひとや  
獄舎に謀反の刑を受く彼を見ぬ  
われはあざけりの中、彼をたたう  
われは彼のため死ぬかと問われて  
身は弱けれど、霊は「死ぬ」と叫びぬ  
(『賛美歌』14番)<sup>21</sup>

夕方4時に監獄の警護役が交替になり、その日の朝ジョセフ・スミスに脅しを与えていたフランク・ウォーレルが当番になった。5時を数分過ぎたころに顔を黒く塗った100人ほどの暴徒が町に着き、監獄に向かった。預言者たちの耳に階下から騒ぎ声が聞こえ、次いで、手向かいするなというどなり声と3、4発の銃声が響いた。預言

## 殉教



ウィラード・リチャーズ(1804 - 1854年)は1840年に使徒に聖任され、ジョセフ・スミスの私設秘書の一人として働いた。彼はまた、1842年には歴史記録者として、また1845年には教会中央記録者の職に任じられた。彼はカーセージでの体験を基に、『監獄での2分』(Two Minutes in Jail)という感動的な記録を著した。1847年にはブリガム・ヤング大管長の第二副管長となり、死ぬまでその職にあって責任を果たした。



ジョン・テラー(1808 - 1887年)。1838年12月19日に十二使徒定員会の一員として召され、カーセージでは重傷を負った。彼はウィラード・リチャーズとともに、ジョセフとハイラムが無実の罪で血を流し、命を絶たれたことの証人となった。ジョン・テラーはブリガム・ヤングが亡くなった1877年8月29日から自分自身がこの世を去る1887年7月25日まで、大管長として教会を管理した。

者たちは、階段を上り半開きの戸口に銃身を突っ込んできた襲撃者たちを撃退するために、ドアの所へ殺到した。ジョン・テラーとウィラード・リチャーズは杖とステッキで突き入れられたマスケット銃を激しくたたいた。戸板越しに撃たれた銃弾を顔の左側に受けて、ハイラムは「わたしは死ぬ」と言いながら倒れ、ジョセフはハイラムの上に身をかがめて「おお、ハイラム兄さん!」と叫んだ。ジョン・テラーは、そのとき見たジョセフの悲痛な表情は永遠に忘れることができないと話している。ジョセフはドアの前の辺りに行くと、暴徒たちがひしめく通路に向けて6連発銃を撃ち放った。6発のうち実際に火を吹いたのは3発だけで、3人の襲撃者に傷を負わせた。

ジョセフ・スミスの銃撃に、襲撃者たちは一瞬ひるんだ。ジョン・テラーは窓から飛び降りようとして、銃弾を受けた。窓の外から撃ち放たれた銃弾が胸ポケットにあった時計に当たり、彼は部屋の中へ押し戻されるようにして倒れた。その時計は5時16分の時刻を指して動きを止めた。ジョン・テラーは床に倒れてからも、さらに左手首と左ひざを撃たれた。寝転がりながらベッドの下へもぐり込もうとするところを、再び階段踊り場からの銃撃を受け、左腰の肉を吹き飛ばされた。彼の血で床と壁が赤く染まった。「ジョセフは、部屋の中には危ないと判断して」ジョン・テラーと同じように窓から飛び降りて逃げようとした。間髪を入れず、暴徒は彼に銃撃を浴びせた。致命傷を受けたジョセフは「おお、わたしの神、主よ」と叫び、開け放たれた窓から、下へ落ちた。階段にいた暴徒たちは、ジョセフ・スミスが死に至ったのを自ら確かめようと、外へ駆け出した。<sup>22</sup>

ウィラード・リチャーズは、耳もとを銃弾がかすめただけで無傷だった。これ以前にジョセフはウィラードに対して、銃弾がうなりを立てて飛び交う中でも、彼は守られ、無傷で逃れるだろうと預言していた。このときになってウィラードはジョセフの言葉の意味をすべて理解した。彼はひどい傷を負ったジョン・テラーの体を引きずるようにして隣の部屋へ運び、わらの上に寝かせて、古く汚いマットレスをかけた。テラー長老は、そのわらが血を止める助けをしたので、命が助かったのだ信じていた。ウィラードはいずれ自分も殺されると思っていた。しかし、驚いたことに暴徒は自分たちをそのままにして、逃げ去ってしまったのである。

預言者の弟サミュエル・スミスは、ジョセフとハイラムの命が危険にさらされていると聞いて、カーセージへ急いだ。その日の晩にはカーセージへ着いたが、暴徒たちの追跡を受けたことで、体は疲れ切っていた。(死ぬか生きるかの逃走で消耗し切ったサミュエルは高熱を発し、それが元で7月30日に息を引き取った。)サミュエルはカーセージで、殉教した二人の兄の遺体をリチャーズ長老とともにハミルトンハウスへ運んだ。検死官の審問が終わってから、ウィラード・リチャーズはノーブーの聖徒たちにあてて「ジョセフとハイラムは亡くなりました」という手紙を書き送った。<sup>23</sup>

暴徒たちは自分たちの町ウォーソーへ逃れたが、モルモンの報復を恐れてミシシッピ川を越え、ミズーリ州へ入った。フォード知事はカーセージへ戻るためにノーブーを出発した直後に暗殺のことを知らされた。カーセージに着くとフォード知事は、カーセージにまだ残っていた数人の住民にそこから避難するように促し、郡の記録類を守るためにクインシーへ移した。しかしそのようなことは必要なかった。



## 時満ちる時代の教会歴史



ジョセフ・スミスとその家族は1843年8月に、このマンションハウスへ移り住んだ。後に建物本体の裏側に翼欄が増築されて、全体的に見るとL字型の建物となり、全部で22の部屋があった。1844年の1月からは、エベニーザ・ロビンソンがマンションハウスをホテルとして経営し始めた。預言者は自分と家族のために、6つの部屋を使っていた。



ジョセフ・スミスとハイラム・スミスのデスマスク

愛する指導者の死を知らされた聖徒たちは、復讐心に燃えるのではなく悲しみに打ちひしがれたのである。

1844年6月28日の朝、殺された二人の指導者の遺体が2台の馬車に別々に乗せられ、夏の強い日差しが当たらないように木の枝で覆われて、ウィラード・リチャーズ、サミュエル・スミス、アルトア・ハミルトンによってノーブーへ運ばれた。2台の馬車は朝8時にカーセージを出発して午後3時にノーブーへ到着し、多くの人々に迎えられた。翌日、遺体はマンションハウスにしめやかに安置され、何千人もが最後の別れをするために二人の棺の前を静かに列を成して進んだ。彼らの死はその家族にとって想像に絶するほど過酷なことであった。二人の遺体は、ジョセフ・スミスの首にかけられた賞金をねらう者たちに見つからないようにノーブーハウスの地階にひそかに葬られた。公開葬儀が行われ、砂を詰めた棺がノーブー墓地に葬られた。カーセージでの悲劇に対する聖徒たちの深い悲しみは何週間も続いた。

## ジョセフ・スミスの偉大さ

カーセージの惨劇の中で奇跡的に生き長らえたジョン・テラーは、そのときの事の次第を記し、また現在教義と聖約135章に収められている預言者への追悼文を記録した。「主の預言者であり聖見者であるジョセフ・スミスは、ただイエスは別として、この世に生を受けた他のいかなる人よりも、この世の人々の救いのために多くのことを成し遂げた。」(3節)彼はさらに、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの名は「殉教者の中に加えられる。そして、あらゆる国の読者が、荒れた世を救うために『モルモン書』と当教会の『教義と聖約』という本書が十九世紀の最も貴い血を犠牲にしてもたらされたことを思い起こす」(6節)と書いている。ジョン・テラーは、この殉教は霊的に重要な意義を持つものであり、ジョセフは「神とその民の目に偉大な者として生き、偉大な者として死んだ。そして、昔の、主の油注がれた者のほとんどがそうであったように、彼は、自らの血をもって自分の使命と業を証明したのである。彼の兄ハイラムも同様であった。彼らは生前に分かたれることはなく、また死後も離れることはなかった」(3節)と述べている。

ジョセフ・スミスはわずか38年と6か月しかこの世に生きなかったが、彼が人類のために残した足跡の偉大さには測り難いものがある。『モルモン書』を翻訳したことに加えて、彼は幾つもの啓示を授けられた。その多くは『教義と聖約』『高価な真珠』として世に現されている。ジョセフ・スミスは、手紙、説教、詩、そのほか靈感あふれる様々な記録を通して、永遠の原則を明らかにした。それらの遺産は数多くの書物となって今に伝えられている。彼は地上にイエス・キリストの教会を回復し、また一つの市を築き、二つの神殿の建築を監督した。彼は死者のための身代わりの儀式をはじめ、数々の神殿の儀式を回復した。そしてそれによって、ふさわしい家族は、神権によって永遠に結び固められるようになったのである。また彼はアメリカ合衆国の大統領候補となり、裁判官、ノーブー市長、ノーブー隊中将などの職も務めた。

後にボストン市長となったニューイングランドの著名人ジョサイア・クインシーは、殉教の2か月前にジョセフ・スミスを訪問している。それから何年も後に、彼は自分の生涯において強烈な印象を与えた人々について記録しているが、彼はジョセ

## 殉教

フ・スミスについてこう記録している。「まだ生まれていない世代の人々が使う教科書には、次のような質問が載せられることであろう。19世紀のアメリカ人でアメリカの運命に大きな影響を与えた人はだれですか？ そのときの答えに『モルモンの預言者、ジョセフ・スミス』と書く人は少ないであろう。」<sup>24</sup>

## 注

1. ルーシー・マック・スミス, *History of Joseph Smith* 『ジョセフ・スミスの生涯』プレストン・ニブレー編 (Salt Lake City: Bookcraft, 1958), 309 - 310
2. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1843年1月22日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ。リチャード・ロイド・アンダーソン “Joseph Smith’s Prophecies of Martyrdom” *Sidney B. Sperry Symposium* 「ジョセフ・スミスの殉教の預言」『シドニー・B・スペリー・シンポジウム』1980年 (Provo: Brigham Young University, 1980), 1 - 14も参照
3. “Trial of Elder Rigdon” *Times and Seasons* 「リグドン長老の試練」『タイムズ・アンド・シーズンズ』1844年9月15日付, 651で引用
4. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1844年3月24日
5. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1844年4月6日参照
6. ダリン・H・オクス “The Suppression of the Nauvoo Expositor” *Utah Law Review* 「ノーブー・エクスポジター出版禁止処分」『ユタ法律論評』1965年冬季号, 890 - 891参照
7. *Warsaw Signal* 『ウォーソーシグナル』1844年6月12日付, 2
8. *History of the Church* 『教会歴史』6 : 487
9. 『教会歴史』6 : 540
10. 『教会歴史』6 : 545 - 546
11. スティーブン・マーカムがワイオミング州フォートサブライのウィルフォード・ウッドラフにあてた手紙, 1856年6月20日付, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ
12. 『教会歴史』6 : 549
13. 『教会歴史』6 : 554
14. ダン・ジョーンズ “The Martyrdom of Joseph Smith and His Brother, Hyrum” *Brigham Young University Studies* 「ジョセフ・スミスと兄ハイラム・スミスの殉教」ロナルド・D・デニス訳。『ブリガム・ヤング大学紀要』1984年冬季号, 85で引用
15. 『教会歴史』6 : 555。教義と聖約135 : 4も参照
16. 『教会歴史』6 : 601
17. ダン・ジョーンズがトーマス・パロックにあてた手紙, 1855年1月20日付。 “The Martyrdom of Joseph and Hyrum Smith” 「ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殉教」『ブリガム・ヤング大学紀要』1984年冬季号, 101で引用
18. 『教会歴史』6 : 602 - 604
19. 『教会歴史』6 : 605
20. 『教会歴史』6 : 623で引用
21. 『教会歴史』6 : 615 ; 『賛美歌』14番
22. 『教会歴史』6 : 617 - 618
23. 『教会歴史』6 : 621 - 622で引用。ディーン・ジャーマン “The Life and Contributions of Samuel Harrison Smith” 「サミュエル・ハリソン・スミスの生涯と貢献」修士論文, ブリガムヤング大学, 1961年, 103 - 105参照
24. ジョサイア・クインシー, *Figures of the Past from the Leaves of Old Journals* 『古い日記の中の思い出の人々』, (Boston: Roberts Brothers, 1883) 376

# 王国を支える十二使徒

年表	重要な出来事
1844.8.3	シドニー・リグドンが教会の「後見人」と主張して、ピッツバーグからノーブーへ到着
1844.8.6	十二使徒定員会会員が東部からノーブーへ到着
1844.8.8	ブリガム・ヤングが人々の前で変貌し、十二使徒会が教会の管理定員会として支持される

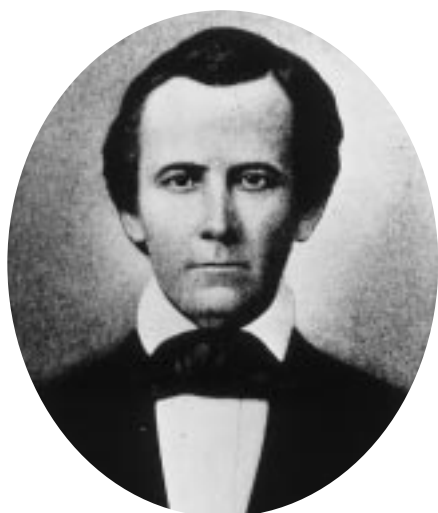
**預**言者ジョセフ・スミスの死に伴い、大管長会が解散する。聖徒たちが指導者の死を嘆き、これから一体だれが教会を指導するのだろうかと考えていたとき、1844年の早いころにノーブーを去っていたシドニー・リグドンが、8月3日に再びノーブーに現れて、自分は教会の「後見人」に任命されて然るべきだと主張した。十二使徒のほとんどはまだ東部での伝道から戻る途中でノーブーにはおらず、リグドンはその主張によって聖徒たちの心を幾らか浸食していた。8月8日にシドニー・リグドンの後見資格について討議するための集会在召集された。

## 陰うつな1か月

ジョセフ・スミスが殺されたとき、ノーブーの町は深い悲しみに包まれた。預言者殉教の知らせを受けたノーブー以外の支部の聖徒たちの悲しみもやはり深いものであった。しかし十二使徒定員会が到着し、確固たる指示を出すことによって、教会に漂っていた陰うつな空気が徐々に去り始めた。殉教当時十二使徒会は、ジョン・テラーとウィラード・リチャーズを除いて合衆国東部で伝道の業に従事していた。『エクスポジター』(Expositor)の一件で重大な局面にあった6月、ジョセフ・スミスはノーブーに戻るよう彼らに手紙を書き送ったが、十二使徒たちがその手紙を受け取ったのは殉教後のことだった。しかしその後の3週間のうちに、預言者殉教という悲しむべき知らせを受けて、彼らは急ぎょノーブーへ戻ったのである。

殉教の後使徒たちが戻るまでの間、ノーブーで秩序が保たれていたことは称賛に値するすばらしいことであった。イリノイ州西部の住民たちは報復を恐れていたが、聖徒たちは気を落ち着けて当局の犯人捜索を見守るようとのジョン・テラーとウィラード・リチャーズの指示に従った。カーセージの悲劇の3日後、リチャーズ長老はブリガム・ヤングに次のような手紙を書き送っている。「聖徒たちはすばらしい忍耐と自制心をもってこの試練を耐えてきました。彼らは今も冷静でなければなりません。信仰にかけても、今は犯人の追求をすべきではありません。それはフォード知事に任せるべきです。……復讐は天にあります。」<sup>1</sup>ノーブー市議会も住民に次のような通達を出した。「市民は義にかなった行いをして、静かに穏やかにしてください。十二使徒とその他の役員、あるいはその大多数が集まり次第、イスラエルの偉大な集合に向けて進むべき道と、時満ちる神権時代の最終的な行く末が示されるでしょう。」<sup>2</sup>

カーセージの監獄で重傷を負ったジョン・テラー長老がノーブーへ戻って来たのは7月2日であった。7月中、彼の回復ぶりには目覚ましいものがあったが、依然として、病床を離れることはできなかった。彼はそのような状態の中でも、ほかの使徒たちが戻って来るまで教会の指導に当たっていたリチャーズ長老を助けた。リチ



トーマス・フォード(1800 - 1850年)はペンシルベニア州で生まれイリノイ州で育ち、そこで法律を学んだ。イリノイ州検事、巡回判事、イリノイ州最高裁判所判事を歴任した。1842年から1846年にかけてイリノイ州知事の職にあった。

## 王国を支える十二使徒

ヤーズ長老とテラー長老は連名でイギリスの聖徒たちに事態を説明する手紙を書き送った。

「聖徒たちは、『報復はわたしのすることである。わたしが報復する』という神の言葉を心に留めて、非常に平静な行動を保っています。……

この神の僕たちは火によって、罪深い暴徒という火によって、天へ送られました。古代の預言者と同じように、彼らは世に受け入れられるかぎり生きました。自分たちの指導者を取り上げられ、その血に対する復讐を許されないということは、聖徒たちが試されようとしている炉の一つと言えるでしょう。<sup>3</sup>

教会の出版事業の責任者、また市会議員、預言者の筆記者でもあったウィリアム・W・フェルプスは、ノーブーの秩序を保つうえで計り知れない大きな貢献をした。フェルプス長老は1842年に教会に復帰して以来、王国の建設のために倦むことなく努力し、アブラハム書の出版や大統領選の選挙運動など数多くの重要な計画において預言者を助けていた。彼はジョセフとハイラムの葬儀においては中心的な話者として話をし、この危機的な状況の中でテラー長老とリチャーズ長老を補佐した。彼は詩人として、後に教会で広く愛唱されるようになった賛美歌の歌詞の中で預言者を記念したたえた。

たたえよ、主の召したまいし  
主と語りし予言者を  
末の時を始めたる  
業を世、皆崇めよ<sup>あが</sup>  
たたえよ、今彼は天に  
争う者もなく  
神と共に働きて  
今は永遠に滅びず<sup>とわ</sup><sup>4</sup>

それから一月もたたないうちに、聖徒たちはもう一つの悲しみを味わった。ジョセフとハイラムの弟、サミュエル・H・スミスが亡くなったのである。サミュエルはジョセフとハイラムの殉教の後、カーセージに入った最初の聖徒の一人であった。彼は教会の敵の手を逃れて、カーセージにいる兄たちのもとへ向かったが、彼が着いたときすでに二人はこの世の人ではなかった。極度の緊張によって彼の体は衰弱した。彼はひどい熱を出し、次第に病が進んで1844年7月30日についに息を引き取った。『タイムズ・アンド・シーズンズ』(Times and Seasons)には、この神権時代の偉大な人物の一人として彼をたたえる記事が載せられた。悲嘆に暮れる彼の母ルーシー・マック・スミスは4年の間に夫と4人の息子、ドン・カーロス、ハイラム、ジョセフ、サミュエルの死に直面してきた。

## 十二使徒の帰還

殉教の当日、十二使徒会の会員たちは訳の分からない重苦しく憂うつな気持ちに襲われていた。ヒーバー・C・キンボール長老はライマン・ワイト長老とフィラデルフィアからニューヨーク・シティーへ向かう旅の途中、友をなくしたときに味わうような悲しい思いにとらわれていた。ボストンにいたオーソン・ハイドは教会が

## 時満ちる時代の教会歴史

ジョセフ・スミスとハイラム・スミスが殉教したとき、使徒たちは国内の様々な場所に散っていた。

ブリガム・ヤング、オーソン・ハイド、ウィルフォード・ウッドラフはボストンにいた。

ヒーバー・C・キンボールとライマン・ワイトはフィラデルフィアをたつて、ニューヨーク州へ向かっていた。どこかでウィリアム・スミスと合流し、6月29日に大会が開かれる予定のボストンへ向けてさらに旅を続けた。十二使徒のうち6人がその大会に出席した。ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、オーソン・ハイド、ウィリアム・スミス、オーソン・ブラット、ウィルフォード・ウッドラフ、ライマン・ワイトの7人である。

パーリー・P・ブラットは運河を航行する川船に乗ってノーブーへ戻る途中で、ニューヨーク州のユティカとパツファローの間の地点にいた。

ジョージ・A・スミスは教会員たちと、ミシガン州ジャクソンバーグ付近に滞在していた。

アマサ・ライマンはシンシナティにいた。

オーソン・ブラットの6月27日の所在は不明であるが、6月29日にはボストンの大会に出席している。したがって殉教があったその日には、ボストンにかなり近い所にいたに違いないと考えられる。

ジョン・E・ページはそれまでピッツバーグに滞在し、1843年6月から1844年5月にかけて、そこで『福音の光』(Gospel Light)の編集と発行に当たっていた。正確な地点は分かっていないが、ピッツバーグかその周辺にいたと考えるのが妥当と思われる。

ジョン・テラーとウィラード・リチャーズはカーセージにいた。

借りていた集会場で地図を見ていたときに重苦しく悲しい気持ちに包まれるのを感じた。地図を見るのをやめ、ゆっくりとその建物の中を歩く彼の頬に涙が伝った。ミシガン州にいたジョージ・A・スミスは、一日中重苦しい気分と不吉な予感のようなものを感じていた。床に就いても眠ることができなかった。そして彼はこう話している。「あるとき、ある友人から『ジョセフとハイラムは死んだ。うれしく思わないかね』と耳もとでささやかれたような気がした。」<sup>5</sup>

殉教の2日前、パーリー・P・ブラットは御霊に促されて、ニューヨーク州を出発してノーブーへと向かった。途中、運河を進む船の上で偶然に兄弟のウィリアムに会った。それは預言者たちが殉教した当日であった。「あたかも地獄の力が解き放たれたかのたように、わたしは不思議な重々しい恐れに捕らえられた。わたしは悲痛な気持ちに捕らわれて、ほとんど口も利けなかった。……『完全に、厳肅に沈黙を守ろう。今日は暗黒の日である。暗黒の力が勝利を得たときである。ああ、全地に蔓延するような殺戮の霊に対し、わたしは何と敏感なことだろう。』」<sup>6</sup>

パーリー・P・ブラットはノーブーを留守にしていた使徒の中では、最初に殉教のことを知らされた。彼は汽船に乗って、五大湖をシカゴに向かって進んでいた。ウィスコンシン州に到着したとき、乗船して来た客たちがカーセージの殺人事件のニュースを伝えた。船内が大騒ぎになり、多くの乗客が彼をあざけり、モルモンはこれからどうするつもりだと聞いてきた。彼はそれに対して答えた。「彼らはこれからも続けてその使命を果たし、彼〔ジョセフ・スミス〕が回復した業を世界中で広めていきます。彼より以前の時代の預言者や使徒はそのほとんどが、また世の救い主までもがその命を奪われました。それでも、その死によって真理が変えられたり、真理の最後の勝利が妨げられることはありませんでした。」<sup>7</sup>

ブラット長老は悲しみのうちに、食べることも眠ることもほとんどできない有様で、イリノイ州の平原をおよそ105マイル(約170キロ)、徒歩で旅を続けた。彼は悲しみの淵に沈む聖徒たちにどう対したらよいのか考えていた。そして主に助けを祈り求めた。「突然、神の御霊がわたしに臨み、言いようのない喜びと幸せな思いが心の中に広がった。そして啓示の霊があたかも炎のように強い温かな思いと歓喜になって胸の内に燃えた。御霊がわたしに告げた。……『行って、ノーブーのわたしの民に、毎日なすべきことを続け、自分たちの問題に対処し、十二使徒定員会の残りの者たちが戻るまでは、教会の管理についていかなる改造や変更の動きもないように言いなさい。しかしわたしがノーブーで命じておいた主の宮の建設を続けるように、彼らを促しなさい。』」<sup>8</sup>パーリーは7月8日にノーブーに到着すると、悲しみに沈む人々に秩序ある行動を保たせるよう、リチャーズ長老とテラー長老を助けた。

ジョージ・アルバート・スミスは7月13日、ミシガン州で新聞を読んで殉教のことを知った。最初はそれを捏造記事と思ったが、事実であることを確認するや同僚の3人の宣教師とともに大急ぎでノーブーに向かった。心配と睡眠不足のために彼の体は発疹が出るほどだった。体中がはれ上がり食べることもできなかったがそれでも旅を続け、7月27日ノーブーへ到着した。そして、すでにノーブーにいた3人の使徒たちとの協議に入った。<sup>9</sup>

ボストンでは、7月9日にジョセフ・スミスの死亡のうわさが流れ始めた。家族からの手紙あるいはもっと完全な新聞記事を通して確認が取れる前の1週間、ブリガ

## 王国を支える十二使徒

ム・ヤング、ウィルフォード・ウッドラフ、オーソン・ブラットはその恐ろしい知らせが意味することについて考えていた。ブリガムは日記にこう書いている。「わたしが最初に思ったのは、ジョセフが王国のもろもろの鍵を自らの死とともに地上から持ち去ってしまったのかということだった。オーソン・ブラット兄弟がわたしの左に座り、二人ともいすにかけていた。わたしはひざに手を置きながら、王国の鍵は今ここに、教会とともにあると話した。」<sup>10</sup>

ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、オーソン・ブラット、ウィルフォード・ウッドラフ、ライマン・ワイトは連絡を取り合い、合流し、鉄道、馬車、船などでノーブーへの旅を急いだ。後に起きた様々な出来事は、このとき旅を急いだことのいかに賢明であったかを証明することになる。彼らは8月6日の夕方にノーブーへ到着した。ウィルフォード・ウッドラフは自分の気持ちを次のように記録している。

「町に入ると、ノーブーはかつて経験したことの深い闇に包まれているかのようにだった。

……町中の聖徒がわたしたちを喜びをもって迎え入れてくれた。彼らは指導者を取り去られ、父親を失い、羊飼いのいない羊のように感じていた。」<sup>11</sup>

## 預言者の召しの継承の重大局面

大半の使徒は8月6日に到着したが、それは決して早すぎるということではなかった。だれが教会を指導するかという点について非常に危機的な状況が発生していたのである。ウィラード・リチャーズは聖徒たちを結束させようと、心身をすり減らして働いていた。8月3日土曜日にシドニー・リグドンが啓示の指示に反し自ら進んで追放の地として移り住んでいたペンシルベニア州ピッツバーグから帰還していた（教義と聖約124：108 - 109参照）。シドニーは教会の管理権を引き継ぐねらいをもって戻って来たのであった。預言者は殉教のかなり前から第一副管長であるシドニーに対して信頼を置けなくなっていたが、ノーブーのすべての聖徒がそれに気づいていたわけではなかった。

シドニーはその時点でノーブーにいた4人の使徒と話し合うことを避け、その代わりに8月4日の日曜日に森に集まった聖徒たちを前に話をした。彼は、自分は一つの示現を受けたと主張した。

「シドニーは教会の状況について主から示された啓示とやらについて話をした。そして、ジョセフ・スミスが起こした教会を、彼の名誉のために築き上げるには、後見人を任じなければならないと語った。

彼は自分こそ、古代の預言者たちが歌にうたい、記録し、喜んだ人物であり、まさに過去のすべての時代の預言者が語った業を行うために遣わされたのだと話した。」<sup>12</sup>パーリー・P・ブラット長老は後に、シドニー・リグドンこそ「預言者たちにうたわれも、記録もされなかった人物」であると話している。<sup>13</sup> この集会で、シドニーは自分の主張に同調していたノーブーステーク会長ウィリアム・マークスに、新しい指導者を支持するために、8月6日に集会を招集するように求めた。マークス会長はその集会の開催日を8月8日の木曜日に変えたが、ほかの十二使徒たちが到着したのは8月6日の夜だったことを考えれば、それは神の御心の表れであった。



シドニー・リグドン（1793 - 1876年）はジョセフ・スミスの副管長として働くように召された。彼は有能な弁舌家で何度も預言者の代弁者としての務めを果たした。『教義と聖約』の中には、幾つかシドニー・リグドンに関する啓示がある。

## 時満ちる時代の教会歴史

またシドニーは教会の財産保管人を任命するために、ジョセフ・スミスの家でウィリアム・マークスとエマ・スミスに会った。エマはジョセフ・スミスの名義になっていた教会の財産と私的な財産が失われるのを防ぐために、それが早く決定されるように望んだ。パーリー・P・ブラットはその集まりの場に来て、彼らが行おうとしていることに即座に抗議した。彼は、財産保管人の任命は中央役員によって、教会全体のビジネスとして行うべきものであり、一ステークの役員が処理すべき事柄ではないことを説明した。パーリーはこう主張したのである。「原則が危機に瀕しているというときに、わたしには金のことなど問題ではありません。たとえ、何千ドル、何百万ドルの金がなくなろうとも、かまいません。わたしたちは金銭上の利益のために、教会の権威と原則が踏みじられるのを見過ごすことはできないし、そうするつもりもありません。」<sup>14</sup>この会は、何の結論も出ないままに解散した。

8月5日月曜日にシドニー・リグドンはようやくノーブーにいた使徒たちと会見した。席上、彼はこう宣言した。「『諸君、あなたがたはくたびれ果てている。あなたがたは皆分裂し、反モルモンに圧倒され、兄弟たちの意見は四分五裂している。...何もかもが混乱し、あなたがたにはなすすべがない。あなたがたに欠けているのは偉大な指導者だ。あなたがたには指導者が必要なのだ。その指導者の下に結束しなければ、あなたがたは四方に吹き散らされるだろう。反モルモンが選挙を制するようになる。ぜひとも後見人を任命する必要がある。』

ジョージ・A・スミスが語った。「『兄弟たち、リグドン兄弟は完全に判断を誤っています。分裂はありません。兄弟たちは結束しています。選挙でも皆一致し、法律と秩序を愛する人たちが、大多数の支持を受けて選ばれることでしょう。おびえる必要はどこにもないのです。リグドン副管長は、根拠のない恐れをあおり立てています。』」<sup>15</sup>

このような状況の中、8月6日の夜、十二使徒たちが東部から戻って来たことは非常に時宜を得ていた。彼らは翌朝ジョン・テラーの家で会見し、再会を喜び合い、「聖徒たちもまた、思いをかき乱され心に悲しみが満ち、闇の中に道が見えなくなりそうに思えたこの非常に重大な転機に十二使徒たちが到着したことを、まさしく神の御心だと考えて彼らを歓迎するに違いなかった。」<sup>16</sup>ブリガム・ヤングは集会を力強く管理した。彼はこれまでに生じたすべての事柄について討議した後で、十二使徒、ノーブー高等評議会、大祭司の出席を得て午後4時から再び集会を開き、前の日曜日にシドニーが聖徒たちに話した事柄について討議すると発表した。

シドニー・リグドンはその集会で、彼が受けたという示現と啓示について話すように求められた。シドニー・リグドンはこう話した。「わたしがここへ来た目的は、聖徒を訪ね、自分自身を後見者として彼らにささげることである。わたしは6月27日〔殉教の日〕にピッツバーグで示現を受けた。それは開かれた示現としてではなく、『教義と聖約の書』(Book of Doctrine and Covenants)〔教義と聖約76章に記録されている、シドニー・リグドンとジョセフ・スミスが受けた啓示を指す〕の示現の続きとして、わたしの心の中に示された。」<sup>17</sup>彼はさらに、だれも教会の指導者としてジョセフ・スミスに代わることはできないということ、また任命された預言者の代弁者として自分が教会の後見人の役割を引き受けるべきだということと話した。ウィルフォード・ウッドフは日記の中で、シドニーの話は「長々しいもので、示現と言

## 王国を支える十二使徒

えるものではなかった」<sup>18</sup>と書いている。

シドニーの後に、ブリガム・ヤングが話した。「だれが教会を導こうと、わたしは心配しない。……しかし、知らなければならないのは、神がそれを指示されるということである。……わたしはこの件に関し、神の御旨を知る鍵と手段を得ている。

……

ジョセフは逮捕される前に、彼自身の持っていた使徒職に属する鍵と権能のすべてを、わたしたちの頭の上に結び固めた。したがって、いかなる人物、いかなる組織といえども、この世にあって、また来るべき世にあって、ジョセフと十二使徒の間に介入することはできない。

ジョセフは十二使徒定員会に向かってよく次のように言った。『わたしは王国の基を敷いた。あなたがたはその上にさらに築いていかななければならない。王国はあなたがたの双肩にかかっている。』<sup>19</sup>

次にブリガム・ヤングは、8月13日火曜日に特別大会として聖徒たちを集め聖会を開き、この件について提議をすると告げた。しかし次の日の朝、使徒たちはひそかに集って「人々の間にあるかなりの動揺と、教会を分裂させようとする一部の者たちのたくらみを考慮して」、火曜日を待たずその日の午後に聖会を開くことに決定した。<sup>20</sup>

## ブリガム・ヤングに引き継がれた預言者の権威

1844年8月4日木曜日は、福音回復の歴史の中でも際立って重要な日となった。この日、教会員たちの前で一つの奇跡が起こった。ブリガム・ヤングが人々の前で尊い者とされ、教会の継承に伴う危機が解消したのである。ウィリアム・マークスの手配で、その日の朝10時に森の中で祈り会が開かれた。シドニー・リグドンは教会の後見人になりたいという自分の望みについて1時間半話したが人々の心を動かすことはできず、彼を真の指導者と印象づけるようなことは話せなかった。その会が始まってから到着したブリガム・ヤングも話をしたが、彼は短い時間でそれを終えた。彼は聴衆に向かって、新しい羊飼いの任命を急ぐよりも、1か月は預言者の死に対して喪に服して過ごしたいと考えていたことを話した。<sup>21</sup> その話をしているときに、彼は人々の前で奇跡によってその姿を変えられた。

この会にはあらゆる年代の人々が集まり、彼らは後に自分の体験を記録に残した。当時26歳だったベンジャミン・F・ジョンソンはこう回想している。「彼〔ブリガム・ヤング〕が話し始めるやいなや、わたしは驚いて飛び上がってしまった。どう考えてもそれはジョセフの声だった。彼の顔つき、態度、衣服、表情はまったくジョセフそのものだった。ジョセフの化身だった。わたしはすぐに、ジョセフの霊と権威が彼に引き継がれたことを悟った。」<sup>22</sup> ジーナ・ハンティントンは当時21歳の女性で、次のように述べている。「ヤング会長が話していました。でもその声はブリガム・ヤングの声ではなく、ジョセフ・スミスの声でした。彼という人間そのものが変わっていたのです。……わたしは目を閉じました。あれはジョセフ・スミスの声よと大声で叫びたい気持ちでした。彼が今は亡き人と分かってはいましたが、彼の霊はわたしたちの内にありました」<sup>24</sup>



ベンジャミン・F・ジョンソン（1818 - 1869年）は預言者ジョセフ・スミスの親しい友であった。彼はしばらくの間、預言者の私設秘書として働いた。彼は1848年10月22日にソルトレーク盆地に入った最初の開拓者の一人である。<sup>23</sup> 彼は後に祝福師の職に召された。



## 時満ちる時代の教会歴史



ジーナ・ディアンサ・ハンティントン・ヤング（1821 - 1901年）は1888年から1901年にかけて中央扶助協会会長を務めた。ジーナはブリガム・ヤングの結婚相手の一人で、その医術でユタ州内に広く名を知られた。



アマサ・ライマン（1813 - 1877年）は1842年から1867年にかけて十二使徒定員会の会員であった。彼はオーソン・プラットが十二使徒定員会に復職したことによって1843年1月20日に定員会を離れた。1843年2月4日ごろに大管長会の補佐に任命され、ジョセフ・スミスの殉教後、1844年8月12日に十二使徒定員会に復帰した。

当時15歳の少年だったジョージ・Q・キャノンがこう宣言している。「その声はまさにジョセフのものであった。しかもジョセフの声が聞こえただけでなく、人々の目にはジョセフ自身がそこに立っているかのように映ったのである。……彼らは自分自身の目と耳で、見聞きしたのです。そして彼の口から語られたその言葉は、神御自身の説得の力を伴って彼らの心に響き、彼らは御霊と大きな喜びに満たされました。」<sup>25</sup>ウィルフォード・ウッドラフはこう証している。「もしわたしが自分の目で彼を見ていなかったとしたら、その話をしているのはジョセフ・スミスではないとわたしに信じさせることは、だれにもできなかったでしょう。」<sup>26</sup>

これらの話を考慮すると、その日の出来事についてのブリガム・ヤング自身の記録は特に意味深い。「わたしの心は、彼らに対する同情と聖霊の力すなわち預言者の霊で満たされ、聖徒らの心に安堵感<sup>あんど</sup>をもたらすことができた。」<sup>27</sup>それからこの会は午後2時まで休憩となった。

午後2時になると、重大な集会になると考えて何千人という聖徒たちが集った。各神権定員会が順序正しくそれぞれの位置に腰を下ろし、ブリガム・ヤングはシドニー・リグドンの提議した後見人の職について、また彼がそれまでの2年間ジョセフ・スミスから離反していたことについて率直に話をした。彼は「教会から人々を引き離したいと望む者には皆、それができるか否か、なすがままにしておこう。しかしそれらの者が栄えることはないだろう」と大胆に預言した。<sup>28</sup>

ヤング会長はさらに話を続け、論点に差しかかると次のように宣言した。

「もしリグドン副管長に導いてもらいたいなら、そうするがよい。しかし、わたしはあえて皆さんに申し上げたい。現在地上で神の王国の鍵を有するのは、十二使徒定員会なのである。……

十二使徒定員会は神の御手によって任命されている。ここにブリガムがいる。彼が善をなすのを恐れたことがあるだろうか。真理を語るのをしりごみしたことがあるだろうか。ヒーバーもそのほかの十二使徒たちもいる。十二使徒会は独立した組織体で、神権の鍵すなわち全世界に救いをもたらす神の王国の鍵を所有している。これはまさしく真実である。十二使徒会はジョセフのすぐ次に位し、大管長会に等しい存在である。」<sup>29</sup>

彼は、シドニーが教会の大管長となるには十二使徒から聖任を受けなければならないという理由を挙げて、シドニーが十二使徒会の上位に立つことはできないと指摘した。ブリガムは聴衆のすべてに、リグドン兄弟を友人の一人として見るように勧め、もし彼が十二使徒会に協力し、話し合うなら、一体となって行動できると話した。2時間に及ぶヤング大管長の話について、アマサ・ライマン、ウィリアム・W・フェルプス、パーリー・P・プラットが話し、十二使徒の権能の正当性を雄弁に主張した。

次にブリガム・ヤングが立って、次のような基本的質問をした。「皆さんの指導者、導き手、代弁者としてリグドン兄弟を支持したいと思っているだろうか。リグドン副管長の希望により、十二使徒定員会を大管長会として支持することを教会が望んでいるのかどうかという問題を、まず提起したいと思う。」そして支持を問う挙手の提議があり、全員の手が挙げられた。ブリガムが言葉を続けた。「十二使徒会が管理することに反対の方がいれば、同じように挙手していただきたい。」手を挙げる者は

## 王国を支える十二使徒

一人としてなかった。<sup>30</sup>

この大会を終える前に、ヤング大管長は以下の問題について会員の承認を求めた。神殿を完成させるために会員が什分の一を納めるべきこと、十二使徒たちに全世界への伝道を行わせること、教会の財政管理、監督たちに教会の様々な実務の処理の仕方を教えること、ハイラム・スミスに代わる大祝福師の任命、信仰と祈りをもってシドニー・リグドンを助けること。この後、大会は閉会となった。こうしてブリガム・ヤングを会長とする十二使徒定員会という教会の管理体制が再び整えられた。

### 十二使徒の責任に対する備え

主はそれまで何年かの間に、十二使徒定員会に教会の指導を行わせるための備えを周到に進めておられた。1835年に初めて十二使徒会が召されたとき、彼らの責任はステークが未組織の地域に限られていた。しかし、やがて彼らの責任は全教会員を管理する権能を含むまでに広げられた。1838年に、トーマス・B・マーシュ、デビッド・W・パッテン、ブリガム・ヤングがファーウェストのステークを指導する召しを受けている。そしてジョセフとハイラムがミズーリ州リパティエの監獄にいた間は、十二使徒会のブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ジョン・テラーがミズーリからイリノイへの聖徒たちの脱出を指揮した。

大英帝国での十二使徒会の伝道は、彼らをブリガム・ヤングの指導の下の定員会として結束させた。使徒たちがアメリカへ戻って来ると、預言者ジョセフは実務と教会に関することの両面において彼らの責任範囲を広げた。彼らは神殿とノーブーハウスの建設、貧しい人々への援助、土地の管理、イリノイ州へ新たに移住する人たちの入植を指揮するほかに、ノーブーハウス、神殿の建築資金の調達も行った。彼らはノーブーの実業や経済の発展に影響を及ぼす数々の決定にも関与した。十二使徒会は、多妻婚と神殿儀式について、ジョセフ・スミスから最初に教えを受けている。十二使徒会会員は教会の出版事業の管理責任を授けられていた。また彼らは宣教師の召し、割り当て、教育を担当し、伝道地やノーブーにおける大会を管理し、教会の本拠地から遠く離れた地域の支部の管理も行った。

中でも特に重要なことであるが、自分の死期の近いことを感じたジョセフ・スミスは、殉教の前の最後の7か月間、十二使徒会を入念に教え備えをさせていた。ジョセフ・スミスはほとんど毎日のように十二使徒定員会と会合を持って指導し、新たな責任を与えていた。彼は1844年3月下旬に開かれた特別な評議会において、自分の務めは終わり、神の王国の発展の土台も据えられたので、自分は彼らのもとを去ることができると話した。

後にウィルフォード・ウッドラフは1844年当時を思い起こして、次のように述べている。

「わたしは、ジョセフ・スミスが十二使徒たちに語ったその言葉を直接聞いた生き証人です。わたしたち十二使徒がその言葉を聞いたのは、彼からエンダウメントを受けたときでした。わたしは彼が死を前にして語ったその最後の話を覚えていません。それは、わたしたちが東部への伝道に出立する前のことでした。彼は約3時間、立ち続けました。その部屋はまるで焼き尽くす火で満たされているかのようで、彼の顔は琥珀こはくのように輝いていました。そして彼は神の力をまとっていました。彼は

## 時満ちる時代の教会歴史

わたしたちに義務を授け、この偉大な神の業のすべてをわたしたちに課しました。彼はその話の中でこう言いました。『かつて地上に生を受けたすべての人々に神がお授けになった命と救いの全原則、すべての鍵と力が、わたしの頭へと結び固められてきました。そしてこれらの原則とこの神権と力は、天の神御自身が着手して地上に確立されたこの偉大な最後の神権時代に属するものです。そして今、わたしは主がわたしの頭に結び固められたすべての鍵と力と原則を、今あなたがたの頭に結び固めました。……』

彼はわたしたちにこのように言ってから、さらに『あなたがたに申し上げたい。この王国の重責は今やあなたがたの肩にかけています。あなたがたは世界中のどこでもその重責に耐えなければなりません。もしそうしなければ、皆さんは罪に定められるでしょう』と言いました。<sup>31</sup>

このとき、ジョセフは十二使徒会会長ブリガム・ヤングに、結び固めのもろもろの鍵を授けた。後にブリガム・ヤングはそれについてこう説明している「神権のこの重要な鍵は、あらゆるものの中で最も神聖であり、大管長会だけが行使できるものである。」<sup>32</sup>

## 分派の形成

十二使徒会がそれらの権能を確固として行使し始めたときに、シドニー・リグドンとそして改宗後間もないジェームズ・J・ストラングは、教会の主導権をもぎ取ろうと裏で画策していた。リグドンは、自分の権能は十二使徒会以上のものであると主張して、彼らの勧告には従おうとしなかったために、1844年9月8日に破門された。彼はピッツバーグに戻り、翌年の春に、使徒、預言者、祭司、王などの職を定めた「キリストの教会」を組織した。彼のこの試みは、十二使徒会と対立し、ジョセフ・スミスは墮落した預言者になっていたと感じていた一部のわずかな人々の心を引きつけた。彼は自分の考えを広めるために、『末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケート』( *Latter Day Saints' Messenger and Advocate* ) を出版した。この小さな組織が存続したのは1847年までであった。しかしリグドンはその後30年間、自らを「王国と教会の大管長」と任じて一握りの支持者たちを従えた。そして最後は1876年ニューヨーク州において、世に知られることもなくこの世を去った。

ジェームズ・J・ストラングはもっと機略に富む、カリスマ的な指導者だった。彼はジョセフ・スミスからバプテスマを受け、預言者の殉教の4か月前にウィスコンシン州の故郷に戻った。彼は1844年8月に、ジョセフ・スミスによって書かれたと主張する一通の手紙を持ち出してきたが、その手紙では彼を預言者の後継者に指名し、ウィスコンシン州のポリーを新しい集合の地として定めていた。ブリガム・ヤングと十二使徒会はその手紙は偽造されたものであると断じ、ストラングを破門にした。にもかかわらず、ストラングは一部の人々を信服させ、ポリーへ従えて行った。また彼は、すでに教会員としての資格を失っていた3人の前十二使徒を味方に引き入れた。その3人とは、ウィリアム・E・マクレラン、ジョン・E・ページ、ウィリアム・スミスであった。彼はしばらくの間、ウィリアム・マークスとマーティン・ハリスの支持も得ていた。彼の教会は、東部における伝道で多少の成功を収めた。彼は1849年にミシガン湖のビーバー島に自分たちの共同体を定め、自らをその「王国



ジェームズ・J・ストラング(1813 - 1856年)

## 王国を支える十二使徒



ウィリアム・スミス(1811 - 1893年)は預言者ジョセフ・スミスの弟で、1835年から1845年にかけて十二使徒定員会の会員であった。

の王」と称した。このグループは最終的にはもろもろの財政的困難に陥り、ストラングは1856年に離反者の手にかかって殺され、このグループは実質的に崩壊した。

ジョセフ・スミス自身の家族の一部も十二使徒会に従わなかった。亡き預言者の妻エマは、経済的な問題と教義上の問題で、十二使徒会と一致することができなかった。彼女は十二使徒会に対して苦々しい思いを持つようになり、自分の子供たちにも、十二使徒会の指示に従わないように感化を及ぼした。聖徒たちが西部への旅を始めたとき、エマとその子供たちはノーブーにとどまった。おそまきながら東部からノーブーへ戻ったウィリアム・スミスは、ハイラムに代わる大祝福師に任命された。しかし彼は数か月後に、自分には教会の指導者になる権利があると主張した。その結果、彼は破門処分を受けた。ウィリアムは短期間ストラングとかかわりを持った後、ジョセフ・スミスの長男であるジョセフ・スミス・サードこそ、その血統による権利をもって教会の管理者となるべき人物であり、彼が成人するまでの間は暫定的に自分が後見人兼最高管理者となるべきだと主張した。

ブリガム・ヤングと十二使徒会の指導に従うことを拒んだ人々がこのほかにもいた。ごく一部の教会員は、多妻婚の教えに不満を抱いて離反した。また、教会の本拠地から遠く離れていた幾つかの支部は西部へ行かず、その後どうすればよいかを巡って混乱するようになった。1850年代に、一つの「新しい組織」が次第にその姿を現してきた。この新しい組織(その中にはウィリアム・マークスもいた)の指導者たちが、復元末日聖徒イエス・キリスト教会と称する教会を組織し、その長として預言者の長男であるジョセフ・スミス・サードを擁立することに成功した。やがてこの教会は、ミズーリ州インディペンデンスに本部を定めた。

## 十二使徒会と継承の過程

1844年の、十二使徒会による継承という形が、原則を確立し、また将来の大管長会再組織に際しての原型を作った。各大管長の死後、使徒が各自の聖任のときに授けられていた王国の鍵は、一組織体としての十二使徒定員会に属するのである(教義と聖約107:23-24; 112:15参照)。

スペンサー・W・キンボール長老は1970年の総大会で、この継承の過程について、次のように説明している。「教会の大管長が死ぬと、十分に経験を積んだ人々が一つのグループになって教会を指導する。以前からそのように任命されており、この人々に権能が与えられて鍵が委譲されてきた。……王国はすでに権能を持つこの十二使徒会の下に進められた。地位を争うことも、そのための選挙運動や演説もない。まさしく神の計画である。主は賢明にも人の心をよく御存じで、人間の弱さを超越した完全な組織を造られた。」<sup>33</sup>

主は教会の継承を自ら指揮される。エズラ・タフト・ベンソン大管長はこう説明している。「神は最初から最後まで、すべてを御存じです。何かの弾みでイエス・キリストの教会の大管長になる人はだれもいません。単なる巡り合わせでその職にとどまる人もだれ一人いません。また偶然に天に召される人もいないのです。」<sup>34</sup>

## 時満ちる時代の教会歴史

### 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』7: 148で引用
2. ウィリアム・W・フェルプス, ウィラード・リチャーズ, ジョン・テラー 『教会歴史』7: 152で引用
3. 『教会歴史』7: 173で引用
4. 「たたえよ, 主の召したまいし」『賛美歌』16番
5. 『教会歴史』7: 133
6. パーリー・P・プラット, *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 292
7. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』292
8. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』293 - 294
9. マーロ・J・ピュージー, *Builders of the Kingdom* 『王国の建設』(Provo: Brigham Young University Press, 1981), 52参照
10. エルデン・ジェイ・ワトソン, *Manuscript History of Brigham Young, 1801 - 1844* 『稿本ブリガム・ヤングの生涯』1801 - 1844年 (Salt Lake City: Elden Jay Watson, 1968), 171
11. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1844年8月6 - 7日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
12. 『教会歴史』7: 224
13. 『教会歴史』7: 225で引用
14. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』295
15. 『教会歴史』7: 226
16. 『教会歴史』7: 229
17. 『教会歴史』7: 229で引用
18. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1844年8月7日
19. 『教会歴史』7: 230で引用
20. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1844年8月8日
21. ブリガム・ヤングの日記, 1837 - 1845年, 1844年8月8日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 47 - 49
22. ベンジャミン・F・ジョンソン, *My Life & Review* 『回顧録』(Independence, Mo.: Zion's Printing and Publishing Co., 1947), 104
23. ジョンソン 『回顧録』123
24. エドワード・W・トゥリッジ, *The Women of Mormondom* 『モルモン王国の女性たち』(New York: Tullidge and Crandall, 1877), 326 - 327で引用
25. "Joseph Smith, the Prophet" *Juvenile Instructor* 「預言者ジョセフ・スミス」『ジュブナイル・インストラクター』1870年10月29日付, 174 - 175
26. *Deseret Weekly News* 『デゼレト・ウィークリー・ニューズ』1892年3月15日付, 3。トルーマン・J・マドセン "Notes on the Succession of Brigham Young" *Seminar on Brigham Young* 「ブリガム・ヤングの継承に関する記録」『ブリガム・ヤングに関するセミナー』1962年5月12日, ブリガム・ヤング大学成人教育公開講座, ユタ州プロボ, 1963年, 9も参照
27. ブリガム・ヤングの日記, 1837 - 1845年, 1844年8月8日, 48
28. 『教会歴史』7: 232で引用
29. 『教会歴史』7: 233で引用
30. 『教会歴史』7: 240で引用
31. 『デゼレト・ウィークリー・ニューズ』1892年3月15日付, 406
32. "P. P. Pratt's Proclamation" *Millennial Star* 「P・P・プラットの宣言」『ミレニアルスター』1845年3月号, 151
33. Conference Report 『大会報告』1970年4月, 118で引用
34. エズラ・タフト・ベンソン 『韓国地域大会報告』1975年, 52より引用

# 使徒の指導の下のノーブー

年表 年代	重要な出来事
1845.1	ノーブー憲章が廃止される
1845春 夏	ノーブーが新たな成長と発展を遂げる
1845.9	ハンコック郡で再び聖徒たちへの敵対感情が高まる
1845.10	教会指導者が西部移住の計画を発表する
1845.12	ノーブー神殿でエンダウメントの儀式が始まる
1845冬 1846	聖徒たちが西部移住の準備をする
1846.2.4	最初のグループがミシシッピ川を渡る
1846.2月中旬	ブリガム・ヤングと十二使徒会のほかの会員がノーブーを去る

**管**理権の継承問題が解決すると、十二使徒定員会は早速その権能を行使して教会の指導に当たった。1844年8月15日付けの『タイムズ・アンド・シーズンズ』( *Times and Seasons* ) 紙上で彼らは、十二使徒は一つの組織体として教会の管理を行い、その発展に努める意向であることを明言した。また彼らは、ノーブーへの集落と神殿を完成させることの重要性を再確認した。彼らは預言者ジョセフ・スミスの志を継いで、「この広大な国のすべての人々と、全世界に」福音を広めることにも情熱を持っていた。<sup>1</sup> しかし彼らが楽観的な展望を持っている一方で、教会の将来には新たな問題や困難が待ち受けていた。それらはノーブーの存続を脅かすとともに、十二使徒会の指導力を問うものでもあった。

## 教会の秩序の維持

十二使徒会は、教会の管理体としての支持を受けた翌日評議会を開いた。この会と、これ以後の数週間に幾度か開かれた集会で、十二使徒会は教会の様々な組織と業務の整理に着手した。まず彼らは、教会財産を管理する責任に、ニューエル・K・ホイットニー監督とジョージ・ミラー監督を任命して、財政上の数多くの責任から離れた。アマサ・ライマンが十二使徒定員会に召され、ジョセフ・スミス・シニアの生存している息子の最年長者ウィリアム・スミスを大祝福師として任命した。ウィルフォード・ウッドラフはヨーロッパの教会を管理するためにイギリスに派遣された。パーリー・P・プラットは東部諸州地域の管理者、また出版事業、移民受け入れ業務の責任者として、ニューヨーク州に召された。ライマン・ワイトは、聖徒たちの定住地となる可能性のある場所を探すという、以前ジョセフ・スミスから与えられていた責任を果たすためにテキサスへ赴いた。ジョン・テラーは『タイムズ・アンド・シーズンズ』の編集の責任を再び与えられ、ウィラード・リチャーズは教会歴史家と歴史記録者としての任務を続けた。

合衆国とカナダで教会の組織は発展していた。どちらの国でも地方部が組織され、各地方部は一人の大祭司によって管理された。これによって各地に散在している何百という支部に必要な援助ができるようになった。ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ウィラード・リチャーズがこの組織の管理を行い、10月までに85人の管理大祭司が召され、ノーブーのような大きいステークを建設するように求められた。<sup>2</sup> ノーブーとその周辺地域では、アロン神権の教師たちが定期的に聖徒たちの家庭を訪問するように奨励された。そして執事たちは、貧しい人々の世話をするという点で監督を助ける割り当てを授けられた。(1850年代に至るまで、アロン神権のこれらの職は主として成人が受けていた。)

もう一つの非常に大きな変更がなされ、それによって教会の七十人定員会が拡大

## 時満ちる時代の教会歴史

することになった。8月18日、ヤング大管長が「第一定員会の中から、7人が会長会として選ばれ、最初の10の定員会を管理するようになる」と発表した。<sup>3</sup> その後の10月総大会で定員会の数は12に増え、430人が七十人として聖任され、各定員会に割り当てられた。ブリガム・ヤングは総大会の話の中で、福音を宣べ伝えたいと望む人は七十人に召されると語った。1846年1月の時点では、30以上の七十人定員会が機能していた。七十人ホールの工事が急いで進められた。この2階建ての美しいれんが造りの集会所は、新しく召される数多くの宣教師たちに備えをさせる学校として用いられた。

七十人ホールはノーブー時代の建築物として重要なものであった。幾つもの七十人定員会の集会所として使う目的で多くの人々の協力によって建てられ、1844年12月に完成し、奉獻式が行われた。

七十人ホールには、宣教師訓練学校、小さな図書館、宣教師たちが世界各地から持ち帰った工芸品などを展示する博物館が置かれていた。またこの建物は教会の様々な重要な集会にも使われた。1900年より以前に完全に取り壊されていたが、考古学上の発掘調査で昔の基礎の部分が分かり、1971年から72年にかけて再建された。



十二使徒会はまた、教会から背教分子を除くための働きも続けた。ブリガム・ヤングは自分が見た一つの夢のことを話した。その夢の中で彼は1本の果樹を見た。その木には先の方が枯れている枝が何本もあった。そしてその木を生長させるには、それらの枝を刈り込まなければならなかった。彼はこう力説した。「良い実が大きくなるように、教会の死んだ枝を切り落としましょう。そうすれば、行ってシオンと主の神殿を築き上げよという声がすぐに聞こえてくるでしょう。」<sup>4</sup>

## ジョセフの市

1844年のノーブーは、イリノイ州でも有数の繁栄した都市であった。聖徒たちは忍耐と勤勉と一致によって、わずか5年の間に湿地帯を繁栄した都市に変えたのであった。ミシシッピ川沿いに位置していたことが有利に働いて、ノーブーは経済の中心地として大いに発展すると見込まれていた。しかし周辺地域の多くの住民は末日聖徒とその宗教に脅威を感じ、ノーブーの成長と発展を妨げる意志を固めた。

彼らが特に不安に思っていたのは、ノーブー憲章によってノーブーに与えられていた様々な権利である。彼らから見ればそれは特別な権利であった。そのために彼らはノーブー憲章の廃止とノーブー部隊の解散を求めた。1845年1月に招集された州議会でこれらの請求が受け入れられ、ノーブー憲章は廃止された。多くの人々が、ノーブーは多くの無法者、犯罪者、詐欺師、逃亡犯の住みかになっていると信じて

## 使徒の指導の下のノーブー

ノーブーを写した銀板写真。木造とれんが造りの建物が多数あり、ノーブーは使徒たちがいた数年の間に急速に発展し、変貌した。最初にここに到着したとき、使徒たちはテント、荷馬車、土を掘った穴、掘って立てた小屋、簡単な丸太小屋などに住んでいた。懸命な働きによって、経済的、社会的、文化的な状況が改善するにつれ、次第に伝統的な木造家屋が建てられるようになった。ノーブー時代の後期には、れんが造りの家が数多く建てられるようになっていた。一方、公共の建築物や商店なども数多く建てられた。



いたことを考えると、この決定も幾分やむを得ないと思われたようである。当時のイリノイ州の辺境地帯には、裁判まで思うままに動かして、罰を逃れるほどの力を持った悪漢が横行していた。中には教会員を自称し、異邦人に対する犯罪は教会によって聖められるなどと言う無法者までいたのである。しかし教会は法律上の重罪を犯している者は、一貫して破門に処していたのである。

イリノイ州西部の多くの新聞が無法なモルモンの存在を報じた後に、ノーブーの市民たちは公開集会を開いた。その会の決議文には次のように書かれている。

「わたしたちにかくまってもらえるという考え違いや、自分たちの罪をわたしたちに押し付けようという悪だくみから、盗みを働いた者や詐欺師がこの市に何度か逃げ込んで来たことがある。その結果、わたしたちは迫害を被る危険を受けてきた。また、モルモンの罪状を増やすために、財産を盗まれたとの報告をしておきながら別の所では、盗まれたのではなく自分で売却したと認めている人々がいることまで発覚している……。

したがって、盗みや詐欺から人々を守り、犯罪者を法に照らして処断するために、あらゆる合法的手段を用いることを、満場一致で決議するものである。」<sup>5</sup>

しかしモルモンの評判はすでに地に落ち、ノーブー憲章の廃止によって、使徒たちは合法的な自治権も、独自の州兵組織による防衛手段も失ってしまったのである。教会の指導者は、市内の統制と防衛の手段として、法律の枠外で部隊を継続することを決めた。市内に許可なく出入りすることを防ぐために、監視人が置かれた。ブリガム・ヤングはノーブーを「ジョセフの市」と改名した。それは4月の総大会で、使徒たちの承認を得た名前であった。ノーブーの一部は州議会によって正式な市として再編入されていたが、依然として特別な防衛の措置を取る必要があった。「木削り口笛隊」と呼ばれた若い男性によって組織されたグループの働きにより、好ましくない人物たちが横行するようなことはあまりなかった。「木削り口笛隊」は好ましくない人物が市内に入ると、彼らがいらだち、怖がって出て行くまで、ナイ



## 時満ちる時代の教会歴史



ヒーバー・C・キンボールの住宅事情の移り変わりは、末日聖徒の住宅事情の変遷の典型的な例と思われる。彼は1839年に家族のために、ほかの家の裏に差しかけ小屋を作った。その2か月後に、もっと大きな丸木造りの家を建て、1841年にイギリスから帰って来るとさらに大きな丸木造りの家を建てた。1843年にはれんがを付け加えた。

このれんが造りの2階家は、1845年の秋になってようやく完成した。これはフェデラリストスタイルと呼ばれていたものを少し変えたもので、切妻式の屋根の両端に画趣に富む暖炉の煙突が見える。これは当時のイギリスで流行していた様式である。キンボール家の人々がこの家に住んだのは、1846年2月に開拓者の第1陣とともにノーブーを出発するまでの5か月足らずのことで、その後の6年以上はテント、荷車、丸木小屋で過ごした。

斧で木を削り、口笛を吹きながら、その後をつけ回すのである。

数々の問題を抱えながらもノーブーは発展し続けた。建築業は特に盛んで、ノーブーの他のいかなる事業よりもはるかに抜きんでていた。新しい木造家屋、れんが造りの家、農園があちらこちらにできた。ノーブーに最初のころに来た人々の多くは急いで作った丸木小屋や板張りの小屋に住んでいたため、新しい家を建てた。ヒーバー・C・キンボールとウィラード・リチャーズは1845年に丸木造りの家を美しい2階建てのれんが造りの家に建て替えた。この時代に教会は、ルーシー・マック・スミスのために家を1軒建てている。七十人ホールやコンサートホールなどの公共の建物の建築計画は、一般住居の建築ブームを補足するものであった。機械などの動力として水力を利用する目的で、ミシシッピ川に石造りの突堤を建設する工事も開始された。しかし、引き続き行われた最も大規模な工事は、ノーブー神殿の建築であった。

1845年6月に、ブリガム・ヤングは当時イギリス伝道部の部長として働いていたウィルフォード・ウッドラフに、ノーブーの発展の様子を知らせる手紙を送っている。彼はこのように書いている。ノーブーは「パラダイスのようです。以前はだれも住む人のなかったすべての土地が、春にはさくで囲い込まれ、穀物や野菜の作付けが行われ、市というよりは極上の農園という風情です。……ほかにもかなり広大な面積の草原を囲い込んで、今は立派に耕作が行われ、とうもろこし、小麦、じゃがいも、そのほかの必要なものが育てられています。神殿とこの町を見るために、よそから多くの人々が来ています。彼らはこの急速な発展を目の当たりにして驚いています。」<sup>9</sup>ノーブーは確かに栄えていた。1845年末におけるノーブーの人口は約1万1,000人であった。ノーブーはまさしくショーケースのような町で、合衆国の東部やイギリスからのたくさんの訪問者が、モルモンの中心都市を称賛する言葉を残している。

## ハンコック郡住民の敵意

ノーブーの目覚ましい発展は、教会の敵の憎悪を募らせるだけであった。ジョセフ・スミスの死が聖徒たちの力と勢いを弱めなかったことは明らかであった。教会の敵たちは、カリスマ的な指導者がいなくなれば教会は立ち行かなくなると考えていた。そして、教会がその命を長らえているだけでなく繁栄している姿を見た彼らは、聖徒たちを州外に追い出そうとする画策を再び始めた。それは以前よりも激しいものであった。

1844年9月の早いころに、カーセージの殺人に加担していたウォーソーのリーバイ・ウィリアムズ大佐が末日聖徒をイリノイ州から追い出すために、大規模な軍事行動を計画した。それは「ハンコック郡のおおかみ狩り大会」として通知された。そのことを知ったフォード知事は州軍のジョン・ハーディン将軍に、リーバイ・ウィリアムズの動きを抑えるように命じた。ハーディン将軍は治安維持のために、冬の間ずっとハンコック郡に滞在した。

1845年5月、9人の男がジョセフ・スミス殺害の容疑でようやくカーセージで公判に付されることになり、ハンコック郡では緊張の極みに達した。容疑者のうちの5人は著名な市民であった。土地取引業者のマーク・オールドリッチ、州議会議員ジェイコブ・C・デービス、州軍ウォーソー連隊のウィリアム・A・グローバー、新聞編

## 使徒の指導の下のノーブー

集者トーマス・C・シャープ、州軍第59連隊大佐リーバイ・ウィリアムズがその5人である。この公判は2週間にわたって行われた。当時としては異例の長期公判であった。検察側証人の証言が首尾一貫しないのに対して、被告側弁護人はモルモンでない陪審員を前に、ジョセフ・スミスの殺害事件は不特定多数の人々の意志にこたえる形で発生したものであり、特定の人物やグループの責任を問うことはできないと言葉巧みに主張した。被告人たちは無罪となった。ハイラム・スミス殺害の分離公判が6月24日に予定されたが、検察側が出廷せず、結局審理は行われなかった。

法律上の追求から解放されたトーマス・シャープは、1845年の夏に『ウォーソーシングナル』(Warsaw Signal)紙上で反モルモンキャンペーンを再開した。彼は郡の公職に就いている末日聖徒を攻撃し、モルモンの政治活動に関する論争の皮切りをした。この一連の活動は、聖徒に対する暴力的な攻撃を見えにくくする働きをした。9月初め、リーバイ・ウィリアムズに率いられた300人の暴徒が計画的にへんぴな所にあるモルモンの農場や家を焼き払った。彼らは最初にモーリーの入植地を急襲し、数多くの無防備な家、農業用の建物、製粉所、収穫された穀物に火を放った。9月中旬、ブリガム・ヤングは包囲されている聖徒たちを救うために志願者を募った。134台の馬車が確保され、ハンコック郡南部とアダムス郡北部にあるへんぴな入植地の家族をノーブーまで安全に連れて来るために急きょ派遣された。

末日聖徒の良き友であったハンコック郡の保安官ジェイコブ・バッケンストスは秩序の維持に努めたが、ウォーソーの住民たちは彼が組織しようとした保安隊への加入を拒否した。彼はノーブー部隊の元兵士たちで構成した保安隊で暴徒たちを追い払ったが、その後でハンコック郡の非モルモンに命をねらわれ逃亡した。ジョセフ・スミスが殉教した日にカーセージで警護の指揮をしていたフランク・ウォーレルがバッケンストス追跡の先頭に立った。ウォーソー北部の鉄道用の仮小屋付近で、バッケンストスは幾人かの教会員に遭遇し、即座に彼らを保安官代理の責任に命じた。銃を持ったウォーレルが保安官にねらいを定めたときに、保安官代理を命じられたポーター・ロックウェルはライフルを撃ち、ウォーレルに致命傷を負わせた。このことがハンコック郡の住民の敵意をさらにかき立て、今にも内乱かと思われる状態になり、イリノイ州クインシーとアイオワ州リー郡の住民たちが教会員に対してイリノイ州から立ち退くように要求してきた。そして1845年9月24日、十二使徒定員会は次の年の春にイリノイ州を立ち去ると約束をした。

フォード知事は、この非常時に独立的に行動する警察力として、ハーディン將軍と連邦議会議員スティーブン・A・ダグラスを含む3人の著名な市民の指揮下に、400人の州軍兵士を派遣した。略奪行為は終わり、一時的に平和が戻った。知事の現地諮問委員として、上記4人の指導者が事情を調査した結果、反モルモンの不意の攻撃によって衝突が始まったことが分かった。また彼らは、モルモンがイリノイ州を去るまでハンコック郡に平和は戻らないということを認めた。

連邦議会議員のダグラスは、合衆国は北米全土に領土を拡張すべき運命を担っているという「自明の運命」説の唱導者であった。彼は教会の指導者に、西部に定住地を見つけるように勧告し、彼らの移住を援助するために力を尽くすと約束した。教会の指導者たちはロッキー山中に移動する計画を以前からしていたために、この交渉は円滑に進んだ。最終的に、聖徒たちは翌年の春、草原の草が家畜のえさとし

ジェイコブ・バッケンストスはモルモンに対して友好的な人物であった。彼はハンコック郡の巡回裁判所の書記官をしていて、1844年には州議会の議員に選ばれた。1845年に郡保安官(訳注:郡民によって選ばれる郡の最高官吏。裁判所の令状の執行権と警察権を持つ)になり、ジョセフとハイラムの殺害の被疑者に関する論争に巻き込まれた。バッケンストスは1846年に軍隊の将校となり、メキシコとの戦争で功績を上げた。

## 時満ちる時代の教会歴史

て十分に生長し次第，ノーブーを立ち去ることで合意した。そして教会の資産管理責任者は，春までに財産の処分ができない聖徒たちがいる場合，彼らの財産を売却するためにノーブーにとどまることになった。

### 神殿の完成

この時代を通して，ブリガム・ヤングと十二使徒会は神殿建設の仕事を進めていた。彼らは建築技師や神殿委員会の委員と頻繁に会合を持ち，教会に対しても「ノーブーに集合し，その財産をもって」主の宮の建設を助けるように繰り返し訴えていた。<sup>7</sup> 1844年10月の総大会でブリガム・ヤングはこう話した。「この民はエノクの教会も含め，かつて地上に生を受けた人々の中で最もすばらしい民であると信じています。皆さんが什分の一とささげ物を携え，この神殿を建設するためにここへ来るように願っています。」<sup>8</sup> これにこたえて扶助協会の姉妹たちはガラスと釘くぎに使う費用として，各会員が週に1ペニーをささげると誓約した。そしてこれらのささげ物は実に大きな貢献をした。これがなければ神殿の建設は進まなかったであろう。ジョセフ・トロントは神の王国を建設するために「自分自身と持てるすべてをささげたい」と言ってブリガム・ヤングに2,500ドル分の金を渡した。<sup>9</sup> 多くの職人に，神殿の建設を助けるようにとの呼びかけがなされた。1845年の春には，笠石かさいしが据えられるところまで工事が進んだ。そして屋根がふかれ，内装工事が終了した。このようにして，1846年4月に正式に奉獻式を行う計画がなされた。

神殿の各部屋はできるだけ早く儀式が執行できるように，それぞれの完成に合わせて奉獻されていた。1845年10月に，部分的に工事が完成していた神殿で総大会が開かれた。ブリガム・ヤングが「開会の祈りをして，その日の行事を始めた。彼はすでにそこまで完成していた神殿は，聖徒たちの物惜しみしない心と忠誠心，信仰を記念する建物であると言った。そして最後に『主よ，わたしたちはこの宮と自分自身をあなたにささげます』と話した。この日はほんとうに快い気持ちで，指示や教えを聞き，心からの感謝をささげた。それは，建物の外ではなくその内側で神を礼拝するという大いなる特権があったからである。その美しさと出来映えは，アメリカのいかなる礼拝堂にも劣ることがなく，その銘は『主に聖なるもの』となっている。』<sup>10</sup>

神殿の中2階が儀式の執行のために，1845年11月30日に奉獻された。ヤング会長が祈りの中で，主の僕たちが神殿で御心を果たすまで彼らを支え，救いたまえと語った。それぞれの部屋はすぐに儀式のために整えられ，ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールが12月10日の夜に，忠実な末日聖徒にエンダウメントを授け始めた。12月11日には，エンダウメントのセッションが夜中の3時まで続けられた。

教会の敵は，神殿の活動が盛んに行われるようになるのを見て再び敵対行動を始めた。教会の指導者に対する新たな攻撃は，スプリングフィールドの連邦地方裁判所がブリガム・ヤングとほかの8人の使徒をノーブーにおける通貨偽造の教唆，未遂容疑で起訴するという形でやって来た。12月23日に，ブリガム・ヤングを発見し，逮捕するために官吏が神殿に近づいて来た。彼らが来たことを知ったブリガム・ヤングは，「生き長らえて聖徒たちのために働けるように」導きと守りを祈り求めた。<sup>11</sup> 神殿のホールには彼のおとりとなることで話がついていたウィリアム・ミラーがい

## 使徒の指導の下のノーブー



ウィリアム・ミラー（1814 - 1875年）は1834年にカートランドでバプテスマを受け、ミズーリ州へ移住する前の短期間、家族とともにそこに住んでいた。1839年には多くの教会員とともにイリノイ州へ移った。「ブリガム・ヤング替え玉事件」の後、ミラーとその家族は聖徒たちとともにノーブーを後にした。ウィリアムは病気のため、ウインタークォーターズでは丸木小屋を建てることができなかった。そのため1846年から47年にかけての冬の間、彼の家族は壕を掘ってそこを住まいとした。

ユタにおいて、彼はプロボとスプリングビルへの入植に関して重要な役割を果たした。1856年にはイギリスへの伝道に召され、後にはユタステークを管理する召しを受け、それと同時にプロボで監督の責任も果たした。

た。ブリガムと同じくらいの背丈のミラー兄弟は、ブリガム・ヤングを装った服装で神殿を出て、ブリガムの馬車に乗った。待ち構えていた執行官が彼を逮捕し、マンションハウスへ連行した。そこでブリガムの友人や親戚の者たちもミラーと同様執行官に見せかけのふりをした。それからミラーはカーセージに連行された。そこにいただれかがそれはブリガムではないと確認するまで、執行吏たちはミラーが「ブリガムの替え玉」だったことに気づかなかった。一方、ブリガム・ヤングとほかの十二使徒たちは安全な隠れ家へと逃亡していた。

指導者たちは、ノーブー退去が始まる前に、できるだけ多くの聖徒に神殿の儀式を授けるために、なお一層の努力をした。1845年末までに、1,000人以上の会員がこれらの儀式を受けていた。ブリガム・ヤングは1月にこう記録している。「〔神殿の〕儀式を受けたいという聖徒たちの望みが非常に強く、それを授けたいというわたしたちの願いも同様であった。それでわたしは夜も昼も神殿で主の業に自分のすべてをささげた。睡眠時間は1日平均4時間以下で、帰宅したのは週に1度だけだった。」<sup>12</sup> 兄弟姉妹の中には、日が明けても儀式が中断することなく続けられるように、神殿衣の洗濯に毎晩時間をささげる人たちもいた。<sup>13</sup>

2月3日に、指導者たちは儀式を終える予定を立てた。そしてブリガム・ヤングが翌日西部へ出発する最後の準備をするために神殿を出た。しかし自分自身のエンダウメントを受けるために集まった大勢の聖徒たちを見て同情し、また神殿に戻って彼らのために儀式を行った。これによって彼の出発は2週間遅れることになった。神殿の記録によると、西部への移住が始まる前に、5,615人の聖徒がエンダウメントを受け、ジョセフ・スミスが心から望んでいたことが果たされたのである。

## ほかの地域における教会

預言者の殉教後、教会のほかの地域、特にイギリスと合衆国東部において重大な事件が幾つも起きた。ウィルフォード・ウッドラフは1845年の早いころにイギリスに着くと、大会を開いたり伝道に関する事柄の処理をしたり、新しい伝道地を開いたりするために全国を訪問した。大工業都市マンチェスターにおける大会で、彼は数多くの熱心な末日聖徒に迎えられた。彼は日記に次のように書いている。「主の御霊がわたしたちとともにあった。愛と一致の精神が会衆の間にあふれていた。多くの聖徒が新しくかつ永遠の聖約によって結ばれている姿を見てうれしく思った。預言者ジョセフ・スミスがイギリスの聖徒たちの大会に出席する姿を見られたらと思うことが何度もあったが、彼はすでにこの世の人ではない。わたしたちが彼のいる所へ行くことはできるが、彼がわたしたちのところへ来ることは考えられない。」<sup>14</sup>

1845年の暮れに、ウッドラフ長老は短くはあったが成功した伝道の任務を解かれた。1845年にイギリスからノーブーへ移住した聖徒たちもあったが、イギリスで教会は成長を続けて急速に発展し、教会員数は1万1,000人以上に達した。1845年の末までにイギリスの忠実な聖徒たちは、ノーブー神殿のために300ポンド以上の献金をした。ウッドラフ長老は2年の伝道期間中に多くの偉大な働きをなしたこの地を再び去るときに、イギリスの聖徒たちは何と穏やかで幸せなことかと書き留めている。

パーリー・P・プラット長老の合衆国東部での伝道は、イギリスのウィルフォード・ウッドラフの場合とは様子が違うものだった。彼の任務は、聖徒たちが長く待

## 時満ちる時代の教会歴史



政府指導者にあてた重要な「宣言」を掲載した新聞『預言者』は、ニューヨークでサミュエル・ブラン、ウィリアム・スミス、パーリー・P・プラットによって編集された。同紙の発行期間は、1844年5月18日から1845年12月15日までの2年足らずであった。

ちわびていた西部への旅を始める前に東部における教会の様々な事柄を整理することであった。しかしプラット長老は、ウィルフォード・ウッドラフがイギリスで経験したよりも、もっと重大な問題にぶつかった。

状況を詳しく調べていく中で、パーリーと彼の二人の同僚はそこに大変な問題があることを知った。ウィリアム・スミス、ジョージ・アダムス、サミュエル・ブランなどが「あらゆる種類の偽りの教義と不道德な行いを教え、その多くは罪を犯し、徳と真理から離れ去っていた。また彼らの罪悪を見て、多くの人々が教会を去り、様々な宗派に加わっていた。」<sup>15</sup> プリガム・ヤングから事前に受けていた指示に従ってプラット長老たちは、その罪を犯している人々を十二使徒会の懲戒に付すためにノーブーへ送った。パーリー・P・プラットは、ニューヨーク州における教会の新聞『預言者』(Prophet)の編集を行う責任も受けていた。彼が書いた記事は多くの人々に教えと靈感を与えた。彼が発行した出版物中でも特に大切なのが、全世界の政府の指導者にあてた宣言である。それによって、1841年に啓示を通して教会に与えられた一つの指示が果たされたのである(教義と聖約124:2-7参照)。

ジェデダイア・M・グラントは「教会の秩序を保ち、純粋な福音の原則を再確立するうえで」プラット長老をよく補佐した人物の一人である。<sup>16</sup> グラント長老は宣教師として数年間有意義な働きをなし、1845年12月には七十人第一定員会の7人の会長の一人として召された。

プラット長老は1845年8月にノーブーへ戻った。そして教会がハンコック郡で反モルモンの攻撃に直面したときに、ほかの指導者とともにその困難な状況に対した。彼はまた神殿の建築にも貢献をなし、12月から1月にかけては、忠実な末日聖徒にエンダウメントを授けるために昼夜を分かたず働いた。

## 西部移住への備え

預言者ジョセフ・スミスは殉教の大分以前から、教会の西部移住を検討していた。1842年彼は、聖徒たちは引き続き多くの苦しみを受けるが、「ある人々は生き長らえてさらに進み、定住地を起し町々を築く助けをし、聖徒たちがロッキー山中において強大な民となるのを目の当たりにする」と預言した。<sup>17</sup> 1844年春、西部への入植の計画が始められた。「カリフォルニア、オレゴンの地を調査し、神殿が完成した後にはわたしたちが移住してすぐに町を築き、独自の政府を持ち、邪悪な者たちに襲われることなく健康的な環境の中で暮らし、そして自分が望むかぎりいつまでも住める良い場所を山岳地帯の中に見つけるために」調査隊が組織された。<sup>18</sup> 預言者の死後、この移住のための準備がさらに進められた。

ある人々にとって、この西部移住の計画は自分に従うグループを教会から連れ出す口実となった。ジョセフ・スミスはライマン・ワイトと監督のジョージ・ミラーにテキサスに入植地を建設する権限を与えていた。ヤング会長もワイトとミラーが教会全体をそこに移住させたいと考えていることが分かるまでは、それを進めるように促した。1844年8月にワイト長老は、ウィスコンシンで松の伐採に一緒に働いている人々だけを連れて調査に行くように勧められた。彼はその人々を連れてテキサスへ向かった。しかし彼は入植地の調査ではなく、恒久的な定住地を作ってしまったのである。1845年11月に、テキサスの聖徒たちはノーブーへ戻るように求められ

## 使徒の指導の下のノーブー



ライマン・ワイト(1796 - 1858年)は1830年11月にバプテスマを受け、最初に大祭司に聖任された中の一人であった。彼はオハイオ州とミズーリ州では幾つか重要な責任を果たし、ミズーリ州ではリパティエの監獄でジョセフ・スミスと起居を共にした。イリノイ州へ移ってから1841年4月8日に彼は使徒に聖任された。

1843年夏、彼は Wisconsin 郡のブラック川流域森林地帯へ木材の伐採に行き、そこにいる間に集合地を確立するためにテキサスへ行くことを思いついたのである。彼はジョセフ・スミスの死後、この考えを実行に移す決心をした。教会の指導者たちも最初はそれを承認していた。後に彼は十二使徒会の指導を拒み、1848年12月3日に破門された。

た。しかしこの独善的な指導者と彼に従った人々はその指示を拒んだ。1848年、何度か話し合いが行われた後、ワイト長老は教会から破門された。

ブリガム・ヤングとその同僚たちは、神殿が完成し、出発の準備が整うまではイリノイ州にとどまっていたいと望んでいた。1844年から翌年にかけての冬の間に、彼らは西部についてできるかぎり多くの情報を集めるために、毛皮商人や政府の調査隊による記録、西部を旅行した人々が書いた新聞記事などを読んでいった。再定住委員会は定住の候補地として3つの広大な地域を検討した。独立国テキサス(訳注:当時テキサスはメキシコからの独立を宣言し、アメリカへの併合を望んでいた)、土地の権利の不明確なメキシコ領北カリフォルニア(後のユタ州に当たる所はその一部であった)、そしてアメリカとイギリスの共同領有となっていた北西部全域に及ぶオレゴンがその候補地であった。しかし、彼らの注意は次第にグレートベースン東側の地域に集中するようになった。その地域は広大な沃地<sup>よくち</sup>が広がり、既存の社会から隔絶されている点で望ましい条件を備えていたからである。

発表を聞いて驚いた人々もいたが、教会の指導者は聖徒たちに、この移住計画は周到に準備されたものであり、教会が発展するためには必要なものであることを断言した。10月の総大会はおもに、イリノイ州からの撤退を秩序正しく力を合わせて行うための準備について論じられた。大会後、十二使徒会は全教会に向けた書簡の中で次のように説明した。「身の引き締まる極めて重大な局面を迎えるに至りました。偏狭、不寛容、飽くなき抑圧が力を振るうことのない、はるか西のかなたの地へ...移住。新しい時代の始まりです。」さらに、財産を売却し、集合に備えるようにというすべての聖徒に対する勧告が続いた。<sup>19</sup> 冬が訪れてきたにもかかわらず、聖徒たちは移住の準備を始め、ノーブーでは人々の動きが活発であった。

イリノイ州西部からの撤退は当初1846年の4月に計画されていたが、新たに生じた二つの脅威のために早い時期に急いで出発することになった。一つの脅威は、通貨偽造の容疑でブリガム・ヤングとほかに8人の使徒が告発されたことであった。そしてもう一つは、セントルイスに駐屯している連邦軍がモルモン<sup>19</sup>の行く手を遮り滅ぼす計画を立てているという、トーマス・フォード知事と他の筋からの警告であった。後になって、これは聖徒たちを彼らが予定していたよりも早く立ち去らせるために流されたうわさにすぎなかったことが分かった。

1846年1月、教会の指導者は幾つかの隊に、指示が出たら即座に出発できる準備をしておくように伝えた。神殿やノーブーハウスを含めて、後に残されるすべての資産の処理に当たる委員会が設置された。出発の指示が2月2日に出され、チャールズ・シャムウェイに率いられた第1陣が2月4日にミシシッピ川を渡った。そして間もなく数百人の聖徒がアイオワの仮の宿営地にやって来た。聖徒たちにエンダウメントを授けるためにノーブーに残っていたブリガム・ヤングたちがミシシッピ川を渡ったのは、ようやく2月半ばになってからであった。しかし残念なことに、あまりに多くの準備不足の人々が、時の判断を誤って早く出発してしまったのである。

もし聖徒たちが最初の計画どおりノーブー出発を4月から始めていれば、事はもっと整然と運んでいたであろう。最初の計画では、25の隊を編成し、それぞれ100家族で構成される各隊は十分な準備のもとに、1人の隊長によって管理されることになっていた。各隊は移動が整然と行われるように、あらかじめ定められた間隔を置いて

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョージ・ミラー（1794 - 1856年）は1839年にイリノイ州でジョン・テラーからバプテスマを受けて教会に入った。1841年には監督として働く責任に召された（教義と聖約124：20 - 21参照）。1842年から1844年にかけて、彼は Wisconsin で伐採した木材をミシシッピ川を下って運ぶ仕事に携った。預言者の殉教後、彼は教会資産の管理責任者に任命された。

しかし1847年に、ミラーはブリガム・ヤングの管理を受けるのを拒んでテキサスのライマン・ホワイトと手を結んだ。1850年にはミシガン州のビーバー島のストラング派に加わった。ジェームズ・J・ストラングが1856年に死亡すると、ミラーはカリフォルニアへ向けて出発したが、イリノイ州で死亡した。

出発することになっていた。しかしせっかくのこの計画も、パニックに陥り、十二使徒たちに置き去りにされたくないと考えた聖徒たちによって無駄になってしまった。事前に隊長として任命されていた人たちの多くも、先発した隊に遅れたくない、十二使徒たちと行動を共にしたいという思いから自分の責任を放棄してしまった。しかしこのような混乱があったにもかかわらず、アイオワ東部にいた聖徒たちは事の推移を楽観視していた。西洋文明の歴史の中でも特筆に値する大移住はこのようにして始められた。



「ノーブーからの大移動」リン・フォーセット画。1846年2月4日、聖徒たちの最初のグループがノーブーを出発した。彼らが直面した最初の困難は、ミシシッピ川対岸までの人と物の運搬であった。短期間氷結した川を歩いて渡った人々もいたが、多くの人は渡し船や小船で移動した。いずれにしても危険なことに変わりにはなかった。

そのとき彼らは気づいていなかったが、西部への旅で最もつらいのは、1846年春の雨がちな天候の中アイオワ州内を横断する300マイル（約500キロ）の区間の旅であった。当初の計画ではその季節にロッキー山中に達し、聖徒たちに冬期宿営の準備を固めさせることになっていた。

## 注

1. “An Epistle of the Twelve” *Times and Seasons* 「十二使徒会書簡」『タイムズ・アンド・シーズンズ』1844年8月15日付, 619
2. *History of the Church* 『教会歴史』7：305 - 307参照
3. 『教会歴史』7：260
4. 『教会歴史』7：260
5. 『教会歴史』7：355 - 356で引用
6. 『教会歴史』7：431で引用
7. 『教会歴史』7：267で
8. 『教会歴史』7：302
9. 『教会歴史』7：433で引用
10. 『教会歴史』7：456 - 457で引用
11. *Journal of Discourses* 『説教集』14：218で引用
12. 『教会歴史』7：567
13. 『教会歴史』7：547 - 548参照
14. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1845年2月16日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ
15. パーリー・P・プラット編, *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・プラット自叙伝』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 299
16. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』

## 使徒の指導の下のノーブー

300

17. 『教会歴史』5：85

18. 『教会歴史』6：222

19. プリガム・ヤング, ウィラード・リチャーズ 『教会歴史』7：478で引用。





# アイオワと横断の旅

年表	
年代	重要な出来事
1846.2.4	聖徒たちがミシシッピ川を渡り始める
1846.3.1	イスラエルの陣営がシュガークリークを出発する
1846.3.26	チャリトン川でイスラエルの陣営を再編する
1846.4.15	ローカストクリークで「恐れず来たれ、聖徒」が作曲される
1846.4.24	ガーデングローブに到着
1846.5.16	マウントピスガに到着
1846.6.14	開拓者の最初の隊がミズーリ州に到着
1846.7.1	20 モルモン大隊の徴募が行われる
1846.9	ウィンタークォーターズが開かれる
1846.9	ノーブーの戦いと貧しい聖徒たちの追放

◀ネブラスカ州オマハにあるこのウィンタークォーターズ記念碑の除幕式は、1936年9月20日に行われた。このモニュメントには、子供を葬る開拓者夫婦の悲しみが表現されている。次のような碑文が刻まれている。

「忠実な開拓者たちの苦闘、犠牲、悲しみ、そして彼らが掲げた理想は決して忘れ去られることはない。この記念碑は、末日聖徒イエス・キリスト教会が感謝の思いを込めて献納するものである。

大管長会：ヒーバー・J・グラント、J・ルーベン・クラーク・ジュニア、デビッド・O・マッケイ

彫刻製作：アバード・フェアバンクス  
ここに埋葬された開拓者の子孫」

ミシシッピ川を渡ってアイオワ州に入った聖徒たちが次に目指すのは、何の抑圧もなく神の王国の建設ができる地であった。この新たな避け所に至る道は、楽な道ではなかった。そこには苦難、犠牲、死が待ち構えていた。そして旅の最初の行程であるアイオワの横断は、まさしく困難の極みであった。「イスラエルの陣営」の本隊は300マイル（約500キロ）に及ぶアイオワの横断に131日を要した。翌年、ウィンタークォーターズからグレートソルトトレイク盆地までの1,050マイル（約1,700キロ）を、開拓者たちはわずか111日で踏破している。不十分な準備、また地理に明るい案内役がいなかったこと、旅程の遅れ、不順な天候、悪路などがあいまって、アイオワ横断は教会歴史上有数の困難な旅となったのである。にもかかわらず、これらの不屈の人々はひるむということをしらなかった。アイオワの旅は彼らの決意を強め、将来へ向けて貴重な体験をもたらしたのである。

## 悲しみとともに始まった旅

1846年2月4日に、最初の荷車隊がノーブーを出発し、渡し船に乗った。ミシシッピ川を渡った後は、シュガークリークまで9マイル（約15キロ）ほどの道を切り開き、テントを張って、ブリガム・ヤングの到着を待った。2月中に3,000人以上がノーブー警察の分署長ホセア・スタウトの指示の下にミシシッピ川を渡りシュガークリークに集合した。

聖徒たちにとってノーブーを去るのは信仰を必要とする行いであった。彼らは、自分たちがどこへ行くのか、またいつ定住地に到着するのか、正確に知らずに出発したのである。彼らが知っていたのは、敵によって間もなくイリノイ州から追い出される瀬戸際にあったことと、指導者たちがロッキーマン山のどこかに避け所を見つけるようにとの啓示を受けていたことだけであった。

春めいた天候がノーブーからの早めの出立を促したが、間もなく厳しい天候に戻り、それは急がれていた出ノーブーに好悪両方の影響を及ぼしたのであった。2月14日には雪が降り、2月19日には北西の風とともに8インチ（約20センチ）の積雪があって寒さの厳しい夜となり、「多くの人々が野営地で苦しんだ。テントや安心して休める場所もない人々が多くいたのである。多くのテントが吹き倒され、中にはテントを張り終えることができず、それを役立てられなかった人々もいた。」<sup>1</sup>ブリガム・ヤングはノーブーを出てミシシッピ川を越えてアイオワ側へ着いた後、ぬかるみがひどくなっていたためシュガークリーク・キャンプへ通じる丘を登るのに、荷車を引く馬の数を倍にしなければならなかった。<sup>2</sup>1週間後に気温が急に下がってミシシッピ川が氷結し、数多くの聖徒たちが氷の上を渡れるようになり、ノーブーからの退去が促された。しかしひどい寒さのためにブリガム・ヤングやウィラード・リチャーズ

## 時満ちる時代の教会歴史

ノーブー吹奏楽団（ウィリアム・ピッツ吹奏楽団という名でも知られている）は、1842年にノーブー隊の教練の伴奏を行うために組織された。この楽団は社交上の集まりや宗教的集会、愛国記念などの祝賀行事、重要人物の歓迎や送別式典で、また蒸気船遊覧の折の引き立て役として頻りに演奏を行っていた。またノーブーコンサートホール建設の基金獲得活動を行い、1843年にはその完成を見ている。

楽団はアイオワの旅の前半において、毎日長い道のりを進んで疲れ切った聖徒たちに娯楽を提供しただけでなく、道沿いの町や村の住民のために開いた演奏会を通して金銭、必要な物資、備品などを得ることまでした。

ガーデングローブに到着後団員は、ノーブーへ戻るグループ、そのままウィンタークォーターズへ進むグループ、ガーデングローブにとどまるグループと別れたために解散となった。後にユタで再結成され、しばらくの間ノーブー時代と同じような活動をした。



イギリス人改宗者であり多才な音楽家であったウィリアム・ピットはノーブー吹奏楽団の指導者であったが、それには二つの理由があった。一つは彼が音楽に精通していたこと、もう一つはイギリスを去るときに吹奏楽用に編曲した数多くの楽譜を携えて来たことであった。ピットは優れたフルート奏者として名を成していたが、彼自身はそれよりもバイオリンなどほかの楽器を好んだ。彼は開拓者の最初の隊とともにソルトレーク盆地に入った3人の吹奏楽団の一人である。

を含めた多くの人々が、シュガークリークで病に倒れた。また、当座しのぎの冷え冷えとした野营地の中で幾人かの女性が出産したが、母親や新生児は冷気と風と雪にさらされて最もひどい苦難を強いられた。

食糧の不足も、旅を始めた聖徒たちを苦しめた。指導者たちと一緒にいたいと考えて、多くの聖徒たちが出発前によく備えるようにとの勧告に従わなかったのである。1年分の蓄えを準備して旅を始めたのは、ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボールなどごくわずかな人々しかおらず、多くの人々がほとんど食糧を持たないまま出発したのであった。このような準備不足の状況があつて、蓄えがあつた人々も喜んでほかの人々に与えたため、食糧は数週間で底を突いてしまった。ヤング大管長の肩にはすべての聖徒の父親としての役割を果たすという、重大な責任がかかっていた。彼の日記の一文から、その落胆の程をうかがうことができる。「この民が霊においてもっと一致し、勧告に反することを祈り求めるのをやめないなら、それはわたしを墓に下らせるであろう。わたしはやせて、去年の冬にはどうしようもなくきつかった上着が今では12インチ（約30センチ）以上もゆるくなってしまった。わたしが死んで、復活の日まで眠り続けるようなことがないのは、ひとえに何か説明のつかない力によるのである。」<sup>3</sup>

このような厳しい状況の中でも、野营地には楽しみもあつた。ウィリアム・ピッツ吹奏楽団はほとんど毎晩のように、当時人気のあつた行進曲、ダンスのクイックステップやギャロップなどの曲を演奏した。また人々はキャンプファイヤーを囲み、バイオリンに合わせてダンスをしたり、自分たちの状況に合わせて作られた新しい歌を含めて、得意の歌を歌ったりした。「北カリフォルニア」はそのような曲の一つである。

「北カリフォルニア、おお、わたしを待つ地よ。  
山並みと太平洋の海原の間に広がる地。  
聖徒らはこの地で養われ、  
自由の喜びを味わう。  
北カリフォルニア。おお、わたしを待つ地よ。」<sup>4</sup>

北カリフォルニアは当時メキシコ領とされていた境界のあいまいな広大な地域で、現在のユタ州、コロラド州、ネバダ州、カリフォルニア州の大半が含まれる。

ブリガム・ヤングは、聖徒たちは「我慢強く、つぶやくことなくあらゆる困苦に耐えた」と書いている。その1か月後にはこう書き加えた。「エノクの時代以来、この民が置かれているような苦しい状況にありながら不平を鳴らす者をほとんど出さなかった民は、ないと思う。わたしは主がイスラエルの陣営の大多数を喜んでおられることをうれしく思った。」<sup>5</sup>

## さらに西へ進むイスラエルの陣営

聖徒たちは1846年3月1日になって初めて、シュガークリークの野营地を出発し始めた。前の週も含めたそれまでの10日間は、おもに旅のもろもろの計画と行進路の検討のために費やされた。当初から聖徒たちの主体は、ブリガム・ヤングを統率者とした「イスラエルの陣営」と呼ばれていた。古代イスラエルの場合と同じように、

## アイオワ横断の旅

百人隊，五十人隊，十人隊の編成とし，それぞれに隊長が定められた。この後の2年間には，「もろもろの山の頭の中のシオン」「選ばれた民」「出エジプト」「マウントピスガ」(訳注：『旧約聖書』和訳では「ピスガの山」と訳出)「ヨルダン川」(訳注：合衆国ユタ州を流れる「ジョーダン川」は和訳『聖書』の表記に従えば「ヨルダン川」となる)「死海」(訳注：合衆国ユタ州の「ソルトレーク」は，日本語で表記すれば死海の別の呼び名「塩の湖」となる)「荒れ野をばらのように花咲かす」，あるいはブリガム・ヤングを「現代のモーセ」と呼んだように『旧約聖書』と対比した表現が増加した。

聖徒たちの出発が遅れた理由の一つに，アイオワ横断にはどのルートを取るのがいちばん良いかについての懸念があった。アイオワ東部は1830年から32年にかけてのブラックホークインディアン戦争以後，入植が自由にできるようになっていた。しかしミシシッピ川から100マイル(約160キロ)以西の地域は，住民数はわずかで道路も少なく劣悪だった。さらに越えなければならない川が大小取り混ぜて数多く流れていた。またどの地点でミズーリ川を渡るかも決定しなければならなかった。聖徒たちは，まだ反モルモン感情が残っていたミズーリ州内は通りたくなかった。

聖徒たちは再び旅を始めるに当たって，4月中旬までにミズーリ州へ到着すべきこと，後続する人たちのために途中小さな畑を開いて作付けすること，ミズーリ州西方のどこかに宿営地を設け，その一部を将来の通行者のための農場あるいは中継所とすること，春の収穫のための種を持たせた身軽な隊を山岳地帯に特派することなどを計画した。そして最も良いルートを探し，交易の行われている開拓地を見つけ，橋を架けるなどのもろもろの備えをするために，スティーブン・マーカムが率いる隊が先発派遣された。

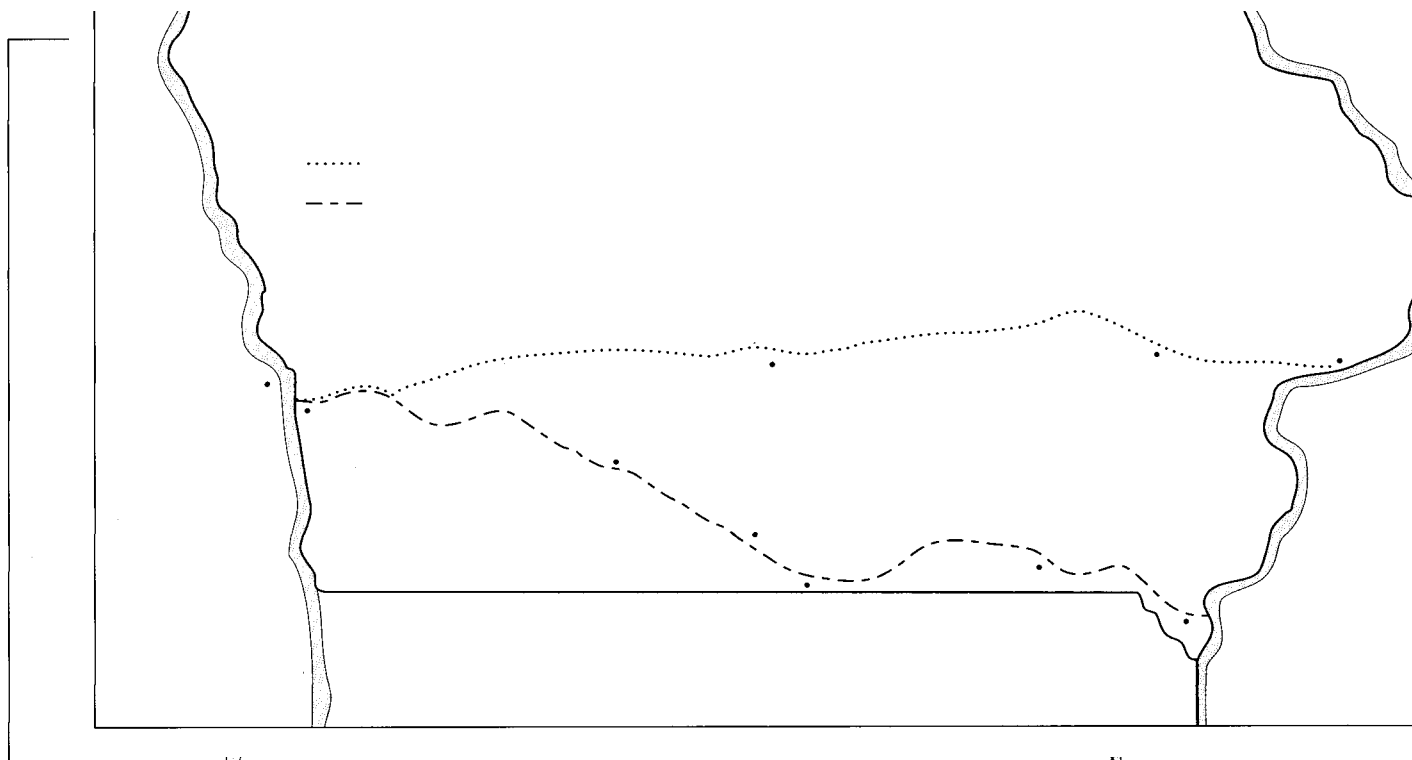
3つの根本的な問題が，聖徒たちのアイオワ横断の妨げとなっていた。最初の問題は食糧の不足であった。各隊には食糧と家畜の飼料の補給のために，入植者たちと接触し，交渉を行う物資供給担当者が二人いた。全般的に食糧不足だったために，男性の多くは必需品を買うためにアイオワ東部の町々で仕事を見つけた。ウィリアム・ピッツ吹奏楽団はより多くの資金を得るために，アイオワの多くの町で正式な演奏会を開いた。幌馬車の手綱を取るよりも仕事に就く男性が多かったために，移住の進行はひどく遅れた。宿営地の多くの人々がノーブーからわずか56マイル(約90キロ)のリチャードソンズポイントに，ほぼ3週間も滞在したのはこのためであった。ブリガム・ヤングは人々に惜しみなく分け与えたために，アイオワ横断の中間地点までしか進んでいないところで，家族のために備えた蓄えを使い果たしてしまった。ほかの使徒たちも同じような状況にあった。<sup>6</sup> 3月24日，ホセア・スタウトは，彼の隊の半数は食糧が尽きたと報告している。そしてミズーリ川に着く前の段階で，問題はますます悪化していった。

第2の問題は，陣営の組織の混乱であった。イスラエルの陣営はアイオワ東部の地域で東西に広く分散してしまっていた。このため，幾人かの連絡係が離れた隊の指導者たちの間を馬で忙しく行き来していた。無秩序と，またジョージ・ミラー監督や他の者たちの冒険的かつ独善的，加えて競争意識の強い態度に危機感を募らせたブリガム・ヤングは，陣営全体の統制をより強化する必要があると考えた。彼はより厳格な従順と協力を求め，陣営の中心からはるか遠く離れて前進していた人々に

スティーブン・マーカム(1800 - 1878年)は1837年にオハイオ州で福音を受け入れた。裕福な農民であり忠実な末日聖徒であった彼は，ジョセフ・スミスの勧めに従って自分の財産を売り，60人の人々がカートランドからミズーリ州ファーウェストへ移住するのを援助した。ノーブー時代はジョセフ・スミスのボディガードとして働き，ここでもまた裁判にかかる費用の支払いで預言者を助けるために，新しい自分の家を持ってテント生活をした。

彼はカーセージで預言者たちとともにいたが，殉教の数時間前に監獄へ入るのを拒絶された。アイオワで開拓者としての役割を果たしたのに加えて，彼はソルトレーク盆地へ入った最初の隊の一員であり，後にはユタで入植事業において熱心に働いた。

## 時満ちる時代の教会歴史



モルモンの開拓者の取ったアイオワ横断の二つの重要なルート。北のルートは1856年に手車隊が進んだ道筋である。1846年に開拓者が通ったのは南側のルートである。陣営の大部分は、悪天候が続いた間に組織の立て直しを図るために、約2週間リチャードソンズポイントにとどまった。それにもかかわらず、ノーブーの西100マイル（約160キロ）のチャリトン川に着くまでに、彼らは1日に平均2マイル（約3キロ）から3マイル（約5キロ）しか進めなかった。多くの人々が広い地域に散在していて、中にはノーブーに戻る人たちがいた。大々的な組織の立て直しが必要とされていた。

1846年のルートはミズーリ州との境界に近い所を進んだが、これはそこが比較的多くの人々が住む開けた地域に近かったからである。教会指導者は、ミズーリ川西岸地域の重要な集結地バンクスフェリーに向けて、ミズーリ川の北西部を横断するルートを考えてが、ミズーリ州民の敵対的な反応を見て、再び北へ進路を変えた。

ウィリアム・クレイトンは、さらに西へ進んだローカストクリークで、賛美歌「恐れず来たれ、聖徒」を作詞した。二つの「恒久的」定住地のうちのひとつガーデングローブは、ノーブーの西144マイル（約230キロ）、ミズーリ川の東120マイル（約193キロ）の地点にあり、アイオワ横断のほぼ中間に位置していた。聖徒たちは4月24日にガーデングローブに到着した。そして、パーリー・P・プラットが、5月18日にマウントピスガを2番目の恒久的宿営地に定めた。ブリガム・ヤングは1846年6月1日にここマウントピスガで45歳の誕生日を祝った。

叱責しっせきの手紙を書き送り、戻って評議の席に着くよう求めた。

ミラーに同行していたパーリー・P・プラットも、ほかの人々とともに厳しくとがめられた。その後起こったことは、ブリガム・ヤングの行動が御霊に促されたものだったことを証明している。パーリー・P・プラットは次のように述べている。「わたしたちのグループを積極的に指導していたミラー監督は、それ以来わたしたちのもとを去って、自分の思うとおりに行動し、大管長会の勧告による指導を拒んだ。そして、テキサスへ移って行ってしまった。ここで述べておきたいことがある。自分自身の思いを理解し得るかぎり、わたしの動機は純粹だった。しかしわたしはこの時宜を得た叱責が与えられたことを神に感謝している。それはわたしの益になり、その後はいつも、より注意深く慎重になった。」<sup>7</sup>

3月26日にチャリトン川の土手において、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールは陣営を、それぞれが100家族から成る3つの隊に再編制した。

それ以来旅は前よりも整然と進むようになったが、組織上の改善もさすがに雨続きの春の天気という、恐らくは最も困難で決定的な要因を克服することはできなかった。急な雪解けやほとんど絶え間なく降る雨で、川や果てしなく続くぬかるみには水があふれ、なぐりつけるような強風が前進を妨げた。

「距離にして6マイル（約10キロ）」にすぎないたった一か所のぬかるみ地帯を通過しただけだった、という3月末ごろのブリガム・ヤングの言葉は、道や宿営地を泥沼に変えてしまった春の雪解けと雨の多い天気の影響をよく物語っている。<sup>8</sup>

日記などの様々な記録によると3月には、10日から始まって少なくとも11日間、雨や雪が降り続いたことが分かる。この悪天候は4月中も続き、その月の半分は雨が雪の空模様で、特に最後の週は毎日そのような天気だった。非常に多くの幌馬車がぬかるみにはまり込み、1日に半マイル（約1キロ）も進まなくなってしまう有様であ

## アイオワ横断の旅

った。

4月6日は特にひどい天気に見舞われた。ホセア・スタウトはこう述べている。「昨日はあれほど良い天気だったのに、午前中はずっと雨降りですぐ暗い空模様。……今日は旅の中で最低の日だった。激しい雨に打たれ、増水した川を見ながら今まで経験した中で最悪の道を進み、丘を上り、かしの木の茂ったひどい湿地帯のぬかるみを下った。馬は腹まで水につかることが時々あり、下り坂では立ち往生した。半日以上悪戦苦闘し、目的地に到着する前に何台かの幌馬車を置き去りにして、幌馬車に連結する家畜の組を倍にしなければならなかった。」夜になり、ほとんどの人が床に就いた後で、風が吹き始めた。

ホセアはテントを太いロープで固定していなかったために、「ベッドから出て、激しく打ちつける風と雨の中、ずぶぬれになって長い時間それを支えていなければならなかった。風に吹き倒されてしまうので、テントを守るためにはその場を離れるわけにはいかなかった。」結局彼は何人かの兄弟たちが助けに来るまで、そこに踏みとどまった。<sup>9</sup>

エライザ・R・スノーはこう記している。それは「文字どおりの大風で、豪雨を伴っていた。わたしたちのテントの幾つかはなぎ倒されてしまい、馬車の幌はかるうじて吹き飛ばされるのを免れた。」<sup>10</sup>疲れ切った旅人たちが朝目を覚ますと、少し雪が降り、うっすらと氷が張り、川の水位が上がっていた。

衣服や寝具がびしょぬれになることもしばしばで、そのうえ低い気温のために病人が続出し、時には死人が出ることもあり、旅はさらに遅れた。

4月15日に、陣営は現在のアイオワ - ミズーリ州境付近のローカストクリークに至った。陣営の旅が思うように進まず、大家族の世話で苦闘を続け、焦燥感を覚えていたウィリアム・クレイトンはうれしい知らせを受け取った。健康と身の安全を配慮してノーブーに残してきた妻のダイアンサが元気な男の子を出産したのである。彼女はクレイトンの複数の妻の一人であった。彼はそこで「すべては善し」という主をたたえる新しい歌の作曲をした（現在は「恐れず来たれ、聖徒」という題で知られている）。この曲は、その後グレートベースン目指して平原を渡った多くのモルモンの開拓者によって愛唱された。

恐れず来たれ、聖徒 進み行けよ  
その旅は辛くとも 恵みあらん  
無益な憂いは 払いて努めよ  
されば喜ばん すべては善し

見いだせ神の国を 西へ遠く  
聖徒を悩ますもの そこにあらざ  
歌声高めて 神を賛めたたえ  
高く声あげん すべては善し<sup>11</sup>

増水したローカストクリークは雨でさらに水位を高め、教会指導者は計画の見直しを始めた。苦痛を伴う旅の遅れ、また聖徒たちの労苦、幌馬車を引く家畜の疲労、高価でとても手が出せない飼料、幌馬車や装備の破損、食糧の急速な枯渇、快復の



ウィリアム・クレイトン(1814 - 1879年)はイギリスで生まれ、1837年に最初に福音を受け入れた人々の一人であった。1840年にノーブーに移住した彼は、すぐにその文章を書く能力と経理の才能を認められた。1842年にクレイトンはジョセフ・スミスの事務処理係となり、私設秘書となった。そして、彼は生涯同じような仕事で働いた。

彼はノーブー神殿の記録者であった。後にユタにおいてはZCMIの会計係、準州の家畜焼き印紋章記録者、準州公共会計監査役などの仕事をした。恐らく彼について最も知られているのは、1843年7月12日一夫多妻に関する啓示を記録し、アイオワ州コリドン付近で「恐れず来たれ、聖徒」を作詞したことであろう。

## 時満ちる時代の教会歴史

見込みのない悪天候，これらの要因がすべて一つとなって，聖徒たちの進路の見直しを迫ったのである。その季節の終わりまでにロッキー山脈に到着するという望みは薄れようとしていた。

### 中継地点の建設とミズーリ州への移動

教会の指導陣は，西へ進むルートの中に農地と中継地点を開くために，ローカストクリークで新しい計画を立てた。開拓者たちは4月24日までに，自分たちがガーデングローブと名付けた地点に進んでいた。そこはローカストクリークからは60マイル（約100キロ），アイオワ州を横切る行程のほぼ中間地点であった。彼らは3週間のうちに715エーカーの荒地を開墾し，丸木小屋を建て，小さな集落を建設した。教会と対外関係の仕事を調整するために高等評議会が召集され，200人が最初の中継地点を改良する仕事を割り当てられた。

ガーデングローブには，間もなくノーブーからやって来る聖徒のすべてを収容する小屋を作るだけの材木がなかった。そのために指導者たちは，この地域の様子を調べるために先発隊を送った。パーリー・P・ブラットは，ガーデングローブの北西25マイル（約40キロ）の所はかなり草深い美しい丘陵地を見つけ，大喜びした。彼はモーセが約束の地を見渡した山の名前を口にし，「ここはマウントピスガだ」と叫んだ。<sup>12</sup>

数日後，ブリガム・ヤングがマウントピスガに到着し，すぐに二つ目の中継地点をそこに組織した。そして，また別の高等評議会が指名され，開拓者たちの協同作業によって数千エーカーの土地の囲い込み，作付け，耕作が行われた。新しい指導者の一人エズラ・タフト・ベンソン（第13代大管長の曾祖父）はこう宣言した。

「そこはわたしがノーブーを去って以来，喜んでとどまりたいと思った最初の地だった。」<sup>13</sup>それから間もなく，マウントピスガは規模においても重要性においてもガーデングローブをしのぐようになった。しかしどちらも1846年から1852年にかけて，開拓者の中継地点として重要な役割を果たしたのである。

1846年6月1日，十二使徒を含む先発隊がミズーリ川を目指してマウントピスガを出発した。当初の予定より二月遅れていたが，指導者たちは，急げば秋までにはロッキー山脈に着けるという望みをまだ持っていた。それまでとは打って変わって乾いた道と，家畜のえさになる豊富な草に恵まれて，ミズーリ川岸のカウンシルブラッフスまでの100マイル（約160キロ）の距離をわずかに14日で進むことができた。ポタワトミーインディアンの領土内のモスキートクリークに，臨時の本部が設置された。彼らがそこでまず最初にしなければならなかったのは，ミズーリ川を越えて幌馬車を運ぶのに必要な船着き場と渡し船を作ることであったが，その作業はわずか2週間で完了した。

にもかかわらず，依然として未解決の二つの問題が残されていた。まだインディアンの領土内にいるというのに，ミズーリ川の近くはどこで越冬すればよいのかという問題が一つ。そしてもう一つの問題は，冬將軍の到来前に，使徒の一部やほかの人々がさらに西へ進むのに必要な時間が残されているのかどうかということであった。後の方の問題については，モルモンの兵士による歩兵大隊を編成するために，7月1日にやって来た合衆国陸軍のジェームズ・アレン大尉との話し合いの後で結論

後続の聖徒たちのために築かれた最初の本格的宿営地がガーデングローブであった。サミュエル・ベント，アロン・ジョンソン，デビッド・フルマーがガーデングローブの開拓地を管理する責任に召された。

ジョン・R・ヤングは次のように回想している。「彼らは貧しい人々には無料で土地を分け与えるように指示されていた。しかし，きちんと耕作できる以上の広さを分配してはならないという条件が付いていた。無駄使いや投機は許されなかった。」<sup>14</sup>

サミュエル・ベントは1846年8月16日にガーデングローブで亡くなった。

## アイオワ横断の旅

が出た。大隊に大部分の壮年者を取られては、西への移動の時期を遅らせるほかにはなかった。

## モルモン大隊の召集

1845年にアメリカ合衆国はテキサスを併合したが、これはテキサスの大部分について領有権を主張していたメキシコを怒らせた。1846年4月24日にメキシコ軍とアメリカの騎兵隊の間で小規模な戦闘になったが、アメリカの議会が宣戦布告をしたのは1846年5月12日になってからであった。アメリカの領土拡張論者たちはこの戦争に沸き立った。太平洋岸まで領土を広げる絶好の機会が訪れたからである。自身が領土拡張論者であったジェームズ・K・ポーク大統領は、ニューメキシコと北カリフォルニアの獲得を戦争の目的の一つに加えた。こうして西部方面の合衆国陸軍に、この広大な領土の攻略が命じられたのである。

メキシコとの開戦が正式に決まったのは、聖徒たちがワシントンで西部への移住について国の援助を請願しているときだった。ブリガム・ヤングはノーブーを出発する前に、ジェシー・C・リトルを東部の教会を管理し、また首都ワシントンへ行って援助を求める請願活動を行う責任に召した。リトル長老は24歳の友人トーマス・L・ケインの助けを得ながら事を進めた。トーマス・L・ケインの父親は、連邦裁判所判事でポーク大統領の政治上の盟友、ジョン・ケインであった。トーマスは父の助手として法曹界でも働き、ワシントンで広くその名を知られていた。リトル長老とケインは政府の担当窓口を相手に、オレゴントレイル沿いに木造要塞<sup>ようさい</sup>やとりでを建設する仕事を請け負う契約を結ぶための交渉をしたが、メキシコとの戦争は、聖徒と政府の双方が互いに助け合える良機を提供したのである。

ケインの強い勧めを受け、リトル長老はポーク大統領に手紙を書いた。彼はその中で、聖徒たちは本来忠実な合衆国国民であるが、政府からの援助を拒否されたならば、「合衆国国籍を捨てざるを得なくなる」おそれがあるという考えを述べた。<sup>15</sup>ポーク大統領は聖徒たちがオレゴン領域に関心を持つイギリス側につくような事態は望まなかったし、また、西部方面の軍隊の中にいるミズーリ州出身の志願兵たちの反感を招くようなこともしたくなかった。そのために、大統領はリトル長老との話し合いを経て、500人のモルモンを彼らがカリフォルニアに到着後徴募すると認めたのである。こうすることによって、彼はモルモンを敵視する勢力の反感を買うことなく、聖徒たちの忠誠心もつなぎ止めることができると判断したのであった。しかし、戦時担当国務長官のウィリアム・マーシーがフォートレブンワースのステイブン・W・カーニー大佐あての手紙を書いた時点で、大統領は気を変えたようである。なぜならカーニー大佐は、モルモン大隊の徴募の即刻開始の許可を得たのである。カーニー大佐は6月の末になって、志願兵の徴募を行わせるために、ジェームズ・アレン大尉を南アイオワのモルモンの宿営地に派遣した。

アレン大尉は最初にマウントピスガに新しく開かれたモルモンの宿営地を訪ねた。彼はそこで、その徴募計画について厳しい拒絶的な態度を示された。ミズーリ川付近で同僚の使徒たちと合流するために旅の途中だったウィルフォード・ウッドラフ長老は、その計画を聞いて非常に疑わしく思った。彼はこう記録している。「彼らがスパイであって、大統領はそのことに直接関与していないと信じるに足る理由が幾



アイオワ州の2番目の本格的宿営地マウントピスガは、1846年5月18日に開かれ、ウィリアム・ハンティントン、エズラ・T・ベンソン、チャールズ・C・リッチによって管理された。ブリガム・ヤングの後を追ってノーブーを出た聖徒の多くがここへ到着し、また、モルモン大隊の一部の徴募はここで行われた。

マウントピスガは少なくとも1852年までは宿営地として維持されていた。最も多いときには、3,000人を超える聖徒が滞在した。南太平洋の諸島での伝道から帰還したばかりのノア・ロジャーズが、ここで亡くなり葬られた最初の人物であった。そしてほかにも多くの人々がこの地で息を引き取り、葬られた。1886年に、教会は墓地がある1エーカーの土地を購入し、1888年にこの地を記念する碑を建てた。



## 時満ちる時代の教会歴史



ジェシー・C・リトル(1815 - 1893年)は1846年にニューイングランド中部諸州伝道部の部長として仕えた。彼は一時家族を東部に残して、一人でネブラスカ州へ行き、ウィンタークォーターズの西70マイル(約110キロ)ほどの地点でブリガム・ヤングおよび最初に編成された開拓者の隊と合流した。

ソルトトレイク盆地に到着した後彼はまた東部へ戻り、妻子とともにユタ州へ向かった。1852年まで続けて伝道部長の責任を果たした。1856年に彼は管理監督エドワード・ハンターの第二副監督として働く召しを受け、1874年までその任を務めた。

つかあった。しかし、わたしたちは彼らを丁重に扱い、その件についてはカウンスルブラッフスへ行って大管長に話すように勧めた。」<sup>16</sup>

ウッドラフ長老が送った使いは、アレン大尉がカウンスルブラッフスに到着する2日前に、大尉の使命について用心するようブリガム・ヤングに警告していた。大尉にあいさつをする前に、ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ウィラード・リチャーズは急きょオーソン・プラットのテントで話し合いを持ち、「午前中にアレン大尉に会って徴募に応じるのが最上の策だという判断を下した。」<sup>17</sup>ヤング大管長は、アレン大尉の要請はリトル長老の交渉の結果によるものだろうと考えたのである。また教会の指導者たちはこのモルモンの男性に対する要請が、絶対的に不足している移住のための資金を得る機会を提供し、インディアン領地内に一時的な居留地を作る機会となると考えたのであった。交渉の中でアレン大尉は、その冬の間聖徒たちがインディアン領地内にとどまれるようにすると確約した。

アレンがカウンスルブラッフスでの徴募を終えた後で、ヤング会長は連邦政府に対する偏見を払い去るために聖徒たちに話をした。「もしわたしたちが一つの州として連邦に認められたとしても、その政府から何の要請もなければ無視されているという気持ちになります。モルモンを、最初にカリフォルニアの土を踏んだ者たちにしようではありませんか。……これはわたしたちが政府から受けた初めての有益な申し出です。」<sup>18</sup>7月3日にブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、そしてウィラード・リチャーズはさらに多くの人を募るために東へ行った。彼らがマウントピスガに到着する前は、末日聖徒はすべてその計画に反対していたが、彼らが何度か徴募演説をした後は、多くの壮年の男性が登録した。この徴募は大隊がフォートレベンワースに向けて出発する前日の7月20日まで続けられた。3週間で、各100人編成の隊が5隊組織された。トーマス・L・ケインとジェシー・C・リトルの二人がミズーリ川に到着して、政府の要請には敵対的な計画は何も隠されていないと保障した。教会の指導者たちは、志願兵の家族の世話は十分に行われると約束した。ブリガム・ヤングは各隊の代表となる人物を選び、彼らに残りの人々の父親役をするように勧告した。また彼は志願兵たちにも、信頼される兵士となって、戒めを守り、各自の指導者の勧告に従うよう勧告した。そして、もし彼らが正しい行いをするなら、戦わずに済むだろうという約束をした。7月18日、土曜日の夕べにミズーリ川沿いの切り開かれた広場で大隊に敬意を表して別れの舞踏会が開かれた。そして7月21日火曜日の正午に、大隊はその歴史的な行軍を開始したのである。

## ウィンタークォーターズの建設

大隊が去るとともに、適当な冬営地を見つけることに全力が注がれた。モルモン大隊の徴募がある以前にブリガム・ヤングは、聖徒の多くをプラット川のグランド島に入植させることをすでに決めていた。グランド島は淡水の川に囲まれた島としてはアメリカで最長の島であり、地味は肥え、樹木が豊かに茂っていた。しかし、その地域には非友好的なポーニーインディアンの存在という一つの障害があった。トーマス・L・ケインとウィルフォード・ウッドラフが7月中旬に宿営地に到着して、グランド島の計画の見直しが行われた。ケインは連邦政府のインディアン監督局はミズーリ州内での入植なら、さらに西寄りの地域への入植よりも、あまり干渉をし

## アイオワ横断の旅



この地図は1846年から47年にかけて、ミズーリ川沿いに作られたモルモンのおもな宿営地を示したものである。グランド島はブラット川の西沿いにあった。1846年にこの地域全体で約1万2,000人の教会員が散在し、そのうちの約4,000人がウィンタークォーターズにいた。

てこないだろうという提案をした。

そこへウッドラフ長老が、イギリスの教会を暫定的に管理していたルーベン・ヘドロックが、もともと移住の目的のために取り分けておいた資金を自己の財産を増やすための計画に流用しているという嘆かわしいニュースを持ってやって来た。さらに背教者のジェームズ・J・ストラングがマーティン・ハリスを英国に送り、末日聖徒の取り込みを図っていた。すぐに何らかの処置を取らなければ、教会は英国諸島でかなりの地歩を失う状況にあった。ウッドラフ長老はさらに、貧しすぎて西へ進めないでいるノーブーの聖徒たちの状況について報告した。1846年7月末までに、教会の指導者たちは中心となる宿営地をミズーリ州の西岸に一つ建設し、ほかの宿営地をアイオワ州西部地域の各所に散在させる方針を決めた。さらに、オーソン・ハイド、パーリー・P・ブラット、ジョン・テラーが英国に急きょ派遣され、そこで教会の様々な問題の解決に当たることになった。

8月になって、探索隊がミズーリ州の3マイル（約5キロ）西の所にあるカトラーズパークという一つの候補地を見つけた。しかしオトーインディアンとオマハインディアン部の指導者たちと幾度か交渉した後で、教会の指導者たちはもっと川寄りの地に宿営地を建設することに決定した。船着き場の建設が提案されていた所に近い良い場所が9月初めに選ばれ、調査が始められた。その月の終わりまでに820区画の町の設計がなされ、幾つかの区画については予約の申し込みがなされた。教会の指導者たちがウィンタークォーターズと呼んだ町が、姿を現し始めたのである。

### ノーブーの「貧しい聖徒たち」の救出

1846年の3月中ごろまでに2,000人以上の聖徒がノーブーを去り、さらに続く4月と5月の2か月間に何百人かがその後が続いた。しかし、ノーブー市内にはまだ多くの聖徒たちが残っていた。ヤング大管長はノーブーをたつ前に、ジョセフ・L・ヘイウッド、ジョン・S・フルマー、アーモン・W・バビットの3人を法律上の管財人として任命し、教会と個人の財産の売却、急を要する債務の支払い、やむを得ず残った人々の安全な出発の助けなどを行わせた。またノーブー神殿の完成と奉献を監督する責任を、オーソン・ハイドに与えていた。

神殿で作業を進めていた人々は、4月末までに割り当ての仕事を終え、神聖な建物を奉献する準備が整った。英国での伝道を終えて帰国したウィルフォード・ウッドラフはその式に間に合うことができた。4月30日、神殿衣に身を包んだオーソン・ハイド、ウィルフォード・ウッドラフ、他の約20名が主の宮を奉献した。

ウィルフォード・ウッドラフはこう記録している。「シドニー・リグドンやほかの者たちは、屋根ふきが進まないし建物本体も完成しない、暴徒の脅威があつて奉献できないなどと多くの偽りの預言をしていたが、わたしたちはそのどちらもし終えた。」<sup>19</sup>

その翌日の1846年5月1日、ノーブーの教会指導者たちは多くの人々を集めて奉献を行った。それが済んだ後で、ハイド長老とウッドラフ長老は、ほかの十二使徒に合流するためにアイオワ州へ向けて出発した。

教会の敵は、夏になつてもすべての聖徒がノーブーを出発するわけではないと知ると、再び迫害を始めた。穀物の収穫をしていた男女が攻撃を受け、そのうちの幾

## 時満ちる時代の教会歴史

人かは激しく打ちめされた。このような攻撃が1846年の夏の間ずっと行われ、秋にまで及んだ。

そうこうしている間に、十二使徒定員会はノーブーに残っている聖徒たちの旅に必要なものを用意する資金を得るために、ノーブー神殿を売却することを決定した。しかし神殿を売却するというこの試みは成功しなかった。8月中ごろには、まだ1,500人弱の聖徒がノーブーに残っていたが、その中には東部から来た改宗して間もない人々もいた。彼らは到着が遅れすぎて、先に出発していた人々に合流できなかったのである。彼らの多くはノーブーに到着するまでに手持ちの金を使い果たして、さらに西へ進むには教会の指導者に頼るほかに望みがなかった。

9月の第2週までに、反モルモンは聖徒たちをノーブーから追い出すことを決めていた。6間の大砲で武装した約800人が、ノーブーを包囲する準備をした。戦闘員として数えられるのは150人ほどしかいなかったが、聖徒や新しい居住者たちはノーブーを守備する備えをした。「ノーブーの戦い」は散発的な発砲とともに、9月10日に始まった。その後の2日間に小競り合いが何度もあったが、9月13日になって、反モルモンはノーブーの守備陣を総崩れにするため、攻撃を熾烈にしてきた。しかし、ダニエル・H・ウエルズが指揮するノーブー側も激しい反撃を加えその日を持ちこたえたが、双方に犠牲者が出た。争いは翌日の安息日にも引き続き行われた。

9月16日に、9月以前に和平の維持のために双方の間に立って働いていた「クインシー委員会」が、再び仲裁に入った。そして聖徒たちは自らの生命を守り、川向こうへ逃れる機会を得るために無条件で降伏することを強いられた。わずか5人の男性とその家族が、財産処理のためにノーブーに残ることを許された。逃げられる人々は着替えの衣服も食糧も持たずに急いで川を渡った。やがて暴徒たちがノーブーに入り込み、家々を略奪し、神殿を汚した。早く逃げるのでできなかった聖徒たちは、暴徒によって打ちたたかれたり、川の中へ投げ込まれたりした。病気が重くて旅ができず残っていた人々も含め、追い出された500人から600人の避難地が、アイオワ州モントロースより上流の2マイル（約3キロ）ほどの川沿いの地に散在した。ほとんどの人は毛布を持っているだけで、低木でわずかに雨露をしのぐ場所を作り、食べる物といえばゆでるか焼くかしたとうもろこししかない有様であった。そのような中で死んでいく人々もあった。ニューエル・K・ホイットニー監督は小麦粉を幾らか買い、それを貧しい避難者たちに分け与えた。教会の管財人たちはセントルイスなどの川筋の町々に行き、人々から彼らを救うための金銭と物資を募った。しかし宗教的な偏見のために、集められたのはわずか100ドルにすぎなかった。

食糧がほとんど底を突いた10月9日に、幾つかのうずらの大群が宿営地に飛んで来て、地面やテーブルの上にまで降り立った。飢えた聖徒たちはたくさんのうずらを捕まえ、料理して食べた。忠実な人々の目には、古代イスラエルでの似通った出来事と同じように、それは末日のイスラエルに対する神の恵みのしるしとして映った（出エジプト16：13参照）。

アイオワ州にいた教会の指導者たちは、ノーブーの聖徒たちの悲惨な状況を知らされる以前に救出隊を派遣しており、「ノーブーの戦い」の知らせがウィンタークォーターズに伝わったときには2番目の救出隊が動員された。プリガム・ヤングは次のように宣言した。「皆さんが主の宮で交わした聖約の炎を、決して消すことのできな

## アイオワ横断の旅

い炎のように心の中に燃やしていただきたい。そして皆さん自身でも代理の人でもよいのですが、とにかく……隊を編成し、すぐに出発してノーブーから貧しい人々を連れて来ていただきたい。……

……今はいろいろと議論している場合ではありません。行動する時です。」<sup>20</sup> 救出隊は聖徒たちを飢えと冬の寒さから救い出すのに間に合うことができた。貧しい聖徒たちはアイオワ西部の様々な宿営地に分散し、わずかな人たちがウィンタークォーターズまで進んだ。

## 荒れ野のイスラエル

1846年の秋の間中、合衆国中西部の各地に散在していた約1万2,000人の末日聖徒はできる限りのことをして冬に備えた。教会の本部はインディアン居留地内のウィンタークォーターズに置かれたが、そこにはその年の暮れまでに約4,000人の聖徒が住むようになっていた。さらに、2,500人の聖徒たちがミズーリ州東岸のポタワトミーインディアンの土地に宿営していた。700人と見積もられる人々がマウントビスガにいて、ガーデングローブには600人、そして少なくとも1,000人がアイオワ州内のほかの各地に広がり、500人がモルモン大隊としてカリフォルニアに行軍中であった。その冬、多くの聖徒がミシシッピ川沿いの町々に集合し、セントルイスにおけるモルモンの人口は1,500人にまでふくれ上がった。<sup>21</sup> 教会員がこれほど広い地域に散らばり、これほど住む所に窮したときはかつてなかった。「荒れ野の中のシオン」という言葉は、1846年から47年にかけての冬の間教会が置かれていた困難な状況を適確に表現している。

このような状況下にあっても、教会を管理する指導者たちは聖徒たちのために、教会的な管理体制、また行政的な管理体制を組織しようとした。幾つかの主要な宿営地に、教会に関する事柄と行政的な事柄を監督するために高等評議会が組織された。ウィンタークォーターズでは、この評議会は「自治高等評議会」と呼ばれた。10月の初めに、ブリガム・ヤングはウィンタークォーターズを13のワードに分割したが、教会員への配慮を行き届いたものとするために、間もなくその数は22に増えた。11月にこの高等評議会は、さらに小規模なワードを組織することと、「労働能力のある男性は、10日のうちの1日を貧しい人々のために用いるか、それに相当するものを監督に納める」べきことを決定した。<sup>22</sup> これによって監督たちはおもに、人々の物質的な必要に配慮することになったが、それは現在の教会に存在するワードの組織に向けての一つの前進でもあった。

越冬生活に入った聖徒たちの多くは、経済状況を良くするために、豚、穀物、野菜、移住用の物資などを求めて、ミズーリ州北部やアイオワ州の入植地の人々と交易をした。若い人々の中には、それらのものを購入するための金銭を得るために仕事を求める人々もいた。聖徒たちは、それぞれの財産を全体の利益のために蓄積するように求められていた。

病気と死が聖徒たちの宿営地に広がっていた。その年の初め、寒い季節のさなかに行われたノーブーからの慌ただしい脱出、困難を極めたアイオワ横断の旅、いつ終わるとも知れない春の嵐、不十分な物資、間に合わせの粗末な住まい、貧しい聖徒たちのノーブーからの力づくの追放、川沿いの地の不健康な環境、これらのすべ

ユタ州オグデン、ユタの開拓者の娘たち」の厚意により掲載

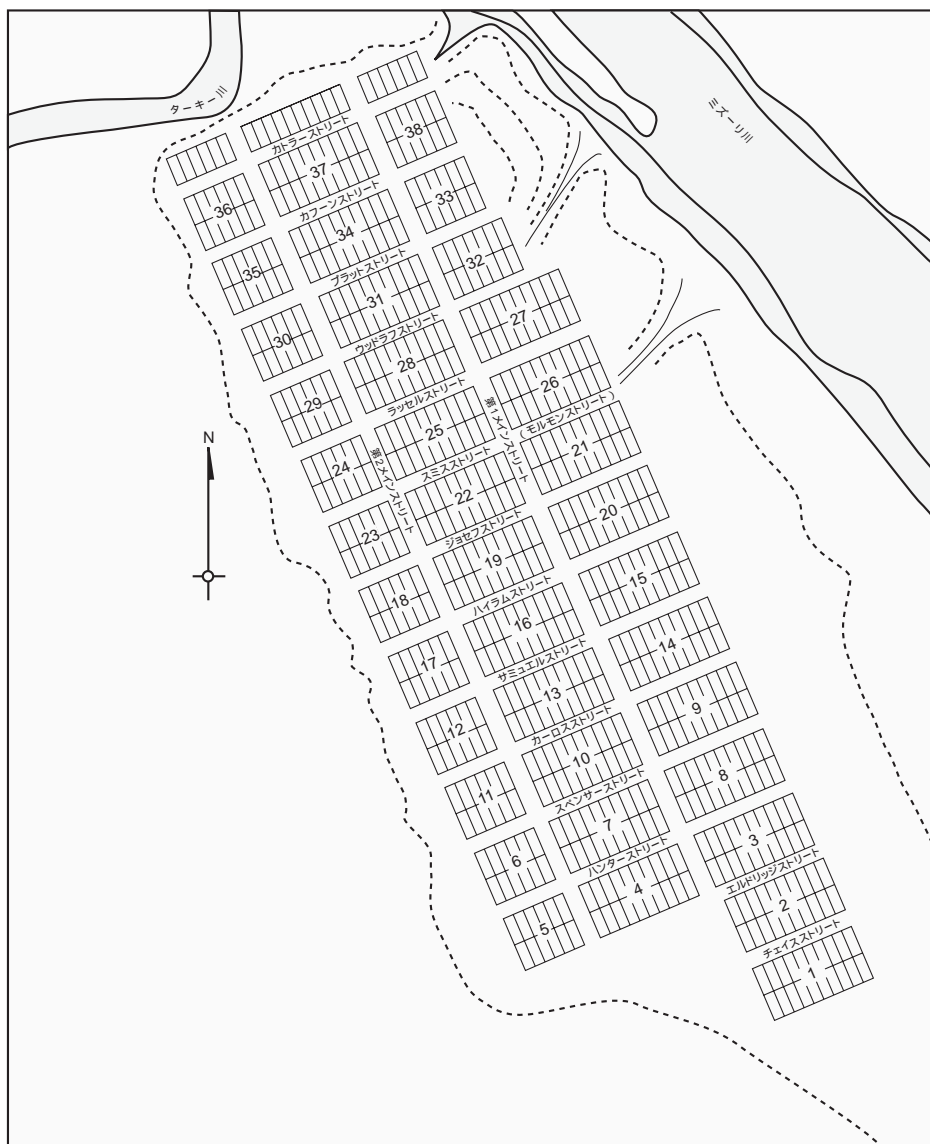


ジェーン・リチャーズ(1823 - 1913年)は1846年の遅くにアイオワ州を横断した。夫のフランクリン・D・リチャーズは英国への旅の途中で、彼女のそばにはいなかった。大祭司であったフランクリン・D・リチャーズは、その3年後に十二使徒定員会に召されることになる。ジェーンの幼い娘ウェルシーは病気で、数週間続いたひどい苦しみした後、カトラパークで死亡した。リチャーズ姉妹はそのときの一つの出来事を次のように記録している。

「2、3日前に彼女はポテトスープが飲みたいと言った。それまでの数週の間彼女が口にした初めての願いだった。わたしたちは旅をしている途中、じゃがいも畑を見つけた。一人の姉妹がじゃがいもを一つ分けてくれるように熱心に頼んだ。粗野な態度の相手の女性はいらいらしながら彼女の話聞き終えると、彼女の肩を押して『あんたたちモルモンにやるようなものは何もないし、売るつもりもないよ』と言いながら追い出した。わたしはがっかりしている娘を慰めようとしている人たちの声を聞きながら、ベッドの上で泣いた。娘が取り去られたとき、わたしは死ぬことができないから生きているというにすぎなかった。」<sup>23</sup>

## 時満ちる時代の教会歴史

「越冬地」の場所がいったん決定した後にまず必要なことは、その用地の調査であった。この計画図には、41ブロックで合計820区画が示されている。街路と建物同士の間隔が適切に配慮されている。



てが積み積みもって、今聖徒たちの上に一気に覆いかぶさった。夏の間は、旅をする多くの人々が、長時間外気にさらされるためにマラリヤ、肺炎、結核などの病気に苦しめられた。その年の秋、ミズーリ州では生野菜が不足したために壊血病が多発した。聖徒たちはそれを「黒壊疽<sup>えそ</sup>」と呼んだ。病魔は相手がだれかに関係なく広まり、ブリガム・ヤング、ウィラード・リチャーズなどを含め、多くの指導者が重い病に倒れた。ウィルフォード・ウッドラフはこう書いている。「末日聖徒がこれほどひどい苦しみをこんなにも短い間に経験したようなことは、かつて見たことがない。」<sup>24</sup> 最初の年の冬の終わりまでに、宿营地の中で700人以上が死亡した。<sup>25</sup>

しかし、悲しいことばかりではなかった。特にウィンタークォーターズでは、宿营地の生活の中にも、喜び、楽しみ、有意義な体験が随所にあったのである。教会の集会は週に2回開かれ、指導者の説教は入植地全体の士気を高めた。同様に家族ごとの集会も数多く開かれた。宿营地建設のための激しい労働が済んだ後で、ブリガム・ヤングは各ワードに対し、宴会とダンスで祝うように勧めている。女性たちは近所同士のグループでよく集まり、食べ物を持ち寄ったり、キルトや麦わら帽子を

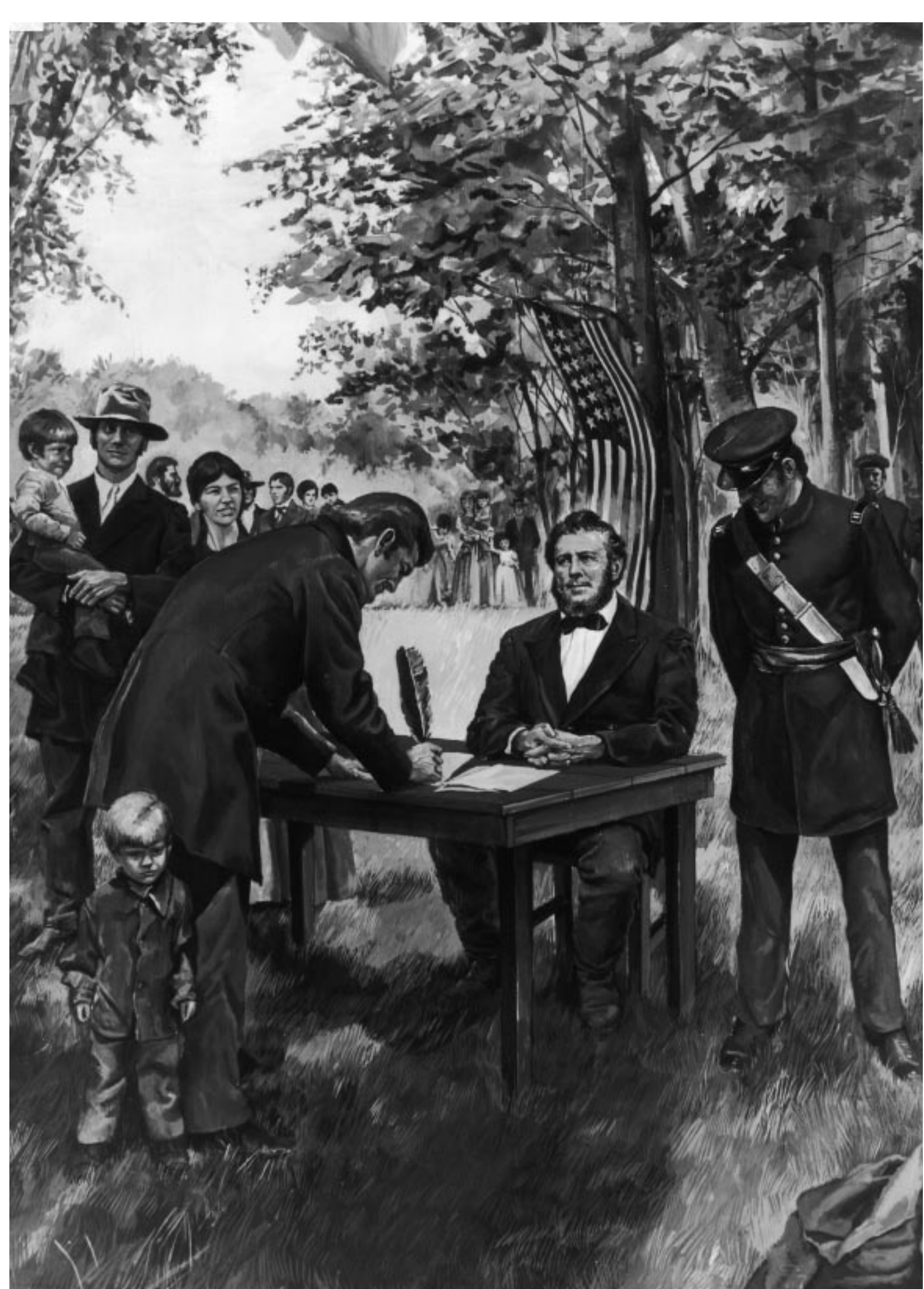
## アイオワ横断の旅

作ったり、また互いの髪の手入れをしたり、編み物、洗濯をしたり、手紙を読み合ったりした。

1846年から47年にかけての冬は、さらに西へ向けて旅を続けるための準備も継続的に進められた。その前の年は教会と教会員にとって計り知れない苦難の年であったが、それでも聖徒たちは未来に対して明るい希望を抱いていた。1846年に学んだ多くの事柄は、将来大きな利益となって戻って来るのだった。

## 注

1. ウィラード・リチャーズ, *History of the Church* 『教会歴史』7: 593
2. フワニータ・ブルックス編, *On the Mormon Frontier: The Diary of Hosea Stout, 1844 - 1861* 『モルモンの辺境地で ホセア・スタウトの日記』1844 - 1861年 (Salt Lake City: University of Utah Press, 1964), 123参照
3. エルデン・J・ワトソン, *Manuscript History of Brigham Young* 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』1846 - 1847年 (Salt Lake City: Elden Jay Watson, 1971), 150 - 151
4. トーマス・E・チェニー編, *Mormon Songs from the Rocky Mountains* 『ロッキー山脈からのモルモンの歌声』(Salt Lake City: University of Utah Press, 1981), 68
5. エルデン・J・ワトソン 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』44, 131
6. "History of the Church" *Juvenile Instructor* 『教会歴史』『ジュブナイル・インストラクター』1882年10月1日付, 293参照
7. パーリー・P・ブラット編, *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・ブラット自叙伝』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 307
8. ワトソン 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』106
9. ブルックス編 『モルモンの辺境地で』149
10. エライザ・R・スノー "Pioneer Diary of Eliza R. Snow" *Improvement Era* 『エライザ・R・スノーの開拓日記』『インブループメント・エラ』1943年4月号, 208
11. 「恐れず来たれ、聖徒」『賛美歌』17番
12. ブラット 『パーリー・P・ブラット自叙伝』308
13. *Journal History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*, 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会歴史』1846年7月16日, 歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 21
14. ジョン・R・ヤング, *Memoirs of John R. Young, Utah Pioneer* 『ユタの開拓者ジョン・R・ヤングの思い出の記』1847年 (Salt Lake City: Deseret News, 1920), 19
15. ワトソン 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』217。B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 3: 72も参照せよ
16. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1846年6月26日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
17. ワトソン 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』202
18. ワトソン 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』205
19. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1846年4月30日
20. 『日誌で見た教会歴史』1846年9月28日, 5 - 6
21. リチャード・エドモンド・ベネット "Mormons at the Missouri: A History of the Latter-day Saints at Winter Quarters and at Kaneshville, 1846 - 52 - A Study in American Overland Trail Migration" 『ミズーリ州におけるモルモン: 1846 - 52年のウィンタークォーターズとケインズビルにおける末日聖徒の歴史 アメリカにおける陸路の移住の研究』博士論文, ウェイン州立大学, 1984年, 173 - 175参照
22. ワトソン 『手稿ブリガム・ヤングの生涯』464
23. ヒューバート・ハウ・バンクロフト, *History of Utah* 『ユタ州の歴史』(Salt Lake City: Bookcraft, 1964), 246
24. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1846年11月17 - 21日
25. ベネット 『ミズーリ州におけるモルモン』280 - 292



# 西へ向かう開拓者たち

年表 年代	重要な出来事
1846.2.4	東部の聖徒たちがブルックリン号で出航する
1846.7.21	モルモン大隊の行軍が始まる
1846.7.31	ブルックリン号がサンフランシスコ湾に到着する
1846.8	「ミシシッピの聖徒」がコロラドのプエブロに到着する
1846.9 - 11	モルモン大隊の3つのグループが病気のためにコロラドのプエブロへ向かう
1846 - 1847冬	ウィンタークォーターズにおいて先発隊の西部への旅の準備が進められる
1847.1.14	西部への旅に関して、主の言葉と御心がブリガム・ヤングに示される
1847.4.15	先発隊が西部への旅を開始する
1847.7.24	ブリガム・ヤングがソルトレーク盆地に到着する
1847.12.27	アイオワのケインズビルで、新しい大管長会が教会員の支持を受ける

**ウ**ィンタークォーターズとアイオワの荒野にいた末日聖徒たちが、1846年から1847年にかけての冬をじっと待ち、春の重大な旅の計画を立てている間に、すでに西への移動を始めている3つの聖徒のグループがあった。モルモン大隊と、ブルックリン号で出航した合衆国東部出身の教会員、「ミシシッピの聖徒」と呼ばれた小さなグループがそれである。

## モルモン大隊の行軍

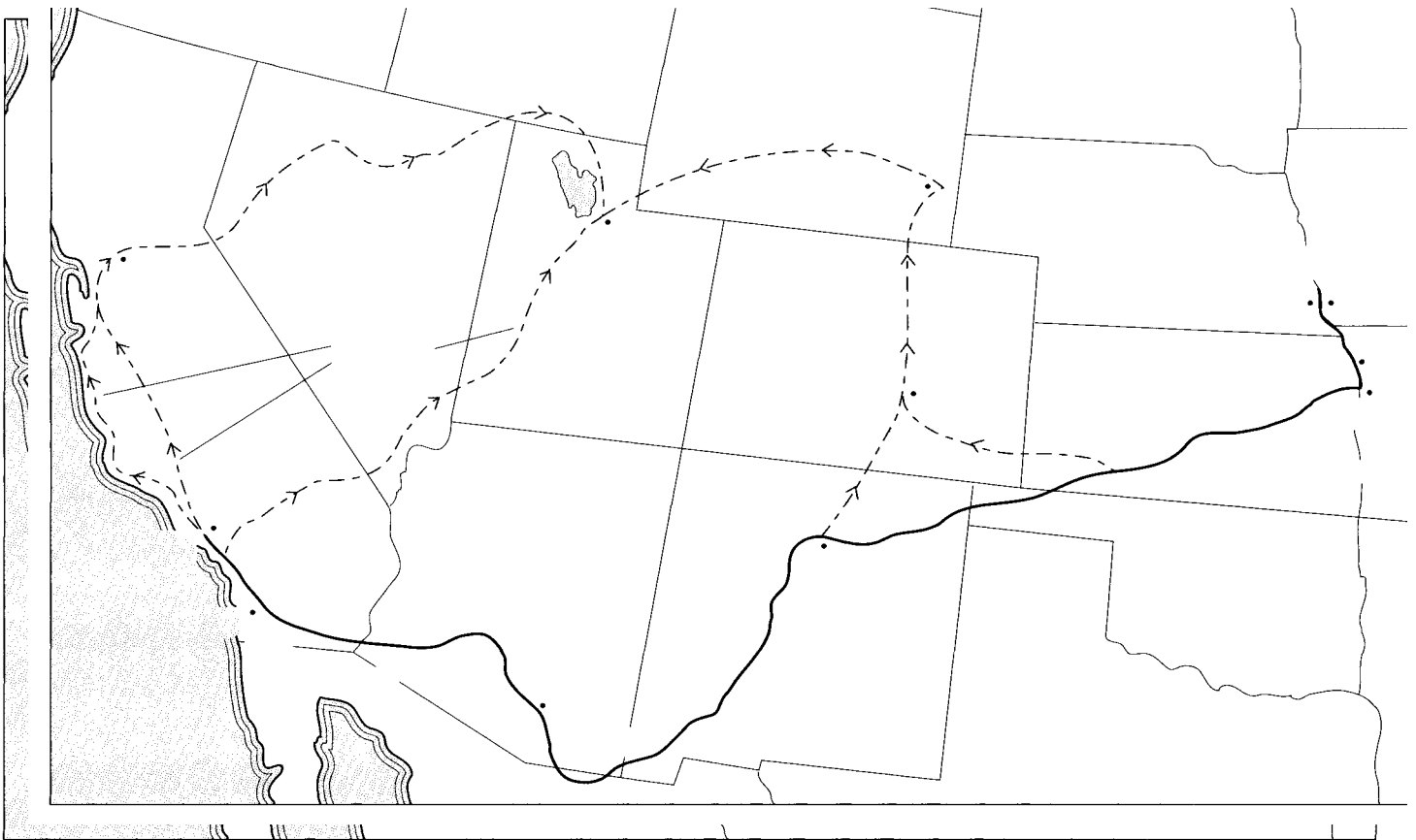
合衆国陸軍のジェームズ・アレン大尉は、モルモンによって編成される5つの隊を徴募の後、中佐に昇進した。アレン中佐の指揮の下に541人の兵士、35人の女性（そのうちの20人は兵士たちの衣服の洗濯係に任命されていた）、42人の子供たちが、1846年7月21日にフォートレブンワースへ向かって行軍を開始した。出発に先立って、教会の指導者によって士官に選ばれていた全員が、十二使徒会の会員たちから個別に面接を受けた。十二使徒たちは彼らに対して、信仰に忠実に生きるなら命を落とすことはないと言った。ウィリアム・ハイド軍曹は、彼らは、「祈ることを忘れず、神の名を尊び、道徳的な清さを厳格に守るように、また、すべての人に愛をもって接し……避け得るかぎり、人の命を取ることがないように」<sup>1</sup>求められたと記録している。

それでも、モルモン大隊の出発は多くの人々を心配させた。妻と二人の小さな子供を年老いた親戚に託して出発したウィリアム軍曹はこう書いている。「妻や子といつ再会できるかは、神のみぞ知ることであった。しかし、わたしたちは不満を言いたいとは思わなかった。」<sup>2</sup>夫がミズーリのクルック川の戦闘で負傷していたドルシラ・ヘンドリックスは、御霊の声によって諭されるまで、長男ウィリアムの入隊を許そうとしなかった。大隊が出発する日の朝、彼女はまたふさぎ込んでいて、隊員の集合を呼びかける太鼓が鳴らされている場所へ、夫と一緒に行くことができなかった。そして牛の乳搾りへ行き、ウィリアムの安全を祈っていたのである。彼女は次のように書いている。「そのとき、その声が……わたしに答えて言った。『祭壇にイサクをささげたアブラハムになされたと同じように、あなたにもなされる。』そのとき自分が乳搾りをしていたかどうか覚えていない。主が自分に語っておられると感じていたからである。」<sup>3</sup>

新兵たちはミズーリ川東岸に沿って230キロ南下し、そこから川を渡り、1846年8月1日にフォートレブンワースに到着した。そこで隊員たちは支給品、銃、その年の被服費として各人42ドルをあてがわれた。このとき、とりでの主計官は、全員が給与台帳に自分で署名できるのを見て驚いている。彼がそれまでに給付をしてきた志願兵で、文字を書けたのは3分の1にすぎなかったからである。隊員の給与の一部は

◀ モルモン大隊の兵士を募るブリガム・ヤング





モルモン大隊のアイオワからカリフォルニアまでの行軍路。病気のために3つのグループがコロラドのプエブロに送られた。彼らは後にワイオミングで先発隊と合流した。

パーリー・P・プラットらによって集められ、教会へ送られた。これらの金は、アイオワや末組織の領地にいた隊員の家族を支えたり、貧しい会員たちのノーブー撤退の援助、イギリス伝道に出たパーリー・P・プラット、ジョン・テラー、オーソン・ハイドへの支援のために用いられた。



ジェファーソン・ハント(1803 - 1879年)とその妻は1834年に福音を受け入れた。ハント兄弟はモルモン大隊のA中隊の隊長となった。彼の二人の息子もモルモン大隊に加わった。後に彼はユタのプロボ、カリフォルニアのサンベルナルディノの入植事業を助けた。ユタのハンツビルは彼の名にちなんだ地名である。

スティーブン・W・カーニー将軍の率いる軍は、ニューメキシコを合衆国領とするために、6月にはすでにサンタフェを攻略していた。モルモン大隊は状況に応じて、カーニー将軍の指揮下に入り、その作戦遂行の一翼を担うことになっていた。大隊はフォートレブンワースに2週間とどまった。酷暑で、多くの兵士が病に、特に熱病にかかったのである。彼らの指揮官アレン大佐は病状がひどく、大隊が行軍を再開したときに、彼らとともに出発できない状態であった。そこで、モルモンの幹部将校ジェファーソン・ハント大尉が暫定的に大隊を指揮することになった。ミズーリ川を出発してから約2週間後に、大隊員たちはアレン大佐の死を知らされた。彼らはそれまでに慈悲の人アレン大佐を慕うようになっていたために、その死を深く悲しんだ。

モルモンの士官たちは、ハント大尉が継続して自分たちの指揮を執ることを望み、ポーク大統領に彼の任官を求める書簡を提出した。しかしそのときすでに、後任の指揮官として、正規軍のA・J・スミス中尉が大隊に向かって旅を進めていた。大隊の歴史記録係ダニエル・タイラーはこう書いている。「スミスの任官は、いまだそのひとりとなり知られていない時期であったが、アレン大佐の死以上に、大隊員たちの気持ちを暗くさせた。」<sup>4</sup>

スミス中尉は、カーニー将軍がカリフォルニアへ向かって出発する前に追いつこ

## 西へ向かう開拓者たち

うとして、サンタフェの行軍の速度を上げた。これが兵士たちの体力をひどく消耗させた。彼らへの随行を許されていた妻子たちにとってはなおさらであった。この強行軍のために、兵士たちはほとんど休息が取れず、疲労し切った者たちは本隊から遅れ、夜の宿営の時間になってようやく追いつくという有様<sup>ありさま</sup>であった。この強行軍に輪をかけて悪かったのが、ミズーリ出身のジョージ・B・サンダーソン軍医の職務遂行ぶりであった。彼はモルモンへの嫌悪感を明言し、1本の汚れたスプーンでカロメルやヒ素を無理やり飲み込ませた。兵士たちは彼に「やぶ医者」「死神博士」と、ぴったりのあだ名を付けていた。植物性の薬品を上手に使うウィリアム・マッキンタイヤという医師が大隊の副軍医として任じられていたが、彼は軍医のサンダーソンの命令によらなければ、苦しむ友人たちを見ても何も手を施すことができなかった。

現カンザス州内アーカンソー川を最後に渡った9月16日に、スミス中尉は、兵士たちの家族の多くを冬に備えてプエブロ（現コロラド州内）のメキシコ人村落まで送り届けるために、ネルソン・ヒギンズとほか10名を派遣した。大隊の兵士たちはこの処置に強く反対した。兵士たちの家族はカリフォルニアまで本隊への随行を許されるという約束があったからである。しかし、前途に待ち受ける困難な旅を考えると、この決定は賢明な選択であることが証明された。1か月後サンタフェにおいて、病気の兵士と、5人を除く女性全員が本隊を離れて、ジェームズ・ブラウンの指揮の下に、先にプエブロに行っていたグループに合流するために送られて行ったのである。そこで大隊員たちは、プエブロで越冬していたジョン・ブラウンと彼が率いるミシシッピの聖徒たちと出会った。

1846年10月9日に、疲れ切った兵士たちが、約6,000人の住民を擁するニューメキシコの中心地サンタフェにようやく到着した。カーニー将軍はすでにカリフォルニアへ出発した後で、サンタフェはミズーリ時代から聖徒たちに対して友好的であったアレクサンダー・ドニファン大佐の指揮下にあった。ドニファンはモルモン大隊の到着をたたえて100発の礼砲を放たせた。サンタフェでスミス中尉はフィリップ・セントジョージ・クック中佐に大隊の指揮権を引き継いだ。大隊の兵士たちは、クック中佐を公明正大で、なおかつ確固たる信念を持つ指揮官として尊敬するようになった。新しい指揮官は、サンタフェからカリフォルニアへの路程の先鞭<sup>せんべん</sup>をつけるようにとの命令を下した。リオグランデ川沿いに進路を南に変えながら、大隊の兵士たちは時々スペイン軍やメキシコ軍に先を越されたこともあったが、全体的に見れば先陣を切って進んでいた。再び病が大隊を襲い、苦しい行軍が始まった。11月10日に、疲労し、衰弱した55人が進路を逆に、プエブロへ向かった。

行軍を続ける350人の士官と兵士を苦しめたのは、食糧と水の不足だけではなかった。砂地の続く進路も絶えず彼らを悩ませた。兵士たちは深い深い砂地にはまった家畜たちに長いロープを付けて引っ張り上げたり、幌馬車の前を2列に並びながら進んで車がうまく進むように地固めをしたりしていた。ツーソンに向かって北へ進路を変えたときに、彼らは野牛の大群に遭遇した。それはスペイン人やメキシコ人の牧場主たちに見捨てられたものであった。その野牛たちは行軍の列に向かって殺到し、身の危険を避けようとする兵士たちを追い立てた。この「戦い」はわずかに数分で終わったが、10頭から15頭の動物が命を落とした。大隊の家畜のうち2頭が角で突



フィリップ・セントジョージ・クック（1809 - 1895年）は14歳のときに、合衆国陸軍士官学校に入学した。彼はその軍務のほとんどを辺境の地で果たし、大平原を数度横断している。彼はサンタフェでモルモン大隊の指揮官としての任務を引き継いだ。スミス中尉の強行軍から解放された隊員たちは、この新任の指揮官を歓迎した。

クックの指揮の下に、健康に問題のある隊員たちがカリフォルニアへの行軍を再開できるようにするため、女性たちと病人がプエブロへ送られた。サンディエゴに到着すると、彼は隊員たちの奮闘を称賛して、大隊の隊員たちは「老練な兵士が持つ欠かすことのできない優れた特質を示した」と語った。

## 時満ちる時代の教会歴史



カリフォルニア北部コロラマにおける公式に認められた最初の金の発見は、1848年1月24日にジョン・サッターの製材所においてなされた。サッター製材所にいた11人の白人男性と一人の女性のうち、少なくとも6人はモルモン大隊を除隊となった教会員であった。この有名な発見について最も広く受け入れられた記録を残したのが大隊の隊員だったヘンリー・ピグラーである。彼はこう書いている。「24日月曜日、今日、金らしき金属が放水路で見つかった。水車場の親方ジェームズ・マーシュアル（マーシャル）が最初に見つけた。」<sup>6</sup>

ブリガム・ヤング大学図書館の厚意により掲載



モルモン大隊退役軍人

1898年に、カリフォルニアにおける金の発見の15周年記念行事に、最初の発見がなされたときにそこにいた4人が出席した。その4人は皆、末日聖徒である。左から、ヘンリー・W・ピグラー、ウィリアム・J・ジョンストン、アザリア・スミス、ジェームズ・S・ブラウン。

き刺されて死に、3人の兵士が負傷した。この出来事は「野牛との戦い」として後々まで伝えられることになったが、大隊が長い行軍の中で経験したたった1度の戦いであった。

大隊はわずかな兵のメキシコ軍守備隊が駐屯していたツーソンをこれといったこともなく通過した。そしてヒラ川沿いに進むカーニー將軍のルートに再び入った。コロラド川の向こうには人跡未踏の砂漠が遠々と百数十キロも続いていた。そこでは深い井戸を掘らないかぎり、水を得ることはできなかった。大隊の兵士たちはそこで深い砂地、日中の酷暑、夜の酷寒に苦しめられた。弱った家畜たちは食肉用とされ、どの部分も余すことなく兵士たちの胃の中に収められた。皮の部分でさえも、煮立てて柔らかくしてから食用としたのである。このころまでに多くの兵士はほとんど素足に近い状態になっていた。熱い砂から足を守るために、牛の皮や古い衣類を巻き付けていた者もいた。砂漠を過ぎ、太平洋岸の地域に近づくと、山岳部の険しい道は、ロープや滑車を使って幌馬車を通さなければならなかった。そして1847年1月29日、大隊は2,030マイル（約3,200キロ）に及ぶ行軍の果てに、ついにミッションサンディエゴに到着し、カーニー將軍に報告した。カーニーは2月にポーク大統領によってカリフォルニアの司政官に任命された。

カリフォルニアはすでに合衆国領となっていたため、大隊の兵士たちはサンディエゴ、サンルイスレイ、ロサンゼルス守備に当たる駐留軍としての任を果たした。その間、カリフォルニア南部において、この聖徒たちは地元の市民たちの間で重んじられるようになった。サンディエゴの聖徒たちは郡庁舎や一般の家屋の建設、れんがの製造、井戸掘りなどに携わり、地域の建設事業に大きな貢献をした。7月16日の志願の兵役期間を終えた大隊員たちは除隊となったが、81名は再入隊し、さらに6か月兵役に就く選択をした。

除隊となった者たちのほとんどは、ソルトレーク盆地の聖徒たちとの合流を目指して東へ行くために、まず北カリフォルニアへ向けて出発した。彼らはその途中、ジェームズ・ブラウン大尉に出会った。彼はオグデンの共同体を創設した開拓者であり、長年にわたり、オグデンのステーキの副会長を務めた人物である。ブラウンは、独身者は1847年から48年にかけて冬をカリフォルニアにとどまって働くようにと求める、ブリガム・ヤングのメッセージを携えていた。該当するほとんどの者がブリガム・ヤングの指示に従った。そして彼らの多くはサクラメント川のサッターのとりででその冬を過ごし、カリフォルニアのゴールドラッシュの幕開けとなる1848年1月の金の発見に一役買ったのである。そして次の夏が来て、彼らはサッターとの契約期間を円満に終え、金の採鉱地を後にして、ソルトレーク・シティーやミズーリ川方面にいた家族のもとへ行った。

## ブルックリン号の聖徒たち

西海岸地域に最初に到達した末日聖徒のグループは、モルモン大隊ではなかった。初めて西海岸へ到達したのは、奇しくも聖徒たちのノーブー脱出が始まったと同じ1846年2月4日に、ブルックリン号でニューヨークを出港した聖徒たちの一団であった。1845年の8月に教会の指導者たちは、南太平洋の聖徒や南米最南端経由でイギリスから移住して来る聖徒たちのために、カリフォルニアに中継地点を作る必要があ

## 西へ向かう開拓者たち

ブルックリン号は1834年にメイン州ニューキャッスルで建造された全装備帆船。445トン、全長125フィート（約38メートル）、全幅28フィート（8.5メートル）、喫水13フィート（4メートル）。船長のアベル・W・リチャードソンは、この船の共同所有者の一人であった。

サミュエル・ブラナンが率いる238名の末日聖徒を乗せたこの船には、800人分の様々な道具類、新聞『預言者』を刷った印刷機、大量の教科書、6か月から7か月分の食糧なども積み込まれていた。ブルックリン号が出航した1846年2月4日に、時を同じくして、聖徒たちのノーブー脱出が始まった。



ると判断していた。プリガム・ヤングは、若くて精力的なサミュエル・ブラナンをサンフランシスコ湾地域の教会の代理人にしようと考えていたようである。ニューヨークで教会の新聞『預言者』（*Prophet*）を発行していたブラナンは、1845年の9月に、用船契約を結び、聖徒たちを指導するようにとの任を授けられた。

1845年の10月から12月にかけて、サミュエル・ブラナンとパーリー・P・プラットは東部各地の支部を訪ね、1月中ごろに船で西部へ向かうグループとして男性70人、女性68人、そして100人の子供たちを集めた。彼らはおもに農夫や職人で、西海岸で新たな入植地の建設に必要なあらゆる道具類を携えた。彼らはまたかなりの量の教科書、そして新聞『預言者』の発行に用いた印刷機も運んだ。ブラナンは月に食糧を含めて大人一人75ドル、子供はその半額で用船契約を結んだ。「ブルックリン号の聖徒」として知られる彼らは、教会の最終的な目的地の選択と確立を助けたいとの希望を抱いて、カリフォルニアへ向けて出航した。

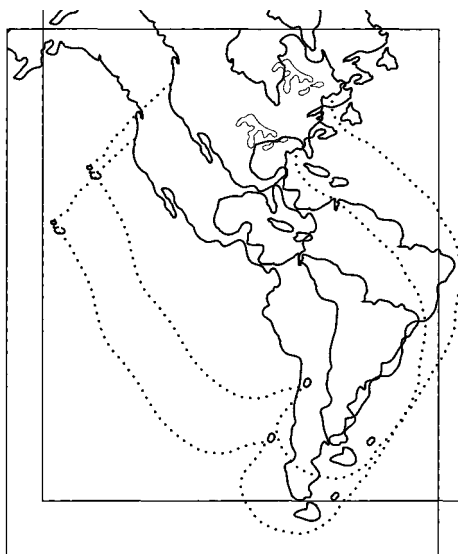
ブルックリン号の航海は、大西洋と太平洋で1度ずつ遭遇した激しい嵐のときを除けば、比較的穏やかなものであった。彼らの船旅は、21箇条の規則によって各自の行動が取り仕切られていた。起床は6時で「上着を着、カラーを付けた、きちんとした服装でなければ、それぞれの船室から出ることは禁じられていた。」船室の掃除は7時まで済ませ、点検と換気を毎日行った。朝食は8時半（子供が先）、夕食が3時から5時、そして夜の8時に「冷えた食事」が出た。病人の世話、グループのための食事の準備などについても規則が定められた。日曜日の午前中には礼拝行事が行われ、「健康な者はすべて、ひげをそり、体をきれいにし、神聖な行事にふさわしい身



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

サミュエル・ブラナン（1819 - 1889年）は、カリフォルニアから東進してソルトレーク盆地へ入ったが、プリガム・ヤングに、さらにカリフォルニアまで旅を続けるように説得することはできなかった。ブラナンは感情を害し、西海岸へ戻った。彼はカリフォルニアでは、政治家、土地投機家、新聞社主として名を上げた。しかし、この世を去る時が近づいたころには、カリフォルニアのわが景気がつかんだ富は泡のように消えていた。

## 時満ちる時代の教会歴史



ブルックリン号の進路。ケープホーンを過ぎた後に、聖徒たちを乗せたブルックリン号は嵐のために東へ500マイル（約800キロ）押しやられ、1846年5月4日にファンフェルナンデス島（ロビンソン・クルーソーの島）に寄港した。ここで聖徒たちは新鮮な水、果物、野菜を調達した。5日後には、サンドイッチ（現ハワイ）諸島へ向けて出帆し、6月20日に到着した。そしてブルックリン号は1846年7月末にヤーバブエーナ（現サンフランシスコ）に到着した。ニューヨークから5か月以上の船旅であった。



「ミシシッピの聖徒たち」をコロラドのプエブロまで連れて来た後、ジョン・ブラウン（1820 - 1897年）は1870年ごろまで、聖徒たちの移住を熱心に助けた。彼はまた29年にわたって、ユタのプレザントグループワードの監督を務めた。様々な公職にも就き、20年間プレザントグループの町長の任にあった。

繕いをして、これに出席するよう求められた。『ブルックリン号はケープホーンを経由して、ダニエル・デフォーの作品『ロビンソン・クルーソー』で有名なファンフェルナンデス島に寄港した。またサンドイッチ諸島（現ハワイ諸島）にも10日間寄港した。航海中に二人の子供が生まれ、出生時にブルックリン号がいた海の名にちなんでそれぞれアトランティック（大西洋）、パシフィック（太平洋）と命名された。また航海中に10人の乗客が亡くなった。

1846年7月31日にブルックリン号がサンフランシスコ湾に到着したとき、カリフォルニアに合衆国旗を掲げる最初のアメリカ人になりたいと望んでいたブランは、メキシコの税関として使われていた建物の上すでに自国の国旗がはためいているのを見て期待を裏切られた。ブルックリン号の聖徒たちの中には、海岸に近い所で仕事を探す者もいたが、多くの者はもっと内陸部へ行き、ニューホープが西部における聖徒たちの中心地になることを夢見ていた。1847年1月には、ブランはすでにカリフォルニアにおける2番目の英字新聞『カリフォルニアスター』（*California Star*）を発行していた。ブルックリン号の聖徒たちのほとんどは、教会がグレートベースンに入植していることを知らず、ブランの指示に進んで従った。

1847年4月に、サミュエル・ブランは教会の主体がある東へ向かい、その地の聖徒たちをカリフォルニアへ導くという申し出をしようとした。彼は7月にグリーン川（現ワイオミング州内）でブリガム・ヤングと開拓者たちに会った。その結果、トーマス・S・ウィリアムズとサミュエル・ブランが、大隊員とミシシッピ隊をソルトレーク盆地に導くために派遣された。この二つのグループは前にプエブロで冬を過ごし、その当時は、ソルトレーク・シティーへ向かっている途中であった。ブリガム・ヤングや聖徒たちとソルトレーク盆地で数日を過ごした後、ブランは、教会の用件を処理するために、モルモン大隊のジェームズ・ブラウン大尉とともにカリフォルニアへ戻った。西海岸に教会本部を置くことはしないというブリガム・ヤングの決定に失望したブランは、間もなく背教した。ブルックリン号の聖徒の中にも一部、彼に従う者がいた。ブランはカリフォルニアのゴールドラッシュを大々的に宣伝し、この地域で最初の富豪となった。しかし愚かな投資によって財産を失い、貧困のうちにこの世を去った。

### プエブロの聖徒たち

先に見てきたように、1846年から47年にかけての冬に、約275名の末日聖徒が、ミズーリ川の聖徒の主体から西へはるかに離れたプエブロにしっかりとした共同体を作っていた。この共同体は、病気が理由でモルモン大隊から別れた3つのグループと、すでに8月にプエブロに来ていた約60名の「ミシシッピの聖徒」から成っていた。

この南部の教会員たちは、ジョン・ブラウンの指導下にあった。彼は1845年にミシシッピからノーブーに移って来た人物である。そして1846年の1月に、ブリガム・ヤングから、南部の同胞の聖徒たちのもとへ戻り、西部への移住に加わるよう彼らを説得する任を与えられた。ブラウンは43人の聖徒を、1,000キロ以上離れたミズーリ州インディペンデンスまで導き、そこでさらに加わった14人を迎え入れた。そして、ブリガム・ヤングが率いる聖徒たちの主体に追いつくためにオレゴントレイルを西へ進んだ。しかし7月にはネブラスカ西部のチムニーロックまで来たが、先を行

## 西へ向かう開拓者たち

く聖徒たちの姿はまだ見えなかった。カリフォルニアから戻るわな猟師たちの話によると、その先にモルモンはいないということであった。ブリガム・ヤングがミズーリにウィンタークォーターズを建設する決定をしていたことを知らなかった彼らは、フォートララミーへ進むことにした。一行はフォートララミーでジョン・リチャードという人物に会った。彼はわな猟師で、ブラウンたちの一行にプエブロにある自分の交易所の近くで冬越しをするように勧めた。その後、プエブロに移った彼らのもとに、ブリガム・ヤングがウィンタークォーターズにとどまっているという知らせが届いた。

プエブロでの生活は比較的落ち着いたものであった。ミシシッピの聖徒たちは鹿猟のほかにかぶ、かぼちゃ、豆、メロンの栽培をし、毛皮猟師たちのために働いて、とうもろこしでその支払いを受けた。また新たにやって来た大隊員たちと力を合わせて、教会兼用の学校を建てた。大隊員たちはいつもの軍事教練を続け、ダンスパーティーがよく行われた。この冬の間7人の子供が誕生したが、9人の死亡者も出た。

春になって、ブリガム・ヤングがプエブロの聖徒たちに手紙をよこし、開拓者の本隊はグレートソルトレークに近いグレートベースンに向かうという計画を知らせた。プエブロからの先発隊が北へ進んでフォートララミーへ行き、そこでブリガム・ヤングと開拓者たちに会った。ヤング大管長は、プエブロの残りの聖徒たちをソルトレーク盆地に導くためにアマサ・ライマン長老たちを派遣した。ヤング大管長たちは先発隊のわずか5日後にソルトレーク盆地へ到着していた。

## ウィンタークォーターズ——開拓者たちの備えの地

1846年から47年にかけての冬、モルモン大隊は人跡未踏の砂漠を進み、ブルックリン号の聖徒たちは航海を終え、サンフランシスコ湾に上陸し、プエブロの聖徒たちは春の到来を待っていた。そのころ、ネブラスカのウィンタークォーターズの聖徒たちは、ロッキー山脈を目指す西への旅の準備に慌ただしくしていた。

西部への旅の計画は、1846年の秋の間に立てられていた。比較的小規模の隊が平原を先に進み、後続の大人数の隊のために道を切り開くということが決められた。しかしこの小規模な企てを行うにしても、かなりの準備が必要であった。幌馬車が作られて必要な装備が整えられた。また1,000マイル（約1,600キロ）に及ぶ過酷な旅に耐えられる牛馬や食糧その他の物資が集められた。そして後に残る者たちの暮らしと安全のための手立てがなされた。

同様に重要なのは、西部の広大な未知の地域に関する情報を得ることであった。教会の指導者たちは11月と12月に、ウィンタークォーターズの西へ向かう道について、ピーター・サーピーなど、地元の商人やわな猟師たちの話を聞いたほかに、最近までロッキー山中にいた経験のある4人の人物の意見も聞いた。オレゴンのインディアンの中で伝道をしていたカトリックの神父ピエール・ジャン・ド・スメットが、山岳地帯での5年の生活を終え、セントルイスに向かう途中、キャンプに到着した。彼はグレートソルトレークを訪れた数少ない白人の一人であった。この好機を捕らえて、教会の指導者たちは、事細かに質問をした。それから5日後には、アメリカ毛皮会社の二人の商人からロッキー西部地域について詳細な情報を得、居住に最適な地域の地図を作成した。後にはオマハインディアンとの通訳であったローガン・フ

## 時満ちる時代の教会歴史

オンテネルが、西部への道と山岳部における入植に最適な地域を詳細に話している。

教会の指導者の一人ジョージ・ミラーは、ルートの選択と入植計画についてブリガム・ヤングと論じ合った。しかし、頑固な彼は、教会の中で十二使徒たちが最終的な決定権を持っていることに同意できず、ネブラスカ北部ニオブララ川のポンカインディアンの地に住むために、小人数の聖徒を連れて出て行った。教会指導者間のこのような考えの相違が危険であると考え、ヤング会長は、ミラーと彼に従った者たちにどう対処すべきかについて主の御心を尋ねた。1847年1月11日、ブリガム・ヤングは前日に見た一つの夢のことを話した。その夢の中で、彼は隊の編成をどうするのがいちばん良いかについて、ジョセフ・スミスと話し合ったのである。その3日後にブリガム・ヤングは教会員に対して「西部に向かって旅をしているイスラエルの陣営に関する主の言葉と御心」を発表した（教義と聖約136：1）。

神権定員会の集まりにおいて、教会への啓示として受け入れられたこの文書は、西部への移住の旅をする聖徒たちの行動規範となった。この啓示の中で、移住の旅は「十二使徒会の指示の下に」（3節）行われると定められ、聖徒たちは「主なるわたしたちの神のすべての戒めと掟おきてを守るという聖約と約束」（2節）をするように求められた。それには、移住の旅への備えや、貧しい者、やもめ、父のいない子供、モルモン大隊の家族の世話などについて、数多くの実際的な指示も含まれていた。一人一人が「自分の影響力と財産をすべて使って、主がシオンのステーキを設ける場所にこの民を移すように」（10節）求められた。また聖徒たちは、互いに争うことをやめ、自分たちの中にある罪悪をなくすように命じられた。

各宿営所に代表が赴き、この啓示を読み、先発隊またそれに続いて年内に出発する隊に入るようブリガム・ヤングから望まれた者たちの名前を発表した。教会の指導者たちは、春の間中、何度も数多くの隊との集会かんがひを持ち、当面のルート選定、渡し船の建造、旅の手順、作物の植付け、灌漑かんがいなどに関する情報を与えた。

最初の計画では、イスラエルの十二の部族にそれぞれに12名ずつというように、先発隊として144人を厳選することになっていたが、最終的には143名（南部の教会員の使用人3名を含む）の男性と、3名の女性（ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ロレンゾ・ダウ・ヤングの妻）、2名の子供の編成となった。全体的に見て、彼らは先駆けとして必要な様々な才能や技術を持ち合わせていた。機械工、牛馬の御者、狩猟、辺境地の生活体験者、大工、船員、兵士、会計士、れんが職人、かじ職人、土木技師など、多彩な顔ぶれであった。隊の中の8人は使徒で、シオンの陣営に加わった者も数名いた。先発隊は、ボート、大砲、7両の幌馬車と自家用馬車を装備し、93頭の馬、52頭のラバ、66頭の雄牛、19頭の雌牛、17匹の犬、何羽かの鶏を連れていた。

### 先発隊の旅

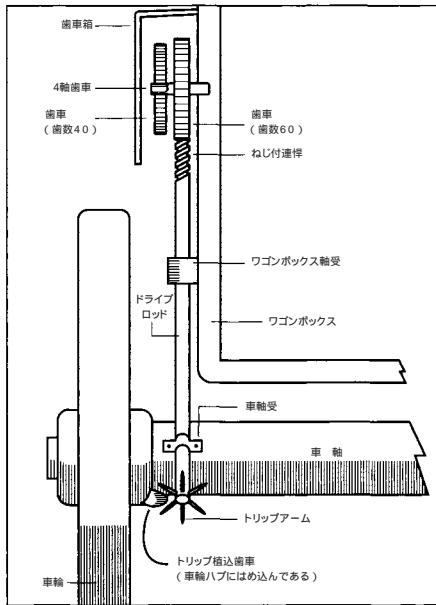
先発隊の一部は1847年4月5日にウィンタークォーターズを出発したが、総大会やパーリー・P・ブラット、ジョン・テーラーのイギリスからの帰国によって生じた遅れのため、当初の数日間、旅はほとんど進まなかった。この二人の使徒の到着は祝福をもたらした。彼らはイギリスの聖徒たちからの献金、また緯度、高度、温度、気圧などを測定する科学的な計器類を持ち帰ったのである。この二人とともにイギ



先発隊の3人の女性 ロレンゾ・D・ヤングの妻ハリエット・ウィーラー・ヤング、ブリガム・ヤング会長の妻クララ・デッカー・ヤング、ヒーバー・C・キンボールの妻エレン・サンダース・キンボール。

## 西へ向かう開拓者たち

ノーマン・E・ライト氏の厚意により掲載



1847年5月16日、進んだ道のりを計るために幌馬車の回転数をひたすら数える退屈な仕事から歴史記録係のウィリアム・クレイトンを解放するために、カウンシルブラッフとフォートララミーの中ほどの地点で、この有名な距離測定計が取り付けられた。この測定計は10マイル（約16キロ）まで測定すると、また次の10マイルまでを測定するという方式であった。

ウィンタークォーターズへ戻る旅のときには、最高1,000マイル（約1,600キロ）まで測定できる新しい測定計が作られ、ウィリアム・クレイトンはソルトレーク盆地からウィンタークォーターズまでの全行程を首尾よく測定することができた。

1847年の先発隊は、現在のネブラスカ州オマハに近いウィンタークォーターズからソルトレーク盆地まで1,100マイル（約1,760キロ）の行程を進んだ。先発隊はまず川幅が広く、ゆるやかな流れのプラット川流域を600マイル（960キロ）ほど進み、6月1日にワイオミングのフォートララミーに到着した。そこからプラット川南岸に渡ってオレゴントレイルに入り、さらに400マイル以上（約640キロ）行くとフォートブリッジャーであった。

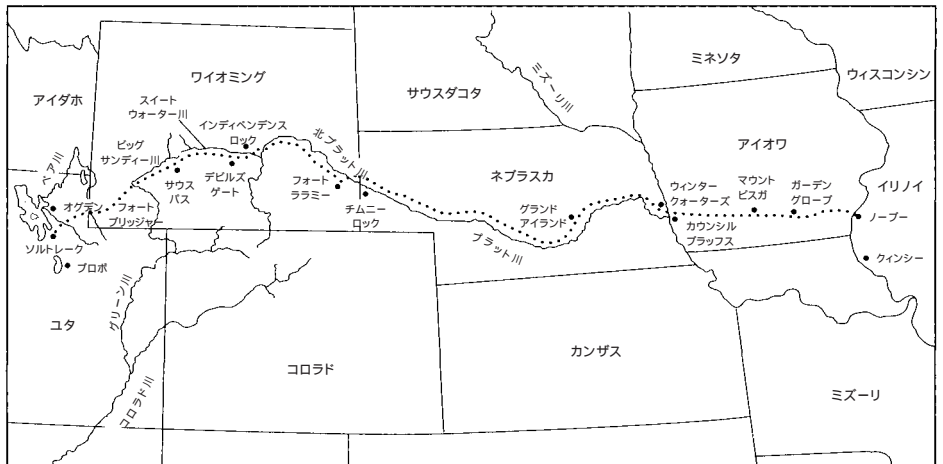
ワイオミングのインディペンデンスロックをさらに西へ進むと、サウスパスで大陸の分水界を越えた。そこから南西某地点で、先発隊はジム・ブリッジャーと出会った。そして7月7日には、フォートブリッジャーに到着した。彼らはそこからさらに南下し、リード・ドナー隊が通過したルートを進み、ソルトレーク盆地へ入ったのである。

全行程の中でも最も険しいこの最後の部分において、プリガム・ヤングは高山病にかかり、隊は先導隊、本隊、そしてプリガム・ヤングのいる後衛隊の3つのグループに分かれた。

リスに渡ったオーソン・ハイドも5月中旬に帰還した。この3人はまだ旅装が整っていなかったために、ウィンタークォーターズにとどまった。プラット長老とテラー長老は、春も遅くなってから、ほかの隊とともに出発し、ハイド長老はまだミズーリ川方面に残っていた聖徒たちの指導に当たった。

結局、先発隊が1,000マイル（約1600キロ）に及ぶ旅を始めたのは、4月16日であった。出発してから2日後に、プリガム・ヤングは、インディアンの攻撃に遭遇したときのことを考え、隊を軍隊式の編成にした。隊の正式な歴史記録係だったウィリアム・クレイトンは、後続する聖徒たちのために正確な里程を記録した。最初の数日間、このきちようめんな記録係は毎日進んだ距離数を算出するために幌馬車の回転数を数えていたが、間もなく、距離測定車の使用を提案した。科学的な思考の得意なオーソン・プラットがその測定器の設計をし、熟練した木工職人アップルトン・ハーモンが実際にそれを製作した。

先発隊はできるかぎり、既存の道を選んで進んだ。ウィンタークォーターズとソルトレーク盆地の間では、道路を新たに切り開くことはほとんどなかった。ネブラスカでは、プラット川南岸沿いにオレゴントレイルが走っていた。モルモントレイルはワイオミングのフォートララミーまではオレゴントレイルと平行して走っていたが、プラット川の北側を進むルートを取っていた。それは聖徒たちが家畜のためにオレゴントレイルよりも良いえさ場を求め、オレゴンへ向かう移住者たちとの衝突を避けたいと望んだ結果であった。さらにモルモントレイルは、フォートララミーからフォートブリッジャーまではワイオミングを通過した。プラット川北岸の険しい断崖のために、聖徒たちはフォートララミーで渡河し、オレゴントレイルを640キロ進まざるを得なかった。オレゴントレイルは、フォートブリッジャーで太平洋岸地域に向けて北に方角を変えた。そしてモルモントレイルの最後は、リード一家とドナー一家の隊も通った、ロッキー山中をソルトレーク盆地に抜けるルートであった。



5月26日に先発隊は、旅人たちの目を引きつけるワイオミングのチムニーロック（煙突岩）を通過した。移住する聖徒たちは、そこを全行程の中間地点と考えていた。模擬裁判や票決、ギャンブル、トランプ遊びに興じる一部の隊員のふまじめさや不敬な態度に対して、プリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールが懸念を示したのは、このチムニーロックの近くの地点においてであった。この二人の使徒はある晩



## 時満ちる時代の教会歴史



チムニーロックは西部への移住者たちにとって最も有名な自然の陸標であった。ネブラスカ西部を進む開拓者たちは、何日にもわたってこの光景を見続けた。開拓者たちはこの近くでインディアンのスー族と遭遇した。平原インディアンとの最初の出会いであった。

遅く、御霊に動かされ、隊員たちに悔い改めを求めることについて話し合った。そして翌日、ブリガム・ヤングが隊員たちに簡潔な内容の話をした。

ウィリアム・クレイトンはそのときのブリガム・ヤングの言葉を次のように記録している。「わたしに祈りの人、<sup>めいそう</sup>瞑想の人、分別を備えた人を与えてください。今のこのような状態のこの隊に自分自身をゆだねるよりは、6人でも8人でもいいからそのような祈り、信仰、瞑想の人々と一緒に未開人の中に入って行った方がはるかに良いと思います。……皆さんは、粗野で、卑しく、下劣で軽薄、強欲で、邪悪な思いを心に宿した状態で、王国を築き、もろもろの国民を招き入れるための聖徒の家、安息の場所、平安の場所を見つけることができるでも考えているのでしょうか。それは無駄なことです。」そして最後に、ブリガム・ヤングは悔い改めを叫んだ。「もし彼ら〔兄弟たち〕に、罪を捨てて主に立ち返り、主に仕え、神の御名を尊ぶという聖約を立てる気持ちがないなら、自分の幌馬車でもと来た道を戻ってください。わたしはこのような状態のまま、これ以上先へ進もうとは思いません。悔い改めて、罪を捨てなければ、わたしたちはこれまで以上に妨げを受け、ひどい嵐に見舞われることでしょう。」<sup>8</sup>

翌日の日曜日、ブリガム・ヤングは指導者たちを集めて、特別集会を開いた。彼らは神殿衣に身を包んで、断崖の上に行き、祈りの輪を作った。ウィリアム・クレイトンによると、彼らは「自分たち、またこの隊と隊に関係するすべての人、軍籍にある兄弟たち、わたしたちの家族、すべての聖徒たちのために神に祈りをささげた。」<sup>9</sup>その後、隊の中には前よりも神聖な雰囲気<sup>10</sup>が占めるようになった。

フォートララミーで隊は修理のために足を休め、ブリガム・ヤングの46歳の誕生日を祝った。そしてこの日、プエブロの聖徒たちの一部が隊に合流した。プラット川（現ワイオミング州キャスパー）の最後の渡河の際に、開拓者たちは「密輸監視艇」と呼ばれた船を用いて、物資を運んだ。そして幌馬車の運搬のためには、いかだ船を作った。オレゴンを目指す幾人かが、ここを渡るために幌馬車1両につき1ドル50セントを支払った。ブリガム・ヤングはこのことを、必要な資金を稼ぐのに良い機会と見て取り、この渡し船を続けるために9人をここに残した。そして本隊はサウスパスを通過して、グリーン川をいかだで渡り、7月の早くにフォートブリッジャーに到着した。

先発隊は西への旅を続ける中で、モーゼズ・ハリス、ジム・ブリッジャー、マイルズ・グッドイヤーなど数多くの山男と出会った。ハリスとブリッジャーは、ソルトレーク盆地での農耕は困難だという考えを述べた。グッドイヤーは、農業を成功させることに非常に熱心で、聖徒たちに自分が住んでいたウェーバー盆地への入植を勧めた。

フォートブリッジャーを過ぎてからの山越えの旅はなおいっそう困難なものになった。ソルトレーク盆地に着くまでに、隊は3つのグループに分かれていた。高山病で体調を崩したブリガム・ヤングは本隊から遅れていた。7月13日以降は、オーソン・プラットの指揮する第3隊が先行し、進路の計画を立て、エミグレーションキャニオンと呼ばれるようになった地域に幌馬車が通れる道を切り開くことになった。7月21日に、オーソン・プラットとエラスタス・スノーが最初にソルトレーク盆地をかいま見、喜びの声を上げた。盆地までさらに12マイル（20キロ弱）の距離を進ん

## 西へ向かう開拓者たち



もう一つの有名な陸標インディペンデンスロックは、ワイオミングのスウィートウォーター川沿いを96マイル(約150キロ)進むルートの始まりを示していた。開拓者の時代から今日に至るまでの移住者たちが岩に刻んだ落書きが現在も残っている。

でから、二人は隊へ戻った。

この隊の先遣グループがソルトレーク盆地へ入ったのは1847年7月22日のことであった。彼らはその後すぐに、大地を潤し、耕作の準備をするために簡単な灌漑システムを作り始めた。7月24日にブリガム・ヤングと後続の隊員たちが、現在のエミグレーションキャニオンからソルトレーク盆地を見渡す地点に到着した。ヤング会長を乗せた馬車をウィルフォード・ウッドラフが御していた。彼らは盆地を見渡しなが、将来に目を向けていた。ウィルフォード・ウッドラフは次のように記録している。「長い年月を経ずに、山々の頂に神の宮がそびえ、シオンの住民によってこの盆地が果樹園、ぶどう畑、菜園、農地に変えられ、諸国民をそこへ集合させるための旗がはためくさまを思ったときに、静かな歓喜の情がわたしたちの胸中を走った。」ブリガム・ヤングは「聖徒たちの安息の地」である盆地の様子を見て満足し、「自分の旅が十分に報いられた」<sup>10</sup>と感じた。

後に、ウィルフォード・ウッドラフは、エミグレーションキャニオンから出て来たときに、ヤング会長が盆地の全容を見渡すことができるように、馬車の向きを変えたと説明している。「彼はわたしたちの前に横たわる光景をじっと見詰めながら、数分間示現に心を奪われていた。彼は前にも示現でこの盆地を見ていたが、このときには、これらの山々に囲まれた盆地に打ち建てられる将来のシオンとイスラエルの栄光をあるがままに見たのであった。示現が閉じると、彼は言った。『結構です。まさにこの地です。さあ、行きましょう。』」<sup>11</sup>

## 盆地における入植地の確立

7月25日日曜日は、神への礼拝と感謝の日であった。十二使徒会の会員たちが、午前と午後の集会において、勤勉に働くことと高潔な行いの大切さについて話をした。盆地における最初の数日は、入植に最適の地を見つけるために北から南の地まで調査が行われた。市の区域をどこにするかについてのブリガム・ヤングの判断は、7月28日までには固まった。彼はシティークリークの2本の流れの間に、神殿を建てる場所を決めた。市街地は、そこを中心にして東西南北に道路を走らせ、各ブロックは四角形となるように決められた。

最初の何週間かは、なすべきことが山のようにあった。1週間以内に、その地域の測量が始まり、耕作に従事しない者たちは、インディアンや野生の動物から守る仮のとりでを作るため、れんが作りの仕事を行った。10月にソルトレーク盆地に到着していた「ミシシッピの聖徒」とモルモン大隊の兵士たちは、神殿の建つブロックの中に仮設の集会場を作った。ソルトレーク盆地で最初に生まれたのはエリザベス・スチールという女の子で、8月9日にモルモン大隊員の家族の子供として誕生した。その2日後に、聖徒たちはミシシッピから来た夫婦の子供の死を悼んだ。ミルトン・スレルキルというその3歳の男の子は、キャンプから迷い出て、シティークリークで水死したのであった。

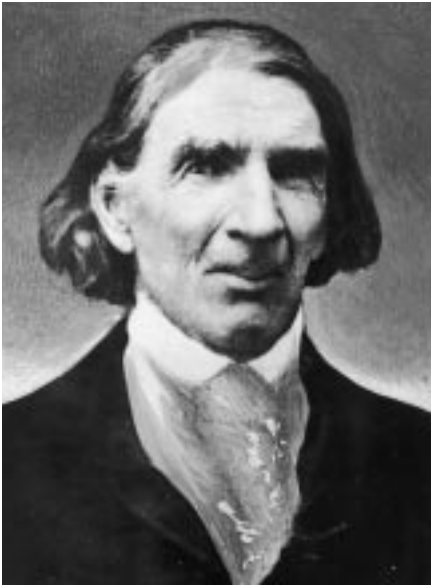
周辺地域の調査も行われた。ブリガム・ヤングと十二使徒たちは北側にまるで山のようにそびえる高台に登り、そこでシオンについて預言し、イザヤの次の預言にちなんで、その地をエンサインピーク(「旗の頂」の意)と名付けた。「主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め……。」(イザヤ11:12) 近

## 時満ちる時代の教会歴史

隣の盆地を探検するための調査隊も派遣された。また聖徒たちは、西側のグレートソルトレークでの水遊びや市の北側の硫黄温泉の楽しみを発見した。

ブリガム・ヤング、十二使徒、先発隊の隊員のほとんどが、1847年にソルトレーク盆地で過ごしたのはわずかに33日だけであった。8月16日に彼らは自分たちの家族を翌年のソルトレーク盆地までの旅に備えさせるために、ウィンタークォーターズまで戻ったのである。途中彼らは、すでにソルトレーク盆地へ向かっていた1,553名の聖徒たちに出会った。東へ戻る今回は、途中の地勢にも慣れ、幌馬車も荷物も少なくしていたために、前よりもかなり早く旅が進んだ。大きな出来事といえば、多くの貴重な馬をインディアンに奪われたことと、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールがハイイログマに追いかけられたことだった。

一方、盆地に到着した聖徒たちは、現在のソルトレークの開拓者公園の敷地に当たる「オールドフォート」に腰を落ち着け、冬への備えをした。ブリガム・ヤングは盆地を出発する前に、後続の隊の中にいたジョン・スミスを、新しく組織したソルトレークステークの管理者に任じていた。スミス会長は9月に盆地に到着すると、チャールズ・C・リッチとジョン・ヤングを副会長として選び、高等評議会を組織した。1年前にウィンタークォーターズで作られた高等評議会と同様、この組織は盆地の共同体の霊的な指導者、市民生活の指導者としての役割を果たした。これは1849年1月に至るまで、ユタに存在した唯一の行政機関であった。



ジョン・スミス(1781 - 1854年) ジョセフ・スミス・シニアの弟。1849年1月1日に、ブリガム・ヤングによって教会の管理祝福師の職に聖任された。

## 大管長会の再組織

ブリガム・ヤングとその同行者たちが、ウィンタークォーターズに到着し、家族との再会を祝ったのは、1847年10月31日の日没直前のことであった。そこへ来るまでの途中、ブリガム・ヤングは十二使徒定員会の会員たちと、大管長会の再組織の可能性について話し合いを持っていた。彼は御霊の促しがあることを強調したが、すべての幹部がすぐに賛意を示したわけではなかった。そのような前例がなかったために、彼らはその時点で大管長会の再組織を行うことが適切かどうか、確信が持てなかったのである。

十二使徒定員会が教会を管理していた3年の間に、重大な課題が幾つも成し遂げられた。彼らが成し遂げたことには、ノーブー神殿の完成と奉獻、多くの忠実な聖徒たちへの神殿のエンダウメントの授与、ノーブーからの撤退、イギリスへの伝道とその地の管理、モルモン大隊の編成、アイオワにおける幾つかの入植地建設、ウィンタークォーターズ入植事業の管理、西部定住地への道の開削などがある。これらのほとんどは、殉教前のジョセフ・スミスに明らかにされたことであり、十二使徒会がすばらしい形で完成させたのである。次に残された課題は、十二使徒会がそのまま教会の管理定員会としてとどまるか、それとも新たに大管長会を組織すべきかということであった。これはいずれかに決しなければならない問題であった。

ブリガム・ヤングはウィンタークォーターズに到着後、引き続き同僚たちと集会を持ち、この問題について話し合った。11月30日に彼は「教会の大管長会として3人の十二使徒を任命する案件」を提議し、そうなればほかの使徒たちが自由になり、「地の諸国民に福音を宣べ伝える」<sup>12</sup>ことができるようになることを示唆した。その提議は、伝道を十二使徒の主たる召しとして指し示した以前の数々の啓示とも一致し

## 西へ向かう開拓者たち

ていた（教義と聖約107：23；112：1，16，19，28参照）。

1847年に開拓者たちが西へ旅していたころ、アイオワにより恒久的で大規模な入植地が建設され、聖徒たちの味方となってくれたトーマス・L・ケインを記念してケインズビルと名付けられた。衛生上の問題と、土地や建物などをどれほど改善したとしても2年後にはインディアンの土地を去ると聖徒たちが約束していたこともあり、ミズーリ川西岸の地域は放棄していた。ブリガム・ヤングたちが戻って来たころには、聖徒たちの多くは、オーソン・ハイドが管理していたケインズビルやアイオワのほかの入植地への移住をすでに終えていたか、その途次にあった。1847年12月5日、ヤング会長はケインズビルのハイドの家で十二使徒定員会の会合を持った。ヤング会長は、大管長会の件が自分の心の大きな重荷となっていること、また主の御霊がこの問題について強く働きかけていることを話した。そして出席した9人の定員会会員に（パーリー・P・プラットとジョン・テラーはソルトレーク盆地にとどまり、ライマン・ワイトはテキサスにいた）年齢の大きい順にその件について思うところを自由に述べるように求めた。<sup>13</sup>

この話し合いの後に、オーソン・ハイドが末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長としてブリガム・ヤングを支持すること、さらに彼が2名の副管長を指名し、その3人をもって新しい大管長会を組織することを動議として提出した。続けてウィルフォード・ウッドラフがその動議に対する賛意を表明し、全員一致で承認された。その後、ブリガム・ヤングがヒーバー・C・キンボールとウィラード・リチャーズを副管長として指名した。そして2名の副管長も全員一致で承認された。

3週間後に、突貫工事でケインズビルに建てられていた丸太造りの大きなタバナクルで総大会が開かれた。12月24日から26日にかけての喜びに満ちた大会の中で、新しい大管長会が発表されるとの期待が高まった。そして1847年12月27日月曜日、1,000人の会員がタバナクルに集い、大管長会、十二使徒定員会、七十人、大祝福師を含む教会の完全な組織の必要性を説くブリガム・ヤングの説明に耳を傾けた。続いて、オーソン・プラットが新しい大管長としてブリガム・ヤングの名を提議し、聖徒たちは喜んで彼に対する賛意を表明した。次に、ヤング大管長が副管長の名を提議し、同様に支持を受けた。最後に、組織されて間もないソルトレークステークの会長ジョン・スミス（預言者ジョセフ・スミスのおじ）が新しい大祝福師としての支持を受けた。これらの教会役員は、1848年10月14日に、ソルトレーク盆地において再び支持を受けた。<sup>14</sup>

末日聖徒の第一陣がソルトレーク盆地に到着したことは重大なことであったが、1847年に起こった出来事で最も意義深いものは、教会が管理指導する最上位の権能が、十二使徒定員会から新しい大管長会に円滑に移行したことであった。大管長の職の継承に関しては、これによって先例が示され、現在に至っている。

## 注

1. ダニエル・タイラー、*A Concise History of the Mormon Battalion in the Mexican War, 1846 - 1847* 『メキシコ戦争におけるモルモン大隊の略史』1846 - 1847年（Glorieta, N. Mex.: Rio Grande Press, 1964）、128 - 129で引用
2. タイラー『略史』128
3. マルガリート・H・アレン編、*Henry*

## 時満ちる時代の教会歴史

- Hendricks Genealogy* 『ヘンリー・ヘンドリクス  
の系図』(Salt Lake City: Hendricks Family  
Organization, 1963), 26 - 27
4. タイラー 『略史』 144
5. A・R・モーテンセン編 “The Command and  
Staff of the Mormon Battalion in the Mexican  
War” 「メキシコ戦争におけるモルモン大隊の  
司令官と将校」 *Utah Historical Quarterly* 『季  
刊・ユタ史』 1952年10月号, 343で引用
6. ヘンリー・ピグラーの日記より抜粋
7. “Rules and Regulations” *Times and Seasons*  
「標準と規則」 『タイムズ・アンド・シーズンズ』  
1846年2月15日付, 1127 - 1128
8. ウィリアム・クレイトン, *William Clayton’s  
Journal* 『ウィリアム・クレイトンの日記』  
(Salt Lake City: Deseret News, 1921), 191,  
194, 197
9. クレイトン 『ウィリアム・クレイトンの日記』  
202 - 203
10. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847  
年7月24日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレー  
ク・シティ
11. “Pioneers’ Day” *Deseret Evening News*  
「開拓者の日」 『デゼレト・イブニング・ニュー  
ズ』 1880年7月26日付, 2
12. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847  
年11月30日
13. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847  
年12月5日参照
14. *History of the Church* 『教会歴史』 7 :  
623 - 624参照

# 荒野における避け所の確立

年表	
年代	重要な出来事
1847.8	ブリガム・ヤングと使徒たちが、ソルトレークからウィンタークォーターズへ向かう
1847.9 10	10隊の聖徒たちがソルトレーク盆地へ到着する
1848.5 6	干ばつやクリケットの害に苦しむ聖徒たちが、かもめの奇跡によって救われる
1848.9	ブリガム・ヤングと教会指導者たちがソルトレーク盆地へ戻る
1848 1849冬	入植を始めたばかりの聖徒たちを厳しい天候が襲う
1849.2	新たに4人の使徒が召され、国外での伝道が始まる
1849秋	永続的移住基金制度が定められる

## 1847年の開拓者の隊

隊	人数
ブリガム・ヤング	148
ミシシッピ	47
モルモン大隊	210
ダニエル・スペンサー	204
パーリー・P・ブラット	198
アブラハム・O・スムート	139
チャールズ・C・リッチ	130
ジョージ・B・ウォレス	198
エドワード・ハンター	155
ジョセフ・ホーン	197
ジョセフ・B・ノーブル	171
ウィラード・スノー	148
ジェデダイア・M・グラント	150
総数	2,095

ソルトレーク盆地に到着してわずか4日後に、ブリガム・ヤングは開拓者たちに「サンフランシスコ湾からハドソン湾までをくまなく知り尽くしたいと考えていること、またこの民がアメリカ全地にインディアンの各部族とつながりを持つようになる」<sup>1</sup>ということを話した。ヤング大管長はこの地域をデゼルトと名付けた。それは蜜蜂を意味する、『モルモン書』の中に出てくる言葉である（エテル2：3参照）。預言者は数々の新しい入植地を活動拠点にしたいと考えていた。聖徒たちは実質的に、広大なグレートベースンにおける唯一の白人入植者であった。グレートベースンと呼ばれた地域はテキサス州に匹敵する広さで、東はロッキー山脈、西はシエラネバダ山脈、北はコロンビア川の分水流域、南側はコロラド川まで達する地域であった。この地域はどちらかと言えば隔絶された乾燥地帯で、樹木や生き物の少ない所であった。聖徒たちは、この地に入植するにはかなりの信仰と最大限の努力が必要なことを理解したが、神の助けがあれば成功できると信じていた。

## ソルトレーク盆地での最初の年

1847年8月、ブリガム・ヤング、使徒、そして約100人の聖徒たちが、ソルトレーク盆地をたち、ネブラスカ州のウィンタークォーターズを目指した。それとちょうど同じころに、10の隊に編成された約150人の聖徒がソルトレーク盆地へ向けて大平原を西へ進んでいた。現在の西ワイオミングで、教会指導者たちはこの開拓者たちに出会い非常に喜んだ。喜びを分かち合った後、ヤング大管長の隊は再び東へ進み、一方、西へ進む隊も旅を続け、彼らは9月と10月の間にソルトレーク盆地へ到着した。

家族全員でやって来た聖徒たちにとって大平原の横断は困難な旅であった。多くの人々がその困難な旅に耐えられず、平原の中で死んでいった。第3隊の隊長だった七十人第一評議会のジェデダイア・M・グラントは妻のキャロラインと生まれたばかりの娘マーガレットを、ほかの多勢の人々と同じように、スウィートウォーター川のコレラで亡くしている。キャロラインは娘が死んだ4日後にその後を追うように亡くなった。彼女は死ぬ前に、自分たちのなきがらをソルトレーク盆地に葬るようにと求めたが、ジェデダイアはやむを得ず娘の遺体を地面を浅く掘って作った墓に入れ、その後ソルトレーク盆地まで旅を続けてそこに妻を埋葬した。後に彼は友人のジョセフ・ベイツ・ノーブルとマーガレットの遺体を掘り起こそうとワイオミングの平原まで戻ったが、すでにおおかみに荒らされた後だった。

しかし二人がそこへ到着する前に、神の御霊はすでに彼に慰めを与えていた。グラント長老は友人にそのことを打ち明けて話した。「ベイツ、神はそのことをわたしに明らかにしてくださった。妻と娘と一緒にいるパラダイスの喜びが今晚わたしに臨んだように思う。二人は何か賢明な目的があって、わたしや君が置かれているこ

## 時満ちる時代の教会歴史



ジェデダイア・モルガン・グラント（1816 - 1856年）。教会の偉大な宣教師の一人。シオンの陣営に参加。カートランド神殿で働き、ノーブー時代に七十人の7人の会長の一人として召される。

彼はソルトレーク盆地へ向けて平原を進む聖徒たちを助け、ソルトレーク・シティの初代市長となる。晩年の最後の2年は、ブリガム・ヤング大管長の第二副管長として仕えた。

の世の苦しみから解放されたのだ。二人はわたしたちが地上で味わえるよりもはるかに大きな幸福を味わっている。」約束を果たせなかったことを悲しみながら、二人はソルトレークへ戻った。<sup>2</sup>

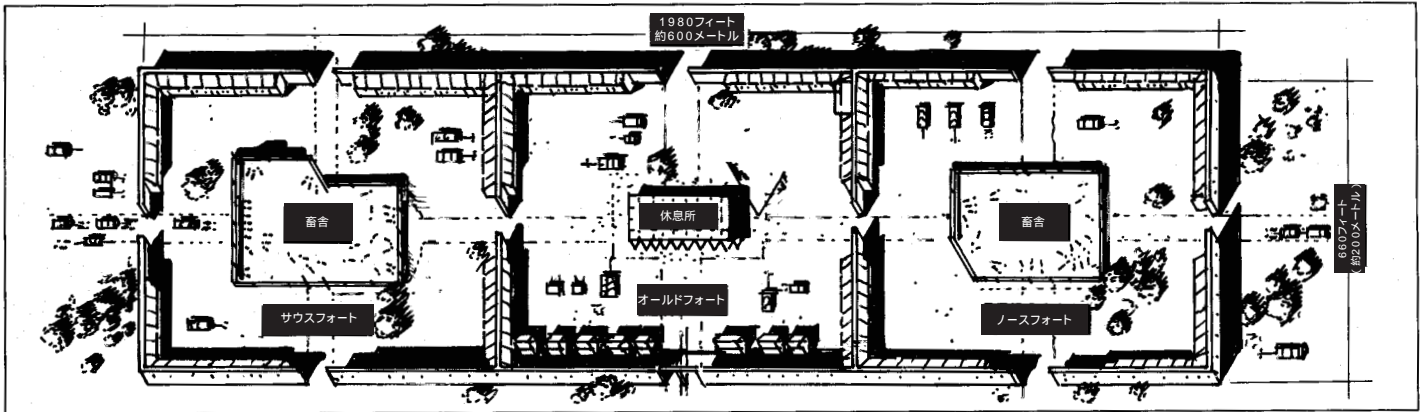
何年後に、ジェデダイアは霊界にいる妻と娘を見ることを許された。グラント長老が亡くなる少し前に、ヒーバー・C・キンボール副管長は彼に祝福を与えた。そのときグラント長老は、彼が受けた示現について語った。「彼は霊界に集った義人を見た。彼らの中には悪霊はいなかった。彼は自分の妻を見た。彼女は彼のところへ来た最初の人だった。彼は多くの知人を見た。しかし、妻のキャロライン以外にはだれとも言葉を交わさなかった。キャロラインがジェデダイアのところへ来たのである。彼は、妻は美しく、彼女が平原で亡くなった小さな子供を抱いていたと話している。彼女は彼にこう話した。『あなた、これがあのマーガレットよ。おおかみが食べてしまったことは御存じですね。でもこの子には何の害もありませんでした。ここなら彼女に何の心配もないわ。』」<sup>3</sup>

チャールズ・C・リッチとジョン・ヤングは前の年にウィンタークォーターズで組織したのと同じような高等市議会を組織した。この市議会の監督の指揮下、とりでに10エーカー（約4ヘクタール）の区画が二つ付け加えられ、450の丸太小屋が建設された。そしてとりでの周囲に巡らした日干しれんが造りの壁が完成した。市の周辺には家畜を管理するための柵さくが作られ、多くの道路や橋も作られた。5,133エーカー（約2,000ヘクタール）の広大な土地が耕され、872エーカー（約350ヘクタール）の土地に冬小麦の植え付けが行われた。ジェームズ・ブラウン大尉がモルモン大隊への支払い約5,000ドルを持ってカリフォルニアから到着すると、市議会はあるグループにその金の一部を持って南カリフォルニアへ行き、牛、ラバ、小麦、そのほか様々な作物の種子を購入する割り当てを与えた。また高等市議会は、ソルトレークから北へ35マイル（約56キロ）の所にあるオグデン川のマイルズ・グッドイヤー牧場と交易場の購入に1,950ドルを支出することを承認した。それはその広大で前途有望な地域への入植から障害の芽を取り除くためであった。<sup>4</sup>

ソルトレーク盆地にいたのは聖徒たちだけではなかった。1847年現在でグレートベースン全体に約1万2,000人のアメリカインディアンがいたが、そのうちの一部がソルトレーク盆地に住んでいた。秋にユートインディアンの一団がとりでにやって来た。彼らの一人が、戦闘で生け捕りにした二人のインディアンの子供を売りたいと申し出た。聖徒たちがその申し出に逡巡しゆんじゆんすると、それを言い出したインディアンは二人の子供を殺すと脅してきた。改めて拒絶すると、一人の子供が殺された。そこでブリガム・ヤングの義理の兄弟であったチャールズ・デッカーがもう一人の女の子を買い取り、ルーシー・デッカー・ヤングにその養育を頼んで預けた。サリーと名付けられたその少女は後にピーハイブハウスの料理長となり、ポーバント・ユート族しゅうちょうの酋長カノシュと結婚した。<sup>5</sup>

盆地で迎えた最初の冬は温和な気候であったが、オールドフォートには数多くの苦痛の種があった。おおかみ、きつね、その他の動物たちが絶えず遠ぼえの声を上げたり侵入して来たりして、人々を悩ませていたのである。ある夜、ロレンゾ・ダウ・ヤングはその一帯にストリキニーネ（訳注：神経刺激剤として用いられるが、甚だしい毒性を持つ物質）をまいておいた。そして朝になって、14匹の白いおおか

## 荒野における避け所の確立



オールドフォートは1847年の8月に建設され、神殿のあるブロックから南へ3ブロック、西へ3ブロックの所にあった。後に、さらに増える移住者を収容するために2区画が付け加えられ、それぞれノースフォート、サウスフォートと呼ばれた。

みの死体を見つけた。ねずみの群れも開拓者たちを悩ませた。ねずみ捕りの一つの方法として、水を入れたバケツのへりに油を塗った板を少し傾斜させた状態で載せておくというやり方があった。そうしておく、油をなめようとして板の上に来たねずみがバケツの中に落ちておぼれるという仕掛けだった。そのようなわけで、とりの中では猫が最も貴重な財産だったのである。

3月と4月には、激しい春の雪と雨が盆地を見舞った。不運なことに、聖徒たちはそのようなことが起こるとは考えてもいなかった。彼らの家の屋根は芝士で覆ったもので、ひどい雨漏りとなった。彼らは食糧を部屋の真ん中に集めて、インディアンたちから得たバッファローの毛皮で守った。「主婦が傘をさしながら家事をするという光景は珍しいものではありませんでした。晴れ上がった日のとりではとてもおかしげな様相を呈していました。どこを見ても、様々な種類の寝具や衣服が干しに出されているのです。」<sup>6</sup>

1848年の春には、食糧や衣類がかなり不足してきた。聖徒の多くは靴や適当な服がなく、動物の毛皮でモカシン（訳注：インディアンが履いていた柔らかい革靴）や服を作っていたが、それらのものも配給制になっていた。一人の人間に1日当たり配給される小麦粉は0.5ポンド（約200グラム強）の量に制限されていた。彼らはまた、からす、あざみの芽、樹皮、植物の根、セゴユリの球根なども食べた。

ブリディ・ミークスは数か月間家族が満足のいく食事をできなかったときに、どのようにして食べ物を探したかを生き生きと描いている。「わたしは時々ジョーダン川を1マイル（約1.6キロ）ほど上った所にある野生のばらの自生地に行き、その実を取って豚がむさぼるように食べた。たかやからすを撃って食べたこともある。味は良かった。また湿地のくぼ地を探し、そこにはまり込んだ家畜の死骸を見つけ、食べられる肉の部分をそぎ落とし、実際に食べたこともあった。おおかみの肉もよく食べたが、味は悪くなかった。木製のシャベルを幾つか作って、それでセゴユリを掘ったこともあるが、必要な量を得ることはできなかった。」彼は特にあざみの根を掘ることに熱を入れて働いた。「わたしはよくくわと袋を持って、夜明けを待って出かけた。あざみの根が採れる所まで6マイル（約9.6キロ）は歩いたと思う。そして家に帰る時刻までに1ブッシェル（約35リットル）、時にはそれ以上のあざみの根を手に入れたものである。そしてよく、それを生で食べたものだった。わたしはその仕事を続けて、疲れ果てると腰を下ろしてあざみの根を食べ、それからまた掘り始めた。」<sup>7</sup>



現在、ユタ州花とされているセゴユリ



## 時満ちる時代の教会歴史



ソルトレーク・シティのテンブルスクウェアに立つかもめの記念碑は、ブリガム・ヤングの孫マホニー・M・ヤングが立案製作したものである。1913年10月1日に、ジョセフ・F・スミス大管長によって除幕式が行われた。現在、かもめはユタ州の州鳥となっている。

このような困難な状況にあったために、開拓者たちは当然のことながら作物の収穫を楽しみに待ち望んでいた。ところが春の遅霜によって小麦や野菜の多くがだめになってしまったのである。そして5月と6月の干ばつはさらに作物の被害を大きくした。さらに悪いことには、クリケット（訳注：いなごのような田畑を食い荒らす、当時大量発生した新種の黒い大型の昆虫。こおろぎに似ているところから、「ロッキー山のコおろぎ」と呼ばれたりする。「モルモンクリケット」）の群れが山すそから下りて来て、残った作物を食い荒らし始めたのである。男、女、そして子供たちまでが棒やシャベル、ほうき、麻布の袋を持って、その害虫たちと戦った。火を使い、さらには溝を掘ってクリケットをおぼれさせようとまでしたが、その激しい攻撃を止めることはできなかった。約2週間にわたって、彼らは戦い、助けを祈り求めた。作物の収穫ができないのでは入植地が立ち行かなくなり、その年に移住を予定していた2,000人以上の聖徒たちの食糧が用意できなくなることを意味していた。

ようやく安息日に、チャールズ・C・リッチの説教中、グレートソルトレークからもめが飛んで来て、害虫たちをむさぼるように食べ始めたのである。「かもめたちはクリケットをついばむと、やがてそれを吐き出し、また別のものを食べては吐き出すということを繰り返した」とプリディ・ミークスは記録している。かもめたちは、クリケットがほとんど姿を消すようになるまで、2週間以上その攻撃を続けた。ミークスは「この出来事によってわたしたちの気持ちはかなり良い方向へ転じた」と述べている。<sup>1</sup> 作物の多くが守られた。現在、かもめはユタ州の州鳥とされ、テンブルスクウェアにはかもめの記念碑が立っている。

聖徒たちは夏の間、残った作物を大切に育て、8月10日には収穫祭を行った。パリー・P・プラットはそのときの様子を次のように描いている。「人々から見えるように、小麦、ライ麦、大麦、オート麦などの作物の束が柱の上に掲げられ、祈り、感謝、祝いの言葉が述べられ、歌、話、楽器の演奏、ダンスも行われ、人々の顔には笑いがあふれ、心には喜びが満ちていた。その日は、この盆地に住む人々にとってすばらしい日であり、苦しみの中にアメリカ内陸の荒地を贖う最初の努力の結果を熱心に待ち望んできた人々が夢に描いていた日であった。彼らは当時は人々に知られることのない寂しい場所を『バラのように、さかんに花咲』かせるために働いたのである。」<sup>9</sup>

またこの入植者たちは、ブリガム・ヤングやほかの指導者たちを含む多くの聖徒たちが戻って来るのを首を長くして待っていた。彼らは9月に盆地に到着した。1848年が暮れる前にモルモン大隊の隊員を含む約3,000人の聖徒たちが盆地に着いた。今やノーブーを逃れた人々の約4分の1が西部の新しい避け所に来ていたのである。再びデゼレトの地に来たブリガム・ヤングはアイオワにいた人々に手紙を書いた。彼はその手紙の中で、聖徒たちがすでに「避け所、聖徒の霊が休まる地、安全に住める場所」を見いだしたことを熱っぽく書き送った。一度ならず自分たちの住まいを追い出された人々にとって、それはうれしい知らせであった。またブリガム・ヤングは「神の御名の誉れと栄光のために再び神殿を建てる」と断言していた。<sup>10</sup>

## デゼレト暫定州

盆地で迎えた最初の年に、高等市議会は法律の草案を作り、税制を決め、土地の

## 荒野における避け所の確立

分配、水利権や木材の伐採権を定め、墓地を造り、刑事犯に対する刑罰や罰金も定めた。1848年の秋に大管長会が到着すると、人口が増え続ける入植地の行政上の責任は指導的な立場にある約50人の神権者から成る中央評議会に移された。中央評議会は大管長会の管理を受け、週に1度、ヒーバー・C・キンボールの自宅で集会を持った。末日聖徒は霊的なことであり、経済的なことであり、政治的なことであり、神の王国の事柄はすべて一つであると考えていたので、教会と政治は分離していなかった。

この暫定政府は拡大する市の町作りを続けた。1848年の秋から冬にかけて、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールの指導の下に適切な管理能力を持つ申請者に対して土地の配分が行われた。市全体が19のワードに分けられ、各ワードは9ブロック四方の大きさであった。各ワードを管理する監督が置かれ、その管理の下に柵や灌漑用水網が作られ、用水路の土手沿いに木が植えられた。

1848年の秋に行われた農地の配分は、ヤング大管長の構想に基づいて行われた。その構想とは、農地は先に入植した者が独占するというものではなく、入植地全体の利益を考え、最も生産的な利用法を取るというものであった。入植地全体にとって重要な資源である水や材木については私的な所有権は認められなかった。監督の指導の下に、人々は灌漑用水路や盆地に通じる道路などを開く工事に携わった。個々の家族はそれらの工事や維持に投入した労働量に応じて、水や材木を利用する権利を与えられた。土地や水、材木などの使用を巡る問題は、神権指導者が調停した。土地、水、材木などの利用に関しては、聖徒たちの間にかかなりの協力関係があったが、次第に私的な事業体がこれらの資源の統制を行うようになった。

1849年に着工し、1850年に完成した市議会の建物は、ユタ州最初の公的な建築物であった。その機能は歳月の流れとともに様々に変わった。準州の議事堂、準州の公立図書館、エンダウメント用の建物などとして用いられ、長年にわたりデゼルト大学の校舎としても用いられた。最終的には1883年に火事で消失した。



## 時満ちる時代の教会歴史



ユタ州で最初の金貨は1849年9月に鑄造された。後に鑄造用のるつぼが壊れ、東部から資材を取り寄せるまで貨幣鑄造ができなくなった。そのときに紙幣を発行することが決められたのである。

また公共工事は、特に聖徒たちの協力によって推進された。この部門を統轄する責任を受けていたのがダニエル・H・ウエルズであった。公共工事としてまず始められたのは、神殿のブロックの周囲に巡らす壁、什分の一の事務所、市議会館（公的な集会や政治集会などに用いられた）、日干しれんが造りの小さな教会本部、市の北部の温泉地の公共浴場、武器庫、テンプルスクウェア内の仮の集会場などであった。さらに、皮なめし工場、製粉所、製材所、鑄造所などが官民の協力関係によって建設された。

盆地で経済的取引のための手段として最初に用いられたのは、サクラメント近郊における金の発見に関与したモルモン大隊の隊員たちがカリフォルニアから持って来た、数千ドルに等しい価値のある砂金であった。後に大管長会は、デゼレト経済の振興のためにさらに多くの貴金属を得るために、数名の教会員を「ゴールドミッション」としてカリフォルニアへ派遣した。砂金は貨幣に鑄造された。教会の金の備蓄を裏付けとして、紙幣も用いられた。<sup>11</sup>

メキシコ戦争の終結と1848年2月2日のグアドループ・イダルゴ条約の締結によって、聖徒たちが建設を始めたばかりの入植地はアメリカの一部となった。この条約によって合衆国は、現在のカリフォルニア、ネバダ、ユタ、またニューメキシコとアリゾナの大半、ワイオミングとコロラドの一部を領土とした。自分たちの入植地がアメリカ合衆国の一部になったことを知った教会指導者は、その地域を州にする計画を立て始めた。1849年初頭、中央評議会はブリガム・ヤングを知事としてデゼレト暫定州を正式に発足させた。ウィラード・リチャーズが州務長官、ヒーバー・C・キンボールが裁判所長官、ニューエル・K・ホイットニーとジョン・テラーが陪席判事、ダニエル・H・ウエルズが検事総長の任に就いた。

デゼレト暫定州は2年にわたってグレートベースン内の行政府の役割を果たした。暫定州は幾つかの郡に分けられ、天然資源に対する権利の割り当て、交易や商業の統制、正規の州軍としてのノーブー隊の確立などを行い、通常の行政府が持つあらゆる機能を果たした。「州議会」はブリガム・ヤングが選び、有権者によって承認された人々によって構成されていた。この暫定州政府は、合衆国議会が1850年9月に正式にユタ準州を定めるまで円滑に、称賛に値する働きを続けた。

### 「わたしたちはここにとどまる」

このように聖徒たちに対する行政的な管理は効果的に行われたが、デゼレトに強固な避け所を確立するには幾つか困難な問題が横たわっていた。1848年から49年にかけての冬はその前の冬に比べて気候が厳しく、人々の間に深刻な事態を引き起こした。何度も雪が降り、冬中積雪が地面を覆って、家畜の飼料の確保が困難になった。また山々の雪が深く、木材を集める仕事が困難を極めた。極度の寒さとすさまじいまでの強風は入植者たちの生活をひどく惨めなものにした。<sup>12</sup>

再び食糧事情が悪くなり、人々はおおかみ、たか、からす、犬などを食べ、時には動物の死骸を食べることさえあった。市議会はなげなしの食糧を食い荒らす動物を駆除するための競技会を開いた。この狩りによって多くの害獣が駆除された。また自発的に物資の配給と地域ごとの貯蔵制度も定められた。余分な食糧を持つ人々はそれを貧しい人々に分け与えるため、監督に託すように求められた。

## 荒野における避け所の確立

寒さの厳しい冬，また慢性的な飢え，前の年の乏しい収穫，いわゆる「カリフォルニア熱」（訳注：カリフォルニアにおける金鉱発見で人々の間に広まった一獲千金を目指す風潮）の誘惑などによって一部に不満が起こり，幌馬車に荷を積んで，春にはユタを出発する準備をする人々もいた。このような試練の時に，ヒーバー・C・キンボール副管長は靈感を受けて次のように預言した。「皆さん，決して心配しないように。1年とたたないうちに，セントルイスで買うよりも安い値段で衣類やそのほかすべてのものが豊富に出回るようになります。」<sup>13</sup>

ブリガム・ヤング大管長も聖徒たちをこう励ました。「神はこの地を聖徒の集合地と定められました。ここにいれば，金鉱へ行くよりも良い結果を得ることができるでしょう。……わたしたちはこれまで最悪の状態から，よりましたな状態へ，そしてよりましたな状態から，何とか忍耐できる状態へと移ってきて，今ここにいます。そしてわたしたちはここにとどまるでしょう。……聖徒がここに集い，この地を所有するまでに強くなるにつれ，神は気候を和らげてくださり，わたしたちはこの地に至高の神のために市と神殿を建設するようになるでしょう。わたしたちは入植地を東西南北へ広げ，何百という町や市を作っていきます。そして何千という聖徒たちが地上のもろもろの国から集合することでしょう。……わたしたちは地上で見だし得る中で最高の気候，最良の水，きれいな空気を与えられています。ここより以上に健康的な気候はほかにありません。金銀，地の豊かな鉱物について言えば，この国に匹敵する国はほかにありません。でもそれは放っておきましょう。それらを探し求めることはほかの人々に任せ，わたしたちは土を耕しましょう。」<sup>14</sup>

多くの聖徒たちはその声に従って，作物の種をまいた。夏が来ると，神の預言者の言葉の正しさが立証された。主は気候を和らげ，豊かな収穫を授けてくださったのである。すでに盆地に入っていた約5,000人の聖徒と，夏の間に移住して来た1,400人の必要を満たすに十分な量であった。さらに1849年と1850年にソルトレーク・シティーを通過した1万人から1万5,000人と見積もられる金鉱探しの人々が，聖徒に思いがけない経済的利益をもたらした。カリフォルニア州へ様々な物資を運ぶために組織された商事会社の面々は，ソルトレーク・シティーへ到着したときに，海路運ばれた食糧，衣類など様々な道具類がすでに西海岸の市場へ到着しているということを知られた。そのために彼らはカリフォルニアで手ひどい損失をするよりはまだましと考える，手持ちの商品を聖徒たちに格安の値段で売却した。陸路を進んで来た彼らの幌馬車は修理や手入れが必要で，モルモンのかじ職人，馬車職人，牛馬の御者，洗濯職人，製粉職人などに就労の機会を与えた。聖徒たちはノースブラット川，グリーン川，ペア川などの上流の渡河地点に渡し場を作り，それらはカリフォルニアへ向かう幌馬車隊によって利用された。

カリフォルニアの採金地域へ早く着くために荷物を軽くしようとした人々が途中で捨てた貴重な物資を集めるために，ソルトレークから空の幌馬車で派遣された人々がいた。ジョン・D・リーは幾日かを使って自分の家族のためのストーブを探した。最後に彼は「自分の好みのストーブを見つけた。お金を出して買えば50ドル以上はするという大型の高級品であった。帰路彼は火薬，銃弾，調理器具，たばこ，釘，様々な道具類，ベーコン，コーヒー，砂糖，衣類を詰めたトランク，斧，馬具などを集め始めた。」<sup>15</sup> このように歴史上有名な1849年のゴールドラッシュは，聖徒

## 時満ちる時代の教会歴史

たちがソルトレーク盆地で生き残るうえで直接的な効果をもたらしたのであった。

### 初期の調整探検と入植

デゼルトにおける最初の2年間の聖徒たちのおもな働きは開拓事業の本拠地を確立することに向けられたが、教会の指導者たちはほかにも入植地となる所を探していた。幾つかの調査隊が、水源地の有無、土壌の肥沃度<sup>ひよく</sup>、木材やその他の建築資材の入手の可否、周辺山岳地帯の標高、鉱床の有無などを調べた。

1847年の7月と8月に、パイオニア商会から調査員が派遣され、ソルトレーク盆地の南方の地域、またベア川沿いの北方の地域、キャッシュ盆地へ向かう東方の地域の探検が行われた。1847年の秋にはモルモンのグループによって、カリフォルニアへ向かう二つのルートが踏破された。ジェームズ・ブラウン大尉が北方の進路を取り、サミュエル・ブランナンをサンフランシスコにあるその入植地まで送ったのである。またモルモン大隊の前任大尉であるジェファーソン・ハントが、牛やその他の必要な物資を得るために18名を率いて南カリフォルニアへ向かった。ハントや隊員たちは、命をつなぐために自分たちの馬を食べることまで余儀なくされたが、オールドスパニッシュトレイル経由でチノーランチョへ無事到着した。

1847年12月に、パーリー・P・プラットは大きな淡水湖ユタ湖を目指し、探検隊を率いて南へ進んだ。彼らはソルトレーク盆地西部のオキール山地を通って帰路に就く前の2日間、船を出して網で魚を取り、ユタ湖とユタ盆地を探検した。彼らは1週間にわたる調査を終える前に、シダー盆地とトゥエラ盆地、そしてグレートソルトレーク南端の探検も行った。

開拓者たちが到着してから1年の間に、ソルトレーク盆地南部と、後にデイビーズ郡、ウィーバー郡と呼ばれる北部地域に小さな町々が開かれた。そのような入植地のうち、ジェームズ・ブラウンにちなんでブラウンズビルと名付けられた町は、その後発展してユタ州で2番目に大きな市となった。(後に、毛皮商人ピーター・スカーン・オグデンを記念してオグデンと呼ばれるようになる。)ブラウンズビルを確立するために、ブラウン家族以外の人々もその地の入植に参加した。彼らはカリフォルニアから持って来た種で、小麦、とうもろこし、キャベツ、かぶ、じゃがいも、すいかの栽培に成功した。彼らはまた約25頭の牛で酪農を行い、この地域でチーズの製造を行った最初のモルモンとなった。これは、ソルトレーク盆地の聖徒たちが1848年から49年にかけての飢えの時期を乗り切る助けとなった。1849年、ブリガム・ヤングは急速に成長するこの入植地を訪れ、さらにローリン・ファーを派遣し、この地域の教会と行政に関するすべての責任を担当させた。ローリン・ファーはオグデンの初代市長となり、またウィーバーステーク最初の会長となった。そして20年にわたりその二つの職を務めた。

昔からその地に住むユーツインディアンにちなんで名付けられたユタ盆地は、ソルトレーク盆地の南に位置する肥沃で魅力的な地域で、当然のことながら入植地の建設が考えられた。当初、教会の指導者たちはこの盆地を、ソルトレーク・シティの聖徒たちのための家畜の放牧地、また魚の供給地として用いることを考えていたが、インディアンとの間に予想される問題を考慮して、恒久的な防備を固めた入植地を建設することになった。総勢約150名の33家族が、ジョン・S・ヒグビーを指

## 荒野における避け所の確立



ローリン・ファー（1820 - 1909年）。11歳のときに家族とともに教会に入り、ライマン・E・ジョンソンからバプテスマを受け、オーソン・プラットから確認の儀式を受けた。彼は長年にわたり、ウィーバーステークの会長とオグデン市長の職を務めた。

フォートユタは、フランス人のわな猟師エテヌ・プロボットにちなんで、フォートプロボとも呼ばれた。

導者としてプロボ川に到着したのは1849年4月1日であった。彼らはユタ湖の東1.5マイル（約2.5キロ）ほどの地点にフォートユタというとりでを築き、肥沃な川沿いの低地の耕作を始めた。ブリガム・ヤングは9月にフォートユタを訪れ、とりでをさらに東寄りのより高い場所に移動するように勧めた。

この新しい場所はプロボ市の中核になった。1849年から50年にかけての冬に、ユーツインディアンが新参の入植者たちに攻撃を仕掛けてきた。そのために、プロボの住民を守るためにノーブー隊が召集された。フォートユタの戦いと呼ばれる2日に及ぶ衝突で、40人のインディアンと一人の入植者が命を落とし、数名の負傷者が出た。<sup>16</sup> この衝突の結果、ユタ盆地におけるインディアンの敵対行為はやみ、1850年と1851年には、リーハイ、アルパイン、アメリカンフォーク、プレザントグローブ、スプリングビル、スパニッシュフォーク、セーレム、サンタクイン、ペysonなどを含む数々の入植地を開くことが可能になった。この一連の入植地は山岳地帯の流水を活用し、それぞれの外縁部にある農地や牧草地で境を接するように配置し、危急の際にはすべての入植者が集結できるようにした。プロボはその地域のステーキの中心地となり、郡庁が置かれた。

ソルトレーク盆地西部のトゥエラ盆地への入植は1849年に行われた。その年の11月に、オハイオ州における最初の改宗者の一人、アイザック・モーリーが225人を率いて、ソルトレーク・シティーの南約100マイル（約160キロ）にあるサンピート盆地に入植した。彼らは、後にマンタイ神殿が建てられた丘陵地に横穴を掘り、そこで寒く厳しい一冬を過ごした。翌年、モーリー長老とその同行者たちは、自分たち



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

の近くの地に住むように勧めてくれたユーツインディアンの酋長ワカラおよび彼の部族たちとの間に友好的な関係を築いた。

1849年11月23日には、ソルトレーク盆地南部にさらに入植地を開くための候補地を選ぶ目的で、パーリー・P・プラットを長とする、50人から成る調査隊が組織された。4日後に彼らは57軒の丸太小屋を誇るプロボの立派な入植地を訪れた。この隊は、全行程を通して詳細な調査を行った。彼らはジュアブ盆地、サンピート盆地とさらに南下を続け、わずか12日前に入植が開始されたマンタイに到着した。12月10日、ソルトレーク・シティーから南200マイル（約160キロ）ほどのセビーア川で彼らの温度計は零下29度を記録した。さらに100マイル（約160キロ）進んだところで隊の一部がグレートベースンの端を横切り、後にユタのディクシーと呼ばれる地域へ入ったが、そこで気候や地形に大きな変化があることを彼らは知った。そして一行は

## 時満ちる時代の教会歴史

新年までに現在のセントジョージに到着したのである。

インディアンのガイドたちや村人がそこから南は荒涼とした恐ろしい地であると告げたので、彼らは北へ戻ることに決定した。マウンテンメドーズやポーバント盆地を通過して戻る途中、彼らは大雪のためにチョーククリーク（現在のフィルモア）での足止めを余儀なくされた。そして隊の半分がプロボまで進み、残りの半分は春までチョーククリークにとどまることになった。この決定がなされたのは、越冬のための物資が隊員の半数の分しかなかったからである。ある朝、プロボを目指した兄弟たちの隊は、夜間に積もった雪の中に完全にうずもれた状態になっていた。プラット長老は起き上がると大きな声でまだ眠っている兄弟たちを起こした。「わたしはラッパのような声を上げ、彼らに起きるように命令した。降り積もった雪の山が震えたかと思うと、その白い墓が開かれ、全員が出て来た。わたしたちはこれを復活のキャンプと呼んだ。」<sup>17</sup>

## シオンへの集合

この初期の探検と入植の時期に、大管長会はミズーリ川近くのアイオワ州の野营地から残りの聖徒たちを集合させる計画を練り上げていた。アイオワに残っていた聖徒たちの多くは非常に貧しい人々であった。

1848年に大管長会は聖徒たちの指導に当たらせるためにオーソン・ハイドをアイオワ州のケインズビルにとどませた。それまでの間に、ポタワトミー郡には約30か所の入植地が開かれていた。農業や商工業が順調に行われ、学校も開設されていた。ハイド長老は1849年に『フロンティアガーディアン』(Frontier Guardian)という新聞を創刊し、1852年にユタの地に召されるまでの間に、約100回の号を発行した。この新聞はアイオワ州と東部にいる聖徒たちに、神の王国の進展についての情報を与えるためのものであった。

アイオワ州におけるモルモン最大の入植地ケインズビルには大平原横断のための集結地としての機能があった。近くには教会がミズーリ川に築いた3つの渡し場があり、それらの渡し場はオレゴンやカリフォルニアへ向かう14万人の移住者にも利用されていた。ケインズビルで起きた最も喜ばしい出来事は、1848年10月にオリバー・カウドリが教会に戻って来たことであった。1848年11月12日に、オリバーは改めてバプテスマを受けた。しかし残念なことに、オリバーはソルトレーク盆地への集合がかなわないまま、病に倒れ、ミズーリ州リッチモンドにいる妻の家族を訪ねた折に亡くなった。1850年3月3日、彼は義父ピーター・ホイットマー・シニアの家で他界した。

1849年の豊かな収穫とゴールドラッシュでカリフォルニアへ向かう人々がもたらした経済の好転は、教会に集合促進への自信を強めさせた。集合を促さねばならない聖徒として、ミズーリ川流域の地にはまだ1万人が残留し、東部諸州全域に散在する支部には数百人、イギリスの教会には3万人の会員がいた。1849年の秋に、教会の指導者は永代移住基金制度を発足させた。この制度の目的は、ゼデレトにおいて献金を募り、それをを用いてアイオワ州の野营地に集合していた貧しい聖徒たちに旅装を整えさせることにあった。ソルトレーク盆地に到着した後、移住者たちには公共事業での労力、あるいは金銭による返却が期待され、それによってこの移住基金制



オーソン・ハイドは1849年2月7日にアイオワ州ケインズビルで『フロンティアガーディアン』という新聞の発行を始めた。1852年この新聞の権利はジェイコブ・ドーソンに売却され、彼は紙名を『アイオワセンチネル』(Iowa Sentinel)と変えた。

## 荒野における避け所の確立

永続的移住基金組合を通してユタへ行く教会員たちが署名した書類。

*48*

### Perpetual Emigrating Fund Company,

ORGANIZED AT GREAT SALT LAKE CITY, DESERET, U.S.A., OCTOBER 22d, 1837.

*Franklin B. Richards, Agent, Emigrant*

---

**We, the undersigned, do hereby agree and bind ourselves to the PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY, in the following conditions, viz:—**

That, in consideration of the amount Computed emigrating or transporting us, and our necessary Luggage, from Great Britain to the Valley of the Great Salt Lake, according to the Rules of the Company, and the general instructions of their authorized Agents;

We do severally and jointly promise and bind ourselves to conform with, and obey the instructions of, the Agent appointed to superintend our passage thither: that we will receipt for our passages previous to arriving at the several ports of New Orleans, St. Louis, and Kanesville;

And that, on our arrival in the Great Salt Lake Valley, we will hold ourselves, our thine, and our labor, subject to the appropriation of the PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY, until the full cost of our emigration is paid with interest if required.

NAME	AGE	NAME	AGE
<i>John Turner</i>	<i>42</i>		
<i>Elizabeth Turner</i>	<i>45</i>		
<i>Emma Turner</i>	<i>17</i>		
<i>Selina Turner</i>	<i>6</i>		
<i>Lucy Ann Turner</i>	<i>1</i>		

*February 1st 1842*

PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY'S OFFICE,  
GREAT SALT LAKE CITY, UTAH TERRITORY,

*July 20 1850*

**ON DEMAND** I promise to pay to the **TREASURER** of the **PERPETUAL EMIGRATING FUND COMPANY**, the sum of *One Hundred and Fifty Dollars* as payment of **EMIGRATING EXPENSES**, for bringing the following named persons, from *Great Britain* to G. S. L. City.

NAMES.

*Richard Knight*  
*Charles*

*James Wright*

度は「永続的」に運用されることになっていた。永続的移住基金制度によるヨーロッパの聖徒たちへの援助は、ノーブーを追われた聖徒らの西部移住が終了した後、極力早い時点に開始された。

最初の年の秋に約6,000ドルの基金が調達され、エドワード・ハンター監督は教会の代表としてアイオワへ行き、多くの聖徒たちにシオンへの旅支度をさせるため、



## 時満ちる時代の教会歴史



エドワード・ハンター（1793 - 1883年）は1840年10月8日に、当時パレスチナへ向かう旅の途中にあったオーソン・ハイドからバプテスマを受けた。エドワード・ハンターは裕福な人物で、教会とその指導者に対して惜しみなく自分の財産を提供した。ブリガム・ヤングは1851年に、彼を教会の管理監督の責任に召した。

幌馬車、牛馬そのほかもろもろの物資を購入する責任を与えられた。1850年には約2,500人がデゼレトへ移住し、さらに1851年にも2,500人が援助を受けた。それでもなお、アイオワには約8,000人の聖徒たちが残っていた。その中にはウィルフォード・ウッドラフ長老の指示の下に東部の支部から集った人々や、はるばるとイギリスからやって来た何千人という聖徒たちもいた。

1851年の秋にエズラ・T・ベンソン長老とジェデダイア・M・グラント長老は、オーソン・ハイドを助けて、1852年には宿営地の聖徒たちをすべて移住させるようにとの任務を受けた。宿営地に残っていた人々に対して、大管長は次のように訴えた。「皆さんは何を待っているのでしょうか。ここへ来ないことについて何か適切な言い訳があるのでしょうか。そのようなものはありません。皆さんすべてが、わたしたちが開拓者としてこの地を見つけることから始めたときに比べればはるかに良い条件に恵まれているのです。馬や牛、それに食糧においても質量ともに恵まれています。皆さんは初めからそれほど恵まれているのです。……

……ですからわたしたちは至高者の聖徒である皆さんがボタワタミーや東部を離れ、次の秋にはわたしたちのところへ来るように望んでいます。」<sup>18</sup>

これにこたえて、多くの聖徒たちがアイオワ州の地や建物などを辺境地のアメリカ人に売却した。そして1852年に、それぞれが60台以上の幌馬車から成る21の隊がグレートベースンに移住したのである。将来の移住者を援助するために、最小限度の人員がミズーリ川沿いの地に残留した。

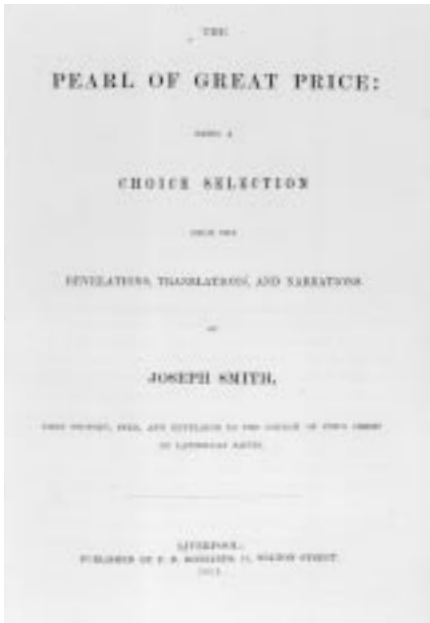
## 国外での発展

集合への意識の高揚とともに、大管長会は世界中の国々にイエス・キリストの福音を広める業にも改めて注意を向けた。その非常に重大な責任を与えられたのは、十二使徒定員会であった。（大管長会の組織とライマン・ワイトの背教によって）生じていた十二使徒定員会の4つの空席は、1849年2月にチャールズ・C・リッチ、ロレンゾ・スノー、エラスタス・スノー、フランクリン・D・リチャーズが召されたことによって満たされた。十二使徒の多くと、十二使徒の指示を受けた何人かの長老たちが、世界中の国々に福音のメッセージを伝える務めを与えられた。ジョン・テラーはフランスとドイツに、ロレンゾ・スノーはイタリアへ、エラスタス・スノーはスカンジナビア諸国へ、それぞれ幾人かの宣教師とともに派遣された。

1849年10月の総大会において、フランクリン・D・リチャーズをはじめとする人々がイギリスへの伝道に召された。リチャーズ長老は伝道部長として、オーソン・プラットの跡を継ぐことになった。イギリスにおける伝道活動は、1846年から47年にかけてのパーリー・P・プラット、オーソン・ハイド、ジョン・テラーの短い伝道期間後も大きな成功を収めていた。その後は、オーソン・スペンサー、そしてオーソン・プラットが引き続き伝道部の管理に当たっていた。1847年から1850年の間に何千もの人々が教会に改宗していた。プラット長老は、イギリスにおける永続的移住基金の最初の適用者となった、3,000名の教会員をアイオワ州ケインズビルへ移住させる仕事も統轄した。

フランクリン・D・リチャーズ長老がオーソン・プラットの後任として正式にイギリスの伝道部長になったのは、1851年1月1日であった。彼の優れた指導の下に、そ

## 荒野における避け所の確立



1851年版の『高価な真珠』のタイトルページ。

の後の17か月間にさらに何千もの人々が教会に加入し、その聖徒たちのシオンへの集合の準備も引き続き行う必要があった。オーソン・プラットとフランクリン・D・リチャーズは数多くの小冊子を発行し、それらは伝道活動の助けとなった。しかしそれらの中で最も重要なものは、預言者ジョセフ・スミスが受けた啓示や翻訳された聖典を一つに編集したものであった。イギリスの聖徒たちはそれまで、それらの啓示や記録を目にすることがなかった。リチャーズ長老はそれに『高価な真珠』という適切な名を付けた。1851年に発行されたその小冊子は、1880年に教会の標準聖典として受け入れられた同名の聖典の基となった。イギリスの聖徒たちが教会の力となって大きく貢献したことは明らかであった。19世紀中にロッキー山中のシオンに集合した多くの聖徒のうち、半数以上はイギリス出身者であった。

十二使徒会のほかの会員たちは、ヨーロッパ大陸の国々に福音を伝えた。ジョン・テラーは1849年と1850年の両年に、フランスとドイツにおける最初の伝道活動を管理した。1848年にヨーロッパに起きた一連の革命は大きな社会変動をもたらした、そのためにテラー長老と同僚たちはどの国においても見るべき成功を収めることができなかった。しかしフランス語とドイツ語の『モルモン書』が出版され、ドイツのハンブルクには教会の支部が設立された。ドイツではその後の数年間、散発的に伝道活動が行われた。

イタリアの伝道に召されたロレンゾ・スノー長老は1850年6月にピエモンテ地方に到着した。彼にはイタリア出身のジョセフ・トロントとイギリス人改宗者T・B・H・ステンハウスが同僚としてついていた。彼らはヴァルド派として知られるプロテスタントの間である程度の成功を収めたが、会員数において勝るカトリック教徒の中では成功を得ることができなかった。ロレンゾ・スノーは『モルモン書』をイタリア語に翻訳するための準備をし、最初の宣教師たちをマルタとインドに派遣した。1850年12月に、ステンハウス長老はスイスで福音を伝え始めた。1851年の2月にスノー長老は、スイスを福音伝道の地として奉献した。1850年代のスイスにおける伝道はゆっくりと、しかし着実に進展し、ヨーロッパにおける伝道部としてはイギリス、デンマークに次いで多くの改宗者を出した。

デンマークに福音を伝える責任は、十二使徒のエラスマス・スノー長老に与えられた。彼は1850年にデンマークに到着し、憲法によって強く保障された宗教の自由の下に、すぐに成功を収めることができた。多くの改宗者の中からスノー長老は、地元デンマーク出身の150名の宣教師を任命し、その宣教師たちはそれぞれに福音のメッセージを広める業を速めるのに貢献した。福音は、デンマークからノルウェー、スウェーデン、アイスランドへと急速に広められた。これらの国々ではデンマークほどの改宗者が出なかったが、スカンジナビア諸国全体ではその後の50年間に、シオンへの偉大な集合の業の中で何千人もの聖徒をアメリカへ送り出したのである。

海外への伝道の熱意が新たに高められたこの時期には、世界中の国々に福音を広めるために多くの勇気ある試みがなされたが、全体的に見ればわずかな成果を得るにとどまった。パーリー・P・プラットは太平洋地域の伝道活動を管理する任務を与えられ、中国、ハワイ、オーストラリア、ニュージーランドに宣教師を派遣した。1851年に彼はチリへ赴いたが、革命のために活動できない状況になってしまった。中国では太平天国の乱で、ホセア・スタウトの活動が妨げられた。オーストラリア

## 時満ちる時代の教会歴史

とニュージーランドではある程度の成果を得、1850年代にわずかながらソルトレーク・シティーへの移住者が出た。

太平洋地域で最も成功したのは、1850年に開設されたハワイ伝道部であった。ジョージ・Q・キャノンはヨーロッパ人やアメリカ人だけではなく、昔からその地の島々に住む人々に福音を広めるべきだと強く感じた。そして、キャノン長老と彼に従った兄弟たちはハワイ語を学んで、福音を受け入れる準備のできた数多くの人々を見いだしたのである。

1847年に続く何年かの際に、末日聖徒イエス・キリスト教会は西部に避け所を見だし、靈感あふれる指導者のもとに御業を大いに前進させた。荒涼とした大地を征服する事業を始め、開拓の核となる入植地を築き、何千人もの避難民をデゼレトに集合させ、勇敢にも福音を世界中の多くの国々に伝えたのである。

## 注

1. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847年7月28日で引用, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
2. カーター・E・グラント “Robbed by Wolves: A True Story” *Relief Society Magazine* 「おおかみに奪われて」『扶助協会誌』1928年7月号, 363 - 364で引用
3. ヒーパー・C・キンボール, *Journal of Discourses* 『説教集』4: 136で引用
4. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 3: 476 - 477参照
5. ジョン・R・ヤング, *Memoirs of John R. Young, Utah Pioneer, 1847* 『ユタの開拓者ジョン・R・ヤングの思い出の記』1847年 (Salt Lake City: Deseret News, 1920), 62; ソロモン・F・キンボール “Our Pioneer Boys” *Improvement Era* 「開拓者の少年たち」『インブルーブメント・エラ』1908年8月号, 734 - 735参照
6. M・イザベラ・ホーン “Pioneer Reminiscences” *Young Woman’s Journal* 「開拓者の思い出話」『ヤングウーマンズ・ジャーナル』1902年7月号, 294
7. プリディ・ミークス “Journal of Priddy Meeks” 「プリディ・ミークスの日記」*Utah Historical Quarterly* 『ユタ州歴史季刊誌』1942年号, 163で引用
8. 「プリディ・ミークスの日記」164。ウィリアム・ハートリー “Mormons, Crickets, and Gulls: A New Look at an Old Story” 「モルモンとクリケットとかもめ 新しい視点から見た昔の物語」『ユタ州歴史季刊誌』1970年夏季号, 224 - 239も参照
9. パーリー・P・ブラット編, *Autobiography of Parley P. Pratt* 『パーリー・P・ブラット自叙伝』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1985), 335
10. ジェームズ・R・クラーク編, *Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』全6巻 (Salt Lake City: Bookcraft, 1965 - 75), 1: 341で引用
11. ユージン・エドワード・キャンベル “The Mormon Gold Mining Mission of 1849” *Brigham Young University Studies* 「1849年モルモンの金採掘ミッション」『ブリガム・ヤング大学紀要』1959年秋季 - 1960年冬季号, 23 - 24; レナード・J・アーリントン, *Great Basin Kingdom: An Economic History of the Latter-day Saints* 『グレートベースンの王国 末日聖徒の経済の歴史』1830 - 1900年 (Cambridge: Harvard University Press, 1958), 71 - 74参照
12. ブリガム・ヤング, ヒーパー・C・キンボール, ウィラード・リチャーズ, *Messages of the First Presidency* 『大管長会メッセージ』クラーク編, 1: 352参照
13. 『説教集』10:247
14. ジェームズ・S・ブラウン, *Giant of the Lord: Life of a Pioneer* 『主の巨人 ある開拓者の生涯』(Salt Lake City: Bookcraft, 1960), 132 - 133で引用
15. ワニータ・ブルックス, *John Doyle Lee: Zealot - Pioneer Builder - Scapegoat* 『ジョン・ドイル・リー: 狂信者, 開拓者, スケープゴート』(Glendale, Ca.: Arthur H. Clark Co., 1972),

## 荒野における避け所の確立

48 - 49

16. ピーター・ゴッドフレッドソン, *Indian Depredations in Utah* 『ユタ州におけるインディアン略奪行為』(Salt Lake City: Merlin G. Christensen, 1969), 28 - 35参照.

17. プラット 『パーリー・P・プラット自叙伝』 340

18. クラーク編 『大管長会メッセージ』 2 : 75 - 76で引用

## 隔絶の地ユタ

年表	重要な出来事
1847	1857 聖徒たちは西部に100以上の入植地を築く
1850.9	ブリガム・ヤングを知事としてユタが準州になる
1851.9	「逃亡官僚」がユタ準州を去る
1855夏	干ばつとクリケットの害がユタの経済に大きな打撃を与える
1856秋	「改革」が始まる
1856.10	11 聖徒の勇敢な行動によって手車隊のウィリー隊とマーティン隊が救出される



ジョン・M・バーンハイゼル（1799－1881年）はペンシルベニア州で生まれ育った。ペンシルベニア大学で医学を学んだ。教会に加入してからは、1841年にニューヨークで監督の責任に召された。

聖徒たちがロッキー山中に避け所を確立した後、バーンハイゼルは聖徒たちの声を代表する準州選出連邦下院議員に選ばれた。彼はこの職を連続4期務めた（1851 - 1859年）。1861年にも再選され、公職から引退した1863年までその任を務めた。

**聖**徒たちはソルトレーク盆地に到着した当初、敵から隔絶された地に来て、平和と安らぎの中で神の王国の建設ができることを喜んだ。1847年7月24日に、ブリガム・ヤングは開拓者隊の会員たちへこう宣言した。

「もし合衆国の人々がわたしたちを10年間そっとしておいてくれるなら、ほかに何の恩恵も求めようとは思いません。」<sup>1</sup>

聖徒たちは主の助けと自らの勤勉な働きによって10年の間に堅固な避け所を築いたが、そこに至るまでの道のりは決して平坦な<sup>へいたん</sup>ものではなかった。連邦政府から任命された官僚たちとのあつれきが高まり、教会員をシオンに集合させ入植させるには大きな犠牲が求められた。

### ユタ準州の組織

教会の指導者たちは1848年に、デゼレトを州にするか準州にするかについて合衆国政府と交渉する計画を決めた。1849年3月には、準州として申請するに当たって準州政府官吏となるべき人物を承認するための選挙が行われ、3月初旬のうちに2,270人の署名を含む長さ22フィート（約6.7メートル）もの請願書がワシントンD.C.に送られた。それは広大な地域に及ぶ準州の創設を請願するもので、準州該当地域としては、現在のユタ州とネバタ州、アリゾナ州、ニューメキシコ州、コロラド州、ワイオミング州、そしてオレゴン州の一部、カリフォルニア州の3分の1、ここには港湾都市サンディエゴを含む太平洋岸沿いの南北に細長く続く地も含まれていた。

政治面への眼識を備えていた医師ジョン・M・バーンハイゼルはデゼレトの声を国会に伝えるために選ばれた。彼はデゼレトからワシントンへ向かう途中、東部で幾人かの重要な立場にある政治家たちと会い、自分の腹案に対する強い支持を求めた。1849年11月に、バーンハイゼル医師はフィラデルフィアでウィルフォード・ウッドラフと教会に非常に好意的なトーマス・L・ケイン大佐と会った。1年前にブリガム・ヤングの要請を受けて、ケインはワシントンに滞在し、デゼレトを準州政府とすることについてジェームズ・K・ポーク大統領やそのほかの政府高官と話し合いを持っていた。彼は、ワシントンにはモルモンに対する同情心のまったくないことに気づいたため、デゼレトは州という地位を得るための申請を行った方がいいと勧めた。準州という立場では、州政府の役人が大統領によって任命されるからである。

ケインはウィルフォード・ウッドラフに次のように話した。「準州政府よりは、議会の意のままになる政体のない今の状態のままがいい。政府の役人は政治的な術策を巡らして皆さんに敵対するでしょう。彼らに治められるよりは自分で自分を治めた方がいいのです。…… 皆さんを利用して自分の利益を得ることしか考えない腐敗し切った役人がワシントンから来て、肩章の付いた軍服で威張り散らして歩き回

## 隔絶の地ユタ



トーマス・リーパー・ケイン（1822 - 1883年）は当時の偉大な博愛主義者の一人で、ほぼ40年にわたり獄中にある人々、クエーカー教徒、そして聖徒たちにも助けの手を差し伸べた。1861年から1863年にかけては、北軍の軍人として南北戦争で戦い、何度か負傷している。

トーマス・L・ケインの死から4か月後、ジョージ・Q・キャノン長老はセントジョージ神殿で彼のために神殿の儀式を執行した。

る姿など見たくはないでしょう。」またケインは、「法律書や法律家特有の策略がなく、人間や様々な物事に対する洞察力を持っている」という理由を挙げて、ブリガム・ヤングが知事になるように勧めた。<sup>2</sup>

バーンハイゼルがケインに会ったころ、ソルトレーク・シティーの教会指導者たちも、準州ではなく州への昇格を目指してロビー活動（議会への陳情運動）を進めるべきであるという決定を下していた。彼らはデゼレト州の憲法の草案を作成し、その中には知事としてブリガム・ヤング、副知事としてヒーバー・C・キンボール、州務長官としてウィラード・リチャーズなど大管長会を含めた必要とされる州政府官吏の選任案も入っていた。アーモン・W・バビットが議会への使節として選ばれ、彼は州憲法草案を携えて7月に出発した。バビットはその文書をアイオワ州ケインズビルで印刷し、12月にワシントンでバーンハイゼル医師に会った。

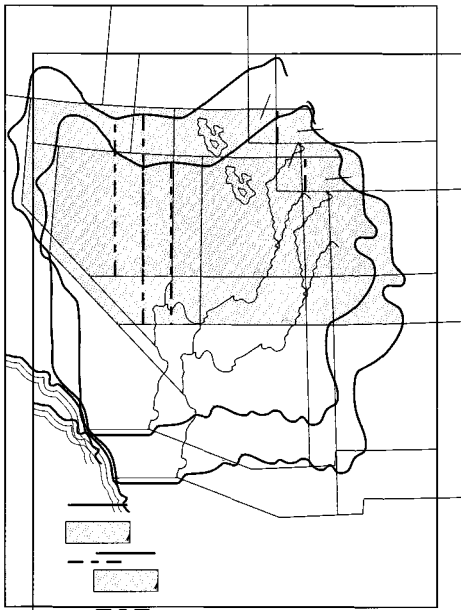
しかし、不幸にも州昇格のその申請は一顧だにされなかった。ケイン大佐とバーンハイゼル医師がすぐに気づいたように、ワシントンの役人たちの頭の中はメキシコとの戦争で獲得した領土への奴隷制度の拡張を巡る北部諸州と南部諸州の対立でいっぱいであった。1849年12月から1850年の9月にかけて、議会では奴隷制度問題を巡る激しい論戦が行われ、グレートベースンのモルモンの入植地にはまったく関心が示されなかった。

議会で教会に対して最も友好的な人物は、イリノイ州選出の上院議員スティーブン・A・ダグラスであった。彼はノーブー時代にジョセフ・スミスや聖徒たちを擁護していた。上院の領土関連委員会の委員長をしていたダグラスは、丁重な態度でバーンハイゼル医師と会い、法律で定められた手続きに従って請願をしてみると約束した。議会は成長著しいカリフォルニアの州昇格申請には快く同意したものの、奴隷制度を巡る論戦の中で、人口の少ないデゼレトやニューメキシコの州昇格申請について真剣な議論がなされることはなかった。ダグラス上院議員は、「自由」州の上院議員がそれ以上増えることを容認できない南部側を軟化させるために、州昇格ではなく準州昇格の申請をすることにした。彼はまたデゼレトという名前をユーツインディアンにちなんでユタに変えた。同僚の上院議員たち、特にミズーリ州出身のトーマス・ベントン上院議員の反感を避けるためであった。ベントン議員はデゼレトという名称は荒地を意味するディザート（desert）と響きが似すぎていると考えていた。<sup>3</sup>

長い論議の末に、議会は「1850年の妥協」として知られる一括法案をまとめあげた。この法案の内容は、カリフォルニアを自由州として、またユタとニューメキシコについては、奴隷州か自由州かの最終的選択は住民の判断によるものとするという条件で準州として認めるものであった。1850年9月9日、ミラード・フィルモア大統領はユタ準州創設のその法案に署名した。末日聖徒側も連邦政府側も、この措置が最後に州昇格を認められるまでの46年にわたる不信と摩擦の幕開けになるとは知る由もなかった。

フィルモア大統領が新しい準州政府の役人の選任を考える段階になると、ロビイスト（院外活動をする人）としてのバーンハイゼルの手腕が特に重要になった。バーンハイゼルは大統領と会ってこう話した。「ユタの人々は、アメリカの市民として自ら選んだ信頼の置ける人間に治められ、意見、考えにおいて彼らと一致すること

## 時満ちる時代の教会歴史



申請されたデゼレト州の領域

が自分たちの権利であると考えざるはありません。」<sup>4</sup>

フィルモアは、準州政府の役人がすべてモルモンから成る指名候補者名簿はとも上院の承認が得られるものではないと憂慮し、妥協策として連邦政府が指名する職に4名のモルモン（ヤング、スノー、ブレアー、ヘイウッド）とそれ以外の4名を選任した。新しいユタ準州政府の高官として以下の人々が指名を受けた。知事兼インディアン指導管理官としてブリガム・ヤング、州務長官としてバーモント州出身のブラフトン・D・ハリス、裁判所長としてペンシルベニア州出身のジョセフ・バフィントン、陪席判事としてオハイオ州出身ゼルバベル・スノー、アラバマ州出身ペリー・E・ブロッカス、連邦政府検事としてユタ州出身セツ・M・ブレアー、連邦裁判所執行官としてジョセフ・L・ヘイウッド、インディアン保護管理官としてヘンリー・R・デイが指名された。

### モルモン以外の人々とのあつれき

1850年の秋と冬から51年にかけて、連邦政府の措置に関する断片的な情報がソルトレーク盆地に達した。自分が知事に任命され、人口調査を行い法的な行政区を定める責務を与えられたことを知って、ブリガム・ヤングは1851年2月3日に就任の宣誓をするとすぐに、その仕事に着手した。ほかの責任に就く人々の選任は8月に行われた。その中で最も重要な職務は準州選出下院議員であり、その職にジョン・M・バーンハイゼルが就いた。

教会外の被任命者たちが到着したのは次の夏であった。最初に来たのは、任命を拒否したジョセフ・バフィントンに代わって就任した裁判所長レミュエル・D・ブランデベリーであった。聖徒たちはブランデベリーを歓迎し、晩餐会や舞踏会などでもてなした。またほかの役人たちも同様のもてなしを受けた。最後に到着したのは、陪席判事のペリー・E・ブロッカスであった。彼は一緒に旅をしてきたオーソン・ハイドに、できればユタ準州選出の下院議員になりたいという希望を漏らしていた。8月17日に到着したとき、彼はバーンハイゼルが下院議員に選ばれていたことを知って落胆した。

聖徒たちと「異邦」の役人たちとの摩擦は間もなく始まった。州務長官のブラフトン・ハリスが、人口調査と選挙に関して不正があったとブリガム・ヤングを非難した。法律上この二つについてはどうしても州務長官による認定が必要であった。ハリス夫人はモルモンの男性とその多妻婚の相手の女性たちは動物と同じだと、見下した発言をした。また教会に対して非友好的な彼は、州の印（訳注：州の公式文書に押すための印）と州政府の経営に充当されていた2万4,000ドルを知事ブリガム・ヤングに引き渡すことを拒んだ。

9月にペリー・ブロッカス判事がブリガム・ヤングに、教会の総大会で話をさせてほしいと言ってきた。彼は大会の席上、聖徒たちの親切と歓待への感謝の言葉を述べた後で、モルモンは愛国心がなく、女性たちに不道徳（多妻結婚が理由）であるといった激しい非難を始めた。聴衆はブロッカスの話に激怒した。ヤング大管長は立ち上がって話し、その無分別な言葉を非難した。後に大管長と判事の間には手紙のやりとりがあったが、見解の一致に至ることはなく、融和し難い相違点が明らかになっただけであった。教会員でない人々の立場から見ると、合衆国とその役人に

## 隔絶の地ユタ

対して激しい非難を浴びせているモルモンは反逆罪に値し、特異な結婚制度を実施している不道徳で奇異な民であり、また教会の指導者の下に「非アメリカ」的な政治体制下にあると映っていた。一方末日聖徒は、ミズーリ州での迫害に対する救済要請を無視され、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殺害者を裁判にかけようとしなかったことで、合衆国を批判するのは当然であると考えていた。さらに聖徒たちは、そのような不公正にもかかわらず、自分たちは合衆国憲法に忠誠を尽くしていることを主張した。

ブロッカス、ハリス、ブランデベリー、デイの4人は1851年の9月28日にユタを去った。聖徒たちに「逃亡役人」と呼ばれた彼らはワシントンD.C.に戻ると、多妻婚を含めてモルモンについて極端な尾ひれを付けた話をした。彼らはさらに、自分たちはブリガム・ヤングと多くのユタ住民の不法な行為と反逆的な勢いのために戻って来ざるを得なかったと主張した。そのような非難を予期していたヤング知事は、フィルモア大統領に手紙を書き送り、準州内の様子に対する自分の見解を示した。彼はまた教会の立場の申し立てを行うためにジェデダイア・M・グラントを派遣し、ジョン・M・バーンハイゼルとトーマス・L・ケインに合流させた。ヤング知事の手紙を受け予備的調査を行った後に、合衆国の國務長官ダニエル・ウェブスターは「逃亡役人」たちに、職務に復帰するか辞任するかのいずれかを選択するように命じた。それに対して4人は辞任の道を選んだのである。

一方ユタにおいては準州としての業務が滞りなく進み、以前デゼレト暫定州によって定められていた法律は正式に準州の法律の中に組み込まれるに至った。合衆国大統領に敬意を表して州議会はミラード郡を作り、郡庁所在地をフィルモアと名付け、そこを将来の準州の州都にすると指定した。1852年2月4日に採択された法案は非常に重要なもので、民事と刑事の両方の原審権を教会の役員によって管理されていた地元ユタの検認裁判所に与えるというものであった。これによって事実上、ほ

初め教会の指導者たちは、準州の州庁を地理的に見て州の中央部に置くことを考えていた。そのような背景があって、1851年10月にフィルモアが選ばれたのである。トルーマン・O・エンジェル設計による準州庁舎の建設は1851年の12月に始まったが、1857年3月の南庁舎の完成をもって終了するにとどまった。

準州議会は1855年12月にここで最初に開かれたが、フィルモアで議会が開かれたのはこの一度だけであった。庁舎完成に十分な資金を連邦政府が拠出するまでは、準州議会はソルトレーク・シティで開いていくことが決定された。

庁舎建設のための支出が承認され、ヤング大管長の計画が実行に移されていけば、東庁舎、西庁舎、北庁舎も建てられるはずであった。そしてこれら東西南北の4庁舎は中央部にある丸天井を持つ円型の建物によってつながれることになっていた。この南庁舎はこれまで、宗教上の集会所、学校、郡、市の市民センター、劇場、監獄、ダンスホール、そして最後は博物館として用いられてきた。



ユタ州歴史協会の厚意により掲載



## 時満ちる時代の教会歴史

とんどの訴訟が合衆国大統領の選任した判事が管理する連邦裁判所ではなく、地元の裁判所で行われるようになった。この状況は、1874年に連邦議会がユタ準州のこの法律を廃止するまで続いた。一方でフィルモア大統領は、聖徒たちを批判することがないために彼らに好まれた人々を役人として任命した。

1853年の秋、聖徒たちと教会外の人々の双方にとって悲しむべきことが起きた。ジョン・W・ガニソン大尉が、計画されていた大陸横断鉄道のためにユタ準州内で調査を行うために、陸軍の測量技師団を率いてやって来た。カリフォルニアへ向かうある移住団の者たちに自分たちの部族の一人を殺され二人を傷つけられたインディアンたちが復讐心<sup>ふくしゅう</sup>を燃やし、ガニソンの一隊を攻撃して、ガニソン大尉とほか7人を殺害したのである。10月のことであった。この悲劇的な事件は末日聖徒の入植地に暗い影を投げかけた。ガニソンはその優しく友好的な人柄によって人々に尊敬されていたからである。教会員がガニソンたちの殺害に加担していたという事実はなかったが、その恐ろしい行いを計画し、命じたのはモルモンだったといううわさによって教会のイメージは損なわれた。1854年、ブリガム・ヤングの知事としての4年の任期が終わると、フランクリン・ピアス大統領はブリガム・ヤングの再任を望むユタ住民の請願を却下した。そしてE・J・ステップトー大佐を知事として選んだ。任命を受けたステップトーは、準州内を通る軍用道路建設の可能性を調査し、またガニソンたちの殺害者の逮捕を後押しするという使命を持ってユタへやって来た。しかしステップトーは知事としての任命を受け入れる代わりに、ブリガム・ヤング再任の請願書に署名して、それからカリフォルニアへと向かった。ピアス大統領は何人かの人々に知事職への就任要請をしたが、彼らにも断られて結局はブリガム・ヤングを再任命したのだった。

## 加速するシオンへの集合

新しいシオンの中にモデル都市を築くという非常に大変に思える仕事を進める一方で、教会の指導者たちはほかに様々なチャレンジを引き受けていた。最も急を要したのは、イエス・キリストの福音を世の人々に伝えることと、改宗して聖徒になった人々の到着に備えることであった。教会の目標はすべての会員を西部に集めることであった。伝道活動は最初にイギリスで、さらにヨーロッパ大陸の各地でかなりの成功を収め、1850年代にはヨーロッパ全体の教会員数がユタ準州のそれをしのぐまでになった。1850年を例に取ると、英国諸島の末日聖徒は3万747人を数え、一方ユタの会員数は1万1,380人であった。伝道活動の成功が続く中で、あまりにも多くの人々の移住の手配は非常に困難な仕事になってきた。それは特に、改宗者のほとんどが貧しい人々だったことに起因していた。

このような困難があってもかわらず、1849年に永続的移住基金が創設されたことにより、アイオワ州の宿营地にいた残りの聖徒たちも、1852年までにはソルトレーク盆地へ入植することができた。その後の関心は、ヨーロッパの数多くの教会員を集合させることに向けられた。ヨーロッパの聖徒の集合については、すでにユタに入っていた友人や血縁者が重要な役割を果たした。教会の指導者たちは、現金や現金化できるものをソルトレーク・シティーの永続的移住基金事務局に寄付するよう、友人や家族たちに勧めた。それを受けた事務局はヨーロッパの代理業者に対

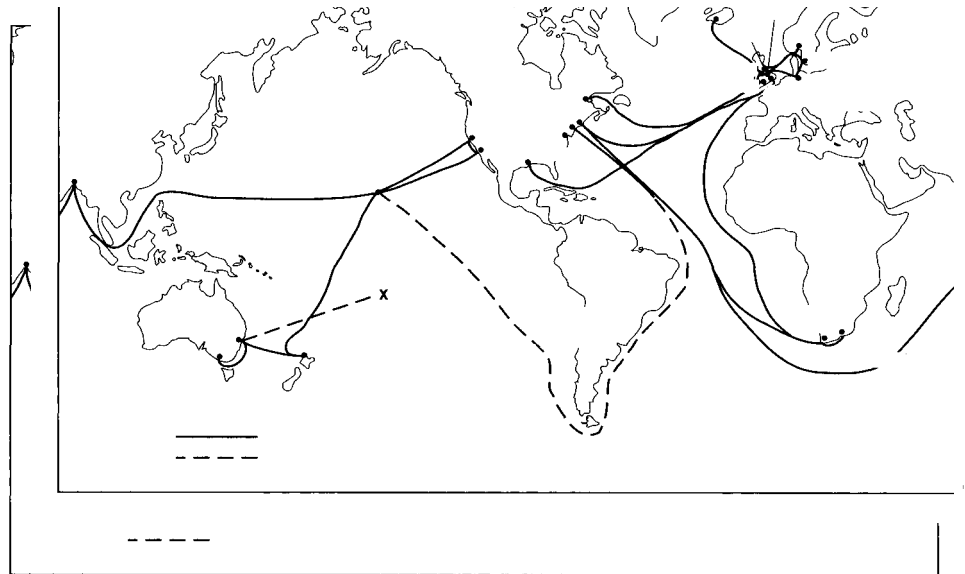
## 隔絶の地ユタ

して、その会社の世話の下に指名された人物をアメリカへ送るように指示を流した。しかし永続的移住基金だけに頼った移民はそれほど多くはなかった。ヨーロッパの聖徒たちの多くは、全額あるいは一部を自分自身で賄ったのである。

永続的移住基金事務局は移住して来る聖徒たちを助けるために、グレートベースンまでの各所に代理業者を置いた。イギリスのリバプールの代理業者は用船契約で船を雇い、移住予定者を集め、指示を与えた。最初の数年間は移住者たちはニューオーリンズまで船旅を続け、そこで別の代理人の迎えを受けて、さらにミシシッピ川をセントルイスまでさかのぼったのである。3番目の代理人は、ミズーリ川を500マイル（約800キロ）進んで次の中継地点までの手配をした。その中継地点には、ユタまでの陸路の旅の準備をした最後の代理人がいた。1855年に、ニューオーリンズ

ミシシッピ川ルートは、聖徒たちの健康を考えて取りやめとなり、それに代わって、移住者たちはフィラデルフィア、ニューヨーク、ボストンから合衆国に入国し、そこからは鉄道でセントルイスからさらに西の終点まで進むようになった。通常、旅は全行程で8か月から9か月を要した。

モルモン移民の進んだ海路



50年以上にわたって行われた海路による移住の中で、聖徒たちは「たった一度だけ海難事故を経験した。アメリカの帆船ジュリア・アン号の難破である。」<sup>5</sup>

28人の教会員を乗せたジュリア・アン号は、サンフランシスコを目指してオーストラリアを出航した。ジュリア・アン号が強風に襲われたとき、5人がさんご礁の海にのみ込まれ命を落とした。

「聖徒たちと何人かの船長たちは、この事故による被害が驚くほど小さかったのは神の手による守りと、多くの場合航海を始める前に船を奉献し、祝福したことによると考えていた。これらの船の多くは最後には海のもくずとして消えたが、モルモンの乗客を運んでいるときにそのようなことは起こらなかった。」<sup>6</sup>

1855年夏のクリケットの害はユタの経済に大きな衝撃を与え、聖徒たちの献金をもってしても永続的移住基金の維持が困難な事態になった。そこで教会の指導者たちは、移住にかかる経費を少なくするための方法を考えた。プリガム・ヤングは1855年9月に、ヨーロッパ伝道部のフランクリン・D・リチャーズ部長に手紙を書

## 時満ちる時代の教会歴史

き送った。

「これまでのように、幌馬車や牛馬を買う経済的余裕がありません。そこで、わたしが以前に考えた計画に戻すことにしました。手押し車を作り、それに荷を積み、徒歩で進むようにするのです。10人に対して1頭か2頭の牛を付けるようにします。聖徒たちは速く進むことができます。以前ほど速くないにしても、はるかに安く済みます。また早めに出発して、毎年多くの兄弟たちを死に至らしめている病気が広がるのを避けることができます。」<sup>7</sup>

手車による移住について教会員全体に詳細な指示を与える大管長会の書簡が1855年10月の総大会において発表されたが、実行に移されたのは1856年になってからであった。手車を使うことによって移住の経費は一人当たり3分の1から2分の1まで削減できると見積もられていた。結果的に、より多くの人々が永続的移住基金を通してシオンへ来ることができた。

1856年の移民の数は、多くの聖徒が初めて手車で平原を横断することもあって著しい増加を見た。合衆国東部の港に到着した聖徒たちは、そこから鉄道で終点のアイオワ州アイオワ・シティーへ進んだ。アイオワ・シティーには代理業者が待っていて、100から500ポンド（約45キロから約230キロ）の食糧や衣類を手車に積み、それを引っ張るかそれとも押すかの方法によって徒歩で進む手車の準備をしていた。帰還宣教師に率いられた最初の3隊は平原を踏破し、9月26日から10月2日の間にソルトレーク盆地へ無事に到着した。最初の隊の旅装の準備を助けたマッカリスター長老は一つの明るい曲を作曲したが、その曲は手車を引いて平原を進む移民たちに愛唱された。

「ヨーロッパの海辺に住む聖徒たちよ、  
さらに多くの聖徒たちとともに備えをせよ。  
祖国を去る備えをせよ。  
神の裁きが近いからである。  
荒れ狂う海を越える備えをなせ。  
はるかなる盆地へ行く前に。  
そして忠実な者たちと旅を始めよ。  
手車を引き、草原を渡れ。

コーラス——  
押す者と引く者  
力を合わせて、山を登る。  
心明るく進め。  
かの盆地へ着くまで。」<sup>8</sup>

先に到着していた人々と同じように、手車隊の人々も危険と試練を味わった。6歳のアーサー・パーカーの救出劇が行われたのは、最初の手車隊がアイオワ・シティーとネブラスカ州フローレンスの間の森林地帯を通過していたときのことだった。病気の状態が続いていたアーサーは、ある日途中座って休んでいるときに、気がつかないうちに置き去りにされてしまった。その隊は旅を続けたが、やがて突然の嵐

## 隔絶の地ユタ

に襲われ、急いでキャンプを設営した。子供たちの中にアーサーの姿がないことに気づいた彼らは、手分けして彼を捜し始めた。2日の探索の後、切迫した食糧不足という事情から彼らはやむを得ず旅を進めることになった。パーカー兄弟はただ一人、息子を探すために道を引き返した。彼が隊を離れるとき、妻が真っ赤な肩掛けを渡した。息子が死体で見つかった場合はそれで息子をくるみ、無事であれば、見守る家族への合図にそれを振ることにした。

何時間にもわたって、パーカー兄弟は頼るもののない小さな息子の名を叫び、捜し、祈りながら道を戻った。郵便物中継所を兼ねた交易所で、彼はある農夫とその妻がアーサーを見つけ、助けたということを知られた。アン・パーカーとその子供たちは3日間、夫とアーサーの帰りを待ちわび、隊全体がアーサーのために祈っていた。3日目に、進んで来た道を振り返った彼女は、遠くに夫の姿を見た。夫は赤い肩掛けを振っていた。アンは砂の上にくずおれた。そしてその夜、彼女は6日ぶりに眠りに就いた。<sup>9</sup>

ツイス・バーミングムも最初の手車隊の一員であった。彼は手車隊は1日に平均して約25マイル（約40キロ）進んだと記録している。1856年8月3日の彼の日記には次のように書かれている。

「朝食は取らず5時に出発し、深い砂の中を6マイル（約10キロ）ほど手車を引かなければならなかった。車が荷台の高さまで砂の中にのめり込んでしまう場所もあり、飢えと渇き、焼けつくような熱気による消耗でふらふらになり、何度か体を横にして休まなければならなかった。ほかの多くの人たちも同様だった。中には倒れてしまう人たちもいた。今日は悲しみのどん底だった。心が引き裂かれてしまいそうだった。病気のかわいそうなケイト、彼女は四つん<sup>ば</sup>這いになって進み、子供たちも空腹と疲れで泣いていた。子供たちが元気をなくさないように、手車に乗せたり、道中あやしったりしなければならなかった。」<sup>10</sup>

1856年10月、ソルトレーク・シティーで行われる総大会の準備をしていた聖徒たちはだれもが、その年の移入は第3陣の手車隊の到着で終わると考えていた。しかし総大会の2日前にソルトレーク盆地にやって来たフランクリン・D・リチャーズは、雄牛<sup>けんいん</sup>が牽引する2両の物資運搬車を伴って盆地へ向かうさらに2組の手車隊があり、無事到着するには食糧や衣類が絶対的に不足していることを伝えた。そのウィリー隊とマーティン隊はリバプールを出発するのが遅れ、そのうえアイオワ・シティーで手車ができるのを待ってさらに遅れを重ねたのであった。そこで作られた手車は、よく乾燥していない木材で作ったためにネブラスカ州のフローレンスで修理が必要になり、ますます歩みが遅れた。

彼らの指導者の一人、リーバイ・サベージは春になるまでウィンタークォーターズで待つように聖徒たちを強く説得したが、彼の考えは、熱心ではあったが西部の自然の恐ろしさを知らない人々によって否決された。そのとき彼はこう宣言した。

「兄弟姉妹、わたしが言ったことはほんとうです。でも、皆さんが行く以上わたしも行きます。皆さんとともに行きます。力の及ぶかぎり、皆さんをお助けします。ともに働き、休みを取り、苦勞し、もし必要とされるなら皆さんと一緒に死にます。慈悲深い神がわたしたちを祝福し、守ってくださるように。」<sup>11</sup>

10月初め、二つの手車隊はワイオミング中部を苦しみあえぎながら進んでいた。わ

## 時満ちる時代の教会歴史

ずかに分配された衣類では凍るような朝の寒さをしのぐことなど不可能に近かった。

二つの隊がまだ平原にいることを聞いたブリガム・ヤングは総大会に集っていた聖徒たちに語った。その集会は正式に予定されていたよりも1日早く、10月5日に開かれた。ブリガム・ヤングはこう語ったのである。

「次にやらなければならないのは彼らをここに連れて来ることです。……わたしは今日、監督たちに援助を要請したい。60頭の元気なラバの隊と12台から15台の荷車を集めたい。明日まで待つことはできないし、その翌日まで待つこともできません。……

皆さんに申し上げたい。わたしが今話しているような原則を実行に移さないかぎり、皆さんの信仰、宗教、信仰告白はだれ一人をも神の日の栄えの王国に救うことはできません。さあ行って、今平原にいる人々を連れて来なさい。」<sup>12</sup>

この呼びかけに対する反応は感動的なものであった。食糧などの物資を積んだ16両の幌馬車がすぐに集められ、10月7日の朝には4頭の元気なラバに引かれた16台の幌馬車と27人の頑健な若者たち（ブリガム・ヤングの「緊急招集兵」と呼ばれた）が最初の救援物資を積んで東へ出発した。そして、準州内の各地から続々と援助が寄せられた。10月末までには、250台の幌馬車が救援に向かった。

ウィリー隊はサウスパスの東数キロの所で例年になく早い雪に閉じ込められ、マーティン隊はそれよりもさらに遅れを取り、（東寄りの）ノースブラット川最後の渡し場の近くにいた。救援隊がようやくウィリー隊を見つけたのは10月19日のことであった。マーティン隊はさらに9日後に発見された。救援隊の中には、マーティン隊は冬営地となりそうな所をきつと見つけたと考え道を引き返してしまった人々もいた。しかし、どちらの隊の聖徒たちも凍え、足取りは重く、餓死寸前の状態であったのである。それまでに何十人もの手車隊員が死んでおり、救援隊の到着後も100人近くが死亡したのである。

絶望的な状況にあったマーティン隊を最初に発見した人々の中に、強健な肉体を持つイフレイム・ハンクスがいた。彼はそこへ来る途中野牛を仕留め、それを食用に解体していた。イフレイムはそのときのことを次のように述懐している。「わたしがその不運な一行を見つけたのは、まさしく彼らが夜のキャンプをしているときだった。わたしはそのキャンプへ足を踏み入れたときに見た光景を決して忘れない。その哀れな人たちは飢えに苦しみ、やつれ切った顔つきをしていた。寒さに震えながら、のろのろと体を動かして乏しい夕食の用意をする彼らの姿は、どんなに強い心の持ち主でも涙を誘われずにはいなかった。わたしの姿に気づくと、彼らは言葉では言い尽くせない喜びをもって声を上げた。そしてわたしが持って行った新鮮な肉を見たときの彼らの感謝の言葉は大変なものであった。」<sup>13</sup>

助けた人々を盆地へ移送する仕事も困難なものであった。夫を失った女性、親を亡くした子供たちが大勢いた。足が凍傷にかかって、歩けない人も幾人かいた。14歳のマギー・プーセルと10歳の妹エレンの足から靴と靴下を脱がせると、皮膚も一緒にはがれてしまった。マギーの足の壊死した肉の部分はそげ落ちていた。しかしエレンの足の凍傷はあまりにひどい状態で、ひざから下を切断しなければならないほどだった。ウィリー隊は11月9日にソルトレーク・シティに到着し、マーティン隊も重い足取りながら、聖徒たちの温かな迎えを受け11月30日に到着した。12月に



イフレイム・ノールトン・ハンクス（1826 - 1896年）は、ノーブー神殿の建設工事で働いていたところに、七十人に聖任された。彼はモルモン大隊の一員として従軍した。ユタへ着いた後は、距離にして1,200マイル（約1,900キロ）以上あるソルトレーク・ミズーリ川間で合衆国の郵便物を運ぶ仕事に携わった。イフレイムは7年の間に50回以上草原を横断した。そして死ぬ3年前に、ブリガム・ヤング・ジュニアによって祝福師の職に聖任された。

## 隔絶の地ユタ

### 手車隊

指導者	平原を横断した年
1. エドマンド・L・エルズワース	1856
2. ダニエル・D・マッカーサー	1856
3. エドワード・バンカー	1856
4. ジェームズ・G・ウィリー	1856
5. エドワード・マーティン	1856
6. イズラエル・エバンズ	1857
7. クリスチャン・クリスチャンセン	1857
8. ジョージ・ロウリー	1859
9. ダニエル・ロビンソン	1860
10. オスカー・O・ストッダード	1860

は、フォートブリッジャーで休息していた幌馬車の一行が盆地に着いた。

この不運な二つの手車隊の200人以上の犠牲者は、シオンに到着する前に凍てついた墓穴に葬られた。合衆国の開拓者移住史の中でこの二つの隊ほど多くの犠牲者を出した例はほかにない。悲劇の原因は旅の方法ではなく、例外的かつほとんど予測のつかない幾つもの悪条件が積み重なった結果によるものであった。教会はその後もさらに5つの手車隊を支援したが、それらはいずれも大禍なく盆地に到着している。

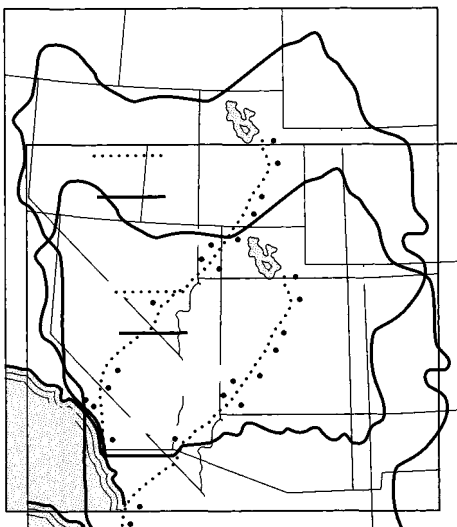
### 進展する入植地の建設

ソルトレーク・シティーに着いた聖徒たちは、通常エミグレーションキャニオンを抜けた所を出迎えを受け、そこからエミグレーションスクウェアと呼ばれた街区に案内された。ブリガム・ヤングや何人かの教会指導者が彼らを歓迎し、市内のワードがよく準備された祝宴を開いてもてなしをした。数日間地元の聖徒たちの世話になった後は、他の入植地へ派遣されるか、ソルトレーク・シティー地域に土地を与えられ、そこで働くようになるかのどちらかであった。特に初期のころは、移住して来た聖徒たちは多くの場合、彼らの持っている技術と様々な入植地での必要とを考慮してどこへ派遣されるかが決まった。1847年から1857年の間に100以上の町が開かれ、入植事業が行われた。

1849年から50年にかけてパーリー・P・プラットが指揮して行った南部地域の探検に続いて、教会の指導者たちは、南カリフォルニアへ向けて南西方向に伸びる山岳地帯の「モルモン回廊」沿いに入植地の建設を始めた。その皮切りが、農業の中心地パロワン、鉄生産の中心地シダー・シティーであった。どちらも1851年に開かれた町である。パーリー・P・プラットの探検隊が推薦した地域への入植は、1853年までにほとんどすべてが実行に移された。

南カリフォルニアのサンベルナルディノも1851年に開かれた入植地である。ここは太平洋岸の港に近い物資の補給地としての機能を持たせることを目的として作られた。この入植地は十二使徒定員会のアマサ・ライマン長老とチャールズ・C・リッチ長老が管理し、1857年に約7,000人の人口を擁するまでに発展していた。ヨーロッパの聖徒たちを南アメリカのケーブホーン経由でカリフォルニアに向かわせ、そこからサンベルナルディノを通してモルモン回廊を北上し、ソルトレーク・シティーに至らせるという計画もあったが、用船契約が結ばなかったために実現することはなかった。しかし、オーストラリア、ニュージーランド、南太平洋諸島からの聖徒たちの一部は、サンベルナルディノ経由でユタへ来たのである。後になって、ブリガム・ヤングはカリフォルニアにこのような大きな入植地を持つことの意義を考え直した。そして1857年にこの入植地の教会員たちはそこを引き揚げて戻って来るようにとの指示を受けた。一つは連邦軍がユタに迫っていたためであり、もう一つの原因としては、モルモン以外の隣人との間で摩擦や問題が生じていたからであった。サンベルナルディノの住民たちの中には、預言者の指示にこたえず、カリフォルニアにとどまった人々もいた。

入植地の発展は、インディアンに対する伝道活動によっても影響を受けた。シダー・シティーが開かれて間もなく、パージン川とサンタクララ川一帯を探検する調査隊が派遣され、1854年には、その地域のインディアンに福音を伝えるために宣教



ユタ南部を通り、ネバダを経て、カリフォルニア南部へ到達するルートは、「モルモン回廊」として知られていた。このルートに沿って置かれた一連の入植地やとりでは、太平洋岸へ向かう旅人たちの避難所となった。

## 時満ちる時代の教会歴史

師が送られた。この宣教師たちは福音を教えるだけでなく、インディアンたちが家を建てたり、農業技術をさらに学ぶ助けをした。また宣教師たちは、ネバダ州のラスベガス、ユタ州の現モアブ付近のコロラド川沿いにあるエルクマウンテン、アイダホ州中部のサーモン川沿いのフォートレムハイにインディアン伝道部を開くように割り当てられていた。ユーツインディアンの間である程度の成功を収めていたエルクマウンテン伝道部は、ユーツインディアンとナバホインディアンの間に戦いが起きて一部のインディアンが宣教師たちを攻撃してきたために、1855年に閉鎖された。ラスベガスとフォートレムハイの入植者たちは1858年にブリガム・ヤングによって呼び戻された。フォートレムハイが閉鎖されたおもな理由はショショニインディアンがそのとりでを攻撃し、数人の宣教師が殺されたためであった。

教会はオレゴントレイルとモルモントレイルの分岐点の近くに二つの小さな入植地を開いた。この二つの入植地を建設したのは東からユタへ入る人々に必要な情報を与えることと、移民たちの補給基地とするためであった。ブリガム・ヤングは開拓者のジム・ブリッジャーからフォートブリッジャーを購入したいと考えていたが、オーソン・ハイドが入植地の一団を率いてそこを訪ねたとき、ブリッジャーとその仲間たちはとりでを売るつもりはないと断った。兄弟たちは当てが外れたとはいえがっかりすることなく、新しい入植地フォートサプライをそこから南へ12マイル（約20キロ）ほどの所に築いた。そこで彼らはインディアンたちへの伝道活動を行った。1855年になって、教会はとりでの所有者であるジェームズ・ブリッジャーとルイス・バースケイスからフォートブリッジャーを購入することができた。この二つの入植地はモルモンの旅行者にもそうでない旅行者たちに対しても物資の補給を行った。

この最初の10年間に行われた辺隔地における入植地建設の最後は現ネバダ州のカーソン盆地（1850年代にはまだユタ準州の一部だった）で行われたものであった。1855年にブリガム・ヤングは、検認裁判所判事および郡政の管理者としてオーソン・ハイド長老をこの地へ派遣した。1856年には約250人の人々がその美しい盆地帯に入植し、インディアンへの伝道と教化の任を与えられた。しかし間もなく、教会による政治面での管理と文化的影響を嫌うモルモン以外の人々との間に様々な問題が持ち上がった。その地域での金鉱発見は、さらなる問題となった。そして1857年にこの入植地は解散された。

辺隔地での入植地建設には様々な問題があったにもかかわらず、教会のその努力は幾つかの要因によって総体的には成功したとの確信を与えた。個人的にあるいは有志の集まりで入植事業が始められるということはほとんどなかった。ほとんどの場所は教会が事前に選び、入植の後押しをした。場所の選定については、飲料に適した水、肥沃な土地、そのほか重要な物資の調達、インディアンの攻撃からの安全などを確実にするために、慎重に行われた。また数多くの有能な男性が入植地の指導を行うようにした。何百人という監督、管理長老、ステーキ会長たちがそれぞれの町や村の建設を監督し、霊的な面でのアドバイザーとしてはもちろん行政担当者としての役割を果たした。そして多くの人々がそれらの責任を10年、20年、30年、あるいはそれ以上の長きにわたって果たしたのである。入植地の活力の源は、毎年やって来る何千人という移民たちであった。ユタにおける最初の10年間に、シオン



コープフォートは1867年に開かれた。アイラ・ナサニエル・ヒンクレーは1867年にブリガム・ヤングから、コールビルの家を後にして北のフィルモア入植地と南のビーバー入植地の間を流れるコープ川沿いの地にこのとりでを築く任務を与えられた。南と北の入植地からそれぞれ1日の道のりにあるこのとりでは旅行者たちの防護所となった。

四方の壁はそれぞれ100フィート（約30メートル）の長さがあり、厚さは基部が4フィート（約1.2メートル）で頂部は2フィート（約60センチ）、高さは18フィート（約5.5メートル）あった。

1988年8月13日に、この歴史的なとりでが当教会に譲渡された。現在は教会の訪問者センターとして用いられている。

## 隔絶の地ユタ



トマス・ブロック(1816 - 1885年)は長年にわたり、教会の様々な状況の中で書記として働いた。初めはジョセフ・スミスの書記として働き、後にブリガム・ヤングに仕えた。彼はまた1847年7月24日にソルトレーク盆地に入った開拓者の隊の書記としても働いたことがある。七十人に聖任された彼は1842年と1856年に、イギリスで2度伝道の務めを果たしている。

に移住して来た聖徒は約4万人に上る。

それぞれの入植地にどのような人を送るかは、様々な方法で決められた。ブリガム・ヤングによって選ばれた家族は、新しい入植地が発表される総大会の中で名前を提示された。時には路上にたむろしている怠惰な兄弟たちに伝道や入植の責任が与えられることもあった。例えば1855年から56年にかけての冬、州議会堂で裁判が行われていたとき、その様子を見ようと多くの人々が詰めかけていた。議事堂内やその周りを歩き回っているだけの人々もいた。そのようなことが数週間続いていたとき、ブリガム・ヤングは書記のトマス・ブロックを「そこに行かせて彼らの名前を控えさせた。裁判の見物よりも大切なことで、自分たちがなすべきことを何も持っていないのであれば、彼らに伝道の責任を与えるという目的があった。」<sup>14</sup>ヒバー・C・キンボール副管長はその人たちの中から、30人をラスベガスへ、48人をフォートブリッジャーへ、35人をフォートレムハイへ派遣した。ほかの人たちもラスベガスに近い鉛鉛山での仕事を割り当てられたり、東インド諸島に召されたりした。また他の場合、教会の中央幹部は各グループの指導者となる人を指名し、彼らにどの家族を選び、募集するかを決める権限を与えるということもあった。すべての人がそのような責任を与えられたことを喜んだわけではなかったが、多くの場合、これらの召しは信仰上の決意の試金石として受け入れられたのである。

それぞれの新しい入植地の指導者は慎重に選ばれ、また新しい町の建設に当たって多岐にわたる能力、技術を確保するために人材の選定が行われた。ほとんどの入植地の中核になるのは農業に従事する人々であったが、ほかに大工、水車大工、機械工、家具職人、左官、塗装工、れんが造り職人、石工、ダム建設者、織物職人、仕立職人、皮なめし職人、測量技師、動物の肉の解体ができる人、パン職人、学校の教師、音楽家、幌馬車造りの職人、車輪修理工など様々な技術を持つ人々が必要であった。聖徒たちの入植地のほとんどは、社会生活と教会員としての活動が密接につながるように注意深く配慮されていた。中心部は、教会また学校として用いられる集会所の用地とされた。通常入植地は広い道路で分けられたます目状の街区によって構成されていた。各家族は町の中に地所を割り当てられて、そこに庭、小さな果樹園、鶏や家畜の小屋などを作った。しかし、主作物と家畜用の牧草は町の外で作られた。

新たな前哨地点<sup>ぜんしやう</sup>に赴いた女性たちがその入植地で果たした役割については、あまり特筆されることがなかった。しかしほとんどの場合、末日聖徒の社会では男女の貢献度に差はなかった。女性の入植者たちは、家事だけでなく、男性のする多くの仕事も同じようにしていた。姉妹たちは家を建て、煙突を作り、木材の割れ目を埋め、丸太小屋外側の土塗り、内側のしっくい塗りや塗装などの仕事を夫と一緒にした。女性たちも灌漑用水路の開削<sup>かんがい</sup>、植え付け、収穫、まき割り、干し草の積み上げ、牛の番や乳搾りなどの仕事をしたのである。

多くの場合、モルモン<sup>モルモン</sup>の女性たちが抱えていた仕事は、他の西部開拓者女性たちと比べて多かった。なぜなら、彼女たちの夫、父親、兄弟たちは伝道や教会の責任などで家を空けることが多く、家族の世話が女性と年長の子供たちの肩にかかっていたからである。彼女たちはこれらの働きを、日常行っている料理、缶詰作り、ドライフルーツ作り、粉ひき、洗濯、アイロンかけ、キルティング、裁縫、繕い仕事、



## 時満ちる時代の教会歴史

糸つむぎ、織物、石けん作り、砂糖作り、結婚式の準備、葬儀への出席、家屋の修繕や美化、子供の養育、教会の責任などのほかにしていたのである。家計を助けるために、ほかに家の中でできる仕事をする女性たちもいた。彼女たちは縫い物や洗濯の仕事を引き受けて、バター、チーズ、ドライフルーツ、カーペット、靴、帽子、紡ぎ糸、布地、ろうそくの芯<sup>しん</sup>、ろうそくなどを作って売ったりしたのである。教師や助産婦として働く女性たちもいた。完全に時給自足できる家庭はほとんどなく、入植地の姉妹たちは協力し合いながら生活した。

## 初期のユタにおける教会の成長

およそ100の小さな入植地が開かれたユタにおける聖徒たちの最初の10年を通して、ソルトレーク・シティーはその中心として発展していった。グレートベースンの広大な宗教社会の中心地とする、という目的をもってソルトレーク・シティーは計画されたのだった。聖徒たちの築いた社会は、公平な土地の分配、農場や家畜の共有、公共事業の実施、組織立てられた移住計画、天然資源の計画的利用などの点において、西部でもユニークなものであった。また、利益を上げることがを優先して一等地を売却するようなことをせず地域社会全体の利便を重視したために、非常に広い道路を建設することができた。

ソルトレーク・シティーでは半年に1度総大会が開催され、聖徒たちはそれに出席するために何百キロも離れた地からやって来た。総大会は旧交を温め、新しい出会いができる場であり、末日聖徒の一致を証する大切なシンボルの一つとなった。その大会は1852年4月6日にウィラード・リチャーズ副管長によって奉獻された旧タバナクルを会場として行われた。旧タバナクルは大会のほかに、プリガム・ヤングや教会の指導者などが出席する、日曜日の定例集会にも用いられた。大会と日曜日の集会で話された説教の多くは、1850年に創刊された教会の公式な新聞『デゼレトニュース』(Deseret News)に掲載された。1854年の分からはじめて、それらの記事の多くはイギリスにおいて『説教集』(Journal of Discourses)として年に1度まとめて発行された。

聖徒たちの経済的自立を目指す一環として、プリガム・ヤングは各入植地に什分の一事務所あるいは監督の倉を建設するように指示した。これらによって聖徒たちが必要としていたほとんどの物資が供給された。多くの人々は教会が行う様々な事業の中で、10日に1日の割合で労力の提供をした。しかし最も一般的に行われたのは、「物納」による什分の一の納入であった。農業を営んでいる人々は鶏、卵、家畜、野菜、家庭で作った様々なものを什分の一事務所に持って来た。各地の事務所に納められた什分の一のおよそ3分の2は、教会全体の必要を満たすために、ソルトレーク・シティーの中央什分の一事務所へ移された。

グレートベースンに入植を始めた当初から、聖徒たちは教育と文化的な生活に関心を示していた。ソルトレーク・シティーで迎えた最初の冬、子供たちのために1教室だけの学校がテントの中で開かれた。後に教会の指導者はすべてのワードに対して学校建設の指示を出した。1850年にはデゼレト暫定州議会によって、デゼレト大学が創設された。同じ年にデゼレト演劇協会が組織され、毎年数回の上演を行った。1852年にはロレンゾ・スノーが、年代を問わずすべての人々が思索と行動のあらゆる



『デゼレトニュース』は1850年6月15日に、ユタ州ソルトレーク・シティーで創刊された。1898年12月10日までは週に1度の発行であった。週2回発行の『デゼレト・セミウィークリー・ニュース』(Deseret Semi Weekly News)は1865年10月8日に創刊され、1922年6月12日まで続いた。日刊紙の『デゼレト・イブニング・ニュース』(Deseret Evening News)は1867年11月2日から発行を開始し、1920年6月15日号からは紙名を『デゼレトニュース』と変更した。

## 隔絶の地ユタ



ビーハイブハウスの東に位置していたブリガム・ヤングの私学校には、ヤング大管長の子供たちと近くの何人かの子供たちが出席していた。

る分野で学び成長できるようにとの目的で「多分野学術協会」を組織した。「多分野学術」というこの言葉は、彼がこの組織の適切な名称を考えめぐっていたときに自分で作り出したものである。

「この協会は週に1度ロレンゾの家で集会を持ち、そこで会員たちは楽器の演奏や歌唱、朗読、詩、エッセイなどを取り入れながら、科学や哲学に関する講義を含め広い分野にわたる知的なもてなしを受けた。プログラムによっては英語以外の言語で進められることも珍しくはなかった。」<sup>15</sup>

一般的に、社交活動はワードを中心として行われた。ワードで行われる親睦会<sup>しんぼく</sup>、ダンスパーティー、演劇、音楽クラブの活動などは、聖徒たちの社会の雰囲気の良い貢献をした。1850年代にはほかにも、デゼレト農工協会、デゼレト神学協会、園芸協会などが組織された。

教会の組織もまた、ユタにおける聖徒たちの社会の拡大に応じた変化を見せた。各入植地には少なくとも一つのワードが組織され、一人の監督によって管理された。監督は管轄地域の物質的な面と霊的な面における活動を管理した。毎週日曜日には説教集会が開かれた。また月に1度木曜日に断食集会が行われ、教会員たちは断食してためた金を献金した。ブロックティーチング（現在のホームティーチングに似た活動）も開始された。ブロックティーチャーは成人のアロン神権者がメルキゼデク神権を持つ代理教師で、ワード内の家族を訪問し、善い行いをするように説き勧めた。普通少年たちがアロン神権に聖任されることはなかった。しかし、1854年1月のウィルフォード・ウッドラフの記録には次のように書かれている。

「今やわたしたちはここシオンにおいて、若い息子たちを小神権に聖任することを始めようとしている。」<sup>16</sup>

1850年代の宗教上の最も劇的な出来事は、1856年から57年にかけて行われた改革であった。新しい入植地が開かれる一方で、辺境での厳しい生活に明け暮れる中、霊的な無気力状態に押し流されていく教会員が多くいた。西部での最初の10年間、多くの聖徒たちは日々の生活に追われ、霊的な事柄をおろそかにすることが少なくなかった。ユタへの移民の急速な増加と1855年の深刻な干ばつとクリケットの害が重なって起きた経済不安の結果、1856年には改革の必要が特に明白になってきた。多くの聖徒たちが、擦り切れた衣服をまとい、飢餓の瀬戸際に立たされていた。教会の指導者たちは、そのような状態は聖徒たちが戒めを守ることをおろそかにしたことが一つの原因になっていると説いた。

1856年に大管長会は改革への動きを開始した。指導者たちは準州全域を訪ね、かつてない熱心さで悔い改めを説いた。特に第二副管長のジェデダイア・M・グラントは熱烈な説教で聴衆の心を揺り動かした。また、この改革のために召された特別な宣教師たちが聴衆に説き教え、悔い改めを叫んだ。ブロックティーチャーは、各自に行いを省みるように促す質問を書いたリストを教会員の家庭に届けた。すべての聖徒たちが、再度のバプテスマを通して主とその戒めに立ち返るように求められた。教会の指導者はこの改革の運動の先頭に立った。ウィルフォード・ウッドラフはこの改革の特性を次のように記述している。「神の御霊がこの民の指導者の間で火のように燃えている。彼らは人々の中に全能者の矢を放っている。J・M・グラントは鋭いもろ刃の剣で刈り込みを行い、目を覚まし、罪を悔い改めるよう人々に声高

ブロックティーチャーが末日聖徒の家族を訪問したときに尋ねた質問。

**QUESTIONS**

TO BE ASKED THE

**LATTER DAY SAINTS.**

---

Have you committed murder, by shedding innocent blood, or consenting thereto?  
 Have you betrayed your brethren or sisters in anything?  
 Have you committed adultery, by having any connection with a woman that was not your wife, or a man that was not your husband?  
 Have you taken and made use of property not your own, without the consent of the owner?  
 Have you cut hay where you had no right to, or turned your animals into another person's grain or field, without his knowledge and consent?  
 Have you lied about or maliciously misrepresented any person or thing?  
 Have you borrowed anything that you have not returned, or paid for?  
 Have you borne false witness against your neighbor?  
 Have you taken the name of the Deity in vain?  
 Have you coveted anything not your own?  
 Have you been intoxicated with strong drink?  
 Have you found lost property and not returned it to the owner, or used all diligence to do so?  
 Have you branded an animal that you did not know to be your own?  
 Have you taken another's horse or mule from the range and rode it, without the owner's consent?  
 Have you fulfilled your promises in paying your debts, or run into debt without prospect of paying?  
 Have you taken water to irrigate with, when it belonged to another person at the time you used it?  
 Do you pay your tithing promptly?  
 Do you teach your family the gospel of salvation?  
 Do you speak against your brethren, or against any principle taught us in the Bible, Book of Mormon, Book of Doctrine and Covenants, Revelations given through Joseph Smith the Prophet and the Presidency of the Church as now organized?  
 Do you pray in your family night and morning and attend to secret prayer?  
 Do you wash your body and have your family do so, as often as health and cleanliness require and circumstances will permit?  
 Do you labor six days and rest, or go to the house of worship, on the seventh?  
 Do you and your family attend Ward meetings?  
 Do you preside over your household as a servant of God, and is your family subject to you?  
 Have you labored diligently and earned faithfully the wages paid you by your employers?  
 Do you oppress the hireling in his wages?  
 Have you taken up and converted any stray animal to your own use, or in any manner appropriated one to your benefit, without accounting therefor to the proper authorities?

—

In answer to the above questions, let all men and women confess to the persons they have injured and make restitution, or satisfaction. And when catechising the people, the Bishops, Teachers, Missionaries and other officers in the Church are not at liberty to pry into sins that are between a person and his or her God, but let such persons confess to the proper authority, that the adversary may not have an opportunity to take advantage of human weaknesses, and thereby destroy souls.

く叫んでいる。戻って来た長老たちは聖霊と神の力に満たされている。」<sup>17</sup>

この改革は聖徒たちの生活を良い方向に変えた。神の教えに添った道徳的な行いが再び彼らの生活の主流となったのである。彼らは遭難した手車隊の救出を通して、互いに愛し合い、危急に際しては手を携えて立ち向かえることを示した。グレートベースンに最初に到着してから10年目に当たる1857年の夏までに、教会は強固な基盤を築き、聖徒たちのなすべきこととして地上に回復された様々な事柄を達成していたのである。

## 注

1. *Journal of Discourses*『説教集』5 : 226で引用
2. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1849年12月31日に続く記録で引用, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
3. *Journal History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*, 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会歴史』1850年3月5, 21, 27日参照, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
4. 『日誌で見た教会歴史』1850年9月16日
5. コンウェイ・B・ソーン, *Saints on the Seas: A Maritime History of Mormon Migration, 1830 - 1890* 『海上の聖徒たち - モルモン海路移住史』1830 - 1890年 (Salt Lake City, University of Utah Press, 1983), 78
6. ソーン 『海上の聖徒たち』58
7. "Foreign Correspondence" *Millennial Star*

## 隔絶の地ユタ

- 「国外との通信文」『ミレニアルスター』1855年12月22日付, 813
8. リロイ・R・ヘーフェン, アン・W・ヘーフェン共著, *Handcarts to Zion* 『シオンへ進む手車』(Glendale, Calif.: Arthur H. Clark Co., 1960), 272
9. *Treasures of Pioneer History* 『開拓者歴史秘話』全6巻 (Salt Lake City: Daughters of Utah Pioneers, 1952 - 57), 5 : 240 - 241参照
10. “To Utah By Hand” *American Legion Magazine* 「人力によってユタへ」『アメリカンリーグジョン・マガジン』エライザ・M・ウエイクフィールド, *The Handcart Trail* 『手車隊』(Sun Valley Shopper, 1949), 13で引用
11. ヘーフェン, ヘーフェン共著 『シオンへ進む手車』96 - 97
12. “Remarks” *Deseret News* 「所見」『デゼレトニューズ』1856年10月15日付, 252
13. ヘーフェン, ヘーフェン共著 『シオンへ進む手車』135
14. ヒーパー・C・キンボールから息子ウィリアムにあてた手紙。「国外との通信文」『ミレニアルスター』1856年6月21日付, 397で引用
15. フランシス・M・ギボンス, *Lorenzo Snow: Spiritual Giant, Prophet of God* 『大いなる霊の持ち主, 神の預言者ロレンゾ・スノー』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1982), 73
16. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1854年1月31日
17. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1856年10月9日

# ユタ戦争

年表	
年代	重要な出来事
1857.7.24	ブリガム・ヤングと聖徒たちに、連邦政府軍によるユタ遠征の報が届く
1857.9.7	スチュアート・バン・ブリー大尉が軍の補給物資調達のためにソルトレーク・シティーに到着する
1857.9.11	シダー・シティーの近くでマウンテンメドローの虐殺が起こる
1857.9.15	ブリガム・ヤング知事がユタ準州に戒厳令を敷く
1857.10	ロト・スミスとその一隊が連邦政府軍の補給物資輸送隊を急襲する
1857 1858冬	ジョンストン指揮下の政府軍がキャンブスコットで越冬する
1858.2 4	トーマス・L・ケイン大佐を介して行われた教会指導者とアルフレッド・カミング知事の調停交渉が成功する
1858.3 5	ユタ北部の入植者たちが南部へ移動する
1858.6	講和委員会が教会に特赦を与える
1858.6.26	ジョンストン指揮下の政府軍がソルトレーク・シティーを通過する

アメリカ国民として忠誠を尽くしていると自負していた末日聖徒は、「モルモンの反乱」を鎮圧するために大規模な連邦政府軍が西進しているという知らせを聞いて憤然とした。以前の迫害の時代を思い出し、また自分たちの入植地を追い出されることになるのではないかと危惧した。その後の数か月間、聖徒たちは自衛の準備をした。教会の指導者も会員も、二度と弾圧を受けたいとは思わなかった。

教会と連邦政府の摩擦の中心にある問題は、聖徒たちが行っていた多妻婚と、教会によるユタ準州の司政権の掌握という二つの事柄であった。1856年にユタ準州が州昇格の申請を行ったときに、それに対して激しい反対が起こり、「モルモン問題」が国政レベルにまで発展した。

1854年に奴隷制度撤廃を強く唱える共和党が結成され、1856年には最初の大統領候補を押し立てた。共和党はその綱領の中で、準州で行われている二つの「悪習」すなわち多妻婚と奴隷制度を禁止するよう議会に強く働きかけていた。奴隷制度の支持が多妻婚への支持と受け取られることを嫌った民主党は、共和党と同じようにモルモンを激しく非難した。民主党候補のジェームズ・ブキャナンは選挙運動期間中に、自分が当選した場合には、ブリガム・ヤングを準州知事の職から降ろすと公約していた。

それと同じころにユタでは、末日聖徒たちの生き方を変えることを己の使命と考え、住民たちに不快感を与えていた準州官吏と聖徒たちの間に新たな問題が生じていた。公有地監督官、3名のインディアン管理官、2名の最高裁判事、前合衆国郵便事業請負業者たちからの書面と口頭による報告がワシントンに届き、教会に対する東部の政治家たちの印象をさらに悪化させた。最悪の結果をもたらしたのは、1854年にユタへ到着するとすぐに聖徒たちと対立した陪席判事ウィリアム・W・ドラモンドであった。彼はユタ準州民が敵に対する最も重要な法的自衛手段と考えていた検認裁判所の管轄権を激しく攻撃したのである。彼はまた破廉恥な人間であり、ワシントンから一人の娼婦を愛人としてユタへ連れて来ていたのである。彼は聖徒たちに道徳心が欠如していると仰々しい説教をするときにも、その愛人を自分の隣に座らせておくようなことさえしていた。後になって、彼が東部で妻子を遺棄していたことが分かった。

モルモンに改宗したユダヤ人リーバイ・アブラハムから自分の人格について真実を突いた批評をされたとき、ドラモンド判事はアブラハムを馬の鞭で打ちすえさせようとして、フィルモアの彼の家<sup>むち</sup>に自分の従者を送った。

ドラモンドとその従者は後に暴行と殺人未遂の容疑で逮捕された。保釈されるとドラモンドはそそくさとカリフォルニアへ逃げ、さらにそこからニューオーリンズ

## ユタ戦争

へ行った。そして彼はそこでブキャナン内閣に書き送った辞表を公開したのである。そして、モルモンは準州最高裁の文書類を破棄し、その指導者たちは連邦政府の官吏を侮辱している、またユタではブリガム・ヤングの作った法以外に法律というものを知らない秘密の誓約による結社が横行している、1854年のジョン・W・ガニソンの測量隊の虐殺はインディアンではなくモルモンの仕業であり、ユタには国家への反乱の意志があるなどと強く主張した。

不幸なことにドラモンドの非難は真実と思われ、ブキャナン内閣の教会に対するおおかたのイメージを決定したのである。ドラモンドの手紙を受け取って間もなく、ブキャナン大統領はユタの実情調査もヤング知事への意志伝達もせず、ジョージア州のアルフレッド・カミングをユタ準州知事に任命し、陸軍に2,500人の兵をもってカミング知事をソルトレーク・シティーまで護送するようにと指示した。1857年5月18日のこの軍令を発した戦争担当長官ジョン・B・フロイドは反モルモンの急先鋒<sup>せんぽう</sup>であり、彼は軍隊による実力行使の必要性を強く主張していた。国務長官ルイス・カスはカミングに、モルモンの生活習慣に対する干渉はせずに、法を遵守するようにとの訓令を与えた。

1857年の夏には、共和と民主両党の多くの政治家がモルモン反対論を主張し、十分な根拠も示さないまま、間違いがあると批判した。上院議員スティーブン・A・ダグラスもその一人であった。彼はそのころ、自分の選挙区のイリノイ州における政治基盤の立て直しを図っていた。イリノイ州には激しい反モルモンの気運がまだ残っていた。以前聖徒たちはダグラスを誠実な友と考えていたので、彼の非難の言葉には特に腹立たしいものを感じた。そして、聖徒たちは1843年にジョセフ・スミスがダグラスに語った預言を思い出し、それを『デゼレトニュース』(Deseret News)に発表した。預言者は、ダグラスはいつか合衆国大統領の職を望むようになるが、もし末日聖徒に対して手を上げるようなことがあれば、「全能者の御手の重さを感じる」であろうと宣言していたのである。<sup>1</sup> 1860年にダグラスは民主党の大統領候補となったが、結局は、共和党のエブラハム・リンカーンに敗北した。

## 教会の対応

1857年7月1日、ブリガム・ヤングが経営する郵便物配達とポニーエクスプレスを行うY.X.会社の職員が、郵便物を受け取るためにミズーリ州インディペンデンスにある連邦政府郵便局に立ち寄った。そこへ来る途中、彼らは物資を積んだ輸送隊が陸路を西へ進むのを見て、非常に興味を引かれていた。インディペンデンスで彼らは、連邦政府がY.X.会社との配達請負契約を解消し、それと同時に大編成の陸軍部隊をユタへ派遣したことを知らされた。彼らが見た輸送隊は陸軍の物資を運ぶためのものだったのである。ソルトレーク・シティー市長であり、この末日聖徒の一行の指導者であったアブラハム・O・スムートはこの報を携えて、同僚のポーター・ロックウェルとジャドソン・ストッダードとともに、力の限りを尽くしてソルトレーク・シティーへ急行し、7月23日に到着した。翌7月24日彼らは、ビッグ・コットンウッド・キャニオンでグレートベースン到着10周年祝賀行事をしていたブリガム・ヤングと多くの聖徒たちのもとへ駆けつけた。祝賀気分には水を差したくないと考えたブリガム・ヤングは、連邦政府の動きを発表するのを夕暮れまで待った。



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

アルフレッド・カミング(1802 - 1873年)は1858年から1861年にかけて、ユタ準州知事の職を務めた。それ以前には、1836年にジョージア州のオーガスタ市長を務めた経歴がある。

## 時満ちる時代の教会歴史

この「侵略」にどう対応すべきかを検討した教会指導者は8月の初めに一齐にユタ住民に一つの宣言を発表した。

「我々は敵の軍隊の侵略を受けている。彼らの攻撃の目的が、我々を倒し、滅ぼすことにあるのは明らかである。……

……軍隊が攻撃するような場合、調査委員会を設置したり、事実関係の確認のために人を派遣したりするのが常であるが、連邦政府にはそのようなことをするつもりはない。……

この強いられた状況の中で、我々は国法の精神とこの国が存立する基盤となるものに保証されている正当防衛の権利により、自衛という第一原則に訴えざるを得ない。

自身と家族を守る責任は、自衛の努力をせざるにまかされるがままに服従し、追い出され、根絶やしにされるというようなことを求めはしない。国家、神聖な宗教、神、自由に対する義務は、何もせずに手をこまねいているように求めるものではない。<sup>2</sup>

この宣言には以下の3つの意図が明示されている。いかなる理由でもユタ準州への軍隊の侵攻を許さない。ユタのすべての戦力をもって、いかなる侵攻に対してもそれを撃退する備えをさせる。準州に戒厳令を敷く。<sup>3</sup>

そしてブリガム・ヤングは、準州軍を召集するとともに、準州内を通過する移住者や投機家に穀物やその他の重要物資を販売しないように命令した。さらにとりでの建設を命じ、政府軍部隊と補給物資輸送隊を攻撃するための遊撃隊を組織した。彼はまた、聖徒たちが入植地を放棄しなければならない事態に備えて、別に適切な入植地を見つけるために、ホワイトマウンテン遠征隊の名で知られる一団を派遣した。遠隔地にいる宣教師や入植者たちも、防衛力強化のために召還された。平原を横断していた移住者たちは安全にソルトレーク盆地に導き入れられ、次の年の移住計画はすべて中止とされた。

ヤング知事はサミュエル・W・リチャーズに親書を持たせてブキャナン大統領のもとへ派遣し、講和委員会によって納得のいく処置が取られるまで、政府軍はユタ準州へ入ることはできないと伝えた。またリチャーズ長老は、聖徒たちの長年の友トーマス・L・ケインにあてた、教会のために仲介の労を要請する手紙を携えていた。リチャーズはまたニューヨークへ行き、『ニューヨークタイムズ』(New York Times)のインタビューを受け、「偏見のない」、聖徒の立場に立った内容が紙上に発表された。<sup>4</sup>

9月7日に、補給部隊のスチュアート・バン・ブリー大尉が、後続が予定されていた軍の食糧と馬糧を調達するために、ソルトレーク・シティーに到着した。彼は教会指導者に、軍の西進は平和的な目的によるものであるということを説得しようとした。バン・ブリーは、一連の問題が生じて以来、軍人あるいは官僚の中で聖徒が初めての接触を持った人物であった。丁重に遇されたバン・ブリーは教会指導者と会談し、モルモンの抵抗規模を調べ、また旧タバナクルの集会に出席してミズーリ州とイリノイ州で受けた数々の迫害に関する話を聞いた。話し手たちは、聖徒たちは政府軍がソルトレーク盆地に入る前に、自分たちの家や収穫物を燃やし、政府軍を間断なく攻撃して悩ませると力を込めて語った。聖徒たちは全員一致で、ブリガム・ヤングが唱えた抵抗運動を支持することを誓約した。

バン・ブリーは、モルモンは合衆国政府の権威に反意を持っているのではなく、

## ユタ戦争

不当な軍隊の侵略に対する自衛は当然と考えていることを確信するようになった。物資の調達をすることができなかつた彼は軍に戻り、さらにワシントンへ赴いて、和平調停を行うよう強く主張した。バン・ブリートには、トーマス・L・ケインへの手紙を託されたユタ準州選出下院議員ジョン・M・バーンハイゼルが随行した。

その一方でプリガム・ヤングは、計画を着々と押し進めた。1857年の9月中ごろ、彼は準州内に戒厳令を敷き、軍隊の侵入を禁じた。彼はノーブー隊に政府軍の侵攻に備えるように命じた。ユタ準州内のほとんどすべての入植地において自衛の準備が加速して進められた。彼はまた村々の監督に対して、万一戦いが起きたときにはすべてのものを焼却する準備をしておくように命じた。

## マウンテンメドローの虐殺

バン・ブリート大尉がソルトレーク・シティーに着いたと同じ週に、南へ約300マイル（約480キロ）離れた所で悲劇的な出来事があった。その事件は、連邦政府軍の接近によって引き起こされた、戦争に興奮した精神状態を考慮すればよく理解できるかもしれない。軍隊が近づいていると知るとすぐに、南部の入植地に対して責任を持っていたジョージ・A・スミスはユタ南部へ行き、兵員となる聖徒たちを動員し、その地域に戦争への警戒体制を取らせた。

ちょうど同じころ、アーカンサス州出身の数家族と「ミズーリの荒くれ者」を自称する一団のカウボーイから成るファンチャー隊がユタ中部を通過していた。彼らは寒い季節が近づいていたために、南のルートを通ってカリフォルニアへ向かっていた。ユタ準州には戒厳令が敷かれていたために、このファンチャー隊の一行は穀物や補給物資を購入することができなかつた。しかし、彼らの中には地元の農民の持ち物を盗む者がいた。そのうえ、ハウズミルの虐殺やジョセフ・スミスの暗殺、モルモンに対する暴行などを得意そうに話す者までいたのである。何人かの地元の入植者は、ファンチャー隊のアーカンサス出身者の中にアーカンサス州で起きたパーリー・P・プラット暗殺事件に関与した者がいると考えた。また、ファンチャー隊は連邦政府軍の偵察隊だと考えた聖徒たちもいた。

ユタ南部におけるインディアン問題はこれらの状況をさらに複雑にした。聖徒たちはインディアンとの間に友好的な関係を築こうと努力を続けていたが、なお危険な状況であった。インディアンたちは「メリキャッツ」と「モルモニー」をはっきりと区別していた。「メリキャッツ」はユタを通過するアメリカ人全般であり、インディアンたちは彼らをまったく信頼していなかつた。「モルモニー」は聖徒たちを指す言葉で、インディアンは一般的に彼らに対して好意的であった。しかし、インディアンがモルモンの入植者を攻撃する可能性も依然として存在していた。

1857年9月7日火曜日、インディアンの一隊がシダー・シティーから35マイル（約56キロ）離れた所で宿営していたファンチャー隊を攻撃した。ファンチャー隊はよく武装していたために、インディアンたちは退却を余儀なくされた。

一方、シダー・シティーの住民たちはファンチャー隊に関してどのように対処すべきかを話し合った。短気な者たちの中には、ファンチャー隊は壊滅されて当然と主張する者もいた。しかしシダー・シティーの住民たちは、ファンチャー隊がカリフォルニア駐屯軍と手を組んで聖徒に戦いを仕掛けてくることを恐れていた。事実



ジョージ・A・スミス(1817 - 1875年)はシオンの陣営に参加した経歴を持ち、宣教師、使徒、副管長、教会歴史記録者、ユタ州議会議員などを務めた。預言者ジョセフ・スミスのいとこである。



## 時満ちる時代の教会歴史



ジェームズ・ホルト・ハズラム (1825 - 1913年) はイギリスのボルトンで生まれた。1851年にユタへ到着し、シダー・シティーに入植した。後にユタ北部のウェールズビルに移り、そこで残る生涯を過ごした。

ファンチャー隊はそのようにすると公然と威嚇していたのである。プリガム・ヤングの助言を求めるために、ジェームズ・ハズラムが急使として派遣されることになった。ハズラムはほとんど不眠不休で、わずか3日でソルトレーク・シティーに到着し、ファンチャー隊を無事に通過させるように聖徒たちを促す手紙をヤング大管長から受け取った。ソルトレーク・シティーを出立するハズラムに、プリガム・ヤングは強い調子で語った。「馬を休ませず全速力で行きなさい。たとえアイアン郡に住むすべての聖徒の協力を得ても絶対にその移民たちに手出しをしてはならない。何の妨害もなく、自由に行かせなければならない。」<sup>5</sup> ハズラムはシダー・シティーへ急ぎ9月13日の日曜日に着いたが、2日遅れの到着であった。

インディアン管理官ジェイコブ・ハンブリンの不在中、プリガム・ヤングによってインディアンに農業を教える責任を与えられていたジョン・D・リーがインディアンたちを静めるために送られていた。彼はインディアンと移住者たちの間で最初の衝突が起こった直後にインディアンのキャンプに到着した。インディアンたちはひどく興奮していて、白人であるリーがそこに一人であること自体が危険な状況であった。彼は最終的にインディアンたちに、報復を受けることになるを理解させ、その後そこから立ち去ることを許された。

その夜遅く、さらに多くのインディアンがシダー・シティーからの数人の白人とともに、そのキャンプにやって来た。その夜、怒り狂うインディアンたちをなだめるといふ目的の下に恐ろしい計画が仕組まれた。翌9月11日の朝、その計画に加わった白人たちは、武器を捨てることを条件にファンチャー隊を保護すると約束をした。しかし、地元の指揮官の命令によって行動するアイアン郡民兵が移住者の中の男たちを殺し、インディアンたちが女と年長の子供たちを殺害したのである。全部で約120名の犠牲者だった。殺されなかったのは、18名のほんとうに幼い子供たちだけであった。後にその子供たちは政府の援助によって、東部の血縁者のもとへ連れ戻された。

殺された者たちの遺体は浅く掘った土中に埋められた。そして虐殺はすべてインディアンの行ったことにするという誓いがなされた。この悲劇的な事件から2週間以上たってから、プリガム・ヤングに報告するためジョン・D・リーがソルトレーク・シティーに派遣された。リーは事前に話し合っていたとおり、すべてインディアンがなしたことであると報告した。後にプリガム・ヤングはアイアン郡民兵隊員が直接関与していることを知った。彼はアルフレッド・カミング知事に、捜査に対して全面的協力を申し出ていたが、結局は何の措置も取られなかった。ユタ戦争に関連して申し立てられた犯罪行為のすべてについて、モルモンに特赦令が出ていたからである。

その後の20年間、様々なうわさや申し立てがあったが、1870年代になってついにこの事件は法廷で裁かれることになった。ジョン・D・リーは重要人物の一人であったが、この事件に対して責任を負うべき士官は彼だけではなかった。にもかかわらず、起訴された末日聖徒は彼だけであった。リーは2度裁判にかけられた。一審では不一致陪審となったが、1876年の9月に有罪となり、その1年後に連邦政府の役員によってマウンテンメドーの地域へ連行され、そこで死刑が執行された。

## ユタ戦争

### 戦争の回避

マウンテンメドーの虐殺が行われたころ、連邦政府軍は現在のワイオミング州にあるサウスパスと呼ばれる地域に接近していた。政府軍の指揮は暫定的にエドモンド・B・アレクサンダー中佐が執っていた。二人のユタの民兵がカリフォルニアへの移民と称して、政府軍の中に入り込んでいた。この二人は政府軍の中の反モルモン分子の不穏な動きを直接察知した。それは政府軍の正規の指揮系統によるものではなかったが、ユタの教会指導者たちはそれを聞いて、武力衝突もあり得ると神経をとがらせた。モルモンの偵察隊は政府軍の動きのすべてを監視していた。

9月にヤング知事が戒厳令を敷いたのに続いて、ノーブー隊のダニエル・H・ウエルズ将軍は東のエコーキャニオンに約1,100人の兵を派遣した。エコーキャニオンは山岳地帯を抜けてソルトレーク・シティーに入るルートの途上にあった。この兵士たちは狙撃用の土手を作ったり、塹壕を掘ったりした。また大きな石を移動して、進んで来る敵軍の頭上にすぐに落とせるように仕組んだり、水路やせきを造って、敵の進路に激流が押し寄せるようにしたりといった備えをした。

接近中の政府軍を間断なく攻撃して疲労させるために、ノーブー隊の一部隊である44名編成の「モルモン電撃隊」がロト・スミス少佐の指揮の下、東部ユタ（現在のワイオミング州西部）に派遣された。彼らが特に指示されたのは、「政府軍各隊の現在地や進路を確かめ、考えられるあらゆる方法で彼らを悩ませることであった。あらゆる手段を使い、政府軍の馬や牛の群れを驚かせて逃げ出させたり、幌馬車に火を放ったりすること、また政府軍の進路や側面に当たる地域の畑を焼き払い、夜には奇襲をかけて寝不足の状態にさせた。……政府軍兵士の命は取らなかったが、あらゆる機会をとらえて、彼らの幌馬車を破壊し、馬や牛を逃げ出させた。」<sup>6</sup>

10月4日の夜、スミス少佐と20人の兵士が、政府軍補給物資輸送の先導をする幌馬車に迫った。その御者たちは、スミス少佐が多数の兵士を率いていると思い込み、撤退を迫られると、一言もなくそれに従わざるを得ない状況だと考えた。ジェームズ・テリーは日記に次のように書いている。「あれほどおびえた人々を見たことはかつてない。彼らは自分たちに危害が加えられないと知るまでひどくおびえていた。彼らは笑い、そして、幌馬車が燃やされれば、自分たちは馬や牛に鞭を入れる必要がなくなり、うれしく思うと話した。御者たちは馬車の中から銘々の衣類と銃を持ち出すことは許されたが、その後で幌馬車は燃やされた。」<sup>7</sup>

翌朝、ロト・スミスとその一隊は政府軍の補充物資を積んでソルトレーク盆地へ向かう別の輸送隊を見つけた。ロトはその隊の御者たちの武装を解除してから、馬を駆り、家畜を守っていた指揮官に出会うと、銃を渡すように要求した。その指揮官はロトに答えて言った。「『今までだれもそんなことをした者はいない。わたしを殺さずにそうできると思うなら、やってみるがいい。』わたしたちはその間中ずっと、輸送隊に向かって鼻を並べた2匹のスコッチテリアのようにして並んで馬を走らせていた。彼は目をぎらつかせていた。わたしはどうだろう。わたしは彼に『その勇敢さは立派だと思うが、血を流すことは好まない。君は殺すなら殺せと言っているが、そんなことはすぐにでもできる。しかし、そうはしたくないんだ』と言った。そのときわたしたちは輸送隊に追いついた。彼は自分の部下たちが監視下に置かれ降伏しているのを見てこう言った。『分かった。わたしの方が不利な立場にある。部下た



ロト・スミス（1830 - 1892年）は16歳のときに、モルモン大隊の一員として従軍した。1869年にはイギリスへの伝道に召された。後にリトルコロラドステーキの会長として10年間、その務めを果たした。

## 時満ちる時代の教会歴史

ちも武器を引き渡している。』わたしはそれに対して、『わたしは優位に立つ必要はない』と答え、彼らに武器を戻したらどうするつもりかと尋ねた。彼が『おまえたちと戦う』と答えたので『そうか、わたしたちも戦い方を少しは知っている。それなら、武器を取れ』と言った。すると彼の部下たちが叫んだ。『おれたちはお断りだ。おれたちがここへ来たのは、荷物を運ぶためだ。戦争するためじゃない。』『シンブソン、彼らの言い分を聞いて、何か言うことがあるか』と聞くと、彼はこれ以上いまいましいことはないという表情で、歯ぎしりをしながら『ちくしょう！』と答えた。『こうなる前にわたしがいて、それでもあいつらが戦うのを拒んでいたら、全員を殺していただろう。』<sup>8</sup>

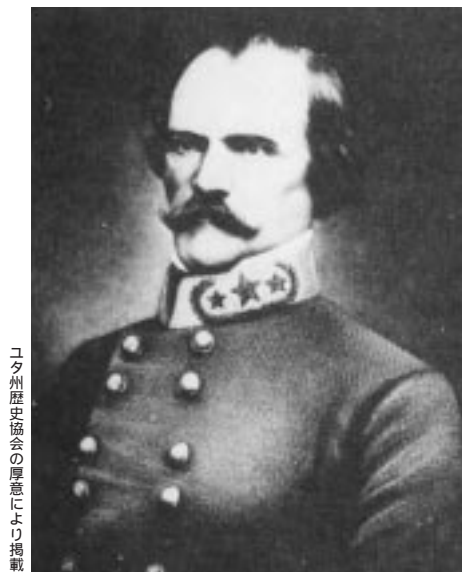
これと、この後の何度かの政府軍との交戦の中で、ロト・スミスの電撃隊は、全部で74両の幌馬車を焼き払い、大隊の3か月分の物資を獲得したのである。また彼らは政府軍の2,000頭の牛馬のうち1,400頭を捕獲した。スミス少佐の率いる民兵はモルモンの二つの重要前哨地点フォートブリッジャーとフォートサブライの焼き払いに参加した。政府軍はこの二つのとりでの占領をねらっていたのである。

このような戦術が功を奏して政府軍の行軍は大幅に遅れ、司令官のアルバート・シドニー・ジョンストン大佐（間もなく将軍になった）が11月初旬に着任した時点では、ソルトレーク・シティーに進むには時期があまりにも遅れてしまっていた。政府軍は嵐と酷寒の中、焼き払われたフォートブリッジャーまでの35マイル（約56キロ）を進むのに15日も要した。約2,500名の政府軍兵士と数百名の文官（カミング知事夫妻を含む）、物資輸送請負人、随行者たちは、ワイオミング西部のテントと間に合わせの小屋から成るキャンプスコットという宿营地と、「準州の新任裁判所長にちなんで『エックルスビル』」と名付けられた急ごしらえの集落で惨めな越冬生活を強いられた。<sup>9</sup> そのころ東部では、政府軍のユタ遠征問題に関する新聞の論調に変化が生じ、ワシントンのジェームズ・ブキャナン大統領とユタのプリガム・ヤングはそれぞれに、1858年に向けて取るべき道を慎重に探った。

### 講和の樹立

冬に入って間もなく、3人の有力者 スチュアート・バン・ブリート大尉、ユタ準州選出下院議員ジョン・M・バーンハイゼル、トーマス・L・ケイン大佐 がワシントンのブキャナン大統領を訪ね、ユタに調査委員会を派遣するように力説した。調査委員会の派遣を望まなかったブキャナン大統領は、平和的解決を達成するためにケインを非公式にソルトレーク・シティーへ派遣することに同意した。1858年1月、ケインは自費でニューヨークを蒸気船に乗って出発し、海路パナマ経由でカリフォルニアへ向かった。彼は自分の動きが人目につくことのないように、ドクター・オズボーンという偽名で旅をした。

ケイン大佐は2月25日にソルトレーク・シティーに到着し、心からの歓迎を受けた。彼はしばらくの間、教会を指導する役員以外には自分の素性を明かさなかった。<sup>10</sup> 年前ウィンタークォーターズで経験したと同じように、聖徒たちが1858年のそのときにも見知らぬ人に対して好意的かどうかを確かめるためであった。プリガム・ヤングとほかの教会指導者たちは、ケイン大佐は神から遣わされたのだと確信した。教会の指導者たちと何度か話し合いを重ねた後に、ケインは彼らに対して、新しい知



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

アルバート・シドニー・ジョンストン（1803 - 1862年）はケンタッキー州出身であった。1826年にウェストポイントの陸軍士官学校を卒業。ブラックホーク戦争に従軍、またテキサス共和国軍と戦いを共にしている。南北戦争では南軍の将軍として従軍し、シャイロー（訳注：南北戦争の激戦地）の戦いで戦死した。

## ユタ戦争

事アルフレッド・カミングを一切妨害することなくユタ準州に入らせるよう説得した。しかし、ブリガム・ヤングはカミングと一緒に軍隊を入れるべきではないと強く主張した。

3月上旬、ケインは健康状態が優れなかったが、モルモンの民兵に護衛されて酷寒の中キャンプスコットへ向かった。キャンプスコットへ近づくと彼は護衛の兵士たちを解散させ、単騎で歩を進めた。

危うく歩哨たちの射撃が命中しそうになったが、彼は勇敢に自分の名を名乗り、激しい交渉を重ねた末にカミング知事と会見することに成功した。彼はカミングに、ユタ準州民が彼を新しい知事として迎え入れるであろうということ、また彼らは政府に対して反逆しているのではないということを理解させようと説得した。そして、モルモンは政府軍のソルトレーク盆地駐屯を認める意志がないということを説明した。

4月になって、ケイン大佐とカミング知事は政府軍の護衛を一人も伴わずにキャンプスコットを後にした。ソルトレーク・シティーに到着したカミングは、ケインの言ったとおりであることを知った。カミング知事は敬意をもって迎え入れられたのである。ブリガム・ヤングは準州の文書類と印を新任の知事に渡し、幾度かの会談の後に友好的な感情が両者の間に生じた。それからの3年間、カミングは如才なく、優れた手腕をもってその職責を果たし、人々の敬意と信頼を受けた。そしてトーマス・L・ケイン大佐も、両者の交渉の間に立って果たした役割のゆえに、末日聖徒の変わらぬ感謝を勝ち取った。

ケインとカミングがユタに到着する前に教会の指導者たちは「戦時評議会」で、その季節に政府軍が侵攻してきた場合、ユタ北部の聖徒たちは衝突を避けるために自分たちの入植地を引き払い南へ移動するという決定をしていた。ブリガム・ヤングは次のように誓った。「残忍な兵士たちによって妻や娘たちが乱暴を受けて汚されたり、息子たちの心の中に墮落の種がまかれたりするのを見るよりは、家を灰にして畑も果樹園も荒れ果てさせ、草木の根や葉を食べ、残りの人生をこの山々を漂泊して生きていった方がましである。」<sup>10</sup>

この「南への移動」のために教会は3つのグループに分けられ、各グループに特別な使命が与えられた。(1)ユタ南部の聖徒たちは動かない。ただし、移動を助けるために幌馬車、牛馬、御者をユタ北部へ送る。(2)ユタ北部に住む若くて強健な聖徒たちは、作物の世話をし、財産を守り、万が一の場合には、わらぶきの家々に火を放つために、入植地にとどまり続ける。そして、(3)ユタ盆地北部に住む約3万5,000人の聖徒たちは南へ移動する。各ワードは、ソルトレーク郡南部の4行政区の一つに土地を割り当てられた。まず物資を運び、その後に聖徒たちを移動させることにした。

移動は厳格な軍規に従って行われた。各ワードは10人、50人、100人の単位に組織され、各隊に指揮官がついた。聖徒たちは食糧や衣服のほか家具なども運ぶように求められた。

ある10代の開拓者の少女はこう記録している。「すべてのものを父の幌馬車に積み込み、出発の命令を待った。夜には横になって眠りに就いたが、自分たちを滅ぼすために近づく軍隊についていつ知らせが入るかは分からなかった。……

## 時満ちる時代の教会歴史

……ある朝、父が夕方になったら大きな隊と一緒に出発すると言った。……

昼ごろに父は部屋の中に木の葉やわらを入れ、こう言った。『心配しないでもいいよ。この家は今日までわたしたちを守ってきてくれたけど、政府の軍隊をここで休ませるわけにはいかないんだ。』<sup>11</sup>

ユタ準州のセンタービルに住んでいた少女ハルダ・コーディーリア・サーストンはそのときの移動のつらさについて、次のように回想している。「1858年の春、モルモンの大移動のときに、わたしたちもその中にいました。わたしたちはスパニッシュフォークまで南下しました。スパニッシュフォークの川沿いの低地には家畜の良いえさ場があり、川にはたくさんの魚がいました。そのとき、ユタ盆地北部に住むすべての人が南へ移動しました。家具や農具を残したまま、どこに行くのか、将来どうなるのかも分からず、すべてを残して自分たちの家を後にしたのです。……

この大移動のときに人々が味わった苦しみと貧しさは絶対に忘れることができせん。敷物で作ったズボンをはいている男の人たちもいました。その人たちの足にはぼろ切れや布袋が巻かれていました。女の人たちは一緒に服を縫ったり、モカシンを作ったりしました。女の人や子供たちの中にもはだしの人がたくさんいました。わたしたちの母が、近所の7人家族のある立派な姉妹から聞いた話によると、実際に身に着けているものを除けば、家族全員が所有するほかの衣類は全部まとめても1枚の大型ハンカチに包み込めるほどしかないということでした。彼女は日曜日に備えて土曜日の夜には早く子供たちを寝かせ、彼らの服の繕い、洗濯、アイロンがけをしました。実際人々は皆貧しい暮らしをしていました。そのうえ、クリケットの害のために収穫物がほとんど底を突いたような状態が何年か続いていました。」<sup>12</sup> 目的地に到着すると、それぞれの家族は幌馬車やテント、<sup>ごう</sup>壕、間に合わせの板張りの掘っ建て小屋などに住んだ。

教会の文書類や資産は公共事業部によって移転されたり、土中に埋められたりした。あるグループは、ソルトレーク神殿のために切り出されたすべての石を隠した。そして、その基礎工事部分を平らにならして土で覆い、耕した畑のように見せて建設が妨げられないようにした。別のグループは什分の一として納められた穀物のすべてをふた付きの大きな箱に詰め、2万ブッシェル（約70万リットル）をプロボに特別に建築した穀物倉庫まで運んだ。またほかにも幌馬車で、機械や器具などを急ごしらえの倉庫や格納庫まで運んだ。

南への移動は約2か月を要し、5月中旬に完了した。5月の最初の2週間は、1日平均600両の幌馬車がソルトレーク・シティーを通過した。推定3万人の聖徒たちがソルトレークと北部入植地の家を後にした。<sup>13</sup> カミング知事夫妻は教会員たちに、家を捨てて行かないようにと説得したが、聖徒たちは預言者に従う道を選んだ。この大規模な住民の移動は、国内外で教会への関心呼んだ。『ロンドンタイムズ』（*London Times*）は次のように報じた。「伝えられるところによると、彼らは人跡未踏の荒野を500マイル（約800キロ）も進む旅を始めたという。」『ニューヨークタイムズ』も次のように伝えた。「モルモンを武装保安隊によって排除すべき不法妨害として扱うのは賢明な策とは言えないのではないだろうか。」<sup>14</sup>

この移動は、罪のない人民が迫害されているという印象を与えて、合衆国政府は不利な立場に立たされた。そして、プリガム・ヤングの指導力が人々の耳目を引き

## ユタ戦争

付けたのである。

幸いなことに、政府と教会側の交渉によって、政府軍の侵攻は中断となった。1858年の早い時点でブキャナン大統領は講和委員会のユタ派遣を決定した。6月初旬に講和委員のベン・マックローチとラザラス・W・パウエルがソルトレーク・シティーに到着した。二人は、政府に対する忠誠心が確認されれば、聖徒たちに対して特赦令が出されるという申し出を用意していた。教会の指導者たちはその申し出を聞いて憤然とした。政府に対して忠誠を尽くさなかったことなど、一度もなかったからである。しかし、何度かの交渉の末、その申し出の受け入れが決まった。教会指導者がその特赦令の受け入れを決めたのは、ノーブー隊が政府軍に対して行った様々な作戦行動を考慮したためであった。講和委員会と教会指導者の間で取り決めたことの中には、軍隊がソルトレーク・シティーに静穏裏に入ること、また連邦軍の駐屯地は、ソルトレーク・シティーまたプロボの両市から少なくとも40マイル（約64キロ）離れた所に置くことなどの項目があった。

1858年6月26日、政府軍はほとんど人影がなく静まりかえったソルトレーク・シティーに入った。彼らは行進しながら「片目のライリー」という下品な歌を歌った。それは兵士たちの間では長く歌い続けられていた短い軍歌で、歌詞は1000節、その大半は印刷をはばかり猥褻な内容だと言われている。<sup>15</sup> 軍楽隊がカミング知事の新しい邸宅でセレナーデを演奏することになっていた。しかし楽隊の隊員たちは、カミング知事を末日聖徒に同情的な人間と見ていたために、演奏にあまり熱が入らなかった。ソルトレーク・シティーには、教会と聖徒たちの財産には手を出さないという取り決めを政府軍が破った場合に市内に火を放つ役割を受けたごくわずかの末日聖徒しかいなかった。フィリップ・セントジョージ・クック中佐は帽子を手に取り、それを胸に当てて、かつてのモルモン大隊の兵士たちに対して敬意を示した。クック中佐はモルモン大隊の指揮官として、彼らと長い行軍を共にした経験があったのである。その後の数日間、ジョンストン将軍は政府軍を率いてユタ湖の西のシダー・シティーに進み、そこに駐留地を開き、戦争担当長官の名にちなんでそこをキャンプフロイドと名付けた。7月1日に、ブリガム・ヤングは南へ移動した聖徒たちに、元の入植地に戻ることを命じた。

## 軍隊の駐留

政府軍の配備によって兵士と聖徒の間には緊張が生じたが、幸いにしてそれが深刻な対立として長期化することはなかった。これはジョンストン将軍の統制によるところが大きかった。将軍は聖徒たちに対して特に好意的ということはなかったが、政府軍の規律を維持する必要性をよく理解していた。

ユタにおける軍隊の悪影響は、準州内に様々な悪習を運んで来たことであった。ソルトレーク・シティーの街頭や近郊の町では、賭博師や輸送業者、駐留地に入りする関係者などが、頻繁に暴力ざたを起こした。そして、ユタにも酒場や売春宿などが建てられたのである。ソルトレーク・シティーのメインストリートは一時「ウイスキーストリート」と呼ばれたほどだった。それまで主流を成していた社会構造に傷がつけられたのである。1858年11月には激しい反モルモンの論調の新聞『バリータン』(Valley Tan) が創刊し、16か月間発行を続けた。この新聞はユタ準州民

## 時満ちる時代の教会歴史

『バリータン』表題紙



を殺人者、国家への反逆者として非難し、おもにキャンプフロイド内で配布されていた。こうして、いわゆる「文明社会」からの隔離は終わりを告げたのである。軍隊の存在は、聖徒たちの中に流入して来る異邦人の増加を象徴するものであった。

政府軍とともに合衆国の3名の新任判事がユタへ到着した。この3人はそろって、末日聖徒の生活習慣を根本から覆えそうと考えていた。その一人ジョン・クレイドル判事はジョンストン將軍の同意を得て、自分の裁判の仕事を無言のうちに支援する圧力とするために、1,000名の兵士をプロボへ移させた。これは地元の人々を激高させ、簡単に大きな対立にエスカレートしかねない状況となった。

カミング知事やほかの関係者の努力のかいあって、ワシントンのブキャナン内閣が、プロボにいる隊はキャンプフロイドへ戻るようにとの命令を出し、危機的状況は回避された。

しかし政府軍のユタ駐留は、聖徒たちに思いがけない経済効果をもたらした。1855年にジョン・カーソンが入植し、キャンプフロイドに隣接していたフェアフィールドという名の小さな町は、7,000人の人口を擁するまでに発展した。多くの地元住民にとって、農作物やその他のものを販売できる市場が形成された。キャンプフロイドは最終的に1861年の夏に閉鎖されたが、このとき約40万ドル相当の余剰物資がわずかな金額で払い下げられた。政府は余剰の軍需物資の払い下げを行い、それによってユタの経済は大いに潤った。<sup>16</sup> 1861年7月27日にクック大佐は駐屯地の旗の掲揚に用いたポールをブリガム・ヤングに贈呈した。ヤング大管長はその旗竿をライオンハウスの東側の丘陵の斜面に立て、長年にわたって国旗を掲揚した。また政府軍の兵士の中には、末日聖徒の信じている教えを学び、教会に改宗した人々もいた。

1859年から1861年にかけて、教会の指導者は、世界の人々に喜びのメッセージを伝え、聖徒たちにシオンの集合を促すために、注意深く目立たないように宣教師の派遣を再開した。宣教師たちは再び、合衆国、カナダ、イギリス、西ヨーロッパで伝道を始めた。幌馬車と手車の両方による移住が、1859年にはゆっくりとした調子で再開され、そして1860年にはさらに勢いよく進められた。そしてヤング大管長は再び入植地開拓を推し進め始めようとしていた。しかし今回は、サンバーナディーノやフォートレムハイといった以前のような遠隔地入植策を再開したのではなく、山岳部の盆地において農業を基盤とした入植地を徐々に広げていくという方針を取った。1859年には30の新しい入植地が開かれ、1860年にはさらに16か所の入植地が築かれた。この傾向は1860年代を通して続いた。新しい入植地の多くはユタ北部とアイダホ南部のキャッシュ盆地、ベアレク盆地、そしてユタのワサッチ盆地、セ

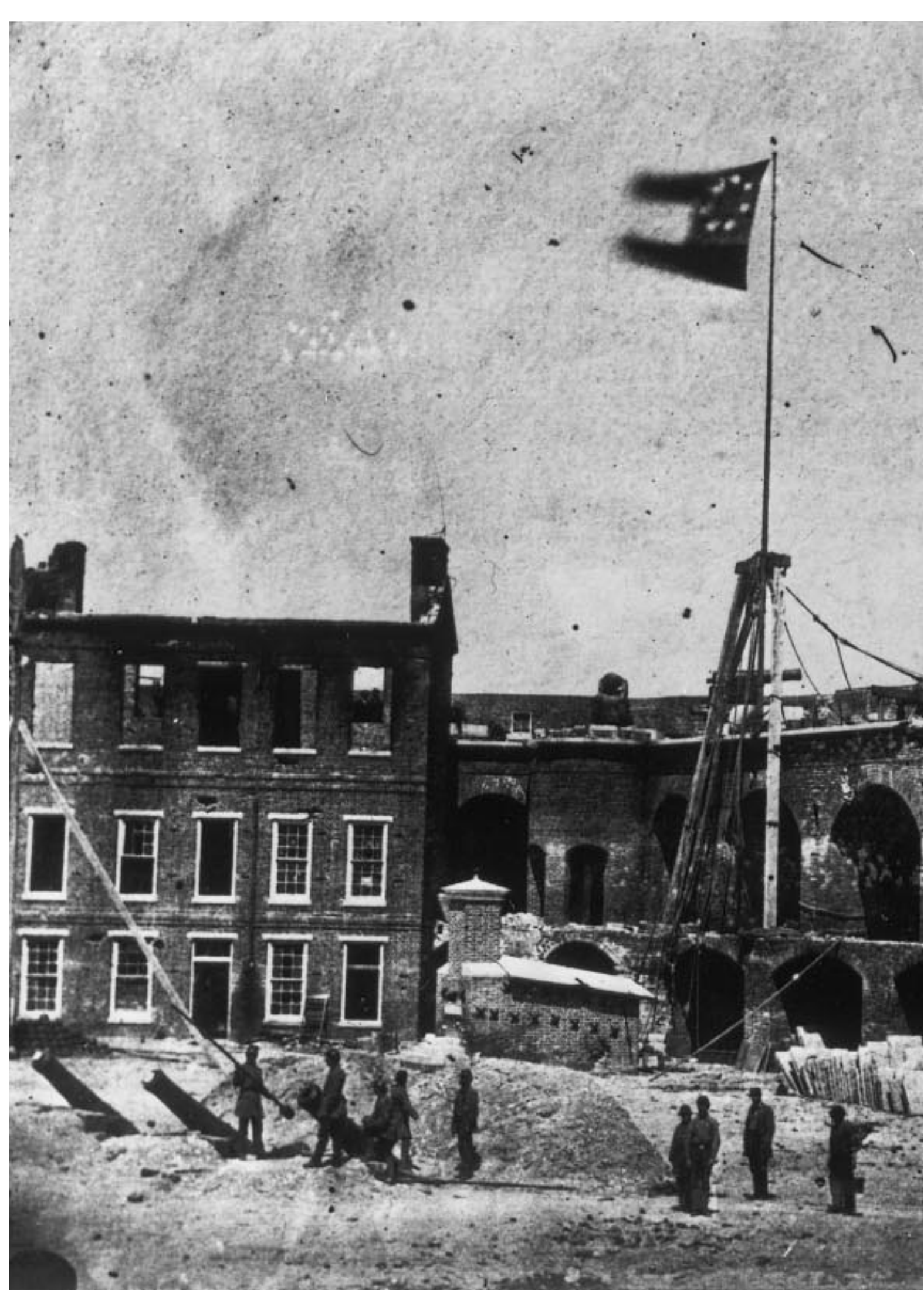
## ユタ戦争

ビーア盆地，サンピート盆地などに築かれた。

### 注

1. “History of Joseph Smith” *Deseret News* 「ジョセフ・スミスの歴史」『デゼレトニュース』1856年9月24日付，225
2. “Citizens of Utah” *Pioneer and Democrat* 「ユタの市民」『開拓者と民主党員』1858年1月1日付，2
3. 「ユタの市民」2参照
4. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻（Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930），4：242
5. ロバーツ『教会概史』4：150で引用
6. レオナード・J・アーリントン，*Brigham Young: American Moses* 『ブリガム・ヤング アメリカのモーセ』（New York: Alfred A. Knopf, 1985），255で引用
7. ジェームズ・パーシャル・テリー “Utah War Incidents” 「ユタ戦争に伴う小事件」*Voices from the Past: Diaries, Journals, and Autobiographies* 『過去からの声 日記，日誌，自伝』教育週間プログラム（Provo: Brigham Young University Press, 1980），66で引用
8. ロバーツ『教会概史』4：284で引用
9. ロバーツ『教会概史』4：314
10. ブリガム・ヤングからW・I・アップルビー長老あての手紙，1858年1月6日付，ブリガム・ヤング書簡控え帳，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー
11. E・セシル・マクガバン，*U.S. Soldiers Invade Utah* 『合衆国陸軍のユタ侵攻』（Boston: Meador Publishing Co., 1937），216で引用
12. ハルダ・コーデリア・サーストン・スミス “Sketch of the life of Jefferson Thurston” 「ジェファーンソン・サーストンの生涯」1921年7月，ユタの開拓者の娘たち博物館，ソルトレーク・シティー，17 - 18
13. ヒューバート・ハウ・バンクロフト，*History of Utah* 『ユタの歴史』（Salt Lake City: Bookcraft, 1964），535参照
14. バンクロフト『ユタの歴史』536で引用。武装保安隊とは治安維持のために組織されるグループ。通常は緊急非常事態のために組織される。
15. ジェームズ・M・メリル，*Spurs to Glory: The Story of the United States Cavalry* 『栄光への拍車 合衆国騎兵隊物語』（Chicago: Rand McNally and Co., 1966），102参照
16. ロバーツ『教会概史』4：540 - 541参照





# 南北戦争の時代

年表	
年代	重要な出来事
1861.4.12	フォートサムターへの砲撃によってアメリカの南北戦争が始まる
1861.4.9	「教会の幌馬車隊」による移住の試みが成功する
1861.10	大陸横断の電信線がユタで全面開通する
1862.4	モルモンの民兵が大陸横断鉄道の守備のために合衆国陸軍に応召する
1862.6	モリス派事件が起きる
1862.10	バトリック・エドワード・コナー大佐の率いる「カリフォルニア義勇軍」がユタに到着する
1864	ウォルター・マレー・ギブソンがハワイで引き起こした一連の問題が解決する
1865.4	南北戦争が終結
1867	ソルトレーク・タバナクルが完成する

**当**時、合衆国では10年にわたる北部と南部との間の激しい対立があった。1861年にエブラハム・リンカーンが合衆国大統領に選ばれると、南部の幾つかの州が連邦から脱退した。1861年4月12日、南北戦争の始まりを告げる最初の砲音が、サウスカロライナ州のフォートサムターに響いた。血肉が相争うこの戦いは4年続き、「古きよき南部」は壊滅し、6万2,000人の命が犠牲となった。この時代、ユタの末日聖徒は比較的に平安な発展の時期を過ごした。

## 末日聖徒と南北戦争

南北戦争が勃発したとき、多くの末日聖徒は「戦争に関する啓示と預言」を思い起こした。それは預言者ジョセフ・スミスが1832年12月25日に授けられたものである。

「まことに、主は、間もなく起こる戦争に関してこのように言う。それはサウスカロライナの反乱で始まり、ついには多くの人の死と苦悩に終わるのである。……

見よ、南部諸州は北部諸州に反対して分裂する。」(教義と聖約87：1, 3) 1843年に預言者は、サウスカロライナで始まる流血は「恐らく奴隷問題によって起こるのである」と宣言していた(教義と聖約130：13)。多くの宣教師がこの預言を引き合いに出し、主の言葉が文字どおりに成就したのを目の当たりにして、心に幾らか喜びを感じた。

しかし、戦いが深刻化するにつれ、この内乱に対する聖徒たちの感情は複雑なものになっていった。末日聖徒は「諸州」で起きる流血と惨状を、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殺害、また神の戒めへの不従順、ミズーリやイリノイにおいて自分たちに加えられた不法行為への裁きと考えていた。教会員はジョセフ・スミスの指導に従い、合衆国憲法を心から擁護していた。ジョン・テラーは当時の多くの末日聖徒の思いを次のように述べている。

「わたしたちは何の正当な理由もなく、町から町、州から州へと追い立てられた。わたしたちは文明の辺境と言われた地を追われ、荒れ野の中に家を作ることを強いられた。……

わたしたちは北軍に加わって、南部と戦うべきなのだろうか。そうではない……。なぜだろうか。すでに明らかのように、彼らは自らその結果を招いたのであり、わたしたちには関係のない問題である。……わたしたちには、北部も南部も、東部も西部もない。厳格に、また積極的に合衆国憲法に従うだけである。」<sup>1</sup>

戦いが始まって約1年経過した時期にヤング大管長は、聖徒たちが西部の地にとどまることができたのは非常に幸運であったとして、次のように述べている。「わたしたちは今はこうして遠く離れた静かな山々と盆地に囲まれた平和な地に住み心穏やかにしていますが、もし迫害を受けていなかったら、今ごろは、国を荒廃させてい

## 時満ちる時代の教会歴史

る戦いと流血の渦中に巻き込まれていたことでしょう。今日こうして兄弟たちが穏やかに席に着いている姿を見ていますが、それもかなわず、彼らの多くが戦場の最前線に出ていたことでしょう。現在わたしたちが安全に守られているのは、神の祝福によるものであることが分かります。わたしたちを滅ぼそうとした敵は今苦しめられていますが、わたしたちは大いなる祝福を受け、豊かに恵みと喜びを授けられているのです。<sup>2</sup>

教会の指導者が南部連合軍への支持を考慮することはなかった。したがってエーブラハム・リンカーン大統領から、大陸横断通信線と輸送ルート守備のための兵員提供の要請を受けると、教会はそれに熱心にこたえた。また聖徒たちは、合衆国議会からユタ準州に賦課された年間2万6,982ドルの戦時負担金の納付にも同意した。教会の指導者たちは再三にわたり北部への忠誠を貫き、北部諸州からの脱退を考慮する州が幾つかある中で、ユタは連邦軍に加入しようとした。

ユタと教会は南部諸州の連邦脱退の影響をすぐさま感じた。南部のジョージア州出身のアルフレッド・カミング知事が、連邦政府から任命された知事職を自ら辞任すべきだと考えたのである。彼はおとなしくユタを去り、南部へ戻った。やはり南部のバージニア州出身のアルバート・シドニー・ジョンストン将軍もその職を辞任し、南部諸州軍に加わった。数か月後には、ユタの駐留軍も撤退した。1861年3月、南部諸州が脱退した連邦政府は、ユタ準州の西部地域をもってネバダ準州を組織した。そして1862年と1866年にネバダ準州はその境界を広げられ、1864年には州に昇格した。

ユタ準州から連邦政府軍が撤退したことにより、大陸横断郵便輸送網と電信網をインディアンの攻撃から守る必要が生じてきた。インディアンたちは以前にも増して攻撃的になっていると伝えられ、ワイオミングのフォートブリッジャーとフォートラミー間の郵便輸送中継所を幾つか破壊していた。1862年の春、連邦政府の当局がブリガム・ヤング（彼はすでに準州知事ではなかったにもかかわらず）に接触を図り、政府軍が到着するまでの約3か月間、東西を結ぶ道路の守備のために、騎兵隊を組織するように要請した。すぐに120名の男性が集められ、出発の準備が整った。皮肉なことにその指揮官となったのは、ユタ民兵隊のロト・スミス大尉であった。彼はそのわずか4年前には、連邦政府軍の進軍を遅らせるために働いた人物である。スミス大尉は兵士たちの間に汚れた言葉遣いや無秩序な行為がないようにし、インディアンと友好的かつ平和的な関係を築くようにとブリガム・ヤングから求められた。この民兵たちは立派にその責任を果たした。実際の戦闘はなく、数名のインディアンを追跡した程度であった。そして、その働きは合衆国政府からの称賛を受けた。<sup>3</sup> 南北戦争中に末日聖徒の組織された部隊が直接的軍事行動に参加したのは、これが最初で最後であった。

1862年にユタ準州民は、州昇格の請願を再び試みた。聖徒たちはデゼレト州という州名で申請し、州憲法の草案も作り、ブリガム・ヤングを知事とする州政府のおもな顔ぶれの仮選出まで行った。しかし彼らの申請はまた却下された。一番の原因は多妻婚の問題であり、与党の共和党がそれに断固として反対していたのである。

共和党選出の大統領エーブラハム・リンカーンは、末日聖徒を直接的な対象とする1862年の重婚禁止モリル法に署名していたが、施行の段階まで事を進めることは

## 南北戦争の時代

していなかった。彼はモルモンに関しては偏見のない公平な見方をしていたが、南部諸州の反乱にどう対応するかという問題により関心が向いていた。ブリガム・ヤングは、モルモンに関してリンカーンがどのような意向を持っているかを確認するために、『デゼレトニュース』(Deseret News)の編集補佐T・B・H・ステンハウスをワシントンに派遣した。大統領は彼に次のように語った。「ステンハウスさん、わたしが子供でイリノイの農場にいたころ、そこには取り除かなければならない木がたくさんありました。倒れた丸太と出くわすこともよくありました。割るには固すぎ、燃やすには湿りすぎ、動かすには重すぎる。それでわたしたちはそれをよけて耕したものです。わたしはモルモンに対して、それと同じようにしようと思っています。戻ったらブリガム・ヤングに伝えてください。彼がわたしのじゃまをしないなら、わたしも彼のじゃまをするつもりはないと。」<sup>4</sup> 南北戦争が終結するまでの残りの期間を通して、信教の自由を支持するリンカーン大統領の態度は、聖徒たちの敬意を得た。

## 通信手段の発達

悪意を持つ政治家たちは多くの人々にモルモンに対して偏見を抱かせたが、一方でユタを訪れる著名な人々が自分の目で確かめて感銘を受け、それを公にするということもあった。1855年にフランスの植物学者ジュール・レミーがソルトレーク・シティーに来て1か月間滞在した。レミーは1860年に、ヨーロッパで自分の見解を発表した。レミーはその中で、聖徒たちを勤勉で宗教心が強いと評し、多くのヨーロッパ人が教会に対して持っていた否定的なイメージの幾つかを変えた。アメリカの非常に有名なジャーナリストであった『ニューヨクトリビューン』(New York Tribune)紙編集主幹ホース・グリーリーも1859年にユタを訪れ、ブリガム・ヤングとモルモンについて公正な内容の記事を書いた。そして当時最も有益な論評の一つを著したのが、世界的に有名な探検家リチャード・バートンであった。彼は1860年にユタ州を訪れ、後にモルモンについて『聖徒の町』(The City of the Saints)という洞察に満ちた本を著し、それは多くの人々に読まれた。

外の世界との通信手段もさらに発展を見せた。その初めが1860年4月に開通したポニーエクスプレスであった。80人の大胆不敵で軽量の騎手がミズーリ州のセントジョセフからカリフォルニア州のサクラメントまで2,000マイル(約3,200キロ)近くもある道のりを、中継しながら10日で郵便物を運んだのである。この伝説的な偉業を成し遂げるために、騎手たちは320の中継地点で10マイル(約16キロ)ごとに馬を変えながら疾走した。ポニーエクスプレスのルートはユタ準州内を通過しており、1年半というその存続期間に、危険ではあったが夢の多いこの仕事に多くのモルモンの男性たちも参加した。

1861年10月には、大陸横断通信線がソルトレーク・シティーで接続され、ポニーエクスプレスが廃止される大きな理由となった。これによって様々なメッセージが電文として、遅れることなく合衆国内の中継局に送信されることになった。電信線の全面開通は、1851年の「逃亡役人」がまき散らした偽りの情報や1857年のブキャナン大統領によるユタ遠征を企てるような問題に終止符を打った。

ブリガム・ヤング大管長は、開通した大陸横断電信線で最初の電文を送信する特



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

大陸横断通信線

## 時満ちる時代の教会歴史

権を与えられた。預言者はオハイオ州クリーブランドのパシフィック・テレグラフ社のJ・H・ウェード社長にあてて次のような祝辞を打電した。「ユタは孤立した立場を取ることなく、この幸いな国の憲法と法律をしっかりと守り、このような有益な事業に心から関心を抱いております。」<sup>5</sup>

大陸横断電信線がソルトレーク・シティーまで通じるようになると、プリガム・ヤングはすぐに、全入植地を結ぶローカル電信線敷設構想を練り始めた。そしてソルトレーク・シティーに電信技術を教育する学校を開設した。電線、バッテリー、絶縁体、送受信器、その他の機器類の発注もなされたが、南北戦争の影響で実際には1866年になるまで調達することができなかった。1867年に500マイル（約800キロ）もの電信線が開通した。その後何年にもわたって電信線はアイダホ南部、アリゾナ北部を含めモルモンの入植地のほとんどを結ぶまでに延びていった。1880年までに、1,000マイル（約1,600キロ）以上の敷設が行われた。

## 再度の政府軍の駐留

リンカーン大統領が当初ユタ準州に対して行った人事の幾つかは望ましい結果を生じなかった。準州知事に任命されたインディアナ州出身のジョン・W・ドーソンがユタにとどまったのはわずか1か月間であった。彼は愚かにもユタに着任して間もなく、国家に対する反逆罪の嫌疑を晴らすという名目でモルモンに税を賦課するという自分の意向を州議会で話した。その数日後、彼はソルトレーク・シティーに住むある女性に理不尽な申し出をした。そしてそのことが露見すると、面目を失って町を後にした。彼はマウンテンデル郵便中継所で見つけたが、そこで酒に酔った多くの無法者たちから暴力を受け、その無法者たちは後に裁判にかけられた。

約2か月後にリンカーン大統領は、やはりインディアナ州出身のステーブ・A・ハーディングをドーソンに代えて、ユタ準州知事に任命した。ハーディングはニューヨーク州マンチェスターでジョセフ・スミスの家族を知っていた。ユタに着任すると、彼は聖徒たちに好意的であるふりをした。しかし間もなく彼は教会とその教えを軽蔑し、聖徒たちは国家に対して忠誠を尽くしていないと告発した。

ハーディングの告発はワシントンの軍当局に、モルモンの志願兵の兵役期間を更新せず、その代わりにパトリック・エドワード・コナー大佐が指揮する「カリフォルニア義勇軍」をユタに派遣する口実を与えた。教会の指導者と会員たちは、郵便輸送ルートと電信線網の守備、インディアンの取り静めなどの任務を喜んで果たしてきただけに、当然のことながら外部からの軍隊の駐留を快く思わなかった。コナーが、モルモンは連邦政府に対して忠実でなく、自分の最重要任務はモルモンの徹底的監視であると強く信じていたことは、事態をさらに悪化させた。聖徒たちは、コナーが700名の兵士を、ジョンストン軍が撤退して間もない駐留地に配備することを望んでいたが、彼はソルトレーク・シティーのすぐ東側の山麓地を選び、故ステーブ・A・ダグラスにちなんでそこをキャンプダグラスと名付けた。

コナー指揮下の政府軍は1862年10月にキャンプダグラスに入り、南北戦争が終わるまでそこに駐留した。政府軍兵士たちは、ユタの地域住民にとって決して好ましい存在ではなかった。カリフォルニア出身の兵士たち自身も、実戦に参加するのが望みで、ユタに駐留するのは楽しいことではなかった。教会員と軍の間では非難の

## 南北戦争の時代



パトリック・エドワード・コナー（1820 - 1891年）。退役後ユタにとどまり、死に至るまで探鉱の仕事をした。しかし、その仕事ではまったく成功を収めることができず、彼が死んだときに持っていた財産はわずか5,000ドル程度だった。

応酬がなされた。聖徒たちは軍を有害な存在と考え、自分たちが山岳地帯の中に築いた大切な社会の道徳を低下させる原因と見なしていた。ユタに駐留している間に将軍に昇格した指揮官コナーは、兵士たちをよく統率した。彼は交易ルートを守り、1863年1月の有名なベア川の戦いではユタ北部とアイダホ南部から、インディアンの襲撃の脅威を取り除いた。その結果聖徒たちは、これらの魅力的な地域への入植を安全に行うことができたのである。コナーはまた山岳地帯において探鉱を精力的に行った。彼はその働きのゆえに、「ユタの鉱業の父」として知られるようになった。<sup>6</sup>

一方、ハーディング知事は聖徒たちから甚だしい不評を受け、リンカーン大統領に対して知事更迭の請願がなされるほどであった。リンカーンはその請願を受け入れたが、ユタに住む「異邦人」たちの意を満す必要からモルモンに対して敬意を払い友好的だったジョン・F・キニー判事も解任した。プリガム・ヤングの指導の下に、聖徒たちは1863年から1865年にかけてキニーを連邦下院議員として選出した。これによって、キニーはユタ準州史上唯一の非モルモン下院議員となった。リンカーンはユタ準州のインディアン管理官ジェームズ・デュエイン・ドティを新準州知事として指名した。彼は1863年6月に受諾し、南北戦争が終わるまでの期間、そつなく統治を行った。

## モリス派事件

1862年の夏、ユタに「モリス派事件」という不幸な出来事があった。モリス派とはイギリス人改宗者ジョセフ・モリスが指導した背教者のグループである。彼らはサウスウィーバーに入植地を開いた。ソルトレーク・シティーの北35マイル（約56キロ）に位置するサウスウィーバーはキングトンフォートという名で知られていた。モリスはすでに1857年から、自分は主の預言者、聖見者、啓示者であると称し、1860年には何人かの信奉者を得ていた。その中にはサウスウィーバー地区の監督と会員たちが含まれていた。1861年2月にヤング大管長は事実関係の調査のために、使徒のジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフをサウスウィーバーに派遣した。二人はそのワードの16名の会員を破門とした。その中にはプリガム・ヤングを支持することを拒否しジョセフ・モリスが預言者であると主張する監督も含まれていた。モリス派の人々は、それぞれの持ち物を共有財産としてささげ、モリスの「示現」が説くキリストの差し迫った来臨を待望していた。

1862年の早いころに、再臨に関して一連の間違った預言が行われた後に、モリス派の信徒の何人かが迷いから覚め、前にささげた財産を返還してもらったうえで、脱退しようとした。逃げようとした3人がモリスによって監禁され、彼らの妻たちが司法当局に訴えて助けを求めた。裁判所長のキニーが5月22日に、監禁された3人の解放と、モリスとその側近の逮捕を命じる礼状を出した。モリスがそれに従うことを拒み、自分の示現の発表を続けるに及んで、キニーは知事代理フランク・フラーに令状の強制執行のために武装保安隊として民兵を出動させるように促した。

準州保安官筆頭代理ロバート・T・バートンは6月13日の早朝、250名の兵を率いて、キングトンフォートの南にあったモリス派の根城に近づいた。彼らはまずモリスに降伏し令状に従うよう求めた。

モリスとそのグループはとりでの中の屋根のない休息所に集いモリスに啓示が授

## 時満ちる時代の教会歴史

けられるのを待っていた。事態が一向に変わらないのにしびれを切らして、バートンがとりでに当たらないようにして大砲で警砲を2発撃つように命じた。ところがその2発目の砲弾がとりで正面の畑に落ち、モリス派の人々が集っていた休息所の中に跳飛した。二人の女性が死亡し、一人の若い女性が重傷を負った。こうして起きた戦いは、3日にわたる包囲戦となった。

3日目に、とりでの中から休戦を求める白旗が掲げられ、戦いがやんだ。無条件降伏を求めた後に、バートンと30名の兵がとりでの中に入った。このときモリスは自分に従う人々にもう一度話をする機会を与えてくれるように求めた。しかし彼は別れのあいさつをするどころか、「わたしと、わたしの神に帰依するすべての者よ、生けるときも、死んだ後も、わたしに従え」と叫んだのであった。そのとき、モリスを疑わない者たちが、すでに引き渡しを済んで積み上げられていた銃を取り戻そうと殺到した。<sup>7</sup> 激しい銃撃戦が交わされ、ジョセフ・モリスと彼の右腕のジョン・バンクスが命を落とした。結局、3日間の衝突の中でモリス派から10名、ユタ武装保安隊から2名の死者が出た。モリス派の90名がソルトレーク・シティーへ連行され、2名の保安隊員殺害と公務執行妨害の罪状で裁判にかけられた。彼らのうち7名が有罪判決を受けたが、ハーディング知事によって特赦となった。そして自ら希望したモリス派の残りの者たちの多くはコナーが指揮する兵の護衛を受けて、アイダホ準州のソーダスプリングへ移った。この不幸な事件に教会は直接関与しなかったが、結果的にこれによって東部では教会の評判が悪くなった。

## ハワイにおける問題

この時代に教会の指導者を憂慮させたもう一人の人物がいる。ウォルター・ムレー・ギブソンという<sup>ようへい</sup>傭兵の経歴を持つ男である。ギブソンはユタ戦争の時代にワシントンで教会の主張を弁護する立場に回り、後に聖徒たちをもっとよく理解する目的でソルトレーク・シティーへ来た。彼は多くの教会指導者と知り合いになり、旧タバナクルで大勢の聴衆を前に自分の旅の経験について話した経験がある。1860年1月15日に娘のタルラとともにヒーバー・C・キンボールからバプテスマを受け、ブリガム・ヤングから確認の儀式を受けた。ギブソンが聖徒たちを東インド諸島に住まわせてはどうかという提案をしたときヤング大管長はそれを受け入れなかったが、彼を合衆国東部への伝道に召した。ギブソンはその召しを6か月だけ果たすとニューヨークの聖徒たちに、自分は今すぐソルトレーク・シティーに行く必要があると話して信用させた。ニューヨークの聖徒たちは彼がソルトレーク・シティーに戻るための旅費の拠出要請に惜しみなくこたえた。

1860年11月、ギブソンはブリガム・ヤング大管長から太平洋地域で伝道活動を行うよう召された。ヤング大管長は彼に、全力を尽くすなら自分が思う以上の良い結果を得ることができると話した。

1861年の夏、ハワイに到着したギブソンは自分に与えられた権限を越えた行いをし、ハワイの古くからの慣習と福音の教えを混交させてハワイの聖徒たちの支持を得た。ユタ戦争の間は宣教師たちがユタへ呼び戻されていたために、ギブソンは聖徒たちを思うままに動かすことができた。彼は自分自身を「海の島々と、ハワイ諸島における末日聖徒教会の最高管理者である」と宣言した。ギブソンはハワイの会



ロバート・テラー・バートン (1821 - 1907) は、ノーブー軍楽隊の隊員であり、宣教師、ユタにおけるノーブー隊隊員、準州保安官代理、デゼルト大学評議員、ユタ州議会議員などの職務を果たした。彼はソルトレーク・シティー第15ワードの監督の職も受け、1875年には教会の管理監督会の副監督として召された。

## 南北戦争の時代

員たちに全財産を自分にささげるように説得した。また十二使徒を任命し、その一人一人から見返りとして150ドルを徴収した。大祭司，七十人，長老などのほかの職についても，彼はそれなりの金銭を求めた。さらに大監督，小監督という職まで設けた。<sup>8</sup> 彼は教会の儀式を物々しく，仰々しいものに変え，長い式服を着，会員たちには自分に対して頭を下げたり，平伏したりするように求めることさえした。ギブソンがねらっていたのは，軍隊を組織し，ハワイ諸島全土を一つの帝国として統一し，自分自身が王になることであった。

そしてついに1864年，事態を憂慮したハワイ人聖徒たちがソルトレーク・シティーに状況を報告する手紙を書き送った。ヤング大管長は十二使徒定員会のエズラ・T・ベンソンとロレンゾ・スノー，また過去にハワイで宣教師として働いた経験のあるジョセフ・F・スミス，アルマ・スミス，ウィリアム・クラフをハワイに派遣し，事の処理に当たらせることにした。彼らはギブソンが本拠地としていたラナイ島に上陸しようとしたが，そのときそこの港は強風が吹き，波が荒れ狂っていた。そして彼らが乗っていたあまり大きいとはいえない船は転覆してしまった。ロレンゾ・スノーを除く全員が，海岸からその事故を目撃したハワイ人たちによって無事救出された。最後に，気絶したロレンゾの体が転覆した船の下で発見された。そこにいただれの目にもロレンゾは死んでいるとしか映らなかった。ハワイ人たちは無駄なことだと断言したが，兄弟たちは彼の体を自分たちのひざの上に乗せ，信仰をもって祈り，癒しの儀式を施した。彼らはロレンゾの体をたるの上に乗せて揺らしたり，胸を押したり，口移しの呼吸を試みたりして，何とか息を吹き返させようと努力した。そして事故から1時間以上たってようやく彼は，かすかに息を吹き返したのである。<sup>9</sup>

ギブソンの居所を捜し当てた長老たちは，状況が聞いていたよりもなお悪いことを知った。彼らはギブソンに会い，彼が教会の名によって集めたすべての財産，金銭を渡すように命じた。しかしギブソンがこれを拒んだため，兄弟たちは彼を破門処分とした。数週間後，ハワイの聖徒たちの多くは自分たちに遣わされた教会の指導者に従うようになった。この指導者たちがハワイの聖徒たちの信頼を取り戻すのに役立った一つの出来事があった。ギブソンはある岩場を聖地と定め，そこを歩く者は死に撃たれると警告していた。ところが長老たちのうちの二人がそこを歩いたのであった。使徒たちは教会の秩序を元に戻すとユタへ戻り，ジョセフ・F・スミスとほかの二人の同僚に伝道の責任を託してハワイにとどまらせた。スミス長老はライエで農園を取得し，開発を進めた。そこは伝道本部と多くのハワイの聖徒が住む場所になった。20世紀には，ここにハワイ神殿，プリガム・ヤング大学ハワイ校，ポリネシア文化センターが建設された。



ウィリアム・ウォレス・クラフ(1832 - 1915年)は，モーガン郡，サミット郡，ワサッチ郡の管理監督として召された。プリガム・ヤング大管長が教会の神権組織の改組の一環として，管理監督は教会に一人とすると発表した1877年に解任された。このとき管理監督に召されたのはエドワード・ハンターであった。ウィリアムはスカンジナビア伝道部を管理するように召され，またサミットステーキ会長としての召しも果たした。

## 伝道活動と移民

アメリカに荒れ狂う南北戦争，コナーが指揮する軍隊の駐留，モリス派事件，ウォルター・ムレー・ギブソン事件など様々な問題があったが，教会の指導者の最大の関心はシオンの発展，すなわちより多くの人々を教会に改宗させ，できるかぎり多くの会員をユタに集合させることであった。

国民の多くが大きな悲しみを経験していたこの時代に，50ほどの新しい入植地が



## 時満ちる時代の教会歴史

開かれた。そのうちの一つがユタ南部のセントジョージであった。セントジョージは南部からの物資の調達ができなくなったときに始まった「綿花栽培振興策」の対象地の一つとなった。アリゾナ北部にはパイプスプリングス、そしてユタ中部にはモンロー、サリナ、リッチフィールド、ユタとアイダホのベアレック周辺地域にはレイクタウン、パリシ、モントピーリアが建設された。その多くが農業を基盤とする、古くからの入植地も発展を遂げていた。1860年代の初期に、コロラド、モンタナ、アイダホ、ネバダ各州で鉱業が大きく発展すると、小麦粉、穀物、その他の農産物を積んだユタの何百台もの幌馬車が鉱山の現場に販売に出かけ、聖徒たちの経済を大いに潤した。これはユタ戦争と南部への移動によって痛めつけられていた人々にとってすばらしい祝福となったのである。

伝道活動は南北戦争の間に再び強化された。北アメリカでは実質的に伝道活動が行われていなかったこの時期に、教会はヨーロッパ中で成長を遂げていた。大西洋横断電信網の発展は、ヨーロッパの聖徒たちとの通信を大いに助けた。1860年に大管長会は、十二使徒定員会会員のアマサ・M・ライマン、チャールズ・C・リッチ、ジョージ・Q・キャンソンを、イギリス伝道部とヨーロッパ伝道部を管理させるために派遣した。この二つの伝道部はどちらもイギリスのリバプールに伝道本部を置いていた。この3人の使徒たちは、ライマン長老とリッチ長老がユタへ戻った1862年5月14日まで、ヨーロッパ伝道部を管理した。キャンソン長老はワシントンへ行き、少しの間ユタの州昇格のための働きをし、その後再びイギリスへ渡って、1864年にユタへ戻るまでイギリスで伝道部の管理の責任を果たした。

これらの使徒たちは、アメリカからの長老たちを派遣できなかった地域ではイギリスとスカンジナビア諸国の地元出身の宣教師を用いて、英国諸島とヨーロッパ大陸の両方におけるイスラエルの集合を再び活性化した。ユタ戦争の間とその後しばらくの間伝道活動は減退していたが、ここに至って再び改宗者の数が大幅に増加した。イギリスとスカンジナビア諸国には特に豊かな収穫があった。教会が拠出する費用を抑えるために、プリガム・ヤングは宣教師たちに「財布も袋も持たず」に旅をし、宿泊と食事は喜んで助力してくれる教会員たちの世話を受けるようにと指示した。また多くの宣教師は妻子を残して伝道に出ているために、家族が自分たちだけの力で生活できなくなった場合には、地元の神権指導者に援助を頼むようになっていた。

教会の指導者は、ヨーロッパの聖徒をシオンへ連れて来るための方法について、新しく、よい方法がないかと常に注意していた。1860年の秋にジョン・W・ヤングが様々な産物を積んだ幌馬車を雄牛に引かせてまず東部へ行き、移住者たちの必要を賄うためにそれらのものを売却した。その後彼は、雄牛に引かせた幌馬車で移住者をミズーリ川からソルトレーク盆地まで連れて来たのであった。この方法は大きな成功を収め、彼は10月の総大会でそのやり方について話す機会を与えられた。

それ以来、毎年行われる移住のための物資を積んで牛に牽引された幌馬車が4月にユタを出発し、夏か初秋には移民とともに戻って来るようになった。若い男性たちがこの「教会の幌馬車隊」の御者の責任を果たす宣教師として召された。1861年から1868年の間に、教会は1万6,000人以上の聖徒をヨーロッパからユタへ運んだが、聖徒たちが自発的にささげた労力、家畜、補給物資によって、それにかかる費用を抑



ジョージ・クエール・キャンソン(1827 - 1901年)は才能豊かな人物で、教会に多大の貢献をした。宣教師、ヨーロッパ伝道部の部長、著述家、出版者、使徒として働いた。ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノーの副管長として務めを果たした。

キャンソン長老は『モルモン書』をハワイ語に翻訳した最初の人物で、1850年にハワイ諸島の伝道の門戸を開くのに貢献した。

キャンソン長老は多妻婚実行の罪でユタ州立刑務所に投獄されていた間に、ジョセフ・スミスの生涯に関する本の大部分を著した。

## 南北戦争の時代

えることができた。また外部から購入する物資も少なく済んだ。

### ソルトレーク・シティーの発展

ソルトレーク・シティーの人口は、1860年現在で8,200人、1870年の段階では1万2,800人であった。1870年の人口調査では、人口の65パーセントが外国出身者であった。最も多いのは英国諸島出身者であったが、スカンジナビア出身者も多かった。当時のソルトレーク・シティーは教会員にとって入植地建設事業の中核の役割を果たしていた。

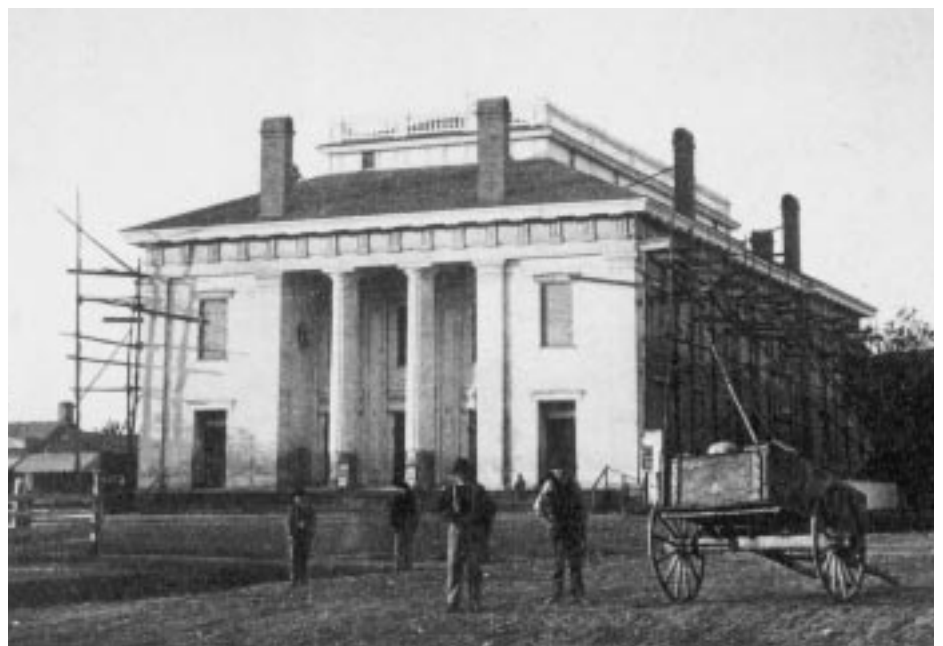
新たに到着した移民たちの労働力を活用して、公共事業の担当局は数多くの重要な建物を建設した。この発展する地域にあって、1850年代には議事堂、社交会館、エンダウメントハウス、什分の一の倉庫などが建設された。そして1860年代には、ソルトレーク劇場、市庁舎、兵器庫、ピーハイブハウス、ライオンハウス、ソルトレークタバナクルなどが建設された。1862年に建設されたソルトレーク劇場は、盆地の多くの文化、娯楽活動の中心となった。

1850年から1870年にかけて、ダニエル・H・ウエルズはソルトレーク・シティー公共事業局の局長を務めた。また彼はノーブー部隊司令官を務め、1857年からは第二副管長、1866年からはソルトレーク・シティー市長の職も務めた。

ブリガム・ヤング大管長は、適切な建物を持ち、そこに集って指導者から教えを受ければ、聖徒たちが霊的にさらに強められると信じて新しいタバナクルの建築計画を立てた。彼が構想していたのは、ドーム型の大規模な礼拝堂であった。ヤング大管長は、橋梁建築家<sup>きょうりょう</sup>のヘンリー・グロー、当教会の建築士ウィリアム・H・フォルサム、そしておもに内装を担当したトルーマン・O・エンジェルの協力を得て、このユニークな建物の建築工事を監督した。このタバナクルは間口が150フィート（約46メートル）、奥行が250フィート（約76メートル）、高さが80フィート（約24メートル）あった。そしてそれは1867年10月の総大会に間に合うように完成した。タバナクル

ソルトレーク劇場。人々が宗教だけでなく、娯楽も必要としていることを感じたブリガム・ヤングは、義理の息子であるハイラム・クラウソンに、聖徒たちの必要を満たすために劇場建設の事業に着手するよう命じた。1852年から53年にかけて建設された社交場はそれまで市の娯楽センターとして重要な役割を果たしてきたが、もはや必要を十分に満たすことができなくなっていた。

1862年に完成したソルトレーク劇場は、3,000人の収容能力を備えていた。この建物は間口80フィート（約24メートル）、奥行144フィート（約44メートル）、高さ40フィート（約12.2メートル）であった。この中では酒類の提供は一切行われず、どの公演も祈りによって開幕し、祈りによって閉幕された。また出演する男性や女性は地域社会に対して良い模範を示すように望まれた。数多くの一流の俳優や芸人たちがユタを訪れ、この劇場の舞台上で上演した。ソルトレーク劇場は1929年に取り壊された。



## 時満ちる時代の教会歴史



ダニエル・H・ウエルズ(1814 - 1891年)はイリノイ州コマースに住んでいた。当時コマースにはミズーリ州を追われた聖徒たちがいた。教会がノーブーに本拠を置いていた時代、彼は教会員ではなかったが聖徒に対して好意的で同情的であった。1846年の夏にバプテスマを受け、開拓者の中に加わった。彼はノーブーを最後に去った教会員の一人である。

1857年、彼はブリガム・ヤング大管長の第二副管長として召され、その職を20年にわたって務めた。1866年にはソルトレーク・シティの市長に選出され、10年間在職した。1884年にはヨーロッパ伝道部を管理する責任を与えられ、その任を終えてアメリカへ戻ってからは、マンタイ神殿の神殿長に任命された。



ウィリアム・H・フォルサムが設計した市長舎は、7,000ドルの費用をかけて1866年に完成した。当初、この建物は準州議会の議場として用いられた。後になって、市警察の本署が置かれた。1960年にこの建物は解体され、ユタ州議会議事堂のすぐ南側に再建された。

の建物の建設と平行して、オーストラリア人改宗者でその道の優れた技術者であったジョセフ・H・リッジスによって、巨大なパイプオルガンの制作も行われた。オルガンの材料としてうってつけの木材が300マイル(約480キロ)離れた南部ユタのパイン峡谷で見つかり、20台もの馬車で注意深くソルトレーク・シティまで運ばれた。当初、タバナクル内では音響効果に問題があったが、1870年に栈敷席を加えたことにより、8,000人の収容能力を持つこの名だたる建築物は大規模な集会に最適の場となった。

ソルトレーク神殿の工事は1860年に再開された。しかし1861年になって教会の指導者たちは、その基礎部に難点があるという結論を下した。ブリガム・ヤングは、近くの山岳地帯から切り出されたみかげ石だけの新しい基礎部は、予定されていた神殿の大重量に堪え得るものでなければならぬと判断した。新しい土台は、厚さが16フィート(約5メートル)ということになった。ヤング大管長はこう宣言した。「わたしはこの神殿が福千年の間立ち続けるように、また、主に受け入れていただけるように願っている。」<sup>10</sup> 基礎部の再工事は進行が遅く、壁体が地上部に達したのは1867年のことであった。

背教や政府軍の進攻などという問題があったにもかかわらず、通信や輸送網の改善、伝道活動の成長、入植地の増加、経済状況の好転などのすべての要素があいまって、教会に喜びをもたらした。合衆国の国民のほとんどが流血の戦いに苦しんでいた南北戦争の時代に、末日聖徒はそれとは極めて対照的な状況にあった。ユタの住民たちは平和と繁栄に浴していたのである。ユタ戦争に伴う困難な年月の後に、教会は神意によって定められた歩みを再開した。

## 注

1. "Ceremonies at the Bowery" *Deseret News* 「仮設集会場における儀式」『デゼレトニュース』1861年7月10日付, 152

2. *Journal of Discourses* 『説教集』10: 38 - 39で引用

3. "Requisition for Troops" 「軍への徴用」『デゼレトニュース』1862年4月30日付, 348参照

4. プレストン・ニブレー, *Brigham Young: The Man and His Work* 『ブリガム・ヤング—人物像と業績』(Salt Lake City: Deseret News Press, 1936), 369で引用

5. ブリガム・ヤング "The Completion of the Telegraph" 「電信の完成」『デゼレトニュース』1861年10月23日付, 189

6. ガスティブ・O・ラーソン, *Outline History of Utah and the Mormons* 『ユタとモルモンの略史』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1958), 195; リチャード・D・ポール編, *Utah's History* 『ユタ史』(Provo: Brigham Young University Press, 1978), 204参照。

7. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 5: 47で引用

8. アンドリュー・ジェンソン "Walter Murray Gibson" *Improvement Era* 「ウォルター・マレー・ギブソン」『インブループメント・エラ』1900年12月号, 87

9. ジョセフ・フィールディング・スミス編, *Life of Joseph F. Smith* 『ジョセフ・F・スミスの生涯』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 215 - 216参照

10. ウィルフォード・ウッドラフ, 歴史記録者による個人の歴史 - 1858年, 1862年8月22日分記載, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ



# 自立への努力

年表	
年代	重要な出来事
1864	ブリガムシティーで協同組合事業が始まる
1867	扶助協会の活性化が図られる
1867.12	ソルトレーク・シティーに預言者の塾が組織される
1868.10	全教会レベルで協同組合事業が始まる
1869.5	シオン協同組合商事が正式に発足する
1869.5.10	大陸横断鉄道がユタ準州プロモントリーサミットで接合する
1869 70	「新しい運動」とも呼ばれた背教グループ「ゴドビー派」が活動を始める
1874.2	共同制度実施への動きが始まる

◀1869年5月10日、ユニオンパシフィック社(右)とセントラルパシフィック社(左)の機関車がユタ準州プロモントリーサミットで接合し、大陸横断鉄道の全通を祝う式典では、黄金の犬釘が打ち込まれた。

中央で握手をしているのは、セントラルパシフィック社の主任技師サミュエル・S・モンタギュー(右)と、ユニオンパシフィック社の主任技師グレンビル・M・ドッジ(右)。この式典に集った人の数については500人から3,000人までと様々な推定があるが、何枚かの写真から推測すると500から600人の間と思われる。

ブリガム・ヤングの代理として、オグデン市長ローリン・ファーが出席した。ブリガム・ヤングはこのときユタ南部に滞在していた。

**南**北戦争の後、教会の指導者たちは前にも増して、自立することの重要性と、それが聖徒らに経済的および霊的な力を与えることを再認識した。それは特に大陸横断鉄道の延伸について言えることであった。これによってユタはもはや隔絶の地ではなくなったのである。この時期に、教会がこの世界的な影響から守られて自立するために、幾つかの方法が講じられた。

## 初期の段階

ブリガム・ヤングは早くも1850年代から鉄道の延伸を促進したいと考えていた。それが実現すれば、グレートベースンへの移住が楽になり、移民にとって大きな助けになると考えていたからである。教会員でない指導的な立場の官吏たちも「鉄の馬」がユタ準州を通過するように望んでいた。それは鉄道によって富を蓄積できるというだけでなく、大陸横断鉄道がユタまで延びてくれば教会は崩壊するだろうと確信していたからであった。彼らのその確信は、ブリガム・ヤングは教会員に服従を強いている邪悪な独裁者なのだという誤った考えに基づくものであった。そのため彼らは、鉄道が来れば、それは抑圧された末日聖徒たちが東部の自由な社会へ逃れるための便利な手段になると考えたのである。彼らがそう考えていることを聞いたヤング大管長は、自分の説く教えが「一本の鉄道に耐え得ないとしたら、それは確かに貧弱な宗教と言わざるを得ない」と語った。

政府の指導者たちは、ブリガム・ヤングと彼に従う人々が、労働者たちが非常なスピードで鉄道建設を進めるのを熱意と期待をもって待ち受けていることを知らなかった。しかし教会員たちは東部での様々な経験から、ユタのプロモントリーサミットでの連結を目指して、大陸の東西両側から延びつつあるレールと枕木まくらぎが様々な現実的な問題を運んでくるということを知らないわけではなかった。

鉄道によって準州にさらに多くの教会員でない人々が来ることを認識していたブリガム・ヤングは、預言者の塾を再び組織し、協同組合制度を奨励し、教会の補助組織の活性化を図った。預言者の塾は、教会の教義と方針の面で兄弟たちを強化するために1867年に組織された。ヤング大管長は経済的な事柄についての判断で兄弟たちの助けを望んでいた。彼は聖徒たちがある程度経済的な自立を維持できるよう、準州内の産業と協同組合事業の新興を考えていたのである。預言者の塾には、教会の様々な集会の内容を高め、偽りの教義けんでんの喧伝を最小限に抑えるという目的もあった。<sup>2</sup>

預言者の塾はソルトレーク・シティーのほかに、ローガン、オグデン、ブリガムシティー、プロボ、パロワン、そのほかの主要な入植地においても組織された。ブリガム・ヤングは自立した経済を目指し、この組織を通して自分たちの同胞である

## 時満ちる時代の教会歴史

聖徒から商品を購入するよう教会員に奨励した。家内工業も奨励され、教会員は衣類、食品を自ら作り、鉄工製品の組み立てまで行った。また聖徒たちは、絹、綿、亜麻の生産も行った。さらには独自に石炭の採掘を行い、紙の製造も行った。ぼろ切れを原料に作った紙もあった。

預言者の塾の活動にはほかに、永続的移住基金の資金獲得活動、反教會的商人に対する不買運動、プロボ毛織物工場の建設、また東部から流入する商品に対してユタで製造される商品の価格競争力維持のための人件費抑制、そしてソルトレーク・シティーからオグデンまでの鉄道建設促進事業などがある。

預言者の塾は教会員に対して、家屋、庭、公道の美化を奨励し、シオンの民がほんとうに世の光となれるよう、正直、清潔、整頓せいとんなどが強調された。聖徒たちが自らの経済的状态を固め、個人の財産を管理し、キリストに従った生活をする一方で、鉄道が彼らを困む山岳地帯を貫き始めていた。

1868年にブリガム・ヤングは、預言者の塾の代表として、ユニオンパシフィック鉄道会社の役員との間で契約書を交わした。それは、鉄道のルートがエコーキャニオンからソルトレーク・シティー間、あるいはエコーキャニオンからオグデン間と決まった場合に、その建設工事を請け負うという契約であった。預言者の塾は幾つかの理由で、この契約には利点があると考えていた。第1は、鉄道建設者用のキャンプに付き物の数々の問題を回避できるという点であった。そのようなキャンプの風紀は、建設労働者たちを誘惑し、彼らの収入をねらって、鉄道の後についてくる賭博師、売春婦、悪漢などによって乱されていた。第2は、「その契約によって得られる収入が、確実に教会と教会員に行く」ということであった。第3は、「ユタが鉱物資源に富んでいるという評判をすばませることにより、好ましくない非モルモンの流入を最小限にとどめる」ことであった。そして第4は、それによって末日聖徒が必要としている多くの雇用機会が得られる点にあった。<sup>3</sup>

エズラ・T・ベンソン、チョーンシー・ウエスト監督、オグデンステーキ会長のローリン・ファーなどを含む名の知られた教会員たちも、ネバダのフンボルトウェルズから東へユタのオグデンに向かう200マイル（約320キロ）の鉄道敷設請負契約に署名した。このようにして、準州内の何百人もの住民が職を得たのである。1869年3月8日にユニオンパシフィック鉄道がオグデンまで敷設されたとき、地元住民たちは多くの旗をもって祝い、建設作業員たちを歓迎した。ある旗には「国民を結ぶ交通路に万歳！ ユタによろこそ！」と書かれていた。<sup>4</sup>

ユタ準州オグデンの北西53マイル（約85キロ）のプロモントリーサミットで東西から延びてきた鉄道が接合されたのは1869年5月10日であった。最後に敷かれた枕木はカリフォルニア産の月桂樹で銀の銘板が打ち付けられ、その上には歴史的なその偉大な出来事を祝う碑文が刻まれていた。午後12時47分に大きなハンマーを用いて、セントラルパシフィック社のリランド・スタンフォード社長とユニオンパシフィック社のトーマス・C・デュラント副社長が鉄の釘を打ち込んだが、打ち損なってしまった。それでも、電信によって合衆国大統領ユリシーズ・S・グラントに最後の犬釘が打ち込まれたことが伝えられた。サンフランシスコでは祝砲がとどろき、合衆国の各地に、この歴史的な出来事を喜ぶ声が上がった。<sup>5</sup> このときブリガム・ヤングは準州南部に足を伸ばして聖徒たちを訪ねている最中で、式典には出席しなかった。

## 自立への努力

準州内の輸送網をさらに改善し、また教会員に雇用機会を与えるために、大管長会はワードの監督たちや準州測量技官ジェシー・W・フォックスの助けを得て、大陸横断鉄道の通過点であるオグデンとソルトレーク・シティーを結ぶ構想をユタ・セントラル・レールロード社に持ちかけた。1869年5月17日、この路線の起工式が行われた。ただしこの式では、農業を重視する聖徒たちの思いを表すために、つるはしではなく農業用のシャベルが用いられた。レールの敷設は1870年1月10日に完了した。ブリガム・ヤング大管長がユタ産の鉄でできた最後の犬釘を打ち込むのを見るために、何千もの人々が集った。

この路線の建設の後にも、教会の支援によってプロボや南部入植地を通過するユタ・サザン・レールロード社の路線、そしてユタ・ノーザン社による、はるか北の地モンタナ州ビューートの路線の建設も行われた。

それまで連邦政府はユタ準州民に対して土地の権利証書の発行を実施していなかった。そのために、鉄道が延伸するにつれ、住民たちの中には自分たちの保有する土地に対する不安が高まった。「鉄の馬」によって準州における末日聖徒以外の人々の数が大幅に増加した場合、土地の所有に関する明確な証書がないために、土地の所有権もそれに付着する財産の権利も拒否されるおそれが多分にあったのである。それまで明確な土地の権利証書もない状態で長年にわたり平穏な生活を維持してきたのは、互いに協調し合って生活する聖徒たちの能力を示すものである。例えばカリフォルニアでは牧場主と所有権獲得の目的で公有地を占拠する人々の間で争いが多発したが、それとは対照的に、ユタでは教会外の人々がやって来ても土地を巡る問題が起こることはごくまれであった。

聖徒たちの不安が次第に大きくなったために、1869年に預言者の塾は塾の内部で「土地問題について学び、鉄道会社がその所有権を要求している自分たちの土地を守るために取るべき段階を人々に知らせる」ために一つの委員会を設置した。<sup>6</sup>（これはグレートベースンへの入植を望む他の人々にも当てはまる問題であった。）「この委員会は預言者の塾に対して定期報告をし、土地所有権の登記申請に関して、準州各地の入植者を援助するために人員を派遣した。」<sup>7</sup> 彼らの働きによって、人々が不当な不利益を被ることは最小限に抑えられた。

議会が発した命令によって、鉄道会社に通行権が与えられるのは個人の財産権がすでに確定している以外の土地と決定していた。預言者の塾のこの委員会は準州各地の住民を訪れ、土地所有権の登記申請について援助を与えた。

1865年10月の総大会においてブリガム・ヤングは、末日聖徒は経済的に助け合う必要があるという発表をした。彼は次のように宣言した。「男性も女性も、すべての末日聖徒は、自分たちの忠実な兄弟たち以外からは物を買わないと心に決めてください。彼らはそうして得たお金で良いことをします。わたしたちが自立を図ることは神の御心です。もしそれをせずに、神と聖徒以外のところから助けを受けているかぎり、わたしたちは必ず滅びてしまうからです。……わたしたちは自らを守らなければなりません。敵は固い決意をもってわたしたちを滅ぼそうとしているのです。」<sup>8</sup>

1868年にヤング大管長は再び、次のことを注意深く説明した。「〔わたしたちは〕この〔教会外の商人たちとの〕取り引きから離れ、外部の人々を富ますことよりもほかの目的のために自分たちの財産を大切にしなければなりません。わたしたちは



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

鉄道接合の式典に用いられた有名な黄金の犬釘は、サンフランシスコのデビット・ヒューズが寄贈したものである。4つの面には、鉄道会社役員の名前、この犬釘の寄贈者の名前、および祝賀の言葉が刻まれていた。式典の後にこの犬釘はヒューズ氏に返還され、彼は1892年にこれをスタンフォード大学に寄贈した。



19世紀の末日聖徒の間で、什分の一事務所は経済的な面において非常に重要な役割を果たした。当時の什分の一はほとんど現物あるいは労力によって納められていたために、什分の一事務所は地元でできる産物や製造品が入手できる雑貨店のような機能を果たしていた。これは1860年代の、ソルトレーク・シティーのデゼレトストアと什分の一事務所である。テンプルスクウェアの東にあるホテルユタ(現在のジョセフ・スミス記念館)の敷地に建っていた。

## 時満ちる時代の教会歴史

自らの財産を、福音を広め、貧しい人々を集合させるために用いなければなりません。また神殿を築き、困っている人々を支え、自分たちの家を作り、わたしたちから得たものをわたしたちの不利益のために使う人々に与えるのではなく、もっと良い使い方をするように変えなければなりません。<sup>9</sup> その後教会の指導者たちは、聖徒たちの経済的安定に対する脅威を防ぐために、教会員が地元で運営し、教会が監督する形の協同組合事業の展開を奨励した。

末日聖徒による最初の協同組合事業は、1864年に十二使徒定員会のロレンゾ・スノー長老の指示の下にブリガムシティーで開始されてかなりの成功を収め、1860年代におけるその後の教会の協同組合事業のモデルとなった。スノー長老は1854年にブリガム・ヤングにより、ボックスエルダーの聖徒たちを管理する任を受けてそこへ派遣されていた。このボックスエルダーは1864年にブリガムシティーと改名された。その年の秋、ヤング大管長とスノー長老はブリガムシティーにおいて共同制度の原則の実施について長い時間をかけて討議していた。ヤング大管長は『教義と聖約』に示されている奉獻の律法の原則を実施したいと長年にわたって強く望んでいた。そして今、経済的自立が強調されるに至り、ブリガムシティーがそれを開始する理想的な地として浮上したのであった。

スノー長老はヤング大管長にあてた1875年の手紙の中で、自分がその協同組合事業の大きな目的としているのは「人々の利益とその資産を結びつけることにより、彼らの気持ちを一致させ、〔大管長の〕教えの精神に基づいて彼らを自立させ、異邦人の店から独立させることです」<sup>10</sup>と説明している。

まずロレンゾ・スノーは、協同組合による雑貨店の組織を管理した。彼はこの商業協同組合事業を、ブリガムシティーの経済生活全体にわたる組織、またブリガムシティーの自立に必要な産業の発展の基礎として活用することを目指していた。さらに株式組織の会社が作られ、ブリガムシティーの全会員に対して株の購入が勧められた。町でただ一つの店として、その会社は間もなく出資者に対して利益還付金を出すようになる。しかし、利益の多くは家内工業への再投資に向けられた。最初に作られたのが皮なめし工場であった。出資者たちの労働によって建設され、その道に熟練したイギリス人改宗者によって管理された。これに続いて靴の製造工場も建てられ、革製品の製造業が興された。その後の数年の間にほかにも様々な産業が興され、ブリガムシティー全体が経済的に自立するようになった。この協同組合事業の成功と評判は合衆国全体に知られるようになり、アメリカにおける協同組合運動を研究していた有名な著述家エドワード・ベラミーがブリガムシティーを訪ね、ロレンゾ・スノーと数日を過ごし、この組合の活動状況について学んだ。

1868年にヤング大管長はシオン協同組合商事（Zion's Cooperative Mercantile Institution：ZCMI）という経済システムを確立した。当時も広く知られていたように、このZCMIの目的は、準州内に商品を流通させ、できるかぎり安い価格で販売し、「その利益をあまねく人々に分配する」ことにあった。<sup>11</sup> また、理事たちは標準小売価格を設定する権限を与えられ、すべての店舗がそれに従うように求められた。それらの価格は「妥当な」ものでなければならず、「売る側と人々全体の両方の満足と利益につながるものであった。」<sup>12</sup> 統一小売価格の目的は価格競争を抑えることではなく、過度の価格のつり上げを防止することにあった。1869年冬、その価格表の最



## 自立への努力

ソルトレーク・シティーのシオン協同組合商事（ZCMI）は、後に準州全域に広がった系列販売店の本部であった。近年になって、創建当時の鑄鉄製の正面玄関部分が復元された。



初のものが、「シオン協同組合商事の管理者は状況に応じて変更することを許されるという了解の下に発表された。」<sup>13</sup> 後にZCMIは、ブーツ、靴、作業ズボン、コート、ベスト、オーバーシャツ、アンダーシャツ、男性用下着などを製造する独自の工場を持つまでになった。<sup>14</sup>

ソルトレーク・シティーに本店が開かれてから6週間のうちに、準州内で81の協同組合店舗が営業を開始した。各地の聖徒たちは1株以上の出資を行うように奨励された。やがて、ユタ、アイダホ南部において150以上の店舗が開設されるまでになった。これらの店舗は末日聖徒による事業のほとんどすべてを扱っていた。

準州の州都ソルトレーク・シティーでは、ほとんどのワードがそれぞれに協同組合の店舗を持ち、その多くが製造事業体を設けて出資者に利益を還付した。牧畜を行う人々は牛、馬、羊などを協同組合事業方式の中で飼育し、品種改良用の家畜を輸入して質の向上を図った。<sup>15</sup> 聖徒たちが1873年の全国的な恐慌の影響を感じ始めるまで、この協同組合方式は自立という教会指導者の目標達成に大きく寄与したのである。幾つかの協同組合は20世紀に至っても活動を続けた。

## 扶助協会の活性化

1867年には預言者の塾が再組織されたが、ブリガム・ヤング大管長はそれと同時に教会の扶助協会も再組織した。彼は家内工業と経済的自立を促すための動きの中に姉妹たちを積極的に参加させようとした。そして日々の生活の中の誘惑に耐えるにはどうしたらよいかを教え、また地元の富を準州内にとどめ、経済成長を促すためには自分たちの衣類や生活用品をどうしたらよいかということについても、互いに教え合うように奨励した。ブリガム・ヤングがエライザ・R・スノーをその会長に

## 時満ちる時代の教会歴史



エライザ・R・スノー(1804 - 1887年)は1835年に福音を受け入れた。彼女は福音に対する固い忠誠心を表して、聖徒たちに慰め、安らぎ、啓発を与え、その生涯を通して「シオンの女流詩人」として名を知られた。エライザはノーブーで扶助協会が最初に組織されたときの書記であった。ユタでは、エンダウメントハウスにおける姉妹たちの働きをまとめる責任を果たした。彼女は2代目の中央扶助協会会長として、1867年から始めて20年間その任を果たした。



デゼレトアルファベットによる第2学年用読本の表紙、実際のデゼレトアルファベットが印刷されている。デゼレトアルファベットは1853年10月に、ヒーバー・C・キンボール、パーリー・P・ブラット、ジョージ・D・ワットで構成される委員会によって始められた。このアルファベットはおもに、ジョージ・D・ワットの考案によるものである。この読本と、そのほかに『モルモン書』を含む何冊かの本が1870年以前に出版されている。

召したときに、人々は扶助協会の重要性を再認識させられた。エライザ・R・スノーは当時の教会の中で、最も尊敬されていた女性だったと思われる。ブリガム・ヤングは姉妹たちに「病気の人、助け手の要る人、貧しい人を訪問して、その人々の必要を知り、監督の指示の下に彼らを助けるのに必要なものを集めるように」望んだ。<sup>16</sup> また姉妹たちは女性のぜいたくをなくしたり、政治的な問題について教えたり、反モルモン的な法律の制定に対して請願や陳情活動を行うことなども期待された。

### さらにシオンを強める

ユタにやって来る改宗者たちの言語が多岐にわたっていたために意思の疎通が困難な状況にあり、英語の定期刊行物を読むことのできない人々もいることを認識していたヤング大管長は、しばらくの間新しい音標文字を普及させようとしたことがある。彼はこの新しい文字によって、聖徒の一致が促進すると信じていた。そして何人かの兄弟たちに、デゼレトアルファベットと呼ばれる新しい音標文字を考案するように依頼した。ピットマンの速記法の発音と文字を参考にして、この兄弟たちはすぐにデゼレトアルファベットを完成させた。そしてヤング大管長はこの新しい文字で、『モルモン書』と幾つかの学校用教科書を印刷することを承認した。オーソン・ブラットは1869年に『モルモン書』をこの新しい文字で書き表し、小さな版型のものが出版された。

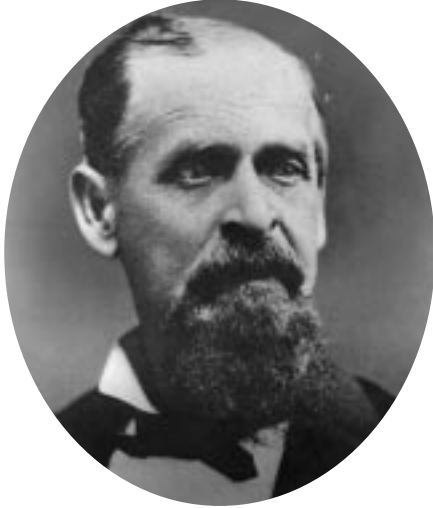
ヤング大管長は子供たちの読み書きの習得を樂にし、学校で使う時間を最小限にすると言って、この新しい文字の利点を説いた。また彼はこれによって、外国人改宗者が英語の学習に使っている時間を減らすことができるとも語った。入門書が印刷されてからこれを教えるための講習が行われ、聖徒たちにこの文字を実際に使わせるための様々な試みがなされた。しかし間もなく、この新しい文字は利点よりも難点の方が大きいということが分かり、実験は断念された。

聖徒たちが一堂に会して指導者の教えを受けることのできる適切な建物があれば、聖徒たちを霊的に強めることができると信じていたヤング大管長は、そのような建物を建設する準備を始めた。何度か評議会を持った後に、ヤング大管長の心の中にドーム型の大きな礼拝堂の姿がくっきりと浮かび上がってきた。そのビジョンを現実化するために、彼は自分の執務室にヘンリー・グローを呼んだ。ヘンリー・グローは、熟練した水車建築家であるとともに優れた機械工でもあった。ブリガム・ヤングはちょうどそのころ、グロー長老がジョーダン川に架かる木製のアーチ型橋梁<sup>きょうりょう</sup>を完成させたところを目撃した。アーチ型橋梁とは、三角形とアーチ形の木製の枠をうまく組み合わせることによって全体を支える構造の橋で、橋の中央部には橋を支えるものがなく、かなり珍しい建築物であった。ヤング大管長は、自分が心の中に描いていたドーム形の巨大な建築物の屋根を支えるには、連続した橋梁構造、また木製の橋梁の技術が必要と考えていた。

建築士ウィリアム・H・フォルサム<sup>フォルサム</sup>の助けを得て、ヤング大管長とヘンリー・グローは計画されていた最初のタバナクルの建築試案を立てた。外周部が、間口150フィート(約46メートル)、奥行250フィート(約76メートル)、高さ80フィート(約24メートル)という、この種の建築物としては世界最大級のものであった。人々の目を最も強く引きつけたのは、支柱が1本もない状態で支えられた巨大な天井であった。

## 自立への努力

今日の末日聖徒が知っているドーム型のタバナクルが建設される以前、教会員はこの写真に写されている旧タバナクルに集った。旧タバナクルの右手に見えるのが北側の仮集会所で、天気の良い日にはここに大勢の聴衆が集まった。最初のタバナクルの建設は1851年5月21日に開始された。この建物は1852年4月6日に完成し、ウィラード・リチャーズ副管長によって奉獻された。その後、1870年に取り壊されて、その跡地にアッセンブリーホールが建てられた。



水車建築家であり橋梁建築家であったヘンリー・グロー（1817 - 1891年）は1842年に教会に加入した。彼はタバナクルのトラス部の建築の責任を負っていた。



ジョセフ・ハリス・リッジス（1827 - 1914年）は、イギリスのあるオルガン工場の近くで生まれ育った。彼の家族は1851年11月にイギリスを後にして、オーストラリアへ移り住んだ。オルガン製作に対する彼の関心は、やがて教会に祝福をもたらすことになった。リッジス兄弟は1853年11月15日にオーストラリアでバプテスマを受けた後にユタへやって来た。タバナクルが公開された時点では、オルガンはまだ3分の1しか完成していなかった。その後長年かけてこのオルガンは作り直され、また電化され、規模もさらに大きくなっていった。



そのようなドーム式屋根の建設が実行可能かどうかを疑問視する人々が聖徒やそのほかの人々の中にもいたため、ヤング大管長はそれらの疑問に答えるためにタバナクルの模型の制作を指示した。タバナクルの建設は1863年の春に始まった。

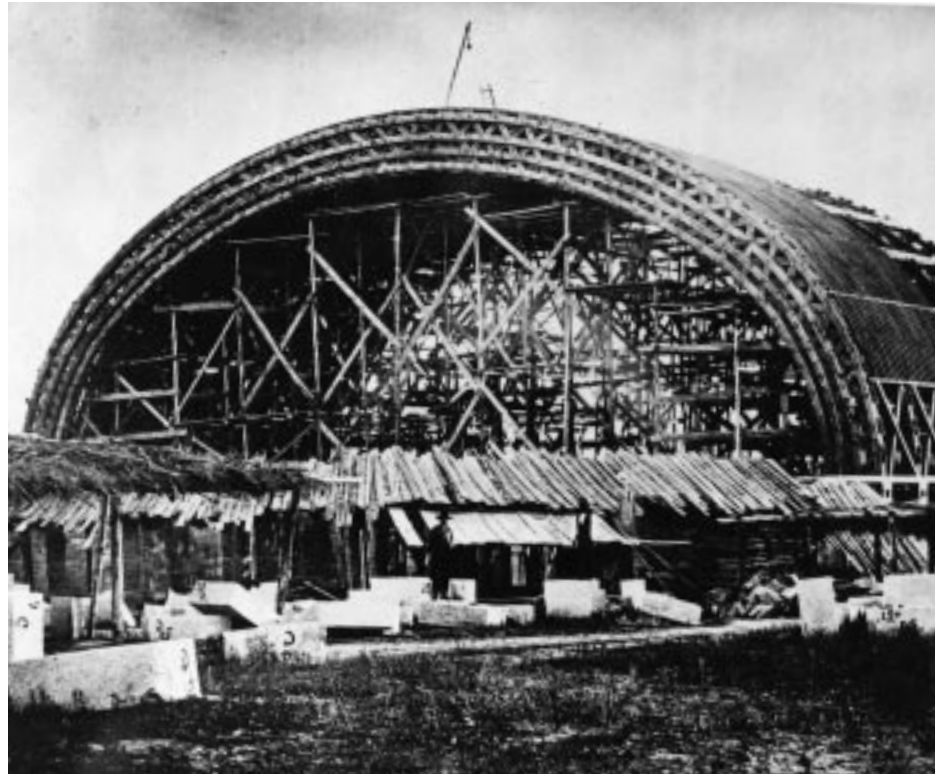
タバナクルとその世界に名だたるオルガンは、10月に行われる総大会の使用に十分間に合うよう、1867年の秋には完成の運びとなった。オルガンやそのほかの内部の造作の工事が完了したのは1870年以降のことであった。棧敷席の工事は1870年に始まった。この棧敷席によってタバナクルの音響効果が改善され、収容能力も増えた。この棧敷席は、幅が30フィート（約9メートル）、長さが全長480フィート（約146メートル）で、タバナクル内部の3方をつないで増設され、72本の柱で支えられた。そして完成したタバナクルは1875年10月の総大会において、十二使徒定員会会長ジョン・テラーにより奉獻された。

オーストラリアで改宗したジョセフ・ハリス・リッジスは、自分が製作した小型のパイプオルガンをユタへ持って来た。リッジス長老という人物とそのオルガン製作技術について知らされたヤング大管長は、彼にタバナクルの最初のオルガン製作者の任を与えた。大きな問題はオルガン製作に適した木材を見つけることであった。やがてふさわしい木材がソルトレーク・シティーから南へ300マイル（約480キロ）の、ユタの山岳地帯であるパロワンのパイン峡谷で見つかった。

このパイプオルガン用の大木の切り出しと運搬は、1800年代の当時においては決して楽な仕事ではなかった。林道を建設したり溪流に橋を架けなければならなかったからである。そのうえ、この仕事のほとんどは有志者の働きに頼らなければならなかった。時には、各3頭の牛が牽引する20両もの荷車が、木材の切り出しと運搬のためにこれら遠くの山岳地帯まで旅をすることもあった。リッジス長老は20か月足



建築工事中と竣工時のタバナクル。卵の殻を思わせるタバナクルのユニークな建築様式は、間口150フィート（約46メートル）、奥行き250フィート（約76メートル）、高さ80フィート（約24メートル）の張間に屋根の部分を支える、巨大な橋梁式のトラス構造である。



ウィリアム・ハリソン・フォルサム（1815 - 1901年）は1842年にニューヨーク州で福音に改宗した。聖徒たちとともにノーブーに到着した後、彼はノーブー神殿で建具工として働いた。1861年10月にソルトレーク・シティで開かれた総大会において、彼は教会建築士として支持を受けた。そして自分自身の要望によって解任された1867年4月までその任にあった。しかしその後、教会建築士補佐の任にあった。

ウィリアム・フォルサムはソルトレーク劇場、市庁舎、タバナクル、マンタイ神殿などの建築士である。ウィリアムは七十人、ソルトレークステーキ高等評議員、ソルトレークステーキ副会長、宣教師、祝福師などの職を務めた。

らずの間にオルガンを完成させ、1867年10月の総大会の演奏に十分間に合わせる事ができた。この大会では、ユタのペイソン、スプリングビル、スパニッシュフォークの合同合唱団が大会の一部で歌い、また、ロバート・サンズの指揮の下に新たに組織されたタバナクル合唱団が、日曜日の集会で歌った。このときを始めとして、タバナクル合唱団は年々その質を高め、今日世界的な名声を得るに至っている。

### 広がり続ける福音

ヤング大管長や聖徒たちが山々の頂でシオンの確立に忙しい日々を送っていた間にも、教会は世界の他の地域において成長し続けていた。しかしそれに反対する動きがなかったわけではない。

オーストラリア、メルボルン出身の宣教師、ロバート・ビーチャム長老は、ニュージーランドのウェリントンで腐った卵を投げつけられた。彼は別のときには、天の御父の計らいによって危害を免れたこともあった。天の御父は、タールと羽根を塗り付けようとしていた邪悪な者たちの目から、彼をかくまわれたのである。暴徒や『ウェリントンアドバタイザー』（*Wellington Advertiser*）という新聞の激しい攻撃があったにもかかわらず大会が開かれ、聖徒たちは「御霊を豊かに受けた。」<sup>17</sup>

クヌート・ピーターソン長老の報告によると、スカンジナビアでは1871年に1,021人がバプテスマを受けて教会に加入した。そしてこう続けている。「この冬は、地元出身の数多くの長老たちが宣教師に召された。スウェーデンとノルウェーでは、教会の長老たちが福音の儀式を執行したことを理由に有罪判決を受け、投獄されるという状態が続いていた。しかしスウェーデンでは、伝道集会に多くの人々が集った。ノルウェーでは、キリスト教のすべての宗派に対して信教の自由が認められていた

## 自立への努力

が、最高裁が末日聖徒イエス・キリスト教会はキリスト教ではないという理不尽な判決を下していた。」そのために末日聖徒は信教の自由を認められていなかったのである。また、ノルウェーの聖徒たちは貧しい生活をしていましたが、その年に630人の会員がシオンへ移住するのに十分な金銭を調達した。<sup>18</sup>

エドワード・シェーンヘルドは、スイスの宣教師たちの様子を「クローバーの葉のように一つにまとまっている」と伝えている。彼らは教会に対する大衆紙の歪曲報道わいぎよくと闘うために、福音の原則を分かりやすく説明したパンフレットを出版しようと奮闘していた。<sup>19</sup>

1872年の暮れ近く、スイスにいたある長老は、スイスの聖徒たちは宗教を実践しようと努力し、宣教師を助けるために最善を尽くしているとの報告をしている。彼はまた、短い間に27人にバプテスマを施し、10人の子供に祝福を与えたと付け加えている。

ジョージ・ネベカー長老は、彼がハワイで働いている間に100人以上の人々が改宗してバプテスマを受けたために集会所がとても手狭になり、そのために聖徒たちが新しい集会所建設のために忙しく働いていると報告している。ハワイ諸島では、1872年の下半期6か月の間に全体で600人以上の人々が教会に加入した。1872年の春の大会には700人以上の聖徒が出席したと報告されている。病気の人々が癒され、知恵の言葉に対する従順が強調された。<sup>20</sup>

一方、1869年から教会は移住して来る聖徒たちに、シオンへの旅を始める前に、それに要する費用を納付するように求めた。それ以前は、ほとんどの場合「教会の幌馬車」(雄牛が牽引する幌馬車がウィンタークォーターズで移住者を迎え、彼らをソルトレーク・シティーまで連れて行く方式)による旅程の部分については支払猶予期間が与えられていた。グレートベースンにいる聖徒たちはそれぞれの友人や親戚の移住を助けるために、「ウェールズ基金」「スコットランド基金」といった基金を作り、英国諸島からシオンへ集合する人々を助けるためにそれらの基金を教会役員に寄託した。ワードの初等協会が子供の移住について献金をしたこともあったが、恐らく最も一般的なものは、友人や親戚からの援助であった。彼らは教会の事務局に現金を寄託し、旅費の調達ができたことを知らせる通知とともに、その金額の小切手を移住希望者に送付してもらうという方法を取った。

## 背教への対処

残念なことではあるが、すべての会員が教会の指導者と彼らが掲げた経済的自立策を支持したわけではなかった。中には背教していった人々もいたのである。ブリガム・ヤングが協同組合事業を推し進めていたころ、モルモンの事業家や知識人の中には彼の方針に公然と異を唱える人々がいた。彼らは「自由主義者」と自称していた。

彼らの指導者ウィリアム・S・ゴドビーにちなんで「ゴドビー派」と呼ばれたこの一派は、全国の教会外の商人たちに協力を呼びかけ、ユタは農業や牧畜よりも、富をもたらす天然資源として鉱業を重視すべきだと主張した。その意見の発表の場となったのが、彼らが1868年に創刊した『ユタマガジン』(Utah Magazine)であった。

教会の指導者たちはゴドビー派の人々を何とか改心させようと努め、彼らの何人



ウィリアム・S・ゴドビー(1833 - 1902年)は青年時代にイギリスで福音に改宗した。彼はユタで傑出した商人となり、準州屈指の金持ちになった。彼は市議会議員、自分の地元の七十人定員会の会長、第13ワードの副監督などを務めた。

## 時満ちる時代の教会歴史

かに伝道の召しを与えた。しかしそれらの召しは拒まれ、彼らが公にする批判の声はさらに激しさを加えていった。この問題について話し合うために彼らは預言者の塾に召喚された。しかしこれは不愉快な対面という結果に終わっただけであった。さらに何度か一致のための試みがなされた後に、ソルトレークステーク高等評議会は「新しい運動」とも呼ばれていたこの派の指導者たちを告発した。そして彼らは教会から破門される結果となった。1870年に彼らは「シオンの教会」という名の独自の教会を興し、自分たちの定期刊行物を『ソルトレークトリビューン』(Salt Lake Tribune)という反モルモンの日刊紙に発展させた。ソルトレーク・シティーの非モルモンの指導的立場にある人々と手を組んで、彼らは教会の政治的活動に反対するために「自由党」を結成した。

「新しい運動」は1870年までに、元使徒で独自の入植地建設を試みていたアマサ・M・ライマンを自分たちの戦列に取り込んだ。アマサ・M・ライマンは贖いに関して偽りの教義を説き、降霊術に傾倒して1867年に十二使徒から離脱していた。ライマンは「シオンの教会」の中で降霊会を行った。「シオンの教会」は人々の支援を得られずに、1873年までにはつぶれていたが、自由党は生き長らえて1893年に至るまでユタの政界を混乱させる種として存続した。

## 共同制度

協同組合事業に関して成功を得たブリガム・ヤングをはじめとする教会の指導者たちは、それよりも優れた経済制度を実施したいと考えた。1872年10月の総大会においてジョージ・Q・キャノン長老が、3年半にわたる協同組合事業の成功は、「エノクの制度」を実施したとき得られるであろうさらに価値ある結果を象徴していると述べた。

キャノン長老は、「末日聖徒の中に富める者と貧しい者がなくなり、また富が人々を誘惑することがなくなってすべての人が自分自身を愛するように隣人を愛し、すべての男女が自身とほかのすべての人々のために働く」という、そのような時を来らせるためには、この新しい制度が必要であると述べた。協同組合制度は「もっと完全な段階へ進むための踏み石」にすぎなかったのである。そして「天にある〔より高度な制度が〕地の人々によって実施され、喜びをもたらす」のである。<sup>21</sup>

ブリガム・ヤングも大会の翌日の話の中でこのテーマを採り上げた。そしてその後の数か月間、教会中央幹部は聖徒たちに共同制度の確立に向けて備えるようにとのメッセージを与え続けた。

1874年には、共同制度の実施を促す幾つかの要因が見られた。預言者ジョセフ・スミスと親しく交わったブリガム・ヤングとほかの中央幹部たちは聖徒たちの間に改革を起こし、奉獻の律法の原則を確立し、実施したいと強く望んでいた。アメリカ合衆国を恐慌が襲った1873年、聖徒たちは、自立への努力にもかかわらず、自分たちの経済が国全体の経済動向に強く影響されていると思い知らされた。このために教会の指導者は、末日聖徒にも及ぶ将来起こる可能性のある経済変動の影響を和らげるために、「エノクの制度」を確立し始めようとした。

また、当時ユタの南部の村落の人々の生活は、ネバダ州ピオーチ付近に本拠を置いた鉱業会社の出現によって数年来混乱が続いていた。聖徒たちの間に流通してい

## 自立への努力

た建築資材や食糧が鉱山業者の需要に吸収されたために、モルモン共同体にそれらの物資の不足が起こっていたのである。若い人々の中には、現金収入を得るために家を離れて鉱山町へ行く者もいた。そこで彼らはこの世的な様々な影響にさらされた。これによって若者たちが減り、労働力に不足を来した所もあった。

セントジョージでは特に経済の振興が必要とされていた。そのためにプリガム・ヤングはこの地で、最初の共同制度を組織した。その運営委員会は、おもにステークと各ワードの監督によって構成されていた。セントジョージの共同制度グループが最初に実施したことの一つは、北部入植地との間の物資輸送の監督であった。その後間もなくこのグループは家禽類や豚の群れの飼育を始め、セントジョージ神殿の建設にも貢献した。グループの各メンバーは霊性を守るために14の規則に従うことで合意していた。その規則には、神の名をみだりに唱えない、さらに完全に知恵の言葉に従う、愛と思いやりをもって家族に接する、純潔の律法に従う、安息日を聖く過ごす、過度に飾り立てた服装をしない、などということが定められていた。各会員は再度のバプテスマを受けることによって、これらの規則に従う意志を示した。

シオン全体に共同制度を確立する条件が整ったと判断したプリガム・ヤングは、セントジョージをモデルとして南部の全入植地を組織するために、教会の指導者たちを派遣した。ヤング大管長は4月の総大会において、すべての教会員に共同制度の実施を説く計画をしていたが、天候が悪化して道路の通行が思うようになくなったために、総大会が予定されていたときまでにソルトレーク・シティーに戻ることができなかった。このため大会は5月の第1週まで延期された。預言者はソルトレーク・シティーに到着するとすぐに、ソルトレーク・シティーのワードにおける共同制度の実施に取りかかった。4日にわたる総大会の期間中、席上話された12以上の説教を通して、共同制度が生み出すあらゆる効果についての説明がなされた。

1874年の年末までに、200以上の共同制度グループが各地の末日聖徒の入植地で組織された。その中にはアイダホ、ネバダ、アリゾナの入植地も含まれていた。人口が多いオグデン、プロボ、ローガンでは、それぞれ複数のグループが組織され、各グループはそれぞれに異なる独自の生産事業を興した。ソルトレーク・シティーの20のワードはそれぞれが一つの共同制度グループを形成した。プリガムシティーと他の地域は、同じモデルに従って協同組合の事業網を維持した。この方式の場合、各人は協同組合事業において保有する株のほかに、独自の私有財産を所有した。

人口が750人未満の小さな地域では、規模に応じて変化を持たせた別のタイプの共同制度が行われた。この方式では、各人がその地域の生産物を平等に分け合い、全員が統制のよく取れた一つの家族として食事を含めて共同生活をした。その最も有名な例が、1875年に24の家族によってユタ南部のケイン郡オーダービルで始められたグループであった。この町はそれまでの5年間で、人口が700人に達していた。協同作業によって「集合住宅が幾つか建設された。それは町の広場を囲むとりでのように配置され、中心部には大きな共同食堂が建設された。」<sup>22</sup> このグループは、店舗、製パン所、納屋などを建て、農場、果樹園、畜産、また家具の制作などの様々な製造業も行った。この人々は全員がオーダービルで作られた同じスタイルの衣服を着、全員の生活が一様に向上しないかぎり、一人だけの生活が良くなるということはない。このグループは10年にわたって協力と愛のモデルとして存続したが、1885

## 時満ちる時代の教会歴史

年の反多妻婚にまつわる迫害の激化によってついに終息するに至った。オーダービル建設のために働いた人々は、統制のよく取れたクリスチャンとしての共同体生活の中にあつた幸せな思い出を、心からの懐旧の念をもって回顧し続けた。

一般的に、多くのグループはあまりうまくいかなかった。国全体の経済不況に加えて、利己心や運営上の失敗などもあって、1877年までにはほとんどのグループが共同制度を解消した。中には、1880年代の一連の政治上の問題によって解散を余儀なくされるまで存続したグループもあった。

にもかかわらず、シオンにおける10年に及ぶ協同組合事業と共同制度の実施は幾つかのすばらしい業績を残したのである。聖徒たちは以前に比べて準州外からの物資に依存しなくなり、外部からの商品の流入量は劇的に減少した。そして家庭における生産と、製造業、小売事業に対する地元投資額が格段の増加を見せた。聖徒たちの間における貧富の格差も小さくなった。儉約と勤勉の徳がはぐくまれ、それは幾世代にもわたって教会の祝福となった。そして経済的自立のための様々な試みは、労力と資材の提供という面においてセントジョージ神殿、ローガン神殿、マンタイ神殿、ソルトレーク神殿の建設に大きな貢献をしたのであった。

## 注

1. サミュエル・ボウルズ, *Our New West* 『新たに変わる西部』(Hartford, Conn.: Hartford Publishing Co., 1869), 260で引用
2. レナード・J・アーリントン, *Great Basin Kingdom: An Economic History of the Latter-day Saints, 1830 - 1900* 『グレートベースンの王国——末日聖徒の経済史』1830 - 1900年 (Cambridge: Harvard University Press, 1958), 245 - 251参照
3. アーリントン 『グレートベースンの王国』246 - 247
4. ジョセフ・ホール “Railway Celebration at Ogden” *Deseret Evening News* 「オグデンにおける鉄道開通式典」『デゼレト・イブニング・ニュース』1869年3月9日付, 2
5. ジョン・J・スチュアート, *The Iron Trail to the Golden Spike* 『鉄路はゴールドスパイクを目指して』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 225 - 227; リロイ・R・ヘーフェン, W・ユージン・ホロン, カール・コーク・レスター, *Western America* 『アメリカ西部』(Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1970), 405 - 406参照
6. *Journal History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史』1869年3月20日, 教会歴史記録部, ソルトレーク・シティ
7. アーリントン 『グレートベースンの王国』249
8. *Journal of Discourses* 『説教集』11: 139で引用
9. 『説教集』12: 301で引用
10. トーマス・C・ロムニー, *The Life of Lorenzo Snow* 『ロレンゾ・スノーの生涯』(Salt Lake City: Deseret News Press, 1955), 317で引用
11. ブリガム・ヤング, *ZCMI First Record Book* 『シオン協同組合商事, 最初の記録』議事録A, 17において引用。アーデン・ピール・オルセン “The History of Mormon Mercantile Cooperation in Utah” 「ユタにおけるモルモン協同組合商事の歴史」博士論文, カリフォルニア大学, 1935年, 80で引用
12. 『最初の記録』19. オルセン 「ユタにおけるモルモン協同組合商事の歴史」81で引用
13. オルセン 「ユタにおけるモルモン協同組合商事の歴史」93
14. アーリントン 『グレートベースンの王国』308 - 309参照
15. レナード・J・アーリントン, フェラモルト・Y・フォックス, ディーン・L・メイ, *Building the City of God* 『神の町を築く』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1976), 108 - 109参照
16. “Female Relief Societies” 「婦人扶助協会」『デゼレト・イブニング・ニュース』1867年12月6日付, 2
17. “The Church in New Zealand” *Millennial Star* 「ニューージーランドにおける教会」『ミレニアルスター』1872年1月9日付, 25



## 自立への努力

18. 『ミレニアルスター』 1872年1月30日付 , 75 - 76
19. 『ミレニアルスター』 1872年2月20日付 , 125
20. 『ミレニアルスター』 1872年11月5日付 , 714  
参照
21. 『説教集』 15 : 207 , 209で引用
22. アーリントン 『グレートベースンの王国』 334

# ブリガム・ヤング大管長： 最後の10年間

年表 年代	重要な出来事
1867	エライザ・R・スノー、扶助協会の再設立の許可を受ける
1867	教会日曜学校連盟発足
1869	青年女子儉約協会発足
1872	『ウーマンズ・エクスポネント』発刊
1875	青年男子相互発達協会設立
1875	ブリガム・ヤング・アカデミーがプロボで開設される
1876	アリゾナのリトルコロラド川沿いに最初の入植団が定着する
1876	メキシコにおける伝道活動開始
1877.4.6	セントジョージ神殿奉獻
1877	ブリガム・ヤング、ステーキにおける神権指導者組織の改革を指示する
1877.8.29	ブリガム・ヤング死去
1878	ユタ州ファーミントンにおいて最初の初等協会が組織される

**18**47年にグレートベースンに到着して以来、聖徒たちは、神学、科学、読み書きの能力向上のために数多くの勉強グループを組織した。しかし、これらのグループは短期間で解散した。ブリガム・ヤングは生涯最後の10年間に、神の靈感により、次の世紀を生きる聖徒たちの必要に対応するため、教会の補助組織を確立した。またアリゾナ北部への入植、教会の神権指導者組織の改革、セントジョージ神殿の建築と奉獻、ブリガム・ヤング・アカデミーの設立などに見られるように、シオンの領域を広げ、教会員の靈性を高めるために力を注いだ。

## 補助組織の発展

以前に触れたように、教会で最初に設立され、教会の中央指導者から常に導きと励ましを受けた補助組織は扶助協会であった。末日聖徒の姉妹たちはデゼレトに到着して以来、自分たちのなすべき仕事と慈善奉仕について、ノーブーの扶助協会集会で預言者ジョセフ・スミスから教えられた理想を実践に移していた。1858年の時点で、活動を行っていた扶助協会はソルトレーク・シティー内で10のワード、そのほかにオグデン、プロボ、スパニッシュフォーク、ニーファイにも存在した。しかしこの年にジョナサン軍の進軍が来ることによって、聖徒たちは南部への移動を余儀なくされたため、扶助協会の活動は中断された。

1867年12月、ブリガム・ヤング大管長はソルトレーク・シティーで扶助協会を再び組織することを承認し、エライザ・R・スノーがこの任を受けた。その後の2年間に預言者は扶助協会のプログラムを正式に承認し、またすべての監督に対して、スノー姉妹と二人の副会長ジーナ・ディアンサ・ハンティントン・ヤングならびにエリザベス・アン・ホイットニーが扶助協会の支部組織設立のために準州内を巡回して、ワードを訪問する際に協力するよう指示を出した。各定住地に住む女性たちは月に2回開かれる扶助協会に出席するために数キロの道のりを馬車や馬、ろば、時には徒歩で通った。毎月2回の集会のうち1回は、裁縫と貧しい人々の世話をするために、残る1回は教育と靈的なテーマに基づいた勉強、また証会に充てられた。

ブリガム・ヤングは晩年、扶助協会に対して幾つかの特別な「使命」を与えている。1873年にヤング大管長はすべての扶助協会会長に対して、3人の若い女性を指名して衛生学と看護学を勉強させるよう指示している。また1875年にヤング大管長はジーナ・ヤングに対してすべての定住地の女性を養蚕事業（蚕の飼育と絹の生産）に従事させ、この事業を定着させるよう指示した。この「絹中心主義」は長年、教会の姉妹たちの中で中心的な活動となった。日常生活で使用する衣類、神殿と教会の集会所で使用する衣裳を作るために必要な絹の生産に従事したのである。預言者は1876年、エメリン・B・ウエルズに対して、穀物の節約運動を女性の間で展開させ

## ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

る責任を与えている。緊急時に備えるため小麦を備蓄したのである。ヤング大管長はまた姉妹たちに対して、教会の消費組合事業と共同制度で築いたあらゆる家内産業を支援し、従事するよう常に奨励した。

扶助協会の活動に熱心に参加していた姉妹たちは、女性のための新聞を発刊する事業にも乗り出している。ルイーザ・ルラ・グリーン・リチャーズを初代編集長とする隔週紙『ウーマンズ・エクスポネント』(Woman's Exponent)が1872年にスタートした。「この新聞の目的は女性にとって興味と価値があるあらゆるテーマを採り上げることです。記事の内容は、広い範囲にわたる、全国と地方の最新のニュースを短くまとめた解説、家事にまつわる様々な事柄の心得、教養、健康と服装に関する記事、通信欄、人々の関心を集めている話題に関する論説、その他様々な読み物などで構成されることになるでしょう。」<sup>1</sup>『ウーマンズ・エクスポネント』はあらゆる定住地の姉妹たちが様々な目標に向かって結束するうえで大いに力を発揮した。

ヤング大管長は他界する1か月前の1877年7月に最後の組織開発を実施している。エライザ・R・スノーを伴ってオグデンへ赴き、最初のステーキ扶助協会を組織した。会長に召されたのはフランクリン・D・リチャーズ長老の妻ジェーン・S・リチャーズだった。当時の聖徒たちは、ステーキ単位で組織されることを予期していなかったため、ステーキ扶助協会の設立には男女とも一様に驚き、そしてその驚きはやがて喜びに変わった。『ウーマンズ・エクスポネント』はその日を歓喜の日と論評している。<sup>2</sup>

初期の扶助協会は個人の家で開かれることが多かったが、定住地の兄弟たちの助けによって扶助協会専用の集会所が建てられた。扶助協会の消費組合の売店はこの集会所の地下に設けられることが多かった。

恒久的な組織形態を整えた2番目の補助組織は日曜学校である。日曜学校という概念は1780年英国諸島のプロテスタントの間で起こり、1790年ごろには早くも合衆国



「ユタの開拓者の娘たち」の厚意により掲載、ユタ州ソルトレーク・シティ

シール・バン・シッケルが描いたブリガム・ヤングの肖像画。ブリガムは右手に『主の律法』(Law of the Lord)と題する書物を持っている。テーブルの上は『モルモン書』と『聖書』。

ユタ州オグデンのウィーバーステーク扶助協会の建物。この建物は1902年に完成した。1926年に「ユタの開拓者の娘たち」組織に譲渡され、ウィーバー郡開拓者ホールと呼ばれた。現在は開拓者関連の物品を展示する博物館として使用されている。

ジェーン・スナイダー・リチャーズはブリガム・ヤングにより、ウィーバーステーク扶助協会の初代会長に召され、同職を31年間務めた。リチャーズ姉妹はウィーバーステーク扶助協会の建物が1902年7月19日に奉献された際、奉献式の司会を務めた。



「ユタの開拓者の娘たち」の厚意により掲載、ユタ州オグデン

## 時満ちる時代の教会歴史



リチャード・バラントイン（1817 - 1898年）はスコットランドで生まれ育ち、青年時代に改革派教会の日曜学校教師を務めた。25歳のときに、バプテスマを受けて当教会の会員となった。リチャードは母親とともに1843年ノーブーへ移住した。

リチャードはなぜそれほどまでに日曜学校に熱心なのかと尋ねられたとき、次のように答えた。「わたしは幼いころに、御霊の声によってこの仕事に召されました。わたしは生まれる前から、教会に入る前から、この仕事に聖任されていたと何度も感じたことがあります。わたしは若人のために働くようにとの靈感を受けました。」<sup>3</sup> 1852年、バラントイン兄弟はインドへ伝道に召され、約3年間伝道を行った。

教会と補助組織の発展に伴い、伝達事項を徹底する必要が高まってきた。1866年、ジョージ・Q・キャンノンは日曜学校のために『ジュブナイル・インストラクター』を個人的な資格で編集出版した。後にこの機関誌はデゼレト日曜学校連盟によって出版されることになる。1866年から1929年までは『ジュブナイル・インストラクター』、1930年から1970年までは『インストラクター』と呼ばれた。

に伝えられた。アメリカ日曜学校連盟が結成されたのは1824年である。一般的に日曜学校は国民教育制度の前身または併設機関として位置づけられており、若き「学者たち」に対して読書力をつける訓練と、『聖書』からのテーマに基づいた教育が行われた。末日聖徒の間では、多くの教会員が以前はプロテスタントであったため、グレートベースンに到着する以前からカートランド、ノーブー、ウィンタークォーターズ、英国において、散発的にプロテスタント方式に似た日曜学校が行われていた。

リチャード・バラントインが監督の許可を得て、ソルトレーク盆地で最初の日曜学校を開設したのは1849年の冬のことである。8歳から14歳までの50人の子供たちがバラントイン家に増設された専用の建物に集まった。集会所は後に第14ワードに移されている。ほかにも多くのワードで日曜学校は設立されたが、1857年にジョンストン軍が接近し、翌年に聖徒たちは南部に追われたため、閉鎖されることになる。

1864年、ヨーロッパ伝道部部长会の任務を終えて帰国したジョージ・Q・キャンノン長老は、シオンに住む人々に福音を教える機会が不足していると感じた。彼は後にこう述べている。「ここにいる子供たちの人数を考えたとき、わたしは可能な限りの時間を使って子供たちに福音の原則を教えたいという燃えるような気持ちを感じました。」<sup>4</sup> そしてキャンノン長老は第14ワードの日曜学校を復活させた。これを契機にソルトレーク・シティーの他のワードでも日曜学校が設立されることとなった。

キャンノン長老は1866年の初めに『ジュブナイル・インストラクター』( *Juvenile Instructor* ) を個人的に発刊している。子供の大会、毎週日曜日の集会、聖典にまつわる読み物、宗教教育などがおもな内容だった。当時はテキストがほとんどない状態だったため、日曜学校で使用する格好の資料となった。『ジュブナイル・インストラクター』は「日曜学校の運営に心を砕いていた人たちにとって心強い味方となった。」<sup>5</sup> この隔週誌は全日曜学校のために刊行されていたにもかかわらず、キャンノン長老個人の裁量にゆだねられていた。教会の管理下に移されたのは、1900年になってからのことである。

1867年11月、日曜学校を恒久的な組織にする動きが開始された。まずヤング大管長が地方の多くの指導者に対して、シオンの若人の教育に関する熱い思いを打ち明けた。ジョージ・Q・キャンノン長老が新しい中央組織の会長に選ばれ、各地ですでに組織されていた日曜学校の統一を図り、全教会に日曜学校を設立するよう呼びかけることになった。1872年に「デゼレト日曜学校連盟」が正式名称として採択され、日曜学校で働く人々の「連盟集会」が毎月第1月曜日に開かれることになった。年々青少年の生徒の数が増えていった。(当時は成人クラスは設けられていなかった。)このようにして、日曜学校での教え方と運営方法が統一された。初期の日曜学校では時間厳守、福音に関する大切な事柄を暗記すること、力強く賛美歌を歌うことな

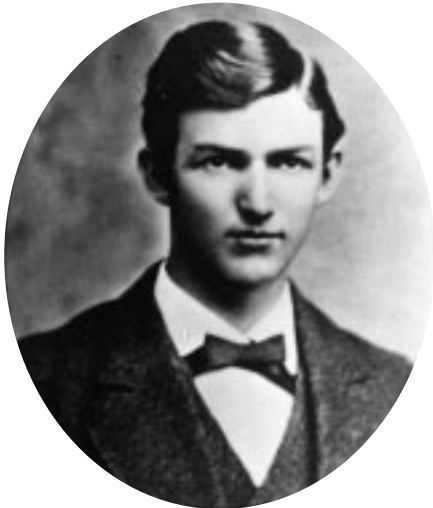


## ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間



マリー・イザベラ・ホーン（1818 - 1906年）は1836年7月カナダにおいてパーリー・P・ブラットにより改宗し、聖徒たちが受けた試練の多くを彼女も体験した。マリーはミズーリ州ファーウェストで家を追われ、ノーブーで家を捨て、大平原を横断してソルトレーク盆地に到着した。

マリーは1842年に組織された扶助協会の最初の会員の一人である。彼女はソルトレークステークでステーク扶助協会会長を30年間務めた。1880年に中央扶助協会管理会に召された後、亡くなるまで同職にあった。ホーン姉妹は15人の子供の母親である。



ジュニアス・F・ウエルズ（1854 - 1930年）はソルトレーク・シティーで生まれ、青年男子相互発達協会の組織化に参画したほか、13年間『コントリビューター』の編集に携わった。1872年から74年までは英国へ、1875年から76年までは合衆国東部へと2度の伝道を経験している。1921年ウエルズ兄弟は教会歴史記録者補助として支持された。

どが特に強調されていた。

1874年の夏、デゼレト日曜学校連盟は準州全域で50年祭（イスラエル民族がカナンに入った年から起算して50年ごとの祭）を実施した。プロボでは6月15日、ヤング大管長と副管長の教えを聞くために5,000人が集まったが、その4分の3は子供だった。この集会では子供たちもプログラムに参加している。歌の発表、聖句の暗唱、笑い話など、すべて地域の子供が発表した。ソルトレーク・シティーで行われた50年祭では1,200ドルの収益を上げている。この資金は日曜学校の歌集や資料を購入するために使用された。

教会の青年女子の組織は、鉄道の敷設とともに流入した異邦人社会から聖徒を守るためにヤング大管長が提唱した計画の一部として発足した。1869年11月28日、ヤング大管長は自分の娘たちを集めて、シオンの女性の責任について話した後、娘たちによる「儉約協会」を組織させた。娘たちはこの「儉約協会」の下であらゆるぜいたくな習慣を改め、衣類や食料を節約し、無駄話をなくすことを決意した。またこの協会では福音の原則に関する指導を行った。これは若い男性が神権活動で受ける訓練に倣ったものである。

儉約協会は1870年末までにソルトレーク・シティーのほとんどのワードで定着した。その後エライザ・R・スノーとマリー・イザベラ・ホーンが他の地域の定住地を巡ってグループの結成に努めた。各グループでは経済面、文化面におけるあらゆる実的な活動を実施した。その後ヤング大管長は青年男子相互発達協会（YMMIA）が組織されたのを機会に、儉約協会を青年女子相互発達協会（YLMIA）と改称したいとする意向を表明したが、名称の変更は1878年まで実施されなかった。

ユタにはそれまで青年男子のための文学研究組織や討論研修会が幾つか存在していたが、1875年にヤング大管長は青年男子のための統一組織を教会内に結成するよう要望した。預言者は彼らが知的、霊的に発達し、適切な指導監督の下でレクリエーションを行う機会を設けたいと考えていた。そこで大管長は副管長ダニエル・H・ウエルズの息子で21歳のジュニアス・F・ウエルズを召して、最初にソルトレーク・シティー、続いて準州全域で青年男子相互発達協会を組織させた。最初の青年男子相互発達協会の集会は第13ワードの集会所で行われ、エドウィン・D・ウーリー監督の息子ヘンリー・A・ウーリーが会長に選ばれた。ヘンリーはブリガム・ヤング大管長の息子B・モリス・ヤングを第一副会長に、ジェデダイア・M・グラントの息子ヒーバー・J・グラントを第二副会長に選んだ。その後の数か月間に100を超える青年男子の組織が誕生している。

1876年には青年男子相互発達協会の中央管理会が組織され、各地で実施されているレクリエーションプログラムと学習コースの統一を図った。青年男子相互発達協会は教会の多くの青年男子の人生に力強い影響を与えることになった。青年男子相互発達協会は1879年から『コントリビューター』（Contributor）という名称で定期出版物を刊行した。この機関誌はその名称が示すように、青年男子からの寄稿による記事を幾つか掲載した。

1877年、ファーマントンワードのジョン・W・ヘス監督はワードの母親たちを集め、子供たちを正しく教育する責任について話し合った。ヘス監督は「子供たちを導く責任は専ら母親にある」と考えていた。

## 時満ちる時代の教会歴史

献身的で思慮深い末日聖徒であったオーレリア・スペンサー・ロジャーズはヘス監督の言葉を真剣に受け止め、何度も祈った結果、「会員たちには各年代ごとに補助組織が設けられています。彼らは何を行い、時間を正しく使うにはどうすべきかをここで学んでいます。けれども、子供たちにはそうした機会が与えられていません」という声を聞いた。ヘス監督は子供のために組織を作りたいというロジャーズ姉妹の考えに心を動かされた。監督はロジャーズ姉妹の提案と彼女が靈感を受けたことについて大管長会に報告し、どのように対処すべきかを尋ねてみることにした。この打診を受けた大管長会はエライザ・R・スノーに、ファーミントンで開かれる補助組織大会に出席してロジャーズ姉妹と話し合うように指示した。<sup>7</sup>



リン・フォーセットが壁画として描いた最初の初等協会。1941年11月24日、十二使徒定員会のチャールズ・A・カリスにより奉獻された。この壁画は現在、ユタ州ファーミンントンのロックチャペルにある。

ブリガム・ヤング大管長から女性の補助組織を監督する責任を受けていたエライザ・R・スノーは、1878年の夏、扶助協会と青年女子の大会に出席するためにファーミントンを訪れた。ロジャーズ姉妹は、エライザ・R・スノーに対して「子供たちを道徳的、靈的に啓発し、成長させるためにもっと何かをしてほしいと訴えた。」<sup>8</sup>

エライザ・R・スノーはソルトレーク・シティーに戻るとジョン・テラー会長に会い、子供のための組織を設けること、また週に1度、日曜日以外の日に集会を開くことについて承認を取り付けた。そこでスノー姉妹はヘス監督にあてて手紙を書き、ロジャーズ姉妹がユタのファーミントンにおいて初等協会を組織し、管理することについてテラー会長から承認を得たことを伝えた。

こうしてロジャーズ姉妹は最初の初等協会を組織した。彼女は1878年8月11日にまず子供たちの両親を集め、新しい組織の重要性について説明している。8月25日の日曜日、ロジャーズ姉妹はファーミントンワードにおいて初等協会を発足させた。まず子供たちを年齢別グループに分け、各グループの最年長者をクラス委員に任命した。そして子供たちに対して、両親と教師に従順であるように、またお互いに親切にするようにという内容の話をした。

初等協会が定住地の間に広まったのを受けて、エライザ・R・スノーは各地の初等協会に出席して、預言者ジョセフ・スミスが始めた大きな運動の中で一人一人が重要な役割を果たしていることを子供たちに伝えている。彼女は持参した預言者ジョセフ・スミスの時計を見せ、手に触れさせて、預言者の時計を手を持ったことを決して忘れないようにと述べている。<sup>9</sup>



オーレリア・スペンサー・ロジャーズ（18334 - 1922年）。オーレリアが12歳のとき、母親のキャサリンはアイオワのシュガークリークの野営地で死亡した。数か月後、ウィンタークォーターズでの仮住まいが完成したとき、父オーソンはヨーロッパ伝道部の部長として召された。2年後にオーレリアは5人の兄弟姉妹とともに大平原を横断し、ソルトレーク・シティーに到着して定住した。父親がソルトレーク・シティーに帰還して子供たちと再会したのは1849年9月のことである。

オーレリアは17歳でトーマス・ロジャーズと結婚し、ユタのファーマントンに転居した。そこで10人の子供を育てる傍ら、様々な分野で活躍した。初等協会の創設者であったオーレリアは、1893年から死去するまで初等協会の中央管理会で働いた。オーレリアは1895年にジョージアで開かれた婦人参政権会議および同年ワシントンD.C.で開かれた全国婦人会議にユタを代表して参加した。

### 教育問題

ユタにおける異邦人と聖徒のあつれきが高じて教育の危機にまで発展していたため、教会は青少年の教育についてどのような役割を果たすべきかを再検討する必要が出てきた。入植した当初の聖徒たちは各ワードに小学校を設立するためにあらゆる努力を払った。これらの小学校は私立の形態を取っていたため、教師の給料は授業料で賄われていた。ユタに鉄道が敷設されて異邦人の流入が急増すると、今度は「地区学校」の運営方法について教会と政府官吏の間で意見の食い違いが出てきた。異邦人は地区学校においてモルモンの教えを採り上げることに反対し、またすべての学校を税金で賄い、教会の支配下から引き離すべきだと主張した。

この論争は別の面に飛び火することとなり、1870年代に至って大きな騒動に発展した。国内の多くの地域の学校と同様、ユタの学校では読み方のテキストとして『聖書』を使用していた。ところが連邦政府の役人は公立の学校では『聖書』を使用すること、宗教的な事柄を教えることを禁止すると通告してきた。ヤング大管長はこれに対して、たとえ他のキリスト教社会がごぞって学校から『聖書』を排除したとしても、モルモンは追従しないと声明した。ユタの他の宗教の指導者たちも、『聖書』を基本にして学校教育における人格形成を行うという考え方を取っていたため、『聖書』の排除には反対した。こうした動きによって、教会の主張は支持を得ることになった。

国内に世俗的な勢力が増大しているという認識に立った教会指導者はデゼレト大学を強化することと、末日聖徒の他の定住地にもデゼレト大学の分校を設けることを検討し始めた。ワレンおよびウィルソン・デュセンベリー兄弟は1869年にプロボで学校を開設し、運営していた。1870年に至って教会と準州の教育担当官吏はデュセンベリー兄弟に対してプロボの学校を大学の分校とするよう勧めた。そして4月にデュセンベリー学校はデゼレト大学のティンパノゴス分校として再発足し、一般の学問と宗教教育の双方を教科課程に組み入れた。

ブリガム・ヤングは教育に熱心に取り組んでいたソルトレーク市長アブラハム・O・スムートに対して、プロボへ移住するよう指示した。スムートはプロボへ移住すると、ステーキ会長、地域社会の指導者として働く傍ら、デゼレト大学のプロボ分校の後援活動に従事した。しかしながら、スムート会長の支援にもかかわらず、分校は経済的危機に陥ってしまった。このためヤング大管長は1875年に、スムート会長、ユタ郡のおもだった5人の男性、さらに女流作家であり教師であったマーサ・ジェーン・ノウルトン・コレイを分校の信託理事に任命した。この任命は公正証書に付され、校名もブリガム・ヤング・アカデミーと改められた。学内における宗教教育を徹底させるために、「ブリガム・ヤングは『アカデミー内において「旧新約聖書」「モルモン書」「教義と聖約」が読まれ、その教えが学生に浸透するようにしなければならない」との指示を文書で通達している。そして数週間後ワレン・N・デュセンベリーが初代学長に任命された。<sup>10</sup>

1876年、ドイツにおいて教育界で豊富な経験を積んでいたカール・G・メーザーはブリガム・ヤング・アカデミーの校長職を引き継いだ。メーザーは同職を皮切りに教会教育制度において目覚ましい活躍を遂げることになる。彼は後に教会が経営す

## 時満ちる時代の教会歴史



ブリガム・ヤングはアカデミーを設立するに当たって、各アカデミーで信託理事会の少なくとも一人は女性を登用するよう要求した。マーサ・ジェーン・ノウルトン・コレイ（1821 - 1881年）は、現在ブリガム・ヤング大学となっているブリガム・ヤング・アカデミーの信託理事会において最初の女性理事に選ばれた人物である。

マーサ・コレイは12人の子供を持つ母親であり、鉱石の分析技師、ハーブ学者、教会職員、多作の作家、学校教師を職業とした多才な女性である。研究分野も地質学、地理学、政治学、化学、聖書研究と幅広い。

るすべての学校を管理する責任を受けている。発足当時は小規模だったこの学校はやがて大きく発展し、20世紀にはブリガム・ヤング大学と改称されている。

1877年、ローガンに2番目のアカデミー、ブリガム・ヤング・カレッジが開設された。この大学は1926年まで運営された後、廃校となり、校舎はローガン市に移管された。続いて3番目のアカデミーとして計画されたのが、ソルトレーク・シティーのソルトレークステーク・アカデミーである。しかし、このアカデミーは1886年まで開校されなかった。校名も何度か変更され、最終的にLDSカレッジ（末日聖徒単科大学）に落ち着いた。この大学は経済恐慌のさなか、1931年に正式に閉鎖された。その後教員たちが経営学を中心とする単科大学を自主運営によって継続したが、後に教会に経営権が移され、名称もLDSビジネスカレッジと変更された。

以上3つのアカデミーは、幅広い文科系教育、高度の道德規範、聖典を中心とした宗教教育を実施することにより、ブリガム・ヤングが教育に対して抱いていた理想を実現している。これらの教育機関は（通常の）教員養成講座も併設し、以後様々な定住地で設立された20以上に及ぶアカデミーの先駆者的な役割を果たすとともに、19世紀後期から20世紀初頭にかけて教会における教育の模範的存在となった。

## 将来を見据える

ブリガム・ヤングはその生涯の最後の10年間を、入植による末日聖徒国家の拡大、伝道活動と移民の推進に努力を傾注した。ヤング大管長が生涯を閉じるころには、モルモンの入植者はアリゾナに定着し、伝道事業はメキシコ共和国まで広げられていた。

宣教師から福音を聞いて改宗した人々が続々とユタ準州に移民して来たため、教会指導者は新しい入植地を常に探し求めなければならなかった。早くも1850年代の初頭に、教会の探検隊がアリゾナに入ったが、砂漠地帯特有の水不足、広大なコロラド川を境とする南側の地域に関する情報不足、さらにインディアンの襲撃により、1850年代と1860年代には入植を果たすことができなかった。1870年になって、政府は1865年以来ユタ南部の入植地に襲撃を繰り返していたナバホ族をようやく制圧した。この制圧によってユタのカナブからアリゾナのコロラド河畔にあるリーズフェリーまでの道が確保された。事実これがきっかけとなって入植が大きく進展したのである。

1872年から1873年にかけての冬を迎えるころ、ブリガム・ヤングは聖徒たちの長年の友人であったトーマス・L・ケインと妻のエリザベスを誘い、セントジョージに向かった。ヤング大管長はメキシコのソノーラパレーを聖徒の集合地とする計画をこの旅の間に考えている。アリゾナの定住地はユタとメキシコをつなぐ中継地とする構想であった。

アリゾナへの入植は相変わらず困難を極めた。このため1873年の初春にヤング大管長はアリゾナ偵察隊と呼ばれた14人の隊員で構成される2番目の探検隊を、コロラド川の南部に位置するリトルコロラド川地域、リオベルデ郡、サンフランシスコ山脈地域に派遣した。この第2探検隊も険しい道と乾燥した気候に前進を阻まれ、意気消沈してしまった。しかしながらブリガム・ヤングのアリゾナ入植の決意はいささかも鈍ることがなかった。1874年から1875年にかけて別の偵察隊が派遣され地域の



## ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間



カール・G・メーザー(1828 - 1901年)は教会の教育分野における第一人者の一人に数えられる。ドイツで生まれ育ち、教育を修めた。ドイツで教鞭を執っていたとき、宣教師に会い、1855年エルベ川においてフランクリン・D・リチャーズ長老からバプテスマを受けた。バプテスマ後、二人は異言の賜物と異言の解釈の賜物によって話を交わしている。

メーザー兄弟がアメリカに渡ったのは1857年だったが、ユタに移ったのは1860年になってからである。彼は1864年にブリガム・ヤングの家族の個人的な家庭教師をしている。大管長会は1888年にメーザー兄弟を教会が経営する学校の初代管理者に召した。

探索が行われた。

1876年初頭に大管長会は200人の「宣教師」を召し、ロト・スミス、ジェシー・O・バレンガー、ジョージ・レイク、ウィリアム・C・アレンを団長とする4つのグループに振り分けた。そしてこの4つの入植団は年末までにリトルコロラドの渓谷にやっとの思いで定着を果たしている。アリゾナに定着したこれらの人々は、水を確保するためにその後長い年月をかけてダムを建設するなどの苦労を重ねている。1880年には別の入植団がリトルコロラド川の支流であるシルバークリーク沿いの川上およびアリゾナ中央部メサに近い地点に定着した。入植に成功して建設した集落に、スノーフレイクがある。これは入植を奨励した十二使徒定員会のエラスタス・スノー長老と入植団の指導者ウィリアム・J・フレイクの名を取って命名したものである。

アリゾナの入植地では生きていくことだけでも精いっぱいであったため、メキシコまで南下する試みはすぐには実行されなかった。しかしながら、メキシコへ宣教師を派遣することを望んでいたブリガム・ヤングは1875年、メキシコ・アメリカ戦争中にメキシコで参戦したダニエル・ウェブスター・ジョーンズを派遣団団長に任命するとともに、『モルモン書』をスペイン語に翻訳する召しを与えた。これは当初の計画にはなかったことだが、ジョーンズ長老は教会に入って間もないスペイン人のメリトン・G・トレホをこの事業に加えることにした。トレホの話によれば彼はロッキー山間地方に住む主の民を探し求めるようにとの靈感を受けたとのことであった。こうして年末にはジョーンズ長老、トレホ長老ほか4名がメキシコへ旅立った。国境を越えたのは1876年1月である。様々な他宗派の牧師から妨害を加えられたが、これらの宣教師は人々を集めて集会を開き、メキシコ全土の100を超える集落の指導者に500枚の『モルモン書』から抜粋した聖句(Selected Passages of the *Book of Mormon*)を送った。

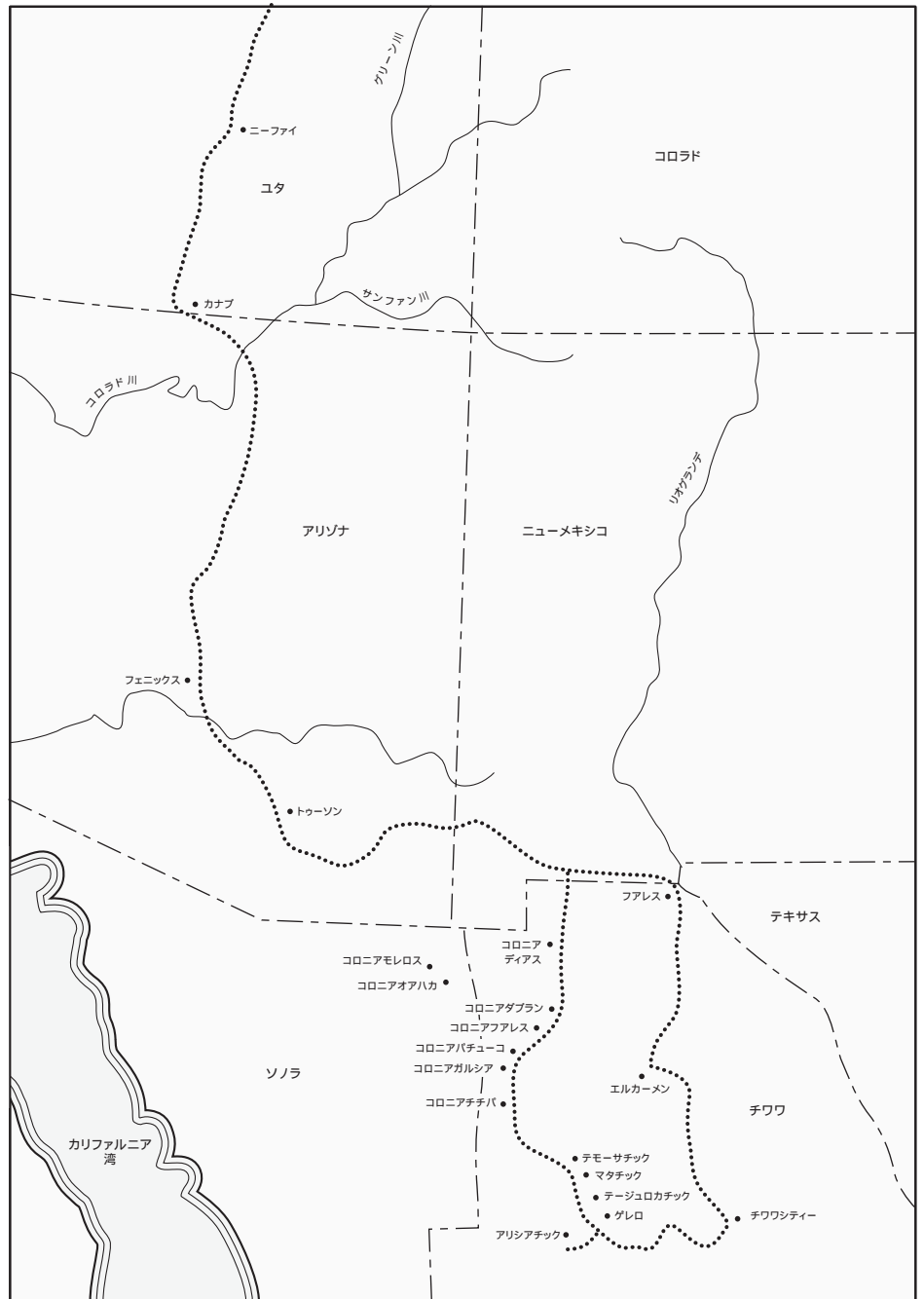
宣教師たちは将来教会員が入植するのに適していると考えたチワワ州地域にも足を伸ばした。1876年の秋に、トレホ長老とヒラマン・プラット長老はソノーラ州で伝道している。1879年に十二使徒定員会のモーゼス・サッチャー長老が宣教師の団を率いてメキシコ・シティーに入り、この地に教会の揺るぎない基礎を築くことに成功している。

1870年代全体を通じて、英国諸島とスカンジナビアから膨大な数の改宗者が引きも切らずに移民して来た。ヨーロッパの聖徒はシオンに集合するために、永続的移住基金を利用し、チャーターした船に乗って米国に渡るという従来からのパターンが毎年繰り返された。1869年に、教会は大西洋の横断にそれまで利用していた帆船に代えて蒸気船を利用するようになった。またこの時期には大陸横断鉄道が完成していたため、ユタまでの陸路は容易になっていた。鉄道が敷設されるまでは約5か月を要していた旅が、3週間足らずに短縮された。しかし、費用はほとんど変わらなかった。

1872年から1873年にかけて第一副管長ジョージ・A・スミスは教会指導者で構成される使節団を率いてヨーロッパとパレスチナに向かった。これは福音を宣伝する機会を探ることと、ユダヤ人の帰還に備えて聖地を再度奉献することが目的であった。オーソン・ハイドは1840年から1841年にかけて同様の任務を果たしたが、そのときは単身で赴いている。聖徒たちは続々と西部の新シオンに集合していたが、中

## 時満ちる時代の教会歴史

この地図は1875年から1976年にかけてメキシコ北部を訪れた最初のモルモン探検隊と宣教師の一行が取ったルートを示している。19世紀、メキシコに8つの居留地を開拓した。



央幹部の兄弟たちはユダヤ人のパレスチナ再集合についても教会が並々ならぬ関心を持っていることを再度宣言する必要があると感じていた。一行はヨーロッパ各地を歴訪し、1873年3月2日、スミス副管長と十二使徒のロレンゾ・スノー長老の二人がオリブ山において奉獻の祈りをささげた。<sup>11</sup>

### セントジョージ神殿

ブリガム・ヤング大管長は生涯最後の10年間で、「山間に住む」聖徒たちのために神殿を建設したいという思いの実現に心血を注いだ。ソルトレーク・シティーのテンプルスクウェアに建設されたエンダウメントハウスは1855年以降一時的な聖なる場所としての役割を果たし、多くの末日聖徒がそこで神殿の儀式を受けていたが、

## ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

恒久的な建物はまだ存在していなかった。ブリガム・ヤングは1847年にソルトレーク神殿の建設場所を明らかにしていたが、建築に着手したのは1853年になってからである。しかし、合衆国軍の接近と、この圧力によって1857年から1858年にかけて多くの聖徒が南部へ移動しなければならなかったことが大きく影響して、建設計画は深刻な遅れを来していた。1860年代と1870年代のソルトレーク神殿の建設はそのためにはかばかしい進捗を見せていない。しかしながら、石切場となったテンプルスクウェアでは100人を超す職人がリトルコットンウッド・キャニオンから運ばれた花崗岩を切断する光景が見られた。

西部で最初に完成した神殿はセントジョージ神殿である。セントジョージは、ヤング大管長が晩年何回かの冬をセントジョージで過ごしたため第2の教会本部と呼ばれた。聖なる建物の敷地としてヤング大管長がこの地を奉献したのは1871年11月のことである。地元の聖徒たちは、預言者の励ましにこたえて、ユタ北部から集められた職人の助けを得ながら建築を急いだ。必要な石を確保するために砂岩採石所が開かれた。材木は一部、南ユタのパインバレーとアリゾナ北部のカイバブフォレストから運ばれたが、ほとんどは130キロ離れたアリゾナのマウントトランブルで伐採し、運び込まれた。多くの聖徒が、建築に従事する人たちのために食料と衣料を寄付した。また「什分の一労働」として10日につき1日を現場で働く聖徒もいた。

ヤング大管長は以前から地元の産業振興に力を注いでいたため、神殿と神殿の内部は周辺地域で入手できる材料が使用された。例えば、神殿のカーペットはプロボの毛織物工場が製造し、祭壇と説教壇のふさ飾りは扶助協会が生産した絹を使用した。構造部分が1877年に完成し、神殿の各部屋が1月に奉献された。同年の年次総大会はセントジョージで開催されることが決定され、大会行事の一環として神殿全体が奉献された。時に1877年4月6日であった。奉献の祈りを朗読したのは、ダニエル・H・ウエルズであった。

ヤング大管長は1877年に、神殿の儀式に関連した別の重要な面で大きな貢献を果たしている。死者のための業が効率的に進められるように、聖なる神権のエンダウメントを正しい様式に記述する作業を他の教会指導者たちとともにに行った。ヤング大管長は神殿における説教で次のように述べている。「もしわたしたちの父祖が墓の中から話すことができるとしたら、何と云うでしょうか。こう云うのではないのでしょうか。『わたしたちは牢獄<sup>ろうこく</sup>に何千年もの間とどめ置かれ、この神権時代が来るのを待たされてきました。この牢獄で汚れた者たちと一緒に縛られ拘束されてきました』と。死者はわたしたちの耳に何かをささやくでしょうか。いや、もし彼らにその力があるとするならば、天の雷の音をもってわたしたちの耳に叫ぶことでしょう。』<sup>12</sup>

ヤング大管長は十二使徒定員会のウィルフォード・ウッドラフをセントジョージ神殿の神殿長に召し、死者のための儀式に本格的に取り組むよう指示した。死者のための最初のエンダウメントが執行されたのはこの神殿である。ヤング大管長は同年、ユタのローガンとマンタイでさらに2か所を神殿用地として奉献した。

ウッドラフ長老は直ちに任務の遂行に取りかかった。「彼は、生者と死者のための神殿の儀式に身も心もささげた。」<sup>13</sup> 彼は死者のための儀式も執り行ったが、その多くは自分の親族だった。ウッドラフ長老は1877年9月にソルトレーク・シティーで行った自分の職務に関する報告の中で次のように述べている。「過去1,800年間、この世

## 時満ちる時代の教会歴史

セントジョージ神殿は教会歴史上特別な位置を占めている。1877年1月11日、この神殿において初めて、死者のためのエンダウメントが執行されたからである。生者のためのエンダウメントはこれ以前にソルトレーク・シティのエンダウメントハウスで行われていたが、ヤング大管長は死者のための儀式には神殿が必要であると説いていた。老い、健康状態が悪化していたヤング大管長は、セントジョージ神殿の完成を非常に気にかけていた。

ブリガム・ヤングは自ら、自分の親族のための儀式を指揮するとともに、神殿の儀式執行者に教える「エンダウメントの完全な様式」を作成した。1877年3月末までに、3,208人の死者にエンダウメントが執行された。完成前のこの写真から、砂岩造りの下半分は、清さと光を象徴するために白石灰塗料で上塗りする準備の段階であることが分かる。塔は後に落雷により損傷したため、さらに高い塔に代えられている。



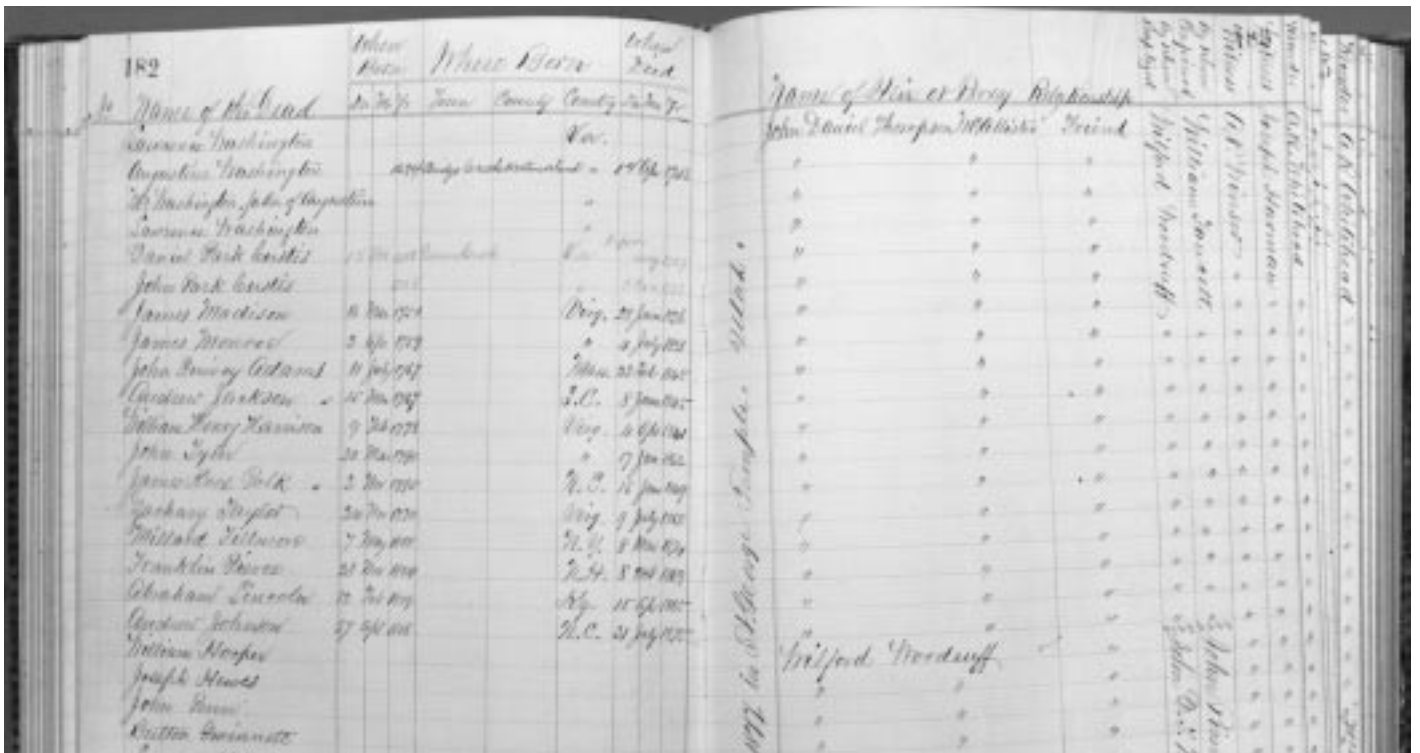
に生まれ死んでいった人々は霊界に行くまで、靈感を受けた人の声を聞くことも、福音の教えを耳にすることも決してありませんでした。肉体を持つだけかが彼らのために儀式を執行して贖わなければなりません。霊の状態にある彼らは自分たちのためにこの儀式を執行できないからです。」そしてこう宣言した。「主はわたしたちの心を揺り動かし、そして死者に関する多くの事柄を明らかにされました。……死者はあなたがたの後を追って、あなたがたに要求することでしょう。セントジョージにおいてまさにこのことが起きているからです。死者はわたしたちが彼らを贖う鍵と力を持っていることを知っているのです、我々を訪ねて来ることでしょう。」

ウィルフォード・ウッドラフは続いて、2日2晩にわたって独立宣言の起草者たちが彼に現れ、彼らは合衆国政府を興し、現在も神に忠実であるのになぜ儀式を施してくれないのかと尋ねたことを明らかにした。ウッドラフ長老は直ちにJ・D・T・マカリスターの手により彼らのためにバプテスマを受け、さらにジョン・ウエスレー、クリストファー・コロンプスなど50人近くの著名な人々のためにバプテスマを受けた。ウッドラフ長老は次にマカリスター兄弟を身代わりとして、「3人（マーティン・バン・ビューレン、ジェームズ・ブキャナン、ユリシーズ・S・グラント）を除くすべての合衆国大統領にバプテスマを施した。この3人については、彼らの申し立てが正当とされたときに、だれかが彼らのために儀式を執行するだろう。」<sup>14</sup> これら3人のための儀式は最終的にヒーバー・J・グラント大管長が管理する時代に執行された。

### 神権組織の改革

年齢を重ねるに従って務めを果たす能力が減退してきたこと、またそう長くは生きられないことを自覚していたブリガム・ヤングは、晩年に神権指導者ならびに組織

ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間



教会の貴重な文書の一つ。これはセントジョージ神殿の記録で、故人となっていた合衆国歴代大統領と独立宣言の起草者、その他歴史上著名な人々のために執行された儀式の詳細が記されている。

に関して幾つかの重要な変更を実施している。1873年に彼は教会信託保管人をはじめとする教会の幾つかの実務職から退き、ジョージ・A・スミス第一副管長の管理の下に12名の信託保管人を指名して実務を担当させた。また、ロレンゾ・スノー、ブリガム・ヤング・ジュニア、アルバート・カリントン、ジョン・W・ヤング、ジョージ・Q・キャノンの5人を副管長として追加した。

十二使徒定員会の先任順位もヤング大管長により訂正されている。ウィルフォード・ウッドラフはジョン・テラーよりも年長であったことが理由でジョン・テラーよりも先任として何年もの間聖徒の支持を受けてきたが、1861年の10月総大会においてジョン・テラーの次位に支持された。ヤング大管長は十二使徒の先任順位を聖任の日付に基づいて決定すべきことを確認し、これによって先に聖任されていたジョン・テラーが定員会においてウィルフォード・ウッドラフよりも先任となったのである。1875年の4月総大会ではさらに、ジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフがオーソン・ハイドとオーソン・ブラットよりも先任使徒となった。オーソン・ハイド兄弟とオーソン・ブラット兄弟は不従順のかどにより定員会から一時除名されていた。この二人が教会から離反していた間に、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・アルバート・スミス（ジョージ・アルバート・スミスは1875年に大管長会で働く召しを受けたため、十二使徒定員会の一員としては支持されなかった）は、使徒職に聖任された。オーソン・ハイドとオーソン・ブラットは復権したとき、定員会における以前の地位を与えられた。しかしヤング大管長は、継続して職を務めることも先任順位を決定する要因となると説明して、この件を訂正している。<sup>15</sup>

1876年にヤング大管長はシオンのステーク相互の関係を明確にしている。ソルトレークステークは「中心地のステーク」として他のステークに勝るものではなく、

## 時満ちる時代の教会歴史

すべてのステークは平等であり、相互に自主独立していると言明した。1877年当時は、使徒の半数以上がステーク会長として働いていた。しかし、彼らは中央指導者としての役割に専念できるように、ステーク会長を解任された。<sup>16</sup>

ブリガム・ヤングは1877年に全ステークにおける主要な神権組織の人事を刷新し、改革を実施した。ほとんどすべてのステークで新しいステーク会長会が召され、またステークの数も13から20に増加した。<sup>17</sup> 地方レベルでの指導責任を明確にするため、「1877年7月11日付け大管長会通達」とその後の書信によって、すべての監督会は3人の大祭司で構成されるべきこと、監督はこの世的な必要を世話する責任に加えて各ワードの管理大祭司としての務めを果たすべきことが指示された。さらに、監督は新たに神殿建築献金を集める責任を課され、またアロン神権定員会を管理する責任を持つことが改めて確認された。

多くの若い男性がアロン神権定員会に召されて訓練を受けるべきであり、長老定員会は、たとえ幾つかのワードにまたがって定員会を組織することになっても、96人の長老で構成されるべきであり、七十人は伝道のみで専念しなければならないことが指示された。大祭司はステーク定員会であって、ワード単位では集会を持たない。ステーク会長は、四半期ごとに大会を開き、また毎月神権会集会を開催しなければならない。神権指導者は各ワードにおいて安息日の集会、日曜学校、青年男子相互発達協会、青年女子相互発達協会が開かれるよう見届ける責任がある。<sup>18</sup> 神権組織におけるこれらの改革はブリガム・ヤングの記念碑ともいうべきものである。この決定はヤング大管長が地上における主の預言者として行った最後の偉業であると考えられている。

## ブリガム・ヤングの不滅の貢献

ブリガム・ヤングは最後まで教会の諸業務と密接なかかわりを持ち続けた。列を成して押し寄せる来客に対しては、従来と変わりなく対応した。1877年8月23日、77歳の預言者はカウシルハウスに集まった監督を指導したが、集会を終えた後、猛烈な腹痛と吐きけに襲われた。4人の医師の努力と全教会員の断食と祈りのかいなく、ヤング大管長は1877年8月29日に他界した。娘のジーナによると、ヤング大管長の「最後の言葉は『ジョセフ、ジョセフ、ジョセフ』でした。父のこうごうしい顔から察するに、最愛の友、預言者ジョセフ・スミスと話をしていたのだと思います。」<sup>19</sup> ブリガム・ヤングの遺体はタバナクルに安置されて公開され、2万5,000人が弔問したと考えられている。葬儀ではジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ダニエル・H・ウエルズ、ジョージ・Q・キャノンなどが弔辞を述べている。キャノン長老の以下の弔辞には、主の力強い預言者が果たした貢献が端的に要約されている。

「ヤング大管長は末日聖徒イエス・キリスト教会の全聖徒の頭であり、目であり、口であり、手でありました。この教会の組織にかかわる重大な問題から日常業務に関するささいなことに至るまで、彼の偉大さはその一つ一つに表れています。教会の組織化、神殿の建設、タバナクルの建設、臨時州政府と準州政府の設立から、今日わたしたちが座っているいすの形状などの細かいことに至るまで、これらすべてと準州内のあらゆる定住地にヤング大管長の才能を見ることができます。ヤング大管長にとっては、関心を向けるに足りないささいなことは存在しませんでした。ま

## ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

た大きすぎるために逃げ出すようなことも存在しませんでした。』<sup>20</sup>

ブリガム・ヤングの末日聖徒イエス・キリスト教会大管長在任期間は歴代大管長の中で最も長い。ヤング大管長の果たした貢献は数限りなく、また多岐にわたっている。今日の教会で慈しまれ、尊敬され、定着している多くの事柄の起源をさかのぼっていくとヤング大管長の行った貢献と指導力にたどり着く。ブリガム・ヤングは彼の師であり友である預言者ジョセフ・スミスの指導にただ従っただけだと考えていた。ヤング大管長は次のように述べている「わたしは預言者ジョセフ・スミス  
を長年知っていることを考えると、一日中でもハレルヤと叫びたい気持ちになります。ジョセフ・スミスは主が立てて聖任された預言者であり、地上における神の王国を築いて維持する鍵と力をお与えになった預言者です。』<sup>21</sup> また別の機会に次のように述べた。「わたしが主から与えられたものは、ジョセフ・スミスを通して受けました。ジョセフ・スミスは主の用向きを伝えました。もしわたしがジョセフをないがしろにするとすれば、それは使徒の時代以来だれも明らかにせず、宣言せず、説明しなかったこれらの原則をないがしろにすることになるに違いありません。』<sup>22</sup>

ブリガム・ヤングが残した最大の遺産の一つに、レクリエーション、事業、管理、教育の面において、教会を異邦人社会から独立させた指導力を挙げることができる。歴史家が教会を指してロッキー山間に築かれた聖徒の巨大な王国であると言うとき、それはブリガム・ヤングに対する賛辞の意味合いが込められている。政府軍と政府官吏の妨害、砂漠気候と荒涼とした未開地、末日聖徒に敵対する商人、この世的な流行、大陸横断鉄道の敷設、ユタにおける貴金属の発見など、これらが大きな障害となって立ち足る中で聖徒の王国の建設は行われたのである。

ブリガム・ヤングは民を率いて次々と危険な事業を成し遂げた。1838年から1839年にかけて、彼は十二使徒会の指導的立場に立つ者として、迫害のただ中であつた聖徒たちを組織してミズーリから脱出させた後、イリノイに避難地を確保した。さらにヤング会長はノーブーから聖徒たちを率いてアイオワ平原を横断し、ウィンタークォーターズ、そしてグレートソルトレークまで導いた。1848年から1852年までの間に彼はアイオワの野营地から数千人の聖徒を集わせて西部の拠点まで導いた。次にブリガム・ヤングは英国とヨーロッパで誕生した数万人の改宗者に目を転じ、永続的移住基金を設立した。この組織化された移民方式は、アメリカ史上最も優れたものであったとされている。ヤング大管長は入植団を農業を中心とする集落に振り分けるため、ユタ、アイダホ、ワイオミング、ネバダ、アリゾナ、コロラドに約350か所の用地を確保した。

ヤング大管長は、苦難が待ち受ける新天地を征服するために、聖徒が互いに協力することの重要性を教えた。この精神は今日まで全世界の教会で豊かに受け継がれている。ヤング大管長は先頭に立って、地上の多くの国々に福音を広め、至高なる神に神殿を建設した。彼は靈感によって、民の間に消費組合を築き、共同制度を実施した。ブリガム・ヤングは末日聖徒に対して教義と、生活に関するあらゆる事柄について指示を与えた。彼の説教は記録されているだけでも800を超えるが、テーマは実に多様である。神の属性に始まって、悪魔の力、自分の救いを達成する必要性、神権の原則、家族生活と結婚生活における行動様式、女性のファッション、自分の持ち物を清潔にし整頓することまでに及んでいる。20世紀に入ってから、ジヨ



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

合衆国政府は各州に対して、ワシントンD.C.の国立彫刻ホールに展示するため、州で最も著名な人物1名ないし2名の彫像を提供するよう要請した。ユタ州は1950年、マホンライ・M・ヤング作のブリガム・ヤングの彫像を寄贈した。ジョージ・アルバート・スミス大管長が寄贈式に出席し、奉獻の祈りをささげた。現在この彫像は国家首都庁舎に移されている。

## 時満ちる時代の教会歴史

ン・A・ウィットォーはブリガム・ヤングの教えを編集して、今や教会の古典の仲間入りをしている『ブリガム・ヤング説教集』( *Discourses of Brigham Young* ) を出版している。ブリガム・ヤングは教会員に対して一般の教育と霊的な教育を受けるよう強く求めた。この教育面における遺産は、今日に至るまで聖徒の祝福となっている。

ブリガム・ヤングは生前からあらゆる教会員に忘れ去ることのできない感銘を与えてきた。柔和で謙遜な人々には優しい心で接し、傲慢で偏屈な人々には猛々しさをむき出しにした。寄る辺ない人々が苦しむのを見ては涙を流し、虐げられた人々を引き取っては世話をする人だった。ヤング大管長は教会の標準を破った人々に対して忍耐を示し、人々の話に耳を傾け、ユーモアのセンスを持ち、演劇やダンスを愛した。しかし政治指導者としての彼は抜け目のない一面も持ち合わせていた。ヤング大管長は、不屈の精神の持ち主であり、決して優柔不断なところがなかった。ヤング大管長の霊性は、彼の祈り、神殿事業、病人の癒しに表されている。長く多彩な人生の随所に、主が命じられたことを行うためのあらゆる指導力が発揮されている。

## 注

1. "Woman's Exponent: A Utah Ladies' Journal" *Woman's Exponent* 「女流解説者：ユタ女性誌」『ウーマンズ・エクスポネント』1872年6月1日付, 8
2. "Home Affairs" 「家事」『ウーマンズ・エクスポネント』1877年8月1日付, 36 - 37
3. アンドリュウ・ジェンソン, *Latter-day Saint Biographical Encyclopedia* 『末日聖徒人名辞典』全4巻 (Salt Lake City: Publishers Press, 1901 - 36), 1 : 705で引用
4. Conference Report 『大会報告』1899年10月, 88で引用
5. *Jubilee History of Latter-day Saints Sunday Schools, 1849 - 1899* 『末日聖徒の日曜学校における50年祭史』1849年 - 1899年 (Salt Lake City: Deseret Sunday School Union, 1900), 14
6. オーレリア・スペンサー・ロジャーズ, *Life Sketches of Orson Spencer and Others, and History of Primary Work* 『オーソン・スペンサー他の人物描写と初等協会設立の足取り』(Salt Lake City: George Q. Cannon and Sons Co., 1898), 206 - 207
7. クララ・リチャーズ, *Insights of Early Farmington History* 『ファーミントンの初期の歴史観察』(Bountiful, Utah: Horizon Publishers, n.d.), 15
8. *Eliza R. Snow, an Immortal* 『不滅の人エライザ・R・スノー』(Salt Lake City: Nicholas G. Morgan, Sr., Foundation, 1957), 40
9. オーレリア・S・ロジャーズ 『人物描写』205 - 217, 221 - 222; Farmington Ward, Davis Stake, Primary Minutes Book, 1878 - 88, デービスステーク, ファーミントンワード初等協会議事録, 1878年 - 1888年, 1878年8月11日付, 1 - 4; 1878年8月25日付, 5, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ; エライザ・R・スノー・スミス, *Sketch of My Life* 『わたしの人生描写』末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ, 38 - 39; キャロル・コーンウォール・マドセン, スーザン・ステイカー・オーマン共著, *Sisters and Little Saints* 『姉妹と小さな聖徒たち』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1979), 1 - 13参照
10. アーネスト・L・ウィルキンソン, W・クレオン・スコーセン共著, *Brigham Young University: A school of Destiny* 『ブリガム・ヤング大学：宿命を持った学校』(Provo: Brigham Young University Press, 1976), 48 - 49
11. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 5 : 474 - 475参照
12. *Journal of Discourses* 『説教集』18 : 304で引用
13. マサイアス・F・カウリー, *Wilford Woodruff: History of His Life and Labors* 『ウィルフォード・ウッドラフの生涯と努力の歴



## ブリガム・ヤング大管長：最後の10年間

史』(Salt Lake City: Bookcraft, 1964), 495

14. 『説教集』19: 228 - 229で引用; 『大会報告』1898年4月, 89 - 90も参照

15. ジョン・テラー, *Succession in the Priesthood* 『神権の継承』1881年10月7日, 神権会, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 16 - 17; *Deseret News* 『デゼレトニュース』1875年4月14日付, 168

16. ウィリアム・G・ハートリー “The Priesthood Reorganization of 1877: Brigham Young's Last Achievement” *Brigham Young University Studies* 「1877年神権組織の改革: ブリガム・ヤングの最後の偉業」『ブリガム・ヤング大学紀要』1979年秋季号, 5参照

17. ハートリー 「1877年神権組織の改革」3, 34 - 35参照

18. ハートリー 「1877年神権組織の改革」20 - 21参照

19. スーザ・ヤング・ゲイツ, リー・D・ウイツォー共著, *The Life Story of Brigham Young* 『ブリガム・ヤングの生涯』(New York: Macmillan Co., 1930), 362で引用

20. ゲイツ, ウイツォー 『ブリガム・ヤングの生涯』364で引用

21. 『説教集』3: 51で引用

22. 『説教集』6: 279で引用

# 迫害の10年：1877 - 1887

年表 年代	重要な出来事
1862	モリル法 最初の重婚禁止法が議会を通過する
1874	ポーランド法可決。多妻結婚に関与した男性の起訴が可能となる
1875	ジョージ・レイノルズ、「試験的訴訟」により有罪となる
1877	ジョン・テラーを会長とする十二使徒定員会がブリガム・ヤングの死後の教会を導く
1879	合衆国を相手取ったジョージ・レイノルズの訴訟に関して、合衆国最高裁判所は、重婚禁止の法制化を支持する
1880.10	ジョン・テラー、教会の第3代大管長として支持される
1882 - 83	七十人定員会が再組織され、強化される
1882	エドマンズ法可決。多妻結婚禁止運動高まる
1885	メキシコにおける入植が定着する
1885	テラー大管長、中央幹部を含む多くの教会員が地下に潜入する
1887.7.25	ジョン・テラー大管長、ユタのケイズビルで死去
1887	エドマンズ・タッカー法可決

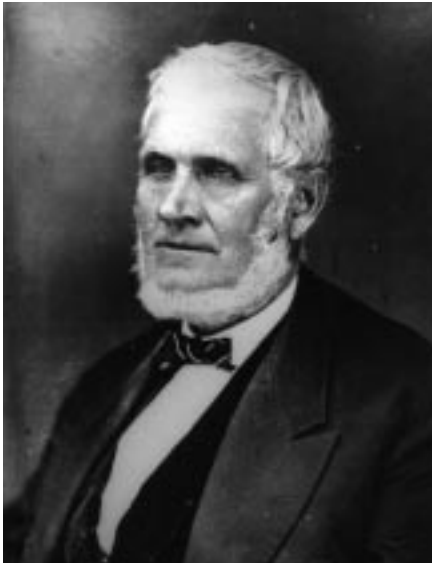
**ブ**リガム・ヤングが他界した直後の10年間は、教会にとって最も困難な時代であったが、それと同時に最も躍動した時代でもあった。多くの改革グループの激励と支援を受けた合衆国政府は、多妻結婚を禁止する幾つかの法律を議会で可決した後、法律を施行し、さらにメディアを使って反対キャンペーンを展開した。しかしながら、こうした激しい迫害のさなかにも教会は、ジョン・テラーの優れた指導の下に依然として会員数を増し続け、入植地を拡大し、教会のプログラムを次々と展開していった。

## 使徒による管理の時代の出来事

ヤング大管長の死後、十二使徒定員会が再び教会を導くことになった。1877年9月4日に開かれた十二使徒定員会の会合において3つの重要事項が決定された。第1、十二使徒定員会を教会の管理定員会とする。第2、ジョン・テラー長老を十二使徒定員会会長に任命する。第3、ジョン・W・ヤング長老とダニエル・H・ウエルズ長老を「ブリガム・ヤングを副管長として補佐したと同じように十二使徒の補佐」とする。

1か月後の1877年10月6日、ジョージ・Q・キャノン長老は総大会に出席した人々に対して、その日の午後の部会を神権の聖会とすることを発表した。聖会は、カートランド神殿の奉献式以来長い間開催されていなかったが、当時の形式に従って進行することになった。キャノン長老は次に各神権定員会の着席場所を指示した。その日の午後開催された聖会において、各定員会は全会一致でジョン・テラー会長を十二使徒定員会の会長として、また「十二使徒を教会の管理定員会および幹部として」<sup>2</sup>支持した。

ジョン・テラーは英国で生まれ、たる職人として奉公した後、青年時代にカナダに渡った。カナダで10歳年上のレオノーラ・キャノンと出会い、結婚している。ジョン・テラーは敬虔なメソジスト信者だったが、末日聖徒イエス・キリスト教会との出会いを得ると熱心に研究を始め、3週間にわたって行われたパーリー・P・プラット長老の説教にすべて出席した。ジョン・テラーはそれらの説教を筆記したものを『聖書』と比較し、教会について祈り、そして改宗した。1839年には使徒に聖任されている。教会の数多くの機関誌の編集に携わり、カーセージの監獄においては預言者ジョセフとともにあわや命を落とすかという経験をし、様々な場所で伝道の召しを果たしてきた。恐れを知らない信仰の擁護者として知られていたジョン・テラーは、「神の王国以外に何もかも求めないこと」を個人的な指針として大切にしていた。十二使徒定員会で働いた30年近くの間、彼は与えられたすべての召しに忠実にこたえた。こうして、迫害のただ中であって教会を導くために、あらゆる



ジョン・テラー大管長（1808 - 1887年）

面での準備を整えたのである。

ブリガム・ヤングの葬儀を終えたジョン・テラーと十二使徒会は、ヤング大管長の資産のうち、どれだけが教会の資産であり、どれだけが相続人の資産かを選別するというやっかいな問題に取り組んだ。1862年に制定されたモリル重婚禁止法により、教会は、専ら宗教以外の目的に使用し、評価額5万ドルを超える資産を所有できなくなっていた。このため、同法施行後に教会が取得した資産はブリガム・ヤング大管長の個人名義にしておいた。テラー会長は、教会の特定の事業用資産を内密に信託人の個人名義とする方針を継続することにした。テラー会長はジョージ・Q・キャノン、アルバート・カリントン、ブリガム・ヤング・ジュニア（ブリガム・ヤング・ジュニアはヤング家の利益代表）を資産の鑑定人に指名した。国中の新聞がこれを探り上げて報道したことにより、様々な憶測が飛び交うこととなったため、彼らの任務はいっそう困難なものとなった。資産は何百万ドルにもなるといううわさが勝手に広がり、こうしたうわさがまたヤング大家族の何人かに膨大な額の遺産を相続できるという期待を持たせることにもなった。

3人の鑑定人は数か月にわたる懸命な作業の結果、資産の推定価値を162万6,000ドルと決定した。しかしながら、このうち教会に所属する資産は100万ドルを超えていた。ヤング家の相続人のうち7人は、金額が期待していたほどではなかったため、第3地区裁判所に不服を申し立てた。そしてこの申し立てが審理に付されることになったため、いやが上にも国中の好奇心をあおることになった。モルモンに反対する立場を自ら明確にしていた判事ジェイコブ・ボアマンは、相続人と結託して、鑑定人に対して法廷侮辱の罪を着せた。キャノン長老、ヤング長老、カリントン長老の3人は1879年8月に、準州最高裁判所がボアマン判事の判決を覆すまでの3週間、ユタ準州刑務所に収監された。そして、最終的に教会指導者は相続人に対して7万5,000ドル相当の資産を余分に渡すことに合意して、結審となった。

1880年4月の総大会において教会は設立50周年を祝うことになった。テラー会長は『旧約聖書』に由来する50年祭の年とすることを宣言した。テラー会長は教会を代表して、永続的移住基金に対して返済が完了していない聖徒たちの負債総額から80万2,000ドル（負債総額の半分）を免除すると発表した。次いで、貧しい人々に牛や羊を供与するよう要請し、また扶助協会に対して備蓄している小麦を、収穫のなかった農家に無利子で貸与するよう奨励した。また、準州内の貧困状態を解消するため、全聖徒に対して貧窮者に援助の手を差し伸べるよう求めた。<sup>3</sup>

十二使徒による管理の時代にも、王国の境を広げる努力は継続された。ワイオミング西部のスターバレー、ユタ東部のカッスルバレー、ユタ南東部の未開地サンウォン川地方、ネバダ南部のバージン川地域、さらにはアリゾナ北部に多数と、合計100を超える新たな定住地が築かれた。

ヤング大管長の死後3年以上が経過した1880年10月、新しい大管長会が組織され、教会員の支持を受けることになった。神権者は再び聖会において、定員会ごとに支持を求められた。ジョン・テラー、ジョージ・Q・キャノン、ジョセフ・F・スミスの名前が聖徒たちに提示され、全会一致で承認された。優れた能力の持ち主であったキャノン長老とスミス長老は、テラー大管長とさらに2代にわたる後続の大管

## 時満ちる時代の教会歴史

長の副管長として働いた。

### 多妻結婚

末日聖徒に対する迫害の多くは、預言者ジョセフ・スミスの指示の下に始められた多妻結婚が原因となっていた。多妻結婚の律法は1831年にはすでに預言者に明らかにされていたが、預言者は信頼するごく少数の友人にしか打ち明けていない。律法に従うようにとの神の厳命により、預言者は1841年、教会のおもだった神権者に対して多妻結婚と彼らがこの律法に従うべき責任について教え始めた。預言者ジョセフ・スミスは1843年にウィリアム・クレイトンにこの啓示を口述して記録させたが、これが多妻結婚に関する最初の記録となる。しかし、この啓示が総大会で読み上げられ、さらに文書として印刷されたのは9年後のことである。<sup>4</sup>

1852年8月28日と29日にソルトレーク・シティーのテンプルスクウェア内旧タバナクルにおいて特別大会が開かれた。大会の初日、合衆国、オーストラリア、インド、中国および海の島々に派遣される100名以上の宣教師が召された。8月に大会が開かれたのは、宣教師たちが厳寒の冬に突入する前に大平原を横断できるようにとの配慮からであった。

大会の2日目にオーソン・プラットはプリガム・ヤング大管長の指示により、教会は神の命令により多妻結婚を実施していることを公にした。国家との関連については次のように宣言している。「我が国のすべての国民は憲法により、宗教上の信条を実践する自由、信教の自由、および信教に基づく行動の自由という特権を与えられています。したがって、もし末日聖徒が複数の妻を持つことを教える教義をその信条の部分および一部として受け入れていることを証明できるのであれば、憲法に違反することはないと考えます。したがって、わたしたちの宗教のこの部分を実践する自由を制限する法律が政府によって制定されるとするならば、そのような法律は合憲性を欠いていると言わざるを得ません。」<sup>5</sup>

プラット兄弟は続いて、聖典に基づいて、多妻結婚に関する説教を長時間にわたって行った。結婚は霊が肉体を得るための方法として神が定められたものであり、ふさわしい神権者による多妻結婚を通して主の前に義とされる多くの子孫を育てることができることを説明した。続いてプリガム・ヤングは日の栄えの結婚に関連した啓示の歴史を簡単に紹介しながら説教を行った。そして、歴史事務局の事務員トーマス・パロックが会衆の挙手による支持を求めため、啓示を読み上げた。

教会指導者は多妻結婚に反対する世論の高まりと、否定的な報道が洪水のように押し寄せることを想定していた。そして、有識者の納得を得られるような説明ができる4人の信仰篤い指導者を直ちに大都市へ派遣し、「日の栄えの結婚」および回復された福音の他の原則について正当性を説明する記事を掲載するための新聞を発行させた。ジョン・テラーはニューヨーク市で『モルモン』(Mormon)を、オーソン・プラットはワシントンD.C.で『聖見者』(Seer)を、エラスタス・スノーはセントルイスで『セントルイス・ルミナリー』(Saint Louis Luminary)を、ジョージ・Q・キャノンはサンフランシスコで『ウェスタン・スタンダード』(Western Standard)を発行した。これらの新聞を通して、多妻結婚を実施した聖徒の義にか

## 迫害の10年：1877 - 1887

ジョン・テラーが発行した新聞『モルモン』(Mormon)は、ニューヨークの主要な新聞『ニューヨーク・ヘラルド』(New York Herald)、『ニューヨーク・トリビューン』(New York Tribune)が社屋を置く同じ通りで印刷された。テラー長老が考案した大胆な題字は、第1面の半分近くを占めた社説と同様に異彩を放った。鷲の左側にモルモンの綱領「自分の仕事に専念せよ」が見られる。

『モルモン』は28のコラムから成る週刊新聞で1855年2月17日に発刊され、1857年9月まで続けられた。



なった動機を説明する記事を発表した。全国紙や俗悪な雑誌、劣悪小説の内容とはまったく逆の説明であった。教会の優れた作家が執筆した記事が公表され、優れた話者による講演会が展開されたにもかかわらず、各種の反対グループが結成され、このような結婚制度を撲滅する法律制定に向けて政府に対して圧力をかけ始めた。

### 多妻結婚反対運動

多妻結婚の実施は自分たちの宗教と道徳上の権利であることを一般市民に納得させるために、末日聖徒はあらゆる努力を重ねたにもかかわらず、国中が結束して教会に反対した。英国やヨーロッパ大陸の宣教師はしばしば暴漢に襲われ、アメリカでは何人かの長老たちが殺害された。多くの人々が多妻結婚を非道徳的で、野蛮で、嘆かわしい行為であると考えた。多妻結婚をさせられ虐待されている女性たちの真の姿を暴くと称する書籍が大量に出回った。多くは、ユタを訪れたことのない人やうわべだけを見た人が書いたものだった。

1862年、リンカーン大統領はモリル法として知られる重婚禁止法案を法制化する文書に署名したが、南北戦争が勃発したためこの法律は施行されなかった。しかし、この法律制定により多妻結婚制度と教会は打撃を受けた。準州内の多妻結婚が禁止され、教会の法人格が剥奪され、教会の所有資産の上限を5万ドルに制限されたのである。合衆国憲法修正第1条に基づく信教上の自由な行為の権利をこの違憲立法により剥奪されたと考えた聖徒たちは、合憲性が確定されるまではこの法律を無視することにした。

その後の数年間、重婚禁止法の強化を目指すための法案が幾つか上程されたが、いずれも合衆国議会を通過することはなかった。教会に対して情け容赦なく反対する人々が中心になってユタ準州内で起草された、ウェイド法案、クラジン法案、カロム法案などがそれである。1866年に登場したウェイド法案がもし議会を通過していれば、ユタ政府は転覆していたと思われる。3年後にクラジン法案が提出されたが、数日後にカロム法案と差し替えられた。これはウェイド、クラジン両法案よりもはるかに過激であった。教会員は結束して法案の廃案に向けて立ち上がった。教会の女性たちは1870年に準州全域で法案に反対する大衆運動を繰り広げた。

「彼女たちは反『モルモン』的性格を持つあらゆる法律の制定に反対した。運動の中心は、モルモンの改革を希望すると称し、教会の女性が専制的な夫によって『虐げられ』『虐待され』ていると主張する人々に対する反論であった。」<sup>6</sup> 末日聖徒

## 時満ちる時代の教会歴史

「ユタの開拓者の娘たち」の厚意により掲載、ユタ州ソルトレーク・シティ



エリス・R・シップ博士（1847 - 1939年）はアイオワで生まれ、1853年に両親とともにユタへ移住した。

多妻結婚上の妻であったエリス・シップ博士は多妻結婚がなかったならば、子供たちを夫の他の妻たちに託して医学の学位を取得する時間はなく、医師になることは不可能であったと考えていた。エリスは1878年にフィラデルフィアの医学校を卒業し、ユタで2番目の女医となった。彼女はまたミシガン医科大学においても医学の勉強を続けた。

60年間の開業中、シップ博士は自身も10人の子供を産み、6,000人以上の赤ん坊を取り上げた。シップ姉妹は1898年から1907年まで中央扶助協会管理委員会として働いた。

の女性たちによる抗議行動は、政治家や婦人参政権運動の活動家にとって大きな驚きであった。彼らはモルモンの女性が苦難と束縛により苦しめられている女性の典型であると考えていたからである。東部の新聞もこの法案には好戦的な要素が見られるために反対の立場をとった。合衆国大統領はこの法令の実施に際してユタに軍隊を派遣する権限を持つことになっていたからである。「これが実施されれば必ず戦争に発展するだろう」と『ニューヨーク・ワールド』(The New York World)は報じた。結局カロム法案は廃案となった。

しかしながら、1874年6月にポーランド法が可決された。この法令では、合衆国地方裁判所（連邦政府から任命されたモルモンでない人が権限を持つ）に民事および刑事上の包括的裁判権を与えたため、ユタの司法制度は形骸化してしまうことになった。また、この法令を適用することによって、モリル法の違反者に対する裁判を開くことが可能になった。ポーランド法では、陪審員席で教会員と非教会員が平等に代表されるように、地方裁判所事務官（モルモンでない）と検認判事（モルモン）が陪審員一覧表を作成することとしていた。合衆国検事は直ちに指導的立場にある教会役員を法廷に立たせようとしたが、問題にぶつかった。教会役員のお多くは法律が可決された1862年以前に結婚しており、懸案となる行為が行われた以降に制定された法律によって、過去にさかのぼってその行為を裁くことはできなかったからである。さらに、夫に不利な証言を妻に対して要求することができず、また多妻結婚の記録はエンダウメントハウスに私的な目的で保管されており、公文書とは見なされなかったのである。

教会指導者は、最高裁判所が重婚禁止法の合憲性を判断する前に、「試験的訴訟」の実施を望んだ。これに対して、合衆国検事ウィリアム・ケーリーは「試験的訴訟」が行われている間、中央幹部の告訴を見合わせることを約束した。このため、大管長会は、大管長会事務局の秘書で最近2番目の妻と結婚した32歳のジョージ・レイノルズを、法廷において教会を代表させることにした。レイノルズは彼が二人の妻と結婚していることを証明する大勢の証人をそろえた。しかし、ケーリーが約束に反してジョージ・Q・キャノン副管長を逮捕したため、教会はもはやケーリー検事に協力しないことを決定した。

1875年、レイノルズは有罪が確定し、2年間の懲役と500ドルの罰金（後に合衆国最高裁判所は禁固刑のみに変更した）が言い渡された。1876年、ユタ準州最高裁判所はこの判決を支持した。合衆国最高裁判所は1878年にレイノルズの上告を受理したが、1879年1月同裁判所は重婚禁止法の合憲性を裁定し、レイノルズに対する判決を支持した。ジョージ・レイノルズが原判決のうちの18か月の服役を終えて出所したのは1881年1月のことであった。レイノルズは服役中、他の受刑者に読み書き、計算、文法、地理などを教える生活を送っていた。レイノルズ兄弟はまた、服役中に書物の原稿を書き終えている。後に出版された『「モルモン書」の全用語索引』(A Complete Concordance of the Book of Mormon)である。彼は出所時にすでに2万5,000語の用語索引を完成させていた。<sup>8</sup>

合衆国議会は1882年に、二人以上の女性を扶養し世話することを「不法な同棲<sup>どうせい</sup>」と規定するエドマンズ法を可決した。2番目の妻と結婚をしているかどうかの証拠は



ジョージ・レイノルズ(1842 - 1909年)は少年時代に福音に改宗したが、両親の反対により数年間バプテスマを受けることができなかった。バプテスマを受けたのは1856年5月4日、14歳のときだった。

ジョージは1865年にアメリカへ渡るまで、英国において教会の様々な職を務めた。渡米後間もなく大管長会の秘書となり、世界するまでこの召しにあった。1890年には七十人第一定員会会長の一人に召されている。有名な『「モルモン書」の全用語索引』<sup>9</sup>を完成するために、21年の歳月を費やした。

もはや必要とされなくなった。この法律は多妻結婚を実施する者から市民権を剥奪し、また公職に就くことを禁止した。多妻結婚を実施している人のみならず、多妻結婚を是認する人も陪審員を務める資格を失うことになった。ユタ準州のすべての登記所および選挙管理委員会職員は解雇され、合衆国大統領から任命された5人で構成する委員会が選挙を実施することになった。

エドマンズ法の議会通過直後の1882年4月に総大会が開催された。大会2日目に集まった聖徒を、みぞれ混じりの嵐が襲った。テラー大管長は天候と最近の法律制定の双方を指して、国家が聖徒たちに対して恨みを込めた偏見を募らせていることについて述べてから、「嵐が襲来しており、この嵐は聖徒たちのうえに猛威を振るうであろうことを警告した。そして幾分おどけてこう言った。『やり過ぎせばよいのです。今朝わたしたちが吹雪の中をやって来たように。襟を立て(大管長は上着の襟を立てて見せ)、嵐が静まるまで待とうではありませんか。嵐の後には太陽が顔を出します。嵐が続いている間は世の人々を説得しようとしても相手にされるはずがありません。嵐が収まれば、彼らと話ができるのですから。』」翌日テラー大管長は、聖徒はアメリカ国民としての自由と権利を守るために「少しずつ戦っていく」ことになるだろうと語っている。<sup>10</sup>

末日聖徒の多くの男性と、少数ではあったが女性も逮捕を逃れるために「地下に潜伏」しなければならなかった。こうして末日聖徒の歴史上最も困難な時期に突入したのである。投獄を逃れるため、多妻結婚を実施している父親には暗号名が付けられた。連邦の役人が接近すると暗号名で本人に警告したのである。セントジョージステーキ会長J・D・T・マカリスターは暗号名ダン、ヘンリー・F・アイリングはルック(見る)と名付けられた。地域社会の呼称も同様に暗号が用いられた。セントジョージはホワイト(白)、ピーバーはブラック(黒)、トカービルはクラウディ(曇り)、また合衆国連邦執行官はリング(鈴)、ボアマン判事はヘロデと名付けられた。警告は電報で発信し、たとえ連邦当局者の手に渡っても解読は不可能だった。

当時、役人は末日聖徒への嫌がらせを企てることだけに熱中していた。合衆国軍司令官フレッド・T・デュボイスは反モルモン思想を利用してアイダホにおける自分の政治的な立場を有利にしようと考えた。多妻結婚の男性を捕えようと家屋の下に掘った穴にもぐり込んだり、列車を徴用してモルモンが大勢いる町を巡回したり、モルモンの町へ潜入したり、夜中に家庭を急襲したりした。このように様々な輩が末日聖徒の周囲を徘徊していた。アイダホ州オックスフォードワードの監督は逮捕を逃れるために、夜になるのを待って、「『ユタ、オグデン』行きと刻印された豚肉の箱の中に忍び込んで」町を出た。この監督はネスビット兄弟に出してもらうまで24時間箱の中に隠れていた。そして夜の闇に乗じて、オグデンの義理の兄弟の家へ行き、そこで安全に暮らした。

ジェームズ・モーガンは5番目の妻アンナとともに奥深い森に入って材木を切り出し、息子たちがそれを町まで運ぶという生活をしていた。

ハイラム・プールはアイダホ州メナンに住む少年だった。「1883年の冬のこと、ハイラムは兄弟のウィリアムと一緒に遅い夕食を取っていた。……突然荒々しくドアをたたく音がしたため、ハイラムがドアを開くと銃身が差し込まれた。そして乱入

## 時満ちる時代の教会歴史

者が叫んだ。『ドアを開けろ。開けないとドアをたたき壊すぞ。』ハイラムはとっさに銃身をつかむと全体重をドアに預け、ドアが開かないようにした。それと同時に、ウィリアムと二人の使用人が駆け寄って来て、ドアを押さえた。

ついに乱入者はドアを押す力を弱めた。彼らは執行官代理で令状を持っており、『N・A・スティーブンスの隠れ家を探している』と言った。そこでドアを開いて中へ入るのを許したが、ハイラム・プールは『まるで暴徒か殺人者のように』力ずくで入ろうとしたことを非難した。一行のリーダーだったイーグル・ロック酒場の主人ウィリアム・ホブソンはそのとき少し酒に酔っていた。そしてハイラムの顔をライフルで殴りつけ、『役人に抵抗するとどうなるか分かっているのか』と言った。

搜索の結果、スティーブンスなる人物は見つからなかった。彼らは引き揚げる際、ハイラムに同行するように言った。闇に包まれた外に足を踏み出すと、ホブソンはいきなりライフルの銃底で頭を殴りつけた。頭がざっくりと割れてハイラムはその場に昏倒した。<sup>こんどう</sup>ハイラム・プールは検挙されたほかの囚人とともに「ブラックフットまで連行され、投獄された。彼らは2日間食物が与えられないまま放置され、けがの手当ても、判事に申し立てをする機会も、保釈金による仮出所の機会も与えられなかった。」<sup>11</sup>

有罪が確定した末日聖徒の中には、遠くミシガン州のデトロイトへ移送され、孤独と恐怖に耐えながら刑に服した人たちも何人かいた。

有罪が確定した多くの聖徒はユタ準州刑務所に送られ服役したが、彼らは模範囚だった。福音の勉強をしたり、書物を執筆したり、他の囚人に読み書きやその他一般には軽視されがちではあるが基本的な技術を教えるなどをして過ごした。服役を終えて出所すると、地域を挙げてのパーティーが開かれ、人間が作った法律よりも神の律法を選んだ彼らをたたえた。しかし、残された家族の方が服役している人よりもはるかに大きな苦しみを味わったことだろう。夫や父親に頼ることもできずに、貧困、飢え、病気に苦しむ人々がいた。このように教会に敵対する社会運動は、経済、社会、教会、家族生活を崩壊に追いやった。しかしこれだけで終わったわけではなかった。1880年代末期には、さらに大きな暗雲がはるかかなたの地平線上に姿を見せてきたのである。

多妻結婚反対運動のさなか、ロッキー山間西部の末日聖徒は逮捕され、裁判に付された。そして有罪判決を受けた者たちは投獄された。ほとんど知られていないことだが、「不法な同棲」のかどで有罪判決を受けたアイダホの多くのモルモンはデトロイト刑務所で服役した。この絵は彼らが投獄された当時のミシガン州デトロイトの刑務所である。



ミシガン州デトロイト市立図書館の厚意により  
同所蔵ハートン歴史選集より掲載



## 迫害の10年：1877 - 1887

合衆国議会は1853年3月3日、ユタに刑務所を建設するための予算を承認した。数か月後ユタ準州長官アルモン・W・バビットが用地を決定した。ソルトレーク・シティー地域に建設されたこの刑務所は1854年に完成し、約2万8,000平方メートルの敷地を有していた。外塙は、高さ3.6メートル、厚さ1.2メートルのれんが作りだった。



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

### 前進する王国

多妻結婚反対運動という「嵐」が吹き荒れる中を、テラー大管長は1880年代初期の教会を導いて前進させている。大管長はシオンのステークを定期的に巡回し、ステークの秩序を回復させ、聖徒たちを教え、また助言と励ましを与えるために熱心に働いた。また、夫、妻、両親、子供、隣人、一市民として日常生活での振る舞いに注意を払うこと、思いと行いの両面において一致、誉れ、高潔、正直、清さを重んじることを民に強く求めた。

1881年、テラー大管長は『神権に関する事項』(Items on Priesthood)と題するパンフレットを自ら執筆し、出版した。これは、神権者特にアロン神権の各職に聖任された若い男性を指導することを目的としていた。翌年には『仲保と贖罪』(Mediation and Atonement)と題した書物を出版した。この書物は世の罪に対して救い主の贖いが必要であること、また主の栄光と権能に関する一連の聖句とそれらの解説をおもな内容としていた。

テラー大管長は自分が受けた啓示に基づいて、聖徒を導き教えた。預言者ジョセフ・スミスが示した模範に従い、テラー大管長は与えられた靈感を書き留め、出版している。そのような啓示の一つに、総大会を終えた数日後の1881年10月13日に口述したものがある。十二使徒定員会は10名で構成される時期が2年間も続いていた。この空席について預言者は頭を悩ましていた。そうしたときに、啓示が与えられた。そして、ジョージ・ティースデールとヒーバー・J・グラントが使徒として、医師のシーモア・B・ヤングが七十人第一評議会に召された。またこの啓示によって、インディアンの各部族に対する伝道活動を強化することが明らかにされ、神権者と全聖徒はこれまで以上に正義を行うことを求められた。<sup>12</sup>

数か月後にヒーバー・J・グラント長老が経験した出来事から、この啓示が与えられた背景をかいま見ることができる。グラント長老の語るところによると、彼は使徒職に召されてから数か月間、自分が救い主の特別な証人としてふさわしくないと感じていた。1883年2月、グラント長老は、インディアンの間で教会を設立するために働いている人々を支援する責任を受けて、アリゾナ北部のナバホ保留地に向かって旅をしていた。その途中で、グラント長老は同僚に、一人になる時間が少し欲しいことと目的地まで別の道を通って行きたいことを告げた。馬を走らせているときに起きた出来事を次のように述べている。

「わたしはそれを見たと思う、また確かに聞いたと思う。それは、これまでの人



ジェームズ・バクストンの木彫りの作品とサイン帳。この時代の末日聖徒は、多くが宗教的信条のゆえに投獄されていた。彼らは服役中に木彫りの作品を作ったり、サイン帳を作ったり、日常の行動や思いを日記につづったりしていた。

## 時満ちる時代の教会歴史

生で経験したことがないほど現実感があった。それは天上の会議のようであった。そこで語り合う声が聞こえた。……大管長会と十二使徒評議会は十二使徒定員会の空席を満たす二人の人を決めかねていた。……わたしが見たこの天上の会議には救い主が出席しておられた。わたしの父〔ジェデダイア・M・グラント〕もいた。預言者ジョセフ・スミスもいた。彼らは、二つの空席を補充しないことが間違いであること、このまま放置しておけば定員会が完全な姿になるには恐らく6か月はかかるであろうということ話し合っていた。そしてだれをこれらの職に就かせたいかを話し合った。結論として、これらの空席を埋めなかった誤りを正すために、啓示が下されることになった。預言者ジョセフ・スミスとわたしの父はわたしの名を挙げ、その職に召すように要請したことが、わたしに知らされた。わたしはそこうずくまって、喜びのあまり泣きだした。……

その日以来、わたしは自分が使徒としてふさわしくないという思いに悩まされることは、昼夜を問わずまったくなくなった。<sup>13</sup>

1884年5月17日、テラー大管長はローガン神殿を奉献した。ローガン神殿は教会の4番目の神殿であり、ユタで2番目に完成した神殿だった。奉献式を翌日に控えた夜、テラー大管長はこの建物を受け入れられるかどうかを主に尋ねた。祈りはこたえられ、啓示が与えられた。主は次のように言われた。「わたしに建てられたこれらの家と今後建てられる家において、わたしは、過去、現在、未来に関する事、現在あなたがたが営んでいる生活と来るべき世の生活について、律法と秩序と支配と管理について、この国と他の国々に影響を及ぼす事柄について、さらに時と時季における天体の律法ならびに万物が治められる原則すなわち律法について豊かに明らかにするであろう。」<sup>14</sup> 翌日神殿の奉献式に集まった聖徒たちは御霊が豊かに注がれるのを目撃した。

テラー大管長が管理する時代に、再発行された教会出版物や新たに発行されることになった教会出版物が幾つか登場した。その中で最も重要な出版物は、広範囲に及ぶ相互参照と注説明を追加して1879年に再発行された『モルモン書』と『教義と聖約』である。1878年に出版された『高価な真珠』は、以前は宣教師のちらしの形態を取っていた。これらの出版作業にはオーソン・プラット長老が当たった。新しく出版された『教義と聖約』ならびに『高価な真珠』は、1880年10月の総大会において正式に聖典として加えられた。1879年の初めにジュニアス・F・ウエルズが月刊誌として発行した『コントリビューター』(Contributor)は正式に相互発達協会の機関誌となった。さらに、教会歴史記録者補佐のアンドリュー・ジェンソンが出版した『歴史記録』(Historical Record)は数多くの出来事と年表を内容としたもので、教会歴史の研究や執筆には非常に貴重な書物となった。さて、教会は引き続き経済的な団結を強く推進していた。そこで生まれたのが共同制度に代わるシオン中央取引所であった。各ステークにも取引所が創設されたが、これらは中央取引所の下部組織としての機能を果たした。取引所の業務は、商取引を促進すること、新しい市場を開発すること、農業や製造業に従事する人々に情報を提供すること、家内産業に悪影響を及ぼす競争を避けること、また時には地域社会の安定を図るために賃金や価格を規制することなどであった。



スイス生まれのジェイコブ・スポリ(1847 - 1903年)はバレスチナに渡った最初の宣教師である。

ユタに移民したスポリは教育事業に専念した。後にアイダホ州レックスバークに移住して、新設されたバノックスステーク・アカデミーの校長に任命された。このアカデミーは現在のリックスカレッジである。スポリはこの学校を現在の姿までに成功させるために多大の犠牲を払っている。二人の教師の給料を支払い、学校の運営費を捻出するために、線路工事夫をしたこともある。

## 伝道活動の推進

伝道活動は相変わらず伸展を続けていた。メキシコでは1876年以来伝道活動が開かれ、ある程度の成功を収めていたが、1881年に至ってモーゼス・サッチャー長老は福音を宣べ伝える地として同国を奉獻した。1881年にはニュージーランドのマオリ族の間でも伝道活動が開始されている。1884年にジェイコブ・スポリはトルコ伝道部を開設した。後に同伝道部はパレスチナまで地域が拡大されている。スポリ長老は、イスラエル北東部のハイファから聖地を訪れてキリストの再臨を待っていた人々の中から改宗者を見いだした。彼らはドイツ語を話していた。これは、スポリ長老がかつてコンスタンチノーブルで受けた示現が成就したものであった。英国諸島、スカンジナビア、スイス、オランダ、ドイツでも伝道活動は引き続き成功を収めていた。

合衆国においても伝道活動は引き続き拡大していた。一例を挙げると、ジョン・モーガンは教会に入る以前に見た夢を記憶していて、改宗後その夢で見たままにジョージアの小さな集落へ行き、福音を説き、そこに住んでいたほぼ全員にバプテスマを施した。しかしながら、伝道活動には危険が伴わないわけではなかった。特にアメリカ南部は危険だった。南部において教会が成長を続けるにつれて、妨害活動も急増した。

1879年7月21日、ジョセフ・スタンディング長老とラドガー・クローソン長老はジョージア州ローマで開かれる教会の大会に出席することになっていた。出発した二人はバーネルズステーション地域に入ると、ライフルで武装した12人の男たちに取り囲まれ、脅された挙げ句森に連れ込まれた。暴漢のうちの3人が馬に乗ってもっと人里離れた場所を探しに行っている間、長老たちは口汚くののしられた。3人が戻って来たとき、どのようにして手に入れたかは分からないが銃を手にしたスタンディング長老は突然立ち上がって銃口を男たちに向け、「降伏しろ！」と叫んだ。すると横に座っていた男が突然、スタンディング長老に向けて銃を発射した。スタンディング長老は顔に被弾した。12丁のライフルを突きつけられたクローソン長老は両腕を組み、静かに死を待った。すると彼らはライフルの銃口を下げ、けがをしている同僚のために助けを求めに行くように言った。クローソン長老は人々を連れて現場に戻ると、スタンディング長老は至近距離から頭と首に数発の弾を浴びて絶命していた。クローソン長老に付き添われ、遺体となってソルトレーク・シティーに戻ったスタンディング長老に対して、聖徒たちは、神の大義のために犠牲となった新たな殉教者に心からの敬意を表した。<sup>15</sup>

ジョセフ・スタンディングは以前にも南部諸州で伝道しており、殺害されたときは南部諸州への2度目の伝道であった。この伝道もすでに16か月を過ぎており、間もなく解任されるはずだった。後にジョン・モーガン伝道部長とクローソン長老はジョージアへ戻り、殺人者たちに対する告発の証言台に立ったが、裁判の結果は無罪だった。

5年後の1884年8月10日にケインクリーク大虐殺が起きた。この事件は、『ソルトレーク・トリビューン』(Salt Lake Tribune)紙に掲載された「ウェスト監督の演説」が瞬く間に流布されたことが直接の原因とされている。この演説は、1884年3月にユタのジュアブに住む一人のモルモンの監督が行ったと何者かが主張した偽りの情報



ジョン・モーガン(1842 - 1894年)は南北戦争で北軍の兵士として戦った経験を持つ。1866年にユタに移住し、教育関係の仕事をした。福音に改宗してバプテスマを受けたのは1867年11月26日のことである。1875年から1877年まで南部諸州で宣教師として働いた。1878年には伝道部長として南部に戻った。1884年に七十人第一委員会会員に召され、他界するまでこの職にあった。



ジョセフ・スタンディング(1854 - 1879年)は教会の殉教者の一人である。1875年から1876年まで南部諸州での伝道を終えた後、1878年に2度目の伝道のため南部諸州へ戻った。スタンディング長老は親切で、温厚な性格を持ち、分別を備えていたため、ジョン・モーガン伝道部長は彼をジョージアでも教会に対する敵対心が旺盛な地域に派遣した。ラドガー・クローソン長老が同僚として赴任したのは1879年の初期のことである。ジョージアにおいてジョセフ・スタンディングが殺害されたというニュースはユタの教会員に大きな衝撃を与えた。ソルトレーク・タバナクルで行われた彼の葬儀には1万人近くの人々が参列した。

## 時満ちる時代の教会歴史



変装して写真に収まるB・H・ロバーツ(1857 - 1933年)。ギブス、ベリー両長老の遺体を取り返しに行くためにこのように変装した。ロバーツ兄弟は少年時代を英国で過ごした。彼はアメリカに渡ったとき、ほとんど徒歩で大平原を横断しユタまでたどり着いた。

ロバーツ兄弟はデゼルト大学での正規の教育のほかに、自分でかなりの勉強をして、教会史上最も明瞭で雄弁な説教者、また教会歴史に名を残す作家の一人となった。彼は『教会歴史(ジョセフ・スミスの歴史)』全7巻を編集出版した後『教会歴史概史』として知られる全6巻から成る教会の第1世紀の歴史を出版した。

ロバーツ長老は1888年31歳で七十人第一委員会に召された。1898年に合衆国下院議員に選出されたが、彼の多妻結婚への関与についての論議が持ち上がったため議席に就くことを許されなかった。

60歳を過ぎてから、第一次世界大戦中の1917年から1918年までアメリカとフランスにおいてユタ出身の兵士のための従軍牧師を務めた。

だった。ジュアブにはウェスト監督なる人物は存在せず、異邦人に対する下品な説教もでっち上げであることが直ちに判明したが、この架空の説教は合衆国東部と南部で広い範囲に流布されてしまった。そのうちの1枚がテネシー州ルイス郡にたどり着き、内容がモルモン反対グループの間に伝えられた。

ジェームズ・コンドーの家では聖徒たちが集まり安息日の集会を開いていた。そこへ暴徒が結集し、銃撃を開始した。二人の宣教師ジョン・H・ギブス長老とウィリアム・S・ベリー長老、コンドー家の家族二人、そして暴徒の主犯が殺害された。伝道部長がそのとき不在だったため、任務を受けた若きB・H・ロバーツは変装し、命がけでケインクリークへ行った。そして、長老たちの遺体を発掘して、ユタで埋葬するために持ち帰った。<sup>16</sup>後に彼は神の助けがなければ、とうてい使命を果たすことができなかったと話している。しかしながら、スタンディング長老の場合と同様、殺人者は裁判にかけられたが、判決は無罪だった。

## 再度の嵐の来襲

1880年代が終わるころには、聖徒のあらゆる定住地で執行官代理による嫌がらせが起きていた。千人を超える男性と少数の女性までもが、多妻結婚のかどで投獄された。テラー大管長は、ウィルフォード・ウッドラフや他の教会役員と同じく、<sup>いんとん</sup>隠遁生活に入った。

主としてアリゾナとニューメキシコに入植していた数百名の聖徒は、激しい迫害を受けたため、1885年末までに急ぎよ同地を引き払いメキシコの定住地に移動した。これらの追放された聖徒を管理したのはジョージ・ティースデイル長老であった。1886年にユタ北部のキャッシュステーク会長であったチャールズ・オラ・カードは避難した入植者を保護収容する施設を建設する場所をカナダで見つけるようにとの要請を受け、現在アルバータ州カードストーンと呼ばれている地域に場所を確保した。そして間もなくこの地域におけるモルモンの定住地が確立された。

多妻結婚に対する司法の圧力が一向に衰えを見せないため、多くの聖徒は生活の方法を変えざるを得なかった。重婚禁止法を除いてすべての法律を守っていたにもかかわらず、人々は、彼らを血眼になって探す連邦執行官から逃れるために、地下に潜り、住居を転々としたのである。逃亡を続ける「コハプス」(多妻結婚を実施している者はこう呼ばれた)は追っ手から逃れるために溪谷、小屋、牧草地、穴蔵に身を隠した。連邦役人は住居に立ち入るために行商人や国勢調査員に変装するなどして対抗した。捜索のために、家屋に不法侵入してプライバシーを侵害したり、妻子に<sup>ろうぜき</sup>狼藉を働く連邦執行官もいた。末日聖徒を捕らえた者には一人につき10ドルから20ドルの賞金を出したり、中央幹部を見つけた者にはさらに多額の賞金が用意されたりした。こうした中で、1886年12月10日に悲劇が起きた。

エドワード・M・ドルトンが自分の町であるパロワンの通りで馬に乗っていたところを連邦執行官代理のウィリアム・トンプソン・ジュニアに<sup>えげき</sup>狙撃され、殺害されたのである。ドルトンは1885年に「不法な同棲」で告発され、裁判を逃れるためにアリゾナへ行っていた。そしてパロワンに戻ったところを、銃撃されたのである。<sup>17</sup>

1886年、依然として隠遁生活を続けていたジョン・テラー大管長は、ユタのケイズピルの市長トーマス・F・ルーシュが所有する農家に移動した。落ち着いた生活

## 迫害の10年：1877 - 1887

を確保できたこの家で大管長は、従来どおり一般書簡を通じて聖徒たちにメッセージを伝えた。大管長と教会指導者の間の連絡は、指導者が護衛付きの馬や馬車で夜間、大管長の隠れ家を訪れる方法をとった。この時期、大管長の健康状態は悪化する一方であったため、同じく隠遁生活にあったジョージ・Q・キャノン副管長がほとんどの教会業務を処理していた。第二副管長のジョセフ・F・スミスはこのほか捜索が厳しかったため、ハワイへ伝道に旅立っていた。

ジョン・テラー大管長は多妻結婚反対の動きが熾烈を極めたため、1885年2月1日から地下に潜り、その後定期的に居所を変えた。1886年11月22日、テラー大管長はユタのケイズビルにあったトーマス・F・ロッシュの家に移動した。木々に囲まれ、農地越しの東へ2キロほど先にケイズビルの集落と、その背後に山並みが見える風光明媚な場所だった。ロッシュ家族の家はジョン・テラーの最後の住まいとなった。大管長に同行した記者によると、大管長は1887年4月から6月まで寝たり起きたりの状態だった。

その間、ジョージ・Q・キャノン副管長はひそかにケイズビルとソルトレーク・シティ間を往復し、教会業務の多くを処理した。6月末にテラー大管長は衰弱し始め、ほとんど食事ができなくなり、意識不明の状態を繰り返すようになった。そして7月25日の夜、静かに息を引き取った。



1887年7月25日、テラー大管長は逃避中の身のまま世を去った。連邦執行官たちは葬儀に姿を見せたが、だれも逮捕しなかった。しかし、教会の大管長となったウィルフォード・ウッドラフは依然として隠遁生活を余儀なくされていた。この時期の聖徒たちは神への忠誠を試されていた。多妻結婚反対運動が渦巻き、多妻結婚の禁止を法制化された国でなお、多妻結婚を実施しよう神から命じられていたからである。

1887年3月、エドマンズ・タッカー法の議会通過に伴い、妻は夫に不利なことであっても証言しなければならないこと、すべての結婚は公の記録に残さなければならないことになった。またこの法律により、郡遺言検認判事は合衆国大統領により任命されることになった。ノーブー軍団の時代に起きたことが再び繰り返された。ユタにおける婦人参政権運動は完全に崩壊し、永続的移住基金は解体され、そして公立学校教育制度が実施されることになった。教会の法人格は剥奪された。そして合衆国司法長官の権限によって5万ドルを超える教会の資産と所有地は合衆国に没収された。連邦政府を首謀者として展開される教会への迫害がこのように継続される中、教会はウィルフォード・ウッドラフ大管長による新しい管理体制を迎えたのである。

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョン・テラー大管長のソルトレークの公邸がこのガードハウスである。死後、大管長の遺体はここへ戻され、埋葬の準備が行われた。1887年7月29日に遺体はタバナクルに運ばれ、公開された。

ガードハウスの建設はブリガム・ヤングの指示の下に始められ、ジョン・テラーが大管長在職中に完成した。そして1883年2月22日フランクリン・D・リチャーズにより奉獻された。ジョン・テラーの死後、ガードハウスはウィルフォード・ウッドラフの執務室として使用された。後に教会はこの建物をサンフランシスコのフェデラル・リザーブ銀行に売却したが、1921年11月に解体された。

### 注

1. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1877年9月4日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
2. “General Conference” *Deseret News Semi-Weekly* 「総大会」『デゼレトニュース, 隔週刊』1877年10月9日付, 2
3. B・H・ロバーツ, *The Life of John Taylor* 『ジョン・テラーの生涯』(Salt Lake City: Bookcraft, 1963), 334 - 337参照
4. Journal History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史』1883年3月4日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 8 - 10; *Territorial Enquirer* 『準州探求者』1883年3月6日; “Celestial Marriage: How and When the Revelation Was Given” *Deseret Evening News* 「日の栄えの結婚: いつどのようにして啓示が与えられたか」『デゼレト・イブニング・ニュース』1886年5月20日付, 2参照
5. Millennial Star 『ミレニアルスター』補遺, 1853年, 18
6. ジョセフ・フィールディング・スミス, *Essentials in Church History* 『教会歴史粹』モルモン名著シリーズ (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1979), 44
7. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 5:314
8. ブルース・A・バン・オーデン “George Reynolds: Secretary, Sacrificial Lamb, and Seventy” 『ジョージ・レイノルズ: 秘書, いけにえの子羊そして七十人』博士論文, ブリガム・ヤング大学, 1986年, 53, 57 - 62, 71, 76 - 77, 80 - 86, 103, 108参照
9. ジョージ・レイノルズ, *A Complete Concordance of the Book of Mormon* 『モルモン書』の全用語索引』全2巻 (Salt Lake City, Deseret Book Co., 1957)
10. ロバーツ 『ジョン・テラーの生涯』360, 362
11. M・D・ビール, *A History of Southeastern Idaho* 『アイダホ南東部の歴史』(Caldwell, Idaho: Caxton Printers, 1942), 86, 312 - 313
12. ロバーツ 『ジョン・テラーの生涯』349 - 351参照
13. Conference Report 『大会報告』1941年4月4日, 4 - 5で引用
14. ボール・トーマス・スミス “John Taylor” 『ジョン・テラー』*Presidents of the Church* 『教会大管長』レオナード・J・アリントン編 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1986), 110 - 111で引用
15. “The Murder of Joseph Standing” *Deseret News* 「ジョセフ・スタンディング殺害事件」『デゼレトニュース』1879年8月6日付, 428 - 429; “The Funeral Services of Elder Joseph Standing” 『ジョセフ・スタンディング長老の葬儀』『デゼレトニュース』1879年8月6日付, 429参照
16. B・H・ロバーツ 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史概史 第1世紀』6:86 - 93; “Death of James Condor” 『ジェームズ・コンドールの死』『インブルーメント・エラ』1911年10月号, 1107 - 1108参照
17. B・H・ロバーツ 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史概史 第1世紀』6:116 - 121; “Homicide at Parowan” 『パロワンにおける殺人』『デゼレトニュース』1886年12月22日付, 777参照

# 和解の時代

年表	重要な出来事
1888.5	マンタイ神殿奉獻
1889.4.7	ウィルフォード・ウッドラフ、大管長として支持される
1890.9.24	ウィルフォード・ウッドラフ大管長、「宣言」を発表する
1893.4.6	ソルトレーク神殿奉獻
1894	ユタ系図協会設立
1896.1.4	ユタが州に昇格する
1897.7.24	聖徒のソルトレーク盆地到着50周年を祝う
1898.9.2	ウィルフォード・ウッドラフ死去



ジョン・テラー大管長は1887年に他界した。それまでの10年間は激動と迫害の連続だった。これからの10年間は和解の時代である。ウィルフォード・ウッドラフが教会の大管長に就任し、多妻結婚反対運動は終焉を告げ、ユタが州に昇格し、ソルトレーク神殿がついに完成して奉獻された。こうして、末日聖徒は大きな希望を胸に抱いて新しい世紀を迎えることになる。

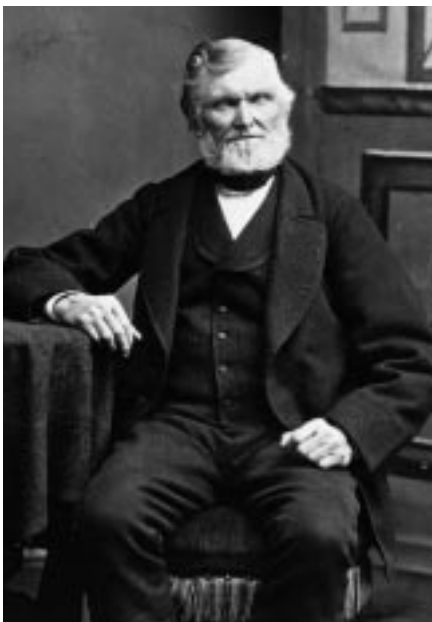
## ウィルフォード・ウッドラフが導く教会

「地下潜伏」の期間中、十二使徒定員会会長のウィルフォード・ウッドラフは、セントジョージとその周辺地域で流浪の生活を続けていた。探索する合衆国執行官の手から彼を守ったのは地域の友人たちである。ウッドラフ長老は、テラー大管長の病気が回復する見込みのない状態にまで悪化したことをジョージ・Q・キャンノン副管長から知らされたとき、直ちにソルトレーク・シティーに向かって出発した。道中でテラー大管長の死去を知らされたウィルフォード・ウッドラフは日記に次のように記している。

「末日聖徒イエス・キリスト教会大管長がまた、もう一人次の世に召された。ジョン・テラー大管長は2度殉教している。預言者ジョセフとハイラム・スミスがカーセージの監獄で殺害されたとき、テラー長老は4発の弾丸を浴びて、自らの血を殉教者ジョセフの血に重ねた。それは1844年のことであった。そして今、1887年... テラー大管長は自らが信じる宗教のゆえに、合衆国官吏に追われて束縛と苦難に満ちた逃避生活を強いられたまま、命を落とした。.....」

ジョン・テラー大管長が本日8時5分前に死去したことによって、末日聖徒イエス・キリスト教会の責任と教会に対する配慮、これらすべてがわたしの両肩に負わされた。教会の大管長として、あるいは大管長会不在の際の教会の管理役員である十二使徒会会長として、わたしはこれまでの人生で一度たりとも望んだことのない非常に特別な立場に立たされている。しかし、神の御心によって、この責任がわたしの頭上に置かれた。<sup>1</sup>

このときすでに80歳の高齢に達していたウィルフォード・ウッドラフは、1833年故郷のコネチカットにおいて教会に加入した。1834年にシオンの陣営でジョセフ・スミスに合流し、その後5年間伝道活動に専念し、多くの実りを得た。ウッドラフ長老は1839年に十二使徒定員会会員に聖任されると、同僚の使徒とともに英国へ渡り、驚くべき成功を収めた。60年以上にわたってこつこつと書きつづった彼の日記は、教会歴史を理解するうえでの貴重な資料となっている。ウッドラフ長老は生者と死者の救いのために、生涯を通じて力のかぎり働き続けた。



ウィルフォード・ウッドラフ (1807 - 1898年)

## 時満ちる時代の教会歴史

ウッドラフ会長はジョン・テラーの葬儀が行われている間ソルトレーク・シティーにいたが、逮捕される恐れがあったため葬儀には出席しなかった。葬儀が終了すると、ウッドラフ会長は直ちに十二使徒と会い、教会の指導に着手したが、引き続き公の場に姿を見せることはしなかった。やがて、1887年10月9日、ウッドラフ会長はロレンゾ・スノーとフランクリン・D・リチャーズを伴ってタバナクルに入り、総大会の午後の部会に出席した。自分たちの指導者を認めた聖徒は拍手をもって迎えた。ウッドラフ会長は説教を終えると、逮捕を避けるために閉会の賛美歌の前に退場した。

政府による撲滅運動は決して終わったわけではなかった。その後の数か月間、ウッドラフ会長はしばしば他の十二使徒、特にテラー大管長と非常に近い間柄にあったジョージ・Q・キャノンらと相談したうえで、自宅でひっそりと教会の業務を処理した。ウッドラフ会長にとってはつらい日々であった。教会の資産は政府に没収されていた。その一方で、教会をだしにして私腹を肥やしていた人々がいた。

1888年の大きな出来事はマンタイ神殿の奉献である。マンタイ神殿は1877年、ブリガム・ヤング大管長により敷地の奉献と、<sup>くわ</sup>鋤入れ式が行われた。政府の撲滅運動により多少の遅れを来してはいたが、1888年の春には完成にこぎつけ、クリーム色の石灰石を外壁に持つ美しい神殿が姿を現した。ウッドラフ会長は次のように述べている。「最も美しい神殿であり、すばらしく仕上がっています。教会が組織されて以来、末日聖徒が建設したいかなる建物よりもぜいたくな建物です。」<sup>2</sup>

1888年5月17日、教会の指導者は非公開の奉献式を行うために新しい神殿に集まり、ウィルフォード・ウッドラフが奉献の祈りをささげた。後に彼は日記に次のように記している。「わたしは地上に生き長らえて、ロッキー山間において至高なる神にもう一つの神殿を奉献する特権に浴したことを神に感謝する。わたしは永遠の父なる神に祈る。わたしたちが神の聖なる御名に……完成したマンタイ神殿とその他すべての神殿をお守りくださるよう、そしてこれらの神殿が異邦人や敵の手に渡されて汚されることが決まれないように祈る。」<sup>3</sup> 5月21日から23日まで行われた公開奉献式はロレンゾ・スノー長老が執行し、ウッドラフ会長が先にささげた祈りを朗読した。ダニエル・H・ウエルズがマンタイ神殿の初代神殿長に任命された。

ジョン・テラーの死後2年を経て、大管長会が再び組織された。1889年4月の総大会において聖会が開催され、ウッドラフ会長が教会の第4代大管長として支持された。テラー大管長の副管長であったジョージ・Q・キャノンとジョセフ・F・スミスが再び副管長として支持を受けた。

## エドマンズ - タッカー法と国政

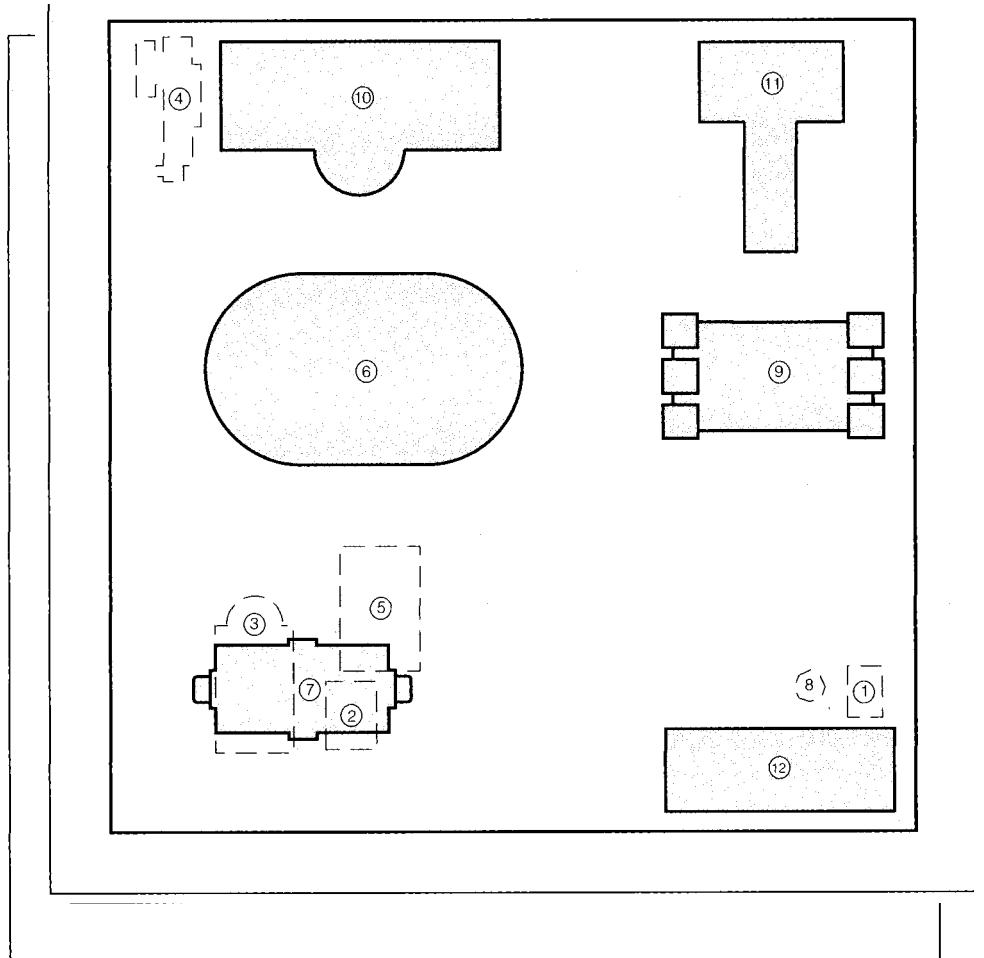
1887年から1890年にかけての末日聖徒と合衆国政府および国民の間関係は相変わらず悪化していた。ウッドラフ大管長はこの件について1889年の大晦日<sup>おおみそか</sup>の日付で次のように記している。「1889年も間もなく暮れようとしている。国民が総力を挙げてシオンに敵対し、聖徒に対して戦いを挑むであろうと語った預言者ジョセフ・スミスの言葉が成就しつつある。今日ほど、国中が聖徒に対する虚言で満ちた時代はかつてなかった。」<sup>4</sup>



## 和解の時代

### テンプルスクウェアの建物

1. 旧簡易集会所。この簡易集会所は1847年の夏、12.2メートル×8.5メートルの敷地に建設された。垂直の柱を立て、先端部分に柱を水平に渡し、それを縛りつけた。垂直の柱に対して大枝を十文字にくくりつけて日よけにしている。
2. 簡易集会所。これは1848年に作られた規模の大きい簡易集会所である。木製の座席と集会所の一方の端に壇がしつらえてあった。
3. 旧タバナクル。1851年から建築が始まったこの建物は30.2メートル×18.9メートルの広さを持つ。日干しれんが造りの建物で、南北に長方形をしており、2,500席を有していた。アッセンブリーホールを建築するため1870年に取り壊された。
4. エンダウメントハウス。1855年5月にヒーバー・C・キンボールにより奉獻された。1889年に取り壊されている。
5. 大簡易集会所。エンダウメントハウスの建築中に建設された。この大簡易集会所は総大会に使用され、後にタバナクル建設時には作業場として使用された。
6. タバナクル。1863年に建築を開始した。1875年10月にジョン・テラー会長により奉獻された。
7. アッセンブリーホール。1877年に建築を開始し、1880年に完成した。1882年にジョセフ・F・スミスにより奉獻された。
8. 最初の案内所。八角形の小規模な建物で直径約6メートル。1902年8月4日にオープンした。
9. ソルトレーク神殿。1853年ブリガム・ヤングによって工事が開始され、1893年4月6日、ウィルフォード・ウッドラフ大管長により奉獻された。
10. 訪問者センター北館。1963年3月7日デビッド・O・マッケイ大管長により奉獻された。
11. 神殿別館。1966年3月21日に完成した。
12. 訪問者センター南館。1978年6月1日スペンサー・W・キンボール大管長により奉獻された。



1887年に制定されたエドマンズ・タッカー法には、政治的および経済的団体としての教会を抹殺することを意図した規定が含まれていた。この法律によって末日聖徒イエス・キリスト教会の宗教法人格は剥奪され、5万ドルを超えるすべての資産は政府に没収されることになった。政府官吏は直ちに教会資産の押収に入った。例を挙げると、テンプルスクウェア内の各種建造物ならびに教会の事務所は政府の管理下に置かれ、教会は政府から借用するという形が取られた。政府はヨーロッパ人改宗者の流入を阻止するために、移民代理業務を行う主要な組織であった永続的移住基金を解体させた。公民権を奪われた聖徒は日増しに増えていった。教育施設は準州最高裁判所が任命した連邦職員の管理下に置かれた。合衆国執行官は以前より多くの聖徒を逮捕すると間髪を入れずに実刑判決を下し、刑務所に送った。ジョージ・Q・キャンノン副管長も刑務所に送られた一人だった。

逮捕や投獄によって家族が大きな打撃を受けたのは事実だが、教会にとって最大の問題は、神殿の建設、伝道活動の推進、印刷物の発行、聖徒の福祉のために必要な資金を獲得し、保持する手段が封じ込められたことであった。教会指導者は、エドマンズ・タッカー法による教会財産の没収が憲法に違反していると主張して、合衆国最高裁判所に上告し、審理を受けるまでにこぎつけた。しかし、1890年5月に合衆国最高裁判所は、エドマンズ・タッカー法に基づく政府の行為をすべて合憲とする決定を過半数で採択した。この決定に聖徒は期待を裏切られたが、さりとて切迫した

## 時満ちる時代の教会歴史

教会の経済的崩壊を食い止める別の手段も見当たらない状態だった。

公民権の剥奪は次第に教会を窮地に追い込んでいった。エドマンズ・タッカー法には、多妻結婚で有罪が確定した者、多妻結婚禁止法を守ることに同意しない者から市民権を剥奪する規定が設けられていた。1890年までに約1万2,000人のユタ市民がこの規定の適用を受けて公民権を奪われている。南東部に聖徒の定住地が幾つかあったアイダホの州議会では、有権者に対して、多妻結婚を信奉する教会に属していないことを宣誓させ、宣誓を拒んだ教会員全員から市民権を剥奪する法律を実施した。1890年2月、合衆国最高裁判所はアイダホにおけるこの宣誓による選別方式を合憲と判断している。この決定に勢いを得たユタの聖徒敵対者は、ワシントンD.C.に代表団を派遣し、同様の宣誓をユタの市民に実施するため、議員に対して賛成するよう圧力をかけ始めた。こうして、カロム・ストラブル法案が起草された。1890年の春までには議会通过しそうな勢いだった。この法律が制定されれば、国内のあらゆる教会員が市民としての基本的人権を剥奪されることになる。

この苦境の間も、教会には首都ワシントンD.C.で教会を擁護するための活動を展開した人々がいた。ユタ選出の合衆国議会代議士ジョン・T・ケイン、元副管長で鉄道事業家のジョン・W・ヤング、教会の主席顧問弁護士でフランクリン・D・リチャーズ長老の息子フランクリン・S・リチャーズ、非教会員のジョージ・ティクナー・カーチスなどである。時には、大管長会のジョージ・Q・キャノン、ジョセフ・F・スミスその他教会の幹部もワシントンD.C.の政治家に働きかけることもあった。彼らは特にユタの州昇格問題に力を入れていた。グローバー・クリーブランド大統領と民主党議員は本案件に対して合意する意向だったが、1888年の総選挙において共和党に政権を奪われてしまったため、ユタの州昇格は実現するに至らなかった。

ユタでは、多くの教会員が選挙権を剥奪されたため、自由党が台頭してきた。自由党の政治運動は、連邦政府官吏の動きと同様に過激だった。自由党は投票に不正な細工を加えて、1889年にオグデン市を支配する権力を得た。次の標的にしたのは、1890年2月に選挙が予定されているソルトレーク・シティーだった。合衆国判事は、移民して来た末日聖徒には合衆国市民権を認めない、すなわち投票権を与えないという決定を下していたため、非教会員に有利な展開が予想された。また多くの異邦人（非教会員）戸籍本署長官は、教会員の有権者登録を不正に拒否していた。

教会指導者は、モルモンが合衆国に対して忠誠を尽くしていないという訴えが事実無根であることを政府官吏に納得させようとしたが失敗に終わっていた。ジョセフ・スミスの生誕記念日に当たる1889年12月23日の日曜日、教会員は呼びかけに応じて、この重大な局面に全能の神の助けを求めて断食した。1890年1月、教会の政治組織である人民党は、党の候補者への支持を取り付けるべく活発な選挙運動を展開した。しかしながら、2月に行われた選挙でソルトレーク・シティーの支配権を握ったのはモルモンではなかった。

選挙での敗北と合衆国最高裁判所の裁定により一層の窮地に立たされた教会指導者は、1890年の春から、ワシントンD.C.において本格的に有力者を探し始めた。過去40年間にわたって、民主党は共和党よりも教会に対して好意的であった。しかし、現在は共和党が実権を握っているため、教会としては政府の方針を転換させ、ユタ

## 和解の時代

における悲惨な状態を解消するために、どうしても共和党内に教会の擁護者を見つけなければならなかった。カリフォルニアの著名な事業家でありロビイストであったアイザック・トランボは、長年にわたって教会に対して好意的であった。大管長会はこのアイザック・トランボを通じて、カリフォルニア州選出の上院議員レランド・スタンフォード、1888年共和党全国大会議長であったモリス・M・エステイ、共和党全国委員会委員長のジェームズ・S・クラークソンをはじめとする数名の共和党議員との間で密接な関係を築くことに成功した。この4人の有力者は1890年に展開された、聖徒たちのロビー活動を支援している。<sup>5</sup>

ジョージ・Q・キャノン副管長は1890年の春と夏に2度ワシントンD.C.へ赴いている。そこで共和党の有力議員数名から聖徒への協力を取り付けた。数年前キャノン長老がユタ準州選出の合衆国議会代議員であったときに味方してくれた有力者、ジェームズ・G・ブレイン国務長官もその一人である。キャノン副管長は6月にユタへ戻ると、長い間、闇の中に閉じこめられていたユタに光がさしてきたと報告している。

### 「宣言」

1890年7月にソルトレーク・シティーの学校区役員選挙が実施されたが、おびただしい数の末日聖徒が投票を拒否されたため、モルモン反対政党が勝利を収めた。こうして、反対政党が準州首都における学校教育の実権を握ることになった。さらに7月下旬に最高裁判所は、多妻結婚の家庭に生まれた子供は父親の財産を相続することができないとする裁定を下した。8月の第1週にモルモン反対政党は、ソルトレーク郡とウィーバー郡におけるほとんどの公職選挙で勝利を収めてしまった。そしてついに、ユタを担当する合衆国検事は教会の資産、特にセントジョージ、ローガン、マンタイ、ソルトレーク・シティーの神殿が合衆国議会で規定した没収財産に含まれるかどうかの調査を開始したとの情報が、教会指導者のもとに寄せられた。ウッドラフ大管長が合衆国政府からの確認を入手したのは8月末のことであった。それによると、1888年に交わした合意によって政府は神殿には手を着けないという約束だったにもかかわらず、この約束を無視して没収する方向に傾いていた。

さらに、大管長会の3名が多妻結婚に関して法廷で証言を求める召喚状を受けることになっているという情報を入手したウッドラフ大管長は、法廷対決を避ける方法を探すためにカリフォルニアへ赴いた。カリフォルニアの政治指導者と会見した結果、できる限りの影響力を行使してくれるという約束を取り付けた。しかし、彼らの支援をもってしても、聖徒の間で実施されている多妻結婚を根絶しようとする力には抗し切れない状況であることは明らかだった。

ウッドラフ大管長はソルトレーク・シティーに戻ると、その1週間、長時間にわたって苦悩し、祈り、副管長たちと話し合った結果、「当面教会を救うため」<sup>6</sup>の行動をとる準備ができたという日記に記している。

もし多妻結婚をやめなかったとしたら、どのようになっていたかを主は啓示によってはっきりと示されたとウッドラフ大管長は後に語っている。「すべての神殿の没収と損失、生者と死者のためのそこでのすべての儀式の中止、大管長会と十二使徒



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

アイザック・トランボ(1858 - 1912年)はネバダで生まれたが、ソルトレーク・シティーで成長した。母親は教会員だったが、アイザックは終生、改宗しなかった。

アイザックはカリフォルニアに移り、そこで実業家として成功した。カリフォルニア沿岸警備隊大佐でもあった。10年以上にわたりユタの州昇格に尽力した。ユタの人々の夢がかなえられたのは、アイザックの政界への働きかけによるところが大きい。

## 時満ちる時代の教会歴史

会と教会内の家族の長たちの投獄，ならびに人々の個人財産の没収という代価を求められながら，多妻結婚を行う努力を続けることか。（これらすべてによって，その行為はおのずと中止されるでしょう。）それとも，この原則を固く守ることによってこれまで行ってきたことを行い，苦しんだ後に，その行為をやめて法律に従い，そうすることによって，預言者たちと使徒たちと父親たちを家に残して，彼らが人々を教え，教会の務めを果たせるようにし，また神殿も聖徒たちの手に残して，彼らが生者と死者のために福音の儀式に携われるようにすることか。」（公式の宣言一，「宣言」に関するウィルフォード・ウッドラフ大管長の三つの説教からの抜粋）

1890年9月24日の朝，大管長は執務室に入ると，ジョン・R・ワインダー監督とジョージ・Q・キャノン副管長に，前の晩あまり眠れなかったことを打ち明けた。大管長は「教会が現在置かれている状況で何をなすべきかについて一晩中，主とともに苦悩した。そして数枚の紙を机の上に置くと、『これがその結果です』と言った。後にわずかな変更が加えられたが，そこに書かれていたのが『宣言』として知られているそのものであった。」そして大管長は自らが記した書類を集まった幹部に見せた。幹部の兄弟たちがそれを承認し，公表する準備をした後，ウッドラフ大管長は，主が大管長に何をなすべきかを明らかにされ，またそれが義にかなうものであることを示されたと言明した。当時「宣言」と呼ばれていたこの「公式の宣言」において，ウッドラフ大管長は，教会はもはや多妻結婚を教えることをせず，多妻結婚の実施をいかなる人にも許すことはないと言明した。また，大管長自身が多妻結婚を禁じる国の法律を守ること，さらに教会員も同様に行うよう大管長としての影響力を行使することを表明した。結びに当たって次のように記している。「そしてわたしは今，国の法律によって禁じられたいかなる結婚も，それを行うのを差し控えるようにというのが，末日聖徒に対するわたしの勧告である，と公に宣言するものである。」（公式の宣言一）

「宣言」は翌日の全国の新聞に掲載された。ユタ準州代議士であるジョン・T・ケインより原稿を受け取った『ワシントンポスト』（Washington Post）までもが，「宣言」を掲載した。

10月の第1週，ケイン代議士は大管長会に電報を送り，政府は教会の総大会で正式に承認を受けないかぎり公式な宣言とは認めないことを内務省長官から告げられたと知らせてきた。

1890年10月4日土曜日の朝から総大会が開催された。この総大会は3日に及んだ。大会3日目，ジョージ・Q・キャノン副管長は「宣言」について述べた後，ソルトレーク・シティ第18ワードのオーソン・F・ホイットニー監督に宣言文を読み上げるように要請した。次いでロレンゾ・スノー会長は，聖徒はウィルフォード・ウッドラフを末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長として，また結び固めの鍵を有する者として支持するのであれば，その理由に基づいて，大管長によって記された「宣言」を支持するよう，聖徒に提議した。提議は全会一致で承認された。

キャノン副管長は続いて，多妻結婚の教義について教会はどのように考えてきたかをかなり長い時間をかけて聖徒に説明した。教会は多妻結婚を，民に対して拘束力を有する神からの啓示として受け入れた。教会は多妻結婚の実施を禁じる1862年

## 和解の時代

合衆国法が憲法違反であり、信教の自由を保証する合衆国憲法修正第1条に違反していることを国家に対して証明する努力を続けた。さらに、教会のこの主張は、国内の最も優れた法律学者の間で支持されていた。また聖徒たちは、教会の1,300人以上の男性が戒めに従順であったがゆえに投獄されるという迫害に耐え抜いた。政府の指導者、また何人かの教会員から受けたあらゆる圧力に屈することなく、聖徒は多妻結婚の実施をやめるようにとの啓示を受けるまで、神の律法に従った。

キャノン副管長は最後に、「宣言」が神から与えられたものであること、中央幹部によって支持されたものであることを証した。もし、「宣言」のゆえに試しを受けることがあるならば、指導者がしたように、すなわち祈りによって天父のもとへ行き自分で証を得るようにと勧告した。<sup>8</sup>

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、自分に与えられた啓示について次のように証して、大会を閉じた。「すべてのイスラエルに対して申し上げます。わたしは、もし主の前に行って一心に祈りをささげていなかったら、この『宣言』を書くことができませんでした。わたしは同年代の人たちと同じように霊界へ行こうとしています。わたしは霊の父である天父の御顔を仰ぎ、ジョセフ・スミス、ブリガム・ヤング、ジョン・テーラーそして使徒たちと顔を合わせたいと思っています。わたしは神の目と諸天の前で喜ばれないようなことをするのであれば、むしろここから外へ出て行って銃で撃たれた方がよいと考えています。わたしはほかの人よりも別段優れた人生を送ったわけではありません。わたしはわたしが取った方法によって、人々にどのように思われるかを知らないわけではありませんでした。しかし、わたしは自分の義務を果たしました。わたしたちも国民であるこの国家は、この原則に関連して行ったことについて責任を負わなければなりません。」<sup>9</sup> ウッドラフ大管長は話を終えるに当たって、次のように約束している。「わたしはイスラエルに申し上げます。主はわたしであろうと、ほかのだれであろうと、この教会の大管長として立つ者が皆さんを誤った道へ導くのをお許しになることは決してありません。そうすることは、計画の中にはありません。それは神の御心の中にありません。もしわたしがそうしようとしたならば、主はわたしをこの職から退けられることでしょう。また、ほかのだれであろうと人の子らを神託や彼らの職務から誤った道に導こうとする者に、主はそのようにされるでしょう。」<sup>10</sup>

## 州昇格に向けての努力

「宣言」の公布は、末日聖徒と合衆国政府の間で和解を成立させるための重要な第一歩だった。新たな理解の時代が始まった。これまで多妻結婚に対して激しい反対行動をとっていた合衆国最高裁判所長官チャールズ・ゼインは法廷に引き出される末日聖徒に対して寛大な態度を示すようになった。こうして、複数の妻を持つ男性を逮捕するための捜索は終わりを告げた。また、多妻結婚をしていた夫が引き続き妻や子供の面倒を見ることについては、これ以上とがめだてをする必要はないとする考え方が世の中を支配するようになった。合衆国大統領ベンジャミン・ハリソンは相次ぐ嘆願書に動かされて、1890年以降多妻結婚を解消したすべてのモルモンの男性を条件付きで免罪とした。そして1894年9月にグローバー・クリーブランド大

## 時満ちる時代の教会歴史

統領は条件をさらに緩やかにして特赦を与えた。1893年、議会は没収した財産を教会に返還する法案を通過させた。こうしてユタを州に昇格させる運動を再開する舞台が整ったのである。しかし議会の承認を得るには、教会が政治への関与をやめる必要があった。また教会の政党である人民党を解散し、ユタの市民は国家政党を支持しなければならなかった。大管長会はこれらすべての議会決議を支持する意向を公式に表明した。かくして1891年6月、人民党は正式に解散し、さらにモルモン反対政党である自由党も多少の衝突はあったが、2年後に解散した。

しかし、ユタに民主党、共和党の二大政党を確立することは非常に困難であった。共和党は1861年以来、ほとんどの時期の政界を支配し、その間多妻結婚禁止法の制定を推進し、また制定後は強力に実施してきたという経緯があったため、聖徒たちの支持は民主党に傾いていた。さらに、1885年から1889年にかけて民主党が任命した官吏は聖徒に対して非常に寛大だったということもあった。教会員の政治に対する一般的な傾向とユタのほとんどの非教会員が共和党支持であったという事実から、民主党支持者が教会において事実上の政党と化してしまうことを、大管長会は何とか避けたいと考えていた。

ステーキ会長と監督が集められて、共和党に投票する末日聖徒の人数を増やすようにとの指示が与えられた。これはユタに二大政党が実質的に存在し得ることを国家政党の指導者に示すことがねらいだった。しかし、このような奨励に当たっても、聖徒は良識を用い、細心の注意を払わなければならないことが地元の指導者に指示された。すでに民主党を強く支持している教会員には支持政党の変更を要請する必要はなく、民主党に対する思い入れがさほどでない人には支持政党を変更するよう奨励した。この方法によって賛同者を得た共和党は、1892年までにユタの政界において有力な政党となっていた。

ユタの州昇格のための微妙な交渉が議会の上下両院で引き続き行われていた。ほとんどの議員が重要視していたのは、教会が多妻結婚の中止に真剣に取り組んでいること、また教会が政治に関与しないことの確証が得られるかどうかであった。非教会員であったアイザック・トランボとハイラム・B・クローソン監督が中心となっていた巧妙なロビー活動により、ついに1894年7月、ユタ州昇格条例が可決された。そして1894年7月から1895年まで、ユタ住民は教会員と非教会員が協力して州憲法を起草し、議会の承認を得た。この州憲法では特に多妻結婚の禁止と、政教分離がうたわれている。

こうして1896年1月6日、ユタは州に昇格し、初代州知事としてダニエル・H・ウエルズの子ヒーパー・M・ウエルズが就任した。

「和解」の時代全体を通じてやっかいだったのは、政治に関連した問題である。教会員の間で政治にからんだ様々な意見の不一致や誤解が生じていた。中央幹部の中にさえ、ある人は民主党の候補者や政策に賛同し、また別の人は共和党を支持するといった状態が見られた。1895年に、十二使徒定員会のモーゼス・サッチャー長老がユタの民主党上院議員候補に指名されてこれを受け、一方七十人第一評議会のB・H・ロバーツ長老も同じ党から立候補して選挙運動を展開するという事態が起きた。これは政治的な紛争にまで発展したため、何らかの対応が必要となった。二人

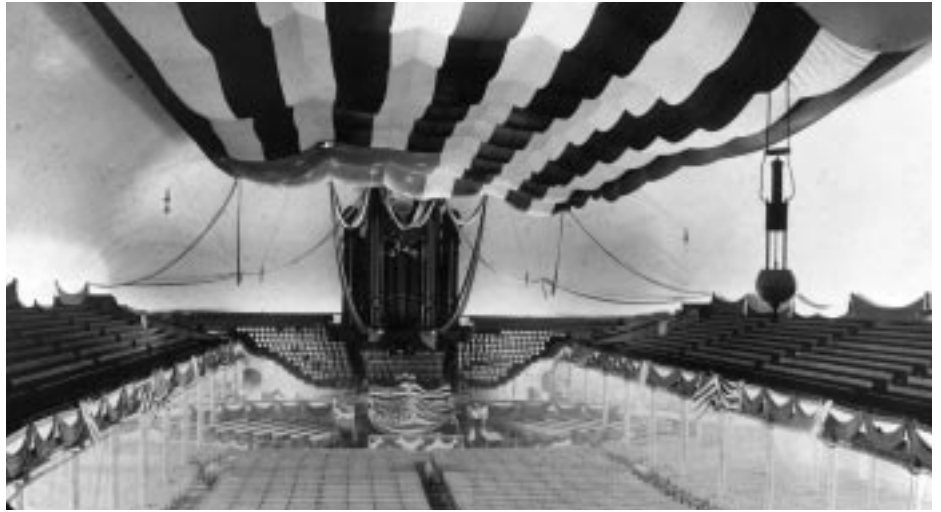


ヒーパー・M・ウエルズ(1859 - 1938年)は1895年に実施された総選挙により、36歳でユタ州の初代州知事に選ばれた。2期にわたって選出され、職務を全うしている。

## 和解の時代

グローバー・クリーブランド大統領は1896年1月4日土曜日、ユタが州として合衆国に加わることが承認されたことを宣言した。1月6日月曜日は祭日となった。ソルトレーク・タバナクルで開かれた祝典には、会場が満席になるほどの人々が詰めかけた。

タバナクルのドームが大旗で覆われている。タバナクルの正面には、中に電球が入った新しい星が飾られ、祝典の間中、点灯された。



は、教会指導者に相談せず指名を受けたため厳重な注意を受けたが、結局二人とも落選した。

1896年4月、中央幹部は教会の政治規則あるいは政治宣言として知られる正式声明を発表した。これによって教会は、政教分離を明確にすること、また個人の政治上の権利を尊重して、いかなる人に対しても教会の意向を押しつけたりはしないことを強調した。さらに、ユタ州における平和と安寧を維持するために、要職に就いている教会指導者は「事前に同僚および管理者の承認を得ることなく、自らに課せられた宗教上の義務の遂行を妨げられたり、遂行不能に陥ることが予測される政治的役職もしくは職業に就くことは」<sup>11</sup>望ましくないとされた。

B・H・ロバーツは当初、この文書によって自分の政治的権利が制限されると考え、署名を拒否した。しかし中央幹部の同僚と話し合い、同僚からの説得を受け、また自ら祈った後に、彼は署名した。一方モーゼス・サッチャーに対しても同様の努力が行われたが、声明文への署名を拒否した。このためモーゼス・サッチャーは十二使徒定員会から解任された。しかし、彼は教会員資格までも放棄することはなかった。政治宣言はこれ以降今日まで、中央幹部の政治活動を規制する基準となっている。

この和解の時代に実施されたもう一つの重要な出来事は、教会の財政上の方針が幾つか変更されたことである。教会は国内の通常の事業形態に合わせるために、教会が所有していたほとんどの事業を個人または私企業に売却するか、あるいは売却しない場合も、収益を追求する私企業と同様の事業方針に添って運営することにした。1890年代全体を通して、教会は政府による財産の一時的没収と1893年の全国的な金融破綻<sup>はたん</sup>によって、厳しい財政状態に立たされていた。

## ソルトレーク神殿と死者のための儀式

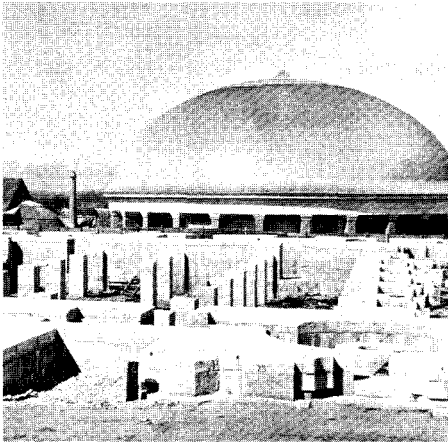
ブリガム・ヤング大管長は1853年4月6日にソルトレーク神殿の礎石を置く儀式を厳粛に執り行った。これは彼が示現によりソルトレーク神殿を見てから<sup>12</sup>、約6年後のことである。ヤング大管長は自分が神殿の完成まで生きることはないと考えていた。ヤング大管長は神殿の建設には最良の資材と技術だけを使用すべきだと言って譲ら



モーゼス・サッチャー（1842 - 1909年）は14歳で長老に聖任され、カリフォルニアで宣教師として働く召しを受けた。10年後に再び宣教師に召され、ヨーロッパに赴いている。

1879年十二使徒定員会に召されて、1896年まで同職にあった。サッチャー長老は使徒に聖任された数か月後に、ジョン・テラー大管長からメキシコで伝道を開始する責任を与えられた。

## 時満ちる時代の教会歴史



ソルトレーク神殿の建築風景。1873年，  
1882年，1892年



なかった。それから40年が過ぎた。その間の、数千人に上る末日聖徒の懸命な作業と献身が報われ、今やウィルフォード・ウッドラフ大管長は自身と教会を奉献式のために備える段階に入った。

ソルトレーク神殿の建設は幾度となく遅れを来していた。しかし1880年代後半から教会は総力を挙げて完成を目指した。1892年4月ウッドラフ大管長は総大会に合わせて「笠石を置く儀式」を実施するよう指示した。5万人を越す観衆（当時、最大の集会であった）がテンプルスクウェアと周辺の道路を埋める中、行進曲の演奏とタバナクル合唱団による特別の神殿聖歌が披露された。ジョセフ・F・スミス副管長が祈りをささげた後、合唱団が「われらに平和を与えたまえ」を歌った。時刻が正午に近づいたころ、ウッドラフ大管長は壇上に立ち、電気のボタンを押した。すると笠石が下がってきて、所定の位置に納まった。観衆は一斉に「ホサナ、ホサナ、神と子羊にホサナ、アーメン、アーメン、アーメン」と叫んだ。白いハンカチを振りながら、これを3度繰り返した。そして全員で「主のみたまは火のごと燃え」を歌った。

聖徒たちは翌月特別の断食を行い、断食によって蓄えた資金を大管長会に差し出した。礎石が置かれてから40周年に当たる1893年4月6日までに神殿を完成させるためであった。教会指導者は会員たちに対して、神殿の奉献式に参加する準備として、思いと生活を厳しく律し、政治に対する極端な思い入れを慎み、あらゆることについて清くなるよう強く求めた。

特異な建築様式を持つ神殿が次第にその全貌を現し始めると、ユタだけでなく全国の人々の好奇心を集めることになった。奉献に先立って行われた一般公開には、1,000人を越す政府官吏、著名な実業家が夫人を伴って押し寄せた。彼らに対する教会指導者の礼儀正しい対応によって、「宣言」以来改善されていた教会に対する印象がますます高まったのである。

1893年4月6日、奉献式が始まった。ウッドラフ大管長はこの日の出来事がかつて夢で見た預言の成就であることを実感していた。大管長は何年も前に夢の中で受けた訪れについて聖徒に話した。ブリガム・ヤングが神殿の鍵を渡し、主に奉献するようにと言ったのである。ウッドラフ大管長は最初の説教において、この日を境にサタン力は打ち破られ、聖徒を覆っていたサタン力は弱まり、福音のメッセー



## 和解の時代

ジに対する人々の関心が高まるであろうと預言した。<sup>13</sup>

奉献式の日程に合わせて神殿を完成させるために職人たちは昼夜を分かたず働いた。奉献式のセッションは、出席を望むすべてのふさわしい教会員が出席できるように、1日に2回行うことが決められていた。推薦状確認係としてすべてのセッションに出席したアンドリュー・ジェンソンは奉献式の初日の模様を次のように記している。「風の王子はここで行われていることに不快感を表すかのように、雹とみぞれ混じりのすさまじい嵐を起こしました。建物の中で栄光あふれる儀式が行われている間、外界ではユタの最長老にも記憶がないほどの嵐が咆哮を上げて暴れまくっていました。市の内外で幾つかの家屋が倒壊し、盆地の全域で大きな害を被ったのです。」<sup>14</sup> 嵐が吹き荒れる天候ではあったが、奉献式の最初のセッションとその後22日間にわたって行われたセッションには愛と一致の精神がみなぎっていた。こうして合計7万5,000人以上の人々が出席した。日曜学校の子供たちも特別セッションに招待されている。

預言者は日記にこう記している。「神の御霊と力がわたしたちのうえにとどまった。預言と啓示の霊がわたしたちのうえにあり、人々の心が和らげられ、多くの事柄がわたしたちの前に明らかにされた。」<sup>15</sup> ある人たちは天使を目撃し、またある人たちは過去の大管長やすでに世を去った使徒たちを見た。<sup>16</sup> プロボから訪れたエマ・ベネットは神殿の中で男の子を出産するという異例の出来事も起きた。1週間後にこの子は神殿でジョセフ・F・スミス副管長から祝福を受け、ジョセフ・テンプル（神殿）・ベネットと命名された。<sup>17</sup>

奉献式にテーマがあったとしたら、それは一致だった。説教壇に立った人々は主の羊の群れとして一つとなることの大切さを繰り返し述べた。教会への激しい攻撃、モルモンの敵対者による法律の制定、特定の政党を熱狂的に支持する人々によって引き起こされた紛争などが渦巻く数十年を忍耐し生き抜いてきた聖徒たちは、平和と一致の時代がやがて来るであろうという期待に胸をふくらませた。聖徒たちは指導者であるなしにかかわらず全員が懸命に働いた。そして、心のわだかまりや悪感情を一切取り払って奉献式に出席できるよう断食し、祈った。彼らはそうした霊と心の準備を成し遂げた。教会は今や、過去のいかなる時代よりも一致しているという言葉が説教の随所で聞かれた。

ソルトレーク神殿は様々な意味で教会のシンボルとなった。40年間にわたる犠牲と労働、さらには教会が入手できた最高の技術の結晶として、一つの建物が完成したのである。初期の教会指導者は神殿の内壁を美しく飾るために、末日聖徒の芸術家たちを芸術宣教師としてフランスへ派遣し、世界最高の芸術家のもとで勉強させた。聖徒たちは今や自分たちの苦勞と努力が無駄でなかったこと、「主の家の山」が「もろもろの山のかしらとして」立てられたことを確信した。

ウッドラフ大管長は、死者の救いにかかわる業を推進するという自らの望みの実現に向けて残りの生涯のほとんどをささげた。「幻を見る人」であったウッドラフ大管長は、この業について幾度となく夢を見ている。ウッドラフ大管長は、セントジョージ神殿で1877年にバプテスマと確認を受けたベンジャミン・フランクリンの訪れを受けている。1894年3月のことであった。この合衆国の著名な愛國の志士はウツ

## 時満ちる時代の教会歴史

ドラフ大管長に対して、神殿の他の儀式も施してくれるように頼んだ。大管長は直ちに神殿で儀式を施す手配をした。ベンジャミン・フランクリンの出現にウッドラフ大管長は喜びを覚えていた。それは、フランクリンは以前に執行された儀式を通してもたらされた祝福を少なくとも喜んでいることを確認できたからである。<sup>18</sup>

ウッドラフ大管長はまた、教会で長年にわたって実施されてきた「養子縁組」の儀式についても深く考え、祈っていた。来世で義人の家族に加えられたいという願望から、自分と家族をジョセフ・スミスやブリガム・ヤングといった教会の著名な指導者と結び固めるという習わしがあり、多くの教会員がこれを実施していた。1894年4月の総大会においてウッドラフ大管長はこの件に関して啓示を受けたことを発表した。この啓示はジョセフ・スミスが教えた原則と一致していることを慎重に言葉を選びながら指摘した。まず、ジョージ・Q・キャノン副管長に教義と聖約第128章9 - 21節を読んでもらった。ここで預言者ジョセフ・スミスは、人類家族の世代間には固いつながりが必要であると記している。

ウッドラフ大管長は、聖徒に対する主の御心を明らかにした。すなわち、聖徒は「今後、できるかぎりいにしえにさかのぼって先祖を探求し、先祖との結び固めを受け」、神殿の儀式を通して世代をつなぎ合わせなければならない。そして、もし現世で福音を聞いていれば受け入れたであろう人は日の栄えの王国に行くというジョセフ・スミスの教えを再度確認した後、このように付け加えている。「あなたがたの先祖もこのような人々であったと思います。福音を受け入れない人がたとえいるとしても、その数は非常に少ないでしょう。」<sup>19</sup>

この新しい啓示は衝撃を与えた。それまで聖徒は系図探求をほとんど行っていなかったため、結び固めの儀式はあまり執行されていなかった。預言者の強い勧めによって聖徒は系図をさかのぼって先祖を探す努力を始めるようになった。同じ年に教会はユタ系図協会を創設した。こうして、教会において最も永続性があり、同時に大きな成果がもたらされることを約束された事業が開始されたのである。

## 新しい方向

迫害が猛威を振るった時代にもそれに続く和解の時代にも、教会の前進は阻まれることがなかった。この間、伝道地域は広がり、定住地は拡大し、多くの新しいステークとワードが誕生し、補助組織プログラムが強化改善され、幾つかの教義が明確になり、教育に対する関心が高まり、大切な出来事を記念する祝典が幾つか実施された。

福音の普及に情熱を抱き続けてきたウッドラフ大管長は、合衆国を含む世界の国々に11の新しい伝道部を開設した。1890年代に召された宣教師の数は、前の10年間と比較して3倍近くになった。新しい動きの中心は南太平洋だった。1888年にサモア伝道部が正式に設立され、1891年にはトンガに宣教師が入った。同じころニュージーランドに向かった宣教師はマオリ族の間で成功を収めていた。1898年にはニュージーランド伝道部がオーストラリア伝道部から独立している。こうして南太平洋諸島からの移民が続々とシオンに入ってきた。ソルトレーク神殿の近くに住むことを希望してユタに移住したハワイの教会員のために、1889年ユタ西部のスカルパレ

## 和解の時代

ーにイオセパ（ハワイ語でジョセフ）入植地が開かれている。

すでに伝道事業が始まっていたヨーロッパの各伝道部でも宣教師は引き続き活動していた。移民する人もいたが、1887年に永続的移住基金が解体されたことが理由でその数は少なくなっていた。ユタへの移民が減少したもう一つの理由には、モルモンの入植地における経済的発展の余地が少なくなってきたということもある。いずれにしても、王国が再び動揺することのないように地域内に末日聖徒を集めるという所期の目的は達成されていた。移民する人たちの数は減少したとはいえ、ワイオミング西部、アリゾナ、ニューメキシコ、コロラド、カナダのアルバータに新たな入植地が開かれた。

補助組織は教会の発展に合わせて、プログラムを絶えず評価し、改善していた。1889年にソルトレーク・シティーにおいて扶助協会と初等協会役員のための年次大会が開催された。こうした大会を開くことによって、中央管理会会員は自ら出向いて行って直接指導する必要性が減少し、肉体的負担が大幅に軽減されることになった。ステーキの代表者は大会で中央の指導者から直接、指示を受け、地元へ持ち帰るのである。デゼレト日曜学校連盟は単独で年次大会を開いていたが、1893年からは各ステーキで日曜学校大会を開催することになった。日曜学校の指導者はまた、プロボのブリガム・ヤング・アカデミーとソルトレーク・シティーのLDSカレッジにおいて教師養成クラスを実施している。

都市の形成と発展によって農業以外の職業に従事する末日聖徒の人数が増えてきたため、これまで長年にわたり毎月の第1木曜日に行ってきた断食証会について考え直す必要が出てきた。大管長会は1896年、すでに英国の聖徒の間で実施されていた方式に倣い、断食日を毎月の第1日曜日とすることを指示した。

教会指導者はまた、長年にわたって行われてきた「再バプテスマ」の習慣を廃止した。それまで聖徒たちは、結婚をすとか、共同制度に入るとか、時には健康回復のため、自分の生涯にとって重要な出来事があると再度バプテスマを受けていた。そしてこれらの再バプテスマは会員記録に記入されていた。心からの悔い改めをする代わりに再バプテスマを受けるといふ教会員が出現するに及んで、大管長会は事態に目を向け始めた。1893年に、ソルトレーク神殿の奉献式に出席を希望する聖徒に対して再バプテスマを要求してはならないとする指示がステーキ会長に与えられたことはあったが、1897年に至って再バプテスマは完全に廃止された。ジョージ・Q・キャンノン副管長は次のように説明している。「バプテスマを何度も受けるのではなく、罪を悔い改めることが救いをもたらすのです。」<sup>20</sup>

教会はこの期間に公立学校に対する影響力を失っていたため、各ワードの集会所で放課後に宗教クラスを教えるプログラムを設けた。こうして、政教分離を規定する法律に違反せずに宗教教育を実施することができるようになった。1888年ウッドラフ大管長は、教会内の全教育事業を監督するために教会教育管理部の設置を指示した。1888年から1891年までの間に、ユタ、アイダホ、アリゾナ、カナダ、メキシコの大きな定住地で30以上のアカデミーが発足した。これらのアカデミーでは、伝統工芸、職業技術ならびに宗教教育を中心にした中等教育が実施されていた。最大のアカデミーがブリガム・ヤング・アカデミーで、後のブリガム・ヤング大学である。

## 時満ちる時代の教会歴史

1897年には二つの重要な記念祝典が行われた。一つは教会員が心から尊敬する預言者、ウィルフォード・ウッドラフ大管長の90回目の誕生日であった。誕生日の前日に当たる1897年2月28日日曜日、美しく装飾を施されたタバナクルに1万人を超える日曜学校の子供たちが通路にあふれるほど詰めかけて大管長をたたえた。ウッドラフ大管長はいたく感激して、彼が10歳のときに日曜学校に通い、『新約聖書』から使徒や預言者について学んだときのことを子供たちに話している。彼は、『新約聖書』の時代の人々のように、いつの日か預言者や使徒に会えるようにと祈った。そして「預言者、族長、そしてイスラエルの民の息子、娘」である子供たちに対して、少年時代の幼い祈りでさえも何度もかなえられたことを証した。<sup>21</sup> 翌日、大管長の実際の誕生日には大人たちも集まって、預言者をたたえる祝典が再び行われた。教会を挙げて一人の指導者にこれほどの愛を表すのはまれなことであった。

1897年7月24日から始まる1週間は、聖徒がソルトレーク盆地に到着してから50年目に当たることを記念して、特別な「50年祭」を祝うことになった。この祝典は新しく州に昇格したユタを世界に向けて披露する初の機会となるため、随所に熱意と愛国心があふれる催しが行われた。祝典の最初のイベントは推定5万人を越す群衆の見守る中で行われた、ブリガム・ヤングの記念碑の除幕式であった。この記念碑はサイラス・E・ダリン制作によるブロンズの彫像で、重量は20トンを超える。この彫像は今なおソルトレーク・シティーの中心部に置かれている。

最初の開拓者団の生き残りである24人が、タバナクルにおいて表彰を受け、金のメダルを贈られた。この中にはウィルフォード・ウッドラフ大管長も交じていた。豪華な飾り付けを施された馬車と、興奮して馬車の後を追う数千の子供たちによるパレード行進が街をにぎわした。ユタの農業、鉱業、産業の特産物も併せて展示された。

ブリガム・ヤングと初期の開拓者をたたえる開拓者記念碑の除幕式は、開拓者団がソルトレーク盆地に到着した1847年7月24日から数えて50周年を記念する祝典において行われた。祝典は1897年7月20日から4日間にわたって行われた。記念碑はユタ生まれのサイラス・E・ダリンの作である。奉獻されるまではテンブルスクウェアで展示された。現在はソルトレーク・シティーのメインストリートとサウステンブルストリートが交差する地点に置かれている。



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

## 和解の時代



アイザック・トランボ邸。サンフランシスコのオクタビアストリートとサッターストリートの交差する地点にある。ウッドラフ大管長は1898年9月2日にここで死亡した。

1898年の夏、ウッドラフ大管長は以前からの恒例で、キャノン副管長その他の人々を伴って、ユタの酷熱を逃れ、カリフォルニアで休暇を過ごした。しかしながら、預言者の健康状態は急激に悪化し、9月2日カリフォルニア州サンフランシスコのアイザック・トランボ宅で睡眠中に死亡した。数日後にソルトレーク・シティーで行われた葬儀の席で、ジョージ・Q・キャノン副管長は次のように述べている。「ウッドラフ大管長は神の人でした。彼は戦いを終えて、兄弟たちと交わるためまた立派に務めを果たした報いを受けるために、次の世に召されました。彼は天上人でした。彼とともにいると天国にいるようでした。わたしたちは大管長の旅立ちによって、偉大で善良な人、忍耐と誠をもって終わりまで堪え忍ぶ者に約束されたすべての祝福をことごとく受けるにふさわしい人との交わりを奪われたのです。」<sup>22</sup>

### 注

1. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1887年7月25日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー。マサイアス・F・カウリー, *Wilford Woodruff: History of His Life and Labors* 『ウィルフォード・ウッドラフの生涯と努力の歴史』(Salt Lake City: Bookcraft, 1964), 560も参照
2. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1888年5月15日
3. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1888年5月17日
4. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1889年12月31日
5. エドワード・リオ・ライマン, *Political Deliverance: The Mormons Quest for Utah Statehood* 『政治的解放: モルモンによるユタ州昇格の追求』(Urbana, Ill.: University of Illinois Press, 1986), 130 - 131参照
6. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1890年9月25日
7. ソルトレーク神殿歴史記録, 1893 - 1922年, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 71で引用
8. *Millennial Star* 『ミレニアルスター』1890年11月17日付, 737 - 738参照
9. 『ミレニアルスター』1890年11月24日付, 739
10. 『ミレニアルスター』1890年11月24日付, 741
11. “To the Saints” *The Deseret Weekly* 「聖徒へ」『デゼレトウィークリー』1896年4月11日付, 533
12. ブリガム・ヤング, *Journal of Discourses* 『説教集』1: 133参照
13. カウリー 『ウィルフォード・ウッドラフ』582 - 583参照
14. *Autobiography of Andrew Jensen* 『アンドリュー・ジェンソンの自叙伝』(Salt Lake City: Deseret News Press, 1938), 205
15. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1893年4月6日
16. ジョン・ニコルソン “Temple Manifestations” *The Contributor* 「神殿における現れ」『コントリビューター』1894年12月号, 116 - 118参照
17. ジェームズ・H・アンダーソン “The Salt Lake Temple” 「ソルトレーク神殿」『コントリビューター』1893年4月号, 301参照
18. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1894年3月19日; カウリー 『ウィルフォード・ウッドラフ』586 - 587参照
19. “The Law of Adoption” 「養子縁組に関する律法」『デゼレトウィークリー』1894年4月21日付, 541 - 543)
20. Conference Report 『大会報告』1897年10月, 68で引用
21. カウリー 『ウィルフォード・ウッドラフ』602。ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1897年2月28日も参照
22. カウリー 『ウィルフォード・ウッドラフ』633で引用

# 世紀の分岐点に立つ教会

年表	重要な出来事
1898春	最初の女性宣教師が任命される
1898.9.13	ロレンゾ・スノー、教会の第5代大管長に任命される
1899.5.17	スノー大管長、セントジョージにおいて什分の一を強調する啓示を受ける
1901.1.1	スノー大管長、「全世界へのあいさつ文」を公布する
1901.8	ヒーバー・J・グラント長老、日本における伝道活動を開始する

**グ**レートベースンでの安全を約束された教会員は、回復された教会はどのような問題に遭遇しようとも耐え得るだけの体力を身に付けているとの確信を持ち、来るべき20世紀に大きな期待を寄せていた。聖徒の信頼を集めていた指導者、ウィルフォード・ウッドラフの死去により、預言者の外套は、経験と霊性においてウィルフォード・ウッドラフに比肩する85歳のロレンゾ・スノーの肩にかけられた。かつて、これほどの高齢で大管長に召された人はいなかった。

## 預言者の準備

大管長に召されたときのロレンゾ・スノーは、身長167センチ、体重はわずか59キロしかなかった。ロレンゾ・スノーは、預言者ジョセフ・スミスと直接交わりがあった最後の中央幹部である。1900年11月にソルトレーク・タバナクルで行った説教の中で、スノー大管長は預言者ジョセフとの思い出を語っている。預言者の家を訪れて家族と談笑したり、時には一緒に食事をするなど、預言者ジョセフと個人的に話し合った経験を通して、預言者ジョセフが人々から大きな尊敬を集めていた誉れある、道義心の強い人物であったことを知ったと述べている。「主は、彼が神の預言者であることをわたしにはっきりとまた完全に示されました」と明言した。

スノー大管長は様々な経験の持ち主であり、それらの一つ一つが預言者の召しの準備となっている。ロレンゾは青年時代をオハイオで過ごしている。オベリン大学で教育を修めた後、学校の教師を職業とした。やがて預言者ジョセフ・スミスとの知遇を得、また姉のエライザの感化を受けて、ロレンゾがバプテスマを受けたのは1836年のことである。生涯を通じて偉大な宣教師であったスノー長老は、1837年にオハイオで最初の召しを受け、その後数年間ミズーリ、ケンタッキー、イリノイで福音を宣べ伝えた。1840年に、英国への伝道に召され、十二使徒の指示の下で働いた。十二使徒定員会に召されてからは、1849年から1851年にかけてイタリアとスイスにおける最初の伝道活動を管理した。1853年にはユタ北部のボックス・エルダー郡の入植地を管理する召しを受けた。スノー長老はヤング大管長をたたえて、その地域で最も大きな定住地をブリガムシティと名付けている。それから40年間、スノー長老は住まいをブリガムシティに置き、地域の聖徒からたいそう愛された。スノー長老は多くの消費組合事業を設立して、地域の繁栄をもたらすと同時に教会の名声を大いに高めている。

ロレンゾ・スノーが果たした最大の貢献の一つに、人はいつの日か神のようになるという教義の解説がある。彼は大管長として「人の偉大な行く末」というテーマで説教を行っている。青年時代に、預言者ジョセフ・スミスが神とイエス・キリストの訪れを受けたときの説教を本人から直接聞いて感銘を受けたこと、それから2年



ロレンゾ・スノー（1814 - 1901年）  
第5代大管長

## 時満ちる時代の教会歴史

半後に、祝福師の祝福を受け終えたジョセフ・スミス・シニアが、その場に居合わせたロレンゾに、あなたは神と同じような偉大な者になることができると言われたことを話し始めた。そしてさらに2年半後に、ロレンゾは聖文の意味について主に尋ねたときに、次の文章を書き留めるようにとの靈感を受けた。「人が現在あるがごとくに神もかつてあり、神が現在あられるごとくに人もなり得る。」「わたしはこのときほどはっきりと示されたことはかつてありませんでした<sup>2</sup>」とスノー大管長は述べた。スノー長老はジョセフ・スミスが亡くなる直前にこの教義を教えるのを聞いている。その後のスノー長老はこの教義をテーマに説教することが多かった。

### 大管長会の継承

ウィルフォード・ウッドラフは亡くなる6年ほど前に、十二使徒定員会会長であったロレンゾ・スノーに対して、教会指導者たちとの会合の後で、個人的に話したいと言った。ウッドラフ大管長は思いを込めて力強く言った。もしウッドラフ大管長がスノー会長よりも先に死ぬことがあれば、期間を置かずに、ジョージ・Q・キャンンとジョセフ・F・スミスを副管長に召して大管長会をすぐさま組織するようにというものだった。ウッドラフ大管長はこれを啓示と考えてほしいと伝えた。<sup>3</sup>

1898年にウッドラフ大管長の健康状態が悪化すると、スノー会長は毎晩のように大管長の家を訪れた。大管長が健康を取り戻すことを目的にカリフォルニアへ出発してから間もなく、スノー会長は自身が神殿長を務めているソルトレーク神殿に入った。そして、自分に教会を導く重責がかかることのないように、大管長の命を自分の命よりも延ばしていただきたい、と主に祈った。「しかし、スノー会長は主が命じられるのであれば、どのような義務であろうとも献身的に果たすことを主に約束した。」

個人的な用を足すためにスノー会長はブリガムシティーへ向かった。そして1989年9月2日、ウィルフォード・ウッドラフが亡くなったとの知らせがブリガムシティーに届いた。スノー会長はその夜のうちにソルトレーク・シティーに戻ると、再び神殿に入り、「主に心を注ぎ出した。そしてウッドラフ大管長の命を延ばしていただきたいとどれほど嘆願したかを主に訴えた。……『しかし、……あなたの御心が成りますように。……わたしは今あなたの導きと教えを頂くために、御前にわたし自身を差し出します。主よ、あなたはわたしに何をなすことをお望みかをお示ください。』

祈りを終えたスノー会長は、祈りの答え、すなわち主からの特別な現れがあるものと考えていた。そこで、待っていた。待って、待ち続けた。しかし、何の答えも、何の声も、何の訪れも、何の現れもなかった。」スノー会長は非常に落胆して部屋を出た。神殿内の廊下を歩いていると、スノー会長は目の前の空中に世の救い主が立っておられるのを見た。主はスノー会長がウッドラフ大管長の後継者になると言われた。そして、「大管長の死に際してそれまで慣例としてきた、一定の期間を置くことはもはや必要ないこと、直ちに教会の大管長会を再組織すべきことが<sup>4</sup>」再び指示された。

ウッドラフ大管長の葬儀を終えた翌日、使徒たちはソルトレーク神殿に集まった。選択の自由と全会一致の原則を尊重するスノー会長は、救い主と話したことについ

## 世紀の分岐点に立つ教会

ては触れずに、定員会会長の座から自発的に降りること、同僚の使徒の中で指名があればその人に指導権を譲ることを告げた。スノー会長の十二使徒定員会における長年の働き、また十二使徒定員会会長として10年近く発揮してきた優れた指導力については、十二使徒のだれもが認めるところであった。そのことによって、スノー会長は同僚の使徒たちから敬愛されていた。十二使徒は靈感を受けると直ちに、ロレンゾ・スノーを定員会の会長<sup>5</sup>として支持した。しばらくして、彼らは再び大管長事務室に集まった。そこでフランシス・M・ライマン長老は、ウッドラフ大管長が、自分が亡くなったら、期間を置かずすぐさま大管長会を再組織するようという指示を残していたことを伝えた。そして十二使徒会は短い間話し合った後に、ロレンゾ・スノーを教会の大管長として全会一致で支持した。

するとスノー大管長は、数日前に主から啓示を受けて、こうした手順を踏むように、またジョージ・Q・キャンノンとジョセフ・F・スミスを副管長として召すようにとの指示を受けていたことを幹部の兄弟たちに話した。「わたしはこのことをだれにも、まったくだれにも話しませんでした。わたしは兄弟たちの気持ちを知りたかったのです。また、主がわたしに現してくださったと同じ霊が皆さんに下ることを確かめたかったのです。わたしは、これが正しく、主の御心になっっていることを主が皆さんに示されると確信していました。」そして、ジョージ・Q・キャンノンとジョセフ・F・スミス（二人はブリガム・ヤング、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフの副管長を務めた）は全会一致で副管長に支持され、フランクリン・D・リチャーズが十二使徒定員会会長に召された。<sup>6</sup> 1か月後にブリガムシティーステーク会長であったラドガー・クローソンが十二使徒に召されて、十二使徒定員会に生じた空席を埋めた。

## 使徒の先任順位の明確化

十二使徒定員会会長のフランクリン・D・リチャーズ長老は1899年に亡くなったが、大管長会は後任の定員会会長を召さなかった。次の先任順位にあったジョージ・Q・キャンノンが大管長会の一員として働いていたからである。さて、キャンノン副管長の次位にブリガム・ヤング・ジュニアとジョセフ・F・スミスのいずれが座を占めるかについて、疑問が持ち上がっていた。両者とも十二使徒定員会に召されるかなり前にブリガム・ヤングによって使徒に聖任されていたからである。<sup>7</sup> 使徒職に聖任されたのはブリガム・ヤング・ジュニアが先だったが、十二使徒定員会に入ったのはジョセフ・F・スミスの方が先だった。

1900年4月5日ソルトレーク神殿で開かれた集会において、大管長会と十二使徒会は、使徒が十二使徒定員会に加わった時点を基準として、定員会におけるその使徒の先任順位を決めることを全会一致で決定した。さらに、大管長の死亡によって大管長会が解散したとき、十二使徒定員会に籍を有する使徒が副管長を務めていた場合、その使徒は十二使徒定員会における先任順位に基づく本来の地位に戻ることが規則として定められた。<sup>8</sup> こうして、ジョセフ・F・スミスはブリガム・ヤング・ジュニアよりも先任の十二使徒となった。これは1901年に、次の会長を選任する必要が生じることになるため、重要な決定となった。

	使徒に聖任	定員会に加入
ジョセフ・F・スミス	1866.7.1	1867.10.8
ブリガム・ヤング・ジュニア	1864.2.4	1868.10.9

ブリガム・ヤング・ジュニアが先に使徒職に聖任されたが、十二使徒定員会に加わったのはジョセフ・F・スミスが先であった。



### 教会の財政問題の解決

スノー大管長は聖任されてからわずか4日後に、教会が直面している重大な財政危機について話し合うため、大管長会と十二使徒定員会の特別集会を召集した。教会はエドマンズ・タッカー法の直接的な影響で約30万ドルの負債を抱えていた。教会はそのほかに、多妻結婚で投獄された人々の家族の生活を支援する費用、彼らの弁護士費用と裁判費用、さらに教会の裁判費用を支払わなければならなかった。以上に加えて、ソルトレーク神殿の建築費用、増大する一方の教育および福祉関連費用、各種産業の事業開始資金などが、負債を膨大な金額にふくらませていた。

教会の財政負担が増大する一方で、1880年代から什分の一による収入が減少していた。これは連邦政府が現金を押収してしまうため、会員たちは積極的に献金する気持ちになれなかったためである。さらに教会に対して憎しみを抱く人々が、教会員は什分の一を強制的に払わされているといううわさを文書や談話を通じて国中に広めた。これがきっかけとなって、什分の一の領収書に「選択の自由による献金」というただし書きが印刷されるようになったのである。こうして教会は1890年代に各種金融機関から莫大<sup>ばくだい</sup>な資金を借り入れざるを得ない状態に追い込まれ、年間の利子だけでも10万ドルを支払っていた。「1898年7月現在で、教会は銀行からの融資残が93万5,000ドル（半分以上がユタ州以外の銀行からの借り入れであった）、ソルトレーク・シティー内の企業からの借り入れが10万ドル以上、末日聖徒の個人からの借り入れが20万ドル以上に上っていた。」<sup>9</sup>

ウッドラフ大管長が亡くなる前に150万ドルの融資を受けるために東部の金融業者との交渉に行っていたフランク・J・キャノンが大管長会から呼ばれ交渉経過の説明を求められた。この会合での報告に愕然<sup>がくぜん</sup>としたスノー大管長は、教会の財政問題について引き続き、調査し、考え、祈ることにした。大管長は、教会が多くの純然たる営利事業に資金を投入していることに重大な関心を抱いた。営利事業につき込んでいる資金の半分を福音を宣べ伝えるために使っていれば、もっと大きな成果を上げられたはずだという考えに達した。大管長は中央幹部に対して、教会は東部の金融業者からの融資を受けないこと、少なくともしばらくの間は出費を抑える方針を貫くことによって、できるだけ早く赤字から脱却することを通告した。この決定に基づいて、教会はデゼレト電報通信網会社、ユタ製糖会社、ユタ電力・鉄道会社、製塩所および鉱山の株などを手放した。

スノー大管長は、フランク・J・キャノンが交渉してきた150万ドルを借り入れるのでなく、年利6パーセントの6か月短期債券を発行して100万ドルを調達することを承認した。これらの手段を講じたにもかかわらず、1899年春までに、教会財政の複雑な問題を完全に解決できるような答えを見つけることはできなかった。

1899年4月総大会を終えたスノー大管長は、教会の財政問題を解決するために熱心に祈り、主から知恵を受ける必要があると強く感じた。しかし大管長の祈りに対する答えはすぐには与えられなかった。このとき、スノー大管長は他の中央幹部とともにユタ州南部のセントジョージと他の定住地を訪問しなければならないと強く感じていた。ジョセフ・F・スミス副管長を含む少なくとも16人の幹部が夫人とともに訪問することになった。当時ユタ州南部の定住地は厳しい干ばつに見舞われていた。

## 世紀の分岐点に立つ教会

1899年5月17日水曜日、セントジョージ・タバナクルで行われた大会の最初の部会で、スノー大管長は聖徒たちに対して次のように語った。「わたしたちがこの地を訪れているのは主が命じられたからです。しかし、いまだもってわたしたちが来た目的がはっきりしません。けれどもここに滞在している間に知らされるでしょう。」<sup>10</sup>

『デゼレトニュース』(Deseret News)に大会の様子を報告する特派員として同行した、大管長の息子であるリロイ・C・スノーは、そこで起こったことを回想して次のように述べている。「父は説教の途中で突然、絶句してしまいました。会場は水を打ったように静まりかえりました。わたしはそのときの、体全体がぞくとするような興奮を生涯忘れることがないと思います。そして、再び話し始めたときの父の声には張りがあり、神の靈感が父だけでなくすべての聴衆を包んでいると感じました。父の目は爛々と輝き、顔から光が出ているようでした。特別な力に満たされていました。そして、父は自分の前に繰り広げられた示現を、末日聖徒に対して明らかにしました。」<sup>11</sup>

スノー大管長は、聖徒が什分の一の律法をおろそかにしていること、教会員が完全で正直な什分の一を納めるならば教会が負債から解放される姿を目にしたと語った。さらに、聖徒が什分の一の納入をおろそかにしていることを主は怒っておられること、聖徒が什分の一を納めるならば、干ばつが取り去られて豊かな収穫を得ることを主が約束しておられると語った。

スノー大管長は大会終了後再び、教会の財政問題の解決策は什分の一の納入にあるという強い気持ちを覚えた。リーズ、シーダー・シティー、ビーバー、ジュアブ、その他ユタ南部の定住地において、スノー大管長はこの福音の原則について力強く説教した。ユタ中央部のニーフアイでは、スノー大管長は什分の一に関して受けた啓示を述べた後、「出席した全員が、主が大管長に与えられた啓示の特別の証人となるよう任命する」<sup>12</sup>という異例の発表を行った。

教会本部に戻ったスノー大管長は6月の相互発達協会大会において再び、什分の一について力強く述べた。そこでB・H・ロバーツ長老は、今提示された什分の一の教義を受け入れることを提議し、この提議は全会一致で採択された。スノー大管長は明らかに聖霊に満たされた様子で立ち上がり、「ここでこの約束を交わしたすべての人は、日の栄えの王国において救われるでしょう」<sup>13</sup>と宣言した。

すべてのステーキ大会において什分の一が説かれた。そして1年後、スノー大管長は、過去1年間に聖徒はその前の2年間の合計の2倍に相当する什分の一を納めたことを発表した。靈感によって開始されたプログラムはやがて1907年に債務の全額返済という結果をもたらしている。多くの聖徒たちは、教会を救うために天の窓が開かれただけでなく、この神聖な律法に従った人々が霊的にも物質的にも祝福を受けたことを証している。

スノー大管長は、教会資金の支出についてさらに厳しい制限を実施した。大管長は資金のすべての支払いを統制する計画を明らかにした。しかし財務の専門家たちは、什分の一を使用する権限は分散させることが望ましいと提案した。これに対してスノー大管長は、権限を一極に集中させることを意図しているのではなく、ただ主が命じておられるように支出の権限は大管長会にとどめておくべきであると関係者に述べた(教義と聖約120章参照)。



このセントジョージ・タバナクルにおいてスノー大管長は、教会の安定を図る方法として什分の一の納入に関する啓示を受け、什分の一を強調する説教を行った。

タバナクルは1863年6月に定礎式が行われ、1875年に完成した。1876年5月7日ブリガム・ヤング・ジュニアが奉獻の祈りをささげた。

## 時満ちる時代の教会歴史



一般にはあまり知られていないが、チャールズ・W・ペンローズ（1832 - 1925年）は注目すべき生涯を送っている。18歳のときに英国で改宗し、6か月後に同国での伝道に召された。それから、10年間にわたって英国で伝道を続けた。その間、22歳のときに有名な賛美歌「高き山よ」を作詞している。

家族とともに英国からユタへ移民した後、2度英国への伝道に召された。ユタにおいてペンローズ長老は、積極的に政治に関与し、新聞の執筆・編集を行い、教会歴史記録者補佐を務め、伝道用のパンフレット『生ける光が放つ光線』( *Rays of Living Light* ) を作成するなど教会の書物を数多く執筆した。

1904年チャールズ・W・ペンローズ長老は72歳で十二使徒定員会に召された。その2年後にヨーロッパ伝道部の部長として英国に戻っている。1911年ペンローズ長老はジョセフ・F・スミス大管長の第二副管長に召され、1921年にはヒーパー・J・グラント大管長の第一副管長に召されている。

スノー大管長は教会の大管長に支持されてから3か月後に、『デゼレトニュース』を再び教会の管理下に取り戻した。デゼレトニュース社は1892年からジョージ・Q・キャノンと彼の息子たちが教会から借り受け、新聞を発行していた。スノー大管長は、長年にわたって宣教師として働き、また新聞事業に豊かな経験を持つチャールズ・W・ペンローズを編集長として召した。こうして『デゼレトニュース』は再び教会の公式な情報伝達手段としての機能を果たすようになった。ペンローズ兄弟は、数年後に十二使徒定員会に召され、さらにその後大管長会の一員に召されている。

### 最初の女性宣教師の召し

1898年、中央青年女子相互発達協会管理会が中央青年男子相互発達協会の管理会を招いて開かれたレセプションにおいて、伝道事業における新しい方針が発表された。これら二つの組織の指導者に向けた話の中で、キャノン副管長は次のように発表した。「賢く分別のある女性数名を伝道地に召すことが決定されました。」<sup>14</sup> 過去にはルイーザ・バーンズ・ブラット姉妹、キャロライン・クロスビー姉妹などが、宣教師として働く夫に同行したことはあったが、教会は姉妹を主イエス・キリストの使節として正式に召し、任命したことはなかった。

大管長会の決定を促したのはエリザベス・クラリッジ・マッキューンである。1897年から1898年にかけての冬の間、家族とともにヨーロッパ旅行に出かけるに当たって、マッキューン姉妹は祝福をしてもらうためにロレンソ・スノー大管長を訪れた。スノー大管長は祝福の中で次のように言った。「あなたは天使のように清らかな心で福音の原則を説くことができるでしょう。」海外で多くの人々と福音について話し合ったときにこの祝福は文字どおりに成就した。このため、マッキューン姉妹は遠からず若い女性たちが伝道に召されるであろうと自分の娘に話している。<sup>15</sup> マッキューン姉妹は旅行から戻ると、ヨーロッパ中で人々に福音の原則を説いたときの経験をスノー大管長に話した。さらに、彼女が話したことがきっかけとなって、英国の親戚の何人かが教会に改宗したことも報告した。キャノン副管長が大管長会を代表して先の発表を行ったのはこの後間もなくのことである。

「末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師として正式に任命された最初の姉妹は、カリフォルニア伝道部の部長E・H・ナイの妻、ハリエット・マリア・ホースプール・ナイであった。彼女は1898年3月27日、十二使徒のプリガム・ヤング・ジュニアによりサンフランシスコにおいて任命された。

この直後に、プロボ第4ワードのジョセフ・B・キーラー監督より、ワードの二人の若い女性をヨーロッパの伝道に召す件について、ステーク会長会に問い合わせがあった。」その結果、ルーシー・ジェーン・プリムホールとアイネズ・ナイトが英国伝道部に専任宣教師として召された。<sup>16</sup> 二人の姉妹はそれぞれ十分な教育を受け、才能に恵まれた教員であり、福音の原則に関する知識も十分に身に付けていた。

姉妹宣教師が任地に到着し、伝道活動を始めると、『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』( *Young Woman's Journal* ) は二人の伝道活動に関する記事や二人から寄せられた手紙を数回にわたって掲載した。ジョージ・Q・キャノン副管長までもが「女性の宣教師」(“ Women as Missionaries ”) と題して、二人の働きを称賛する手紙を引用した記事を『ジュブナイル・インストラクター』( *Juvenile Instructor* ) に掲載し

## 世紀の分岐点に立つ教会



9人の子供を持つエリザベス・マッキューン（1852 - 1924年）は、長年にわたり扶助協会と中央青年女子相互発達協会管理会で働いた。またユタ系図協会の会長、神殿の儀式執行者、テンブルスクウェアの宣教師としても奉仕している。女性の権利を主張する運動にも活発に活動し、ロンドンとローマで開催された国際婦人大会に参加している。

た。この記事は後に『ミレニアルスター』（*Millennial Star*）<sup>17</sup>にも掲載されている。これらの姉妹宣教師は、戸別訪問によるちらし配り、街頭伝道、大勢の群衆を集めて集会を開くなどして熱心に伝道活動に従事した。モルモンに敵対する英国の新聞に中傷記事が掲載されることもあったが、魅力的であるばかりか知的なモルモン女性が力強く伝道する姿は、英国人の目を引くところとなった。

新聞に掲載された二人の手紙には次のように記されている。「わたしたちは街頭集会も数多く開いています。これまでのところ、何の妨害もなく、人々は熱心に聞いてくれます。多くの人々から家庭に招かれてユタやユタの人々、そして福音についてお話ししています。プリストルにはもうすでに何人かの親しい友人ができました。」<sup>18</sup> 伝道部内に姉妹が赴任してきたという情報は、二人の姉妹が出席することになった初めての伝道部の神権会が「宣教師集会」と改称されたことが示すように、伝道部内全域に知れ渡っていた。<sup>19</sup>

時には失礼なことを言われることもあったと手紙に記されているが、それらも姉妹たちにとっては貴重な経験となった。しかし、ほとんどの手紙には、長老たちからの手紙と同様に成功もあれば落胆もある宣教師の日常的な生活の様子が記されている。1899年1月、プリストルでモルモン反対グループが結成され、宣教師の活動を妨害し始めた。<sup>20</sup> 英国の他の地域でも回復された福音を宣べ伝える青年男女の活動を妨害する動きが見られるようになっていた。ナイト姉妹は手紙で次のように報告している。「いつも順風満帆ということはありません。暴漢に追われて交番に逃げ込んだり、侮辱する言葉を暴徒から浴びせられたり、敵対者からつばを吐きかけられたり、石を投げつけられたり、棒を振り上げられたりもします。けれどもわたしたちは喜んで御業に携わっています。」<sup>21</sup> こうしてアイネズ・ナイト姉妹とルーシー・ブリムホール姉妹は全世界の伝道部で雄々しく福音を宣言する大勢の女性の先駆けとなったのである。

1890年から1900年までの10年間に、宣教師数が倍増したという事実から、教会の伝道活動に対する熱意をうかがい知ることができる。その後も伝道部の数と宣教師の数は着実に増え続けていった。

ルーシー・ジェーン・ブリムホールとアマング・アイネズ・ナイトは独身女性として最初に宣教師に召された姉妹である。二人は1898年4月1日、英国で働く召しを受けた。

ブリムホール姉妹は1895年にブリガム・ヤング・アカデミーを卒業後、教員をしていた。ナイト姉妹とは仲の良い友達だった。アイネズ・ナイト姉妹はジェシ・ナイトの娘であり、また初期の教会歴史で有名なニューエル・ナイト、リディア・ナイトの孫娘であった。二人はヨーロッパ旅行を計画していたが、伝道に召されたため中止した。



### 20世紀への突入

世界中の人々が20世紀に新しい時代の到来を待ち望んだように、教会員も期待に胸をふくらませていた。スノー大管長は「全世界へのあいさつ文」(*Greeting to the World*)と題した宣言を作成して、教会はどのような世界を築こうとしているのかを明確にした。大管長は20世紀が「平和と偉大な進歩の時代となり、全世界で黄金律を実践する時代となるであろう。……恐ろしい戦争は過去の遺物にしなければならない。各国は相互に尊重し、あらゆる国が成長することを目指すべきである。一民族の繁栄や帝国の拡大ではなく、人類全体の福祉を研究しなければならない。世の専制者と国家の支配者よ、目を覚まして、来るべき平和と幸福と繁栄から放射される光が20世紀の朝を金色に染めていることに目を留めよ。……軍を解体せよ。戦争を想定した武器の製造ではなく産業の振興に力を注げ。人民の首からくびきを外せ」との希望を述べた。そして、神と御子と聖なる天使が人に語りかけられたこと、神は全人類に対して悔い改めて神のもとへ来るように招いておられることを証した。さらに、87歳になるスノー大管長は全世界の人々に天の祝福が降り、平和がもたらされるように願い求めて宣言を終えた。<sup>22</sup>

新しい年と新しい世紀を迎えるに当たり、1900年12月31日午後11時より、タバナクルにおいて特別礼拝が行われた。あの有名なパイプオルガンに電光文字で「歓迎、1901年、ユタ」と装飾を施したタバナクルには5,000人の聖徒が集まった。ソルトレークステーク会長アンガス・キャノンの司会によって進められた集会は敬虔な雰囲気にも包まれていた。多くの聴衆は教会がこれまでに成し遂げてきた成長と業績に思いをはせ、また大胆に20世紀に立ち向かう教会の姿を思い浮かべていたに違いない。1900年末現在で、教会は43のステーク、20の伝道部そしてステークと伝道部に967のワードと支部を擁していた。28万3,765人の会員はほとんどが西部の山間地域に住んでいた。セントジョージ、マンタイ、ローガン、ソルトレーク・シティーの4つの神殿で儀式が執行されていた。1900年には796人の宣教師が、世界の国々で福音を宣べ伝えるために任命されていた。<sup>23</sup>

宣教師に召される人数が増えてきたことに伴い、教会指導者は宣教師に十分な訓練を施す必要があると感じていた。このため1900年に、七十人第一評議会は教会教育部と協力して、プロボのブリガム・ヤング・アカデミー、ソルトレーク・シティーのLDS大学、ローガンのブリガム・ヤング・カレッジ、アリゾナ州サッチャーのLDSアカデミーにおいて宣教師訓練コースを開設することを決定した。ここで、宣教師候補者は6か月の教科課程で神学と宗教史を学び、聖文に基づく教え方の訓練を受けた。受講料は無料で、参加者の滞在費はステーク会長が負担することになっていた。

教会員は毎週日曜日の午後、2時間の聖餐会に出席していた。通常は安息日の午前中に開かれる日曜学校の後に、断食証会が毎月1回開かれていた。冬の間は青年男女の集いが週日、おおむね木曜日の夕べに開かれていた。扶助協会は火曜日の日中に、初等協会は水曜日の放課後に開かれていた。神権定員会は月曜日の夕べか日曜日の朝に開かれていた。しかし、ほとんどの教会員が農作業で忙しい夏の間は神権定員会は開かれなかった。

## 世紀の分岐点に立つ教会

地域宣教師訓練センター

場所	開設
ブラジル, サンパウロ	1977.11
ユタ州プロボ	1978.10
ニュージーランド, ハミルトン	1978.11
メキシコ, メキシコ・シティー	1979.1
日本, 東京	1979.5
チリ, サンチアゴ	1981.7
フィリピン, マニラ	1983.10
英国, ロンドン	1985.2
韓国, ソウル	1985.4
アルゼンチン, ブエノスアイレス	1986.2
グアテマラ, グアテマラ・シティー	1986.5
ペルー, リマ	1986.7
トンガ	1987.4
サモア	1987.9

1892年から年に1回、ステーク神権指導者の管理の下でワード大会が開かれるようになった。この大会で会員は指導者を支持する機会と、神権指導者から指導と霊的な励ましを受ける特権に浴した。多くのワードでは日曜学校の主催による野外プログラムを実施していた。会員たちはまず午前中に、用意したプログラムの発表会を行い、午後には子供たちのパーティーを開き、夜はダンスを踊った。また、毎年春になると各ワードでは年輩者のためのパーティーを催した。最大の呼び物は、華やかに装飾を施したホールで行う大晩餐会であった。

20世紀に入ってから、教会の若い女性のための正式な定期刊行物として『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』が登場した。この機関誌には、ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローのふるさと紹介、真理についての証を得る方法、少女が知っておくべき倫理などの記事のほか、使徒パウロの紹介、ヒーバー・J・グラントの回顧録なども掲載された。これらは、若い女性が福音に対する理解を深めるだけでなく、世界中の優れた文学に触れることを目的として、女性指導者が執筆した。また、若い女性はこの機関誌から、キルト作り、裁縫、ボタン穴かがりなどを学ぶこともできた。

1900年1月から『ジュブナイル・インストラクター』は、対象とする読者を全教会員に広げて、「わたしたちの指導者 使徒の生涯」(“Lives of Our Leaders - The Apostles”)と題する記事の連載を始め、教会の中央幹部の略歴を毎回エッセイ風に採り上げた。また、短編小説や「国々の歴史」(“History of the Nations”)というタイトルでアラスカ、ベルギー、アイルランドなどを紹介する記事もあった。ステークでは日曜学校大会が年に1度開かれた。この大会では中央管理会会員や中央幹部による報告や指導が行われたほか、子供たちのコーラスの発表、教授法改善のための現職教師訓練などが行われた。ステークの規模は大きく、例えばユタステークには49の日曜学校が組織され、1万1,000人の聖徒が登録されていた。

『コントリビューター』(Contributor)に代わって出版されることになった青年男子相互発達協会の機関誌『インプループメント・エラ』(Improvement Era)は、『モルモン書』の翻訳に関する記事、中央幹部の説教、他の教会の聖職者や反モルモン作家の攻撃に対する反論などを掲載していた。青年男女の組織は年次大会を開催して、数千名の青年を集めていた。この大会では、中央幹部による指導、ダンス、演劇のほかに、翌年度のプログラムの紹介などが行われた。

20世紀を迎える時点で、ユタは州に昇格し、教会は財政の安定を取り戻し、ほとんどの地域の聖徒はもはや暴徒から家を追い出される恐れを抱く必要もなかった。彼らは砂漠に花を咲かせた。そして、末日に関する預言の成就を待ち望んだ。

## 十二使徒の責任の明確化

20世紀の幕開けとともに、西部山間地域における開拓者時代が終わりを告げることがいっそう明白になってきたため、スノー大管長は全世界に出て行って福音を伝える必要性を強く感じていた。これを実施する責任は十二使徒定員会にあった。十二使徒会はスノー大管長の指示を受けて、伝道活動を展開する新しい地域の検討に入った。

1901年、ジョージ・Q・キャノン副管長は大管長会を代表して、日本に伝道部を開

## 時満ちる時代の教会歴史

設すると発表した。この発表を聞いていたヒーバー・J・グラント長老は非常に強い印象を受けた。それは、グラント長老自らが伝道部を管理するために召されることを告げる声が聞こえたと思われるほどのはっきりとしたものだった。25分後にキャノン副管長はグラント長老が選ばれて日本へ行くことを発表した。グラント長老は多額の負債を抱えており、借金の返済に追われてとても伝道に行けるような状態ではなかったが、それを言い訳にせず召しに従って行こうと決意していた。大管長会はグラント長老に1年間の猶予期間を与え、その間に私的な事柄を整理し、また伝道の準備をするように言った。

ヒーバーの財政状態と彼がどれほどの犠牲を強いられていたかをよく知っていたジョン・W・テラー長老は次のように預言している。「あなたは主の恵みにより、十分な金銭を手に入れて、経済的な束縛を解かれ自由になって日本へ行くでしょう。」グラント長老は直ちに家へ帰り、自分の経済的な問題を解決できるよう主に助けを求めて祈った。グラント長老の証によると、神の靈感により幾つかの巧みな手段が与えられて、またほかにも数々の祝福が与えられて、4か月で負債を完済することができた。<sup>24</sup> グラント長老は日本へ赴く同僚として、北部諸州伝道部の部長であったルイス・A・ケルチ、29歳のホラス・S・エンサイン、18歳のアルマ・O・テラーを召した。一行は開拓者記念日に当たる1901年7月24日にソルトレーク・シティーをたち、荒れ狂う太平洋を渡って8月12日に横浜港に到着した。

宣教師たちは横浜市に到着するとすぐさま行動を開始した。教会出版物の翻訳と出版をとりあえず手配し、長期的に住むことのできる家を探し始めた。ところが、一行が来日する情報をつかんだ他のキリスト教宗派の牧師たちは、教会に関する偽りの情報に惑わされていたため、日本に末日聖徒イエス・キリスト教会を定着させまいとして猛烈な敵対行為を展開した。

しかし、福音を宣べ伝えるという宣教師たちの決意はいささかも鈍ることがなかった。1901年9月21日、彼らは横浜市郊外の人里離れた森を見つけ、ひざまずいて、グラント長老が奉獻の祈りをささげた。グラント長老の舌は緩められ、御霊が力強くグラント長老を覆った。あまりにも強い力であったため、彼は後に、神の天使たちが近くにいた思いがしたと語っている。

グラント長老はまた、『偉大にしてかつ進歩国家である日本へのごあいさつ』を書いた。これは『モルモン』の宣教師がなぜ日本を訪れたかを簡単明瞭に説明したものであった。

『……私どもは皆様方が信じておられる真理やこれまで受けてこられた啓蒙の光を奪おうとして参ったのではなく、より偉大なる光、より豊かな真理、そしてより進んだ知識を携えて参りました。……』

私どもは神の権能によって、日本国民の皆様のために聖なる鍵によって天の王国の扉を開き〔ました〕。』」グラント長老は最後に「キリストのために働く僕」<sup>25</sup>と記して署名した。

グラント長老は日本中を旅行した後、他のキリスト教宗派からの偽りと憎しみのこもった攻撃に対抗するため、東京で最も有力な新聞であった『ジャパニメール』(Japan Mail) に連載記事を掲載し始めた。

グラント長老は2年間滞在してユタに戻ったが、他の宣教師は残った。テラー長



ヒーバー・J・グラント(1856-1945年)は23歳でトゥエラステークの会長に召された。2年後、26歳の誕生日を迎える直前に十二使徒定員会の一員に召された。それから19年後に日本において伝道活動を開始するために派遣された。

この写真は日本を奉獻した場所で撮影したものである。左から、ホラス・エンサイン、ルイス・A・ケルチ、ヒーバー・J・グラント。

## 世紀の分岐点に立つ教会

老は9年間滞在し、その間に『モルモン書』を日本語に翻訳した。日本政府は1890年代に国内に浸透しつつあった西欧化の風潮を阻止するために「日本人のための日本」という政策を打ち出していた。このため、末日聖徒をはじめキリスト教各宗派の伝道はほとんど成功していなかった。日本伝道部が最終的に閉鎖されたのは1924年のことである。後に日本における伝道活動は大きな成功を収めるが、それは1945年以降、第二次世界大戦終結後まで待たなければならない。

1901年にグラント長老が日本へたった後、大管長会と十二使徒定員会は南アメリカ、オーストリア帝国、ロシアに福音を伝えることを検討し始めた。中央アメリカにおける伝道の第一歩は、1901年に行われたメキシコにおける伝道の再開であった。アンモン・M・テニー長老がメキシコの幾つかの支部を再建することに成功した。しかし、この時期に同国では政治的な問題が続発したため、これ以上の進展はなかった。

この世における最後の数か月となった1901年の夏から初秋にかけて、スノー大管長は御霊の励ましと現実とのギャップに頭を悩ませていた。スノー大管長は、大管長会と十二使徒定員会の評議会において、主イエス・キリストの再臨までに地の国々に福音を宣べ伝える義務は使徒と七十人にあることをしばしば口にしていた。使徒と七十人の7人の会長が、本来地元の神権指導者がなすべき責任を果たしていたために、非常に多くの時間を取られていることを大管長は憂いていた。また、数週間悪質な風邪を引き、せきが止まらない状態が続いていたが、スノー大管長は10月の総大会でこの重要な件について説教をしたいと考えていた。

預言者は健康状態が優れなかったため大会の部会をすべて欠席していた。しかし1901年10月6日の日曜日の最後の部会で話すため、病気を押してタバナクルに姿を現した。そして公の席での最後の説教を行った。ジョセフ・F・スミス副管長は1か月後に次のように述べている。「大管長は明らかに弱っていました。しかし、大管長の思いがこの上なく清らかであり、大管長の口をついて出た言葉は力と自由がみなぎ

1901年に印刷された、ヒーバー・J・グラントによる「末日聖徒イエス・キリスト教会に関する声明」(“An Announcement Concerning the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints”)と題した最初の日本伝道用ちらし。日本語版は1903年に印刷されている。

ヒーバー・J・グラントの名刺。左上に教会名が印刷されている。





## 時満ちる時代の教会歴史

っていたことに、人々は注目しました。』<sup>26</sup>

スノー大管長はこの重要な説教で次のように説明している。「この教会は間もなく72周年を迎えます。わたしたちにはもはや青年時代に果たしたような働きは期待されていません。もっと偉大な、もっと大きな、もっと広範囲にわたる仕事を期待されているのです。」預言者は次いでステーク会長に対して、責任下にある聖徒たちを自分の家族のように考え、自分の息子や娘に対すると同じように聖徒の福祉に心を配るよう勧告した。さらに、「このような責任は使徒たちの肩には課せられていないのです。……主が神の息子、娘を昇栄に導き、地から邪悪を一掃し、義を打ち建てるには一つの系路があります。その系路が神権です。……使徒と七十人の責任は、全能者の定めたもうたところによると、世の人々の霊的福祉に関するものです。十二使徒と七十人はすべての人々に対する特別の証人なのです。』<sup>27</sup> 大管長会は十二使徒が本来の責任を果たすことができるように、ステークにおけるすべての管理責任から解任した。

スノー大管長が中央幹部と聖徒に与えた最後の指示について、ジョセフ・F・スミス副管長は次のように述べた。「わたしたちは十二使徒すなわち管理神権者の義務について言われたことを、主がわたしたち全員に語られた言葉として受け入れました。それは非常に明確であり、説得力があり、疑念の余地はまったくないものでした。残されたことがあるとすれば、それはただ一つ、熱心に働いて、わたしたちの手に求められているすべてのことを立派に成し遂げることです。』<sup>28</sup>

### 一つの時代の終わり

スノー大管長が教会を管理した3年間に、何人かの重要な教会指導者が世を去った。彼らの死は一つの時代が終わって、新しい指導者が王国を導いて行くことを示唆していると言えよう。教会機関誌は写真と大きな見出しで、当時教会の日曜学校中央会長会の一員として働いていた、教会の最も著名な教育家カール・G・メーザーの死を報じた。十二使徒定員会会長フランクリン・D・リチャーズ長老は1899年12月9日ソルトレーク・シティで死去した。リチャーズ長老の訃報を聞いて、シオンの至る所で深い悲しみに沈む聖徒たちの姿が見られた。『ミレニアルスター』は特別に彼の死去を報じた。<sup>29</sup>

1901年4月12日、教会員はジョージ・Q・キャノン副管長が亡くなったことを知らされた。このとき彼は第一副管長と十二使徒定員会会長を兼任していた。キャノン長老は4人の大管長の副管長を務めた。また自ら発刊して30年以上にわたり編集に携わった機関誌『ジュブナイル・インストラクター』を通じて教会に貢献してきた。彼の説教はどれも傑出したものばかりで、多くの本に残されている。また10年以上にわたり合衆国議会におけるユタ準州の代議員として政治手腕を発揮し、ユタの州昇格に大きな力を発揮した。

中央扶助協会管理会会長としてエライザ・R・スノーの跡を引き継いだジーナ・ハンティントン・ヤングは1901年8月28日にソルトレーク・シティの自宅で亡くなっている。彼女はブリガム・ヤング大管長の妻で、ニューヨーク州バッファローで開催された全米婦人会議に派遣された経歴を持つ。また、デゼレト病院の理事長を10年以上にわたって務めた。



フランクリン・D・リチャーズ(1821 - 1899年)は勉強と読書に非常に熱心な少年だった。与えられた『モルモン書』を喜んで読み、14歳で帰依したが、バプテスマを受けたのは1838年である。その4か月後に、弟のジョージ・S・リチャーズはハウズミルで暴徒により殺害された。

1844年、フランクリンは英国への伝道に向かう旅の途中で、ジョセフとハイラム・スミスの殉教の知らせを聞いた。1846年に伝道を終えて帰国したが、妻のジェーンと幼い娘は開拓者の一団とともに西部へ旅立っていた。その途中で娘は亡くなっていた。しばらくして、もう一人の兄弟であるジョセフ・W・リチャーズがモルモン大隊の一員として行軍中に病死した。

1849年フランクリン・D・リチャーズは27歳で使徒に聖任されている。中央幹部として働いた期間は50年間にわたる。

## 世紀の分岐点に立つ教会

スノー大管長は激しいせきを伴う風邪のため、家族と医師の勧めに従って総大会の最後の部会のみに出席した。しかしタバナクルにおける説教で聴衆に聞こえるように精いっぱい声をし続けたため、総大会を終えると病床に伏してしまった。1901年10月10日スノー大管長は静かに息を引き取った。葬儀の後、遺体はブリガムシティーの墓地に埋葬された。

ロレンゾ・スノー大管長は使徒としての召しをあらゆることに優先させる人だった。スノー大管長は、貧困と砂漠の中という環境にあっても文化と教養を重んじる生活を聖徒に教えた。また、ありきたりのものをどのようにしたら美しく飾って特別なものにすることができるかを教えた。落ち着きと威厳のある人生を送り、自らに与えられた力をすべて神に帰した。預言者を通して受けた教えに従って生活すればどのような者になることができるかを聖徒たちに教えた。

ロレンゾ・スノーが管理した3年間は教会にとって重大な意味を持つ3年間であった。スノー大管長の賢明な判断によって教会は再び経済的な力を取り戻した。スノー大管長はオハイオ州マンチュアで青年時代に受け入れた信仰を堅く守り続けて生涯を閉じたのである。

## 注

1. “The Redemption of Zion” *Millennial Star* 「シオンの贖い」『ミレニアルスター』1900年11月29日付, 754

2. “The Grand Destiny of Man” 「人類の偉大な行く末」『ミレニアルスター』1901年8月22日付, 547. 「人類の偉大な行く末」『ミレニアルスター』1901年8月15日付, 541 - 542; リロイ・C・スノー, “Devotion to a Divine Inspiration” *Improvement Era* 「神の靈感に心から従う」『インブルーメント・エラ』1919年6月号, 656も参照

3. “Memorandum in the Handwriting of President Lorenzo Snow” *Elder's Journal* 「ロレンゾ・スノー大管長の手書きのメモ」『エルダーズジャーナル』1906年12月1日付, 110 - 111; リード・C・ダラム・ジュニア, スティーブン・H・ヒース共著, *Succession in the Church* 『教会における継承』(Salt Lake City: Bookcraft, 1970), 103 - 104参照

4. リロイ・C・スノー “Remarkable Manifestation to Lorenzo Snow” *Church News* 「ロレンゾ・スノーの驚くべき示現」『チャーチニュース』1938年4月2日付, 3, 8. N・B・ランドウォール編, *Temples of the Most High* 『至高者の神殿』(Salt Lake City: N. B. Lundwall, 1968), 139 - 141; トーマス・C・ロムニー, *The Life of Lorenzo Snow* 『ロレンゾ・スノーの生涯』(Salt Lake City: Deseret News Press, 1955), 441 - 442も参照

5. ロムニー 『ロレンゾ・スノーの生涯』443 - 444参照

6. *Journal History of The Church of Jesus Christ of latter-day Saints* 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史』末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 26

7. 使徒は皆、救い主の神聖な使命について世に証をするために聖任されている。しかしながら、使徒は十二使徒定員会に召されなければ、教会の管理組織の一員とはならない。

8. ジョセフ・フィールディング・スミス編, *Life of Joseph F. Smith* 『ジョセフ・F・スミスの生涯』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 310 - 311参照

9. レオナード・J・アリントン, *Great Basin Kingdom: An Economic History of the Latter-day Saints, 1830 - 1900* 『グレートベースンの王国: 末日聖徒の経済史, 1830年 - 1900年』(Cambridge: Harvard University Press, 1958), 402

10. ロムニー 『ロレンゾ・スノーの生涯』456で引用

11. リロイ・C・スノー “The Lord’s Way out of Bondage Was Not the Way of Men” 「束縛から解放する際に主が用いられる方法は人の方法とは異なる」『インブルーメント・エラ』1938年7月号, 439

12. スノー 「束縛から解放する」440

13. スノー 「束縛から解放する」442で引用

14. J・スーザ・ヤング・ゲイツ “Biographical Sketches: Jennie Brimhall and Inez Knight”

## 時満ちる時代の教会歴史

- Young Women's Journal* 「人物描写：ジェニー・プリムホールとアイネズ・ナイト」『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』1898年6月号，245
15. スーザ・ヤング・ゲイツ “Biographical Sketches: Elizabeth Claridge McCune” 「人物描写：エリザベス・クラリッジ・マッキューン」『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』1898年8月号，339 - 340で引用
16. J. スーザ・ヤング・ゲイツ 「ジェニー・プリムホールとアイネズ・ナイト」245 - 246
17. “Women as Missionaries” 「女性の宣教師」『ミレニアルスター』1898年6月23日付，398参照
18. “A Letter from Bristol” 「ブリストルからの一通の手紙」『ミレニアルスター』1898年7月28日付，477)
19. アイネズ・ナイト “Our Girls” 「わたしたちの少女」『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』1898年9月号，416参照
20. “Bristol Conference” 「ブリストル大会」『ミレニアルスター』1899年1月26日，58参照
21. 「わたしたちの少女」『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』1899年4月号，187で引用
22. ロレンゾ・スノー 「全世界へのあいさつ文」(pamphlet, 1900)，11
23. *Deseret News 1987 Church Almanac* 『デゼレトニュース1987年教会年鑑』(Salt Lake City: Deseret News, 1986)，239，253参照
24. ヒーパー・J・グラント “Ram in the Thicket” 「やぶの中の雄羊」『インブルーメント・エラ』1941年12月号，713，765，767
25. “Address to the Japanese” 「日本国民に告げる」『ミレニアルスター』1901年9月26日付，625 - 627
26. ジョセフ・F・スミス “The Last Days of President Snow” 「スノー大管長の最後の日々」『ジュブナイル・インストラクター』1901年11月15日付，689
27. Conference Report 『大会報告』1901年10月，61で引用
28. スミス 「スノー大管長の最後の日々」690
29. “Biographical Sketch of President F. D. Richards” 「F・D・リチャーズ会長の人物描写」『ミレニアルスター』1900年1月4日付，1 - 8

## 20世紀初頭の教会

年表 年代	重要な出来事
1900.1.25	B・H・ロバーツ、合衆国下院を追放される
1901.10.10	ロレンゾ・スノー死去
1901.10.17	ジョセフ・F・スミス、大管長に任命される
1903.1.29	リード・スムート、合衆国上院議員に当選する
1904.4.6	ジョセフ・F・スミス大管長、「第二の宣言」を公布する
1905.12.23	バーモント州シャロンにおいてジョセフ・スミスの記念碑が奉獻される
1907.2.20	リード・スムート、投票により上院にとどまることを認められる



B・H・ロバーツ（1857 - 1933年）。成人後も特徴的な顔つきをしていた。彼は恐れを知らない信仰の擁護者であった。（生い立ちについては第33章を参照）

「宣言」が公布され、ユタ州が連邦への加入を承認されてから、短い間ではあったが比較的平穏な日々が続いた。しかし、教会は再び内憂外患に直面することになった。20世紀に入るとアメリカ社会のあらゆる面における悪事や不正を暴く急進的な運動が繰り返されるようになり、国中の関心を集めた。これらの悪事には事実もあれば捏造されたものもあった。この時期に起きたB・H・ロバーツ事件は、国家の指導者と各界の急進的な指導者に、教会と教会員に対して再び好奇の目を向けさせるところとなった。

### ブリガム・H・ロバーツ事件

1896年の夏、大管長会は、七十人第一定員会の会員であり、また教会で最も優れた話者の一人であったブリガム・ヘンリー・ロバーツ長老ならびにタバナクル合唱団から選抜して結成されたカルテットを、親善使節として合衆国東部へ派遣した。著名な声楽家であったジョージ・D・パイパーがカルテットを率いるとともにテナーを担当した。ロバーツ長老の一行は、ミズーリ州セントルイス、オハイオ州シンシナティ、ペンシルベニア州ピッツバーグおよびフィラデルフィア、ニューヨーク州ニューヨークなどの東部主要都市を訪れた。セントルイスにおいてロバーツ長老は平均1時間15分の講演を42回にわたって行い、「連続講演を終えた時点で60名に上る人々にバプテスマを施した。これらの改宗者は支部を組織し、やがてセントルイスで大きな繁栄をもたらすことになる教会の核となったのである。」<sup>1</sup> B・H・ロバーツは生涯を通じてイエス・キリストの福音を愛し、また福音を擁護した。このため、彼は「信仰の擁護者」と呼ばれるようになった。

ロバーツ長老はユタへ戻ると、州の民主党指導者から合衆国下院議員に立候補してほしいとの要請を受けた。ロバーツ長老は大管長会の承認を得たうえで、出馬を決意し、1898年9月に民主党の指名を受けた。積極的な選挙運動を展開したロバーツ候補は2位に6,000票近くの大差をつけて当選した。しかしながら、勝利の興奮が冷めやらないうちに、弁護士のア・セオドア・シュローダーに加担するモルモン反対派宗教家グループが、ロバーツの議員就任を阻止する運動を展開し始めた。シュローダーは、モルモンに反対することを目的としてユタ州で出版されていた『ルシフェルのカンテラ』(Lucifer's Lantern)の編集にも従事していた人物である。

シュローダーはウィスコンシンで生まれ、同地で教育を受けた後、弁護士事務所を開業する目的と、「新しい宗教がどのように根付いていくかを確かめ、研究する」目的をもってユタへやって来た。ソルトレーク・シティでは、『ソルトレーク・ヘラルド』(Salt Lake Herald)を民主党の正式な機関紙に移行させる活動に携わり、同新聞社の40名から成る発起人の一人として名を連ねた。ユタにおいて教会に敵対

## 時満ちる時代の教会歴史

する人々と親交を深めていたシュローダーは、彼らと結託して「最終的にロバーツを合衆国議会から追放する結果となった、B・H・ロバーツ訴訟事件」<sup>2</sup>の原告側の弁護人を務めた。

反対グループはロバーツ議員罷免請求に全州で700万人以上の署名を集めることに成功した。これはロバーツ長老が以前に多妻結婚を実施していたことが大きく影響したためである。請願書の署名としてはそれまでのアメリカ史上で最も多い人数を集めた。しかし、ロレンゾ・スノー大管長は、「ロバーツは、この嵐を『蚊に刺されたほどの痛みにはか』感じていませんでした」<sup>3</sup>と述べている。

ワシントンD.C.に到着したロバーツ下院議員は、請願運動の決着がつくまでは、議員に就任できないことを悟った。そこでロバーツ議員は、自分の立場を明確にするため、また多妻結婚を実施した者が議員に選ばれる権利を不当に侵害されることの違法性を主張するための準備を始めた。この論争は白熱化して、延々15か月間に及ぶところとなった。反対グループは、宗教、道徳、政治とあらゆる分野の論理を振りかざして、ロバーツの議員罷免を要求した。かつての多妻結婚者の多くはいまだに複数の家族を有しているとして教会を非難する声もあれば、モルモンは家族や子供を扶養せず路頭に迷わせているとして非難する声もあった。彼らは、たとえ神から受けた命令であったとしても多妻結婚を信じた教会員を攻撃し、多妻結婚をやめたことについては神から受けた命令を無視したと言って教会員を非難した。教会員は多妻結婚の実施をやめはしたが、多妻結婚の正当性を信じる信仰をいまだに捨てていないとして、非難する声もあった。そしてついに末日聖徒は、多妻結婚によって生まれた子供たちを愛していると言っても非難され、愛していないと言っても非難されるという状況に追い込まれていった。<sup>4</sup>

こうした論議はしばしば全国の主要新聞の1面をにぎわしていた。多くの女性は、多妻結婚は女性に対する冒瀆ぼうとくであると考えていたため、ロバーツ罷免に賛成の立場を取った。後に、婦人参政権運動の圧力がロバーツを罷免に追い込んだとする政治家もいたほどである。いずれにしても、国中の漫画家や風刺画家がこぞってロバーツを題材として採り上げたため、ロバーツはどこへ行っても有名だった。

合衆国下院では、最終的に無記名投票によって決着をつけることになったが、ロバーツ長老は投票を前にして最後の弁明の機会を与えられた。ロバーツ長老は疲労困憊こんぱいしていたが、なおも意気軒昂で、持ち前の「かじ屋の弁士」ぶりを発揮して（彼は少年時代にかじ屋の経験があったため、あるグループからこう呼ばれた）、次のような弁明を展開した。

「『ロバーツ事件を論評する新聞のうち数紙が「この男に恥を着せて、連中のもとに送り返せ」と言っているようですが、わたしに恥を着せる力を手にした新聞記者がいるとは驚きです。合衆国議会のこの下院にさえ、それほどまでの権力は与えられていないというのに。恥を知る力というのはその人自身の中にあるのであって、他人がどうこうするものではありません。全能の神は他人にその力を与えておられないのです。わたしは今日まで、わたしを育てた社会から教えられた道徳に従って生きてきました。良心の呵責かしゃくはまったくありません。恥を覚えるような行動をとったことは、わたしの人生には一度たりともないのです。わたしにレッテルを張るがよいでしょう。わたしを追い出すがよいでしょう。顔を上げ、胸を張ってこの大議

## 20世紀初頭の教会

場を後にするでしょう。天使が雲の上を歩くとすれば、わたしは神の大地を歩く。天使と同様、心にいささかの恥を覚えることなく。』

(議員たちから拍手喝采<sup>かっさい</sup>を浴びるが、傍聴席からは『シー』と静粛を求める声が聞こえた。)

『わたしを罷免するのであれ追放するのであれ、ユタ州で選出された議員に対して罷免を叫ぶ一派の騒ぎに同調しているあなたがたは、自分の国の憲法に違反することになります。そして、本件が作り出した恥は、わたしではなく、本議会に帰されることになります。』

(拍手)<sup>5</sup>

ロバーツ長老の最後の演説に圧倒されながらも、下院議員による投票の結果は、罷免の賛成に268票、反対に50票、棄権に36票が投じられた。ロバーツ長老は、教会と国家の名誉を守るために、雄々しく戦い、威厳をもって行動したが、下院は複数の妻を持ったことのある人は議場に入らばならずという決定を下した。その後、B・H・ロバーツは二度と公職選挙に出馬することはなかった。

### ジョセフ・F・スミス大管長

4代にわたる大管長の副管長を務めたジョセフ・F・スミスは、1901年10月10日に死去したロレンゾ・スノーの後継者として聖任された。63回目の誕生日を迎える一か月前のことであった。ジョセフ・F・スミスは殉教者ハイラム・スミスの息子であり、ジョセフ・スミスのおいである。彼の名前は叔父にちなんで命名されたものである。未亡人であった母親のメアリー・フィールディング・スミスは偉大な信仰を持った女性であった。模範と説得により息子に福音を教えた。ジョセフ・F・スミスはわずか15歳でハワイへ伝道に召され、成功を収めている。10年後の1864年に、彼はロレンゾ・スノーに同行してハワイ諸島を訪れ、ウォルター・ムレイ・ギブソンが広めた偽りの教えを教会内から一掃している。マウイ島に滞在しているときに、スノー長老はジョセフ・F・スミスがいつの日か教会を管理するという啓示を受けた。<sup>6</sup> ジョセフ・F・スミスがブリガム・ヤングにより使徒に召されたのは、まだ28歳のときであった。

ジョセフ・F・スミスは、生涯を通じて福音の勉強を続けた。スミス大管長は、聖文に通じた人、教義に対する愛情にあふれた人、力あふれる説教者として知られている。また子供に対する愛情の深い人でもあった。自分の子供たちにあてた彼の手紙にはあふれるばかりの愛情と父親らしい心の行き届いた教えが見られる。1901年11月10日に行われた特別の聖会において、ジョセフ・F・スミスは教会の大管長として支持を受けた。副管長には、管理監督会の一員であったジョン・R・ワインダーと十二使徒定員会のアンソン・H・ランドが選ばれた。

スミス大管長は教会の管理を始めて間もなく、リード・スムートに対して、合衆国上院議員選挙に出馬する許可を与えている。1900年の春に38歳で使徒に召されたリード・スムートは、ユタ州の著名な政治家であり、州の共和党創設者の一人でもあった。そして1903年の選挙において合衆国上院議員に選出された。この当選を発端として、教会と国家を巻き込んだ延々5年近くに及ぶ大論戦の末にスムート議員が勝利を収めることになる公聴会が展開されていくのである。この公聴会の模様は逐



ジョセフ・F・スミス(1838 - 1918年)は1901年10月に教会の第6代大管長となった。青年時代の1866年に使徒に召されてから45年間にわたり、教会において顕著な働きを残している。

スミス大管長は教会の教義の権威者であった。スミス大管長の説教と著作をまとめて一冊の書物にしたのが、1919年に出版された『福音の教義』である。この書物は20世紀の末日聖徒にとって、教義の基本的な参考書になっている。

## 時満ちる時代の教会歴史

次報道されたため、教会は再び国中の報道機関のスポットライトを浴びることになった。

### リード・スムート公聴会

1930年に合衆国上院の「最古参議員」となったリード・スムート使徒は、『ソルトレーク・テレグラム』(Salt Lake Telegram)の編集長の言葉を借りると、「ユタ出身で最も傑出した人物」であった。この記事がきっかけとなって新聞が世論調査を行ったところ、スムート上院議員は圧倒的に第1位にランクされた。<sup>7</sup> スムート議員は、30年間にわたる上院議員生活を通じて最も影響力の大きい議員の一人と言われるようになった。また上院議員として、世界各国の大統領、首相、王、女王に接する機会を得た。しかし、上院議員に選出された当初は、これほどの成功を収めるとはだれも予想しなかった。

1906年に公聴会が終わって間もなくのこと、ジョセフ・F・スミス大管長のある友人が、スムート長老は議員生活を引退すべきだと考えていた。そこで彼はスミス大管長とヨーロッパから一緒に帰国した折に、できるかぎり「慎重にまた言葉巧みに」自分の考えをスミス大管長に打ち明けた。話をじっと聞いていたスミス大管長は、やがて二人の間にあった手すりを強くたたき、勢い込んで言った。「わたしはこれほど力強くまたはっきりと主の御霊から靈感を受けたことはありません。リード・スムートについてははっきりした答えを受けました。彼は引退するのではなく、合衆国上院にとどまるべきです。」<sup>8</sup>

上院議員に立候補する件について神から承認を受けたといっても、選挙に勝つ保証を与えられたわけではない。1902年当時の上院議員は住民による選挙ではなく、州の議員によって選ばれていた。したがって、スムート長老が選挙に勝つためには、ユタ州の議員からの支持を取り付ける組織を作らなければならなかった。1903年1月、スムート長老は共和党議員のうち46票を獲得した。これに対して対立候補の獲得票数は16であった。こうして、使徒の合衆国上院議員が誕生したのである。

選挙での勝利から数日もたたないうちに、19名のソルトレーク市民が合衆国大統領に対して、スムート上院議員の選出に反対する抗議行動を起こした。彼らは、スムート長老が「末日聖徒イエス・キリスト教会すなわち『モルモン』教会の統治権を有する自治組織の15人の一人であり、彼らは、支配下にある人々の信仰ならびにあらゆる市民行動、物質的および精神的な宗教行動を統制するために、神の認可を受けた最強の権威を自ら行使し、あるいは配下にある者を通じて行使する権限を与えられている」として非難した。間もなく、4年前にB・H・ロバーツの下院議員就任に反対した同じグループが再び結集して、スムート議員に反対する市民行動を展開し始めた。人心をおおることで有名な、ある全国紙は第1面で次のように報じた。これは当時の反対者の感情を端的に表している。

「あなたは人々から嫌われていることを理解できないのか。

使徒などというものは政界では場違いな人間だということが分からないのか。

あなたはふさわしい人物でないことが分からないのか。

スムートさん。ワシントンと異邦人の世界には足を踏み入れない方がよい。

荷物をまとめて、家へ帰るがよい。



リード・スムート(1862 - 1941年)は少年時代に大志を抱いてプロボの消費組合、羊毛工場で熱心に働いた。成人したスムートは実業家として成功し、ユタの多くの企業で要職に就いていた。また長年ブリガム・ヤング・アカデミーの信託理事も務めた。

リード・スムートは1900年にロレンゾ・スノーによって使徒に聖任されている。十二使徒定員会にあった41年間のうち30年間は、ユタ州選出の合衆国上院議員として働いた。

## 20世紀初頭の教会

すぐさま家路に就くがよい。

急いで、スムート、急いで帰れ。」<sup>10</sup>

1903年2月の下旬にスムート長老がワシントンD.C.に到着すると、J・C・パローズ上院議員は「国民の反逆児」を権利擁護および選挙管理委員会に引き合わせた。数日後、メソジスト教会ユタ地区布教監督のジョン・L・リーリッチは、多妻結婚を実施していたことを含む法律違反を理由にスムート長老を告訴した。しかしこれは事実無根だった。スムート長老はそれを証明することができた。B・H・ロバーツの場合とは異なり、スムート長老は、多妻結婚に関する調査が進行している中、上院議員に就任することを許された。1903年3月、スムート議員は上院議員に就任する宣誓を終えた。上院議員に就任して議員活動を始めると、彼の優れた管理能力、適正な判断力、高潔な人格はだれの目にも明らかになった。スムート議員は議会運営能力にもたけていた。この貴重な資質は、公聴会の最終投票の際に明らかにされるのである。

『スムート事件』と呼ばれ始めたこの騒動は、かつてのモルモン撲滅運動に登場した様々な『昔話』を復活させるだけでなく、新たな物語をも登場させることとなった。秘密結社『ダナイト』が再登場し、マウンテンメドー大虐殺の話が再度繰り返され、プリガム・ヤングの『ハーレム』が人々の話題に上るようになった。『ニューヨーク・ヘラルド』(New York Herald)紙は1ページ全面を割いて多妻結婚の恐怖を掲載した。『ニューヨーク・コマーシャル・アドバタイザー』(The New York Commercial Advertiser)は次のような愚にもつかない非難を浴びせている。「モルモンの宣教師は男性を改宗させた場合は一人につきわずか4ドルだが、16歳以上の女性を改宗させて多妻結婚に入らせることができた場合は、一人につき60ドルの報酬を受け取っている。」<sup>11</sup>

1904年1月、スムート上院議員は、非教会員の弁護士数人の助けを借りて、浴びせられた非難、告発に対する正式回答書を作成して上院に提出した。しかしながら、公聴会が開催されたのは3月になってからである。ジョセフ・F・スミス大管長は最初の証人として喚問され、3日間にわたり質問を受けた。質問に答えるスミス大管長の正直で率直な態度に多くの上院議員は不承不承ながらも敬意を表した。ほかに教会側から証言した人々には、モルモンの教義に関する疑問点を明確にしたジェームズ・E・タルメージ、十二使徒定員会会長のフランシス・M・ライマン、教会歴史記録者補佐のアンドリュー・ジェンソン、B・H・ロバーツ、1896年に十二使徒定員会から解任されたモーゼス・サッチャーがいる。モーゼス・サッチャーの証言は、教会指導者が聖徒の生活を「操っている」とする告発に対抗するうえで特に有効だった。これら教会指導者の証言は全国の新聞の1面に掲載された。

公聴会が終了したのはそれから2年以上も後のことである。教会に敵意を持つ上院議員たちは、教会指導者がいまだに多妻結婚を実施している、教会はユタ州の政治に過度の影響力を行使している、教会員は神殿内で憲法上の原則に反対する聖約をするよう求められている、教会員は神から与えられた律法を国の法律より優先させているなどと主張した。アイダホ州選出の上院議員フレッド・T・デュボイスは、自らの政治的立場を優位に立たせようとして、スムート議員と教会指導者を声高にまた乱暴な口調でなじった。しかしこの演説により、上院を牛耳っていた多くの共和



## 時満ちる時代の教会歴史

党議員はかえって、スムート議員がデュボイスの言うように影響力を持つ人物だと考えるようになった。

1907年2月20日、共和党はリード・スムートの議員資格剥奪動議を却下した。スムート議員の勝利は、セオドア・ルーズベルト大統領を含む共和党指導者が、スムートが上院に残っていれば、ユタを共和党寄りの州としておくために役立つであろうと判断したことも一因となっている。この勝利を背景に、スムート上院議員はそれから26年間、ワシントンにおける最も影響力の大きい人物の一人として議員生活を送った。

### スムート公聴会の影響

大管長会は、スムート上院議員や東部に住む有力な末日聖徒の報告から、合衆国の一般市民は教会指導者が基本的に法律を守る意志を持っていないばかりか、それを隠蔽するために様々な策を弄しているという目で見ていたことを知った。その上に、教会指導者は多妻結婚を終結させるために真剣に努力していないという非難を受けていた。ジョセフ・F・スミス大管長は、状況を慎重に考え、祈り、またこれらの非難に対して弁明するため、1904年4月6日、「第二の宣言」として知られる声明を発表した。この「宣言」においてスミス大管長は、多妻結婚の結婚式を執行した教会役員ならびに多妻結婚を実施した男女はすべて破門されることを言明した。さらに、この「宣言」は世界中のあらゆる地域で適用されることを明確にした。

残念なことに、十二使徒定員会の2名、ジョン・W・テラーとマサイアス・F・カウリーは、「第一の宣言」が規定する範囲と意味について同僚の指導者たちの見解と完全に一致することができず、またスミス大管長が公布した「第二の宣言」についても同意することができなかった。このため、スムート公聴会が始まったとき、テラーとカウリーは謹慎を命じられ、ワシントンD.C.に出向いて証言する機会を拒否された。

これらの二人の使徒は、スムート公聴会が終了した後に、十二使徒定員会に対して辞表を提出した。二人が「宣言」の公布後もかなり多くの回数にわたって多妻結婚を行っていたことは周知の事実だった。二人の十二使徒の辞職は、多妻結婚が名実ともに終了したことを象徴している。ジョン・W・テラーは十二使徒を辞任してから6年後、さらに別の女性と多妻結婚を実施したため、破門された。カウリー長老は十二使徒定員会会員として復権することはなかったが、教会には忠実であった。1930年代に英国への伝道に召されている。ニュージーランドで伝道部長として働いたマシュー・カウリーは、カウリー長老の息子である。マシュー・カウリーは後に使徒に召されている。

### 教会に対する報道機関の攻撃

リード・スムートと同時期にユタ州から上院議員として選出されたのは、鉱山主の大富豪トーマス・カーズであった。カーズは教会員ではなかった。彼が上院議員に当選できた理由の一つにはロレンゾ・スノー大管長の支援を受けたことがある。議員としての第1期を通じて、カーズは上院の同僚議員の間でも、ユタの人々の間でも、また彼を指名したユタ州上院でも、才覚を表すこともなく、また人気も

## 20世紀初頭の教会



トマス・カーンズ(1862 - 1918年)はカナダで生まれ、少年時代にネブラスカへ移り、同地の農場で成長した。カーンズは生涯のほとんどをダコタのブラック・ヒルズ、アリゾナそして最終的にユタの鉱山で働いた。ユタのパークシティにおいて銀山を掘り当てるといふ幸運を手にした。

なかった。さらに、新たに大管長となったジョセフ・F・スミスはカーンズが上院議員に再選されるべき人物だとは考えていなかった。こうした要因が重なって、カーンズは落選した。カーンズはその恨みと怒りを教会にぶつけた。彼の上院議員としての最後の演説はすさまじいものであった。怒り狂ったカーンズは、教会指導者を、ユタにおけるあらゆる事業、政治、社会生活を独占する「独裁者」であると非難したのである。さらに、「この独裁者は気に入った者たちに多妻結婚を許している」とまで言っていた。<sup>12</sup>

カーンズはユタに戻ると、アメリカ政党の結成を支援した。これは1893年に解散したかつてのモルモン反対政党、自由党を復興したものだ。また「ソルトレーク・トリビューン社」を買収して、ジョージ・Q・キャノン副管長の息子で、教会を破門されていたフランク・J・キャノンを編集長に据えた。

『トリビューン』(Tribune)に掲載されたキャノンの社説は教会と教会の指導者に対する怒りに満ちあふれていた。しかし、社説やモルモン敵対記事に込めた彼の憎しみが募れば募るほど、キャノンに対する読者の信頼は失墜していった。そしてキャノンはついにデンバーに引っ越し、1933年に亡くなるまで同地で文筆生活を続けた。しかしながら、キャノンのモルモンに対する憎しみに満ちた書物や記事は一時期、人々の末日聖徒に対する見方に大きな影響を与えた。またカーンズの行動や話に刺激された他の編集者たちが、教会に反対する様々な見解を活字にするようになった。1907年から1911年にかけて『ソルトレーク・トリビューン』(Salt Lake Tribune)が主導する形で、モルモンに反対する宣伝活動が数を増していった。これらは、ロバーツおよびスムートにまつわるエピソードよりもはるかに過激な内容であった。

スミス大管長はこれらの非難に対して対抗手段も講じることをせず、次のように宣言するにとどめた。「わたしは御父の子らのいかなる人に対しても悪意をまったく持っていない。しかし神の御子に対する敵がいたと同じように主の業に対する敵がいる。末日聖徒に対して悪口雑言を吐く者がいる。わたしたちの間に大勢いるが、あらゆる徳とこの末日の業に関する良きことには目を閉じ、神の民に対して偽りとデマを浴びせかける者がいる。わたしはこのことについて彼らを赦す。わたしは彼らを正義の判士の手ゆだねる。」<sup>13</sup>

全国的に購読者を持つ雑誌『ピアソンズ』(Pearson's)、『エブリボディーズ』(Everybody's)、『マククラズ』(McClure's)、『コスモポリタン』(Cosmopolitan)は、教会とその神聖な使命についてほとんど理解していないことを露呈する記事ではあったが、末日聖徒を情け容赦なく攻撃した。セオドア・ルーズベルト大統領は、スムート上院議員との友情が一部、動機となって、教会を擁護するために立ち上がり、教会役員に対する多くの事実無根の非難を論破する文書をしたためて、『コリアーズ』(Collier's)に掲載した。大統領は同時に、彼がモルモンと政治的な取り引きをしているとして流布されていた中傷についても否定した。大統領はさらに、末日聖徒が高潔な人々であり、高い標準に従って生活していることを力強く宣言した。<sup>14</sup> この記事は合衆国における末日聖徒への非難を抑えるうえで効果があった。しかしながら、大統領のこの文書はヨーロッパでは公表されなかった。教会はヨーロッパにおいても猛烈な攻撃にさらされていた。何ら事実の裏付けもなくモルモンを攻撃する暴露小説を構築して発表する出版社がアメリカには数多く存在していた。そうした

## 時満ちる時代の教会歴史

出版社の手になる十数種類の小説や記事がヨーロッパに持ち込まれ、流布されていた。

1910年から1914年にかけて、英国では末日聖徒の宣教師に対する常軌を逸した暴行事件が頻発した。この時期、英国では大きな社会改革が進行していたため、多くの人々は英国独特の方式や道徳に対する伝統的な考え方を否定し、威嚇するための先鋒として教会が入り込んできたと考えていたのである。彼らはさらに、モルモンがいまだに多妻結婚を実施しており、宣教師は英国の少女をわなにかけるために来ていると思い込んでいた。英国のウィニフレッド・グラハム（セオドア・コリー夫人）はモルモンを攻撃する小説を数冊著している人気作家であったが、あるとき彼女は次のように言った。「わたしは、自分の利益のためには手段を選ばないこの強大な王国に対してペンと言葉で戦うことに興奮を覚えています。彼らは、羊の皮をかぶって英国の女性に近づくおおかみの使者であり、ヨーロッパ中の血を吸い尽くそうとする吸血鬼なのです。」<sup>15</sup>

このような宣伝活動がちまたにあふれたため、英国議会はすべての末日聖徒を英国から追放すべきかどうかについての論議を展開し始めた。ここで偉大な勇気を発揮したのが、若きウィンストン・チャーチルであった。彼は信教の自由を訴えて、布教活動を実施する教会の正当性を弁護した。末日聖徒の追放が実施されることはなかったが、バーケンヘッド、ブース、ハイウッド、ほか英国の8都市では暴行事件や暴徒による民衆支配が起きている。こうした暴行事件に巻き込まれた宣教師には、タールを浴びせられてその上に鳥の羽根を振りかけられた長老、顔を殴られた長老、石灰の粉を顔に投げつけられて一時的に目が見えなくなった長老などがいた。また路上で数千人の怒り狂った市民に取り囲まれて暴行を受けた宣教師もいた。

反対運動が激化する中で、数々の奇跡が起きている。カナダから来た一人の若い新米宣教師がケンブリッジで伝道活動を行っていた。1904年のことである。名をヒュー・B・ブラウンという。ケンブリッジに赴任した日に、彼は駅舎に次のようなポスターが張ってあるのに気がついた。「悪質な詐欺師に気をつけよう。モルモンが戻って来た。モルモンを追放しよう。」ブラウン長老は丸2日間戸別訪問をしてちらしを配ったが、だれとも福音について話すことができなかった。<sup>16</sup> ある土曜日の夕方、ドアをノックする音が聞こえた。ブラウン長老は当時を振り返って次のように述べている。

「宿の女主人が対応に出ると、男の声が聞こえてきました。『こちらにブラウン長老はいらっしゃいますか。』やれやれ、わたしもこれまでかと思っていると、女主人が言いました。

『ええ、いらっしゃいますよ。居間にね。さあ、どうぞ。』

男は入って来て、こう言いました。『あなたがブラウン長老ですか。』

彼は驚いたような顔をして尋ねましたが、わたしは平然として言いました。『はい、そうです。』

『あなたがこのちらしをうちの玄関のドアに挟んで行かれたのですか。』

わたしは名前と住所をちらしに書いておきました。わたしは当時、弁護士資格を得る直前の状態までいっていたのですが、このようなときにどう答えてよいか分かりませんでした。そこで『はい、そうです』とだけ言いました。

『ブラウン長老、実は先週の日曜日、17家族が英国国教会を離脱しました。わた

## 20世紀初頭の教会

しの家には大広間があるので、全員がわたしの家に来ました。17家族それぞれが大家族でしたので、広間は男やら、女やら、子供やらでいっぱいになりました。わたしたちは、主が新しい牧師様を遣わしてくださるように1週間お祈りをするにしました。今晚も、主は祈りを聞いてくださらなかったと思って、気落ちしながら家に帰ったのです。でもドアの下に挟んであったこのちらしを見たとき、主がわたしたちの祈りにこたえてくださったのだと分かりました。明日の晩おいでになって、わたしたちの牧師様になってください。』

けれども、わたしは伝道地に着いて3日とたっていませんでした。宣教師が何をすることも知らないわたしに、牧師になってくれと言われたのです。しかし、わたしは無謀にも『はい、参ります』と言ってしまったのです。それから約束の時間までずっと悔い改めを続ける羽目になりました。

彼はわたしに礼を言って帰って行きましたが、わたしの食欲まで一緒に持って行ってしまいました。そこで女主人に、夕食は要らないと告げると、部屋に上がって寝る支度をしました。わたしはベッドの傍らにひざまずいて、若い兄弟姉妹の皆さん、生まれて初めてほんとうに神と話をしました。わたしは自分が立たされている窮地について主にお話しし、助けを求めました。導きを与えてくださるようお願いしました。この責任から逃れさせてくださるよう必死にお願いしました。わたしは祈りを終えると立ち上がって、ベッドに入りましたがなかなか寝つけないため、また起きて祈りました。そうして一晩中祈り続けました。わたしはほんとうに神と話をしました。」

翌日、ブラウン長老は朝食も、昼食ものどを通らなかった。彼らの宗教指導者にならなければならないという思いに悩みながら、ただあちらこちらを歩き続けた。

「ついにその時が来ました。時計は6時45分を指していました。わたしは身を起こして丈長のプリンス・アルバート・コートをはおり、ノーウィックで買った山高帽をかぶり、ステッキを手に取り（当時の宣教師はいつも手にしていた）、キッドの手袋をはめ、『聖書』をわきに挟んで、文字どおり足どり重くその家に向かったのです。間違えようもない一本道でした。

門の前まで来ると、前夜顔を合わせた男が出て来て、丁寧にお辞儀をして言いました。『どうぞ、お入りください。牧師様。』もちろん、わたしはかつてそのように呼ばれたことは一度もありませんでした。中に入ると大広間にいっぱいの人々が全員、新しい牧師に敬意を表すために立ち上がって迎えました。それがかえって、わたしに死ぬかと思うほどおびえを感じさせたのです。

さて、わたしは何をすべきかを考え始めなければならないところまで来ていました。賛美歌を歌うことについて何か言わなければならないことに気づきました。そこで『高きに栄えて』を歌うように提案したところ、まったく反応がなく、ただわたしを見詰めているだけでした。そこでわたしたちは歌い始めましたが、聞こえたのは聞くに堪えないカウボーイの独唱だけでした。次にわたしが考えたことは、全員に自分のいすに向かってひざまずいてもらうことでした。そうすれば、祈っている間じろじろ見られなくて済むでしょう。提案すると、全員がすぐに言われたようにしました。そして、わたしは神と話をしました。これが生涯で2度目です。恐れと不安がすべて消えました。わたしはすべてを神にお任せしていました。

## 時満ちる時代の教会歴史

わたしは神にこうお話ししました。『天にまします父よ、ここに集まっている人々は英国国教会を離れました。彼らは今晚、真理を聞くために集まっています。父よ、あなたはわたしが彼らに望むものを与える準備ができていないことを御存じです。しかし、あなたはそれがおできになります。神よ、あなたこそそれをお与えになることができる御方です。もしわたしを介してお話しになるのであれば、どうかそのようになさってください。』

祈り終えて立ち上がると、大半の人は目頭を押さえていました。わたしも同じでした。2曲目の賛美歌を心を込めて歌ってから、話を始めました。45分間話をしました。わたしは何を話したか覚えていません。その後の出来事が証明するように、神はわたしを通してお話しになりました。神は非常に力強くこの人々に話されました。集会が終わると人々はわたしの周りに集まり、わたしを抱いて、手を握ってきました。そして、『わたしたちが待ち望んでいたことが起こりました。あなたをお遣わしくださった神様に感謝します』と言いました。

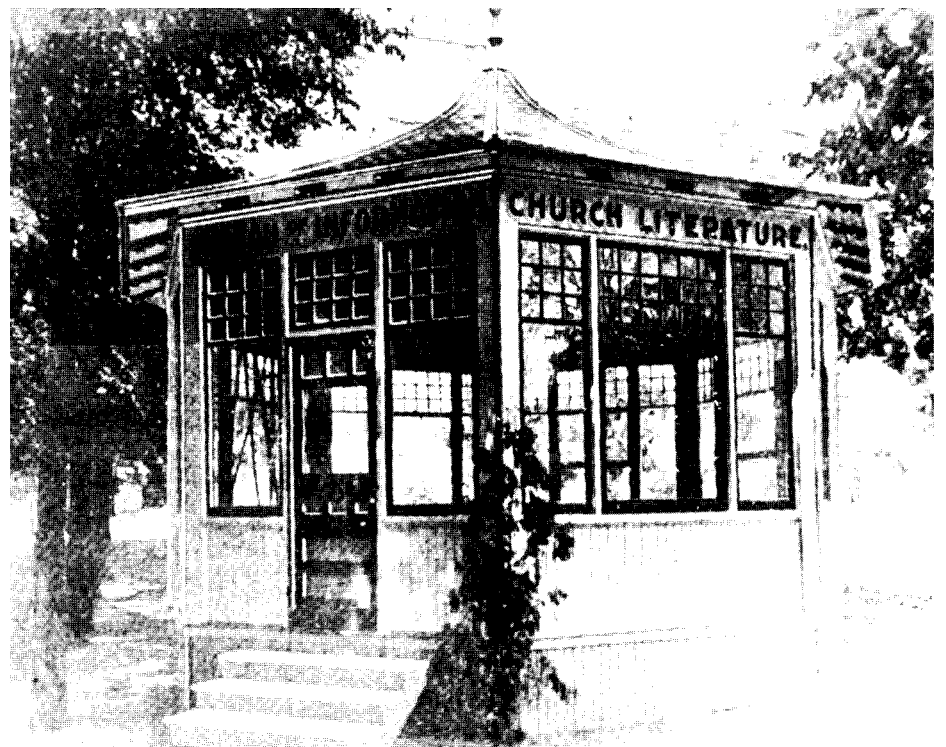
先ほど、集会に向かうときには重い足を引きずって来たと言いましたが、帰り道で地面に足が着いたのはたった一度きりでした。わたしは有頂天になっていました。神は、人間には成し遂げることが不可能な務めから、わたしを外してくださったのです。

それから3か月のうちに、あの広間にいた男女子供の全員がバプテスマを受けました。』<sup>17</sup>

## テンプルスクウェア伝道部

教会外の人々に対して末日聖徒の正しい姿を説明すること、また偽りの宣伝活動に対抗することを目的として、教会はテンプルスクウェア伝道部を設置した。実は

1897年の50年祭を記念してテンプルスクウェアに建設されたこの小さな建物が、最初の案内所である。テンプルスクウェアにおける伝道活動は1902年まで待つことになる。



## 20世紀初頭の教会

これ以前にも正式ではないが伝道活動に近い活動は行われていた。1875年に、当時建築中だったソルトレーク神殿の管理人チャールズ・J・トーマスは訪れる旅行者に対して、テンプルスクウェア内を案内し、また質問に答える責任が与えられていた。トーマスはテンプルスクウェアを訪れた人々に記帳してもらいノートを作っていた。後に、2名の合衆国大統領を含む多くの人々がトーマスのサイン帳に名前を記している。<sup>18</sup> それから25年の間に、訪問者のために案内所と案内係を常設しようとする動きは幾度があったが、実現までには至らなかった。

テンプルスクウェアに最初の訪問者センターが建設されたのは1903年である。2階部分は1915年に増築された。この建物は博物館と訪問者センターを兼ねていた。タバナクルの北側に建てられている現在の近代的な訪問者センターは1970年代に完成したものである。



結婚したばかりのウィラード・ビーン（1868 - 1949年）とレベッカ（1891 - 1976年）は、1915年の初めにユタ州リッチフィールドで開かれた、ジョセフ・F・スミス大管長が管理する大会に出席した。スミス大管長は、教会を代表することができると同時にニューヨーク州マンチェスターのジョセフ・スミス農場を運営できる人を探していた。ウィラードが入って来たとき、「非常に強い印象を受けました。まるで『あの男が探している人物だ』という声が聞こえたかと思うほどでした」<sup>22</sup> と後にスミス大管長は語っている。

モルモンに敵対する人々の偏見に囲まれる毎日だったが、ビーン夫妻はへこたれなかった。そしてついにパルマイラ近郊に住む人々の信頼を勝ち得た。教会がこの地域の史跡地を購入することができたのは、ウィラードの助けによるところが大きい。パルマイラで働くのは「5年くらい」の予定だったが、結局25年間の長きに及んだ。ビーン夫妻がソルトレーク・シティーに帰還したときには、孫がいたという。



1880年代から1890年代にかけて、ソルトレーク・シティーで書店を営んでいたジェームズ・ダイヤーはテンプルスクウェアに毎日出かけて行って旅行者と福音について話したり、自分で印刷した信仰簡条カードを渡したりしていた。ジェームズは、カードの裏に神殿の絵と「教会の教えについて詳しく知りたい方は、ソルトレーク・シティー、ノーステンプルストリートのジェームズ・ダイヤーまでご連絡ください」と印刷していた。ジェームズはこの勤勉な努力により、「ソルトレーク・シティーにおいて組織的な案内活動を行った先駆者」<sup>19</sup> と呼ばれた。1901年7月、スノー大管長の息子であるリロイ・スノーは貸し馬車の御者が教会についておもしろおかしくうそを並べているのを聞いていた。このためリロイ・スノーは正しい情報を伝える手段を確立する必要性を感じ、様々な働きかけをした。その結果、大管長会は1901年、七十人に対してテンプルスクウェアに案内所を設けるよう指示を与えた。<sup>20</sup>

翌年の3月、教会の正しい情報を発信する小さな展示館が建設された。建設費用は約500ドルだった。案内係として召された人は男女合わせて100名だった。彼らは定期的に奉仕する割り当てを受け、テンプルスクウェアを案内し、末日聖徒に関する正しい情報を伝えた。さらに、夏の間はタバナクルで1日に2回オルガンの演奏会が開かれた。この年の訪問者は15万人以上に達している。

伝道には反対が付き物である。テンプルスクウェアの案内係や印刷物が旅行者に

## 時満ちる時代の教会歴史



預言者ジョセフ・スミスの出生地であるバーモントに、生誕100周年記念日の完成を目指して、記念碑を建設する作業を監督したのはジュニアス・F・ウエルズであった。土台から笠石に至るすべてがみかげ石でできている。塔の高さは38.5フィートあり、60トンの原石から切り出された。塔の部分を鉄道の駅から現場まで運ぶのに20日間を要した。ウエルズ兄弟の信仰と熱意により、1905年12月23日の奉獻式に間に合わせることができた。

1971年、この美しい訪問者センターは、1904年に教会が再取得したミズーリ州インディペンデンスの敷地に建設された。奉獻式を管理したのはハイラム・スミスの孫に当たるジョセフ・フィールディング・スミス大管長であった。奉獻の祈りはN・エルドン・タナー副管長がささげた。

与える影響を阻止しようとする動きが出てきた。それは地元の非教会員グループと『ソルトレイク・トリビューン』紙で、彼らは訪れた人々に末日聖徒に関する偽りの情報を提供しようと、テンプルスクウェアの入り口にモルモン敵対者の「案内」を張り付けるようなことをしていた。訪れる旅行者の数が非常に多くなり、またテンプルスクウェア伝道部が成功を収めていたため、教会は1904年に、花崗岩とれんが造りの大きな訪問者センターを建設した。1905年の年間訪問者数は20万人に上った。1915年には訪問者センターに2階部分を増築し、デゼレト博物館を設置している。訪問者センターの内部はその後数々の変更が加えられたが、テンプルスクウェア伝道部の活動は現在に至るまで依然として、教会の伝道プログラムにおいて重要な位置を占めている。<sup>21</sup>

## 歴史的な意義を持つ土地の購入

教会歴史にちなんだ様々な場所に訪問者センターを設けることによって、回復された真理を効果的に伝えることができると判断した教会は、財政が許すかぎり、歴史的に意義のある土地の購入を開始した。ジョセフ・F・スミス大管長は自身の生い立ちからしても当然のように、教会歴史に対して深い関心を抱いていた。教会は、スミス大管長の管理する時代に初期の教会歴史にちなんだ土地を数多く購入した。

1903年11月5日に最初の史跡地を購入した。それは、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスが殉教したカーセージの監獄だった。また1907年6月にはニューヨーク州パルマイラ近郊のスミス家の農場と家屋100エーカー（約40万平方メートル）を購入した。この敷地には、預言者が1820年に最初の示現を受けた聖なる森も含まれている。前所有者が明け渡した後の1915年、この土地を管理するために、ユタ出身の元ボクサー、ウィラード・ビーンと結婚後1年に満たない新妻のレベッカが派遣された。二人はその地で福音を宣べ伝え、教会の理解者を得るという困難な課題に取り組んだ。二人は84年間の空白を経て、初めてマンチェスターに住んだ末日聖徒である。<sup>23</sup>

1905年から1907年にかけて、教会は預言者の出生地であるバーモント州シャロン



## 20世紀初頭の教会

村近郊の、マック家の農場の所有権を4回に分けて購入した。小さな農家風の訪問者センターを建設するとともに、預言者ジョセフ・スミスをたたえるパーモントみかげ石製の堂々とした記念碑を建設した。この記念碑は、預言者の生誕100年記念日に当たる1905年12月23日、おいのジョセフ・F・スミス大管長が奉献した。高さが38.5フィート（約11.6メートル）あるが、これは預言者の生きた1年を1フィートに見立てたものである。

ミズーリ州において歴史的意義を持つ土地もこの時期に購入した。最初は、1904年にミズーリ州インディペンデンスに購入した20エーカー（8万1,000平方メートル）の広大な土地である。1831年に元々教会が購入した63エーカー（25万4,900平方メートル）の一部を取得したものである。この敷地には現在、礼拝堂と訪問者センターが建設されている。また教会は後にミズーリ州北部のファーウェストに神殿用地を購入している。

これらの史跡地の取得を機に、多くの末日聖徒が教会歴史に対する興味を持つようになった。また、史跡地は全世界に向けて教会のメッセージを発信する場所ともなっている。幾つかの史跡地には、伝道活動を支援するために、テンプルスクウェアで成功を収めた方式に倣って訪問者センターが建設されている。また、訪問者センターが建設されていない史跡地でも、末日聖徒とどのようなかわりを持っているかを訪れる人々に伝える手段が講じられている。

## 教会歴史の出版

B・H・ロバーツ長老は、『モルモン書』の著者が実はソロモン・スポールディングだったとするデマを『ソルトレーク・トリビューン』がどこからか掘り起こしてきて、記事にしているのを知った。ロバーツ長老は編集長と連絡を取り、記事の根拠について文書による回答を求めた。すると、この記事はもともとセオドア・シュローダーが書いたものであって、『ニューヨーク・ヒストリカル・マガジン』（*New York Historical Magazine*）に掲載された記事を再掲載したものであるという回答が寄せられた。

ロバーツ長老はニューヨーク・ヒストリカル・マガジン社に対して反証を挙げて抗議文を書き送った。同社はロバーツ長老の抗議文に好感を示し、同社の雑誌に掲載するために教会の歴史を執筆してほしいと要請した。掲載の手はずが整ったころ、雑誌名は『アメリカーナ』（*Americana*）に変更されたが、ロバーツ長老が執筆した教会歴史の記事はそれから6年間にわたって掲載された。これらの記事を基本にして、全6巻から成る『教会概史』（*Comprehensive History of the Church*）が完成した。そして、教会設立100周年記念祭が実施された1930年に出版された。

ロバーツ長老は長年にわたって、預言者ジョセフ・スミスが作成した資料と預言者の周辺にまつわる資料を集めていた。それらは各種の雑誌に掲載されたものもあったが、ほとんどは教会の定期刊行物に掲載された資料だった。あるとき、ロバーツ長老が収集した資料をフランシス・M・ライマン長老に見せたところ、ライマン長老は自分が所属する十二使徒定員会に対して、これらの資料の出版をロバーツ長老に委託するよう熱心に働きかけた。当時教会が所有していた初期の教会歴史に関連する文書は前後関係があいまいであったり、明確でない箇所があったりしたため、



## 時満ちる時代の教会歴史



エメリン・B・ウエルズ(1828-1921年)は1842年に改宗し、翌年15歳6か月の若さで結婚した。預言者ジョセフ・スミスが殉教した後、彼女の夫は海へ行き、そのまま戻らなかった。教会に忠実にとどまったエメリンは、1845年にニューエル・K・ホイットニーの多妻結婚上の妻となった。ニューエルが死亡した後、1852年にダニエル・H・ウエルズの多妻結婚上の妻となっている。

1877年にエメリンは『ウーマンズ・エクスポネント』の編集長に就任し、出版が中止された1914年までこの地位にあった。19世紀末期の彼女は婦人参政権運動に深くかかわり、女性問題に関する数多くの会議に出席した。

エメリンは終生、教育と執筆を愛した。エメリンは長年、扶助協会の事務長を務めた後、1910年に中央扶助協会管理会第5代会長に召された。

広範囲にわたる注を付けたロバーツ長老の資料の出版は有益だと考えたのである。ライマン長老の提案を受け入れた十二使徒会は、ロバーツ長老に対してこの事業に必要な経費の見積書を提出するように言った。

数週間後にロバーツ長老は見積書を提出したが、ジョージ・Q・キャノン副管長は金額が高すぎると判断して、自分が費用を負担してこの事業を進めることを提案した。ロレンゾ・スノー大管長はキャノン副管長の申し出を受け入れることにした。しかし、出版事業に着手した直後にキャノン副管長が亡くなるという事態が発生した。そこでロバーツ長老が再び呼ばれて事業を完結させるようにという要請を受けたのである。キャノン副管長が出版を予定していた資料に目を通したロバーツ長老は、内容をさらに掘り下げた仕事をしたいと大管長会に申し出た。大管長会はロバーツ長老が最も良いと思う方法で進めることを許可した。こうしてロバーツ長老のもとで作業が開始されることになった。

ロバーツ長老は、日記、印刷物、教会員の記憶などを当たって事実を確認しながら、ジョセフ・スミスの生涯を中心にした教会歴史の編さん作業を進めた。最終的にアンソン・H・ランド長老とジョセフ・F・スミス大管長が原稿を読んで、承認した。こうして完成した全7巻、4,500ページを超える大作は、『教会歴史』(*History of the Church*)という標題が付され、今日に至るまで教会員と歴史家の間で貴重な資料として活用されている。ロバーツ長老はこの『教会歴史』のほかに、全6巻から成る『教会歴史概史』を執筆したことにより、教会設立後の100年間における末日聖徒の歴史家の第一人者に挙げられている。

## 教会のイメージ向上に貢献した末日聖徒の女性

教会歴史にちなんだ土地の取得、訪問者センターの建設、教会歴史の出版により、大衆に与える教会のイメージは改善されたが、大きな貢献をしたのは末日聖徒の女性たちでもあった。教会の多くの女性は中央幹部の支援を受けて、婦人参政権運動に積極的に携わった。これは合衆国中でも有名だった。扶助協会は、全国婦人会議や国際婦人会議に代表団を派遣していた。シカゴ万国博覧会に並行して開催された婦人特別会議において、教会使節団の一員として出席していたエメリン・B・ウエルズは、全国婦人会議議長からの要請を受けて、「ジャーナリズム界における西部の女性」というテーマのもとに力強い演説を行った。彼女は会議の一つの部会を管理するという榮譽にも浴している。ウエルズ姉妹は、1899年にロンドンで開かれた国際婦人会議評議会に合衆国代表として出席し、ここでも雄弁な才能を披露している。

1910年、エメリン・B・ウエルズは83歳になるうかという年齢であったが、教会の扶助協会を管理する召しを受けている。彼女自身はこの召しに驚いたが、「扶助協会を率いる人としてエメリン・ウエルズほどふさわしく、また資格のある人はいなかった。」1912年に、この傑出した女性は、ブリガム・ヤング大学から名誉博士号を受けている。教会の歴史を通じてこれほどの大きな榮譽を与えられた女性はエメリン・ウエルズが最初だった。<sup>24</sup>

## 20世紀初頭の教会

### 注

1. トルーマン・G・マドセン, *Defender of the Faith: The B. H. Roberts Story* 『信仰の擁護者: B・H・ロバーツ物語』(Salt Lake City: Bookcraft, 1980), 233
2. アイズレー・ブーン “He Became an Evolutionary Psychologist” *Evolutionary Psychology* 「彼は新しい心理学者になった」 『新しい心理学』, A・パート・ホースリー “Theodore Schroeder, Mormon Antagonist - Content and Significance of the Theodore Schroeder Collection, New York Public Library” 「モルモンの敵対者セオドア・シュローダー, ニューヨーク公共図書館におけるセオドア・シュローダー収集品の内容と意義」 2 - 3で引用
3. マドセン 『信仰の擁護者』 247で引用
4. マドセン 『信仰の擁護者』 248 - 249参照
5. ブリガム・H・ロバーツ, *Defense before Congress and Defiers of the Law* 『議会における弁護と法の反抗者』(pamphlet of Congressional record and of 1886 Contributor), 12 - 13
6. ジョセフ・フィールディング・スミス編, *Life of Joseph F. Smith* 『ジョセフ・F・スミスの生涯』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 216参照
7. ミルトン・R・メリル “Reed Smoot, Apostle in Politics” 「リード・スムート, 政界における使徒」 博士論文, コロンビア大学, 1950年, iで引用
8. チャールズ・W・ニブレー, *Reminiscences, 1849 - 1931* 『追憶』 1849 - 1931年 (Salt Lake City: Charles W. Nibley family, 1934), 125
9. メリル 『リード・スムート, 政界における使徒』 27 - 28で引用
10. *San Francisco Call* 「サンフランシスコ・コール」, メリル 「リード・スムート, 政界における使徒」 32で引用
11. メリル 「リード・スムート, 政界における使徒」 45
12. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史概史』(Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 6 : 405で引用
13. Conference Report 『大会報告』 1907年10月, 5で引用
14. “Mr. Roosevelt to the 'Mormons'” *Improvement Era* 「ルーズベルト閣下と『モルモン』」 『インブルーメント・エラ』 1911年6月号, 712, 715, 718参照
15. ウィニフレッド・グラハム, *That Reminds Me* 『忘れられないこと』(London: Skeffington and Son, n.d.), 59
16. ユージン・E・キャンベル, リチャード・D・ポール共著, *Hugh B. Brown: His Life and Thought* 『ヒュー・B・ブラウン: その生涯と主張』(Salt Lake City: Bookcraft, 1975), 30 - 31
17. “Father, Are You There?” 「父よ, あなたはそこにおいでになるのですか」 プリガム・ヤング大学ファイヤサイドにおける説教 (Provo, 8 Oct. 1967), 13 - 15
18. プレストン・ニブレー “Charles J. Thomas: Early Guide on Temple Square” 「チャールズ・J・トーマス: 初期のテンプルスクウェア案内人」 『インブルーメント・エラ』 1963年3月号, 167, 202 - 206参照
19. リーバイ・エドガー・ヤング “The Temple Block Mission” *Relief Society Magazine* 「神殿地区伝道」 『扶助協会誌』 1922年11月号, 560
20. エドワード・H・アンダーソン “The Bureau of Information” 「訪問者センター」 『インブルーメント・エラ』 1921年12月号, 132 - 133参照
21. ニブレー 「チャールズ・J・トーマス」 205 - 206; ヤング 「神殿地区伝道」 561 - 563; アンダーソン 「訪問者センター」 137 - 139参照
22. ビッキー・ビーン・ツィンマーマン “Willard Bean: Palmyra's 'Fighting Parson'” *Ensign* 「ウィラード・ビーン: パルマイラの『闘う男』」 『エンサイン』 1985年6月号, 27
23. ツィンマーマン 「ウィラード・ビーン」 26
24. キャロル・コーンウォール・マドセン “Emmeline B. Wells: Romantic Rebel” 「エメリン・B・ウエルズ: ロマンチックな謀反」 ドナルド・Q・キャノン及びデビッド・J・ウィタカー編, *Supporting Saints: Life Stories of Nineteenth-Century Mormons* 『支援した聖徒たち: 19世紀のモルモンの生涯』(Provo: Brigham Young University, 1985), 332 - 334で引用



# 20世紀を前進する

年表 年代	重要な出来事
1902	初等協会が『チルドレンズフレンド』を発刊する
1902	扶助協会が母親教育を始める
1905	末日聖徒病院がソルトレーク・シティーにて開院する
1906	日曜学校が成人のクラスを設置する
1906	ジョセフ・F・スミス、ヨーロッパを訪れた最初の総長となる
1909	ワード神権会が毎週開かれるようになる
1909	大管長会、人類の起源に関する声明を発表する
1911	ボーイスカウトプログラムが採用される
1914	第一次世界大戦がヨーロッパで勃発する
1915	『扶助協会誌』が発刊される
1915	『キリスト・イエス』が出版される
1915	大管長会、会員たちに家庭の夕べを定期的に開くよう勧告する
1916	御父と御子に関する教義上の解説が発表される
1918	死者の贖いに関する示現がジョセフ・F・スミス大管長に与えられる

**教**会にとって新しい時代が始まろうとしていた。前世紀に遭遇した苦難の多くはすでに過去のものとなり、教会は将来に目を向ける余裕を持つことができるようになっていた。20世紀の初頭から20年近くの間、教会を管理したのはジョセフ・F・スミス大管長であった。この間、教会はスミス大管長の指導の下に前進を続けて、全世界の教会員に祝福をもたらしている。

## 繁栄の時代

スミス大管長は前任者に倣って引き続き什分の一を重んじた。聖徒は大管長の呼びかけに忠実に従ったため、教会は1906年末までにすべての負債を完済することができた。スミス大管長は1907年4月の総大会において次のように感謝の言葉を述べている。「今や末日聖徒イエス・キリスト教会は、直ちに返済できないような負債はまったくなくなりました。ついにわたしたちは現金で取り引きのできる状態に到達したのです。もう借金をする必要はありません。末日聖徒が自らの宗教に忠実であって、什分の一の律法を守り続けるならば、わたしたちは将来にわたって借入れを必要としないでしょう。<sup>1</sup> 聖徒たちがこの歳入の律法に従順であったため、教会は史跡地を購入し、訪問者センターを建設し、教会が負債にあえいでいた時代にはできなかった活動に着手することができるようになった。

この繁栄の時代に最も恩恵に浴したのは教会建築プログラムであった。地方の教会堂が数多く建設されると同時にソルトレーク・シティーでも幾つかの主要な建物が建設された。1905年には末日聖徒病院がオープンした。これは教会の病院運営制度において建設された最初の病院であり、その後20世紀を通じて次々に建設される病院の先駆けとなる。

教会は宗教活動の資金手当の一環として、厳選した事業への投資活動を継続していた。デゼレトニュース、ベネフィシャル生命保険会社、ZCMIなどの事業を経営、または投資に対する利子配当収入を得ていた。教会の最大の投資案件の一つがホテル・ユタであった。このホテルはテンプルスクウェアの東に建設され、1911年に営業を開始した。スミス大管長は教義と聖約第124章22 - 24、60節を引用して、教会がこの事業を始めた理由を説明している。ホテル・ユタは、ノーブーハウスについて主が規定されたと同じ機能、すなわち「疲れた旅人」が休息を見いだし、「シオンの栄光を……つくづくと考える」<sup>2</sup> 場所となると説明した。1919年、デゼレト日曜学校連盟が経営していた書店とデゼレトニュースが経営していた書店は合併して、新たにデゼレトブック社と名付けられた。

教会は事務部門を収容する適当な事務所を必要としていた。中央幹部、補助組織、

◀ 教会執務ビル。1917年以来、末日聖徒イエス・キリスト教会の本部となっている。

## 時満ちる時代の教会歴史

1910年に建設されたビショップス・ビルディング（下）と1911年に建設されたホテル・ユタ（右）。20世紀初頭における教会の成長、繁栄、安定を表している。



その他の教会組織は長年にわたってソルトレーク・シティ市街地に散らばる幾つかの建物で事務を処理していた。1910年に奉献されたビショップス・ビルディングはホテル・ユタの後側に位置し、ソルトレーク神殿と通りを隔てた向かい側にあり、管理監督会とほとんどの補助組織の事務所として使用された。イーストサウステンブルストリート47に教会執務ビルが完成したのはそれから7年後になる。教会執務ビルは外壁が花崗岩、内部は大理石と優れた木工細工が施された5階建てのビルである。教会の強さと安定を象徴するかのような堂々とした本部ビルは中央幹部が使用する建物としてふさわしい威厳をたたえている。この建物の3階から5階は同じく事務所を緊急に必要としていた教会歴史記録者事務局と系図協会が入所した。

### 補助組織と神権組織の拡充

20世紀の初期には神権組織と補助組織のプログラムの規模が拡大されるとともに大きな改革が実施された。特に大きな変化を遂げたのは補助組織である。各組織によって具体的に変更された点は異なるが、レッスンを年齢層別を実施することと、一般的な教育資料よりも聖典を強調することが共通した変更点である。

19世紀の扶助協会は、困窮者への援助と直接的な関連を持つ裁縫やその他の活動を実施していた。1902年から全教会で「母親教育」が開始された。当初は地元の扶助協会が思い思いのレッスン資料を作成していたが、1914年に中央管理会は毎週のレッスンの内容を統一することにした。そして間もなく、第1週の神学に始まり、ホ

## 20世紀を前進する

ームメーカー、文学、社会の順でレッスンが実施されるようになった。

20世紀初期の日曜学校で実施された改革に大きく貢献したのが若き帰還宣教師デビッド・O・マッケイである。デビッド・O・マッケイは大学を卒業後、教育の仕事に携わっていた。マッケイ兄弟は、オグデンのウィーバーステーク日曜学校会長に召されたが、その際、レッスンの内容に特別な注意を払ってほしいと言われた。そこでしばらくの間観察した後に生まれたのが、レッスンの目標の設定、レッスンの概要の説明、教材の使用、レッスン内容の日常生活への応用など、従来の教授法を改善したものである。そしてステーク内のすべての日曜学校でクラスを年齢層ごとに分けた。デビッド・O・マッケイは1906年、十二使徒定員会に召されると同時に日曜学校中央管理会の会長会で働く召しを受けた。マッケイ長老は中央管理会会長の一員として全教会における教授法の改善を実施した。1906年以前の日曜学校は基本的に子供と若人のための組織だった。しかし同年、成人のためのクラス、「両親のクラス」が全教会で設置されることになった。

19世紀の青年男子相互発達協会および青年女子相互発達協会は青少年と成人のための集会で、若人と成人と一緒に、神学、科学、歴史、文学のレッスンを受けていた。しかし1903年になって、若人のクラスと成人のクラスは分離されることになった。1911年に青年男子相互発達協会は、青少年に対して徳を身に付けさせ、自然の中で各種の技術を習得させるためにスカウトプログラムを採用することにした。教会は1913年にアメリカ・ボーイスカウト連盟に正式に加盟するとともに、青年男子相互発達協会の登録年齢を12歳に下げた。教会はやがて世界最大のボーイスカウト支援団体の一つとなる。1915年、ボーイスカウトと同年代の若い女性が、ピーハイブと名付けられたプログラムを始めた。これが発端となって後年、教会の若い女性の必要を満たすために年齢別のプログラムが幾つか実施されるようになった。

教会指導者は都市に流入する末日聖徒が年々増えてきたため、質素儉約、純潔、神殿結婚といった伝統的に大切にされてきた事柄を強調した。大管長会はこのため1916年に風紀諮問委員会を発足させ、青少年が適切さを欠くダンスに興じたり、たばこを吸ったり、華やかな服装に走ったりすることのないように注意する責任を同委員会に与えた。ワードでは社交委員会が設置され、健全なレクリエーション活動を実施する責任を与えられた。相互発達協会も活動範囲を広げてレクリエーションプログラムと社交プログラムを実施するようになった。教会指導者は少年非行や不道徳な行為などの問題を未然に防ぐ努力をするよう各ワードに要請している。1920年にはブリガム・ヤング大学において、夏期特別研究会が開かれた。この集会では教師養成、社交およびレクリエーションの指導方法、慈善活動、困窮者に対する援助などについて、ステーク指導者に対する訓練が行われている。<sup>3</sup>

初等協会でも子供に対する教育と活動プログラムの向上を図った。子供たちが初等協会に興味を持つように、クラスを表す名称と象徴が決められた。男の子はトレイル・ビルダーと呼ばれ、女の子はホーム・ビルダーと呼ばれた。他の補助組織と同様、初等協会においても社会的な要求に対応する努力が払われている。1922年には小児病院を開設した。これは中央初等協会管理会会長ルーイ・B・フェルトと副会長のメイ・アンダーソンが多くの身体障害児を目にして、こうした子供たちのため

## 時満ちる時代の教会歴史



中央初等協会管理会の初代会長ルーイ・B・フェルト（1850 - 1928年）。1880年に支持を受けてから47年間会長を務めた。フェルト姉妹は1902年1月に『チルドレンズフレンド』を発刊し、1911年に病院基金を設置し、また1922年に完成した小児病院の建築を監督した。

▶ 初等協会小児病院は30年間にわたってソルトレーク・シティー、ノーステンブルストリートに置かれた。この建物は邸宅を改造したものである。

に自分たちの組織で何かできないかと考えたことが発端となっている。二人はこの事業に着手する前に、合衆国東部の小児病院で採用されている最新の治療法を研究した。こうして設立されたのが初等協会小児病院である。この病院は現在も子供たちのために医療活動を行っている。

補助組織がこのような急速に発展する中で、ジョセフ・F・スミス大管長は神権定員会が教会を主導する日が来ることを待ちわびていた。1906年4月の総大会でスミス大管長は次のように述べている。「わたしたちは、……末日聖徒イエス・キリスト教会のすべての神権評議会が、自らの義務を悟り、責任を引き受け、その召しを尊んで大いなるものとする……日の来るのを待ち望んでいる。その日が来れば、現在補助組織によって行われていることはそれほど必要でなくなるだろう。なぜならば、それらは通常的神権定員会によって行われるからである。主は初めからそのように計画し、理解しておられた。主は、すべての必要を正規的神権組織によって満たすよう定められたのである。」<sup>4</sup>



ほとんどの神権定員会は19世紀末には、定員会集會を月に1回しか開かなくなり、またワード内で全定員会が一緒に集まらなくなっていた。このように集會の回数が減り、不定期になることもあったため、神権定員会は本来の機能を果たさなくなっていた。神権活動を強化するための口火を切ったのは、七十人だった。彼らは七十人第一評議会の指示の下に活動を始めた。1907年、ジョセフ・F・スミス大管長は聖徒を伝道活動に備える責任は七十人にあることを確認した。七十人は、福音の知識を教える責任を補助組織や教会の学校に依存してならないこと、七十人定員会を「学問と指導を与える学校とし、そこで将来求められるすべての働きと義務に備える」<sup>5</sup>ようにとの指示を受けた。このような経緯から、B・H・ロパーズが執筆してレッス

## 20世紀を前進する

ンの手引き『七十人のための神学コース』(*The Seventy's Course in Theology*)が出版されることになり、福音の勉強に対する熱意が全教会で高まったのである。

大管長会は中央神権委員会を設置し、デビッド・O・マッケイ長老を委員長に任命した。この中央神権委員会の提案によって、1909年からワードの神権会は毎週開かれることになった。当初、神権会は月曜日の夕べに開かれていたが、次第に日曜日の朝に移行していった。

中央神権委員会はさらに、アロン神権の職に聖任する年齢を定めた。執事は12歳、教師は15歳、祭司は18歳、長老は21歳で聖任することが提案された。中央神権委員会はこの規定を実施すれば、各定員会の学習コースを効果的に計画することができると考えていた。ふさわしい若い男性に対して一定の年齢でアロン神権の各職に聖任する方式は、その後も継続して実施されたが、時には聖任の年齢が変更されることもあった。

このように教会の各集会とプログラムが新しい方向に展開を始めたことにより、レッスンの教師用手引きや教科書を新たに出版する必要が出てきた。19世紀の出版物の多くが個人やグループが中心となって進められたのに対して、20世紀初期の出版物は教会の補助組織が主導した。1897年に、青年男子相互発達協会は『インブループメント・エラ』(*Improvement Era*)を発刊した。定期的な出版する資金が不足していたため、B・H・ロバーツは自ら資金調達運動に携わっている。B・H・ロバーツ長老が初代編集長を務め、十二使徒定員会のヒーバー・J・グラント長老が経営を担当した。この機関誌は聖徒に対して大きな影響力を発揮するようになると同時に、教会員の作家や詩人の作品を発表する場を提供することにもなった。1929年、『インブループメント・エラ』は『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』(*Young Woman's Journal*)を併合して、教会の主要な成人用機関誌となった。

日曜学校は1900年にジョージ・Q・キャノン一族から『ジュブナイル・インストラクター』(*Juvenile Instructor*)を買い戻して、日曜学校の正式な出版物とした。初等協会は1902年に『チルドレンズフレンド』(*Children's Friend*)を発刊した。1910年から出版された『ユタ系図歴史機関誌』(*Utah Genealogical and Historical Magazine*)には、調査、系図、地元の歴史に関する有益な記事が掲載されている。扶助協会は1914年、『扶助協会会報』(*Relief Society Bulletin*)と呼ばれる組織独自の機関誌を発刊した。1915年には『扶助協会誌』(*Relief Society Magazine*)と改称されている。ブリガム・ヤングの娘であるスーザ・ヤング・ゲイツを主幹としたこの機関誌は、末日聖徒の女性たちの必要を満たすことを目指した。最近の出来事、系図、家庭における倫理、園芸、文学、美術、建築設計などの記事が掲載された。

このようにプログラムと出版物が次々に開発される一方で、大管長会は福音を教える第一の責任は家庭にあることを強調している。スミス大管長は1903年、教会のプログラムは「家庭におけるわたしたちの教えと訓練を補うものとしなさい。家庭環境、模範、訓練が……キリストの福音の真理に添って築かれ、行われるならば、100人のうち一人として迷う子供はいないであろう<sup>6</sup>」と強調している。1909年、ソルトレーク・シティーのグラナイトステーキにおいて家族のために毎週家庭の夕べを開くプログラムが実施された。ジョセフ・F・スミス大管長はステーキ会長会のこの



## 時満ちる時代の教会歴史



ブリガム・ヤングの娘であるスーザ・ヤング・ゲイツ（1856 - 1933年）は教育の機会に恵まれた。父親の私塾に通ったほか、デゼレト大学、ブリガム・ヤング大学、ハーバード大学で学んだ。

1899年から1911年までは青年女子相互発達協会の中央管理会、1911年から1922年までは扶助協会で働いた。

ブリガム・ヤングから著作活動を通じて若人を強めるようにとの指示を受けたスーザは、生涯を通じて地元の出版物に寄稿した。彼女は『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』を発刊し、後に1914年から1922年まで『扶助協会誌』の編集に携わった。また、他界する2年前に『ブリガム・ヤングの生涯』を出版した。

ゲイツ姉妹はブリガム・ヤング大学の信託理事を40年間務めたほか、全国および地元の婦人運動に積極的に参加した。10人の息子と3人の娘をもうけている。

決定は神の靈感によるものであることを言明した。グラナイトステーキでの成功を踏まえて、大管長会は1915年にこれと同様の活動を全教会において毎月実施するように提案している。

「わたしたちは全教会員に『家庭の夕べ』の実施を勧め、奨励するものである。家庭の夕べで父親と母親は子供たちを集め、主の言葉を教えるのである。子供たちはこの機会を通して自分たちの家族が何を必要とし、何を要求されているかをより確かに知るだろう。……もし聖徒たちがこの勧告に従うならば、大いなる祝福がもたらされることをわたしたちは約束する。家庭に愛がみなぎり、子供たちは両親に対する従順の念が深まり、イスラエルの若人の心に信仰がはぐくまれることである。そして彼らは彼らを待ち受ける悪の力と誘惑に立ち向かう力を得るだろう。」<sup>7</sup>

## 福音の教義に関する解釈の明確化

20世紀の初頭は宗教界において原理（根本）主義者と自由主義者もしくは現代主義者の論争が白熱化した時代だった。多くの人々が、モルモンはこの神学上の多種多様な論争においてどのような見解を取るのかという質問を投げかけた。末日聖徒は幸運にも、福音の原則に関してたくいまれな解説力と靈感を備えたジョセフ・F・スミス大管長という指導者を得ていた。スミス大管長と二人の副管長は当時問題になっていた点について、教会の立場を明確にする教義上の論文を数回にわたって公にしている。

末日聖徒の間でも、父なる神、イエス・キリスト、聖霊、およびミカエルまたはアダムが相互にどのような役割を果たしているのかについて理解していない人々がいた。1916年、大管長会は『御父と御子』( *The Father and the Son* ) と題した解説書で次のように説明している。「聖文で用いられている、神を指す『御父』という語は、明らかに異なった複数の意味を有している。」神はわたしたちの霊の父であり、文字どおりの親であられる。イエス・キリストはこの地球の父すなわち創造主であられる。救い主はまた、福音に従って生活することにより霊的な再生を受ける人々の父であられる。イエスは「力と権威において」この地上でエロヒムを代表するため、父と呼ばれ得る。しかしながら、「イエス・キリストはこの地球上で体を受けた霊あるいはこれから体を受ける霊の父ではない。なぜならばイエスもそれらの霊の一人だからである。」<sup>8</sup>

スミス大管長は神会に関する同様の質問に対して、次のように答えている。「聖霊」と「主の御霊」は同義語として用いられることがしばしばあるが、「聖霊は神会の御一方」であるのに対し、キリストの光すなわち主の御霊は、「キリストを通して放射される神の御霊であって、この世に来るすべての人を照らし、彼らに働きかけて、彼らに真理を理解させ、より大いなる光と聖霊の証を得させる」<sup>9</sup> とスミス大管長は説明している。ジョセフ・F・スミス大管長は『福音の教義』を著しているが、この書物はスミス大管長の説教と文書を編集したもので、福音の基本的な概念を明確に定義し、解説している。

この時期には末日聖徒の有能な学者が次々に登場して、福音の概念に理解の光を投げかけている。そうした人物の一人がブリガム・ヤング・アカデミーで科学を教

## 20世紀を前進する

え、またユタ大学の学長を務めたジェームズ・E・タルメージである。

大管長会は1891年に早くも、教会の学校と一般の宗教クラスで使用できる神学書の出版について検討を始めている。教会指導者はタルメージ博士に白羽の矢を立て執筆を依頼した。タルメージ博士は執筆に取りかかる前に、信仰箇条に関する一連の講演会を開いたところ、第1回の講演会に大勢の聴衆が集まり、多くの人々が入場できなくなる事態が生じたため、会場をテンプルスクウェアのアッセンブリーホールに移した。出席者は約1,300名に達した。これらの講演内容は最初『ジュブナイル・インストラクター』に掲載された。二人の十二使徒とカール・G・メーザーほかで構成された出版委員会が原稿を読み、多少の変更を提案した後、1899年に大管長会の指示に基づいて1冊の書物として出版された。これが『信仰箇条の研究』である。タルメージ長老の『信仰箇条の研究』の英語版はその後50版を重ね、また12か国語以上の言語に翻訳されている。現在も教会員が使用しているこの書物は、回復された教義の本格的な研究書として教会の正式な承認を最初に受けた書物である。

タルメージ長老は1911年に十二使徒に召されたが、その後、2冊の重要な書物を執筆した。1912年に出版された『主の宮』(The House of the Lord)と1915年に出版された『キリスト・イエス』である。『主の宮』の出版にはおもしろい経緯がある。ソルトレーク神殿の内部の写真を不正に入手したある非教会員が4万ドルで教会に売りつけようとした。教会が買わなければ東部の雑誌社が買うことになり、その雑誌社は教会の名誉を傷つけるような形で出版するだろうと言って脅迫した。ジョセフ・F・スミス大管長はこの恐喝に耳を貸そうとしなかった。むしろ末日聖徒の神殿内で行われている事柄を一般的な言葉で説明する書物を出版してはどうかというタルメージ長老の提案を受け入れた。タルメージ長老が文章を執筆し、ソルトレーク神殿内部の写真を挿入した『主の宮』は、恐喝者を沈黙させるだけでなく、末日聖徒にとっても貴重な資料となった。

大管長会は、ジェームズ・E・タルメージ長老に対して、彼が救い主の生涯に関して10年前に行った一連の説教を本にまとめて、一般の教会員が活用できるようにしてほしいとの要請をした。タルメージ長老は熱心に原稿を書き始めたが、十二使徒として様々な責任があったために執筆がはかどらなかった。このため、ステーク大会への訪問を免除されることになった。タルメージ長老はソルトレーク神殿にこもって執筆活動を続けた。帰宅が真夜中になることもしばしばだった。こうした7か月及び苦勞の末に完成したのが『キリスト・イエス』である。

タルメージ長老は1915年4月19日の日記に次のように記している。「昨年(1914年)の9月14日に着手して以来、余暇の時間をすべてつぎ込んだ『キリスト・イエス』をついに書き終えた。もし神殿内でこの仕事をする特権に浴していなければ、現時点での完成はとうてい及びもつかなかったことだろう。わたしは神殿でしか得られない靈感を受けた。神殿で一人きりになれたことと、神殿内の静かな環境のおかげで仕事が大いにはかどった。改訂の作業も順調に進められることを希望する。」<sup>10</sup>

タルメージ長老は大管長会と十二使徒定員会からの意見を求め、さらに承認を受けるために、彼らの前で全章を読み上げた。この会合は18回を重ね、2か月間に及ん



ジェームズ・E・タルメージ(1862 - 1933年)は英国で生まれ、1876年5月に家族とともに合衆国へ移民した。一行がソルトレーク・シティに到着したのは1876年6月14日である。タルメージ兄弟はペンシルベニア州ベツレヘムのリーハイ大学の4年間課程を1年間で修了し、さらに研究を続けるために、メリーランド州バルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に進んだ。

ユタに戻ったタルメージ兄弟は1884年から1888年までプロボのブリガム・ヤング大学で化学と地質学を教えた。後に1894年から1897年までユタ大学の学長を務めた。

1911年、チャールズ・W・ベンローズが副管長に召された際、タルメージ兄弟は十二使徒定員会に召された。タルメージ長老は傑出した英語力を持っていた。講演者、著作家として有名である。

## 時満ちる時代の教会歴史

だ。この書物は現在も広く愛読されており、タルメージ長老の研究と靈感の金字塔となっている。

### 科学の時代に呼応する

世界中の人々は過去数十年間にわたって現代科学がもたらした新しい発見と理論に大きな関心を寄せていた。20世紀に入ると技術革新の速度が加速されて、ガソリン自動車やライト兄弟の飛行などの重要な発明が次々に登場した。これらの発明は人々の日常生活に非常に大きな影響を及ぼしていた。技術革新によって、人々はさらに科学への興味を高めたのである。反面、人々は宇宙や生物社会を理解するのに、神学よりも人知に頼る傾向が強くなった。

新しい科学の時代の学者たちは『聖書』に対して懐疑的な目を向けるようになり、聖文の意味と信憑性<sup>しんぴやう</sup>までもを疑問視するようになった。末日聖徒の聖典に対しても、いわゆる「先進的な批判」を浴びせ始めた。1912年、監督教会派のユタ州地区監督であったF・S・スポールディング師は、『翻訳者としてのジョセフ・スミス』(Joseph Smith, Jr., As a Translator)と題するパンフレットを出版した。このパンフレットでは、『高価な真珠』のアブラハム書からの模写に関するジョセフ・スミスの解説と、8人のエジプト学者の解説を対比させていた。ほとんどの末日聖徒は自らの信仰のゆえに聖文の真実性を信じていたが、教会はこのような批判にこたえる必要性を感じていた。1913年の2月から9月まで、ほとんど毎月の『インプループメント・エラ』に、批判に対する回答となる記事が掲載された。

19世紀末期から20世紀初期にかけて最も論議が集中したのは、地球の創造と生物進化論に関してであろう。論議が白熱化する中、大管長会は十二使徒定員会のオーソン・F・ホイットニー長老に、人類の起源に関する教会の公式見解を執筆するよう要請した。こうしてホイットニー長老が作成した原稿は大管長会および十二使徒定員会の承認と署名を受け、1909年、教会の公式声明として発表された。この声明によって以下の事項が確認された。

「すべての男女は、宇宙の御父と御母に似ており、文字どおり神の息子、娘なのである。……

……人は、霊として、天の父母から生まれ、御父の永遠の住まいにおいて成熟するまで養育された後、現世での経験を得るために死すべき体を受けて地上に来た。

……

アダムは地上に置かれた最初の人ではなく、人は下等動物から進化したと固く信じる人々がいる。しかし、これはあくまで人の考えた論理である。主は御自ら、アダムが『すべての人の最初の者』(モーセ1:34)と宣言しておられる。したがって、わたしたちはアダムを人類の父祖と考える必要がある。……人類は天父に似た姿形を持つ人間として生活を始めたのである。」<sup>11</sup>

ジョセフ・F・スミス大管長が心配したのは、教会の若人が進化論の論議に関して、「はっきりしないままに放置されることだった。彼らは、わたしたちが信じているのは単なる空想にすぎないとする理論に対して、信憑性を判断し、その理論には幾つかの限界があることを認知できるほど成熟しているわけでもなく、また勉強してい

## 20世紀を前進する

るわけでもなかった。……進化論に関する論議を当教会の学校では行わないという結論に達してからは、わたしたちは議論の適否に結論を下し、進化論がどれほど正しく、どれほど間違っているかなどについて意見を差し挟まないことにした。教会は主がどのようにして世界を創造されたかについてその手段を知らされているわけではない。……神が明らかにされたのは、わたしたちが神に仕えるための簡潔で具体的な方法だけである。」<sup>12</sup>

## 外国の聖徒たち

教会指導者は1890年代の初期から聖徒に対して、自国にとどまって教会を築くように奨励している。この結果、合衆国以外の国々における末日聖徒の伝道部と支部の数が増大することになった。ジョセフ・F・スミス大管長がヨーロッパを訪れた最初の大管長だったことから、この時期の諸外国における成長が目覚ましかったことを知ることができる。スミス大管長は1906年に、約2か月をかけてオランダ、ドイツ、スイス、フランス、英国の伝道部を訪問した。大管長の訪問は各国の教会を強めるうえで大きな力となった。また、訪問先で数々の霊的な出来事があり、聖徒の信仰が強められた。オランダのロッテルダムで、スミス大管長は、11歳の信仰篤い盲目の少年の目を開いている。この少年は、母親に「預言者は地上のどの宣教師よりも大きな力を持っている方です。どうか集会に連れて行ってください。預言者がわたしの目をのぞき込んでくだされば、必ず癒されます」<sup>13</sup> と言った。

スミス大管長はヨーロッパを旅行中に重要な預言をしている。スイス、ベルン市で開かれた大会において、スミス大管長は天に向かって両手を広げ、次のように宣言した。「この地に多くの神殿が建てられ、皆さんが神殿に入って、先祖を贖うことができる日が来るでしょう。」<sup>14</sup> さらに、「神の神殿は……世界の多くの国々に建設されるでしょう」<sup>15</sup> と述べた。ヨーロッパにおける末日聖徒の最初の神殿は、それから50年ほど後に、スミス大管長が預言した市の郊外に建設され、奉献された。

スミス大管長はユタ州以外の地域に住む教会員が祝福を受けるためには神殿が必要であることを認識していた。「彼らはわたしたちと同じ特権を受ける必要があります。しかし、彼らには手が届きません。彼らは貧しいからです。ここへ来て、生者と死者のためにエンダウメントを受け、この世と永遠にわたる結び固めを受けるための旅費を用意することができないのです。」<sup>16</sup> 外国で最初に神殿が建設された地は、カナダのアルバータ州カードストーンであった。ジョセフ・F・スミス大管長は、1913年にカードストンの神殿用地を奉献した。また1915年にはかつて自身が宣教師として奉仕した地ハワイでも神殿用地を奉献した。両神殿とも、奉献されたのはスミス大管長が他界した後だった。

この時期にメキシコで起きた出来事は、メキシコの教会とメキシコと合衆国の隣接州の将来に非常に大きな影響を与えることとなった。1901年にはメキシコの政情も改善され、伝道部を再開できそうな状態にまで安定していた。チワワにおける末日聖徒の入植地は繁栄しており、スペイン語を流ちょうに話しメキシコ人文化に通じた若い人々は宣教師として働くことができる状態にあった。その後10年間に宣教師の数は20人に増えていた。地元の末日聖徒は指導者として召され、訓練を受けて

## 時満ちる時代の教会歴史



ラファエル・モンロイはサンマルコス支部の支部長であった。モンロイ支部長は信仰を否定することを拒んだために殺害された。

いた。メキシコの聖徒たちはレイ・L・プラットの影響を強く受けている。彼は1907年に伝道部長に召され、4分の1世紀近くにわたって伝道部を管理した。新しい改宗者が続々と教会に加わり、1911年の伝道部内の会員数は1,000名を超えた。

しかしながら、その後のメキシコは革命運動と反革命運動が続くようになり、伝道活動は次第に困難になっていた。その上に事態をややこしくしたのは、国粋主義と反アメリカ主義が台頭してきたことである。1913年8月に至って再び宣教師を撤退させなければならない事態に陥った。

このようにメキシコの聖徒たちは自力で信仰を維持しなければならない状態に置かれた。例えば、メキシコ・シティーの北西約80キロにあるサンマルコスでは比較的最近に改宗したラファエル・モンロイに支部長の責任が与えられた。ところが1915年、宣教師が撤退してわずか2年後に、モンロイ支部長といこのピンセンテ・モラレスが、革命抗争で粗暴になっているだけでなく宗教上の偏見を持った一団に、殺害されるという事件が起きた。二人はその一団に対抗する革命グループに属していたことと福音の証を捨てないことを理由に殺されたのである。

1912年、伝道活動を崩壊に追いやった一団がメキシコ北部の入植地に乗り込んで来た。モルモンの指導者は聖徒の持っていた武器を反逆者たちに没収されたため、7月26日までに入植地を撤退する指令を出した。わずかな人数の男性に付き添われて女性と子供たちはテキサス州エルパソまでの290キロをすし詰め状態の汽車で避難した。残った大多数の男性は数日後、幌馬車と馬に乗って出発した。一行の隊列は2キロの長さにもなったと言われている。7月末にエルパソに逃れた末日聖徒の数は1,300人を超えた。彼らの多くは美しい家と農場を捨てて、上は屋根と下は床板だけの小屋で生活せざるを得なかった。古家の屋根裏を住居とした人々もいた。当時の建物は屋根がトタンびきだったため、燃えるような太陽光線で熱され、息ができないほどの暑さだった。これらの状況を目撃した人は彼らがあまりにも悲惨な状況で生活している様子を見て泣き崩れたと証言している。革命運動はまだ続いていたが、1913年2月にメキシコへ戻った聖徒もいた。革命抗争はこの後も数年間にわたって続くことになる。残った聖徒たちは合衆国に永住した。

しかしながら、モルモンの入植者たちはしばしば神の助けを受けた。コロニア・デュブランのアンソン・コール監督は、情報を流したために仲間が殺されたと言いがかりをつけられ、反逆者たちにより連行された。逮捕された2日後、コール監督はライフルを手にした射撃隊の前に立たされていた。銃殺直前に指揮官は200ペソを支払うならば命を助けると言った。こうしてコール監督は兵に付き添われてコロニア・フアレツへ行き、聖徒たちの支援によって保釈金を調達することができた。この出来事は、コール監督が十二使徒定員会のアンソニー・アイピンス長老から受けた約束の成就であった。アイピンス長老は次のように預言していた。「彼らはあなたのすべての持ち物を奪い、正義の敵が考え得るあらゆる試練をあなたにもたらすであろうが、命を奪う力を持つことはないであろう。」<sup>17</sup>

後年、教会の入植者が高等教育と先進農業技術をメキシコに持ち込んだため、教会は一目置かれ、いろいろな面で好待遇を受けることになった。さらに、メキシコ政府が国内での外国人聖職者の活動を禁止する法律を施行したとき、入植地におい



アンソン・B・オーエン・コール(1863 - 1958年)はユタ州バウンティフルで生まれた。1890年にメキシコへ移住した。フアレツステークのデュブランワードの監督を29年間務めた。

## 20世紀を前進する



レイ・L・プラット(1878 - 1931年)は1887年に家族とともにメキシコへ移住した。1906年に伝道に召され、1907年末にはメキシコ伝道部の部長に召された。1931年までこの任にあったが、1913年にメキシコをやむなく離れ、1921年まで戻るができなかった。1925年、プラット長老は七十人第一評議会の会員に召された。

てメキシコ市民権を取得していた人々は、宣教師、伝道部長、および教会学校制度の指導者を自ら務めている。このようにしてモルモンの入植者は様々な面で力を発揮して、やがてメキシコ全土と中央アメリカにおける教会の発展の基礎を築いたのである。

教会は、メキシコにおける政情不安が続いたため、進出先を合衆国南西部に変更した。メキシコから避難した多くの家族はアリゾナ、ニューメキシコ、テキサスに定着していた末日聖徒の間で大きな力となり、また指導者として活躍した。1915年、大管長会はレイ・L・プラットに対して、スペイン語を話す合衆国住民への伝道活動を管理する責任を与えている。後に、これらの人々の間で偉大な伝道活動が繰り広げられる結果となる。

### 聖徒と第一次世界大戦

1914年にヨーロッパで第一次世界大戦が勃発した。諸外国の聖徒は愛国心に基づいてそれぞれ自国の呼びかけに応じた。英国では、地元の新聞によると、パージー支部の聖徒たちが「愛国心の新記録を樹立した。兵役の年齢に達している人で、政府および軍需産業関連の仕事に就いている人以外の全員が兵役を志願したのである。この記録は更新されそうにもない。我々はいわゆる『モルモン』についてだれが何を言おうとも、彼らは間違いなく『パージーに住む愛国精神の篤い人たち』であることを認めざるを得ない。」<sup>18</sup> ドイツでも末日聖徒は祖国のために戦い、約75名が兵士として命を落としている。

合衆国は大戦勃発後3年を経て参戦した。時の合衆国大統領ウッドロー・ウィルソンは民主主義と自由と平和を確保するための戦争であると宣言した。教会は長年これらの確立を主張してきたため、教会員は信条との矛盾を感じることなく、すぐさま徴兵に応じた。

ほとんどの末日聖徒はユタ州に住んでいたため、ユタの市民の動向が戦争に対する聖徒全体の姿勢として米国民の目に映った。州への割り当てをはるかに上回る2万4,382人の男性が徴兵を志願した。ジョセフ・F・スミス大管長自身の息子たちも6人が兵役に就いた。赤十字はユタ州に対して35万ドルの寄付金を要請したが、ユタ州が集めた金額は52万ドルに達した。政府が自由債の募集を開始したとき、ユタ州の市民は650万ドルの割り当てを受けたが、940万ドルに相当する債券を引き受けた。教会は法人として公式に、85万ドルの自由債を購入した。さらに、補助組織は組織の資金から60万ドル近くを購入した。また扶助協会の女性たちは積極的に赤十字を支援した。

各州は自発的に義勇軍を組織するのが習わしとなっていた。ユタ州は第145野戦砲兵連隊を組織した。約1,500名から成る将校と兵士の圧倒的多数が教会員だった。連隊長を務めたのは七十人第一評議会のB・H・ロバーツ長老だった。この現代の「モルモン大隊」のうち600人は海外に派遣された。

教会は、戦争で荒廃したヨーロッパで飢えに苦しむ人々に食料を提供する準備態勢を整えていた。これはほかの団体にはなかったことである。長年にわたって、このような緊急時に備えて小麦を蓄えていた扶助協会は、720万リットルを超える小麦

## 時満ちる時代の教会歴史

を合衆国政府に売却した。そして、この売却資金は将来、慈善目的に使用するための基金とした。これら有事における教会と教会員の敏速な対応は、聖徒の国家に対する忠誠と愛国心を如実に物語っている。アメリカの各新聞はこれらの迅速な対応を評価する記事を掲載した。モルモンに敵対する雑誌が扇動した結果広がっていた教会に対する否定的な社会通念が、これによって大幅に改善されることになった。

合衆国が1917年に正式に参戦したとき、教会では4月総大会が開催されていた。ジョセフ・F・スミス大管長は大会の冒頭の説教で、戦争に対する教会の姿勢を十分に説明している。大管長は聖徒に対して、たとえ戦争の渦中にあっても福音の精神を失ってはならないと述べた。さらに、戦争のさなかにあっても人々は「人道的精神と、愛と平和を作り出す精神」を持たなければならないと宣言した。また、これから戦地へ行く人々に対して、彼らは「命の使者であって、死の使いではないこと、敵を破壊する目的ではなく、人類の自由を擁護する精神で進軍するように」<sup>19</sup> 指示した。

## 死者の贖いに関する示現

1918年1月23日、十二使徒定員会の一員であり、またジョセフ・F・スミス大管長の長男であったハイラム・M・スミスが死亡した。自身の健康状態も優れなかったスミス大管長は息子の死に大きな衝撃を受けた。「彼は悲しみに打ちひしがれて叫んだ、『わたしは身も心も引き裂かれる思いだ。悲しみに打ちのめされている。心臓は激しく鼓動しており、わたしはやっとの思いで生きている。愛する息子よ、わたしの喜びよ、わたしの希望よ。……息子はまことに人類の王子だった。息子は生涯を通じて一度も、わたしを不機嫌にさせることも、疑いを抱かせるような行動をとったこともなかった。わたしは彼を完全に愛していた。息子ほどに、演説の力をもってわたしの身と霊に感動を与えた人はいなかった。これは、わたしの息子であったためであるかもしれない。しかし、彼は聖霊の火に包まれていた。そして今、わたしはどうしたらよいのだろう。どうすればよいのか。身も心も引き裂かれ、悲しみに打ちひしがれている。神よ、わたしをお助けください。』」<sup>20</sup>

それから8か月後、ジョセフ・F・スミス大管長は霊界における義人の働きに関して栄光あふれる啓示を受けた。1918年10月3日、スミス大管長はイエス・キリストの贖いについて思いをはせながら、『聖書』を開いて1ペテロ3：18 - 20と4：6から、救い主が獄にいる霊たちに教えを宣べ伝えられた箇所を読んでいた。これらの聖句について深く考えていると、主の御霊が大管長のうえにとどまり、スミス大管長は霊界に集まっている「死者の群れ」を示現によって見た。救い主が彼らの間に現れ、義人に福音を説かれるのを見た。主が他の者にこの伝道の業を引き継いで行うよう命じられたこと、また現在の神権時代の忠実な長老たちが死すべき世を去っても死者に伝道しているのを見た。このようにしてすべての死者は贖われるのである。

この「死者の贖いに関する示現」はスミス大管長によって、大管長会と十二使徒定員会に提示され、全会一致で啓示として承認された。1976年にこの啓示は正式に教会の標準聖典に付け加えられ、その後間もなく教義と聖約第138章となった。

20世紀の幕開けから約20年の間に、教会は様々な重要な面で前進を見せた。繁栄の時期に入ったことによって、教会は緊急に必要とされていた礼拝堂と神殿を建設

## 20世紀を前進する

することができ、また預言者が外国を訪れて聖徒を祝福することができるようになった。神権組織と補助組織におけるクラスの充実、大管長会による教義の解説、1918年にスミス大管長が受けた重要な啓示、これらすべてによって聖徒は福音の原則をさらに深く理解することができた。一方、教会は、急進的な科学理論、メキシコにおける革命、世界大戦の恐怖というチャレンジに対しても精力的に対応した。

## 注

1. Conference Report 『大会報告』1907年4月、7で引用
2. 『大会報告』1911年10月、129 - 130で引用
3. トーマス・G・アレクサンダー “Between Revivalism and the Social Gospel: The Latter-day Saint Social Advisory Committee, 1916 - 1922” *Brigham Young Studies* 「復興主義と風紀面における福音：末日聖徒風紀諮問委員会、1916 - 1922年」 『ブリガム・ヤング大学紀要』1983年冬季号、24 - 37参照
4. 『大会報告』1906年4月、3で引用
5. 『大会報告』1907年4月、5 - 6で引用
6. ジョセフ・F・スミス “Worship in the Home” *Improvement Era* 「家庭における礼拝」 『インブルーメント・エラ』1903年12月号、138
7. ジェームズ・R・クラーク編、*Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』全6巻 (Salt Lake City: Bookcraft, 1965 - 75), 4 : 338 - 339で引用
8. クラーク 『大管長会メッセージ』5 : 26, 32, 34で引用
9. ジョセフ・F・スミス 『福音の教義』 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1939), 67 - 68
10. ジェームズ・E・タルメージの日記、1915年4月19日、ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学所蔵古文書、19
11. “The Origin of Man” 「人類の起源」 『インブルーメント・エラ』1909年11月号、78, 80; クラーク 『大管長会メッセージ』4 : 203, 205
12. “Philosophy and the Church Schools” *Juvenile Instructor* 「哲学と教会の学校」 『ジュブナイル・インストラクター』1911年4月号、209
13. ジョセフ・フィールディング・スミス編、*Life of Joseph F. Smith* 『ジョセフ・F・スミスの生涯』 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 397参照
14. サージ・F・バリフ 『大会報告』1920年10月、90で引用
15. “Das Evangelium des Tuns” [“The Gospel of Deeds”] *Der Stern* 「行動の福音」 『デルスターン』1906年11月1日付、332。ドイツ語より翻訳
16. 『大会報告』1915年10月、8で引用
17. トーマス・コタム・ロムニー、*The Mormon Colonies in Mexico* 『メキシコにおけるモルモン入植地』 (Salt Lake City: Deseret Book Co., 1938), 227で引用
18. “Messages from the Missions” 「伝道部からのメッセージ」 『インブルーメント・エラ』1916年2月号、369で引用
19. 『大会報告』1917年4月、3で引用
20. スミス 『ジョセフ・F・スミスの生涯』474



# 変更と継続

年表 年代	重要な出来事
1918.11.23	ヒーバー・J・グラント、教会の第7代大管長として聖任され、任命される
1920.12	デビッド・O・マッケイとヒュー・J・キャノン、世界視察旅行に出発する
1922	大管長法人が設立される
1922.5.6	グラント大管長、ソルトレーク・シティーにおいてKZN（後のKSL）放送を通じて放送する
1925	ソルトレーク・シティーにおいて伝道本部が開設される
1926秋	最初のインスティテュートがアイダホ州モスコで開設される
1928	教会はクモラの丘を買収する
1930.4	教会設立100年祭

19 20年代に入ってから10年間はそれまでの教会歴史と比較すると様々な面において割合平穏な時代だった。第一次世界大戦が終結してから、多くの末日聖徒は仕事を探すためにユタを離れて、カリフォルニアや他の州へ移って行った。また、指導者の指示に従って自分の国にとどまる教会員の数も次第に増加したため、世界各地の支部や地方部が強化されることになった。大管長会は、世界中のあらゆる人々に関心を持っていることを内外に示すかのように、デビッド・O・マッケイ長老とヒュー・J・キャノン長老に世界各地の伝道部を訪問する召しを与えた。教会は1920年代にセミナーを設立し、また初めてインスティテュートプログラムを実施した。またユタ州における最初のラジオ放送局KZNが放送を開始し、福音のメッセージを電波に乗せた。新たに支持された大管長はおよそ30年間にわたって教会を導くことになる。

## 新しい大管長会の組織

ジョセフ・F・スミス大管長は死の床にあっても預言者、聖見者、啓示者として自分を引き継ぐ人のことを考えていた。スミス大管長はヒーバー・J・グラント長老を病室に招いた。病室を訪れたヒーバー・J・グラント長老はスミス大管長の手を握ったときに、大管長の霊的な力と強さを感じていた。そして、死を直前にした指導者から特別な祝福を受けたのである。主は、主の教会を導く人を選ぶに当たって決して間違いを犯されるようなことはないと言った。スミス大管長はグラント長老に告げた。グラント長老は目に涙をいっぱい浮かべ、大管長に対するあふれるばかりの愛を胸に抱きながら、そこを去った。大管長の最後の言葉が耳に鳴り響いていた。「主があなたを祝福されるように、ヒーバー、主の祝福があるように。」<sup>1</sup>

ジョセフ・F・スミス大管長が亡くなってから4日後の1918年11月23日、十二使徒定員会はソルトレーク神殿において会合を開いた。そして、ヒーバー・J・グラントを教会の第7代大管長として聖任し、任命した。グラント大管長はユタで生まれ育った最初の大管長である。1882年以来十二使徒定員会会員として働いてきたグラント大管長は不屈の意志を持つ人として知られていた。大管長は個人として持つ限界をどのようにして克服してきたか、弱点を持っていてもそれを克服するにはどうしたらよいかというテーマを好んで採り上げた。またラルフ・ワルド・エマーソンの言葉を愛した。「継続して行う物事は容易に行えるようになる。それは物事の本質が変わるからではなく、わたしたちの力が増すからである。」

グラント大管長は非常に霊的な人である。神殿での会合を含む数回の会合において、グラント大管長は話している間に、亡くなったジョセフ・F・スミスに酷似した

## 時満ちる時代の教会歴史



ヒーバー・J・グラント(1856 - 1945年)は1882年に使徒として召され、1916年以降十二使徒定員会会長として働いた後、62歳で教会の第7代大管長となった。

グラント大管長は20世紀の教会に大きな影響を与えた。グラント大管長の中央幹部在任期間はデビッド・O・マッケイに次いで長い。また、27年の大管長在任期間はブリガム・ヤングに次いで2番目に長い。

顔<sup>へんぽう</sup>に変貌したことが報告されている。<sup>2</sup> グラント大管長が大管長に召された当時、流感が世界中で大流行したため、大規模な集会はすべて中止された。このためグラント大管長は1919年6月まで教会の大管長として支持を受けていない。グラント大管長は支持を受けたときに、アンソン・H・ランド長老を第一副管長に、チャールズ・W・ペンローズ長老を第二副管長に選んだ。

スミス大管長が亡くなり、その後新しい大管長会が組織されたことにより、十二使徒定員会に一つの空席が生じた。グラント大管長は親しい友人であり忠実な教会員であったリチャード・W・ヤングを召すであろうと、おおかたの使徒は予想していた。実際にグラント大管長も二人の副管長の了承を得て、リチャード・ヤングを使徒職に召すつもりでいた。そしてこの空席を埋めるべき人について考え、祈り始めた。やがて大管長会と十二使徒定員会の会合が開かれたとき、グラント大管長は提示して承認を得るために、リチャード・W・ヤングの名前を記したメモをポケットの中から引っ張り出した。ところが、グラント大管長の口から出た言葉は、主は十二使徒定員会の空席を埋めるべき人として合衆国北西部諸州伝道部の部長メルビン・J・バラードを望んでおられるという言葉だった。主は確かに教会の大管長に対して靈感をお与えになるということを経験を通して学んだとグラント大管長は後に証している。<sup>3</sup>

バラード長老の母親は、出産する前に、やがて生まれてくる息子が主イエス・キリストの使徒となるであろうということを驚くべき方法で知らされている。<sup>4</sup> この霊的な体験は後に、バラード長老が祝福師の祝福において主の特別な証人の一人になると宣言されたことによって確認されている。

1921年、アンソン・H・ランド副管長が死去した。グラント大管長はアンソニー・W・アイピンスを副管長に選んだ。アイピンス長老の召しによって十二使徒定員会に生じた空席を埋めたのは、ユタ大学の学長であったジョン・A・ウィットソーである。4年後にチャールズ・W・ペンローズが死去すると、管理監督であったチャールズ・W・ニブレーが大管長会の一員となった。こうしてチャールズ・W・ニブレー副管長とアンソニー・W・アイピンス副管長が1931年までグラント大管長の副管長を務めることになる。教会歴史記録者であったランド副管長に代わって召されたのが、ジョセフ・F・スミスの息子ジョセフ・フィールディング・スミスである。彼はその後半世紀以上にわたってこの職を務めることになる。

グラント大管長は大管長に任命されると間もなく、教会の管理方法を変更し、また新しい手続きを幾つか導入した。これらは今日に至るまで実施されている。その第1は、従来、大管長会は他の中央幹部を副会長として各補助組織の会長を兼任していたが、これを改め、大管長会は各補助組織の会長を兼任しないという方針である。第2は、教会の宗務上の資産を保持し、また管理するために大管長法人が1922年初頭に組織された。この法人の目的は教会の非課税資産を管理することにあった。同じ時期にシオン資産保護法人が設立されたが、この法人は純粋な投資と収益を目的とする資産の管理に当たった。これらの保有財産について、一般的には非収益事業目的であることを主張できたが、教会は自発的に税金を納めた。

## 変更と継続

### 教会と国際連盟

第一次世界大戦の終結後、合衆国大統領ウッドロー・ウィルソンは世界の恒久的平和を確立するための計画を発表した。討議と議会制手続きにより、世界各国間の紛争を解決することを目指した国際連盟の創設がこの計画に含まれていた。ジョージ・ワシントンが告別の辞を発表して以来、合衆国は諸外国特にヨーロッパの国々との紛争に関与することをできるかぎり避けてきた。したがってウィルソンの計画は従来の外交政策からの変更を意味していた。大統領は合衆国上院に対して条約の批准を求めたが、上院では条約の是非を巡って激しい論争が展開された。リード・スムート使徒を含む共和党上院議員の多くは、アメリカの主権を尊重する条項を加えた修正案を提示し、この修正案以外による連盟への参加を拒否した。その他の議員は国際連盟に全面的に反対した。

1919年2月、平和維持を主張する西部山間諸州の議会連盟がソルトレーク・シティーで会合を開いた。合衆国前大統領ウィリアム・ハワード・タフトがこの会議に出席した。そしてヒーバー・J・グラント大管長は会議の幾つかの部会の進行役を務めた。7月にはアイピンス副管長が大管長会を代表して、連盟に賛成の意志を表明し、また数名の中央幹部は夏の間に開催されたステーキ大会においてこれを支持する意向を表明した。

ウィルソン条約を支持するこれらの人々の努力にもかかわらず、条約支持派は合衆国議会において全面的な敗北を喫した。教会においても強硬に反対意見を表明する教会員と賛成意見を表明する教会員が真っ向から対立して、教会が大きく二つに分かれる事態となっていた。このため、上院での敗北が決定した後開催された10月総大会において、グラント大管長は過去1年間の出来事について触れ、論争の結果として生じた事態に遺憾の意を表明した。そして末日聖徒は互いに赦し合うよう求めた。グラント大管長は使徒に召されて間もないころ、ジョン・テラー大管長から受けた忠告を紹介した。「グラント長老、あなたが責任を果たすときに忘れてはならないことは、愛と赦しの気持ちを常に心に満たしておくことです。」

グラント大管長は心に一片のわだかまりも残していなかったことは明白である。グラント大管長はその後リード・スムートを尊敬し、親交を続けている。また国際連盟に反対した中央幹部のうちチャールズ・W・ニプレー、J・ルーベン・クラーク、デビッド・O・マッケイが後に大管長会においてグラント大管長の副管長に召されたという事実は、遺恨を残していないことの証明である。<sup>5</sup> しかし政治的に未解決の問題がまだ存在していた。これは道義的問題で、解決までにはしばらくの時を要することになる。

### 知恵の言葉と酒類製造販売禁止法の徹廃

この時期に合衆国の一部の人々は国内の罪悪や不正を一掃する運動を繰り広げていた。この運動の核となっていたのは、酒精飲料の販売禁止を求める新教正統派プロテスタントのグループだった。教会と教会の指導者はこの運動を支持した。そして間もなくヒーバー・J・グラント大管長を中心とするユタ州酒類製造販売禁止連盟が結成された。しかしながら、リード・スムート上院議員をはじめとする数人の教

## 時満ちる時代の教会歴史

会指導者は、酒類の製造販売を全国的に禁止するのではなく、特定の地域（州、市など）ごとにその地域の裁量に任せることを主張した。またある指導者は、こうした禁止規定は自由権の侵害であり、教会員に対しては飲酒の害悪を説き続けるべきだが、いずれを選ぶかは教会員の判断に任せるべきだと主張した。しかし、酒類販売を法律によって禁止することを望む声が非常に大きかったため、議会は合衆国憲法修正第18条を承認し、酒類製造販売禁止法は国の法律となった。

1920年代、監督は神殿参入を希望する会員の面接を行う際に、知恵の言葉の原則を守ることを奨励するようにとの指示を受けていた。教会はこのほかに、機関誌特に『インブループメント・エラ』( *Improvement Era* ) を通じて喫煙に反対するキャンペーンを展開した。科学的根拠と教会の教義上の理由から、飲酒と喫煙をやめるように訴える記事が多数登場した。教会指導者はこのほかにも、広告用看板を使用したたばこの宣伝を禁止することを含む、喫煙に反対する運動を法律によって支援することを強く求めた。グラント大管長は飲酒と喫煙に反対する説教をしばしば行い、先に制定された法律の厳格な施行を支持する演説を行った。グラント大管長は、『デゼレトニュース』( *Deseret News* ) は酒類製造販売禁止法の施行を公式に支持すべきだという主張も行っている。さらに、教会は酒類製造販売禁止連盟に対して資金援助も実施した。

酒類製造販売禁止法が法律としての効力を有していた間も、この法律を廃止させるための運動が大々的に展開されていた。教会が酒類製造販売禁止法を熱心に支持し、またグラント大管長が同法を熱心に支持していたことは衆知の事実であったにもかかわらず、ユタ州は修正第18条の撤廃賛成に票を投じた36番目の州となった。皮肉にも、この投票によって酒類製造販売禁止法の廃止が決定したのである。グラント大管長は教会員が大管長の指導と勧告に従わなかったことについて公に失意を表明した。グラント大管長は、もし教会員が大管長の忠告に従っていれば、飲酒や喫煙に伴う苦しみ、悲しみ、霊的墮落、肉体的健康への悪影響の多くを避けることができたはずであると主張した。後にジョージ・アルバート・スミス長老は、生ける預言者の勧告に従わない愚かさのゆえにもたらされた結果と後々まで続く影響について、次のように述べた。

「今日わたしたちの中に、人の哲学と愚かさによって目を見えなくされた者がいます。これらの者は、神がこの教会の頭に据えられた人の忠告と勧告を受け入れませんでした。

わたしはここに立って、わたしたちがどのようにグラント大管長の勧告を拒否したかを考えると深い悲しみを覚えます。わたしを『わたしたち』の中に入れてもらいたくありません。わたしは預言者の勧告に従いました。しかし、この中にこの教会の大管長の忠告を聞き入れようとせず、修正第18条の廃止に賛成し、わたしたちの社会に酒精飲料を再び持ち込むことを承認し、合法化した者がいるのです。この決定はわたしたちの間に事故と殺人を増加させています。また、アメリカの数多くの息子娘たちが自分を見失い、道徳的に引き返すことのできないところまで迷い出てしまいました。

わたしたちの頭として立つ人の言葉に耳を傾けて、各々の義務を果たしていたな

## 変更と継続

らば、今わたしたちに降りかかっているような災いがこの盆地や他の場所に来ることはなかったでしょう。少なくとも、わたしたちはその災いに対して責任はありませんでした。

確たる知識を持っているわけでもない人が突然、うまい考えがひらめいて、『これが正しい』『あれが正しい』とそそのかしたのです。それは主の勧告と相いれないものでしたが、ある人々はそれを試してみることに合意しました。主は確かな忠告を与えて、その忠告を解釈する人として大管長を任命しておられます。大管長の忠告を無視した人々はやがて大変な過ちを犯したことに気づくでしょう。』<sup>6</sup>



ヒーバー・J・グラント大管長の指示により世界視察旅行に出発したデビッド・O・マッケイ（右）と同僚のヒュー・J・キャノン（左）。二人は、教会指導者が世界各地の末日聖徒の実状を検討するに当たって、状況を把握している人物を必要とするという判断から、情報の収集旅行に出発した。

マッケイ長老はその後の生涯を通じて、教会と世界の人々の気持ちを理解する指導者として知られることになった。マッケイ長老は使徒時代によく旅をしたが、大管長に召されてからもしばしば各地を訪問した。マッケイ大管長の指導の下に教会は世界の教会となった。

## 伝道事業の継続

第一次世界大戦終結後、教会はヨーロッパの幾つかの国において宣教師の再入国の認可を受けることができなかった。しかしながら、ヨーロッパ伝道部の部長ジョージ・F・リチャーズは、彼の後継者となったジョージ・アルバート・スミス長老およびリード・スムート上院議員の協力を得て、オランダ、ノルウェー、スウェーデン、デンマークにおいて宣教師が伝道活動を行う許可を得た。ドイツでの伝道が再開されたのは1920年の秋、南アフリカの伝道が再開されたのは1921年の春であった。

世界各地の末日聖徒に関する現況を把握することと、すべての国民、部族、国語の民、民族に福音を宣べ伝えるという聖文上の命令を実行するために、グラント大管長はデビッド・O・マッケイ長老と『インブループメント・エラ』の編集長ヒュー・J・キャノンを全世界を訪問する旅に遣わした。『デゼレトニュース』の報じたところによると、マッケイ長老は世界各国の指導者から正式な歓迎を受けられるように、教育コミッショナーという肩書きで伝道部を歴訪することになった。グラント大管長はマッケイ長老に対して次のような指示を与えた。「伝道部を全般的に調査し、状況を調べ、そのデータをまとめてください。つまり、全般的な情報を入手して、大管長会と十二使徒評議会が検討する際に、実状を十分に把握したあなたに対応できるようにしてください。』<sup>7</sup>

二人の使節は1920年12月4日、教会指導者、家族、友人の見送りを受けて出発した。エンプレス・オブ・ジャパン号に乗ったマッケイ長老は日本までの航海の大半を船酔いに悩まされた。その船酔いの様子をマッケイ長老は次のように記している。「昨晩の夕食よ、さようなら。昨日のロータリークラブ主催の昼食会よ、さようなら。そしてそれから60時間というものは、わたしが母のひざの上で与えられて以来口にしてきたあらゆる食物を受け付けなくなった。わたしは前世に通じる入り口をまたいで逆戻りしてしまったかと思うほど、この世の食物がのどを通らなくなってしまった。』<sup>8</sup>

日本で宣教師たちに会った後、二人は朝鮮、満州を経由して中国に渡った。北京に到着した二人は国を奉獻するための場所を探して歩き回った。そして、最終的にかつて中国皇帝の住居であった紫禁城（故宮）の城壁までやって来た。門をくぐり、中国人の悲しみの象徴である「いとすぎ」の森まで歩いて行った。マッケイ長老は圧制を受け悲しみに閉ざされたこの民に対して天の祝福を祈り求めるには絶好の場所であると感じた。キリストの現代の証人は頭を垂れて祈りをささげた。こうして、回復されたイエス・キリストの福音を宣べ伝える神の正式な僕たちが中国に入るた

## 時満ちる時代の教会歴史

めの扉の鍵は開かれたのである。

ハワイへ立ち寄ったマッケイ長老とキャノン長老は、ライエで教会経営の学校を視察した後、他の島を訪れることにした。キャノン長老は、父ジョージ・Q・キャノンが1851年7月に最初のハワイ人にバプテスマを施したマウイ島のペレフを訪れたいとしきりに願った。それから34年後にマッケイ大管長はマウイ島であった出来事について語っている。

「こうしてわたしたちはここへやって来ました。わたしはこの場所（コショウの木が生えている場所を指して）に立つと、古い木造の家があることに気がつきました。すると、彼は『あれが恐らく礼拝堂です』と言いました。その古い家はそこからかなり遠くにあるように見えました。見渡したところ、その古屋以外には何もありませんでした。『多分ここでしょう。あなたのお父さんジョージ・Q・キャノンとナペラ判事が人々と語り合った場所に、今わたしたちは立っていると思います。』わたしたちは周囲の様子、そこにいた人々、その場所の霊的な意味を考えると心が動かされるのを感じました。東洋への旅の間に数々の霊的な現れを受けましたが、ハワイに着いてから同じような経験をしていました。『祈りをささげるべきだと思います』とわたしは言いました。

そしてわたしが祈りをささげました。参加した全員が目を閉じました。非常に霊的な集まりでした。祈りを終えてその場を去ろうとしたとき、ケオラ・カイリマイ兄弟がE・ウェズリー・スミス兄弟をわきへ呼んで、ハワイ語で何かを熱心に話していました。わたしたちは彼らをそのままにしてしばらく歩き、振り返ると二人はまだ話し込んでいました。カイリマイ兄弟は祈りの間に目にしたことについてハワイ語で熱心に話していたのです。（近くを指さして）二人はここで立ち止まり、話していました。そしてE・ウェズリー・スミス兄弟がこう言いました。『マッケイ兄弟、カイリマイ兄弟が今しゃべったことが分かりますか。』わたしは『いいえ』と言いました。『カイリマイ兄弟の話はこうです。あなたがお祈りしている間、わたしたち全員は目を閉じていました。カイリマイ兄弟はヒュー・J・キャノンとE・ウェズリー・スミスと思われる二人が列から前へ出て、だれかと握手をしているのを見ました。カイリマイ兄弟はお祈りをしているのにキャノン兄弟とスミス兄弟はどうして握手なんかしているのだらうと思いました。そこでカイリマイ兄弟は目を開けてみると、二人は目を閉じてきちんと列の中にいました。カイリマイ兄弟はきっと示現を見たのだと思って、すぐにまた目を閉じました。』

さて、ヒュー・J・キャノン兄弟は顔形が父のジョージ・Q・キャノン長老と非常によく似ていました。わたしは旅の間に親子がうり二つのようだとキャノン兄弟に何度か話していました。もちろん、E・ウェズリー・スミス兄弟もジョセフ・フィールディング・スミス大管長と同様に、スミス家の人々が持つ特徴を受け継いでいました。ケオラ・カイリマイ兄弟が、二人がそこにいたと考えたのも不思議なことではありません。そこでわたしはこう言いました。『霊的なカイリマイ兄弟が見たのは、かつてハワイで伝道したジョージ・Q・キャノン長老とジョセフ・F・スミス大管長だったと思います。』

さらに少し歩いてから、わたしは言いました。『カイリマイ兄弟、わたしはあなた

## 変更と継続

が受けた示現にどのような意味があるのかは分かりませんが、わたしたちと昔の宣教師たちとを隔てている幕が非常に薄くなっていったことは確かです。』するとわたしの横にいたヒュー・J・キャノン兄弟は涙で頬をぬらしながら言いました、『マッケイ兄弟、わたしたちを隔てる幕はありませんでした。』<sup>9</sup>

マッケイ長老とキャノン長老は、南太平洋への船便の接続が便利なサンフランシスコまでいったん戻った。二人はそこでヒーパー・J・グラント大管長と自分たちの妻に会った。そして、大管長からアンソン・H・ランド副管長の訃報を知らされたため、二人はいったんソルトレーク・シティーに戻ることにした。3月末に再びサンフランシスコに戻ったマッケイ長老とキャノン長老はタヒチに向けて出発した。12日間の船旅だった。二人は4月12日にタヒチに到着したが、伝道部長は伝道部内を旅行中だったため会うことができなかった。二人の長老はタヒチからララトンガを經由して、会見が予定されていた最初の目的地ニュージーランドのウエリントンに到着した。ニュージーランドでは9日間滞りして宣教師や聖徒たちとの交流を深めた。現在の神権時代に使徒がニュージーランドを訪れたのはこれが最初である。

マッケイ長老とキャノン長老は1921年4月30日にオークランドを出発してサモアに向かった。蒸気船トファ号でサモアに到着した二人の長老は大勢の教会員から歌と歓喜の叫び声で迎えられた。サモアには1か月以上にわたって滞在した。島々を巡り、聖徒たちとの集会を開き、また政府官吏と会見した。マッケイ長老は行く先々で大勢の聴衆を前に説教を行った。現地の人々、政府官吏、訪問者など1,500人以上が出席する集会になることもしばしばあった。マッケイ長老は説教の際に通訳を介していたが、あるとき通訳を中断させて話し始めた。会衆が英語で話している自分の話を理解していることが分かったからである。全会衆が異言を解釈する賜物を受けたのである。

模範と証によって、デビッド・O・マッケイ長老とヒュー・J・キャノン長老はサモアの人々の心に入り込むことができた。やがてサモアを離れる時が来ると、人々は涙ながらにとどまってほしいと訴えた。マッケイ長老は御霊の励ましを受けて、人々を振り返り、馬を降りると、何をしようとしているかを人々に告げた。そして両手を高く挙げ、使徒職と神権の権能と力によって祝福を宣言した。別れを告げるに当たってこれほど完璧な方法はなかった。マッケイ長老はきびすを返すと、聖徒たちが白いハンカチを振って別れを惜しむ中を出発した。サモアの人々は後にマッケイ長老が祈りをささげた場所に記念碑を建てている。

トンガでははしかが流行していたため、入国するには12日間の検疫を受けなければならなかった。マッケイ長老自身はトンガを訪問することにしたが、キャノン長老には検疫を避けるためにニュージーランドへ向かわせた。

マッケイ長老はトンガからニュージーランドへ向かい、2週間にわたってオークランドとヘースティングスを訪れた。1921年8月2日、二人の旅行者はオーストラリアのシドニーへ向かった。それまで訪れた国々では大勢の人々に迎えられたのとは対照的に、シドニー、メルボルン、アデレード、ブリスベンではわずかな数の聖徒しか集まらなかった。しかしながら、二人の長老は人々が持つ深い霊性を感じ取っていた。

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョセフ・ウィルフォード・ブース（1866 - 1928年）は生涯の大半を中近東において宣教師として過ごした。中近東への最初の伝道地は1898年のトルコだった。後に彼は1903年から1909年、1921年から1924年と2度にわたってトルコ伝道部部長を務めている。

ブース部長は1905年アテネのマースヒルにおいてギリシャを福音を宣べ伝える地として奉献した。トルコ伝道部はアルメニア伝道部と改称されたが、ブース部長は1924年から1928年まで部長として同伝道部を管理している。ブース部長は解任の知らせが届く直前にシリアのアレッポで死亡し、埋葬された。

オーストラリアをたつと、次は東南アジアへ向かった。東南アジアの各国では食糧が満足に得られないため、やせこけた人々であふれていた。その悲惨な状態の一例を挙げると、インドでマッケイ長老は通りに立っていると、すぐ横にいた物乞いが静かに息を引き取る場面に遭遇した。インドからエジプトに向かう船旅は、うだるような暑さとその上に湿度が高いという過酷な条件を強いられる旅となった。眠れない夜を過ごす二人の宣教師は故国で待つ家族を思い出していた。ある晩、マッケイ長老は船のデッキに腰かけていると、隣に座った女性が泣きやまない赤ん坊を抱いて途方に暮れているのを見た。するとマッケイ長老はその母親にほほえみかけ、自分が赤ん坊を抱いている間、体を休めるように言った。母親は喜んで申し出を受け入れた。すると間もなく赤ん坊は使徒の腕の中ですやすやと眠り始めた。

パレスチナでは、デビッド・O・マッケイ長老とヒュー・J・キャノン長老はアルメニア伝道部の部長に新しく召されたJ・ウィルフォード・ブースと落ち合い、地域内の小さな支部を一緒に回ることになっていた。しかし、二人はエルサレムに到着したときにブース部長とどこで合流するのかを知らなかった。数日間、エルサレムの寺院や史跡を巡った後、二人はシリア北西部のアペロを経由して、エルサレムの地中海沿い北部にある港町ハイファへ移動することにした。予定ではサマリヤを経由して自動車で移動することになっていたが、マッケイ長老は列車で行くべきだという強い気持ちを感じたためにこのように変更したのである。

二人はハイファに到着したもののどこへ泊まるかも分からなかった。マッケイ長老は適当なホテルを探しに出かけた。そしてその間キャノン兄弟が荷物の番をしていた。10分後にマッケイ長老は高級ホテルを見つけてボーイと一緒に戻って来た。そして駅の大きなドアを出ようとしたところ、マッケイ長老は肩をたたかれた。「マッケイ兄弟ではありませんか。」振り返って見ると、その人がブース部長だった。もし二人が自動車で移動していたとしたら、もしエルサレムを出発する前にハイファでのホテルを予約していたら、もしエルサレムにもう少し長く滞在していたら、ブース部長と会うことはできなかったであろう。こうして二人は聖徒たちとの霊的な集会を数多く開き、またユタにおける特別断食によって集められた資金を届けることができた。この資金は地域の教会員にとって大きな恵みとなった。

デビッド・O・マッケイ長老とヒュー・J・キャノン長老の世界視察旅行はヨーロッパの各伝道部の訪問をもって全日程を終了した。5か月間に約10万キロを踏破した二人の長老は1921年のクリスマスイブに故郷へ戻った。マッケイ長老は1922年4月の総大会において、課せられた使命を成功裏に果たすことができたことを報告し、次のように力強く証している。「清さと率直な態度と信仰をもってみもとへ行くならば、キリストはいつでもあなたが必要とするときに助けと慰めと力をお与えになります。」<sup>10</sup>

デビッド・O・マッケイ長老は、ユタに戻って間もなく、ヨーロッパ伝道部の部長に召された。マッケイ部長は、特に英国において教会に対する大衆イメージを改善するという特別な責任を与えられた。マッケイ部長はジョン・A・ウィットソー長老とリード・スムート上院議員をロンドンに招いて、英国の主要な新聞の社主ならびにスタンレー・ボールドウィン元英国首相との特別な会合を開いた。この会合において各新聞社は彼らが末日聖徒に関して報道していた記事の多くが真実を伝えてい



## 変更と継続

十二使徒定員会のメルビン・J・バラード長老（1873 - 1939年）は1925年12月25日アルゼンチンのブエノスアイレスにおいて、南アメリカを福音を宣べ伝える地として奉献した。この写真は1926年6月に撮影されたものであるが、この場所で奉献の祈りがささげられた。

写真左から右：南アメリカ伝道部部长レイホルツ・スツーフ、妻のエラ・スツーフ、メルビン・J・バラード長老、レイ・L・ブラット副管長、ジェームズ・バーノン・シャープ。



なかったことを知り、今後モルモンに反対する情報を受け付けないことを約束した。

間もなく、世界の他の地域と教会の関係にも改善が見られるようになった。フランス、チェコスロバキア、ババリアで伝道部が開設または再開された。1925年にメルビン・J・バラード長老は南アメリカ伝道部を再開した。アルゼンチンのブエノスアイレスで行われた奉献の祈りでバラード長老は次のように預言している。「この地における主の業はしばらくの間、ゆっくりと成長するであろう。ちょうど<sup>かし</sup>櫨の木がどんぐりからゆっくりと生長するように。一日で生長し、そして枯れてしまうひまわりのような生長ではない。この地において多くの人々が教会に加わるであろう。やがて伝道部が分割され、教会で最も力ある伝道部となるであろう。……この地のレーマン人は教会において力ある者となる日がやがて来るであろう。」<sup>11</sup>

伝道に対する教会員の気持ちを代表するような例がパーシー・D・マッカーサーの模範に見ることができる。知恵の言葉を守るパーシーは有能な短距離走者で、440ヤード走のカリフォルニア州チャンピオンだった。パーシーは競技の前に祈ることが多かった。競技に勝つためではなく、全力を尽くせるようにという祈りだった。パーシーは1927年ネブラスカ州リンカーンで開催された全米陸上競技会にロサンゼルス競走クラブの代表として出場し、デッドヒートの末他の二人の走者とともに同着で1位になった。1928年のオリンピック出場について次のように語っている。「コンディションは上々でしたからオリンピック代表に選ばれる自信がありました。しかし伝道の召しが来ました。わたしにとって、伝道はどのような競技よりも大切でした。」間もなくマッカーサー長老はメキシコへの伝道に出発した。<sup>12</sup> マッカーサー長老のように教会を最優先にした偉大なスポーツ選手は枚挙にいとまがない。マッカーサー長老は陸上競技界における名声や将来約束されていたであろう富に背を向け、地上に再び回復された福音を心の貧しい人々に宣べ伝えることを選んだのである。

さて、教会指導者は訓練された宣教師を伝道地に派遣するために、ソルトレーク・シティに宣教師訓練センターを設立した。そしてリロイ・スノーを初代の所

## 時満ちる時代の教会歴史

新しく召された宣教師はソルトレーク・シティーへ来て、指導を受け、自身の神殿のエンダウメントを受け、宣教師の任命を受けるのが、長年の慣習とされていた。1924年に宣教師がソルトレーク・シティーに滞在する際の宿舎を設立することが承認された。1925年に1軒の家を購入し、改造して宿舎とした。ロレンゾ・スノー大管長の息子、リロイ・スノーが初代所長に指名された。

同所で実施された訓練プログラムは次第に日数が増えて、2週間に及ぶところとなり、福音、教会の組織、英語および外国語の指導、健康法、運動、食事のエチケットおよびマナー、服装、時間厳守など、教育項目は71に及んだ。



長に任命した。宣教師はここで、マナー、時間厳守の大切さ、伝道方法などについて2週間にわたる集中訓練を受けた。福音の原則に関する指導は中央幹部が実施した。1925年2月3日に当時伝道本部と呼ばれた建物が完成し、ヒーバー・J・グラント大管長により奉献されている。最初のクラスに集まったのはわずか5人の長老にすぎなかった。しかし、1927年には3,000名の青年男女が訓練を受けるまでになっている。<sup>13</sup> 訓練を受ける宣教師の数がこれほどまでに急増したのは、1925年の10月総大会でグラント大管長が教会はさらに1,000人の宣教師を必要としていると述べたことが一因となっている。

この時期には、宣教師がより効果的に福音を宣べ伝えるための方法が、幾つか実施された。カリフォルニア伝道部の若き宣教師ガスティブ・O・ラーソン長老は、一連の視覚教材を使って福音を教える方法を発案し、伝道部長の許可を得て、伝道部内全域で実施した。これはスライドを使いながら対話する方法で、古代アメリカ文明、モルモンの歴史、末日聖徒の神殿と神殿の儀式という3つのテーマを中心に構成されていた。数千名に上る非教会員がラーソン長老の話聞き、スライドを見に集まった。しばらくして、新たに東部諸州伝道部の部長に召されたB・H・ロバーツは、伝道部内の宣教師に対して福音を教えるうえでの基本的な事柄について訓練を実施し、特に、福音のメッセージを系統立てて教えることと『モルモン書』を活用することを奨励した。またロバーツ部長は宣教師をしばしば伝道本部に集めて、福音の原則に関する講義を行った。

日本における伝道活動は1920年代に入って一時的に後退していた。23年間にわたり宣教師たちは努力と犠牲を払ってきたが、日本伝道部を開設したグラント大管長自身が、閉鎖を決定することになった。宣教師を引き揚げるといつらい決定に至った理由は幾つかある。言葉と文化の違いという障害に加えて、教会は改宗者を得られなかったことである。これ以外にも1923年に起きた関東大震災、1924年に発令

## 変更と継続

された排日移民法が原因となっている。

関東大震災は関東一円を壊滅状態に陥れた。このため伝道活動は完全に中断され、同地にいた宣教師は復旧作業の手伝いをするしかなかった。1924年7月に合衆国議会を通過した排日移民法は、日本人が合衆国へ移民することを禁止する法律である。これによって日本に住むあらゆるアメリカ人に対する感情が悪化するところとなった。こうした状況を踏まえて大管長会は慎重に考慮し祈った結果、1924年8月に伝道部の閉鎖を決定した。回復された福音が数千、数万人規模で改宗者をもたらすようになったのは第二次世界大戦以降のことである。<sup>14</sup>

## 教会における教育の新たな展開

末日聖徒は第一次世界大戦以前から、同時に二つの教育制度を維持し続けることが困難であることに気づいていた。教会は当時アカデミーと呼ばれていた教会の学校を、すべての教会員の子弟のために建設することはできなかった。会員たちは法律的に義務づけられた公立学校を維持する費用を負担し、その上に地元の教会経営の学校の運営費を負担することが重荷になっていた。このため、1920年からほとんどのアカデミーは公立学校に移行するか、コミュニティー短期大学または2年制の教員養成学校に姿を変えていった。

末日聖徒の青少年に対して宗教教育を日常的に提供する手段として、教会は1912年ソルトレーク・シティーのグラナイト高校を皮切りに、公立高校に隣接するセミナリーを設立した。幾つかの学区ではリリーストタイム（通常の授業を1時間程度免除して近くのセミナリーに出席することを認める制度）を認めたため、高校の校舎とは別にセミナリーのための建物が建設された。セミナリーでは資格のある教師が採用されることになった。そして中央教会教育部と教会が指名したコミッショナーが制度全体を監督した。このようにして、教会の卓越したセミナリー制度が始まったのである。

1920年代に入って短期大学や総合大学に通う末日聖徒が増えてくると、学生たちは一般の学問と宗教をどのようにして両立させたらよいかという点について心配する声が教会員の間から出てきた。1920年代の初めに、科学を重要視する風潮が高まり、当教会に限らずキリスト教会全般の影響力と力が衰退し始めた。当時の学生が愛読した書物に、コーネル大学の有名な歴史学教授であり、学長であったアンドリュー・ディクソン・ホワイトの著書『キリスト教社会における科学と神学の闘争史』（*A History of the Warfare of Science with Theology in Christendom*）がある。ホワイト教授はキリスト教の基本的な教義を、「社会全体の自然な改革を阻害する厄介者」<sup>15</sup>と呼んで激しく攻撃した。ホワイト教授の著書は、科学の研究者が科学とキリスト教の間の理論闘争を理解するうえでの教科書的な存在となっていた。

このように理論上の混乱を呈していた時期に、アイダホ大学の末日聖徒は大管長会に対して支援を要請した。多くのモルモンの学生たちは一般の学問を補うための教会教育を受ける機会がなかったからである。大管長会はこの要請にこたえて、南アフリカ伝道部の部長を解任されたばかりのJ・ワイリー・セッションズと妻のマグデリンに末日聖徒の学生を支援するための手立てを講じる権限を与えて、アイダホ



1912年から1913年にまたがる学期に、ソルトレーク・シティーのグラナイトセミナリーにおいて、最初の「リリーストタイム」セミナリーが実施された。出席した生徒は70名だった。翌年、専任の教師としてガイ・C・ウィルソンが採用された。

試験的プログラムとして始められたが、成功を収めたため瞬く間に各地域に広まった。10年後のセミナリー登録人数は5,000名を超えている。1926年から1927年にかけてアイダホ州のモスコでインスティテュートが設立されたころには、この登録人数は倍増し、1980年代半ばに至ってセミナリー登録者数は22万5,000人に達した。



アイダホ州モスコのモスコインスティテュート館は1928年9月25日、チャールズ・W・ニブレイ副管長により奉献された。

## 時満ちる時代の教会歴史

州モスコに派遣した。セッションズ兄弟は間もなく、大学関係者と協力して学生たちの交流組織を作る一方、教会の教義に基づいた聖典と倫理のクラスを教えた。このクラスを受講する学生は大学の単位を取得することができた。

最初のクラスは1926年の秋に開かれた。登録した学生は57名だった。その後、登録する学生数が増えたため、大学の近くに大きな校舎が建設されている。間もなく、ローガンのユタ州立農業大学、ポカテロのアイダホ州立大学、ソルトレーク・シティーのユタ大学においても、インスティテュートが組織され、大学に隣接して専用の校舎が建設された。

1920年代の初期にはブリガム・ヤング大学において、成人を対象にした教育週間が初めて実施されている。元来ステーキとワードの指導者を訓練するために大管長会をはじめとする中央幹部が実施していたものだが、中央幹部は多忙を極めていたため、大学の教員を使って指導を行うことと、講義を一般に開放することを大学の関係者に指示した。このようにして、現在では合衆国およびカナダ各地から教育週間に集まる末日聖徒は数千人に上り、プロボのブリガム・ヤング大学では年間2万5,000人を超える受講者が集まっている。

## 教会の発展

1920年代は、多くの末日聖徒がユタ州を離れ、南カリフォルニアなどの他の地域へ移住した時期だった。南カリフォルニアでは、伝道活動によって多くの改宗者が誕生したため、以前から多くの教会員が住んでいた同地は会員数が急膨張した。1923年1月、ヒーバー・J・グラント大管長、チャールズ・W・ペンローズ副管長ほかの中央幹部は、カリフォルニア州の3,000人の教会員が集った大会において、ロサンゼルスステーキを組織した。このステーキは教会の88番目のステーキに当たり、地域はカリフォルニア南部全域にまたがった。ロサンゼルスステーキの組織は、教会がもはや単なるユタ州の団体ではないことを示す象徴となったばかりでなく、合衆国の全域に拡大していく時代の幕開けともなったのである。教会は初期の時代から入植事業を推進していたため、各地で教会員が増大し、神殿の建設を必要としていた。こうして1923年にはカナダにおいて、1927年にはアリゾナ州において神殿が建設され、いずれもグラント大管長が奉献した。

1922年5月6日、預言者は新設されたデゼルト・ニューズ・ラジオ放送局（KZN）を奉献した。教会歴史を通じて初めて、教会のメッセージが電波に乗ったのである。放送番組に出演した大管長は、ジョセフ・スミスが生ける真の神の預言者であることを証した。開局2年後にKZNは総大会の実況を開始した。こうして多くの教会員と非教会員が中央幹部の靈感あふれるメッセージを聞くことができるようになった。なお1924年の夏に同局のコールサインはKSLと改称された。

タバナクル合唱団が放送番組を開始したのは1929年7月15日である。リチャード・L・エバンズによる、人々に靈感と希望を与えるメッセージ「スポークンワード」が登場し、同番組の呼び物となった。合唱団の清らかな歌声と霊的で感動を誘う「スポークンワード」を聞いたことが動機になって多くの人が教会に加わっている。また合唱団の放送を通じて慰めと希望を見いだした人々は数知れない。

## 変更と継続

1922年5月6日、デゼルトニュースが所有するラジオ放送局KZN放送（後のKSL）の第一声を発するヒーバー・J・グラント大管長。写真は左から右へ：ネイサン・O・フルマー、アンソニー・W・アイビンス、ジョージ・アルバート・スミス、不詳、不詳、オーガスタ・ウィンタース・グラント、ヒーバー・J・グラント、C・クレアレンス・ネルソン、ジョージ・J・キャンノン



## 百年記念祭と教会歴史に対する関心の増大

大管長会は、教会に回復の歴史に関して1冊にまとめられた読みやすい歴史書が必要であると考え、ジョセフ・フィールディング・スミスに執筆を依頼した。こうした経緯から1922年に出版されたのが『教会歴史粹』(Essentials in Church History)である。この書物は1920年代の初めにメルキゼデク神権者のテキストとして使用された。その後現在に至るまで20版以上を重ねている。

教会歴史記録者補助のアンドリュー・ジェンソンは1920年代に全世界のワード、支部を訪問し、教会の歴史記録を収集する責任を果たしている。ジェンソン兄弟の関心と不屈の努力のおかげで、今日の歴史研究者は教会の歴史を調査するための豊富な資料を手にすることができるのである。

1920年代にはまた、御父と御子それに天使モロナイがジョセフ・スミスを訪れてから100年を経たことを記念して、教会はニューヨーク州パルマイラにおいて特別なカンタータ（声楽曲）の演奏と式典を実施した。さて、1930年4月6日、日曜日の朝を迎えた数千名の教会員はソルトレーク・タバナクルに詰めかけ、聖会に出席した。出席者が神権定員会ごとに教会指導者を支持した後、ホサナを連呼するという感動的な場面が繰り広げられた。B・H・ロバーツは次のように記している。「合唱団はヘンデルが作曲した栄光と喜びの合唱曲『メサイア』から「ハレルヤ」を演奏した。聖徒たちの力強い叫び声は、合唱団の演奏からほとぼしる感情の高まりと同調するかのように響きわたった。」<sup>16</sup>

この大会期間中にソルトレーク神殿はおびただしい数のライトを浴びて、初めて夜空にくっきりとその姿を浮かび上がらせることになった。またタバナクルに設けられた特別ステージにおいて、100年記念ページント「時を超えたメッセージ」が上演された。このページントのために新たに制作された脚本では、福音の様々な神権時代が描写されている。このページントは連夜、熱狂的な歓呼を受けたため、1か月以上にわたって公演された。入場料は無料だった。この100年記念祭に合わせ

## 時満ちる時代の教会歴史

てB・H・ロバーツ長老は6巻から成る不朽の名作『末日聖徒イエス・キリスト教会概史』( *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* ) を出版した。

教会指導者は1928年4月にクモラの丘の買収が完了したことを発表した。これは、教会が歴史に対して関心を有しているもう一つの証左である。クモラの丘は合衆国東部を旅行する末日聖徒が最も頻繁に訪れる史跡地となった。後に、丘のふもとに訪問者センターが建設されている。

教会歴史において1920年代は、教会がしっかりと根を下ろした時期である。また、比較的平和な10年間でもあり、ほとんどの地域において教会に対する悪感情や攻撃はその姿を消した。教会はこの穏やかな10年間にゆっくりではあるが着実に会員数を増やし、また教会員は充実したプログラムを通して成長し、信仰を強めていった。

## 注

1. ヒーパー・J・グラント, Conference Report 『大会報告』1941年4月, 4
2. アンソン・H・ランドの日記, 1919年5月25日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 49 - 50; チャールズ・W・ベンローズ, Journal History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史』1919年6月1日付け参照, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
3. フランシス・M・ギボンズ, *Heber J. Grant: Man of Steel, Prophet of God* 『ヒーパー・J・グラント: 鋼の人, 神の預言者』( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1979 ), 174 - 176参照
4. ブライアント・S・ヒンクレイ, *Sermons and Missionary Services of Melvin Joseph Ballard* 『メルビン・ジョセフ・バラードの説教と伝道活動』( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1949 ), 23参照
5. ジェームズ・B・アレン “ Personal Faith and Public Policy: Some Timely Observations on the League of Nations Controversy in Utah ” *Brigham Young University Studies* 「個人の信仰と国家の方針: ユタ州における国際連盟論議に関する時宜を得た観察」『ブリガム・ヤング大学紀要』1973年秋季号, 97で引用。ジェームズ・B・アレン “ J. Reuben Clark, Jr., on American Sovereignty and International Organization ” 「アメリカの主権と国際組織に対するJ・ルーベン・クラーク・ジュニアの主張」『ブリガム・ヤング大学紀要』1973年春季号, 347 - 372も参照
6. 『大会報告』1936年10月, 75で引用
7. “ Two Church Workers Will Tour Missions of Pacific Islands ” *Deseret News* 「太平洋諸島視察に派遣された二人の教会役員」『デゼレトニュース』1920年10月15日付, 5
8. ルウェリン・R・マッケイ 編, *Home Memories of President David O. McKay* 『デビッド・O・マッケイ大管長の家庭での思い出』( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1956 ), 41
9. デビッド・O・マッケイ, *Cherished Experiences* 『思い出深い経験』クレア・ミドルミス編 ( Salt Lake City: Deseret Book Co., 1976 ), 115 - 116
10. 『大会報告』1922年4月, 69で引用。62 - 68も参照
11. “ Prophecies for Children of Lehi Are Being Fulfilled ” *Church News* 「リーハイの子孫に関する預言は成就している」『チャーチニュース』1984年2月26日付, 10
12. M・C・モリス “ Olympic Games or a Mission? ” *Improvement Era* 「オリンピック出場か伝道か」『インブループメント・エラ』1929年3月号, 382。378 - 383も参照
13. リロイ・C・スノー “ The Missionary Home ” 「宣教師館」『インブループメント・エラ』1928年5月号, 552 - 554参照
14. R・レイニア・ブリッシュ “ The Closing of the Early Japan Mission ” *Brigham Young University Studies* 「初期の日本伝道部の閉鎖」『ブリガム・ヤング大学紀要』1975年冬季号, 171 - 190参照
15. アンドリユー・ディクソン・ホワイト, *A History of the Warfare of Science with Theology in Christendom* 『キリスト教社会における科学と神学の闘争史』全2巻, 1: vi
16. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会歴史概史 第1世紀』6: 540

# 大恐慌と教会

年表	
年代	重要な出来事
1929.10.29	証券市場の暴落に端を発した大恐慌が始まる
1932	ハロルド・B・リー会長のもとにバイオアステーキ倉庫が建設される
1933秋	成人アロン神権者の活発化プログラムが全教会で始まる
1935.4.20	ハロルド・B・リー、教会福祉プログラム策定の召しを受ける
1936.4	福祉プログラムが開始される。地区が組織される。全教会でステーキ伝道部が組織される
1937.4	会員は1年間の食糧貯蔵のチャレンジを受ける
1938	デゼルト産業が設立される。クラーク副管長は教会の教職者が進むべき道を説く
1941.4	十二使徒補助が召される

## 19

30年代に襲った大恐慌ほど外部からの影響によって教会歴史の流れを変えるまでの大きな影響を与えた出来事はない。1929年10月29日、暗黒の火曜日と呼ばれるようになったこの日に、ニューヨーク証券取引所は史上最安値を更新し、数百万人とも言われる投資家が破滅に追いやられた。人々は必要なものを一切買わなくなった。多くの企業が倒産するのにさほどの時間を必要としなかった。ほとんどの末日聖徒が住むユタ州、アイダホ州の西部山間地方では大恐慌が与えた衝撃はことのほか大きかった。1932年のユタ州の失業率は35.9パーセントに達し、国民所得は48.6パーセント下落した。<sup>1</sup> 一家を支える家長は自尊心をかなぐり捨てて、パンと食料の配給を受けるために長蛇の列を作った。農村地帯では融資の返済ができないために農場を失う家族が続出した。

教会員と同様に教会自体も大恐慌の影響をまともに受けた。教会のおもな収入源である什分の一からの支出は、1927年に400万ドルだったのに対して1933年には240万ドルに減少したため、多くの活動が規模を縮小された。<sup>2</sup>

### 苦境から脱出するための努力

1933年大恐慌のさなか、フランクリン・D・ルーズベルト大統領が率いる合衆国政府は、いわゆるニューディール政策と呼ばれる建て直し策を実施した。ほとんどの末日聖徒はこの政策を支持した。しかし、教会指導者は一部の聖徒が安易に施しを受けることになるのではないかと憂慮していた。グラント大管長は悲痛な思いを込めて次のように語っている。

「多くの人々がこう言っています。……『ほかのみんなが政府の援助を受けているのですから、わたしたちが少々の援助を受けたからといって気にすることはありませんよ。』

返済する意思もなく合衆国政府からの援助を受ける風潮が民の間に蔓延<sup>まんえん</sup>しています。わたしはこれが正しいことだとは思いません。<sup>3</sup>

大恐慌のただ中に置かれた聖徒たちへの勧告を考え、彼らの必要性を満たそうとしていた教会指導者は聖文から指針を見いだした。主は時の初めより「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」と命じてこられた。使徒ヤコブはこの原則を「きわめて尊い律法」(ヤコブの手紙2:8)と呼んでいる。主はこの戒めをイスラエルの子らにお与えになったとき、貧しい人々の世話をするようにも命じられた(レビ19:10参照)。幸せでない兄弟たちに対して助けることができるにもかかわらず、助けようとしぬ人々を主は激しくお怒りになった(モーサヤ4:16-27; 教義と聖約56:16; 104:14-18参照)。

## 時満ちる時代の教会歴史



シルベスター・クェール・キャノン（1877 - 1943年）はジョージ・Q・キャノンの息子で、オランダ・ベルギー伝道部長に2度召された。またパイオニアステーク会長も務めている。

1925年に管理監督に召された。1939年10月の総大会において十二使徒に召された。

教会は大恐慌に襲われる前から福祉プログラムを有していた。1920年代に管理監督会と中央扶助協会管理会は就職先の<sup>あつせん</sup>斡旋、倉庫の維持、その他援助を必要とする人々を積極的に支援していた。このため、株式市場の崩壊後、市民生活が悪化の一途をたどる間も、教会はすでに確立されている土台の上に様々な支援策を築くことができた。

1930年に管理監督のシルベスター・Q・キャノンは、監督会は「活発な教会員が一人として生活必需品に事欠く状態に放置されることがないように、確認する責任があります。……教会がなすべきことは人々の自立を助けることです。教会の援助に依存するのではなく、自立するように<sup>はたん</sup>支援することが教会の方針です<sup>4</sup>」と強く主張した。各地の指導者は教会員を経済破綻から救済するために様々な革新的な方法を考え出している。ソルトレーク郡のグラナイトステークでは、ステークの様々な福祉事業で働く機会を失業者に提供したり、寄付された古着を再生する縫製工場を運営したり、近隣の農家と交渉して食物を確保するなどの活動を実施した。経済的にあまり裕福でなかったパイオニアステークは、大恐慌から受けた影響によって特に悲惨な状態を呈していた。しかしながら、若きステーク会長ハロルド・B・リーの指導の下に、パイオニアステークではステーク福祉事業で生産した品物や教会員の寄付によって集められたものを倉庫に蓄えていた。中央幹部は地方の教会ユニットを通じて、緊急に援助を必要とする人々のために実施されたこれらの活動を奨励し、また時には助言し、支援した。

教会全体の福祉活動の確立に大きな貢献をしたのが、1933年にグラント大管長の副管長に召されたJ・ルーベン・クラーク・ジュニアである。クラーク副管長はこの召しを受けるまで、国際法と外交の専門家として合衆国國務長官のもとで働き、また駐メキシコ合衆国大使として働いていた。グラント大管長はこの新任の副管長に対して、聖徒たちを援助する計画を立案するよう指示した。

1933年7月、大管長会は福祉の基本原則を明確化し、また教会全体で実施する具体的な支援の方法を初めて明らかにした。「五体満足な教会員は、単なる施しを受けるような事態に陥ることがないようにしてください。施しは最後の手段です。……救済活動を指揮する教会役員は、困っている教会員が自分の受けた援助の代償として何らかの奉仕ができるよう配慮しなければなりません。」各ワードは援助の代償として提供される労働によって、所属する会員の必要をまず満たし、なお余力があれば援助を必要としているユニットに手を差し伸べることにした。大管長会は声明を結ぶに当たって、会員たちに「やがて来るかもしれないさらに過酷な事態に備えて、義にかなった生活を送ること、何事によらず行きすぎを避けること、儉約と節約と勤勉の習慣を養うこと、収入の範囲内で生活すること、たとえわずかであっても何かを蓄えること<sup>5</sup>」の原則を教えるよう奨励した。

## 教会福祉プログラムの発足

1935年に教会は教会福祉プログラムの開発に向けて大きな一歩を踏み出した。当時、連邦政府は援助を提供する責任を州に転嫁しようと考えていた。しかしユタ州は、恐慌によって大きな打撃を受けていたため、とてもこの責任を引き受けられる



## 大恐慌と教会



ジョシュア・ルーベン・クラーク・ジュニア（1871 - 1961年）はユタのグランツビルにおいて開拓者の家庭に生まれた。長年、合衆国政府の国務省に勤務し、国際法の第一人者として知られるようになった。1930年にはメキシコ駐在合衆国大使に指名されている。

1933年、J・ルーベン・クラークはまだメキシコで在任中であったが、ヒーバー・J・グラント大管長から副管長として働く召しを受けた。クラーク副管長は、ヒーバー・J・グラント大管長、ジョージ・アルバート・スミス大管長、デビッド・O・マッケイ大管長のもとで28年間にわたって副管長を務めた。

クラーク副管長は多くの書物を執筆した作家であり、才能豊かな話者であった。大会では、一致、合衆国憲法、貧しい人を助けるなどのテーマで話すことが多かった。

ような状態ではなかった。同年4月20日、大管長会はステーク会長のハロルド・B・リーに対して福祉プログラムを全教会に導入する責任を与えた。後にリー長老は当時を振り返って次のように述べている。「わたしは、いささか驚いた。というのも、その計画が何年間も教会指導者の胸中にあり、彼らの熟考と計画の末、また全能の神の靈感によって執行がとどめておかれたこと、さらに末日聖徒の信仰が、教会を導き管理する人の勧告に喜んで従うほどに強められたと感じられる時まで備えおかれてきたことを知ったからである。」<sup>6</sup>

ハロルド・B・リーは大管長会との会合を終えると、近くのシティークreekキャニオンの頂上まで車を走らせた。そして、林の中へ歩いて行き、どのような組織を設立すべきかについて祈りをささげた。そのときの経験を後に次のように述べている。「霊の理解力が開かれました。教会と神の王国の壮大な組織について、かつて考えてもみなかった領域まで理解する力が与えられました。大管長会はこのために新しい組織を作る必要がなく、従来からある組織によって目的を達成することができるという大切な真理が明らかにされたのでした。『あなたがなすべきことは、わたしがすでに示した組織を機能させることだけである』と主が言っておられるかのよう

に思われたのです。」<sup>7</sup>

翌年ハロルド・B・リーと教会指導者は幾度となく会合を開いて、全教会で実施する明確で系統立った計画を立案した。1934年にグラント大管長の第二副管長となったデビッド・O・マッケイ副管長が中心となってこの計画段階を推進した。委員会の面々は靈感に導かれるままに熟慮を重ねたこと、そして到達した結論は神の承認を受けていることを確信した。

総大会の全日程を終了した翌日の1936年4月6日月曜日、テンプルスクウェアのアッセンブリーホールにおいてステーク会長会と監督会のための特別集会が開かれた。大管長会は、教会員の約6分の1が公共の援助によって生活を維持しており、彼らの多くは受けた援助の見返りとして何ら働くことを要求されていないという憂慮すべき事実を報告した。大管長会は「すべての末日聖徒が経済的に自立する意志を取り戻すように」と地方の指導者に訴えた。そして、「主は、わたしたちすなわち教会内に、この偉大な目的を成し遂げるための管理体と組織と指導者をお与えになっています。もし、わたしたちがこれを成し遂げることができなければ、責めを受けることになる」と教会指導者は言明した。とりあえず、教会内のすべての困窮者に食物と衣類を用意することが目標とされた。ワードティーチャー（後のホームティーチャー）は扶助協会と密接な連絡を取り合っており、ワードの困窮者が何をどの程度必要としているかを調査した。また、支援に回す基金の安定を図るために、断食献金を増額するようにというチャレンジが聖徒に与えられた。大管長会は特別集会を閉じるに当たって、プログラムの成否は、聖徒の忠実さにかかっていると述べている。<sup>8</sup>

大管長会はプログラムの実施に当たって管理監督会を支援するために、教会援護委員会を設けた。この委員会には十二使徒評議会のメルビン・J・バラード長老、ステーク会長のハロルド・B・リーなどが委員として名を連ねていた。地方の教会ユニットにおける福祉活動を活気づけ、ユニット相互の調整を図ることが委員会の責務とされた。また福祉プログラムの機能調整を図るために新たな管理レベルとして地

## 時満ちる時代の教会歴史

区が設けられた。4から16のステーキで構成される各地区は、地区内のステーキの余剰物資を保管したり、他の地区との交換に充てたりするために倉庫を保有することになった。

1936年5月にバラード長老はワシントンD.C.に招かれて、教会の「保全」プログラム（福祉計画は当初このように呼ばれていた）についてフランクリン・D・ルーズベルト大統領に説明することになった。大統領は教会の努力を承知しており、また好感を持っていた。大統領とバラード長老は今後も続く大恐慌の嵐に立ち向かうために相互に全面的な協力をする事を約束した。教会の成功によって、他の団体でも同様のプログラムをそれぞれに実施することを希望すると、大統領は述べている。<sup>9</sup>

1936年10月の総大会において、大管長会は、福祉計画の根底となる基本原則を再度採り上げた際に、次のように述べた。「わたしたちの第一の目的は、可能なかぎり忌まわしい怠惰や施しのもたらす悪弊を除去し、独立心、勤勉、儉約、自尊心を再びわたしたちの間に確立する制度を築くことである。教会の目的は、人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」<sup>10</sup>

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は大管長会を代表して、1937年4月の総大会において、聖徒たちに収入の範囲内で生活するように勧告した後、次のように述べた。「伝染病を避けるのと同じように、借金を避けようではありませんか。……家族の長である者は、最低向こう1年分の食糧、衣料、またできれば燃料を手もとに確保するようにしてください。……また自分の家屋を担保から外すことを目指してください。

正直、誠実、貞潔、節制、忍耐、勤勉、儉約といった尊重すべき諸徳を身に付け、ねたみや貪欲な心どんよくを捨てようではありませんか。」<sup>11</sup>

経済的に破綻を来した人々に対する援助額は急速に増加したことが、1930年代後半の統計に表れている。教会の福祉関連支出は1935年と1936年を比較すると30パーセント以上の増加を示している。1936年における福祉事業の生産量は、瓶詰めの果物が13万4,661本、果物もしくは野菜が17万5,621缶、生鮮野菜が61トン、小麦粉が48トン、キルトが1,393枚、衣類が36万3,640点であった。福祉プログラムのおもな現金収入源である断食献金も増加した。この増加は、断食献金の納入者数と金額双方の増加によるものである。ワードとステーキは農場、製缶工場をはじめ食糧、衣料、その他援助を必要とする人々のための日用品類を製造、生産する事業を引き続き実施していた。1937年には、福祉プログラム関連の資産を所有し、金融面での調整を図る目的で、共同保全法人が設立された。この法人はまた、銀行からの融資やその他の通常の方法では融資を受けられない個人に融資を実行した。

末日聖徒は自立することの大切さを認識していたが、年齢や、肉体的、精神的または情緒的な障害を持つために仕事を見つけれない人が大勢いた。このため、教会指導者は1938年にデゼルト産業プログラムを創設した。会員たちは衣類、家具、電気製品、新聞紙、雑誌、その他不要なものをデゼルト産業に寄付した。デゼルト産業の従業員はそれらを分類し、清潔にし、修繕する作業を行った。そして、これらの品物はデゼルト産業の直営店で安く販売された。売上は従業員の賃金と運営費



ソルトレーク・シティー西部の福祉区域。4万468平方メートルの敷地に建設された。区域内には、管理棟、製缶センター、根菜類貯蔵施設、牛乳加工工場、穀物エレベーター、器具補修施設、訪問者センターがある。

## 大恐慌と教会

に充当された。賃金に見合うだけの売上がない場合は、監督の倉から不足分の補助を受けることもあった。このプログラムは教会の福祉の基本概念と完全に一致する形態で実施された。会員たちは施しを受けるのではなく、価値のある仕事を行うことにより自立心を持つようになった。

扶助協会は家族の自立を促すうえで重要な役割を果たしている。1937年に大管長会からの勧めもあって、姉妹たちは裁縫、パン作り、食糧貯蔵の方法を教えるコースを設けた。レッスンは家庭で行われたり、姉妹たちが出席しやすいように福祉事業の製缶工場や縫製工場で行われた。

デゼレト産業が開業したのは1938年9月のことである。初代店長はステュアート・B・エクスだった。当時のデゼレト産業は4つの目的を掲げていた。「第1：持つ者は持たない者を助けるための機会が与えられる。第2：持ち物をできるだけ長く使うことによって無駄を減らす。第3：仕事の改革によって、現在失業中の人々のために多くの雇用の機会を創造することができる。第4：良い品質の日用品を廉価で入手する。」<sup>12</sup>



ハロルド・B・リー長老は福祉プログラムが預言の成就であると考えていた。1894年にウィルフォード・ウッドラフ大管長が「わたしたちは自分の靴や衣類を自分で作り、食糧を自分で手当てして、皆が一致して主の目的を果たす必要に迫られる」<sup>13</sup>時が来るのを知っていたことを、リー長老は教会員に向かって述べている。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、貧しい人々を援助することだけが福祉計画の目的ではないことを確信していた。クラーク副管長は、次のように指摘している。福祉プログラムは、奉獻の律法と同じものではないが、「その時はまだ来ていませんが、教会福祉プログラムを完全な形で実行するならば、わたしたちは共同制度の偉大な基本原則を実施する状態から、あまり遠くない地点まで近づくことになるでしょう。」<sup>14</sup>

教会の福祉プログラムの実施に当たって中心的な役割を演じた指導者の一人であったマリオン・G・ロムニー長老も次のように証している。「福祉プログラムは主が直接ヒーバー・J・グラント大管長にお与えになった啓示です。わたしは(J・ルーベン・)クラーク副管長がオレムで開かれたステーキ会長の集まりでそのことを話

## 時満ちる時代の教会歴史

したのを耳にしています。」<sup>15</sup>

### 教会活動に積極的に参加することにより豊かな生活を営む

大恐慌の10年間に、教会指導者は物質的な必要だけでなく、他の面においても教会員と非教会員の生活に祝福をもたらすことの大切さに目を向けていた。例えば、教会の各種プログラムはどうすればそれぞれが有機的に機能して青少年の必要を満たし、伝道に備えさせることができるかというテーマについてかなりの検討が加えられている。その結果、1931年4月の総大会においてアロン神権コーリレーションプログラムが発表された。この計画に基づいて各定員会は定員会会員に対して神権にかかわる責任を教え、ふさわしさを維持し活発であるように励まし、兄弟愛をはぐくむために力を注ぐようになった。日曜学校は福音の原則と儀式に関するレッスンを実施し、青年男子相互発達協会はこれらの原則を、実生活における健康面、社交面、文化面、霊的面において正しく実践することを教えた。これは以上の組織の役割が変更されたわけではない。それぞれの組織の働きが以前よりも密接な関連性を持つようになったのである。さらに、監督の指導の下に、役員教師は若い男性の福祉を考えるために毎月会合を開くようになった。<sup>16</sup>

管理監督会は青少年を教会の活動にもっと活発に参加させることを目的として、1935年に、あらゆる青少年が少なくとも一つの割り当てを実行することによって100万の「神権の割り当て」を達成するという目標を設定した。地方の定員会では基準を達成した神権者に「達成証明書」を渡した。その後数十年間にわたり教会活動において重要な位置を占めることになったグループおよび個人達成賞プログラムはこの運動がきっかけとなっている。

教会指導者は、メルキゼデク神権を受けることなく成人に達した、教会にあまり活発でない青年の数が増えていることに、指導者の注意を喚起した。彼らへの働きかけを成功させたのはソルトレーク第28ワードのA・P・A・グラッド監督である。グラッド監督はこれらの教会にあまり活発でない青年が気がねなく神権会に出席するためにはクラスを別にする必要があると考えていた。1932年、監督は情熱にあふれた献身的な指導者たちを召して、彼らにそのような青年たちに全面的な関心を寄せるように指示した。この指導者グループは、青年たちに自分たちで活動の計画を立てられるように援助した。グラッド監督が考えたスローガンの一つである「わたしたちは行動することによってどのように行動するかを学ぶ」<sup>17</sup>に基づいた決断だった。

8か月間にわたる懸命な努力の結果、40人の青年が活発になった。その一人は当時を振り返って、眠っているところをたたき起こされてはクラスに出席したものだと話している。しかし彼はこれがきっかけとなって定期的に教会へ通うようになり、やがてメルキゼデク神権を受け、大祭司グループリーダー、監督、高等評議員に召されることになったのである。<sup>18</sup> 1933年の秋に全教会で導入された成人アロン神権プログラムは、グラッド監督の働きを基にして作られたものである。

### 大恐慌時代の伝道活動

大恐慌によって様々な問題が発生していたが、教会は伝道事業を強化する姿勢を

## 大恐慌と教会



リグランド・リチャーズ(1886 - 1983年)は現在の神権時代が生み出した最も偉大な宣教師の一人である。リチャーズ長老は宣教師として4回、伝道部長として2回奉仕している。

1938年から1952年までは管理監督として、1952年から亡くなる1983年までは十二使徒定員会会員として働いた。彼の父、ジョージ・F・リチャーズ、祖父のフランクリン・D・リチャーズも十二使徒定員会で働いている。

変えなかった。多くの家庭では働き手である息子を必要としており、伝道に出す余裕はなかった。このため、恐慌が進行するにつれて、伝道地の宣教師の数は急激に減少した。1932年の宣教師はわずか399人、宣教師として働くことができる人の5パーセントが伝道に出ているにすぎなかった。このように宣教師の数は激減していたが、伝道事業は継続され、地域によっては大きな成功を収めていた。宣教師たちは伝道活動の効率を上げるために、革新的で系統的な伝道方法を開発していた。1937年、南部諸州伝道部のリグランド・リチャーズ部長は『モルモンの教えが伝えるメッセージ』(“The Message of Mormonism”)と題した、福音のテーマを24週間にわたって紹介する手引きを作成した。これが後になって出版された『奇しきみわざ』である。この書物はその後を考え出された多くの伝道方法の基礎となっている。

宣教師は教会に興味を持つ人々を見つけるために様々な方法を試みている。例えば、イギリスとアイルランドでは宣教師たちが結成したコーラスグループが好評を博した。チェコスロバキアでは宣教師がバスケットボールチームを作って多くの友人を獲得した。ドイツでは4人の宣教師が1936年のベルリンオリンピックでバスケットボールの審判員を務めた。また、カラースライドを使って古代アメリカの物語を紹介する伝道方法は、求道者を獲得するうえで特に大きな効果を上げている。これらの視覚教材を充実させるために「教会ラジオ、広報、伝道資料委員会」が1935年に組織された。イギリスでの伝道から帰還したばかりのゴードン・B・ヒンクレーが委員会の実務部長として、ちらしなどの伝道用資料の作成、ラジオ番組の脚本の制作に当たった。

大恐慌は地元の教会員が伝道活動に積極的に参加するという副産物をもたらしている。カリフォルニアでは、宣教師は経費を節約するために会員の家に住んだ。アラバマの聖徒たちは求道者を積極的に誘って、長距離の旅行をいとわずに地方部大会に参加した。宣教師があまり効率のよくない戸別訪問にかかる時間を減らすために、多くの地域の教会員は友人を宣教師に紹介した。毎週、数時間だけでも専任宣教師と一緒に働いたり、短期間だけ伝道する特別の召しを受けて働く教会員がいたため、世界全体の宣教師の数はむしろ増加した。従来、多くの地域では宣教師を中心に集会が開かれていたが、大恐慌によって、地方の聖徒たちは教会員に関係する仕事を自分たちで処理する自覚が芽生え、多くの責任を引き受けるようになった。これによって宣教師は多くの時間を伝道に使うことができるようになったばかりでなく、聖徒たちも自分たちの支部に対して誇りを持つようになった。グラント大管長は、宣教師数の不足は「むしろ祝福になったと考えられる。なぜならば、わたしたちは地元の聖徒たちを最大限に活用せざるを得ないからである」<sup>19</sup>と評価している。

シオンのステーキでは組織的な伝道活動を実施することによって、多くの改宗者を得た。<sup>20</sup> 1936年4月の総大会において、すべてのステーキに伝道部を組織するようにとの指示が与えられた。そしてこれらステーキ伝道部の監督は七十人第一評議会が行うことになった。<sup>21</sup> この結果、毎年数百人の改宗者が生まれ、聖徒の霊性も高まっているようであった。あるワードは、この伝道活動によって教会員の活発率が50パーセント上昇したと報告している。<sup>22</sup>

## 時満ちる時代の教会歴史

大恐慌の影響によって宣教師の数が激減する中、教会はその不足分を補うために様々な方法を採用した。タバナクル合唱団の毎週の放送が引き続き成功を収めていたため、まずラジオの活用に目を向けた。幾つかのワード、ステーク、宣教師グループは番組を制作して地元の放送局に持ち込んだ。総大会の様子の一部が1936年4月5日から国際短波放送局を通じてヨーロッパで放送され始めた。タバナクル合唱団の社会的認知が高まっていたという理由もあって、テンプルスクウェアにおける伝道活動は相変わらず効果を上げていた。合唱団の放送や昼のオルガン演奏を聞くために、はるばる遠方より多くの旅行者が旅程を変更して演奏時間に合わせてタバナクルを訪れた。このため、テンプルスクウェアの来場者数は地域内の有名な国立公園をしのぐほどだった。

教会はまた、国内外の祭典と博覧会への参加を定例化する動きを始めている。1933年から1934年にかけてシカゴで行われた「今世紀に成し遂げた進歩」をテーマとした博覧会では、推定230万人が教会の展示館を訪れたと考えられている。B・H・ロバーツ長老は1893年にシカゴで開催されたコロンブス博覧会において演説を拒否されたが、1933年、シカゴ博覧会に合わせて行われた宗教会議において演説する機会が与えられ、聴衆の拍手を浴びている。このように教会の大衆イメージは飛躍的に改善されていた。1935年から1936年にサンディエゴで開催されたカリフォルニア・太平洋国際博覧会において、教会は初めてパビリオンを建設した。また1939年から1940年にかけてサンフランシスコ湾のトレジャーアイランドにおいてゴールデンゲイト国際博覧会が開催されている。教会はタバナクル合唱団の名声を利用して、50席の観客席を持つミニタバナクル展示館を建設した。この展示館で宣教師は教会の歴史と信条を視覚資料を使って説明した。

テンプルスクウェア



## 大恐慌と教会

1937年から実施されたクモラの丘ページェントは、教会の広報活動において最大の成功を収めるイベントの一つとなった。丘の斜面に設けられた3つの大きなステージで「アメリカにおけるキリストの証人」を演じた。出演者のほとんどは地域内の宣教師だった。この劇の内容は、『モルモン書』に登場する幾つかの場面を紹介し、最後に古代アメリカ住民を救い主が訪れられる場面でクライマックスを迎える。最初のページェントが行われる一か月前、大学で演劇科を専攻して卒業したばかりのハロルド・I・ハンセン長老は、任地である東部諸州伝道部に到着した。ハンセン長老は到着を待っていたかのように、ページェントの最終的な準備とリハーサルを手伝う責任を与えられた。彼はこの時期に、この伝道部に自分が召されたのは神の導きによるものに違いないと感じていた。ハンセン長老はそれから40年間にわたって、主として舞台監督として毎年のページェントにかかわりを持つようになった。ハンセン兄弟の指導の下に、その後舞台の数、照明、その他音響効果などの設備が追加されていった。

## 教会教育制度の改革

大恐慌の残したつめ跡が次第に薄らいでくると、教会は教育プログラムの拡大に着手した。1930年代後半にインスティテュートが実施されていた大学は西部山間地方とカリフォルニアの全主要大学を含む17校に増えていた。1933年に南カリフォルニアの末日聖徒グループの間で、教会の掲げる理想と標準に従って知的、社交的必要を満たす活動として、デゼレトクラブが組織された。これはインスティテュートに準じる内容を持ったプログラムであった。1936年にロサンゼルス地域を訪れていたジョン・A・ウィットソー長老はデゼレトクラブの活動が学生生活に及ぼす影響力を評価し、このプログラムが教会教育部の支援を受けられるように手配した。こうして、正規のインスティテュートを設置するだけの教会員の学生がいない大学においては、デゼレトクラブが組織されることになった。このデゼレトクラブは後に末日聖徒学生協会に代わった。

教会の教育指導者は、大学レベルの教職者に対して特に宗教に関する専門的教育を実施する必要性を感じていた。こうして、ブリガム・ヤング大学において著名な学者たちによる夏期研究会が開催された。将来性のある大学院生は各種の神学講座を受講するよう奨励されている。

しかしながら、1930年代半ばになって、多くの教会員と指導者は、宗教学の教員が末日聖徒でない学者から指導を受けていることに懸念を持ち始めた。聖文に対する「先進的な批判」(『聖書』の起源と信憑性<sup>しんびょう</sup>について科学的な検証を行う学派)と人間的な概念が、教科課程に入り込んでいたからである。このような経緯から、教会教育制度、特に宗教教育について中央幹部による厳密な調査が開始された。このとき、教会の教育制度について豊かな経験を持つデビッド・O・マッケイは副管長を務めていたことも重なって、クラーク、マッケイ両副管長はその後の教会教育プログラムに対して力強い影響力を行使することになる。

1938年にJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、教会教育プログラムの使命を明らかにする責任と、教会経営の学校、インスティテュート、セミナー<sup>きょうべん</sup>で教鞭

## 時満ちる時代の教会歴史

を執る人々の資格と義務を規定する責任が与えられた。そして8月8日、ブリガム・ヤング大学に近いプロボキャニオンのアスペングローブにおいて開かれた教職者の夏期講習会で、クラーク副管長は「教育に関して教会が進むべき道」と題する講演を行った。これは以後しばしば引用の対象となる優れた講演である。クラーク副管長は、二つの基本的な真理を恐れることなく宣言し、必ず解説しなければならないと述べている。

「第1に、イエス・キリストは神の御子であり、御父の肉身の独り子であり、……また、十字架にかけて殺され、その霊が肉体を離れて亡くなられたこと。また、墓にその身を横たえられた3日目に霊と肉体が再び一つとなり、再び生ける者となられたこと。また復活して墓からよみがえり、完全な御方となって、復活の初穂となられたこと。その後御父のもとに昇られたこと。さらに、キリストの死のために、また主の復活により、時の初め以来この世に生を受けた人々は皆、同様に文字どおり復活するということである。……」

わたしたちが完全に信じなければならない第2の点は以下のとおりである。御父と御子が、実際に、疑う余地なく、森の中の示現で預言者ジョセフに御姿を現されたということ。その後、天の示現がジョセフや他の人々に示されたこと。原始教会の背教によって失われていた福音と、神の御子の位に従う聖なる神権が真実、この地上に回復されたこと。主が、ジョセフ・スミスの働きを通じ、再び主の教会を設立されたこと。『モルモン書』は、その内容が示すままの書物であること。預言者に対して、教会と教会員を導き、支え、組織し、励ますために、数々の啓示が与えられたこと。預言者ジョセフの後継者たちも、同様に神により召されることである。」

次いでクラーク副管長は教師に対して、これらの真理に飢えている教会の若人に対して率直に教えること、教師を信頼する学生たちの心に疑いの種をまいてはならないことを警告した。そして、教師は標準聖典と末日の預言者の言葉に基づいてイエス・キリストの福音を教える責任があることを述べて講演を終えた。<sup>23</sup>

中央幹部は末日聖徒の若人の霊的成長に関心を寄せていたため、教会が経営する学校の管理に直接的に関与することを希望していた。当時、ブリガム・ヤング大学、リックスカレッジ、LDSビジネスカレッジはそれぞれに信託理事会を有していた。中央からの管理を強化するために、1938年にこれらの信託理事会は解散され、すべての教会経営の学校は中央教会教育部の直接の管理下に置かれることになった。中央教会教育部は中央幹部を中心として構成され、若干名の中央幹部以外の職員が加えられている。

末日聖徒は大恐慌の間も高い教育実績を誇っていた。1940年の国勢調査によれば、住民の大多数が教会員であるユタ州は合衆国内のいかなる州よりも州民の受ける教育年数が多いことが明らかになった。ユタ州の青年男女の平均教育年数は11.7年であった。第2位は二つの州が11.3年、全国平均は10.3年であった。<sup>24</sup> 教会の機関誌は、コロンビア大学のE・L・ソーンダイクが実施した研究結果を誇らしげに報告した。ソーンダイクは『名士録』(Who's Who)と『アメリカの科学者』(American Men of Science)に最も多くの著名人を登場させているのがユタ州であることを発見し、「優れた人物は偶然に出現するものではない。経済的に恵まれているかいないかはほ



## 大恐慌と教会

とんど無関係である。最も密接な関係を持つのは、彼らがどのような資質を培ってきたかということである」<sup>25</sup>と結論している。

### 教会管理体制の整備

1930年代に教会の活動は規模が拡大されたため、聖徒に求められる時間と経済的負担が大きくなっていった。この負担を軽減するために、中央幹部は教会のすべてのプログラムを見直して、できるかぎりプログラム相互の調整を図り、単純化することを目指した。

1939年の初めに大管長会は補助組織と他の組織の働きを「重複を避けるために調整し、統一し、平準化する」ことを希望した。そしてこのために3人の十二使徒を長とする「コーリレーションおよび相互調整委員会」を任命した。大管長会は、教会のすべての組織が存在する真の理由は、「人々に福音を教え、真理の証を得られるように導き、援助を必要とする人々に関心を払い、主より任じられた業を成し遂げることであり」<sup>26</sup>と述べている。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は1940年に、教会の管理役員に対して次のように指示している。「家庭は義にかなった生活の基盤であって、いかなる組織も家庭に代わることはできないし、その基本的な機能を果たすこともできません。補助組織ができることといえば、必要なときに援助の手を差し伸べて、家庭が問題を解決するのを支援することぐらいでしかありません。」<sup>27</sup>

簡素化を図るための具体的な手段として、毎週開かれていた系図集会は1940年に廃止されて、日曜学校の学習課程の中で系図のレッスンが行われることになった。同時に、1910年以来出版されていた『ユタ系図歴史機関誌』(*Utah Genealogical and Historical Magazine*)は廃刊となり、同誌の内容は『インブループメント・エラ』(*Improvement Era*)に引き継がれた。

1930年代の教会は北アメリカと世界各国で引き続き成長していた。こうした発展に伴い中央幹部は2度にわたって諸国を訪問した。1937年にヒーバー・J・グラント大管長をはじめとする教会指導者は3か月をかけてヨーロッパの各伝道部を訪問した。グラント大管長は行く先々で、聖徒に対して自国にとどまって教会を築くように奨励した。大規模な集会在一般の人々も対象にして開催され、また報道機関がそれらの集会をラジオや新聞で採り上げたため、教会に関する情報が不足していた地域や教会について誤解があった地域でも、モルモンに対して好感を持つ人々が増えてきた。イギリスにおいて行われた伝道開始100年記念行事においてJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長はグラント大管長の一行に合流した。大管長会の二人が同時にヨーロッパを訪れたのはこれが最初である。

教会歴史上重要な位置を占めるイギリスで伝道が開始されてから100年の間に12万5,000人を超える改宗者が生まれた。これらの改宗者の約半数は移民して西部における教会の力となった。1938年に十二使徒評議会のジョージ・アルバート・スミス長老は6か月間にわたって太平洋地域の伝道部を訪問し、聖徒から温かい歓迎を受けている。この訪問期間中にスミス長老はマオリの聖徒たちの年次「ファイ・タウ」すなわち大会に出席した。前の年にグラント大管長がヨーロッパで行ったように、スミ

## 時満ちる時代の教会歴史

ス長老は太平洋地域の教会員を激励するとともに、報道関係者との会見に応じ、ラジオ放送に出演し、政府官吏との会合を開くことによって、教会に対するイメージの改善に努めた。

教会が成長を続けたため、世界中にステークと伝道部が組織され、その数も増えることになる。このため、中央幹部が担う管理責任は次第に大きくなっていった。これは多くの大会を管理するだけでなく、頻繁に旅行しなければならないという意味を持っていた。1930年代に聖徒たちは全国各地に移り住むようになり、その結果ニューヨーク、ワシントンD.C.、シカゴ、シアトル、ホノルルなどの遠隔地にステークが組織されていた。

このような状況から、中央幹部の負担を軽減するために新たな中央幹部組織を創設することが決定された。1941年4月の総大会において大管長会は「十二使徒補助が任命されることとなります。彼らは大祭司であり、大管長会および十二使徒会が命じる業務を十二使徒会の指示の下に実行する」<sup>28</sup>ことを発表した。最初に任命されたのは、マリオン・G・ロムニー、トーマス・E・マッケイ、クリフォード・E・ヤング、アルマ・ソネ、ニコラス・G・スミスの5人である。その後管理責任が増大するにつれて、さらに十二使徒補助が召された。

1930年代の10年間は福祉計画が確立されたことで有名であるが、教会プログラムの拡大と改善において重要で大きな前進を遂げた時期でもある。教会は大恐慌をくぐり抜けて、より強く、自信に満ちた姿に変身した。教会は大恐慌のもたらした様々な問題を見事に処理したが、新たに戦争の脅威というチャレンジに遭遇することになる。

## 注

1. ユタ大学経営学部 “Measures of Economic Changes in Utah, 1847 - 1947” *Utah Economic and Business Review* 「1847年から1947年のユタにおける経済の変遷」『ユタ州経済経営レビュー』1947年12月号、23
2. Conference Report 『大会報告』1928年4月、3 - 4；『大会報告』1934年4月、4 - 5参照
3. 『大会報告』1933年10月、5で引用
4. 『大会報告』1930年10月、103で引用
5. ジェームズ・R・クラーク編、*Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』全6巻（Salt Lake City: Bookcraft, 1965 - 75）、5：332 - 334で引用
6. 『大会報告』1941年4月、121で引用。『大会報告』1972年10月、124；Ensign 『エンサイン』1973年1月号、104も参照
7. “An Enlarged Vision of Church Organization and Its Purposes” *Church News* 「教会の組織と目的に関するビジョンの拡大」『チャーチニュース』1961年8月26日付、8
8. “Launching of a Greater Church Objective” 「さらに大きな教会の目的に着手する」『チャーチニュース』1936年4月25日付、1で引用。クラーク『大管長会メッセージ』6：10 - 13も参照
9. “Church Security Program Indorsed by President Roosevelt” *Deseret News* 「ルーズベルト大統領が賛同した教会保全プログラム」『デゼレトニュース』1936年6月9日付、1参照
10. ヒーパー・J・グラント『大会報告』1936年10月、3
11. 『大会報告』1937年4月、26で引用
12. ジョン・A・ウィットソー “Deseret Industries” *Improvement Era* 「デゼレト産業」『インブループメント・エラ』1938年9月号、544
13. 『大会報告』1943年4月、126で引用
14. 『大会報告』1942年10月、57で引用
15. “New Storehouse Is Dedicated at Welfare Square Complex” 「福祉工場区域で奉献された新しい倉庫」『チャーチニュース』1976年5月29

## 大恐慌と教会

日付，4で引用

16. 1931年4月4日，アッセンブリーホールにおいて開催されたアロン神権者大会の議事録，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー，2 - 4，10

17. “An Opportunity for Adult Members” 「成人会員に与えられた機会」『チャーチニュース』1936年6月6日付，4。Instructor's Manual and Lesson Outline for Adult Aaronic Priesthood Classes 『1936年版成人アロン神権者クラスの教師用引きとレッスンの概要』7 - 8；“Adult Aaronic Priesthood Class Outstanding Success” 「大成功を収めている成人アロン神権者クラス」『インブルーブメント・エラ』1933年11月号，812も参照

18. “Fifty Years Ago, Adult Aaronic Program Started” 「50年前に始められた成人アロン神権プログラム」『チャーチニュース』1982年9月18日付，10参照

19. J・ルーベン・クラーク・ジュニアがレア・D・ウイツォーにあてた手紙，1933年10月13日付，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー，867

20. J・ゴールドデン・キンボールが七十人にあてた手紙，1934年1月31日付，七十人第一評議会回状1860年 - 1985年，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー，1参照

21. ラドガー・クラウソンがステーク会長にあてた手紙，1936年4月24日付参照，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー

22. “Stake Mission Program Accomplishments Reported” 「ステーク伝道プログラム業績報告」『デゼルトニュース』1937年7月17日付，7参照

23. *The Charted Course of the Church in Education* 『教育に関して教会が進むべき道に関する指針』2 - 3。Charge to Religious Educators 『宗教教育者の責任』1982年，3も参照

24. 1940年合衆国政府国勢調査，『ユタ州経済経営レビュー』1947年12月号，58で引用参照

25. E・L・ソーンダイク “The Origin of Superior Men” *Scientific Monthly* 「優れた人が生み出される経緯」『月刊科学』1943年5月号，430。“Utah Holds High Rank as Birthplace of Scientists” 「科学者の宝庫ユタ」『インブルーブメント・エラ』1940年10月号，606も参照

26. J・ルーベン・クラーク・ジュニアおよびデビッド・O・マッケイからジョセフ・フィールディング・スミス長老，スティーブン・L・リチャーズ長老，アルバート・E・ボーエン長老にあてた手紙，1939年1月19日付，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー，635 - 636

27. J・ルーベン・クラーク・ジュニア “Memorandum of Suggestions” 「各種提案事項のメモ」1940年3月29日付，末日聖徒歴史記録部，ソルトレーク・シティー，3

28. J・ルーベン・クラーク・ジュニア 『大会報告』1941年4月，95で引用

# 第二次世界大戦中の聖徒

年表	重要な出来事
1939.8.24	大管長会，ヨーロッパの宣教師の撤退を指令する
1939.9.1	ヒトラーのポーランド侵略により，ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発する
1940	ヒュー・B・ブラウン，末日聖徒軍人コーディネーターに指名される
1940	太平洋地域と南アフリカから宣教師が撤退する
1941.12.7	日本軍が真珠湾を攻撃し合衆国は宣戦を布告する
1942.4	大管長会，戦争に対する教会の立場を宣言する
1942.10	軍人委員会が組織される
1945.8.14	第二次世界大戦終結

**第**二次世界大戦がヨーロッパで勃発したとき、世界はまだ大恐慌が残した影響から回復する途上にあった。アドルフ・ヒトラーならびに第三帝国の下で、ドイツは領土を拡大していた。同時期に日本も、政治的支配の拡大、原材料の供給、産業振興を目的に新しい市場を確保するため、太平洋に領土を拡大していた。世界のほとんどの地域が戦争の危機に瀕するまでにその時間はかからなかった。大恐慌が1930年代の末日聖徒に大きな影響を与えたように、第二次世界大戦と戦争が残したつめ跡は1940年代の教会と教会員に強い衝撃を与えた。

## 教会と第三帝国

1920年代から1930年代のドイツ伝道部は特に東部地域において過去に例を見ないほどの成功を収めていた。ナチスと呼ばれた国家社会主義者が1933年にドイツを制したとき、教会員は周囲に細心の注意を払って生活しなければならない状態に追い込まれた。ゲシュタポと呼ばれた秘密国家警察が教会の集会を監視するために度々出没し、支部と伝道部のほとんどの指導者はモルモンの教え、信条、儀式などについて警察から徹底的な尋問を受け、さらに政治的な事柄に口を挟まないように警告を受けていた。1930年代半ばにはナチの示威運動のために末日聖徒の集会は度々中止に追い込まれ、またヒトラー青年運動が始められたため、スカウトプログラムは強制的に中止させられた。

イスラエルに関する福音の教えは、ナチの反ユダヤ政策と相いれなかった。このため、イスラエルとシオンについて触れているジェームズ・E・タルメージ長老の執筆したもので人気のあった『信仰箇条の研究』は廃棄させられた。ある町では警察官がイスラエルとシオンに関する賛美歌をすべて歌集から破り取るという事件が起きている。このような状況から不安に駆られ、警察とのいざこざを避けるために教会の集会に出席するのをやめた教会員もいた。また、ドイツから脱出して外国に移民することを真剣に考える教会員もいた。

他の小規模の宗教団体はドイツ国内において活動を禁止されていたが、教会は正式に活動を認められていた。1936年のベルリンオリンピックにおいてモルモンの長老たちはバスケットボールチームのコーチとオリンピックの運営を手伝うようナチ政府から依頼を受けたこともあって、むしろ好感を持たれていた。さらに、ナチスは人種的な純血主義をとっていたため、系図の探求を奨励していた。政府官吏は以前、モルモンは社会的認知がないという理由から重要記録の閲覧を拒否していたが、彼らが系図に対して関心を持ち始めるに及んで、教会を尊重するようになった。<sup>1</sup> しかしながら、1930年代後半の教会と教会員の置かれた状況は次第に厳しくなっ

## 第二次世界大戦中の聖徒

いった。

ドイツにおけるナチスの<sup>ほっこう</sup>勃興は、南アメリカにおける教会活動にも影響を与えた。大勢のドイツ人が移民していたからである。ブラジル政府はナチ親派による破壊行為を恐れて公の集会においてドイツ語を話すことを禁止し、ドイツ語の文書の配布を禁止した。末日聖徒の宣教師はブラジルで伝道を開始した最初の10年間、伝道活動をドイツ語を話す少数民族だけに限定していたため、ほとんどの支部の集会はドイツ語で行われていた。政府からの圧力により、ある地域の警察官は聖徒からドイツ語の聖典を没収し、公衆の面前で燃やすという暴挙に出ている。1930年代末期はこのような状況が展開されたため、宣教師は国民の大多数の言語であるポルトガル語圏で伝道活動を行うようになった。こうして後年の大成功の布石が打たれたのである。

### 宣教師の撤退

アドルフ・ヒトラーは1937年の秋に、オーストリアとチェコスロバキア西部に住むドイツ語民族を併合して領土を拡大する決意を固めていた。

1938年3月、ドイツはオーストリアを併合した。そして同年9月にヒトラーは、チェコ人が同国に住む少数民族であるドイツ人を虐待しているとして非難し、同国への介入権を主張した。こうしてドイツとチェコの軍隊は国境に集結し、両国軍の戦闘は避けられない状況へと化していった。ヨーロッパの緊張が高まる中、中央幹部は同地域で働く宣教師たちの安全に重大な関心を払っていた。1938年9月14日、大管長会はこれら両国からの宣教師全員の撤退を指令した。この時期にミュンヘンで開かれた会議において、ドイツ、イギリス、フランスは、これ以上の侵略を行わないことを条件にヒトラーのチェコスロバキア西部併合に合意した。この合意によって一時的に戦争が回避されたため、大管長会は撤退した宣教師に対してそれぞれの任地に帰ることを許可した。

しかしながら、ミュンヘンでの合意は恒久的な平和をもたらすものではなかった。1939年、ヒトラーはポーランドに目を転じ、ポーランドを經由してドイツ民族が住む東プロシアに入ることを要求した。ヒトラーは1年前にチェコスロバキアに対して発したと同様の非難を再び持ち出し、ポーランドが同国のドイツ少数民族に対して不当な扱いをしていることを理由に軍事介入の正当性を主張し始めた。緊張が高まる中で、J・ルーベン・クラーク副管長がとった行動は、豊かな外交経験を持つ同副管長が教会にとって貴重な存在であることを証明している。クラーク副管長は国務省と連絡を取り、ほぼ1時間ごとにヨーロッパの動向を教会指導者に報告した。1939年8月24日木曜日、大管長会はついに、ドイツとチェコスロバキアの全宣教師に対して2度目の撤退を指示した。伝道部を訪問するためヨーロッパに滞在していたジョセフ・フィールディング・スミス長老に撤退を指揮する責任が与えられた。

特にドイツ西部伝道部からの撤退は困難を極めた。撤退を急ぐ宣教師たちに、神の大きな助けがもたらされることになる。

大管長会からの電報がドイツに到着したのは8月25日金曜日の朝のことであった。ジョセフ・フィールディング・スミス長老とM・ダグラス・ウッド伝道部長はハノ

## 時満ちる時代の教会歴史

ヨーロッパの伝道部1938年



ーバーで大会を開いていたが、ウッド部長夫妻は電報を受け取ると直ちにフランクフルトの伝道本部へ戻った。金曜日の正午までに部長は宣教師全員に電報を打ち、直ちにオランダへ避難するよう指示した。土曜日の朝、国境にいた宣教師が電話で、オランダ政府はすでに食糧が不足しているところへ難民が大挙して押しかければ一層の食糧危機に陥ることを懸念して、ほとんどの外国人に対して国境を閉ざしたと報告してきた。しばらくして、今度はドイツ国营放送が、日曜日の夜までにすべての鉄道が軍の統制下に入ること、一般市民の旅行は保証できないことを警告した。

オランダが国境を閉じたことにより、ウッド部長と宣教師たちは別の手段で脱出を図らなければならなくなった。ドイツ貨幣を国外へ持ち出すことができないと知った宣教師はほぼ全員が手持ちの現金をカメラやほかの品物に代えていた。このため、宣教師はもう一つの避難先であるデンマークのコペンハーゲンへ向かうための切符を買う現金を持っていなかった。このためオランダ国境付近で宣教師の一行が立ち往生していた。

フランクフルトではウッド部長が、アイダホ州出身のフットボール選手であったノーマン・ジョージ・シーボルド長老に特別な任務を与えていた。

『長老、31人の宣教師がここからオランダ国境までの間のどこかで行方不明になっています。彼らを捜して、国外に脱出させてください』とわたしは言った。……

シーボルド長老は列車に4時間揺られてケルンに到着した。オランダ国境までの道

## 第二次世界大戦中の聖徒



ノーマン・ジョージ・シーボルドは1915年10月18日に生まれた。現在(1989年)はアイダホ州ラバートに在住。



ワレス・F・トロント(1907 - 1968年)は1928年、宣教師としてドイツ・オーストリア伝道部に召された。1929年7月、ジョン・A・ウィッツォー長老はチェコスロバキアを教会の伝道地として奉獻した。ウィッツォー長老は6人の宣教師とともに同国を旅行したが、ワレス・トロントはそのうちの一人だった。トロント長老はその後新しく設立された伝道部で働く召しを受けた。

1936年、トロント長老は妻のマーサとともにチェコスロバキア伝道部を管理する召しを受けてヨーロッパに戻った。夫妻は第二次世界大戦が勃発するまで同地で働いた。1946年、トロント伝道部長はチェコスロバキアへ戻り、伝道部長としての責任を果たす召しを受けた。

のりの約半分の地点である。わたしたちには31人の長老がどこにいるか見当がつかないので、勘に頼るしかないことを指示しておいた。ケルンは終着駅ではなかったが、シーボルド長老はここで降りるべきだと感じた。大きな駅は数千人にふくれあがった群衆でごった返していた。長老は駅の構内に入ると、宣教師が口笛でよく口ずさむ、『正しかれ、夜は明けぬ』を口笛で吹いた。」こうして8人の宣教師と出会うことができた。<sup>2</sup>

シーボルド長老はある駅では車中にとどまり、ある駅では強い気持ちを感じて下車した。ある小さな駅での出来事を長老は回顧している。『わたしは予感がしたため、駅を出て町の中へ入って行きました。無駄かもしれないとは思いながらも、わたしたちはしばらく立ち止まり、そして再び歩き始めました。すると一軒のレストランが目に入りました。中へ入るとそこに二人の宣教師がいました。奇跡でした。彼らはわたしを知っていましたので、もちろん大喜びでした。……確かにだれかに手を取られて、そこへ導かれたのです。』8月28日月曜日にコペンハーゲンに到着していたウッド部長は行方不明の31人の宣教師のうち、14人が無事にオランダに入ったことを確認した。そしてその晩、残る17人がデンマークに到着したとの電報をシーボルド長老から受け取った。<sup>3</sup>

ドイツ西部伝道部の宣教師たちがデンマークに逃れるために悪戦苦闘している間、チェコスロバキアではまったく別のドラマが展開されていた。7月11日、4人の宣教師がドイツ秘密国家警察に逮捕され、政治犯が収容されているパンクラック刑務所に投獄された。ワレス・トロント伝道部長はそれから6週間彼らの釈放を求めて努力を続けたが、チェコ伝道部が退避の指令を受ける前日の1939年8月23日まで、まったく成果はなかった。ほとんどの宣教師とトロント姉妹、それにトロント家の子供たちはすぐさまデンマークに向かって出発した。しかし、トロント部長は投獄されている長老たちが旅券と所持品を返還してもらおうのを手伝うためにとどまることにした。

ヒトラーの軍隊がポーランド侵略のために集結した時点で、チェコスロバキアとの連絡はまったく閉ざされてしまった。トロント姉妹は次のように語っている。「わたしがすっかり憔悴して、刻々と時間がたつにつれて怒りが込み上げている様子を見た(ジョセフ・フィールディング・)スミス長老は、近寄って来て、わたしの肩に手を置き『トロント姉妹、トロント兄弟と宣教師たちがデンマークのここへ到着するまで戦争は始まりません』とおっしゃいました。」

チェコスロバキアのトロント部長と宣教師たちが目的を果たしたのは8月31日木曜日のことである。しかしながら、出発する寸前に一人の宣教師が再逮捕され、投獄されてしまった。トロント部長の素早く靈感あふれる行動により、ドイツ官憲に対して誤認逮捕であることが証明され、この長老はすぐに解放された。その夜彼らは、イギリス代表団のために用意された特別列車に乗り込むことができた。これがチェコスロバキアをたつ最後の列車だった。彼らは翌日の早朝にベルリンを通過して、午後ドイツからデンマークに向かう最後のフェリーに乗り込んだ。<sup>4</sup> この日にドイツ軍はポーランドに進攻した。第二次世界大戦が開戦した日として一般に考えられている同じ日の出来事である。ジョセフ・フィールディング・スミス長老がトロント姉妹に預言した約束は、正確に成就した。

## 時満ちる時代の教会歴史

高まる危機をソルトレーク・シティーにおいて詳細に観察していた大管長会は、間もなくヨーロッパから全宣教師を撤退させる指令を出した。ほとんどの宣教師は、数百人単位で船客を輸送するにわか仕立ての貨物船に乗り込み、大西洋を横断した。これらの貨物船の中には簡易ベットで埋め尽くされており、せいぜいカーテンで男女の間を仕切っているくらいであった。J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は宣教師が無事に撤退できたのは奇跡以外の何ものでもないと言っている。

「何万人というアメリカ人が大客船の事務所に切符を求めて詰めかけている中で、長老たちはまったく予約をしていませんでした。そのような状況にもかかわらず、宣教師全員が3か月でヨーロッパから脱出しました。出発時刻の数時間前から予約しようとしてもできなかったのに、宣教師のグループが乗船する準備ができると、必要なスペースは必ず見つかりました。……

この大移動はまことに主の祝福によって行われました。<sup>5</sup>

1940年には、急速に拡大する戦争に各国は次々に巻き込まれていった。ベルギー、オランダ、フランスは早々とドイツに攻略された。イギリスは自国の存亡をかけた戦争に備えていた。その結果、これらの国の海外植民地は攻撃の脅威にさらされることになった。日本は1940年9月に、ドイツおよびイタリアと三国同盟を結び、仏領インドシナを占領し始めた。

このように戦火が拡大したため、大管長会は翌月、南太平洋および南アフリカから宣教師を全員引き揚げさせた。ヨーロッパの場合と異なり、これらの地域と合衆国の教会本部との通信は途絶えていなかった。また伝道部長はそれぞれの任地にとどまることを許された。南アメリカの宣教師は撤退の指令を受けなかったが、1941年以降同地への新規の派遣が見送られたため、1943年には宣教師が一人もいない状態になった。この時期に通常の専任宣教師による伝道が行われていたのは北アメリカとハワイのみとなった。これらの地域においても宣教師の数は激減していた。徴兵される青年の数が次第に増していたからである。

## ヨーロッパの聖徒による教会の継続

宣教師と宣教師の指導者たちが撤退した後、ヨーロッパの聖徒は大半が孤立した環境の下で、自力で教会を運営しなければならなくなった。破壊と死に直面した聖徒が大勢いた。戦闘地域外に住む聖徒たちも戦争に対する苦悩と恐怖によって勇気と意識が低下し、霊的な事柄への関心が薄れていった。被占領地域やドイツの聖徒たちは別の問題に直面していた。ナチスに協力するのが最も賢明な道だと考える聖徒もいれば、ナチスに抵抗することが愛国者の義務だと考える聖徒もいた。例えば、ハンブルクに住む10代の教会員であったヘルムス・フーベナーはイギリス国営放送の短波放送からナチの宣伝とは異なるニュースを受信し、果敢にもその情報を流していた。ヘルムスはこうした行為により、最終的に秘密国家警察の刑務所で打ち首の処刑を受けた。<sup>6</sup>

撤退した宣教師たちはそれぞれ自分が働いていた地域の会員に対して信仰と希望を与える手紙を送るように奨励されていた。また伝道部長は、支部の管理を任せてきた地元の指導者と手紙で連絡を取る特別な責任が与えられた。しかしながら、戦



## 第二次世界大戦中の聖徒



ヘルムス・フーベナー（1925 - 1942年）はドイツ人の末日聖徒で、ヒトラーの時代に命を落とした。

争はその手紙さえも奪ってしまった。中立国であったスイスからの手紙でさえ、2年間にわたって1通も届かなかった。このような環境に置かれた地方の指導者は導きを得るために個人的な啓示を受けなければならないことを学んだ。

若干の例外はあるが、ヨーロッパのほとんどの聖徒は教会の教義と規定に忠実に従う気持ちはむしろ戦争中の方が高まっていた。幾つかの地域では什分の一、断食献金、教会の集会への出席が増加している。スイスでは会員たちが週に2晩を伝道活動のために使い、戦争が始まる直前の専任宣教師よりも多くの人々を改宗に導きそしてバプテスマを施した。戦争の数年前から伝道部長たちは、やがて訪れる孤立化した状態に聖徒を備える訓練を積極的に行っていた。ヒーバー・J・グラント大管長は1937年にヨーロッパを訪問した際に、預言者として将来を予見して、会員たちに自分の責任を全うするように、アメリカからの長老たちにあまり頼らないように何度も勧告した。戦争中にスイス伝道部を管理したマックス・ツィマーはそのような勧告に模範的に従った地元の優れた指導者の一人だった。彼は地元の神権指導者と補助組織指導者のために優れた訓練プログラムを実施し、定期的に印刷物を作成しては聖徒たちに配付した。

ドイツでは独身者と既婚者を問わず大勢の男性会員が自国の軍隊に徴兵された。多くの地域の支部は1930年代後半には力をつけ強くなっていたが、徴兵によって支部から神権者がいなくなってしまう。兄弟たちの大半は妻や子供を残して戦争に向かった。戦争が始まって数か月の間、ドイツの聖徒たちのほとんどは義にかなった戦争で戦っていると考えていたが、戦争が長引き、野蛮な行為が頻繁に行われるようになると、連合軍の勝利を希望し祈る教会員の数が次第に増えてきた。東部の前線地帯ではロシア軍が参戦して容赦のない攻撃を加えたため、ドイツ軍兵士は非常な苦しみに遭い、また、多くが戦死していった。何人かの末日聖徒は家族のもとへ帰ることができたが、それも何年も捕虜収容所を経てからの帰国であり、また愛する家族のもとへついに帰ることができなかった聖徒もいた。

戦争中に命を落とした聖徒の一人に、1940年にドイツ東部伝道部の部長に召され、活躍していたヘルベルト・クロファーがいる。クロファー兄弟は伝道部長に召された年に徴兵されたが、ベルリンに駐屯したため、軍の駐屯地から伝道部の業務を果たすことができた。3年後、クロファー兄弟は西部前線に行く命令を受けた。彼は二人の副部長に伝道部の責任を任せ、また家族の世話も頼んで前線に向かった。その後、短期間デンマークに駐屯している。デンマークでは数人のデンマーク人聖徒を訪れる機会があった。最初デンマークの聖徒たちはドイツの軍服を身に着けた彼を見て恐れを抱いた。しかし、クロファー兄弟は福音が真実であることを証すると、聖徒たちの信頼を受けるようになった。しかし、1944年7月、東部前線で戦闘中に行方不明となった者のリストの中にヘルベルト・クロファーの名前が記されていた。終戦後、クロファー兄弟は1945年3月にロシアの病院で亡くなっていたことが確認された。

もう一人の末日聖徒の若き兵士、シュトットガルト出身のヘルマン・モースネルは戦時中に変った経験をしている。西ヨーロッパで戦闘中、彼はイギリス軍の捕虜となり、イギリスの捕虜収容所に移送された。収容所の中のモースネル兄弟は別

## 時満ちる時代の教会歴史

にすることもないため、一緒に捕らわれている人々に福音を伝え始めた。4人が福音を受け入れて、バプテスマを受けることを望んだ。そこでモースネル兄弟はロンドンの教会本部に手紙を書き、指示を仰いだ。間もなくヒュー・B・ブラウン長老が収容所のモースネル兄弟を訪れ、改宗者にバプテスマを施す権能をモースネル兄弟に与えた。モースネル兄弟はそれから長い年月を経た後に、ドイツのシュトゥットガルトステークの会長に召されている。

戦場に送られた兵士ではなくともドイツ人聖徒は苦難を強いられた。特に爆弾の直撃を受けた地域の聖徒たちである。指導者たちはしばしば靈感の導きによって、この困難な時期に責任を果たしていた。例えば、1943年にハンブルクでは10日間に104回の爆弾投下を受けている。教会の集会を開いている間も、ラジオをつけて空襲のニュースを聞いていなければならなかった。ある日曜日、空襲警報はなかったが、支部長は急に集会を閉じなければならぬと感じて、直ちに徒歩で10分ほどの最寄りの防空壕に聖徒たちを避難させた。支部の会員たちが防空壕に到着した直後に、一帯に爆弾が投下された。<sup>7</sup>

集会場所を破壊された聖徒たちは、家庭で集会を開いていた。しかしその家庭すらも、ある伝道部では会員の95パーセントが家を失っている。地元の指導者はこのような緊急事態に対応するため、様々なプログラムを実施して自給自足の体制を敷いていた。緊急事態に備えて、食糧、衣類、家庭用品を支部の集会所に運び込んでおき、そこから全員で使うように指示した指導者もいた。聖徒は手もとにある品物を全員で分かち合うことに賛成して、この要請に心からこたえた。家族は次々にすべての蓄えを支部へ運び込み、困窮する兄弟姉妹と分かち合ったのである。また、扶助協会では古着を繕い再生するための布や新しく衣類を作るための材料を買うことができるように基金が設けられて、全員が献金した。<sup>8</sup> ハンブルクの会員たちは「スプーン寄付に参加した。これは集会に参加する度に、スプーン1杯分の砂糖か小麦粉を持って来るというプログラムだった。わずかな量であったために会員たちの反応は鈍かった。しかし、すぐに『スプーン1杯が200倍になって若い男女の結婚式のためにケーキを作れたり、妊娠中の母親、授乳期の母親に砂糖や小麦粉を提供できるようになった。』」<sup>9</sup>

## 戦争に対する教会の立場

日本は1941年12月7日、ハワイの真珠湾にある合衆国海軍基地に奇襲攻撃をかけた。合衆国は翌日、日本に対して、そして後日ドイツに対して開戦を布告した。このため多くの末日聖徒が戦争に直接巻き込まれることになった。多くの聖徒たちは再び、戦争に対するそれぞれの考えを改めて吟味する必要性に迫られた。彼らは、侵略的な戦争は非難されるが、家と国家と自由と宗教を守るために「必要であれば血を流してまでも」戦うことを容赦する、『モルモン書』の教えを指針としていた（アルマ48：14。43：45 - 47も参照）。大管長会は、真珠湾攻撃から1週間以内に発表したクリスマスメッセージで、イエス・キリストの福音に従って生活することによってのみ、永続する平和が世界にもたらされることを宣言した。大管長会は、第一次世界大戦が勃発したときに述べたジョセフ・F・スミス大管長の勧告を再び繰り返して、

## 第二次世界大戦中の聖徒

たとえ戦闘中であっても「あらゆる残虐な思い、憎しみ、残忍な思い」を持たないよう軍隊にいる教会員に勧告した。<sup>10</sup>

1942年4月の総大会において、この原則を踏まえた大管長会の公式声明文が読み上げられた。この宣言は戦争に対する教会の立場を分かりやすくまた権威をもって確認したもので、パンフレットとして印刷され広く配布された。聖徒は「義になつた者の心に憎しみが湧き上がるはずはない」が、なお「国家の一員であり」、国民に対する権威を持つ者に忠実に従わなければならないと告げられた。大管長会は続けて次のように述べている。「教会員は、祖国のために武器を取ることを要請された場合は、召集に応じなければならない。」兵士はもし戦闘中に「相手側の命を奪っても、それは殺人とはならない。また殺人を犯した者に定めておられた神の罰を受けることもなく、……主権者に対してまったく抵抗する力を持たない彼らが、主の命令どおり主権者に従い、戦士の一人として殺人を犯したからといって、罪人にされるとしたら、神は何と無慈悲な御方であろうか。……

この教会は世界中に広まっている。忠実な教会員が敵味方の立場に置かれる」ことをこのメッセージは承知していた。大管長会はまた、清い生活を送り、戒めを守り、常に祈る者には、主がともにましまし、神の誉れと栄光を損ねることや彼らの救いと昇栄を危うくするようなことにはならないと約束した。<sup>11</sup> 末日聖徒は教会指導者の勧告に従って、軍隊での命令を守った。

## 軍服の聖徒たち

スペイン・アメリカ戦争では末日聖徒の軍人グループが組織され、第一次世界大戦中はB・H・ロバーツ長老が従軍牧師を務めたという例が過去にあったが、末日聖徒の軍人のために教会のプログラムが完全な形で開発されたのは、第二次世界大戦中である。

1941年4月、合衆国が正式に第二次世界大戦に参戦する9か月前に、大管長会はヒュー・B・ブラウンを軍人コーディネーターに任命したことを発表した。第一次世界大戦中にカナダ陸軍の少佐であったブラウン長老は、この階級を生かして軍の高官と接触を図った。そして大戦中に各国を訪問して末日聖徒の軍人と会い、彼らに励ましを与えている。温かい人柄と高い霊性を持つブラウン長老はこの責任を全うするうってつけの人物であったと言えよう。

教会の軍人委員会は、新しく十二使徒会の一員に召されたハロルド・B・リー長老を委員長として1942年10月に発足した。委員会は末日聖徒従軍牧師の任命を要求するため合衆国軍当局に対して働きかけたが、認可されなかった。従軍牧師は通常、職業牧師が任命されていたため、陸軍と海軍の当局者は、この条件を満たさない人を従軍牧師に任命することに反対した。しかしながら、陸軍従軍牧師部長は地方のモルモンの監督が軍人の霊的な状態に行き届いた心配りをしていたことを記憶していた。こうして、軍当局は末日聖徒従軍牧師を徐々に承認し始めるようになり、第二次大戦中46人が従軍牧師として任務に就いていた。<sup>12</sup>

軍人委員会はこれら従軍牧師を補佐するために、約1,000人の「グループリーダー」を任命した。これらのグループリーダーはいったん任命されると、任地を問わずど

## 時満ちる時代の教会歴史



第二次世界大戦中、ヒュー・B・ブラウン（1883 - 1975年）は全教会の軍人コーディネーターとして働いた。ブラウン長老はカナダ軍の将校、弁護士、教育家、演説家、教会指導者として活躍した。

ブラウン長老は1953年に中央幹部に召された。十二使徒定員会補助、十二使徒定員会会員、副管長を務めた。

こでも必要とされる儀式などを執行することができた。彼らは次のような認定書が与えられていた。当人は「末日聖徒イエス・キリスト教会の長老であり、同教会の相互発達協会の正式なグループリーダーであって、軍務に就いている末日聖徒の会員に対して職務を遂行することができる。この者は所轄軍将校の許可を受けた後は、学習クラスおよび他の礼拝集会をつかさどることができるものとする。」<sup>13</sup>

教会は兵役に就いている教会員のために幾つかの活動を実施した。ソルトレーク・シティーとカリフォルニア州では家庭が開放され、任地からの帰路あるいは往路に立ち寄って健全な環境の下で宿泊できるような配慮が実施されている。家庭から遠く離れている軍人のために、教会は社交とレクリエーション活動を主催して、これらの活動の入場許可書として「バジェットカード」を発行した。兵役に就く教会員にはポケットサイズの『モルモン書』と『福音の原則』が支給された。また、『チャーチニュース』（*Church News*）のミニチュア版も配付された。靈感あふれるメッセージ、軍人たちによる活動の報告、その他重要な発表事項が掲載されていた。

末日聖徒の軍人の多くは、信仰と献身の面で優れた模範を示している。軍の将校は、モルモンの軍人は職業牧師がいなくても自分たちの礼拝行事を手際よく進める能力と強い責任感を持っていることに驚きの目を向けることもしばしばあった。サイパン島では、L・トム・ペリー（後の十二使徒定員会会員）をはじめとする末日聖徒の海兵隊員は集会場所がなかったため、自分たちの手で礼拝堂を建設した。末日聖徒のドイツ人兵士はノルウェーを占領中、自分たちの食糧を食べ物に窮していたノルウェーの教会員と分かち合っている。同じようにアメリカ人兵士も、戦争末期にドイツの同胞である聖徒たちの再興を助けている。教会員は常に福音を分かち合うことに熱心である。戦争中にもかかわらず、教会員はあらゆる機会をとらえて伝道した。エズラ・タフト・ベンソン長老は専任宣教師の数が減少していることに心を痛めていた。しかし、末日聖徒の軍人は「教会の歴史を通じて例を見ないほど、あらゆる面で充実した伝道を展開する」責任を果たしてくれることをベンソン長老は確信していた。

「ある軍人は次のように言った。『ベンソン兄弟、わたしたちは伝道に来ているみたいなのがしますよ。状態は違いますが、わたしたちには福音を宣べ伝える機会があり、その機会を逃さないようにしています。』」<sup>14</sup>

モルモンの同僚が示した模範に影響を受けた兵士は数えられないほど多い。一兵卒だったポール・H・ダンがどのようなときにも教会の標準に従おうとする姿を見て、それまで教会に無関心だった合衆国陸軍軍曹が影響を受け、最終的にバプテスマを受けている。ポール・H・ダンは後に七十人第一定員会の会員に召された。沖縄の塹壕ざんごうで末日聖徒の青年ニール・A・マックスウェルから福音を聞いて深い感銘を受けた軍人もいる。当時19歳だったニール・A・マックスウェルは特にモルモンの教えを宣べ伝える必要がなかった。福音が教えるとおりに生活することによって周囲の人々に影響を与えていたのである。彼は後に十二使徒定員会の会員に召された。ドイツの捕虜収容所では、あるオランダ人会員は同じ捕虜として収容されていた同国人のジェイ・ポール・ヨンキーズに福音を宣べ伝えた。ヨンキーズ兄弟は後にオランダで最初に組織されたステーキの会長に召されている。

## 第二次世界大戦中の聖徒

末日聖徒の軍人たちは世界各地で初めて福音を紹介するという責任を果たした。例えば、フィリピン諸島に教会が進出する足がかりを作ったのは末日聖徒の軍人であった。<sup>15</sup>

戦争末期には、末日聖徒の軍人は10万人近くになっていた。約10人に1人の割合である。何人かの軍人が奇跡的に守られる一方で、命を落とす軍人もいた。ハロルド・B・リー長老は戦争で愛する人を失った人々に慰めを与えるために、次のように述べている。「今日の破壊的な戦争によって数十万の人々が殺されています。その多くはわたしたちの青年と同様に戦争の原因と何らかかわりのない人々です。このような多くの死者が出ているために、霊界では伝道活動を活発に行う必要が出てきました。聖なる神権を持ち、ふさわしい青年たちは、この世を去った後にその伝道活動に宣教師として召されていることでしょう。」<sup>16</sup>

## 北アメリカの教会に与えた影響

北アメリカの聖徒はヨーロッパの聖徒のような苦難を強いられただけではないが、戦争は教会と教会員に対して確実に影響を及ぼしていた。第二次世界大戦の勃発によって、造船所、航空機製造工場、その他軍需産業は、合衆国西海岸で多くの雇用の機会を創造した。これらの経済的機会を求めて山間地方から多くの家族が太平洋沿岸地域へ移動した。しかし後に、ユタ州および周辺地域に軍事産業が設立されたため、多くの聖徒が還流している。

戦争によるこの人口移動は幾つかの問題を教会にもたらした。モルモンの独身青年もこれらの軍需工業に就職していた。このため、戦争が終わるころには多くの青年が、家庭や家族という安定した環境から遠く離れた地域に住んでいた。<sup>17</sup> 中央幹部はこれらの青年男女が移動した先の教会指導者に対して、彼らに特別な関心を示すように奨励した。住民の大多数をモルモンが占める地域にも新しい産業が入ってきた。ユタ州の幾つかの地域では末日聖徒でない人々が大量に流入することになった。これらの地域に長年住んでいる人々は、大量の「異分子」の流入を懸念していた。しかし、教会指導者は聖徒に対して、転入者に関心を示し、可能なかぎり彼らと福音を分かち合うように奨励した。こうした人口構成の変化により、1930年代に発達したステーキ伝道に肥沃な土壌が提供されることになった。

教会が主催するプログラムは戦争によって様々な面で影響を受けている。合衆国が第二次世界大戦に参戦した1か月後の1942年1月、大管長会はすべてのステーキ指導者を直ちに中止し、戦争が続いている間は開かないことを発表した。この指導者教育を縮小する発表が行われたのは、折しも家族の導きや支持という影響下から離れつつある教会員の数が増えたため、教会活動をこれまで以上に効率を上げなければならない時期と一致していた。大管長会は「この決定により、ワードおよび支部の補助組織は組織の活動を低下させるのではなく、効率を上げ、質を高め、全般的な効果を高めるという責任がむしろ大きくなったことを」強調した。補助組織の中央管理会は指示事項を郵送するなどして地方の指導者との接触を継続した。また、若人の信仰を維持するための重要な場所として、家庭の果たす役割が以前より増して強調された。<sup>18</sup>

## 時満ちる時代の教会歴史

大管長会はさらに総大会の出席者を特に招待した神権指導者のみに限定した。タバナクルの一般公開は中止され、毎週のタバナクル合唱団の放送も聴衆の入場を制限した。扶助協会が1942年に実施を計画していた100年祭は延期され、毎年開催されていたクモラの丘ページェントは戦争中、中止されることが決定された。

1942年4月27日、合衆国大統領フランクリン・D・ルーズベルトは増税、賃金と物価の統制、ガソリンの配給制、その他戦略物資の配給制を実施する必要があることを発表した。しかし、末日聖徒の指導者はすでにこれらの対応策を教会プログラムに取り入れ、実施していた。

ハロルド・B・リー長老は、教会が実施した予防措置が啓示に基づくものであることを確信していた。リー長老は1942年1月に教会が実施した補助組織の集会和旅行の制限について、次のように述べた。「まだ皆さんの記憶に新しいことと思いますが、タイヤとガソリンの配給制度が実施される8か月から1年前にこれらすべてはわたしたちの間で実施されてきました。少し考えてみればお分かりのように、この民に対して再び主の声があったのです。主は1年以内に直面する事態に民を備えさせようとされたのです。当時、生活必需品を生産していた国々が侵略され、それによって物資の不足を来すなどとはだれも予想していませんでした。」

さらに、教会指導者は1937年の初めから、1年分の食糧を生産して貯蔵するよう聖徒に勧告してきたが、リー長老はここにも靈感があったことを確信していた。教会員はこの勧告のおかげで、配給制度や物資の不足、さらには政府の勤める家庭菜園にも十分に対応することができた。<sup>19</sup>

戦争のために「教会活動はこれら以外の面でも制限を受けた。建築資材が軍隊用に回されたため、集会所の建設は停止された。アイダホフォールズ神殿も例外ではなかった。しかし、戦争によって最も大きな影響を受けたのは宣教師プログラムであろう。1942年、教会は徴兵が適用される年齢の青年を伝道に召さないことに同意した。このため、宣教師の数は急激に下落した。1941年には1,257人の新しい専任宣教師が召されていたが、2年後にはわずか261人が召されたにすぎない。大戦前は、全宣教師の6分の5が長老もしくは七十人の職を持つ青年男子であったが、大戦中、1945年までに召された宣教師のほとんどは女性が大祭司だった。10年前、大恐慌の際に宣教師の数が落ち込んだときと同様に、伝道地に住む会員たちは再び、伝道について大きな責任を引き受けることになった。北アメリカ全域で聖徒たちはパートタイム宣教師の召しを受け、地方部や支部で大きな役割を果たした。

教会は戦時用の特別なプログラムを実施したほか、会員たちが自らの愛国心に基づいて戦場にいる兵士に対して支援するよう奨励した。1942年の最初の日曜日は特別の断食と祈りの日として指定された。第一次世界大戦中に行ったように、再び、赤十字をはじめとする慈善団体に惜しみなく貢献する聖徒たちを中央幹部は称賛した。扶助協会は家庭用に応急手当セットを手配し、また赤十字に対して包帯などを寄付した。1942年から1943年の冬にかけて、12歳と13歳のビーハイブの少女たちは廃品となった金属、食肉の脂肪、その他必要とされるものを集めたり、兵士のためにスクラップブックを作ったり、クッキーを焼いたり、軍需産業で働く母親のために子供たちの面倒を見るなどの活動に、22万8,000時間の奉仕をした。このような奉

## 第二次世界大戦中の聖徒

仕に対して特別の「オナー・ビー」(Honor Bee)賞がビーハイブの少女たちに贈られている。そして1943年に合衆国とカナダの相互発達協会の青年は、爆撃された空軍兵士の救助に緊急に必要とされていた救命ボートを購入するために、300万ドル以上の資金を集めた。<sup>20</sup>

末日聖徒は故国に残る者、戦場にいる者、敵味方として戦う者、それぞれが自国の大義を支持するために愛国心に基づいて力を尽くしていたが、全員が求めていたのは平和を取り戻すことであった。戦争中に進展を見せた活動もあったが、人々の力の多くが戦争に注がれたため、教会の活動は全般的に停滞した。人々が待ち焦がれた大戦終結が1945年に実現してから、教会は再び成長の道を歩み始めるのである。

### 注

1. ギルバート・W・シャーフス, *Mormonism in Germany* 『ドイツのモルモニズム』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1970), 86 - 88参照
2. M・ダグラス・ウッド, Conference Report 『大会報告』1940年4月, 79 - 80で引用
3. デビッド・F・ブーン “The Worldwide Evacuation of Latter-day Saint Missionaries at the Beginning of World War II” 『第二次世界大戦初期における末日聖徒の宣教師による世界的規模の撤退』修士論文, プリガム・ヤング大学, 1981年, 39 - 40。35 - 43も参照
4. マーサ・トロント・アンダーソン, *A Cherry Tree behind the Iron Curtain: The Autobiography of Martha Toronto Anderson* 『鉄のカーテンの向こうにある桜の木: マーサ・トロント・アンダーソンの自叙伝』(Salt Lake City: Martha Toronto Anderson, 1977), 31 - 32
5. 『大会報告』1940年4月, 20で引用
6. シャーフス 『ドイツのモルモニズム』102 - 103参照
7. シャーフス 『ドイツのモルモニズム』104 - 105参照
8. フレデリック・W・バベル, *On Wings of Faith* 『信仰の翼に乗って』(Salt Lake City: Bookcraft, 1972), 110 - 111参照
9. シャーフス 『ドイツのモルモニズム』111で引用
10. ジェームズ・R・クラーク編, *Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』全6巻 (Salt Lake City: Bookcraft, 1965 - 75), 6:141で引用
11. 『大会報告』1942年4月, 90, 92 - 95で引用
12. ジョセフ・F・ブーン “The Roles of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints in Relation to the United States Military, 1900 - 1975” 『合衆国軍との関係において末日聖徒イエス・キリスト教会が果たした役割, 1900 - 1975年』博士論文, プリガム・ヤング大学, 1975年, 548 - 552参照
13. ブーン 『教会の役割』698 - 699
14. 『大会報告』1945年4月, 108 - 109で引用
15. ロウエル・E・コール “Latter-day Saints Servicemen in the Philippines Islands” 『フィリピン諸島における末日聖徒の軍人』修士論文, プリガム・ヤング大学, 1955年, 98, 103参照
16. 『大会報告』1942年10月, 73で引用
17. リー・A・パーマーから管理監督会にあてた報告書, 1944年9月21日付, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, リグランド・リチャーズに関連する記録, 1937 - 1947年参照
18. 大管長会から教会役員への通知, 1942年1月17日付参照, 回状1889 - 1985年, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー
19. 『大会報告』1943年4月, 128で引用。126も参照
20. リチャード・O・コーエン, *The Church in the Twentieth Century* 『20世紀の教会』(Salt Lake City: Bookcraft, 1985), 186 - 187

# 大戦後の復興

年表	重要な出来事
1945.5.21	ジョージ・アルバート・スミス、大管長となる
1945.8	第二次世界大戦終結
1945.9.23	アイダホフォールズ神殿がスミス大管長により奉献される
1946.1	エズラ・タフト・ベンソン長老、ヨーロッパ伝道部を再開するために派遣される
1946.9	スペンサー・W・キンボール長老、教会のレーマン人委員会委員長に召される
1947	教会員数が100万人を突破する
1947.7	開拓者百年祭を祝う
1947秋	インディアン学生紹介プログラムが始まる

## 19

45年、第二次世界大戦の恐怖と破壊はついに終わりを告げた。ヒーバー・J・グラント大管長は同年の5月14日に他界した。ヨーロッパの戦闘が終了して1週間後、日本が降伏する3か月前のことであった。グラント大管長の跡を引き継いだジョージ・アルバート・スミス大管長は、全世界が再建に向けて活動を開始し、また戦後になおくすぶっていた憎しみを克服しなければならない時代に教会を導くというチャレンジに立ち向かうことになった。教会指導者は、イエス・キリストの福音の原則に従うことによってのみ恒久的な平和がもたらされることを、全世界と聖徒たちに訴えた。

### 戦後の教会を管理した愛の指導者

ジョージ・アルバート・スミス大管長は、半生における様々な経験によって、また自らの内に培ったキリストが持ちたもうような愛によって、この召しを受けるための準備をしてきた人物である。スミス大管長はそれを裏付けるようにこう述べている。「わたしが知っているかぎり、わたしには敵と呼ばれるような人はいません。……あらゆる男女は御父の子供です。わたしは生涯を通じて、自分を愛するように隣人を愛しなさいと言われた人類の救い主の思慮深い戒めに従おうと努力してきました。」<sup>1</sup>

ジョージ・アルバート・スミス大管長が十二使徒定員会に召されたのは1903年のことである。スミス一族から中央幹部に召された第4世代に当たる。ジョージ・アルバート・スミスが召しを受けたとき、彼の父親であるジョン・ヘンリー・スミスも使徒として働いていた。父親と息子が同時に十二使徒定員会で働いたという例は、教会の歴史を通じてこれが最初であり、また唯一のケースである。

ジョージ・アルバート・スミス長老は1919年から1921年までヨーロッパ伝道部を管理した。第一次世界大戦終結後、宣教師の再入国を拒否した国は数か国に上っていた。スミス長老は宣教師たちの再入国の許可を得るために各国の政府と交渉したが、このときの経験が第二次世界大戦終結後に大いに役立つことになった。教会は前回の戦後と同じような状況に遭遇したからである。

スミス長老はヨーロッパ伝道部から帰還すると、青年男子相互発達協会を管理する召しを受けた。スミス長老のこの召しは10年以上に及ぶことになる。スミス長老自身は長年にわたって、青少年に対して非常に大きな関心を寄せており、初期のころから、ボーイスカウト運動の中心的支持者であった。1932年には、アメリカボーイスカウト連盟の全国実行委員会の委員に選ばれ、2年後にはその優れた働きに対して、連盟の最高栄誉賞であるシルバーバッファロー賞を受けている。スミス大管長



ジョージ・アルバート・スミス（1870 - 1951年）



## 時満ちる時代の教会歴史

の若人に対する関心は、第二次世界大戦終了後に帰国して数々の問題に遭遇した軍人たちに対して助言を与える際に、大きく生かされている。

1945年の末期から、兵役を解かれた末日聖徒が続々と故郷へ帰って来た。軍隊の生活から一般市民の生活に戻るのには容易なことではなかった。教会は彼らを生活環境の変化に順応させるために手段を講じた。まず、監督は帰国した軍人をすぐに面接し、教会の責任を与えた。神権定員会は歓迎会を開き、職探しを手伝った。その中でも特に大切な役割を果たしたのは相互発達協会であり、スポーツや社交活動によって退役軍人のフェローシップを実施した。

## 戦争で荒廃したヨーロッパの聖徒を援助する

第二次世界大戦後の教会指導者がまず第一にすべきことは、最長6年間にわたって音信不通だったヨーロッパの教会員と連絡を取ることだった。特にドイツとオランダの市街地は壊滅状態にあり、おびただしい数の教会員が住居を失っていた。戦後の極端な食糧不足は苦悩する人々にさらに追い打ちをかけていた。

連合軍に所属していた末日聖徒の軍人はこれらの苦しむ会員たちに応急的な援助を提供した。戦後ヨーロッパ大陸を訪れた最初の教会役員は、イギリス伝道部のヒュー・B・ブラウン部長であった。ヨーロッパの戦火が消えてわずか2か月後にブラウン部長はパリへ飛び、大きなホテルの舞踏会場に350人の軍人と地元の会員を集めて集会を開いた。次に列車でスイスに向かい、様々な障害を克服して幾つかの集会を開いた。ブラウン部長は行く先々で、集まった人々の信仰と希望を燃え立たせるために力を注いだ。

1945年の秋から教会はヨーロッパに救援物資を送り始めた。通常の郵便で送っていたため、小包にしなないと取り扱ってもらえず、そのために莫大な送料<sup>ばくだい</sup>がかかっていた。しかし、それでも教会は1946年1月までに1万3,000個の小包を送った。さらに多くの小包が教会員、個人の手で送られた。その間に、教会は荷物を大量に輸送する手段を探していた。これを達成するには政府官僚の協力が必要であった。最終的に、ジョージ・アルバート・スミス大管長、ジョン・A・ウイツォー長老、デビッド・O・マッケイ長老の3人がワシントンD.C.へ赴き、諸外国の大使や政府関係者とかなりの期間にわたって話し合いを続けた。スミス大管長は、11月3日ホワイトハウスにおいて20分間、ハリー・S・トルーマン大統領と会見したときの様子を後に次のように述べている。

「『大統領閣下、もし末日聖徒に食糧や衣類や寝具をヨーロッパへ送る用意があるとしたら、閣下がどのような対応をしてくださるかお伺いしたいと思ひまして、参ったのですが。』

大統領はにっこりとしてわたしの方へ目を向け、こう言った。『どのような目的でお送りになるのですか。ヨーロッパの通貨は価値がありませんよ。』

わたしは言った。『お金が欲しいわけではありません。』彼はわたしを見てこう尋ねた。『では、物資を無料で差し出すとおっしゃるのですか。』

『そのとおりです。わたしたちは物資を彼らに分け与えたいのです。彼らはわたしたちの兄弟姉妹であり、苦境にあえいでいます。神はわたしたちに余るほどのも

## 大戦後の復興

のを祝福してくださったので、もし政府の協力が得られれば喜んでそれを送りたいと思っているのです。』

大統領は言った。『承知しました。』そしてこう続けた。『何なりともわたしたちにできることがありましたら、お手伝いしましょう。』<sup>2</sup>

1946年1月14日、大管長会は、国家の農業団体において永年にわたり重責を担ってきた十二使徒定員会会員のエズラ・タフト・ベンソン長老に、ヨーロッパの伝道部を再開し、ヨーロッパの聖徒たちの霊的ならびに物質的必要を満たす責任が与えられたことを発表した。大管長会は次のように約束している。「あなたが会うすべての人々は、あなたの及ぼす影響力を善意から生まれたものであると感じ取り、……また、あなたに伴う力と霊が人の手によって作り出されたものではないことを、人々とともに感じるができるでしょう。」<sup>3</sup> その後ヨーロッパで起きた数々の出来事は、この約束がまさに預言であったことを証明している。

ベンソン長老に同行したのは、戦争直前までスイス・ドイツ伝道部で働いていたフレデリック・W・バベル長老であった。二人は1946年1月29日にソルトレーク・シティーをたって、イギリスに向かった。この大きな使命を果たしている間、二人はしばしば聖典に記された一つの約束を思い返すことになる。そしてこの約束は文字どおり実現した。「彼らは出て行き、彼らをとどめる者はいない。主なるわたしが彼らに命じたからである。」(教義と聖約1:5) ベンソン長老は、後に総大会で次のように述べている。「障害となるものは次々と姿を消していきました。解決することが不可能だと思われた問題が解消していきました。わたしたちが果たした使命のほとんどは主の祝福によって行われたのです。」ロンドンに到着して2日後に、本部として使用するために理想的な設備が整った建物を確保することができた。<sup>4</sup>



吹雪の中を飛行機に乗り込むフレデリック・W・バベルとエズラ・タフト・ベンソン長老

エズラ・タフト・ベンソン長老は、ドイツ国内にあった4か所の占領地域すべてを訪れる許可を受けた最初のアメリカ民間人であった。ベンソン長老はこの旅行を通じて様々な驚くべき出来事を経験した。もしこれらが起きなかったとしたら、与えられた過酷な日程をこなすことはとうてい不可能だった。ベンソン長老をはじめとするこれらの出来事に居合わせた人々は、神が彼らに手を差し伸べておられた証として受け止めている。こうした体験の典型的な例として、ベンソン長老が末日聖徒従軍牧師のハワード・S・バドガー長老とともにパリからヘグに移動したときの出来事がある。パリの鉄道関係者からは、オランダへ行くにはオランダ東部の国境まで行かなければ入国できないこと、この迂回のために丸1日余分に時間がかかることを知らされた。そのときベンソン長老は出発の準備を整えている列車に気づき、駅長にその列車の行き先を尋ねた。ベルギーのアントワープ行きだった。

「駅長にその列車に乗ると言ったところ、駅長は、戦争の影響でアントワープとオランダ国内の間の接続便が途絶えているため、アントワープで1日待つことになると言いました。

けれども、わたしはどうしてもその列車に乗り込まなければならないと感じたのです。……

アントワープに到着すると、……駅長は当惑した様子で、オランダへ行くには、

## 時満ちる時代の教会歴史

かなりの距離を引き返さなければならず、そのために丸1日を無駄にしなければならぬことを教えてくれました。またもや、わたしは別の列車が出発しようとしているのに気づいて、その列車の行き先を尋ねました。すると、この列車はマース川にかかっていた大きな橋が破壊されているため、オランダの国境地点までを折り返し運転している便だということを教えてくれました。駅長はやめるように言いましたが、わたしはその列車に乗るべきだと感じました。

マース川に到着すると、乗客は全員降ろされました。わたしたちが荷物を持って立っていると、アメリカ軍のトラックがこちらにやって来るのに気づきました。バドガー兄弟は手を振ってトラックを止めました。そして近くに舟橋があることを聞いたバドガー兄弟はわたしたちをオランダまで連れて行ってくれるよう説得しました。こうしてオランダ側に入り最初の小さな村まで来たとき、驚いたことにわたしたちをヘグまで運んでくれる折り返し運転の列車が待っていたのです。<sup>5</sup>

ベンソン長老の最初の訪問先の一つにライン川沿いのドイツの主要都市カールスルーエがある。フレデリック・W・バベル長老に、末日聖徒はどこで集会を開いているかを尋ねたところ、<sup>はいきよ</sup>廃虚と化した地域へ行くように指示を受けているはずだと言った。

「ねじ曲がった鉄筋とがれきと化したコンクリートが大量に積み上げられた場所の近くで車を止めると、わたしたちは建物の<sup>ざんがい</sup>残骸の山を幾つか乗り越え、爆弾の投下によりむき出しになった壁と壁の間を用心しながらくぐり抜けて、言われた方角に向かって進みました。周囲の絶望的な状況を見て、わたしたちは使命を果たすことをあきらめかけていました。そのとき、遠くからドイツ語で歌う『恐れず来たれ、聖徒』の歌声が聞こえてきました。……

わたしたちは歌声が聞こえる方角に急ぎました。かなりの爆撃を受けた建物の前まで来ました。見たところ、まだ使える部屋が幾つかはありそうでした。そして、一つの部屋に、260人の喜びを満面にたたえた聖徒たちが集まっているのを見つけたのです。彼らは解散する時刻が過ぎてもずっと残っていたのでした。……

わたしたちは感謝の涙で頬をぬらしながら、にわか作りの壇上に上りました。わたしはベンソン長老がこのときほど感情を表に出した姿を見たことがありませんでした。<sup>6</sup>

ベンソン長老は後に、当時の気持ちをこのように述べている。「聖徒たちはわたしたちが大会に出席するという知らせを受けていたために、2時間も待っていていました。わたしたちが壇上まで歩いて行くとき、出席者のほぼ全員が涙を流していました。わたしは生涯を通じてこのような光景に出会ったことがありませんでした。6年か7年間の空白の後に、彼らの言葉を借りれば、シオンからの代表者がついに戻って来たのです。聖徒たちの希望により閉会時間を延ばして、ようやく集会を終えました。聖徒たちは爆撃で破壊された建物を去る前に、どうしても全員と握手をほしいと言いました。わたしたちは握手を交わしているうちに、列に並んで握手をした後もう一度列の最後尾へ行って、2度3度と繰り返す人が大勢いるのに気がつきました。いずれの人もわたしたちの手を握ることができて、うれしくてたまらない様子でした。青白くやせた顔でわたしたちを見詰める多くの聖徒はボロボロになっ



戦争で壊滅したヨーロッパを視察するエズラ・タフト・ベンソン長老

## 大戦後の復興

た服を身に着けていました。はだしの人もいました。わたしは、この偉大な末日の業が神の業であることを証し、主の祝福に感謝の言葉を述べる彼らの目に信仰の光を見ることができました。』<sup>7</sup>

ベンソン長老は、現在はポーランド領となっている旧東プロシア地域（ドイツの一部）に四散している聖徒たちを早急に訪問しなければならないと感じていた。ロンドンのポーランド大使館に何度も足を運んだが、ワルシャワまでのビザは交付されなかった。バベル兄弟は次のように報告している。

「ベンソン長老は数分間じっと考えてから、穏やかにしかしきっぱりと言いました。『このことについてお祈りしてみます。』

ベンソン長老が祈りをささげるために自分の部屋に入ってから、2、3時間が過ぎました。ようやく、ベンソン長老はわたしの部屋に姿を見せると、笑みを浮かべながら、『荷物をまとめておいてください。明日の朝ポーランドへ出発します』と言ったのです。

そのとき、わたしは自分の目を疑いました。ベンソン長老は美しく輝く光に包まれていたのです。彼の顔は輝いていました。思うに、預言者ジョセフが主の御霊に満たされたときはこのように輝いていたに違いありません。』<sup>8</sup>

飛行機でベルリンに到着してから、ベンソン長老は一行がポーランドへ入るために必要な許可を得た。ベルリンのポーランド軍在外公館は、ワルシャワに問い合わせさせて承認を受けなければビザを交付することは不可能であり、そしてこの手続きには14日間かかると断言していたが、ベンソン長老はいとも簡単にビザを手に入れた。ポーランドに着くとベンソン長老の一行はかつて教会のドイツ人支部があったゼルバックという小さな村へ車に向かって。ところが村へ入ると、通りには人の気配がまるで感じられなかった。唯一目に入った女性に、支部長がどこに住んでいるかを尋ねた。バベル長老はそのときの様子を次のように述べている。

「わたしたちは大きな木の陰に隠れている一人の女性を見つけました。車を止めると、彼女は明らかにおびえていました。しかし、わたしたちの素性を明かすと、彼女は感謝と喜びの涙を流しながら歓迎してくれました。……

……数分もしないうちに、叫び声の家から家へと伝わっていきました。『兄弟たちがおいでになった！ 兄弟たちがおいでになった！』間もなくわたしたちはかつて見たこともないような幸せの頂点に達した50人くらいの人々に取り囲まれたのです。

わたしたちが乗った見慣れないジープが近づいて来るのを見た人々はロシアかポーランドの兵隊だと思い込み、くもの子を散らすように通りから姿を消したのでした。しかし、わたしたちが何者であって何のために来たかが明らかになると、村は喜びにあふれた女性と子供たちで活気を取り戻しました。なぜ女性と子供かと言えば、かつては29人いた神権者がわずか2人になっていたからでした。

その日の朝、村の100人を超える聖徒たちは断食証会を開いて、証を述べ、賛美歌を歌い、断食と祈りによって全能の神に願い求めていました。彼らに神の憐れみが与えられ、長老たちが再び彼らを訪れるようにと。1943年の初期以来、教会本部と伝道本部からほとんど連絡のない状態に置かれていた聖徒たちにとって、わたしたちの突然の訪問は、まさに長い間待ち焦がれていた祈りの答えでした。彼らはこの

## 時満ちる時代の教会歴史

ような幸運が現実には起こるとはすぐには信じることができませんでした。<sup>9</sup>

ベンソン長老はヨーロッパの聖徒が再び主の業を前進させる意欲に燃えていることを知った。しかし教会のプログラムを再開する前に、多くの問題を解決しなければならなかった。多くの支部は戦争中に神権指導者のほとんどを失っていたため、支部を組織するための神権者がいなかった。さらに、集会所や家屋が破壊された聖徒たちは、物質的な財産を失っただけでなく、霊的に大切なものもなくしていた。例えば、幾つかの支部には聖典がなかった。しかしながら、ベンソン長老はこのように報告している。「教会員は驚くほどの忍耐を持ち続けました。彼らは信仰篤く、すばらしい献身を示し、この上なく忠実でした。」<sup>10</sup>

ベンソン長老に与えられた最も重要な任務の一つに、ヨーロッパの聖徒が緊急に必要としていた食糧と衣類を支給する責任があった。物資の不足が最も深刻だったドイツにおいて、教会員はこの緊急事態に対応するための勇気と信仰を示し、また前もって手段を講じていた。戦争末期の数か月間、会員たちは衣類を集めて、安全な場所に隠しておき、それを分かち合っていた。ベルリンの伝道部長リチャード・ラングラックはこれらドイツの教会員の中に、苦難に遭遇する度に結束した初期の末日聖徒の姿を見たと語っている。<sup>11</sup>

オランダの聖徒は戦争後、土地を手に入れてはじゃがいもを植えた。そうして得た収穫をかつては敵国だったドイツの兄弟姉妹と分かち合っている。ベンソン長老は3月半ばまでに、ヨーロッパ各国の政府および軍当局と交渉して、アメリカからさらに救援物資を送る手配を終えた。

教会は合衆国においてこれまで備蓄しておいた量の物資を超える必要があるため、中古衣類その他の物資を集める運動を展開し始めた。ジョージ・アルバート・スミス大管長は率先して、ヨーロッパで苦しむ聖徒たちへの愛と関心を示した。大管長は少なくとも洗濯したてのスーツを2着、洗濯屋から届けられた袋に入ったままのワイシャツを数枚、寄付している。大管長は中古衣類回収運動の状態を視察するために福祉区域を訪れた際、着ていたコートを脱いで、ヨーロッパへ送るために積み上げられた衣類の上に置いた。その場に居合わせた人々が思いとどまらせようとしたが、大管長は耳を傾けず、コートなしで事務所に戻った。<sup>12</sup>

ヨーロッパの軍関係者と政府官吏は教会がアメリカから送った物資があまりにも早く着いたのでその手際の良さに驚きの目を向けていた。ヨーロッパの教会指導者は、福祉援助物資が到着した倉庫へ衣類の検品に行ったところ、衣類のポケットに穀物の入った小袋を見つけた。彼らは人々の思いやりに喜びと感謝で人目もはばからず号泣した。こうして、合計93台の貨車に相当する物資が届けられた。

ベンソン長老はフィンランドで宣教師活動を開始するための任務も果たしている。1946年7月16日、ベンソン長老はラスモに近い美しい丘の頂で、フィンランドが福音を受け入れる国となるよう奉献し、祝福した。翌日にヘルシンキで開かれた集会には驚いたことに245人もの出席者があり、彼らは福音に対して心からの関心を示した。<sup>13</sup> フィンランド伝道部が組織されたのは翌年のことである。

ベンソン長老は、合計9万6,500キロ、10か月にわたるヨーロッパの旅を終えて、1946年12月に帰還した。このころには、新しく召された伝道部長が再びヨーロッパ

## 大戦後の復興



マシュー・カウリー（1897 - 1953年）はポリネシアの使徒として知られていた。青年時代に宣教師としてニュージーランドへ渡り、マオリ語を学んだ。カウリー長老は『教義と聖約』と『高価な真珠』をマオリ語に翻訳している。

各地へ向かっていた。

### 太平洋諸島における伝道の再開

太平洋諸島における伝道の再開はヨーロッパほど難しくはなかった。宣教師はハワイを除く各国から引き揚げていたが、伝道部長だけは各任地にとどまっていた。さらにこれらのほとんどの地域では戦闘が行われなかったため、戦争後、宣教師はこれといった障害もなく再び任地に向かった。

1946年も押し詰まったころ、大管長会はマシュー・カウリー長老を太平洋伝道部の部長に召したことを発表した。カウリー長老は、この召しを受ける以前に戦争中も含めて8年間ニュージーランド伝道部部長を務め、解任されるとほぼ同時に十二使徒定員会会員に召されていた。カウリー長老は太平洋地域の各伝道部において、ベンソン長老がヨーロッパで果たしたと同様の使命を果たした。カウリー長老は3年間にわたり太平洋各地を旅行して、多くの驚くべき体験をしている。例えば、あるとき彼は50人の人々に祝福を与えている。また、別の日には76人の人々に祝福を与えた。彼らは祝福を受けるために朝5時から並んだそうである。

カウリー長老は日記に次のように記している。「これは異常な出来事だと思う。...

...

彼らは癒された。癒される信仰を持っていたからである。.....わたしが彼らの頭に手を置くと、彼らは癒された。それはわたしの信仰ではない。わたしは彼らの信仰を信じただけである。」<sup>14</sup> カウリー長老の太平洋地域に住む人々に対する大きな愛、イエス・キリストに対する深い信仰、熱意あふれる指導力、これらが太平洋地域における教会の成長をもたらしたのである。

教会は日本において大きな問題に直面していた。伝道部は1924年以降閉鎖されていた。1945年の時点で、この日の出ずる国に残っていた教会員は50人ほどにすぎなかった。しかし、アメリカ占領軍に交じた末日聖徒の軍人たちは、日本における教会の将来に大きな貢献をしたのである。彼らは福音の精神とメッセージによって日本人に祝福を与えたいと考えていた。3人のモルモン兵士が、愛知県鳴海村の骨董品屋でお茶を勧められた。彼らは辞退し、この機会を捕らえて肉体の神聖さについて説明し始めた。これが、その場に居合わせた一人の男性と福音について話さきかけとなったのである。間もなく佐藤龍猪は家族とともに戦後の日本で最初にバプテスマを受けた改宗者となった。この家族は福音を固く信じた。佐藤兄弟は日本における教会の翻訳の第一人者となった。佐藤夫人にバプテスマを施した若い軍人が将来の十二使徒定員会会員ボイド・K・パッカーであった。<sup>15</sup> その後改宗者のバプテスマが次々と施された。こうして日本伝道部を再開するための基礎が築かれたのである。

1947年、大管長会は連合占領軍の将校として日本に駐留したことのあるエドワード・L・クリソルドに対して、日本へ戻り伝道部を開く召しを与えた。日本に到着したクリソルド伝道部長は、20年前よりもよりいっそう人々が福音を受け入れやすい状態になっていることに気がついた。日本人には霊的に空白の期間があった。多くの人は人生の目的を求めていた。日本に最初に召された5人の宣教師はいずれも元軍

## 時満ちる時代の教会歴史

人で、つい先ごろまで敵であった国の人々に対して福音を分かち合うことになった。1949年の時点で日本の教会員数は135人であった。

第二次世界大戦後の数年間は北アメリカの各地が成長を遂げた時期であった。末日聖徒が戦争中に職を求めて移動して行った先の地域において大きな成長が見られている。また1947年に教会員数は100万人に到達した。記念すべき道標を通過したことになる。さらに戦後の数年間は、教会の各種プログラムや活動を再度立ち上げる時期でもあった。

### 戦後の教会活動

戦争がもたらした様々な制約により最も大きな打撃を受けていたのは伝道事業と教会の建築活動であった。しかしながら、戦争が終結してこれらの事業をはじめとする様々なプログラムは息を吹き返しただけでなく、聖徒たちの必要を満たすために以前よりも規模を拡大して展開されることになった。戦争中は宣教師の召しにも制限があったが、その制限も解除された。こうして、伝道の召しを受け入れても着任を延期せざるを得なかった多くの青年が任地に向かった。このように宣教師の数は急増して、過去の記録を塗り替えていった。1945年には年間平均わずか477人だった宣教師が、1年後には2,244人にふくれ上がった。ほとんどの宣教師は若い長老が召されて、大戦前の状態に戻った。しかしながら、これは、新任の宣教師ばかりが増えたということであり、したがって福音を教える経験が不足していて、援助と指導を必要とする新任の宣教師が大勢任地にいるという状態が起きていたのである。

戦後、宣教師に最も広く使用されていたレッスンの概要は合衆国北西部諸州伝道部のリチャード・L・アンダーソンが作成したものである。アンダーソン兄弟は兵役中にステーキ宣教師として働いていたが、その間に開発した方法を基にして福音の教授法を新しく作り上げた。宣教師は単にちらしを配るだけに終始するのではなく、求道者から家庭に招待を受けてそこで福音のメッセージを紹介することを目標とした。福音について話し合う場合は、聖典を詳しく調べることに、それらを論理的に積み重ねていくことにより改宗まで導くことを目指した。この方法が伝道部全体で実施されるようになると、以前とは明らかに違う結果をもたらした。1949年に合衆国北西部諸州伝道部では1年間に1,000人以上もの改宗者のパプテスマがあった。

伝道活動が活発になり、改宗者が増えるのに伴い、伝道部長の管理責任も大きくなっていった。このため中央幹部は1947年に全世界の伝道部長に対して、宣教師と地元のメルキゼデク神権者の中から副部長を召すようにとの指示を与えた。スペンサー・W・キンボール長老は後に、副部長が召されるようになったのは大管長会に啓示が与えられたためであることを明らかにしている。<sup>16</sup>

伝道部の組織が強化され、宣教師の福音を教える方法が改善される一方で、教会は全世界に福音を宣べ伝えるための方法に別の面から改善を図っていた。戦時中に実施されていたガソリンの配給制度が解除されて、人々の旅行が活発になったことにより、テンプルスクウェアにおける伝道が大きな成果を上げていた。1948年に、テンプルスクウェアの年間訪問者数は初めて100万人を超えた。<sup>17</sup> 同じ年に、クモラの丘ページェントが再開されることになり、『モルモン書』と福音の回復にまつわる

## 大戦後の復興

物語「アメリカにおけるキリストの証人」を上演して、伝道活動に貢献している。

戦後、教会は映画の制作に力を入れ始めた。1940年代後期に新しく制作された映画には、教会の史跡地、テンブルスクウェア、福祉プログラムを扱ったものがある。この時期にはテレビの発達も目覚ましかった。教会はすぐさまテレビの活用に着手した。<sup>18</sup> 総大会のテレビ放送が初めて行われたのは1949年10月のことである。<sup>19</sup>

戦時中の教会建築プログラムは必要な資材が不足していたため、ほとんど休止状態にあった。資材の入手が可能になると、教会は大きな目標を掲げて、礼拝堂建設プログラムを開始した。1949年には200の集会所が完成した。そして、わずか3年後には完成した集会所は合計900に達している。1950年代半ばの時点で、末日聖徒が使用している建物の半数以上は第二次世界大戦終了後に建設されたものだった。この間、教会中央資金から拠出される予算の半分以上がこれらの建築事業に充てられた。

ヒーバー・J・グラント大管長は1937年に、アイダホ州アイダホフォールズに神殿を建設する計画を発表し、2年後に工事が始まった。1941年10月19日に笠石が置かれ、外観上は完成間近を思わせていた。しかしそれから2か月もたたないうちに真珠湾攻撃に端を発して合衆国は戦争に突入した。建築用資材が突如として入手できなくなったため、神殿の完成は大幅に遅れを来すことになったのである。1945年半ばにアイダホフォールズ神殿はついに完成し、奉献の準備が整えられた。ジョージ・アルバート・スミス大管長は奉献の祈りの中で戦争の終結に感謝を表すとともに、世界の人々がイエス・キリストの福音に従って生活するようになり、それによって恒久的な平和がもたらされるようにと祈っている。

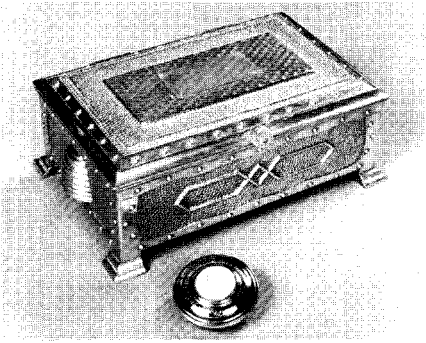
系図の探求を目的として重要記録をマイクロフィルム化する作業も世界大戦の**ぼっぼつ**勃発によって中断されていたが、戦争終結以前からすでに再開されていた。1945年3月、教会は365のイギリス教区記録のマイクロフィルム化を始めた。1947年に系図協会事務官のアーチボルド・F・ベネットはヨーロッパに4か月間滞在して、政府官吏や宗教指導者と交渉した結果、イングランド、スコットランド、ウェールズ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、オランダ、ドイツ、フィンランド、スイス、イタリア北部、フランスにおいて系図協会が記録をマイクロフィルムに撮影する許可を受けた。戦争により被害を受けていた各記録保管所は、これによって万が一原本が焼失しても控えを取っておくことができるために、マイクロフィルム化に進んで協力した。系図協会は各図書館または教会に対して、閲覧者が壊れやすい原本に手を触れずに閲覧できるように、撮影したマイクロフィルムを寄贈した。

1950年初頭には合衆国とヨーロッパの数か国で22人の専任技師がマイクロフィルム撮影の作業に携わっていた。聖徒は教会の系図図書館でこれらの重要記録を閲覧することが可能になったため、神殿の儀式が執行できる人々の身元を確認するうえで必要な調査が容易に行えるようになった。

戦後は、家族を重視することが社会的な風潮となった。この時代の要求にこたえた教会指導者は、以前にも増して家庭の重要性を強調している。戦争が終結すると結婚する人々が急増し、続いてベビーブームが起こった。教会においても過去の歴史に見られないほど多くの家族が誕生し、子供が生まれている。しかしながら、残念なことに合衆国では1940年と1950年を比較すると離婚率がおよそ倍増している。



## 時満ちる時代の教会歴史



ヒーバー・J・グラント大管長は1938年11月22日、82回目の誕生日に大管長が好意的に感じている慈善活動に寄付するよう、1ドル銀貨が1,000枚入った銅の小箱を贈られた。グラント大管長は銀貨を文鎮に入れ、それを新しく建設される初等協会小児病院の資金にするために売った。

初等協会小児病院は1952年に完成し、デビッド・O・マッケイ大管長により奉献された。



このため、戦後教会は家庭と家族にかつてない注意を向けている。1946年に教会の幾つかの組織では、家族を強め、定期的に「家族の時間」を持つことを奨励するプログラムを実施した。

教会の青少年は家族の離散など戦争が残した影響から派生した深刻な問題を抱えていた。このため、中央幹部は地元の指導者に対して青少年に関心を払うように指示している。青年男子および青年女子相互発達協会は、若人に対して健全なレクリエーション活動を提供するために、短いミュージカル劇や演劇、スピーチコンテスト、音楽祭などを主催した。フットボール競技場を会場にして開かれた地区ダンスフェスティバルには色とりどりの衣裳に身を包んだ大勢の若人が参加した。ワードのソフトボールとバスケットボールのチームはステーキ、地区そして全教会の選手権を争った。これらの教会が主催した活動は、競技会としては当時世界最大の規模であると考えられていた。このように変化に富んだプログラムは教会の若人に祝福をもたらすと同時に多くの人々の注目と称賛を浴びることになった。

教会指導者は聖徒に対して、霊的な成長を図ることを家庭内で最優先の課題とするように奨励した。また、日曜日を礼拝のための聖なる日として尊ぶことを強調した。日曜日の朝、男性は大人も子供も1時間の神権会に出席した。そして家族全員が日曜学校に出席する。30分間の開会行事では、ワードの二人の若い人々が2分半の話をした。その後全会衆が10分間、賛美歌を練習してから、聖典と聖典に関連した福音の主題から約1時間のレッスンを受ける。家族はいったん帰宅してから、午後の遅くか夕べに再び聖餐会に出席するために教会に集まる。この集会は1時間半にわたって開かれ、時にはワード聖歌隊が霊的な音楽を発表したり、若人と成人会員が様々なテーマで教義に関する話をした。月に1度は日曜日の夕べに若人と成人会員が集まってファイヤサイドが開かれた。ここでは、皆くつろいだ雰囲気の中でいろいろなことについて話し合い、その後準備されたリフレッシュメントを楽しんでいた。戦後、聖徒が参加する教会活動は急速に増えている。

教会はまた、会員の健康管理の改善にも力を入れている。ソルトレーク・シティーとオグデンの病院の改築と増築が実施された。また教会はユタ、アイダホ、ワイオミングの過疎地域において、自治体と協力して小規模の病院を設立した。1949年には総工費125万ドルをかけた初等協会小児病院の建設がソルトレーク・シティーにおいて開始されている。これはノーステンプルにあった小規模な施設に代わるもの

## 大戦後の復興

である。この近代的な設備を持つ病院は宗教と人種を問わずあらゆる子供に診療活動を行った。支払い能力のない家族には無料で診療が行われた。

### レーマン人に関心を向ける

教会は1940年代に、アメリカインディアンと、『モルモン書』の民の子孫と考えられている人々に対して実施してきたプログラムを大きく発展させている。20世紀におけるアメリカインディアンへの伝道は1936年に開始された。この年に大管長会はアリゾナ州北東部のスノーフレイクステークに対して、ナバホ族、ホピ族、ズーニー族の間で正式に伝道活動を始めるよう指示した。その後、間もなく他のステークもアメリカインディアン（原住民）に対する伝道活動に着手している。

アメリカインディアンに対するこれらの伝道活動が飛躍的な進歩を遂げたのは、1942年11月のことである。同月、ナバホ族の末日聖徒であるジョージ・ジャンボは腰椎の手術を受けるためにソルトレーク・シティーへやって来た。手術を終えて帰る前に、ジョージの妻メアリーがヒーバー・J・グラント大管長に会うことを希望した。手配が調い、メアリーはグラント大管長の前に立つと、「自分の部族にも宣教師を派遣してほしいと大管長にお願いしました。」するとグラント大管長は涙で頬をぬらしながら、十二使徒定員会のジョージ・アルバート・スミス長老に向かって、こう言った。「『あなたが十二使徒評議会会長として大切な責任を担っていることは承知していますが、もう一つ責任を受けてください。この民の間で宣教師活動を始めてください。……そして、この伝道活動が途中でしぼむことがないように、永続するように見届けてくださいませんか。』」<sup>20</sup> 翌年早々にナバホ・ズーリー伝道部が組織された。間もなく、合衆国とカナダ全域のインディアンに対して手を差し伸べるために、他の部族にも宣教師が派遣されるようになった。

1945年から他のレーマン人の子孫は、これとは違った別の方法で祝福を受けることになった。スペイン語を母国語とする多くの人々は、神殿の儀式が英語で行われているため十分に理解できなかった。これらの人々のためにアリゾナ神殿で初めてスペイン語による儀式が行われることになった。1945年11月初旬にアリゾナ州メサにおいてレーマン人のための特別大会が開かれ、約200人が集まった。遠くメキシコ・シティーから参加した人々もいた。これらの聖徒のほとんどはメサへ来るために、金銭的に大きな犠牲を払っていた。仕事を辞めて参加した人もいた。デビッド・O・マッケイ第二副管長は出席者を称賛する言葉を述べている。史上初めてスペイン語によるエンダウメントが行われたのはその2日後のことである。<sup>21</sup> レーマン人大会に出席した人々は、教会には自分たちが毎週礼拝している小さな支部だけでなく、もっと大勢の人々が集まる組織があることを発見したのである。これ以降、人々は年に1度開かれるようになったレーマン人大会とアリゾナ神殿におけるスペイン語の神殿セッションを待ち焦がれるようになった。

1946年、ジョージ・アルバート・スミス大管長はスペンサー・W・キンボール長老に、レーマン人に対して特別な関心を払い、また指導する責任を与えた。キンボール長老は当時を振り返って次のように述べている。「わたしは、リーハイの子孫に対して愛情を覚えるようになったのはいつごろからなのかをよく覚えていません。

## 時満ちる時代の教会歴史

.....また、9歳のときに祝福師サミュエル・クラリッジ長老から受けた祝福にそのようなことが約束されていたからかもしれません。祝福の一部を読んでみると、次のように書かれています。

『あなたは多くの民に福音を宣べ伝えるであろう。特に、レーマン人に伝えるであろう。.....』

.....約束が与えられてから42年たった今、ジョージ・アルバート・スミス大管長からこの伝道の召しを受けたことにより、わたしに与えられた祝福が成就したのです。』<sup>22</sup>

キンボール長老は1947年にメキシコ伝道部を訪問中、レーマン人の輝ける未来について示現を受けた。同年11月にメサで開かれたレーマン人大会においてこのことについて話している。彼が見たレーマン人は他人に仕える僕ではなく、銀行や企業のオーナーであり、建築技師であり、政治指導者、弁護士、医者であった。また、レーマン人が新聞の発行を手がけ、書物や記事の執筆活動に携わることによって、大きな影響力を持つようになることを予感して、次のように語っている。「わたしは教会が歩みを速めて成長し、ワードやステークが組織されるのを見ました。それも数百のステークを見ました。

わたしは神殿を見ました。またこの神殿が参入者の男女でいっぱいになるのを見たいと願っています。』<sup>23</sup>

それから30年後、キンボール大管長はメキシコ・シティーで開かれた地域大会を管理した。大管長は再び、1947年に受けた示現について語り、示現の成就に向かって人々がしっかりと歩んでいるのを見ることができると述べた。<sup>24</sup>

インディアンが最も必要としていたのは教育だった。この必要を満たすためのユニークなプログラムが1940年代末期にユタ州中部で始められている。ゴールデン・R・ブキャナンはユタ州リッチフィールドのセビアステーク会長会の一員だった。1947年の秋に、ブキャナン副会長は同地域に季節労働者として農作業に来ていたインディアンが極めて貧しい状態に置かれていることを知った。そこでステーク大会において、レーマン人の兄弟たちに対してよく世話をするように聖徒たちに勧告した。

それからしばらくして、近くの町から来た一人の教会員から、ヘレン・ジョンという名のインディアンの少女が家族と一緒に保留地に帰らないで、町に残って学校に行きたいと言っていることをブキャナン副会長は知らされた。彼女は末日聖徒の雇い主にこう言っていた。「お宅の裏庭にテントを張らせてください。決してご迷惑をかけないことを約束します。自分のことは自分でしますから。あなたの娘さんたちと一緒に学校へ行きたいのです。」ブキャナン副会長はその考えに心を打たれた。「もし教会がこのようなプログラムを実施したら、数百人のインディアンの子供たちは末日聖徒の家庭で暮らして、学校に通うだけでなく、学校では教えてくれない福音の原則についても学ぶことができる。」ブキャナン副会長は考えをまとめてキンボール長老に手紙を出した。キンボール長老はブキャナン兄弟姉妹に、ヘレンを自分の家で世話をすることを申し出た。こうして数人のインディアンの若人が地域内の家庭に預けられることになった。

こうした出来事が契機となってプログラムは大きく成長した。1950年代には教会

## 大戦後の復興

が正式に主催する活動となった。そしてついに、1年間で5,000人も生徒が、合衆国西部とカナダ全域で末日聖徒の家庭に預けられたのである。

## 開拓者百年祭

教会活動が戦後の復興を遂げていた最中の1947年に、開拓者百年祭が行われた。この祭典によって聖徒は自分たちが受け継いでいるものに改めて注目することとなった。祝賀活動を計画するための市民組織の中心となったのがジョージ・アルバート・スミス大管長であった。教会指導者の中で、過去の偉業をたたえることに最も熱意を示したのはスミス大管長であった。春と夏に、音楽の演奏会、芸術作品展覧会、スポーツ大会、演劇の公演などが数多く実施された。1930年の教会設立百年祭で好評を博した「時を超えたメッセージ」がソルトレーク・タバナクルで再度上演された。このページの制作にかかわった人は1,400人に上る。公演は25回を数え、13万5,000人の観客を集めた。

ユタ大学の競技場で2週間にわたって上演された新しいミュージカル「約束の谷」には8万5,000人の観客が集まった。末日聖徒の著名な作曲家クロウフォード・ゲイツによるオリジナル曲を中心としたこの作品は、初期の開拓者が味わった苦悩と献身を描いている。また全教会の相互発達協会がそれぞれ地元で上演するようになるとともに、後にソルトレーク・シティーで夏に必ず公演される人気作品となった。72台の車に幌をかぶせ、ペニヤ板で作った牛を横に張り付け、開拓者隊を模して開拓者時代のノーブーからソルトレーク盆地までの行程を再現したグループもあった。

百年祭が最高潮に達したのは、最初の開拓者隊がソルトレーク盆地に入った日からちょうど100年目に当たる7月24日である。「1847年の時代」と名付けられた巨大なパレードには初期の入植者をたたえる様々な装飾を凝らした車が参加した。合衆国郵政省は開拓者を記念する記念切手を発売した。式典の最大の呼び物は、高さ18メートルの「ディス・イズ・ザ・ブレース」の記念碑をジョージ・アルバート・スミス大管長が奉獻する式典であった。この記念碑はソルトレーク・シティーの東部、イミグレーションキャニオンの入り口付近に設置された。このときの聖徒と一般市民との間にどれほど良い関係が築かれていたかは、『タイム』(Time)誌の表紙にスミス大管長の写真が掲載されたことに象徴されている。

開拓者百年祭の意義について大管長会は次のように宣言した。「開拓者たちの小さな一団がこの地に到着して荒れ果てた砂漠を見たと同じように、今日の教会は、道徳的価値に対する関心を失い、霊的に墮落した世界を目の前にしています。わたしたちは今日の教会において、神の王国を築く責任感……を担わなければなりません。わたしたちはこの責任に目覚めなければならないのです。」大管長会は開拓者が直面した外的な危険と、教会員特に20世紀の若人が直面する誘惑とを対比し、先祖と同様にこれらのチャレンジに立ち向かう準備をするよう聖徒に勧告した。<sup>25</sup>

1950年が終わって、20世紀の中間点を通過した。その3か月後にジョージ・アルバート・スミス大管長は他界した。そして新しい指導者が支持された。末日聖徒はこれら二つの出来事によって、教会の現状すなわちこれまで何を成し遂げ、今後何をなさなければならないかを深く考えることとなったのである。



「ディス・イズ・ザ・ブレース」の記念碑

## 時満ちる時代の教会歴史

20世紀の前半は教会にとって大きな成長を遂げた時期であった。教会員数は20世紀の中間点に到達する3年前に100万人という道しるべを通り過ぎた。1950年4月の総大会においてジョージ・アルバート・スミス大管長はこの成長について感想を述べている。「教会は昨年、組織されて以来最大の成長を遂げました。……わたしたちが所属する組織の人数が増えたからでなく、御父の子らつまり、より多くの神の息子娘たちが真理を理解するようになったという意味においてわたしたちは喜んでいるのです。」<sup>26</sup>

### 注

1. ジョージ・アルバート・スミス “After Eighty Years” *Improvement Era* 「80年が過ぎて」『インブループメント・エラ』1950年4月号, 263
2. Conference Report 『大会報告』1947年10月, 5 - 6で引用。“President Smith in East on Mission of Mercy” *Church News* 「東部において憐れみの使命を果たすスミス大管長」『チャーチニュース』1945年11月10日付, 1; “President Smith Returns from Successful Trip to Capital” 「スミス大管長, 首都から成功の帰還」『チャーチニュース』1945年11月17日付, 1も参照
3. フレデリック・W・パベル, *On Wings of Faith* 『信仰の翼に乗り』(Salt Lake City: Bookcraft, 1972), 46で引用
4. 『大会報告』1947年4月, 153で引用
5. パベル 『信仰の翼に乗り』7 - 8で引用
6. パベル 『信仰の翼に乗り』36
7. 『大会報告』1947年4月, 154で引用
8. パベル 『信仰の翼に乗り』132
9. パベル 『信仰の翼に乗り』148 - 149
10. 『大会報告』1947年4月, 154で引用。パベル 『信仰の翼に乗り』25 - 26も参照
11. “Reports Tell of Saints in Europe” 「ヨーロッパの聖徒に関する報告」『チャーチニュース』1945年11月24日付, 5, 9参照
12. ジョセフ・アンダーソン, *Prophets I Have Known* 『わたしが出会った預言者たち』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1973), 103参照
13. パベル 『信仰の翼に乗り』126 - 128参照
14. ヘンリー・A・スミス, *Matthew Cowley: Man of Faith* 『信仰の人マシュー・カウリー』(Salt Lake City: Bookcraft, 1954), 160で引用
15. ハリソン・T・プライス “‘A Cup of Tea’” *Improvement Era* 「一杯のお茶」『インブループメント・エラ』1962年3月号, 161, 184, 186; スペンサー・J・パーマー, *The Church Encounters Asia* 『アジアにおける教会』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1970), 65 - 69参照。ボイド・K・パッカー 『大会報告』1975年4月, 155で引用
16. “Mission Heads Will Select Two Counselors to Form Presidency” 「伝道部長は二人の副部長を選んで伝道部長会を組織する」『チャーチニュース』1947年4月12日付, 1参照; スペンサー・W・キンボール, ジェームズ・R・クラーク編, *Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』全6巻 (Salt Lake City: Bookcraft, 1965 - 75), 6:256 - 258で引用
17. メルビン・ケイ・ジョンソン “A History of the Temple Square Mission of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints to 1970” 「末日聖徒イエス・キリスト教会テンプルスクウェア伝道部の歴史, 1970年まで」修士論文, プリガム・ヤング大学, 1971年, 50 - 51参照
18. デビッド・ケント・ジェイコブス “The History of Motion Pictures Produced by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints” 「末日聖徒イエス・キリスト教会の映画制作の歴史」修士論文, プリガム・ヤング大学, 1967年, 69 - 99参照
19. “Telecast Sessions Make New History” 「大会テレビ中継放送が作る新しい歴史」『チャーチニュース』1949年10月9日付, 12 - 13参照
20. ラルフ・ウィリアム・エバンスの口述筆記, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティー, 5
21. “200 Lamanites Gather in History-Making Conference, Temple Sessions” 「歴史的な大会と神殿のセッションに集まった200人のレーマン人」『チャーチニュース』1945年11月10日付, 1参照
22. 『大会報告』1947年4月, 144 - 145で引用
23. “Emotional Farewell in Mexico” 「メキシコにおける感動的な別れ」『チャーチニュース』1977年2月19日付, 3参照。スペンサー・W・キンボール, “Hope Sees a Star for the Sons of

## 大戦後の復興

Lehi ” 「リーハイの息子ちに希望の星を見る」  
『チャーチニュース』1947年12月20日付，9も参  
照

24. リチャード・O・コーワン，*The Church in  
the Twentieth Century* 『20世紀の教会』（Salt  
Lake City: Bookcraft, 1985），224参照

25. “ A Centennial Message from the First  
Presidency ” 「100周年記念大管長会メッセージ」  
『インプループメント・エラ』1947年7月号，  
422

26. 『大会報告』1950年4月，6で引用

# 世界の教会への成長

年表	重要な出来事
1950	近東およびチェコスロバキアの伝道部が閉鎖される
1950	朝鮮戦争勃発
1950	カリフォルニア州で早朝セミナーが開始される
1950	太平洋地域において建築宣教師が学校を建設する
1951	デビッド・O・マッケイ、大管長となる
1952	マッケイ大管長、ヨーロッパの伝道部を歴訪する
1952	教会全体で使われるものとして最初の、福音の標準教授法が発行される
1955	マッケイ大管長、南太平洋を訪問する
1955	チャーチカレッジ・オブ・ハワイが開校される
1955	スイス神殿が奉獻される
1956	ロサンゼルス神殿が奉獻される
1956	最初の学生ステークが組織される
1958	ニュージーランドのオークランドで最初の「海外ステーク」が組織される
1958	ニュージーランド神殿およびロンドン神殿が奉獻される
1961	全世界の伝道部長セミナーが開催される
1961	宣教師の言語教育が開始される
1962	総大会の様子が短波ラジオ放送で中継される
1964	ニューヨーク万国博覧会においてモルモン館が開設される
1966	家庭学習セミナーが開始される

**シ**ョージ・アルバート・スミス大管長は81歳の誕生日に当たる1951年4月4日水曜日、総大会が開催される2日前に他界した。スミス大管長の葬儀のために大会の土曜日の部会は中止となった。総大会は日曜日に閉幕する予定だったが、4月9日、月曜日に特別の聖会が開催され、デビッド・O・マッケイが第9代大管長として支持を受けた。

マッケイ大管長は、この高貴で聖なる召しを受けるに当たって、次のことを理解していた。「いかなる人もまず教会の頭である救い主イエス・キリストと一つとならなければ、この教会を管理することはできません。イエス・キリストはわたしたちの頭であられます。これは主イエス・キリストの教会です。絶えず主の導きと靈感を受けていなければ、誤った道に迷い込んでしまうのです。主の導きと靈感があれば失敗することはありません。」<sup>1</sup>

マッケイ大管長は78年間にわたるまれに見る豊かな経験を通して、大管長の召しに十分な備えをしてきた。彼が生まれた1873年9月は、ブリガム・ヤングがまだ大管長として働いていた時期である。また、マッケイ大管長はアメリカ大陸横断鉄道が完成して、金の「犬釘」を枕木に打ちつけた年の4年後に生まれ、人類最初の月面着陸を見る時代までの生涯を送っている。1897年、マッケイ長老は宣教師に召され、イギリス諸島に派遣された。そして2年後にスコットランドのグラスゴーで開かれた非常に霊的な宣教師大会において、ジェームズ・L・マクマリン副部長はマッケイ長老に対して次のように言った。「もしあなたが常に忠実であるならば、あなたは教会の管理評議会の一員となることでしょう。」<sup>2</sup>

1906年4月、マッケイ長老は32歳で十二使徒評議会に召され、同年10月に中央日曜学校会長会に召された。それから30年の間に、教会教育委員会委員長、中央神権委員会委員長また教会の各種プログラムを相互調整する委員会委員長の召しを受けている。1920年から1921年にかけて実施した世界各地の伝道部の状態を調査する視察旅行とヨーロッパ伝道部を2年間にわたって管理した経験は、マッケイ長老が世界の教会と教会員を理解するうえで大いに役立っている。1934年にマッケイ長老は大管長会に召され、ヒーバー・J・グラント大管長とジョージ・アルバート・スミス大管長の副管長を務めた。このように、デビッド・O・マッケイ大管長は急膨張する時代の教会を導くために十分な準備を整えてきたのである。

## 過去に例を見ない成長とチャレンジの時代

1950年に教会は120周年を迎え、教会員は約110万人に達していた。これから20年の間に教会員数は約3倍、290万人を超えることになる。この20年間に亡くなった人

## 世界の教会への成長



デビッド・O・マッケイ大管長（1873 - 1970年）は十二使徒定員会と大管長会において合計63年9か月間にわたって働いた。現代の神権時代における使徒としての在任期間は、これまでの最長である。

の数を考えると、1970年初頭の教会員の4分の3近くはデビッド・O・マッケイ大管長以外の大管長を知らないことになる。1950年から1960年代にかけての教会員の増加速度はそれ以前の10年間単位での速度と比較すると約2倍になっている。教会は会員数において力をつけたばかりでなく、会員の分布する範囲が世界中に広がったという点においても力を増している。これは、世界中で伝道が成功したことと、教会指導者が聖徒に対して自分の国にとどまって王国を建設するよう強く勧告したことが大きな理由となっている。

教会が世界中に広がりを見せるのに伴い、会員が遭遇する問題や機会は多種多様になってきた。様々に異なる環境と文化を持つ地域に住む聖徒が福音の原則を同じように理解し、実践しなければならない。ヨーロッパの一部の国では戦争が残した結果と戦後の荒廃からの回復が遅々として進まなかったために、人々の宗教に対する関心が薄れていった。また国教を維持するために国民に税金を課していた国々では、日曜日の礼拝に参加する人々が国民の5パーセントを割り込んでいた。重税とその他の経済的圧迫から、各家庭では一人か二人の子供を育てるだけでも苦しく、そのため多くの母親が家庭を出て働いていた。道徳の標準が低下し、ポルノグラフィを容認する法律が制定されるなどして、家族の弱体化は進行していた。ヨーロッパの一部の国では日常的にアルコール飲料を飲むことが当たり前になっていた。そして、世界には非常に多くの言語が存在することから、教会の大会、神殿の儀式、その他教会活動は様々な言語に翻訳しなければならない状態にあった。

南太平洋のポリネシア人は世界で最もあいきょうのある民族と言われている。彼らが豊かな霊性を持っていることは、彼らの間で起こった数々の驚くべき癒し、異言の賜物による霊的な現れが証明している。ポリネシア人の中には彼らの先祖がどのようにしてアメリカ大陸から数千キロも離れた南太平洋まで小さな舟に乗ってやって来たかを述べた言い伝えがある。スペンサー・W・キンボール大管長はニュージーランドの地域大会において、マオリ族の祖先は『モルモン書』に記録されている民であることを確認した。<sup>4</sup> このため、ポリネシアの末日聖徒は自分たちが『モルモン書』の民であると考えようになっている。ポリネシア人が詳しい系図を暗記したり、暗唱したり、木片に刻むなどの習慣を有していることは、彼らが家族を大切にす民族であることの証明である。教会はポリネシア人の間で繁栄している。

全人口に占める教会員の割合ではユタ州を上回る地域は存在しなかった。1970年の統計によれば、合衆国全体に占める教会員の割合はわずか1パーセントであるのに対して、サモアでは13パーセント、トンガでは約20パーセントを占めている。しかし、この熱帯のパラダイスでの生活は必ずしも容易ではない。地域によっては年間に1種類の作物しか栽培することができないため、貧しい生活を強いられている。またヨーロッパの牧師や宣教師社会の影響を強く受けている地域であるため、末日聖徒の宣教師は政府の圧力を受けることもあった。また、島々を結ぶ交通手段の開発が遅れていたため、太平洋諸島の各ユニットを訪れる中央幹部にとっては悩みの種となっていた。

ラテンアメリカの聖徒たちは別の問題を抱えていた。ラテンアメリカほど一つの宗教が文化の奥深くまで浸透している地域は恐らくほかに見当たらないであろう。



「いかなる立場にあるうとも、課された役割に最善を尽くせ」この石板はスコットランドのスターリング地域のある建物にはめ込まれていた。マッケイ大管長は1898年の宣教師時代に初めてこの言葉を目にして、大きな感銘を受けた。

「その朝、この言葉を目にしたとき、わたしは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師として全力を尽くせと言われていたように感じました。聖典から引用するのであれば、次の聖句です。……『わたしにむかって「主よ、主よ」と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。』（マタイ7：21）」<sup>3</sup>

教会は1965年にこの石版を取得し、1970年までスコットランドの伝道本部で保管された。その後ソルトレーク・シティーへ運ばれ、現在はテンプルスクウェア横の教会歴史美術館に展示されている。



## 時満ちる時代の教会歴史

地名や祝日，日常生活に密着した様々な分野に宗教の影響が及んでいる。この地域の人々が福音に改宗するには，ほかの地域の人々以上に大きな変化が求められる。ラテンアメリカ特にメキシコ，中央アメリカ，西南アメリカの教会員は自分たちが『モルモン書』のニーファイ人とレーマン人の子孫であり，したがって『モルモン書』に記されている偉大な約束の相続人であると考えている（2ニーファイ30：6参照）。20世紀の第3四半期においてラテンアメリカほど教会が大きく成長を遂げた地域はない。1950年には9,000人に満たなかった教会員が1970年には20万人を超えている。

アジアに福音を携えて行った北アメリカ出身の宣教師は自分たちがまるで別世界に来たような気持ちを感じていた。キリスト教徒の数は極端に少なく，西欧人が日常的に使うアルファベットにすらなじみがなかった。文化の違いはあったが，アジアの数か国で福音はしっかりと根付き，それらの国々の教会は急速な成長を遂げていた。家族の大切さを強調する末日聖徒の教えは，何世代にもわたって先祖を敬う習慣を持つ多くの人々の心をつらえたのである。

教会は世界の多くの地域で急速に成長していたが，この成長を鈍らせる動きが出てきた。1950年に国際緊張が高まったことにより，近東とチェコスロバキアで伝道部が閉鎖された。1949年に中国は共産主義者の支配下に置かれ，また1950年には朝鮮戦争が勃発した<sup>5</sup>ことにより，香港に本部を置く中国伝道部が閉鎖された。

しかしながら，朝鮮戦争の影響は極東地域だけにとどまらなかった。合衆国が国際連合の平和維持軍の主役を果たすことになったため，青年たちは再び徴兵されることになった。宣教師として働くことのできる長老の数が減少したのである。大管長会は1950年に3,015人の宣教師を召していたが，2年後にはわずか872人に減少した。

マッケイ大管長は教会が急成長する中で，数のうえでの成長と同時に霊的面でも成長する大切さを強調しなければならぬと感じていた。「人生の中で人が最大の関心を向けなければならないのは，物や金銭ではありません。名声でもありません。また，体力や知力の向上でもありません。人生における最も崇高な目的は，キリストのような特質を伸ばすことです<sup>5</sup>」と大管長は確信していた。

人がこの崇高な水準にまで到達するには，自分の性格からこの世的，俗世的な面を取り除かなければならない。「まず第1に，大きな影響力を及ぼしている動物的な本能，激情，性欲から世界を救うことです。」人類が抱えている問題の原因は主として利己心にあるとマッケイ大管長は考えていた。<sup>6</sup>

マッケイ大管長は次のように主張している。「わたしたちは，霊的な特質の育成に最大の関心を寄せなければなりません。霊性とは人が身に付けることのできる最高のものであり，『人間を万物の霊長と呼ぶための至高の賜物』すなわち人間に備わっている神性のことなのです。それはまた，己れに打ち勝ち，無限無窮の御方と心を通わすことのできる意識でもあります。ただ霊性だけが，人生で最高の満足をもたらすことができるのです。』<sup>7</sup>

## 全世界の教会の大管長

デビッド・O・マッケイ大管長は教会の歴史上最も広範囲に旅行をした大管長となった。1952年，マッケイ大管長はイギリスとヨーロッパ大陸の伝道部を訪問した。

## 世界の教会への成長

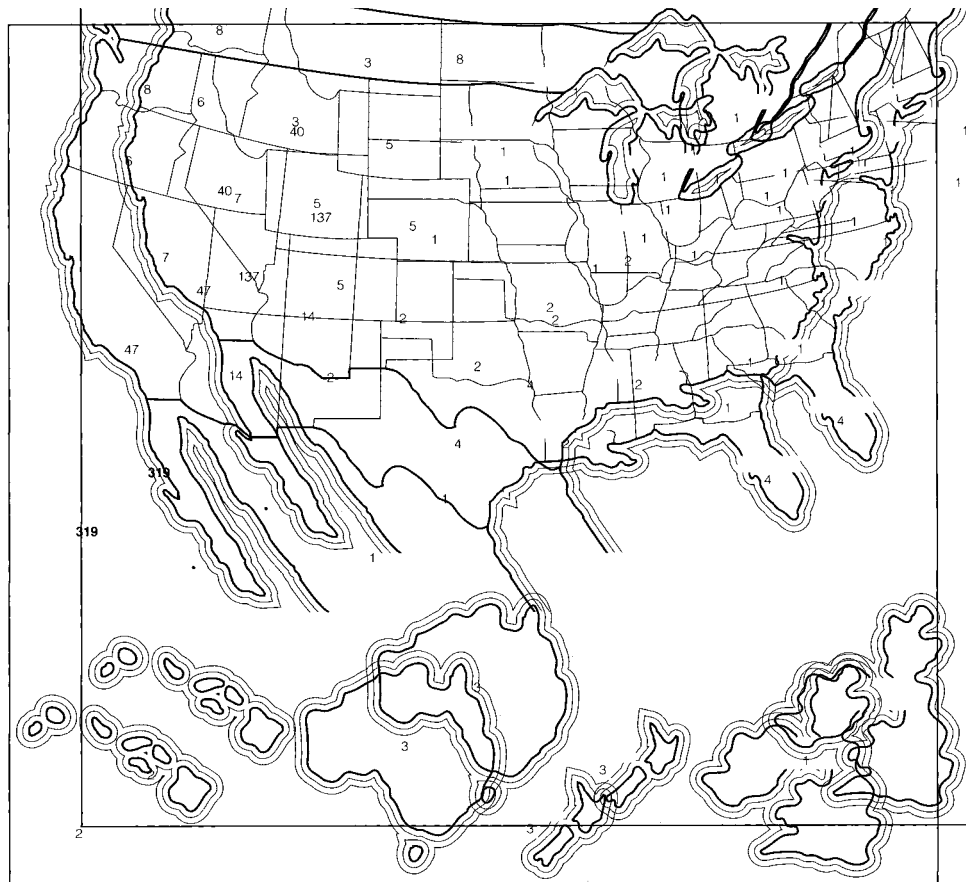
翌年、再びヨーロッパを訪れ、北アメリカとハワイ以外では最初の神殿を建設する用地を奉獻した。1954年には、ロンドンを皮切りに南アフリカ、ラテンアメリカを巡る約6万キロの旅をしている。この旅行でマッケイ大管長は南アフリカ（1921年の旅行では立ち寄りなかった）を訪れた最初の中央幹部となるとともに、南アメリカを訪れた最初の大管長となった。

1955年には南太平洋全域を旅して、約34年前に神聖な体験をした場所を訪れた。この旅の間に大管長はニュージーランドに神殿を建設する計画を発表している。こうして世界各地に住む聖徒たちに主の宮の祝福をもたらすための歩みをまた一歩進めたのである。数か月後、大管長は4年間で4回目となるヨーロッパ訪問を行った。この度はスイス神殿を奉獻することが目的だった。1958年、マッケイ大管長は太平洋地域を再び訪れて、ニュージーランド神殿を奉獻した。また同国ではオークランドステークを組織したが、これは北アメリカとハワイ以外で組織された最初のステークであり、教会が国際的に成長していることの証でもある。さらに、同年の後半にはイギリスを訪れて、ロンドン神殿を奉獻した。

マッケイ大管長は訪問する先々で人々から愛と尊敬の歓迎を受けた。ほとんどの聖徒にとってマッケイ大管長は初めて目にする生ける預言者だった。各地の空港では聖徒たちが目に涙を浮かべ、声を詰まらせながら皆がよく知っている「感謝を神に捧げん」を歌って大管長を歓迎した。

マッケイ大管長は旅の途中で神の祝福と導きをしばしば経験していた。例えば、

1960年に教会には319のステークが組織されていたが、このうち、7ステークは北米とハワイ以外の地域で組織されていた。



## 時満ちる時代の教会歴史

1955年のこと、大管長がフィジーへ行くために乗り込んだ飛行機は、ハリケーンが接近したため着陸が遅れていた。しかし飛行機がフィジー上空に差しかけたとき、着陸が可能になった。フィジーの空港当局者は、どうしてハリケーンが「大管長の乗った飛行機がスバに到着する時刻に突然進路を変えたのか不思議に思っていた。マッケイ大管長は何か非常に普通でないことが起こったと語った。」<sup>8</sup> 到着後、熱帯性の豪雨に見舞われたため、預言者のフィジー出発は遅延されることになった。

マッケイ大管長は思いがけなく二人の長老に出会うまで、3か月前から末日聖徒の宣教師がこの地域に派遣されていたことを知らなかった。大管長は早速、翌日の日曜日にスバに住んでいるわずかな聖徒たちとともに集会を開くことにした。集会はセシル・B・スミスの家で開かれた。彼は長年にわたって聖徒の小さな群れを一人で守ってきた人である。スミス兄弟は神の預言者を自分の家に迎えたとき、「感極まり、喜びと感謝から思わず涙を流し始めました。……

会衆は『感謝を神に捧げん 預言者の導き』と心から歌った。……目に喜びの涙を浮かべて歌詞の言葉一つ一つを祈るように歌った。……

話に立った大管長はこの集会は大きな意味のある集会であると述べました。『わたしたちは日曜日までスバに滞在する予定はありませんでした。本来ならスバとトンガの間のどこかにいるはずですが、けれどもハリケーンのために出発が1日ずれました。』大管長はスバに教会員がいるとは知らなかったと述べました。

……大管長はまた、気象条件が悪化したために、一行はスバで福音を宣べ伝え、神の王国の建設に着手することができたと語った後、このように述べました『もちろん、神は、わたしたちの日程を変更し、教会員の皆さんとともに集会を開くことができるように、手を差し伸べることがおできになります。』<sup>9</sup>

マッケイ大管長の旅行はこれらの地域に散在する聖徒たちだけに靈感をもたらしたのではない。『チャーチニュース』(Church News)は大管長の毎日の旅の様子を報道したため、多くの人々の関心を集めた。教会の中心地に住む聖徒たちも、遠く離れた地に住む同胞である聖徒たちが現した信仰と感謝の記事を読むことにより、信仰を強められたのである。



初の全世界伝道部長セミナーはソルトレーク・シティにおいて1961年6月25日から10日間にわたって開催された。62人の伝道部長のうち、51人が参加した。11人はすでに解任されており、後任が召されなかったため出席しなかった。

### 「すべての会員は宣教師である」

マッケイ大管長は教会が成長を継続するには、伝道活動を効果的に進めなければならないことを認識していた。教会が伝道で使用する福音の教授法を正式に発表したのは1952年のことである。これは宣教師の話を6回のレッスンに凝縮して、論理的に福音を教える方法である。さらにレッスンの内容を充実させるために聖典を読み、証を述べ、心からの祈りをささげる項目が加えられている。1961年に教会指導者は全世界の伝道部長セミナーを開催している。中央幹部の指導の下に、各伝道部長はそれぞれの体験を持ち寄り、伝道方法の改善を検討した。

マッケイ大管長は「すべての会員は宣教師である」をモットーに、改宗の見込みのある人々を見だし、フェローシップすることは聖徒の役割であると強調した。<sup>10</sup> 教会員が模範的な生活を送るならば、教会員でない友人の尊敬を勝ち得ることができ、それがやがて福音について話し合う道につながることを大管長は力強く語った。

## 世界の教会への成長

聖徒たちはまた、教会員でない友人を家庭に招いて、宣教師からメッセージを聞いてもらうようにすることを奨励されている。これによって宣教師は教える対象となる人々を探すよりも教えることに集中して、時間をより有効に使うことができるようになった。さらに、宣教師に友人を紹介した家族は、友人が福音に改宗した後も彼らが友人との交際や生活方法を変えるための手助けをするなどのフェロウシップを継続して行うことができた。

この時期に教会は、宣教師を任地に向かう前に教育する方法を改善する努力を続けていた。1961年には大きな改革が実施された。当時アルゼンチンとメキシコに向かう長老たちはビザを取得するのに時間がかかっていた。この期間を利用して、彼らのためにブリガム・ヤング大学で特別な言語訓練プログラムが実施されたのである。会話に重きを置いて、「任地の言葉で生活する」プログラムが実施され、宣教師は任地の言葉だけを使って生活することが求められた。現地の言葉を話す人々とのコンタクトを取るなどの伝道の実習も行われた。さらに、長老たちと姉妹たちは宣教師としての生活と行動の基準に従うことを求められ、伝道地に着任する前から正しい習慣と態度を身に付けることができるようになった。このプログラムは成功を収めたため、1963年に言語訓練伝道部として正式に組織されることになった。後年、多くの言語が追加されている。

伝道活動において個人との接触を図る宣教師を支援するために、教会はマスメディアをはじめとする様々な方法を使って全世界にメッセージを投げかけている。教会と教会員に対する大衆イメージを改善するうえで、訪問者センターとラジオ、テレビ放送は大きな力を発揮した。

第二次世界大戦が終結してから旅行者の数が急激に増加したのに伴い、テンプルスクウェアの年間来場者は従来の記録であった100万人を突破した。教会は1966年にテンプルスクウェアの訪問者センターを大きな建物に立て替え、福音の様々な面を説明するために模型をはじめとする各種の展示方法を採用した。

教会はテンプルスクウェアでの成功を受けて、バーモント州のジョセフ・スミスの生誕地、ニューヨーク州の聖なる森とクモラの丘、ミズーリ州インディペンデンス、イリノイ州のノーブーといった他の史跡地においても訪問者センターを開設した。また、クモラの丘ページェントが引き続き好評を博していたため、インディペンデンス、ノーブー、マントイ神殿、その他の場所でページェントを実施して、福音のメッセージを一般大衆に伝えるための重要な手段として活用することになった。

かつてのモルモンの都市、ノーブーの再建事業は1960年代に始められた。この大規模な再建事業では、バージニア州ウィリアムズバーグのアメリカ移民の町を再建する際に大成功を収めた方法が採用された。ノーブー神殿跡は芝の上に石垣の列を築いて、かつて神殿が建立されていた場所を庭園風にアレンジしている。1840年代の外観と機能を再現した民家や店を訪れた人々を宣教師がガイドの役を務めて案内した。ノーブーがイリノイ州最大の都市であった1840年代におけるノーブーでの生活の興味深い面について説明することを再建の目的とした。そして、さらに大切な目的がある。それは大きな犠牲を払って都市を建設した後に、宗教上の迫害のためにその都市を捨てなければならなかった聖徒たちの信仰を人々に伝えることである。

## 時満ちる時代の教会歴史

教会は博覧会や展覧会に出展することによっても人々に福音を紹介している。1964年から1965年にかけて開催されたニューヨーク万国博覧会のモルモン館には300万人以上の人々が訪れた。この博覧会のために、教会は末日聖徒が信じる前世と来世における人々の生活を描いた新しい映画『幸福の探求』をブリガム・ヤング大学の映画制作スタジオで制作した。教会は博覧会における展示方法や提示方法についての経験を生かして、各訪問者センターが福音をより効果的に伝える手段として改善されていった。

第二次世界大戦終結直後にテレビが完成した。教会はすぐさまテレビの活用に取り出している。1948年4月の総大会において部会の模様をタバナクルからテンプルスクウェア内の他の建物へ閉回路で送るテレビ放送を行った。1949年10月の総大会では初めてテンプルスクウェア外に放送された。1950年代末期には総大会のテレビ放映はカリフォルニア州まで広げられ、1962年には初めて全米に向けて放送が行われた。教会は地元のテレビ局に対して放送料金を支払っていたが、多くのテレビ局は総大会の中継を公共サービスの一環と見なして、電波料金を受け取らなかった。

1952年から総大会の神権部会を特定のステーキセンターおよび教会の集会所との間を閉回路により直接結線して、放映している。やがて、合衆国およびカナダ全域、またオーストラリア、ニュージーランド、その他の国々において1,000を超える神権者グループが、大会の模様を同時に聞くことができるようになった。1962年には別の放送手段が採用されている。これはラジオの短波放送により、ヨーロッパとアフリカには英語で、ラテンアメリカにはスペイン語で総大会の模様が放送された。

教会は永年にわたりメディア用の資料を開発してきた。例えば、ラジオ放送・広報・伝道文書委員会はラジオ用プログラム、フィルムストリップ、印刷物を配布してきた。これらの資料を必要とする頻度が次第に増えてきたため、教会は1957年に責任を分割して非教会員への対応は教会情報サービス部が担当することになった。この部門は教会の原則と活動について良いイメージを築くことによって、伝道活動を促進することをおもな目的とした。写真資料を充実させること、大会や神殿の奉獻などの特別なイベントのために広報活動を調整すること、福祉活動、家庭の夕べ、青少年の活動などの教会の活動を紹介する特別な資料を準備することなどを行った。ほかにも地元の教会堂で行われるオープンハウスのためにポスターや展示物を提供したり、支援を行うなどの活動を実施した。

教会本部を訪れる政府関係者、財界人、他の教会の代表者、芸術家、タレントなどをもてなすことも重要な活動となっていた。こうした訪問者はテンプルスクウェアやウェルフェアスクウェアに案内された。また、彼らは末日聖徒の個人宅でもてなしを受けたり、地元のワードの集會に出席したりすることもあった。

## 教育の機会を全世界の人々に提供する

教会教育プログラムの基本的な役割は1930年代に確立されている。一般の学校で実施される教育を宗教面から補完することである。

その後、特に第二次世界大戦以降、教育プログラムは大きな成長を遂げていたため、教会は教育に対して特別な関心を寄せるようになった。デビッド・O・マッケイ

## 世界の教会への成長

大管長が教会を管理した20年間に教会の各種教育プログラムの登録人数は約5倍に増えている。自身の経歴と教育に対する熱意を考えると、マッケイ大管長はこの驚異的な成長を遂げた時期に聖徒を導くうえでふさわしい人物であったことはうなずけるであろう。

マッケイ大管長は1953年に、全世界の教会の経営する学校、セミナー、インスティテュートを含む教会の総合的な教育制度を編成するようにとの指示を与えた。第二次世界大戦終了後に大量の聖徒が登録したため、教会の教育プログラムは対応に苦慮していた。さらに、大管長会は1950年にブリガム・ヤング大学を「世界で最も偉大な教育機関」<sup>11</sup> にすることを希望すると述べた。

このためブリガム・ヤング大学では過去に例がない大がかりな建築プログラムを実施した。構内に建設された学生の宿舎の収容能力は3倍になった。このほか、映画制作スタジオ、学生センター、スタジアムが新たに建設された。おもな校舎と研究所もこの時期に建設されている。当時ブリガム・ヤング大学の学長であったアーネスト・L・ウィルキンソンは、学究レベルも施設の拡大と平行して向上させるための手段を講じている。ブリガム・ヤング大学は1960年に初めて博士課程を設置した。同年に優等生プログラムも導入した。これは学問の追求を真剣に志す学生が、学内で最も著名な学者たちから小人数編成で授業を受ける制度である。

学生の教会活動にも関心が向けられている。自宅を離れて学校に通う学生の中には教会の集會に出席しなくなる者もいたが、大学の近くにあるワードは集會に活発に出席する大学生であふれていた。1947年には早くも、結婚した学生と独身の学生のために二つの支部がブリガム・ヤング大学において組織された。当初これらの支部は実験的に組織されたものであったが、やがて東プロボステーク内で出席者が最も多い支部となって、この試みの成功を裏付けることになった。大学の在籍者数が増えたため、1956年にはブリガム・ヤング大学において初めての学生ステークが組織された。この学生ステークは、ブリガム・ヤング大学における学生生活と学生個人の成長という意味において、独特のまた重要な役割を果たしている。

間もなく学生数が基準に達している他の多くの大学でも学生ワードとステークが組織された。ほとんどの学生ワードの監督は大学の教員かまたは地域に住む成人会員が召され、ほかの職は学生が務めた。このようにして学生たちは定員会や補助組織の指導者、教師、書記として働く体験をしている。成熟した学生は副監督やステーク高等評議員として働いた。ほとんどの主要大学では日曜日には数人の学生が礼拝堂に集まるだけであったが、ブリガム・ヤング大学とリックスカレッジでは、学

### 教会教育プログラム登録者数

	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985
セミナー			2,980	27,075	26,128	28,677	38,285	62,253	103,500	132,053	174,010	199,317	225,709
インスティテュート				321	3,352	4,309	5,558	10,270	30,052	44,005	73,643	124,939	127,470
ブリガム・ヤング大学	40	111	438	1,448	2,715	5,429	9,440	11,555	21,286	25,950	25,950	27,772	26,894
その他の教会の学校									12,076	17,459	15,659	27,449	18,664

## 時満ちる時代の教会歴史

生ワードが使用している建物は日曜日も週日も学生であふれていた。ウィルキンソン学長は20年間のプリガム・ヤング大学学長生活を振り返って、これら学生ステークとワードの組織化が「ここにいる間で経験した最も満足感を覚えた仕事」<sup>12</sup> だったと述べている。

生徒の時間の一部を使って宗教教育を行う教会教育プログラムにおいても大きな進歩が見られた。高校生と大学生の必要を満たすためにセミナーとインスティテュートが合衆国全域と世界中で実施されるようになった。

幾つかの高等学校では生徒の実状に合わせたセミナープログラムを実施することによって急速の成長を遂げている。元来すべてのセミナーは「リリースタイム」方式により実施され、生徒は高校の近くのセミナー校舎へ行ってレッスンを受けていた。しかし、末日聖徒が山間地域のステークを越えて分布するようになると、この方式を実施することが不可能になった。このため、早朝プログラムと家庭学習プログラムが開発されて教会員の必要を満たすことになった。

早朝セミナーは1929年にソルトレーク・シティーとアイダホ州のポカテロで始められた。しかし、ポカテロではわずか1年間で中止されている。このプログラムを必要としたのは他の地域であった。カリフォルニア州南部のインスティテュートディレクターからの報告によると1941年にはロサンゼルス5つの高校に在籍する末日聖徒の高校生がそれぞれ100人を超え、他の幾つかの高校でも100人近くに達していた。しかしながら当時は戦争中であったため、新規プログラムの開発はすべて見送られていた。1950年にロサンゼルス11のステーク会長は全員一致で、早朝セミナーをすぐにも実施してほしいとの要望を表明した。

しかし、非常に難しい問題があった。多くのセミナークラスは2校以上にまたがる高校生を対象にして開かなければならない状況に置かれていた。さらに始業時間が学校によって異なるため、午前7時以前でなければセミナーを開くことができなかった。教会堂は高校から歩いて通える範囲になかったため、車に乗り合いでセミナーに出席するなどの方法が取られた。1950年9月にテストケースとして6クラスが開かれ、これらが成功したため、さらに7クラス同学校年度に開かれた。こうした問題があったにもかかわらず、カリフォルニア州南部地域の早朝セミナーには461人の生徒が登録し、初年度の平均出席率は88パーセントを示した。

3年後には59のクラスが誕生し、平均出席率は92パーセントに上昇した。この記録は登校する前に宗教教育を受けるために、早い人は朝5時に起きることをいとわなかった生徒と両親の献身の賜物である。その後の25年間に早朝セミナーは世界の各地、特に西部山間地方を除く合衆国およびカナダにおける教会員が密集した地域で実施されるようになった。

生徒の数が十分でなく通常の毎日のセミナークラスを開けない地域では家庭学習セミナーが実施されている。これは1966年から1967年の学校年度に合衆国中西部で試験的に行われた。若人は週日に家庭でセミナーのレッスンを勉強して、日曜日には教師の責任を受けた教会員が、週日に勉強してきた事柄を復習する集会を開いた。そして月に1度は地区内の生徒全員が一か所に集まって、専任のセミナーコーディネーターから指導を受けた。この集会で生徒は、午前中に前月に学んだお

## 世界の教会への成長

もな事柄を復習し、午後からは相互発達協会の指導者が計画した社交プログラムやレクリエーション活動に参加した。一方、教師はこの時間に翌月のレッスンについてセミナーコーディネーターから指導を受けた。この家庭学習セミナーの導入によって、あらゆる地に住む末日聖徒がセミナーのレッスンを受けることができるようになったのである。大学生を対象とした同様の家庭学習インスティテュートが始まったのは1972年のことである。

教会が特に急成長を遂げていた太平洋地域とラテンアメリカでは公共の学校教育が普及していなかった。教会指導者はかなりの数の聖徒が初等教育すらも受けていないことを憂慮していた。このため、教会はこれらの地域において19世紀の開拓者時代に実施していた方法を取り入れ、学校を設立して一般教育と宗教教育を並行して実施することにした。

太平洋地域の幾つかの伝道部では20世紀の初期に末日聖徒の子弟のために学校を開いていた。通常は小規模の学校だったが、ニュージーランドではマオリ農業カレッジのような卓越した学校が設立されている。これらの学校では専任宣教師が教員を務めた。第二次世界大戦後に教会は大きな成長を遂げたため、これらの学校を拡張する必要が出てきた。教会は1950年代初期に、トンガにリアホナカレッジ、サモアではペセガ高校とマプサガ高校、ハミルトン近郊にチャーチカレッジ・オブ・ニュージーランド、そしてこれらの国に幾つかの小学校を開設した。上記の二つはカレッジ（単科大学）という名称が付いているが、高等学校程度の授業が実施された。これらの緊急に必要とされていた学校の校舎は、この時期に南太平洋地域で始められた建築宣教師プログラムによって建設された。1950年代全般と1960年代の初期には数百人の労働宣教師が召されて、教会堂、学校、その他教会が主催する事業で建築に従事した。労働宣教師によって教会の建物を建設するプログラムは、プログラムを維持する費用が外部発注による建設費よりも高くなった時点で中止された。

1955年に開校されたライエのチャーチカレッジ・オブ・ハワイは大学教育を実施する2年制の短期大学であったが、1957年に4年制の大学に移行した。この大学の約1,000人の学生はほとんどが太平洋諸島出身の男女で占められていた。教員の養成に力を入れていたため、ポリネシアの多くの若者は大学を修了した後、故郷へ戻り、現地で教会が経営する学校の教員になった。デビッド・O・マッケイ大管長は1958年に、チャーチカレッジ・オブ・ハワイにおいて幾つかの新しい建物を奉献している。建物の正面に高さ10メートルのモザイク装飾を施した大学管理施設の国旗掲揚式に参加したマッケイ大管長は、ライエがいつの日か太平洋地域における聖徒の教育の中心地になることを約37年前に預言している。

1963年に教会は大学の隣にポリネシア文化センターを開設した。この施設は太平洋地域の幾つかの民族の特異な文化を保存し、紹介するだけにとどまらず、旅行者の人気を博して教会に対する印象を良くしたばかりか、大学に通う多くのポリネシア人学生に対して有意義な仕事の機会を提供した。1974年にチャーチカレッジ・オブ・ハワイは、ブリガム・ヤング大学ハワイ校と改称された。この試みは、科目によってはプロボのブリガム・ヤング大学本校よりも太平洋という地域性を生かした方が有利な教育を受けられるという利点を強調したものである。



## 時満ちる時代の教会歴史

ラテンアメリカにおいても教会の教育プログラムは1950年から1975年の間に拡大されている。1897年にメキシコ北部のモルモン定住地においてフアレツアカデミーが発足した。また1960年からはデビッド・O・マッケイ大管長の勤めにより、小学校と中学校を40校設立して、メキシコ各地に住む聖徒の教育上の必要を満たすための制度が設けられた。メキシコ・シティー近郊で教会が経営する学校、ベネメリト・デ・ラス・アメリカスには、2,000人を超す学生たちが通い、その多くは大学生であった。この学校でも力を入れたのは教員の養成である。太平洋地域と同様に、これらの学校は末日聖徒の生活全般の向上に大きな貢献を果たしている。大多数の地元の教会指導者はこれらの学校の卒業生だったからである。教会は一時、チリ、ペルー、ボリビア、パラグアイにおいても幾つかの学校を運営していた。

特に大きな貢献をしたのは、教会が主催した読み書き能力向上プログラムである。ある開発途上地域では、読み書きを知らない人々が指導者や教師に召されていた。ブリガム・ヤング大学の監修により、この基本的な技術を教える簡単な方法が開発された。例えば、ボリビアではスペイン語を話す教会員に対して読み方を教えるために15時間の個人レッスンが行われた。このコースを終えた人は次に、他人に教える方法を学ぶために4時間の訓練を受ける。このようにして多くの末日聖徒は聖典を読み、さらに手引き、レッスンの教科書、その他教会の出版物を読むことができるようになったのである。多くの聖徒は好条件の仕事を得るとともに、自尊心を高めることができた。ある支部長は、読み方を学ぶ前は様々な機会から締め出されていたが、読み方を習得した今では多くの機会が開かれて豊かで充実した人生を送っていると語っている。

## 注

1. Conference Report 『大会報告』1951年4月、157で引用
2. フランシス・M・ギボンズ, *David O. McKay: Apostle to the World, Prophet of God* 『デビッド・O・マッケイ: 世界を巡る使徒、神の預言者』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1986), 50で引用
3. デビッド・O・マッケイ “Ye shall know Them by Their Fruits” 「あなたがたはその実によって彼らを知るであろう」1955年1月15日、サモアのウバル、サウニアツにおけるサウニアツ教会記念碑の奉獻式における説教、説教および原稿、1906 - 70年、末日聖徒歴史記録部、ソルトレーク・シティー、3
4. 1976年ニュージーランド地域大会、3参照
5. ジネット・マッケイ・モレル, *Highlights in the Life of President David O. McKay* 『デビッド・O・マッケイ大管長の生涯におけるおもな出来事』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1966), 240。『大会報告』1953年10月、10も参照
6. デビッド・O・マッケイ “The World Needs to be Saved from Dominating Animal Instincts” *Instructor* 「世界は強大な力を持つ動物的本能から解放されなければならない」『インストラクター』1962年6月号、181 - 182
7. 『大会報告』1936年10月、103で引用
8. “Hawaiian and Fiji Islands Members Greet Church Leaders” *Church News* 「教会指導者を歓迎するハワイとフィジー諸島の会員たち」『チャーチニュース』1955年1月22日付、2
9. “South Sea Islands Members Pay Devotions to Leader” 「南の海の島々の会員たち、指導者に信仰を表す」『チャーチニュース』1955年1月29日付、2
10. 『大会報告』1959年4月、122参照
11. アーネスト・L・ウィルキンソン, W・クレオン・スコーセン共著, *Brigham Young University: A School of Destiny* 『ブリガム・ヤング大学: 使命を持つ大学』(Provo: Brigham Young University Press, 1976), 433参照
12. *Decades of Distinction: 1951 - 1971* 『特色のある20年間: 1951 - 1971』ブリガム・ヤング大学年度講話 (Provo, 9 Mar. 1971), 7

# コーリレーションと統合の時代

年表	重要な出来事
1961	子供、青少年、成人の教科課程と活動を相互調整するための教会評議会が設立される
1964	ホームティーチング、神権役員会、ワード評議会が始められる
1965	家庭の夕べの最初のテキストが発行される
1967.10	最初の地区代表が召される
1969.10	社会福祉部が組織される
1970.1.23	ジョセフ・フィールディング・スミス、大管長に召される
1971	『エンサイン』『ニューエラ』『フレンド』が発刊される
1971	教会員数が300万人を超える
1971	英国マンチェスターにおいて最初の地域大会が開催される
1972.7	ハロルド・B・リー、大管長に召される
1973.12.26	ハロルド・B・リー大管長、他界する

## 中

中央幹部は教会と教会のプログラムを通して、聖徒を整え、民が地上にシオンを築く準備をするために長年にわたって様々な手段を講じてきた。教会員数はわずか15年で倍増し、1963年には200万人を超えたため、聖徒に対する中央幹部の関心はいっそう切迫したものとなっていた。また教会指導者は、各組織が神権の指示の下に調和の取れた働きを展開し、家族が強められ、聖徒の様々な必要に的確な対応ができるように管理方法を単純化し、効率を上げる必要性が高まっていることも認識していた。1950年代に教会はかつてない成長を遂げたため、教会の機能を相互に関連づけ、統合する必要に迫られたのである。1960年代から1970年代初頭にかけて、このコーリレーションと統合が実施された。中央幹部はこの目的に照らして、教会のすべての組織と活動が適切な関連性を持ちながら機能しているかどうかを定期的に検討することになった。

### 神権コーリレーションの強調

大管長会は1960年に、十二使徒定員会のハロルド・B・リー長老を委員長とする中央神権委員会に対して、教会の究極的な目的を踏まえたうえですべてのプログラムと教科課程を「心から祈り、研究し」、「教会は、各補助組織や神権委員会の信仰、英知、技術、知識を結集し、最大の成果を上げる」<sup>1</sup>よう指示した。リー長老をはじめとする委員会のメンバーは福音のすべての主題が教科課程に網羅されていることを確認するだけでは不十分であることに気づいた。神権組織および補助組織で行われている福音に関するレッスンを教会の中央レベルで調整するための組織を新たに設立する必要があると。

1961年の秋の総大会において、リー長老は後に神権コーリレーションと呼ばれることになる基本原則の概要を発表した。リー長老は正しく機能する人の体にたとえて教会を説明したパウロの言葉を引用した後（1コリント12：14 - 28参照）、現代に与えられた啓示を引用した。「各人をそれぞれの職に就かせ、それぞれの召しにおいて働かせなさい。頭は足に向かって、足は要らないと言ってはならない。足がなければ、体はどうして立つことができるであろうか。体はまたあらゆる部分を必要としている」（教義と聖約84：109 - 110）。

リー長老が強調したのは次の点である。「各組織はそれぞれ特別な働きを持っており、目が手に向かって『おまえは要らない』と言えないように、ほかの組織の働きを代わってすることはできない。」また1940年の大管長会宣言を再度強調した。「家庭は義にかなった生活の基盤である。いかなるものも家庭に取って代わることはできないし、その本来の機能を果たすこともできない。補助組織がなし得る最大のこ

## コーリレーションと統合の時代

とは、特別な援助が必要とされる場合に援助の手を差し伸べることによって、問題を抱えている家庭を助けることである。」この宣言以後、教会指導者は教会の組織の中心は家族ごとの単位であることをしばしば述べていた。

リー長老はここで、教会全体の調整を図る教会相互調整評議会を組織することを発表した。この評議会は中央幹部と各組織の役員で構成され、また教会のすべてのプログラムの計画と運営に関する方針を定めることを目的とした。この評議会の指示の下に、子供、青少年、成人の3つの委員会がそれぞれ学習コースを執筆し、年齢グループごとに活動を調整することになった。各補助組織はこれらの委員会が立案したプログラムを実施するのである。また、教会相互調整評議会の指示の下に、4つの中央神権委員会がホームティーチング、系図および神殿、宣教師、福祉プログラムについて全教会に指示を与え、奨励することになった。リー長老は次のように説明している。「このようなプログラムを導入することによって、教会の教科課程、教会出版物、教会の建物、集会をはじめ、主の業のほかの様々な面で、強化と簡易化を図ることができることを願っています。」<sup>2</sup>

1962年、コーリレーションの計画に携わった十二使徒定員会のリチャード・L・エバンズ長老は、コーリレーションの主旨を次のように説明している。

「あらゆる人は、子供、青少年、成人の各年代で、少なくとも3回はできるかぎり完全に福音の教えに関する指導を受けることとなります。

すべての聖徒はこれら3つの大きなグループに分けられますが、それぞれのグループは学年、交友関係、神権の職ごとの年齢、伝道、結婚、その他の要因からさらに多くのグループに分割されます。……

各年齢グループの基本となるプログラムは、個人が置かれている環境、さらにワード、ステーク、支部、伝道部を取り巻く環境と、それぞれの必要に応じて変更することができます。」<sup>3</sup>

教会全体としてプログラムを調整するために大きな改革が実施されたが、ワード、ステークのレベルではまだまだ多くの事柄を行う必要があった。ワードおよびステークレベルでの最初の改革は1964年に実施された。監督会とメルキゼデク神権指導者は毎週開かれるワード神権役員会において、ワードのすべての活動について調整を行うことになった。月に1度開かれるワード評議会には補助組織とその他の指導者が出席することになった。この評議会では日程や活動の調整を行い、さらに個人と家族の必要を満たすためにワードのプログラムをどのように活用するかという重要な事柄が話し合われる。3年後にはステークにも同様の組織が設けられることになる。

地方レベルの神権コーリレーションにおいて実施された重要な事柄は1964年から始められたホームティーチングである。ホームティーチングは教会の様々なプログラムを家族に届ける重要な手段として位置づけられ、これによってワードの教師たち、神権定員会の代表者、補助組織のクラス会員により個々に行われていた接触は廃止されることになった。ホームティーチャーは少なくとも月に1回は家族を訪問して、家族と神権指導者の間の定期的な連絡を図ることになった。

1964年に新しく発行されたメルキゼデク神権手引きでは、教会の3つの主要な目的が明らかにされている。

## 時満ちる時代の教会歴史

「1. 聖徒を完成させる 教会員がすべての義務を果たし、主の前をまっすぐに歩むよう助ける。

2. 伝道活動 福音を聞いたことのない人または受け入れていない人に福音を教える。

3. 神殿活動 神殿に参入する資格のあるすべての教会員が自身のエンダウメントを受け、家族との結び固めを受けるようにする。また、ふさわしい死者が福音の恵みを受けられるように、系図の探求を行い、神殿の身代わりの儀式を行う。<sup>4</sup>

教会の活動を相互に関連づける作業はさらに続けられた。1967年に実施された教会年度の統一は重要な出来事である。それまで教会には、地元の学校年度に合わせてレッスンを開始する組織もあれば、暦に合わせて年度を始める組織もあった。この年度の統一によって、神権組織と補助組織はすべて同時にレッスンを開始することになった。さらに年齢別にグループを分ける方式が次々と各組織で採用されていった。ワードの各組織の教師は、若人がそれぞれに持つ必要に対して従来よりも密着した対応ができるようになった。

1960年代は世界の多くの地域で、末日聖徒の若人が積極的に友人と福音を分かち合う活動を展開し、そのためのユースミッションナリー委員会が組織された時期である。1967年にはこの委員会の理念を発展させて、監督の青少年評議会が組織された。この会合では各ワードの青少年と成人の指導者が月に1回集まって、青少年が必要としている事柄を検討し、活動の調整を行った。また、各組織がそれぞれに集めていた教材は、教会付属図書館で一括して保存されることになった。各組織で実施されていた教師養成プログラムも同様に、ワード教師養成指導主事の下で実施されるようになった。

## 家族を強める

神権コーディネーションにおいて強力に推進されたものの一つが末日聖徒の家族を強める運動である。教会指導者は再び家庭の夕べに力を入れ始めた。1965年から教会は世界中の家庭で毎週使用されることを意図してレッスンの手引きを出版した。神権会や補助組織のレッスンでは福音の原則を教えることが中心だったが、家庭ではそれらの原則を日常生活で実践することに重きが置かれた。家庭の夕べテキストのほかに、各組織でも家族で行う活動の手引きを作成した。扶助協会は母親を助けることに努力を傾け、メルキゼデク神権定員会では父親への訓練を実施した。

ハロルド・B・リー長老はこのプログラムが靈感に基づいて計画されたことを証している。「わたしは本年1964年ならびに昨年、神より時宜にかなった重要な指示を頂きました。教会の大管長として管理している預言者であり、指導者である方を通して与えられる指示の中で、これほど重要なものは教会史上かつてありません。<sup>5</sup>

デビッド・O・マッケイ大管長は家庭の夕べテキストの前書きで次のように宣言している。「この困難な時代の様々な問題は、家庭の愛と義、教え、模範、献身によらなければ、他のどのような場所、力、手段によっても解決することはできません。<sup>6</sup>

また後年に出版されたテキストには次のような約束が記されている。「祈りによって家族を整え、毎週家庭の夕べを開き、レッスンで学んだ事柄を週日に実践する家

## コーリレーションと統合の時代



教会が制作した家庭向けのメッセージ  
「いつでもあなたのために時間を作ります」  
より。

あなたのそばに座ってあなたのことを聞く、  
これ以上に大切なことはありません。だから  
わたしは、いつでもあなたのために時間を作  
ります。

ほかのことをしたいとは思いません。  
いつでもあなたの話に耳を傾けることを約束  
します。

二人と一緒にしたら、できないことはありません。

二人がお互いに耳を傾けていれば。

わたしはいつでもあなたのために時間を作り  
ます。

家族は話し合えば話し合うほど、親しくな  
ります。

族は祝福を受けるでしょう。夫と妻、両親と子供たち、そして子供たちに間に良い  
思いが生まれることでしょう。そのような家庭に、主の御霊は現れるのです。』<sup>7</sup>

このような約束に励まされて、世界中の末日聖徒の両親はこの新しいプログラム  
を喜んで実施した。ニューヨーク市のアパートであろうと、ナバホ族の住居であろ  
うと、ポリネシアのかやぶきの家であろうと、世界各地で行われる家庭の夕べには  
共通したものがある。プログラムの司会、祈り、賛美歌の指揮、レッスンは家族が  
順番に行うのである。以上の内容に加えて、特別なレクリエーション活動を行うこ  
ともある。また、リフレッシュメントは家庭の夕べと切り離せない習慣となっている。  
1970年、教会指導者は月曜日の夕べを家族の集いの日とし、一切の教会活動を  
行わない日と定めた。

教会が家族を重視したことにより、伝道活動も変化を遂げた。教会はラジオ、テ  
レビを通じて、健全な家族関係の確立を呼びかける簡単なメッセージをシリーズ化  
して流した。教会が制作したこれらの番組は宗教界、放送界から優秀な作品として  
賞を受けている。宣教師は家庭の夕べの開き方を紹介することを糸口にして福音を  
伝えるようになった。家庭の夕べの紹介をきっかけに、通常のレッスンに移行した  
例は多い。

デビッド・O・マッケイ大管長は家族の大切さを採り上げる説教をしばしば行って  
いる。最も有名なのが次の言葉である。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはで  
きない。<sup>8</sup>……愛の下に一致した家族は、いかに貧しくとも、他のいかなる富にも増し  
て神と将来の人類にとって大きな価値を持つのである。このような家庭において、  
神は奇跡を行うことができ、また実際に奇跡を行われるであろう。……清い家庭で  
清らかな心をもって生活する者は、いつも天からのささやきが聞こえる距離に自分  
を置くことができる。」<sup>9</sup> 1970年の初めにマッケイ大管長が亡くなってからも、彼の後  
継者は神権コーリレーションと家族の大切さを引き続き強調した。

### ジョセフ・フィールディング・スミス大管長と ハロルド・B・リー大管長

1970年代の前半は二人の優れた末日の預言者が教会を導いた。ジョセフ・フィー  
ルディング・スミスは2年半、ハロルド・B・リーは18か月にわたって大管長を務め  
た。二人の大管長はともに短期間の管理ではあったが、長年にわたる教会の召しの  
最後を飾るにふさわしい働きをしている。

## 時満ちる時代の教会歴史



ジョセフ・フィールディング・スミス（1876 - 1972年）。スミス大管長が大管長に召されて間もなく、ブルース・R・マッコンキー長老は次のように述べた。「わたしたちの新しい大管長は、教義の教師であり、神学者であり、この上なく聖文に通じた人であり、まことに文字どおりの義の説教者です。」<sup>11</sup>

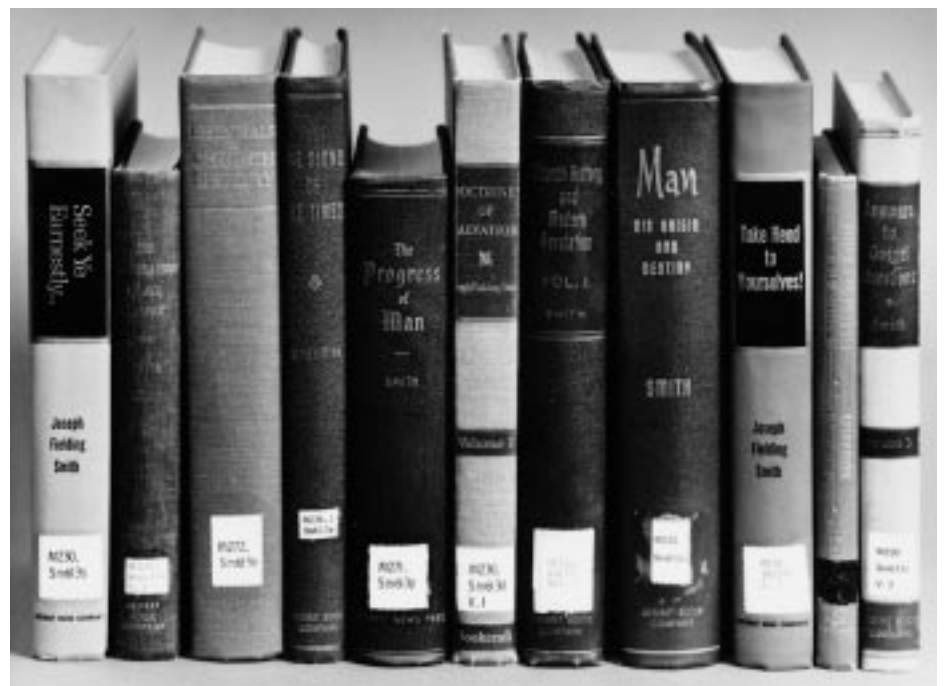
20世紀の後半に大管長に召されたジョセフ・フィールディング・スミスは、ブリガム・ヤングが他界する1年前の1876年に生まれた。スミス大管長は長い生涯における多彩な経験と責任を通じて、地上における神の業を成長させるうえで大きな貢献をするための十分な備えをしてきた。スミス長老は1910年に十二使徒評議会会員として支持され、父親のジョセフ・F・スミス大管長によって使徒に聖任された。スミス長老の十二使徒在任期間60年はほかのいかなる使徒よりも長期にわたっている。スミス長老はまた、1921年に教会歴史記録者に任命され、大管長に支持されるまでの半世紀にわたって同職を務めた。

過去の大管長たちと同様に、ジョセフ・フィールディング・スミスは大管長に召されるまでの長い年月の間に教会に対して大きな貢献をしている。十二使徒の職にあった期間を通じて、スミス長老は預言者ジョセフ・スミスの教えと教義、また回復のメッセージの擁護者として特に有名であった。

ジョセフ・フィールディング・スミスは1913年に祝福師のジョセフ・D・スミスから祝福師の祝福を受けている。祝福の中で、預言者ジョセフ・スミスの神聖な使命を擁護するとき決して相手から打ち負かされることがないという約束を受けた。「あなたはだれよりも、真理の原則を理解し、分析し、擁護する能力を祝福されている。あなたが集める証拠は、預言者ジョセフ・スミスの使命が神から与えられたものであることを現在と将来にわたって破壊しようとする人々を阻む大きな壁となる時が来るであろう。そして、あなたは真理を守り通すことができるであろう。」<sup>10</sup>

ジョセフ・フィールディング・スミスは20数冊の書物を著している。そのうちの1冊である『預言者ジョセフ・スミスの教え』( *Teachings of the Prophet Joseph Smith* ) を例に取ってみても、教会における教義の解釈と明確化にどれほど大きな貢献を果たしたかを考えてみるとよい。ジョセフ・フィールディング・スミスの日記

ジョセフ・フィールディング・スミスが著した25冊の書物の一部。



## コーリレーションと統合の時代

によると、この書物を編集したのは、教会の多くの教師が「靈感を受けてもいない教育者の見解をあまりにも安易に受け入れていた」<sup>12</sup> からである。『預言者ジョセフ・スミスの教え』は初版以来、教義の解釈、教会の方針、教会の管理政体に関する基本的な参考書籍となっている。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は使徒としての50年間に執筆し、また語った事柄の正当性を主張するかのように、大管長に就任した最初の説教で次のように述べている。「わたしは生涯を通じて聖文を調べ、そのまことの意味を理解するために主の御霊の導きを求めてきた。主はわたしの願いを聞き届けてくださった。そしてわたしは、主がお与えになった知識と、救いの真理を教える機会に喜びを覚えている。

.....わたしは過去に教え、書いてきたことを、今までと同様、聖文を調べ、主の助けを借りて再び同じことを教え、書き続けるであろう。」<sup>13</sup>

スミス大管長は2年半にわたって教会を管理する間、預言者ジョセフ・スミスに啓示されたとおりに回復の基本原則を宣言し続けた。またスミス大管長は1970年代の世界に広がる教会に対して、預言者ジョセフ・スミスの永遠の教えと教義を力説し、解説した。大管長時代のメッセージを幾つか抜粋してみると、スミス大管長がどれほど預言者ジョセフ・スミスの教えを教会員に力説し、説き明かしていたかを知ることができる。

「神はわたしたちの御父であります。.....神は全知全能なる御方であり、あらゆる力とあらゆる知恵を持っておられます。.....

.....神は永遠・無限の御方であり、あらゆることを御存じであり、あらゆる力をお持ちであることをわたしたちは知っています。また、神の進歩とはさらなる知識や力を得ることではなく、神としての属性をさらに完成させることでなく、王国を増し加えるという意味における進歩であることを知っています。わたしはこれらの知識に感謝しています。これは預言者ジョセフ・スミスが教えたことでもあります。」<sup>14</sup>

「預言者ジョセフ・スミスは、人はイエス・キリストと救いにかかわる福音の真理を知らなければ救いを得ることができないこと、また人はこれらの真理を知らずに救われることは不可能であると教えています。」<sup>15</sup>

スミス大管長が教会を導く召しを受けたときは93歳という高齢に達していた。ハロルド・B・リーとN・エルドン・タナーという二人の有能な副管長の助けを得て、スミス大管長は教会の様々な活動とプログラムの改善を実施した。スミス大管長は世界中を旅行し、大会を管理し、建物を奉献し、またほかの方法を通して教会と教会員を強めた。ジョセフ・フィールディング・スミスは30か月近くの間、大管長を務めた後、96歳の誕生日の2週間前に安らかに息を引き取った。

スミス大管長の死後、ハロルド・B・リーが教会の第11代大管長として支持された。リー大管長は前任者と同様、教会と教会のプログラムに対してすでに大きな貢献を成し遂げていた。恐らく最もよく知られているのは、福祉計画において果たした貢献と、神権コーリレーションプログラムの開発における指導力であろう。リー長老が基本計画を作成した福祉計画は後に全世界で実施されることになった。リー長老はこれらの新しいプログラムについてステーキ指導者を指導するために、1930年代



ハロルド・B・リー（1899 - 1973年）

## 時満ちる時代の教会歴史

に世界各地のステーキを訪問している。

リー長老が十二使徒定員会の会員に支持されたのは1941年4月である。第二次世界大戦が勃発して間もない1942年10月に、リー長老は教会軍人委員会の初代委員長に任命された。1960年にリー長老は中央神権委員会の委員長に召された。教会の教科課程とプログラムの徹底的な研究を実施する責任であった。リー長老はその後数年間総大会において神権コーリレーションの進歩状況について、またホームティーチング、神権役員会、ワードコーリレーション評議会、家庭の夕べなどの重要な活動の導入について報告を行っている。これらすべての経験が大管長としての務めを果たすための準備となったのである。

リー大管長は大管長に就任した際の記者会見において次のように述べている。「教会が安定して成長するかどうかは、会員が戒めを守るかどうかにかかっています。わたしはこれ以上に大切なことを思い浮かべることができません。会員たちが戒めを守るならば、祝福がもたらされるでしょう。」<sup>16</sup> リー大管長はわずか1年半の間、教会を導いただけで、1973年12月26日に急逝した。短い期間ではあったが、リー大管長は前任者たちが始めた重要な路線に沿って教会を前進させた。特に教会が急成長を遂げる中で教会のプログラムを統合し、簡潔化する作業は大きな進展を見せた。

### 1970年代初頭に実施された統合

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長とハロルド・B・リー大管長が教会を導いた4年の間に、教会員は280万人から330万人に増加した。1970年の初め、デビッド・O・マッケイ大管長が他界した日に、500番目のステーキが組織された。同年には64のステーキが組織されている（それまでの年間最多記録は29だった）。この中には、アジアで最初の日本東京ステーキ、アフリカで最初の南アフリカ・ヨハネスブルクステーキ、南アメリカ西海岸で最初のペルー・リマステーキが含まれている。このような成長を支えたのは福音を分かち合うために行われた様々な活動である。日本の大阪で開催された「1970年万博」のモルモン館には600万以上の人々が訪れた。万博への出展によって教会のプログラムと教えは日本と東アジアにおいてかつてないほど広く知られるようになった。1972年に教会は、モルモン大隊が驚異的な行軍を終えたサンディエゴに訪問者センターを建設している。またニューヨーク・シティーには広報事務所を設置した。翌年にはノーブーにおいて幾つかの建物が復元、奉献され、またハワイ神殿の訪問者センターでは日本語による案内が開始された。

しかし、1970年代初頭は成長と拡大だけの時期ではなかった。教会本部においては管理責任を統合し、教会の各種プログラムを改善する努力が続けられ、現代社会がもたらす様々な問題から会員一人一人を守る要求が高まった時代でもあった。

教会本部では、関連する組織と活動をまとめて幾つかの大きな部門に統合するという重要な改革が実施された。機関誌、レッスンの手引き、その他指導資料の執筆、編集、翻訳が一つの部門に統合された。広報部は放送、訪問者センター、その他の広報活動を一括して調整することになった。不動産、建築、建物の維持は施設管理部の責任となった。歴史部は、調査に必要とされる際に利用できるように、記録を収集し、保管する責任が与えられた。教会の管理業務は、ソルトレーク・シティーの教会執務



## コーリレーションと統合の時代

ビルの北側に建設された28階建ての教会本部ビルの完成によって物理的にも統合されることになった。それまで各部門は市内の十数か所の賃借ビルに分散して業務を行っていたが、1972年、このビルの完成によって一か所に集合することになった。

従来独立していた幾つかの教会活動は、コーリレーションと統合の主旨を踏まえて、併合されることになった。例えば、青年男子相互発達協会のプログラムは青少年アロン神権の活動に併合された。アロン神権定員会アドバイザーはワード若い男性会長会となった。青年女子相互発達協会においても同様の簡素化が実施され、役員と教師の数が削減された。教会は1971年から英語の機関誌の出版を3誌に限定することにした。成人のための『エンサイン』(Ensign)、青少年のための『ニューエラ』(New Era)、子供のための『フレンド』(Friend)である。これまで、補助組織と他の教会組織はそれぞれに機関誌を発行していたが、新しく中央幹部の指示の下にスタッフが一本化して制作と配付を担当することになった。

この時期に行われた変更によって、長年の伝統を持つ教会プログラムの名称が変更されることになる。99年間にわたって親しまれた「デゼレト日曜学校連盟」は「末日聖徒イエス・キリスト教会日曜学校」と改称された。このほかに、トレイルビルダー（初等協会の9歳から11歳の少年）、Mメンとグリーンナー（青年独身成人）、さらに相互発達協会またはMIAなどの名称も廃止された。成人した後もメルキゼデク神権を受けていない男性会員は成人アロン神権者から長老見込み会員となったが、この変更にはこのプログラムに対する新たな意気込みが表れている。以前の名称では、昇進できずに小神権にとどまっているような印象を与えていたが、新しい名称には将来の進歩を期待する響きが表されている。これらの人々の活発化については長老定員会が責任を持つことになった。こうして長老見込み会員は、神権活動と神権者の交流に関して最も関心を持つ組織の中核に置かれることになったのである。帰還宣教師は通常、長老定員会の会員であるため、伝道中に教会員ではない人に教えた経験を生かしてあまり活発でない兄弟たちに対応することができた。<sup>17</sup>

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の福音の勉強に対する関心は、日曜学校のクラスを改善する動きに表れている。1972年から日曜学校の福音の教義クラスは聖典を系統的に勉強することになった。それまで、福音の教義クラスでは様々なテキストが使用されていたが、1972年からは聖典自体がテキストとなった。『旧約聖書』『新約聖書』『モルモン書』『教義と聖約』をそれぞれ2年間かけて（後に1年間となった）順番に勉強するのである。『高価な真珠』はほかの標準聖典の関連箇所を採り上げるようになった。教会指導者は、聖徒たちの聖典に接する時間が増えることにより、霊性が増すことを期待した。

スミス大管長とリー大管長の指導の下で、神殿活動は引き続き活発に行われた。1972年にはオグデン神殿とプロボ神殿が奉献された。この二つの神殿は先進技術が駆使されていることと教会員が密集した地域に建設されたことが要因となり、儀式的執行数という意味でたちまちのうちに最も生産性の高い神殿となった。教会最大の神殿であるワシントン神殿の建設が始まったのは1971年である。また既存の5つの神殿を広範囲にわたって改築することが発表された。さらに、家族単位でしか提出できなかった死者の記録が、個別に提出できるようになったため、系図



ワシントンD.C.の神殿用地は1968年ヒュー・B・ブラウン副管長により奉献された。1974年11月に、完成した神殿を奉献したのはスペンサー・W・キンボール大管長である。

## 時満ちる時代の教会歴史

および神殿活動に拍車がかけられた。

### 教会教育制度の指針

活動を簡素化するという主旨にのっとり、教会は教会教育部の簡略化にも着手した。1970年、ユタ大学の理事であったニール・A・マックスウェルは教育委員長に召された。マックスウェル長老はほかのスタッフとともに教会の教育部門を徹底的に研究した後、1971年に以下の3原則を中心とした報告書を提出した。

(1)「読み書きの能力と基本的な教育は福音を学ぶうえで必要とされる。……教育は会員個人の経済的安定を図るうえで必要とされるばかりでなく、個人の持つ能力を認識し、教会において責任を十分に果たし、地域社会に貢献するためにも必要とされる。」教会はこの必要を満たすために、ラテンアメリカと南太平洋地域において75の小学校と中学校を開設した。これらの地域の教会員は、教会が経営する学校がなければ、教育の機会はまったくないに等しい状況に置かれていた。しかしながら、後に各国の政府が公立の学校を設置し始めた段階で、教会は幾つかの学校を閉鎖している。

(2)「教会は特に高等教育について、ほかに機会が提供されている場合には重複して教育機関を設置しない。」委員長は教会員の大部分は高等学校卒業以後の教育について、希望する者はその機会が身近にあることを指摘している。「単科大学および総合大学に在籍している20万人以上の教会員の学生のうち、教会の大学に在籍している学生は3万2,000人にすぎない。しかし321の教会外の大学に在籍している5万人の末日聖徒の学生がインスティテュートに登録して、宗教教育を受け、末日聖徒の学生と交わり、異文化に触れる機会を得ている。」

(3)「究極的には、高等学校と大学の年代にあるすべての末日聖徒に対して、一般の教育と並行して、宗教教育を受ける機会を週日に与えるべきである。教会の教育プログラムの登録者数を見れば、19万人の学生が登録しているセミナーおよびインスティテュートプログラムが最も大きな影響を与えていることが分かるはずである」と委員長は締めくくっている。<sup>18</sup>

教会教育プログラムにおけるコーリレーションがどのように実施されたかについては、1966年からユタ州とカリフォルニア州南部の各大学で組織された末日聖徒学生協会(LDSSA)に成功例を見ることができる。末日聖徒学生協会は神権指導者の管理の下で、学生ワードや支部の活動、インスティテュート、教会が実施する社交組織について活動の調整を行った。これらのプログラムは競合するのではなく、それぞれが、学生の霊的、知的成長を促す手段となる目的で実施されることを確認した。末日聖徒学生協会は独自の活動を実施したほか、教会のプログラムと大学の各種学生組織との公式な接点となる役割をも果たしたのである。

1969年にユタ大学のインスティテュートにおいて末日聖徒学生協会国際会議が開かれた。この会議に参加した300人を超える大学生は思い出に残る霊的な体験をすることになる。教会指導者はこの会議を通じて、合衆国とカナダの大学から慎重に選ばれた学生指導者を力づけ、不安と混乱が横溢する時代に生きる学生たちにとってこれらの学生指導者が光となることを希望していた。会議では特別ゲストとして八

## コーリレーションと統合の時代

ロルド・B・リー長老が話をしている。

「リー長老は自分に起こった現代の奇跡について話をしました。……

そして、1時間15分の話の半ばを過ぎたころ、集会の雰囲気ががらりと変わったのです。……

……リー長老は、それまで話してきた彼の信じていることが真実であることをはっきりとまた熱意を込めて証し、神が生きておられることを心から証して、話を終えました。リー長老は地上における神の特別の証人として、この真理をどのようにして知り得たかを話してくれました。そして出席者全員はリー長老が確かに知っているということが分かったのです。」閉会の祈りが終わっても席を立つ者は一人もいなかった。その場の雰囲気を壊したくなかったからである。やがて、集会を司会していたマリオン・D・ハンクス長老はリー長老夫妻とともに礼拝堂のロビーへ出た。「リー長老とリー姉妹は、涙を浮かべ何も言わない学生たちと握手を交わして礼拝堂を後にしました。」<sup>19</sup>

## 新しい課題に立ち向かう

第二次世界大戦後の20数年間は、以前には社会の安定と安全をもたらしていた制度と伝統が全般的に崩壊した時期である。犯罪率は上昇し、離婚が増え、家族の生活は崩壊していった。人々は農業を捨て、都会へ移り住むようになった。都会生活には人々の興味を引くものがあふれ、家族がバラバラになる現象が見られた。福音はこれらの社会問題に対して自分をどのようにして守るべきかを教えてはいるが、末日聖徒もこれらの問題にまったく無縁の存在にいるというわけにはいかなかった。ハロルド・B・リー大管長はこうした事態を憂慮し、あらゆる会員が教会のすべてのプログラムに参加することによって祝福にあずからなければならないことを説いた。情緒面での安定と体の健康に関する分野でも教会員は大きな問題に直面していた。そのため、教会は社会福祉プログラムと健康管理プログラムを実施することになった。

教会はそれまで社会的な問題に対して3つのプログラムを実施していた。まず、扶助協会の社会福祉部は養子縁組を斡旋して恵まれない子供たちの里親を世話していた。次に、1950年代半ばから実施されてきたインディアン学生紹介プログラムは、数千人の子供たちにより良い教育の機会を与えていた。そして青少年指導プログラムでは援助を必要とする青少年に対して人生相談、里親の紹介、デイキャンプ（週日の昼間だけ参加する子供たちのための、宿泊施設のないキャンプ）を行っていた。これらのプログラムを実施するにはそれぞれに資格のあるソーシャルワーカーを雇用することが法律で定められていた。1969年に、これらの3つのプログラムを統合する組織として教会社会福祉部が設立された。

このようにして設立された社会福祉部は、様々なサービスを提供するプログラムを実施していった。選ばれた特別な里親家庭が未婚の母親を援助する一方で、教会は彼女たちに状況が許すならば結婚するように奨励した。教会の養子縁組紹介機関では、子供のいない夫婦に子供を世話する助けをしたり、養子を迎えたい末日聖徒の家庭を探したりする活動を行った。刑務所で服役中の教会員とその家族にはカウ

## 時満ちる時代の教会歴史

ンセリングと社会復帰のための援助が実施された。また刑務所内で特別な家庭の夕べが開かれることもあった。教会社会福祉部は、薬物やアルコール中毒の問題を抱える教会員に対して、公共機関との調整を行い、また地元の教会指導者を支援するサービスを実施した。教会員が多い合衆国西部やカナダには社会福祉課が設置された。これらの事務所では、専門的訓練を受け、資格を持つ職員を採用し、自治体の規定に従って業務を行った。<sup>20</sup>

教会は設立当初より肉体の健康の重要性を強調してきた。知恵の言葉が良い例である。20世紀の後半に入って、教会はユタ州、アイダホ州、ワイオミング州で合計15の病院を運営するようになった。しかし1970年代初頭から教会は健康管理プログラムについて新たに範囲を広げて活動を実施することになった。

1971年、教会は初めて健康管理宣教師を召した。健康管理宣教師は通常の伝道のほかに健康の原則、栄養、衛生についての指導を行った。健康管理活動というと、政府や他の宗教団体は病院を運営するのが通常であるが、医師が診察できる人数は比較的少数に限定される。これに対し、教会の健康管理宣教師は病気の予防を訴える教育を主体としたため、数千人単位の人々に奉仕することができた。これらの宣教師は通常の教会組織を通して活動を行った。ポスターなどの教材を使って、初等協会の子供たちに食事の前に手を洗うことを教えたり、扶助協会の姉妹たちには健康によい食物の調理法や保存方法を教えたりした。後に健康管理宣教師の責任範囲が広げられ、福祉宣教師もしくは特務宣教師と呼ばれるようになった。

1974年に教会は病院の所有権を譲渡して、健康プログラムに関して新たな方向に進む決定を下した。大管長会は次のように宣言している。「教会は全世界的な発展を遂げているため、裕福な一地域だけで治療行為を実施するのでは妥当性を欠くこととなります。」これに代わって教会は、教育を通して全世界の会員たちの健康増進を図るために、教会が有している様々な援助手段を活用することにした。病院については、別法人のインターマウンテン健康管理株式会社を設立して、この法人がそれまで教会が所有していた病院の所有権の譲渡を受け、運営することになった。<sup>21</sup>

1973年に中央福祉プログラム、健康サービス部、社会福祉部は併合されて、福祉活動部となり管理監督会の監督下に置かれることになった。この決定は「個人の様々な必要を満たすために活動を一元化すること」を目的としたのである。<sup>22</sup>

教会は長年にわたり、目の見えない教会員のために点字もしくは録音による資料を出版してきた。障害を持つ会員たちがそれぞれに持つ必要を満たすための配慮は引き続き実施され、またその範囲は広げられていた。学習能力に障害を持つ人々のためには特別教育セミナーが実施されている。監督に対しては、障害を持つ会員がどのように教会のプログラムに参加したらよいかについての指示が与えられた。盲目の教師がレッスンを準備する際には、目の見える会員が手伝いを申し出た。車いすで教会に出席する会員をホームティーチャーが援助する光景が見られるようになった。集会に参加する耳が聞こえない教会員を助けるために、若人が手話を学んで彼らのために通訳している。耳が不自由な人々のための特別支部は合衆国全域に組織されている。1972年には、耳が聞こえない末日聖徒の必要をどのようにして満たすかを検討する会議が開かれている。その結果、口述によらない神権の儀式を執



メアリー・ジェーン・ブリー(1900年-)は1957年からユタ州アメリカンフォークにおいて障害を持つ人々の訓練学校で働き始めた。1967年に彼女は訓練学校でセミナーを組織する召しを受けた。これは障害を持つ人々のための最初のセミナーである。

## コーリレーションと統合の時代

行する方法に関する映画が制作され、また福音や教会に関連した特別の用語を伝える手話が標準化された。<sup>23</sup>

1970年代初頭は少数民族に対する関心が高まった時期でもある。これによって少数民族に属する人々は自分たちの民族独自の文化に対する誇りを高めた。教会は少数民族の人々がそれぞれに持っている必要に対してより一層の関心を示している。1970年に、インディアン委員会は、「レーマン人および異文化委員会」と名称が変更されたが、これは教会が広範囲に関心を有していることの表れである。この委員会は独自のプログラムを実施することではなく、様々な少数民族の人々のために、教会の既存の組織との調整を図ることを主眼とした。委員会では、文化の違いによって理解が異なることを考慮して、福音の原則を理解できるように教える方法を検討した。さらに、「様々な文化を持つ人々がほかの教会員に対して貢献できるように、文化の特徴を明確にし、また文化を維持する努力を行った。」<sup>24</sup>

1972年、ハロルド・B・リー大管長をはじめとする大管長会は、地方の神権指導者に対して、ユニット内に住む少数民族の必要を満たす責任を果たすようにとの指示を与えている。この指示に基づいて、地域の標準的な言語を話さない人々に対して特別な関心が向けられることになった。少数民族の言語を話す人々のためのクラスが設けられ、通訳設備が整えられ、また別個の支部やワードが組織された。このように特別な必要を満たすための努力が払われている。しかし、教会が目標としているのは、少数民族の人々が教会の通常の集会や活動からもたらされる恩恵を余すところなく受けるようにすることである。

教会内に増え続けている独身成人には、他の年代の人々とは異なる独特の必要性がある。元来、教会は結婚した男女を中心にした活動を展開してきたが、これらの活動を独身成人の間で実施することには無理がある。このような背景から、1973年8月に、ソルトレーク・シティにおいて独身成人の支部が初めて組織された。それ以降、独身成人の必要を満たすために独身成人ワードが組織された。教会はまたメルキゼデク神権組織と扶助協会が主催する活動においても、独身者に対する配慮を加えている。

20世紀に実施された社交、健康、およびこれらに関連したプログラムは、教会が新たに必要となった事柄に対処するために、霊的な導きにより即座に対応していることを物語っている。

## 世界的規模に広がった教会の伝達手段

既存のプログラムと活動の質的向上を図り、またこれら相互の関連性を密接にし、新しい必要に対応する努力が続けられたこの時期に、中央幹部は全世界の聖徒と指導者を強めるために、伝達手段を早急に改善しなければならないと感じていた。このために少なくとも3つの新しい手段が講じられている。

福祉活動の運営に携わるステーク間の調整を図るために1936年に地区が組織された。1964年にはこの地区の責任はすべての神権活動へとその対象が拡大された。大管長会はこの3年後に、ステーク指導者に対して一層の指導と指示を与えるために、経験豊かな人々を地区代表に任命すると発表した。<sup>25</sup> 地区代表は中央幹部の指示の下

## 時満ちる時代の教会歴史

に、各担当地区において教会のプログラムと活動を紹介し、強化するために指導者会を実施した。最初に召された地区代表は69人だったが、年々人数と責任範囲が増大していった。

1971年から始められた地域大会は、全世界の教会員との意思の疎通を改善するための第2の手段である。最初の地域大会は同年の8月に英国のマンチェスターで開催されたが、地域大会の開催日が近づくにつれてマスコミが大きく採り上げるようになった。『ガーディアン』(Guardian)、『タイムズ』(Times)、『サンデーテレグラフ』

最初の地域大会は、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の管理の下1971年8月英国で開催された。14人の中央幹部が大会に出席し、各部会において責任を果たした。壇上で説教するのはハワード・W・ハンター長老である。



『ソルトレークニュース』(Deseret News)の厚意により掲載

(Sunday Telegraph)などの英国の大新聞は、英国における教会の発展をたどる記事や、知恵の言葉、末日の預言など教会の原則について好意的な記事を掲載した。BBCテレビは55分間のドキュメンタリー番組「モルモン」を放送している。一般大会はキングズホールのベルボー博覧会会場で開催された。ソルトレークタバナクルに模して、中央幹部が着席する壇上には、背の部分が高い赤色のいすが用意された。一般大会の出席者は1万2,000人から1万4,000人で、これは英国の全教会員の5分の1に相当する。この大聴衆に向かって、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように主張した。

「わたしたちは世界の教会、命と救いの計画を持つ教会、主御自身が全世界のあらゆる子らに救いのおとずれをもたらすために末日に立てられた教会の会員であります。

わたしたちがアメリカのロッキー山脈の頂に住む特異な民と考えられていた日はすでに過ぎ去っています。……

今やわたしたちは一つの教会、一つの民として立ち上がる時代に来ているのです。」<sup>26</sup>

大会の準備に当たった地区代表のデレク・A・カスバートは、日曜日の午後の最後の部会で壇上に立って次のように述べた。「英国の教会員はもはや、教会員としての祝福にあずかるために故国を離れる必要はなくなったのです。」<sup>27</sup>

## コーリレーションと統合の時代

大会が終了して、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長が退席の準備をしている間、全会衆は立ち上がったが、会場を出ようとする人はいなかった。そこではささやくような会話の音が聞こえるだけだった。「彼らは大会を覆っている御霊から離れたくないことを態度で示しているかのようでした。キングズホールには神聖な雰囲気が漂っていました。そして全会衆は御霊への証を表すように声をそろえて『感謝を神に捧げん』を歌い始めました。そして、『神よ、また逢うまで』を歌ったのです。』<sup>28</sup>

翌年メキシコ・シティーにおいて同様な形の地域大会が開催された。ハロルド・B・リー大管長が大管長に召されてわずか1か月後のことである。聖徒たちは、遠い人で4,800キロもの旅をして大会に出席するという大きな犠牲を払っていた。メキシコのティファナからの団体は53時間バスに揺られてやって来た。しかも座席数よりも10人余分に乘ったために交代で立っていたという。金曜日の夕方にはメキシコと中央アメリカの才能豊かな出演者による音楽の演奏とダンスが「フォルコリコ」文化プログラムを飾った。土曜日の夕べはメキシコ・シティー内の幾つかの会場に分かれて、アロン神権、若い女性、扶助協会、メルキゼデク神権の各集会が同時に開催された。リー大管長は各会場を回って、説教を行い、出席者に靈感を与えた。タバナクル合唱団はチャピュルテペク公園内の国立講堂において日曜日の朝の定例の放送を行った。合唱団がスペイン語の歌を数曲演奏したとき、聴衆の多くが感謝の涙を誘われた。午前の部会において、新しく組織された大管長会は3人全員が出席して支持を受けた。地域総大会において大管長会全員が出席して支持を受けたのはこれが最初である。

この大会においてブルース・R・マッコンキー長老は、集合の原則を現代の人々はどうに理解すべきかを明確にしている。「メキシコの聖徒のための集合の地はメキシコにあり、グアテマラの聖徒のための集合地はグアテマラにあります。またブラジルの聖徒のための集合の地はブラジルにあり、これが同じ意味で全世界の規模にまで広がるのです。日本は日本の聖徒のためにあり、韓国は韓国の聖徒のためにあります。またオーストラリアはオーストラリアの聖徒のためにあり、あらゆる国々は、その国の民のための集合の地となるのです。』<sup>29</sup>

メキシコ地域大会以降、ドイツ、スウェーデンをはじめ世界の各国で同様な地域大会が開催され、各地域の聖徒たちは一様に霊的な励ましを受けている。

1972年に組織された国際伝道部は、全世界の教会員との接触を図る第3番の手段である。国際伝道部は、特に、既存のステークまたは伝道部の管轄地域内に住んでいない教会員を対象とした。タンザニア、ザンビア、モロッコ、ギアナ、ニューギニア、ハンガリー、ソビエト連邦などには数千名の末日聖徒が住んでいた。政府の公使、外国支援機構の代表者、大企業の派遣員、農業をはじめとする開発事業の顧問として派遣されている人々がほとんどで、家族同伴の人もいれば、単身赴任の人もいた。彼らの大部分は合衆国かカナダから来ていたが、英国、フランス、ドイツ、スカンジナビア、その他世界各地から派遣された人々もいた。

これらの聖徒たちはどこに住んでいようとも、教会員であることを誇りにし、また教会の活動に積極的に参加する意欲を持っていた。国際伝道部の初代部長である

## 時満ちる時代の教会歴史

バーナード・P・ブロックバンク長老は次のように説明している。

「この伝道部が組織されたのは、会員が孤独感を味わうことのないようにとの配慮からです。教会の資料を受け取り、質問に対する回答を与えられ、いろいろな相談に乗ってもらえ、あるいはただ教会との接触を維持するためだけであっても、彼らもだれかを必要としているのです。……

……教会員はどこにいようと、……教会は最寄りの郵便箱の距離にあるのです。」<sup>30</sup>

国際伝道部は、教会支給品を注文する、会員記録に最新の情報を記載する、什分の一その他の献金を受け取り領収書を発行する、神権の昇進や神殿推薦状のための面接を手配するなどの業務をおもに手紙によって実施した。国際伝道部はその後、世界の新しい地域に福音を伝え、教会の活動を実施するうえで重要な役割を果たしている。このようにして情報伝達手段が確立され、また各種プログラムの相互調整が完成したことにより、教会はいよいよ全世界に対する使命を果たすための歩みを速める準備が整えられたのである。

## 注

1. ハロルド・B・リー、Conference Report 『大会報告』1963年4月、83で引用
2. 『大会報告』1961年9月、77、79、81で引用
3. 『大会報告』1962年10月、74、76で引用
4. 『メルキゼデク神権の手引き』1964年、18 - 19
5. 『大会報告』1964年10月、137で引用
6. *Family Home Evening Manual* 『家庭の夕べの手引き』1965年、iii
7. 『家庭の夕べの手引き』1967年、iii - iv
8. デビッド・O・マッケイは1935年4月の総大会において初めてこの考えを発表した。J・E・マクローク、*Home: The Savior of Civilization* 『家庭——文明化の救い手』(Washington, D.C.: Southern Cooperative League, 1924)、42からの引用である。
9. 『大会報告』1935年4月、116で引用
10. ジョセフ・フィールディング・スミス・ジュニア、ジョン・J・スチュワート共著、*The Life of Joseph Fielding Smith* 『ジョセフ・フィールディング・スミスの生涯』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1972)、195
11. “Joseph Fielding Smith—Our New President” *Instructor* 「ジョセフ・フィールディング・スミス——新しい大管長」『インストラクター』1970年3月号、78
12. スミス、スチュワート 『ジョセフ・フィールディング・スミスの生涯』212で引用
13. 「完全なる我が福音……宣べられんがため」『聖徒の道』1971年5月号、117で引用
14. ジョセフ・フィールディング・スミス “The Most Important Knowledge” *Ensign* 「最も大切な知識」『エンサイン』1971年5月号、3
15. 1971年5月28日南ユタ州立大学における説教、ジョセフ・フィールディング・スミスのスクラップブック1970 - 72年より引用、末日聖徒歴史記録部、ソルトレーク・シティー、5
16. “Presidency Meets the Press” *Church News* 「大管長会の記者会見」『チャーチニュース』1972年7月15日付、3で引用
17. “Elders Presidency Magnified” 「長老定員会会長会の責任範囲の拡大」『チャーチニュース』1972年1月29日付、3参照
18. “Seek Learning Even By Study and By Faith” 「研究によって、また信仰によって学問を求めなさい」末日聖徒イエス・キリスト教会教育委員長の報告書（1971年）、1
19. L・ブレント・ゴーツ、*Harold B. Lee, Prophet and Seer* 『預言者、聖見者ハロルド・B・リー』(Salt Lake City: Bookcraft, 1985)、394、396
20. マービン・J・アシュトン “The Church Focuses on Social and Emotional Problems” *Ensign* 「教会は福祉および情緒の問題に注目する」『エンサイン』1971年1月号、30 - 31；“Help Available Here” 「援助の手はここにある」『エンサイン』1973年12月号、54 - 56参照
21. “Church Divests Self of Hospitals” 「教会は病院を譲渡する」『チャーチニュース』1974年9月14日付、3
22. “Three Welfare Units Joined” 「3つの福祉機関の併合」『チャーチニュース』1973年4月7日付、4



## コーリレーションと統合の時代

23. “ Needs Identified at Seminar for LDS Deaf ”  
「末日聖徒のろう者セミナーにおいて必要とされている事項が明確になる」『チャーチニュース』1972年8月19日付, 7, 12参照
24. “ New Name, More Duties Given Church Indian Committee ”  
「教会インディアン委員会は改称され, 責任範囲が広げられる」『チャーチニュース』1970年6月27日付, 6
25. 『大会報告』1967年10月, 5 - 26参照
26. 1971年イギリス・マンチェスター地域大会, 5で引用
27. “ No Longer Need to Leave Homeland, Members Told ”  
「会員たちはもはや自国を離れる必要はないとの勧告を受ける」『チャーチニュース』1971年9月4日付, 13
28. “ Prophet Leads Conference; British Saints Rejoice ”  
「預言者に導かれた大会——英国の聖徒たち歓喜する」『チャーチニュース』1971年9月4日付, 3
29. 「1972年メキシコおよび中央アメリカ地域大会」45で引用
30. “ Unique Mission Serves World ”  
「全世界にまたがるユニークな伝道部」『チャーチニュース』1975年2月1日付, 3

# 教会の歩みを速める

年表	重要な出来事
1973.12.30	スペンサー・W・キンボール、第12代大管長に召される
1974	教会員は「歩みを速める」チャレンジを受ける
1976	二つの啓示が聖典に加えられる
1976	プロボに宣教師訓練センターが開設される
1978.6.1	すべてのふさわしい男性に神権を授ける啓示が明らかにされる
1978.9.16	女性のための年次集会在初めて開催される
1979.10.24	エルサレムにおいてオーソン・ハイド記念公園が奉獻される
1979	欽定訳聖書（英語）の新しい末日聖徒版が発行される
1981	合本（英語）の新しい版が発行される
1981	教会のプログラムを放送する衛星放送網が確立される

ハロルド・B・リー大管長は1973年12月26日に急逝した。そして、スペンサー・W・キンボール長老が第12代大管長に召された。キンボール大管長は謙虚に次のような声明を発表している。「大筋においては従来どおりのプログラムを推進したい。これまでわずかしが達成できなかったプログラムを推し進め、わたしたちの才能と能力の許すかぎり御業を前進させたいと考えている。」<sup>1</sup>このように謙虚な声明を発表したにもかかわらず、キンボール大管長は教会を管理した期間に、数多くの偉大な改革を成し遂げている。

## 預言者の召しの準備

スペンサー・W・キンボールは1895年3月28日ソルトレーク・シティーで生まれた。スペンサーは3歳のときに、家族とともにアリゾナ州南東部に引っ越し、中央幹部に召されるまで同地で生活した。彼は什分の一を納めることと従順の大切さを両親から学んでいる。彼は幼いころから、霊的な事柄について関心を示している。牛乳を搾りながら信仰箇条を暗記したり、石炭油のランプの明かりを頼りに聖文を読んだり、また教会の集会にはほとんど完全に出席したりするという少年時代を過ごした。父親から特別にあつらえてもらった柄の短い特製の<sup>くわ</sup>鋏を手にして大人たちと一緒に牧草を荷車に積み上げる仕事を通して、一生懸命に働く習慣を身に付けた。スペンサーは顔面まひにかかったが、神権の祝福により回復している。また運河で水泳中におぼれて、蘇生した経験も持っている。母親を亡くしたのは、わずか11歳のときである。これらの経験を通して、忍耐、勇気、信仰について大切な教訓を学んだのである。

キンボール長老は合衆国中部諸州伝道部での伝道を終えた後、カミラ・アイリングと結婚し、4人の子供たちに恵まれた。キンボール長老は銀行家、実業家として頭角を現し、間もなく地域社会の指導者となっている。23歳でステーキ書記に召され、数年後にはステーキ副会長に召されている。1938年に新しくマウントグラハムステーキが組織されたとき、キンボール長老は初代ステーキ会長に召された。5年後に使徒の召しを受けるまで、キンボール長老はこの責任を果たしていた。

1943年にソルトレーク・シティーから入った電話が、スペンサー・W・キンボールの人生をまったく変えてしまうことになる。電話の主はJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長であった。クラーク副管長はキンボール長老が十二使徒定員会に召されたことを告げた。「わたしはすぐさま、自分の能力がないこととこの召しが自分の能力の限界を超えていると感じ、こう叫んだのです。『わたしが召されるなんてとんでもないです。クラーク兄弟、何かの間違いではありませんか』とキンボー



スペンサー・W・キンボール（1895 - 1985年）

## 時満ちる時代の教会歴史

ル長老は当時を思い起こして語っている。それから数週間をかけて、キンボール長老はそれまでの人生で不当に扱った相手がいないかどうかを確認するなどして、身辺を整理していった。

キンボール長老はさらに続けてこう述べている。「ヤコブは祝福を得るために『夜明けまで』一晩中組み打ちしました。わたしは皆様に申し上げたいと思います。わたしは85日の間、毎晩祝福を受けるために組み打ちしました。85回、わたしは助けてください、力をお与えください、訪れ来た大いなる責任にふさわしい者となることのできるようにしてくださいとひざまずいて主に祈りながら夜明けを迎えたのです。」<sup>2</sup>

十二使徒定員会の一員としてキンボール長老が発揮した影響力はたちまちのうちに全世界の教会に浸透していった。キンボール長老は教会の什分の一基金の使用方法を祈りをもって慎重に検討するという重要な委員会の委員に召されている。また、教会インディアン委員会の委員長に召されたとき、キンボール長老は心に熱いものを感じた。長年にわたりインディアンに対して特別な関心を抱いていたからである。キンボール長老が語る卓越した説教の数々は末日聖徒に大きな影響を与えた。いきいきとした描写を用いてキンボール長老は聖徒たちに対して清くあるべきことの大切さを効果的に教え、レーマン人と呼ばれる人々に対して教会が持つ責任を果たすよう熱心に訴えた。

キンボール長老は生命にかかわる様々な病気を体験している。1957年には喉頭癌こうとうがんに冒され、声を失う危機に立たされた。キンボール長老は苦悶くもんした。「もう、神殿の奉献式で話すことはできなくなるのだろうか。説教壇に立って話すことができなくなるのだろうか。」しかし、多くの人々の断食と祈りがこたえられて、手術は考えられていたよりも簡単に済んだが、それでもやはり、声帯のほとんどは摘出されてしまった。再び声を出すことはできたが、「このしわがれ声で人々の感情を害するのではないか」とキンボール長老は思い悩んだ。<sup>3</sup> しかし、聖徒たちは間もなくキンボール長老の「新しい声」に敬意をもって聞き従い、新しい声を愛するようになった。

1972年に心臓障害が再発した。この度は特に複雑な心臓切開手術を受けなければならなかった。多くの人々の信仰と、敬虔な末日聖徒の外科医であるラッセル・M・ネルソン博士の卓越した執刀技術によって、キンボール長老は再び命を延ばされたのである。手術の直前に、大管長会はネルソン博士に祝福を与えている。「大管長会は手術が誤りなく行われ、すべてが順調に進むように祝福してくれました。...それはわたしがこの手術を行うために主によって備えられていたからです。」手術は完璧かんぺきに行われた。キンボール長老の心臓が再び力強く鼓動し始めた。ネルソン博士は当時を振り返って次のように述べている。「わたしは、大管長になる人の手術をたった今終えたという御霊の声を聞きました。」<sup>4</sup> キンボール長老は肉体的な障害を抱えていたにもかかわらず、神の王国を建設するために自己を忘れて献身的に働いた。その熱心に働く姿は伝説的にさえなっている。キンボール長老の机の上に置かれたモットーは「実行」である。これらの経験を通してスペンサー・W・キンボール長老は、召しが与えられたときにすぐさま教会を導く備えをしてきたのである。

## 教会の歩みを速める

### 歩みを速める

スペンサー・W・キンボール長老は大管長に召されると、前任者の副管長を引き継ぎ召した。すなわち第一副管長にN・エルドン・タナー長老が召された。タナー副管長は4代にわたって大管長に仕えたが、これは教会歴史上、ほかに例がない。タナー副管長は聖徒たちに対して霊感あふれる勧告を与え、また教会を管理するうえで優れた指導力を発揮しただけでなく、社会全体に祝福をもたらす働きを行っている。ソルトレーク・シティの末日聖徒でない実業家や教育界の指導者は、地域社会に対するタナー副管長の無私の奉仕、優れた働きを称賛している。キンボール大管長の第二副管長に召されたマリオン・G・ロムニー副管長は中央幹部としての経験は大管長会のだれよりも長い。というのは1941年に最初の十二使徒補助の一人に召されたからである。これはキンボール大管長が十二使徒に召される2年前のことである。ロムニー副管長は30年以上にわたる力強い指導力と聖文を中心とした教えによって、物質面と霊的面上における聖徒たちの進歩を促してきた。

1974年4月に開かれた地区代表セミナーにおいてキンボール大管長は話を始めた。そのときの様子をW・グラント・バンガーター長老はこう述べている。大管長が話し始めて間もなく、「わたしたちは非常に強く御霊の訪れを感じたのであった。……これまでの集会とは違う特別な力強い言葉に一心に耳を傾けていることに気づいた。その霊感あふれる言葉に、わたしたちの全身が緊張し始めた。……キンボール大管長が霊の窓を開き、……永遠の計画と一緒に見るようわたしたちを招いているのが分かった。」<sup>5</sup>

キンボール大管長は1974年に地区代表に対して45分間にわたって話している。この説教は最も頻繁に引用されるものの一つであり、またキンボール大管長の教会管理の進め方を示した説教として有名である。

「主は〔福音が宣べ伝えられなければならないとおっしゃた際〕『全世界』や『全地』『地のはて』『あらゆる国語の民』『あらゆる国民』『すべての人』『多くの国々』という言葉を選重に選んで使っておられることが分かる。

だからこそこれらの言葉は重要な意味を持つのである。

……これは全世界の人々に向けて与えられた命令なのである。

わたしたちは今、自分にできるすべてのことをしているだろうか。わたしたちは全世界に教えを宣べ伝えようとしているが、現状に満足してはいないだろうか。…歩みを速めるための準備はできているだろうか。もっと大きなビジョンをもって進む備えができていないだろうか。……

主はその心にかけてもうすべてのことをなし得ると、わたしは信じる。

しかしわたしたちに入る準備ができていないのに主が門を開けてくださると思えない。また、わたしたちが入る準備をしていないのに、主が鉄のカーテンや竹のカーテンそのほかの障壁を取り除いてくださるはずもない。

わたしはこの門戸を開くために使徒たちを助ける人が出てくると思う。有能で信頼の置ける政治家が。しかしそれは、わたしたちの準備が整ったときである。

1年前わたしは日本と韓国を訪問した。……そのときわたしは、かの国々の何千人もの人々が備えをし、他国へ伝道に出ることを強く望んでいる姿を心に思い浮かべ

## 時満ちる時代の教会歴史

ることができた。また……メキシコの若者をはじめ中央および南アメリカに住むラテン系の人々が、資格を得て、自国は言うに及ばず他の国々にまでも伝道に出、そしてついには主の宣教師による軍勢が、あたかも水が大海を覆っているようにこの地球全体に満ちみちる日を心に浮かべることができた。<sup>6</sup>

キンボール大管長が話を終えたとき、セミナーの司会を務めていたエズラ・タフト・ベンソン会長は出席者全員の気持ちを代表するかのようになり、感情を込めて「まさしく、あなたは、イスラエルの預言者です」と言った。<sup>7</sup>

### 全世界の人々に手を差し伸べる

大管長会は全世界に福音を宣べ伝えるために、デビッド・M・ケネディーを外交問題の特別顧問として召した。当時シカゴのステーキ会長会で働いていたケネディー兄弟はこの重大な責任を果たすうえで求められる社会的経験を豊富に有していた。ケネディー兄弟は国際間取引を頻繁に行う合衆国のある銀行の会長ならびに最高執行役員を務めた経験を持つ。また、合衆国財務長官、北大西洋条約機構（NATO）の大使、合衆国特別外交大使を歴任していた。特別顧問に任命されたケネディー兄弟はそれから数年間にわたって、教会に対して活動を禁じていた多くの国々の政府に働きかけて規制を取り除くための重要な役割を担うことになる。<sup>8</sup> ケネディー兄弟は、通常の宣教師がまだ活動を許されていない国々において、年輩者の夫婦を教会の特別の代表者として派遣する手配をしている。1977年にはポーランドにおいて教会の宗教法人格を取得し、社会的な認知を得るといふ偉業を成し遂げた。これによって、キンボール大管長がワルシャワを訪問する道が開かれ、大管長は「主の業が進められるようにポーランドの地を奉献し、国民を祝福した。」<sup>9</sup>

この時期に、教会の担当者はイスラエル政府と折衝を行っていた。その結果、教会はエルサレムの旧市街地を見渡すことのできるオリブ山の西斜面に約2万平方メートルの広さのオーソン・ハイド記念公園を造る許可を得ている。<sup>10</sup>

「デゼレツ・ニューズ」(Deseret News)の厚意により掲載



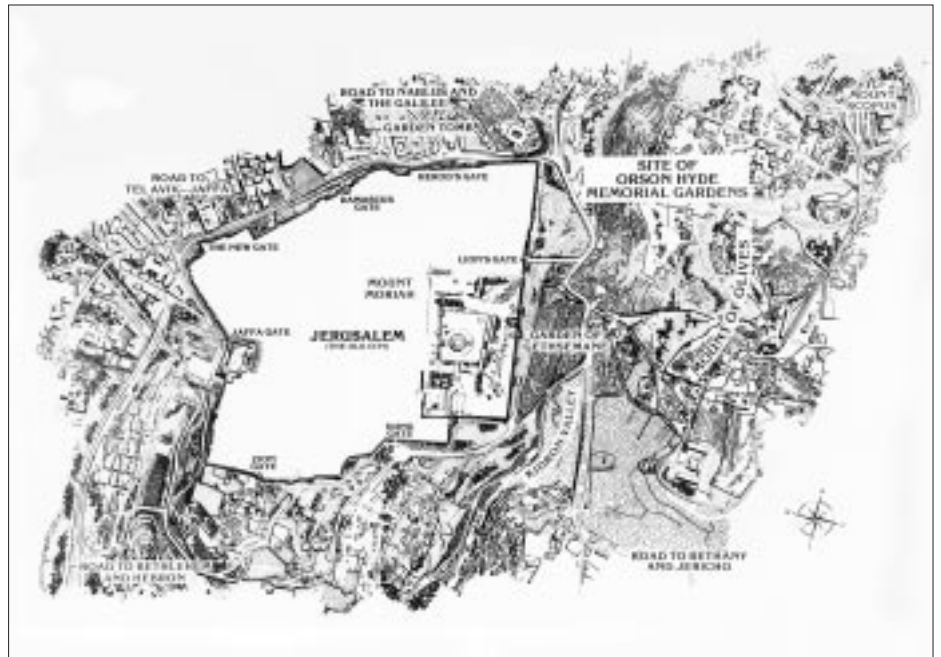
スペンサー・W・キンボール大管長はワルシャワ滞在中の1977年8月24日に福音を宣べ伝える地としてポーランドを奉献した。

1979年10月24日スペンサー・W・キンボール大管長はオーソン・ハイド記念公園を奉献した。これは1841年10月24日にオリブ山に登り、イスラエルがその住民の集合の地となるよう願い求めて奉献の祈りをささげたオーソン・ハイドをたたえるものである。建設に先立って、奉献の祈りがささげられた場所を示す看板が立てられた。



## 教会の歩みを速める

エルサレムの地図



キンボール大管長はすべての青年が宣教師の召しを受けるためのふさわしさを身に付け、また伝道に備えることの大切さを力説した。1976年に教会言語訓練伝道部がブリガム・ヤング大学の近くに新しく建設された数棟のビルに移転した。1978年にはソルトレーク・シティー伝道本部が閉鎖され、おもに合衆国とカナダ出身の英語を母国語とする宣教師は「宣教師訓練センター」と改称されたこの新しい施設で指導を受けることになった。1978年以降、ブラジル、チリ、メキシコ、ニュージーランド、英国、日本をはじめとするほかの国々でも宣教師訓練センターが設立されて、これらの地域で伝道の召しを受けた地元の若い男女に訓練を実施している。

各大学で結成されたグループが公演を行って、教会の評判を高めるといった活動が行われている。1978年、ブリガム・ヤング大学のミュージカルグループはポーランドとソビエト連邦を訪問して、音楽とダンスの公演を行った。このグループは公演旅行の数週間前から訪問先の人々の文化と言葉を勉強し始めた。その国の言葉で公演を進行し、公演が終わった後で人々と個人的な話し合いを持つためである。彼らは良い模範を示し、人々に愛情を示すことによって福音の精神を伝えたいと考えていた。両国における公演はともに好評を博した。公演の様子はビデオに収録されて後に全国に放送されている。翌年、同じようなグループが今度は中国を訪問する準備をしていた。中国では国家最高級のホールで行われた公演から工場内での即興公演に至るまで、各地で熱烈な歓迎を受けた。その後もこうした公演旅行は継続され、全世界に親善の輪を広げている。<sup>11</sup>

ブリガム・ヤング大学のスポーツチームも教会の友達作りに貢献している。1984年の秋、ブリガム・ヤング大学のフットボールチーム「BYUクーガーズ」は合衆国のメジャー大学フットボールリーグで唯一負けを喫しなかったチームとなり、シーズンが終わると全国の大学コーチおよびスポーツ記者から全米一のチームに選ばれた。このため、全国の出版物にブリガム・ヤング大学の選手、大学、宗教について

## 時満ちる時代の教会歴史

好意的な記事が数多く掲載されることになった。

教会が国際的な性格を帯びてきたことは、合衆国とカナダ以外の国から召される中央幹部の数が増えていることから理解することができる。スペンサー・W・キンボール大管長により、七十人第一委員会に召された人々は次のとおりである。まず、ヨーロッパから5人、ベルギーからチャールズ・A・ディディエ長老、オランダからヤコブ・ディヤガー長老、ドイツからF・エンツィオ・ブッシュェ長老、英国からデレク・A・カスパート長老、スイスからハンス・B・リンガー長老である。東洋人を先祖に持つ最初の中央幹部としてアドニー・Y・小松長老、アジアから最初の中央幹部として菊地良彦長老、南アフリカから2人、アンヘル・アブレア長老とエリオ・R・カマルゴ長老である。以上の指導者は、それぞれの地域で教会が直面している国際的な問題や機会を、教会の管理評議会に対して直接報告し、注意を喚起することになった。

### あらゆる人種の人々に神権を授ける

スペンサー・W・キンボール大管長が1978年に受けた啓示ほど、全世界に福音を宣べ伝えるうえで大きな影響をもたらした出来事はほかにないと思われる。それはあらゆる人種のふさわしい男性に神権が授けられるというものであった。中央幹部は神殿における定例の集会でこの件について長い間話し合ってきた。さらに、キンボール大管長は導きを求めるためしばしば神殿に入っていた。特に、一人になることができる土曜日と日曜日には神殿に足を向けていた。「わたしは確認が欲しかったのです」と大管長は説明している。<sup>12</sup>

1978年6月1日、神殿における月例の集会に出席するために、ほとんど全員の中央幹部はいつものように断食して集まった。キンボール大管長は3時間の集会が終わると、副管長と十二使徒に対してそのまま残るように言った。大管長会と十二使徒会だけになると、キンボール大管長はすべての人種のふさわしい兄弟たちに神権を授ける件について話し始めた。大管長は是認か否認かのはっきりした答えを求めている。ブルース・R・マッコスキー長老はそのときの模様を次のように述べている。「そこでキンボール大管長は、懸案の事項に対する兄弟たち一人一人の気持ちと見解を述べるようにと言いました。わたしたちは全員が自由闊達かつたつにしかもかなりの時間をかけて意見を述べました。一人一人が自分の見解を述べ、心にある思いを明らかにしました。この評議会には驚くべきほどの一致、一体感、調和がみなぎっていたのです。」<sup>13</sup>

2時間に及ぶ話し合いの後に、キンボール大管長は全員が一つになって正式な祈りをささげることを提案し、へりくだった態度で大管長自身が祈りの言葉を述べると申し出た。キンボール大管長は次のように述べている。

「わたしは、もしそれが正しくないのであれば、もし主がこの変更を教会で実施することをお望みでないのであれば、わたしは生涯、その指示を忠実に守ること、そして主がこの変更を望んでおられるならばたとえ全世界を敵に回すことになってもその指示を守るために闘うことを、主に申し上げました。

.....わたし自身は大きな苦悩を経験していました。なぜならば、わたしは黒人は

## 教会の歩みを速める

神権を授けられるべきでないという思想の中で育てられていたし、この思想を守るためには命を賭しても闘い抜く考えでいたからです。しかし、わたしに与えられたこの啓示と確認は、疑問を差し挟む余地のないほどはっきりとしたものでした。」<sup>14</sup>

十二使徒のマッコンキー長老はさらにその集会での出来事をこのように説明している。「この祈りをささげているときに、啓示がもたらされました。主の御霊はわたしたち全員に力強く降り、わたしたちは、ペンテコステの日やカートランド神殿の奉献式で起きたと同じようなものを感じたのです。永遠に続く時間のただ中から、神の声は御霊の力によって神の預言者に語りました。……そしてわたしたち全員が同じ声を聞き、同じメッセージを受けて、与えられた言葉が主の御心であり、主の思いであり、主の声であることの正真正銘の証人となったのです。」<sup>15</sup>

忠実な末日聖徒の黒人は、長い間待ち焦がれていた神権の聖任、伝道の召し、神権指導者として働く召し、そしてもちろん神殿における永遠の祝福を受けた。彼らは歓喜の声を上げた。この啓示が与えられてから5か月後の1978年11月に、大管長会はアフリカの黒人国家であるナイジェリアとガーナで伝道活動を開始するために2組の経験豊かな夫婦を招いた。後に、アフリカのほかの国々、ならびにブラジル北部とカリブ海諸国の黒人社会においても伝道活動が開始された。

## 警告の声

スペンサー・W・キンボール大管長は主の預言者として、様々な問題について警告の声を発する必要性を日増しに強く感じていた。例を挙げると、大管長に召された後の最初の2回の総大会において、キンボール大管長は、賢明な政治指導者を選び、憲法に従う政治上の責任が聖徒にあることを再確認している。大管長は家屋と農場を清潔にして、壊れている箇所を修繕すること、家庭菜園を作り、食糧を貯蔵し（法律上、禁止されている国を除いて）、無駄をなくすようにと聖徒に勧告した。労働、勤勉、質素儉約の美德を培うように強く求めた。安息日を清くすること、主の名をみだりに唱えてはならないことを訴えた。トランプ遊びに興じることをないように勧告した。また、聖徒が背教者グループとかかわりを持つことをないように警告した。

キンボール大管長の教えの多くは家族に焦点を当てている。大管長はすべての若い末日聖徒が結婚して、子供をもうけることを奨励した。大管長は次のように述べている。「わたしたちは、あらゆる人が真の幸福の基礎として、正常な結婚を受け入れるようにと呼びかける。」キンボール大管長は離婚件数が増加していることを憂慮していた。家族が崩壊するおもな原因は利己心にあること、また、墮胎は利己心から派生する罪悪であると考えていた。「計画的墮胎の恐ろしい罪は正当化し難い。…わたしたちは墮胎を罪の中でも最も重いものとし、断固、民に警告するものである。」

キンボール大管長はこのように宣言している。「教会は、幻覚剤および類似の薬物を常用すると、薬物中毒や、肉体的、精神的な欠損を来したり、道徳規準を低下させたりするので、誤用、悪用することに一貫して反対してきた。」

また、キンボール大管長は、家族の幸福を脅かす大きな原因は肉体を非道徳的に



## 時満ちる時代の教会歴史

あるいは不正に扱うことにあると考えた。「人の体は神の霊の子が宿る神聖な幕屋であり、不当な扱いや神聖さを汚す行為は、ただ痛恨と後悔をもたらすのみである。したがって、汚れなく、清くありなさい、と勧告したい。」大管長は、同性愛、男性と女性の区別をあいまいにするいわゆる「中性化」、そして男女が結婚をしないで同棲生活どうせいに入る習慣が罪であって、これらに関与することのないようにと警告している。キンボール大管長はこのような罪悪を厳しく非難したが、こうした誘惑に陥ってしまった人々には希望を与える言葉を投げかけている。大管長に召される数年前に出版され、現在に至るまで教会員に広く愛読されている著書『赦しの奇跡』は、以上の事柄をテーマとした書物である。

キンボール大管長は特に母親の役割の大切さを強調した。「母性は神性に近い。それは人にできる最も高く最も神聖な務めである。その聖なる召しを尊ぶ女性は、天使に次ぐ者である。」<sup>16</sup> また、両親は、誉れ、高潔さ、正直などの徳を含む、イエス・キリストの福音を子供たちに教える責任があることを力説している。「家庭は教育の場である。すべての父親は息子に、母親は娘に教えるべきである。その後子供たちが受けた助言を無視したとしても、子供たちには何ら弁解の余地がない。」<sup>17</sup>

家族に関連する問題が幾つか論議の対象となっていた。特に合衆国では、性別を理由に社会においての様々な機会を拒否されたり、差別されることのない、法律の下での公平な扱いを求める男女の平等権修正案が提起され、大きな社会問題となっていた。当初、これら法律として規定することに何ら問題はないと考えられていたが、検討を重ねるに従って幾つかの問題が出てきた。教会は女性に対して男性と平等の機会を与えることに賛成したが、1976年に大管長会は修正案の法制化に反対する意向を表明した。

「修正案は人類の基本的な単位である家族を揺るがすことになるでしょう。……

平等権修正案の条項には、現在の法律の下で女性のために積み上げられてきた多くの利益を一挙になくしてしまう可能性があるとする法律の専門家の意見もあります。」<sup>18</sup> 大管長会はまた、修正案によって女性特有の役割が失われてしまうことを恐れた。末日聖徒の大多数は大管長会の意向に賛成したが、強硬意見を主張する少数の聖徒のグループは、この声明が女性の権利を侵害するものだとして声を大にして叫び、教会の方針の受け入れを拒否するだけでなく、総大会中にデモ行為を展開した。これに対して大管長会の声明を支持する末日聖徒は、修正案の廃棄に向けて、合衆国の各地でグループを結成して国会議員に働きかけを行ったり、その他の方法で大衆の意見をまとめたりする活動を実施した。

結局、平等権修正案は法制化期限の1981年までに承認されなかった。しかし、女性の役割を見直そうとする社会的傾向は依然として高まっていた。全国に幅広く読者を持つ雑誌には、家庭を離れて職業を持つ女性の成功例をことさら採り上げて、女性がこれまで携わってきた家事を屈辱的な仕事であると決めつける記事が登場した。教会指導者はこうした主張が末日聖徒の女性たちにも影響を与えていることを承知していた。そこで、教会は1978年から、秋の総大会に先立って女性のための年次集会を開催することにした。ソレトレーク・タバナクルで開かれたこれらの集会の様子は、男性のための神権部会と同じように、合衆国全域とほかの国々の集会所

## 教会の歩みを速める

で閉回路により中継放送が行われている。スペンサー・W・キンボール大管長は第1回の集会で、自己を改善するための計画を立て、成長と自己実現の努力をするよう強く求める話をしている。

「わたしたちは、姉妹たちに聖文の研究者になっていただきたいと考えている。これは男性も同様である。……

……あなたが個人として持っている価値を決して疑ってはならない。……

女性の役割は、退屈で労力だけが果てしなく求められる仕事でしかないとか、家に閉じ込められているとか、様々なことが言われている。しかしこれらの表現は正しくない。……新たな生命をもたらすこと、一人一人の子供を育てるというチャレンジに立ち向かうこと、これらは神聖な務めである。結婚は夫婦が共同して築き上げるものである。どうか夫婦お互いが力を出し合って立派な共同事業者になっていただきたい。」<sup>19</sup> 多くの女性が自分自身あるいは家族のために生計を立てるといった境遇に立たされることを想定して、教会指導者は姉妹たちに対して、教育を受ける機会を活用するように、それと同時に家庭における母親としての第一の役割に対する見識を失うことのないように勧告した。

1978年、イリノイ州ノーブーで行われた扶助協会の女性の像の奉献には2万人以上の教会員が参加した。約8,100平方メートルの公園には13のブロンズ像が置かれている。「それぞれの像は女性が及ぼす影響力を表している。……

キンボール大管長はこの彫像の庭を称賛して、こう語った。『この庭園を散歩すると、女性たちが世界に及ぼした偉大な、力強い影響力に思いをはせることができます。』<sup>20</sup>

13の等身大の像から成る扶助協会の女性の記念碑はノーブーの末日聖徒イエス・キリスト教会訪問者センター裏手の美しい公園内に展示されている。記念碑の奉献は1978年6月28日から30日まで3日間にわたって行われた。



## 時満ちる時代の教会歴史

### 標準聖典

スペンサー・W・キンボール大管長の指導の下で、新たに3つの事項が聖典に追加された。これは今世紀、4分の3が経過した時点で、初めて行われた聖典への追加である。

このうちの二つは、教義と聖約第137章と第138章となった、死後の生活に光を投げかける啓示である。これらの章の重要性についてブルース・R・マッコスキー長老は次のように述べた。「いずれの示現も内容はすでに広く知られていますし、示現によって宣言されている事柄はそのとおりに行われています。また啓示で明らかにされた原則は広く教えられています。しかし聖徒の公式の聖典に加えられたこの瞬間から、二つの啓示は新しい戒めとなったのです。言い換えれば、死者の救いという、わたしたちの心を大きく開かせる教義が要求するすべてのことを述べかつ行うようにとの神の新しい宣言となったのです。」<sup>21</sup>

これらの啓示は、死者の身代わりの儀式に関する教義的な根拠を詳しく説明している。これらの啓示が聖典に付け加えられたことによって、過去に例がないほど多くの神殿が建設されることになり、その結果、神殿の活動はますます活発に行われるようになった。これがキンボール大管長が教会を管理した時代の末期の特徴である。

キンボール大管長が実施した聖典に関連する第2の大きな事業は、聖典の新しい版の出版である。1979年に英語の欽定訳聖書が新しい版として、出版された。『聖書』の内容が変更されたわけではないが、注の方法の改良、ジョセフ・スミス訳からの抜粋、ほかの標準聖典の関連聖句の相互参照、章の見出し文の充実、598ページに及ぶ用語索引と項目索引、末日の啓示を通していっそう意味を明確にされている194ページの聖書辞典、地名辞典、地図が加えられている。2年後には、『モルモン書』『教義と聖約』『高価な真珠』の合本が新しい版として出版され、『聖書』と並ぶことになる。合本にも多くの改訂が加えられている。

これらの聖典の出版までには、10年以上に及ぶ懸命な作業が背後に隠れている。トーマス・S・モンソン長老、ポイド・K・パッカー長老、ブルース・R・マッコスキー長老の3人で委員会が構成され、彼らは絶えず作業に関して指示を与えた。また、



ポイド・K・パッカー長老は新しい聖典について次のように語った。「ユダの木、すなわち記録（『新旧約聖書』）それにエフライムの木すなわち記録（『モルモン書』）イエス・キリストについてのもう一つの証）は、このような過程を経て一つに合わされたのです。一方を読めば他方も読むことになり、一方から得た知識は他方を読むことによってより明確なものになります。2本の木は、ほんとうにわたしたちの手の中で一つになりました。こうして今日、エゼキエルの預言が成就したわけです。」<sup>22</sup>

1982年10月15日、教会はレイメンズ・ナショナル聖書委員会のマックス・チョブニック副会長から、『聖書』にかかわる顕著な業績を残したとして表彰された。授賞式にはゴードン・B・ヒンクレー副管長が出席した。



## 教会の歩みを速める

マービン・J・アシュトン長老とハワード・W・ハンター長老も一時この委員会に参加していた。委員会はブリガム・ヤング大学の3人の宗教学教授で構成される実務委員会の支援を受け、奉仕を申し出た数百人の人々の協力によって支えられた。この事業に参加した人々は、必要なときに必要な専門知識を持った人が現れて、作業を前進させることができたことを証している。パッカー長老は優れた学習資料を加えたこれらの聖典の重要性について述べている。

「年月を経るに従って、この聖典に触れる人々は、次々と主イエス・キリストを知って主の御心に従う忠実なクリスチャンとなっていくことでしょう。

.....彼らには、過去の人々には到底なし得なかった研究ができるのです。.....

世代を経るにつれて、この業はキンボール大管長が教会を管理した時代の輝かしい業績として、史上に残るようになるでしょう。.....

その参照聖句は4つの標準聖典からのものであり、この標準聖典には世界史上一度も収集し得なかったほどの量の主イエス・キリストの使命と教えに関する聖典から得た情報が収められているのです。」<sup>23</sup>

キンボール大管長とほかの教会指導者は、教会の拡大と並行して生じた全世界の聖徒の必要を満たす手段を次々に実施したのであった。

## 注

1. "First Presidency Meets with News Media" *Church News* 「大管長会、報道機関と会見する」『チャーチニュース』1974年1月5日付、14
2. Conference Report 『大会報告』1943年10月、15 - 16で引用
3. スペンサー・W・キンボール, *One Silent Sleepless Night* 『ある眠れない静かな夜』(Salt Lake City: Bookcraft, 1975), 35, 51
4. ラッセル・マリオン・ネルソン, *From Heart to Heart* 『心と心を通わせて』(Salt Lake City: Russell M. Nelson, 1979), 164 - 165
5. 「教会史上に残る特別な日」『聖徒の道』1978年2月号、38で引用
6. 「全世界に出て行って」『聖徒の道』1974年11月号、482 - 483
7. 「教会史上に残る特別な日」『聖徒の道』1978年2月号、39で引用
8. "Diplomatic Affairs Consultant Appointed" 「外交問題顧問、任命される」『チャーチニュース』1974年4月13日付、17参照
9. "Poland Dedicated by President Kimball" 「キンボール大管長、ポーランドを奉獻する」『チャーチニュース』1977年9月17日付、3
10. "Gardens to Blossom in Israel" 「花を咲かせるイスラエルの庭園」『チャーチニュース』1977年10月29日付、3参照
11. "Performers Tour Russia" 「ロシア公演」『チャーチニュース』1978年7月15日付、5; "Y Students a Success in China" 「ブリガム・ヤング大学学生、中国公演の成功」『チャーチニュース』1979年8月11日付、9参照
12. "News' Interviews Prophet" 「預言者と会見するニュース記者」『チャーチニュース』1979年1月6日付、4参照
13. ブルース・R・マッコンキー "The New Revelation on Priesthood" *Priesthood* 「神権に関する新しい啓示」『神権』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1981), 27
14. 「預言者と会見するニュース記者」4
15. マッコンキー 「神権に関する新しい啓示」128
16. 「神の業を清く押し進める」『聖徒の道』1974年8月号、371 - 373で引用
17. 「神は欺かれず」『聖徒の道』1975年2月号、82で引用
18. "First Presidency Opposes ERA" 「大管長会は権利平等修正案に反対する」『チャーチニュース』1976年10月30日付、2
19. "Women Urged to 'Reach for Stars'" 「女性たちは、『星に手を伸ばす』よう奨励される」『チャーチニュース』1978年9月23日付、3, 10
20. "Nauvoo Park Honors Women" 「女性をたたえるノーブー公園」『チャーチニュース』1978年7月8日付、3

## 時満ちる時代の教会歴史

21. 「新しい戒め あなた自身と先祖を救いなさい」『聖徒の道』1977年8月号，353
22. 「聖典」『聖徒の道』1983年1月号，92で引用
23. 「聖典」『聖徒の道』1983年1月号，92 - 94で引用

# 世界中の教会の必要を満たす

年表 年代	重要な出来事
1975	補助組織の大会が廃止される
1976.10	中央幹部定員会として七十人第一定員会が組織される
1978	系図人名抄出プログラムが導入される
1979	ステーキ大会が年2回となる
1980	集会の統合化スケジュールが導入される
1982	教会員数が500万人を超える
1984	地域会長が任命される
1985.11.5	スペンサー・W・キンボール大管長、90歳で死去する

スペンサー・W・キンボール大管長が大管長に召された1973年の年末現在で教会員数は332万1,556人に達していた。<sup>1</sup> キンボール大管長が管理する時代に入って教会の成長はさらに加速した。1980年代初頭には、毎年25万人以上の改宗者が生まれ、1982年に教会員数は500万人を超えた。教会はこの10年間に急速な成長を遂げたことにより、大きな課題に直面することになる。すなわち、中央幹部は全世界で急速に膨張する聖徒に対して効果的に接触を図るにはどうすればよいのか。多種多様な環境に置かれている会員たちの必要を満たすには、教会の活動をどのように適応させればよいのか。神殿の祝福を会員たちにもたらすにはどうすればよいのか。以上をはじめとする様々な課題に対応する手段と解決策が求められることになったのである。

## 七十人第一定員会が教会の管理定員会として組織される

教会員の急激な増加に伴って、ステーキと伝道部の数も増加した。これは中央幹部にとって、出席すべきステーキ大会の数が増え、監督すべき伝道部の数が増えるということになる。教会の拡大に伴うチャレンジに対応するために、1941年に5人の大祭司が十二使徒補助として召された。その後も教会は成長を続けたため、順次十二使徒補助が召されていった。こうして1975年までに召された十二使徒補助は23人になっていた。この間、七十人第一評議会を構成する7人の中央幹部の責任範囲も広げられていた。これらの七十人は、大祭司を聖任したり、ステーキ会長を任命したりするなどという中央幹部として果たすべき責任が増えてきたため、1961年にデビッド・O・マッケイ大管長は彼らを大祭司の職に聖任することを発表した。<sup>2</sup> しかしながら、七十人第一評議会には、ステーキ七十人定員会の会員だけを召すという慣例はその後もしばらく続けられていた。

1975年、スペンサー・W・キンボール大管長は「主の業の中で特に伝道の業に携わる」<sup>3</sup> ために、七十人第一定員会を中央幹部定員会として組織する時機が到来したことを発表し、7人の会長に加えて、3人の定員会会員を召した。この3人は全員、召しを受けたときに七十人の職にあった。1976年4月の総大会において、さらに4人が追加されたが、このとき、4人中3人は大祭司であり、1人は長老だった。そして大管長会は、七十人第一定員会の会員が十二使徒補助と同じ権能を持つことを発表した。

キンボール大管長は1976年10月の総大会において中央レベルにおける教会指導者の統合を発表した。ここで大管長会は次のような考えを持っていることを明らかにした。「全十二使徒補助を七十人第一定員会会員として召すべきである」という靈感を受け、

## 時満ちる時代の教会歴史

……この結果……第一定員会会員は総勢39人となる。……

この異動によって、啓示された3つの定員会（大管長会、十二使徒定員会、七十人第一定員会）が主が啓示されたとおりに設置されたことになる。以上の定員会は、現在教会に課せられている多岐にわたる任務を効果的に処理し、御業の急速な進展への対応を可能にするものである。そしてひいては、主が再びこの地上を訪れ、主の教会と王国を直接管理される日に向かって備えをなすものとなるであろう。」<sup>4</sup>（教義と聖約107：28も参照）その後、数年間にわたり総大会が開かれる度に、七十人第一定員会の会員が召され、彼らは教会の管理上重要な役割を担った。

### 全世界の教会員との接触を図る

このようにして七十人第一定員会は教会本部における責務を果たすことになった。一方、教会は全世界に散在する教会の地方ユニットとのきずなを強めるための手段を講じる必要があった。そして、教会と地方ユニットとの間に、2段階の管理組織が設けられた。

ステーキは福祉生産事業の調整を図るために1936年から地区単位にまとめられている。1960年代に入って、地区の機能する範囲が拡大され、さらに中央幹部の指示の下で働く地区代表が召されて、教会管理上重要度を増してきた地区を監督することになった。同じく1960年代に伝道部は地域単位にグループ化され、中央幹部の直接の監督下に置かれることになった。こうして1966年までに、11人の中央幹部が合衆国を離れ、現地に住んで地域を監督することになった。

1984年には重要な改革が実施された。世界が13の広範囲な地域に分割され、各地域は地域会長会によって管理されることになった。地域会長会を構成する3人は七十人第一定員会の会員が召された。この変更は地域レベルでの教会管理体制を強化することにつながっている。地域会長会を構成する3人の中央幹部は各々の知識と経験に基づいて、世界各地に住む聖徒たちの多種多様な必要と環境に即した決定を下すことができるようになったのである。スペンサー・W・キンボール大管長の第二副管長であったゴードン・B・ヒンクレー長老は「神の命令は変わることがない。しかし、教会は神の命令を成し遂げるために、成長の過程においては管理方法を必要に応じて調整できるものでなければならないことを力説した。」<sup>5</sup>

中央幹部は教会本部における各種の部門と委員会を運営する責任も有している。大管長会は1977年に、俗世にかかわる事柄を管理監督会の責任とし、宗務と霊的面にかかわる事柄を十二使徒会および七十人第一定員会の責任として、両者の間に一線を画すことを発表した。七十人第一定員会の会員は、教会の伝道、神殿、系図プログラムの日常業務を管理することをおもな責任とし、このほかに神権定員会および補助組織の活動を指示する各部門を管理した。七十人定員会がこの責任を引き受けることによって、十二使徒定員会は全世界の教会が必要としている事柄に広く目を向けることができるようになった。

中央幹部と全世界の聖徒たちを結ぶうえで重要な役割を果たしていたのが総大会である。しかしながら、地方の指導者を教会の本部へ集めるための教会の財政負担が次第に大きくなり、また教会指導者のメッセージを聞くために長時間旅行して参

## 世界中の教会の必要を満たす

加する大勢の人々をソルトレークタバナクルに収容することが難しくなってきた。このため、1971年から始められた地域大会が、頻繁に開かれるようになった。地域大会は通常、地域内の大規模な会議場やスポーツアリーナなどで開催されている。

ほとんどの地域大会には、地域内各地の小さな支部から数千人の人々が長距離を旅行して集まっている。彼らは大きな集会に参加することによって励ましを受け、また靈感あふれる指導者を直接見ることによって霊的な力を得ている。しかし、教会がさらに大きくなると、このような地域大会でさえも開催が困難になってきた。1980年代半ばから、地区大会または地区合同大会が一般的になり、少数の中央幹部が中央幹部を代表して出席するようになった。

キンボール大管長は1975年に、扶助協会、若い男性および若い女性、日曜学校が毎年教会本部において開催していた補助組織の大会を廃止することを発表した。こうして地方の指導者に対する指導は地区集会で実施されることになった。

同様に、総大会も1977年から日程を3日間から2日間に短縮された。一般大会は4月と10月の最初の週の土曜日と日曜日に開催されることになった。それまで、春の総大会は、教会が組織された記念日である4月6日を総大会の会期中に含めるのが伝統であったが、この決定は4月6日にこだわらないという意味である。また一般大会が週末に限定されたことにより、週日に仕事を休むことができないステーク会長をはじめとする指導者たちは総大会への出席が容易になっている。通常、中央幹部は総大会が開かれる週末の直前に当たる金曜日に地区代表のためのセミナーを開催している。

さらに地方レベルでは、年間に4回開催されていたステーク大会が1979年から2回に減らされることになった。これは「教会員がステーク大会に出席するための時間と旅行と金銭の負担を軽減するため」<sup>6</sup>の措置である。1980年代半ばから、十二使徒定員会の会員は個々のステーク大会よりも地区大会またはステーク合同大会に出席することが多くなった。

## 活動の簡素化

教会指導者は、聖徒に不必要な時間と金銭の負担をかけずに教会の目的を達成する手段を着々と進めていた。集会所の設計にも省エネルギー化すなわちコストの低減を追求する姿勢が表れている。中央幹部はまた、青少年の旅行や会員に負担となるような大がかりな活動を行わないよう地方の指導者に注意を促している。若い男性と若い女性はこれまで音楽、ドラマ、スピーチ、スポーツの分野で常任の指導者を召していた。1977年にこれらの指導者は解任され、代わってワード全体のこれらすべての活動を調整する活動委員会が設けられた。3人で構成されるこの活動委員会の目的は、「教会において、適切な芸術、文化およびレクリエーション活動を推進することである。」健康管理などのコンテストから音楽の演奏、演劇の上演に至る幅広い分野において、聖徒があらゆる面で進歩向上するための催しを計画する度に、特定の分野における才能を持つ人々が一時的に召されることになった。<sup>7</sup>

世界の末日聖徒の中には、周辺に教会員がわずか2、3家族しか住んでおらず、ユニットの大部分の会員が住んでいる地域から遠く離れた地域に住んでいる人々が数



## 時満ちる時代の教会歴史

多くいる。当然ながらこれらの家族は、規模が大きく十分な組織を備えたワードに所属している場合のようにすべてのプログラムを行うことはできない。このため教会は1978年に、スモールユニット・プログラムまたはベーシックユニット・プログラムを導入した。このプログラムは、単純な事柄から始めて徐々に進歩の道を進む必要がある開発途上地域においても実施された。発展する各段階でどの役員を召し、いずれの活動を実施すべきかを説明する特別な手引き書が出版された。まったく孤立して近隣に頼るべき教会員がいない地域に住む家族向けに与えられた指針では、どのような集会を開くべきかの指示が与えられている。これらの家族では、家庭で教会の集会を開き、家族全員が話や他の責任を順番に果たしている。

ポルトガルでは父親と執事の息子が二人で神権会を毎週開いている。東アフリカのある家族は幼い子供たちにいったん居間を出て、数分後に改めて「礼拝堂」に敬虔な気持ちで入るように教えている。このように孤立した状況に置かれている聖徒たちはほかの教会員との接触をこの上なく大切にしている。

転勤により北アフリカに家族全員で引っ越した家族が経験した出来事である。引っ越して間もなく、母親が日用品を買いに店へ出かけた。すると同じ北アメリカから来たと思われる夫婦が買い物をしているのに気づいた。そこで彼らは軽いあいさつを交わした。彼女は当時を思い起こして次のように述べている。「そのとき、息子は兄のBYUのロゴが入ったTシャツを着ていました。すると、その奥さんが『ブリガム・ヤング大学、もしかしてあなたがたは末日聖徒ではありませんか』と言いました。

『はい、そうです』と言うと、彼女は『実はわたしたちも末日聖徒です』と言いました。わたしたちは目に涙を浮かべながら、抱き合い、握手し、<sup>せき</sup>壇を切ったように話し始めました。わたしたちはまったく知らない人と、一瞬のうちに愛と友情を築き上げるモルモンの奇跡を経験したのでした。』<sup>8</sup>

このように孤立した状況に置かれている人々のために教会のプログラムと資料が開発されている。完全なステークが組織されている地域であっても、言語上の問題で大多数の教会員から孤立した状態に置かれている会員たちは、小グループを作り、この簡素化プログラムを実施している。スモールユニットのために特別に出版された6冊のテキストの一つである『福音の原則』は、教義の概要を説明する優れた書物として末日聖徒の間で愛読されている。孤立したユニットにおいて始められた簡素化プログラムは成功を収めた。これはまた、全世界的な資源不足により旅費や光熱費の急上昇を招いた社会的な問題への対応手段にもなっている。

神権会と日曜学校の集会は日曜日の午前中に開かれ、聖餐会は日曜日の午後または夕べに開かれるのが数十年間にわたって教会の慣習となっていた。女性のための扶助協会、子供のための初等協会、青年の教育と活動を実施する相互発達協会は週日に開かれてきた。ワードの基本的な集会である神権会、扶助協会、若い女性、初等協会、日曜学校、聖餐会は、1980年に再構築され、日曜日の午前もしくは午後の3時間単位の中で開かれることになった。長年にわたり日曜学校で行われてきた30分間の開会行事は廃止された。子供の日曜学校も統合策の一環として初等協会に併合された。週日に開かれる集会は、青少年の活動の夕べ、月1回の扶助協会のホームメ

## 世界中の教会の必要を満たす

ーキング、その他不定期に行われる活動だけとなった。

こうした措置によって教会員は集会に出席するために教会まで往復する回数が減り、また集会所に暖房や冷房を入れる日数が減少した。この方式には明らかに省エネルギー効果があり、当時は重要な問題であった。しかし、大管長会は家族に聖文を勉強したり、活動を行うための時間を与えるという長期的な展望に基づいた変更であることを説明している。聖徒たちはまた、地域社会の奉仕活動に積極的に参加するようにとの奨励を受けている。<sup>9</sup>

## 神殿事業の推進

1970年代は神殿の建設と神殿事業に関してかつてない大きな成長を遂げたが、これはやがて来るさらに大きな成長を遂げる時代の幕開けにすぎなかった。ワシントン神殿は1974年にキンボール大管長により奉獻された。同神殿にはエンダウメントを執行する部屋が6室あるだけでなく、上階に大きな神権者集会用のアッセンブリールームを有している。20世紀に建設された神殿で神権者集会用のアッセンブリールームを持つのはロサンゼルス神殿に次いで2番目である。1973年にアリゾナ神殿とセントジョージ神殿が改造工事のために閉鎖されている。これは映写装置を使用してエンダウメントを執行するための改造である。この改造工事は大がかりだったため、これらの二つの神殿の改造が完成し、オープンハウスが行われ、再奉獻されたのは1975年になってからであった。このように大がかりな神殿の改装が実施されたのは教会史上初めてのことであった。ハワイ神殿とローガン神殿にも同様の改造工事が実施され、1970年代後半に再奉獻された。

1975年には、新しく3つの神殿が建設されることが発表され、南アメリカで最初の神殿としてブラジルのサンパウロに、アジアで最初の神殿が日本の東京に、そして合衆国太平洋岸地域北西部で最初の神殿がワシントン州シアトルにそれぞれ建設されることになった。これらの地域に住む末日聖徒はこの発表を聞いて、長い間待ち焦がれていた神殿の建設が間近に迫ったことを心から喜んでいる。

「3月1日、スペンサー・W・キンボール大管長がサンパウロに神殿が建設されることを発表したとき、ブラジルの地域総大会に出席していた聖徒たちの感動は大きな波のようにうねりながら会場を支配していった。

『重大な発表があります』とキンボール大管長は開会の祈りの前に最初の事務事項を話し始めた。……

『ブラジルに神殿を建設することになりました』と大管長は発表した。

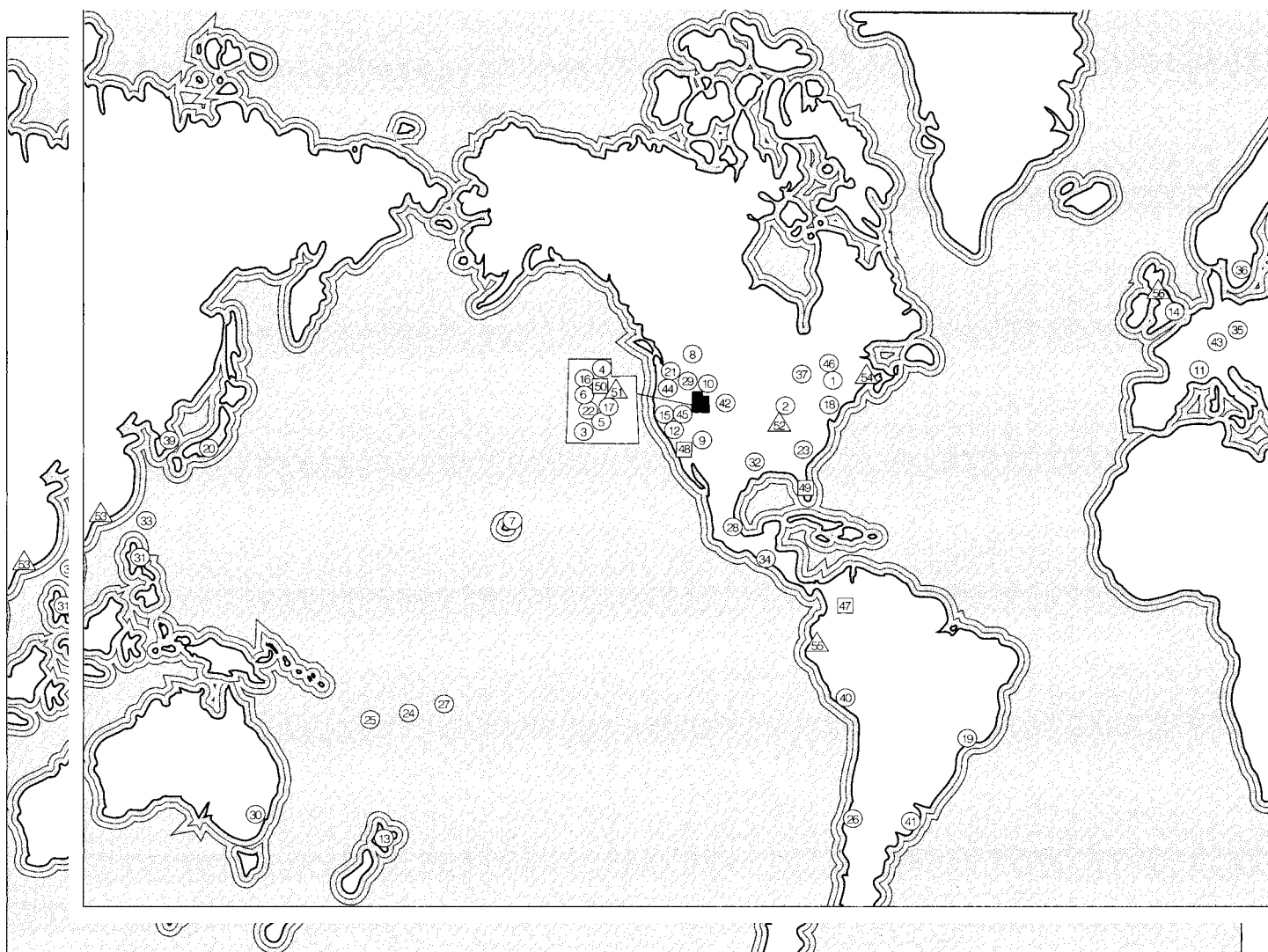
聖徒たちは驚きのあまり、息をのんだ。

『サンパウロに神殿が建設されます』と大管長は言葉を続けた。

すでに多くの人々の目に涙が浮かんでいた。そして、喜びのあまり周囲をはばかり泣き始めた。<sup>10</sup>

1970年代が終わりに近づくにつれて、神殿建設のペースは加速された。1977年にメキシコシティー神殿の計画が発表され、翌年にはソルトレーク盆地の南部にジョーダンリバー神殿が建設されることを教会指導者は明らかにした。1980年には一挙に7つの新しい神殿が建設される発表があった。これほど多くの神殿建設が発表され

## 時満ちる時代の教会歴史



### 世界の神殿 奉献された日付順

1. カートランド神殿, 1836年3月27日
2. ノーブー神殿, 1846年4月30日
3. セントジョージ神殿, 1877年4月6日
4. ローガン神殿, 1884年5月17日
5. マンタイ神殿, 1888年5月17日
6. ソルトレーク神殿, 1893年4月6日
7. ハワイ神殿, 1919年11月27日
8. アルバータ神殿, 1923年8月26日
9. アリゾナ神殿, 1923年10月23日
10. アイダホフォールズ神殿, 1945年9月23日
11. スイス神殿, 1955年9月11日
12. ロサンゼルス神殿, 1956年3月11日
13. ニューゼaland神殿, 1958年4月20日
14. ロンドン神殿, 1958年9月7日
15. オークランド神殿, 1964年11月17日
16. オグデン神殿, 1972年1月18日
17. プロボ神殿, 1972年2月9日
18. ワシントン神殿, 1974年11月19日
19. サンパウロ神殿, 1978年10月30日
20. 東京神殿, 1980年10月27日
21. シアトル神殿, 1980年11月17日

たのは教会史上初めてのことである。合衆国南西部で最初のジョージア州アトランタをはじめとして、アルゼンチン、チリ、オーストラリア、トンガ、タヒチ、西サモアの7つである。キンボール大管長は次のように言明した。

「わたしたちは教会史上で最も多くの神殿を建設する時代に突入しています。...」

わたしたちはすべての教会員が世界中の最寄りの神殿において、神殿で執行される教会の神聖な儀式にあずかることができる日が到来するのを待ち望んでいます。」<sup>11</sup>

この期待どおりに、教会指導者は1980年代初頭に、南アフリカとドイツ民主連邦すなわち東ドイツ（当時）をはじめとしてさらに多くの神殿が建設されることを発表した。

1983年には過去に例のない、一挙に6つの神殿の奉献式が行われた。1984年半ばには、21の神殿が建設中または計画中という状況に達していた。これらの神殿が完成すると神殿の数は総計47となり、キンボール大管長が教会の管理を始めた時期の15と比較すると大幅な増加である。神殿が同時に建設された過去の記録は、1880年代のソルトレーク、ローガン、マンタイの3か所であった。さらに教会史上初めて、す

## 世界中の教会の必要を満たす

22. ジョーダンリバー神殿, 1981年11月16日
23. ジョージア州アトランタ神殿, 1983年6月1日
24. サモア・アピア神殿, 1983年8月5日
25. トンガ・ヌクアロファ神殿, 1983年8月8日
26. チリ・サンティアゴ神殿, 1983年9月15日
27. タヒチ・パペーテ神殿, 1983年10月27日
28. メキシコシティ神殿, 1983年12月2日
29. アイダホ州ボイシ神殿, 1984年5月25日
30. オーストラリア・シドニー神殿, 1984年9月20日
31. フィリピン・マニラ神殿, 1984年9月25日
32. テキサス州ダラス神殿, 1984年10月19日
33. 台湾・台北神殿, 1984年11月17日
34. グアテマラシティ神殿, 1984年12月14日
35. ドイツ・フライベルク神殿, 1985年6月29日
36. スウェーデン・ストックホルム神殿, 1985年7月2日
37. イリノイ州シカゴ神殿, 1985年8月9日
38. 南アフリカ・ヨハネスブルク神殿, 1985年8月24日
39. 韓国・ソウル神殿, 1985年12月14日
40. ペルー・リマ神殿, 1986年1月10日
41. アルゼンチン・ブエノスアイレス神殿, 1986年1月17日
42. コロラド州デンバー神殿, 1986年10月24日
43. ドイツ・フランクフルト神殿, 1987年8月28日
44. オレゴン州ポートランド神殿, 1989年8月19日
45. ネバダ州ラスベガス神殿, 1989年12月16日
46. オンタリオ州トロント神殿, 1990年8月25日

### 建築中

47. コロンビア・ボゴタ神殿
48. カリフォルニア州サンディエゴ神殿
49. フロリダ州オーランド神殿
50. ユタ州バウンティフル神殿

### 建設発表された神殿

51. ユタ郡 (正式名未定)
52. ミズーリ州セントルイス神殿
53. 香港神殿
54. コネティカット州ハートフォード神殿
55. エクアドル・グアヤキル神殿
56. イギリス・プレストン神殿

末日聖徒は将来にわたって多くの神殿を建設する計画を進めている。神殿の事業は福千年の間に行う最も大切な事柄であるとわたしたちは信じている (スเปนサー・W・キンボール, Conference Report 『大会報告』1979年3月 - 4月, 3 - 8参照)。

べての大陸に神殿が存在することになった。

長年にわたって多くの家族が生涯でただ一度、最寄りの神殿に参入するために財産のほとんどを犠牲にしてきた。最寄りの神殿とはいえ、長期の旅行を強いられた聖徒も多い。タヒチの家族がニュージーランド神殿まで旅行するにはほぼ1年分の収入に相当する費用が必要とされた。コスタリカで靴屋を営むある家族は、自動車と商品である靴をすべて売って、妻と7人の子供たちとともにアリゾナ神殿まで行き、家族全員が永遠の結び固めを受けている。この家族は往復1万2,900キロの旅の間、夜は行く先々の教会に立ち寄って文化ホールで寝泊まりし、国境を越えて新しい国に入る度にバスを乗り換えなければならなかった。しかしながら、これらの聖徒は神殿でしか得られない神聖な祝福を熱心に求めていたために、こうした犠牲をむしろ喜びとしてささげたのである。

韓国など幾つかの国々の政府は夫婦が同時に国外に出ることを禁じていた。したがってこれらの国の聖徒は夫婦の結び固めができない状態に置かれていた。一方、手持ちの資金に限られているために、どの子供を残し、どの子供を一緒に連れて行って結び固めを受けるかという難しい判断を迫られた両親もいた。しかし世界の各地に神殿が建設され始めると、このような問題は次第に姿を消していった。

神殿が次々に建設されたために、系図に関する情報を収集する方法も大きく改善された。系図探求にコンピューターは欠かせない手段になっていた。1961年に神殿の儀式のために多くの人名が必要とされたとき、系図協会の職員は教区記録や市民の記録から重要な情報を抄出する作業を始めている。これらの情報は直ちにコンピューターによりアルファベット順に並べ替えられて印刷された。1969年初頭から、教会員はこれまで家族単位でしか人名を提出することができなかったが、コンピューター処理が可能になったため、個々の人名を提出できるようになった。この緩和措置によって聖徒たちは系図作業を早く進めることができようになり、教会が所有するコンピューターの国際系図索引に以前よりも毎年数千人以上多くの人名が登録されることになった。

1970年半ばには毎年300万人以上の死者にエンダウメントが執行されるようになったが、末日聖徒が自らの系図探求によって提出した人名は100万にも達していなかった。200万以上の人名は教会本部の系図部職員による記録作成プログラムから供給されていた。中央幹部は神殿で執行される儀式数を増やす必要を感じていたが、それ以上に、聖徒たちが神殿の儀式のために人名を提出する責任に対して意識を高める必要性に関心を向けていた。スเปนサー・W・キンボール大管長は次のように述べている。

「わたしは、生者への伝道と同様に、死者のための神殿活動も急ぐ必要があると感じている。なぜならば、この二つは基本的に同じだからである。わたしは先日中央幹部の兄弟たちに話したが、死者のためのこの業のことがいつもわたしの心を離れない。

大管長会と十二使徒評議会は先ごろ、この非常に大切な業を早急に推し進めるためにはどのようにすればよいかについていろいろと検討を加えた。そして、二つの大切なプログラムを強調することになった。

## 時満ちる時代の教会歴史

第1に、教会員はすべて個人の歴史を書き、家族の行事に参加する。またわたしたちは4代家族の記録プログラムの重要性をここで再び強調し、このプログラムに関する責任を個人と家族の双方に直接課したいと思う。……

第2に、系図記録から人名を抄出するプログラムを実施する。教会員は2マイル行く精神をもって、この抄出プログラムに従事し、奉仕するようになっていただきたい。このプログラムは地元の神権指導者が管理し、運営する。」<sup>12</sup>

何人かの教会員が個々に同じ記録を探すために果てしない時間をかける方法は終わりを告げた。原記録からすべての人名を抄出することができるようになったのである。これらの人名は検索が容易に行えるように、コンピューターによってアルファベット順に並べ替えられた。この抄出プログラムに聖徒たちが参加することによって、各神殿地区は神殿の儀式のための人名を地区内で供給するという目標に近づくことができるのである。神殿の儀式のための名前の処理を地元で迅速に行うことができるように、サンパウロ、東京、メキシコ・シティーでは神殿に隣接して神殿サービスセンターが設置された。

## 人々から愛された指導者キンボール大管長

キンボール大管長は健康に恵まれていなかったために、大管長が管理する時代にさほどの業績を残すことはできないであろうと考えた人々もいた。しかし、教会を管理した12年間に、キンボール大管長は後の教会に大きな影響を与える数多くの業績を残している。神権を受ける特権があらゆる人種の人々に与えられた。重要な学習資料と追加部分を加えて新しい版となった聖典が教会の公式な聖典として認められた。七十人第一定員会は教会の管理組織として、かつて啓示されたとおりの立場に据えられた。教会の集会スケジュールが簡素化された。かつてないほど多くの神殿が建設され、全世界の末日聖徒に対する福音の最高の祝福として与えられた。

キンボール大管長は教会の急速な成長と同じくペースの速い私生活を送っていた。しかし、大管長の健康状態は次第に衰えを見せ、生活のテンポが緩やかになってきた。この時期にキンボール大管長は靈感によってゴードン・B・ヒンクレー長老を大管長会副管長に召した。ヒンクレー副管長は40年以上にわたって伝道プログラムとその他の教会活動を指導する責任を果たしてきた。ヒンクレー長老は1958年に十二使徒補助に召され、3年後に十二使徒定員会会員に召された。N・エルドン・タナー副管長が病床に伏して1982年に亡くなり、マリオン・G・ロムニー副管長も重病にかかって業務を果たすことができなくなった。このため、副管長に召されたヒンクレー長老は重責を担うことになった。このような状況において、キンボール大管長は教会の運営に関する日常的な業務を次第にヒンクレー副管長に委任していった。

またこの時期に多くの神殿が完成したため、ヒンクレー副管長は頻りに世界各地に飛んで奉献式を行った。ヒンクレー長老は副管長として18の神殿を奉献したが、この数は教会史上だれよりも多い。しかし、ヒンクレー副管長にとって、これらの責任を果たすことは長年にわたる無私の奉仕を単に継続することでしかなかった。ボイド・K・パッカー長老はヒンクレー副管長についてこう述べている。「この時代

## 世界中の教会の必要を満たす



ゴードン・B・ヒンクレー（1910年 - ）は1958年4月に十二使徒補助として召され、3年後に十二使徒定員会に召された。そして1981年7月、スペンサー・W・キンボール大管長の副管長として召された。

に、彼ほど福音を伝え、聖徒を教え導き、死者の救いを見るという誠実な目的のために各地を訪れ、遠方まで足を伸ばした人はいません。」<sup>13</sup>

スペンサー・W・キンボール大管長は長期にわたる闘病の末、1985年11月5日に他界した。キンボール大管長の死は預言者、聖見者、啓示者として心から支持してきた数百万の聖徒の深い悲しみを誘った。キンボール大管長について、ヒンクレー副管長はこのように述べている。「使徒、そして預言者としての42年にわたる奉仕、謙遜さと人々への愛、物静かでありながら熱い思いを込めて信仰を表現する態度には、わたしたちの心を揺り動かしてやまないものがありました。彼の生涯はどこを見ても飾りけのないものでした。虚栄、高慢さなどは少しもない方でした。そのすばらしさは金のごとく輝いていました。キンボール大管長の生涯を見ますと、主の手によって強められた方であることがよく分かります。わたしはキンボール大管長を愛しておりました。主に仕える人々なら皆そうだと思います。」<sup>14</sup>

ニール・A・マックスウェル長老も同じように述べている。「スペンサー・ウーリー・キンボール大管長が管理した業を語るには、最大の賛辞を用いるのが適切であるばかりでなく、必要です。……わたしたちはすでに、彼の数多くの業績のうちどれが最も重要だろうかと心の中で考え始めています。……

……キンボール大管長について考えるとき、彼が特別な人物であり、とりわけ強い慈しみの気持ちがわき上がります。」このようにマックスウェル長老は、この預言者が人々に愛された指導者キンボール大管長として人々の心にいつまでも刻み込まれることを信じている。<sup>15</sup>

## 注

1. Conference Report 『大会報告』1974年4月、27参照
2. 『大会報告』1961年10月、90参照
3. 『実践の時代』『聖徒の道』1976年2月号、34で引用
4. 「七十人第一定員会の改組」『聖徒の道』1977年2月号、40で引用
5. “Area Presidencies Called as Church Modifies Geographical Administration” *Ensign* 「教会の地理上の管理区分修正が実施され、地域会長会が召される」『エンサイン』1984年8月号、75
6. “Stake Conferences to Be Semi-annual” *Church News* 「ステーク大会、年2回となる」『チャーチニュース』1978年4月1日付、4で引用
7. “New Activities Committee” 「新しい活動委員会」『チャーチニュース』1977年5月28日付、8-9
8. “Unique Mission Serves World” 「世界で繰り広げられる新しい伝道」『チャーチニュース』1975年2月1日付、12. “Mission Organized to

- Aid 'Unattached' ” 『無所属の教会員』のために組織された伝道部」『チャーチニュース』1972年12月16日付、4、6；“Church Family Style in Tanzanian Home” 「タンザニアにおける教会員の家族の生活」『チャーチニュース』1975年2月22日付、6も参照
9. “Meeting Schedule Approved” 「承認された集会スケジュール」『チャーチニュース』1980年2月2日付、3参照
10. “Area Conference in Brazil” 「ブラジルにおける地域大会」『チャーチニュース』1975年3月8日付、3
11. ジェイ・M・トッド “Report of the Regional Representatives' Seminar” 「地区代表セミナー報告」『エンサイン』1980年5月号、99で引用
12. 「命と救いに至るまことの道」『聖徒の道』1978年10月号、2で引用。『チャーチニュース』1978年4月22日付、3も参照
13. ボイド・K・パッカー 「ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長」『聖徒の道』1986年10月号、13

## 時満ちる時代の教会歴史

14. 「幸福への招き」『聖徒の道』1986年7月号，  
49で引用 Beloved: Leader-Servant ”「愛された指導者，  
僕スペンサー」『エンサイン』1985年12月号，8
15. ニール・A・マックスウェル “ Spencer, the

# チャレンジと成長の時代

年表	
年代	重要な出来事
1985.11.10	エズラ・タフト・ベンソン、教会の第13代大管長として聖任と任命を受ける 大管長会は教会を離れている会員に対して「囲いへ戻って来る」ように促すクリスマスメッセージを発表する
1986.10	ステーキにおける七十人定員会が廃止されるステーキ伝道の再興を促す



エズラ・タフト・ベンソン大管長  
(1899年 - 1994年)

100年間近く続いてきた伝統に従って、十二使徒定員会はスペンサー・W・キンボール大管長の葬儀が行われた翌日に会合を開き、前任使徒であるエズラ・タフト・ベンソンを教会の大管長として支持した。86歳になるベンソン大管長は、42年間にわたる使徒の務めを経て大管長に聖任された。ベンソン大管長はゴードン・B・ヒンクレーとトーマス・S・モンソンを副管長に召した。58歳で大管長会に召されたモンソン副管長は、過去100年間における教会歴史上、最年少で大管長会に召されている。新しい大管長会の発表に当たってベンソン大管長は、教会のおもな目的は世の人々をイエス・キリストのもとへ導くことであると述べている。そして、次のように宣言した。「わたしの心はすべての教会員とあらゆる地に住む天の御父の子供たちに対する大きな愛と慈愛で満たされています。わたしは肌の色、主義、政治的主張を問わず、御父のすべての子らを愛しています。」<sup>1</sup>

## 預言者の準備

エズラ・タフト・ベンソンは1899年アイダホ州ホイトニーの農村地帯において、11人の子供たちの長子として誕生した。彼は1846年から1869年まで十二使徒定員会で働いた曾祖父と同じ名前を受け継いでいる。「T」という愛称で呼ばれた彼は、4歳から農作業に携わり、14歳のときに父親が専任宣教師に召されたため、父親に代わって大きな責任を負うことになった。後に、ユタ州ローガンのユタ州立農業大学に入学し、そこで後に妻となったフローラ・アムッセンと出会っている。二人が結婚したのは二人が伝道を終えた後のことである。エズラ・タフト・ベンソンは英国で、フローラ・アムッセンはハワイ諸島で伝道した。

エズラ・タフト・ベンソンはブリガム・ヤング大学を優秀な成績で卒業した後、アイオワ州立大学において農業経済学の修士号を取得している。その後アイダホ州へ戻ると、郡の農業団体において頭角を現し、後にアイダホ州ボイシの州政府が実施したアイダホ大学公開講座において経済学を担当することになった。1939年にはワシントンD.C.へ移り、全国農業組合評議会の幹部役員として働いた。また、ボイシとワシントンD.C.においてステーキ会長を務めている。

ベンソン長老は40年以上にわたって十二使徒定員会会員として働いた間に、注目すべき業績を残している。ベンソン長老が十二使徒に召されたのはスペンサー・W・キンボール長老と同じ時である。両長老が1943年10月に中央幹部に召されたとき、教会はわずか83万7,000人の会員と146のステーキを擁していたにすぎなかった。ベンソン長老は1946年、戦争により荒廃した状態にあったヨーロッパへ伝道部長と



## 時満ちる時代の教会歴史

して赴いた。彼は途絶えていたヨーロッパの聖徒たちとの連絡を回復し、物資の不足に悩まされていた会員たちに福祉救援物資を供給し、伝道活動を再開させた。人々に対して憐れみの気持ちをあふれんばかりに寄せることになったこの体験はベンソン長老にとって思い出深いものであった。また当時のベンソン長老の働きは後々の語り草になっている。

1952年に合衆国大統領に指名されたドワイト・D・アイゼンハワーは教会の中央幹部に対して、ベンソン長老を農務長官として内閣に迎えることが可能かどうかを問い合わせてきた。デビッド・O・マッケイ大管長はこの指名を受諾するように勧めた後、国家の必要をはっきりと見定める洞察力を持ち、国家の自由を脅かす破壊勢力に対して恐れずに憲法を擁護して立つようにベンソン長老に祝福を与えた。こうしてベンソン長老はそれから8年間、彼自身の表現を借りると「敵の集中攻撃を受ける中」を合衆国大統領の閣僚として働いた。在任期間中、ベンソン長老は約130万キロを旅行して、44か国を訪れ、自身の篤い信仰と高潔さにより教会にとっての友人を数多く得ている。後にベンソン長老は、政治にかかわった年月とその間の多くの機会と経験を回顧して、『敵の集中攻撃を受ける中』(Cross Fire)という標題の書物を著している。

1961年に全時間を教会にささげる生活に戻ったベンソン長老は、説教の依頼をひっきりなしに受けることになった。1960年代の半ばにベンソン長老は再びヨーロッパ伝道部を管理し、また1960年代末にはアジアの各伝道部を管理する召しを受けた。そして1973年に十二使徒定員会会長として支持され、以来12年間にわたって同職を務めた。十二使徒定員会において親しい同僚として働いたマーク・E・ピーターセン長老はベンソン長老の指導力を次のように述べている。

「ベンソン長老は非常に効率よく、絶えず靈感によって、そして兄弟たちに対するたゆみない愛によって定員会を導いてきました。彼は同僚である十二使徒の兄弟たちをいつも気遣っていました。また、ベンソン長老は同僚の十二使徒に世界各地における責任を割り当てる際に、『王国にとって何が最も大切か』ということとともに兄弟たちが最も関心を抱いていることは何かを常に考えていました。

ベンソン長老が十二使徒定員会を管理する間、定員会には常に一致が見られました。」<sup>2</sup>

1983年にベンソン長老は著書『キリストのもとへ来なさい』(Come unto Christ)を完成させた。この書物では「主の足跡を歩む」「イエスはどうかされるだろうか」「人はどのような人物になるべきだろうか」「子供たちをキリストのみもとへ導きなさい」「全世界の国々に福音を宣べ伝えなさい」「わたしの羊を養いなさい」などのテーマが強調されている。これらはベンソン大管長が神の預言者として民に教えた基本的なテーマでもある。<sup>3</sup>

## キリストのもとへ来なさい

教会は活発でない会員に対して常に手を差し伸べてきたが、ベンソン大管長はキリストのもとへ戻るようにとの特別な呼びかけをしている。これは失われた羊を群れに戻すための固い決意に基づく継続的な働きかけである。大管長会は1985年のク

## チャレンジと成長の時代

リスマスメッセージで次のように述べている。「わたしたちは教会に活発でない人々、教会に対して批判的であら探しをしている人々、重大な罪を犯して正会員資格を剥奪されたり破門されたりした人々に対して関心を寄せています。そのような人すべてに対してわたしたちは愛の手を差し伸べています。……戻ってください。戻って主の食卓に着き、聖徒たちとの交わりの中に見いだすことができる甘くおいしい実をもう一度食べてください。」<sup>4</sup>

この訴えの一部には、教義や慣習に同意できずに教会を去った人々、反モルモン運動に加担した人々に対する呼びかけも含まれていた。1970年代半ばからこれらの反対グループは規模を拡大し、また運動の激しさも増していた。しかし教会の指導者は、反対グループのようにマスコミを使って論争を展開したり、攻撃したりするのではなく、敵のために祈り、彼らが真理に立ち返るように愛をもって助けるよう聖徒たちに勧めた。

### わたしたちの宗教のかなめ石、『モルモン書』

ベンソン大管長はキリストのもとに来るために第1になすべきこととして『モルモン書』を読んで活用することを末日聖徒に勧告した。ベンソン大管長は預言者として話をする度にジョセフ・スミスの言葉を引用して『モルモン書』の重要性を強調した。「わたしは兄弟たちに、『モルモン書』はこの地上において最も正確な書物であり、わたしたちの宗教のかなめ石であって、人がその教えに従うことにより最も神に近づくことのできる書物であると語った。」<sup>5</sup>ベンソン大管長は、教会員は『モルモン書』を正しく使わなければ罪の宣告を受けると言い、1831年の主の宣言は現在も有効であることを説明した（教義と聖約84：54 - 57参照）。またベンソン大管長は次のように述べている。「今わたしたちに必要なのは、『モルモン書』について口にするだけでなく、その教えにさらによく従うことです。……

……わたしたちは今でもそうですが、これまで聖文学習の中心に『モルモン書』を置いてきませんでした。家族に教える場合でも、人々に福音を教えたり、伝道活動を行ったりする場合もそうでした。この点について悔い改めが必要です。」<sup>6</sup>

ベンソン大管長の呼びかけに対して教会員はすぐさま行動した。そしてそれは現在も行われている。預言者は、老若男女を問わず多くの聖徒から『モルモン書』を読み、勉強するというチャレンジを受け入れると意思表示した手紙を受け取った。1986年に配付された『モルモン書』は前年の2倍に当たる291万1,916冊に上った。このうち15パーセントは会員たちが写真と証を『モルモン書』に挿入し、「家族から家族に贈る『モルモン書』プログラム」<sup>7</sup>を通じて配付された。ベンソン大管長は家族とともに率先して、「毎月数十冊の家族特製の『モルモン書』」を配付した。<sup>8</sup>1987年4月の総大会においてベンソン大管長は、聖徒が「『モルモン書』を世に広め……るために、さらに強い望みを持つことができるように」<sup>9</sup>主の祝福を願い求めている。

### 当面の問題に取り組む

大管長会は、過去の大管長会もそうであったように、多くの当面する問題について靈感あふれる勧告を与え、指導力を発揮した。

## 時満ちる時代の教会歴史

1980年代初頭にアフリカ北西部はひどい干ばつに襲われ、数か国で数百万人が栄養失調に陥り、あるいは死亡していた。七十人第一定員会のM・ラッセル・バラード長老と福祉事業部の管理部長グレン・L・ペイスは1985年3月にアフリカを訪れて、状況を調査し、大勢の飢えた人々に対して教会はどのような援助ができるかを確認した。アメリカ合衆国の教会員は1985年11月24日に行われた全米の断食日に参加して、集まった380万ドルを寄付した。同年の1月に行われた同様の断食で集められた献金と合わせると、教会員は1,000万ドル以上を寄付したことになる。1986年1月上旬にエズラ・タフト・ベンソン大管長はワシントンD.C.へ赴き、新しい神殿長会を召し、新たなステークを組織した。ベンソン大管長は国家首都に滞在中、ロナルド・レーガン大統領と会見し、アフリカの難民に対する聖徒の献金について報告している。<sup>10</sup>

教会は1980年代を通じてブリガム・ヤング大学エルサレムセンターの建設事業を推進していた。この大規模な教育センターの建設は、末日聖徒がセンターを拠点として伝道活動を展開するのではないかとこの危険の念を持った保守的なユダヤ人グループから反対を受けていた。このため、大管長会と十二使徒会の面々ならびにブリガム・ヤング大学の学長ジェフリー・R・ホランドはイスラエル政府、宗教および教育界の指導者、またイスラエルに対して影響力を持つ合衆国の政府、宗教ならびに教育界の要人をしばしば訪れていた。彼らは関係者に対して、エルサレムセンターは教育活動だけを実施する施設であること、ブリガム・ヤング大学の学生はイスラエル滞在中にいかなる形であれ伝道活動を行わないことを確約した。

エルサレムセンターはスコバス山の約2万平方キロの敷地に建設されており、ブリガム・ヤング大学の海外研究プログラムで使用されている。センターは1987年3月から使用開始となり、1989年5月に十二使徒定員会のハワード・W・ハンター会長により奉獻された。



ベンソン大管長は教会を管理した期間を通じて、堅固な家庭を築くことと邪悪な力に取り囲まれた環境にあっても家族の一人一人がどのようにして神から与えられた責任を果たすことができるかについて頻繁に説教し、また執筆した。スペンサー・W・キンボール大管長が亡くなる数週間前の1985年10月総大会において、ベンソン会長は教会の男性に対して、『モルモン書』に登場する義にかなった父親の模範

## チャレンジと成長の時代

に倣って父親としての召しを尊んで大いなるものとするよう強く勧告した。大管長に召されてからも引き続き、若い男性、若い女性、そして母親に向けたメッセージを述べ、そして1987年10月の総大会で大管長は再び教会の父親に対して語りかけている。

「皆さんはこの末日において主の軍勢に加わるべき人々です」とベンソン大管長は1986年4月総大会の神権部会において、若い男性に話し始めた。預言者は青少年に対して母親から遠く離れることのないように、また父親に従い、父親が示している立派な模範を見習うように勧告した。また、聖文、特に『モルモン書』を毎日読んで深く考えるよう訴えた。さらに、すべての若人は祝福師の祝福を受けるべきであること、出席すべき集會に必ず出席すること、スカウトプログラムに参加すること、セミナーに出席すること、そのほか義にかなった方法によって伝道に出るための準備をするように勧告した。「主はすべての若い男性に、フルタイムの伝道に出るように望んでおられます。現在資格ある若い男性のうち、伝道に出ているのはわずか5分の1にすぎません。これは主の目にかなう状態ではありません。もっと多くの人が伝道に出られるはずですよ。またそうしなければなりません。」<sup>11</sup>

6か月後には若い女性に対して次のように述べている。「家庭や家族を愛し、日々聖文を読み、深く考え、『モルモン書』に対して燃えるような証を持つ若い女性はすばらしいものです。……徳高く、清く、神殿結婚以外のものには満足しない若い女性になってください。そうしたならば、この世のみならず永遠に至るまで主のために奇跡を行う若い女性になれることをお約束いたします。」<sup>12</sup>ベンソン大管長は大勢の若人を前にしてしばしば、若人に対する大管長の愛を伝えるとともに、『モルモン書』を活用し、誉れと徳を重んじる生活を送るように勧めている。

1987年2月22日、両親のために開かれたファイヤサイドにおいてベンソン大管長はシオンの母親に向かって話している。この模様は教会の衛星中継によって全世界に放送された。「善良で神を畏れる母親の働き以上に高貴な働きはありません。……

若い母親と父親の皆さん、わたしは心から勧告します。子供をもうけ、天の御父と一緒に共同の創造主になることを先延ばしにしないでください。」子供を育てる主の方法は、世の方法とはまったく別のものであることを大管長は説明した。置かれている環境からある姉妹たちは家庭を離れて働かなければならないことを認識したうえで、ベンソン大管長は教会の女性には『『夫に扶養を要求する権利がある』』ことを確認し、……教会はいつの時代にも、母親は全時間を家庭で過ごし子供を育て、子供に注意を払うように勧告してきました。」さらに、母親は子供たちと過ごす時間を効果的に使うように奨励している。<sup>13</sup> 教会は両親が子供たちに道徳と道徳上の責任を教えるための資料として『良い親になるために』を出版している。

大管長会のゴードン・B・ヒンクレー副管長は神権者の大会においてエイズ（後天性免疫不全症候群）を主題に採り上げて次のように話している。

エイズは、「命にかかわる病気です。……

わたしたちは周囲の人々と同様、医学的な発見によってこの恐ろしい病気の治癒と予防が可能になることを望んでいます。しかしそうした発見とは別に、神から授けられただれにも分かる規則を守る方が、ほかの何ものにも増して感染の波を食い

## 時満ちる時代の教会歴史

止められるのではないのでしょうか。それは結婚前の純潔と、結婚後の貞節です。…

…

……わたしたちは罪の苦い結果について考えるとき、罪のあるなしを問わずその犠牲者に対してキリストと同じ同情心を感じるということなのです。」<sup>14</sup>

大管長会は倫理に関する現代のもう一つの問題である宝くじについても声明を発表している。合衆国のほとんどの州ならびに幾つかの国では宝くじの実施を合法化しているかもしくは合法化を検討している。中央幹部は教会員に対してそれぞれの地域における公共の宝くじに反対するよう緊急の勧告を発表した。トーマス・S・モンソン副管長は次のように説明している。「宝くじは経済的に貧しい人々にお金を出させて、何ら対価となるものを与えないため、彼らの問題をいっそう深刻にさせている場合が往々にして見受けられます。一獲千金という誘いに乗せられた貧しい人や老人が宝くじの犠牲者になっています。」<sup>15</sup>

1985年10月、ソルトレーク・シティーにおいて教会を巻き込む事件が起きた。マーク・ホフマン爆弾事件である。ホフマン氏は1980年から、教会歴史に関連があると称する幾つかの資料を教会に対して売ったり、寄付したり、交換したりする仕事を始めていた。これらの資料の中で、マーティン・ハリスがチャールズ・アンソンに見せたアンソンの写本と称するものと、ジョセフ・スミスが魔術と宝探しに熱中していたと書かれているマーティン・ハリスからウィリアム・W・フェルプスにあてた手紙とされるものについては世間の大きな注目を集めた。1985年10月に手製の爆弾によって、監督であり資料収集家であったスティーブン・F・クリステンセンが、そして以前にクリステンセンと共同で事業をしていたJ・ゲリー・シーツの妻キャスリーン・シーツが殺害された。また翌日には第3の爆弾によってマーク・ホフマンが重傷を負った。

問題の文書、文書の取引、爆弾を破裂させた犯人に関して様々な報道が1年以上にわたってマスコミをにぎわした後、爆破の罪で起訴されたホフマンは売買契約を言い逃れるために殺人を犯したことを自供した。そしてユタ州刑務所送りとなった。ホフマンはまた末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史に関連した文章は偽造したものであることを自供した。ダリン・H・オークス長老は次のように説明している。「これらの偽造文書と文書にまつわる虚言は末日聖徒イエス・キリスト教会の初期の歴史を改ざんしようとして作者が苦心さんたんして作り出したものです。」<sup>16</sup>

教会の指導者はこれらの文書について初めから警告を発していた。「ゴードン・B・ヒンクレー副管長は、これらの文書の信憑性<sup>しんびょう</sup>について教会は関知しないことを繰り返し述べていた。」<sup>17</sup>

ダリン・H・オークス長老はまた次のように述べている。「報道機関は、わたしが言うところの科学的根拠のない歴史的な新事実をはじめとする事実に関する誤った情報に特に影響されやすい傾向を持っています。最近発見され、筆跡や紙、インクなどの鑑定によって信憑性が確立されたとする文書についてもこの傾向が見られません。わたしたち読者はこの種の文書については疑ってかかる必要があります。特に文書がどこで発見されたか、150年間だれが保管していたかが定かでないような場合にはそうです。歴史的に重要な文書が発見されたとしたら、それは非常に大きな価

## チャレンジと成長の時代

値を持つものであるはずですから、所有者は躍起になってその信憑性を訴え、主張することでしょう。最近世間を騒がせた詐欺事件である、いわゆるヒトラーの日記から、この種の話には十分注意しなければならないことを学ばなければなりません。」<sup>18</sup>

ホフマン裁判が結審した時点で教会の広報部は以下の声明を発表している。

「わたしたちは過去数か月間、爆弾事件と本件に関連する様々な出来事によって大きな打撃を受けた家族と関係者に対して心からの同情を寄せるものであります。これらの悲劇に巻き込まれた人々が一刻も早く受けた傷から癒されるように希望しています。……

国内の文書収集家と同様に教会は、文書の取得に関して信頼の置ける権威者の鑑定にゆだねています。また教会は、現在法廷で明らかにされつつある詐欺行為の犠牲者でもあるのです。」<sup>19</sup>

## 神権定員会の変更と新たな方向

1986年10月、エズラ・タフト・ベンソン大管長はステーキの七十人定員会が廃止されることを発表した。ステーキの七十人はそれぞれのワードの長老定員会に所属するようにとの指示を受け、またステーキ会長は「これらの兄弟たちのうちだれを大祭司の職に聖任すべきかを判断する」ように指示を受けた。<sup>20</sup> それまで多くの教会員は七十人だけが伝道活動に関心を寄せるものと考えていた。新しい方針に基づいて、ステーキ宣教師の質と技術を高め、すべての教会員を伝道活動に参加させるようにとの新しい指示が与えられた。これらの変更が行われたのは「教会の全ステーキにおける伝道活動に新たな息吹を与える」ためである。<sup>21</sup> すべてのステーキの七十人定員会が解体されたことにより、教会で引き続き機能を果たす七十人定員会はただ一つとなった。すなわち、教会の第3管理定員会である七十人第一定員会である。

教会指導者はさらに多くの宣教師を必要としていることを引き続き機会あるごとに話していた。神権指導者は独身の長老一人一人についてまた年配の夫婦について祈り、彼らに伝道活動に携わる主からの召しを与える責任を果たすことになった。中央幹部は、該当する年齢に達したときに伝道に出る準備ができた若い男性の割合を高めるために熱意あふれる成人指導者を召すようステーキとワードに対して奨励している。

新しい改宗者に必要な助けを差し伸べることの重要性についても強調されている。宣教師、特にステーキ宣教師は新しい教会員が教会の召しを受け、成人の男性会員がアロン神権を受けるまで数週間にわたって訪問する責任が与えられた。ワードの伝道主任は神権役員会とワード評議会において『改宗者のバプテスマチェックリスト』を使って新しい改宗者に対するフェローシップ活動の調整を行っている。

監督は再活発化の活動を調整する責任についてこれまで以上に大きな責任を負うことになった。十二使徒会のマービン・J・アシュトン長老は次のように勧告している。「監督は監督室でいすに座っていないで、失われた羊を探しに行かなければなりません。」<sup>22</sup> 神権役員会とワード評議会を毎週開くようにとの指示が監督に与えられた。「これらの集会ではプログラムや日程の調整、活動よりも人々に焦点を当てなけ

## 時満ちる時代の教会歴史

ればなりません。そのためには、『管理する』ことよりも『教え導く』ことに重きを置く必要があります。」監督はまた、必要に応じてワードの神権会を活用して、神権者が群れの羊飼いとなるための義務を教える機会とするように奨励されている。<sup>23</sup>

教会のプログラムの相互調整が大規模に実施された1964年に「ワードティーチング」から発展したホームティーチングは、あまり活発でない会員に対して手を差し伸べるための最善の方法として新たな脚光を浴びることになった。ホームティーチングを通じて長老見込み会員と活発でない長老ならびにその家族に対してフェロウシップを実施するために、教会における長年の奉仕を通じて分別をわきまえた大祭司が必要に応じて召されることになった。この責任についてベンソン大管長は次のように述べている。

「ホームティーチングというこの偉大な神権プログラムに対して、月並みな訪問で満足してはなりません。どの点を取っても優れたホームティーチャーになってください。群れの真の牧者となってください。……

忘れないでください。影響力のあるホームティーチャーになるには、質と量の双方が不可欠なのです。」<sup>24</sup>

教会の指導者はまた、多くの教会員が系図は難しいものだと考えていることに気づいていた。十二使徒定員会のジェームズ・E・ファウスト長老はこのように説明している。「わたしたちは先祖の探求を簡潔にするとともに、系図探求にまつわるなどを解消しようと努力しています。また、少しの訓練を受ければだれもが自分の先祖を探し出し、彼らの身代わりの儀式を受けられるようにしたいと考えています。」<sup>25</sup> この目標に添って、家族の記録、系図表が簡略化されるとともに、人名抄出プログラムが実施されることになった。1987年に教会は系図という名称を家族の歴史に変更した。ワードの相談員が召されて、聖徒の家庭を訪れ、家族の歴史作成作業を支援する制度が設けられた。こうして「先祖を神殿へ連れて行こう」という新しいモットーが生まれた。日曜学校の「家族の歴史クラス」の手引き書として新たに『神殿の儀式と聖約を通してキリストのみもとへ行く』が出版された。これは『あなたからあなたの先祖へ』に代わるものである。この新しい手引きでは会員たちに「自身のエンダウメントと結び固めを受ける準備をさせる」ための情報が記されている。また、「入手可能な家族の歴史資料に関する概要」についても情報が提供されている。<sup>26</sup>

## 記念祝典

1987年に教会は福音の回復とそれを全世界にもたらす責任に関連した4つの記念祝典を実施した。最初に行われた祝典は、初期の聖徒がカナダのアルバータ州リーズクリーク流域に定住地を築いた開拓作業をたたえるために行われた。この定住地は現在のカードストーン市である。1886年、キャッシュステークの会長であったチャールズ・オラ・カードはジョン・テラー大管長から指示を受けて、避難地を探すために北方へ向かった。1886年に、カード兄弟はカナダへ入り、ユタへ戻って見込みのありそうな場所があることを報告すると、再びカナダへ行って、定住地を建設した。1887年の早春のことであった。5月には最初の定住地で土地が耕され、穀物が植えられた。

## チャレンジと成長の時代



チャールズ・オラ・カード（1839  
1906年）は16歳のときにノーブーを出発し大平原を渡ってユタまで移動している。カードはユタ州ローガンの定住地開発に携わり、後にローガンのタバナクルと神殿の建築を監督している。その後、カナダに移住し、同地の人々に大きな影響を与えた。

アルバータ大学はカナダ西部における末日聖徒の初期の入植者が果たした貢献を紹介するために、「カナダにおけるモルモンの入植事業」と題した3日間の大会を主催した。1987年5月6日から9日まで開かれたこの大会の話者には教会員と教会外の人々が選ばれている。8月1日、エズラ・タフト・ベンソン大管長はカードストーン百年祭パレードの主賓として招かれている。ベンソン大管長は翌日、美しいアルバータ神殿の敷地に集まった7,000人の人々を前にして話をしている。

英国諸島における伝道活動の開始を記念する行事は合衆国と英国の報道機関から大きな注目を集めた。この年の初頭に、記念行事の一環として行われたブリガム・ヤング大学の特別シンポジウムにおいてゴードン・B・ヒンクレー副管長が基調演説を行っている。ヒンクレー副管長はこの演説の中で、1837年7月中旬にイングランド・リバプールの波止場に到着したヒーバー・C・キンボール長老が岸までの最後の2メートルを待ち切れずにジャンプして渡ったことを紹介している。到着して3日目にキンボール長老はプレストン近郊において多くの改宗者というすばらしい収穫を得た。この収穫は当時から現在に至るまで教会歴史に大きな影響を与えている。通算して10万人近くの改宗者がアメリカの教会に集合するために移民した。現在、英国諸島には400のワードと支部に14万人の会員が在籍している。

英国の初期の宣教師と会員の業績をたたえるために、教会は幾つかの意義のあるイベントを行っている。教会は地域大会に先立って、ロンドンの超豪華ホテルであるサボイホテルに400人の賓客を集めて記念晩餐会を催した。中央幹部、地元の教会指導者、末日聖徒の著名なスポーツ選手、タレントなどが出席した。英国の政界ならびに実業界から招待された賓客の一人であるエドワード・ヒース元英国首相は、出席者を前にして末日聖徒が果たした役割を称賛している。また、ビデオに収録されたロナルド・レーガン合衆国大統領よりの祝辞が披露された。7月26日、地域大会はイングランド、アイルランド、北アイルランド、ウェールズ、スコットランドの6つの会場において開催され、3万5,000人以上の出席者を集めた。さらに、英国における教会歴史上重要な8か所の地点が奉獻された。地域大会、歴史をテーマにした会議、教会内と一般の報道機関による大々的な報道により、教会員は初期の宣教師が味わった苦勞と成功に改めて目を向けることとなったのである。

7月24日から8月1日まで、ニューヨーク州パルマイラのクモラ丘陵地帯においてクモラの丘ページェントが開催された。1937年に東部諸州伝道部のドン・B・コルトン部長がページェントのために委員会を組織して最初のページェントを公演してから50年目に当たっていた。クモラの丘ページェントは初演以来、数十万人の観衆を集めてきた。初回の公演は「アメリカにおけるキリストの証人」をテーマとして、約70人の出演者で行われた。それが50年後には出演者が600人、舞台関係者が50人と膨れ上がっている。1987年の公演には約10万人の観客を集め、そのうち約60パーセントが教会員でない人々だった。<sup>27</sup>

アメリカ合衆国は1987年に憲法制定200周年を迎えた。末日聖徒も合衆国国民とともに記念祝典に参加している。憲法の起草者が靈感によって憲法の原則を定めたことは『教義と聖約』においても確認されているため（教義と聖約98：6；101：80；109：54参照）、教会の指導者はこの国家的行事に積極的に参加した。大管長会は十



## 時満ちる時代の教会歴史

二使徒定員会のL・トム・ペリー長老，七十人第一定員会会長のロバート・L・バックマン長老とヒュー・W・ピノック長老を委員に任命して，200年記念行事に教会としてどのように参加するかを企画させている。<sup>28</sup> ベンソン大管長は憲法の重要性についてしばしば語り，また執筆するとともに，教会員に対して憲法を入念に研究するように勤めている。合衆国の教会員には家庭の夕べで3回にわたって憲法について学ぶための特別資料が配付された。

合衆国建国200年記念式典を支援するために教会の合唱団が幾つかの大きなイベントに参加している。1987年7月，350人から成るモルモンユース交響楽団およびモルモンユースコーラスはユタ州を代表して，合衆国東部で開催され盛況を得た5回の連続公演に出演した。モルモンユース交響楽団およびモルモンユースコーラスはまた9月17日にソルトレークタバナクルをいっぱい埋めた聴衆を前にコンサートを開いている。この演奏会ではユタ州知事ノーマン・H・バンガーター氏が歓迎のあいさつを述べている。モルモンタバナクル合唱団は，9月17日ペンシルベニア州フィラデルフィアのコンベンションホールから全国にテレビ中継された番組「わたしたちは200年間にわたって擁護してきた憲法を祝う」で合唱している。当日の朝，憲法を祝うパレードの出発に先立ち，合唱団はフィラデルフィアのインディペンデンスホールの前で国歌を歌った。多くのワードとステークでも憲法の重要性に関連したミュージカル，スキット，ドラマを上演した。

エズラ・タフト・ベンソン大管長が管理した時代に，聖徒は地上において自分たちが果たすべき使命を理解するために『モルモン書』をさらに効果的に活用する努力を行った。その結果，家族と聖徒の集會に新たな活力が生まれた。ベンソン大管長の時代はチャレンジと成長の時代であり，また現在の神権時代に展開されて末日聖徒の生活に大きな影響を与えた偉大な出来事を深く考える時代でもあった。

## 注

1. ドン・L・シール “President Ezra Taft Benson Ordained Thirteenth President of the Church” *Ensign* 「教会の第13代大管長に聖任されたエズラ・タフト・ベンソン大管長」『エンサイン』1985年12月号，5
2. マーク・E・ピーターセン “President Ezra Taft Benson” 「エズラ・タフト・ベンソン大管長」『エンサイン』1986年1月号，4 - 5
3. エズラ・タフト・ベンソン，*Come unto Christ* 『キリストのもとへ来なさい』（Salt Lake City: Deseret Book Co., 1983）参照
4. “An Invitation to Come Back” *Church News* 「困いへ戻るとの呼びかけ」『チャーチニュース』1985年12月22日付，3
5. *History of the Church* 『教会歴史』4：461。『モルモン書』の序文も参照
6. 「器の内側を清める」『聖徒の道』1986年7月号，5
7. “Missionaries Number 33,000” 「宣教師の総数が3万3,000人に到達する」『チャーチニュース』1987年3月14日付，3参照
8. *Deseret News 1987 Church Almanac* 『デザートニュース1987年教会年鑑』（Salt Lake City: Deseret News, 1986），134
9. 「『モルモン書』と『教義と聖約』」『聖徒の道』1987年7月号，97
10. “Day of Fasting for Africa Yields \$6 Million in Aid” 「アフリカ援助のための断食日により600万ドルの義援金が集まる」『チャーチニュース』1985年4月14日付，19；“Prophet Is 'At Home' in Capital” 「預言者，首都の故郷へ帰る」『チャーチニュース』1986年1月12日付，3参照
11. 「高貴な生得権を持つ若人へ」『聖徒の道』1986年7月号，45 - 47
12. 「教会の若い女性の皆さんへ」『聖徒の道』1987年1月号，92
13. *To the Mothers in Zion* 『シオンの母親へ』

## チャレンジと成長の時代

パンフレット, 1 - 3, 5, 8

14. 「敬虔さと道徳心」『聖徒の道』1987年7月号, 50 - 52

15. “ Church Opposes Government-sponsored Gambling ” 「教会は公営ギャンブルに反対する」『エンサイン』1986年11月号, 104 - 105

16. ダリン・H・オクス “ Recent Events Involving Church History and Forged Documents ” 「教会歴史と捏造文書にからんだ最近の出来事について」『エンサイン』1987年10月号, 63。偽造文書の多くはマーク・ホフマンの手により捏造されたかまたは改ざんされたものである。マクレラン・コレクションをはじめとする幾つかの文書は存在すらしなかった。捏造された文書には以下のようなものがある。

チャールズ・アンソン写本

ジョセフ・スミス・サードへの祝福文, 1844年1月17日付

金額の記載がない手形 3人の兄弟たちの署名が付された初期の手書きの手形, 1849年

ルーシー・マック・スミスの手紙, 1829年1月23日付

ウォルター・コンラッドにあてたデビッド・ホイットマーの手紙, 1873年1月13日付

ジョサイア・ストウエルにあてたジョセフ・スミスの手紙, 1825年6月18日付

W・W・フェルプスにあてたマーティン・ハリスの手紙, 1830年10月23日付

E・B・グランディンの『モルモン書』に関する契約書, 1829年8月17日付

ピセル・トッドにあてたピーターおよびデビッド・ホイットマーの手紙, 1828年8月12日付

ジョナサン・ダンハムにあてたジョセフ・スミスの手紙, 1844年6月27日付

ソロモン・スボルディングおよびシドニー・リグドンの土地権利証書, 1822年

ハイラム・スミスにあてたジョセフ・スミスの手紙, 1838年5月

17. オクス「教会歴史と捏造文書にからんだ最近の出来事について」69

18. ダリン・H・オクス “ Reading Church History ” 「教会歴史を読む」『教義と聖約』および教会歴史に関するシンポジウム, 1985年ユタ州ソルトレーク・シティーの末日聖徒聖徒イエス・キリスト教会にて, 1. オクス「教会歴史と捏造文書にからんだ最近の出来事について」69も参照

19. “ LDS Leaders Offer Sympathies and Hope for a Swift Healing ” *Deseret News* 「末日聖徒の指導者は同情を寄せ, 速やかな回復を願う」『デゼレトニュース』1987年1月24日付, A 3

20. 『聖徒の道』1987年1月号, 105

21. 「ステーキ七十人定員会の廃止」『聖徒の道』1987年1月号, 105

22. “ LDS Leaders Stress Missionary Work, Present New Home-teaching Guidelines ” 「末日聖徒の指導者, 伝道活動を強調する, 新しいホームティーチングの指針を発表する」『デゼレトニュース』1987年4月4日付, A 2

23. “ Come unto Christ ” 「キリストのみもとへ来なさい」『チャーチニュース』1987年4月11日, 5. “ Key Concepts to Help Leader ” 「指導者を援助するうえでの基本概念」『チャーチニュース』1987年7月4日付, 9も参照

24. 「教会のホームティーチャーへ」『聖徒の道』1987年7月号, 55 - 56

25. “ Church Bears Glad Tidings ” 「教会はよきおとずれを伝える」『チャーチニュース』1987年7月4日付, 10

26. “ Department Clarifies Use of New Booklet ” 「教会の実務部門は新しい小冊子の使用について明確にする」『チャーチニュース』1987年9月26日付, 4

27. “ Hill Cumorah Spectacular Celebrates Its Fiftieth Year ” 「50周年を祝うクモラの丘ページェント」『チャーチニュース』1987年7月25日付, 6 - 7参照

28. “ Committee to Guide Church’s Constitutional Celebration ” 「教会における憲法定制祝典を企画する委員会」『チャーチニュース』1987年5月16日付, 3参照

# 教会の行く末

**預**言者ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリが『モルモン書』の翻訳に携わっていたときに、主は二人にお与えになった啓示の中で、回復された主の王国を愛を込めて「小さい群れ」(教義と聖約6:34)と呼ばれた。主は続いて、「この世と地獄」が連合しても教会を打ち負かすことはできないので恐れることはないと言われた。このように教会が設立された当初から、末日聖徒は預言によって教会が最終的に成功を勝ち得ることを知らされていたため、常に希望と励ましと慰めを得てきた。主と主の預言者たちはしばしば、「人手によらずに山から切り出された石が全地に満ちるまで転がり進むように、そこから福音は地の果てまで転がり進むであろう」というたとえを用いて、教会の行く末を説明しておられる(教義と聖約65:2)。

## 小さな石

預言者ジョセフ・スミスは『シカゴデモクラット』(*Chicago democrat*)の編集者であり社主であったジョン・ウェントワースの要請にこたえて、末日聖徒の歴史を手短かに記している。この記事は1842年3月1日付けの『タイムズ・アンド・シーズンズ』(*Times and Seasons*)に掲載された。預言者はこの機会を利用して自身の半生と教会の歴史の初期を振り返り、また回復された教会の行く末について預言している。預言者は次のように述べた。

「迫害をもってしても真理が広がり行くのをとどめることはできなかった。かえって火に油を注ぐような結果になった。……この教会の長老たちは、信奉する大義に誇り……を抱いて、前進し、連邦のほとんどの州に福音を根づかせた。福音は数々の都市に浸透し、村々に広がり、……多くの人々を神の命令に従わせた。……福音はまた、イングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズにも広められた。……現在あらゆる地で多くの人々が教会に加わっている。

……いかなる汚れた者の手も、この御業の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊が集合し、中傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と出で立ち、あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国々に広まり、あらゆる者の耳に達して、神の目的は成し遂げられるであろう。かくして、大いなるエホバは、御業は成ったと告げられることだろう。」<sup>1</sup>

教会は、預言者ジョセフ・スミスが殉教し、ノーブーを追放された後に、再び行進を開始した。ブリガム・ヤングの指揮の下にソルトレーク盆地へ向かったのである。1847年10月、ヤング会長がウィンタークォーターズへ向かって引き返している

## 教会の行く末

間、ソルトレーク盆地に残ったわずかな数の聖徒たちは大会を開いた。ソルトレーク盆地における大会に参加した人々の数は、依然としてウィンタークォーターズや英国にとどまっていた数千人の教会員と比較すると極端に少なかった。

預言者の弟のジョン・ヤングはこの大会について9年後に次のように述べている。「そこでわたしは彼らが大会を開いている場所に向かいました。彼らは何と積み上げられた干し草の横で大会を開いていました。〔ブリアム・ヤングから責任を与えられていた〕父ジョン・スミスと一握りの人々が小さなテントを覆いにして、末日聖徒イエス・キリスト教会の半期大会を開いていたのです。」<sup>2</sup>

オーソン・プラット長老は初期の時代の英国における説教で、このように人里離れた場所に聖徒たちが導かれた理由を聖文を根拠に説明している。<sup>3</sup> プラット長老はイザヤの預言を引用した。「主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち…。」(イザヤ2:2)

ヤング大管長は、ケネスビルの聖徒たちを管理していたオーソン・ハイド長老にあてた手紙の中で教会と教会の行く末についての考えを述べている。「わたしたちは何の恐れも抱いていません。わたしたちは天の御父の手の中にいるのですから。わたしたちをこの地に導き、大平原で飢えた聖徒たちにうずらを食物として与え、パンを口にすることもなく働く強さを民に与え、民のパンとなる金色の麦を救うために海からかもめを遣わし、敵の手から民を守り救い出されたのはアブラハムとヨセフの神です。……わたしたちはこのようにして生かされてきました。わたしたちは神の知恵によって導かれており、神の力によって守られています。」<sup>4</sup>

それから1世紀以上を経た1976年4月の総大会においてスペンサー・W・キンボール大管長は、教会が人手によらずに山から切り出された小さな石であることについて証を述べている。キンボール大管長はまたこの石が預言されたように全地を満たすこと、教会の教えを受け入れて守る人々に永遠の命が約束されていることを証した。<sup>5</sup> 1979年4月の総大会において大管長は合衆国と他の国々の「隅々に」神殿が建てられること、伝道部と宣教師が非常にたくさん増えること、霊性が高まることについて述べた。またキンボール大管長は、末日聖徒は過去の時代にはできなかった事柄を成し遂げる用意ができていると述べた。<sup>6</sup> 同年10月の総大会において、わたしたちが直面しているチャレンジについて次のように述べている。「わたしたちの行く手には、立ち向かわなければならない数々の難題、機会が待ち受けている。しかし、わたしはそれらを明るい見通しをもって迎え、へりくだって主にこう申し上げたいと思う。『この山地をわたしに下さい』『これらのチャレンジをわたしに下さい』と。」大管長はさらに、約束の地に入る直前にカレブとヨシュアが経験した事柄と現代のチャレンジを比較している。<sup>7</sup>

## 教会は前進する

ジョセフ・F・スミス大管長はかつて、次のように述べた。「この民が現在に至るまでに導かれてきたのは、人間の知恵によるのではない。人間以上の御方、人に勝る知識と力を有しておられる御方の知恵によったのである。……主の手は人々には見えないかもしれない。この偉大な末日の業の進展の中に神の御心があることを見

## 時満ちる時代の教会歴史

分けられない人は多いかもしれない。しかし、教会の設立当初から現在に至るまで、教会の存続の中に、独り子をこの世に送られた全能者の手を見てきた人々がいる。神が御子を送られたのは、世の罪の犠牲となられるためである。』<sup>8</sup>

1982年4月の総大会においてG・ホーマー・ダラム長老が次のような宣言を行うことができたのは、教会は常に神の手によって導かれているからである。「わたしたちが受け継いでいるこの教会の歴史は実に偉大なものです。しかしこの行く手に待ち構えている歴史は、一人一人の会員にとって、また一つ一つのユニットにとって、さらに偉大なものです。とにかく、その歴史は韓国、フィリピン、アンデス、そして全ステーキの中で毎日毎日築き上げられています。』<sup>9</sup>

ブルース・R・マッコスキー長老は1984年10月の総大会における説教で、教会を、組織され準備を整えて定められたコースを進んでいる大きなキャラバンにたとえている。そして、牛は力強く、御者（教会の指導者）は賢いと宣言した。荒れ狂う嵐にも、橋を流してしまう洪水にも、砂漠にも、歩いて渡らなければならない川にも出遭うであろうが、キャラバンは前進する。そして、マッコスキー長老は行く手に日の栄えの町、神の永遠のシオンを見た。キャラバンを離れず信仰をもって最後まで旅を続ける人は皆、そこで食物と飲み物を得、休息すると預言した。<sup>10</sup>

ニール・A・マックスウェル長老は次のように述べている。「預言されているところによると、教会は末日に現在よりもはるかに大きなものとなります（教義と聖約105：31）。けれども、依然として『地の面における教会の占める場所』は比較的小規模にとどまるでしょう。教会員は『地の全面に散る』でしょう。』<sup>11</sup> 教会はパンのイースト菌のように、世の様々な出来事に大きな影響を及ぼすようになる。

ゴードン・B・ヒンクレー副管長は1987年4月の総大会において聖徒に向かってこのように述べている。「末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史の中に、今日ほど輝かしい時代はありませんでした。」教会の急激な発展に驚きの言葉を述べた後、このように述べて話を終えた。「わたしたちが今日にしているのは、これから起こるはるかにすばらしいことに比較すれば、ごく小さなことなのです。』<sup>12</sup>

エズラ・タフト・ベンソン大管長はこのような行く末と、将来、偉大な出来事が展開されることを踏まえて次のように述べている。「預言者ジョセフ・スミスは次のように述べました。『わたしたちはこのような偉大な大義において前進しようではありませんか。退かずに前に進んでください。兄弟たちよ、勇気を出してください。勝利に向かって進み、進んでください。心を喜び楽しませ、大いに喜んでください。地は声を放って歌いなさい。死者は、王なるインマヌエルに向かって永遠の賛美の歌を語りださなさい。王なるインマヌエルは、わたしたちが死者を獄から贖えるようにする方法を、世界が存在する前に定められました。獄にいる者たちは解放されるのです。』<sup>13</sup>

ベンソン大管長はまた教会員に対して、教会が休息を得る時が来るまでにはなすべきことがたくさんあると述べている。世界の国々に福音を宣べ伝えるためには、世界の指導者の心が和らげられなくてはならない。偽りのイデオロギーを打破して、喜びと救いのメッセージを地上のすべての人に伝えなければならない。<sup>14</sup>

ニューヨーク州北部においてジョセフ・スミスが初めて近所の人々に述べた証と

## 教会の行く末

同じ証が様々な言語で宣言されるようになることであろう。すなわち、神は生きておられ、イエスはキリストであられ、古代に教えられた主の福音が回復され、イエス・キリストの教会が再び、世のあらゆる人々にもたらされていることである。

わたしたちは小さな石がさらに大きくなる定めにあることを知っている。この石は現在も猛烈な速度で転がっている。大勢の人々が教会に加わっている。一時的な障害や迫害によって時には成長の速度が鈍ることもある。しかし、福音は勝利を得る。そして、いつか栄光にあふれる日が到来したときに真理は全地を満たすのである。

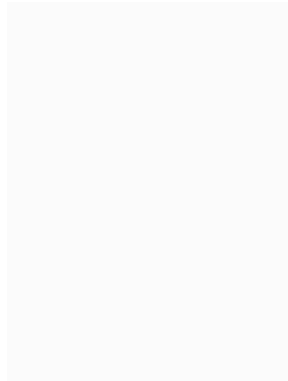
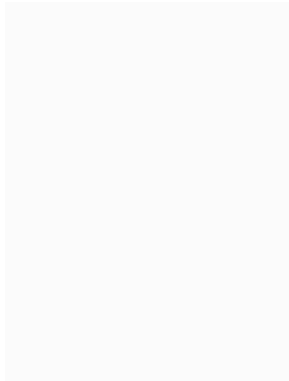
## 注

1. *History of the Church* 『教会歴史』4 : 540
2. "Conference: An Enduring Tradition for 155 Years" Church News 「総大会 155年間にわたって継続されてきた伝統」『チャーチニュース』1985年10月6日付, 7
3. ブレック・イングランド, *The Life and Thought of Orson Pratt* 『オーソン・プラットの生涯と見解』(Salt Lake City: University of Utah Press, 1985), 134参照
4. プリガム・ヤングがオーソン・ハイドに書き送った手紙, 1850年7月28日付, 末日聖徒教会歴史部, ソルトレーク・シティー
5. 「人手によらずに切り出された石」『聖徒の道』1976年8月号, 319参照
6. 「より高い地点に向かって前進しよう」『聖徒の道』1979年10月号, 116 - 117
7. 「この山地をわたしに下さい」『聖徒の道』1980年3月号, 111
8. ジョセフ・F・スミス 『福音の教義』50
9. 「教会の将来」『聖徒の道』1982年7月号, 119
10. 「キャラバンは行く」『聖徒の道』1985年1月号, 83参照
11. ニール・A・マックスウェル, *Meek and Lowly* 『柔和で謙遜な人』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1987), 62 - 63
12. 「神の手に使われる僕」『聖徒の道』1987年7月号, 57, 60
13. 「主が完全に受け入れられた価値ある……」『聖徒の道』1979年2月号, 44
14. 「福音を分かち合う責任」『聖徒の道』1985年7月号, 6



## 時満ちる神権時代の 十二使徒定員会会員

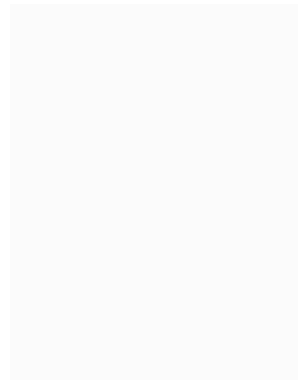
トーマス・ボールドウィン・マーシュ  
生年月日：1800年11月1日  
使徒に聖任された日付：1835年4月26日  
死亡年月日：1866年1月



デビッド・ワイマン・パッテン  
生年月日：1799年11月14日  
使徒に聖任された日付：1835年2月15日  
死亡年月日：1838年10月25日

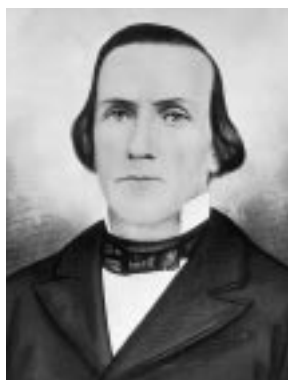
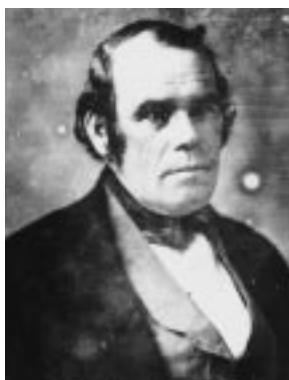
ブリガム・ヤング  
生年月日：1801年6月1日  
使徒に聖任された日付：1835年2月14日  
死亡年月日：1877年8月29日

ヒーバー・チェイス・キンボール  
生年月日：1801年6月14日  
使徒に聖任された日付：1835年2月14日  
死亡年月日：1868年6月22日



オーソン・ハイド  
生年月日：1805年1月8日  
使徒に聖任された日付：1835年2月15日  
死亡年月日：1878年11月28日

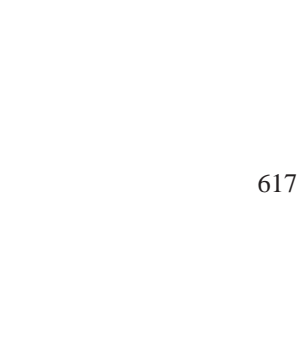
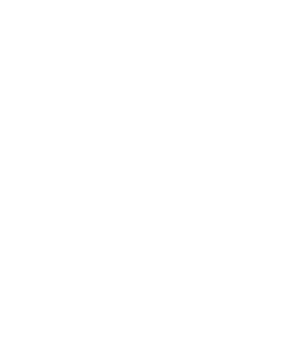
ウィリアム・E・マクレラン  
生年月日：1806年1月18日  
使徒に聖任された日付：1835年2月15日  
死亡年月日：1883年4月24日



パーリー・パーカー・プラット  
生年月日：1807年4月12日  
使徒に聖任された日付：1835年2月21日  
死亡年月日：1857年5月13日

ルーク・S・ジョンソン  
生年月日：1807年11月3日  
使徒に聖任された日付：1835年2月15日  
死亡年月日：1861年12月9日

ウィリアム・スミス  
生年月日：1811年3月13日  
使徒に聖任された日付：1835年2月15日  
死亡年月日：1893年11月13日

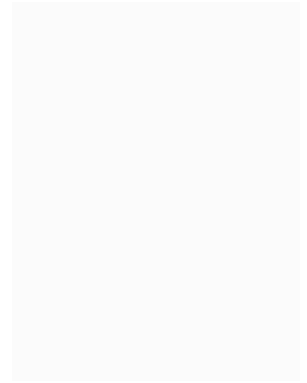
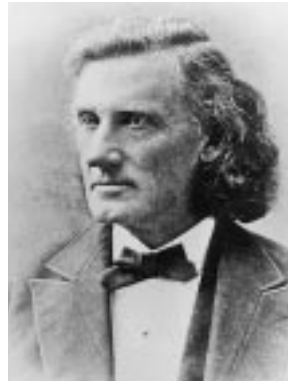




## 時満ちる時代の教会歴史

### オーソン・ブラット

生年月日：1811年9月19日  
使徒に聖任された日付：1835年4月26日  
死亡年月日：1881年10月3日



### ジョン・ファーナム・ポイントン

生年月日：1811年9月20日  
使徒に聖任された日付：1835年2月15日  
死亡年月日：1890年10月20日

### ライマン・ユージン・ジョンソン

生年月日：1811年10月24日  
使徒に聖任された日付：1835年2月14日  
死亡年月日：1856年12月20日

### ジョン・エドワード・ページ

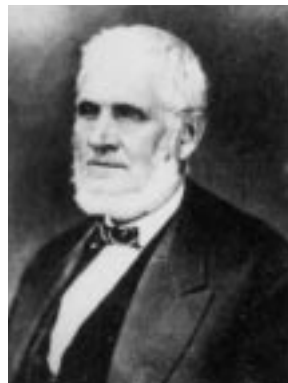
生年月日：1799年2月25日  
使徒に聖任された日付：1838年12月19日  
死亡年月日：1867年10月14日

### ジョン・テラー

生年月日：1808年11月1日  
使徒に聖任された日付：1838年12月19日  
死亡年月日：1887年7月25日

### ウィルフォード・ウッドラフ

生年月日：1807年3月1日  
使徒に聖任された日付：1839年4月26日  
死亡年月日：1898年9月2日



### ジョージ・アルバート・スミス

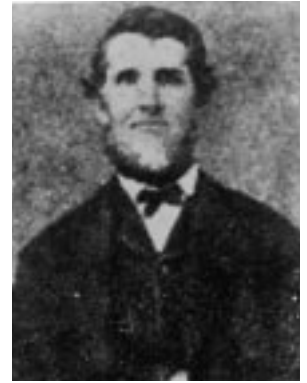
生年月日：1817年6月26日  
使徒に聖任された日付：1839年4月26日  
死亡年月日：1875年9月1日

### ウィラード・リチャーズ

生年月日：1804年6月24日  
使徒に聖任された日付：1840年4月14日  
死亡年月日：1854年3月11日

### ライマン・ホワイト

生年月日：1796年5月9日  
使徒に聖任された日付：1841年4月8日  
死亡年月日：1858年3月31日



### アマサ・メーソン・ライマン

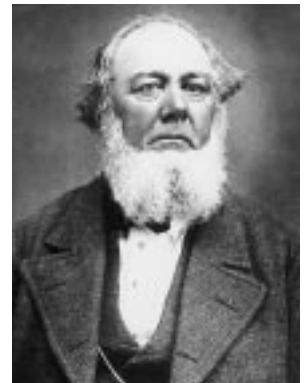
生年月日：1813年3月30日  
使徒に聖任された日付：1842年8月20日  
死亡年月日：1877年2月4日

### エズラ・タフト・ベンソン

生年月日：1811年2月22日  
使徒に聖任された日付：1846年7月16日  
死亡年月日：1869年9月3日

### チャールズ・コールソン・リッチ

生年月日：1809年8月21日  
使徒に聖任された日付：1849年2月12日  
死亡年月日：1883年11月17日



時満ちる神権時代の十二使徒定員会会員

ロレンゾ・スノー

生年月日：1814年4月3日  
使徒に聖任された日付：1849年2月12日  
死亡年月日：1901年10月10日



エラスタス・スノー

生年月日：1818年11月9日  
使徒に聖任された日付：1849年2月12日  
死亡年月日：1888年5月27日

フランクリン・デューイ・リチャーズ

生年月日：1821年4月2日  
使徒に聖任された日付：1849年2月12日  
死亡年月日：1899年12月9日

ジョージ・クェール・キャノン

生年月日：1827年1月11日  
使徒に聖任された日付：1860年8月26日  
死亡年月日：1901年4月12日



ジョセフ・フィールディング・スミス

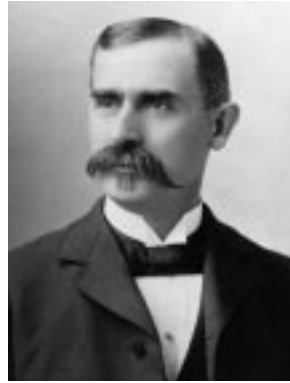
生年月日：1838年11月13日  
使徒に聖任された日付：1866年7月1日  
死亡年月日：1918年11月19日

ブリガム・ヤング・ジュニア

生年月日：1836年12月18日  
使徒に聖任された日付：1864年2月4日  
死亡年月日：1903年4月11日

アルバート・カリントン

生年月日：1813年1月8日  
使徒に聖任された日付：1870年7月3日  
死亡年月日：1889年9月19日



モーゼス・サッチャー

生年月日：1842年2月2日  
使徒に聖任された日付：1879年4月9日  
死亡年月日：1909年8月21日

フランシス・マリオン・ライマン

生年月日：1840年1月12日  
使徒に聖任された日付：1880年10月27日  
死亡年月日：1916年11月18日

ジョン・ヘンリー・スミス

生年月日：1848年9月18日  
使徒に聖任された日付：1880年10月27日  
死亡年月日：1911年10月13日



ジョージ・ティースデール

生年月日：1831年12月8日  
使徒に聖任された日付：1882年10月16日  
死亡年月日：1907年6月9日

ヒーバー・ジェディ・グラント

生年月日：1856年11月22日  
使徒に聖任された日付：1882年10月16日  
死亡年月日：1945年5月14日

## 時満ちる時代の教会歴史

ジョン・ホイッテカー・テラー  
生年月日：1858年5月15日  
使徒に聖任された日付：1884年4月9日  
死亡年月日：1916年10月10日



マリナー・ウッド・メリル  
生年月日：1832年9月25日  
使徒に聖任された日付：1889年10月7日  
死亡年月日：1906年2月6日

アンソン・ヘンリック・ランド  
生年月日：1844年5月15日  
使徒に聖任された日付：1889年10月7日  
死亡年月日：1921年3月2日

アブラハム・ホーランド・キャンノ  
生年月日：1859年3月12日  
使徒に聖任された日付：1889年10月7日  
死亡年月日：1896年7月19日



マサイアス・フォス・カウリー  
生年月日：1858年8月25日  
使徒に聖任された日付：1897年10月7日  
死亡年月日：1940年6月16日

エイブラハム・オーウェン・ウッドラフ  
生年月日：1872年11月23日  
使徒に聖任された日付：1897年10月7日  
死亡年月日：1904年6月20日

ラドガー・クローソン  
生年月日：1857年3月12日  
使徒に聖任された日付：1898年10月10日  
死亡年月日：1943年6月21日



リード・スムート  
生年月日：1862年1月10日  
使徒に聖任された日付：1900年4月8日  
死亡年月日：1941年2月9日

ハイラム・マック・スミス  
生年月日：1872年3月21日  
使徒に聖任された日付：1901年10月24日  
死亡年月日：1918年1月23日

ジョージ・アルバート・スミス  
生年月日：1870年4月4日  
使徒に聖任された日付：1903年10月8日  
死亡年月日：1951年4月4日

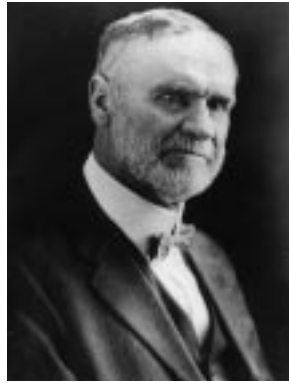


チャールズ・ウィリアム・ベンローズ  
生年月日：1832年2月4日  
使徒に聖任された日付：1904年7月7日  
死亡年月日：1925年5月16日

ジョージ・フランクリン・リチャーズ  
生年月日：1861年2月23日  
使徒に聖任された日付：1906年4月9日  
死亡年月日：1950年8月8日

## 時満ちる神権時代の十二使徒定員会会員

オーソン・ファーガソン・ホイットニー  
 生年月日：1855年7月1日  
 使徒に聖任された日付：1906年4月9日  
 死亡年月日：1931年5月16日



デビッド・オーマン・マッケイ  
 生年月日：1873年9月8日  
 使徒に聖任された日付：1906年4月9日  
 死亡年月日：1970年1月18日

アンソニー・ウッドワード・アイビンズ  
 生年月日：1852年9月16日  
 使徒に聖任された日付：1907年10月6日  
 死亡年月日：1934年9月23日

ジョセフ・フィールディング・スミス  
 生年月日：1876年7月19日  
 使徒に聖任された日付：1910年4月7日  
 死亡年月日：1972年7月2日



ジェームズ・エドワード・タルメージ  
 生年月日：1862年9月21日  
 使徒に聖任された日付：1911年12月8日  
 死亡年月日：1933年7月27日

スティーブン・L・リチャーズ  
 生年月日：1879年6月18日  
 使徒に聖任された日付：1917年1月18日  
 死亡年月日：1959年5月19日

リチャード・ロズウェル・ライマン  
 生年月日：1870年11月23日  
 使徒に聖任された日付：1918年4月7日  
 死亡年月日：1963年12月31日



メルビン・ジョセフ・バラード  
 生年月日：1873年2月9日  
 使徒に聖任された日付：1919年1月7日  
 死亡年月日：1939年7月30日

ジョン・アンドリアス・ウィットソー  
 生年月日：1872年1月31日  
 使徒に聖任された日付：1921年3月17日  
 死亡年月日：1952年11月29日

ジョセフ・フランシス・メリル  
 生年月日：1868年8月24日  
 使徒に聖任された日付：1931年10月8日  
 死亡年月日：1952年2月3日



チャールズ・アルバート・カリス  
 生年月日：1865年5月4日  
 使徒に聖任された日付：1933年10月12日  
 死亡年月日：1947年1月21日

ジョシュア・ルーベン・クラーク・ジュニア  
 生年月日：1871年9月1日  
 使徒に聖任された日付：1934年10月11日  
 死亡年月日：1961年10月6日

## 時満ちる時代の教会歴史

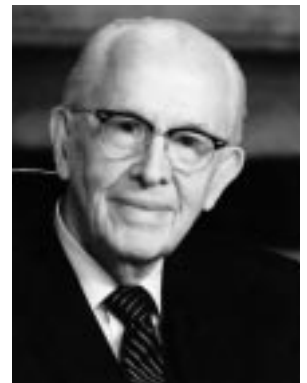
アロンゾ・アーザ・ヒンクレー  
 生年月日：1870年4月23日  
 使徒に聖任された日付：1934年10月11日  
 死亡年月日：1936年12月22日



アルバート・アーネスト・ボーエン  
 生年月日：1875年10月31日  
 使徒に聖任された日付：1937年4月8日  
 死亡年月日：1953年7月15日

シルベスター・クエイル・キャノン  
 生年月日：1877年6月10日  
 使徒に聖任された日付：1938年4月14日  
 死亡年月日：1943年5月29日

ハロルド・ビンガム・リー  
 生年月日：1899年3月28日  
 使徒に聖任された日付：1941年4月10日  
 死亡年月日：1973年12月26日



スペンサー・ウーリー・キンボール  
 生年月日：1895年3月28日  
 使徒に聖任された日付：1943年10月7日  
 死亡年月日：1985年11月5日

エズラ・タフト・ベンソン  
 生年月日：1899年8月4日  
 使徒に聖任された日付：1943年10月7日  
 死亡年月日：1994年5月30日

マーク・エドワード・ピーターセン  
 生年月日：1900年11月7日  
 使徒に聖任された日付：1944年4月20日  
 死亡年月日：1984年1月11日



マッシュー・カウリー  
 生年月日：1897年8月2日  
 使徒に聖任された日付：1945年10月11日  
 死亡年月日：1953年12月13日

ヘンリー・ディンウーディー・モイル  
 生年月日：1889年4月22日  
 使徒に聖任された日付：1947年4月10日  
 死亡年月日：1963年9月18日

デルバート・リーオン・ステイブレイ  
 生年月日：1896年12月11日  
 使徒に聖任された日付：1950年10月5日  
 死亡年月日：1978年8月19日



マリオン・ジョージ・ロムニー  
 生年月日：1897年9月19日  
 使徒に聖任された日付：1951年10月11日  
 死亡年月日：1988年5月20日

リグランド・リチャーズ  
 生年月日：1886年2月6日  
 使徒に聖任された日付：1952年4月10日  
 死亡年月日：1983年1月11日

時満ちる神権時代の十二使徒定員会会員

アダム・サミュエル・ベニオン  
 生年月日：1886年12月2日  
 使徒に聖任された日付：1953年4月9日  
 死亡年月日：1958年2月11日



リチャード・ルイス・エバンズ  
 生年月日：1906年3月23日  
 使徒に聖任された日付：1953年10月8日  
 死亡年月日：1971年11月1日

ジョージ・クェール・モリス  
 生年月日：1874年2月20日  
 使徒に聖任された日付：1954年4月8日  
 死亡年月日：1962年4月23日

ヒュー・ブラウン・ブラウン  
 生年月日：1883年10月24日  
 使徒に聖任された日付：1958年4月10日  
 死亡年月日：1975年12月2日



ハワード・ウィリアム・ハンター  
 生年月日：1907年11月14日  
 使徒に聖任された日付：1959年10月15日  
 死亡年月日：1995年3月3日

ゴードン・ビトナー・ヒンクレー  
 生年月日：1910年6月23日  
 使徒に聖任された日付：1961年10月5日

ネイサン・エルドン・タナー  
 生年月日：1898年5月9日  
 使徒に聖任された日付：1962年10月11日  
 死亡年月日：1982年11月27日



トーマス・スペンサー・モンソン  
 生年月日：1927年8月21日  
 使徒に聖任された日付：1963年10月10日

ボイド・ケネス・パッカー  
 生年月日：1924年9月10日  
 使徒に聖任された日付：1970年4月9日

マービン・ジェレミー・アシュトン  
 生年月日：1915年5月6日  
 使徒に聖任された日付：1971年12月2日  
 死亡年月日：1994年2月25日



ブルース・レッド・マッコンキー  
 生年月日：1915年7月29日  
 使徒に聖任された日付：1972年10月12日  
 死亡年月日：1985年4月19日

ローウェル・トム・ペリー  
 生年月日：1922年8月5日  
 使徒に聖任された日付：1974年4月11日

## 時満ちる時代の教会歴史

デビッド・ブルース・ヘイト  
生年月日：1906年9月2日  
使徒に聖任された日付：1976年1月8日



ジェームズ・エドラス・ファウスト  
生年月日：1920年7月31日  
使徒に聖任された日付：1978年10月1日

ニール・アッシュ・マックスウェル  
生年月日：1926年7月6日  
使徒に聖任された日付：1981年7月23日

ラッセル・マリオン・ネルソン  
生年月日：1924年9月9日  
使徒に聖任された日付：1984年4月7日



ダリン・ハリス・オークス  
生年月日：1932年8月12日  
使徒に聖任された日付：1984年5月3日

メルビン・ラッセル・バラード・ジュニア  
生年月日：1928年10月8日  
使徒に聖任された日付：1985年10月10日

ジョセフ・ビトナー・ワースリン  
生年月日：1917年6月11日  
使徒に聖任された日付：1986年10月9日



リチャード・ゴードン・スコット  
生年月日：1928年11月7日  
使徒に聖任された日付：1988年10月6日

ロバート・ディーン・ヘイルズ  
生年月日：1932年8月24日  
使徒に聖任された日付：1994年4月2日

ジェフリー・ロイ・ホランド  
生年月日：1940年12月3日  
使徒に聖任された日付：1994年6月23日



ヘンリー・ベニオン・アイリング  
生年月日：1933年5月31日  
使徒に聖任された日付：1995年4月6日

# 索引

## 英数字

1年分の貯蔵物資，第二次世界大戦中に恵みをもたらした，532  
1882年エドマンズ法，不法な同棲の意味を定義した，426  
1887年エドマンズ - タッカー法案，教会を政治的および経済的に壊滅させることを意図した，433，436  
「1800年代初めての，凍え死ぬほど寒い年」，夏が来なかった年，23  
1837年の恐慌，春に起きた経済恐慌，172  
1850年の妥協，ユタを準州とする，353  
1862年重婚禁止モリル法の概要，425  
末日聖徒に敵対する目的で定められた，382，425  
20世紀，に教会は突入した，458  
「95箇条の抗議文」，マルチン・ルター，6  
JST，『聖書』のジョセフ・スミス訳，117  
KZN  
KSLと名称を改めた，506  
ユタの最初のラジオ放送局，495  
Y.X.会社，ブリガム・ヤングが所有した郵便物の配達とポニーエクスプレスを業務とする会社，369  
ZCMI  
業務を展開する利点，396  
の設立，396

## あ

アイオワ，ノーブーを脱出した後に聖徒たちが旅した，309  
アイピンズ，アンソニー・W，の写真，621  
アシュトン，マービン・J，の写真，623  
アダム，アダム・オンダイ・アーマンにおいて義にかなう子孫に祝福を与え

た，187  
アダム・オンダイ・アーマン，救い主を迎えるために選ばれた義人が集められ，開かれる集会，187  
の意味，187  
場所に関する啓示，187  
アッチンソン，デビッド，聖徒たちと友好的だった弁護士，135  
アバード，サンブソン，「ダナイツ」と呼ばれた地下秘密社会を築いた，191  
『暴かれたモルモン教』，モルモンに敵対する内容が記された最初の書籍，114  
アブラハム書，神の賜物と力によってもたらされた，257  
アブラハムの記録，ジョセフ・スミスが翻訳した，257  
アメリカ  
選ばれた地として取っておかれた，8  
新エルサレムとなる，102  
への移民と発見，回復における重要性，8  
アメリカインディアン  
イスラエルの家の残りの者，79  
レーマン人と呼ばれる，79  
『合衆国政府の政治権力と政策に関するスミス将軍の見解』  
アメリカ合衆国大統領に立候補したときのジョセフ・スミスの見解を紹介するパンフレット，269  
最も重要な点，270  
アメリカ合衆国憲法  
に関する啓示，123  
末日における主の方式，110  
靈感による起草，123  
アメリカ独立戦争，に関する預言，122  
アリゾナ，におけるモルモン入植者の定着，412  
「荒野の中のシオン」，1846年から1847年の冬の間の教会を説明するために用いられた言葉，319  
『荒野に呼ばわる声』，オーソン・ハイド著，ドイツ語の論文，238  
アロン神権コーリレーションプログラ

ム，の導入，514  
アロン神権，備えの福音の儀式をつかさどる権能，122  
の説明，55  
暗黒の火曜日，株式市場が急落して底値をつけた，509  
暗黒時代，の解説，5  
安息日  
主を礼拝するために定められた聖なる日であることが強調された，110  
どのように守るべきか，110  
に関する啓示，110  
アンソン，チャールズ  
当時の古典研究者，46  
の写真，46  
ヘブライ語，バビロニア語を含む4つの言語に通じていた，45  
マーティン・ハリスに版が正確であることを記した証明書を渡したが，後にその証明書をり返した，46  
マーティン・ハリスが文字の写しを持って行った言語学者，45  
アンダーソン，ウィリアム<sup>しゅうちやう</sup>，デラウェアインディアンの年老いた酋長，85  
アンダーソン，リチャード・L，第二次世界大戦後の伝道に関する概要を作成した，542  
案内所  
最初の，の写真，474  
の設立，475  
委員会  
移住，聖徒をミズーリ州から脱出させるためにブリガム・ヤングによって組織された，212  
教会援護，の設立，511  
教会軍人，の組織，529  
教会ラジオ，広報，伝道資料，の組織，515  
コーリレーションおよび相互調整，の組織，519  
レーマン人および異文化，の組織，573  
イエス・キリスト



## 時満ちる時代の教会歴史

- 古代の使徒たちに鍵と権能を授けられた, 2
- 古代の使徒を自ら訓練された, 2
- 使徒たちに御自身の証人となる責任を与えられた, 2
- ダマスコへの道でタルソのサウロに語られた, 2
- 福音と大神権を回復された, 2
- 「世の初めからほふられた子羊」, 1
- を中心に御父の計画は立てられている, 1
- イエス・キリストの福音
- 地球の歴史よりも古い, 1
- の回復, 人類の歴史上の偉大な出来事, 1
- の原則は永遠である, 1
- イギリス
- 1900年代初頭における教会との関係, 472
- サタンとその軍勢に攻撃された宣教師, 174
- 初期の宣教師がもたらした成功, 174
- 初期の伝道活動を表す地図, 176
- 伝道活動の開始, 173
- における十二使徒の伝道, 228
- ヒーバー・C・キンボールが福音を宣言するために派遣された, 173
- 『幾つかの驚くべき示現に関する興味深い記録』オーソン・プラット著, 最初の示現についての印刷物として初めて世に出された記録, 232
- イザヤ
- 成就した預言, 45
- 未来のシオンについて預言した, 102
- 移住, アメリカへ渡ったイギリスの聖徒たち, 233
- イスラエルの陣営
- 聖徒たちは根気よく旅を続けてアイオワを横断した, 309
- 二つの重要な道, 312
- 一致, ソルトレーク神殿奉献式のテーマ, 445
- 一夫多妻
- 神の命令によって実施を中止した, 440
- 教会歴史の初期の時代に与えられた神の戒め, 424
- 公式の宣言, 439
- の実施, 424
- 反対運動, 425
- 万物の回復の一部, 256
- 『イブニング・アンド・モーニング・スター』
- からの抜粋, 109
- 教会で初めて出版された定期行物, 109
- 『戒めの書』
- 教会の教義と管理制度に関して主から与えられた指示, 119
- の写真, 119
- 末日における教会の基礎となる啓示, 119
- 印刷所, W・W・フェルプスの, 暴徒の襲撃によりほとんど破壊された, 133
- インスティテュート
- 第二次世界大戦後の成長, 558
- の設立, 506
- インターマウンテン健康管理, の組織, 572
- インディアン移住法案, アンドリュー・ジャクソンの署名をもって法制化された, 79
- インディペンデンス, ミズーリ州
- 神殿建設用地, の写真, 106
- 神殿建設用地の奉献, 107
- 『インブルーメント・エラ』
- 聖徒たちを善に向かわせる力強い声となった, 485
- 青年男子相互発達協会の機関誌『コントリビューター』に代わるものとなった, 459
- 『ユタ系図歴史機関誌』の果たしてきた役割を引き継いだ, 519
- ウィークス, ウィリアム, ノープー神殿の建築設計士, 242
- ウィード, サーロー, 翻訳が正確なものであることを信じなかったという理由で『モルモン書』を印刷する仕事を断った, 61
- ウイスキーストリート, ソルトレーク・シティーのメインストリートに一時的につけられた名称, 377
- ウィックリフ, ジョン, 著名な宗教改革者, 7
- ウィットソー, ジョン・A, の写真, 621
- ウィリアムズ, フレデリック・G
- ジョセフ・スミス家の主治医, 82
- の写真, 82
- ウィリアムズ, ロジャー
- 1635年, マサチューセッツ州から追放された, 9
- 教会と国家の分化について論争した, 9
- 清教徒の中で率先して国教会に異議を唱えた人, 9
- ロードアイランドに入植する権利を得る助けをしていた, 9
- ウィンタークォーターズ
- 開拓者隊の備えの地, 329
- における生活の説明, 319
- の建設, 316
- ウィンタークォーターズの記念碑, の写真, 309
- 『ウーマンズ・エクスポネント』, 扶助協会と密接な関係を保ちながら, 女性の手によって発行された機関誌, 407
- 『ウェインセンチネル』, 『モルモン書』の発行前と発行後に入手が可能であることを公告した, 65
- 『ウェスタンモニター』, ミズーリ州フェイエットで発行された新聞, 134
- ウエルズ, エメリン・B
- 人物描写, 478
- の写真, 478
- ウエルズ, ジュニアス・F
- 人物描写, 409
- の写真, 409
- ウエルズ, ダニエル
- 人物描写, 390
- の写真, 390
- ウエルズ, ヒーバー・M
- 人物描写, 442
- の写真, 442
- ユタ州初代知事, 442
- ウェントワース書簡
- 教会に関する要求の回答としてジョセフ・スミスがジョン・ウェントワースに送った数ページの文書, 256
- 教会の重要な文書, 256
- ウェントワース, ジョン, 人物描写, 257
- 失われた原稿
- 原稿が失われた後, 邪悪な人々によって内容が変更された, 48
- の経緯, 46
- リーハイ書から取り去られた116ページ, 48, 49
- ウッド, ゴードン・S, 回復に最も適した時期, 12
- ウッドラフ, ウィルフォード
- 90歳の誕生日を祝った, 448
- 1840年に実施した旅行の概要, 230
- 系図に関する啓示, 446
- 公式の宣言, 439
- シオンの陣営に志願した, 142
- 死者の救いのための活動を促進した,

## 索引

- 445  
死の床にあった双子に癒しの儀式を施すためにジョセフ・スミスから与えられた赤い絹のハンカチ, 219  
ジョン・テラーの跡を引き継いで大管長となった, 435  
セントジョージ神殿におけるベンジャミン・フランクリン, 445  
長老証明書, の写真, 158  
の死去, 449  
の写真, 142, 435, 618  
の生涯, 435  
病床から起き上がって病気の妻に祝福を与えた後, イギリスへの伝道に旅立った, 227  
ウッドラフ, アブラハム・O, の写真, 620  
ウリムとトンミム, 版とともに隠された, 40  
エイズ, ゴードン・B・ヒンクレーによる説教, 605  
永続的移住基金制度, アイオワに集合する貧しい聖徒たちを支援した, 346  
英知, ジョセフ・スミスの解説, 259  
『エクスポジター』事件, 『ノーブーエクスポジター』を印刷するために使用されていた印刷機が破壊されたことにより発生した, 275  
エクレス, ステュアート・B, デゼレト産業の初代店長, 513  
エジプトに売られたヨセフ, ジョセフ・スミスに関する預言, 21  
エノク, シオンの社会を築いた, 102  
エバンズ, リチャード・L, の写真, 623  
エライアス, カートランド神殿においてアブラハムの福音の神権時代の鍵を授けた, 165  
エリー運河  
重要な内陸交通手段, 29  
の写真, 30  
エリヤ, カートランド神殿において結び固めの鍵を回復した, 165  
エルサレムセンター, の写真, 604  
エルサレム, の地図, 583  
『エンサイン』, 教会の機関誌, 発行を開始した, 569  
エンジェル, トルーマン・O, カートランド神殿建設の現場監督, 161  
エンダウメント  
に関してジョセフ・スミスに与えられた指示, 252  
の意味, 254  
黄金の犬釘, セントラルパシフィック鉄道とユニオンパシフィック鉄道が結ばれる地点で使用された, 395  
おおかみ狩り, 聖徒たちの農場を手に入れ, 侵略するために暴徒がとった偽装行為, 270  
オクス, ダリン・H, の写真, 624  
オハイオ  
初期の北東部の地図, 113  
に移るように主は民に命じられた, 89  
「オリーブの葉」, 教義と聖約88章, 128  
オルガン, タバナクルの  
完成, 390  
の建設, 399  
音楽, 現在の神権時代における重要性, 74  
御父と御子, 神, イエス・キリスト, 聖霊, アダム役割に関して大管長会が1916年に発表した説明, 486
- ### か
- カーセージの監獄  
教会が購入した最初の史跡地, 476  
の絵, 279  
の詳細, 279  
カーター, シメオン, パーリー・P・ブラットを通じて教会に加入した, 84  
カード, チャールズ・オラ  
人物描写, 608  
の写真, 609  
ガードハウス, ソルトレークにおけるジョン・テラーの公邸, 434  
カートランド安全協会  
事業は失敗した, 172  
ジョセフ・スミスがカートランドで発足させたいと考えていた銀行, 171  
の銀行券, の写真, 171  
カートランド安全協会反銀行会社, カートランドにおいて発足した共同株式会社, 171  
カートランド, オハイオ州, 初期伝道活動の中心地, 123  
カートランド神殿  
兄弟たちに示現によって明らかにされた, 161  
建設するようとの指示, 161  
資金調達を承認する証明書, 164  
示現と啓示が与えられた大いなる日, 165  
ジョセフ・スミスが受けた日の栄えの  
王国に関する示現, 163  
聖徒たちが神殿を通して受けた偉大な祝福, 163  
独特の内装, 161  
の写真, 166  
の設計図, 162  
の奉献, 164  
末日の神権時代に建てられた初の神殿, 161  
カートランドの陣営  
憲章, の写真, 178  
聖徒たちはミズーリ州へ移動した, 177  
カーズ, トーマス・  
幾多のモルモン反対運動を展開した, 470  
鉱山業の富豪, モルモンではなかった, 470  
人物描写, 470  
「ソルトレーク・トリビューン社」を買収した, 471  
の写真, 471  
改革の動き, 1856年から1857年の間に行われた教会の, 365  
改宗, タルソのサウロの, 教会が成長するうえで重要な役割を演じた, 2  
会衆派教会, 1700年代にニューイングランドで組織された宗教, 16  
開拓者百年祭, 第二次世界大戦後に実施した, 547  
開拓者隊  
の結成, 329  
の旅, 330  
回復  
ノーブー市の再建, 555  
の時代が主の手によって導かれていたことが明白だった, 11  
福音, の必要性, 1  
カウドリ, オリバー  
1848年に再びバプテスマを受けた, 186  
印刷するために, 『戒めの書』の原稿をミズーリまで運ぶよう命じられた, 119  
インディアンのための学校を設立する許可を求めるためにウィリアム・クラーク将軍に手紙を書いた, 86  
ウィリアム・クラーク将軍にあてた手紙, の写真, 87  
公の場における教会の最初の説教を行った, 68  
教会が組織された集会で長老に聖任さ

## 時満ちる時代の教会歴史

れた, 67  
教会指導者を迫害したかどで有罪となる, 186  
原稿を紛失した事件の後, モロナイがジョセフ・スミスに約束した新しい筆記者, 52  
ジャクソン郡の土地を売却したかどで告発された, 186  
主から啓示と確約を受けた, 53  
生涯に関する解説, 52  
ジョセフ・スミス・シニアの家に下宿し, 金版について知った, 53  
ジョセフ・スミスとともに, 回復の第二の証人として立った, 153  
ジョセフ・スミスに会った, 53  
ジョセフ・スミスに対して命令することのないように命じられた, 77  
の写真, 52  
ジョセフ・スミスの人格を傷つけようとしたかどで告発された, 186  
ジョセフ・スミスの筆記者, 52  
大管長補佐に聖任された, 153  
デビッド・ホイットマーとの親交, 53  
の到着, 筆記者として助けるため, 52  
背教と破門により, 大管長補佐の職を失った, 153  
ハイラム・スミスとともに『モルモン書』出版作業を監督した, 62  
バプテスマのヨハネの訪れを受けた, 55  
バプテスマのヨハネによってアロン神権を授けられた, 55  
バプテスマのヨハネの指示に基づいてジョセフ・スミスにバプテスマを施した, 55  
バプテスマを受けた後に聖霊に満たされた, 55  
バプテスマを受けることを願った, 55  
破門された, 186  
へのペテロ, ヤコブ, ヨハネの訪れ, 56  
翻訳が神の力によって行われていることをデビッド・ホイットマーに証した, 56  
翻訳する力を授けられた, 54  
メルキゼデク神権を授けられた, 56  
『モルモン書』を出版するために印刷業を学んだ, 63  
『モルモン書』の証人となることを約束された, 59  
レーマン人の中で伝道する召しを啓示によって与えられた, 79

カウドリ, ライマン, オリバー・カウドリの兄, 52  
カウリー, マサイアス・F  
公式の宣言二が発表された後に十二使徒を辞任した, 470  
の写真, 620  
カウリー, マシュー  
太平洋地域における伝道活動, 541  
の写真, 541, 622  
ポリネシアの使徒, 541  
科学, の時代に呼応する, 488  
拡大, 教会歴史の初期の時代におけるユタからの, 412  
合衆国憲法修正第18条, の撤回, 498  
家庭の夕べ  
に関する新たな強調, 564  
の確立, 486  
カナダ, 南部  
教会史跡, の地図, 117  
ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンの伝道活動, 116  
神  
人類の歴史の広大な計画を立てられた, 11  
初めから終わりを知っておられる, 11  
人を偏り見られない, 2  
歴史上の重要な事項について手を下された, 11  
神の顕現  
『聖書』によって確認されている真実性, 33  
の意味, 33  
神の力が現された日, マラリヤからの治癒, 217  
カミング, アルフレッド, の写真, 369  
かもめ  
記念碑, の写真, 340  
ソルトレーク盆地からクリケットを取り除いた, 340  
ユタ州の州鳥, 340  
ガラティン, ミズーリ州, 投票日に起きた闘争, 193  
ガランド, アイザック  
人物描写, 215  
の写真, 215  
カリス, チャールズ・A, の写真, 621  
カリントン, アルバート, の写真, 619  
カルビン主義, の基本的信条, 8  
カルビン, ジョン  
カルビン主義を展開した, 8  
スイスにおける中心的な宗教改革者, 8

監督  
イスラエルの一般判士, 120  
教会歴史の初期の時代に, 課せられた義務, 120  
管理, 1970年代初頭に実施された統合化, 568  
機関誌, 教会の, 1970年代初頭に統一された, 569  
木削り口笛隊, 299  
木箱, 版を納めた, の写真, 44  
キニー, ジョン・F, ユタ準州の歴史を通じて唯一のモルモンでない連邦下院議員, 385  
記念公園, オーソン・ハイド, の写真, 582  
記念碑  
ジョセフ・スミスをたたえる, の写真, 476  
ブリガム・ヤングをたたえる, の写真, 448  
「ディス・イズ・ザ・ブレース」, の奉獻, 547  
ギブソン, ウォルター・ムレー  
太平洋諸島で働く召しをブリガム・ヤングから受けた, 386  
ハワイにおいて問題を起こした, 386  
キャノン, アブラハム・H, の写真, 620  
キャノン, ジョージ・Q  
人物描写, 388  
鋭い洞察力を持った政治家, 462  
ユタの州昇格に影響力を発揮した, 462  
『ジュブナイル・インストラクター』を通して足跡を残した, 462  
の写真, 388, 619  
キャノン, シルベスター・クェール  
人物描写, 510  
の写真, 510, 622  
キャノン, ヒュー・J, 全世界を巡って伝道活動を行った, 499  
キャンベル, アレキサンダー, 「キリストの弟子」または「キャンベル派」と呼ばれた教会の設立に寄与した, 80  
求正派, 『新約聖書』に基づくキリスト教社会に戻ることを求めた人々, 12, 80  
教育  
1900年代, 教会教育機関の登録者数一覧表, 557  
第二次世界大戦後の教会教育機関の拡大, 556  
ユタにおける初期の聖徒たちの必要を

## 索引

- 満たす, 411
- 教育週間, プリガム・ヤング大学における, の創設, 506
- 『教会概史』, B・H・ロバーツ著, の由来, 477
- 教会教育管理部, の組織, 447
- 教会執務ビル, の完成, 482
- 教会相互調整評議会
- 教会の各種プログラムを調整するために設置された, 563
- ハロルド・B・リーによって組織された, 563
- 教会の各組織, 存在する理由, 519
- 教会の教育
- 新たな展開, 505
- 大恐慌のさなかとその後実施された拡充, 517
- 3つの大原則, ニール・A・マックスウェルが語る, 570
- 教会の設立
- 最初の集会, 67
- 出席者にとって忘れることのできない特別な機会, 68
- ジョセフ・スミスの10年間に及ぶ準備が頂点を迎えた, 67
- 教会の大会, 1830年に第3回大会が開かれた, 70
- 教会の大管長会, 王国の鍵を持つ, 120
- 教会の幌馬車隊, 毎年やって来る移民に対してユタから食料を運ぶため牛に引かせた幌馬車隊, 388
- 教会本部ビル, の完成, 569
- 『教会歴史粹』
- 回復の歴史, 507
- ジョセフ・フィールディング・スミス著, 507
- 『教義と聖約』
- 『戒めの書』に与えられた新しい書名, 159
- 大きく二つの部分に分けられる, 159
- の起源, 118
- の出版, 159
- タイトルページの写真, 159
- 共同保全法人, の組織, 512
- 協同組合事業, 末日聖徒の間で最初に組織された, 396
- 共同制度
- に関する重要な啓示, 98
- の設立, 403
- ギリアム, コーネリアス, 悪名高き反モルモン, 198
- 『キリスト・イエス』, ジェームズ・E・タルメージ著, の経緯, 487
- キリスト教信仰公認の勅令, コンスタンチヌスによる, 5
- キリスト教徒, 古代の, 反社会的存在であると考えられ, 無神論者と呼ばれていた, 5
- キリスト教, の分布, 図による説明, 3
- キリストの弟子, キャンベル派とも呼ばれた, 80
- ギルバート, ジョン・H
- 印刷のため, 『モルモン書』に句読点を付した, 64
- グランディン印刷所において印刷の組み版を作成した, 64
- の写真, 65
- キングトン, トーマス, イギリスにおける同胞教会の指導者, 後に末日聖徒となった, 230
- キンボール, スペンサー・W
- 家屋を清潔にするよう聖徒たちにチャレンジした, 585
- 健康上の重大な問題, 580
- 個人の清さを強調した, 580
- 「実行」, 580
- 十二使徒定員会に召された, 579
- 聖典に加えられた3つの啓示, 588
- 聖典の改訂版を発行した, 588
- 大管長を継承する過程, 295
- 墮胎に関する勧告, 585
- の死去, 599
- の写真, 579, 622
- の生涯, 579
- 母親が果たす役割の重要性について強調した, 586
- ハロルド・B・リーの跡を引き継いで大管長となった, 579
- 平等権修正案について論評した, 586
- 福音を宣べ伝える地としてポーランドを奉献した, 582
- ふさわしいすべての男性に神権を授けることに関する啓示, 584
- 『赦しの奇跡』の著者, 586
- レーマン人に特別な関心を払う召しを受けた, 546
- キンボール, ヒーパー・C
- 住居の写真, 300
- の写真, 617
- 福音を宣言するためイギリスへ派遣された, 173
- クック, フィリップ
- 人物描写, 325
- の写真, 325
- クモラの丘
- 教会が購入した, 508
- ドラムリンであったことが確認された, 40
- の写真, 40
- クモラの丘ページェント, 教会で最も成功した広報活動の一つ, 517
- クラーク, J・ルーベン, ジュニア
- が語った基本的な真理, 518
- 「教育に関して教会が進むべき道」, 518
- 人物描写, 511
- の写真, 511, 621
- 福祉プログラムの初期開発段階において影響力を発揮した, 510
- クラーク, ウィリアム
- の写真, 86
- メリウェザー・ルイスとともにルイジアナ購入地に関する調査を実施した, 86
- ルイジアナ準州に住むインディアン部族担当官, 86
- グラナイトセミナリー
- 最初のリリースタイム・セミナリークラス, 505
- の写真, 505
- クラブ, ウィリアム・ウォレス
- 人物描写, 387
- の写真, 387
- グランディン印刷所, の写真, 63
- グランディン, エグバート・B
- の写真, 62
- 不買運動の脅迫によって『モルモン書』の印刷を中断した, 65
- 『モルモン書』の発行を承諾した, 61
- グラント, ジェデダイア・モルガン
- 人物描写, 338
- の写真, 338
- 霊界に関する示現, 338
- グラント, ヒーパー・J
- アイダホ州アイダホフォールズに神殿を建設する計画を発表した, 543
- 「偉大にしてかつ進歩国家である日本へのごあいさつ」, 460
- 決意を最後まで貫くことで有名だった, 495
- 将来にわたって教会に影響を及ぼすことになった管理上の変更を実施した, 496
- ジョセフ・F・スミスの跡を引き継いで大管長となった, 495
- 日本伝道部を管理する召しを受けた,

## 時満ちる時代の教会歴史

- 460  
の死去, 535  
の写真, 460, 496, 619  
初めてラジオを通じて声明を発表した, 506  
メルビン・J・バラードを十二使徒定員会に召す際に経験した特別な出来事, 496  
ユタ生まれの最初の大管長, 495  
臨終の床にあったジョセフ・F・スミスから特別な祝福を与えられた, 495  
グリーン, ハービー, 大会開催中, 悪霊によって床に投げ出された, 100  
クルクト川の戦い  
サミュエル・ボガートの行為が発端となって起きた, 199  
ミズーリ州におけるモルモン戦争の転機, 199  
クレイトン, ウィリアム  
「恐れず来たれ, 聖徒」を書いた, 313  
人物描写, 313  
の写真, 313  
クローソン, ラドガー, の写真, 620  
グロー, ヘンリー, の写真, 399  
クロファー, ヘルベルト, 第二次世界大戦中に亡くなった著名な末日聖徒, 527  
軍需工業, 第二次世界大戦中の勃興, 531  
警告  
いたずらに悪霊にかかわることを避ける, 100  
霊的に熱狂しすぎることを避ける, 100  
啓示  
アダム・オンダイ・アーマンの場所, 187  
カートランド神殿における大いなる日, 164  
神と人との間のコミュニケーションの経路, 67  
教訓に教訓を加え, 規則に規則を加えられる, 119  
教会の名称を明らかにする, 187  
結婚, 254  
什分の一, 190  
食物に関する事項, 122  
ジョセフ・スミスが経験した啓示の種類, 49  
神権組織, 154  
すべてのふさわしい男性に神権が授けられる, 584  
知恵の言葉, 123  
奉献の律法, 190  
ミズーリ州ファーウェストに建設される神殿, 187  
預言者の塾, 122  
継承, の課程, 大管長会における, 295  
系図  
が強調された, 608  
に関する啓示, 446  
ゲイツ, スーザ・ヤング  
人物描写, 486  
の写真, 486  
『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』を創刊した, 486  
ゲイツ, ダニエル  
会衆派教会の執事, 18  
ルーシー・マック・スミスの祖父, 18  
ケインクリークの大虐殺, の解説, 432  
ケイン, トーマス・L  
人物描写, 353  
の写真, 353  
結婚, に関する啓示, 254  
ケネディー, デビッド・M, 外交問題特別顧問として召された, 582  
言語訓練伝道部, の設立, 555  
憲章, カートランド陣営の, 178  
権能, 有効なバプテスマを執行するために不可欠な, 68  
儉約協会, の設立, 409  
『高価な真珠』, の起源, 349  
公共の宝くじ, 大管長会の勧告, 606  
公式の宣言  
ウィルフォード・ウッドラフの指示の下で, 440  
神から与えられた啓示, 441  
教会はもはや多妻結婚を教えておらず, 実施していなかった, 440  
の経緯, 440  
公式の宣言一, からの抜粋, 441  
高等評議会, 教会歴史の初期の時代における義務, 121  
『幸福の探求』, 死すべき世の前と後の生活に関する末日聖徒の教えを描いた, 556  
コール, アブナー  
印刷所から『モルモン書』の原稿を盗み出して, 『リフレクター』に掲載した, 63  
パルマイラで発行された『リフレクター』の発行人, 63  
ペンネームをオベディア・ドッグベリ  
ーと称した, 63  
『モルモン書』の出版に反対した, 63  
コール, アンソン・B  
の写真, 490  
メキシコ伝道部における働き, 490  
コールズビルスクール, 教会歴史の初期の時代に子供たちの教育を開始した, 110  
国際伝道部, の設立, 575  
国際連盟, 教会の関与, 497  
ゴドビー, ウィリアム・S  
人物描写, 401  
の写真, 401  
子供たち  
責任を負う年齢に達する前に死んだ子供は日の栄えの王国に救われる, 164  
の死, ジョセフ・スミスの説教, 259  
コナー, パトリック・エドワード  
人物描写, 385  
の写真, 385  
ユタの鉱業の父, 385  
コルトリン, ゼベディー  
の写真, 104  
実りある伝道, 104  
コレイ, マーサ・ジェーン・ノウルトン  
人物描写, 412  
の写真, 412  
コロンプス, クリストファー  
インディアンの間で宗教を確立した, 8  
探検の旅の間, 神からの靈感を感じた, 8  
ニーファイは示現によって到着する模様を見た, 8  
のための儀式が執行された, 416  
コンスタンチヌス  
キリスト教信仰公認の勅令, 5  
死ぬまでキリスト教徒にはならなかった, 5  
ニケアの宗教会議召集を促した, 5  
マクセンチウスを征服した, 5  
自らの象徴として十字架を用いた, 5  
ローマのミルビアンブリッジでの戦い, の絵, 5  
さ  
最初の示現  
ステンドグラスに描かれた, 28  
の重要性, 35  
再バプテスマ, の慣習は廃止された, 447

## 索引

- 再臨  
ジョセフ・スミスによる教え, 259  
の図, 1
- 酒類製造販売禁止法  
アルコール飲料の販売, 497  
の撤回, 498
- サタン  
義の敵の根源, 73  
聖なる森における試みは失敗に帰した, 35  
聖なる森におけるジョセフの祈りの場に現れた, 33
- サッチャー, モーゼス  
人物描写, 443  
政治宣言の承認を拒否した, 443  
の写真, 443, 619  
福音を宣べ伝える地としてメキシコを奉獻した, 431
- 様々な組織, 教会に設けられている理由, 519
- サモア伝道部, の創設, 446
- サンダーソン, ジョージ・B, 「死神博士」と呼ばれていたモルモン大隊の医師, 325
- 三人の証人,  
の証, ピーター・ホイットマー・シニアの家で署名した, 68  
『モルモン書』, 59
- 賛美歌, 教会で最初の, エマ・スミスが編集した, 161
- シークサス, ジョシュア, 長老の塾から派生したヘブライ語を教える学校を指導した, 161
- シールド, ノーマン・ジョージ  
ドイツで立ち往生している宣教師を捜し出す特別な任務, 524  
の写真, 525
- シェーカー, キリストの再臨を信じる者たちの共同社会, 94
- シェキング・クエーカー, クエーカーと類似しているためにシェーカーに付けられた別称, 94
- ジェファーソン, トーマス  
アメリカで最も優れた政治家の一人, 1  
信教の自由の確立を目指す法案, 10  
政府は宗教組織から反対する圧力を加えられた, 10  
独立宣言の起草者, 11  
の彫像, 11  
バージニア大学の建学の父, 11
- ジェンソン, アンドリュー, 多くの歴史情報を収集する責任を受けた, 507  
「塩の説教」, シドニー・リグドンが行った熱烈な説教, 190
- シオン  
心をつにし, 思いをつにし, 義のうちに住み, 貧しい者はいなかった, 102  
最初のシオンのステーキ, 1834年にカートランドで組織された, 121  
初期の居住者は農夫と一般の労働者だった, 109  
土地の奉獻, 107  
の栄光, 多くの艱難を味わった後のみもたらされる, 127  
の確立, 人類の歴史上偉大な出来事, 1  
町を建設する計画, 130  
ミズーリに築かれた, 106  
約束の地の場所がジョセフ・スミスに啓示された, 106  
「レーマン人の境地」に設立された, 90, 105
- シオン共同組合商事, の写真, 397
- シオン資産保護法人, の設立, 496
- シオン中央取引所, の設立, 431
- シオンの学校  
記念碑の写真, 129  
ミズーリ州カンザスシティーで建設された最初の校舎, 129
- シオンの陣営  
古代イスラエルにおける軍の編成方法に倣って組織された, 143  
小グループに改編され, 陣営のメンバーが除隊した, 149  
将来の教会指導者となる人々にとって試しの場となった, 150  
陣営のメンバーの反逆のためにコレラが流行した, 149  
の絵, 140  
の行軍, の地図による説明, 144  
の説明, 142  
の徴募, 141  
の編成, 141  
の利点となった側面, 150  
暴徒からの襲撃を防いだ嵐に関する出来事, 148  
ミズーリの聖徒たちが土地を取り戻すのを助けられなかった, 150  
ミズーリの土地と人々を贖うために組織された, 141  
レーマン人の軍司令官ゼルフの遺骨を発見した, 145
- 市議会の建物, ユタにおける最初の公的な建物, 341
- 示現,  
カートランド神殿における大いなる日, 164  
モーセの, 『高価な真珠』に記されている, 73
- 死者の贖いに関する示現, 『教義と聖約』の中に正式に加えられた, 492
- 死者の救い, 日の栄えの王国に関する示現で説明された, 164
- 地震  
1923年関東で発生, 伝道活動が完全に中断された, 505  
中国, 北京近郊で発生, モルモンの若い女性が預言した, 93
- 七十人第一定員会, 教会の管理定員会として組織された, 591
- 七十人定員会, の廃止, 607
- 七十人, の組織, 154
- 七十人ホール  
の写真, 298  
の歴史, 298
- シップ, エリス・R  
人物描写, 426  
の写真, 426
- 使徒  
救い主により任命された, の説明, 2  
の使命, 225
- 支部, 用語の起源, 158
- シャープ, トーマス  
イリノイ州における教会敵対者の中心的存在, 265  
『ウォーソーシグナル』の編集者, 265  
の写真, 265
- ジャクソン郡, ミズーリ州  
ジョセフ・スミスの説明によるエデンの園があった場所, 106  
聖徒に敵対する暴徒の活動, 132  
の解説, 106
- ジャックモルモン, モルモンに対して友好的なモルモンでない人々を表す言葉, 137
- 『ジャパンメール』, 東京の有力な新聞, 460
- ジャンボ, メアリー, レーマン人の妻, レーマン人の間で伝道を始めるようヒーパー・J・グラントに要請した, 545
- 宗教, 新しい, 古代における宗教の発展, 5  
宗教改革者

## 時満ちる時代の教会歴史

- の貢献，偉大ではあったが，福音の回復の準備にすぎなかった，8
- 福音の回復に備えさせた，8
- 州昇格，ユタは1896年に実現した，442
- 従順，ジョセフ・スミスによる教え，259
- 「自由人である黒人」，解放された奴隷に付けられた名称，132
- 十二使徒定員会
- イギリスにおける伝道に与えた影響，233
- イギリスへの伝道，226
- 使徒の継承過程，295
- 先任順位が明確にされた，453
- 時満ちる神権時代の十二使徒定員会会員，617
- の使命，225
- の写真，617
- の責任，293
- の組織，回復において最も重要な出来事の一つ，153
- 預言者ジョセフが死亡したときの所在場所，287
- 十二使徒定員会，最初の
- オリバー・カウドリによって与えられた使徒の責任，154
- 「キリストの名の特別な証人」としての責務を与えられた，155
- 先任順位，を説明する表，154
- 東部への5か月間の伝道に関する説明，156
- 十二使徒補助，最初の任命，520
- 什分の一
- セントジョージ・タバナクルにおいてロレンゾ・スノーに与えられた啓示，455
- に関する啓示，190
- 祝福師の祝福，イスラエルの家における血統を明確にする，121
- 「主のみたまは火のごと燃え」，カートランド神殿の奉献のために書かれた曲，165
- 『主の宮』ジェームズ・E・タルメージ著，の経緯，487
- 『ジュブナイル・インストラクター』
- 刊行の経緯，408
- 「国々の歴史」という表題の記事を連載した，459
- 中央幹部の伝記物語を掲載した，459
- 日曜学校がジョージ・Q・キャンノン家から買い取った，485
- シュローダー，A・セオドア
- B・H・ロパーツに対する訴訟で起訴した，465
- 『ルシフェルのカンテラ』の編集者，465
- 巡回管理高等評議会，の説明，155
- 巡回説教者
- の絵，30
- 人々を教え導くためにメソジスト派で実施された，30
- 殉教
- の絵による説明，282
- の解説，280
- 少数民族，教会による働きかけ，573
- 証人の律法，『モルモン書』が真実であることを立証した，60
- ジョーンズ，ダン
- ジョセフ・スミスから与えられた預言的な約束，280
- 人物描写，280
- の写真，280
- 食事，に関する啓示，122
- 書籍，モルモンに敵対する，471
- ジョセフ・スミスが住んだ土地と建物，ノーブーにおける，の写真，217
- ジョセフ・スミスの先祖
- 父方，15
- 母方，17
- 初等協会
- において改善された事項，483
- の設立，410
- 初等協会小児病院
- 最初の，の写真，484
- デビッド・O・マッケイによって奉献された，544
- の写真，544
- ジョンストン，アルバート・シドニー
- 人物描写，374
- の写真，374
- ジョンソン，エリサ，ジョセフ・スミスは彼女のまひした腕を癒した，93
- ジョンソン，ジョン，住居の写真，114
- ジョンソン，ベンジャミン
- 人物描写，291
- の写真，291
- ジョンソン，ライマン・E，の写真（入手不能），618
- ジョンソン，ルーク・S，の写真，617
- 自立，聖徒が自分に必要なものを手に入れる基準，393
- 新エルサレム，ミズーリ州に建設される，122
- 神会
- ジョセフ・スミスによる解説，259
- の説明，486
- 進化論，に関する教会の立場，488
- 信教の自由
- アメリカ合衆国独特の特徴，10
- アメリカ合衆国における，9
- 憲法修正第1条で保証された，10
- 信教の自由を確立するための法案，の説明，10
- 神権
- 1877年に実施された大規模な組織再編成と改革，418
- 誓詞と聖約によって受ける，122
- の回復，54
- プログラムの拡大，482
- 神権時代，の意味，1
- 信仰箇条
- 教会の正式な教義として採用されるまでの経緯，256
- ジェームズ・E・タルメージによる講演，487
- 末日聖徒の信条が13箇条にまとめられた，256
- 信仰復興運動
- の絵，31
- の説明，30
- 真珠湾，日本軍の攻撃を受けた，528
- 真鍮の版，神に関する知識を人々にもたらすうえで大きな価値を持つ，40
- 神殿
- カードストン，アルバータ州，カナダ，489
- カートランド，現在の神権時代に建設された最初の神殿，161
- カートランド，建設の指示，161
- カートランド，中央幹部の兄弟たちに示現によって明らかにされた，161
- カートランド，の写真，166
- カートランド，の設計図，162
- カートランド，の奉献，164
- ジョセフ・スミスに与えられた啓示を通して関連する教義が次々に明らかにされた，254
- 世界の，489
- 全世界の神殿と奉献年月日一覧表，596
- セントジョージ，西部で最初に完成した神殿，414
- ソルトレーク，の奉献，444
- 内で執行される業の進展，595
- ノーブー，の建設，241
- ノーブー，の写真，242

## 索引

- ノーブー, の奉献, 317  
ノーブー, 歴史上重要な日付, 242  
ハワイ, 489  
マントイ, の奉献, 436  
ローガン, の奉献, 430  
ワシントン, スペンサー・W・キンボールにより奉献された, 569
- 人民党  
教会の政治組織, 438  
正式に解散した, 442
- スコット, アン, ジョセフ・スミスが翻訳した『聖書』の貴重な原稿を暴徒から守るために預かった, 213  
スコット, リチャード・G, の写真, 624  
スタウト, ホセア, の写真, 142  
スタンディング, ジョセフ  
殉教, 431  
人物描写, 431  
の写真, 431
- ステイブレイ, デルバート・L, の写真, 622
- ステーキ, シオンにおける最初の, カートランドで組織された, 121
- ストーウェル, ジョサイア  
ジョセフ・スミスが治安びん乱行為の嫌疑を晴らすために力を貸した, 71  
宝探しのためにジョセフ・スミスを雇った, 42
- ストラング, ジェームズ・J  
ストラングを後継者に指名し, 新しい集合地としてウィスコンシン州ポリーを指定したジョセフ・スミスからの手紙を持っていると主張した, 294  
の写真, 294
- スノー, エライザ・R  
教会で最も尊敬を受けた女性の一人, 398  
人物描写, 398  
の写真, 398
- スノー, エラスタス  
デンマークで福音を紹介する任命を受けた, 170  
の写真, 170, 619  
マサチューセッツ州セーレムから多くの聖徒が集められるとの主の約束が成就した, 170
- スノー, ロレンゾ  
ウィルフォード・ウッドラフの跡を引き継いで大管長となった, 451  
教会資金の支出に関して包括的な計画を立案した, 455
- 使徒としての召しを何よりも優先させた, 463  
重病に陥った, 461  
救い主の訪れを受けた, 452  
全世界に福音を広めることに関心を抱いていた, 459  
「全世界へのあいさつ文」, 458  
セントジョージ・タバナクルで受けた  
什分の一に関する啓示, 455  
中央幹部に与えた最後の指示, 462  
の改宗とバプテスマ, 160  
の写真, 451, 619  
の生涯, 451  
ビクトリア女王とアルバート公に『モルモン書』を贈呈した, 233  
「人の偉大な行く末」というテーマで説教を行った, 451  
人はいつか神のようになるという教義, 451  
『デゼレトニュース』を教会の管理下に取り戻した, 456
- スプーン寄付, 第二次世界大戦中に実施されたスプーン1杯のささげ物, 528
- スペンサー, オーソン  
人物描写, 246  
の写真, 246
- 「スポークンワード」, タバナクル合唱団のプログラムの一部, リチャード・L・エバンズが創作した, 506
- スポリ, ジェイコブ  
人物描写, 430  
の写真, 430  
パレスチナにおける教会の最初の宣教師, 430, 431
- スポールディング - リグドン説, 『モルモン書』に疑いを抱かせるサタンのため, 58
- スミス, アエサル  
神は人類に大いなる益をもたらす者としてスミス家からだれかをお立てになることを預言した, 17  
ジョセフ・スミスの父方の祖父, 16  
の家系を示す図, 76  
『モルモン書』を信じ, 大部分を読んだ, 17
- スミス, アルビン  
ジョセフ・スミスの長兄, 41  
ジョセフ・スミスは日の栄えの王国の示現でアルビンを見た, 164  
の死去, 41  
日の栄えの王国を受け継ぐ者, 41  
墓石の写真, 41
- スミス, アレクサンダー・ヘイル, ジョセフとエマ・スミスの間に生まれた息子, 188
- スミス印刷機  
の解説, 64  
『モルモン書』を印刷するために使用された, の写真, 64
- スミス, ウィリアム  
十二使徒の指示に従えなかった, 295  
ジョセフ・スミス・ジュニアの弟, 295  
の写真, 295, 617
- スミス, エマ  
「選ばれた婦人」, 74  
賛美歌を編集するよう啓示によって指示された, 74, 161  
十二使徒の指示に従えなかった, 295  
のパプテスマ, 71  
扶助協会の初代会長, 248
- スミス, サミュエル  
ジョセフ・スミス・ジュニアの弟, 55  
ジョン・P・グリーンの改宗に関与した, 74  
伝道活動の結果, 力ある人々を改宗に導いた, 75  
の死, 287  
の伝道活動, 74  
ヒーバー・C・キンボールの改宗に間接的に関与した, 75  
フィニアス・ヤングの改宗に関与した, 75  
福音が真実であるかどうかについて祈り, 啓示を受けた後にバプテスマを受けた, 55  
ブリガム・ヤングの改宗に間接的に関与した, 75
- スミス, ジュリアおよびジョセフ・マードック, ジュリア・マードックの死後, ジョセフおよびエマ・スミスの養子となった双子, 99
- スミス, ジョージ・A  
人物描写, 371  
の写真, 371, 618  
福音を教えている最中に起きた発砲事件, 124
- スミス, ジョージ・アルバート  
酒類製造販売禁止法の撤廃に対する落胆と論評, 498  
の死去, 547  
の写真, 535, 620  
の生涯, 535  
ヒーバー・J・グラントの跡を引き継



## 時満ちる時代の教会歴史

- いで大管長となった, 535  
人々に対するキリストのような愛, 535
- スミス, ジョセフ・F  
15歳のときにハワイで実りある伝道を行った, 467  
教会の教義の権威者, 467  
最初の示現の重要性, 36  
死者の贖いに関する示現, 492  
人物描写, 467  
説教と著作を抜粋して『福音の教義』が出版された, 467  
ソルトレーク神殿においてジョセフ・テンプル・ベネットに祝福を与えた, 445  
の写真, 467, 619  
ヨーロッパを訪問した最初の大管長, 489
- スミス, ジョセフ・サード, ジョセフとエマ・スミスの間に生まれた第四子, 生き延びた最初の子供, 116
- スミス, ジョセフ・シニア  
100エーカーの農場, の図による説明, 38  
一連の夢の説明, 22  
家族とともにニューヨーク州パルマイラへ引っ越した, 24  
気持ちの優しい人物として知られていた, 21  
祭司の聖任証明書, の写真, 70  
最初の大祝福師, 121  
朝鮮人参を大量に買い付けた, 21  
伝統的な教会に対して疑問を抱いていた, 21  
の写真, 122  
のパプテスマ, 68
- スミス, ジョセフ, シニア, とルーシー・マック, の子供たち, を説明する図表, 21
- スミス, ジョセフ・ジュニア  
赤れんが造りの店, の歴史, の写真, 253  
足の病気, 22  
アダム・オンダイ・アーマンの場所に関する啓示, 187  
アブラハムの記録の翻訳, 257  
アメリカ合衆国憲法に関する論評, 10  
アメリカ合衆国大統領候補, 269  
暗殺計画について警告を受けた, 177  
安息日に関する啓示, 110  
イリノイ州クインシーへ旅した, 213  
ウリムとトンミムを通して, ハイラム・スミスに関する主の御心を尋ねた, 55  
英知に関する説教, 259  
「エクスポジター」事件の後にカーセージにおいて逮捕された, 275  
エジプトに売られたヨセフの預言を成就する名前, 21  
エマ・スミスが「選ばれた婦人」であることを明らかにした啓示, 74  
エマ・ヘイルと結婚した, 43  
エマ・ヘイルとの出会い, 42  
エリサ・ジョンソンのまひした腕を癒した, 93  
エンダウメントに関する啓示, 252  
幼いころに盛んに行われた信仰復興運動と野外集会の影響を受けた, 30  
オリバー・カウドリとの出会い, 53  
オリバー・カウドリとハイラム・スミスに『モルモン書』の出版を監督する責任を与えた, 62  
オリバー・カウドリを筆記者として翻訳作業を開始した, 53  
御父, 御子, 聖霊に関する教え, 259  
御父と御子が別個独立した存在であることを証した, 35  
カートランド時代に実施された14回の伝道, 117  
カートランドとインディペンデンスにおける経済制度を併合して一つの組織とした, 115  
カナダ北部における伝道活動, 117  
神の靈感によって書かれた記録を翻訳するために天使たちにより備えられた, 41  
義人の死に関する教え, 261  
教会が全世界に満ちることを預言した, 113  
教会の設立時に長老の職に聖任された, 67  
教会の正しい名称を明らかにする啓示, 187  
教会歴史を最初から執筆した, 187  
教会を組織すべき日に関する啓示, 67  
『教義と聖約』中の啓示に関してオリバー・カウドリにあてた手紙, 77  
キング・フォレット説教, 275  
啓示を受ける様々な手段, 49  
結婚の聖約の重要性, 254  
原稿を失ったことを悲しむ, 48  
原稿を紛失した事件の後に, 翻訳する力と啓示を受ける力を与えられた, 48
- 声に出して祈りをささげる初めての試み, 32  
子供たちの死に関する説教, 259  
子供のころからキリスト教の影響の下で教育を受けた, 32  
再バプテスマに関する啓示, 68  
再臨に関する教え, 259  
サタンの実在を知った, 35  
さらに指示があるまで翻訳を中断した, 52  
シオンの陣営でのガラガラ蛇, 144  
シオンの陣営内で衝突が起きたときにシルベスター・スミスと馬が病気にかった, 145  
シオンの陣営の司令長官, 143  
示現に対する大衆の反応, 34  
示現に対する両親の反応, 34  
死者の救い, 164  
自宅近くの空洞の丸太の中に版を隠した, 43  
死の予感, 273  
宗教の探求, 30  
従順に関する教え, 259  
自由を愛した, 15  
出生地, の写真, 14  
出生地に建設された記念碑, の説明, 15  
出生にまつわる情報, 15, 21  
主の業に熱心に携わっていなかったため, モロナイから叱責された, 43  
少年時代初期の, 22  
ジョセフ・シニア, ジョセフ・ジュニア, ニューエル・ナイトの間の友情, 43  
ジョセフ・ナイト・シニアとの出会い, 43  
ジョセフにカートランドへ来てもらおう祈っていたニューエル・K・ホイットニーに関する示現, 90  
神権の各職の組織に関する啓示, 154  
神聖な版を託された, 44  
聖見者, 12  
聖見者, 翻訳者, 預言者, 使徒として任命された, 68, 120  
聖餐に用いるぶどう酒を敵の手から買わないように天使から警告を受けた, 74  
聖餐の象徴に関する啓示, 74  
『聖書』の翻訳, 117  
『聖書』の翻訳は彼の召しの一つの「枝」と考えられた, 117  
『聖書』の靈感による翻訳, 73

## 索引

- 『聖書』を信じるように教えられた, 32
- 聖なる森で父なる神とイエス・キリストの訪れを受けた, 33
- 聖なる森において赦しを受けた, 34
- セーレム, マサチューセッツ, 宝が隠されている家を探す, 170
- 責任を負う年齢に達する前に亡くなった子供たちの救い, 164
- タールを浴びせられ, 羽根をつけられた, の絵による説明, 114付
- 大会開催中に聖徒たちの目の前でサタンを追い出した, 100
- 大会開催中にハービー・グリーンから悪霊を追い出した, 100
- 大管長を務める傍ら, 時には専任宣教師として働いた, 117
- 大神権の大管長として支持された, 115
- 大神権の大管長として聖任された, 120
- 多妻結婚, 255
- 度重なる迫害のゆえに自分を使徒パウロにたとえた, 35
- 治安びん乱行為を働いたとして偽りの罪を着せられ, 逮捕された, 71
- 地上に教会を回復した, 26
- チフス熱の合併症, 15
- デビッド・ホイットマーがジョセフとオリバー・カウドリを迎えに来る示現, 56
- デビッド・ホイットマーとの出会い, 56
- に与えたニューイングランド地域の影響, 26
- ニューエル・K・ホイットニーとの出会い, 90
- ニューエル・ナイトから悪魔を追い出した, 69
- の偉大さ, 284
- ノーブー部隊を指揮した, 223
- の使命, 予任されていた, 15
- の殉教, 283
- の説教, 258
- の先祖, の図による説明, 15
- の父方の先祖, 15
- の名が良くも悪くもすべての民の中で覚えられる, 39
- の母方の先祖, 17
- の両親, に関する解説, 19
- 迫害を受けても, 決して示現を否定しなかった, 35
- 激しい嘔吐のためにあごの骨が外れた, 116
- バプテスマのヨハネによりオリバー・カウドリにバプテスマを施すよう指示された, 55
- バプテスマの祝福を求める, 55
- バプテスマのヨハネが訪れた, 55
- バプテスマのヨハネによってアロン神権を授けられた, 55
- バプテスマを受けた後, 聖霊に満たされた, 55
- 版を受けるために古代の使徒と預言者たちから教えを受けた, 41
- 日の栄えの王国に関する示現, 163
- 不正な動機のために版を与えられなかった, 40
- フリーメーソンとの遭遇, 264
- ブリガムおよびジョセフ・ヤングに対して, 彼らがシオンの陣営において危害を加えられないことを約束した, 142
- ブリガム・ヤングが教会を管理することを預言した, 116
- ペテロ, ヤコブ, ヨハネの訪れ, 56
- ヘブライ語に歓喜した, 160
- 骨の残骸はレーマン人の軍司令官ゼルフの骨であったことに関する示現, 145
- 翻訳に携わり, 教会を導くための備えとなった資質, 49
- 翻訳を完成させるためにホイットマー家に滞在した, 56
- まことの教会を探し求めるために『聖書』を調べる, 32
- 貧しい環境で育てられた, 30
- 末日聖徒の信仰の基礎となった深遠な真理を学んだ, 35
- ミズーリから脱出した, 215
- ミズーリ州インディペンデンスを奉献した, 神殿建設用地, 107
- ミズーリ州ジャクソン郡, エデンの園の所在地, 106
- ミズーリ州ファーウェストに定住した, 185
- 結び固めの力の鍵をブリガム・ヤングに授けた, 294
- メルキゼデク神権を授けられた, 56
- モットー 「主が命じられるときにそれを行う」, 49
- 最も名高い説教, 260
- 『モルモン書』の版權を申請した, 61
- 『モルモン書』の版權, 61
- 『モルモン書』翻訳の初期段階, 45
- 『モルモン書』を準備した, 1840年版の, 62
- モロナイの訪れを受けた, 37
- モロナイの最初の訪れ, 37
- モロナイは版を受けることについて警告し, 約束した, 43
- ヤコブの手紙第1章5節の重要性, 32
- 預言者としての召し, 73
- 預言者となるように予任された, 26
- リッチモンドにおいて看守を叱責した, の絵, 207
- リディア・ベイリー・ナイトの預言, 117
- リバティーの監獄に収監中, 主に訴えた, 207
- リバティーの監獄に拘留中, 主から教えを受けた, 207
- リバティーの監獄に拘留された, 206
- リルバーン・ボッグズの暗殺を企てたとして告訴された, 266
- スミス, ジョセフ・フィールディング
- 『教会歴史粋』の著者, 507
- ジョセフ・スミスの使命が神聖なものであることを擁護するとき決して打ち負かされないことを約束された, 566
- トロント伝道部長に関して預言的な約束を与えた, 525
- の写真, 566, 621
- の生涯, 566
- 背教は破壊的な結果をもたらすことを書き記した, 4
- 『預言者ジョセフ・スミスの教え』を一冊の本にまとめた, 566
- スミス, ジョセフ・マードック, の死, 115
- スミス, ジョン, の写真, 334
- スミス, ジョン・ヘンリー, の写真, 619
- スミス, シルベスター, シオンの陣営内に不和と争いをもたらしたグループのリーダー, 145
- スミス, ドン・カーロス, ジョセフ・スミスの弟, 71
- スミス, ネイサン
- 足の手術を行ったジョセフ・スミスの主治医, 23
- の絵, 23
- スミス, ハイラム
- 「エクスポジター」事件の後, カーセージでジョセフ・スミスとともに逮

## 時満ちる時代の教会歴史

- 捕に身をゆだねた, 277  
オリバー・カウドリとともに『モルモン書』の出版作業を監督した, 63  
自分に関する主の御心を尋ねるようジョセフ・スミスに求めた, 55  
ジョセフ・スミスの兄, 55  
の偉大さ, 284  
ミズーリの教会を叱責する手紙を書いた, 128  
スミス, ハイラム・マック, の写真, 620  
スミス, メアリー・デューティー  
ジョセフ・スミスの証を受け入れた, 17  
ジョセフ・スミスの父方の祖母, 17  
スミス, メアリー・フィールディング  
ジョセフ・F・スミスの母, 157  
ジョセフ・フィールディング・スミスの祖母, 157  
の写真, 158  
スミス, ルイーザおよびサダウス  
ジョセフおよびエマ・スミスの間に生まれた双子, 生後3時間で死亡した, 99  
スミス, ルーシー・マック  
19歳のころに霊的な感動を体験した, 19  
神と聖約を交わした, 20  
宗教と救いを見いだす努力をした, 20  
ジョセフ・スミスの母, 17  
の写真, 92  
のバプテスマ, 68  
スミス, ロト  
人物描写, 373  
の写真, 373  
スミス, ロバート, ジョセフ・スミスの父方の先祖でイギリスからアメリカに渡った人, 15  
スムート事件  
公聴会の影興, 470  
リード・スムートに関する公聴会, 467  
スムート, リード  
アメリカ合衆国上院議員, 467  
人物描写, 467  
の写真, 468, 620  
正貨, 金銀などの交換可能硬貨, カートランドで使用された, 171  
清教徒  
アメリカにおける価値観に大きな影響を及ぼした, 8  
厳格なカルビン派グループ, 8  
ニューイングランドにおいて力ある宗教団体を形成した, 9  
他の宗教を容認しない, 9  
政治宣言  
政教分離が強調された, 443  
中央幹部の政治行動についてはなお, 抑制されている, 443  
ユタが州に昇格した後中央幹部により公布された, 教会の政治規則として知られる公式の声明文, 443  
『聖書』, ジョセフ・スミスによって翻訳された, 117  
聖地, オーソン・ハイドによりユダヤ人の帰還の地として, 神殿の建設地として奉獻された, 235, 237  
聖典, スペンサー・W・キンポール大管長の時代に出版された改訂版, 588  
聖徒  
イリノイ州クインシーへの移動, 213  
カートランドにおける日常生活の説明, 159  
外国の, 489  
最初の協同組合, 396  
ノーブーへの移住, 215  
ミズーリ州における, 背きが原因で苦しみを受けた, 138  
『聖徒の町』, 1860年にユタを訪れた世界旅行家リチャード・パートンの著書, 383  
聖なる森, の写真による説明, 33  
「西部に向かって旅をしているイスラエルの陣営に関する主の言葉と御心」, 西部への旅に関してブリガム・ヤングに与えられた啓示, 330  
西部保護区, の定義, 80  
聖約, 主が示された条件を満たして初めて永遠の効力を持つ, 255  
セゴユリ, ユタ州の州花, 339  
セネカインディアン, 回復のメッセージに耳を傾けた最初のアメリカインディアン, 80  
セミナー  
第二次世界大戦後の成長, 558  
の創設, 505  
ゼルフ, レーマン人とニーファイ人の最後の戦争で殺されたレーマン人の軍司令官, 145  
宣教師  
教会歴史の初期の時代に「財布も, 袋も持たずに」旅をした, 388  
健康管理, が召された, 573  
西部の保護区, 80  
ドイツおよび周辺地域からの撤退, 523  
福音の奥義について教えることを控えるよう警告された, 124  
南太平洋および南アフリカからの撤退, 526  
レーマン人に対する, 79  
レーマン人に対する, の写真, 80  
宣教師活動  
1952年に初めて出版された公式の福音教授法, 554  
国際的, 第一次世界大戦後の, 499  
初期の働きと改宗, 74  
初期の女性宣教師の働きがもたらした成果, 456  
女性による最初の, 456  
第一次世界大戦後も引き続き強調された, 499  
大恐慌の時代, 514  
第二次世界大戦後の復興, 542  
太平洋地域で始められた, 238  
地域訓練センター, 458  
ナイジェリアとガーナで開始された, 585  
の訓練コース, 459  
レーマン人の間における活動地図, 84  
宣教師訓練センター  
最初の宣教師用宿舎, の写真, 504  
ソルトレーク・シティーに設立された, 503  
宣言, の内容, 主の戒めとしてジョセフ・スミスに与えられた, 241  
「全世界へのあいさつ文」, ロレンゾ・スノー, からの抜粋, 458  
戦争  
に関する啓示, 122  
に対する教会の姿勢, 492, 529  
ミズーリ州におけるモルモン戦争, 199  
選択の自由, 神から与えられた永遠の原則, 1  
セントジョージ神殿  
死者のエンダウメントが初めて行われた場所, 415  
西部で最初に完成した神殿, 415  
の建設, 415  
の写真, 416  
セントジョージ, ユタ州, 第2の教会本部となった, 415  
相互発達協会, の改善, 483  
速記法, 教会歴史の初期の時代には表音式速記法とも呼ばれた, 175

## 索引

- ソルトレーク劇場, の写真, 389  
ソルトレーク神殿  
建設の進行, 写真による説明, 445  
「主の家の山」, 446  
の奉献, 444  
ブリガム・ヤングによって明らかにされた敷地, 415  
ソルトレーク盆地  
開拓者が入った地点, 333  
最初の年の発展, 337  
入植地の確立, 333  
ユタのほかの地域の探索, 344
- た
- ターナー, ナット, 1831年にバージニア州で反乱を起こした奴隷, 132  
ダイ・アーマン, アダム・オンダイ・アーマンの周辺地域に付けられた地名, 188  
第一次世界大戦, における聖徒たちの関与, 491  
「大覚醒」  
アメリカ宗教史上重要な運動, 9  
の解説, 9  
大管長会, ソルトレーク盆地の発見後に再組織された, 334  
大管長, 全教会を対象とする啓示を受ける権利を持つ, 77  
大虐殺, ハウンズミルで起きた, 201  
大恐慌, 教会歴史上大きな影響を及ぼした, 509  
第三帝国, 教会に与えた影響, 522  
第二次世界大戦,  
北アメリカの教会に与えた影響, 531  
教会に与えた影響, 522  
教会の対応, 529  
教会プログラムの中断, 531  
伝道活動に与えた影響, 532  
後の教会の活動, 542  
後の教会教育プログラムの拡大, 556  
第二次大覚醒, の解説, 10  
第二の公式の宣言, 一夫多妻の廃止に関してジョセフ・F・スミスが公布した声明, 470  
大農場協会, ノーブーにおいて, 作物の収穫量と耕作地について規定を設けた, 244  
大背教, の説明, 176  
『タイムズ・アンド・シーズンズ』, ノーブーで発行された, 245  
ダイヤー, ジェームズ, ソルトレーク・
- シティーにおける広報活動の父, 475  
タイラー, ダニエル, モルモン大隊の歴史記録係, 324  
大陸横断鉄道, の発達, 393  
大陸横断通信線, ポニーエクスプレスが廃止されたおもな理由, 383  
宝探し, 地中に隠された金銭を掘り出すことを意味していた, 42  
ダグラス, スティーブン・A  
イリノイ州の民主党指導者で聖徒たちに力を貸した, 265  
最終的には聖徒に敵対した, 369  
人物描写, 266  
の写真, 266  
多妻結婚  
神の命令によって実施を中止した, 440  
教会歴史の初期の時代に神の戒めによって与えられた, 424  
公式の宣言, 439  
の実施, 424  
反対運動, 425  
万物の回復の一部, 256  
墮胎, スペンサー・W・キンボールの警告, 585  
タッカー, ポメロイ, グランディン印刷所の職長, 64  
脱出  
ノーブーから, 305  
ノーブーから, 絵による説明, 306  
ユタを越えて, 374  
タナー, ジョン, カートランド神殿建設のために, 持っていた財産のほとんどを差し出した, 163  
タナー, ネイサン・エルドン, の写真, 623  
ダナイツ, サンプソン・アバードが築いた秘密地下組織, 191  
タバナクル  
建設中と完成後, の写真, 400  
建築の着手, 389  
建物と建築に関する説明, 398  
タバナクル合唱団  
効果的な伝道的手段, 506, 516  
最初のラジオ放送, 506  
多分野学術協会, ロレンゾ・スノーによって創設された, 365  
ダリン, サイラス・E, ブリガム・ヤングの彫像, 448  
タルソのサウロ  
輝く光の中に救い主を見た, 2  
古代の教会において初期の信者を迫害した, 2  
サンヒドリン(議会)の一員, 3  
主の「選ばれた器」となった, 3  
の改宗, 教会の成長に大きな貢献を果たした, 2  
パウロとなった, 信仰の擁護者, 3  
タルメージ, ジェームズ・E  
『キリスト・イエス』の著者, 487  
『主の宮』の著者, 487  
『信仰箇条の研究』の著者, 487  
人物描写, 487  
の写真, 487, 621  
ダנקリン, ダニエル, 教会歴史の初期の時代にミズーリ州の知事を務めていた, 135  
断食日曜日, 様式の確立, 447  
タンブリッジ, パーモント州, の絵による説明, 20  
タンボラ山, 1815年に発生した大爆発, 23  
知恵の言葉  
に関する啓示, 122  
肉体の健康, 572  
地球, 試しの場所を与える, 1  
チャーチカレッジ・オブ・ハワイ  
の設立, 559  
ブリガム・ヤング大学ハワイ校と改称された, 559  
チャーチル, ウィンストン, 信教の自由を擁護した, 472  
チャーリー, ジョセフ・スミスが好んで乗った馬, 243  
チェイス, ウィラード, 魔術師に依頼して金版を探したジョセフ・スミスの家の近くに住んでいた人, 44  
中央神権委員会, の組織, 485  
朝鮮戦争, 伝道活動に与えた影響, 552  
長老の塾  
宣教師を訓練する重要な役割, 124  
の解説, 160  
追放, ミズーリから聖徒の, 193  
ツィングリ, ウルリック, スイスの中心的宗教改革者, 7  
通信手段, 1800年代におけるユタの聖徒と世界の聖徒たちとの間の, 383  
ティースデール, ジョージ, の写真, 619  
ディオクレティアヌス, キリスト教徒を迫害した, 5  
ディブル, フィロ  
狙撃されたが, ニューエル・ナイトによって奇跡的に癒された, 136

## 時満ちる時代の教会歴史

- のバプテスマ, 81
- デウィット, ミズーリ州, モルモン敵対者により包囲された, 196
- テラー, アルマ・O, 『モルモン書』を日本語に翻訳した, 460
- テラー, ジョン
- 一夫多妻反対者の襲撃から逃れるために地下に潜入した, 433
  - ジョセフ・スミスの無実の血が流されるのを使徒として目撃した, 283
  - 『神権に関する事項』の著者, 429
  - 人物描写, 283
  - 『仲保と贖罪』の著者, 429
  - の改宗, 157
  - の死去, 433
  - の写真, 157, 283, 423, 618
  - の生涯, 422
  - ブリガム・ヤングの跡を引き継いで大管長となった, 423
- テラー, ジョン・W
- ジョセフ・F・スミスが多妻結婚について第二の宣言を公布した後に十二使徒定員会に対して辞表を提出した, 470
  - の写真, 620
  - ヒーバー・J・グラントが経済的な自由を得た後に, 日本の伝道部を管理するようになることを預言した, 460
- 手車隊
- 聖徒たちは移住するために大平原を横断した, 358
  - 隊一覧表, 361
- デゼレト
- アルファベット, ブリガム・ヤングが発案した音標文字, 398
  - 言葉の意味, 337
  - 州への昇格を申請した, 352
  - 名称がユタと変更された, 353
- デゼレトクラブ, の創設, 517
- デゼレト産業
- の写真, 513
  - の設立, 512
  - 4つの主要な目標, 513
- デゼレト州, の設立, 340
- デゼレト大学, の設立, 364
- デゼレト日曜学校連盟, の設立, 408
- 『デゼレトニュース』
- 教会の公式な新聞, 364
  - の成り立ち, 364
- デゼレトブック社, の設立, 481
- 鉄の馬, 大陸横断鉄道に付けられた名前, 393
- デトロイト刑務所, 「不法な同棲」のことで有罪判決を受けたモルモンが収監された, の写真, 428
- デビッドソン, ジェームズ, ジョセフ・スミスと親交のあった法律愛好者, 72
- デュセンベリー学校, の設立, 411
- テンプルスクウェア
- 効果的な伝道的手段, 516
  - 敷地内の建物の地図, 437
  - の写真, 516
- テンプルスクウェア伝道部
- 教会の伝道プログラムにおいて重要な位置を占める, 474
  - の成功, 474
  - の設立, 474
- ドイツ, オーストリアの併合, 523
- 動機
- ジョセフ・スミスは版を手に入れるに当たって一つの目的以外にほかの目的を抱いてはならないことを指示された, 39
  - マウンテンメドーの虐殺, 371
  - 「時を超えたメッセージ」, 各神権時代を描写した100周年記念ページメント, 507
- 独立宣言
- トーマス・ジェファーソンにより起草された, 11
  - の署名者たち, のために執行された儀式, 416
- 時計, ジョセフ・スミスがニューエル・K・ホイットニーに与えた, の写真, 116
- ドニファン, アレクサンダー
- ジャクソン郡で聖徒たちと親交があった弁護士, 135
  - 州の議員であり, 聖徒たちの友人であった, 183
  - 人物描写, 183
- デイビーズ郡とコールドウェル郡を命名した, 183
- の写真, 183
- トプスフィールド, マサチューセッツ州, ジョセフ・スミスの先祖の多くが住んでいた小さな町, 16
- ドラムリン, の意味, 40
- ドラモンド, ウィリアム・W, ユタで聖徒たちと対立した, 368
- トランボ, アイザック
- 住居の写真, 449
  - 人物描写, 439
- 聖徒たちのロビー活動を支援した, 439
- の写真, 439
- トロント, ワレス・F
- 人物描写, 525
  - 第二次世界大戦中にドイツの秘密国家警察に捕らえられた4人の宣教師を取り戻した出来事, 525
  - 第二次世界大戦中のドイツ伝道部の部長, 525
  - の写真, 525
- な
- 
- ナイト, アマング・アイネズ
- の写真, 457
  - ルーシー・プリムホールとともに独身の姉妹として最初に召された宣教師, 456
- ナイト, ジョセフ, シニア
- ジョセフ・スミスの証を受け入れた, 43
  - ジョセフ・スミスを雇用した, 43
  - ジョセフとオリバーを支援するために食料と金銭を提供した, 54
  - のバプテスマ, 71
- ナイト, ジョセフ, ジュニア, ジョセフ・スミスの証を受け入れた, 43
- ナイト, ニューエル
- 悪魔にとりつかれる体験をした, 69
  - 永遠が開け放たれる示現を受けた, 69
  - ジョセフ・スミスの証を受け入れた, 43
  - 救い主に関する示現を受け, 主の前に行くことを許されることを知った, 70
  - のバプテスマ, 69
  - フィロ・ディブルに神権の祝福を受けた, 胃に銃弾を受けたフィロは奇跡的に癒された, 136
- ナイト, ポリー
- 健康を害していたが, 生きて約束の地を見ることを望んだ, 105
  - ニューエル・ナイトの母, 105
  - ミズーリで埋葬された最初の末日聖徒, 105
- ナイト, リディア・ベイラー
- カナダ南部における改宗, 117
  - セントジョージ神殿においてこの世を去った700名の親戚に儀式を施した, 117
  - 父親の家の救い手となることをジョセ

## 索引

- フ・スミスから告げられた, 117  
ニューエル・ナイトと結婚した, 117  
ナイ, ハリエット・マリア・ホースプ  
ール, 最初の女性宣教師, 456  
ナチス  
国家社会主義者, 522  
人種の純血性を維持することを強調し  
た, 522  
南アメリカにおける教会活動に影響を  
与えた, 523  
「悩める旅人」, ジョン・テラーがカー  
セージの監獄で歌った, 281  
南北戦争  
ジョセフ・スミスによって預言されて  
いた, 381  
ユタに与えた影響, 381  
ニーフアイ  
1812年のアメリカ独立戦争を予見し  
た, 9  
古代モルモンの預言者, 8  
証人を必要とすることについて書き記  
した, 59  
レーマン人が異邦人によって散らされ  
るのを予見した, 9  
肉体の健康, の重要性, 572  
ニケアの宗教会議, キリスト教の最初の  
全体会議, 5  
日曜日, 聖なる日として認められた,  
110  
日本  
1923年に発生し, 壊滅的な被害を与え  
た地震, 505  
真珠湾攻撃, 528  
第二次世界大戦後の伝道部の再開,  
541  
における宣教師の働き, 460  
「日本人のための日本」, 西欧化を最小限  
にとどめるために日本政府により実施  
された政策, 461  
『ニューエラ』, 教会の機関誌, 発行を開  
始した, 569  
ニューエル・K・ホイットニーの店  
一時期, 監督の倉として使用された,  
91  
初期の教会本部, 91  
ジョセフ・スミス・サードの出生地,  
91  
の写真, 91  
の平面図, 123  
預言者の塾の集会場所, 91  
入植地, 西部における拡大, 361  
ニューヨークの聖徒たち  
カートランドへ移動した, 91  
神の戒めに従って西部へ移住した, 92  
認可書, 教会を代表することを承認した  
小さな文書, 70  
ネバダ準州, 1861年に創設された, 382  
ネルソン, ラッセル・M  
心臓外科医, スペンサー・W・キンボ  
ールの手術に先立って大管長から祝  
福を受けた, 580  
の写真, 624  
農業説教者制度, バプテスト派が教会運  
営のために採用した, 30  
ノーブー  
教育制度, 244  
建設された様々な建物, 243  
社会的側面, 246  
ジョセフ・スミスの死後の発展と成  
長, 298  
聖徒たちはマラリヤに感染した, 217  
土地の購入, 216  
の写真, 299  
の成長, 243  
病気, 死, 苦難, 246  
ブリガム・ヤングによって「ジョセフ  
の市」と改名された, 299  
ヘブライ語で「美しい」という意味を  
持つ, 217  
「貧しい聖徒たち」が救われた, 317  
『ノーブーエキスポジター』  
印刷機が破壊された, 『エキスポジタ  
ー』事件へと発展した, 275  
『エキスポジター』事件を引き起こし  
た教会を攻撃する新聞, 275  
ノーブー憲章  
の廃止, 299  
法制化されるまでの段階, 222  
ノーブー市立大学, ノーブーの教育制度  
の頂点, 245  
ノーブー神殿  
重要な日付, 242  
の絵, 242  
の建設, 242  
の奉献, 317  
ノーブーの吹奏楽団, の説明, 310  
『ノーブーネイバー』, ノーブーで毎週発  
行された宗教色のない新聞, 246  
ノーブーの戦い, に関する説明, 318  
ノーブーハウス  
建設する必要があることをジョセフ・  
スミスに啓示された, 240  
財産家, 有名人, 有力者をもてなし,  
真理を教えるために使われることに  
なっていたホテル, 243  
神殿の建設に労力を集中させたために  
完成しなかった, 245  
ノーブー部隊  
ジョセフ・スミスが指揮を執った,  
223  
ノーブーの軍隊, 223  
ノールトン, イフレイム  
人物描写, 360  
の写真, 360  
ノックス, ジョン, カルビン主義への初  
期の改宗者, 8  
は  
バージニア, 信教の自由を擁護するた  
めに立ち上がった最初の州, 10  
パトリッジ, エドワード  
教会の最初の監督として働くよう召さ  
れた, 96  
主によって古代のナタナエルにたとえ  
られた, 120  
「主の偉大な兵士の一人」, 82  
宣教師証明書, の写真, 156  
の改宗とバプテスマ, 82  
の監督聖任証明書, の写真, 121  
の写真, 120  
バートン, ロバート・テラー  
人物描写, 386  
の写真, 386  
バーンハイゼル, ジョン・M  
人物描写, 352  
の写真, 352  
背教  
カートランド神殿の奉献後に広まっ  
た, 172  
期間をおいて繰り返される, 1  
古代の使徒たちの死によって急速に広  
がった, 4  
古代の宣教師が直面した難題, 4  
大背教, 3, 176  
によってもたらされる悲惨な結果, 4  
の意味, 1  
の説明, 3  
ハイド, オーソン  
教会歴史上最も長期にわたる, 最も重  
要な使命の一つを果たした, 238  
人物描写, 235  
聖地を奉献した, 235, 237  
の写真, 235, 617  
パレスチナにおいて使命を果たす召し  
を受けた, 235

## 時満ちる時代の教会歴史

- ヒーバー・C・キンボールとともに任命を受けて、福音を宣べ伝えるためイギリスへ赴いた, 174
- ミズーリ州の教会への叱責の手紙を書くよう指示された, 128
- 自らの使命に関する示現, 235
- 排日移民法, 1900年代初頭に公布された日本人のアメリカ合衆国移民を禁じる法律, 505
- ハウ, エバー・D, 『暴かれたモルモン教』の著者, 114
- パウロ, ローマ帝国の全域に教会の支部を設立した, 3
- ハウ, ジェコブ, ハウンズミルを築いた, 183
- ハウズミル  
ジェコブ・ハウによって築かれたモルモン居住地, 183  
聖徒たちが預言者の勧告に従わなかったために大虐殺が起きた, 200  
大虐殺, 200  
の絵, 203
- バジェットカード, 軍人が教会の主催する活動に参加するための参加証, 530
- ハズラム, ジェームズ・ホルト  
人物描写, 372  
の写真, 372
- バセット, ヒーマン, リーバイ・ハンコックが所有する時計に関連して起きた出来事, 95
- 八人の証人, 『モルモン書』の, 人物資料, 61
- パッカー, ボイド・K  
新しい聖典に関する話, 589  
の写真, 588, 623
- バックンストス, ジェイコブ  
人物描写, 301  
の写真, 301  
ハンコック郡の保安官で, 聖徒たちに友好的な人物だった, 301
- ハッチンソン, アン, 宗教の自由を獲得するために戦った, 9
- パッテン, デビッド・W  
クルックト川の戦いで命を落とした, 199  
現在の神権時代において最初に殉教した使徒, 199  
殉教者として死ぬことを望んだ, 199  
友のために命を捨てた, 199  
の写真(入手不能), 617
- パプテスマ  
死者のための, 251
- 正しい様式にのっとって執行するために必要な権能, 68  
の回復, 55
- パプテスマのヨハネ, イエス・キリストのために道を備えた, 82
- ハブル, 教会で教師になることを許されるべきだと主張した自称女預言者, 93
- ハミルトンハウス, の写真, 278
- バラード, M・ラッセル, の写真, 624
- バラード, メルビン・J  
1925年に南アメリカ伝道部を再開した, 503  
祝福師の祝福において主の特別の証人になることが宣言された, 496  
の写真, 621
- パラントイン, リチャード  
人物描写, 408  
ソルトレーク盆地において最初の日曜学校を組織した, 408  
の写真, 408
- ハリス, マーティン,  
原稿を失ったために悲しんだ, 48  
自分の財産をむさぼることのないように命じられた, 64  
生涯を通じて『モルモン書』が真実であることを証した, 45
- ジョセフ・スミス, オリバー・カウドリ, デビッド・ホイットマーが啓示を受けることができるように, 引き下がった, 60
- ジョセフ・スミスの筆記者を務めた, 45  
妻に116ページの原稿を見せた, 47  
の写真, 45  
のパプテスマ, 68  
『モルモン書』出版の準備に当たって経済的に支援した, 45  
『モルモン書』の印刷費の支払いを保証するために農場の一部を担保として差し出した, 61  
『モルモン書』の印刷費を支払うために土地を売却した, 64  
『モルモン書』の証人となる約束を受けた, 59  
『モルモン書』の文字の写しを言語学者に見せた, 45  
『モルモン書』を出版するために自身と財産をささげた, 46
- ハリス, ルーシー  
金版が実在することに疑いを持った, 46
- マーティン・ハリスとジョセフ・スミスを批判した, 46  
マーティン・ハリスの妻, 46  
はりつけ, ペテロの, の絵, 4  
『パリータン』, ソルトレーク・シティーで創刊された反モルモンの新聞, 377  
反感, ミズーリ州において反対者が聖徒に対して持った理由, 181  
ハンコック郡, 聖徒たちは苦難に陥った, 300  
ハンコック, ジョン  
独立宣言の第一署名者, 104  
リーバイ・ハンコックの親戚, 104  
ハンコック, リーバイ  
宣教師として多くの実りをもたらした, 104  
大工, W・W・フェルプスの住居兼印刷所を建てた, 110  
の写真, 105  
ハンセン, ハロルド・I, クモラの丘ページェントの実施に携わった, 517  
ハンター, エドワード, の写真, 348  
ハンター, ハワード・W, の写真, 623  
ハント, ジェファーソン  
一時期モルモン大隊を率いた, 324  
人物描写, 324  
の写真, 324  
版, 盗み出そうとした企て, 44  
バンビューレン, マーティン,  
の写真, 221  
ミズーリにおける不当な行為について聖徒たちが提出した嘆願書に冷淡な対応をした, 221  
ハンプリン, ジェイコブ, インディアン管理官, 372  
ピーターセン, マーク・E, の写真, 622  
ピーター・フレンチ農場  
最終的にカートランドにおける教会の中心部となった, 96  
の地図, 96  
ビーン, ウィラードおよびレベッカ  
スミス家の農場の管理を任された, 476  
の写真, 475  
ピッチャー, トーマス, 聖徒たちをジャクソン郡から追放するために軍隊を指揮した陸軍大佐, 136  
ピット, ウィリアム  
人物描写, 310  
の写真, 310  
ピット, メアリー, ブリガム・ヤングによる神権の祝福を通して癒された多く

## 索引

- の聖徒たちの一人, 231  
人々, は試練を受け, 試されるであろう, 1  
日の栄えの王国, に関するジョセフ・スミスに与えられた示現, 164  
日の栄えの結婚の律法, 255  
百年祭, 御父, 御子, 天使モロナイがジョセフ・スミスを訪れた出来事を祝う, 507  
ピューリタン主義, ジョセフが預言者となるための準備に貢献した原則, 26  
表音式速記法, 教会歴史の初期の時代には速記法としても知られていた, 175  
平等権修正案, スペンサー・W・キンボールの論評, 586  
ピルグリム  
アメリカにおける価値体系に大きな影響を与えた, 8  
厳格なカルビン派グループ, 8  
ヒンクレー, アロンゾ・A, の写真, 622  
文書会, 6人の兄弟たちが『戒めの書』の管理人として召された, 119  
ファーウェスト, ミズーリ州  
1838年に設けられた新しい教会本部, 181  
神殿を建設することに関する啓示, 187  
の位置と設立, 182  
の説明, 181  
末日聖徒が築いた社会として最も繁栄した, 189  
モルモンでない人々による包囲攻撃, 203  
ファー, ローリン, の写真, 345  
ファウスト, ジェームズ・E, の写真, 624  
ファミリー  
協同事業を設立した聖徒たちは使徒行伝に記されている内容を基本とした, 95  
を強めることを強調した, 564  
フィッシング川, シオンの陣営の行軍時の出来事, 147  
フィルモア, ユタ準州の最初の州都として選定された, 355  
フィンランド, における伝道の開始, 540  
風紀諮問委員会, の組織, 483  
ブース, エズラ, 教会に反対する意見を詳しく記した手紙を『オハイオスター』に掲載した背教者, 113  
ブース, ジョセフ・ウィルフォード  
人物描写, 502  
の写真, 502  
の伝道活動, 502  
フーベナー, ヘルムス  
の写真, 527  
ヒトラー統治時代に命を失ったドイツ人の末日聖徒, 526  
フェルト, ルーイ・B  
中央初等協会初代会長, 484  
『チルドレンズフレンド』誌を発刊した, 484  
の写真, 484  
フェルプス, ウィリアム・ワインズ  
啓示の中で「召され, 選ばれ」たと言われた, 103  
シオンにおいて印刷技師と, 新聞の編集者を務めるよう召された, 109  
新聞の編集者, 経験豊かな著述家, 印刷業者, 103  
土地取引で利益を得ようとした, 183  
の印刷所, 暴徒によりほとんど破壊された, 133  
の改宗と『モルモン書』の証, 103  
の写真, 103  
破門された, 184  
滅ぼす者が水面を進んで行く示現, 107  
フォード, エライジャ  
ジョセフ・スミスによって奇跡的に癒された, 218  
人物描写, 219  
の写真, 219  
フォード, トーマス  
人物描写, 286  
の写真, 286  
フォルサム, ウィリアム・ハリソン  
人物描写, 400  
の写真, 400  
『福音の教義』  
ジョセフ・F・スミスの説教と著作を編集した書物, 486  
末日聖徒の基本的な参考書, 466  
復元末日聖徒イエス・キリスト教会  
の設立, 295  
ミズーリ州インディペンデンスに本部を置いた, 295  
福祉活動部, 中央福祉プログラム, 健康サービス部, 社会福祉部の併合, 572  
福祉区域, の写真, 512  
福祉プログラム  
教会の「保全」プログラム, 512  
全教会で実施された, 511  
大恐慌のさなかに実施された, 510  
扶助協会  
教会歴史の初期の時代における成長と拡大, 406  
創立の様子を描いた絵皿, 248  
組織の目的, 248  
の設立, 248  
プログラムの拡大, 483  
『扶助協会誌』, の創刊, 485  
不動産, 教会が取得した教会史跡地, 476  
普遍救済派, イエス・キリストは愛の神であって, すべての子らを救われると信じた, 17  
ブラウン, ジョン  
人物描写, 328  
の写真, 328  
「ミシシッピの聖徒たち」を西部へ導いた, 328  
ブラウン, ヒュー・B  
人物描写, 530  
第二次世界大戦中, 軍人コーディネーターを務めた, 530  
伝道初期の経験, 472  
の写真, 530, 623  
ブラック, アダム  
デイビーズ郡のモルモンでない治安判事, 194  
平和協定に署名したが, 24時間以内に破棄された, 194  
プラット, アディソン  
人物描写, 238  
の写真, 238  
プラット, オーソン  
アダム・オンダイ・アーマンの意味, 187  
イギリス滞在中に執筆した出版物の一覧, 232  
スコットランドへ福音を携えて行く責任を受けた, 232  
の写真, 77, 618  
プラット, パーリー・P  
イギリス滞在中に執筆した出版物の一覧, 232  
カナダにおける伝道, 156  
シメオン・カーターの改宗を助けた, 84  
ジョセフ・スミスから家族の永遠性について知らされた, 221  
の改宗, 75  
の写真, 77, 617  
バプテスマと神権の聖任, 76



## 時満ちる時代の教会歴史

- 『ミレニアルスター』の編集者に選ばれた, 231
- 『モルモン書』の1837年改訂版作業に携わった, 62
- 『モルモン書』の証, 75
- 見張りの警官から逃れた, 83
- プラット, レイ・L  
の写真, 491  
メキシコ伝道部における働き, 491
- ブラディシュ, ルーサー, マーテン・ハリスが文字の写しを持って行った言語学者, 45
- ブランナ, サミュエル  
人物描写, 327  
の写真, 327  
ブルックリン号で聖徒たちを率いた, 327
- フランクリン, ベンジャミン  
神権の祝福を喜んで受け入れた, 445  
セントジョージ神殿においてウィルフォード・ウッドラフを訪れた, 445
- ブリー, メアリー・ジェーン  
人物描写, 572  
の写真, 572
- ブリガム・ヤング・アカデミー  
の設立, 411  
後にブリガム・ヤング大学となった, 447
- 「ブリガム・ヤング替え玉事件」, ブリガム・ヤングとウィリアム・ミラーを巻き込んだ, 303
- 『ブリガム・ヤング説教集』, ブリガム・ヤングの教えの一部を編集したもの, 420
- ブリガム・ヤング大学, 第二次世界大戦後の発展, 557
- ブリガム・ヤング大学エルサレムセンター, の創設, 604
- ブリタニア号, 末日聖徒の最初の団をアメリカまで輸送した船, 234
- ブリムホール, ルーシー  
アマンダ・アイネズ・ナイトとともに独身の姉妹として最初に召された宣教師, 456  
の写真, 457
- 「古くからの移住者たち」  
ジャクソン郡に以前から住んでいた人々の呼称, 130  
東部から移住して来た聖徒たちとの衝突, 130
- ブルックリン号  
たどった航路, 図による説明 328  
の写真, 327  
の旅, 326
- 『フレンド』, 教会の機関誌, 発刊された, 569
- プログラム, 教会プログラムの改善, 514
- ブロック, トーマス  
人物描写, 363  
の写真, 363
- プロテスタントによる宗教改革, キリスト教界の結束を崩した, 6
- 分離策, ファーウェストとショールクリークにおける末日聖徒の, 183
- 兵士, 戦闘時ならびに教会の使者としてどのように振る舞うべきか, 492
- ヘイト, デビッド・B, の写真, 624
- ヘイル, アイザック  
エマ・スミスの父親, 52  
金版に関するジョセフ・スミスの主張に対して懐疑的だった, 52  
墓石の写真, 55
- ヘイル, エマ  
ジョセフ・スミスと結婚した, 43  
ジョセフ・スミスに出会った, 42  
の絵, 42
- ヘイル, ジェシー, エマ・ヘイルの長兄, 45
- ページ, ジョン・E, の写真, 618
- ページ, ハイラム, 啓示を受けたと主張する石を持っていた, 77
- ヘーベン, エリザベス  
人物描写, 219  
の写真, 219
- ペテロ  
示現を受けて, 神は人を偏り見る御方ではないことを知った, 2  
のはりつけ, の絵, 4  
ヨッパの家の屋根に登って祈った, 2
- ペテロ, ヤコブ, ヨハネ  
古代の管理使徒, 2  
ジョセフ・スミスとオリバー・カウ德里に現れた, 56
- ベニオン, アダム・S, の写真, 623
- ベニストン, ウィリアム, ミズーリ州ガラティンでの投票日に起きた争いを扇動した, 194
- ベネット, エマ, 奉献式中にソルトレーク神殿で子供を産んだ, 445
- ベネット, ジョセフ・テンブル, 奉献式中にソルトレーク神殿で生まれた, 445
- ベネット, ジョン・C  
改宗とバプテスマ, 222  
ジョセフ・スミスの暗殺を計画した, 263  
人物描写, 264  
『聖徒の歴史 ジョー・スミスとモルモンイズムの真相』の著者, 264  
ノーブー憲章の制定に尽力した, 223  
ノーブーの初代市長, 223  
の写真, 264  
の背教, 263  
破門された, 264  
霊のうえでの妻として迎えること, 263
- ペリー, L・トム, の写真, 623
- ヘレフォードシャー・ビーコン, の写真, 225
- ヒンクレイ, ゴードン・B  
エイズについて述べた, 605  
の写真, 599, 623  
の生涯, 598
- ベンソン, エズラ・T, の写真, 618
- ベンソン, エズラ・タフト  
『キリストのもとに来なさい』の著者, 602  
『敵の集中攻撃を受ける中』の著者, 602  
シオンの母親に対する重要なメッセージ, 605  
スペンサー・W・キンボールの跡を引き継いで大管長となった, 601  
占領下のドイツを訪問した最初のアメリカ民間人, 537  
大管長に関する説明, 295  
第二次世界大戦後のヨーロッパで伝道部を再開した, 537  
農務長官, 602  
の写真, 601, 622  
の生涯, 601  
人々に「キリストのもとに来」るよう招いた, 602  
フィンランドで伝道を開始した, 540  
福音を宣べ伝える地としてフィンランドを奉献した, 540  
『モルモン書』を読むことを強調した, 603
- ヘンドリックス, ジェームズ  
人物描写, 215  
の写真, 215
- ヘンドリックス, ドルシラ  
食物に恵まれたときの出来事, 214  
人物描写, 215  
の写真, 215

## 索引

- ヘンリー8世  
1533年、法王により破門された、7  
英国国教会を設立した、7
- ペンローズ、チャールズ・W  
賛美歌「高き山よ」を作詞した、456  
人物描写、456  
宣教師用パンフレット『生ける光が放  
つ光線』を執筆した、456  
『デゼレトニューズ』の編集長、456  
の写真、456、620
- ホイットニー、オーソン・F  
の写真、621  
人の起源に関する教会の公式見解、  
488
- ホイットニー、ニューエル・K  
足の骨折事件、116  
教会の第2の監督、120  
ジョセフ・スミスに会った、90  
の写真、90
- ホイットマー、ジョン  
一時期、カートランドの聖徒たちの管  
理長老を務めた、90  
教会の歴史記録者、119  
の写真、90  
破門された、184  
不動産取引で不当な利益を得ようと  
した、183
- ホイットマー、デビッド  
オリバー・カウドリとの親しい関係、  
53  
気づかない間にモロナイと会った、57  
教会を離れた後も、モロナイと金版の  
証を決して否定しなかった、186  
故意に知恵の言葉を破ったことにつ  
いて非難を受けた、184  
ジョセフ・スミスに会った、56  
ジョセフ・スミスに対して早く支援で  
きるように農場で神の助けを受け  
た、56  
の写真、56  
『モルモン書』の証人となることを約  
束した、59
- ホイットマー、メアリー、モロナイから  
金版を見せられた、57
- ホイットロック、ハービー、大会中にサ  
タンに縛られたため、話すことがで  
きなかった、100
- ポイントン、ジョン・F、の写真、618  
奉献  
イリノイ州ノーブーに建設され、女性  
にささげられた扶助協会記念碑、  
587
- カートランド神殿、164  
シオンの地、107  
ソルトレイク神殿、444  
マンタイ神殿、436  
ミズーリ州インディペンデンスの神殿  
建設用地、107
- 奉献の律法  
説明、95  
に関する主の啓示、190  
に関する重要な啓示、98  
の起源、95
- 暴徒、1830年にニューヨーク州コールズ  
ビルの会員たちを襲撃した、71
- 訪問者センター、最初の、の写真、475
- ポーウェン、アルバート・E、の写真、  
622
- ポーランド  
1874年の法律、ユタの司法制度<sup>けいがい</sup>を形骸  
化させた、426  
福音を宣べ伝える地としてスペンサ  
ー・W・キンボールにより奉献され  
た、582
- ホーン、マリー・イザベラ  
人物描写、409  
の写真、409
- ポガート、サミュエル  
悪名高き反モルモン、198  
クルックト川の戦いの引き金を引い  
た、199
- 撲滅令、リルバーン・ボグズ知事によ  
る、200
- 補助組織  
1970年代初頭に実施された統合化、  
568  
教会歴史の初期の時代における成長と  
拡大、406
- ボグズ、リルバーン・W  
聖徒たちをジャクソン郡から追放す  
るために州兵を出動させた、136  
撲滅令、201
- ミズーリ州の副知事、132  
ミズーリ州の紛争について聖徒たちの  
申し立てに耳を貸さなかった、198
- ホテル・ユタ、教会最大の投資事業の一  
つ、481
- ポニーエクスプレス、郵便物の配達制度、  
383
- ホフマン、マーク、爆弾投下による爆撃、  
606
- ポリネシア文化センター、の開始、559
- 翻訳  
ジョセフ・スミスによる『聖書』の霊  
感訳、73、117  
『モルモン書』、53、65  
『モルモン書』の翻訳の過程について  
はほとんど知られていない、58

## ま

- マーカム、スティーブン  
人物描写、311  
の写真、311
- マーシュ、トーマス・B  
の改宗、74  
の写真(入手不能)、617  
のバプテスマ、74  
破門されたが、後に教会に戻った、  
199
- マードック、ジョン  
大会中にサタンによって縛られたた  
め、話すことができなかった、100  
の写真、81  
のバプテスマ、81  
実りある伝道、90
- マイクロフィルム撮影、第二次世界大戦  
中および戦後に実施された系図の記  
録、543
- マウントピスガ、の記念碑、315
- マクレラン、ウィリアム・E  
啓示を創作するチャレンジを受け入れ  
たが、失敗した、119  
の写真(入手不能)、617
- 「ディス・イズ・ザ・プレース」記念碑、  
の奉献、547
- マッカーサー、パーシー・D、教会に献  
身した才能豊かな陸上競技選手、503
- マッキューン、エリザベス・クラリッジ  
女性の宣教師が召される先駆けとなっ  
た、456  
人生の大切な側面、456  
の写真、456
- マック、ジョン、イギリスからアメリカ  
への移住を実行したジョセフ・スミス  
の母方の先祖、15
- マックスウェル、ニール・A  
教会教育部委員長、571  
教会の教育における3つの大切な原則、  
570  
の写真、624
- マック、ソロモン  
自伝を書いた、19  
ジョセフ・スミスの母方の祖父、18  
長引くリューマチのために、生き方を  
変えた、19

## 時満ちる時代の教会歴史

- ルーシー・マック・スミスの父, 18  
マック, リディア・ゲイツ  
子供たちが身に付けた宗教とこの世に  
関する教育のほとんどを自ら与え  
た, 19  
ジョセフ・スミスの母方の祖母, 18  
幌馬車の事故でけがをした, 25  
ルーシー・マック・スミスの母, 18  
マッケイ, デビッド・O  
家族の重要性, 565  
教会の教育面における豊かな経験,  
517  
ジョージ・アルバート・スミスの跡を  
引き継いで大管長となった, 550  
スイス神殿, ニュージーランド神殿,  
ロンドン神殿を奉獻した, 553  
「すべての会員は宣教師である」, 554  
世界訪問旅行に派遣された目的, 499  
全世界で展開した伝道活動, 499  
日曜学校プログラムに対する貢献,  
483  
日曜学校プログラムの展開に大きな影  
響を与えた, 483  
ニュージーランドに神殿を建設する計  
画を発表した, 553  
の写真, 551, 621  
の生涯, 550  
南アフリカを訪れた最初の中央幹部,  
553  
マッコンキー, ブルース・R  
集合に関する教え, 575  
の写真, 623  
末日聖徒イエス・キリスト教会  
1900年代初頭の発展, 506  
1830年に存在した3つの中心地, の地  
図, 70  
1830年に開かれた第1回大会, 70  
アメリカ国内および国際博覧会への出  
展, 516  
永遠の命に導く, 1  
教会歴史の初期の時代に投票権を剥奪  
された, 438  
戦争に関する見解, 492, 529  
地上における主の組織, 1  
の行く末, 612  
の設立, 67, 68  
繁栄の時代, 481  
3つの主要な目的, 564  
ユタにおける成長, 364  
末日聖徒学生協会  
デゼレトクラブに代わる組織, 517  
の結成, 570  
末日聖徒の軍人  
世界の新しい地域に福音を紹介する責  
任を与えられている, 531  
模範によって人々をバプテスマに導  
き, 福音を分かち合う, 530  
末日聖徒の病院, の開設, 481  
『末日聖徒のミレニアルスター』, イギリ  
スの聖徒のための月刊誌, 231  
マラリヤ, ノープーの聖徒たちが感染し  
た, 217  
マンタイ神殿, の奉獻, 436  
ミズーリ  
受け継ぎの地, 102  
聖徒の追放, 193  
の地図, 教会歴史の初期の時代, 103  
北西部の地図, 教会歴史の初期の時代,  
193  
ミズーリ州ガラティンにおける選挙の投  
票日に起きた争い, 193  
ミッチェル, サミュエル・レイサム  
の写真, 46  
マーティン・ハリスが金版の文字の写  
しを持って行った言語学者, 45  
「密約」, モルモンはひそかに奴隷を持ち,  
治安妨害を扇動していると非難した宣  
言, 132  
ミラー, ウィリアム  
人物描写, 303  
「ブリガム・ヤング替え玉事件」, 303  
の写真, 303  
ミラー, ジョージ  
人物描写, 306  
の写真, 306  
民主党クインシー協会, イリノイの聖徒  
を支援した, 213  
胸当て, ジョセフ・スミスが発見した版  
とともに隠されていた, 40  
メーザー, カール・G  
教会の教育において傑出した経歴を持  
つ, 411  
教会の傑出した教育家の一人, 463  
人物描写, 413  
の写真, 413  
メキシコ  
1900年代初頭の聖徒たちの状態, 489  
1901年に再開された伝道部, 461  
教会の堅固な基礎の確立, 412  
メリル, ジョセフ・F, の写真, 621  
メリル, マリナー・W, の写真, 620  
メルキゼデク神権  
大いなる神権, 122  
儀式をつかさどる権能, 122  
ジョセフ・スミスとオリバー・カウド  
リに授けられた, 56  
免罪符の購入, の概要, 6  
モイル, ヘンリー・D, の写真, 622  
モーガン, ジョン  
人物描写, 431  
の写真, 431  
モースネル, ヘルマン, ヨーロッパの捕  
虜収容所収監中に4人を改宗に導いた,  
527  
モーセ  
イスラエルの集合の鍵を回復するため  
にカートランド神殿でジョセフ・ス  
ミスとオリバー・カウドリに現れ  
た, 165  
の示現, 『高価な真珠』に記されてい  
る, 73  
モーリー, アイザック  
宣教師証明書, の写真, 156  
の写真, 134  
黙示者ヨハネ, シオンが天から降る様子  
を示現で見た, 102  
モスコインステイテュート館, の写真,  
505  
モリス, ジョージ・Q, の写真, 623  
モリス派, イギリスの元改宗者ジョセ  
フ・モリスが率いた背教者集団, 385  
モリス派事件, の説明, 385  
モルモン回廊, ユタ州南部, ネバダ州,  
カリフォルニア州南部を通過するルー  
ト, 361  
『モルモン書』  
18世紀の出版, 11  
印刷工程は少しずつ実施された, 62  
印刷の開始とともにモルモンの教えに  
対する大衆の関心が集まった, 74  
印刷の準備に取りかかった, 61  
「黄金の『聖書』」とE・B・グランディ  
ンは呼んだ, 61  
オリバー・カウドリとハイラム・スミ  
スが出版の責任者となった, 62  
オリバー・カウドリは印刷業を習得し  
た, 63  
神の賜物と力によって翻訳された, 58  
完全な福音が記されている, 65  
古代の預言者たちが予告した, 41  
出版にかかわる出来事, 65  
主によって真実であることが確認され  
た, 58  
証人, 59  
ジョン・ホイットマーが筆記した原稿  
の写真, 58

## 索引

- タイトルページ、の写真、64  
著作権を申請し、認可された、61  
翻訳が完成した、65、68  
翻訳の方法についてはほとんど知られていない、57  
末日における神の思いと御心が表されている、64  
元原稿には句読点と文節が付されていない、62  
元原稿の著作権証書、の写真、62  
モロナイによって真実であることが確認された、58
- 『モルモン書』の11人の特別な証人  
行く末、60  
証を決して否定しなかった、60
- 『「モルモン書」の全用語索引』、ジョージ・レイノルズ編、426
- モルモン戦争、ミズーリ州における、199
- モルモン大隊  
の行軍、323  
の行軍跡、図による説明、324  
の召集、315
- モルモン電撃隊、ノーブー軍団内でロト・スミスが率いた部隊、373
- 『モルモンの教えが伝えるメッセージ』、リグランド・リチャーズ著、毎週行われた福音に関する話を『奇しきみわざ』としてまとめ、出版した、515
- 「モルモンの問題」、教会歴史の初期の時代のモルモンとミズーリ州の住民の間に見られた状態を表すために用いられた言葉、182
- モロナイ  
アメリカが選ばれた地であると述べた、8  
「エフライムの木」の鍵を所有していた、38  
金版が隠されている場所を明らかにした、39  
原稿紛失事件の後に、版およびウリムとトンムをジョセフに戻した、52  
古代モルモンの預言者、9  
示現で見たことを父に告げるようジョセフ・スミスに指示した、39  
主の業に十分に携わっていなかったジョセフ・スミスを叱責した、43  
ジョセフがデビッド・ホイットマーとオリバー・カウドリとともにフェイエットへ移動している間ジョセフから版を受け取った、56  
ジョセフ・スミス、オリバー・カウドリ、デビッド・ホイットマー、マーティン・ハリスに版を見せた、59  
ジョセフ・スミスに版を受け取る準備をさせた、41  
ジョセフ・スミスへのその後の訪れ、39  
ジョセフ・スミスへの最初から3度目までの訪れ、37  
ジョセフ・スミスへの最初の訪れ、37  
デビッド・ホイットマーを訪れた、57  
版を受け取ることにしてジョセフ・スミスに警告と約束を与えた、43  
『モルモン書』の最後の管理人、58  
『モルモン書』の読者に対して、この書物が真実であるかどうかを確かめるようにとチャレンジした、58
- モンソン、トーマス・S  
教会歴史中100年以上を通じて大管長会に召された最年少の副管長、601  
の写真、623
- モンロイ、ラファエル  
証を否定しなかったために処刑された、490  
の写真、490
- や
- 野牛との戦い、モルモン大隊の行軍において唯一起きた戦い、326
- 「焼け野原の地区」、1800年代初期ニューヨーク西部で行われた熱狂的な布教活動、30
- 『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』、教会の初期の時代に若い女性のために発行された正式な機関誌、459
- ヤング、ジーナ・ディアンサ・ハンティントン  
医療技術に卓越していることで有名だった、292  
エライザ・スノーの後継者として中央扶助協会会長となった、463  
の写真、292
- ヤング、フィニアス  
の写真、75  
ブリガム・ヤングの兄、75
- ヤング、ブリガム  
祈りをささげている間に異言を話した、116  
異邦人社会から教会の独立を守り続けた、419  
ウィリアム・ミラーを巻き込んだ「ブリガム・ヤング替え玉事件」、303
- エンダウメントの文章化作業を監督した、415  
カートランド神殿における集会でジョセフ・スミスを擁護した、173  
枯れた枝を持つ果樹の夢、298  
シオンの陣営に志願するならば、髪の毛一筋すらも失われないことをジョセフ・スミスによって約束された、142  
ジョセフ・スミスの跡を引き継いで大管長となった、292  
ソルトレーク・シティーの電信技術学校、384  
ソルトレーク神殿の建設場所、333、415  
ソルトレーク盆地を初めて目にした、333  
による不滅の貢献、418  
ノーブーの名称を「ジョセフの市」と改めた、299  
の死去、418  
の死後、相続財産に関して持ち上がった論争、423  
の写真、75、617  
のパプテスマ、75  
パプテスマを受ける前に2年間福音を研究した、75  
変貌して、ジョセフ・スミスのような風貌と声になった、291  
ミズーリ州移住委員会、212  
をたたえる記念碑、の写真、448
- ヤング、ブリガム、ジュニア、の写真、619
- ユーイング、フィニス、モルモンを滅ぼすべきだと考えた長老派教会の牧師、131
- ユタ  
1894年のユタ州昇格条例、442  
1896年に州の資格を取得した、442  
議会により州の憲法が承認された、442  
州昇格の努力が続けられた、441  
準州の扱いとするよう交渉した、352  
『ユタ系図歴史機関誌』、1940年に廃刊となった、519  
ユタ系図協会、の設立、446  
ユタ州酒類製造販売禁止連盟、の結成、497  
ユタ準州  
の創設、353  
ユタ戦争、369  
養蚕、蚕の飼育と絹の生産、406

## 時満ちる時代の教会歴史

ヨーロッパの各伝道部、の地図、524  
預言者、子らを教えるために神によって立てられた、1  
『預言者』、ニューヨークにおいて発行され、全世界の国家首脳への宣言を掲載した教会の新聞、304  
預言者の塾  
宣教師を訓練する重要な役割、124  
に関する啓示、122  
夜、「長くて暗い」、4

### ら

ラーソン、ガスティブ・O、モルモンの歴史、神殿、神殿活動を絵に描いて説明する方法を考え出した、504  
ライダー、サイモンズ、初期の背教者、113  
ライマン、アマサ  
人物描写、292  
の写真、292、618  
ライマン、フランシス・マリオン、の写真、619  
ライマン、リチャード・R、の写真、621  
ラテンアメリカ、1950年から1975年の間に実施された教会教育プログラムの拡大、559  
ランド、アンソン・H、の写真、620  
リアホナ、荒野でリーハイに与えられた指示器、59  
リー、アン  
シェーキング・クエーカー教の宗教指導者、94  
メシヤが女性の姿で地上に戻られたと主張した、94  
リード、ジョン、社会秩序を乱したかどで訴えられたジョセフ・スミスの無実を晴らした弁護士、72  
リー、ハロルド・B  
ジョセフ・フィールディング・スミスの跡を引き継いで大管長となった、567  
の写真、567、622  
福祉計画に影響を及ぼす革新的なプログラム、567  
福祉プログラムが預言の成就であると考えた、513  
福祉プログラムを全教会レベルで導入した、511  
リグドン、シドニー  
1838年独立記念日の説教、191  
カナダ北部での伝道活動、116

キリストの弟子またはキャンベル派と呼ばれた教会の設立を率いた、80  
「キリストの教会」を創設した、294  
「塩の説教」として知られる熱烈な説教を行った、190  
シオンの地の詳細を記す任務を与えられた、107  
シオンの地を奉献した、107  
主によってバプテスマのヨハネにたえられた、82  
ジョセフ・スミスの筆記者、82  
ジョセフ・スミスの後継するもの自分では考えていた、289  
の改宗、81  
の写真、289  
破門された、294  
リチャーズ、ウィラード  
ジョセフが無実の血を流したことにいて使徒としての証人となった、283  
人物描写、283  
の写真、283、618  
リチャーズ、ジェーン  
人物描写、319  
の写真、319  
フランクリン・D・リチャーズの妻、319  
リチャーズ、ジョージ・F、の写真、620  
リチャーズ、ジョージ・S、フランクリン・D・リチャーズの兄弟、ハウズミルで暴徒により殺された、462  
リチャーズ、ステイブン・L、の写真、621  
リチャーズ、フランクリン・D  
人物描写、462  
青年時代は忠実な学生であり、熱心な読書家であった、462  
の写真、462、619  
リチャーズ、リグランド  
『奇しきみわざ』の著者、515  
現在の神権時代における最も偉大な宣教師の一人、515  
人物描写、515  
の写真、515、622  
リッジズ、ジョセフ・ハリス  
人物描写、399  
の写真、399  
リッチ、チャールズ・C  
クルックト川の戦いにおいてデビッド・バットンが殺されたときに、指揮を執った、212  
人物描写、212

の写真、212、618  
ベアレクバレーにおける最初の入植者の一人となった、212  
リトル、ジェシー・C  
人物描写、316  
の写真、316  
リパティーの監獄  
ジョセフ・スミスが主から霊的な指示を受けたため、神殿の監獄であると考えられていた、207  
の写真、208  
の説明、208  
流血の苦しみを受けるシオン、ミズーリ州北部への移住を待つためクルックト川で野営した聖徒たち、182  
ルーカス、サミュエル・D、ジャクソン郡の郡判事、135  
ルーズベルト、フランクリン・D、福祉プログラムを確立するための教会の働きに好感を示した、512  
ルシフェル  
あらゆる偽りの父、1  
御父と御父の計画に背いた、1  
サタンと呼ばれるようになった、1  
天を追い出された、1  
『ルシフェルのカンテラ』、モルモン敵対者の定期刊行物、465  
ルター、マルチン  
「95箇条の抗議文」、6  
活動をやめるように命令されたときの対応、7  
勝利者、民衆の英雄、7  
『聖書』のドイツ語訳を完成させた、7  
徹底的に『聖書』を研究した、6  
ドイツの宗教改革を先導した、7  
に従った者たち、ルーテル教会を興した、7  
についての説明、6  
の絵、7  
反抗したためローマ教会から破門された、7  
法外追放者となった、7  
最も有名な宗教改革者、6  
ルネッサンス  
再生の時期、5  
の説明、5  
霊的に変化を遂げた時期、5  
霊、悪霊を見抜き、対処する方法、94  
令状、収監、278  
レイノルズ、ジョージ  
合憲性を確認するために「試験的訴訟」の被験者として選ばれた、426

## 索引

- 重婚禁止法, 426  
人物描写, 427  
の写真, 427  
『「モルモン書」の全用語索引』の著者, 426
- レーマン人  
20世紀に規模を拡大して実施された伝道活動, 545  
アメリカインディアンに付けられた名前, 79  
インディアンの間で行われた伝道活動, の地図, 84  
神の言葉を信じるようになる, 79  
への伝道, 79
- 「レーマン人の境の地」, の定義, 79  
レーマン人への伝道, 『モルモン書』が改宗の手段として力を発揮することを立証した, 87
- レーン, ジョージ, の写真, 35
- レターオープナー, ジョセフ・スミスがニューエル・Kおよびエリザベス・ホイットニーに与えた, の写真, 116
- レボロ, アントニオ, アブラハムとヨセフの書き物が納められていたミイラと巻き物を発見したフランス語を話す探検家, 158
- ローガン神殿, の奉獻, 430
- ローマ, 紀元64年に焼失した, 4
- ロリンズ, キャロライン, 『戒めの書』の印刷原稿を暴徒による破壊から守った, 133
- ロリンズ, メアリー・エリザベス  
『戒めの書』の印刷原稿を暴徒による破壊から守った, 133  
の改宗, 134  
の写真, 134
- ロジャーズ, オーレリア・スペンサー  
最初の初等協会を組織し, 管理する召しを受けた, 410  
人物描写, 411  
の写真, 411
- ロックウェル, オリン・ポーター  
のパプテスマ, 68  
リルバーン・ボッグズを暗殺するためにジョセフ・スミスから指示を受けたとしてジョン・ベネットから告訴された, 266
- ロックウッド, アルバート・P  
ジョセフ・スミスのボディガード, 264  
人物描写, 264  
の写真, 264
- ロバーツ, プリガム・H  
アメリカ合衆国下院議員に就任することを認められなかった, 466  
アメリカ合衆国下院議員に選出された, 465  
一部の人々から「かじ屋の弁士」と呼ばれた, 466  
『教会歴史』の出版に関連して重要な働きをした, 478  
下院議員選出に関連して, 一夫多妻を実施していたことが問題になった, 466  
ケインクリークで殺された二人の長老たちの遺体を取り戻すために変装した, 432  
信仰の擁護者, 465  
人物描写, 432  
の写真, 432, 465  
『末日聖徒イエス・キリスト教会概史』の著者, 508
- ロムニー, マリオン・G  
の写真, 622  
福祉プログラムに関する証, 513
- わ
- ワースリン, ジョセフ・B, の写真, 624
- ワード, 19世紀における, 政治上の区域を示すために用いられた語, 242
- ワイト, ライマン  
人物描写, 188, 305  
デイビーズ郡に定着した最も著名なモルモン, 187  
の小屋, の写真, 188  
の写真, 305, 618  
破門された, 305  
ワイト入植地を築いた, 187
- ワシントン神殿, スペンサー・W・キンボールによって奉獻された, 569
- ワット, ジョージ・D  
イングランドで最初にパプテスマを受けた改宗者, 175  
教会指導者の説教を速記法または表音式速記法によって記録した, 175  
の写真, 175

末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会



2902325023000

32502 300